酒井志摩守　二万石　いせさき　二十四り　あさくさ下

吉井てい丸　一万石　よしゐ　二十七り　赤坂やげん坂

前田たんごの守　一万石ヨ七日いち　廿九り廿九丁　もん前はつれ

# 志もつけ 野州 九郡

戸田ゑちぜんの守　四品　七万七千八百五十石　うつの宮　廿六り半　本所十間川

戸田やまとの守　一万石　ほしんでん　足日ろ　本所屋敷内

鳥居たんばの守　三万石　みぶ　廿三り半　下谷ひろこうじ

大久保さん九郎　三万石　からす山　二十五り　下谷三みせんぶり

堀田せっつの守　一万六千石　さの　二十二り　三ばん丁角

# 群馬縣史

第四巻

群馬縣廳舊廳舍

（前橋舊城内諸邸大玄關）

群馬縣舊廳舍正門

# 群馬縣史第四卷

## 目次

## 第二章　縣治の沿革

# 第六章　郡市町村の政治

## 第八章　教育奬勵と文物隆盛

## 第九章　交通と治水

## 第十章　賑給と旌表

## 第十一章　兵事



## 第十二章　衞生

第十三章　司法と警察

群馬縣史第四卷目次大尾

# 群馬縣史第四卷

## 第七期　現代

## 第一章　行幸啓

### 第一節　總說

本縣の地帝都に近く、夙に殖産・興業を以て其名著し。而して域內靈泉に富み名所亦尠からず。加ふるに地域關東平野の西北部を占めて、形勢頗る振武に適す。是を以て本縣の存在は夙に九重の奥に達し、明治六年、皇后(昭憲皇太后)皇太后(英照皇太后)の富岡行啓を初として、或は產業奬勵或は大演習御統監時には、名所御遊覽の御思召を以て、行幸啓の地となりたること、一再に止まらず。竹の園生に彌茂れる方々の行啓を數ふるに至りては、枚擧に遑あらず。縣民の光榮何物か之に如かんや。此章　天皇　皇后　皇太后　東宮の御四方々の行幸啓に

つき、謹みて其大畧を記し、御聖德の一端を偲び奉り、永く聖代の餘澤に浴することゝせり。茲に恭しく本縣行幸啓の御事跡を調査するに、

明治天皇御臨幸　三回
皇后(昭憲皇太后)行啓　五回
皇太后(英照皇太后)行啓　六回
皇太子(大正天皇)行啓　三回

を數へ奉る。今次節に於て更に之を詳說せんとす。

## 第二節　行幸啓各説

### 第一項　明治六年六月皇后皇太后御同列

#### 富岡製絲所行啓

六月廿四日、兩陛下には杉孫七郎・福羽美靜等の供奉にて、新町驛より、政府にて新に修築したる所謂製絲道（新町より神流村中栗栖を經て美土里村動堂落合を過ぎ吉井町に至り北甘樂郡福島を經て富岡に至る道路）を御馬車に召され、御成りあり。鏑川には未だ架橋の設なきにより、渡船にて御渡し申し、當夜は七日市舊藩主御殿を御泊所とせられ給ふ。

六月廿五日、群馬縣令河瀨秀治御先導にて、製絲場工場を御巡覽、社長尾高淳忠御案內、一々御說明を申し上ぐ。皇后陛下には、

絲車とくもめぐりて大御代の富を助くる道開けつゝ

と詠じて、製絲所に下し給ふ。場內にて御少憩の後、鏑川に御案內申し上げ、清流に放てる香魚を御漁遊さる。同夜御殿に御滯留、其夜御餉に香魚を獻上す。

六月廿六日、御機嫌麗はしく還御仰出さる。途中七日市舊藩主前田利昭の御

茶屋に御少憩あり。此邊の風光に　英照皇太后惜くして、

作りなす瀧にはあらで面白くおのれとおつる音のすがしき

（本行啓につき縣廳文書備はらざるを以て、昭憲皇太后の御坤德所載富岡製絲所長大久保佐一氏の談話に據る。）

〔參考〕

## 皇太后皇后兩陛下御駐輦遺跡

從二位勳一等　股野　琢謹書

明治六年六月二十三日。皇太后・皇后兩陛下。行啓於富岡製絲場。途駐輦吾家者二次。可謂光榮矣。茲業樹碑。紀以傳于後云。堀越文右衛門。

右御駐輦之碑は多野郡吉井町舊春日神社境內にあり。

### 兩陛下御駐輦繪卷の詞

王政維新の鴻圖定められしより、明らけく治まる御代も、はや六年の夏六月の二十一日に、畏くも皇太后宮・皇后宮の兩陛下御揃ひましまして、遠く鳳輦を上野國くるまの縣に行啓まし、國の榮えの富岡の製絲場にぞ臨御し玉ひける。その砌この吉井町に二次御輦を駐めまし、忝けなくも我茅屋を行在所に御下命ありて、勿體な

くも萬乘の玉體を憩はせ玉ふ。斯くためしなき恩光を蒙るは、獨り我家のみかは、この鄕土の大光榮とこそいふべきなり。

されば この光榮を幾千代の後までも語り傳へ、また產業の御獎勵の大御心を子孫永久に奉仕せんとて、こたび新碑を御遺跡に建設しける。碑の表文字は從二位股野藍田翁謹書せられ、裏面にはその事歷を彫勒せり。

兩陛下行啓の御時代は、御維新の年月尙淺く、萬事御簡畧に渡らせられし折とて御召川の鳳輦には兩陛下御同乘遊ばされ、御行列供奉の御人數も多からず。河瀨(秀治)熊谷縣令は、騎馬にて管內御送迎申されける。

此日御輦の御安着ましませしとき、恐多くも文右衞衞門は、御車寄の間近に奉迎し恭しく天貌を咫尺に拜し奉りぬ。

皇太后陛下には、濃き紫の御袴を、皇后陛下には緋の御袴をめさせられ、綾錦の御裲襠に綠の御髮ながく〱と後に垂れさせ玉ふ。白羽二重の御小袖いと淸らかに御玉步のとき、濱荻典侍は麗しき御傘をさしかざしまゐらせらる。玄關御車寄の正面には、菊花御紋の紫縮緬の御幕を張り、紅の緣ある薄べりの御座を、入口より廊下に敷列ね、軒頭に大國旗を交叉せらる。奥の間の御玉座には緞子の御茵をまうけ、金地の屛風もて御座側を圍みまゐらせたり。御調度の品々は、いづれも宮中よ

り御持參遊され、宿許へ御用命の品は、若干の雜具のみ、御料の御菓子は、加賀落雁の長生殿を用ゐさせられ、御菓子ども女官方より宿許へ御下賜あり、また御目錄包頂戴の光榮を拜せり、かくて御簡約なる御まうけを拜し奉り、草民等は一向恐縮に存し奉りぬ。

とりわけて此頃は、五月雨月の空合とて、御道筋の川々の水溢れ橋落ちて御通輦の御日割さへ自ら御變更を見し事、いと恐多き次第なり。道すがら賤女の田植のさまを見まゐらせて、供奉の福羽(美靜)氏は左の歌を上りぬ。

ふる雨にしひても見ませぬれつゝもはこぶ田面の賤がわか苗

陛下御覽遊されて御詠を賜ふ。

心ありてしひても見よと賤のわざこれも敎のうちとこそ思へ

又富岡にて御詠あらせらる。

絲車とくもめぐりて大御代の富を助くる道開けつゝ

とる絲のけふのさかえを初めにてひきいたすらし國の富岡

又久しぶりにて雨の晴れたるを、

けふうれしまつ雨はれて武士の心のこまもさそいさむらし。

御道筋の民家はいづれも軒頭に國旗をかゝげ、新らしき手桶に清水を滿へて、非

常に備へ、門前を掃清めて、謹みて御通輦の御威儀を拜し奉りける。

御輦をとゞめましつる大御跡いく千代かけて殘る石ふみ

維時大正十年四月、御駐輦遺跡記念碑建設の日、

堀越文右衛門富美謹而記之。

内山正如敬書

廣耕畫史謹寫

明治神宮外苑繪畫館八十題の内

第二十八番富岡製絲場　行啓

（堀口薫治氏報告及上毛及上毛人參取。）

## 第二項　明治九年六月奥羽御巡幸

明治九年六月五日、奥羽御巡幸につきては、當時栃木縣下たりし新田・山田・邑樂三郡關係者、其餘光を拜したるなり。即ち其途次宇都宮行在所に於て、高山彥九郎同じく匹夫を以て勤王の大義を明にし、曩に追賞に與りしを追懷し給ひ、今回祭粢料拾五圓を賜ひ、栃木縣官をして之を傳へしむ。此時伏島近藏が事も聖聽

に達せしにや、聽て賞賜せらるゝ所あり。即ち近藏が事蹟は左の如し。東巡録

近藏は上野國新田郡蛇塚村の農なり。平素身を率ゐる儉素、而して亦能く散するを好む。維新已來勸農の政大に行はる。近藏乃ち明治五年三月を以て自ら唱首となり、外八箇村と協議して、岡登用水再開の事を請ひ、同年十月功を竣へ、大に洪益を起せり。抑是の水路は、往昔寛文年中、舊幕代官岡登次郎兵衛なる者、新田郡笠懸野原を開拓せんとし、多方苦慮巖石を鑿ち、許多の工を費し、新溝を開きたるものなり。而して其流末他領の村民、異議を陳して服せず。各方之に應じ數千の士民蜂起して、一夜にして新溝を埋む。岡登腹を屠て死す爾來各村灌漑の利特に雨水を仰ぎ、再開に志す者ありと雖も、封建の餘弊議協はずして止む者久し。近藏の時に至て水路上下同管に歸し、復往日の憂なし。乃ち其舊址を蹤するに渡良瀬川入口より七十間餘を隔て、巨巖の半腹長十七間の斫開口ある者あり。其他水門・土臺・木柵・杭等、依然として土中に存し、百五十餘年前の遺業を繼くを得、奮勵不已、終に成功に至る。其費總計金四千七百三拾圓、近藏衆に先ちて其貳千五拾圓を出す。餘額乃ち容易に募集するを得たり。明治六年十月、銀杯三つ組壹具を賜て、之を賞す。

## 第三項　明治十一年九月北陸東海御巡幸途次本縣に行幸

一　御休泊割

八月三十日
　午前七時五十五分　假皇居御發輦御馬車
　午後二時三十五分　浦和御着
　　行在所　師範學校

八月三十一日
　浦和御滯在

九月一日
　午前八時　浦和御發御馬車
　午後二時　熊谷御着

行在所　竹井耕一郎宅

九月二日

午前七時　熊谷御發御馬車

午後二時二十五分　新町御着

行在所　羇客所

九月三日

午前七時　新町御發御馬車

新町屑絲紡績所に臨幸各工場御巡覽

午前八時十五分　同所御發輦

御小休　倉賀野町須賀喜太郎宅

御晝餐　高崎區務所

御小休　日高村假休所

內藤分村より御板輿に御召換前橋曲輪町にて再御馬車に乘御

午後二時四十分　前橋御着

行在所　生絲改所

九月四日

午前八時　御出門

群馬縣廳　師範學校　座繰製絲場御巡覽

正十二時　行在所還御

午後一時　前橋御發御馬車

同三時二十分　高崎御着

行在所　高崎區務所

九月五日

午前七時三十分　御出門

高崎營所に臨幸兵舍內御巡覽觀兵式分列式及操練等天覽

同九時四十分　行在所還御

午十二時　高崎御發御馬車

御小休　板鼻町福田壽郎宅

御板輿に御召換碓氷川渡御

御小休　原市町五十貝鶴郎宅
午後四時二十分　松井田御着
行在所　警察署

九月六日
午前七時　松井田御發御馬車
五料村にて御板輿に御召換
御小休　坂本驛　金井尙七郞宅
同　粟ヶ原村小山小一郞宅
同　峠町(碓氷峠)熊野神社社頭假御休所
午後六時五分　追分御着
行在所　土屋一二宅
(以下省略)



## 二　重なる供奉員

太政官
右大臣　岩倉具視　參議　大隈重信

參議　井上馨　少書記官　谷森眞男
少書記官　櫻井能監
內務省
大書記官　品川彌二郞
警視局
大警視　川路利良　權少警視　迫田利綱
大藏省
少書記官　橋本安治　少書記官　佐伯惟馨
陸軍省
少輔　大山巖　中尉　高田善一
近衞士官
陸軍少佐　比志田義輝　同大尉　本田親秀
同中尉　高橋信寬　同中尉　橫地剛
同少尉　川井守一　同　佐久間盛義
同　富田質稱　同　小田新太郞

同　栗栖亮

騎兵

陸軍少尉　細井安恭

近衛局

陸軍中尉　磯林眞一

宮内省

卿　德大寺實則　大輔　杉孫七郎

一等侍補　佐々木高行　同　土方久光

二等侍補　高崎正風　三等侍補　山口正定

一等侍醫　伊東方成　三等侍醫　伊東盛貞

大書記官　香川敬三　同　山岡鐵太郎

權大書記官　堤正誼　侍從　堀河康隆

侍從　高辻修長　同　富小路敬直

同　綾小路有良　同　西四辻公業

同　東園基愛　同　北條氏恭

同　片岡利和　同　太田左門
御用掛　近藤芳樹　七等出仕兼二等掌典　橋本實梁
三等掌典　岩倉具綱
（御先發人名）
內務省　少輔　林友幸　權少書記官　西村捨三
警視局　少警視　佐和正
宮內省　少書記官　櫻井純造

總計一行七百九十一人

三　行幸記事

（一）御巡幸御決定御發表となるや、楫取群馬縣令は、明治十一年八月五日、甲第六十九號を以て、左の數件の布達をなせり

今般　御巡幸被仰出候に付ては、管內御通輦の節左の通可相心得、此旨布達候事。

一御行列拜觀勝手たるべき事。

一御行列拜見の節は、笠或は帽を脫し、路傍に寄り、謹で敬禮可致事。

一庶民營業平日の通。

一諸献上物等は一切不_レ相成候事。

(二)御巡幸御休泊割　明治十一年七月廿二日、乙第八十號を以て、正副區戶長に達して曰く「今般北陸・東海兩道御巡幸に付、當管內御休泊割、左の通り被_レ定候旨被_二仰出_一候條、此旨爲_二心得_一相達候事。

| | 御晝 | | 御泊 | |
|---|---|---|---|---|
| 第四日 | | | | 新町 |
| 第五日 | 同 | 前橋 | 同 | 前橋 |
| 第六日 | 同 | 前橋 | 同 | 高崎 |
| 第七日 | 同 | 高崎 | 同 | 松井田 |

(三)御巡幸御行列拜觀の者、敬禮を盡し、不敬の振舞無_レ之樣告諭。

今般御巡幸仰出され候に付、甲第六十九號の通布達候に付ては、御行列拜觀之者共、能く敬禮を盡し不敬の振舞等決して無_レ之樣、懇篤告諭可_レ致置、此旨相達候事。

(四)八月廿二日を以て、天機奉伺者の資格を定めて、區內に布達す。(五)明治十一年九月十三日を以て、御巡幸につき、本月滿八拾年以上の者へ、慰老として金貳拾五錢づつ、縣廳へ臨御の節下賜候に付、該金員を戶籍掛より渡す樣、正副區戶長へ布達せり。(六)明治十一年七月二十日、御巡幸沿道正副區戶長、學區取締、

今般御巡幸被仰出候に付ては、御通輦沿道學校生徒、御行列を拜觀候儀は不苦候得共、其爲め衣服を揃へ、帽履を新調し、虚飾を張り、無益の費用有之ては聖意に乖戻し相濟まざる儀に付生徒一般平常處持の衣服を用ひ可申候。假令一村一町限、人民協議上に出候共虚飾浪費に渉り候儀は不相成候條、此段其父兄共へ懇篤告諭可致此旨相達候事。

(七)七月廿二日

今般御巡幸被仰出候際、各學校有志戮力、新築及修繕の儀申出候向も有之、右は在來の建屋陜隘或は破損したるを以て經營候段、學事振興の一端には候へ共、或は資力不足を以て、該所一般の費用に關し、或は相競外觀を粉飾するの弊を生じ、空く浪費に相涉候ては、人民の困難を來候は勿論、第一地方の疾苦を問はせらるゝ朝意に悖り不都合候條此旨厚相心得、從前集金方法相立候を以て、此際着手候は格別、資金不足の向は強て建設修繕等を以て、虚飾に相流、他日の疾苦に相成候樣の儀無之樣、注意可致、此旨爲心得相達候也。

(八)本縣內御巡幸の詳細は、巡幸日誌によれば左の如し。

九月一日、群馬縣令楫取素彥、熊谷行在所に伺候拜謁を賜はる。

九月二日、埼玉・群馬兩縣の界より、縣令楫取素彦先駈、午後二時廿五分新町驛行在所

着輦、縣客所を用ゐらる。夜縣令楫取素彦、同縣御用掛正四位千種有功、從五位河鰭實文謁見す。

九月三日、微雨。午前七時發輦、御馬車、新町屑絲紡績所（現今ノ前橋市[illegible]）に行幸あり内務少輔前島密、內務少書記官橋本正人、同御用掛人見寧等、假設の便殿に著御。前島密、屑絲及び處務一覽表等を叡覽に供ふ。少焉して密を先導とし、各工場を順覽せらる。

該所は內務省の直轄にして、故內務卿木戶孝允・大久保利通の建議を以て、明治八年、同省七等出仕佐々木長淳をして、地を此にトし、獨乙國人グレーフェ、を雇ひ工場建築の事に任し、又機械師獨乙國人マルチン、紡績技師瑞西國人ヘールを雇ひ機械を英獨瑞西に購入し、十年六月功を竣ひ、十月二十日を以て開業すと云ふ。

工手男女二百二十名。

八時十五分出輦、烏川・岩鼻驛等を經、九時七分、倉賀野驛に着せられ、須賀喜太郎の許に御少憩。十時十分、高崎驛區務所に於て、午餐を供す。該地屯在東京鎭臺高崎分營兵驛口に整列奉迎す。發輦の時亦驛外に奉送す。午後一時八分日高村に至る。區長柴田藤次郎等、林下に假葺せし小亭に就て、御小憩。同五十七分內藤分村より鸞輿にて、利根川新架の舟橋を渡御。二時前橋曲輪町に至り、馬車に復御。同四十

分、前橋驛着輦、生絲改所<sub>本町農工銀行東側</sub>を以て行在所に充つ。本日岩倉右大臣・大隈參議品川内務大書記官・櫻井太政官少書記官・佐伯大藏少書記官、新町より新路を經て、本驛に着す。該路は縣廳を前橋へ移すの後東京往還の便を謀り、居民協同開鑿する所、卽今功を竣ふを以て、縣官供奉官の巡視を請ふ。仍て之に及べるなり。

同　四日、雨。聖駕前橋に駐す。午前八時、縣令楫取素彥を先導とし、縣廳に臨御。大書記官岸良俊介、僚屬を率ゐ門外に奉迎。先づ設置の玉座に著御。縣令祝詞及縣治書類を上る。次に各課御順覽。博物所に至る。縣令陳列物件に就て、其沿革盛衰を奏す。次に衞生所を通覽せらる。次に師範學校に臨御。校員・生徒門外に奉迎、豫め設くる所の一室に御小憩。既にして縣令、校長の祝詞及生徒名簿等を上る。次に各教場を巡覽し給ふ。次に座繰製絲場を通覽せらる。該場は本驛製絲者共有の工場なり。工女七十人、蠶絲製造の業を爲し覽に供ふ。次に製絲原社に幸せらる。頭取深澤雄象・副頭取星野長太郎等、奉迎祝詞を上る。縣令を先導とし工場を通覽せらる。工女數名製絲の業を爲す。又製絲及繭等を覽に供ふ。後雄象・長太郎を行在所に召し、右大臣をして褒詞を傳へ、別に社へ金百圓を賜はしむ。午十二時還御。今朝贈正四位高山正之の玄孫高山守四郎を行宮に見玉ふ。守四郎時に十三年一ヶ月、本驛寄留學校の生徒たり。

午後一時本驛發輦。故途を經て高崎驛著輦。行在所は昨日午餐を供せし屋舍（編者所）なり。本日侍從綾小路有良、疾を以て供奉を辭す。該驛士民烟火技を演じ巡幸を祝す。晩間供奉諸員に酒饌を賜ふ。奏任官以上は行在所に於てし判任官以下は内膳課に至り之を領す。又新田郡太田町大光院住職中教正日野靈瑞、本縣士族木呂子退三拜謁す。退三は戊辰の役に功勞あり。曩既に賜賞を辱くせし者なり。

同　五日、雨。午前七時三十分出御。高崎營所へ臨せらる。司令官陸軍中佐山路元治奉迎。先づ假設の便殿に著御。司令官兵員表等を上る。次に兵舍各室御巡覽。次に練兵場に於て、觀兵式・分列式及操練等を覽玉ふ。此時營兵人員、奏任官四十七名、判任官百四十八名、卒千二百七十五人あり。九時四十分、行在所還御。午十二時、該驛發輦、午後一時十分板鼻驛に着せらる。福田壽郎の宅に御小憩。之より輿に御し、碓氷川新架の船橋を過ぎ賜ひ、二時五十五分、原市村五十貝鶴郎の宅に御小憩あり。四時四十分松井田驛着御。警察署を以て行宮となす。本日終日雨歇まず。道路泥濘一行困頓す。

同月六日、晴。例刻發輦。七時卅五分、五料村中島金平の宅に御小憩。輿に御して發せらる。前路碓氷峠等の峻坂多きを以てなり。村盡る所、妙義山嶄然雲間に聳ゆ。連日雲雨晦冥、山色の賞眺に供するもの無かりしに、本日放晴、頗る叡慮を慰せ

らるゝを知る。九時二十分坂本驛に着せられ、金井尙七郞の宅に御小憩。十一時五分栗ヶ原村に御小憩。小山小一郞の宅なり。吏卒に摶飯を賜ふ。是より碓氷の山路に入る。該道巖石犖确、人の知る所。今玆龍駕經過の盛典に際し、或は凸を刪り、凹を塡め、或は舊道を廢し、新道を作り、衆庶をして永く行路の沮難を免れしむ。亦是巡幸の餘澤のみ。午後一時五分、碓氷峠町に着御、熊野神社社頭假設の小楹に憩息し玉ふ。該地は碓氷嶺の絕頂にして、上野・信濃二國、群馬・長野兩縣是に於て界す。縣吏交代例の如し。長野縣令楢崎寬直先駈。午後二時十八分、輕井澤驛に著せられ、晝餐を佐藤織衞の宅に奉る。是より馬車に復御、六時五分、追分驛著輦。土屋一二の宅を以て行在所に充つ。

(註一)當日紡績所にては、午前十時頃、從業員一同工場南側廣場に整列して、龍駕を迎へ奉る。聖上には一旦事務所の樓上に入御あり。御少憩の後、精練室・製綿室・精紡室・仕上室等、各作業の狀態を精細に御巡覽あり。終つて再び樓上に御少憩の後、午前十一時頃從業員奉送の裡に還御ありたり。當日從業員一同に賜餐の料を賜へり。

## 四　行在所の現況

(一)新町行在所は御羈客所と稱し、行在所に充つるため、新町驛にて特に新築し

たるものにして、後新町分署となり、其後又町役場に假用せられ、今に當時の建築物を存す。行在所前に建てられたる標札も、亦新町役場に現存す。

（表面）行　在　所

（裏面）明治十一年。車駕將巡于北陸。九月初二日。駐蹕上野國緑野郡新町驛二日。此牌所當時標植行宮者。而官賜驛吏也。歳日歴久、恐致瀆損。因記事由於牌背。告珍護之意。且使後人由以瞻仰盛大偉績。亦本縣之志也。

明治十一年十一月

群　馬　縣

（一）松井田行在所は、碓氷郡松井田町字仲町四百及び四百一番の地籍を占め、街の中央國道の南にあり。今の安中警察署松井田分署の建物に用ゐらるるもの則ち是れなり。木造平家建板葺にして、建坪六十坪五合あり。明治九年七月三十一日、警察富岡出張所第三區巡査屯所を此地に設置せらるゝに當り、町人金井菊太郎の居宅を借用し、明治十一年、更に同人より購入したるものなり。庭前の樹木は當時附近の人民より獻納したるものゝ由にて、行在所の標札、此地にも亦保存せらる。裏書の文、新町行在所の標札と略相同じ。

（表面）行在所

（裏面）明治十一年。車駕將巡于北陸。九月初五日。駐蹕上野國碓氷郡松井田驛一日。驛之警察署。實爲行在所。此牌當時所植以駐蹕者也。歲日之久、恐致瀆損。因記事由於牌背。告主者以珍護之意。且使後人由以瞻仰盛大偉績。亦本縣之志也。

明治十一年十一月　　群馬縣

聖蹟碑

明治十一年戊寅九月。今上巡幸北陸。二日車駕入群馬縣。四日臨幸厩橋治廳。以日高村當輦道。新相地架屋。以爲駐駕之處。後村民相謀建石。欲使聖蹟不歸於湮滅。蓋新道通高崎二線。稱御幸道者。由此得名云。乃屬余記其事。余奉職本縣。不辭而書之。

明治十四年十一月三日

群馬縣令從五位楫取素彦撰並書

## 第四項　明治十二年七月英照皇太后伊香保行啓

| 日付 | 地名 | | 場所 |
|---|---|---|---|
| 七月十七日 | 東京御發輿 | | |
| 七月十八日 | 新町驛 | 行在所 | 羈客所 |
| 七月十九日 | 岩鼻町 | 御小休所 | 勸業試驗場 |
| | 倉賀野驛 | 同 | 須賀喜太郎 |
| | 高崎驛 | 行在所 | 西群馬郡役所 |
| 七月二十日 | 中泉村 | 御野立 | |
| | 金子驛 | 御小休所 | 今城晉七 |
| | 上野田村 | 同 | 森田文次 |
| | 澁川村 | 同 | 梅澤儀平 |
| | 一本松（澁川村之內） | 御野立 | |
| | 離山村（伊香保之內） | 御野立 | |
| | 伊香保村 | 御駐輿行在所 | 木暮八郎 |

〔御歸路〕

伊香保村御發輿

| | | |
|---|---|---|
| 離山 | 御野立 | |
| 一本松 | 同 | |
| 澁川村 | 御小休所 | 梅澤儀平 |
| 八木原村 | 同 | 北爪仲二郎 |
| 大久保村 | 同 | |
| 岩神村 | 同 | 製絲場 |
| 前橋町 | 行在所 | 生絲改所 |
| 新堀村 | 御野立 | |
| 玉村驛 | 御小休所 | |

〔參考〕

御蔭の松　明治十二年、英照皇太后陛下行啓の際、御野立あらせられし所。碑を建て柵を繞らす。碑面には扈從皇太后大夫萬里小路博房卿の歌「芝中の松のやどりに千代かけて殘るは君が御蔭なりけり、」裏面には時の群馬縣知事楫取素彥の撰文を鐫す。（群馬縣案內、）

御陰松碑陰文

是歲己卯。皇太后宮行啓於伊香保之溫泉。七月十七日。車駕發京。往返由此道。時屬盛夏。揖松下休車駕矣。既而土人建石。命松曰御陰。請博房卿之詠。屬余書題額。博房卿以本宮從駕。余則管地方。卿之詠余之題。皆不可辭者。碑成矣併記其事於碑陰。亦出土人之意云。

明治十二年秋九月

群馬縣令　楫取素彦撰並書

### 第五項　明治十七年六月日本鐵道會社上野高崎間鐵道開業式臨御の爲高崎に行幸

御發着割

六月二十五日　午前六時三十分　青山假皇居御發輦

午前八時　上野停車場御發車

正午十二時　高崎停車場御着車

高崎停車場便殿に於て御晝餐。

午後三時　高崎停車場御發車

午後七時　上野停車場御着車

式場に臨御勅語を賜ふ

午後八時　假皇居還幸

重なる供奉員

宮内卿　伊藤博文　宮内省御用掛　副島種臣

宮内省出仕　寺島宗則　宮内省二等出仕　杉孫七郎

宮内少輔　香川敬三　宮内大書記官　北垣國道

宮内權大書記官長田銈太郎　同　三宮義胤

宮内權少書記官田邊新七郎　侍從長　德大寺實則

侍從　太田左門　同　三條西公允

同　岡田善長　御用掛　龜井玆明

御用掛　田沼望　侍從　東園基愛

侍從　富小路敬直　同　藤渡言忠

一等侍醫　池田謙齋　步兵大尉　西島助義

歩兵少尉　中院通規（みちのり）

## 第六項　明治十七年六月皇后皇太后高崎驛行啓

明治十七年六月、日本鐵道株式會社上野・高崎間に營業を開始するや、六月二十五日、明治天皇陛下は、開通式に親臨せられ、高崎驛に行幸せられたることは、前項に記述したるが、皇后・皇太后にも、此月二十八日を以て亦高崎驛に行啓せられたり。

## 第七項　明治十八年十月皇后（昭憲皇太后）太田金山行啓

明治十八年十月二十一日付を以て、宮內卿伯爵伊藤博文より、十月廿四日、本縣新田郡太田町金山に行啓の日割を、群馬縣令佐藤與三宛通牒あり。是れより先二十一日、宮內書記官より行啓仰出さるゝ旨電報あり。

御休泊所日割

御休泊所日割

十月二十四日

午前八時三十分　御出門。

御小休　上野停車場

午前九時三十分別仕立汽車乘御。

御小休　熊谷驛停車場

此より御乘輿　七町

御晝　同所　熊谷寺　一里八町

御小休　下奈良村　飯塚吉五郎　一里十五町

御小休　妻沼村　歡喜院　二里廿六町餘

御泊　太田町　大光院

同　廿五日

午前九時御發輿

御晝　御野立　金（）山字井戸の上

御晝餐前後松蕈狩御覽。畢て大光院へ還御。

同　廿六日

午前七時三十分　御發輿　二里廿六丁餘

御小休　妻沼村　歡喜院　一里十五町

御小休　下奈良村　飯塚吉五郎　一里八町

御晝　熊谷驛　熊谷寺　七町

御小休　同所　停車場

午十二時四十分別仕立汽車乘御。

還御

然るに廿五日に至り變更あり。午前七時大光院御發輿、午後一時三十分、熊谷發別仕立汽車に乘御せらるゝこと、なれり。

重なる供奉員

重なる供奉者

皇后宮大夫　香川敬三　皇后宮亮　兒玉愛三郎

宮内大書記官　山口正定　侍從　富小路敬直

侍從試補　田沼望　一等侍醫　池田謙齋

醫員　丸茂文興　十七等出仕　高橋良尙

女官

典侍　室町靖子　権典侍　柳原愛子
権掌侍　萬里小路良子　命婦　藤島朝子
権命婦　中東明子　同　平田三枝
外　女嬬　四名　十七等出仕　壹名　従婦　八名
御内儀掛屬　二名　外四人

(註一)新田神社記錄、十月二十五日の條に「新田神社參拜あらせらる」とあり。

縣廳文書の記事左の如し。

(一)本縣は吏を遣はして、松茸生立の状況調査す。(十月二十二日。)

字茶臼山　、百八本　内七本　不用の分
字井戸ノ上　百貳拾壹本　内八本　不用の分
字はげ下　拾九本　内一本　不用の分
字神ノ倉　四本
字藤巻　貳拾七本
字御茶屋　貳拾本　内十本　不用の分
字八王寺　七拾七本　内一本　不用の分

計　　參百七拾六本　　内貳拾七本　不用の分

差引合計參百四拾九本

但し本日發生合計貳拾壹本

(二)古戸船橋を撤して架橋とし、井水を檢し、東光寺井水を御膳水とし、長念寺を御立退所と定む。行在所に充てられたる大光院にては、自費を以て修理を施す。大光院住職日野靈瑞に、白羽二重壹疋、金貳百圓下賜。縣令以下に酒肴料を下賜する等差あり。(三)縣令より鯉五尾、鯰五尾、つぐみ三百羽を獻納す。(四)大光院住職日野靈瑞は和歌二首、細谷村金谷雪平は長歌一首を台覽に供す。

皇后宮の金山へ行啓あらせられしを畏み祝てよめる。(一八一〇)

大光院住職　　日野靈瑞

山賤がやどの薪となる松も御代の惠みに萬代や經ん

金山の松も御代にし逢ざれは語るよしなきちよの古事

右短冊二枚宮内省山口大書記より御手許え上る。

細谷村　　金谷雪平

今年明治十八年九月末つ頃、くるまの縣上毛野國丹北太郡細谷村に、大宮となんい

へる家あり。この側を流るゝ小川の名を、聖川となん負はせしことはりは、今知るべき由なけれど、その名くはしくいとめでたけれ。そもこの水上は、同じ國渡良瀬川より流れ入る新田堀といへる流の末にして、古より名も高き新田山の西南に當りて、三拾町許隔りて、この大宮聖川になんある。折しも雨のふりつゞきて、落たぎつ水いやまさりければ、春の年越の頃より、手肱に水沫掻たり、むか股に泥かきよせて、勞つき作りしをき津としのもし穂の田の面に、水のをしいらんことをいとへて、里人と共にいすゝきゆきてせきとめんと、鋤鍬にて砂子さゞれ石をうがちけるに、底より赤く又黄を含むまでうるはしき勾玉のいでければ、手玉に提けて之を見るに、これぞこのかねて聞き傳へし、古への神代のあかれる御代のやんごとなき人々の手玉もゆうにめでて、みまの襲への宇都たからの滿ろ玉なり。いかにしてかくなる小川に埋みしものにやと怪む許り、しかすがに大宮聖川の名ををへぬるは、深き故のあるべけれど、そのよし知らえぬをうれたきの餘りに。

百千歳埋みし玉のいでぬるは大宮人の戀しかるらん。
いつよりかいひ傳へけん大宮の名をそおへぬる聖川哉。
新田山みねに小松の生えにけり千代萬世も御代そ榮ゆる。
此神の赤き心を見よかしにみねの紅葉の色そことなる。

## 第八項　明治十九年五月皇后皇太后館林躑躅ヶ岡行啓

一　御發着割

六月十日

午前七時十分　御出門

　御別列にて新宿停車場御着

同　七時三十分　同停車場御發　別仕立汽車

同　九時　鴻巣停車場御着

　御小休　同町　鈴木半右衛門方

　御馬車　途中御小休行田町橋本喜助方

午　十二時　利根川渡船場着御乘船

午後一時　躑躅ヶ岡御着

　御晝餐　同所　躑躅樓

午後四時　躑躅ヶ岡御發

御小休　行田町　橋本喜助方
同　鴻巣町　鈴木半右衞門方
同　七時四十分　鴻巣停車場御發別仕立汽車
同　九時　新宿停車場御着
御別列にて還御

## 二　主なる供奉員

皇后陛下供奉員
皇后宮大夫　香川敬三　皇后宮亮　三宮義胤
典侍　室町靖子　權掌侍　樹下範子
權掌侍　小池道子
外に命婦二人　權命婦一人　女孀四人

皇太后陛下供奉員
皇太后宮大夫　杉孫七郎　皇太后宮亮　兒玉愛次郎
典侍　萬里小路幸子　權典侍　平松好子
掌侍　中御門隆子　權掌侍　吉見光子

外に　七等出仕女官一人　權命婦一人　女孺三人

侍醫　岩佐純　醫員　藤岡元禮

內事課屬一人　皇后宮職屬二人　皇太后宮職屬二人

大膳職屬・雇・人夫・定傭夫十一人　內藏寮屬一人　主殿寮十六人

內匠寮二人　外職工八人　主馬寮十三人　外磨方馬供十七人

調度局三人　外士卒拾貳人

騎兵一分隊　下士二人 卒六人　警部二人　馬丁二人

外に

吉井次官　田沼侍從

記事

三　當時の記事左の如し。

(一)行啓の前年、明治十八年五月二十三日、內詔を奉じて、三條西侍從・萬里小路侍從・廣幡侍從試補、三名の下檢分あり。(二)五月五日行啓の御豫定なりしも、連日の雨天のため、利根川出水のことあり。延引に延引を重ね、六月十日に至れるなり。(三)利根川渡御の御船は、長さ七間許りの屋形船にて、搏風には旭日に鶴の祥瑞を畫き、紅・白縮緬の天幕を張り、周圍には御紋章の御幕を絞り上げ、內には毛布に鷲

絨氈を敷き重ねて、御座所に充て、舳艫には二人の船子を乘せ、六人の船子棹を操りて、挽舟となる。(四)本縣知事佐藤與三は、東京まで奉送迎せり。(五)本縣より森大書記官、其他屬三名、行啓事務のため、前日より出張。(六)御料水は館林町字肴町青龍權現井戶と定めらる。(七)沿道町村、館林・佐貫・六鄕・赤羽の四小學校生徒は、沿道に整列奉送迎す。(八)行啓に際し、赤羽村大字羽附字上志柄、縣道より躑躅ヶ岡に至る道路、全長九町三十五間、巾二間の內三分の一を直線に改修す。土俗行啓道の名あり。(九)城沼に於て鯉捕の狀を御覽に供し、鯉數尾、外に蓴菜若干を獻納して、御嘉納あらせらる。(進藤長作氏調査書)

〔參考〕大正四年度に於て、邑樂郡會は此の行啓紀念碑を建設せんがため、經費金五百四十七圓六錢五厘を議決支出せり。同年十一月竣工。其碑文は左の如し。

行啓記念碑

躑躅岡公園花時紅豔奪ㇾ目。明治十九年五月十日。英照皇太后　昭憲皇太后兩陛下玉輅臨啓。流覽移ㇾ晷。賜二金若干一。僻陬小園辱沾二雨露之恩一。卉木有ㇾ知。亦當ㇾ增二一段榮盛一矣。玆紀二慈惠一以傳二無窮一。

大正四年十一月

正三位子爵　秋元興朝撰並書

## 第九項　明治十九年十月皇后（昭憲皇太后）太田金山行啓

御休泊割

一　御休泊割　明治十九年十月二十八日、皇后陛下第二回の金山行啓あり。其發表せられたる御休泊割は左の如し。

十月廿八日　午前八時三十分御出門、午前九時三十分別仕立汽車にて熊谷驛着御。休泊所御道筋昨年の通り。

廿九日　午前九時御發輿、御晝　御野立　金山字井戸の上、御晝餐前後松茸狩御覽畢て大光院へ還御。

三十日　午前七時御發輿、

午後一時三十分別仕立汽車乘御還御。

御行列

二　御行列　熊谷より太田町間御往還御乘輿。御列左の如し。

警部（馬）　騎兵　御旗　下士　士官（馬）　士官（馬）　仕人（歩）

警部（馬）　騎兵　二名　士官（馬）　士官（馬）　仕人（歩）

| | | | |
|---|---|---|---|
| 内舍人(歩) | 内舍人(歩) | 御板輿主殿屬(歩) | 皇后宮屬(歩)　女官(人力車) |
| 女官(人力車) | 女官(人力車) | 大夫(人力車)　侍醫(人力車) | 亮(人力車) |
| 侍從試補(人力車) | 騎兵騎兵 | 騎兵騎兵 | |

三　主なる供奉者

皇后宮大夫　香川敬三　侍醫　池田謙齋

調度局長　堤正誼　侍從試補　田沼望

外　內事課　二人　大膳職　十三人　內匠寮　八人

調度局　十八人　主殿寮　廿五人　內藏寮　二人

皇后宮職　二人　近衛士官　四人馬丁四人

騎兵下士六人　卒　六人　計

女官

典侍　室町清子　權典侍　千種任子

掌侍　唐橋貞子　權掌侍　樹下範子

命　婦　藤島朝子　權命婦　平田三枝

權命婦　吉田　愛

外　女孺　三人　權命婦　二人　十七等出仕　一人

雜仕　一人

有栖川一品宮御息所　侍女一人　家扶一人

御宿　太田町　岡　太仲方

記事

四　縣廳文書の記事、左の如し。

(一)尋で還御の翌三十一日、典侍高倉壽子・權典侍小倉久子・權掌侍萬里小路良子・同園祥子、外女官・雜仕・針女、計拾四人、日歸りにて松茸狩に出張せらる。西山官林・八王寺民林茸狩。小倉權典侍以下數名は、新田神社に參拜、午後五時出發、熊谷に向ひ御泊せらる。(二)松茸は十月二十八日調査にて、五百七拾參本。(三)御立退所・御膳水・獻上物等、概ね昨年に同じ。(四)細谷村の人金谷雪平、亦和歌四首を獻納し、太田町の畫家大澤秀山、楠公圖額面を獻上す。金五拾圓を下賜せられ、執奏したる群馬縣令佐藤與三宛、皇后宮大夫香川敬三より左の書面あり。

　群馬縣平民大澤秀山より自製之額壹面獻上願出候旨を以て、御傳獻相成候に付、

早速御前へ差上候。依て金五拾圓被下候間、御傳達有之度、此段申入候也。

明治十九年十月二十九日

(五)此回は桐生産帯地・洋服地、約四百圓の御買上あり。(六)佐藤縣知事以下に酒肴料御下賜は概昨年の通り。

## 第十項　明治廿一年十月皇太后（英照皇太后）太田金山行啓

御休泊日割

一　御休泊日割

十月二十一日

一午前六時二十分　青山御所御出門、新宿停車場御着、直に汽車乗御。(別仕立汽車。)

一午前六時五十五分　御發車　同　十時四十五分足利御着車、織物講習所前にて御停車。

御晝　足利町　織物講習所

御泊　太田町　大光院　二里十五丁餘

十月廿二日

午前九時　御發輿

御晝　御野立　金山　字井戸の上

御晝餐前後松蕈狩御覽、畢て大光院へ還御。

十月廿三日

一　午十二時三十分　太田町御發輿。

御小休　足利町　足利停車場　二里十五丁餘

一　午後三時　足利御發車　別仕立汽車　同六時五十五分　新宿停車場　御着

直に還御

御列

二　足利・太田町間御往返御列

警部（馬）　警部（馬）　騎兵　騎兵　御旗　下士二名　近衛將校（馬）　近衛將校（馬）　同（同）　同（同）

内舍人（歩）　内舍人（歩）　御板輿　輿丁八人　皇太后屬　女官（人力車）　同（同）　同（同）

大夫（同）　亮（同）　侍醫（同）　侍從（同）　騎兵　騎兵　騎兵　騎兵

主なる供奉員

三　供奉員

從二位　中山慶子　皇后宮大夫　杉　孫七郎
主獵局長官　山口正定　皇太后亮　兒玉愛三郎
侍醫　竹內正信　侍從
近衛將校　四人
女官
典侍　萬里小路幸子　權典侍　中御門隆子
權掌侍　吉田桃子　七等出仕兼命婦　松室伊子
權掌侍　竹屋津根子　權命婦　生源寺須賀子
外　女孺二人　權命孺二人　雜仕一人　從婦七人
內事課　一人　皇太后職　二人
大膳職　八人外定傭夫二人　內藏寮　一人
主殿寮　內舍人　二人　仕人　九人　輿丁仕人　七人
內匠寮　二人　外職工六人　侍醫局　二人
調度局　三人　夫卒十四人　主獵局　一人
二位局附　四人

縣廳記事

騎兵　下士　二人　卒　六人
近衞士官馬丁　四人

四　縣廳文書の記事、左の如し。

(一)御休泊日割發表に先ち、十月十七日、兒玉皇后宮亮、御道筋下檢分として出張せらる。(二)御立退所は太田町高等小學校に指定。御膳水は東光寺井水を充てらるゝこと前年に同じ。(三)群馬縣知事より鶴二百羽、薯蕷五拾本を獻納す。一位局に對して、又鶴五十羽を獻納す。(四)縣よりは佐藤知事・曾我部書記官、其他關係吏員出張し、御警衞として雨宮警部長・警部・警部補・巡査・雇を合せて八十五人。(五)太田町參拾貳番地中村年雄より、和歌千首集壹卷を獻納す。又埼玉縣榛澤郡新戒村農村岡傳吉より、カモ瓜壹個量五貫七百目を獻納す。(六)發生松茸調査(十月十三日調。)

| | | | |
|---|---|---|---|
| 字井戸の上 | 一九六本 | 字茶臼山 | 二一八本 |
| 字太平 | 三〇本 | 字中山 | 三〇本 |
| 字御茶屋 | 三四本 | 字藤巻 | 四五本 |
| 字八王寺民林 | 九四本 | 計 | 六六八本 |

(七)桐生織物會社より帶地・服地・縮緬等拾六點、百五拾五圓貳拾五錢の御買上あり。

(八)十月二十二日、御代理をして新田神社を參拜せしめられたり。(新田神社記錄。)

## 第十一項　明治廿二年十月皇太后(英照皇太后)太田金山行啓

一　行啓御次第

十月十二日

午前七時三十分　青山御所御出門。　同五十分　新宿停車場御着。

御小憩二十六分間、　汽車乘御。別仕立汽車。

同八時十六分　同驛發　午前十一時五十分　佐野停車場ニ御着。　直ニ御板輿。　午十二時十分　御晝泊所。

佐野町　正田利一郎方着御。停車場より十町。

十月十三日

午前九時　御泊所御發輿　同十時三十分　御晝餐御野立所　唐澤山字富

士山着御。御泊所より一里十八町

松茸狩御覽　午後三時三十分　同所御發輿。

午後五時　御泊所佐野町正田利一郎方還御。

十月十四日

午前八時三十分　佐野町御泊所御發輿。

同五十分　佐野停車場ニ着御。直ニ汽車乘御。

同九時　佐野御發車。別仕立汽車。　同廿一分　足利停車場御着、直ニ御板輿。

正午十二時　御晝泊所太田町大光院へ着御。足利停車場より二里十五町餘。

十月十五日

午前九時　御泊所大光院御發輿。　同九時二十分　金山字井戸の上　御晝御野立所着御。大光院より八町。

松茸狩御覽。

午後四時　金山字井戸の上御發輿。　同時二十分　大光院着御。

十月十六日

午前七時三十分　大光院御發輿。

同　十時三十分　足利町織物講習所着御。

午十二時三十分　同所御發輿。足利停車場へ着御。直に汽車乘御。

午十二時四十分　足利停車場御發車。別仕立汽車。

午後四時三十分　新宿停車場着御。同所にて御休憩。

午後四時五十分　新宿停車場御發車。午後五時五十分　還御。

二　主なる供奉者

皇太后宮大夫　杉　孫七郎　皇太后宮亮　林　直康

侍　醫　竹內正信　侍　從　岡田善長

侍從試補　田沼　望　近衛將校　四　名

二位局　中山慶子

女官

典　侍　萬里小路幸子　權典侍　平松好子

權掌侍　吉見光子　命　婦　生源寺政子

權命婦　鴨脚八十　同　富田　算

外　女孺三人　雜仕一人　從婦　六人

庶務課　三人　主計課　一人　主獵局　一人
醫員　一人　用度課　一人　調度課　二人
供進課　二人　宮丁　七人　輿丁　七人
二位局附屬　三人　侍從職　一人　外雜役　二十一人
騎兵　下士二人　卒六人

三　足利太田町間御往返御列

| 警部馬 | 騎兵 | 御旗　下士二名馬 | 近衞將校馬 | 同 |
|---|---|---|---|---|
| 警部馬 | 騎兵 | | 近衞將校馬 | 同 |

| 御板輿 | 皇太后宮屬　同屬 | 輿丁七人 | 女官人力車 | 同 | 同 |
|---|---|---|---|---|---|

| 大夫同 | 亮同 | 侍醫同 | 侍從同 | 同試補同 | 騎兵 | 同 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | 騎兵 | 同 |

四　縣廳文書の行啓記事、左の如し。

(一)十月七日頃、下檢分として皇太后宮亮林直康、太田町出張の通知、群馬縣知事の許に來信。(二)御休泊割竝に御列書、十月九日通牒來る。(三)御晉輦當日心得書は左の通り。

本縣高等官大光院門內奉迎ノコト。
御先驅ノ警部兩名ハ、凡二町餘ノ距離ヲ計リ、諸所備向其他、沿道人民不敬ノ所業無之樣、配置ノ巡査監督、竝學校生徒整列等ノ注意方ヲ專務トスルコト。
郡長・郡吏員、縣界奉迎ノコト。
郡吏員、其他町村惣代等、市街入口ニ奉迎ノコト。

(四)御立退所、御膳水昨年通り。(五)群馬縣知事より薯蕷七拾本、鶫七十羽を獻納。(六)太田町中村年雄當年八十一歲和歌千首集壹卷、廿一年中より本年に亘りて詠じたるものを獻納。他に獻上物として左の通り。

一柿實五拾個但名稱御所柿　太田町　神谷定七
一梨實貳拾個但新赤龍　鳥之郷村大字長手　由良禹禪
一手製眞綿百目　山田郡相生村高田こう(八十七歲)
一柿實三拾五個但名稱御所百目　太田町　岡きゐ
一高澤海苔梅田村產　山田郡　梅田村民一同

(七)御酒肴料御下賜金額につきては先年の通り。(八)還御の前夜暴雨ありしも、御通路支障なし。(九)中村年雄御褒賞を奉謝して、

伏し仰ぐ御恵あつき賜は數ならぬ身の老の冥加を

（二〇）桐生物産會社より御買上品、代金額百貳拾五圓五拾貳錢。

## 第十二項　明治廿五年十月皇太子太田金山行啓

御休泊割

一　御休泊割

十月十六日

午前十時四十分　御出門

御小休　上野停車場

同十一時三十五分　同所御發汽車

午後二時二十分　小山停車場御乗換御發汽車

同三時四十分　足利停車場御着（二十分延着）

同三時四十五分　同所御發（人力車）

同五時二十五分　太田町御旅館大光院御着

十月十七日

御滯在　同所

十月十八日

午前九時　御旅館御出門

御小休　足利停車場

同十一時四十九分　同所御發（汽車）

午後一時三分　小山停車場御着

同一時十一分　同所御乘換御發（汽車）

同三時三十五分　上野停車場御着

同三時四十分　同所御發

還御

二　重なる供奉員

侍從長　中山孝麿　　東宮亮　足立正聲

東宮武官　中村覺　　同　宮本照明

同　橘周太　　東宮侍從　小笠原長育

東宮侍從　勘解由小路資承　　侍醫　高橋經本

御用掛　丸尾錦作　　御學友　脇坂孝之助
御學友　北小路清　　同　　谷儀一
外
東宮屬　二人　　東宮内舍人　二人　　雜　九人

三　縣廳文書に見えたる行啓記事、左の如し。

(一)十月十四日東宮大夫奥保鞏より、群馬縣知事に宛て、東宮殿下太田行啓は十六日と御治定の電報到着。(二)奉送迎につき左の心得書本縣より通達す。

一本縣高等官ハ大光院門内ニ於テ奉送迎ノコト。
一郡長・郡吏ハ縣界マデ奉送迎ノコト。
一郡吏・町役場員、其他町内重立の者ハ、市街入口ニ於テ奉送迎ノコト。
一新田郡警察署長幷巡査部長壹名、縣界ヨリ御先驅ノコト。

(三)十月十五日、中村群馬縣知事は、横尾參事官、屬一人、警部一人を隨行せしめて、太田町に出張。(四)知事其他より獻上物は左の如し。

一鵜　百羽　　中村群馬縣知事
一利根川鮎　五拾尾　　高山新田郡長

一利根川鯉　參　尾　同

一丹波栗　新田郡生品村大字小金井　田村駒四郎

一御所柿　壹　籠　同　太田町　寺田權平外三名

(五)沿道及太田町附近の小學校十一校奉送迎せり。(六)十月十七日、御茸狩の狀況は左の如し。

午前八時御出門、字神ノ倉ヨリ松茸狩ヲ始メラル。夫ヨリ中山・亢山・茶臼山ヲ順次狩リ終リ、字井戸ノ上ニテ中食。午後八王寺山ノ松茸ヲ狩ラレ、夫ヨリ山ヲ超エ谷ヲ渡リ、新田神社へ御參拜、幣帛料金五圓を納メラル。午後四時、大光院御旅館へ還御。當日本縣郡ヨリ知事・郡長・參事官・警部二名・郡書記等供奉セリ。

(七)中村縣知事以下關係者に酒肴料を下賜せられたり。

## 第十三項　明治廿六年十月近衞師團小機動演習天覽の爲前橋澁川高崎に行幸

一　御發着日割

十月廿日　午後一時　宮城御發輦　鹵簿御遊行　上野停車場御休憩

同　一時四十五分　上野停車場御發車

同　五時二十分　前橋停車場御着車

同　五時四十分　前橋行在所御着

行在所　臨江閣

十月廿一日　前橋御駐輦。

午前七時行在所御出門。御馬車及御乘馬にて中村・石原村・有馬村・八木原村に行幸、演習天覽。(二)

午後四時十分行在所に還御。

(註一)御晝澁川町西群馬片岡出張所

十月廿二日　午前七時　前橋行在所御發、御乘馬。

堤ヶ岡村・三ッ寺村・大八木村に行幸、演習天覽。午後十二時三十分高崎御着。午後一時四十分　行在所御出門。御馬車にて高崎兵營に臨幸。練兵場に於て觀兵式を行はせられ、四時十七分行在所に還御。

行在所　中島伊平宅

十月二十三日　午前七時二十分　高崎行在所御發
同　七時三十五分　高崎停車場御發車
同　十時四十分　上野停車場御着車
同　十一時十五分　宮城還幸

二　主なる供奉員

侍從長侯爵　德大寺實則　宮內次官　花房義質
侍醫　池田謙齋　宮內書記官子爵　高辻修長
侍從子爵　堀河康隆　侍從　片岡利和
侍從子爵　北條氏恭　內大臣祕書官　田中建三郎
主馬助　川上鎭右　侍從試補　廣幡忠朝
車馬監　目賀田雅周　侍從試補　日野西勇麿
侍醫局勤務　平野好德　陸軍步兵少佐　摺澤靜夫
同步兵大尉　新妻英馬　同　騎兵大尉　齋藤久輔
同步兵中尉　藤井高恒　同　步兵中尉　花ヶ崎專之助

外

内事課　屬二人　侍従職　屬四人　内藏寮　屬一人

大膳職　屬一人　膳部六人　庖丁三人　定傭三人

主殿寮　屬二人　内舍人一七人

内匠寮　技手三人　職工六人

主馬寮　主馬助一人　車馬監一人　屬二人

調馬手四人　馭者三人　掌者一人

馬醫一人　蹄鐵工一人　馬丁取締一人

廐方四人　馬丁四三人　省丁二人

侍醫局　醫員一人　屬一人

調度局　屬三人　省丁一二人

下士兵卒　下士二人　兵卒九人

樞密院議長伯爵山縣有朋、學習院次長高嶋信茂も演習陪覽のため來縣。

三　前橋停車場、前橋行在所、高崎行在所、高崎停車場間鹵簿

警部(馬)　警部(馬)　御旗(騎兵下士)　近衛將校(馬)　近衛將校(馬)　近衛將校(馬)　同(同)　同(同)

聖上(御馬車)御陪乘　侍從(馬)　侍從(馬)　侍從(馬)　次官　侍醫(馬車)　書記官　群馬縣知事(馬)　警部(馬)　警部(馬)

第二日　前橋行在所より諏訪森御野立所迄御列

御旗(下士)　近衛將校(馬)　近衛將校(馬)　同(同)　同(同)　聖上(御乘馬)　侍從(馬)　侍從(馬)　侍從(馬)　次官(馬)　侍醫(馬)　書記官(馬)

第三日　前橋行在所より高崎行在所まで劍璽渡御の御列

警部(馬)　劍璽(御馬車)侍從御陪乘　近衛將校(馬)　警部(馬)

(みゆきのあと)

四　縣廳文書に見えたる記事、左の如し。

(一)縣知事中村元雄は縣廳內に臨幸御用係を設けて、九月廿九日、縣官を任命し、之を分擔せしむ。

本部兼庶務迎送係。　用度係。　營繕係。　主馬寮係。　接待係。

道路係。　軍隊係。

（二）十月三日高辻宮內書記官、及侍從等、行在所其他檢分のため來縣。（三）行在所地の前橋・高崎兩地、亦係を設けて遺漏なきを期せり。（四）奉送迎として、縣下全郡に亘り、遠くは吾妻・舊南甘の中里尋常小學校生徒凡そ拾五名も、亦希望し來る。（五）御立退所、前橋行在所は群馬縣廳・高崎行在所は西群馬片岡郡役所とせらる。（六）御膳水は前橋行在所は厩橋高等小學校・高崎行在所は高崎町愛宕神社、澁川御晝食所に於ては澁川町吉田藤太のを以て充てらる。（七）御休泊所に於ける設備品の內、御料用御卓は各宿主に下賜せらる。

前橋行在所臨江閣へ　大中小四脚
高崎行在所中島伊平へ　同
澁川御晝休所郡役所出張所へ（一）　大中小三脚
半田御召替所半田村へ　中　一脚
諏訪神社御野立所諏訪神社へ　中　同
高崎營所高崎營所へ　中　同
計　十四脚

（註一）澁川便殿は警察署樓上とあり。

（八）行幸中につき御手當として下賜されたる分左の如し。

金貳百圓　臨江閣　行在所
金參拾圓・澁川郡役所出張所　御晝食所
金　拾圓　澁川町製絲會社昇立社　臣下休所
金　貳圓　半田村高橋儀市　同
金　貳圓　半田村里見藤吉　同
金　貳圓　半田村高橋民八　同
金　參圓　前橋市厩橋高等小學校　御膳水所
金　貳圓　高崎町愛宕神社　同
金　壹圓　澁川町吉田藤太　同
金　參圓　高崎町塚田清三郎　守衞扣所
金　拾圓　半田御召換所

（九）前橋行在所へ陳列天覽に供したるもの左の如し。

賀茂眞淵著書經難註　碓氷郡松井田町平民畑中七郎。
長樂寺文書　新田郡世良田村長樂寺。
豐城入彥命陵墓に關する書類。　前橋市曲輪町高橋周禎

參考

石鏃・石斧・石劍諸種　高崎町柳川町向山林彌

右の内書經雜註は、明治十七年六月、高崎町へ行啓の際、天覽に供したる其儘御留置となりたる賀茂眞淵著古今集註と姉妹篇とも云ふべきものにして、當時缺本となり居たるを、百方苦心の結果、漸く高崎町より搜索して、天覽に供したるなり。從つて當人は之を獻納したり。（高崎町田子石文）

［參考］　駐蹕遺蹟記念碑。

（一）群馬郡豐秋村大字石原村にては、明治卅五年五月、同地猿田彥社前に駐蹕碑を建設せり。其文に曰く、

明治廿六年十月

皇上親閱近衞兵上野國群馬郡豐秋村。駐驆馬於石原猿田彥祠內。石原實一小山村也。而遭遇此盛事。村民深榮之。頃相謀欲建碑於祠內以傳不朽。使人來乞余文。余亦當時在扈從之列。不可辭也。乃書。

明治三十五年五月

參謀總長陸軍大將大勳位功二級彰仁親王題額。

陸軍大將正二位勳一等功二級侯爵山縣有朋撰。

(二)同村大字湯上にては、同地の田園に駐蹕せられしを光榮とし、大字名を行幸田と改稱し、明治三十四年紀元節を以て、碑を同村村社甲波宿禰神社境內に建設せり。其文に曰く、

行幸田

權典侍　愛子

豐としのたりほいろつくみゆき田に
あまつ日影もてりわたるらむ　(以上表面)

明治二十六年十月二十一日
大元帥天皇陛下率將校、親閱近衛師團機動演習于上野國群馬郡豐秋村。駐龍馬于田塍間。因其地稱行幸田。翌年會有征淸之事。遂得古今無比之大捷。臺灣隨入我版圖。輝國威於海外。村人欣躍。特請元帥小松宮彰仁親王題額。鐫石而傳不朽。

明治卅四年貳月十一日紀元節

正三位勳一等男爵　大鳥圭介撰

(三)群馬郡古卷村大字半田に於ては、明治卅年九月、記念碑を建設せり。其碑文

は左の如し。

参謀總長陸軍大將大勲位功二級小松宮彰仁親王殿下篆額。

近衛師團長陸軍中將從三位勲一等功三級男爵黑木爲楨撰文。

明治二十六年十月、近衛師團行機動演習于群馬縣。第一旅團爲南軍、第二旅團爲北軍、對抗于利根河畔。始于廿日、終廿二日。天皇臨御第二日駐蹕于古巻村半田之郷焉。初縣民聞此行幸也。皆歡喜相慶。修道路、繕橋梁、聖駕所過旄倪如雲。拜跪路傍以瞻仰威德。例演武之地。兵馬蹂踐田園者。官必行賠償。而此縣民則辭之矣。時余以第二旅團長、統率北軍、親睹其狀、竊謂。國民忠誠如此。緩急無憂也。越三十有餘旬。有征清之役。果賴皇上之威靈與國民之義勇。以博曠古大捷矣。頃者半田人胥謀。將建碑于駐蹕之蹟以紀光榮于不朽、索文于余。余已與當時之事、且喜所見之不差也。乃鐫諸石。

明治卅年九月

越前　青木修書

題字永紀恩榮

(四)同郡同村大字有馬にても、又駒立の地に記念碑を建設せり。其文に曰く

有馬駐蹕之碑

近衛師團長陸軍大將大勳位彰仁親王題額。

皇上御極二十有餘年。於此內修文德。外振武功。中興之業可謂盛矣。而宇內形勢。列國對峙。邦國捍衛之備。有一日不可緩焉。者故特留聖意於此。明治二十六年十月。就本縣管內。有近衛師團演習之舉。皇上臨焉。以其月二十日。駕發東京。御中仙汽車。館前橋行宮。翌二十一日經澁川孔道。由半田浮梁。渡刀根川。皇上軍服。駐馬眺矚。此地延喜式所載九牧之一。有馬古蹟。今之有馬村駒立是也。邦語駒立猶立駒。會駐龍駒於此。衆咸異之。此日近衛步兵第一旅團假裝南軍。屯於古卷村。第二旅團假北軍。次於澁川驛近傍。互進漸逼。相遇於駒立。砲彈雨射。叱咤激戰。蓋治兵之術莫善於對抗也。演習終。駕抵澁川驛。御午饌。復取來路。還幸前橋。拜觀者如堵牆。元雄亦扈從辱陪覽之榮。越明年。村人胥謀。欲建石於駐龍蹕地。勒其事。而永傳景仰之意。謁予請文。夫不以至治而廢武。素聖德之事。國家長久之基也。況村人之舉。出於義誠。予豈可以不文辭之乎。乃係以辭。其辭曰。

榛山之麓。刀水之涯。郊原迤邐。四望曠開。邑名有馬。面陽向日。延喜九牧。是居其一。禁旅演武。廼相斯地。八千貔貅。對抗講試。維南維北。或步或騎。神出鬼沒。乘隙投機。皇帝臨焉。細閱軍容。左顧右眄。茲立紫龍。古詠甘棠。

況此聖迹。邑民仰止。記之刻石。治不忘亂。武之善經。嗚呼懿乎。四海永寧。

明治廿六年十月

群馬縣知事從四位勳三等　中村元雄撰

正四位勳三等特選議員錦雞間祗候　金井之恭書

---

(五)同郡中川村大字大八木諏訪神社境內に聖蹟碑を建設す。

(表面)

聖蹟碑

候爵　西園寺公望書

(裏面)

上毛群馬郡中川村聖蹟碑頌

正二位勳一等候爵　西園寺公望題額

明治中興。癸巳孟冬。至尊有勅。爰御飛龍。羽林將士。如雲相從。出觀演武。
正氣隨鍾。昭代令典。民瞻虔恭。久之不忘。無今無昔。長少望風。心同所擇。
論兵會盟。昏晨秋夕。或則講韜。或則擊戟。拮据勉旃。則名竹帛。來由若此。
發詳何邊。東山之道。上毛之天。郡曰群馬。邨曰中川。臨驛訪廟。聖蹟儼然。
頌辭刻石。萬古永傳。

明治四十弍年九月　　上毛布衣　松村芳撰幷書

(六)明治二十六年十月二十二日、高崎兵營內に於て觀兵式を行はれ、其際御野立の跡を標さんがため、松樹を植ゑて飛龍松と命名し、樹下に記念碑を建設す。

飛龍松之記

明治二十六年秋。於高崎近郊。有近衛師團小機動演習之擧。天皇陛下親臨閱之後。行觀兵式於此地。于時十月二十二日也。於是植一松樹。以標駐蹕之跡。傳之永遠。號曰飛龍松。

歩兵第十五聯隊長

河野通好撰幷書

## 第十四項　明治卅四年十月近衛小機動演習

(臨幸中止)

演習御覽として、左の御發着割發表せられしが、御出門の前日即十七日、御風氣のため御見合せとなりたるも、本縣として亦光榮とする所なるを以て、御豫定の

御發着割を左に錄す。

御發着割

十月十八日
午後一時二十五分　御出門
上野停車場御休憩
午後二時　上野停車場御發車
同　五時五分　高崎停車場御着車
御泊　群馬縣立高崎高等女學校
十月十九日
演習御覽
十月二十日
演習御覽
十月二十一日
高崎停車場御發車上野停車場御着車
還幸

## 群馬縣下御道筋

### 高崎の分

高崎停車場より八島町通右へ、新町通り末廣町左に行在所。(群馬縣立高崎高等女學校。)

行在所より右へ、末廣町を經、新町通左へ、八島町通り停車場へ。

行在所より右へ、末廣町を經、新町通り東京街道通り右へ、佐野渡假橋を渡り、八幡村へ。

### 前橋の分

前橋停車場より田中町通り、左へ本町・曲輪町を右へ、竪町・細ヶ澤町より勢多郡南橘村を經て、同郡北橘村半田橋を渡り、群馬郡古巻村を經て、同郡澁川町通り左へ。高崎街道通り豐秋村へ。

但還御の節竪町右へ、曲輪町右へ、柳町臨江閣下、臨江閣より右に、曲輪町・本町を經右へ、田中町通り停車場へ。

臨江閣より右へ、右へ利根川寄洲觀兵式場に。

## 第十五項　明治三十五年五月皇太子東北地方御旅行の途次高崎前橋富岡伊香保桐生に行啓



一　御發着割

高崎市

五月二十日

| | | |
|---|---|---|
| 午前八時 | 東宮御所 | 御出門（御馬車） |
| | 上野停車場 | 御着 |
| 同　八時四十分 | 同　所 | 御發（汽車） |
| 午後零時五分 | 高崎停車場 | 御着 |
| | 同　所 | 御發 |
| | 高崎御旅館（中島伊平方） | 御着（御泊） |

五月二十一日

| | | |
|---|---|---|
| 午前十時三十分 | 高崎御旅館 | 御出門 |
| | 同　停車場 | 御着 |

同　十時五十三分　同　所　御發汽車

午後四時五十四分　長野停車場　御着

同　所　御發

長野御旅館　善光寺大勸進御着御泊

前橋市

五月三十日

午前七時四十分　高田停車場　御發汽車

午後五時十分　前橋停車場　御着

同　所　御着御馬車

臨江閣　御着御泊

五月三十一日

未詳

六月一日

未詳

富岡町

六月二日

| | | |
|---|---|---|
| 午前九時二十分 | 前橋停車場 | 御發 |
| 同　九時三十五分 | 高崎停車場 | 御着 |
| 同　九時五十五分 | 同 | 御發 |
| 同　十一時二十分 | 富岡停車場 | 御着 |
| | 富岡製絲所 | |
| 午後二時 | 富岡停車場 | 御發 |
| 同　三時二十三分 | 高崎停車場 | 御着 |
| 同　三時四十分 | 高崎停車場 | 御發 |
| 同　三時五十五分 | 前橋停車場 | 御着 |
| 同 | 前橋停車場 | 御發 |
| | 臨江閣 | 御着　御泊 |

桐生町

六月三日

| | | |
|---|---|---|
| 午前九時三十分 | 御泊所御出門 | |

同　九時五十分　前橋停車場　御發車
同　十時四十八分　桐生停車場　御着
御晝所　丸山
午後二時十分　桐生停車場　御發
同　三時二十分　前橋停車場　御着
前橋停車場　御發
臨江閣　御着　御泊
伊香保町
六月四日
午前八時二十分　御出門
同　八時三十分　上毛鐵道馬車會社御發　鐵道馬車
同　十時　澁川町　御着
同所　御發　人力車
伊香保　御着
御晝食　岩崎男爵別莊

午後二時　伊香保　御發 人力車
同　三時　澁川町　御發 鐵道馬車

還御

（御泊は二泊の御豫定なりしが六泊に御變更となれり。）

六月五日　茨城縣に御巡啓

午前十時四十分　御出門
同　十一時　前橋停車場　御發 臨時列車
午後一時廿九分　小山停車場　御着
同　一時五十五分　小山停車場　御發 通常列車
同　四時四十八分　水戸停車場　御着
御旅館　好文亭　御着 御泊

御列

二　御列

御先驅 警察署長一人　同 東宮内舍人一人　御先導 東宮武官一人
皇太子　有栖川宮　侍從長 武官長の內一人　當番侍從二人　當番武官一人　當番侍醫一人
皇族付武官一人　大夫　侍講一人　非番高等官　屬以下

重なる供奉員

三　主なる供奉員

東宮大夫　齋藤桃太郎　　御用掛主事　錦小路
侍從長　木戶　　侍從武官長　村木雅美
侍講　本居　　侍從武官　中村
侍從　丸尾錦作　　侍從　大迫
同　本多正復　　同　原
侍從武官　田內　　侍從武官　清水谷
侍醫　片山　　侍醫　池部
宮內書記官　久保田　　宮內技師　野田

## 四　行啓記事

(一)本行啓は　皇太子御見學のため、左の十縣下御巡回あらせらるゝ御豫定にして、順路先づ高崎に御泊。それより長野・新潟を御巡歷の後、再び本縣下御巡回あらせられたるなり。御豫定にては本縣より福島縣に御直行の筈なりしも、東北地方郡山・若松・米澤・山形・仙臺・盛岡の各地方に痲疹患者發生につき、御見合せとなり、六月二日之を發表し、本縣下御巡回後は、茨城縣に入らせらるゝことに變更せり。(二)行啓に先ちて、齋藤東宮大夫より本縣知事に充てたる通牒は、御巡回の

目的及び皇室が猥りに國民を煩はさゞる叡慮の程を了知するに足るべきを以て、左に抄錄す。

一東北御旅行は御見學のための御微行にして、地理・風俗等御實見に外ならず。換言すれば、行啓先各地に於て、平常の有樣を御目擊被成度御趣意なれば、皇太子の御資格にて、公然の御旅行と誤認せざる樣、特に注意を要す。故に奉送迎のため官吏農商工學校生徒等、公務は勿論、業務授業を廢し、迎送する等の事これなき樣、叡慮に被爲在に付、公然の御旅行と御微行と判然區別相立て、御趣意に背かざる樣、地方官にて厚く注意有㆑之度事。

　本文の御主意に付、各地に於て奉迎送準備は一切無用の事。

　但し御着發當日、每戶國旗・軒提燈を揭ぐる位は不㆑苦事。

一御巡見の場所は、前以て豫約せざること。

一御健康上、御無理なる御動作は各方面より出願せざる樣、知事に於て注意有㆑之度事。

一行啓のため、各地に於て殊更に獻上品は見合せ有㆑之度事。

一各地所在高等官・市長・貴衆兩院議員・縣會議長等の向は、其地停車場に奉迎送の事。

　御用をも差繰り、奉送迎するに不㆑及。

但し知事・警察部長は御用都合に依、便宜の場所迄奉迎送相成も差支無之事。
一各地に於て、諸團體其旗幟を立て、奉迎する等のことも一切見合相成度事。
一流行病有無は前以て報告有之度事。
一道路・橋梁は危険の虞無之以上は、殊更に修繕に不及事。
一御旅舘は可成的縣廳又は學校等の如き、公務若くは教育事業の運用を妨ぐるものを避け、偕行社・倶樂部の如き(偕行社も兵營外に設立のもの)を目途とし、不得已ときは、一私人の家にても差支無之事。
一御旅舘は可成有形の儘にて、疊・障子の張替、御厠及御湯殿(木材は粗末にてよし)丈は清潔に致度事。
一御食品原料は各地に於て撰擇の事。
一御料人力車一輛携帶車夫三人召連れるも、豫備車夫は豫め地方に於て人體撰定置有之度事。
一拜觀のため人民群集するも、御通過に妨げなき限り、又は不敬(裸體の如き著しきもの)に渉らざる限りは、可成人民の自由に(禮節其他)任せ置く事。
御滯在中各所行啓も同様の事。
一御旅舘に入用の器具は借入度事。

一御旅館詰供奉員夜具・布團・賄等、便宜を與へられたき事。
一供奉員旅宿の調達、荷物の運搬、人力車雇上げ依頼の事。
一御旅館に於て拜謁被仰付とき、
　高等官　フロックコート　武官　相當服のこと。
一供奉員總數小者迄五十四五名のこと。
一有栖川宮御同行、武官一人　家從三人の事。
（以　上）

(三)有栖川宮の御旅館は、高崎町須藤方、前橋市は高久方なり。(四)伊香保町民總代十二名より、宮内大臣田中光顯宛に東宮行啓を出願せり。

## 第十六項　明治四十一年十一月　皇太子機動演習台覽のため行啓



一　御發着割
十一月十三日

午　十二時　東宮御所御出門
午後　零時四十分　上野停車場御發車臨時列車
同　三時三十五分　前橋停車場御着車
前橋市臨江閣御着御滯在

十一月十四日
午前八時　御旅館御出門
同　八時十五分　前橋停車場御發車臨時列車
同　九時　本庄停車場御着車
演習台覽（埼玉縣兒玉町附近）
午後四時　本庄停車場御發車臨時列車
同　四時四十五分　前橋停車場御着車
還御

十一月十五日
午前六時十分　御旅館御出門
同　六時廿五分　前橋停車場御發車臨時列車

同　七時　新町停車場御着車

演習台覽　倉賀野町附近

午後二時四十分　倉賀野停車場御發車（臨時列車）

同　三時　二分　前橋停車場御着車

還御

十一月十六日

午前八時　御旅館御出門

演習台覽　井野村附近

十一月十七日

午前九時廿分　御旅館御出門

同　九時卅五分　前橋停車場御發車

同　九時五十分　高崎停車場御着車

午後一時十分　高崎停車場御發車

同　一時廿五分　前橋停車場御着車

還御

十一月十八日
午前十時　御旅館御出門
同　十時十八分　前橋停車場御發車
同　十時卅八分　伊勢崎停車場御着車
　演習台覽　新田郡綿打村附近
午後八時　伊勢崎停車場御發車
同　八時廿二分　前橋停車場御着車
　還御
十一月十九日
午前四時十五分　御旅館御出門
　四時三十分　前橋停車場御發車
同　四時五十四分　伊勢崎停車場御着車
　演習台覽　新田郡强戸村寺井附近
午後一時　伊勢崎停車場御發車
同　一時廿二分　前橋停車場御着車

還御

十一月二十日

午前七時五十五分　御旅館御出門

同　八時十分　前橋停車場御發車

同　十一時五分　上野停車場御着車

還御

御列

二　御行列　停車場旅館間往復

警部　內舍人　東宮武官　東宮　武官長　侍從　侍從

侍醫　東宮主事　知事　警部　宮內屬以下

十六日より前驅・後驅に、騎兵三騎づゝ附せらるゝことゝなり、左の通り變更す。

騎兵　副官　東宮武官　東宮　東宮武官長　侍從

侍醫　東宮主事　知事　內舍人　騎兵

主なる供奉員

三　主なる供奉員

東宮大夫　村木雅美　侍從　有馬純文

侍從　本多正復　侍醫　相磯慥
東宮武官　本城幹太郎　東宮主事　錦小路在明
外
屬　三人　內廷　一人　主膳　一人　藥劑員　一人
內舍人　二人　仕人　五人　藥丁　一人　庖丁　二人
使夫　五人　現金取扱方　二人

四　行啓記事

(一)今回の行啓は、陛下御名代の御資格にもあらず。又東北行啓の如く、縣の實況御視察にもあらず、近衞師團御附員の御資格にて、機動演習台覽のためなり。(二)本縣に於ては、御臨幸に準じて、係員を任命し、諸般の事務を處理せり。(三)警備其他施設費用として、一萬二千十五圓四十五錢の追加豫算を、十一月二日の縣參事會に提出して可決せり。(四)本縣より左の獻上品をなせり。

群馬縣治一班(筆寫)　一部
群馬統計書　同
群馬縣統計概要　同

群馬縣管内全圖　同
前橋市街全圖　同
東宮行啓記念繪葉書　同
群馬縣名勝繪葉書　同
臨江閣四周山岳圖　同
辨官符の碑石摺　同
山名村の碑石摺　同
上贊鄕の碑石摺　同

(五)十一月十四日・同十六日、共に午後七時三十分より約一時間、群馬郡總社町及元總社町兩小學校職員・兒童、提灯行列を行ひ、台覽に供せり。(六)十一月十七日午後一時より、市内小學校生徒職員約五千三百八十一名、敷島河原に於て旗行列を擧行し、台覽に供せり。(七)御膳水は前橋市向町木村農夫吉氏方井水。(八)十一月十七日、左記の通り獻上せり。

薄琥珀　貳匹　桐生織物同業組合
伊勢崎縞　壹匹　伊勢崎織物同業組合

| 品名 | 數量 | 獻上者 |
|---|---|---|
| 伊勢崎絣 | 壹匹 | 同 |
| 生絲 | 壹括 | 碓氷社 |
| 同 | 同 | 甘樂社 |
| 同 | 同 | 下仁田社 |
| 同 | 同 | 交水株式會社 |
| 同 | 同 | 原富岡製絲所 |
| 紡績絹絲 | 一貫二百匁 | 絹絲紡績株式會社新町工場 |
| 眞綿 | 貳拾枚 | 高齢者關なか |
| 梨 | 貳籠 | 碓氷郡里見村長 |
| 牛酪 | | 北甘樂郡神津牧場 |
| 眞綿 | | 前橋市長 |
| 同 | | 島村農會 |
| 榛名湖産蜆貝一箱 | | 群馬郡長 |
| 同 鮒 | 二尾 | 同 |
| 前橋地方裁判官所管內一覽 | | 前橋地方裁判所長<br>同 裁判所檢事正 |

（九）十一月十八日、新田郡綿打村附近に於て御觀戰の際は、同村大字大根綿打尋

常高等小學校大根分教場を以て、御休憩所並に御夕飯所に充てられたり。其際庭前に金松樹を御手植遊され、特に御思召を以て、殿下の御影御下賜の御下命あり。由りて同月廿五日、村民一同は嚴肅なる拜戴式を擧行し、尋いで村民は此光榮を永久に傳へんために、長一丈四尺餘、巾三尺二寸の大石材に近衞師團長大島久直に揮毫を乞ひ、

皇太子殿下行啓記念

の大文字を彫刻し、明治四十二年四月二十五日、御手植なる金松樹の下に建てたり。(一〇)同十九日、強戶村附近演習台覽の後、寶泉村大字脇屋なる脇屋義助の墓所と稱せらるゝ觀音堂にて、御晝餐の後、御乘馬にて生品村大字市野井生品神社に行啓あらせられたり。(一一)新田郡生品村大字村田大島義知(八十一歲)、台覽に供したき趣にて願出でたる和歌は、

寄神賀

ちはやふる神や千年を守るらん君が治めて靜なる世を

寄菊祝

露しもは移りゆくとも君が代は尙長月の白菊の花

(一二)十一月十七日、歩兵第十五聯隊及前橋市武徳會群馬支部內に於て、縣內有資格者に拜謁仰付けらる。普通拜謁有資格者以外にも、特に、奉拜を許可せられたるもの左の如し。

一綠綬褒章拜受者。　　一藍綬褒章拜受者。

一小學校教育效績狀選奬者。　　一博覽會及共進會に於ける功勞賞受賞者。

一高齡者。　　一赤十字社有功章拜受者。

# 第二章　縣治の沿革

## 第一節　廢藩置縣

序說

本縣の管轄が、現今の如く上野國一圓に亘り、縣廳の位置が前橋に固定したるは、明治十四年二月のことにして、王政維新以後、此に至るまでには、或は縣名に於て、或は治域に於て、或は又治所に於て、變更せられたること啻に一再に止まらざりき。蓋し維新當初に在りては百事改廢の際、事情已むを得ざるに出でたるか。

王政維新の當初岩鼻縣を置かる

慶應三年十月、徳川慶喜大政を奉還し、朝廷舊幕府の領地を沒して、御料と改むるに當りてや、本縣の舊幕領は現埼玉縣下の西南部地方と共に、岩鼻縣の下に一統せられ、治所を群馬郡岩鼻村（元代官高島彈正支配地）に置かる。是れ實に明治元年六月十七日なり。治所を岩鼻に選定したる理由につきては明瞭ならざるも、思ふに舊岩鼻陣屋は幕府時代上武の同幕領地を支配したる歷史的關係に基き、岩鼻縣の所管も亦上野・武藏の兩國に跨りたるを以て、專ら行政上の便宜を顧慮しての事

ならん。而して岩鼻置縣の當初の所管郡村石高は左の如し。

一高三拾六萬千五百八拾五石壹斗四升二勺四才。

内譯

一高貳拾四萬八千九百九十四石八斗六升五合五勺八才。

一反別貳百貳町三反壹畝八步。

上野國郡村の内

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 群馬 | 三〇 | 甘樂 | 八九 | 吾妻 | 一〇一 | 多胡 | 三二 |
| 綠野 | 五七 | 佐位 | 三二 | 山田 | 六二 | 新田 | 一〇一 |
| 邑樂 | 五九 | 那波 | 二一 | 碓氷 | 二八 | 勢多 | 六 |
| 利根 | 五一 | | | | | | |

一高拾壹萬貳千五百九拾石貳斗七升四合六勺六才。

一反高五十四町七反貳拾六步。

武藏國郡村の内

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 賀美 | 四三 | 秩父 | 五〇 | 兒玉 | 六六 | 榛澤 | 一〇九 |
| 幡羅 | 六〇 | 那賀 | 一五 | | | | |

(備考) 明治二年三月調。

以上岩鼻縣に屬せざる本縣の地は、當時の情勢に從ひ、暫く舊藩主の治むる所なりしが、諸藩も亦王政復古、海内一統の叡斷を感戴し、薩・長・土・肥を始め、爭つて版籍奉還を願ひ出づるもの、明治二年三・四月の頃まで、十の八九に及びたり。依りて朝廷其請を允し、六月列藩侯を知藩事に允て、各其舊政を釐革し、府縣と治體を同うせしむ。是に於て本州の藩主前橋・高崎・沼田・安中・小幡・伊勢崎・吉井・七日市・館林の九藩主、亦知藩事の職を奉せり。然るに明治二年十二月、吉井藩知事吉井信謹は、獻言して其職を解き、所轄の地を以て岩鼻縣に附せんことを請ふ。朝議其請を嘉納す。其獻言に曰く、

吉井藩知事の上表

臣信謹儀、先般改テ藩知事ノ任ヲ蒙リ罷在候得共、臣信謹徒ニ其重任ニ堪ヘサルノミナラス、實以非常ノ御時節柄、奉恐入候ニ付、藩知事職御免被仰付被下度、奉懇願候。右ニ付委細以別紙申上候間、願之通御沙汰被下置候樣、奉冀望候。誠恐再拜。

十二月　吉井從四位信謹

辨官御中

別紙

方今内外御多事ノ折柄、公費莫大ニシテ、國用不給。加之、庶民泣號之聲達九重、無

體モ御減膳ノ舊典ヲ被レ爲レ擧候ハ、實以恐入次第ニ奉レ存候。斯非常ノ御時節ニ當リ、臣信謹儀幼弱不才ノ身ヲ以テ、重任ヲ蒙リ罷在候テハ、一日モ安カラザル儀候間、是迄管轄ノ士民、彌以朝廷御支配ニ奉レ願候。左候節ハ自然冗費少ニモ罷成、小有餘出來可レ申、是レ以テ　主上御憂勞ノ萬一ヲ安慰シ奉ルニ足ラズト雖モ、或ハ下民御救助ノ緒餘ニモ充ラレ候ハバ、如何難レ計難レ有奉レ存候。去迚泛々歸着モ無レ之願上候テハ、却テ奉レ恐入候間、同國岩鼻縣ヘ總テ附屬爲レ仕、勿論邑土モ共支配ニ込入候得ハ、別段御手數モ無レ之、聊縣ノ兵備モ相立可レ申、兼テ承聞仕候ニ、縣ニ兵隊無レ之テハ、往々不都合ノ儀モ有レ之趣、別シテ人民慓悍ノ土俗、差當リ御出費ニ及バズ且他縣ヘノ響ニ至ラズ、守衛ノ兵隊出來候ハバ、是亦一擧兩得ノ儀ト奉レ存候。左樣被二仰付一候上ハ、臣信謹乍レ不レ及勉業仕、稍成業之上、尚又相應ノ御奉公モ仕度、右ハ既ニ養父ヘモ申談候處、是モ素願ノ由ニ付、何卒此段御許容被二下置一候樣、俯伏奉二懇禱一候。以上。

十二月　　　　　　　　　　　　吉井從四位信謹

辨官御中

是より該藩を廢して、岩鼻縣に屬せしめ、其士族卒亦之に隸せしめ、以て廢藩置縣に及べり。

廢藩置縣に及び始めて群馬縣を置き縣廳

明治四年七月十四日、朝廷諸藩知事を悉く東京に召集し、　天皇親しく廢藩置

を高崎に定む

縣の大詔を宣し給ひ、中央集權全く就り、各藩知事解任せらるるに及び、本州内亦九藩を廢して、縣（本縣内以上八縣の外、松嶺・泉・淀・佐野・岩槻五縣の所轄あり。）となす。同年十一月、全國諸縣廢合の制成るに至り、州内十縣（岩鼻縣外九縣）を廢し、（舊岩鼻縣内武藏の國に屬せし郡村は十一月十四日に至り、入間縣の下に管轄せらる。）上野國の内山田・新田・邑樂の三郡を割いて、栃木縣に屬せしめ、殘部拾壹郡を併せ、新に群馬縣を置きて之を管せしむ。岩鼻廢縣の際、其管轄高は三十三萬七千六百八拾石六升五勺なり。群馬縣設置の布令は左の如し。

太政官布告第五百五十九（明治四年十月二十八日）

今般上野國諸縣被廢、更に群馬縣被置候事。

但高崎に縣廳を被置候事。

此時群馬縣への御達。

群馬縣

今般上野國小幡・伊勢崎・前橋・岩鼻・高崎・沼田・安中・七日市ノ八縣ヲ廢シ、更ニ其縣ヲ被置、同國利根・吾妻・勢多・群馬・碓氷・那波・甘樂・佐位・片岡・綠野・拾壹郡管轄被仰付候事。

但當分同國邑樂・山田・新田三郡之内竝ニ元縣々管地他國ニ有之候分モ、管轄可致事。

辛未十月廿八日　太政官

同日小幡縣外七縣へ、

各通

小幡縣　伊勢崎縣　前橋縣　岩鼻縣　沼田縣

安中縣　高崎縣　七日市縣

今般其縣被廢候ニ付テ、管轄地竝當未歳物成等、群馬縣へ可引渡事。

但元縣ノ官員、追テ　御沙汰候迄、從前縣廳ニ於テ事務可取扱事。

但高崎縣ヘハ元縣ノ官員、追テ御沙汰候迄、從前ノ通可相心得事ニ作ル。

佐野縣

上野國勢多郡・綠野郡ノ内、其縣管轄地竝ニ當未歳物成等、群馬縣へ可引渡事。

岩槻縣

上野國那波郡・勢多郡ノ内、其縣管轄地竝ニ當未歳物成等、群馬縣へ可引渡事。

各通

松嶺縣　泉縣　淀縣

上野國勢多郡ノ内、其縣管轄地竝當未歳物成等、群馬縣へ可引渡事。

同年十一月、又左の御達あり。

群馬縣

其縣當分管轄地、別紙之通、新治縣其外諸縣管轄ニ被仰候條、當未年ヨリ地所物成等

夫々へ可引渡事。

別紙

新治縣へ可引渡分

元前橋縣管轄常陸國　河内郡ノ内、筑波郡ノ内。

元安中縣管轄下總國　香取郡ノ内、海上郡ノ内、匝瑳郡ノ内。

元高崎縣管轄下總國　海上郡ノ内。

栃木縣へ可引渡分

元前橋縣管轄上野國　邑樂郡ノ内、新田郡ノ内、山田郡ノ内。

元同　縣管轄下野國　安蘇郡ノ内、足利郡ノ内。

元岩鼻縣管轄上野國　新田郡ノ内、山田郡ノ内。

入間縣へ可引渡分

元前橋縣管轄武藏國　入間郡ノ内、高麗郡ノ内、秩父郡ノ内、大里郡の内。
比企郡ノ内、榛澤郡ノ内、那賀郡ノ内、兒玉郡の内。

元岩鼻縣管轄武藏國　賀美郡ノ内、秩父郡ノ内、幡羅郡ノ内、榛澤郡の内、
兒玉郡ノ内。那賀郡ノ内、

埼玉縣へ可引渡分

元前橋縣管轄武藏國　埼玉郡ノ内。

以上

其縣當分管轄地元高崎縣管轄越後國蒲原郡之內、新潟縣管轄被仰付候條、當未年ヨリ地所物成鄉村等、同縣へ可引渡事。

辛未十一月　　太政官

群馬縣

其縣當分管轄地、元沼田縣管轄美作國勝北郡ノ內、英田郡ノ內、北條縣管轄被仰付候條、當未年ヨリ地所物成鄉村、同縣へ可引渡事。

辛未十一月　　太政官

群馬縣

其縣當今管轄地、元沼田縣管轄河內國若江郡之內、志紀郡之內ハ堺縣、元前橋縣管轄近江國蒲生郡之內、野洲郡之內、栗太郡之內ハ、大津縣管轄被仰付候條、當未年ヨリ地所物成鄉村等、夫々へ可引渡事。

辛未十一月　　太政官

是に至りて群馬縣の治域は、現今の縣域より新田・山田・邑樂三郡を除きたるものとなる。新に治所を群馬郡高崎に設け、元高崎縣廳（高崎舊城內、）に於て事務を行ひ、本月十九日を以て開廳となす。然るに明治五年壬申正月、高崎舊城兵部省へ引上の趣につき、當縣廳は舊城內に在るを以て、舊城は本縣の所屬たらんことを大

藏省へ請へり。其文に曰く、

當縣廳之儀者高崎ニ被置候旨御決定に付、既に同縣舊廳請取不辨之簡所々々者、僅に模樣替仕候積り、此程相伺置、其他米金庫倉・囚獄・徒場・準場、其他官員宅舍等之儀モ、別紙繪圖面之通取建度積ヲ以テ、當時目論見中之處、此程兵部省官員各縣城地爲見分罷越、城地之分者勿論、各陣屋地共、同省所屬之趣ニテ、既に當縣地所之儀ニ引上候哉ニモ相見へ、一體高崎縣城地、並伊勢崎・七日市・小幡・岩鼻陣屋地之分者、當縣へ受取、夫々所分仕候積り、辛未十二月中伺濟モ有之候儀之處、孰モ兵部省へ引上ニ相成候而者、縣廳其他取設候地所無之、此上者貫屬屋敷地、又者田地等買上候外見込無之、左候ハバ巨多之入費モ相掛リ、隨テ民情ニモ關係仕儀ト、深ク心痛罷在候。依テハ最前伺濟之通、元高崎縣城池ヲ始メ各陣屋地之分者、當縣所屬ニ致度、就而者其旨急速兵部省へ御達相成候樣致度、此段相伺申候也。

壬申正月十八日　　群馬縣

大藏省御指令

(書面)故高崎縣城地者、兵部省所轄ニ付、其縣へ引渡難相成、伊勢崎ヲ始メ三陣屋之儀ハ、同省へ關係無之候ニ付、其縣ニ於テ所分之儀可伺出候。且右城地外ニテ可然見立、縣廳建設繪圖ニ照準シ、成丈在來之分相用候心得ヲ以テ、目論見相立、經費小積帳ヲ

縣廳を前橋に移す

以可伺出候事

壬申正月二十八日

依りて五月に至り、群馬郡前橋舊城を以て縣廳に充てんことを請へり。卽ち允許あり。其御達に曰く、

其縣廳前橋城へ移轉可致事。

群馬縣

但前橋城受取方之儀ハ、陸軍省へ可打合、岩鼻・伊勢崎・七日市・小幡、四陣屋は同省へ可引渡事。

壬申五月廿七日

太政官

是に於て同六月、前橋舊城を陸軍省より請取んことを請ふ。其照會の書に曰く、

當縣廳前橋城へ移轉受取方之儀者、御省ニ可申立旨、御達相成候ニ付而者、品々不都合ノ次第モ有之候ニ付、至急御引渡有之度、尤城郭繪圖面竝建物等、詳細取調帳者、縣地より送致次第差出可申候。依之此段申上候也。

壬申六月二日

群馬縣

陸軍省御中

同省指令、

一書面當省ヨリ別ニ立會ニ不及、直ニ轉移可有之事。

之に依りて高崎より移轉し、此月十五日を以て開廳たることを管下に布達せり。

前橋表本廳修繕粗成功ニ付、來十五日ヨリ彼地ニ於テ事務取扱候條、諸般同所へ可申出、就而者明十一日ヨリ十四日迄休暇候事。

但差掛候事件ハ休暇中ニ而モ可申出事。

壬申六月十日

此の如くにて一旦高崎に開きたる縣廳も、約八箇月にして前橋に移轉したり。

此時に至りては、舊縣の管地全く一管轄に歸し、

其高四拾五萬二千百三十六石九斗二升壹合貳勺

反別六萬三千百八拾五町七反三畝廿八歩八厘

貫高貳拾貫貳百六文

反高千九百五十六町九反六畝五歩五厘

大繩反別貳千八百五拾九町四反七畝貳拾歩六厘

なり。然るに明治六年二月七日、群馬縣令に任せられたる河瀬秀治は、同時に入間縣令を兼ね、群馬縣の吏員亦皆入間縣の職務を兼ね、入間の吏員亦皆群馬の職務を兼ぬることと、長官の例の如くなるに及び、群馬縣廳所在地たる前橋と、入間縣

明治六年六月群馬入間兩縣を廢して熊谷縣を置く

廳所在地たる川越とは相距る十八里貳拾六町餘、獨往復の不便あるのみならず、各、南北一偶に偏せるに因りて、地を武藏國大里郡熊谷驛にトし、同所熊谷寺を以て事務局に充て、六年四月入間の吏員を玆に遷し、諸省布令、四方の來牒及び兩縣の常務を擔當せしむ。而して長官は兩縣の間を往來して、縣務を總括せり。次いで六月十五日、兩縣を廢し、熊谷縣を置かる。此時該縣への御達は左の如し。

太政官布告第二百十四號

入間・群馬ノ兩縣ヲ廢シテ、熊谷縣ヲ被置候條、此旨相達候事。

但縣廳ハ武藏國大里郡熊谷驛ニ被置候事。

熊谷縣

今般其縣被置候條、武藏國大里郡熊谷驛へ廳ヲ設ケ、舊入間・群馬兩縣地所物成等請取可申事。

明治六年六月十五日　太政大臣三條實美

熊谷縣は管轄の便宜上、翌十六日を以て、前橋と川越に熊谷支廳を設け、元入間縣管轄、土地人民の事務は、都て熊谷縣本廳にて掌務し、元群馬縣管轄の事務は、當分都て前橋支廳に於て掌務し、區廳は都て舊に仍り變革するなし。又同月三十日、前橋・川越・大宮の支廳を廢して、更に區廳を設け、遂に事務局を以て假の本廳と

し、群馬縣高崎に支廳を置いて、上野國の事務を管せしむ。上野國貳拾貳大區內、貳大區を本廳に於て管し、貳拾大區を支廳に於て管す。

かくて熊谷縣管轄たること三年有餘、明治九年八月、全國諸縣廢合の事あるや、熊谷縣亦左の御達あり。

再び群馬縣となり縣廳を高崎に定む

熊谷縣

其縣管轄武藏國之分埼玉縣へ被併、栃木縣管轄上野國山田・新田・邑樂三郡其縣へ被併候條、土地人民夫々受取渡可致、此旨相達候事。

明治九年八月二十一日　右大臣岩倉具視

熊谷縣

其縣廳上野國高崎へ移シ群馬縣ト改稱被仰出候條、此旨相達候事。

明治九年八月二十一日　右大臣岩倉具視

右の御達により暫く熊谷舊廳を以て、殘事務局とし、事務引繼の吏員若干を埼玉縣へ殘し、本州群馬郡高崎支廳を廢し、同地へ移轉し、通町安國寺を假りに縣廳とし、九月一日を以て開廳せり。此時各區正副區戸長中への令達に依れば左の如し。

本縣第三號

今般熊谷縣管地分合、群馬縣ト改稱、縣廳を高崎へ被ㇾ移候ニ付、同驛安國寺ヲ以、差向群馬縣假廳トシ、本月一日ヨリ一切ノ事務取扱候條、此旨可ㇾ相心得ㇾ事。

一第三課　　分廳

一等四課並警部　　高崎宮本町

一第五課　　高崎下横町中學本部烏川學校

一地租改正掛　　高崎新紺屋町第壹番地

一衞生所　　高崎若松町龍廣寺

右之趣毎戸無ㇾ洩通達、且可ㇾ掲示ㇾ者也。

群馬縣令楫取素彦代理

明治九年九月一日　　群馬縣權參事根本公直

各區正副區戸長中

右の通り數箇所に分割し、事務を行ふと雖も、各〻數町を距て、百事不便なるより、內務省に上申し、同郡前橋町舊城內（當時前橋中學本部利根川學校）を以て假廳となさんことを請ふ。其文に曰く、

群馬郡前橋舊城建物ヲ以テ假廳ト仕度儀ニ付伺

先般熊谷縣管轄武藏國ノ內ヲ、埼玉縣ニ合シ、栃木縣管轄上野國山田・新田・邑樂の三

郡ヲ熊谷縣ヘ合シ、熊谷縣廳ヲ上野國高崎ニ移シ、群馬縣ト改稱被仰出、迅速土地人民諸引渡受取等、夫々處分相濟セ、本月一日ヲ以テ、高崎ニ移轉、同縣安國寺ヲ假ニ本廳ト相定メ、闔廳六課配列可致、餘地無之ニ付、四箇所ニ分裂事務取扱候得共、不都合不少候。原來高崎ノ地タル、宅地狹隘、舊城廓ハ悉皆陸軍所轄ト相成、此外新規廳堂可建築隙地無之、隨テ即今官員寓宿之家作モ些少、是又不都合ニ有之、追テハ田畠耕地ニテモ可然地所見立候テ、縣廳敷地可伺出候得共、方今地租改正、收穫調査等焦眉之急ニ差迫リ、敷地見立方、建築經理等時日ヲ費シ候テハ、急緊ノ事業手後レニ可立至ト、痛心之餘、不得已前橋舊城存在之建物、本部中學校ニ下附ノ分ヲ以テ、群馬假縣廳ト致シ、事務取扱申度、此段至急相伺申候也

明治九年九月廿一日　　群馬縣令楫取素彥

　　內務卿大久保利通殿

右に對する指令は左の如し。

　書面之趣聞屆候事。

　明治九年九月廿一日　　內務卿大久保利通

假縣廳を前橋に移す

由りて九月廿六日、各區正副區長戶長に左の通牒を發し、同月廿九日を以て移轉開廳せり。

本縣廳及分廳假設ノ儀ニ付、豫テ布達ノ趣モ候處、今般縣治ノ都合ニ據リ、當分群馬郡前橋中學本部、利根川學校ヲ以テ假廳ト相定メ、本月廿九日開廳、各課ノ事務合一取扱候條、同日以後諸願伺屆等、一切同廳ヘ差出シ可申、此旨毎戸無洩通達、且可掲示者也。

但太田假出張所之儀ハ、從前ノ通リニ候條、新田・山田・邑樂三郡の諸願伺屆等ハ、便宜同所ニ於テ受理候儀ト可相心得事。

明治九年九月廿六日　　群馬縣令楫取素彥

各區

正副區戶長中

高崎人民置廳の歎願書を出しゝも納れられず

一たび假縣廳を前橋に移すの令出づるや、九月廿九日、高崎驛人民總代金子彌平外七名、正副區長一同の奥印を經たる歎願書を、縣令宛に提出し、高崎に置廳の儀を歎願に及びたるも、九月三十日、書面歎願の趣採用相成難き事に指令せられたり。然りと雖も前橋の地たる、未だ假廳なり。本廳は依然高崎なることとなれば明治十三年十一月に至り、時の群馬縣令楫取素彥より內務卿へ伺出の筋もあり。

假縣廳遂に本廳となる

其結果にや、明治十四年二月十六日、太政官布告第十一號を以て、前橋に改定の令出でたり。伺出書と太政官布達の本文とは左の如し。

縣廳位置換之儀ニ付伺

明治九年、熊谷縣ヲ本州ニ移シ、縣廳ヲ高崎ニ置キ、群馬縣ト改稱被御出候所、高崎驛ノ儀ハ、土地狹隘ニシテ、廳堂可設置隙地モ無之、廳堂ニ代用スル建物等モ無之候ニ付、當時上申之趣モ有之、御裁可ノ上、現今ニ地前橋ニ於テ學校ヲ借受假リニ廳堂設置、爾來施政スル茲に五年、百般就緒、上下其便ニ由ル。縣治ノ方略總テ現地ヲ根據トシ、民心ニ於テモ亦之ヲ便利トシ、今更移轉スベカラザルノ勢ニアリ。而シテ施治ノ便否ハ既往五ヶ年間ノ經驗ニ於テ瞭然タレバ、今般斷然現在ノ地、卽前橋ヲ以テ本廳位置ニ被定度、且自今人民ニ於テモ都合有之、該校地所及建物等、悉皆買上ゲ方懇請ニ及候間、本文ノ意御採納ノ上ハ、代價等取調、更ニ可相伺候條、至急御裁可相成度、此段相伺候也。

明治十三年十一月十一日

群馬縣令楫取素彦

內務卿松方正義殿

太政官布告第十一號

群馬縣廳位置ヲ上野國前橋ニ改定候條、此旨布告候事。

明治十四年二月十六日

而して伺書末文に關する通牒は左の如し。

書面伺出之趣、去月第十一號布告ノ通リ可相心得、尤地所及建物等買上ノ儀ハ、諸般節省ヲ要スル場合ニ付、難聞届候條、從前ノ儘据置可申事。

明治十四年三月三日　　内務卿松方正義

廳舍敷地買上の儀につき、同年三月十二日、重ねて上申に及びたるにより、同年五月十四日を以て、金壹萬圓下渡しあり。縣廳全く現在の廳舍敷地に固定したるなり。

前橋移轉につき高崎士民縣當局に迫る

然るに此移廳につき、高崎士民中不平を抱く者、此年七月中旬より、縣廳還元の運動を起し、處々に會合、協議を重ねたる結果、總代を擧げて縣當局に面接し、其要求の容れざるに至りて、多數を以て縣廳に押寄せ、形勢頗る不穩なるものありしが、縣當局の所措宜しきを得、大事に至らずして、八月中旬鎭靜に歸し、今日に及べり。此紛擾に際して、楫取縣令より高崎士民に與へたる告諭文は、事件の大要を知悉する上にも必要なれば、左に之を採錄す。

楫取縣令の告諭文

告諭文

西群馬郡

高崎驛士民中

本年太政官第十一號、群馬縣廳位置ヲ前橋ニ改定セラレタルノ旨、公布有之候ニ付

テハ、惣代二十七名ヲ以テ、先年假廳設置ノ砌、當官素彦ト該驛人民ノ間ニ縣廳位置ハ他ニ更定ス可カラズトノ約アル趣申立、數ケ條ノ疑問ヲ起セシニヨリ、口頭或ハ書面ヲ以テ、都度都度辯明ヲ與ヘタリト雖モ、惣代等只々不了解ト唱ヘ、承服不致ノミナラズ、猶種々ノ事柄申立、素彦ニ於テハ最前ヨリ惣代人ノ請求ニ應シ辯明ヲ與ヘタレバ、該事件ニ付論旨ハ已ニ悉セリ。其餘ハ枝葉ノ穿鑿ニ渉リ、際限ナキヲ以テ乃チ爾後此件ニツキテハ面談ヲ絶チ、又書面ノ受理ヲ嚴ニセリ。抑當時ノ事狀、縣廳ヲ前橋ニ移轉スルヤ、高崎人民ニ於テ種々疑惑ノ間有之、素彦出張、說々ニ安國寺ノ狹隘、各課ハ所々ニ分斷シ、殊ニ地租改正ニ際シ、理事ノ不便尤居多ナルハ衆ノ知ル所、然ルニ前橋ニ舊藩廳ノ建物存在セルアリ。乃チ假廳ヲ移轉スル所以ナリ。然レ圧本廳位置ハ、既ニ政府ノ制定セラレシモノナレハ、早晚本地ニ復スヘキノ旨趣ヲ以テシ、且ツ屬官ヲシテ豫メ縣廳新築地ヲト相セシメタリ。然ルニ惣代等ハ縣廳更定スベカラザルトノ約束アリ、保證セシ等ノ旨ヲ以テ難問スト雖モ、是全ク官府ノ體裁ヲ知ラザル者ノ言ニシテ、原來縣廳位置ハ政府ノ制定ニ出テ、地方職權ノ措置スルヲ得ルモノニ非ス。素彦不肖ト雖モ、妄ニ是等ノ約束保證スルノ理ナシ。良シヤ假ニ之ヲ約束保證セシモノトセシカ、是レ無效ノ約束保證ト謂フベシ。豈是ヲ以テ已ニ改定セラレタルノ位置ヲシテ、最前ノ地ニ復セシムルベキ理アランヤ

ヤ。然ラバ則今日高崎人民ニ在リテ、資力ヲ抛チ、總代人ヲ立テ、請求スル所アルモ、何等ノ利アルモノゾ。豈無益ノ擧ト謂ハザルヲ得ンヤ。然ルニ惣代人ト稱スル者、約束保證ノ廉ニノミ拘泥シテ、時日ヲ費シ、銘々ノ論旨ヲ主張スル尤甚ク、其末昨十一日、該驛人民突然數百名縣廳ニ集合シ、素彥ニ面會說明ヲ請求スルニ至レリ。抑惣代等申ス所ハ、素彥辯明ハ到底了解セラレ難シトノ事ナレ𪜈、該驛人民中、擧テ某ノ辯明ヲ了解スル者ナシト謂フベカラズ。仍テ昨日集合スル所ノ人民ヘハ、卽其請願ヲ許シ、辨明ヲ與ヘント欲シ、戸長ヲシテ一町二三名ノ代人ヲ撰定セシムルニ當リ、豈料ンヤ集合ノ者一同故無ク退散、其主意ヲ暢達スルヲ得ズ。面會說明ヲ請フノ切ナルニ付、其請ヲ許シテ面會セントスルニ際シ、突然退散スルヤ、且又鐵道布設及淸水越開路之儀ニ付テモ疑團有レ之趣ニ相聞候ヘ共、鐵道ハ東京ヨリ高崎ヲ經テ前橋ヘ達スベキ儀ニ有レ之、將淸水越ハ東京ヨリ越後新潟ニ達スルノ路線ニシテ、卽中仙道ニ係リ、高崎ヨリ金古・澁川ヲ經ルモノナレバ、此兩線路ニ付テモ疑團ノ生ズベキ謂レハ無レ之筈。雖レ然疑團ノ件、虛心平氣ヲ主トシ問フコトアランカ、懇篤說示スルハ勿論、就テハ更ニ可二相達一儀有レ之ニ付、一ケ町一人ヅツ出廳可レ致旨相達置候事ニ候得共、今般事柄ニ至リシハ、既ニ前條ノ次第ニ有レ之、亟ニ其理非得喪ヲ反省シ、各自業體ニ安着スル事肝要ニ候。

右告諭候事。

明治十四年八月十二日

群馬縣令楫取素彦

大正十四年縣廳舍改築の議起るや、高崎市民亦高崎市に廳舍設定の運動を起したるも、其效なくして終れり。

## 群馬縣治沿革一覽表（其一）

| （明治元年） | （明治二年六月） | （明治四年七月） | （明治六年六月） | （明治九年八月） |
|---|---|---|---|---|
| 岩鼻縣 | 岩鼻縣 | 群馬縣 | 熊谷縣 | 群馬縣 |
| 吉井藩 | （岩鼻縣へ） | | | |
| 前橋藩 | 前橋縣 | | | |
| 高崎藩 | 高崎縣 | | | |
| 沼田藩 | 沼田縣 | | | |
| 安中藩 | 安中縣 | | | |
| 伊勢崎藩 | 伊勢崎縣 | | | |
| 小幡藩 | 小幡縣 | | | |
| 七日市藩 | 七日市縣 | | | |

館林藩――館林縣――栃木縣――栃木縣――

## 明治元年縣内所領藩縣郡別表

| (郡名) | (藩縣名) |
|---|---|
| 吾妻 | 岩鼻縣 |
| 利根 | 岩鼻縣　沼田藩 |
| 勢多 | 岩鼻縣　松嶺藩(羽後)　前橋藩　館林藩　泉藩(磐城)　佐野藩(下野)　岩槻藩(武藏)　淀藩(山城) |
| 群馬 | 岩鼻縣　吉井縣　前橋藩　松本藩(信濃)　高崎藩　加知山藩(安房)　沼田藩　安中藩 |
| 片岡 | 高崎藩 |
| 碓氷 | 岩鼻縣　安中藩　高崎藩　小幡藩　吉井藩　前橋藩 |
| 緑野 | 岩鼻縣　高崎藩　吉井藩　佐野藩(下野) |
| 多胡 | 岩鼻縣　吉井藩　小幡藩 |
| 甘樂 | 岩鼻縣　吉井藩　小幡藩　七日市藩 |
| 佐位 | 岩鼻縣　前橋藩　伊勢崎藩　一ノ宮藩(上總) |
| 那波 | 岩鼻縣　前橋藩　高崎藩　吉井藩　伊勢崎藩　岩槻藩(武藏) |

山田 岩鼻縣 前橋藩 館林藩 松嶺藩(羽後)

新田 岩鼻縣 前橋藩 館林藩 佐野藩(下野) 一ノ宮藩(上總) 西端藩(三河) 半原藩(三河) 宍戸藩(常陸) 久留里藩(上總) 請西藩(上總)

邑樂 岩鼻縣 館林藩 前橋藩 西端藩(三河)

(十四郡) 二縣二十三藩

## 群馬縣治沿革郡別一覽表(其二)(自明治四年十一月至現今)

| 郡名 | 明治四年十一月設 | 同六年六月十五日 | 同九年八月廿一日 | 自同十年至同十一年 | 同十三年五月五日 | 同廿五年四月一日 | 同廿九年四月一日(一) | 同三十三年四月一日 | 大正十年四月一日 | 大正十四年四月現在 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 吾妻 | 群馬縣(十月廿八日置ク) | 熊谷縣 | 群馬 | 同上 | | | 吾妻 | | | 吾妻郡 |
| 利根 | 〃 | 〃 | 〃 | 〃 | | | 利根 | …… | …… | 利根郡 |
| 勢多 | 〃 | 〃 | 〃 | 〃 | 北勢多 | …… | 利根 | | | |
| | | | | | 南勢多 | …… | 勢多 | | | 勢多郡 |
| 群馬 | 〃 | 〃 | 〃 | 〃 | 東群馬 | 内前橋市 | 勢多 | | | 前橋市 |
| | | | | | 西群馬 | …… | 群馬 | 内高崎市 | | 高崎市 群馬郡 |
| 片岡 | 〃 | 〃 | 〃 | 〃 | | | 群馬 | | | |
| 碓氷 | 〃 | 〃 | 〃 | 〃 | | | 碓氷 | | | 碓氷郡 |
| 緑野 | 〃 | 〃 | 〃 | 〃 | | | 多野 | | | 多野郡 |
| 多胡 | 〃 | 〃 | 〃 | 〃 | | | 多野 | | | |
| 廿樂 | 〃 | 〃 | 〃 | 〃 | 南廿樂 | …… | 多野 | | | |
| | | | | | 北廿樂 | …… | …… | …… | …… | 北廿樂郡 |

| 郡 | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 佐位 | 栃木縣 十一月十四日置ク | 同上 | 縣 | 十年五月卅日新田ヨリ三村併(三) | 佐波 | 佐波郡 |
| 那波 | | | | | | |
| 山田 | | | | | | 山田郡 桐生市 |
| 新田 | | | | 十年五月卅日三村佐位へ變入(三) | | 新田郡 |
| 邑樂 | | | | 十年三月二日栃木縣ヨリ一部入(四) | | 邑樂郡 |

（内桐生市）

〔註〕

(一)西群馬郡中山村を吾妻郡に、吾妻郡新治村を利根郡に編入變更す。

(二)西群馬郡の内中山村を除く。(明治二十九年三月二十九日法律第四十一號。)

(三)新田郡久仁村を佐位郡國定村に、又新田郡田部村を佐位郡田部井村に、新田郡間野村を佐伊郡間野谷村に併合。以上新田の三村は何れも無民戸。(明治十年五月三十日内務省布達甲第十二號。)

(四)栃木縣管下下野國都賀郡内野村飛地字仕出の内、反別八反三畝十一歩邑樂郡海老瀬村に更編入、從つて國界更正。(明治十年三月二日内務省布達甲第五號。)

# 本縣内藩縣沿革調

## 岩鼻縣

置縣　明治元年六月十七日。同四年十月十八日廢。

長官　大音厚龍明治元年六月十七日攝知縣事。同十二月七日罷。

小室　彰同十二月七日任知事。同三年五月廿三日任德島藩大參事。

中島錫胤同三年八月二日任知事。同四年正月五日罷。

青山　貞同四年正月十五日任知事。（元東京府大參事）

治所　上野國群馬郡岩鼻。

管轄　明治二年十二月二十六日併吉井藩。

理事　同三年閏十月廿七日、停上野國新田郡德川鄉免役。舊幕府所許。

鎭撫　同元年五月三日、大總督府命横濱裁判所副總督鍋島直大、鎭撫上野・下野。同十八日、改鎭撫下總・下野。同七月十七日罷。

## 吉井藩

藩主　吉井信謹侍從。明治二年六月二十四日、任藩知事。十二月二十六日、藩納上表辭職、廢藩併岩鼻縣。

治所　上野國多胡郡矢田。

領地　草高一萬石。二年六月十七日、奉還封土。仍賜家祿二百十六石、現石高二千百六十石。

前橋藩——前橋縣

藩主　松平直克　大和守。明治二年六月十七日、任藩知事。同年八月二十五日、致仕。　置縣　明治四年七月十四日、廢藩爲縣。舊藩大參事以下、假管理事務。大事取朝裁。

同　直方　直克子。同二年八月二十五日、任藩知事。

治所　上野國群馬郡前橋。

領地　草高十七萬石。現石高五萬四千四百五十石。明治二年六月十七日奉還封土。仍賜家祿五千四百四十五石（明治三年九月十日。以下倣之。）

高崎藩——高崎縣

藩主　大河內輝照　右京亮。明治二年六月十九日、任藩知事。　置縣　同上。

治所　上野國群馬郡高崎。

領地　草高八萬二千石。現石三萬三千百十石。明治二年六月十七日奉還。仍賜家祿三千三百十一石。

沼田藩——沼田縣

藩主　土岐賴知　隼人正。明治二年六月二十日、任藩知事。　置縣　同上。

治所　上野國利根郡沼田。

領地　草高三萬五千石。現石一萬五千百十石。明治二年六月十七日、奉還封土。仍賜家祿千五百十一石。

## 安中藩――安中縣

藩主　板倉勝殷（主計頭。明治二年六月二十日、任藩知事。）　置縣同上。

治所　上野國碓氷郡安中。

領地　（草高三萬石。現石七千六百八十石。明治二年六月十七日奉還。仍賜家祿七百六十八石。）

## 伊勢崎藩――伊勢崎縣

藩主　酒井忠強（下野守。明治元年六月二十五日致仕。）　置縣同上。

同　忠彰（下野守。忠強弟。同元年六月二十五日襲封。二年六月二十二日、任藩知事。）

治所　上野國佐位郡伊勢崎。

領地　（草高二萬石。現石五千五百十石。明治二年六月十七日、奉還封土。仍賜家祿五百五十一石。）

## 小幡藩――小幡縣

藩主　松平忠恕（攝津守。明治二年六月二十二日、任藩知事。）　置縣同上。

治所　上野國北甘樂郡小幡。

領地　（草高二萬石。現石四千百七十石。明治二年六月十七日、奉還封土。仍賜家祿四百十七石。）

## 七日市藩――七日市縣

藩主　前田利豁（丹後守。明治二年六月廿二日、任藩知事。同年八月二日致仕。）　置縣同上。

治所　同　利照（利豁子。同二年八月二日、任藩知事。）

領地　上野國北甘樂郡七日市。

草高一萬十四石、現石二千六百石。明治二年六月十七日、奉還封土。仍賜家祿二百六十石。

館林藩　館林縣

藩主　秋元禮朝（但馬守。明治二年六月、任藩知事。）　置縣同上、

治所　上野國邑樂郡館林。　栃木縣（明治四年十一月十四日、廢館林等諸縣、置本縣。同九年八月二十一日、邑樂・新田・山田、三郡爲群馬縣所管。）

領地　草高六萬石。現石三萬七千四百五十石。明治二年六月十七日、奉還封土。仍賜家祿三千七百四十五石。

群馬縣

置縣　明治四年十月二十八日、廢岩鼻・前橋・高崎・安中・伊勢崎・小幡・七日市八縣置之。

長官　青山貞（明治四年十一月二日、任權令。同五年十一月二日罷。）　尋進令。（舊岩鼻縣權知事。）

河瀨秀治（同六年二月七日任令。）　兼入間縣令。（元印旛縣令。）

治所　上野國群馬郡高崎。（北緯三十六度二十分。西經〇度四十七分。）　五年五月二十七日、徙於前橋城。

管轄　明治四年十月二十八日、管吾妻・碓氷・群馬・甘樂・片岡・多胡・綠野・利根・勢多・

那波・佐位十一郡一。石高四十四萬石餘。戶數九萬三千三百五。人口三十八萬二千六百九十七。

## 熊谷縣 ―― 群馬縣

改稱（明治九年八月二十一日。）

置縣　明治六年六月十五日、廢二入間・群馬兩縣一置ㇾ之。

長官　河瀨秀治（同六年六月十五日任ㇾ令。（元群馬入間縣令。）同七年一月十五日、任二內務大丞兼縣令一。（同七月十九日罷二兼任一））

楫取素彥（同七年七月十九日、任二權令一（元足柄縣參事。）同九年四月四日進ㇾ令。）

治所　武藏國大里郡熊谷驛（北緯三十六度九分。西經〇度二十六分。）同九年八月二十一日徙於上野國群馬郡高崎一。同十四年二月二十六日、徙二于上野國前橋一（北緯三十六度二十七分。西經〇度三十五分。）

管轄　明治六年六月十五日、管二武藏國橫見・入間・秩父・男衾・大里・榛澤・加美・幡羅・比企・新座・那賀・兒玉・高麗十三郡及多摩郡中（舊入間縣所管）上野國吾妻・碓氷・群馬・甘樂・片岡・多胡・綠野・利根・勢多・那波・佐位・十一郡一。（舊群馬縣所管。）明治九年八月廿一日、屬二武藏國中十三郡及多摩郡中于埼玉縣一。而管二栃木縣所ㇾ管上野國山田・新田・邑樂三郡一。至ㇾ是管二上野全國一。

岩鼻縣管轄

上野國群馬・碓氷・甘樂・利根・吾妻・多胡・綠野・勢多・佐位・山田・邑樂・新田・那波拾參郡之内。武藏國賀美・秩父・那賀・榛澤・男衾・比企・大里・幡羅・横見・埼玉拾壹郡之内、惣高拾萬八仟二百四拾二石三斗五升壹合九勺七才。高畠彈正元代官所ノ分、戊辰七月、本縣支配地に被仰付候。武藏國秩父郡六村埼玉郡二村上野國山田郡二村新田郡七村高五千二百九十七石四斗六升一合一勺一才、林昌之助元領分上知、上野國群馬郡三村綠野郡二村高七百九拾一石八斗七升一合、小栗上野介知行上知之分、合高六千八十九石三斗三升二合一勺一才、戊辰七月、本縣支配地に被仰付候。

同國甘樂郡三村高六百七十五石八斗四升九合、東叡山領地上知、同年八月支配地に被仰付候。

同國群馬郡七村高三千百四十六石二斗九升八合二勺、酒井大和守上知之分、同新田郡一村山田郡一村合高千五十七石八斗三升五合五勺、黑田筑後守領地村替上知之分、武藏國榛澤郡拾村幡羅郡四村兒玉郡九村賀美郡七村比企郡四村合高六千四百四十八石七斗八升八合六勺七才、同人領地村替上知之分、已上三件同年十月本縣支配被仰付候。

内比企・大里・横見・埼玉・男衾五郡、大宮縣近傍、便宜ニ依リ、己巳二月、彼縣支配ニ被仰付。

兒玉・榛澤・賀美・那賀・幡羅五郡、彼縣支配之分、該縣ノ支配ニ交換被仰付候。

一高貳拾四萬八千九百九十四石八斗六升五合五勺八才。

一反別二百二町三段一畝八歩。

上野國　群馬郡三〇村　甘樂郡八九村　利根郡五一村

吾妻郡百壹村　多胡郡三三村　綠野郡五七村

佐位郡三二村　山田郡六二村　新田郡百壹村

邑樂郡五九村　那波郡貳壹村　碓氷郡貳八村

勢多郡六　村

一高拾壹萬貳千五百九拾石貳斗七升四合六勺六才。

一反別五拾四町七反廿六歩。

武藏國　賀美郡四三村　秩父郡五〇村　兒玉郡六六村

榛澤郡百九村　幡羅郡六〇村　那賀郡拾五村

合高　三拾六萬千五百八拾五石壹斗四升貳勺四才。

反高　貳百五拾七町貳畝四歩。

岩鼻縣支配所高國郡村名調　（明治二年三月）

上野國多胡·綠野·甘樂·碓氷·群馬·那波六郡之内、高九千六百四拾四石餘、吉井藩上知之地、己巳(明治二年)十一月、本縣の所轄に入。

武藏國高麗郡之内、高三千四百四拾石餘、一ッ橋從二位采地上知之處、庚午五月、本縣の所轄に入。

上野國新田郡之内七村佐位郡之内五村元一ノ宮縣加納遠江守の領地、庚午閏十月、本縣の所轄に入る。

内上野國勢多郡之内、高三百七拾八石九斗七升五合、庚午十二月、之を下野國佐位縣に分割せしむ。

同國邑樂郡高三萬八千貳百貳拾三石貳斗八升貳合貳勺五才、辛未正月、之を館林藩に分割せしむ。

### 吉井藩

高壹萬千四百九拾四石貳斗九升九合三才。

内高九千八百九拾五石壹斗九升九合三勺、上野國多胡·群馬·那波·甘樂·碓氷·綠野六郡の内貳拾四村。高千五百九拾五石壹斗、上總國長柄·夷隅二郡之内五村。五箇年平均米千五百九拾石貳斗參升貳合貳勺六才。金千三百拾一兩、永八百四拾四文九歩貳厘。

小幡藩

高貳萬參千七拾石壹斗四升五合。

甘樂・多胡・碓氷三郡の内四拾壹ヶ村。六箇年平均現米四千百七拾三石五斗壹升七合。

七日市藩

高壹萬千百拾三石貳斗八升。

甘樂郡之内拾八村、五箇年平均現米貳千六百四石六斗七升九合八勺七才定免。

高崎藩

高八萬貳千石

内高五萬五千六拾九石三斗九合。群馬・片岡・碓氷・綠野・那波五郡之内九拾九村、高貳千三百五拾石六斗七升八合。武藏國新座郡の内、高五千石。下總國海上郡の内、高貳萬四千八百五拾參石八斗貳升五合。越後國蒲原郡の内、五箇年平均、現米三萬參千百拾四石壹斗八升參合四勺三才定免。

安中藩

高參萬石。

内高壹萬七千石、碓氷・群馬二郡の内四拾五ヶ村。

高一萬參千石、下總國匝瑳・香取・海上三郡の內。五箇年平均現米七千六百八拾貳石七斗壹升七合六勺九才定免

沼田藩

高參萬五千石。外に九千百五拾四石貳斗壹升貳合七勺九才込。總高四萬四千百五拾四石二斗一升貳合七勺九才。

內高貳萬千八百四拾四石四斗貳升九合、利根・群馬二郡の內五拾七村。高壹萬四千百拾七石八斗七升六合三勺、美作國英田。勝南。勝北三郡ノ內。高八千百九拾壹石九斗七合四勺九才、河內國志紀。若江二郡の內。五箇年平均現米壹萬五千百拾壹石九斗七升二合八勺定免。

前橋藩

高拾七萬石。外に四萬四千百貳拾四石七斗貳升壹合三勺六才込。總高貳拾壹萬七千七百九石參升三合八勺四才。

內高拾參萬四千四百九石八斗五勺六才、群馬・那波・勢多・佐位・新田・邑樂・山田・碓氷八郡ノ內三百四拾五村。

高千參百貳拾參石六斗九升七合七勺二才、武藏國入間・高麗・比企・埼玉・榛澤・大里・兒玉・多摩・秩父・那賀十郡ノ內百六拾五村。

高壹萬四千七百三拾貳石七斗六升三合三勺七才、常陸國河内筑波二郡の内四拾壹箇村。

高五千四拾六石壹斗參升九合、近江國栗太・野洲・蒲生三郡ノ内拾三村。　五箇年平均、現米五萬四千四百五拾石貳斗八升六合三勺六才定免。

伊勢崎藩

高貳萬石　外に五千四百九拾貳石參斗六升三合、改出新田高。　總高貳萬五千四百九拾貳石三斗六升三合。　佐位・那波二郡の内四拾九村。　五箇年平均、現米五千貳百六拾石五斗七升六合。

館林藩

高六萬石。

内高五萬千七百六拾三石四斗二升三合、邑樂・山田・新田三郡の内五拾九村。　飛地高不詳。　下野國簗田郡の内、河内國丹南・丹北・八上三郡の内。

五箇年平均、不詳。

上野國内領地所有治所國外藩調

| （藩名） | （藩主） | （治所） | （領地　草高 現石） | （備考） |
|---|---|---|---|---|
| 淀藩 | 稻葉正邦侍從 | 山城國紀伊郡淀 | 十萬二千石<br>四萬三千七百八十石 | |
| 岩槻藩 | 大岡忠貫主膳正 | 武藏國南埼玉郡岩槻 | 二萬三千石<br>八千八百八十石 | |
| 佐野藩 | 堀田正頌攝津守 | 下野國安蘇郡佐野 | 一萬六千石<br>五千二百六十石 | |
| 松本藩 | 戶田光則丹波守 | 信濃國筑摩郡松本 | 六萬石<br>三萬六千八百五十石 | |
| 西端藩 | 本多忠鵬對馬守 | 三河國碧海郡西端 | 一萬五百石<br>三千二百八十石 | |
| 半原藩 | 安部信發攝津守 | 三河國半原 | 二萬二百五十石<br>五千九百四十石 | 別項 |
| 加知山藩 | 酒井忠美大和守 | 安房國平群郡加知山 | 一萬二千石<br>四千二百八十石 | |
| 一ノ宮藩 | 加納久宜遠江守 | 上總國長柄郡一ノ宮 | 一萬三千石<br>五千四百七十石 | |
| 久留里藩 | 黑田直養筑後守 | 同望陀郡久留里 | 三萬石<br>一萬千百二十六石 | |
| 櫻井藩 | 瀧脇信敏丹後守 | 同同郡櫻井 | 一萬石<br>三千五百六十石 | 別項 |
| 請西藩 | 林忠崇昌之助 | 上總國望陀郡請西 | 一萬石<br>— | 明治元年五月二十七日沒二其封土一。以レ抗二官軍一故也。 |
| 宍戶藩 | 松平賴位主稅頭 | 常陸國茨城郡宍戶 | 一萬石<br>千八百九十石 | |
| 泉藩 | 本多忠伸兵庫助 | 磐城國菊多郡泉 | 一萬八千石<br>四千五百五十石 | 別項 |
| 松嶺藩 | 酒井忠匡信三郎 | 羽後國飽海郡松山 | 二萬二千五百石<br>一萬二千四百二十石 | 別項 |

（備　考）

半原藩　初武藏國榛澤郡岡部、岡部藩と稱す。後三河國半原に徙る。半原藩と改稱及び移轉の年月詳ならず。

櫻井藩　初駿河國庵原郡に在り。小島藩と稱す。明治元年七月十三日移封せられ、藩名を改む。

松嶺藩　明治元年閏四月二十日、奧羽列藩連衡し、朝命を奉ぜず。官軍之を討ち、九月二十七日、藩主酒井忠良罪を謝して、降をこふ。十一月七日、封土二千五百石を削り、退老を命ず。十五日、子忠匡をして其家を繼がしむ。

泉　藩　明治元年五月三日、奧羽列藩連衡し、朝命を奉ぜず。六月二十八日、官軍藩城を取り、藩主本多忠紀、走りて外に在り。九月二十四日、罪を謝し、降をこふ。十一月五日、其官位を褫ひ、十二月七日、封土二千石を削り、退老を命ず。同月十八日、養子忠伸をして其家を繼がしむ。

（群馬縣史稿政治部縣治・熊谷縣沿革概略・地方沿革略譜。）

## 第二節　縣官職制竝に所管事務の分合

### 第一項　府藩縣時代

#### 甲　岩鼻縣職制

明治元年閏四月發布せられたる政體書に據れば、地方行政は地方を府・藩・縣の三者に區劃し、地方官を分ちて、三官としたり。而して府縣は政府直轄地、藩は諸侯の領地にして、府縣の長官たる知府事・知縣事（七月十三日、知縣事・判縣事を置き、手代元締・手代等の名目を廢せり。）の職權は、人民を繁育し生産を富殖し、教化を敦くし、租税を收め、賦役を督し、刑賞を知り、郷兵を監制する等、單に行政事項のみならず、司法・軍務一切を處理するものたれば、大體諸侯に同じきを知る。されどこれ其大綱を示したるものなり。府縣内の職制に至りては、未だ充分定まらざりしが如し。此時に當りてや、東國未だ完全に皇化に霑へるとは云ふ能はず、所在脱賊奸民尠からず。故に縣治專ら警備を主とし、其他の庶務は、大抵疎畧に歸せり。且つ我上野國中、諸藩の領地と旗下の采地と犬牙交錯し、其間本縣を置き管する所の地、偏小にして吏員亦僅

少なり。故に唯取締・調方・書記・玄關番・小頭等の職名を設けて、訟獄・租役・警備等の諸務を掌らしめ、確然たる官制の設けあらざりき。

明治二年七月に至り、民政・地方・監察の三局を立て、分課職制創めて成れり。此職制は都て京都府の職制に則れりと云ふ。職員に知事・判事・權判事・調役頭取・調役・同補・下調方・出仕あり。

民政局は官政・聽訟・斷獄・社寺・捕亡、

地方局は租稅・會計・營作・驛遞・庶務、

監察局は縣吏の曲直・勤惰を監し、宿驛村落を巡檢し、下民安撫の事を務む。

此月、七月八日の官令に基き、舊職名を廢し、知縣事を知事と改め、其他を大參事・小參事・大屬・權大屬・小屬・權少屬・史生等に改む。此時岩鼻縣の職員錄に據れば左の如く定めらる。

知縣事　一名　　大參事　一名　　小參事　一名　　大屬　四名

少屬　十名　　權少屬　十三名　　史生　三名　　准史生　五名

史生試補　十三名

其他　玄關番　門番　牢番　小使等。

同年八月、上武十一藩と協議し、先當時急務とする警備の制を設け、管下へ布達す。其文に曰く、

今般府藩縣三治一致之御趣意に付、於諸藩も各藩知事奉職之上者、管轄下、取締之儀も、其藩々にて取計候儀に付、是迄之支配々々打交、取締組合寄場大小惣代者廢止、組合者解放候間、只當縣管下而已、最寄十箇村づつ一組に改組合、其中より人撰之上、一人年限を以て惣代之者相立置、廻在之出役より及差圖候。取締筋者勿論、御布告之趣意、教諭筋等、右之者より村々へ爲申諭、取締向萬端行届、無宿無賴の者共不立廻樣、爲取計候間、宿町村々都合宜敷樣、村々組合可申事。

但本領安堵之領地、幷管轄地、孕り候社寺領村々、可組入者勿論、組合十箇村にて不都合の場所は、五六箇村組合候ても不苦事。

組合村々組替相成、入用相掛候而者、難儀可致間、管轄所爲取締廻村いたし候出役のもの、囚人於場所日數逗留取調候儀は相止、召捕次第、探索書幷に見込書を以て、直に當縣へ差送候筈に付、村々に於て差押候惡徒共、其最寄に出役無之候はゞ、惡事の始末書取を以て、其村方より直に可差出事。

右の通相心得、最寄〱組合組替、來月十五日迄組替相成候村々名主、連印を以て可申立、猶追々相達候儀も可有之候得共、先づ右之趣小前末々迄、不洩樣可申聞置、以此

廻狀村名下請印、至急順達、從留村可相返もの也。

巳巳十月　岩鼻縣

右村々役人。

## 乙　藩縣時代の職制

以上は政府直轄地たる岩鼻縣の職制なるが、此間縣と並立したる諸藩の政治は如何と云ふに、明治元年十月二十八日、政府は藩治職制を頒布し、諸藩をして之に則らしめたれば、國內各藩共、大同小異たりしなり。先づ藩治職制に見るに左の如し。

諸藩

天下地方府・藩・縣の三治に歸し、三治一致にして、御國體可相立、然るに藩治之儀は、從前各其家の立るに隨ひ、職制區々異同有之候に付、今後一般同軌の御趣意を以て、藩治職制大凡別紙の通可相立旨被仰出候事。

藩治職制

執政　無定員

掌　體認朝政。輔佐藩主。一藩紀綱政事無不總。
參政無定員
掌　參政事。一藩庶務無不與聞。
公議人
掌　奉承朝命。代國論。備議員。
一執政・參政は藩主の所在と雖も、從來沿襲の門閥に不拘、人材登庸、務て公擧を旨とし、其人員黜陟等、時々太政官に達すべし。
一執政・參政の外、兵刑民事及庶務の職制、其藩主の所定と雖も、大凡府縣簡易の制に准じ、一致の理を明にすべし。
　但職制一定の上は、之を冊にして太政官に達すべし。
一藩主の側はら、從來所置用人等の職を廢し、別に家知事を置き、敢て藩屏の機務に混ぜしめず、專ら內家の事を掌らしむべし。
一公議人は執政・參政中より出すべし。
一大に議事の制を立てらるべきに付、藩々に於ても其制を立つべし。
以上。

此時に當り上野國管內に藩廳を設けたるもの前橋・高崎・沼田・伊勢崎・館林・安中・

小幡・七日市・吉井の九藩、皆知藩事となり、領内を治め居たることとなれば、各藩多少の相違ありと雖も、今各藩別に職制を擧ぐるを略して、縣中の大藩たりし前橋藩政治の大要を掲ぐべし。

是より先、明治元年九月廿二日、前橋藩にては藩政體を變革し政府を内外二局に分ち各職員を定む。其令に曰く、

當今非常多端の時に當り、百事簡便に非れば、所謂因循遲滯の患を免れず。故に政體の内外二局を分ち、各事務勉勵、事機を失せざるを要す。議局を附するは、議事を厚くし、輿論を採るがため、又說諭探索に備ふるものなり。辨局を附するは、一定の規則に依らしめんがためなり。内局職員、家老、其職執政決議、其任百事を決し、諸司に附す。公務交際・會計兼之、軍務に臨て督とす。年寄、其職參政輔議、其任總て執政に副たり。軍務に當て副督とす。附議局職員、議事頭取・町在奉行列内局監察忍役を預る。議員諸士より遊擊隊を以て任之。内局の令を受けて、事を議す。又諸向の意見を議し、或は諸向の議を聞糺して、之を内局に達す。又諸向の說得・糺正及び探索・使命に任す。（以上内局。）

外局職員家老二。一は其職執政、其任軍務掛、諸隊の勤惰、兵器を督す。新に議すべき件は、議案を定めて議を内局に取る。軍務に當て督す。其二は其職執政、其任文

武掛、文武を擴張し、新に議すべき件、同上。軍務に當て又同じ。年寄二。一は其職參政、其任前に副たり。軍務に當て副督とす。其二は職參政前と同じ。（右一座衆判所出仕、一月三回內局に會す。）

附辨局職員、調役頭取・町在奉行・列外局監察兼宗門改調役・諸士より遊擊隊に至る。任は外局に屬し、諸向願屆等の疑問に指令し、又例規に違ふを糺す。（以上衆判所出仕。）兩局に書記を分附す。軍務掛附局職員、顧問・改役、其他內外執政・參政共、出軍は時の令を待つべし。又隔地の出張は內外混一たるべし。自家に於て政事を議するを禁ず。抱議のものは議局に出づべし。時宜に依り執參の面謁も其局に限る。大目附を廢し、狙擊隊差圖役の職掌を改め、隊兵の差圖のみとし、餘は辨局に任ず。

（橋藩祕史。）

尋いで藩治職制を頒布せらるゝや、又藩政を釐革する所あり。卽ち明治二年正月十六日、朝旨に基き、民政・會計を改革す。其達に曰く、

王政一新朝旨を遵奉し、逐次藩政を變革せり。尙又府・藩・縣三治一致の主意に基き、更に從前の家法の今に違せざるものを斟量取捨し、新法を設けられんとす。尙朝廷に於ても、邦內一樣の新律確定せらるゝ難、計を以て、卽今の所、朝旨を體認し、民政・會計の二科を改正す。其他本藩に限りたる規律は、宜く之を廢し、御歷代の時宜家

法を參酌し、然る後家法を立てらるゝにあり。抑民政・會計は國政の要務、朝廷に於ても殊に力を盡さるゝ所なり。且其主意は諸事恢轄にして、人々心志を養ひ、倦まざらしむるにあり。一統不行違樣體認し、緩に走せ、飲食に耽り、奢侈に流れず、各分限に應じ、守を立るを要す。微細に至りては、一々申聞けず。各心志を養ひ、識見を立て、禮讓を厚うし、士氣を振起し、緩急公に奉じ、精勵すべし。萬一之に反するか守を失するものあるに於ては、屹と沙汰に及ぶべし。云々。其改正の目的は曰く、鎭民・澤民・會計の三局を設け、各判事を置き、諸吏を之に添ふ。曰く三判事、一列席器械司の上とす。曰く會計監察をおく。曰く銃砲奉行、自今器械司と改む。曰く建築奉行を建築司と改め、同小奉行を小司と改む。云々。

越えて四月廿五日、更に藩政を改定して六局を置く。

議政局・施政局・軍務局・總教局・民政局・會計局にして、中に就き軍務局の下に兵學・備器械・兵馬の二局を、總教局の下に博喩堂及び練武所を、會計局の下に營繕局を屬せしむ。

明治二年六月、朝廷勅命あり。諸藩の版籍奉還の請を聽許し、各藩主を以て知藩事となし、從前帶ぶる所の官職稱號は一切之を罷めらるゝも、改めて華族の稱を賜ひ、又藩封の舊臣は、士族・卒族と稱せしめ、知藩事をして其祿制を定めしめら

る。七月官制を改め、職員令を定め、諸藩に命じて、公議人・公用人を東京に置かしむ。

明治三年九月、政府又藩制を改正せらる。左の如し。

大藩　十五萬石以上
中藩　五萬石以上
小藩　五萬石未滿

右石高物成を以て稱し、雜稅金は一石八兩立にて、本石の高に結ぶ。

知事―大參事―權大參事―少參事―權少參事

大參事　不過二人。有無其便宜に從ふ。

少參事　不過五人。有無其便宜に從ふ。小藩は之を置かず。

以上位階大・中・小藩に從て同じからず。

從七位―正八位―從八位―正九位―從九位

大屬―權大屬―少屬―權少屬―史生・廳掌―使部

以上分課事務する所あるべし。譬へば會計・軍事・刑法・學校・監察の類の如し。

官員の多寡、大・中・小藩に從て適宜たるべきこと。

以上は藩知事時代の大略なり。

## 第二項　群馬縣時代（第一次）

明治四年十月廿八日、群馬縣を置き、舊岩鼻縣知事を以て權知事となす。而も此廢藩置縣の際、新管授受の事務頗る繁忙を告げたれば、暫く舊岩鼻縣の制に依り、聽訟・租稅・庶務・出納の四課を存置し、別に新制を設けず。此日政府にては府縣官制を布告す。

縣

| 官職 | 員數 | 等級 |
|---|---|---|
| 知事 | 一員 | 四等 |
| 權知事 | | 五等 |
| 參事 | 一員 | 六等 |
| 權參事 | （便宜置之不過二員） | 七等 |
| 典事 | | 八等 |
| 權典事 | | 九等 |
| 大屬 | | 十等 |
| 權大屬 | | 十一等 |
| 少屬 | | 十二等 |

権少屬　十三等
史生　十四等
出仕　十五等

一知事あれば權知事を不置。權知事あれば知事を不置。
一典事以下の職員は府縣の一課目を擔當して、參事の允許なければ、其事務を施行するを得ず。
但し租税・庶務・聽訟の三課に分つ。
一典事以下官員定限は、舊縣規則に照準して定むべし。

本縣にては舊岩鼻縣知事は、群馬縣權知事となる。已にして十一月二日、縣知事を改めて縣令と稱せしめ、尋いで廿七日、縣治職制を定めらるゝに及び、地方長官の權限及び廳內の分課制明となれり。卽地方長官たる令若くは權令は、縣內の人民を敎督保護し、條令布告を遵奉施行し、租税を收め、賦役を督し、賞刑を判し、非常の事あれば、鎭臺分營に稟議し、便宜處分するを掌り、縣內互市場あれば、貿易事務を兼掌し、且つ上下に對して責に任じ、縣官奏任以上の進退は、具狀して處分を乞ひ、判任以下の官員は、能否勤惰を檢査し、撰薦・免黜專行する等管內に於ける

立法・司法・行政を總括す。令の下に參事、又は權參事を置き、其下に權典事ありて、典事の事務を補佐す。權典事の下に大屬・權大屬・少屬・權少屬・史生・出仕等を置く。其の官等左の如し。

| （奏任） | | | | （判任） | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| （四等） | （五等） | （六等） | （七等） | （八等） | （九等） | （十等） | （十一等） | （十二等） | （十三等） | （十四等） | （十五等） |
| 縣令 | 權令 | 參事 | 權參事 | 典事 | 權典事 | 大屬 | 權大屬 | 少屬 | 權少屬 | 史生 | 出仕 |
| 一人 | | 一人 | | 二人 | | 五人 | 五人 | 五人 | 六人 | 六人 | |

此時廳内の事務を分ちて、四課とす。即ち左の如し。

庶務課

社寺・貫屬戸籍、竝に人畜の數を稽査し、郡長・里正の勤惰を察し、官省・進退・府縣往復の文書を案じ、學校の事務、及び郡長・里正・戸長・等外・使部等の進退を掌る。

聽訟課

縣内の訴訟を審聽し、其情を盡して、長官に具陳し、及び縣内を監視し、罪人を處置し、捕亡の事を掌る。

租稅課

正租・雜稅を收め、豐凶を檢し、及び開墾・通船・培植・漁獵・山林・堤防・營繕・社倉等の事を掌

る。

出納課

歳入・歳出を計り、金穀を大藏省に納め、公廨・用度の計算を明にし、及び官員官祿・旅費・堤防・營繕等、一切の費用を掌る。

是に由て之を觀る時は、敎育・勸業・土木・會計・警察・裁判・監獄、一切管掌せざるなく、唯軍隊指揮權を有せざるのみ。之を今日の地方長官に比するに、其權限の大小に於て、著しき相違あるを知るべし。

明治六年二月に至り、分課中に左の掛りを設けて、事務を分擔せしめ、當分試驗的に行ひ、漸次熟議の上更正すべきものとす。

庶務課

常務掛　受付・戸籍・社寺・編輯・布達・往復。

勸業掛　學務・開墾・牧畜・種藝・諸鑛礦・工藝・諸會社。

驛遞掛　道路・郵便。

監察掛　囚獄・徒流場・邏卒。

租稅課

常務掛

地理掛　地券官林。

雜稅掛　三造舟車・傘紙・生絲等一切の雜稅。

土木掛　營繕。

出納課

受拂掛

正算掛

同年三月、捕亡の事務を廢し、司法省へ引渡す。依りて本縣監察掛を廢し、更に**勸業掛に左の職務を追加す。**

常々管内を周廻し、正副區長・戶長、及神官・敎官等の勤惰は勿論、農工商其他百般人民の各業を勸め、若巡廻先に於て各務各業の障碍を釀し、良民の患害をなす者あれば、速に之を地方の長官に報告するを要す。

又常務掛に左の職務を追加す。蓋し監察掛を廢したる餘響なり。

徒場・囚獄・斷刑の事を掌る。

此月群馬縣令河瀨秀治、入間縣令を兼ね、其事務を兼掌す。武藏國大里郡熊谷驛を以て、事務局に充て、入間の吏員を此に移し、諸省布令、四方の來牒、及び兩縣の

常務を擔當せしむるに及び、翌四月、上・武の管轄地內八箇所に區廳を置き、事務概則を定め、左の事務を執り行はしむ。

(一)盜難訴。(二)拾品拾物訴。(三)失火・放火。(四)諸檢使、及亂妨・人殺等、急迫の事件。(五)逃亡人訴、附歸住願。(六)正副區戶長、及準副戶長進退願、附病死屆。(七)寺院住職、鄕村社神官願。(八)神佛祭禮、及開帳屆。(九)說教執行屆。(一〇)敎導職拜命屆。(一一)娼妓・藝妓・同貸座敷渡世願、又は改業屆、其外芝居・手踊・定席・臨時諸興行・寄せ・角力等の類。

但し本文に關する收稅は、兼而布達の通り、正副戶長へ可收事。

(一二)行旅發病、宿村送り歸鄕の願。(一三)公事出入濟口屆。(一四)刑罪處置濟屆。裁判所所在の廳に於ては、左の條件を增加す。

(一五)刑人處置の事、附處置濟府縣送取扱の事。(一六)囚獄懲役場取締の事、及懲役人を使用する事。(一七)同出納精算、及有宿の費用を取立る事。

當分此の如く假定追次增減すべき也。

而して其區廳設置地としては、當分左の八個所と定む。

武州　深谷・松山。

上州　高崎・伊勢崎・下仁田・藤岡・沼田・中之條。

但し川越本廳に於ても、當分區廳の制に依ることゝなる。

此時に當りてや、未だ今日の如く郡役所なく、警察署なく、地方行政事務未分化せず、混沌たる狀態にありしなり。

### 第三項　熊谷縣時代

明治六年六月十五日、熊谷縣を置かるゝに及びても、唯入間・群馬兩縣を併合したるにすぎざれば、地方長官たる縣令の權限に於ては、變更を見ず。唯治域は上・武二國に跨りたれば、武藏國分を南部として、拾壹大區九拾四小區に、上野國（新田・山田・邑樂の三郡を除く。）を北部として、貳拾貳大區貳百四拾七小區に區劃したるを異なりとす。然りと雖も年次を經るに從ひ、政務は次第に複雜に赴きたれば、之に伴ひ廳內の職制も分化するに至れるは、亦已むを得ざりしなるべし。即ち明治七年二月、行政・司法兩警察規則仰出されしに付ては、從前庶務掛中の巡廻方を廢して、警視方とし、後之を一般警視掛と改め、（八年四月）又警視掛を警察掛と改稱し、（同年八月）各警保出張所に等級を設けたり。（同年十二月）

高崎　一等　前橋　一等　伊勢崎　二等

富岡　二等　沼田　二等　澁川　三等

又八年四月に至りて、學務課を獨立せしめ、庶務課の次に列せしめる等、漸次多きを加へたり。かくて明治八年七月の熊谷縣職員表に據れば、左の如し。八年七月四日、編輯掛を置く。即ち各課へ達「今般編輯掛差置候間、舊藩縣引繼の書物、他日の考據に可相備部類、無遺漏取調、編輯掛へ可差出候事。」明治九年七月二十日、簿書編纂及び圖書保存條例を設定し、之を編纂係の管掌とす。後の文書保存係なり。

明治八年七月職員表

一　分課

庶務課
常務・戸籍・社寺・勸業・驛遞・囚獄・懲役・警視・編輯の九掛。

學務課

租稅課
總括・地稅・地租改正・土木・雜稅・證券印紙・蠶種取扱の七掛。

出納課

常務・公債の二掛。

二　職員

| 官職 | 人員 | 官職 | 人員 | 官職 | 人員 |
| --- | --- | --- | --- | --- | --- |
| 權令 | 一人 | 少屬 | 一三人 | 十五等出仕 | 二一人 |
| 七等出仕 | 一人 | 十二等出仕 | 一人 | 等外一等出仕 | 二五人 |
| 大屬 | 二人 | 權少屬 | 十八人 | 同　二等出仕 | 二一人 |
| 權大屬 | 一人 | 史生 | 一二人 | 同　三等出仕 | 一五人 |
| 中屬 | 一二人 | 十三等出仕 | 一人 | 同　四等出仕 | 二一人 |
| 權中屬 | 一七人 | 十四等出仕 | 二二人 | | |

計　一八四人　内奏任　貳　判任　一〇〇　等外　八二

明治八年十一月、府縣職制並に事務章程を改定せられ、縣令は憲法典令を遵奉施行し、部内の安寧、部民の保護、徴稅・勸業・教育等の事を掌り、事務章程中揭ぐる所の諸件を管理し、部内に互市場あれば、幷に其事務を掌る。掌管の事務舉らざることあれば、其責に任ず。其他奏任官の功過を具狀し、判任以下の官員の任免を專行し、非常の際は鎮臺に稟議し、便宜處分することを得る職權を有せしめたり。而して令以下に左の官職を設け、政務を六課に分ちて、之を處理せしむ。

知　事　知事あれば權知事を置かず。

権知事

令　令あれば權令を置かず。

權令

參事

權參事

府は參事・權參事各一員を置くを得。縣は參事あれば、權參事を置かず。但一員にすぎず。

大屬

權大屬

中屬

權中屬

少屬

權少屬

史生

府縣掌

廳內分課　明治九年八月卅一日、各課名を改稱す。「明治八年第二百三號公達府縣職制に據り、自今各課名前記の通り、改稱候條、此段相達候事。」（舊群馬縣

（史偏）

第一課　　庶務課
第二課　　勸業課
第三課　　租税課
第四課　　警保課
第五課　　學務課
第六課　　出納課

## 第四項　群馬縣時代（第二次）

明治九年九月、太政官達第八十九號、及び布告第百十四號を以て、府縣裁判所を改め、地方裁判所を置き、聽訟・斷獄の司法事務を司法省の直轄とするに及び、地方官憲の職務に一大變革を來せり。

明治十一年七月改定の府縣官職制に據れば、府知事・縣令は部内の行政事務を總理し、法律及び政府の命令を執行することを掌る。而して之れが爲に要用な

りとするときは、其實施の順序を設けて、部内に布達し、及び其適宜處分を許されたる事件に就いては、規則を設立して、部内に布達することを得。而して發行の後、直に主務の卿に報告するの義務ありとし、若し法律若くは政府の命令と相背き、又は權限を侵したるときは、太政大臣若くは各省主務の卿より、之が取消を命ぜらるゝことあるべしとし、又地方税を徵收して、部内の支費用に充つる府縣會ある地方に於ては、之を會議に附すべきものとし、府縣會を召集し、會議を中止し、決議案を認可し、或は認可せざるの權を有す。其他屬官及び郡長以下、郡の吏員を判任進退し、郡務を指揮監督し、非常事變あれば、鎭臺若くは分營の將校に通議して、便宜處分することを得る等の職能を明示せられたり。此に於て地方長官明治十九年七月の地方官官制の改定により地方長官は法令の範圍内に於て一般に府縣令を發することを得。然れども公益を害し、成規に違ひ又は權限を侵すものあるときは、主務大臣は之を取消し、又中止を命ずること。(此改正に於て縣令の名稱を知事と改む。)は國の行政機關たると同時に、其府縣自治體の行政機關たるの形となり、其職權明確となれり。是れより以後時勢の進運に伴ひ、地方官制の改革、數次行はれたりと雖も、地方長官の權限に至りては、大なる變革を見ず。唯行政事務の分化に伴ひ、明治二十九年十月二十日、勅令第三百三十七號、税務管理局官制の發布に依り、府縣の管掌に屬する國税事務が、大藏省

の管轄に移りたると、明治三十六年三月二十日勅令第三十四號地方官々制改正に依りて、監獄事務が司法省管轄に移りたるを著しとなし、其他は事務の繁簡に鑑み、統督の利便を圖りて、各課の分合を行ひたるに過ぎず。今年次を逐ひ官制の改正に從ひ、之を列擧すれば左の如し。

明治十一年七月十五日府縣官職制の頒布に伴ひ、同年十二月七日本縣職制

令　一人

府縣職制を奉守し、屬官・郡長・郡書記等を判任進退し、廳務を七課に分ち、每課課長を置き、郡役所制限を立、每郡郡長を置き、各、其職を擧行せしむ。

書記官　一人

令を輔け、行政事務を參判し、令不在のとき、代理の任を受く。

屬

事を縣令に受け、各務を分掌す。

警部

事を縣令に受け、管内の警察を掌る。

郡長

事を縣令に受け、法律命令を郡内に施行、一郡の事務を掌る。

郡書記
事を郡長に受け、郡役所各務を分掌し、郡長不在のときは、代理の任を受く。

明治十一年十二月十二日甲第百三號を以て廳内各課科を改置す。
庶務課　職務科・審査科・記錄科・戶籍科・社寺科。
勸業課　勸農科・勸工科・勸商科・銀行科。
警保課　警察署・監獄署・懲役署。
學務課　衞生科・編纂科。
地理課　土木科・驛遞科・山林科。
租稅課　國稅科・地方稅科。
出納課　公債科・警費科・學費科。

本廳課科は左の通り廢置の旨、明治十三年三月廿七日を以て達せらる。
廢止　審査科・衞生科・警費科・學費科。
學務課の衞生科を獨立せしめて一課となす。
越えて六月十六日、科名を係と改稱す。

明治十三年六月十六日、事務章程を改定す。
庶務課

常務係・職務係・戸籍係・社寺係・編輯係・受付係　（十六年十月九日、常務係へ併合）

同年六月廿八日に至り、地理課の內土木科を獨立せしめ、土木課とし、地理課の次に列せしむ。同時に分掌及び事務章程を定む。

土木課　常務係・水理係・道路係・營繕係。

となし、斯くて明治十三年七月には、廳內は左の八課一署となる。

庶務課・勸業課・租稅課・學務課・衞生課・地理課・土木課・出納課・警察本署。

明治十四年五月に至り、勸業課內の分掌勸農・勸工・勸商の三係を廢して、常務・農務・工商務の三係を置きしが、同年八月に至りて、更に改定して左係となす。

勸業課　常務係・農務係・工商係・山林係・銀行係。

明治十五年三月に至り、租稅課中に常務係を置き、同年八月に至り、國稅係を廢し、常務係・地理係となす。同十六年二月、庶務課中の戸籍係の一部を分ちて、兵事課を獨立し、事務章程を定む。是れ徵兵令制定に基きたるなり。同十六年五月、各課の外に調書係を設置し、特に本局の命に依りて、其意見を陳述し、又は事務を調理、其他諸般の事件調査を掌る。同十六年十月、勸業課分掌、常務係・農務係・工商係を廢し、農商係を設置し、又租稅課中地方稅係を廢し、會計課に屬せしむ。同十

七年六月、租稅課中地理係を勸業課の分掌とし、租稅課を收稅課と改稱し、左の諸係を置き、收稅長を以て課長となす。同十七年八月、庶務課中編輯係を削除す。

收稅課 庶務係・地租係・雜稅係・收納係・地方稅係。

明治十八年一月、庶務課中に新に記錄係を置き、文書の淨書・謄寫、其他辭令及び褒狀を認むることゝせり。同十八年七月に至り、收稅課事務規程を更定して、五係となす。

收稅課 庶務係・地租係・雜稅係・收納係・地方稅係。

同年八月、調査係を昇格して、調査課とし、事務章程を定め、凡全管の治體に關するもの、及び事重大に涉り、或は紛議に係る事件の調査を掌らしむ。

同月勸業課中山林係を廢し、地理係に管掌せしめ、又土木課中水理・道路の兩係を廢し、土工係を設く。九月調査會を創定し、書記官を議長とし、警部長・收稅長・各課長・典獄・各課員一名乃至二名を以て、會員となす。其設置の目的は、本局の諮詢幷に各課署の提出に係る事件を審議することゝせり。

十八年九月、庶務課中驛遞係を勸業課に屬せしむ。

同年十一月、收稅課事務規定を改廢し、租稅及び徵稅費に關する一切の事務を

分擔整理せしむ。

　收稅課

　　本科

　　　庶務係・賦稅係・收納係・地方稅係。

　　檢稅科

明治十九年七月廿日、地方官官制を制定し、府縣に知事・書記官・收稅長・屬・警部長・警部・警部補・典獄・副典獄・書記・看守長・看守副長を置く。廳中に第一部・第二部を置き、書記官を以て部長とし、收稅長は收稅部長となり、警部長は警察部に長として、所部の事務を管掌す。此官制改定に基き、本縣處務細則を定む。

　第一部　議事課・文書課・農商課・庶務課。

　第二部　土木課・兵事課・學務課・監獄課・衞生課・會計課。

　警察部

　收稅部

明治廿三年十月十一日、地方官々制（勅令第二百二十五號）左の如し。

　職員

　知事　一人　勅任

　屬　判任

書記官　一人　奏任　技　手
警部長　一人　奏任　警　部　判任
收稅長・　一人　奏任　收稅屬　判任
參事官　二人　奏任　監獄書記　判任
典　獄　一人　奏任　看守長　判任
技　師

本縣にては同廿三年十一月四日、處務細則を定む。

廳務分課

知事官房　祕書係・文書係。

內務部

第一課　議事係・庶務係。

第二課　農商係・土木係。

第三課　學務係・兵事係。

第四課　國費係・地方費係。

警察部　警務課・保安課。

直稅署　收稅課・徵稅費課。

間稅署　賦稅課・調査課。
監獄署　守警課・庶務課。

明治卄五年三月十七日訓令甲第十八號を以て、本廳處務細則を改正し、別に警察部・直稅署・間稅署・監獄署の處務細則を定む。

本縣にては明治卄七年一月四日、左の如く改定す。

知事官房（祕書・文書・圖書三係を廢す。）
內務部
第一課　議事係・庶務係。
第二課　土木係・地理係。
第三課　學務係・農商係（一）・兵事係・社寺係。
第四課　國費係・地方費係。
警察部
第一課　警務。
第二課　保安・衞生。
收稅部
第一課　直稅。

（註一）明治卄八年七月訓令甲第七十六號中農商係を廢し、第五課を設け、農務係商工係を置く。

第二課　間稅。
監獄署
第一課　監視。
第二課　監役。
第三課　庶務・衞生課。(明治卅一年十月十九日改正。衞生課獨立。)
醫務所
明治卅六年六月廿日、處務細則を改定す。
知事官房　祕書係・文書係。
內務部
第一課　議事係・(一)郡市係・兵事係・庶務係。(註一)明治卅七年八月廿六日、廳訓第六號議事係・郡市係を倂合し、地方課と改む。
第二課　土木係・營繕係・地理係。
第三課　學務係・視學係。
第四課　農務係・商工係。
第五課　國費係・縣費係。
警察部
警務課

保安課
・衛生課
巡査教習所

明治卅八年四月七日、内務部に統計係を置き、統計に關する事項を處理せしめ、兵事係の次に序せしむ。同月十八日地方官々制改正あり。書記官・警部長・視學官・參事官の官職を罷めて、事務官となし、更に通譯を置く。廳中事務分掌を知事官房の外、四部に分ち、事務官を其部長とす。四月廿一日、本縣にては各部に課を置き、次の如くせり。

知事官房　秘書係・文書係。
第一部　地方課・土木課・會計課。
第二部　學務課・社寺兵事課。
第三部　農務課・商工課。（一）
第四部　警務課・保安課・衛生課・巡査教習所。

（註一）明治卅九年二月十五日、第三部中商工課の次に林務課を置き、森林・原野・鑛業の事務を分掌せしむ。

明治四十年七月十二日、地方官々制に一部改正あり。事務官の次に事務官補

を加へられ、第一部・第二部・第三部を合せて內務部とし、第四部を警察部に改め、內務部に內務部長・警察部に警察部長を置き、之が長たらしむるに及び、本縣は同月十七日、內務部に五課を置き、各課分掌したりしが、同年十一月七日、處務細則を改正せり。其分課は次の如し。

知事官房　　秘書係・文書係。

內務部　　庶務課・土木課・學務課・農務課・商工課・會計課。

警察部　　警務課・保安課・衛生課。

明治四十四年九月廿七日、內務部農務課を農林課・商工課に分ち、警察部に特務課を設け、高等警察に關する事務を掌らしむ。明治四十五年五月廿七日、農林課・商工課を合併して、勸業課と改めたるが、大正二年二月十日、再び分轄して、農務課・商工課となす。大正二年六月十四日、警察部中特務課を高等警察課に改む。大正三年三月十八日、統計事務に關する規定を設けて、之を內務部庶務課に統一す。從來は各主務課に於て取扱ひ來りしを、玆に於て統一したるなり。大正四年四月一日、兵事・社寺に關する事務を學務課に移す。大正七年一月廿一日、處務細則を改定し、分課分掌左の如くす。

知事官房　　秘書係・文書係。
内務部　　地方課・土木課・學務課・農務課・蠶絲商工課・會計課。
警察部　　警務課・保安課・衞生課。

大正十一年七月五日、警察部内に高等警察課・工場課（汽罐・汽機・石油及び瓦斯發動機、並に勞務者募集に關する地方事務を管掌す。）を特置せり。十二年一月十六日、學務課の次に社會課を設け、蠶絲商工課を蠶絲課・商工課に分離せり。大正十三年一月廿六日、林務課を設け、農務課より山林・鑛山に關する事務を分掌せしめたり。かくて大正十五年六月、地方官々制の改正に伴ひ、廳訓第一號を以て群馬縣廳處務細則を改正せり。此改正に據れる廳内分課は左の如し。

一知事官房　　秘書係・文書係・統計係。
二内務部　　地方課・土木課・農務課・林務課・蠶絲課・商工課・會計課。
三學務部　　教育課・社寺兵事課・社會課。
四警察部　　高等警察課・警務課・保安課・衞生課・工場課。

而して縣官の職制は、大正二年六月の改定に據り、知事・内務部長・警察部長・理事官・警視・技師（以上、奏任）視學・屬・警部・技手・通譯・警部補に分ち、定員を置かれたるが、後工場

監督官補・小作官・小作官補を追加せられ、大正十三年十二月の改定、及び其後一部の改正に據り、本縣職制及び定員を記さば、

| 官職 | 任 | 定員 | 等級 |
|---|---|---|---|
| 知事 | | 一人 | 勅任 |
| 書記官 | | 三人 | 奏任 |
| 地方事務官 | 專任 | 三人 | 奏任 |
| 地方警視 | 專任<br>警察署長 | 一人<br>三人 | 奏任 |
| 地方小作官 | 專任 | 一人 | 奏任 |
| 地方技師 | 專任 | 六人 | 奏任 |
| 視學 | | 二人 | 判任 |
| 屬 | 專任 | 四一人 | 判任 |
| 警部 | 專任 | 二九人 | 判任 |
| 技手 | 專任 | 二四人 | 判任 |
| 警部補 | 專任 | 三〇人 | 判任 |

にして、書記官一人は內務部長、一人は警察部長に補せられ、部長ならざる他の書記官一人は視學官に補せらるゝことゝなれり。而して縣廳內に、左の如き待遇者あり

奏任官待遇

| | | | |
|---|---|---|---|
| 道路技師 | 六 | 土木技師 | 二 |
| 衛生技師 | 五 | 防疫醫 | 一 |
| 地方農林技師 | 二七 | 地方商工技師 | |
| 測候技師 | 一 | | |

判任官待遇

| | | | |
|---|---|---|---|
| 道路書記 | 二八 | 道路技手 | 七一 |
| 土木書記 | 四 | 土木技手 | 二五 |
| 衛生主事補 | 二 | 衛生技手 | 一一 |
| 防疫醫 | 一 | 防疫監吏 | 二 |
| 工場監督官補 | 三 | 測候技手 | 八 |
| 測候書記 | 二 | 農林技手 | 一七七以内 |
| 商工技手 | 二 | 農林主事補 | 四四以内 |

# 第三章　歷代地方長官及次官

## 第一節　長官

明治元年六月、大音龍太郎の攝知縣事たり以來、歷代長官は左表の如し。

| （任命年月日） | （官職） | （氏名） | （轉免年月日） | （事由） | （在職年月） | （備考） |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 明治元、六、一七 | 攝知縣事 | 大音厚龍 | 明治元、一二、七 | 罷免 | 五ヶ月二十日 | 岩鼻縣 明治元、六、一七置 同四、一〇、二八廢 |
| 同　一二、七 | 知事 | 小室彰 | 同　三、五、二三 | 任德島藩大參事 | 一年五ヶ月一六 | |
| 同　三、八、二 | 同 | 中島錫胤 | 同　四、一、一〇 | 罷免 | 五ヶ月十日 | |
| 同　四、一、一五 | 同 | 青山貞 | — | | | |
| 同　一一、二 | 權令縣令 | 同人 | 同　五、一一、二 | 罷免 | 一年九ヶ月一九 | 群馬縣 明治四、一〇、二八置 同六、六、一五廢 進令月日不詳 |
| 同　六、二、七 | 縣令 | 河瀨秀治 | — | 七、一、一〇、任內務大丞兼縣令 | | |
| 同　六、一五 | 同 | 同人 | 同　七、七、一九 | 七、一九罷兼任 | 十一ヶ月三〇日 | 熊谷縣 明治六、六、一五置 同九、八、二一廢 |
| 同　七、七、一九 | 權令縣令 | 楫取素彥 | — | 九、四、四進令 | | |
| 同　九、八、二一 | 縣令 | 同人 | 同一七、三、三〇 | 任元老院議官 | 九年八ヶ月三 | 群馬縣 明治九、八、二一 |
| 同一七、七、三〇 | 縣令知事 | 佐藤與三 | 同　二四、四、九 | 非職 | 六年八ヶ月九 | 明治一九、七、二〇（十二日付）官制改正知事トナル |

| 任命年月日 | 官職 | 氏名 | 退任年月日 | 事由 | 在任期間 |
|---|---|---|---|---|---|
| 明治二四、四、九 | 知事 | 中村 元雄 | 明治二九、二、二八 | 諭旨免官 | 四年九月二〇日 |
| 同二九、二、二八 | 同 | 阿部 浩 | 同二九、八、一二 | 任千葉縣知事 | 六ヶ月一六日 |
| 同 八、一二 | 同 | 石坂 昌孝 | 同 三〇、四、七 | 非職 | 七ヶ月二七日 |
| 同 三〇、四、七 | 同 | 古莊 嘉門 | 同三一、七、二八 | 非職 | 一年三ヶ月二一日 |
| 同三一、七、二八 | 同 | 草刈 親明 | 同 一一、二三 | 免官 | 四ヶ月二六日 |
| 同 一一、二三 | 同 | 古莊 嘉門 | 同三三、一〇、三一 | 任三重縣知事 | 一年一〇月三〇日 |
| 同三三、一〇、三一 | 同 | 小倉 信近 | 同 三四、四、二 | 任司法省官房長 | 五ヶ月二日 |
| 同 三四、四、二 | 同 | 關 清英 | 同 三五、二、八 | 任長野縣知事 | 一〇ヶ月七日 |
| 同 三五、二、八 | 同 | 鈴木 定直 | 同 一〇、四 | 任滋賀縣知事 | 七ヶ月二五日 |
| 同 一〇、四 | 同 | 吉見 輝 | 同三九、七、二八 | 休職 | 三年九ヶ月二四日 |
| 同三九、七、二八 | 同 | 有田 義資 | 同四〇、一一、六 | 依願免官 | 一年三ヶ月一〇日 |
| 同四〇、一一、六 | 同 | 南部 光臣 | 同四一、八、二九 | 休職 | 九ヶ月二四日 |
| 同四一、八、二九 | 同 | 神山 閏次 | 同四五、三、二八 | 休職 | 三年七ヶ月 |
| 同四五、三、二八 | 同 | 依田銈次郎 | 大正元、一二、三〇 | 休職 | 九ヶ月三日 |
| 大正元、一二、三〇 | 同 | 黑金 泰義 | 同 二、六、一 | 休職 | 五ヶ月三日 |
| 同 二、六、一 | 同 | 大芝 惣吉 | 同 三、四、二八 | 休職 | 一〇ヶ月二八 |
| 同 三、四、二八 | 同 | 三宅源之助 | 同 六、九、二六 | 任德島縣知事 | 三ヶ年五ヶ月二六 |

大音厚龍

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 大正六、九、二六 | 同 | 中川友次郎 | 同　八、六、二八 | 任製鐵所次長 | 一年一〇ヶ月二 |
| 同　八、六、二八 | 同 | 大芝　惣吉 | 同一一、一〇、一六 | 任宮崎縣知事 | 三年四ヶ月一九 |
| 同一一、一〇、一六 | 同 | 山岡　國利 | 同一三、七、二三 | 任三重縣知事 | 一年一〇ヶ月七 |
| 同一三、七、二三 | 同 | 牛塚虎太郎 | 同一五、一二、二八 | 任宮城縣知事 | 二年四ヶ月二七 |
| 同一五、一二、二八 | 同 | 百濟　文輔 | 昭和二、五、一七 | 任奈良縣知事 | 五ヶ月 |
| 昭和二、五、一七 | 同 | 縣　忍 | | | |

（官房祕書係藏
退官者索引簿）

、右の中、縣廳文書に見えたるもの丶略歴を左に掲ぐ。其漏れたるは他日之が増補に竢たん。

大音厚龍、通稱は龍太郎。弘化三年、江州伊香郡大音村（彦根領）に生る。弱冠にして彦根領なる上州群馬郡矢原の龍門寺に來り、住職再龍に就いて學ぶ。後江戸に出でて修學す。時會〻幕末に臨み、勤王志士京師に蝟集す。龍太郎乃ち上京して、岩倉具視の知る所と爲り、明治元年、擢でられて上野巡察使に擧げらる。其任地に赴くや、監軍等と計り、小栗上野介を烏河畔に斬る。是年六月十七日、岩鼻縣攝知縣事と爲る。時に年廿三。其縣政に於ける、嚴酷を極め、道路目を側てゝ震慄す。在職僅に七箇月にして罷めらる。其後大藏省書記官と爲る。明治十年、西南の役起るや、濳に西鄕隆盛に聲息を通じ、事顯れて軍律に問はれ、終身官途に就くを禁ぜらる。爾來不遇に沈淪し、上毛に漂遊せしこと

ありしも、容れられず、大正元年十一月廿三日、東京に卒す。年六十八。（縣文書・人物志）

楫取素彦、名は志毅、字は希哲、畊堂と號す。舊稱は小田村素太郎、又は文助。明治に至り改姓すと云ふ。長藩の醫松田誠成が次男なり。文政十二年三月生る。後小田村なる藩儒某の家に養はる。初め藩黌明倫堂に學び、江戶に出でて、安積艮齋の門に入る。元治元年十二月、藩論沸騰するの際、反對黨の爲めに投獄せられしが、慶應元年二月、出獄するを得たり。同年幕府再び長州を征するや、長軍山田顯義等と與に、之を破る。時に長藩宍戶備後介、總督軍目付と廣嶋に於て談判を開始す。素彦、宍戶に副たり。翌二年六月、談判破裂して、素彦等捕へられて、獄に投ぜらる。後赦されて、長州に歸る。三年朝廷藩主を召す。素彦其先發と爲り、上京して公卿諸侯の間に奔走す。明治五年、足柄縣參事に任じ、次いで熊谷縣權令と爲り、九年四月、縣令に進む。八月熊谷縣を廢して、群馬縣を再置するに及び、群馬縣令と爲る。十七年三月、元老院議官と爲り、在職九年八箇月餘にして、本縣を去る。其本縣在職中の治績は、前橋公園に建てられたる功德碑に依りて、其大要を知るを得べし。

前群馬縣令楫取素彦君功德碑

今元老院議官楫取君之令二于群馬一也、勤儉以涖レ下、忠誠以奉レ上、休二養民力一、宣二布德敎一、風移俗易。君已去而士民翕然謳吟弗レ已。於レ是合レ辭謁レ予、以二功德之碑一爲レ請。且曰、上野自レ古稱二難レ治一。其民慓悍輕佻。臨時躁急無二老成持久之實一。君初至、首張二學政一、以レ示二敎化之不レ可

忽。而世方模倣泰西學術、專偏智育。加以剽輕之俗、其極竟爲虛誕妄進。犯上凌長之風漸長。君病之、導以忠厚質實、痛矯其流弊。無幾朝議更革學制、以德育爲最。智育體育次之。略如君所經畫。衆始服其先見焉。十二年學制復變。世謂之自由教育。君固執不可。既而地方教育果然解體。君獨免其害。官亦率復舊制。凡君於之學事、以身率衆、每郡吏訪廳、必先問學事。然後及他。郡吏亦至以興衰爲喜戚。君又用於心農桑。謂富強之術、在殖國產。縣尤以養蠶稱。而繭絲輸出海外者、悉假手外人、不能自往交易。其利多爲外人所壟斷。君募縣民有材幹者、投私材、助其資、航海直輸。群馬繭絲之名、頓躁海外、邦人直輸、實發端於此矣。其他設社倉、以諭蓄積之急務。獎勵醫學、以救縣民之疾病。搜訪古蹟、以彰先哲之逸事。諸如此類不一而足。嘗遇邑樂郡大谷林者。松樹鬱茂、連亘數十町。上杉氏遺臣大谷休泊所手植也。君乃往見其遠孫某於一陋屋中、稱以祖先功勞。傍觀者爲泣下。又言、君之在任十餘年。居常儉素、出入不駕馬車、惟修繕舊屋耳。而居之晏如。縣民慕君、如慈父母。臨去老幼遮路乞留。送者數千人、不勝悼惜之情。嗚呼君眞不愧古之良二千石者歟。因頌以辭。其辭曰、

詩詠甘棠。千載流芳。書揭風草。萬古斯光。振民育德　顯幽闢荒
彝倫已明　蔚起校庠　男服於耕　婦勤於織　老安少懷　既衣既食
有義有方　理平訟息　輿誦嘖々　噫是誰力　遺愛在里　何須生祠

頌美無已　弦見隆碑。

明治二十三年十月

元老院議官從四位勳四等文學博士　重野安繹撰

此他本縣三古碑の保存、文書の蒐集、史跡調査等、枚舉に遑あらず。明治十九年、高等法院判官に任ぜらる。後貞宮內親王御養育主任を仰付けられ、恪勤の聞え高かりしに、不幸內親王御早世あり。二十年五月、勳功に依り男爵を授けらる。三十一年、宮中顧問官に任ぜられ、從二位に陞叙す。後貴族院議員に勅選せられしが、四十四年病を獲て、郷里三田尻に歸臥し、八月十四日薨す。年八十四。其病篤きやの報、天聽に達するや、生前の勤勞に依り、特旨を以て正二位に叙し、勳一等瑞寶章を授けらる。（上毛及上毛人。）

佐藤與三

佐藤與三、もと與三左衛門と稱す。天保十四年八月廿三日、長州阿武郡萩平安湖町に生る。明治十七年六月、兵部少丞に任じ、從六位に叙す。九月、海軍大佐に任じ、兵部少丞を兼ぬ。十二月、正六位に叙す。五年二月、工部省五等出仕を仰付られ京阪に出張す。三月、鐵道助に任じ横濱に出張す。四月、燈臺權守に任じ、横濱に在勤す。六年一月、燈臺頭に進む。二月、從五位に叙す。九年六月、天皇東北に巡幸するや、御迎として明治丸に搭乘して、青森に出張す。七月、其功に依り、紅縮緬二匹、三重銀盃一組を賜ふ。十二月、鑛山權頭に任す。十年一月、工部大書記官に任じ、鑛山局長に補せらる。十三年十二月、內

國勸業博覽會審査部長仰付らる。十五年六月、勳五等に叙し、雙光旭日章を賜ふ。七月、參事院員外議官補を兼任す。八月、工作局長たり。十六年九月、總務局鑛山課長と爲り、品川硝子製造所長を兼務す。是月、工作局の殘務を取扱ふ。十一月、硝子製造所長兼務を免ぜらる。十七年七月、群馬縣令に任じ、勅任に進み、八月正五位に叙す。十八年四月勳四等に叙し、旭日小綬章を賜ふ。十九年七月、群馬縣知事に任じ、勅任官二等に叙す。十一月、從四位に叙す。廿一年五月、勳三等に叙し、旭日中綬章を賜ふ。廿六年二月、願に依り、本官を免ぜらる。縣廳文書。

中村元雄

中村元雄は大分縣豐後國日田郡豆田町の人なり。天保十年生る。明治元年六月、當分の內日田縣諸取調掛申付けられ、十月御雇を以て同縣調役と爲る。二年九月、同縣大屬に任ぜられしが、四年七月、同縣權大屬と爲る。十一月、日田縣を廢して大分縣を置くに當り、同縣十一等出仕たり。五年六月、大分縣大屬と爲る。六年五月、租稅寮九等出仕申付けられ、六月租稅權大屬に任ず。七年五月、同大屬に進み、八年七月、同寮七等出仕に補せらる。十年一月同寮を廢せらるゝに及び、大藏權少書記官に任じ、租稅局勤務申付けらる。十一年九月、大藏少書記官に進み、十四年六月、農商工上等會員仰付けらる。七月同權大書記官に進み、租稅局副長と爲り、十五年六月、書記局を兼務す。十七年五月、租稅局を廢せられ、二等主稅官に任じ、第三部長と爲る。十七年九月、一等主稅官に進み、十

石坂昌孝

古莊嘉門

月地方税日取調委員申付けらる。是月從五位に叙す。十八年十二月、獨逸・佛蘭西國へ差遣せらる。十九年三月、大藏省主税局長に任じ、四月奏任官一等に叙せらる。廿年勳四等に叙し、旭日小綬章を賜ひ、廿三年勅任官二等に叙し、從四位に進む。十二月勳三等瑞寶章を賜ふ。廿四年四月、群馬縣知事に任じ高等官二等に叙す。廿八年正四位に進み、廿九年一月、本官を免ぜらる。同月錦雞間祇候仰付らる。

石坂昌孝は東京府南多摩郡鶴川村大字野津田の人なり。天保十二年生る。明治十二年一月、神奈川縣會議員に當選し、尋いで縣會議長と爲る。十三年三月同議員を辭す。廿三年七月、同縣第三選擧區に於て衆議院議員に當選す。廿五年二月、同縣第三選擧區に於て、衆議院議員に當選す。廿七年三月、東京府第十三選擧區に於て、衆議院議員に當選す。九月同區に於てまた衆議院議員に當選す。廿九年八月、群馬縣知事に任じ、高等官二等に叙せらる。九月正五位に叙し、同月議員を辭す。三十年四月、非職を命ぜられ、九月本官を免ぜらる。

古莊嘉門は、熊本藩士なり。天保七年十二月生る。山口縣脫徒に黨與し、大樂源太郎を始め、數名の者を潛伏せしむ。既にして縛の其身に及ばんとするを察知し、逃亡して所々に隱匿す。後終に其非を悔い自首す。明治六年六月、不還徒の科例に問はれ、除族・禁獄三年を命ぜらる。七年二月、特旨を以て之を免ぜられ、三月、同縣司法省出張所の御

小倉信近

川にて、中國筋に出張す。五月、司法省七等出仕に補せられ、八年五月、大阪上等裁判所在勤仰付けらる。是月、七等判事に任ず。九月、正七位に叙せらる。十年六月、判事の等級を廢せらる。十一年十月、本官を免じ、位記返上を命ぜらる。十四年五月、內務省御用掛仰付けられ、監獄局事務取扱を申付らる。七月、監獄局事務取扱を免じ、取調局事務取扱を申付らる。十月、警保局事務取扱を申付られしが、十一月、御用掛を免じ、十二月、青森縣大書記官に任ぜらる。十七年二月、從六位に叙し、十九年一月、大分縣大書記官、七月書記官に任ず。二十年六月、第一高等中學校長と爲り、二十一年十二月、奏任官二等に陞叙す。二十二年五月、特旨を以て正六位に陞叙し、諭旨免官と爲る。二十八年五月、陸軍省雇員を命ぜられ、大本營附仰付けらる。是月、臺南縣知事心得を命ぜられしが、廿九年四月、臺灣總督府改政局事務官に任じ、內務部長を命ぜらる。七月、正五位に叙せらる。三十年四月、群馬縣知事に任じ、十二月、勳四等に叙し、瑞寶章を賜ふ。卅一年七月非職、九月免官と爲りしが、十二月、また群馬縣知事に任じ、三十三年十月、三重縣知事に轉任す。

小倉信近、舊稱は新太郎。嘉永二年四月廿二日、米澤に生る。明治五年九月、海軍少尉に任じ、歩兵局分課を申付けらる。六年七月、中尉心得に進み、一番小隊附と爲る。七年二月、本官を免ぜらる。六月、海軍省十三等出仕に補し、水兵本部分課申付けられ、又事務課申付けらる。八年四月、海軍少尉に任じ、歩兵課仰付けらる。十月、海兵士官學校出勤

仰付けられしが、九年三月、本官を免ぜらる。是月、愛知縣三等警部に任じ、代言人試驗掛申付けらる。十二月、同縣權中屬に任じ、第一課申付けらる。十年一月、同縣六等屬に任じ、七月、六等警部に轉じ、半田・師崎・東端三分署長を申付けらる。十一月、五等警部に進み、一宮警察署長に補せられ、同署駐箚治罪係長兼務を命ぜらる。同月、三等副獄司兼務を命ぜらる。十三年一月、石川縣五等警部に轉任し、警察文書係兼庶務係と爲り、三月第一部長を命ぜらる。四月、金澤警察署長を兼ね、八月、四等警部、十四年三月、三等警部に累進し、五月石川縣副典獄を兼任し、監獄本署長兼警察本署副長を命ぜらる。十二月、同縣二等警部兼典獄に任ず。十五年三月、同縣警部長に任ず。四月依願本官を免ぜられ、內務省御用係仰付けられ、警務局事務取扱を命ぜらる。七月、東京檢疫局幹事を申付らる。十二月、德島縣警部長に任ぜられしが、十六年二月、依願本官を免ぜられ、內務省御用係を仰付られ警保局事務を取扱ふ。五月、青森縣警部長に任ぜられ、六月、從七位に叙す。十九年十一月、正七位に陞叙。二十年五月、檢事に任じ、東京控訴院詰を命ぜらる。廿三年八月、高知縣始審裁判所詰、十月、高知縣裁判所檢事正たり。十二月、勳六等に叙せられ、瑞寶章を賜ふ。廿五年二月、從六位に叙せらる。八月警視に任じ、警視總監官房第一部長に補せらる。廿六年十一月、內務省第一部長に補せられ、廿七年、陸軍省大本營附仰付けられしが、翌年五月、之を免ぜらる。十月、勳五等に叙し、雙光旭日章を賜ふ。廿九年四月、

福島縣知事に任じ、高等官二等に進み、五月、正五位に叙せらる。十二月、非職仰付られ、三十年二月、依願本官を免ぜらる。四月、從四位、六月嘉義縣知事に任ぜられしが、三十一年三月、依願免官と爲る。八月、山形縣より衆議院議員に選出せらる。三十三年一月、三重縣知事に任ぜられ、十月群馬縣に轉じ、十一月、衆議院議員を辭す。三十四年四月、司法省官房長に任じ、高等官一等に叙せらる。

關清英

關清英は、舊佐賀藩士なり。嘉永四年五月七日生る。明治元年三月、司法省十二等出仕に補し、長崎上等裁判所檢事局に在勤す。八月四級檢事補に任ぜらる。十年四月、九州臨時裁判所御用掛を命ぜらる。五月二級檢事補に任ぜられしが、六月官制改革ありて、七月檢事補に任ず。十一年八月、東京上等裁判所詰、十三年十月、大阪上等裁判所詰に在勤す。十四年五月、檢事に任じ、八月宮津支廳詰、十一月宮津始審裁判所詰、十六年十一月京都始審裁判所詰、十七年二月鹿兒島始審裁判所詰、廿三年十月鹿兒島地方裁判所檢事正に補せらる。廿四年十二月從六位、廿五年六月勳六等に叙し、瑞寶章を賜ふ。十二月仙臺地方裁判所檢事正に補せらる。廿八年十一月、高等官三等に陞り、廿九年一月從五位、六月勳五等に叙せらる。十月、名古屋地方裁判所檢事正に補せらる。三十一年十二月、佐賀縣知事に任ぜられ、高等官二等、卅二年二月正五位、六月勳四等叙せらる。三十四年、四月、群馬縣知事に任ぜられしが、卅五年二月、長野縣知事に轉任す。

鈴木定直

鈴木定直、通稱は半蔵。嘉永六年三月、日向國高鍋藩に生る。明治十年六月、警部補に任じ、新選旅團第一大隊第四中隊左半隊長を命ぜられ、九州地方に出張す。七月三等少警部に任ぜられしが、十一月御用濟につき解職せらる。十一年十月、兵庫縣十等警部に任じ、警察本署に在勤す。十二年九月、兵庫警察署に轉勤す。八月同縣八等警部に任じ、十四年二月、豐岡警察署長たり。十一月、七等警部に進む。十八年六月、本署第一部長たり。十九年四月、高知縣警部に任じ、五月、富山縣警部に轉す。十二月、同縣射水郡長に任す。廿二年三月、同縣警部長に任す。二十五年八月滋賀縣警部長。二十六年三月大阪府警部長に歴任す。廿七年二月從六位、廿八年十二月勳六等に叙せらる。廿九年一月高等官四等、二月正六位に陞り三十一年七月、依願本官を免ぜらる。九月、特旨を以て從五位に進む。十一月、警視に任じ、警視總監官房主事に補す。十二月、高等官三等に陞る。卅二年八月、大分縣知事に任じ、卅三年十二月、高等官二等に陞り、勳五等瑞寶章を授けらる。卅四年六月、內務省警保局長に任ず。卅五年二月、群馬縣知事に任じ、六月勳四等に叙せらる。十月滋賀縣知事に轉任す。

有田義資

有田義資は、佐賀の人、嘉永二年十二月廿五日生る。明治八年一月、內務省地理寮雇と爲り、文書掛諸務課を命ぜらる。六月、內務省雇に轉ず。九年三月、內務十五等出仕に補せられしが、十二月免官と爲る。十年三月、栃木縣八等警部に任じ、四月宇都宮に在勤す。

十一年十二月、宇都宮警察署在勤を命ぜらる。十二年四月同縣七等警部、十三年五月、六等警部、七月、五等警部に進む。十五年七月、警察本署第一部長兼第三部長を命ぜられしが、十二月第一部長を免ぜらる。十六年十二月、島根縣警部に任じ、十七年一月、同縣警察本署第四部兼第三部勤務を命ぜらる。是月、第二部兼第一部勤務に更めらる。八月、第一部長、十月、第三部長たりしが、十八年十二月、非職と爲る。十九年三月、福島縣警部に任じ、警察本署勤務を命ぜらる。八月、同保安課長たり。十九年九月、青森縣屬に任じ、庶務課長たり。廿年五月、同縣警部兼同縣屬たり。廿一年六月、同縣警部長に任じ、奏任官五等に叙せらる。廿三年三月、埼玉縣警部長に任ず。廿六年一月、警視に任じ、警視廳參事に補せらる。三月、福岡縣警部長に任ず。廿七年二月、從六位に叙す。廿八年三月、山口縣警部長に任じ、高等官五等、勳六等に叙せられ、瑞寶章を賜ふ。廿九年一月、高等官四等に陞り、島根縣書記官に任ず。三月、正六位に叙せらる。卅年四月、大分縣書記官に任じ、高等官四等に叙せらる。三十一年二月、高等官三等に陞り、四月、從五位に叙せらる。十二月、岡山縣書記官に任じ、高等官三等に叙せらる。三十二年六月、勳五等に叙し、瑞寶章を授けらる。卅三年四月、徳島縣知事に任じ、高等官二等に叙し、七月正五位に叙せらる。十月、福島縣知事に任じ、卅四年六月勳四等、卅八年六月勳三等に叙せられ、瑞寶章を授けらる。七月從四位に進む。三十九年、群馬縣知事に任ず。三十九年四月、旭日中綬章を

授けられ、四十年十一月、病の爲め依願本官を免ぜらる。

南部光臣、舊名は烏丸千佳之二。慶應元年二月廿五日、京都に生る。明治廿五年七月、帝國大學法科大學を卒業し、內務省試補を命ぜられ、土木局に勤務す。廿六年五月、南部甕男の養子と爲る。十一月、香川縣參事官に任じ、廿七年二月從七位に叙す。六月、內務書記官に轉任し、土木局に勤務す。廿八年、正七位に叙せられ、廿九年十月、從五位に進む。卅一年十一月、土木局長事務取扱を命ぜられしが、是月之を免じ、十二月、帝國大學工科大學講師を囑託せらる。卅二年十一月、高等官四等、卅五年二月、同三等に陞叙し、四月土木局治水課長と爲り、獨逸國にて開催の第九回萬國航海會議に、委員として參列を命ぜらる。卅六年一月、內務省土木局長に任ぜられ、卅七年二月、高等官二等、四月正五位に叙せらる。六月、休職仰付けらる。四十年十一月、群馬縣知事に任ぜられしが、四十一年八月、休職仰付らる。四十三年八月、宮內省御用掛仰付けられ、帝國林野管理局に勤務す。

神山閏次は、舊熊本藩の人。明治三年生る。明治廿八年七月、帝國大學法科大學政治科を卒業し、內務屬に任じ、縣治局市町村課に勤務す。十一月、文官高等試驗に及第し、廿九年五月、青森縣參事官に任じ、高等官七等に叙せらる。六月、內務部第一課長兼第三課長たり。七月、從七位に叙せらる。三十年六月、內務部第二課長臨時兼務、七月、第二課長及第五課長を命ぜらる。八月、司法大臣祕書官に任じ、大臣官房祕書課長たり。九月、司

黒金泰義

法省參事官を兼任し、民刑局に兼務す。卅一年四月、衆議院書記官に任じ、高等官六等に敍し、議長附を命ぜらる。五月、正七位に降る。十二月、内務省參事官を兼任し、警保局圖書課長たり。卅三年四月、高等官五等、六月、從六位に陞敍す。是月警保局圖書課長を免ぜらる。卅五年五月、休職を命ぜられ、衆議院より歐米視察の序を以て、議會事務取調囑託せらる。十二月復職し、祕書課長兼警務課長たり。卅六年三月、正六位に敍せらる。十月、農商務大臣祕書官兼衆議院書記官に任ず。卅七年、農商務省參事官を兼任す。十二月、高等官三等從五位に陞敍す。卅八年十一月、農商務省參事官兼農商務大臣祕書官に任ぜらる。兼衆議院書記官故の如し。十二月、農商務大臣祕書官を免ぜらる。卅九年一月、勳四等に敍し、旭日小綬章を授けらる。十一月、農商務省水產局長に任じ、十二月高等官二等に陞敍す。四十年二月、從五位に敍せらる。四十一年八月、群馬縣知事に任じ、高等官二等、四十三年勳三等に敍し、瑞寶章を授けらる。四十五年三月、從四位に敍せられ、休職と爲る。大正元年十二月、鐵道院理事に任ぜらる。

黒金泰義は、舊米澤藩士なり。慶應三年七月十三日生る。明治廿九年七月、帝國大學法科大學を卒業し、警視屬に任じ、第一部第二課兼警視總監官房第一課文書係に勤務す。三十年六月、同文書係に專勤す。十一月、文官高等試驗に合格し、警視廳警部に任じ、第二部第三課長たり。三十一年五月、警視に任じ、小石川警察署長たり。七月、京橋警察署長

兼深川警察署長に補せられしが、十二月神田警察署長に轉補せらる。卅三年五月、品川署長に轉ぜしが、間もなく山口縣警部長に任じ、高等官六等に叙す。卅五年七月、高等官五等、十二月從六位に進む。卅六年七月、栃木縣警部長に任じ、卅七年七月高等官四等、九月正六位に叙せらる。卅八年、警視に任じ、第二部長たり。卅九年四月、勳五等に叙し、双光旭日章を賜ふ。四月、依願本官を免ぜられしが四十年一月、北海道廳事務官に任じ、第五部長たり。七月高等官三等、九月從五位に叙せらる。四十三年四月、拓殖部長、四十四年八月庶務部長たり。大正元年十月、正五位、十二月勳四等に叙し、瑞寶章を授けらる。十二月群馬縣知事に任じ、高等官二等に叙せらる。大正二年六月休職と爲りしが、大正三年四月大分縣知事に任ず。

大芝惣吉

大芝惣吉は、山梨縣北巨摩郡熱見村の人なり。明治元年五月四日生る。明治廿三年七月、和佛法律學校を卒業し、十二月、代言人免許を受け、廿六年五月、辯護士と爲る。廿七年四月、判事に任じ、弘前區裁判所判事に補せらる、十二月檢事に任じ盛岡區裁判所檢事兼盛岡地方裁判所檢事に補せらる。卅二年一月、秋田地方裁判所檢事、卅三年十二月、大津地方裁判所檢事、卅四年三月、東京地方裁判所檢事、十月八王寺區裁判所檢事に轉じ、卅六年六月、東京地方裁判所檢事を兼ねしが、十二月、東京事補と爲る。卅八年四月、大分地方裁判所檢事に轉じ、高等官四等勳六等に叙し、瑞寶章を授けらる。四十一年三月、佐賀

縣事務官に任じ、警察部長たり。四十二年五月富山縣事務官に轉任、警察部長たり。四十三年、高等官三等從五位と爲る。四十四年五月、福島縣事務官に任じ、内務部長に補せらる。大正二年六月、群馬縣知事に任じ、八月正五位に叙せられ、十二月勳四等と爲る。三年四月、依願本官を免ず。五月從四位に叙し、十一月旭日小綬章を授けらる。六年十二月、佐賀縣知事に轉じ、高等官二等に叙せらる。八年四月、休職と爲りしが、六月群馬縣知事に任じ、九年九月、高等官一等に進み、十月勳三等に叙し、瑞寶章を授けらる。十一年十一月、宮崎縣知事に轉ず。

三宅源之助

三宅源之助は香川縣仲多度郡廣嶋村大字手嶋の人なり。明治七年生る。高等小學校卒業の後、明治廿四年、香川縣高等小學校教員檢定試驗に及第し、多度郡吉原小學校教員に任ぜられ、廿五年、那珂郡廣嶋南尋常小學校教員に轉任す。廿六年職を辭し、廿八年十一月、辯護士試驗に及第し、其業に從事す。三十年十一月、文官高等試驗に合格し、翌月内務屬に任ぜられ、北海道局兼縣治局市町村課勤務を命ぜらる。三十一年八月、鹿兒嶋縣參事官に任じ、内務部第一課長兼第三課長を命ぜらる。三十六年四月、愛媛縣參事官に轉ず。三十八年四月、同縣事務官に任じ第三部長に補せらる。十一月高等官四等正六位に陞叙せらる。三十九年一月、鹿兒島縣事務官に任じ、第一部長に補せらる。四十年七月、内務部長に補せられ、次いで高等官三等と爲り、從五位に叙せらる。六月埼玉縣

事務官に任じ、內務部長に補せらる。四十五年六月、勳四等に敍し、瑞寶章を授けらる。大正二年六月、熊本縣內務部長に任す。三年四月、群馬縣知事に任じ、高等官二等に敍せらる。六年勳三等に敍し、瑞寶章を授けらる。同年九月、德島縣知事に轉す。

中川友次郎

中川友次郎、舊姓は井關、石川縣人なり。明治六年四月一日生る。明治三十年七月、東京帝國大學法科大學法律科第一部を卒業し、內務屬に任じ、縣治局に勤務す。十一月、文官高等試驗に合格、三十一年二月社寺局を兼勤す。六月、造神宮主事兼內務事務官に任ぜられ、高等官七等に敍せらる。十一月、內務書記官を兼任す。十二月、古社寺保存會幹事たり。三十二年四月、內務省參事官に任じ、社寺局に勤務す。同局神社課長たり。卅三年三月、高等官六等に進む。四月、宗教局に勤務す。又神社局第一課長兼第二課長たり。卅五年五月、高等官五等、九月、從六位、卅七年六月、高等官四等、八月、正六位に陞る。卅八年四月、高知縣事務官に任じ、第一部長に補せらる。八月山林局監督官兼農商務省參事官に任す。十一月山林局監督課長兼山林局審査課長を命ぜらる。三十九年三月兼官を免ぜられしが四月山林局書記官兼農商務省參事官に任す。四月再び監督課長兼審査課長と爲り勳五等に敍し雙光旭日章を授けらる。十二月高等官三等に陞り四十年二月從五位に敍せらる。八月農商務省山林局長に任じ四十一年八月法制局參事官に轉す。四十三年四月行政裁判所判事を兼任し高等官二等と爲り六月正五位に陞敍

山岡國利

す九月臺灣總督府財務局長に轉じ四十四年六月勳四等に敍し瑞寶章を授けらる。大正四年二月勳三等に敍し四月大禮使事務官仰付らる。七月從四位に敍せらる六年九月群馬縣知事に任じ高等官一等と爲る。八年、六月、製鐵所次長に轉任す。

山岡國利は舊氏名を奥堅政と曰ふ。鹿兒島市の人なり。明治十五年生る。四十二年、東京帝國大學法科大學を卒業し、八月山形縣屬に任ぜられしが、自己の便宜に依りて、翌年九月、官を辭す。十月再び任官して、山形縣試補と爲り、十二月、警視に任ぜらる、四十三年十一月、文官高等試驗に合格す。四十四年九月、農商務大臣祕書官に任じ、高等官六等に敍せられ、十二月、同省參事官を兼ぬ。大正元年十二月、山林局書記官に任ず。兼官故の如し。二年六月、特許局審査官に任じ、八月、同局事務官を兼ぬ。三年六月、三重縣理事官に任じ、視學官に補せらる。九月、高等官五等に陞る。五年三月、同縣警察部長に任じ、十一月高等官四等に陞り、十二月、正六位に陞敍す。六年一月、福岡縣警察部長に轉じ、八年二月、高等官二等に陞る。三月、從五位に敍せられ、四月、兵庫縣警察部長に轉ず。九年十一月、勳四等に敍し、瑞寶章を授けらる。十年六月、休職と爲り、八月、瑞西國ジウネーブに於て開催の國際聯盟總會第二囘會議に於ける帝國代表者隨員を命ぜらる。十一年六月、內務事務官に任じ、內務監察官を兼ぬ。同月、內務省參事官を兼ね、土木局河川課長たり。七月、正五位に敍せらる。十一年十月十六日、群馬縣知事に任ぜられしが、十三

年七月二十三日、三重縣知事に轉任す。

牛塚虎太郎は富山縣射水郡水戸田村大字藤卷の人なり。明治十二年生る、明治三十八年七月、東京帝國大學法科大學政治科を卒業し、八月、遞信省屬に任す。十一月、文官高等試驗に合格し、商船學校敎授を兼ね、地方海員審判所判官たり。四十年十二月遞信書記官に任じ、商船學校敎授に任じ遞信書記官を兼ぬ。四十一年一月、內閣書記官に任す。四十三年二月、高等官五等に陞り、三月從六位、六月勳六等に敍し、瑞寶章を授けらる。十二月、臨時制度整理局幹事を仰せ付けらる。四十五年二月、高等官四等に陞り、三月正六位に敍せらる。大正元年七月、大喪使事務仰付けらる。十二月、臨時制度整理局廢せらるゝに及び、勳五等に敍し、雙光旭日章を授けらる。二年七月、故元帥威仁親王葬儀使を仰付けらる。大正三年三月、高等官三等に陞り、三年四月、從五位に敍せらる。四月、內閣記錄課長を命ぜらる。四年四月、大禮使事務官仰付けらる。五年一月、勳四等に敍し、旭日小綬章を授けらる。五年四月、內閣統計局長に任じ、高等官二等に敍せられ、四月勳三等に敍し、旭日中綬章を授けらる。五月正五位に陞る。十月、行政裁判所評定官を兼ぬ。五月、臨時國勢調査局次長を兼ぬ、八年五月國勢院部長に任じ、行政裁判所評定官を兼ぬ。九年八月、高等官一等に陞り從四位に敍せられ、十二月勳二等に敍し、旭日重光章を授けらる。十一年十月、岩手縣知事に任じ、十三年七月二十三日、群馬縣知事に轉任す。

十四年十一月、正四位に陞り、十五年十二月十八日、宮城縣知事に任ぜらる。

百濟文輔は山口縣厚狹郡高千帆村の人なり。明治十六年生る。四十年七月、京都帝國大學法科大學を卒業し、十二月山梨縣屬に任ず。四十二年四月、同縣警部を兼ぬ。四十三年六月、同縣警部に任じ縣、屬を兼ぬ。十一月文官高等試驗に合格し、同縣警視に任じ、事務補を兼ね、高等官七等に叙せらる。四十四年同縣東山梨郡長に任じ、大正二年一月、高等官六等に陞り、二月正七位に叙せらる。七月關東都督府參事官に任じ、高等官六等と爲る。四月九月、同五等に進み、十二月從六位に叙せらる、七年高等官四等、五月正六位に陞る。九月大阪府事務官に任じ高等官四等に叙せらる。九年九月、三重縣警察部長に任じ、十月高等官三等に進み、十二月從五位に叙せらる。十年六月三日、群馬縣內務部長に任ぜらる。十一年三月、勳六等に叙せられ、瑞寶章を授けらる。十月十六日、愛媛縣內務部長に轉ず。十二年十月、東京府產業部長に任じ、十三年六月、同府內務部長たり。(高等官二等。)十一月產業部長を兼ぬ。十二月同府書記官に任じ、內務部長に補せらる。十四年十月、北海道廳部長に任じ、十二月勳五等に叙し、瑞寶章を授けらる。十五年六月、勳四等に進む。十二月十八日、群馬縣知事に任ぜられしが、昭和二年五月、奈良縣知事に轉任す。

# 第二節　次官表

## 書記官内務部長表

| （任命年月日） | （官職） | （氏名） | （轉免年月日） | （事由） | （在職年月日） | （備考） |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 明治一〇、一、二七 | 大書記官 | 岸良俊介 | 明治一三、一一、二五 | 任内務少書記官 | 三年一〇ヶ月 | 明治十年一月十六日參事以下を廢し大小書記官の内一人を置く（一九、七、二〇、十二、一日付）書記官二人を置き一部長二部長とす |
| 同　一三、一一、二二 | 同 | 森　醇 | 同　一九、七、三 | 任佐賀縣書記官 | 五、七、一一 | |
| 同　一九、七、三 | 書記官一部長 | 渡邊　清 | 同　二一、三、一六 | 任徳島縣書記官 | 一、七、一七 | |
| 同　二一、三、一六 | 同 | 森岡　眞 | 同　二三、三、一八 | 任熊本縣書記官 | 一、二、四 | |
| 同　二三、三、一八 | 同 | 伊志田友方 | 同　一〇、一一 | 非職 | 七、二三 | 明治二三、一〇、一一（十日付）書記官一人となる |
| 同　一一、一一 | 内務部長 | 佐藤　暢 | 同　二四、八、一六 | 任内閣書記官 | 一〇、七 | |
| 同　二四、八、一六 | 同 | 島田宗正 | 同　二六、三、三一 | 任富山縣書記官 | 一、七、七 | |
| 同　二六、三、三一 | 同 | 荒川義太郎 | 同　二七、一二、一五 | 任神奈川縣書記官 | 一、八、一五 | |
| 同　二七、一二、一五 | 同 | 武田千代三郎 | 同　二九、一二、二六 | 任兵庫縣書記官 | 二、〇、一一 | |
| 同　二九、一二、二六 | 同 | 薄　定吉 | 同　三〇、四、二六 | 任山梨縣書記官 | 〇、四、二 | |
| 同　三〇、四、二六 | 同 | 永井　環 | 同　三一、七、二五 | 任北海道廳事務官 | 一、三、〇 | |
| 同　三一、七、二五 | 同 | 三橋勝到 | 同　三五、一〇、四 | 任廣島縣書記官 | 四、二、一〇 | |

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 明治三[illegible]、一〇、四 | 事務官 | 一部長 | 青木良雄 | 同 三八、六、三 | 任三重縣事務官 | 二、八、一[illegible] | 九、事務官四人を置き四部に分つ |
| 同 三八、六、三 | 事務官 | 一部長 | 堀信次 | 同 三九、七、二八 | 任東京府事務官 | 一、一、二六 | |
| 同 三九、七、二八 | 同 | 一部長兼三部長 内務部長 | 相良歩 | 同 四一、四、二一 | 任宮城縣事務官 | 一、八、二六 | 明治四〇、七、一三、四部を廢し内務警察の二部となす |
| 同 四一、四、二一 | 同 | 内務部長 | 今野東吾 | 同 一〇、九 | 休職 | 〇、五、一九 | |
| 同 一〇、九 | 同 | 同 | 佐藤孝三郎 | 同 四五、三、一 | 任秋田縣事務官 | 三、三、二四 | |
| 同 四五、三、一 | 同 | 同 | 石井謹吾 | 大正元 一二、三〇 | 休職 | 〇、二、〇 | |
| 大正元 一二、三〇 | 事務官 内務部長 | 内務部長 | 横田郷助 | 同 四、七、一 | 任三重縣内務部長 | 二、六、三 | 大正二、六、一三事務官を内務部長に改む |
| 同 四、七、一 | 内務部長 | — | 渡邊忠壽 | 同 五、六、二 | 任兵庫縣内務部長 | 〇、一一、一 | |
| 同 五、六、二 | 同 | — | 窪谷逸治郎 | 同 八、四、一九 | 休職 | 二、九、一七 | |
| 同 八、四、一八 | 同 | — | 馬場一衞 | 同 一〇、六、三 | 任警視廳刑事部長 | 二、一、一七 | |
| 同 一〇、六、三 | 同 | — | 百濟文輔 | 同 一一、一〇、一六 | 任愛姬縣内務部長 | 一、五、一三 | |
| 同 一一、一〇、一六 | 同 | — | 杉野繁 | 同 一三、六、二七 | 任栃木縣内務部長 | 一、九、一一 | |
| 同 一三、六、二七 | 同 | — | 板東義雄 | 同 一三、一二、一九 | 廢官 | 五、二四 | |
| 同 一三、一二、二〇 | 群馬縣書記官 | 内務部長 | 落合慶四郎 | 同 一五、九、二八 | 任石川縣書記官 補内務部長 | 一、一〇、七 | |
| 同 一五、九、二八 | 同 | 同 | 土居通次 | 昭和二、五、一七 | 任福井縣書記官 補内務部長 | 七、一九 | |
| 昭和二、五、一七 | 同 | 同 | 大森佳一 | | | | |

# 第四章　地租改正

## 第一節　改租の經過

本縣の地租改正は明治九年一月に着手し同十四年五月に至りて整頓す。是より先き明治六年七月二十八日、上諭を以て地租改正法を全國に頒布せられ、越えて明治八年三月、地租改正事務局を内務・大藏兩省間に設置し、改正に關する一切の事務を管掌せしめらるゝに及び、各地の情勢を審按し、前途の得失を考量し、明治九年を以て、一般整頓の期と定む。是に於て本縣は明治八年十月三十一日、先づ地租改正着手心得書を令達し、同十二月九日、地租改正期限確定に付き、測量最好の時期を逸せざる樣、左の訓令を發せり。

來ル明治九年ヲ以テ、一般地租改正期限ト確定相成候ニ付テハ、差向實地精覈取調ヲ急務トス。然ルニ季旬ニヨリ、耕地作毛有之候テハ、障碍筋不少儀ノ處、幸日下諸作收穫濟、測量地最好ノ季節ニ觸ヒ候テ、徒ニ經過候テハ不相成候間、早々着手、可成速ニ落成候樣、盡力可致候。尤疑團ノ廉ハ、豫質問、調向退歩無之樣注意、且村境丈

量ノ節ハ、村吏直ニ立會、後日不都合無レ之樣可レ致事。

同月十二日、地租改正に付き、人民心得書十五條を布達せり。其第一條に曰く、

今度管内一般地租改正調査に付テハ、第一土地ノ境界ヲ明ニシ、隨テ收穫地價調方ノ順序ニ可レ及。然ルニ從前用來候反別ハ、往古ノ檢地帳或ハ名寄帳ニ據リ候事ニテ、檢地ハ土習ニ寄リ、地租ヲ量ルニ種々ノ方法アリ、其制ヲ異ニシ、名寄ハ村方限リ調タル帳簿ナレバ、誤リ來レルモノ少カラズ。且年曆ヲ經、天災地變等ノタメニ、帳簿上ト實地ト大ニ相違シ、或ハ廣ク或ハ地詰リニナリ來レルモノ多ケレバ、御規則第二則ノ通リ、是迄ノ帳簿ニ據ル時ハ、地ノ廣狹適實ナラズ。陰ニ地價ノ昂低ヲナシ、其相當ヲ失ヒ候ニ付、現今所有スル處ノ步數ヲ、更ニ精密ニ取調、別記雛形ノ振合ニ、字一筆限リノ地引繪圖ヲ製シ、而シテ一村ノ總繪圖ヲ仕立、之ヲ以テ根本トシ、諸事取調可レ致事。

同月二十七日、更に戶長以下役員をして、勤續年限滿期に達するも、地租改正事務の進行に頓挫なからしめんとせり。而して翌九年一月には、地租改正に關する告諭書を諭達して、趣旨徹底に努むる所ありたり。

改租の旨告諭書　　明治九年一月

夫租稅ハ國用ヲ足シ、非常ニ備ヘ、良民ヲ保護安寧ナラシムルノ基本ナリ。故ニ國アレバ必ズ稅アル所以ニシテ、不可欠モノトス。然ルニ舊來地租ノ方法整一ナラズ、尋テ民ニ寬苦アツテ、其平ヲ得ズ。是レ全ク封建制度ノ偏執ニ生スル者ニシテ、其謂ハ領主地頭ノ適宜ヲ以テ租稅ヲ定メ、甲領部內ノ民ハ輕租ニシテ、逸樂ヲ極ムルモ、乙領ニ屬スル民ハ、苛斂ニシテ困迫ヲ極ムルニ至ル。是卽チ改正ノ議起ル所以也。抑檢地ノ方法タル、土地ノ肥瘠ニ應ジ、容易ニ之ヲ取調、吏員ノ見込ヲ以テ土地ヲ丈量シ、繩ノ伸縮ニ由リテ之ヲ斟酌シ、反別ヲ定ムルモノニシテ、實地ノ變轉モ之ヲ更正セザル者アリ。加之、檢地施行ノ年度亦先後アツテ、昔日ノ檢地ハ寬ニシテ、後年ハ嚴ナル等ノ弊ナキニシモアラズ。昔時鹵埆ノ地ナルモ、變ジテ沃饒ノ地トナリ、膏腴ノ地モ變シテ、瘠土トナルノ類比々皆然リ。而シテ只簿冊上地租反別ヲ舊ニ存シヲ、實地ノ變換ハ曾テ更正セズ。推シテ一村落ニ至ルモ、租ニ輕重アリ、民ニ寬苦アルヲ免レズ。故ニ狹窄高租ノ地ヲ有スル者ハ、朝ヨリ昏ニ至ルマデ汲々力耕スルモ、獲ル所ノ利ハ甚ダ微細ナリ。而シテ寬廣ノ地ヲ占メント欲スルモ、地價頗ル高貴ニシテ、力不能モノアリ。漸次貧困ニ至ル、亦勢ノ當然ナラズヤ。之ニ反シ寬廣輕租ノ地ヲ有スルモノハ、力ヲ勞スル少シテ、獲ル所ノ利饒ク、益富ヲ致ス所以。夫地租不公平ヨリ、人々甘苦ノ差アル如此。改正ノ擧徐々スベケン哉。

然リト雖沿習ノ久シキ、人々安シテ怪マズ、豈ニ維新ノ今日ニ當リ、特ニ萬國竝立ノ治ヲ期スルノ際、之ヲ不問ニ措ク可ナラン歟。故ニ今般地租改正被仰出ニモ、亦勢不可止也。蓋其御趣意ハ、日本全國ヲシテ稅法均一ナラシメ、地ニ輕重ノ稅ナク、民ニ甘苦ノ差ナカラシメントノ御仁惠ニ付、此旨ヲ厚ク奉戴シ、土地丈量其外諸事取調ノ際ニ臨ミ、御趣旨ニ不悖樣厚ク注意シ、私情ヲ去テ公義ニ就キ、萬事正廉ニ取調可致、萬一此旨ヲ不辨シテ、或ハ隱地致シ、或ハ道敷畦畔敷等驟ニ取込置、檢査濟ニ至リ、舊ニ復スル等ノ詐僞ヲ構造ス𪜈、實地官員派遣一度點檢セバ、發顯スベキ必然ニ有之。夫ガ爲メ再ビ調査スルニ至テハ、村方冗費ヲ重ネ、徒ニ官民共手數ヲ費ス迄ニテ、其損益スル所果シテ幾何ゾヤ。假令適詐僞ヲ一時ニ遂クルモ、比鄰ヨリシテ其不公平ヲ愬ヘ、他日相顯ルレバ、到底御趣旨ニ背反スルノミナラズ、品ニ寄リ隱田科律ニ擬セラレントス。文明日新ノ際、豈可耻ノ至ナラズヤ。故ニ必ズ私慾ノ念ヲ蓄藏セズ、萬事公平ヲ旨トシ、舊租甘苦ノ差ヲ辨ヘ、御改正ノ盛意ヲ奉シ、縣廳ノ辭令ニ乖戾セズバ、實ニ管下人民一般ノ幸福ニ非ズヤ。因テ豫此旨ヲ諭シ候條、心得違致間敷者也。（群馬縣布達全書。）

尋いで是月廿九日、地租改正御用係、各大區各ミ一名づつ、合計二十二名を任命し、（新田・山田・邑樂三郡は、當時栃木縣に屬せしを以て不詳。）三月に至りて、地租改正地主總代人を選定せしむ。其

主意とする所、改正事務の精確と進捗とを期するに在り。選定の方法は、各區正副區長を除き、所有反別壹町歩以上の總地主中より互選投票し、人數は二人以內とす。但山邊等の僻陬地に至り、所有反別壹町以上の者寡少なるに於て、該區の適宜を以て、或は反別壹反歩以上所持の總地主中より互選することを得しむることゝす。

是月重ねて地租改正成功期を遲延せざる樣諭達し、又土地丈量に付き、奸詐の所爲無之樣懇諭せり。而して同年四月十二日、管下に地租改正事務局を設置せり。其位置と管轄大區とは左の如し。

| 所在地（郡） | （町村） | （管轄大區） |
| --- | --- | --- |
| 佐位 | 伊勢崎町 | 北第十六、第十七 |
| 群馬 | 稻荷新田村 | 第二、第四 |
|  | 西明屋村 | 第六、第十 |
| 群馬 | 澁川村 | 第九 |
| 吾妻 | 大戸村 | 第二十 |
| 利根 | 沼田町 | 第十八、第十九 |

| 所在地（郡） | （町村） | （管轄大區） |
| --- | --- | --- |
| 群馬 | 前橋町 | 第一、第三 |
| 勢多 | 宮關村 | 第七、第八 |
| 多胡 | 吉井町 | 第五、第十三 |
| 綠野 | 藤岡町 | 第十四、第十五 |
| 甘樂 | 富岡町 | 第十一、第十二 |
| 碓氷 | 原市村 | 第廿一、第廿二 |

（附）北第五ハ支廳所在地ニツキ同廳ニテ管ス。

同年四月、地味等差調査の儀に就き内諭を達し、以て至仁の御趣旨に副はんことを期せり。

地租改正地味等差調査ノ義内諭　明治九年四月二十九日

地租改正ノ業タル、皆不容易件々タリ。故ニ土地丈量濟ノ上ハ、條件逐次可相違ト雖モ、就中地味ノ等差ヲ調査スル最至難タリ。若シ之ヲ均一ニセザレバ、至仁ノ御旨趣モ水泡ニ屬スルノミナラズ、人民ノ幸・不幸ヲ釀成候事ニ有之。因テハ之ヲ整一ニ歸セシムルハ、土地丈量ノ際ヨリシテ、反覆丁寧、實地ニ就キ土地ノ肥瘠ヲ明瞭ニシ、甲乙地味ノ良否ヲ視察セザレバ、自然等差ノ公平ヲ不得。雖然地味ノ良否ヲ視察スル甚難事ニ可有之、夫レ地味ノ厚薄タル、一村落中タリト雖、頗ル差違アリ。加之、地主耕耨、勉・不勉ニ依リテ、地味ヲ進ムルアリ、或ハ減スルアリ。故ニ之ヲ檢スル、諦視スト雖モ、一目ノ能ク盡ス所ニ無之。因テハ之ヲ區戸長（總代人、用係リ。）地主總代人・事務擔當人等ニ尋問商議セザルヲ得ズ。就テハ今般土地丈量ノ際ヨリシテ、正副戸長・事務擔當人（擔當人無之村ハ、正副戸長ニ於テ視察ス。）等ニテ商議評論シ、村中一筆毎ノ地味善否ヲ熟視比較シ（戸長並親族等ノ所有地ハ、之ヲ副戸長等ニテ良否ヲ視察シ、又副戸長等同斷ノ地ハ、戸長等ニテ視察比較シ、後日私ヲ蔽フノ異論ナカラシムルヲ要ス。）甲乙

地主ヲシテ不平ノ念ナキニ專ラ注意シ、副區長・地主惣代人トハ、各見込ヲ商議貫論シテ、其小區内甲乙村ノ土地良否ヲ(副區長居村、又ハ親類等多數有之村ハ、之ヲ總代ニテ視察シ、總代人同斷ノ義、副區長ニテ視察スルコト前ニ同ジ。)比較シ、各村幸・不幸ナカラシムルコトヲ專務トシ(武州ハ總代人兩名、上州ハ區長・用掛各一人、各村等ノ視察ハ前ニ同ジ。)各小區ヲシテ、後日遺憾ナカラシメン事ヲ專ラ注意シオキ、官員推問ノ際、各區劃中ノ景況ヲ辨明シ、管内一般整肅、朝旨ニ乖戾ナカラシメバ、庶幾クハ人民所有ノ地力ヲ展ベ、各ノ義務ヲ盡スニ至ラン。因テ前意ヲ了知シ、各區内正副戸長・擔當人等ヘ無洩懇々通達致シ、管内一般勉勵從事候樣可致。此旨及内達候也。

地租改正市街準市街宅地價調理心得書　明治十一年五月二十五日、内第十四號

正副戸長　地主惣代人

地租改正ノ儀ハ、從來適宜ノ租法ニシテ、寛苦アルノ弊ヲ憫ミ、之ヲ一洗シ、國内一般地租ヲシテ公平ナラシムベキ人民一視ノ御仁恤ニ出テ候ニ付、其趣旨ヲ體認、左ノ通リ相心得、地價調理方從事可致。此旨相達候事。

## 第二節　調査の概況

### 第一項　郡村地の調査

#### 一　地押丈量の概況

地順番號は、全村通じて番を用ひ、其順次列序は、整齊を要せり。一筆限の地圖は、地形と其量地せし縱橫の線とを畫し、其間數反畝步、及び字番號・持主姓名等を詳記せり。其一村圖は、全村內各字の地形と、其字名及び番號とを記入し、地押は丈量檢査の後、更に官吏をして每村每筆を精査せしむ。丈量は當初三斜法、及び分間略器製圖法を教授し、便宜量地をなさしめ、整了の後、官吏は每村に就て數筆を檢査し、其確實なるを認定せり。

#### 二　地價調査所用の穀價

地價調査所用の米麥價は、明治三年以降五箇年間、各地の時價を平均し、之を掛

酌して左表の額を用ひたり。

| （時價提査地名） | （米價） | （表價） | （所用區域） |
| --- | --- | --- | --- |
| 高崎町・前橋町・白井村・伊勢崎町・沼田町・大胡町・駒形驛・太田町・木崎驛・桐生新町・館林町・下小泉村・大戸村・布施驛・原市村・安中驛・新町驛・藤岡町 | 五、圓四五 | 一、八六 | 全管 |

## 三　地位收穫地價調査の概況

地位調査は、村內の等數凡十四等に止め、其各等間の差量、米麥（田方米 畑方麥）一斗五升を目的とすべきを布達す。此差率は模範組合上、及び全管聯絡上の等級に於ける、亦之を伸縮せしめず。地位詮評は、水利運輸、耕作の便否、水害の厚薄、地味米質の善惡等を含蓄折衷すべきを示せり。

地位の組織は、當初一郡中を便宜數箇に區分し、二十或は三十村を改租調理組合村とし、組合內一の模範村を選定し組合各村の地主總代・區吏員等をして、先づ村內一筆一地上の地位等級を議定せしめ、其組合中數村內各地等級は、模範村の等位に對照比準して、應當を得、尋いで彼此組合の接壤如何に推及し、順次組織し

て、竟に全管一體に聯絡し、以て彼此不平準なからしめたり。地位檢査は、純ら細觀を要せしを以て、全管每村每等之を實踐檢査せり。

收穫は現在の立毛に拘泥せず、各地平年穫らるべき收利を調理するを主とし、官吏每村に就き、最上・最下兩地の穫量を檢視し、之を村內各等に擬定し、積んで全管內の穫量を算出し、更に其得る所の穫量と、曩に達觀を以て豫定せし穫量とを對照詳議し、其適當と視認する所を以て、再び各地位に配分し、之を査定せり。利率は全管六分を用ふ。然れども山郭僻境、及び堤防用惡水路修繕費等夥多なる地に限り、六分五厘より七分まで、適宜斟酌して之を用ゐたり。宅地地價は、全管田畑一反當り地價を平均し、之が二割減を目的とし、尙各村の實況を酌量して、其應當を得しめたり。

以上の順序に由り、地價を算出し、地租を査定す。其成績は左の如し。

| (地目) | (改正反別) | (收穫、田方米・畑方麥) | | (地價) | | (地租) | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | (全額) | (一反當) | (全額) | (一反當) | (全額) | (一反當) |
| 田 | 町 二八六六五、六〇〇八 | 圓 三五九四九〇、五三二 | 圓 一、三五四一 | 圓 一六六五〇三二、八〇六 | 圓 五八、〇八四三 | 圓 四九九五〇六、六五四 | 町 一、七四三五 |
| 類外田 | 二七〇、五七一〇 | 五一六、七五三 | 〇、一九一〇 | 二二九三七、四六八 | 八、四七七四 | 六八八、一一九 | 〇、二五四三 |
| 畑 | 六六一六六、一七二四 | 六五四三〇六、三九七 | 〇、九八八九 | 一〇三一七〇八六、一三〇 | 一五、五九二七 | 三〇九五一三、五八八 | 〇、四六七八 |

| 郡名 | 上下等村名 | 反別（町） | 收穫麥 全額（圓） | 收穫麥 一反當（圓） | 地價 全額（圓） | 地價 一反當（圓） |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 碓氷 | 八幡 | 四六、〇八一三 | 七七五、五九九 | 一、六八三 | 三五九二、九六三 | 七七、九六五 |
| | 入山 | 四、八八一四 | 二七、七四五 | 〇、五六八 | 一三〇一、三〇四 | 二四、五九一 |
| 甘樂 | 中里 | 一三、一九〇〇 | 二〇一、〇一六 | 一、五二四 | 九三一二、〇六六 | 七〇、五九九 |
| | 西野牧 | 三、〇五一一 | 一〇、〇七七 | 〇、三三〇 | 四二四、三七九 | 一三、八九七 |
| 山田 | 荒金 | 三九、四一〇三 | 六五九、七四〇 | 一、六七四 | 三〇五六二、四五六 | 七七、五四八 |
| | 二渡 | 二、七八三五 | 二〇、八〇一 | 〇、七四六 | 九六三、六〇六 | 三四、五五八 |
| 新田 | 鶴生田 | 四六、九六三〇 | 八〇八、七六六 | 一、七三三 | 三七四六六、〇八六 | 七九、七七二 |
| | 金井 | 三三、五四一一 | 三三五、三七四 | 〇、九七〇 | 一五〇七二、九五一 | 四四、九三五 |
| 邑樂 | 秋妻 | 七三、七六一三 | 一三五三、三三三 | 一、七二一 | 五八〇一四、二八〇 | 七九、七二五 |
| | 離 | 三八、九六一八 | 七七、九三二 | 〇、二〇〇 | 三四四二、九六二 | 八、八三六 |
| 片岡 | 石原 | 九九、〇九三三 | 一五六五、七三八 | 一、五八〇 | 七二五三三、八一三 | 七三、一九三 |
| | 寺尾 | 三五、一七一五 | 五四一、六九五 | 一、五四〇 | 二五〇九四、〇二一 | 七一、三四三 |

ロ　畑方

| 郡名 | 上下等村名 | 反別（町） | 收穫麥 全額（圓） | 收穫麥 一反當（圓） | 地價 全額（圓） | 地價 一反當（圓） |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 佐位 | 伊與久 | 一七四、九八一七 | 一三〇八、三一九 | 一、三六二 | 三四九一三、五三三 | 一九、九五三 |
| | 今井 | 七七、七八二三 | 六三三、三八四 | 〇、八一三 | 九九九七、九九一 | 一三、八五四 |
| 郡波 | 下道寺 | 二六、九九一二 | 四六二、九四七 | 一、七一五 | 七三一九、一九三 | 二七、一一四 |
| | 飯島 | 二四、二五〇七 | 一五五、九四二 | 〇、六四三 | 二四六五、四四三 | 一〇、一六六 |
| 多胡 | 吉井 | 五五、三三一〇 | 七二六、一八七 | 一、三一五 | 一一四八一、〇一六 | 二〇、七九〇 |
| | 下日野 | 一六二、五九〇六 | 一〇六〇、一〇〇 | 〇、六五二 | 一五九六三、〇七七 | 九、八一七 |
| 緑野 | 森 | 四四、三三一四 | 七九三、五七〇 | 一、七九四 | 一三五四六、三四三 | 二八、三六三 |
| | 三本木 | 四三、八八〇二 | 四四八、四六〇 | 一、〇三二 | 七〇九〇、一五三 | 一六、一五八 |

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 那波 | 下新田 | 四、四一一九 | — | — | 一五七二、三九九 | 三五、六〇四 |
| | 前河原 | 四、〇五〇八 | — | — | 一〇二二、五九一 | 二五、三三三 |
| 多胡 | 吉井 | 四、一八二一 | — | — | 一三九六、七五〇 | 三三、三五九 |
| | 東谷 | 二、八七〇五 | — | — | 六七四、二〇三 | 三三、四七八 |
| 緑野 | 山名 | 一三、八三〇六 | — | — | 四四八九、五八二 | 三三、四五八 |
| | 三波川 | 一八、七八〇一 | — | — | 二六六三、六六一 | 一四、〇二四 |
| 郡馬 | 元總社 | 一七、三三三五 | — | — | 七一九五、六三一 | 四一、五〇一 |
| | 新堀 | 五、六一一九 | — | — | 一三三一、九一三 | 二三、七一五 |
| 勢多 | 岩神 | 一四、一六二六 | — | — | 五六〇〇、一七一 | 三九、五二五 |
| | 根利 | 三、二六二二 | — | — | 二九一、五六八 | 八、九三三 |
| 利根 | 下沼田 | 四、三三二〇 | — | — | 一〇五八、九〇六 | 三四、四七四 |
| | 東代田 | 〇、〇七〇五 | — | — | 一、六九二 | 二、三六一 |
| 吾妻 | 岩下 | 七、九一一二 | — | — | 三三一八、四七三 | 二九、二九六 |
| | 干俣 | 五、五〇〇九 | — | — | 七五五、一八〇 | 一三、七三三 |
| 碓氷 | 松井田驛 | 〇、六四二七 | — | — | 二三三、七〇七 | 三五、八五六 |
| | 峠町 | 〇、三六〇四 | — | — | 三一、九八四 | 八、八五一 |
| 甘樂 | 下仁田 | 一、六六〇七 | — | — | 六七七、二六九 | 四〇、七四二 |
| | 熊倉 | 〇、七三二二 | — | — | 七一、二五六 | 九、七〇八 |
| 山田 | 荒金 | 六、一〇〇二 | — | — | 二一七三、〇五三 | 三五、六二〇 |
| | 山地 | 二、七六二六 | — | — | 三九一、七七二 | 一四、一五〇 |
| 新田 | 岩松 | 一一、〇六〇一 | — | — | 四三七八、五九五 | 三九、五八八 |
| | 六千石 | 二、四六一四 | — | — | 四〇九、一四七 | 一六、六〇一 |
| 邑樂 | 新當鄕 | 九、八九二三 | — | — | 三三九、〇七四 | 三三、七二七 |
| | 離 | 七、四八二四 | — | — | 九〇〇、九一七 | 一二、〇三一 |
| 片岡 | 石原 | 一八、九一〇八 | — | — | 五八四五、六三七 | 三〇、九〇九 |
| | 寺尾 | 一六、四〇一二 | — | — | 四八〇五、七〇二 | 二九、二九六 |

一筆上最上最下の收穫地價

各郡に就き一筆上最上等・最下等地の收穫地價を摘載すれば左の如し。

イ　田方

| 郡名 | 上等・下等村名 | 反別（町） | 收穫米 全額（石） | 收穫米 一反當（石） | 地價 全額（圓） | 地價 一反當（圓） |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 佐位 | 茂呂 | 〇、〇九〇九 | 一、九五三 | 二、一〇〇 | 九〇、四七三 | 九七、三八三 |
| | 下武士 | 〇、一一〇〇 | 〇、八二五 | 〇、七五〇 | 三八、二一八 | 二四、七四四 |
| 那波 | 除ヶ | 〇、〇四一五 | 一、一〇三 | 二、三五一 | 四六、九二七 | 二〇四、二八三 |
| | 下蓮沼 | 〇、〇六〇九 | 〇、四七三 | 〇、七五一 | 二一、九二二 | 二四、七八一 |
| 多胡 | 長根 | 〇、〇六二七 | 一、一三九 | 一、六五一 | 五三、七六四 | 七六、四七〇 |
| | 下日野 | 〇、〇八二二 | 〇、三七八 | 〇、四五一 | 一七、五二一 | 二〇、八四六 |
| 緑野 | 牛田 | 〇、〇四〇〇 | 〇、八七〇 | 二、一七五 | 四〇、三〇三 | 一〇〇、七五八 |
| | 神田 | 〇、〇三〇三 | 〇、三三三 | 〇、七五三 | 一〇、七九四 | 三四、八一九 |
| 群馬 | 宗甫分 | 〇、一七六八 | 三、七六六 | 二、一〇〇 | 一七四、四六〇 | 九七、三八三 |
| | 塚田 | 〇、〇一二三 | 〇、〇六五 | 〇、三七五 | 三、〇二一 | 一七、三七二 |
| 勢多 | 北代田 | 〇、〇四〇三 | 〇、八六一 | 二、一〇〇 | 三九、八八六 | 九七、三八三 |
| | 三夜澤 | 〇、〇三二七 | 〇、一七六 | 〇、四五一 | 七、七六五 | 一九、九一〇 |
| 利根 | 政所 | 〇、〇六〇六 | 一、三〇二 | 二、一〇〇 | 六〇、三一五 | 九七、三八三 |
| | 大沼 | 〇、〇三一一 | 〇、〇四一 | 〇、一五三 | 一、八九九 | 七、〇三三 |
| 吾妻 | 中ノ條町 | 〇、〇四三四 | 〇、八二八 | 一、七二五 | 三八、三五七 | 七九、九一〇 |
| | 大前 | 〇、〇三一三 | 〇、一〇三 | 〇、三〇〇 | 四、七七一 | 一三、八九六 |
| 碓水 | 八幡 | 〇、一五一一 | 三、四五四 | 二、三四八 | 一六〇、〇〇七 | 一〇四、二三六 |
| | 入山 | 〇、〇二〇〇 | 〇、〇三〇 | 〇、一五〇 | 一、二六三 | 六、三三五 |
| 甘樂 | 中里 | 〇、一八〇〇 | 三、五一〇 | 一、九五〇 | 一六三、六〇一 | 九〇、三三四 |
| | 西野牧 | 〇、〇一二八 | 〇、〇〇三四 | 〇、一五〇 | 一、〇二一 | 六、三一九 |

| 郡名 | 村名 | 反別 | 收穫麥 全額 | 收穫麥 一反當 | 地價 全額 | 地價 一反當 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 山田 | 荒金 | 〇、一五〇〇 | 三、三六三 | 二、一七五 | 一五一、一五八 | 一〇〇、七七二 |
|  | 二渡 | 〇、〇五三〇 | 〇、三九七 | 〇、五三四 | 一三、七五九 | 二四、二八一 |
| 新田 | 鶴生田 | 〇、一三〇〇 | 二、六一〇 | 二、一七五 | 一三〇、九〇八 | 一〇〇、七五七 |
|  | 金井 | 〇、〇三〇六 | 〇、三四〇 | 〇、七五〇 | 一一、一一八 | 三四、七四四 |
| 邑樂 | 秋妻 | 〇、一〇〇二 | 二、三六二 | 二、一七五 | 一〇四、七八七 | 一〇〇、七五七 |
|  | 離 | 〇、〇八〇八 | 〇、一三四 | 〇、一五〇 | 五、三三二 | 六、三一七 |
| 片岡 | 石原 | 〇、一一三一 | 二、六三三 | 二、三五〇 | 一三一、九七四 | 一〇四、三五一 |
|  | 寺尾 | 〇、一一一八 | 〇、三九〇 | 〇、三五〇 | 一三、四三四 | 一一、五八一 |

ロ　畑方（收穫麥）

| （郡名） | （上等村名 / 下等村名） | （反別） | （收穫麥）（全額） | （收穫麥）（一反當） | （地價）（全額） | （地價）（一反當） |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 佐位 | 伊與久 | 〇、〇八二七 | 一、九三六 | 二、一七五 | 三〇、六〇八 | 三四、三九二 |
|  | 今井 | 〇、〇八〇〇 | 〇、三六〇 | 〇、四五〇 | 五、六九二 | 七、一一五 |
| 那波 | 下道寺 | 〇、〇五二一 | 一、三四二 | 二、三五四 | 二一、三一七 | 三七、二三三 |
|  | 飯島 | 〇、一三〇〇 | 〇、六三〇 | 〇、五三五 | 九、九六〇 | 八、三〇〇 |
| 多胡 | 吉井町 | 〇、〇八〇六 | 一、七八四 | 二、一七六 | 二八、二〇五 | 三四、三九六 |
|  | 下日野 | 〇、〇七〇九 | 〇、一八三 | 〇、三五一 | 二、七五五 | 三、七七四 |
| 緑野 | 森 | 〇、〇八二四 | 二、一一三 | 二、四〇〇 | 三三、三九一 | 三七、九四四 |
|  | 三本木 | 〇、〇三三二 | 〇、〇九三 | 〇、三四九 | 一、四七〇 | 三、九三八 |
| 群馬 | 市ノ坪 | 〇、〇八二七 | 一、八〇三 | 二、〇三五 | 二八、四九〇 | 三三、〇二一 |
|  | 春名山 | 〇、〇八〇三 | 〇、一六二 | 〇、三〇〇 | 二、三九四 | 二、九五六 |
| 勢多 | 三俣 | 〇、〇七〇六 | 一、五六六 | 二、一七五 | 二四、七五八 | 三四、三八六 |
|  | 石戸新田 | 〇、〇二一五 | 〇、〇三五 | 〇、一〇〇 | 〇、三五九 | 一、四三六 |
| 利根 | 眞庭 | 〇、〇三三七 | 〇、八七八 | 二、三五一 | 一三、八八一 | 三五、五九二 |
|  | 東田代 | 〇、〇一〇三 | 〇、〇二一 | 〇、一〇〇 | 〇、一五八 | 一、四三六 |

| （郡名） | （上下等村名） | （反別）町 | （收穫米）（全額） | （收穫米）（一反當） | （地價）（全額）圓 | （地價）（一反當）圓 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 吾妻 | 岩下 | 〇、〇八二四 | 一、八四八 | 三、一〇〇 | 二九、三一七 | 三三、三〇二 |
| | 田代 | 〇、〇三二八 | 〇、〇九〇 | 〇、三五〇 | 一、二九四 | 三、五九四 |
| 碓水 | 松井田驛 | 〇、〇三〇六 | 〇、五九四 | 三、七〇〇 | 九、三九一 | 四二、六八六 |
| | 坂本驛 | 〇、〇三〇〇 | 〇、〇四五 | 〇、一五〇 | 〇、七二一 | 二、三七〇 |
| 甘樂 | 中澤 | 〇、〇五三四 | 一、三九三 | 二、四〇〇 | 三三、〇〇八 | 二七、九四五 |
| | 野栗澤 | 〇、〇五〇九 | 〇、〇八〇 | 〇、一五一 | 一、一五〇 | 二、一七〇 |
| 山田 | 桐生新町 | 〇、〇八一二 | 一、五七五 | 一、八七五 | 二四、九〇一 | 二九、六四四 |
| | 山地 | 〇、〇三二二 | 〇、〇八五 | 〇、三五〇 | 一、三四四 | 三、五五三 |
| 新田 | 岩松 | 〇、〇九一五 | 一、九九五 | 三、一〇〇 | 三二、五四一 | 三三、三〇一 |
| | 六千石 | 〇、〇五〇〇 | 〇、一五〇 | 〇、三〇〇 | 二、三七三 | 四、七四四 |
| 邑樂 | 藤川 | 〇、〇七二一 | 一、六七五 | 三、一七五 | 二六、四八二 | 三四、三九二 |
| | 離 | 〇、〇九〇九 | 〇、一八六 | 〇、一九九 | 二、六七三 | 二、八七四 |
| 片岡 | 石原 | 〇、〇五一二 | 〇、九七三 | 一、八〇〇 | 一五、三六七 | 二八、四五七 |
| | 乘附 | 〇、〇三二五 | 〇、〇八八 | 〇、三五一 | 一、三九一 | 三、九七四 |

八　宅地

| （郡名） | （上下等村名） | （反別）町 | （收穫米）（全額） | （收穫米）（一反當） | （地價）（全額）圓 | （地價）（一反當）圓 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 佐位 | 伊與久 | 〇、〇〇〇九 | ― | ― | 一三、三三七 | 三七、〇八二 |
| | 東新井 | 〇、〇三〇六 | ― | ― | 八、〇七九 | 三五、二四七 |
| 那波 | 下新田 | 〇、一三一二 | ― | ― | 四八、三〇五 | 三五、九七四 |
| | 前河原 | 〇、〇四一四 | ― | ― | 二二、〇九九 | 三五、三三五 |
| 多胡 | 吉井町 | 〇、〇四二七 | ― | ― | 一七、三九一 | 三五、四九二 |
| | 東谷 | 〇、〇五〇三 | ― | ― | 一〇、八九三 | 二二、三五九 |
| 緑野 | 山名 | 〇、〇九〇三 | ― | ― | 三二、七七八 | 二四、九二二 |
| | 三波川 | 〇、〇六一五 | ― | ― | 七、六五三 | 一二、七七二 |

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 群馬 | 元惣社 | 〇、一二〇〇 | \| | \| | 五二、〇四七 | 四三、三七三 |
| | 新堀 | 〇、〇五一五 | \| | \| | 一一、九五二 | 二一、七三一 |
| 勢多 | 岩神 | 〇、〇九〇三 | \| | \| | 四〇、三一六 | 四四、三〇三 |
| | 根利 | 〇、〇五一九 | \| | \| | 三、六〇五 | 六、四〇〇 |
| 利根 | 下沼田 | 〇、〇三一八 | \| | \| | 九、六二八 | 二六、七四四 |
| | 東田代 | 〇、〇三三七 | \| | \| | 〇、九三三 | 二、三九二 |
| 吾妻 | 岩下 | 〇、〇六〇〇 | \| | \| | 一九、五四一 | 三三、五六八 |
| | 干俣 | 〇、〇三三一 | \| | \| | 四、七九〇 | 一三、九四六 |
| 碓氷 | 松井田驛 | 〇、〇三三四 | \| | \| | 一〇、二一三 | 三六、四七五 |
| | 峠町 | 〇、〇三三七 | \| | \| | 二、五六一 | 八、八三一 |
| 甘樂 | 下仁田 | 〇、一〇〇〇 | \| | \| | 四三、三一九 | 四三、三一九 |
| | 熊倉 | 〇、一一三七 | \| | \| | 八、四七四 | 七、一三一 |
| 山田 | 荒金 | 〇、三五〇〇 | \| | \| | 八九、八四八 | 三五、九三九 |
| | 山地 | 〇、〇四〇〇 | \| | \| | 四、四二七 | 一一、〇六八 |
| 新田 | 岩松 | 〇、〇八一八 | \| | \| | 三四、五六一 | 四〇、一八七 |
| | 六千石 | 〇、〇八一五 | \| | \| | 一三、三一二 | 一五、六六一 |
| 邑樂 | 新當鄕 | 〇、〇六一三 | \| | \| | 二一、八四九 | 三四、一三九 |
| | 離 | 〇、〇四〇八 | \| | \| | 一、三四四 | 三、一五〇 |
| 片山 | 石原 | 〇、〇六一二 | \| | \| | 二〇、〇四七 | 三一、三三四 |
| | 寺尾 | 〇、〇一三四 | \| | \| | 四、七七五 | 二六、五二八 |

各郡に就き一村平均地租の最増數と最減數とを摘載すれば、左の如し。

一村平均地租の最增數と最減數

| （郡名） | （增減村名） | （反別）（舊） | （反別）（改正） | （反別）（差引增減） | （地租）（舊） | （地租）（改正） | （地租）（差引增減） |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 町 | 町 | 町 | 圓 | 圓 | 圓 |
| 佐位 | 中島 | 三七、三八〇七 | 五七、五八一一 | 二〇、二〇〇四 | 五〇、七八九 | 三三八、三五五 | 二八七、五六六 |
| | 八寸 | 二〇八、二四三三 | 一七一、六四一九 | △三六、六〇〇三 | 一二六八、五一四 | 一三九二、一〇九 | 一二三、五九五 |

| 郡 | 町村 | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 那波 | 前河原 | 三八、三六一五 | 三三、五一一八 | △四、八四二七 | 一五、八六三 | 一三四、六四四 | 一〇八、七八一 |
| | 下茂木 | 四三、三七〇四 | 五三、五一一〇 | 一二、一四〇六 | 八三八、五六八 | 八三六、四五四 | △二、二一四 |
| 多胡 | 中島 | 一三、九八一五 | 二四、七四四一 | 一一、七五一六 | 二八、四一九 | 一四三、一三五 | 一一四、七〇六 |
| | 矢田 | 七一、三三三五 | 七一、四三〇五 | 〇、一八一〇 | 七〇七、六四一 | 五八二、七〇〇 | △二三四、九四一 |
| 緑野 | 森田 | 九一、三二〇七 | 八六、三五三八 | △四、八五〇九 | 二六、四八八 | 四三四、一八四 | 三九七、六九六 |
| | 川除新田 | 一六、〇八三一 | 二三、五六三〇 | 四、七七九 | 三八、四三一 | 三六四、三六九 | △一六、〇六二 |
| 群馬 | 横堀 | 五一、七〇〇三 | 二〇六、〇六一三 | 五四、三六一一 | 五八、三五五 | 五三〇、五四五 | 四六二、一九〇 |
| | 倉賀野 | 二一四、一八二一 | 二三〇、七五一四 | 六、五六三三 | 三八〇一、八四三 | 二八四、三七七 | 九一七、四六六 |
| 勢多 | 棚下 | 三三、三三〇三 | 七三、四七三七 | 四九、三七一五 | 二一、八七三 | 三三三、九五九 | 三〇二、〇八六 |
| | 龜泉 | 四二、二三〇五 | 三八、六七三五 | △四、五四〇八 | 五四六、八二一 | 三九七、六二一 | △一四九、三一〇 |
| 利根 | 横塚 | 一〇三、七八三三 | 一五六、六二〇六 | 五三、八三一四 | 六八、三九一 | 四〇八、九二五 | 二四〇、六三三 |
| | 發知新田 | 五〇、一八三七 | 四四、九五三八 | △五、三三三九 | 四三九、七三八 | 三二七、一二九 | △一〇三、六〇九 |
| 吾妻 | 田代 | 一六、六六二一 | 一六七、一九〇二 | 一五〇、五三三〇 | 八、七三〇 | 二七〇、五三三 | 三六一、八一二 |
| | 岩井 | 九七、三三一九 | 一〇七、一二三六 | 九、七八〇七 | 一一三〇、〇六〇 | 一〇三九、三三〇 | △九〇、七四〇 |
| 碓氷 | 水沼 | 三七、九九〇三 | 九七、九八三〇 | 五九、九九一七 | 一五三、六一二 | 六七四、三五七 | 五三〇、六四五 |
| | 大竹 | 九三、二六二二 | 一〇〇、七六二四 | 八、五〇二三 | 一五四七、九三六 | 一三〇八、六四四 | △三九、二九三 |
| 甘樂 | 七日市 | 一五、四二一八 | 一四三、八三〇一 | 三八、四〇二三 | 六九一、一六五 | 一四一、三四七 | 四五〇、一八二 |
| | 君川 | 五八、六四二二 | 五四、二七三三 | △四、三六一九 | 一〇八三、〇二八 | 六四八、五八六 | △四三、四四三 |
| 山田 | 桐生新町 | 二六、三〇三三 | 一三三、一一一八 | 五、八〇一六 | 一六一、三八七 | 一一八六、七一五 | 一〇三五、四二八 |
| | 安樂土 | 二一九、〇三〇九 | 三三四、三二一一 | 五、三〇〇三 | 二四八九、三八九 | 二四〇五、〇六八 | △八四、三三一 |
| 新田 | 前小屋 | 七三、三九一〇 | 九七、七九〇七 | 二四、三九三七 | 二六、五三 | 五三、八九九 | 五〇七、三七六 |
| | 下田中 | 一三四、五四〇七 | 一五五、三七三三 | 三〇、八三二五 | 三七九、八七四 | 一八六七、三三一 | △四一二、六五三 |
| 邑樂 | 大荷場 | 七六、八一三〇 | 六七、三一〇七 | △九、六〇三三 | 一〇九、三〇五 | 二四九、七〇四 | 一四〇、四九九 |
| | 近藤 | 二八、三四三〇 | 一九、八五三七 | △八、三八三三 | 一七六、一二六 | 一六七、〇三六 | △九、〇九〇 |
| 片岡 | 乘附 | 一六九、一三〇二 | 一六三、三六一七 | △六、八五二四 | 一四五一、二七七 | 一七七、〇八六 | 三一八、七〇九 |
| | 石原 | 二〇五、五三三一 | 二一七、九三〇九 | 一三、四〇一八 | 三〇九五、九四〇 | 二八六四、六二九 | △三三一、三〇一 |

（備考）　△印減

## 第二項　市街地の調査

市街地調査は、廻り分間法を以て各市街の總積を測り、其實測圖を製し、之に毎筆の地形を畫し、圖上に於て三斜法を用ひ、毎地を求積せり。官吏は一町内三四箇所以上、十箇所以下を檢査す。其地位等級、及び地價は、實地賣買價、及び借地料に基き、其士族邸地と商業を營まざる地は、郡村宅地の比準を參酌し、彼此の權衡を推究して、其相當を得しめたり。

以上の順序に由り、地價を算出し、地租を査定す。其成績は、左の如し。

| （地目） | （改正反別） | （地價）（全額） | （地價）（一反當） | （地租）（全額） | （地租）（一反當） |
|---|---|---|---|---|---|
| 市街宅地 | 町 三二、九三一八七六 | 圓 一七七五八七、〇一三 | 圓 八〇、〇三〇七 | 圓 五三二七、六一一 | 圓 二、四〇〇六 |

地位毎當の地價及百坪當

又地位毎等の地價、及び百坪當りを擧ぐれば、左の如し。

一　高崎　前橋

| （等級） | （坪數） | （地價） | （百坪平均地價） |
|---|---|---|---|
| 一 | 二五二、二九（坪） | 五四六、六二八（圓） | 二一六、六六七（圓） |
| 二 | 七八、四四 | 一六三、四一七 | 二〇八、三三三 |
| 三 | 一五九、一三 | 三一八、二六〇 | 二〇〇、〇〇〇 |
| 四 | 一八一、九八 | 三四八、七九五 | 一九一、六六六 |
| 五 | 一二六、九七 | 二三二、七七八 | 一八三、三三三 |
| 六 | 三七四、三一 | 六五五、〇四三 | 一七五、〇〇〇 |
| 七 | 三五二、六一 | 五八七、六八四 | 一六六、六六七 |
| 八 | 二一一九、八一 | 三三九一、六九六 | 一六〇、〇〇〇 |
| 九 | 三六二〇、一五 | 五五五〇、八九六 | 一五三、三三三 |
| 一〇 | 二六九二、〇四 | 三九四八、三二四 | 一四六、六六七 |
| 一一 | 二三九一、八七 | 三二〇八、六一八 | 一四〇、〇〇〇 |
| 一二 | 二二一〇、九二 | 二八一四、五六〇 | 一三三、三三三 |
| 一三 | 三一五三、七六 | 三九九四、七六四 | 一二六、六六七 |
| 一四 | 一八三三、五六 | 二二〇〇、二七二 | 一二〇、〇〇〇 |
| 一五 | 四八〇一、二二 | 五四四一、三八三 | 一一三、三三三 |
| 一六 | 二〇八七、〇三 | 二二二六、一六六 | 一〇六、六六七 |

| | | | |
|---|---|---|---|
| 一七 | 三二四四、四八 | 三二四四、四八〇 | 一〇〇、〇〇〇 |
| 一八 | 五一七六、八八 | 四九一八、〇一一 | 九五、〇〇〇 |
| 一九 | 一〇〇六七、八八 | 九〇六一、〇九二 | 九〇、〇〇〇 |
| 二〇 | 四九一〇、二〇 | 四一七三、六七二 | 八五、〇〇〇 |
| 二一 | 一五四六、一一 | 一二三六、八八八 | 八〇、〇〇〇 |
| 二二 | 三三四四、八五 | 二五〇八、六四〇 | 七五、〇〇〇 |
| 二三 | 四一二四、一七 | 二八八六、九一九 | 七〇、〇〇〇 |
| 二四 | 八一六八、〇四 | 五三〇九、二二九 | 六五、〇〇〇 |
| 二五 | 三八二四、六一 | 二二九四、七六六 | 六〇、〇〇〇 |
| 二六 | 五七四〇、五五 | 三一五七、三〇六 | 五五、〇〇〇 |
| 二七 | 七一二六、一五 | 三五六三、〇七五 | 五〇、〇〇〇 |
| 二八 | 九五六〇、二六 | 四四六一、四五四 | 四六、六六七 |
| 二九 | 一〇〇三四、八一 | 四三四八、四一七 | 四三、三三三 |
| 三〇 | 八八九六、〇四 | 三五五八、四一六 | 四〇、〇〇〇 |
| 三一 | 八四九三、六〇 | 三一一四、三一九 | 三六、六六七 |
| 三二 | 一四四〇五、四七 | 四八〇一、八二四 | 三三、三三三 |
| 三三 | 一四〇二一、九八 | 四三四六、八一六 | 三一、〇〇〇 |

| | | | |
|---|---|---|---|
| 三四 | 一一九八〇、四八 | 三四三四、四〇四 | 二八、六六七 |
| 三五 | 二〇二一五、三三 | 五三二三、三七二 | 二六、三三三 |
| 三六 | 一八九八〇、二六 | 四五五六、二六三 | 二四、〇〇〇 |
| 三七 | 二三三四六、八八 | 五〇五八、四九三 | 二一、六六七 |
| 三八 | 三七二一一、〇二 | 七一九四、一二九 | 一九、三三三 |
| 三九 | 三二二九四、八二 | 五四九〇、一二二 | 一七、〇〇〇 |
| 四〇 | 五三九五六、六四 | 八二七三、三五二 | 一五、三三三 |
| 四一 | 四一四五一、七七 | 五六六五、〇七六 | 一三、六六七 |
| (計) | 三八八三五九、三七 | 一四七六〇八、八一九 | 三八、〇〇八 |

二　類外

| | | | |
|---|---|---|---|
| 一 | 三六四三、四七 | 四八五、七九六 | 一三、三三三 |
| 二 | 四二〇四六、四五 | 五一八五、七二九 | 一二、三三三 |
| 三 | 六八九二〇、九二 | 七八一一、〇三七 | 一一、三三三 |
| 四 | 一三九三三二、三三 | 一四三九九、六七六 | 一〇、三三三 |
| 五 | 一三二四九、七四 | 一二三六、六四二 | 九、三三三 |
| 六 | 一〇〇九六、四〇 | 八四一、三六七 | 八、三三三 |
| (計) | 二七七二八九、三一 | 二九九五八、二五七 | 一〇、八〇四 |

## 第三項　山林原野各種地の調査

山林・原野は、毎筆地押を爲し、其丈量は分間略器を用ひ、官吏も亦同器を以て、百町歩毎に三四箇所以上を檢査せり。地價を議するや、其便否好惡等に由り、首として地位等級を詮評して、毎等の收益を計算し、其價格を確定せり。

以上の順序に由り、地價を算出し、地租を査定す。其成績は左の如し。

| (地　目) | (改正反別) | (地價) (全　額) | (地價) (一反步) | (地租) (全　額) | (地租) (一反當) |
|---|---|---|---|---|---|
| 山　林 | 町 一〇三九四九、五一三五 | 圓 一〇五四七九二、三三三 | 圓 一、〇一四七 | 圓 三一六四三、七七一 | 圓 〇、〇三〇四 |
| 原　野 | 一八六二八、九七〇六 | 七一四七三、一四五 | 〇、三八三七 | 二一四四、一九三 | 〇、〇一一五 |
| 溫　泉 | 〇、〇七二一五 | 一九七〇、七八九 | 二五五三、九七三三 | 五九、一二五 | 七六、六二〇五 |
| 池　沼 | 二六七、五三〇九 | 一一〇六、五七七 | 〇、四一三六 | 三三、一九七 | 〇、〇一二四 |
| 荒　地 | 二五一九、二八三五 | — | — | — | — |
| 新開鍬下 | 五七六、四五一九 | — | — | — | — |
| (計) | 一三五九四一、八三一三 | 一一三九三四三、八四三 | — | 三三八八〇、三八六 | — |

一筆上最上最下の一町當り地價

各郡に就き一筆上最上等・最下等地の壹町當り地價を摘載すれば、左の如し。

| (郡名) | (上等林<br>下等林) | (山林) | (芝場) | (野) | (池沼) | (井戸敷) | (湯之花溜) | (温泉地) | (冷泉地) |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 佐位 | 圓<br>三六,〇〇〇<br>六,〇〇〇 | —<br>— | —<br>— | 圓<br>三〇,〇〇〇<br>六,〇〇〇 | —<br>— | —<br>— | —<br>— | —<br>— | —<br>— |
| 那波 | 三六,〇〇〇<br>九,〇〇〇 | —<br>— | 二七,〇〇〇<br>九,〇〇〇 | 三三,〇〇〇<br>九,〇〇〇 | 九,〇〇〇<br>— | —<br>— | —<br>— | —<br>— | —<br>— |
| 多胡 | 三六,〇〇〇<br>三,〇〇〇 | 三三,〇〇〇<br>一三,〇〇〇 | 二七,〇〇〇<br>一三,〇〇〇 | 三〇,〇〇〇<br>九,〇〇〇 | 三三,〇〇〇<br>三,〇〇〇 | —<br>— | —<br>— | —<br>— | —<br>— |
| 緑野 | 三六,〇〇〇<br>三,〇〇〇 | 三三,〇〇〇<br>一三,〇〇〇 | 二一,〇〇〇<br>一八,〇〇〇 | 三六,〇〇〇<br>九,〇〇〇 | 三六,〇〇〇<br>一五,〇〇〇 | —<br>— | —<br>— | —<br>— | —<br>— |
| 群馬 | 三六,〇〇〇<br>三,〇〇〇 | 三〇,〇〇〇<br>三,〇〇〇 | 三六,〇〇〇<br>三,〇〇〇 | 三六,〇〇〇<br>三,〇〇〇 | 三六,〇〇〇<br>六,〇〇〇 | —<br>— | —<br>— | —<br>— | —<br>— |
| 勢多 | 三六,〇〇〇<br>一,〇〇〇 | 二七,〇〇〇<br>一,〇〇〇 | 二四,〇〇〇<br>三,〇〇〇 | 三六,〇〇〇<br>一,〇〇〇 | 三六,〇〇〇<br>一,五〇〇 | —<br>— | —<br>— | —<br>— | —<br>— |
| 利根 | 二七,〇〇〇<br>一,五〇〇 | 二七,〇〇〇<br>一,〇〇〇 | 一九,〇〇〇<br>一,〇〇〇 | 一八,〇〇〇<br>一,〇〇〇 | 一八,〇〇〇<br>一,〇〇〇 | —<br>— | —<br>— | —<br>— | —<br>— |
| 吾妻 | 一五,〇〇〇<br>一,五〇〇 | 一五,〇〇〇<br>一,五〇〇 | 二九,〇〇〇<br>三,〇〇〇 | 一五,〇〇〇<br>一,五〇〇 | —<br>— | —<br>— | 二,〇〇〇<br>— | 六〇,〇〇〇〇〇〇<br>一〇,〇〇〇〇〇〇 | —<br>— |
| 碓氷 | 三六,〇〇〇<br>二,〇〇〇 | 三五,〇〇〇<br>二,〇〇〇 | 一五,〇〇〇<br>一三,〇〇〇 | 三六,〇〇〇<br>二,〇〇〇 | 三三,〇〇〇<br>二,〇〇〇 | —<br>— | —<br>— | —<br>— | 二五〇,〇〇〇<br>— |
| 甘樂 | 三六,〇〇〇<br>二,〇〇〇 | 二〇,〇〇〇<br>一,五〇〇 | 二七,〇〇〇<br>一,五〇〇 | 三〇,〇〇〇<br>一,五〇〇 | 二七,〇〇〇<br>九,〇〇〇 | —<br>— | —<br>— | —<br>— | —<br>— |
| 山田 | 三六,〇〇〇<br>二,〇〇〇 | 三三,〇〇〇<br>一,五〇〇 | 三三,〇〇〇<br>一,五〇〇 | 三三,〇〇〇<br>一,五〇〇 | 三三,〇〇〇<br>一,五〇〇 | 六,〇〇〇<br>— | —<br>— | —<br>— | —<br>— |
| 新田 | 三六,〇〇〇<br>三,〇〇〇 | 二七,〇〇〇<br>三,〇〇〇 | 二一,〇〇〇<br>六,〇〇〇 | 三六,〇〇〇<br>三,〇〇〇 | 三三,〇〇〇<br>六,〇〇〇 | —<br>— | —<br>— | —<br>— | —<br>— |

| | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 邑樂 | 三六,〇〇〇<br>三,〇〇〇 | —<br>— | 三三,〇〇〇<br>三,〇〇〇 | 二七,〇〇〇<br>三,〇〇〇 | 一三,〇〇〇<br>三,〇〇〇 | —<br>— | —<br>— | —<br>— | —<br>— |
| 片岡 | 三三,〇〇〇<br>一三,〇〇〇 | 二四,〇〇〇<br>一三,〇〇〇 | —<br>— | 二七,〇〇〇<br>一三,〇〇〇 | —<br>— | —<br>— | —<br>— | —<br>— | —<br>— |

| | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 壹種 温泉 | 〇、七二一五 | 一九七〇、七八九 | 二五五三、九三八ヨ | 五九、一三五 | 七六、六二〇内 | | | 〇、七二一五 | |
| 荒地 | 二五八二、四四一六五 | | | | | 五二九五、五八〇六六 | | △二七一三、△一三三〇一 | |
| 開墾鍬下 | 五五九、七〇六八 | | | | | 一六七、一三三三四 | | 三九二、六一一五七六 | |
| (小計) | 一三五九八、二九三六〇 | 一二三九三四二、八四三 | | 三三八八〇、二八六 | | 五四六二、七一二八八四 | 二一三四、一三〇 | 一三〇五三五、五七三七一六 | 三一七五六、一六六 |
| (合計) | 三三三九一七、七三二九三六 | 三一三四四三一二、〇三七 | | 九四〇三三九、三六一 | | 九四三一六、八七一九五八 | 八二五九五〇、八三五 | 一三九六〇〇、八五〇九六八 | 一一四三七八、五三六 |
| 同第二種 郷村社地 | 一七、一七一八八五 | | | | | | | 一七、一七一八八五 | |
| 潰地 | 三三七、五九〇九 | | | | | | | 三三七、五九〇九 | |
| 墳墓地 | 五九二、二六一七七四 | | | | | | | 五九二、二六一七七四 | |
| (合計) | 九三七、〇三一五五九 | | | | | | | 五三七、〇三一五五九 | |
| (總計) | 三三四八五四、七六一四八五 | 三一三四四三一二、〇三七 | | 九四〇三三九、三六一 | | 九四三一六、八七一九五八 | 八二五九五〇、八三五 | 一四〇五三七、八八二五二七 | 一一四三七八、五三六 |

備考　△印減額ヲ示ス

類外田　未定田　流作田　沼田

宅地　堂宇敷地　社寺境内　水車敷地

類外畑　未定畑　焼畑　流作畑　山畑　切替畑

山林　崖地　竹木　雑生地　竹籔　柴草　萱山　櫨山　石山

原　野　林場　蒲生地　牧場　草生地　芝地　萱野　柴生地　野地　温　泉　温泉　引入敷地　冷泉

池　沼　堀　養魚池　水車溝　蓮池　井戸敷

雜　地　荷揚場　流木置場　布晒場　物置場　土揚場　稻干場　土取場

潰　地　堤敷　道敷　井溝敷　堀敷　溜池敷　川敷　用水悪路

墳墓地　火葬場　塚　斃馬捨場

次に明治十年、減租の勅あり。地價百分の二箇半を以て、地租とせらる。由りて該率に換算したるものを擧ぐれば、左の如し。明治十年一月四日、第一號布告。

| 地目 | （改正反別） | （地價金） | （税率百分ノ二個半地租） | （舊地租） | （地租比較増減） |
| --- | --- | --- | --- | --- | --- |
| 耕宅地 | 一〇七九三九、四町三三六 | 三〇三一四九六九圓一八四 | 七五五三七四圓三二九 | 八三三六八三、六七二五 | △六八四五三、四八六 |
| 山林原野等雜地 | 二五九八、三九三六〇〇 | 一二三九三四三、八四三 | 二八三三三、五七一 | 三一三四、一三〇〇 | 二六一〇九、四五一 |
| （計） | 一三九一七、七三三九三六 | 三三二四四三二三、〇二七 | 七八三六〇七、八〇〇 | 八三五九五〇、八三五 | △四三二四二、〇三五 |

# 第四節　改租費額

改租に付き、官民の消費額は左の如し。

| （件名） | （年月） | （金額） | （壹反當金額） |
|---|---|---|---|
| 官費 | 自明治六年一月 至事業整頓 | 一四三七〇五、七九五 | 〇、〇六一四 |
| 民費 | 自明治九年 至同十三年 | 七五九五二三、〇八九 | 〇、三二四八 |
| （計） | | 九〇三二二八、八八四 | 〇、三八六二 |

官費は即ち府縣經費にして、支出費目及び金額を擧ぐれば、左の如し。

| （費目） | （金額） |
|---|---|
| 俸給 | 三八、五〇五、二六五圓 |
| 給與 | 一九、一二六、四三五 |
| 旅費 | 二七、五四八、五九八 |
| 顧問鑑定總代人雇費 | 八、九二六、八二五 |
| 廳中費 | 六、四一二、三九一 |
| 券状台帳用紙價 | 四二、八二五、四九四 |
| 雜費 | 三六〇、七八七 |

（計）　一四三、七〇五、七九五

右の内金二萬七千九百二十九圓十二錢五厘は、官庫より補助し、殘額金十一萬五千七百七十六圓六十四錢二厘は、各人民に初度附與する地券證印税を以て支辨したり。民費の費途は、反別提理の爲めに、間竿・間繩・野帳・杭、或は地順帳、及び地圖を製するが如き、又地價調理の爲め地等を分ち、收穫を算勘して、之を帳記し、官に進呈するが如き等にして、之を調査するが爲めに、或は測量師及び筆算者を傭使して、殊に多額を耗せしものなりと云ふ。其支出年度別を記せば、左の如し。

| （年度） | （支出額） |
| --- | --- |
| 明治九年 | 三七五、〇一六、三一八 |
| 同十年 | 一五四、〇六三、五五九 |
| 同十一年 | 七九、六五二、九〇四 |
| 同十二年 | 四六、六一六、二四八 |
| 同十三年 | 一〇四、一七四、〇六〇 |
| （計） | 七五九、五二三、〇八九 |

## 第五節　地　券

地券は土地所有の公證にして、併せて、納租の標目たり。蓋し舊時の慣行に於ける人民名受地と稱するものも、永代賣買の禁止、植物の制限、其他種々の檢束法に抑掣せられ、所有の權明確ならず。且從來地籍錯亂、名實齟齬枚擧に遑あらず。是に於て明治政府は、先づ地種の區別を明晰にし、人民の所有權を確定せんが爲め、地券を附與すべきの議を決し、五年一月、始めて地券を東京府下に發行し、次いで京・坂二府、其他從來無税の市街に及べり。同年二月、田畑永代賣買の禁を解き、其賣買毎に地券を附與するの規則を頒布し、同年七月、全國民有の土地一般地券を發行すべき旨を令せり。此時に當りてや、猶舊税法履行中なるを以て、只其地目・歩積、及び其地方の賣買權を登記するのみ。然り而して之を授與する、未だ半を了せざるの際、六年七月、地租改正法の頒布あり。爾來調査整頓の部分より、更正の反別、及び地價・地租を記載して、精覈の地券を下附せり。本縣にて交附せられたる地券の筆數、耕宅地百三十七萬三千百十八にして、一筆當り段別は、七畝二十六歩弱なり。此時に於ける本縣の耕宅地、土地所有者人員は十二萬六千七百

十三人にして、一人當り段別は八段五畝五步、地價は金二百三十八圓四十五錢二厘餘、一人當地租金は五圓九十六錢一厘なり。之を全國耕宅地所有者一人當りに比較するに、反別に於て四畝二十五步多く、地價に於て金三十圓六錢二厘三毛少く、一筆當りの反別に於ては二畝六步多く、所有者一人當りの筆數は、本縣は十筆八分にして、是れ全國當り十四筆二分弱より少し。

地券證印税收入額は、明治六年一月より事業整頓に至るまで、金十一萬五千七百七十六圓六十四錢二厘なりき。（群馬縣布達令書・大藏省地租改正報告書。）

# 第五章　縣の自治

## 第一節　縣　會

本縣の自治は、明治十一年發布の府縣會規則に基きて開かれたる縣會に端緒を發したり。蓋し明治政府の理想とする所、早晩立憲自治の制度を確立するに在りしが如しといへども、維新當初は百事草創に際したると、民情の幼稚なるとにより、暫く地方の治務も官治の專行と爲したり。而も其間本縣(熊谷縣時代。)にては、明治六年、大小區集會を設け、政府にては明治八年地方官會議を召集し、民意暢達、上下輯睦の機關とし、徐に地方自治の機運を促進したるが、明治十一年に至りて、始めて府縣會規則を發布し、府縣に府縣會を開き、地方税を以て支辨すべき經費の豫算、及びその徵收方法を議定し、府知事・縣令はこの議決によりて、地方費所屬の事業を施行すべきことゝなれり。本縣は明治十二年より之を實施して、同年三月十日までに議員選擧を了り、五月二日を以て、第一回通常縣會を曲輪町なる群馬縣師範學校の新築校舍に開けり。此際楫取縣令の開會の辭、宮崎議長の開

會の答辯は、當時に於ける官民の縣會に對する思想の一端を窺ふに足るを以て、左に之を議事錄より抄錄す。

## 第一回通常縣會開會式辭

舊來ノ因襲、在上專制ノ權ヲ移シ、廣ク衆庶ノ情志ヲ通暢セントスル縣會ノ開設ニシテ、ソノ當選ノ議員タル者、乃チ衆民ノ依賴ヲ負ヒ、一國ノ代議ニ立チ、此ヨリ較々治體ニ質參スルコトヲ得セシムルモノナレバ、ソノ責實ニ重ク、而シテ其擬議ノ當否ニヨリテ、無限ノ福祉ヲ來スモ、或ハ百事ノ委頓ヲ招クモ、渾テ爰ニ胚胎スヘシ。加フルニ來裔ノ軌範ヲ取ルベキ第一會ノ始メニ當レバ、一層議事ノ正當練實ヲ盡シ、此擧ノ果シテ闔縣福祥ノ基礎ニシテ、人民ヲシテ實利ニモ沾被セシムアルヲ、諸員ノ自ラ期待センコトヲ望ム。若然ラズシテ逾超願望、平生ノ薀有ヲ傾倒セザルカ或ハ一隅ノ偏ヲ主張シ徒ニ立異ヲ以テ自ラ高シト信認スル等ニ至ラバ、流弊ノ及ブ所、又往時專權者ノ上ニ出デ、縣會ノ實ヲ失ヒ、以テ衆庶委託ノ旨ニ背馳スルアラントス。意フニ議員各位、今日ノ選ニ膺ル者、此等ノ事ニ於テ豫メ講明スル所アラン。必ズ喋々ヲ須ズト雖、素彦一日ノ長ヲ以テ、此縣ニ守牧トナリ、諸員ト其間ニ周旋ヲ得ルヲ以テ、此ニ議員ノ自ラ期待スベキ所ト、利病ノ制スル所トヲ併セテ告

ク。諸員諒レ之。

明治十二年五月二日　　縣令　楫取素彦

縣會閉場式御演述按

本年本縣通常會タル、農蠶繁熾ノ候ニ際スルモ、各員公衆ノ爲メ、審議討論至ラザルナシ。眞ニ能ク其職ヲ盡スト謂ベシ。素彦實ニ感賞ニ堪ヘザルナリ。今玆ニ閉場式ヲ行フニ當リ、各員ノ勞ヲ謝シ、併テ此會ノ追年熾盛増滋、公衆ノ便益タルヲ希望ス。

明治十二年六月五日　　長官

宮崎議長答辭

今日衆庶ヲシテ地方財政ノ一部ニ參與セシムルモノハ、民力ヲ愛重シ、以テ國本ヲ養成スルノ意ニアラズシテ何ゾヤ。是本年通常縣會ノ開設アル所以ナリ。有敬等駑劣ヲ以テ、議員ノ重任ヲ負擔セシヨリ、夙夜惟恐ル、議事或ハ當ヲ得ズ、人民委託ノ重キニ負クアランコトヲ。曩ニ數日討議決定スル所ヲ以テ上申セシニ、幸ヒニ允准ヲ蒙リ、今閉場ノ盛典ニ當テ、閣下ノ勞辭ヲ忝フス。感謝ノ至リニ堪ヘザルナリ。若シ有敬等ガ議討セシ所ノ結果ヲシテ、萬一ノ公益ヲ將來ニ生ズルアラシ

ノ八亦餘榮アリト謂フ可シ。因テ滿場議員ニ代リ、玆ニ答辭ヲ呈シ、併テ本會ノ追年益隆盛ナランコトヲ拜祈ス。

明治十二年六月五日　　　　議長　宮崎有敬

かくて明治十三年、府縣會の改正により、常置委員てふ行政參班の機關を設けられたるより、明治十四年某月、常置委員數名をおけり。その數度の改正を經、明治二十三年に至り、法律第三十五號を以て、府縣制を公布せられ、本縣も明治三十年四月一日を以て實施し、常置委員に代ふるに縣參事會を以てせり。これより縣は完全なる自治團體となり、地方長官は國の行政機關たると共に、縣自治體の行政機關となり、縣は教育・產業・交通・水利基本財產の造成等、各般の經營をなし得て、今日に至る等、各府縣に同じ。而して明治十二年、第一回通常縣會開會以來の概略は、別表の如し。

一　縣會議員選擧期日表

| (回次) | (選擧期日) | (種別) | (備考) |
|---|---|---|---|
| 一 | 明治十二年三月十日マデ | 總選擧 | 初度 |
| 二 | 同　十三年五月 | 半數改選 | 、 |

| | | | |
|---|---|---|---|
| 三 | 同 十五年三月 | 半數改選 | |
| 四 | 同 十七年四月十七日マデ | 半數改選 | |
| 五 | 同 十九年十二月 ? | 半數改選 | ? |
| 六 | 同 二十一年 ? | 半數改選 | ? |
| 七 | 同 廿三年二、二六—二八 | 半數改選 | |
| 八 | 同 廿四年二、二五—三、二一 | 總選擧 | 廿四年一月一日解散ニツキ |
| 九 | 同 廿五年三、二一—三、二六 | 半數改選 | |
| 一〇 | 同 廿七年三、一六—三、二一 | 半數改選 | |
| 一一 | 同 廿九年三、一〇—一四 | 半數改選 | |
| 一二 | 同 三十年四月十五日 | 總選擧 | 府縣制施行(明治三十年四月一日ヨリ)ニツキ總選擧トナル |
| 一三 | 同 三十二年九月廿五日 | 同 | |
| 一四 | 同 三十六年九月廿五日 | 同 | |
| 一五 | 同 四十年九月廿五日 | 同 | |
| 一六 | 同 四十四年九月廿五日 | 同 | |
| 一七 | 大正四年九月廿五日 | 同 | |
| 一八 | 同 八年九月廿五日 | 同 | |
| 一九 | 同 十二年八月廿七日 | 同 | |

二　縣會議員定員數異動表（其一）　郡市分合以前

| （郡名） | （明治一二、三、一五） | （明治一三、五、二〇） | （明治一五、一、一） | （明治一九、一二、二四） |
|---|---|---|---|---|
| 東群馬 | 二 | 二 | 三 | 三 |
| 西群馬 | 五 | 五 | 五 | 五 |
| 片岡 | 二 | 二 | 三 | 一 |
| 碓氷 | 三 | 三 | 四 | 四 |
| 吾妻 | 二 | 二 | 四 | 四 |
| 利根 | 三 | 三 | 四 | 四 |
| 南甘樂 | 二 | 二 | 三 | 二 |
| 北甘樂 | 三 | 三 | 五 | 五 |
| 多胡 | 二 | 二 | 三 | 二 |
| 綠野 | 二 | 二 | 四 | 四 |
| 那波 | 二 | 二 | 三 | 三 |
| 佐位 | 二 | 二 | 四 | 四 |
| 南勢多 | 四 | 四 | 五 | 五 |
| 北勢多 | 二 | 二 | 三 | 一 |

| （郡市名） | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 山田 | 三 | 三 | 四 | 四 |
| 新田 | 二 | 三 | 四 | 四 |
| 邑樂 | 三 | 三 | 五 | 五 |
| （合計） | 四四 | 四五 | 六六 | 六〇 |

三　縣會議員定員數異動表（其二）

| （郡市名） | （明治三〇、四、一） | （明治三三、七、一四） | （明治三八、一、三） | （明治四二、一二、一三） | （大正四、一、二九） | （大正八、八、八） | （大正一二、二、三） |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 勢多 | 三 | 三 | 四 | 四 | 四 | 四 | 四 |
| 群馬 | 六 | 五 | 五 | 五 | 五 | 五 | 五 |
| 多野 | 二 | 二 | 三 | 三 | 三 | 三 | 三 |
| 北甘樂 | 三 | 三 | 三 | 三 | 三 | 三 | 三 |
| 碓氷 | 二 | 二 | 二 | 二 | 二 | 二 | 二 |
| 吾妻 | 二 | 二 | 二 | 二 | 二 | 二 | 二 |
| 利根 | 二 | 二 | 二 | 二 | 二 | 三 | 三 |
| 佐波 | 三 | 三 | 三 | 三 | 三 | 三 | 三 |
| 新田 | 二 | 二 | 二 | 二 | 二 | 二 | 二 |
| 山田 | 三 | 三 | 三 | 三 | 三 | 三 | 二 |

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 邑樂 | 三 | 三 | 三 | 三 | 三 | 三 | 三 |
| 前橋 | 一 | 一 | 一 | 二 | 二 | 二 | 二 |
| 高崎 | — | 一 | 一 | 一 | 二 | 二 | 一 |
| 桐生 | — | — | — | — | — | — | 一 |
| (合計) | 三二 | 三三 | 三四 | 三五 | 三六 | 三七 | 三六 |

備考

(一)明治廿三年五月、法律第三十五號府縣制、及び明治廿四年六月、勅令第五十九號府縣會議員定數規則により改正。

(二)明治三十二年七月二十一日、群馬縣令第二十九號を以て、明治三十二年三月、法律第六十四號府縣制、及び同年五月內務省令第十七號により、各選擧區に於て選擧すべき縣會議員の數を定めたるも、明治三十年四月一日分と異動なし。

## 四 縣會一覽表

| (年次) | (會別) | (開閉會月日) | (會期) | (議員定數) | (開會當時ノ長官氏名) | (議長氏名) | (副議長氏名) | (特殊事項) |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 明治二三年 | 通常 | 五二—六五 | 三五 | 四四 | 楫取素彦 | 宮崎有敬 | 星野長太郎 | 會期延長 |
| 同 二三年 | 同 | 五一三—五二七 | 一五 | 四四 | 同 | 同 | 同 | 會期延長 |
| 同 | 臨時 | 一二二二—一二三〇 | 九 | 四五 | 同 | 同 | 星野耕作 | |

| | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 明治一四年 | 臨時 | 三、三―三、五 | 三 | 四五 | 楫取　素彦 | 宮崎　有敬 | 星野　耕作 | |
| 同 | 通常 | 三、八―四、一 | 二五 | 四五 | 同 | 同 | 同 | |
| 同一五年 | 同 | 三、三―四、一〇 | 四〇 | 四五 | 同 | 同 | 同 | 會期延長 |
| 同 | 臨時 | 四、二一― | 一 | 四五 | 同 | 同 | 同 | 改選再任 |
| 同 | 同 | 八、二五―九、二 | 九 | 四五 | 同 | 同 | 同 | |
| 同一六年 | 通常 | 三、二六―四、二三 | 二九 | 四五 | 同 | 同 | 同 | |
| 同一七年 | 同 | 三、二二―四、二四 | 三四 | 四五 | 同 | 同 | 同 | |
| 同 | 臨時 | 四、二五― | 一 | 六六 | 同 | 湯淺　治郎 | 同 | 役員改選 |
| 同 | 同 | 七、一七―二三 | 七 | 六六 | 同 | 同 | 同 | |
| 同一八年 | 同 | 三、一二―一七 | 六 | 六六 | 佐藤　與三 | 同 | 同 | |
| 同 | 通常 | 三、一八―四、一六 | 三〇 | 六六 | 同 | 同 | 同 | |
| 同 | 臨時 | 九、二三―二六 | 五 | 六六 | 同 | 同 | 同 | |
| 同 | 通常 | 一一、二四―一二、二三 | 三〇 | 六六 | 同 | 同 | 同 | 府縣會開會期三月ヲ十一月ニ改ム |
| 同 | 臨時 | 一二、二四― | 一 | 六六 | 同 | 同 | 宮口　次郎 | 役員改選 |
| 同一九年 | 臨時 | 一〇、一一―一三 | 三 | 六六 | 同 | 同 | 同 | |
| 同 | 通常 | 一一、二四―一二、二三 | 三〇 | 六六 | 同 | 同 | 同 | |
| 同二〇年 | 臨時 | 三、一〇―一三 | 三 | 六六 | 同 | 同 | 同 | |

| | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 明治二〇年 | 臨時 | 八、二三—二六 | 四 | 六六 | 佐藤與三 | 湯淺治郎 | 宮口次郎 | |
| 同 | 同 | 八、一八—二四 | 七 | 六六 | 同 | 同 | 同 | |
| 同 | 通常 | 一一、二〇—一二、一九 | 三〇 | 六〇 | 同 | 同 | 同 | |
| 同二一年 | 臨時 | 三、一三—一六 | 四 | 六〇 | 同 | 同 | 同 | |
| 同 | 同 | 一一、一五—一七 | 三 | 六〇 | 同 | 同 | 同 | |
| 同 | 通常 | 一一、一九—一二、一八 | 三〇 | 六〇 | 同 | 同 | 同 | |
| 同 | 臨時 | 三、一九—二〇 | 二 | 六〇 | 同 | 同 | 同 | |
| 同 | 同 | 三、二〇—二二 | 三 | 六〇 | 同 | 同 | 同 | |
| 同二二年 | 同 | 一一、一一—一四 | 四 | 六〇 | 同 | 湯淺治郎 | 同 | 議長選擧 |
| 同 | 通常 | 一一、二四—一二、二三 | 三〇 | 六〇 | 同 | 同 | 同 | |
| 同二三年 | 臨時 | 三、一五—二〇 | 六 | 六〇 | 同 | 同 | 天野宗忠 | |
| 同 | 同 | 一一、二二—二八 | 七 | 六〇 | 同 | 同 | 同 | |
| 同 | 通常 | 一一、二八—一二、二九 | 一二 | 六〇 | 同 | 天野宗忠 | 宮口次郎 | 三、一八　一四中止。三、二九再中止。二四、一二解散 |
| 同二四年 | 同 | 三、一七—二〇 | 四 | 六〇 | 同 | 宮口次郎 | 竹内鼎三 | 通常會ノ繼續 |
| 同 | 臨時 | 一一、一一—一四 | 四 | 六〇 | 中村元雄 | 同 | 同 | |
| 同 | 同 | 一一、二四—二七 | 四 | 六〇 | 同 | 同 | 同 | |
| 同 | 通常 | 一一、二八—一二、二七 | 三〇 | 六〇 | 同 | 同 | 竹内鼎三 | |

| | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 明治二五年 | 臨時 | 四、一四—二七 | 七 | 六〇 | 中村　元雄 | 野村　藤太 | 野口茂四郎 | 一九中止。二七中止ヲ解ク。役員改選 |
| 同 | 同 | 一一、一九—二五 | 七 | 六〇 | 同 | 同 | 同 | |
| 同 | 通常 | 一一、二六—一二、二五 | 三〇 | 六〇 | 同 | 同 | 同 | |
| 同　二六年 | 臨時 | 六、一九—二一 | 三 | 六〇 | 同 | 同 | 同 | |
| 同 | 同 | 一一、二三—二六 | 五 | 六〇 | 同 | 同 | 同 | |
| 同 | 通常 | 一一、二七—一二、二六 | 三〇 | 六〇 | 同 | 同 | 同 | |
| 同　二七年 | 臨時 | 三、二九—四、一九? | 二?二 | 六〇 | 同 | 高津仲次郎 | 本島　自柳 | 四、一一中止。四、一九中止ヲ解ク |
| 同 | 同 | 一一、二一—二七 | 七 | 六〇 | 同 | 同 | 山同藤十郎 | |
| 同 | 通常 | 一一、二八—一二、二六 | 二九 | 六〇 | 同 | 野村　藤太 | 須藤　嘉吉 | |
| 同　二八年 | 臨時 | 九、二七—一〇、三 | 七 | 六〇 | 同 | 同 | 同 | |
| 同 | 通常 | 一一、一八—一二、一七 | 三〇 | 六〇 | 同 | 同 | 同 | |
| 同　二九年 | 臨時 | 三、二四—二七 | 四 | 六〇 | 阿部　浩 | 高津仲次郎 | 山口　六平 | |
| 同 | 同 | 九、二八—一〇、三 | 六 | 六〇 | 石坂　昌孝 | 同 | 同 | |
| 同 | 通常 | 一一、二六—一二、二五 | 三〇 | 六〇 | 同 | 同 | 同 | |
| 同　三〇年 | 臨時 | 四、二七—三〇 | 四 | 三二 | 古莊　嘉門 | 同 | 田島　善平 | 役員改選。定員數改正 |
| 同 | 同 | 七、一〇—一五 | 六 | 三二 | 同 | 同 | 同 | |
| 同 | 通常 | 一一、二二—一二、一五 | 二四 | 三二 | 同 | 同 | 同 | |

| 年 | 種別 | 會期 | 日數 | 議員數 | 議長 | 副議長 | 參事會員 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 同三一年 | 通常 | 一一、二四—一二、二三 | 三〇 | 三二 | 草刈親明 | 高橋謙三郎 | 田島善平 | |
| 同三二年 | 臨時 | 一〇、六—七 | 二 | 三二 | 古莊嘉門 | 下城彌一郎 | 田中甚平 | 府縣制改正役員選擧 |
| 同 | 通常 | 一一、二五—一二、二四 | 三〇 | 三二 | 同 | 同 | 同 | |
| 同三三年 | 臨時 | 四、一七—二三 | 七 | 三二 | 同 | 同 | 同 | |
| 同 | 通常 | 一一、二三—一二、二二 | 三〇 | 三二 | 小倉信近 | 同 | 同 | |
| 同三四年 | 同 | 一一、二二—一二、一九 | 二八 | 三二 | 關清英 | 同 | 同 | |
| 同三五年 | 同 | 一一、二五—一二、二〇 | 二六 | 三二 | 吉見輝 | 同 | 同 | |
| 同三六年 | 臨時 | 一〇、二〇—二二 | 三 | 三二 | 同 | 關根作三郎 | 德江亥之助 | 改選後ノ役員選擧 |
| 同 | 通常 | 一一、二〇—一二、一八 | 二九 | 三二 | 同 | 同 | 同 | |
| 同三七年 | 臨時 | 三、一一—一六 | 六 | 三二 | 同 | 同 | 同 | |
| 同 | 通常 | 一一、二五—一二、二三 | 二九 | 三二 | 同 | 同 | 同 | |
| 同三八年 | 同 | 一一、二—一二、一 | 三〇 | 三四 | 同 | 江原桂三郎 | 同 | 關根議長辭職 |
| 同三九年 | 臨時 | 一一 | ? | ? | 同 | 同 | 同 | |
| 同 | 通常 | 一一、二四—一二、二〇 | 二七 | 三四 | 有田義資 | 同 | 同 | |
| 同四〇年 | 臨時 | 一〇、一四— | 一 | 三四 | 同 | 星野源左衛門 | 新井佐五郎 | |
| 同 | 同 | 一一、一二— | 一 | 三四 | 南部光臣 | 高津仲次郎 | 正田虎四郎 | 正副議長辭職ニ付改選 |
| 同 | 通常 | 一一、二九—一二、二三 | 二五 | 三四 | 同 | 同 | 同 | |

| 年次 | 種別 | 會期 | 日數 | | | | | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 明治四一年 | 臨時 | 九、二一— | 一 | 三四 | 神山閏次 | 高津仲次郎 | 正田虎四郎 | |
| 同 | 通常 | 一一、二一—一二、二二 | 三二 | 三四 | 同 | 同 | 同 | |
| 同　四二年 | 臨時 | 一、三〇— | 一 | 三四 | 同 | 同 | 同 | |
| 同 | 同 | 九、一〇— | 一 | 三四 | 同 | 同 | 同 | |
| 同 | 通常 | 一一、二〇—一二、二六 | 三七 | 三五 | 同 | 同 | 同 | |
| 同　四三年 | 同 | 一一、二一—一二、一三 | 二三 | 三五 | 同 | 同 | 同 | |
| 同 | 臨時 | 三、一九—二三 | 五 | 三五 | 同 | 同 | 同 | |
| 同　四四年 | 同 | 一〇、一一—一六 | 六 | 三五 | 同 | 芥川辰次郎 | 後藤文平 | 改選後ノ役員選擧 |
| 同 | 通常 | 一一、二〇—一二、一七 | 二八 | 三五 | 同 | 同 | 同 | |
| 大正元年 | 同 | 一一、一—一一、三〇 | 三〇 | 三五 | 依田銈次郎 | 星野源左衛門 | 同 | 芥川議長辭任 |
| 同　二年 | 同 | 一一、二二—一二、一四 | 二三 | 三五 | 大芝惣吉 | 同 | 同 | |
| 同　三年 | 同 | 一一、二二—一二、二一 | 三〇 | 三五 | 三宅源之助 | 同 | 同 | |
| 同　四年 | 臨時 | 一〇、一二—一五 | 四 | 三六 | 同 | 飯塚志賀 | 岡田養平 | 改選後ノ役員選擧 |
| 同 | 通常 | 一一、二二—一二、二一 | 三〇 | 三六 | 同 | 同 | 同 | |
| 同　五年 | 同 | 一一、九—? | ? | 三六 | 同 | 同 | 同 | |
| 同　六年 | 通常 | 一一、一五—一二、一四 | 三〇 | 三六 | 中川友次郎 | 同 | 同 | |
| 同　七年 | 同 | 一一、二二—一二、二一 | 三〇 | 三六 | 同 | 同 | 同 | |

| | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 大正八年 | 臨時 | 九、一―三 | 三 | 三六 | 大芝惣吉 | 飯塚志賀 | 岡田養平 | 新築議事堂ニテ開會 |
| 同 | 同 | 一〇、一八― | 一 | 三七 | 同 | 木島白柳 | 都木重五郎 | 總改選後役員選舉 |
| 同 | 通常 | 一一、三〇―一二、二九 | 三〇 | 三七 | 同 | 同 | 同 | |
| 同　九年 | 同 | 一一、二二―一二、二一 | 三〇 | 三七 | 同 | 同 | 同 | |
| 同　一〇年 | 臨時 | 一〇、二八―一一、二 | 六 | 三七 | 同 | 山田平太郎 | 赤石武一郎 | 正副議長辭職改選 |
| 同 | 通常 | 一一、二五―一二、二四 | 三〇 | 三七 | 同 | 同 | 同 | |
| 同　一一年 | 臨時 | 九、九―一五 | 七 | 三七 | 同 | 同 | 同 | |
| 同 | 通常 | 一一、二六―一二、二四 | 二九 | 三七 | 山岡國利 | 同 | 同 | |
| 同　一二年 | 臨時 | 一〇、一五―一六 | 二 | 三六 | 同 | 森川抱次 | 田中京四郎 | 總改選後役員選舉 |
| 同 | 通常 | 一一、二六―一二、二五 | 三〇 | 三六 | 同 | 同 | 同 | |
| 同　一三年 | 臨時 | 一、三〇― | 一 | 三六 | 同 | 同 | 同 | 御成婚記念事業費 |
| 同 | 通常 | 一一、一五―一二、一三 | 二九 | 三六 | 牛塚虎太郎 | 同 | 同 | 縣廳舍改築案 |
| 同　一四年 | 臨時 | 九、二八―二九 | 二 | 三六 | 同 | 同 | 同 | |
| 同 | 通常 | 一一、一四―一二、一二 | 二九 | 三六 | 同 | 青山德太郎 | 同 | |
| 同　一五年 | 臨時 | 六、一六―一七 | 二 | 三六 | 同 | 同 | 同 | |
| 同 | 通常 | 一一、一五―一二、一四 | 三〇 | 三六 | 同 | 林庸太郎 | 同 | |
| （計） | 通常<br>臨時 | 五〇回<br>五四回 | | | 長官一九人 | 議長一八人 | 副議長二人 | |

以上表示したる如く、縣自治制布かれて以來四十年、縣會の開かれたること通常・臨時合せて百四回、その間縣會の經過を調査するに、時により波瀾曲折なきにしもに非ず。就中明治二十三年十一月の通常縣會に於ては、縣知事佐藤與三に辭職勸告を決議し、中止・再中止を受けて尙取消さず、遂に解散を命ぜられたると、明治二十五年四月の臨時縣會に於ては、半數改選選擧に於て、中村縣知事が選擧干涉をなしたりとて、選擧干涉に關する質問をなし、又明治二十七年三月の臨時縣會に當り、役員選擧に於て議員收賄の件を附議して、共に中止を受けたると、及び明治四十年十月十四日開會の臨時縣會に於て行ひたる役員選擧を違法として、內務大臣より取消を命ぜられ、知事まで交迭して、翌十一月十二日・再度臨時縣會を召集して、役員を選擧したるとは、縣會史中の大波瀾に屬せり。明治四十年十月十四日開會の臨時縣會役員選擧に於て、假議長指名にて、議長に星野源左衞門・副議長に新井佐五郎、參事會員に田村庄作・飯塚志賀・今井今助・今泉健次郎・眞砂傳次郎・岡田又八の六名を當選せしめたるに對し、議員の一人黑田孝藏異議を唱へ、贊成者ありたれども、問題とせずして閉會したり。然るに此の指名選擧に反對したる縣會議員一同は、之を違法として內務大臣原敬に陳情せり。依つて內務

大臣は其陳情を容れ、選擧を違法として、先きの役員選擧を取消し、知事有田義資を休職とし、後任には南部光臣を任命し、翌十一月十二日、再び臨時縣會を召集して、役員選擧を行ひ、議長に高津仲次郎、副議長に正田虎四郎、參事會員に根岸峨太郎・大竹勝衛・黒田孝藏・新井佐五郎・金井慎三・福澤常五郎の六名當選して局を結べり。

## 附　記

### 公娼存廢に關する本縣の沿革要領

明治十五年三月十七日、通常縣會ニ於テ、娼妓廢止ノ建議案ヲ可決シ、之ヲ建議セリ。縣令楫取素彦ハ之ヲ是認シ、其年四月十四日ヲ以テ、明治廿一年六月限リ、貸座敷及ビ娼妓營業ヲ廢止スルコト、併ニ貸座敷營業ハ新ニ之ヲ許サヾルコトヲ布達シ、以テ一面ハ縣會ノ建議ヲ容レ、一面ハ當業者ヲシテ漸次正業ニ就カシムルノ猶豫ヲ與ヘタリ。

然ルニ其廢止ノ期切迫スルニ至リシモ、當業者ハ正業ニ就クノ實ナク、將ニ活路ヲ失セントスルノ悲況ヲ呈セリ。知事佐藤與三ハ之ヲ諒察シ、明治廿一年五月廿六日ヲ以テ、娼妓貸座敷營業ハ當分延期スル旨發令セリ。爲メニ其年通常縣會ニ於テ、其延期ノ理由及ビ當分ノ意義ニ向ツテ、質問百出紛擾ヲ極ムルニ至レリ。

明治二十二年十一月廿八日、通常縣會ニ於テ、再ビ廢娼建議案ヲ可決シ、之ヲ建議セリ。且ツ賦金及ビ檢徴費ノ削除ニ向テハ、當業者ヲシテ之ヲ自辨セシムルノ方法ヲ執レリ。

明治廿三年三月三十一日、貸座敷免許地中、綠野郡新町・碓氷郡安中町・北甘樂郡妙義町ノ三箇所ハ、其年九月限リ廢止スル旨發令セリ。是レ此ノ三箇所ハ營業者ノ數僅少ナルノミナラズ、近接地ニ在ル同業者ニ壓到サレ、殆ンド自滅ノ傾向ヲ來スト同時ニ、漸ク正業ヲ兼有スルニ至リタルニ依ル。碓氷郡板鼻町・同郡坂本町・那波郡玉村町・新田郡木崎町・邑樂郡川俣村・北甘樂郡一ノ宮町・西群馬郡倉賀野町ノ七箇所ハ、事情大ニ反スルモノアルヲ以テ、姑ク延期ノ儘据置クコトニ決定セリ。然ルニ其年通常縣會ニ於テハ、理事官ノ處置、縣會ノ希望ヲ滿タサズ。廳議ノアル處果シテ如何トノ質問ヲ提起シ來レリ。是ニ於テ傍聽禁止ノ請求ヲナシ、小會議ニ於テ既往ニ對スル處置ニ就イテ理由ヲ說明シ、且ツ延期中ノ七箇所モ、明治廿六年十二月限リ全廢スルコトニ廳議決定セリトノ答辯ヲ與ヘタリ。

明治廿四年九月十二日、縣令第三十九號ヲ以テ、明治二十六年十二月限リ、貸座敷及ビ娼妓營業廢止ノ旨發令シタリ。其理由ハ、拙者知事トシテ本縣ニ赴任以來、管下一般ノ狀況ヲ觀察スルニ、大勢既ニ廢娼ニ歸シ、營業者モ亦到底其業務ノ永續シ

雖キヲ自覺スルニ至リシノミナラズ、本縣ノ娼妓ナルモノハ、大ニ他ト情況ヲ異ニシ、所謂舊時ノ飯盛ナルモノニシテ、其所在地ノ如キモ前橋・高崎・桐生・伊勢崎等ノ如キ繁盛ナル市街地ニ非ズシテ、僻遠ナル舊街道タリ。且ツ其娼妓ノ現數ハ僅ニ三百四十餘名ニ過ギズ。而シテ此公娼ノ外、各地既ニ密賣淫ノ行ハルルアリ。明治二十三年ノ調査ニ於テ、其嫌疑婦ノ數一千二百二十七名ノ多キヲ得タリ。是ニ於テ此娼妓アルガタメニ、密賣淫ヲ杜絶スルノ効ナキヲ知ルト同時ニ、之ヲ廢止スルモ特ニ密賣淫ヲ増加シテ、風俗ヲ壞亂シ、黴毒ヲ傳播スル如キ大害ナキヲ豫見シタルニ因ル。而シテ此廢止令ハ斷然實行シタリ。

明治二十七年、通常縣會ニ於テ、議員中公娼設置ノ必要ヲ唱ヘ、其建議案ヲ提起セント試ミタルモノアルモ、遂ニ其目的ヲ達セズ。爾來運動ヲ繼續シテ、漸ク其勢力ヲ増スニ至レリ。

明治二十八年十二月十六日、通常縣會ニ於テ、公娼設置ノ建議案ヲ可決シ、之ヲ建議スルニ至レリ。當時六十名ノ議員中、公娼・廢娼兩派トモ三十名ヅツニシテ、互角ノ勢ナリシモ、廢娼派ハ議長ヲ出スガ爲メ、一名ノ不足ヲ見ル。茲ニ於テ愈公娼問題ノ雌雄ヲ決セントスルニ際シ、正副議長ヲ始メ、廢娼派一同退席シ、議場ハ公娼派ノ獨占スル所ニナリ、假議長ヲ設ケテ議事ヲ進行シ、六名ニ對スル二十三名ノ多數

ヲ以テ、公娼建議案ヲ可決シタリ。而シテ其少數者六名ハ單ニ公娼設置ノ必要ナルコトヲ決議スルニ止メオカントイフニアリシナリ。

前述ノ如キ次第ナルヲ以テ、公娼設置ニ係ル建議ノ如キハ、果シテ縣會議員中多數ノ意志ヲ表明シタルモノト見做シ難ク、又縣民ノ輿望ナリトモ斷定シ得ザルナリ。然レドモ今ヤ公娼設置ノ希望ハ、漸次其氣焰ヲ高メ、彼等ハ既ニ地點ノ競爭ニマデ熱中シ居ルノ狀況ナリトス。然ルニ其後明治三十年十二月十四日、通常縣會ニ於テ、前年本縣ニ公娼設置ノ必要アリトシテ提出シタル建議ハ、本縣ノ公論ニ背反シタル建議ナリトノ理由ヲ以テ、之ガ取消ノ決議ヲナシタリ。「然ルニ其後」以下草刈知事引繼書。

越エテ明治三十一年八月、草刈知事着任以來、公娼設置ノ運動ヲナスモノアリ。知事モ亦之ガ必要ヲ民間ニ公言セラレテヨリ、一層氣焰ヲ熾ンナラシメ、此間利慾的運動者ハ晝夜ヲ分タズ、東西ニ奔走シ、醜聞百出物論囂々、之ヲ見聞スルニ忍ビザルモノアリ。而シテ縣會議員ノ多數、及ビ縣民中重立テル者ハ、絕對的ニ之ニ反對シ、年來公娼論ヲ唱ヘタルモノモ、此際公娼ヲ許可スベカラズトノ意見ヲ持シ、却テ反對運動ヲナスニ至ル。縣下ノ清議ハ既ニ斯ノ如ク明ナルヲ以テ、強テ此際公娼ヲ設クルノ必要ナキヲ認メ、書記官・警部長・參事官ハ屢草刈知事ニ對シ、公娼急設ノ不可ナル旨ヲ具情シタルモ、聞キ入レラレズ。遂ニ知事ハ廳議ト廳規ヲ顧ミラレ

ハ獨斷ヲ以テ十一月十八日付縣令第五十一號家畜生肉販賣營業場所ノ指定地ヲ同月二十日愈公布セラレタリ。而シテ內務大臣ヨリ右取消ノ縣令ヲ發スベキ旨訓令アリタリ。（石坂知事ノ談話）

# 第二節　貴族院多額納稅者議員

明治二十三年、帝國議會の開設せらるゝや、爾來選擧を行ふこと六回、其中第一回より第五回までは舊選擧法により、第六回より改正法に據りたるものなり。

左に各回に於ける選擧成績を表示すべし。

| （回次） | （選擧年月日） | （當選者氏名） | （生年月） | （出身地） | （當選成績） | （備考） |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 第一回 | 明治二三、六、一〇 | 櫻井伊兵衛 | 安政元年三月 | 群馬郡高崎町 | 十四票中六票 | 一票棄權 |
| 第二回 | 同　三〇、六、一〇 | 本間千代吉 | 安政三年十二月 | 佐位郡赤堀村 | 八票中八票 | 七票棄權 |
| 第三回 | 同　三七、六、一〇 | 同人 | 同 | 同 | 十二票中八票 | 三票棄權 |
| 第四回 | 同　四四、六、一〇 | 江原芳平 | 嘉永元年九月 | 前橋市 | 十五票中十三票 | |
| 第五回 | 大正七、六、一〇 | 櫻井伊兵衛 | 明治二十年十一月 | 高崎市 | 十五票中十五票 | |
| 第六回 | 同　一四、九、一〇 | 本間千代吉 | 明治二十一年六月 | 佐波郡赤堀村 | 八十五票中八十三票 | 不參者七人 選擧前失格者八人 |

## 第三節　衆議院議員

衆議院議員の總選擧は明治二十三年七月一日を第一回とし、爾來回を重ぬる十五、其中につき第六回までは小選擧區制にして、第七回より第十三回まで大選擧區制、第十四回より再び小選擧區制に戻りて、現今に及べり。而して其選擧區割は左の如し。

小選擧區割（第一次）

第一區　東群馬・南勢多・利根・北勢多　四郡定員一名
第二區　新田・山田・邑樂　三郡同
第三區　佐位・那波・緑野・多野・南甘樂　五郡同
第四區　西群馬・片岡・吾妻　三郡同
第五區　北甘樂・碓氷　二郡同

大選擧區制

市部　前橋市一名　高崎市一名
郡部　六名

## 小選擧區制（第二次）

第一區　前橋市　一市定員一名
第二區　高崎市　一市同　一名
第三區　新田・山田邑樂　三郡同　二名
第四區　群馬・吾妻・碓氷　三郡同　二名
第五區　利根・勢多・佐波　三郡同　二名
第六區　多野・北甘樂　二郡同　一名

## 衆議院議員當選者氏名表

| （回次） | （選擧年月日） | （當選者氏名（氏名上ノ數字ハ選擧區番號）） | （備考） |
|---|---|---|---|
| 第一回 | 明治二三、七、一 | (1)新井毫 (2)竹井懿貞 (3)高津仲次郎 (4)木暮武太夫 (5)湯淺次郎 | 明治二四、一二、二五解散 |
| 第二回 | 明治二五、二、一五 | (1)竹内鼎三 (2)金井貢 (3)中嶋祐八 (4)矢嶋八郎 (5)湯淺次郎 | 明治二六、一二、三〇解散 |
| 第三回 | 明治二七、三、一 | (1)新井毫 (2)金井貢 (3)中嶋祐八 (4)木暮武太夫 (5)清水永三郎 | 明治二七、六、二解散 |
| 第四回 | 明治二七、九、五 | (1)新井毫 (2)荒井啓五郎 (3)中嶋祐八 | 明治三〇、一二、二五解散 |

| 回次 | 選挙期日 | 当選者 | 備考 |
|---|---|---|---|
| | | (4)木暮武太夫(5)宮下[illegible]十郎 | |
| 第五回 | 明治三一、三、一五 | (1)久米民之助(2)荒川高三郎(3)高津仲次郎<br>(4)木暮武太夫(5)萩原鐐太郎 | 明治三一、六、一〇解散 |
| 第六回 | 明治三一、八、一〇 | (1)久米民之助(2)金井　貢　(3)中嶋祐八<br>(4)鹽谷五十足(5)齋藤壽雄 | 満期 |
| 第七回 | 明治三五、八、一〇 | (前橋市)下村善右衛門　(高崎市)大河内輝剛<br>(郡　部)久米民之助　須藤嘉吉　中嶋祐八<br>木暮武太夫　日向輝武　細野次郎 | 明治三五、一二、二八解散 |
| 第八回 | 明治三六、三、一 | (前橋市)下村善右衛門　(高崎市)大河内輝剛<br>(郡　部)日向輝武　中嶋祐八　木暮武太夫<br>佐藤虎次郎　久米民之助　高橋庄之助 | 明治三六、一二、一〇解散 |
| 第九回 | 明治三七、三、一 | (前橋市)關口安太郎　(高崎市)宮部　襄<br>(郡　部)須藤嘉吉　木暮武太夫　佐藤虎次郎<br>日向輝武　星野長太郎　武藤金吉 | 満期 |
| 第十回 | 明治四一、五、〇一 | (前橋市)(二)關口安太郎　(高崎市)鈴木久五郎<br>(郡　部)細野次郎　武藤金吉　須藤嘉吉<br>根岸鐺太郎　(二)佐藤虎次郎　日向輝武 | 満期 |

| | | | |
|---|---|---|---|
| 第十一回 | 明治四五、五、一五 | (前橋市)竹越與三郎　(高崎市)矢嶋八郎<br>(郡　部)武藤金吉　(三)細野次郎　根岸蝫太郎<br>日向輝武　葉住利藏　須藤嘉吉 | 大正三、一二、二五解散 |
| 第十二回 | 大正四、三、二五 | (前橋市)大隈信常　(高崎市)矢嶋八郎<br>(郡　部)本間三郎　小林丑三郎　武藤金吉<br>須藤嘉吉　根岸蝫太郎　葉住利藏 | 大正六、一、二五解散 |
| 第十三回 | 大正六、四、二〇 | (前橋市)平田健太郎　(高崎市)土屋全次<br>(郡　部)武藤金吉　田島達策　齋藤壽雄<br>今井今助　本間三郎　兒玉右二 | 滿　期 |
| 第十四回 | 大正一〇、五、一〇 | (1)清水留三郎(2)松井鐵夫　(3)武藤金吉<br>(3)飯塚春太郎(4)木檜三四郎(4)今泉嘉一郎<br>(5)本間三郎　(5)今井今助　(6)齋藤壽雄 | 滿　期 |
| 第十五回 | 大正一三、五、一〇 | (1)清水留三郎(2)小林彌七　(3)武藤金吉<br>(3)飯塚春太郎(4)木檜三四郎(5)生方大吉<br>(5)青木精一　(6)井本常作　(4)木暮正一 | 現在期中 |

(註一)明治四十二年七月佐藤虎次郎退職、七月二十五日補缺選擧、當選中嶋祐八

(註二)明治四十四年七月關口安太郎死去ニテ、同八月八日補缺選擧、當選笹治元

（註三）細野次郎辭職、大正二年五月十日補缺選擧當選中島祐八。同年十一月四日中島祐八死去、同年十二月一日補缺選擧當選高津仲次郎

以上の表示を究むるに、延人員百四名なれども、實人員は五十名なり。即ち二回以上當選したるもの二十四名。最多きは群馬郡の木暮武太夫、山田郡の武藤金吉佐波郡中嶋祐八の七回にして、之に次いでは、碓氷郡須藤嘉吉、多野郡日向輝武の五回、利根郡の久米民之助の四回、勢多郡出身新井毫、新田郡金井貢、高崎市矢嶋八郎、北甘樂郡齋藤壽雄、佐藤虎次郎、佐波郡細野次郎、群馬郡根岸儲太郎、佐波郡木間三郎、多野郡高津仲次郎の三回、碓氷郡湯淺次郎、前橋市下村善右衛門、高崎市大河内輝剛、前橋市關口安太郎、利根郡今井今助、前橋市清水留三郎、新田郡葉住利藏、山田郡飯塚春太郎、吾妻郡木檜三四郎の二回にして、其他は各一回なりとす。

# 第四節　自由民權の發達

## 第一期　搖籃期

中島祐八書を縣會議長に呈す

本縣下に於ける民權自由の思想は、其起原を未だ詳に究めざれど、惟ふに明治七年一月、民選議院設立の建白以來勃興したる世論に刺激せられ、次第に啓發せられたるには非るか。明治十三年一月、佐位郡小保方村の人中嶋祐八は、當時白面の身を以て、天下の形勢を叙し、國會開設請願の主動者たらんことを縣會議長宮崎有敬に呈したり。之と前後して勢多郡下田澤村の人新井毫は、新進の英を以て、立つて民權を唱道し、經綸新誌を發刊したり。是に由つて之を觀れば、明治十二三年頃は、自由民權の氣運縣下に欝勃たりしを知るべし。而も斯の主義の

新井毫の經綸新誌

爲めに、一世の指導者となり、同志を糾合して開發者となりたるは、群馬郡高崎驛の人宮部襄なりとす。襄は舊高崎藩士にして、府藩縣設置の際は、高崎藩の大監察となり、文武學校總裁の職に在りしが、後出でゝ度會・熊本の兩縣に歴任し明治十年、家事の都合により歸國して、本縣に祿仕す。或は警察官、或は師範學校長の

高崎に於ける有信社

職に就きたりしが、其間高崎の同志長坂八郎・伊賀我何人・深井卓爾と共に前橋町齋藤壬生雄・朝岡剛平・小勝俊吉、館林町木呂子退藏・山口重修・森六郎、勢多郡新井毫等と相謀り、高崎驛に有信社を創立し、當時の宿弊たる士農の階級を打破し、專ら自由主義を鼓吹し居たりしが、會〻明治十三年、大阪愛國社の飛檄に接し、深く時勢に鑑みる所あり。決然職を辭し、國會開設期成同盟會に入り、自由民權の說を鼓舞せり。之が爲めに縣下の同主義者猛然として起り、勢頓に振ひたり。明治十三年九月には、上毛有志者の會合を高崎驛覺法寺に開き、國會開設に關し、別記の決議案を作製し、事務所を同驛大信寺に置き、翌月願望書を闕下に捧呈するに至れり。此願望書に調印したる者、上野國十四郡有志人民八千九百八十人、其總代としては長坂八郎・木呂子退藏の二人之に署名したれど、上京委員として外に宮部襄・新井毫・清水永三郎の三人ありき。されど此統率者が宮部襄なりしことは勿論なり。而して其決議案と願望書とは左の如し。

上毛有志大會

明治十三年九月十二日上毛有志會決議案

第一條　請願書草案委員五名ヲ公撰シ、整頓ノ上ハ各會員ヘ遞送スベキコトニ

第二條　各會員ハ交付サレタル草案ニツキ審議ヲ盡シ、本月廿六日ヲ期シ、本局ニ

テ各區委員會ヲ開キ、其當否ヲ決定スベキコト。

但各區ヨリ差出ス所ノ委員ハ三名以下トス。

第三條　上京總代人ハ願意ヲ達センガタメニハ、臨機ノ處置ヲ行フノ權アルベシ。

第四條　上京總代人ノ報道、或ハ事情ニヨリ、臨時大會議ヲ起スコトアルベシ。

但本條ノ場合ニヨリ、本局幹事ハ速ニ各區委員ニ報知シ、各區委員ハ各組擔當人ニ通知スベシ。

第五條　請願書受理之レナキニ於テハ、各區ヨリ更ニ遊說委員ヲ派遣シ、益同志ヲ募集シ、願意洞達ノ手段ヲナスベシ。

第六條　請願書ヲ奉呈スル後、願意洞達スト雖、其組織ノ可否ヲ見ザル內ハ、此團結ヲ解カザルコト。

區　畫

一　一郡衙所轄ノ地ヲ以テ一區トス。

一　一町村或ハ數町村ヲ合セテ一組トス。

役　員

一　上京總代人ハ四名トス。

但、二名ヅツ上京スベキコト。

一　本局事務所ニ幹事三名ヲ置キ、本會ノ諸務ヲ掌ル。

但シ當分高崎有志者ヲ以テ之ニ充ツ。

一　各區ニ委員二名ヲ置キ、其區内ニ關スル諸務ヲ掌ル。

一　各組合ニ擔當人二名若クハ三名ヲ置キ、其町村ニ關スル事ヲ掌ル。

撰擧法

一　上京總代人ハ各區ニ於テ拾名ニツキ一名ノ撰擧人ヲ投票シ、其撰擧人ヲシテ更ニ投票セシムベキ事。

但シ該投票ハ之ヲ委員ニ托シ、來ル廿六日委員會ニ於テ各區立會人ノ上開札スベキコト。

一　各區委員ハ其區内ニ於テ適宜ニ撰定シ、組合擔當人ハ其組合中ニ於テ撰定スベシ。

一　各委員擔當人姓名ハ本局ヘ屆オクベシ。

投票雛形半紙四ツ切。



國會ノ開設ヲ願望シ奉ルノ書

群馬縣下上野國十四郡有志八千九百八十人ノ總代臣長坂八郎、臣木呂子退藏、誠恐

誠惶頓首再拜、謹デ書ヲ我叡聖文武ナル
天皇陛下ニ奉リ赤誠以テ哀訴懇願セント欲ス。臣等不肖謹デ方今我
皇國ノ情勢ヲ觀察スルニ、之ヲ內ニシテハ人民未ダ參政ノ權ヲ得ズ。而シテ風俗愈〻衰壞ス。之ヲ外ニシテハ國權未ダ擴充セズ。而シテ洋夷ノ跋扈日益〻甚シ矣。今夫レ邦家ノ衰運ヲ挽回シテ、人民ヲシテ一心同情、皇室ヲ永遠ニ保護セシムルハ、只國會ヲ開設シテ、君民共治ノ美政ヲ施行スルノ一途アルノミ。是レ闕下ニ哀訴懇願セント欲スル所以ナリ。臣等伏テ惟ルニ我
叡聖文武ナル
天皇陛下、賢クモ明治初年登極ノ肇メ、首トシテ五事ヲ以テ
天地神明ニ盟ハセラル。其第一條ニ曰、廣ク會議ヲ興シ、萬機公論ニ決ス可シト。尋デ八年四月、又
聖詔ヲ下シ給ヒテ曰ク、國家漸次ニ立憲ノ政體ヲ立テ、汝衆庶ト俱ニ其慶ニ賴ラント。臣等奉讀シテ天恩優渥感涙ノ衣襟ヲ沾スヲ知ラザルナリ。嗚呼生レテ此照代ニ遭ヒ、如何ゾ感激興起自治ノ精神ヲ振起シ、進ンデ大政ニ參與シ、以テ
聖旨ノ萬一ニ奉答セザル可ケンヤ。諸縣ノ有志者續々起テ國會ノ開設ヲ願望シテ止マザルハ、此レ固ヨリ輿論ノ歸スル所ニシテ、

聖旨ヲ奉體スルニ外ナラザルコト昭々乎トシテ明カナリ。夫レ天下ノ事物ハ究極アル無シ。假令明君上ニアリ、賢相之ヲ輔佐シ、廟堂其人ニ乏シカラズトナスモ、豈ニ全國ノ衆智衆力ヲ合シテ、萬機ヲ處スルノ愈レルニ若カンヤ。今ヤ我國ノ情況ヲ視察スルニ、上下乖離シ、財政日ニ困難ニ陷リ、條約改正未ダ其效ヲ奏セズ。而シテ虎狼其欲ニ乘ゼントス。抑我
瑞穗洲ハ、四面環海屹トシテ東洋ノ一隅ニ卓立スルノ別乾坤ニシテ、畏クモ
二尊建極垂統シ給ヒシヨリ、皇統連綿天地ト共ニ窮リナク、未ダ曾テ他邦ノ屈辱ヲ被ラザルノ美帝國ナリ。然ルニ今日如此洋夷ノ侮蔑ヲ被リ、タメニ堂々タル我神州ノ權義ヲ汚損スルニ至ル。苟モ我日本人民タル者、眞ニ悲憤慷慨ノ至リニ堪ヘザル處ナリ。而シテ今ヤ條約改正ノ期已ニ既ニ過ルト雖モ、彼ノ貪婪飽クコトナキ外人ハ、言ヲ左右ニ託シテ、連リニ現行條約ヲ保續セシメンコトヲ之レ謀ルニ非ズヤ。此時ニ際シテ日本人民タルモノ、勇往敢爲ノ氣象ヲ振興シ、愛國ノ精神ヲ奮起シテ、之レガ恢復ヲ計ラザルモノハ、上
皇室ニ盡スノ忠ヲ懈リ、下報國ノ責任ヲ放擲セルモノト謂フベシ。果シテ然ラバ今日救世ノ策ヲ講ズル者ハ、叡旨ヲ奉體シテ、天地ノ公道ニ基キ、速ニ國會ヲ開設スルニアルナリ。國會ヲ開設シテ、人民參政ノ權ヲ得、而シテ獨立自治ノ氣象ヲ振作

シ、以テ國家ノ艱難ヲ分擔シ、上下一致、廣ク公議輿論ニ則リ、其宜シキヲ制スルアラバ、

皇室ヲ富嶽ノ安ニ置キ奉リ、財政ノ困難ヲ救濟シ、國權ヲ擴充スル、何ノ難キコトカ之レ有ラン。然リト雖臣等進ンデ國民ノ本分ヲ盡サントスルモ、未ダ天與ノ參政權ヲ得ズ。之ヲ點々ニ付シテ止ンカ、國家ノ危急ヲ如何セン。俯仰シテ天地ニ號泣スルモ、天地應ヘズ。是ヲ之レ我

叡聖至仁至愛ナル

天皇陛下ニ哀訴懇願セズンバ、將タ何レノ處ニ向ツテ訴ヘン乎。仰願クハ陛下臣等ノ衷情ヲ憫察アラセラレ、現今輿論ノ歸スル處ニ隨ヒ、以テ速ニ國會ヲ開設シテ、參政權ヲ付與セサセ給ヒ、明治八年ノ

御聖詔ヲ御實踐アラセラレンコトヲ。臣等國家ノタメ身ヲ忘レ、敢テ尊嚴ヲ冒瀆ス。恐懼戰慄ノ至リニ堪ヘズ。臣等誠恐誠惶、頓首謹言。

明治十三年庚辰十月　日

群馬縣下上野國西群馬郡高崎驛龍見町

士族　長坂八郎

同　縣下同國邑樂郡館林町

士族　木呂子退藏

自由黨員の活動と其末路

當時各府縣の國會開設請願者總代は、陸續上京して諸官衙の門を叩き、或は當路の有司を歷訪する者踵を接するに至りしかば、政府は其煩に堪へず、因つて上書建白の呈出は必ず地方廳を經由すべき法令を發せり。是に於て民權自由の主張者は、中央政府に對して示威運動を爲すの途を失ひ、已むを得ず方針を一變し、民間に勢力を扶植し、徐に目的貫徹を期せんとせり。即ち中央の先覺者は、地方遊說の途に上る者漸く多きを加へ、地方有志亦政治上の結社を設けて、之と策應するに至る。多野郡新町及び其附近の有志高津仲次郎・三俣素平・同愛作・針谷吾作等は、新町に明巳會を興し、東京より嚶鳴社の幹部沼間守一・堀口昇等を聘して、其所說を聽きたるは明治十四年の事にして、高崎驛の有志が板垣退助の東北遊說に際し、高崎劇場に演說會を開き、會後大信寺に懇親會を催し、一行を慰勞したるは、同じく、十四年十月の事なり。かくて縣下の政治思想も次第に進み、國會開設準備として、中央に政黨の組織せらるゝに及び、自由黨創立の會議に列したる本縣人に、宮部襄、齋藤壬生雄等ありき。是より自由黨は縣下に優勢となり、其黨員中には、自由民權說に熱中の餘、明治十五年には、長坂八郎・伊賀我何人・大木權平・松井親民・山口重修・高橋渡等は、自由黨史の所謂福島事件に應援に赴き、連座し

て投獄せられ、明治十七年四月には、北甘樂郡の人清水永三郎は、同志日比遜・三浦桃之助等と共に、東京より杉田定一・宮部襄等、自由黨の名士を聘して、一宮町光明院に政談演說會を開き、其極暴動を誘致し、同類四十二人の疑獄事件を惹起したる等、頗る極端に至りたる者もありしが、否らざる者は穩健の手段を以て、民權の伸張に努めたり。明治十七年三月、伊賀我何人は、東京より片岡健吉・植木技盛等を聘して、減租請願に關する大會を高崎驛に開きたることありき。然るに此年十月、本縣自由黨の頭首宮部襄は、照山峻三謀殺事件に關連し、北海道集治監に幽囚せられ、中央の自由黨亦是月解黨したれば、本縣の自由黨員も亦四方に離散し、本縣自由民權の發達は一頓挫せり。然りといへども自由民權の運動は、之が爲めに停滯したるに非ず。縣下自由黨以外の自由民權家によりて組織せられたる政社ありて、當時盛に活躍し居たれば、自由黨離散後の本縣の民權擴張自由の主張は、此系統に屬せる人士により次第に發達せるは、一面より見て幸福なりとすべきか。

## 第二期　發達期

熟々本縣自由民權の發達の歴史を考ふるに、其搖籃期の主張者は、二派に區別するを得るが如し。即ち士族等と平民派となり。士族派は宮部襄・長坂八郎・木呂子退藏等平民派は新井毫・中島祐八等之を代表する者と見るべし。而して之が牛耳を執りたるは、士族派に屬するものなりしが、既に國會開會願望の目的を達し、愈、政黨の組織を見るに至りては、士族派は多く之に加盟し、平民派は之に賛せず、其有力者は當時施行せられたる縣會に議員として、是等が中心として、別に一旗幟を樹せり。明治十五年三月、縣會議員中の有志湯淺次郎・中嶋祐八・野村藤太・竹内鼎三等發起となり、民權の擴張、地租輕減、自由氣運の發達を目的として、前橋町に上毛協和會を組織し、縣下の有志を糾合し、別に此會員中より創立委員を選定し、上野新聞の發刊を企て、中嶋祐八社長となりて、上毛協和會の機關新聞とせり。其發刊の目的は、人生の自由と社會の改進とを擴張するに在りと明記しあれば、此會の主張、亦自由民權の充實擴張に在りしを知るべし。

### 上毛協和會

此上毛協和會は、其最後は不明なれど、次記の上毛倶樂部なるものは、その後に

上毛倶樂部の組織

言論出版集會の自由を得る建白書

起れる自由黨の後身なるべし。明治二十年十月十二日、本縣縣會議員中高津仲次郎・宮口二郎・中嶋祐八・竹内鼎三・野村藤太等の有志は、發起者となり、前橋臨江閣に上毛有志大會を開き、會集數百名、玆に上毛倶樂部を組織し、民權伸張の運動を起せり。翌十一月廿五日の同倶樂部總會に於て、言論出版集會の自由を得ることの建白書を、元老院に呈出することを決議し、同年十二月十日、宮口二郎・高津仲次郎・關農夫雄の三名は左の建白書を元老院に呈出せり。

言論出版集會ノ自由ヲ得ル建白書

群馬縣上野國中愛國忠誠ヲ體スル人民若干總代某等、謹デ書ヲ捧ゲ、大木元老院議長閣下ニ建言ス。某等近來仰デハ天機ヲ覩、俯シテハ國狀ヲ察スルニ、妖雲霿䨚トシテ、我大日本帝國ヲ掩ヒ、邦家ノ命脈ヲ繫グ所ノ綱索太ダ强カラザルヲ知ルニ足ルモノアリ。是ヲ以テ愛國忠誠ヲ體スル人民某等、夙夜憂愁措ク能ハズ。肯テ鄙蕪ヲ嫌フノ間ナク、敢テ忌諱ヲ憚ルノ遑ナク、爰ニ議ヲ獻シテ以テ閣下ノ明裁ヲ仰ガント欲スル所以ナリ。

伏テ惟ルニ、維新以來、我至仁至愛ナル

天皇陛下ハ、夙夜黽勉、身親ラ艱難ノ衝ニ膺リ、精ヲ勵シ治ヲ求メ、辛苦經營至ラザル

所ナク盡サヾル所ナシ。而シテ元年五事ノ御誓文、億兆撫安ノ聖詔ヲ始メトシ、爾後、數次ノ詔勅、一トシテ天理ニ應ジ、人情ニ適セザルモノアルコトナシ。嗚我ガ天皇陛下ガ、上列聖ニ奉事シ、下斯民ヲ綏撫シ給フノ至孝至仁ナル、天地ノ爲メニ感動スル所ニシテ、蒼龍尾ヲ俛レ、猛虎河ヲ渡ルノ德擧テ稱スベケンヤ。就中五條ノ御誓文ノ如キハ、光輝日月ト與ニ滅セズ、龜鑑萬世ヲ則ラシム。綸言空シカラズ、遂ニ立憲政體ヲ規定セラレ、尋デ國會開設スベキノ詔勅ヲ垂レサセラレタリ。某等人民ハ幸ニ斯ノ聖明ノ代ニ遭フヲ得、億兆ガ熙々トシテ威德ヲ頌揚シ奉ル所以、亦豈偶然ナランヤ。

熟ラ我國現時ノ狀態ヲ諦視スルニ、國會開設ノ期漸ク縮迫スルニ拘ラズ、公議ヲ發揚スベキ言論ノ自由ナク、出版ノ自由ナク、集會ノ自由ナク、纔カニ條例ノ一小範圍ニ喘息スルノ狀ノミニ止マラズ、近來ニ至テハ其範圍層一層ヨリ縮蹙シ、殆ド將ニ絕息セントスルノ境遇ニ際會スルモノ、如シ。某等是ニ至テ往年ノ聖詔ト、今日ノ施設ト相背馳スルヲ疑フナリ。啻ニ疑フノミナラズ、聖詔ノ光輝、陰翳ヲ帶ブルヲ察ルナリ。啻ニ察ルノミナラズ、陰翳霽レズンバ、我國ハ暗黑社會トナラムコトヲ懼ルルナリ。啻ニ懼ルルノミナラズ、社會暗黑ナレバ、皇室ノ尊榮保ツ可ラズ、國家ノ基礎建ツ可ラズ。倏チニ土崩瓦解シ、乍ニシテ潰散分離シ、覆亡ノ奇禍、反掌

ノ裏ニ在ランコトヲ憂ヘテ、片時モ措ク能ハザルナリ。請フ嘗ニ其眞然ヲ陳セン。夫レ言論出版ヲシテ自由ナラシムルハ、國家ノ隆盛富强ヲ買フノ資本ト言テ可ナリ。蓋シ言論出版ノ自由ハ、文明ヲ產ムノ母ナレバナリ。彼ノ英ノ如キ、佛ノ如キ、米ノ如キ、其他文明隆盛ヲ以テ世ニ稱セラル、所ノ泰西諸國ハ、咸ナ悉ク言論出版ノ自由アラザルナシ。言ヲ換テ之ヲ再說スレバ、是等諸國ハ斯ノ自由ヲ將テ、其隆盛富强ヲ買ヒシモノナリ。既ニ言論出版ノ自由ハ、國家ノ隆盛富强ヲ買フノ資本タルコトヲ知ラバ、之ニ反スル抑制ハ、國家ヲ削滅スルノ利刄ナルコトヲ悟ラザル可ラズ。是レ固ヨリ覩易ク悟リ易キノ道理ニシテ、敢テ喋々ヲ要セズト雖モ、然レドモ顧ミテ現政府ノ政略ヲ視ルニ、斯覩易キノ道理ヲ顚倒誤解シ、言論出版ノ自由ハ、施政ノ障碍物ニシテ、擾亂ノ媒助法ナリト臆斷シ、肯テ其自由ヲ抑制シテ、以テ國家保護ノ策ヲ得タリトナス者ノ如シ。是豈痛歎太息ニ勝フベケンヤ。

抑モ言論出版ハ、天下公衆ノ思想ノ歸適スル所ニ向テ、施政ノ方針ヲ定メ、長短相補充シ、正ニ典リ義ニ則リ、邪ヲ去リ私ヲ忘レ、一意潛心國家ノ幸福安寧ヲ謀ルトキハ、則チ爲ストシテ圓滑ナラザルナク、行フトシテ勢力アラザルナケン。其レ斯ノ如クナルトキハ、縱令不良非徒ノ亂民アリト雖モ、復タ奈何トモナス能ハザルベシ。何トナレバ是レ實ニ天地ノ公道ニ據ルモノナレバ、正義ノ輿論ハ直チニ政府ヲ援

ケ、容易ニ邪僻ノ亂民ヲ鎭壓スレバナリ。若シ之ニ反シ單ニ思想發表ノ路ヲ杜絕セシカ、思想內ニ鬱勃シテ、漏ルヽノ路ナク、堆積膨脹、其極竟ニ破裂シテ腕力ノ一方ニ路ヲ求ムルニ至ルハ必然ノ勢ニシテ、蓋シ免ル可カラザルノ數ナリ。現ニ露國ノ虛無黨ノ如キ、不祥不吉ノ非徒ヲ現出スルハ、畢竟スルニ言論出版ノ自由ヲ抑制シ、思想發表ノ路ヲ閉塞セル結果ニ外ナラザルナリ。又佛帝那翁三世ノ巧ニ斯ノ自由發表ヲ抑制セシニ方テヤ、外强ヲ裝フモ、內既ニ頹レ、怨怨國ニ充チ、殺氣天ニ蟠ル。一朝釁ノ乘ズベキニ際シ、忽チ起テ第二ノ革命トナレリ。而シテ言論ヲ壓服セシ當時ト、輿論ニ聽從スル今日トヲ對照シ來レバ、隆替盛衰ノ別ル、所、佛國ノ國狀ニ於テ當ニ正ニ判知シ得ベキナリ。然リ而シテ設シ佛帝ニシテ夙ニ自由言論ノ路ヲ快濶ニシ、輿論ノ方針ニ從ヒ、立憲ノ根基ヲ鞏メバ、國ヲ破ルノ愁ヒナク、家ヲ喪フノ恐レナク、赫々トシテ其光榮ヲ英國ト方フルコトヲ得タリシナラン歟。是ニ由テ之ヲ觀レバ、言論出版ノ自由ハ、政府ノ抗敵ニ非ズシテ、政府ノ援軍ナリ。國家擾亂ノ煽動者ニ非ズシテ、擾亂ヲ鎭定スルノ防禦者ナリ。而シテ抑制ハ政府ヲ維持スルノ壘柵ニアラズシテ、之ヲ破壞スルノ砲丸ナリ。國家ノ命脈ヲ繫グノ綱繩ニ非ズシテ、綱繩ヲ截ルノ利及ナルコト、炳乎トシテ夫レ明矣。我國今日ノ狀態ハ果シテ如何ナル方針ニ向ツテ運動スルモノナル乎。言論出版ノ自由ハ立憲政

體ニ附帶シテ、一日モ離ル可カラザルモノナリ。國會開設ニ大必要ナルモノナリ。然ルニ　天皇陛下ガ公議輿論ヲ採ルトノ御誓文ヲ奉體スベキニモ拘ハラズ、立憲政體ノ基礎ヲ確立セラレシニモ拘ハラズ、國會開設ノ期ヲ詔勅アラセラレ、其期已ニ切近スルニモ拘ハラズ、言論出版ノ自由ナキハ抑モ何ゾヤ。是豈毒石ヲ服シテ、身體ノ健全ナランコトヲ欲スルニ異ナランヤ。吁亦木ニ緣テ魚ヲ求ムルヨリ甚シキモノト謂フベキナリ。

我當路者ニシテ夙ニ之ヲ悟ルノ明アリテ、聖明ノ旨趣ヲ奉體シ、忠誠是レ體トシ、愛國之レ心トシ、公平無私ノ襟懷ヲ開キテ、廣ク言論出版ノ自由ヲ與ヘ、輿論ノ公道ニ據テ、施政ノ進行ヲ圖ラバ、今日ノ如キ條約中止ノ非擧ヲ視ルコトハ決シテ之アラザルベク、外人ノ嘲笑ヲ受ケ、　皇國ノ尊嚴ヲ瀆スコトハ、決シテ之アラザルベシ。夫レ然リ、然リト雖モ、往ク者ハ逐フ可ラズ。既ニ其非ヲ知ラバ、輙チ直ニ過ヲ改メ、大ニ言論ヲ開キ、輿論ヲ鼓舞シテ、以テ囘復整理ノ策ヲ講ゼバ、奏績必スベクシテ、而シテ、吾々人民ハ啻ニ昨非ヲ尤メザルノミナラズ、應ニ日月ト供ニ景仰スベキナリ。然ルニ策是ニ出デズシテ、却テ屢數條ノ訓示等ヲ州牧ニ與ヘテ、益人民ヲ箝制セントスルモノヽ如シ。嗚呼之ヲ以テ聖明ヲ佐ケテ、曩時垂詔ノ旨趣ヲ貫徹スルノ方針ニ向テ進行スルモノト爲スヲ得

ル乎。國家ヲ删滅スルノ利及ヲ研ゲモノニ非ズト爲スヲ得ル乎。

我國人民ハ今ヤ數重ノ鐵柵ノ中ニ害メラレ、身邊尺寸ノ餘地ヲ有セザルニ至リ、天ニ訟ヘンカ、天太ダ高ク、地ニ訴ヘンカ、地酷ダ厚シ。徒ニ嗚咽聲ヲ吞ミ、血涙ノ潸然タルヲ覺ユル而已。某等人民ハ、素ヨリ温良柔順、叨リニ敵愾ヲ抱クノ徒ニ非ズ。唯　皇室ニ對スルノ義務ヲ知リ、國家ノタメニ身ヲ致サンコトヲ誓フ者ナリ。故ニ常ニ不祥ノ妖雲ヲ排除セシコトヲ勤メ、旭光ヲ東天ニ輝カサンコトヲ索メテ、未ダ嘗テ止マザルナリ。某等竊ニ今日ノ施政方針ニシテ、猶依然將來ニ向テ進行スル時ハ、事固ニ危殆ニシテ、國家ノ存亡旦夕ニ迫ルモノ有テ存スルヲ見ルナリ。是ヲ以テ某等之ヲ憂ヒ之ヲ愁ヒ、造次モ忘ルルコト能ハズ。勃々タル忠誠愛國ノ情ノ許ス所ニ任セ、敢テ鄙見ヲ吐露シテ、尊嚴ヲ冒スニ至ル。伏テ願クハ閣下ノ賢明ナル、宜シク某等ノ衷情ヲ洞察シ、天下今世ノ實狀ヲ達觀シ、速ニ是ノ議ヲ採納アリテ、之レヲ　陛下ニ奏聞シ、爾來大ニ言路ヲ開潤ニシ、民意暢達、輿論ノ公道ニ則ルベキノ裁斷ヲ仰ガレンコトヲ、謹愼蹺足シテ止マザルナリ。頓首々々、昧死敬白。

宮口二郎

明治二十年十二月　日

關農夫雄

高津仲次郎

元老院議長

上毛政社

之より先、政府は明治十一年七月、政社取締令、同十三年四月、集會條例、同十六年四月には、新聞紙條例を布き、言論抑壓の擧に出でしが、民間志士の反對運動愈〻盛なるを加ふるに及び、明治二十年十二月には、更に保安條例を發布したり。明治二十一年二月廿九日、本縣の有志者は前橋町三眺樓に會し、上毛政社創立會を開く。其目的とする所は、縣會議員其他有志者が政學を研究するに在りき。當日幹事として選擧せられたる高津仲次郎・關農夫雄・多賀恒信の三名、及び同志中嶋祐八・三俣素平・深澤利重・桑原靜一・鈴木豐介五名は、同夜竪町鍋屋旅館に會し、時事を談じつゝありしが、警官の爲めに拘引せられ、保安條例違犯として、直に收監せらる。而して其後數回取調の結果は、證據不十分として、公訴棄却せられたり。此事件の起るや、縣下人民の耳目を聳動し、愈〻自由民權の擴充伸張の必要は絶叫せられ、曩に創立せられたる上毛倶樂部及び上毛政社は、打ちて一丸となし、明治二十一年十二月、前橋町臨江閣に大會を開き、上毛民會と命名したり。此日會衆七百餘名にして、委員選擧を行ひ、宮口二郎・高津仲次郎・關農夫雄・三俣素平・中嶋祐八・竹內鼎三・野村藤太當選せり。

此時中央政界は自由黨先づ解黨し、改進黨は首領を缺き、其一部は舊自由黨員と共に相提携して、後藤象次郎の幕下に參し、其唱道にかゝる大同團結が全盛の際にて、既に廿一年九月十六日、上毛政社員は後藤象次郎及び其一行を招待して、臨江閣に政談演說會を開き、其趣旨を贊成し居たる時なれば、合同後の上毛民會

上毛民會

亦此大同團結に聲援して、大隈外務大臣の條約改正等に反對し明治廿二年九月、臨江閣に總會を開き、更に地方委員會を北曲輪町對岳館に開き、大同俱樂部員植木枝盛の意見を聽取し、遂に高津仲次郎・竹内鼎三の二人を委員とし、條約改正延期の建白書を元老院に捧呈せり。かくの如くにして上毛民會は其勢益盛なりしが、會員中意見感情の阻隔より二派に分れ、幹部中中嶋祐八・三俣素平・宮口二郎・野村藤太等の數名脫會して、當時別に存立せる上毛同志會と合し、群馬公議會を

群馬公議會

組織したり。是れ明治廿二年八月の事にして、既に帝國憲法は發布せられ、翌二十三年七月の第一回の衆議院議員の總選擧を目前に控へたる時なりき。蓋し帝國憲法發布せられ、帝國議會開會も確立し、茲に多年主張せる目的を達したるにより、最早共同戰線を布くの必要なきに至りしものならん。（高津仲次郎・小泉信太郎・石川泰三・三俣素平・深井寛八等諸氏調書、宮部襄衆議院議員推選狀、新井毫祭文、上毛民會沿革、上野新報發刊趣意書。）

# 第六章　郡市町村の政治

明治維新以後に於ける我國郡町村の政治は、之を三期に區分するを得べし。第一期は、維新以後より、明治十一年七月、郡區町村編制法の公布せらるゝまでにして、全くの官治專行時代なり。府藩縣時代は名主、廢藩置縣後は區戸長、町村行政の首腦者に立ちたるを以て、今之を名主區戸長時代と名付く。第二期は、郡區町村編制法公布せられ、郡に郡役所を置き、郡長之を統轄し、町村に戸長役場を置き、民選又は官選の戸長、之が事務に當りたるを以て、之を郡長戸長時代となす。此期には町村會を設けられ、政治に論及するを禁ぜられたるも、町村の安寧公益、及び協議費の徵收方法等を議決するの權能を與へられ、町村自治に入る準備期たるが如し。第三期は、市町村制發布以後、現今に至るまでにして、郡に郡制を布いて、自治を許したるも、郡役所は依然として存置せられ、郡長之を統轄し、町村には市町村制實施せられて、民選の市長・町村長之を治すれば、郡長市町村長時代とす。今之を自治方面より通觀するに、第一期は德川時代の舊自治制地方の民政を一種の自治

治制と見て破壞せられて、明治の新自治制未だ起らず、專ら官治行政を行へりと雖も、新自治制の萠芽は、此時代に胚胎せりと云ふべく、自治萠芽胚胎時代と稱すべし。第二期は、郡區町村編制法發布せられ、次いで區町村會法の發布ありて、區町村の公共に關する事件、及び其經費の支出・徵收法を議するが爲めに、區町村會を設くることを明にしたれば、新自治制の基礎は、此時代に確立せりと云ふべく、即ち自治基礎確立時代と稱すべし。第三期は現行市町村制の發布せられたる時代にして、即ち自治制完備時代とも稱すべきなり。

郡は未だ行政區劃とならず

村を大小區に編む

# 第一節　名主區戸長時代

## 第一項　郡

王政維新以後、明治十一年七月、郡區町村編制法公布せられ、尋いで此法の實施せらるゝまでの郡町村の政治は、全く官治專行にして、郡は單に地理上の一名稱にすぎず。縣は直接に町村を監督支配すること、宛然郡役所廢止後の現時に於けるに似たらんか。明治四年四月、戸籍法制定せられ、數町村を組合せて、一區劃を定めたる時に於ても、又翌明治五年五月、大小の區制を布き、町村を組合せたる時に於ても、其區劃は必ずしも、郡の區域と一致せざりき。左の表は明治十年三月現在の、管下區別村名帳なり。尤も此村名簿は、熊谷縣時代に比し、多少の變更ありたるが如きも、大體には變更なし。

本縣管轄村名一覽（明治十年三月三十日調）

第一大區　上野國（群馬勢多）郡之内　三十九ケ町三十九ケ村

第一小區（前橋之内總八ケ町）　南曲輪（みなみくるわ）町　北曲輪町　石川町　堀川町　田中町　神明町

第二小區　總拾ヶ町　柳　町　曲輪町
　本　町　相生町　連雀町　田　町　中川町　片貝町
　芳　町　百軒町　新　町　大塚町
第三小區　總拾壹ヶ町　紺屋町　桑　町　横山町　立川町　竪　町　萱　町
　榎町（勢多）　細ヶ澤町（勢多）　小柳町（勢多）　向町（勢多）　諏訪町（勢多）
第四小區　總六ヶ村（勢多郡）　一毛村　清王寺村　岩神村　秋　村　國領村　才川村
第五小區　總五ヶ村（群馬郡）　紅雲分村　宗甫分村　前代田村　市坪村　天川原村
第六小區　總三ヶ村　三公田村　勝島村　六供村
第七小區　總三ヶ村　龜里村　横手村　鶴光路村
第八小區　總三ヶ村　上佐鳥村　下佐鳥村　宮地村
第九小區　總三ヶ村　天河村　朝倉村　後閑村
第十小區　總二ヶ村（勢多郡）　西片貝村　東片貝村
第十一小區　總四ヶ村（勢多郡）　幸塚村　三ッ俣村　下沖ノ鄕　上沖ノ鄕

第二大區　上野國群馬郡　一ヶ驛　一ヶ町　三十二ヶ村
第一小區　惣社町
第二小區　總三ヶ村　高井村　植野村　大久保村

第三小區　總五ケ村　青梨子村　上青梨村　池端村　北下村　南下村
第四小區　總二ケ村　山子田村　新井村
第五小區　總二ケ村　廣馬場村　柏木澤村
第六小區　總五ケ村　野良犬村　金古宿　足門村　中里村　井出村
第七小區　總七ケ村　引間村　後引間村　冷水村　北原村　西國分村　東國分村
塚田村
第八小區　總五ケ村　棟高村　菅谷村　福島村　中泉村　三ツ寺村
第九小區　總四ケ村　下小鳥村　大八木村　上小鳥村　筑繩村

第三大區　上野國勢多郡　五十六ケ村

第一小區　總五ケ村　荒牧村　關根村　川端村　日輪寺村　上小出村
第二小區　總六ケ村　下小出村　北代田村　上細井村　下細井村　青柳村　龍藏寺村
第三小區　總四ケ村　端氣村　五代村　鳥取村　小坂子村
第四小區　總七ケ村　嶺村　勝澤村　小神明村　時澤村　小澤新田村　小暮村
皆澤新田村
第五小區　總三ケ村　横室村　原之鄉　引田村
第六小區　總六ケ村　米野村　漆窪村　市ノ木場村　山口村　石井村　田島村

第七小區　總五ヶ村　眞壁村　上箱田村　箱田村　下箱田村　田口村
第八小區　總十ヶ村　持柏木村　溝呂木村　北上野村　勝保澤村　瀧澤村　見立村
三原田村　上三原田村　下南室村　上南室村
第九小區　總三ヶ村　八崎村　分郷八崎村　小室村
第十小區　總三ヶ村　樽村　宮田村　猫村
第十一小區　總四ヶ村　津久田村　長井小川田村　深山村　棚下村

第四大區　上野國群馬郡　三十五ヶ村

第一小區　總四ヶ村　川曲村　稻荷新田村　大澤村　京目村
第二小區　總五ヶ村　前箱田村　箱田村　後家村　江田村　新保田中村
第三小區　總五ヶ村　小相木村　古市村　内藤分村　大渡村　大友村
第四小區　總三ヶ村　上新田村　下新田村　萩原村
第五小區　總三ヶ村　鳥野村　矢島村　西島村
第六小區　總三ヶ村　南大類村　宿大類村　元島名村
第七小區　總二ヶ村　新保村　上大類村
第八小區　總三ヶ村　日高村　井野村　小八木村
第九小區　總二ヶ村　貝澤村　瀧尻村

第十小區　總四ケ村　正觀寺村　中尾村　鳥羽村　稻荷臺村
第十一小區　元惣社村

第五大區　上野國群馬片岡郡之内　四十三ケ町一ケ驛十九ケ村（内片岡郡三ケ村）

第一小區　高崎之内總十二ケ町　高松町舊城郭一圓　柳川町　堰代町　宮本町　明石町
龍見町　十人町　北通町　弓町　眞町　椿町
山田町

第二小區　總十一ケ町　新喜町　南町　鎌倉町　新田町　新町　下横町
職人町　砂賀町　檜物町　鍛冶町　若松町

第三小區　總十二ケ町　連雀町　鞘町　通町　田町　中紺屋町　寄合町
白銀町　本紺屋町　羅漢町　九藏町　新紺屋町　高砂町

第四小區　總八ケ町　本町　嘉多町　赤坂町　常盤町　歌川町　四ツ屋町
相生町　住吉町

第五小區　群馬郡總三ケ村　赤坂村　上並榎村　下並榎村

第六小區　飯塚村

第七小區　總二ケ村　江木村　高關村

第八小區　總二ケ村　上中居村　下中居村

第九小區　總四ヶ村　岩押村　[illegible]後閑村　下和田村　和田多中村

第十小區　總四ヶ村　上佐野村　下佐野村　佐野窪村　下ノ城村

第十一小區　倉賀野宿

第十二小區　片岡郡　乘附村

第十三小區　同　石原村

第十四小區　同　寺尾村

第六大區　上野國群馬那波郡之内　一ヶ町三十六ヶ村

第一小區　群馬郡總四ヶ村　西横手村　宿横手村　中島村　上瀧村

第二小區　總二ヶ村　板井村　齋田村

第三小區　總三ヶ村　綿貫村　下瀧村　瀧村（無民家）

第四小區　總二ヶ村　下大類村　中大類村

第五小區　總二ヶ村　柴崎村　矢中村

第六小區　總三ヶ町壹ヶ村　岩鼻町　臺新田町　栗崎村　東中里村

第七小區　總三ヶ村　八幡原村　下齋田村　宇貫村

第八小區　群馬郡總二ヶ村　上新田村　與六分村

第九小區　總三ヶ村　下新田村　上之手村　東飯島村

第十小區　總二ケ村　福島村　南玉村
第十一小區　總五ケ村　沼之上村　飯倉村　小泉村　下ノ宮村　箱石村
第十二小區　總四ケ村　上茂木村　下茂木村　川井村　後箇村
第十三小區　角淵村

第七大區　上野國（那波群馬勢多）三郡之内（勢多三ケ村 群馬五ケ村 那波十四ケ村）計二十二村

第一小區　那波郡　宮子村
第二小區　總三ケ村　連取村　飯塚村　藤川村
第三小區　那波郡　樋越村
第四小區　總四ケ村　東上之宮村　西上之宮村　宮古村　上福島村
第五小區　（群馬郡）總五ケ村　力丸村　徳丸村　房丸村　新堀村　下阿内村
第六小區　那波郡　西善村
第七小區　總三ケ村　東善養寺村　山王村　中内村
第八小區　（勢多郡）總二ケ村　駒形新田村　小屋原村
第九小區　總四ケ村　天川大島村　上大島村　下大島村　野中村
第十小區　總三ケ村　女屋村　上長磯村　下長磯村

第十一小區　野多郡總二ヶ村　笂井村　小島田村

第十二小區　總二ヶ村　上增田村　下增田村

第十三小區　那波郡　今村

第八大區　上野國勢多郡　二十九ヶ町村

第一小區　總八村　市ノ關村　柏倉村　鼻毛石村　苗ヶ島村　三夜澤村　大前田村　馬場村　室澤村

第二小區　總五村　女淵村　深津村　新屋村　込皆戸村　月田村

第三小區　總七ヶ町村　大胡町　河原濱村　樋越村　上大屋村　茂木村　堀越村　横澤村　瀧久保村

第四小區　總八村　荒口村　泉澤村　荒子村　下大屋村　西大室村　東大室村　新井村

第五小區　總六村　江木村　上野村　堤村　富田村　今井村　二之宮村

第六小區　總五村　上泉村　石關村　龜泉村　堀之下村　荻久保村

第九大區　上野國群馬郡　二十九ヶ村

第一小區　總三村　横堀村　北牧村　小野子村

第二小區　中山村

第三小區　總二村　上白井村　中郷村

第四小區　總二村　白井村　吹屋村

第五小區　總二村　澁川村　中村

第六小區　總三村　川原島新田　半田村　漆原村

第七小區　總二村　八木原村　有馬村

第八小區　總五村　下野田村　上野田村　小倉村　長岡村　水澤村

第九小區　總二村　湯ノ上村　石原村

第十小區　總三村　金井村　南牧村　阿久津村

第十一小區　總四村　伊香保村　湯中子村　祖母島村　川島村

第十大區　上野國群馬碓氷郡之内　群馬郡三十六ヶ村　碓氷郡三ヶ村　計三十九ヶ村

第一小區　總群馬郡六村　西明屋村　上芝村　矢原村　東明屋村　金敷平村　松之澤村

第二小區　總三ヶ村　生原村　保渡田村　行力村

第三小區　總群馬郡四村　濱川村　南新波村　北新波村　樂間村

第四小區　總五村　西新波村　我峯村　下小塙村　上小塙村　菊地村

第五小區　總四村　和田山村　白川村　本郷村　下芝村

第六小區　總五村　高濱村　白岩村　富岡村　善地村　十文字村

第七小區　總　四　村　下室田村　神戸村　三ツ子澤村　宮澤村

第八小區　總　三　村　中室田村　上室田村　春名山村

第九小區　總　五　村　權田村　三ノ倉村　水沼村（碓氷郡）　岩氷村（碓氷郡）　川浦村（碓氷郡）

第十一大區　上野國碓氷郡　一ケ驛　三十八ケ村

第一小區　總　三　村　下豐岡村　中豐岡村　上豐岡村

第二小區　總　三　村　藤塚村　劍崎村　八幡村

第三小區　總一村一宿　板鼻宿　若田村

第四小區　總　四　村　金井淵村　町谷村　下大島村　上大島村

第五小區　總　四　村　鼻高村　大谷村　岩井村　中宿村

第六小區　總四村一宿　安中宿　下野尻村　谷津村　常木村　上野尻村

第七小區　野殿村

第八小區　總　五　村　高別當村　古屋村　小俣村　下秋間村　中秋間村

第九小區　總　三　村　下里見村　中里見村　上里見村

第十二大區　上野國甘樂郡　三ケ町　三十八ケ村

第一小區　總　四　村　菅原村　古立村　上高田村　八木連村

第二小區　總　二　村　上丹生村

第三小區　總　二村　下丹生村　原　村
第四小區　下高田村
第五小區　總　二村　黑川村　宇田村
第六小區　總四ケ村　上高尾村　下高尾村　上黑岩村　下黑岩村
第七小區　總　四村　曾木村　君川村　星田村　別保村
第八小區　總　二町　七日市町　富岡町
第九小區　總壹町三ケ村　一ノ宮町　田島村　大島村
第十小區　高瀬村
第十一小區　總　三村　南後箇村　岩染村　秋畑村
第十二小區　總　二村　國峯村　善慶寺村
第十三小區　總　二村　岡本村　内匠村

第十三大區　上野國甘樂多胡郡之内　甘樂一ケ町十六ケ村 多胡一ケ町十六ケ村　計二ケ町三十二ケ村

第一小區　甘樂郡總四村　小幡村　轟　村　上野村　小川村
第二小區　總一町一ケ村　福島町　田篠村
第三小區　白倉村
第四小區　甘樂郡總二村　天引村　金井村

第五小區　多胡郡　總二村　長根村　下長根村
第六小區　總六村　多胡村　高　村　神保村　鹽　村　東谷村　大澤村
第七小區　總三町村　池　村　鹽川村　吉井町　河内村
第八小區　總二村　多比良村　矢田村
第九小區　總三村　片山村　本郷村　小棚村
第十小區　甘樂郡　總四村　後賀村　白岩村　庭谷村　造石村
第十一小區　總四村　藤木村　桑原村　小桑原村　相野田村

第十四大區　上野國　緑野 多胡 甘樂　三郡之内　緑野十九ヶ村 多胡十ヶ村 甘樂五ヶ村　計三十四ヶ村

第一小區　緑野郡　總二村　上大塚村　西平井村
第二小區　總二村　中大塚村　緑野村
第三小區　總三村　下大塚村　本動堂村　篠塚村
第四小區　總三村　上落合村　白石村　三ツ木村
第五小區　總二村　木部村　山名村
第六小區　總二村　阿久津村　根小屋村
第七小區　多胡郡　總三村　岩井村　小暮村　馬庭村
第八小區　甘樂郡　總二村　岩崎村　下奥平村

第九小區　總三村　上奥平村　坂口村　蕨村

第十小區　總（多胡郡）五村　小串村　石神村　中島村　深澤村　黑熊村

第十一小區　總（緑野郡）四村　東平井村　鮎川村　三本木村　高山村

第十二小區　總三村　金井村　下日埜村（多胡郡）　上日埜村（多胡郡）

第十五大區　上野國緑野甘樂郡之内（緑野二ケ町一ケ驛二十二ケ村　甘樂二十五ケ村）　計二ケ町一ケ驛四十七ケ村

第一小區　總（緑野郡）一宿三ケ村　新町宿（笛木新町　落合新町）　立石新田　立石村　中島村

第二小區　總三村　中村　森新田　森村

第三小區　總三村　中栗須村　上栗須村　下栗須村

第四小區　總三村　岡之郷村　下戸塚村　上戸塚村

第五小區　總壹町一ケ村　藤岡町　小林村

第六小區　總（緑野郡）三村　根岸村　本郷村　川除村

第七小區　總四村　牛田村　神田村　矢場村　保美村

第八小區　總二町一ケ村　鬼石町　淨法寺村　三波川村

第九小區　總（甘樂郡）三村　坂原村　保美濃山村　讓原村

第十小區　總八村、　麻生村　柏木村　生利村　萬場村　森戸村　黑田村　鹽澤村　小平村

第十一小區　總十四村　船子村　椎原村　青梨村　魚尾村　神ヶ原村　平原村
尾附村　新羽村　野栗澤村　勝山村　川和村　乙母村
乙父村　楢原村

第十六大區　上野國佐位那波郡之內　（佐位二ヶ町十七ヶ村 那波二ヶ町二十一ヶ村）計四ヶ町三十八ヶ村

第一小區　佐波郡　伊勢崎町
第二小區　佐位郡總三村　太田村　上植木村　下植木村
第三小區　總二村　今泉村　茂呂村
第四小區　總三村　伊與久村　木島村　百々村
第五小區　織三村　上淵名村　東新井村　下淵名村
第六小區　總三村　保泉村　上武士村　下武士村
第七小區　總壹町二村　境町　中島村　小此木村
第八小區　島村
第九小區　那波郡總五村　田中村　韮塚村　阿彌大寺村　北今井村　田中島村
第十小區　山王堂村
第十一小區　總二町　芝町　中町
第十二小區　總四村　堀口村　戸谷塚村　下福島村　八斗島村

第十三小區　總四村　除ケ村　大正寺村　富塚村　下道寺村
第十四小區　總二村　長沼村　馬見塚村
第十五小區　總五村　上蓮沼村　上飯島村　下蓮沼村　國領村　前河原村

第十七大區　上野國佐位勢多郡之内（佐位十九ケ村 那波三十五ケ村）計五十四ケ村

第一小區　總佐位郡六村　西久保村　曲澤村　間野谷村　香林村　西野村　磯村（勢多郡）
第二小區　總佐位郡五村　上田村　西小保方村　八寸村　田部井村　國定村
第三小區　東小保方村
第四小區　總六村　野村　今井村　下觸村　五目牛村　堀下村　市場村
第五小區　總二村　波志江村　安堀村
第六小區　總勢多郡七村　一日市村　前皆戸村　上東田面村　下西田面村　下田面村　膳村　中村
第七小區　總三村　山上村　關村　板橋村
第八小區　總三村　新川村　野村　小林村
第九小區　總五村　武井村　鶴ケ谷村　大久保村　高泉村　奥澤村
第十小區　總勢多郡四村　下神梅村　上神梅村　宿廻村　水沼村
第十一小區　總二村　下田澤村　上田澤村

第十二小區　總五村　鹽澤村　荻原村　花輪村　八木原村　小倉戸村

第十三小區　總五村　小中村　神戸村　座間村　草木村　澤入村

第十八大區　上野國（利根 勢多）郡之内　（利根二ヶ町四十八ヶ村 勢多十三ヶ村）計二ヶ町六十二ヶ村

第一小區　利根郡　沼田町

第二小區　總三村　戸鹿野村　屋形原村　岩本村

第三小區　總四村　沼須村　下久屋村　上久屋村　横塚村

第四小區（勢多郡 總三村）　椽久保村　森下村　川額村

第五小區（勢多郡 總三村）　綿井村　貝野瀬村　生越村

第六小區（利根 勢多郡）　高平村　生枝村　岩室村　尾合村　平出村　多那村（勢多郡）

總十一村　石戸新田（同上）　輪組村（同上）　青木村（同上）　砂川村（同上）　日影南郷村（同上）

第七小區（利根郡 總六村）　生品村　立岩村　中佳村　萩室村　下古語父村　上古語父村

第八小區　總六村　天神組　門前組　谷地村　川場湯原村　太田川村　小田川村

第九小區（利根郡 總十三村壹町）　薗原村　大原新町　高戸谷村　追貝村　千鳥新田　幡谷村

平川村　大揚村　老神村　穴原村　日向南郷村　柿平村

小松村　根利村（勢多郡）

第十小區（利根郡 總十二村）　下平村　須賀川村　菅沼村　築地村　東田代村　東小川村

土出村　戸倉村　越本村　御座入村　摺淵村　花咲村

第十九大區　上野國利根吾妻郡之内計　一ケ町・一ケ驛 六十六ケ村

第一小區　利根郡 總三村　岡谷村　町田村　戸神村

第二小區　總六村　下發知村　奈良村　秋塚村　發知新田　中發知村　上發知村

第三小區　總九村　上佐山村　下佐山村　石墨村　善桂寺村　大釜村　宇楚井村

原村　堀廻村　下沼田村

第四小區　總六村　白岩村　硯田村　恩田村　井土上村　政所村　眞庭村

第五小區　總四村　師村　後閑村　下牧村　上牧村

第六小區　總二十村　大沼村　奈女澤村　高日向村　小日向村　鹿野澤村　寺間村

小仁田村　川上村　湯原村　阿能川村　谷川村　大穴村

吉本村　湯檜曾村　幸知村　綱子村　向山村　栗澤村

夜後村　藤原村

第七小區　利根郡 總一ケ町二村　月夜野町　石倉村　小川村

第八小區　利根郡 吾妻郡 總四村　羽場村　新巻村(吾妻郡)　布施村(同上)　入須川村(同上)

第九小區　吾妻郡 利根郡 總六村壹宿　須川宿　西峰須川村　東峰須賀川村　相俣村(利根郡)　猿ケ京村　吹路村

永井村

第十小區（吾妻郡利根郡總三村）　師田村（吾妻郡）上津村（利根郡）下津村（同上）
第十一小區（利根郡總三村）　上川田村　下川田村　今井村
第二十大區　上野國（吾妻群馬）郡之內（吾妻四ヶ町六十七ヶ村群馬郡二ヶ村）計（四ヶ町六十九ヶ村）
第一小區（吾妻郡總六村）　大戶村　本宿村　萩生村　須賀尾村　大柏木村　厚田村
第二小區（總壹町三村）　原町　郷原村　川戶村　金井村
第三小區（吾妻郡總五村）　植栗村　岩井村　小泉村　泉澤村　若巻村
第四小區（吾妻郡群馬郡總五村）　箱島村　岡崎新田村　上村（群馬郡）五町田村　奥田村
第五小區（吾妻郡總二町三村）　中之條町　伊勢町　西中之條村　市城村　青山村
第六小區　總五村　山田村　折田村　下澤渡村　上澤渡村　四萬村
第七小區　總六村　原岩本村　蟻川村　大道新田　栃窪村　五反田村　横尾村
第八小區（吾妻郡群馬郡總四村）　赤坂村　大塚村　平村　尻高村（群馬郡）
第九小區（吾妻郡總四村）　岩下村　三島村　矢倉村　松谷村
第十小區（吾妻郡總壹ヶ町七村）　河原畑村　林村　川原湯村　横壁村　長野原町　古森村
與喜屋村　大津村
第十一小區　同　總十村　羽根尾村　赤岩村　太子村　日影村　小雨村　生須村
入山村　草津村　前口村　今井村

第十二小區　同總十一村　應桑村　鎌原村　干俣村　門貝村　蘆生田村　三原村
袋倉村　大前村　大笹村　西窪村　田代村

第二十一大區　上野國碓氷甘樂郡之内（碓氷一ケ町二ケ驛三十四ケ村　甘樂一ケ町五ケ村）　計二ケ町二ケ驛三十九ケ村

第一小區　碓氷郡總二村　東上磯部村　下磯部村
第二小區　同　總三村　大竹村　下間仁田村　上間仁田村
第三小區　同　總二村　鷺宮村　中野谷村
第四小區　同　總三村　西上磯部村　上磯部村　人見村
第五小區　總　三　村　二軒在家村　八城村　行田村
第六小區　甘樂郡總一ケ町五村　妙義町　岳　村　大牛村　諸戸村　行澤村　中里村
第七小區　碓氷郡總四村　簗瀬村　原市村　峯　村　郷原村
第八小區　同總一宿四村　松井田宿　新堀村　高梨子村　國衙村
第九小區　同總一宿四村　五料村　横川村　原　村　坂本宿　入山村　峠　町
第十小區　同　總四村　新井村　土鹽村　上増田村　下増田村
第十一小區　同　總三村　上後閑村　中後閑　小日向村
第十二小區　同　總三村　下後閑村　東上秋間村　西上秋間村

第二十二大區　上野國甘樂郡　一ケ町三十三ケ村

第一小區　總三村　上小坂村　中小坂村　下小坂村

第二小區　總二村　南蛇井村　中澤村

第三小區　總三村　蚊沼村　神成村　上小林村

第四小區　總二ヶ村　神農原村　宮崎村

第五小區　野上村

第六小區　馬山村

第七小區　（總一町壹村）　下仁田町　白山村

第八小區　總七村　川井村　吉崎村　栗山村　青倉村　大桑原村　風口村　宮室村

第九小區　總十二村　小澤村　大鹽澤村　千原村　岩戸村　檜澤村　大日向村　大仁田村　六車村　砥澤村　羽澤村　星尾村　熊倉村

第十小區　西野牧村

第二十三大區　上野國（山田新田邑樂）三郡之內（山田二ヶ町四十九ヶ村　新田一ヶ町一驛九十七ヶ村　邑樂一ヶ町八十八ヶ村）計四ヶ町一驛二百三十四ヶ村

第一小區（山田郡總廿四ヶ村）　荒金村　八重笠村　沖之郷村　龍舞村　茂木村　矢場村　下小林村　石原村　臺之郷村　安良岡村　上小林村　植木野村　吉澤村　丸山村　矢田堀村　古氷村　東今泉村　東金井村

富若村　大町村　市場村　只上村　東長岡村　一本木村

第二小區　同（總一ヶ町十一村）

桐生新町　如來堂村　廣澤村　安樂土村　下久方村　上久方村
二渡村　山地村　淺部村　高澤村　新宿村　境野村

第三小區　同（總一ヶ町十四村）

大間々町　桐原村　鹽原村　淺原村　小平村　長尾根村
東小倉村　西小倉村　須永村　高津戸村　蕪町村　天王宿村
下新田村　天沼新田　山田村

第四小區　新田郡（三十二村）

菅鹽村　西長岡村　山之神村　藪塚村　阿佐美村　西鹿田村
鹿村　久宮村　大久保村　大原本町村　六千石村　市野井村
市村　溜池村　上中村　權右衛門村　金井村　嘉禰村
大根村　大村　强戸村　小金井村　寺井村　新野村
鳥山村　脇谷村　成塚　北金井村　天良村（以下無民家）寄合村（同上）
小金村（同上）西村（同上）

第五小區　總（一宿三十四村）

木崎宿　上田島村　中江田村　世良田村　反町村　別所村
赤堀村　前島村　粕川村　沖野村　武野島村　徳川村
出塚村　安養寺村　前小屋村　女塚村　二ッ小屋村　大舘村
境村　上田中村　平塚村　米岡村　西今井村　高尾村

上矢島村　三ツ木村　上江田村　村田村　下田中村　小角田村
西野谷村　花香塚村　下江田村　多村（無民家）　四軒在家村（同上）

第六小區　新田郡一ケ町　總三十一ケ村

太田町　新島村　飯塚村　大島村　長手村　鶴生田村
藤阿久村　新井村　小舞木村　内ケ島村　東別所村　東矢島村
西矢島村　高林村　牛澤村　富澤村　福澤村　岩瀨川村
下濱田村　細谷村　由良村　中根村　下田島村　龜岡村
尾島村　岩松村　堀口村　押切村　備前島村　米澤村
飯田村　阿久津村

第七小區　邑樂郡　總廿六村

古戸村　寄木戸村　仙石村　古氷村　坂田村　吉田村
古海村　新福寺村　舞木村　赤岩村　鍋屋村　福島村
篠塚村　下小泉村　上小泉村　石打村　藤川村　秋妻村
中野村　光善寺村　狢塚村　赤堀村　鶉　村　鶉新田
瀨戸井村　木崎村

第八小區　同總廿七村

上五箇村　菅野村　野邊村　上中森村　下中森村　大輪村
下三林村　上三林村　入ケ谷村　須賀村　川俣村　大佐貫村
矢島村　梅原村　中谷村　南大島村　新里村　江口村

第九小區　邑樂郡　總十四村一ケ町

田島村　江黑村　千津井村　羽附村　赤生田村　堀工村
青柳村　小桑原村　大輪沼新田
館林町　谷越村　新宿村　近藤村　松原村　成島村
高根村　日向村　岡野村　木戸村　傍示塚村　上早川田村

第十小區　同　總廿一ケ村

下早川田村　足次村　大新田
當郷村　新當郷　田谷村　四ツ谷村　籾谷村　岩田村
内藏新田　板倉村　北大島村　西岡新田　西岡村　大曲村
除川村　大荷場村　細谷村　離村　海老瀬村　下五ケ村
大高島村　飯野村　斗合田村

大區數　貳十三　郡數　十四
小區數　貳百五十七　宿驛數　九
町數　百
村數　千百十

| (郡名) | (町數) | (驛數) | (村數) | (郡名) | (町數) | (驛數) | (村數) |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 群馬 | 七十 | 二 | 百九十三 | 勢多 | 五 | 〇 | 百六十 |
| 甘樂 | 六 | 〇 | 百十七 | 碓氷 | 一 | 四 | 六十五 |
| 緑野 | 二 | 一 | 四十 | 佐位 | 二 | 〇 | 三十六 |

| | | | |
|---|---|---|---|
| 山田 | 二 | 〇 | 四十九 |
| 片岡 | 〇 | 〇 | 三 |
| 多胡 | 一 | 〇 | 二十一 |
| 那波 | 二 | 〇 | 五十 |
| 利根 | 三 | 〇 | 七 |
| 吾妻 | 四 | 一 | 七十五 |
| 新田 | 一 | 一 | 九十七 |
| 邑樂 | 一 | 〇 | 八十八 |

(縣座文書)

## 第二項　町村

一町村を一人支配と爲す

按ずるに、此期は幕府時代の地方政治より、明治時代の地方自治に至る、過渡期にして、一方より考ふれば、地方自治制發布の準備期とも見ることを得べし。此第一着手として明治政府は、名主を一町村一人制とせり。是れ曩に幕府時代にありては、町村によりては、數領主に分轄支配されたる結果、村役人多數ありしかば、一村統一上不便少なからざりしを以てなり。明治二年四月十二日、岩鼻縣は上知村々に對し、左の示達を出したり。

上知村々の儀、舊地頭にて名主・組頭申付有之村方に寄り、村役人共多數有之候處、今般一村一支配相成候上は、名主は一人に致し、組頭右に準じ、人數相減可申、名主・組

頭共村中人撰入札を以て取極來る六月二十日迄に役人村賦可申事

右の通り其組合村々の内上知の儘、村役人多人數有之候村々へ可相達者也。

巳四月十八日　岩鼻縣

明治四年四月、戸籍改正調査御布令により本縣に戸籍係を置き、管內町村の區別を設け、從前の肝煎名主等を、戸長竝に副等の名目となし、戸籍の事務を掌らしむ。同年七月廢藩置縣となり、管下劃一の政治を行ふに至りて、翌十月、鄉村役人職掌規則を設け、村方に肝煎名主・名主・組頭・百姓代を置き、警備・徵稅・殖產・風敎、その他政府の布達周知方の事務に當らしむ。

鄉村役人職掌規則

肝煎名主兼戸長

一肝煎名主ハ區內百姓ノ長ニテ、其安寧ナルト否サルト、富ト富サルト、皆差配ノ是非ニヨル所ナレバ、時々區內ヲ見廻リ、取締一切ノ事ニ心ヲ盡シ、組小役ヲ指揮シ、常々見廻ラセ、不審ノ者アラバ取調ラベ、火災盜難等ノ害無之樣厚ク心掛ケ、小前ヲ引立ルコトヲ專務トスベシ。

一租稅取立ノ節ハ、名主・組頭ニ申談シ、期限ノ通リ上納相成ル樣、精々篤ク世話致スベシ。

一官ヨリ布告スル所ノ規則ヲ導奉シ、區内ノ村々ヘ達シ、小前並ニ社寺ヘ施シ行ヒ、總テ其事理ノ末々ヘ貫徹スルヲ要ス。

一村々ノ貧富戸籍ノ多寡、民心ノ良否、土地ノ厚薄、及ビ物產ノ有無ヲ辨知シ、宜シク之ヲ計フヲ旨トスベシ。

一新田ヲ開キ、古田ノ荒蕪ヲ發シ、其他ニ應ジテ物品ヲ培植シ、生產ヲ興シ、以テ民ノ利益ニ注意スベク、堤防・橋梁等ノ修繕怠ル可カラズ。

一名主以下百姓代等ヲシテ精勤セシムベシ。其正邪曲直ヲ鑑視シテ、常ニ匡正シ、若シ背ク者アラバ、官ニ申立テ差圖ヲ受クベシ。

一民ノ風俗ヲ正シ、人倫ノ道ヲ明ニシ、又鄕中素讀・手跡指南、或ハ醫者・社寺等、都テ敎ヲ施ス者ナシテ、深切丁寧敎導セシムル樣世話イタシ、博奕ノ惡弊ナカラシムベシ。

一區中孝子・義僕・德行ノ者アラバ、其情狀ヲ記シテ是ヲ上表スベシ。

一小前并社寺ヨリ、諸願伺筋等、村役人ヨリ差出サバ、條理審察奥印イタシ、以テ下情ノ貫徹スルヲ要ス。

右肝煎名主兼戸長ノ職掌タリ。苟モ公且誠ニアラザレバ、事ヲ爲ス能ハズ。小心約志、以テ其職ヲ奉ズベシ。

名主

一名主ハ一村ノ長ニシテ、小前ノ貧富ハ勿論、靜謐ナルト否ラザルト、皆其所分ニヨル所ナレバ、幾重ニモ心ヲ用ヒ、小前行立ヤウノ工夫肝要ナリ。

一小前ノ内田畠モナク、又是ト云フ産業モナクシテ、其日ヲ送リ兼ル者ヘハ、向寄ノ閑地ヲ見立、開墾ノ世話致スカ、或ハ所持ノ地多キ者ノ小作致サスルカ、又ハ土地ニ應ジ他ノ産業ヲ授ルカ、都テ何事ニヨラズ恒産ニ有ツクヤウ、常ニ肝煎名主ト談シ合ヒ、精々世話致スベシ。

一租税・米金等、割合ノ時ハ、必組頭ト倶ニ百姓代ヲ立會セテ、分明潔白ニ勘定スベシ。

一租税竝諸夫錢等、村中ニ割合ニ成ベキ品ハ、割元帳ニ其都度百姓代ノ檢印ヲ取置クベシ。

一右租税・諸夫錢等年々十二月晦日迄ノ分ヲ調ベシ。若シ手廻リ兼ル時ハ、小前ノ内ヨリ書算ニ能キ者ヲ擧テ手傳ハセ、組頭ト共ニ百姓代ヲ立會セテ、違謬ナキヤウ勘定スベシ。

一諸夫錢・村入用等、割賦帳記シ方ハ、何月何日之事ニテ、何品何程買入、或ハ何ノ事ニ付、何入用ト其譯柄ヲ詳細ニ書竝ベ、肝煎以下ノ給米ヲモ加ヘ、總計ヲ記シ、小前持高ノ分課ハ、高一石ニ付何程、軒別割ノ品ハ一戸何程充ト算勘シ、是ヲ割賦元帳ト

名付ケ、三役人連署シ、先ヅ名主・組頭押印シテ、一旦是ヲ百姓代ニ渡シ、總百姓ニ示シ、異論ナクバ連印ヲ證シ割賦シテ取立ベシ。

一右取立方ハ、別ニ帳面ヲ仕立テ、小前一人別ノ納高ヲ記シ置キ、納ノ時ニ當ツテ、請取帳ノ員數ト押切印形シテ、其ノ本人ニ渡スベシ。但シ百姓代取集メテ納ルトモ、請取書ハ必一人別ニ分ケテ附與スベシ。且割賦元帳・取立帳トモ、小前幷越石ノ者一見ヲ乞フ者アラバ、速ニ是ヲ許スベシ。亦巡廻ノ官員時トシテ之ヲ檢査スルコトアルベシ。

一村内ニ官林アラバ、時々見廻リ、猥ニ伐木致ス者アラバ、取押ヘ申立ベシ。若シ野火アラバ、速ニ手配消防スベシ。且風折・根返リ・枯木等アラバ、訴出可受差圖事。

一盜賊又ハ不法亂妨之者アル時ハ、速ニ搦捕訴出ルヤウ、兼テ村内ヘ示シ合セ其手當致シ置クベシ。

一盜難ニ逢フ者アラバ、其始末幷紛失ノ品品トモ、明細ニ認メ、必屆出ベシ。

一村内萬一出火アル時ハ、速ニ消防ノ手當致シ、尚附火・過失等ノ事實、人馬怪我ノ有無、其他ノ模樣、書認メ速ニ屆出ベシ。

一行倒レ人、或ハ變死・棄兒等之アラバ、速ニ屆出ベシ。都テ事替リタル件ニハ、小事ト雖モ屆ケ出ベシ。私ニ計フヲ許サズ。

一生者死者アラバ、逸々小前ヨリ屆ケヲ受ケ、洩漏ナク、一ケ月每ニ取調ベ、副戶長へ差出スベシ。

一村中ノ組合ヲ正シ、戶籍ヲ明ニシ、人員ノ增減、牛馬ノ有無、各戶ノ分限等、詳細ニ辨知スルヲ要ス。

一若シ肝煎名主、幷組頭・百姓等ニ不正ノ事アラバ、宜ク是ヲ匡正スベシ。用ヒザルニ及ビテハ、廳中へ申立ベシ。若シ俱ニ不正ノコトアルニ於テハ嚴科ニ處ベシ。

一村內男女ノ風俗ヲ正シ、人ノ人タル孝悌廉恥ノ道ヲ衆ニ示シ、墮胎・博奕等ノ惡習ナカラシメ、老幼ヲ存撫スベシ。

一都ヲ布告向肝煎ヨリ通達アラバ、組頭ト談合シテ、小前・社寺等へ親切ニ告諭シ、了承セシムル樣致スベシ。

一小前、幷社寺等ヨリ、諸願伺筋等申出ル時ハ、其條理ヲ正シテ調印シ、或ハ肝煎ニ談ジ、奧印ヲ得テ差出ベシ。無謂差拒ムヘカラズ。

一村中爭訟ノ事起ラバ、百姓代ヲ立會セ、其原因ヲ尋ネ、事ノ曲直ヲ糺シ、偏頗ナク道理ヲ推テ、之ヲ勸解スベシ。若シ止ルヲ得ザルニ至ラバ、訴出其裁判ヲ願フベシ。

一村內孝子・義僕ノ類、篤行ノ者アラバ、能々穿鑿ヲトゲ、偏頗ナク取調申立ベシ。

右名主ノ職掌タリ、一村ノ利害得失其所分ニ係ル所ナレバ、公正廉直ヲ旨トシ、盡ク

私心ヲ去リ、職ヲ奉スベシ。

副戸長

一副戸長ハ戸長ノ副役ナレバ、其職掌ハ同一ナリ。能々申談ジ、粗錯雜ノ弊ナク、規則ニ悖ラザル様、詳細取調ベシ。

組　頭

一組頭ハ名主ニ代ル者ニシテ、都テ名主ノ事務ヲ助ケ、一村ノ事ヲ取扱ヒ、年貢諸勘定トモ、名主倶々百姓代ノ立會ヲ受ケテ、取調其他村内行立ツ様心掛、若シ肝煎又ハ名主等ニ心得違ノ事アラバ、能々申談ジ匡正スベシ。取用ヒザル節ハ、直ニ廳ヘ申出ベシ。倶々不正ノ取計致スニ於テハ、嚴科ニ處スベシ。其他都テ掌ル所、名主ニ易ルコトナシ。只指揮ヲ得テ行フノ別アルノミ。

百姓代

一百姓代ハ其村百姓ノ惣名代人トナリ、名主・組頭ノ正不正ヲ監察スル爲ナレバ、租税米金、其他村入用・夫錢ノ高割、幷取立等ノ節ハ、必立會若シ疑シキ廉アラバ、一々其元帳ニ附テ、割合方不公平之レ無キ様、篤ト取調ノ上、名主ノ控帳ヘ調印シ、相違ナキコトノ證トスベシ。若シ不筋ノ入用ヲ小前ヘ割付ケ、私欲・横領ノコトアラバ、篤ト穿鑿ノ上、談議スベシ。若シ其上ニモ取用ヒザル時ハ、廳ヘ申出ベシ。申

出ガタキ仔細アラバ、封書ニテ目安箱ニ入ルモ妨ゲナシトス。

一村内ニテ名主・組頭等繁務ノ節ハ、俱々助合、用辨相成ル樣致スベシ。

一都テ小前諸願伺等ノ事ハ、名主・組頭ヘ申立ベシ。若シ不都合ノ仔細アラバ、直ニ廳ヘ申出ルモ妨ゲナシ。

一村内男女ノ風俗ヲ正シ、墮胎・博奕等ノ惡弊ナカラシムル樣、厚ク心ヲ用ユベシ。

一何事ニ限ラズ、小前一同ヘ響ク事ハ、能々申談ジ、異存無之上ニテ取計フベシ。

右百姓代ノ職掌タリ。誠悃實直、以テ宜ク其ノ職ヲ奉ズベシ。

名主等の稱を廢し區戸長を置く

明治五年四月九日、庄屋・名主・年寄等の稱を廢し、戸長(正副)を置く。五月廿七日、全縣下全く統一に歸したれば、從前の區劃を廢し、更に大小區制を設け、全縣下を廿二大區に畫し、戸長以下の職制、及び鄕村の規則を定む。

一、戸長ハ各大區一人ヅツニ限ルベシ。

二、大區長高千石ヨリ二千石ヲ目度トシ、地形ノ便宜ニ從ヒ、小區ヲ立テ、副戸長一人ヅツヲ置クベシ。但無高ニテ家屋竝列ノ市街ハ、千戸内外ヲ以テ一小區トシ、副戸長一人ヲ置キ、小區中凡五百戸毎ニ、組頭一人、總代一人、或ハ二人ヲ置クベシ。

三、小區中、村毎ニ組頭、總代人ヲ置ク、從前ノ如クナルベシ。但各村家ノ便宜ニ從ヒ、五戸ヲ合セ、五人組トシ、伍長一人ヅツヲ置クベシ。

四、正副戸長以下ノ格式左ノ如シ。

戸長十五等。副戸長等外二等。組頭（惣代人以下ヲ總括ス）總代人（組小前ノ上席）

但戸長ハ官撰トス。副戸長ハ小區内ノ入札ヲ以テ、戸長其當否ヲ檢査シ、組頭以下ハ一村ノ入札ヲ以テ、副戸長ニテ前ノ如ク檢査シ、上達スベシ。

五、戸長以下組頭ニ至ル迄、都テ其部内ヲ保護スベキ職掌ナレバ、上政府ノ御趣意ヲ守リ、下小前ノ勤惰ヲ監シ、丁寧親切、之ヲ匡正スベシ。

六、前ニ揭グル如クナレバ、大小區内ノ取締ハ、總テ正副戸長ニ委任ス。故ニ其區内士民ヲ論ゼズ、萬一御趣意ニ悖ルカ、或ハ不體裁ノ所業アレバ、其責戸長ニ任スベキナレバ、常ニ合議シ、篤ク教戒ヲ加ヘ、尙不取用者アラバ、斟酌ナク其事故書綴リ、上達スベシ。但孝子・義僕・力田ノ者ヲ檢シ、荒蕪ヲ起ス等ノ勤メ怠ルベカラズ。

七、戸長以下小前ニ至ル迄ノ勤怠・曲直ヲ監シ、幷盜賊・博徒追捕トシテ、官員・捕亡吏等、臨時ニ巡村セシムルト雖モ、自己ノ家產ヲ守ルハ、人民ノ通義ナレバ、官力ノミヲ仰ガズ、區内連合、組小役ノ類ヲ置キ、嚴重取締ルベシ。其人員ノ多少ハ便宜ニ從ヒ、方法ヲ設ケ、別途ニ申立ツベシ。

八、區内賊徒ヲ搜索シ捕縛セバ、一ト通リ戸長ニテ糺彈シ、假口書ヲ添ヘ、本廳ヘ差出スベシ。但證據分明ナラザレバ、訊杖ヲ用ユルヲ許サズ。勉メテ寃枉ノ弊ナキ

ヲ要ス。

九、區内行倒レ或ハ縊死人等有之節ハ、副戸長ヨリ戸長ニ通達次第、速ニ場所出張、副戸長以下定例ノ立會人ヲ置キ、規則ノ通リ連署ノ口書、並ニ見分書ヲ以テ屆出ベシ。若シ疑シキ事アラバ、檢使ヲ請フベシ。但往返五里外、及一泊以上ハ、當縣規則之通、旅費下サルベク、其餘ハ自費タルベシ。

一〇、貸金賣掛ノ類、其事理瑣細ノ訴訟ハ、戸長ニテ其訴答ノ情實ヲ推究シ、證書ヲ檢シ、條理分明至當公平ニ說諭ヲ加ヘ、和解セシムベシ。此時ニ膺テ凝滯寃枉ノ弊ナキヲ要ス。故ニ解訟ナシ難キト見込バ、速ニ其事理ヲ書綴リ、長副ノ添書ヲ以テ、双方共差出スベシ。

一一、租稅納ノ儀、期限ヲ怠ラザル樣注意スベシ。但戸籍ノ調ハ、規則ノ通リ詳細取調ル勿論ナリ。

一二、各區割ヲ立ルト雖モ、惣管内ハ一家ノ如ク、人民ハ猶兄弟ノ如キモノナレバ、互ニ交通親睦シ、家業ヲ經營スベシ。故ニ各大區ノ戸長、各小區ノ副戸長モ、互ニ諸般合議シ、各區彼我ノ別ナカルベシ。

一三、戸長ハ年給百圓トシ、總管内ノ戸數ニ課シ、官ヨリ支給スベシ。

一四、副戸長ハ年給金十五圓トシ、一大區中ノ總戸數ニ課シ、戸長ニテ取立割渡スベ

シ。

一五、組頭總代人ハ草高百石ニ付、金三圓トシ、其六分ヲ組頭、四分ヲ總代人ノ年給ト定メ、小區内ノ總草高ニ課シ、副戸長ニテ取立、人頭ニ割渡スベシ。但シ無高市街ノ組頭ハ、年給四圓、惣代人ハ同金二圓ト定メ、其取立方ハ第十九條ノ如クナルベシ。

一六、大小區内ノ用向ニテ、戸長以下出廳ノ節ハ、五里外一泊以上ハ、旅籠料並日當錢四錢ト定メテ、戸長ハ大區中、副戸長以下ハ小區内ニテ、其身ハ勿論惣高割タルベシ。但檢見、其他町内ヘ官員出郷等ハ、何レモ手辨當タルベシ。

一七、前ニ揭グル外、平常村入費ハ、其小區内ノ高割タルベシ。

一八、右戸數幷草高割取立物ノ儀ハ、細大トナク其事理詳細ニ記載シ、證書取置キ、大小區共、夏冬二季ニ取立、後日紛紜生ゼザル樣致シ、雛形ノ通リ區内勘定帳ヲ仕立、翌年正月晦日迄ニ差出スベシ。但勘定帳ニ載スル外私ニ入用取立ルヲ許サズ。

一九、無高ノ市街、副戸長以下ノ給分ハ、戸數ニ課シ、戸長ニテ取立割渡シ、其餘ノ諸入費ハ小間割タルベシ。但勘定帳ハ別途ニ仕立テ、大區ニテ取纏メ、前ノ如ク差出スベシ。

二〇、自己ノ訴訟願事等ニテ出廳ノ節ハ、附添役人ノ旅籠料日當トモ、其本人ノ受持

トシ、勘定帳ノ外タルベシ。

右之通リ相定候條、御趣意ヲ奉體シ、諸般虛飾ニ涉ラズ、總テ誠實ヲ旨トシ、可相勤事。

明治六年六月に至り、集會局を設く。是れ下意上達、上下輯睦を期せんがための機關たり。次いで宿村吏員の選擧方法に就て、告諭を出し、徒に門閥・門地等に泥まず、人材本位にて選出すべき旨を諭せり。

集會局假規則

第一條　大區集會、每月一度。但廿一日、當分熊谷驛。
　右定日會頭・會員、朝第十時入局候事。

第二條　大區集會ハ、奏任官・會頭・判任官、及議者幹事タリ。各大區正副區長會員タルベシ。

第三條　大區會席ニ於テハ、正副區長專ラ下情ヲ陳述、且朝旨ヲ奉ジ、上下相親ミ、言語洞開、漸次舊來ノ陋習ヲ破リ、人民一般ノ公利ヲ興スヲ要ス。

第四條　小區集會、每月一度ヅツ。但每一小區一ヶ所ヅツ會席ヲ設ケ、定日集會スベシ。

第五條　小區集會ハ、各大區正副區長會頭タリ。每區戶長會員タルベシ。但副戶長ノ內、一名乃至二三名、其村驛ニ於テ、人撰會員ト定メ、戶長同樣出席スベ

シ。最モ其人名ハ、預メ會頭ヘ屆ケ置クベシ。

第六條　小區會席ニ於テハ、戸長・副戸長ノ内、專ラ區内村驛ノ情實ヲ陳述、且朝旨ヲ奉ジ、漸次舊來ノ陋習ヲ破リ、各村各區廣ク協力、人民相互ニ其志ヲ遂ゲシムルヲ要ス。臨時本縣官員出席、事情傍聞スルコトアルベシ。

第七條　小區會席ニ於テ、會員陳述スル處ノ情實ヲ公評、顚末條理ヲ詳ニシ、區長其可否ノ目途ヲ立テ、大區會席ニ於テ更ニ之ヲ陳述スベシ。

第八條　小區會席ニ於テ、一切ノ事件之ヲ決スベカラズ。

第九條　大區會席ニ於テハ、紛議一決スベクシテ、一切之ヲ行フベカラズ。

第十條　大區會席ニ於テ、決議ノ條々之ヲ施行スルハ、太政官・諸省・縣廳各事ノ大小輕重ニヨリ、都テ御一定ノ制ニ從フ。

第十一條　大區會席ニ於テ議事ヲ起ス者ハ、更ニ小區會席ニ於テ熟議、次會大區會席ニ於テ、之ヲ評決スルヲ以テ平素ノ例トス。

第十二條　集會正則例外（省略。）

宿村吏撰擧方諭達　（明治六年八月七日第三十號）

從前宿村役人共ノ儀ハ、專ラ其宿村、又ハ其區内ノ者ニシテ相勤候仕來ニ候處、維

新以來、萬民ノ爲メ廣ク其人選被レ爲レ在、譬外國ノ人ニテモ用立候者ハ、御雇入被二召仕一候程ノ御時節、別而其區其宿村ノ如キ少人數ノ內ヨリ人選候樣ニテハ、自然其任ニ堪兼候者モ有レ之、往々上下ノ不便ヲ釀シ候事ニ付、自今追々右樣ノ舊習ハ勿論、家柄抔ト唱ヒ候者ニ不レ拘、他村又ハ區違ヒ等ノ無二差別一役々申付候儀モ可レ有レ之候間、小前末々迄厚ク得二其意一宿村各區等ニテ人選致シ候節モ、同樣ノ心得ヲ以テ、居村其區ニ不レ拘、廣ク入札其人ヲ得候樣、專ラ注意可レ致候。 右ノ通追々人選申付候樣相成候上ハ、可レ成丈ケ人員ヲ減少シ、相應ノ給料相與候樣、都テ實地ノ取計可レ致候事。 且又一村立相成居候村々ノ內ニモ、無民家ハ勿論、僅ノ軒數ニテ一村獨立ノ事實ハ、素ヨリ難二相立一村々モ不レ少、右等ノ類ハ追々取調ノ上、合村等ノ見込ニ候條、此段モ兼テ相心得、都テ舊習ニ不レ泥、諸事實用第一盡力可レ致候。 加レ之、從前一村內ニテモ鄕分・組分等致シ、役人共マデ區別有レ之、却テ不和ノ基ニモ可二相成一哉ノ趣モ有レ之、殊更不都合ノ筋ニ候間、追々右等固陋ノ處置相止メ、廣ク一和協力、相當ノ土地役人ヲ選擧シ、彼我ノ私情無レ之候樣可レ致、右ハ舊縣々ニ於テ兼テ布達ノ趣モ、有レ之處、更ニ此段及二告諭一候也。

尙此告諭の內、合村必要の場合に於ける村々合併につき、合併願の雛形につき、明治七年六月十五日附を以て布達せり。 此結果、明治十一年十一月迄に合併・改稱、及び分離したるもの左の如し。

## 上野國村之合併或分離及村名改稱願許可分調

### 一　合併及改稱之部

| （上申指令ノ年月日） | （郡名） | （舊町村名） | （新町村名） | （事由） |
|---|---|---|---|---|
| 明治七年六月十四日<br>同年同月廿八日 | 勢多郡 | 下田澤村<br>楡澤村 | 下田澤村 | 山林或ハ耕作地人家共入會、從前ノ一村同樣ノ村ニ付、便宜ヲ以合併。 |
| 七年七月十三日<br>同年同月廿九日 | 群馬郡 | 今宿村<br>善光寺村 | 鶴光路村（くわくくわうぢ） | 今宿始段別坪數戸數トモ少分ニ付、便宜合併。 |
| 同上以下同ジ | 同 | 矢島村<br>龍門村<br>阿內宿村<br>寺家村<br>阿內村 | 龜里村（かめさと） | 以下同前 |
|  | 甘樂郡 | 左京分村<br>十二村 | 上高田村 |  |
|  | 吾妻郡 | 赤羽根村<br>中井村 | 三原村 |  |

| 年月日 | 郡 | 舊村名 | 新村名 | 備考 |
|---|---|---|---|---|
| | 碓氷郡 | 行田村<br>越泉村 | 行田村 | |
| | 同 | 二軒在家村<br>別所村 | 二軒在家村 | |
| | 群馬郡 | 高崎驛田町三丁目迄<br>同八軒町 | 八軒町ヲ廢シ田町四丁目 | |
| 七年八月廿五日<br>同十月七日 | 甘樂郡 | 後箇村<br>後賀村 | 南後箇村 | 右同郡中異字同様ニ付、後箇村ノ方南ノ字ヲ爲レ冠。 |
| 七年八月廿九日<br>同十一月十五日 | 群馬郡 | 下公田村<br>茂右衛門分村<br>公田村 | 三公田村 | 右下公田村始、小村或無民家ニ付、便宜ノ爲メ合併。 |
| 同上以下同ジ | 同 | 中齋田村<br>齋田村 | 齋田村 | 同前。 |
| | 利根郡 | 奈良村<br>大倉蘭新田 | 奈良村 | 同前。 |
| | 同 | 新巻村<br>二枚原村 | 新巻村 | 同前。 |

七年十一月十八日
同十二月八日

| 郡 | 舊町村 | 新町村 | 備考 |
|---|---|---|---|
| 利根郡 | 相俣村、富士新田 | 相俣村 | 同前。 |
| 吾妻郡 | 入須川村、上須川村 | 入須川村 | 同前。 |
| 同 | 布施村、湯宿村 | 布施村 | |
| 同 | 永井村、合瀬村 | 永井村 | |
| 利根郡 | 谷地組、富士新田 | 谷地組 | |
| 同 | 湯原組、木賊新田 | 湯原村 | |
| 甘樂郡 | 笹村、多井戸村、二口町村 | 小川村 | |
| 綠野郡 | 鬼石村 | 鬼石町 | 鬼石村ハ土俗町名ヲ稱ス。 |
| 甘樂郡 | 鹽澤村 | 大鹽澤村 | 鹽澤村ハ一郡中ニ同名同樣ノ村名アルヲ以改稱。 |

| 年月日 | 郡 | 舊村名 | 新村名 | 摘要 |
|---|---|---|---|---|
| | 甘樂郡 | 神原村 | 神農原村 | 同前。 |
| | 勢多郡 | 糸井村<br>長者久保村 | 糸井村 | 糸井村始、舊幕府旗下上知ニ付、小村分郷相成居或ハ一郡中同樣ノ村有之ニ付、合併改稱。 |
| | 群馬郡 | 上瀧村<br>瀧新田村 | 上瀧村 | 同前。 |
| | 群馬郡 | 中里村 | 東中里村 | 同前。 |
| | 吾妻郡 | 小宿村<br>狩宿村 | 應桑村 | 同前。 |
| 八年一月廿九日<br>同六月十七日 | 綠野郡 | 落合新町<br>笛木新町 | 新町驛 | 兩町ノ義ハ中仙道新町宿ト稱來ノ處今般合併改稱。 |
| 八年九月七日<br>同同廿七日 | 吾妻郡 | 松尾村<br>横谷村 | 松(まつ)谷(や)村 | 當村ノ義小村ニ付、便宜ノ爲メ合併改稱。 |
| | | 本宿村<br>大平村<br>森平村<br>藤井村<br>芦野平村 | | |

| 年月日 | 郡 | 舊町村 | 新町村 | 摘要 |
| --- | --- | --- | --- | --- |
| 八年九月七日<br>同　同　廿七日 | 甘樂郡 | 三ツ瀨村<br>市野萱村<br>根小屋村<br>漆萱村<br>黑川村<br>矢川村<br>恩賀村<br>入山村<br>坂詰村 | 西野牧村 | 本宿村始、往古ハ一ケ村ニ有之處、延寶度檢地ノ節分裂、爾來一村立ニテ費用モ嵩ムノ趣ヲ以テ復古シ、合併改稱。 |
| 八年十一月二日<br>同　同　廿日 | 群馬郡 | 曲輪町<br>竪町 | 竪町 | 地坪五千四百五十三坪八合ノ內、千四百二十四坪一合竪町ヘ合併。右竪町ノ義ハ、曲輪町內書ノ坪數元貫屬、耶ニ有之ヲ竪町地檢積ノ故ヲ以テ同、町ノ者共從來家數繁殖致シ度旨ニテ有志協力、右地坪ヲ購求シ、便宜ノ爲メ新道開通、已ニ兩側町竝、家屋新築ノ處、貫屬町ニ連リ居リ故、不都合有之合併。 |
| 八年四月廿五日<br>同　十二月廿七日 | 碓氷郡 | 人見村<br>上人見村<br>下人見村 | 人見村 | 人見村其外ハ戶數少ク、耕地民家點綴人交リ居、百般ノ事務差支アルヲ以テ合併。 |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 八年九月七日<br>同同廿七日 | 吾妻郡 | 與喜屋村<br>新井村 | 與喜屋村 | |
| | 同 | 立石村<br>勘場木村<br>坪井村 | 大津村 | 右何レモ小村、就中勘場木村ハ獨立不二相成一、立石村ハ兼帶ノ義ニテ、村費減少ノ廉ヲ以テ合併。 |
| 八年九月三十日<br>同十一月四日 | 甘樂郡 | 八城村<br>稻荷村 | 八城村 | 右八城村ハ碓氷郡中狹孕シ、甘樂郡ヨリ飛地ノ姿ニテ、地圖取調等不都合ノ趣ヲ以テ合併。稻荷村ヲ廢シ、碓氷郡八城ト改稱ス。 |
| 八年九月三十日<br>同十一月四日 | 同 | 二軒在家村<br>鳥留村 | 二軒在家村 | 右村費減少ノ爲メニ合併。 |
| 八年十二月十二日<br>同同廿八日 | 利根郡 | 湯原村 | 川場湯原村 | 右同郡中ニ同名有レ之ニ付改稱。 |
| 九年一月廿五日<br>同二月九日 | 甘樂郡 | 大桑原村 | 桑原村 | 同上。 |
| 九年五月十日<br>同同廿日 | 勢多郡 | 山上後閑村<br>山上內町村<br>山上新町村<br>山上太郎左衛門分村 | 山上村 | 右山上後閑村始、何レモ村落民家共互ニ入會、或ハ飛地ニテ不都合ハ勿論、村費モ相嵩ミ、且地租改正ニ付、土地丈量地圖調製方差支ノ趣ヲ以テ合併。 |
| 九年五月九日<br>同五月廿二日 | 同 | 不動堂村<br>中島村 | 時(とき)澤(さは)村 | 同前。 |

| 年月日 | 郡 | 舊村 | 新村 | 備考 |
|---|---|---|---|---|
| | 甘樂郡 | 上白倉村<br>下白倉村 | 白倉村 | |
| | 多胡郡 | 上長根村<br>中長根村 | 長根村 | |
| 九年十月九日<br>同　同　廿日 | 新田郡 | 藪塚村<br>西野村 | 藪塚村 | |
| 九年十月六日<br>同　同　廿五日 | 勢多郡 | 宮關村 | 大胡村 | 右宮關村ノ義、往古、大胡常陸介居城ノ節、大胡町ト唱へ候處、廢城ノ後宮關村ト改稱相成候得共、一般大胡トノミ唱へ候故、不都合不レ少趣ヲ以テ改稱ス。 |
| | 勢多郡 | 小泉村<br>中龜村 | 龜泉村 | 兩村共、戸口共甚少故、彼是不便不尠、且改租ニ付土地丈量等ニテ差向地圖調製方困難ノ趣ヲ以テ合併。 |
| 九年十月十九日<br>同　十一月四日 | 那波郡 | 兩家村<br>矢田村<br>西善養寺村<br>横堀村 | 西（にし）善（ぜん）村 | 村々往昔ハ西善養寺ノ一村ニ有之處、元祿年度四ケ村ニ分裂セシ所、入會ノ村落耕地共錯雜致シ、不都合ノミナラズ改租ニ付、以下前同文。 |
| 十年二月十一日<br>同　同　十四日 | 勢多郡 | 日影南鄕村<br>下水良村 | 日影南鄕村 | 下水良村ノ義ハ文政年間無民家相成候。已來日影南鄕村ニ而進退取扱來村柄ニ而今般改租ニ付以下前同文。 |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 十年二月一日<br>同年同月十六日 | 群馬郡 | 小野子村<br>同村字寄島<br>横堀村 | 横堀村 | 當村ノ義ハ、往昔一村ノ處、寛文年間分裂、兩村ニ相成候得共、今般改租ニ當リ、寄島ト相唱フ地ハ、横堀村ト入會、且飛地等モ有之、地圖調成等互ニ困難ノ故ヲ以テ合併。 |
| 九年十二月廿四日<br>十年二月廿八日 | 佐位郡<br>新田郡 | 國定村<br>久仁村 | 國定村 | 村々本村ヘ合併ノ義ハ、元來新田郡三ケ村ハ、少反別無民家故、百事本村ニテ取扱來、自然冗費モ相嵩、殊ニ改租ニ當リ、地盤ノ區域當郡ニ孕在スルヲ以テ、製圖其他不都合不レ尠候ニ付合併シ、佐位郡本村ヘ編入ス。 |
| 同 | 佐位郡<br>新田郡 | 田部井村<br>田部村 | 田部井（ためがゐ）村 | |
| 同 | 佐位郡<br>新田郡 | 間野谷村<br>間野村 | 間野谷（あひのや）村 | |
| 九年十二月十八日<br>十年三月三日 | 群馬郡 | 高崎驛ノ内<br>高松町 | | 高崎舊城内一圓ヲ更ニ上書ノ通名稱ヘ相付スハ、改租ニ當リ發輝ト名稱ヘテハ差支アルヲ以ノ故ナリ。 |
| 九年十二月十八日<br>十年三月三日 | 邑樂郡 | 海老瀬村 | | 栃木縣管下下野國都賀郡内野村飛地字仕出ノ内、下反別八反三畝十一歩編入、十年二月十三日太政官ヨリ達。 |
| 十一年二月<br>同同廿三日 | 利根郡 | 戸鹿野村<br>戸鹿野新町 | | 去ル明治七年五月（舊五月）舊熊谷縣ヨリ史官ヘ差出候村名簿ニ、戸鹿野村ヘ戸鹿野新町合併ト有レ之共、合併ニ無レ之ニ付取調候處、慶安年間、分村以降、連綿兩立シ、相違無レ之ニ付、舊縣ヨリ差出候村名簿中、合併ノ廉取消之義、十一年二月開申、同月廿三日聞屆ノ指令アリ。 |

| 年月日 | 郡 | 舊町村 | 新町村 | 摘要 |
|---|---|---|---|---|
| 十二年五月<br>同　十月十五日 | 利根郡 | 東田代村<br>東小川村 | 東小川村 | 東田代村ノ義者、最僻タル一寒村ニシテ、戸口モ亦僅少ナルヲ以テ、東小川村へ合併ノ義出願。 |
| 十二年四月三十日<br>同　十月二十七日 | 碓氷郡 | 安中驛<br>谷津村<br>上野尻村<br>下野尻村<br>常木村 | 安中驛 | 安中驛外三村ハ中仙道線路ニ中リ、殆一驛ノ姿ヲナシ、家屋連軒ニ商業ニ從事シ、一驛三村ナルモ外見區域ヲ辨ゼズ、百事不便ノ故ヲ以テ、常木村ノ義、戸數僅少ナルヲ以テ合併、安中驛ト稱シ度旨出願ニ付。 |
| 十二年五月二十一日<br>同　六月六日 | 那波郡 | 飯島村<br>同 | 上飯島村<br>東飯島村 | 二ケ村同郡同村名ニテ不便ナルヲ以テ、改稱ノ義出願ニ付。 |
| 十四年六月十一日 | 利根郡 | 上佐山村<br>下佐山村 | 佐山村 | |
| 十五年二月十七日<br>同　四月十三日 | 多胡郡 | 吉井町<br>川内町 | 吉井町 | 往古一町ニシテ、年度不詳分離、各獨立ニ候得共、人家混同誤視スルヨリ不都合不レ尠、依テ川内村ヲ廢シ、吉井町へ合併ノ義出願ニ付。 |
| 十五年十二月 | 佐波郡<br>那波郡 | 島村<br>前河原村 | 島村 | 二ケ村ノ義往古ヨリ各獨立ノ村落ニ候得共、地形四周、川城ヲ以テ兩郡各村ト隔絶、兩村ノ耕地宅地交々混淆候處ヨリ、現今一部落ノ状況ヲ爲シ、且合併ノ上ハ村費若干減少スルヲ以テ、出願ニ付内務省伺濟。 |

## 二　分離之部

| 年月日 | 郡 | 村 | 分離後 | 事由 |
| --- | --- | --- | --- | --- |
| 十二年八月十五日 | 利根郡 | 沼須村 | 上沼須村<br>沼須村 | 二ケ村往者ヨリ一村ニ有之處、形地二區ニ分割、耕宅地等モ亦之ニ同ジク、民情ニ於ケルモ自然其意想ヲ異ニシ、分離ハ大ニ人情ニ適スルヲ以テ、諸願ノ顚末ヲ主務省ニ禀議シ指定。 |
| 十三年十二月六日<br>十四年二月九日 | 南勢多郡 | 舊込皆戸村 | 込皆戸村<br>稻里村 | 當村ノ義地形二區ニ分割、中間他村ヲ夾ミ、諸出費等不便ニ付、分村出願ニヨル。 |
| 十五年四月六日<br>同　五月九日 | 北甘樂郡 | 西野牧村 | 西野牧村<br>北野牧村<br>本宿村<br>東野牧村<br>南野牧村 | 往昔西野牧村ト稱シ、延寶六年以後、十四ケ村ニ分離ノ處、村費節減ノ爲メ、明治八年右村々合併、西野牧村ト改稱ノ處、全村地盤廣濶、戸長役場ニ不便ナルヲ以テ、更ニ五ケ村ニ分離、出願ニヨル。 |

右之外、碓氷郡西上磯部村・上磯部村ヲ合併、西上磯部村ニ(明治九年一月十三日)、新田郡由良村・別所村ヲ合併由良村ニ(同十一年十二月廿四日)、吾妻郡日影村、太子村ヲ合併、日影村ニ(明治十一年一月十五日)山田郡淺原村、長尾根村ヲ合併、淺原村ニ(明治十二年九月六日)上申シタルモ、聞屆ケ難キ旨ヲ以テ、許可指令トナラザリキ。

### 大小區會議ノ議ニ付大區會頭ヨリ達　(明治七年七月五日)

去ル戊辰歳、大政復古ノ初メニ當リ、　聖上親シク百官ト倶ニ神明ニ誓ハセラレ、國家前途ノ目途ヲ立セラレタル御旨意ヲ以テ、今般先ヅ地方長官ヲ召集セラレ、人民ニ代リテ協同公議セシメラルベキノ旨仰出サル。此乃全國人民ノ代議人ヲ召集シ、公議輿論ヲ以テ律法ヲ定メラルベキノ基礎タルモノナレバ、陋劣短才某等ノ如キモ、此會場ニ出テ吐露スル所ヲ領シ、熟議明辯セザルベカラズ。因テ當縣ニ於テ兼テ施行スル所ノ大小區會議、尚一層ノ勵精協議、管下一般ノ愛國心ヲ集メ、國家ニ奉ズルノ義務ヲ盡シ、其非トスルモノ、可トスル者、詳ニ熟慮討論アルベシ。且ツ本年會同ノ期、九月十日ノ命アリ。敢テ請日今建議セント欲スルノ事件アラバ、無忌憚速ニ申告アランコトヲ。（群馬縣布達全書）

官令ヲ人民ニ熟知セシメ違令犯則ノ輩ナカラシムル告諭。

（明治八年十一月十四日）

上意ヲ下達シ、下情ヲ上通スルハ、專ラ區戸長ノ擔任スル所ニシテ、今日官令ヲ人民ニ熟知セシメ、違令犯則ノ輩ナカラシムルノ責メハ、正副戸長ニアリ。然リ而シテ人民モ亦官ノ令スル所ハ、區戸長ニ就キ示諭ヲ乞ヒ、文意ノ解セザルハ飽迄質問承知スベキ筈ニ候處、多クハ公布布達ノ何者タルヲ解セズ、掲示ハ勿論、毎戸廻達ノ活版布令ニ於ルモ、文字ノ讀得ガタキニ托シ、只一回スルノミニ止リ、其旨趣ノ概意

モ不知者夥多有之、夫ガ爲メ遂ニ違犯ノ徒モ不少趣、甚以憫然ノ至リ、且ハ御趣旨ニ悖リ不相濟儀ニ付、自今各村落便宜ノ地ヘ官令教諭所ヲ設ケ、農繁ノ節ヲ除キ、定日相立、毎戶一名宛ヲ相會シ、正副區戶長ニ於テ懇切ニ解讀辨知セシメ、萬一文意難解ノ時ハ、小學校休業ノ節、教員ニ訓讀ヲ依賴スルモ、無妨、漸次教諭セバ、寒村不學ノ者モ自然耳目ニ慣レ、終ニハ自讀スルニ至リ、且其子弟ヲ誘導ノ端緖ニモ可相成、然トモ一般ノ廻達ヲ廢止シ、只解諭ノミヲ施行スル、各所ノ事情一定ニモ難至歟。依テ各區適宜ヲ以テ、官令訓釋・說諭ノ方法ヲ設、其旨趣普ク人民ニ徹底候樣、各區小會議ヲ遂ゲ、施設ノ便否、熟議相定可申、此旨及示諭候也。

正副區長學區取締共出縣ノ節ハ長次官ヘ謁見シ該區內現況上陳方心得

（明治十年二月八日）

各區正副區長取締共、自今出縣ノ節ハ、長次官ヘ謁シ、必該區內ノ現況概略上陳候樣可致、此旨可相心得事。　但長次官ヘ謁見ノ節ハ、名刺ヲ以第一課ヘ申入、同課ノ指揮ニ從フ可ク、且ツ別記ノ通尋問候儀モ可有之ニ付、要目爲心得相達置候事。

（別記）

第一　一般人民ノ專ラ勉ムル事業ノ大略。

第二　一般人民ノ專ラ歡樂トスル件。

第三　一般人民ノ專ラ苦慮トスル件。

第四　米麥其他諸作ノ豐凶、及養蠶・製絲等重ナル物産ノ盛衰、竝諸品賣買相場ノ高低。

第五　學校ノ形勢。

第六　當時改正事務、其外ニ對シ、正副戸長立會人等ノ勉否、及一般民情ノ向背。

第七　水火災・盜難之有無。

第八　金穀流融之可否。

第九　篤行及奇特之者有無。但志行格別ナル者有之時ハ、書面ヲ以テ申立ベシ。

第十　窮民之有無。但窮民ハ其窮迫ノ事由ヲ詳ニシ、書面ヲ以テ申立ベシ。

第十一　道路橋梁ノ便否及破壞ノ有無、竝行旅ノ難易。

町村總代人選擧規則（明治十年八月一日甲第三十九號）

第一條　凡町村總代人ハ、千戸以上ノ町村ハ、百戸ニ壹人ヲ置キ、千戸以下ハ五十戸ニ一人ヲ率トナス。其五十戸ニ滿タザル町村ハ、近接ノ町村ヲ合シ、數人ヲ置クヲ得。

第二條　凡總代人ハ其町村ニ本籍アリ、少クトモ價格百五十圓以上ニ當ル不動産ヲ管内ニ所有スル者タルベシ。

第三條　左ノ場合ニ於テハ、總代人タルヲ得ズ。
一　幼年者。　一　懲役一年以上、又ハ除族ノ刑ニ處セラレシ者。
一　官吏・准官吏。
第四條　總代人ハ毎年七月ヲ期トシ、其半數ヲ改選セシメ、毎期半數ヲ交代スルモノトス。其存置スル半數モ、投票ノ多數ニ依テ定ム。但明治十一年ヨリ、毎年七月、第二回土曜日ヲ以テ改選投票ノ定日トス。
第五條　選擧ハ其町村役場ニ於テ、區戸長會同、投票數ノ最モ多キ者ヲ以テ之ニ充ツ。但官吏・准官吏ハ投票ノ數ニ加ヘズ。
第六條　投票ハ區長之ヲ開キ、其總代人ト定メタル者ノ住所・身分・職業・氏名・年齢ヲ詳記シ、其開キシ票ヲ添ヘ、第一課ヘ屆ケ出ヅベシ。
第七條　總代人ハ其土地ニ對シテノ義務ニテ選バルヽモノナレバ、之ヲ辭スルヲ得ズ。
第八條　總代人若シ破産、或ハ犯罪アリテ、第二條・第三條ニ觸ルヽトキハ、臨時改選スベシ。

年中行事概略　（明治十年十月三十日）

一月

一　前年地租五分通納方ノ事。

一　車稅前年七月以後ノ分納方ノ事。

一　戸籍總計取調着手ノ事。

一　御布告揭示表、前年十月以後ノ分取調差出候事。

一　大小區入費、前年分悉皆正算、賦課法等完結スベキ事。

一　徵集生徒賄費、竝ニ御委托金補共、其年六月分迄豫算賦課ノ分納方着手ノ事。

一　縣限賦金ノ内、年稅ノ分前年七月以後ノ分、取立上納ノ事。

一　右同斷ノ内、月稅前年十二月分取立上納ノ事。　但其年一月分ハ同二月上納以下倣之。

一　前年分埋葬調着手ノ事。

一　各村内一同集會、新年ノ祝賀ヲ述べ、而シテ該歲施行スベキ村内事務ノ概略ヲ議スベキコト。

一　村費檢印證、前年分ノ内未ダ正算不ニ相成分取調、悉皆縣廳へ差出候事。

一　小區集會、該歲各區適宜集合ノ定日相立可レ申事。

一　坑業明細帳、前年七月以後ノ分取調、縣廳へ差出候事。

一　坑山借區稅上納ノ事。

一 戸籍加除竝身分異動、前年十二月分取調、翌月縣廳ヘ差出候事。但其年一月分ハ同二月差出、以下倣之。

一 前年七月ヨリ十二月迄ノ間、復籍人・遞送人費取調、縣廳ヘ差出、致受取方候事。

一 各區各村役場、七日ヨリ相開キ候事。

一 各小學校八日ヨリ開校ノ事。

一 沽券稅、前年ノ半額上納ノ事。

一 前年七月以後半年分、官林竝木・損木御拂下代、及盜伐木追徵金上納ノ事。

一 前年七月以後半年分、地券證書替證印稅上納ノ事。

二月

一 道路・橋梁修繕着手始ノ事。

一 前年分村費檢印證ヲ以賦課ノ事。

一 同民費總計取調、縣廳ヘ差出候事。

一 同物產取調、區長又ハ當番副區長ニ於テ、御雛形ニ照準、大區總計ヲ調製シ、縣廳ヘ差出候事。

一 前年七月以後ノ種痘調、大區ニ取纏メ、縣廳ヘ差出候事。

一 前年ヨリ着手ノ戸籍、總計取調、埋葬調等縣廳ヘ差出候事。

一　前同斷、徵集生徒斷費、其外納方完了スベキ事。
一　牛馬賣買免許鑑札改、竝其月一月ヨリ六月迄半年分稅上納ノ事。
一　徵兵檢査ノ事。

三月

一　前年分地租二分五厘納方ノ事。
一　堤防・川除・用惡水樋類・溜井浚等工事着手ノ事。
一　地租定免、竝免下場年季切替規定免、新規檢見入願、及荒地起返貢附願、本月限縣廳ヘ差出候事。
一　獵銃竝威銃鑑札返納ノ事。但不定期ノ場所ハ此限ニアラズ
一　各村火ノ番ヲ引セ候事。
一　村役場諸帳簿目錄取調、村々ヨリ差出候事。

四月

一　一月ヨリ三月迄御布告掲示表取調差出方、渾テ一月ニ同ジ。
一　大小區入費、一月ヨリ三月迄ノ分取調、正算檢印請、縣廳ヘ差出候事。
一　村費檢印請、一月ヨリ三月迄ノ分、縣廳ヘ差出候事。
一　酒類釀造稅ノ半高、竝船稅上納ノ事。

一　道路・橋梁修繕ノ工事ヲ終ヘ候事。

一　村役場諸帳簿目錄、區限取纏、縣廳へ差出候事。

五月

一　前年地租貳分五厘皆濟納ノ事。

一　堤防・川除・用惡水樋類・堰溜井浚等ノ工事ヲ終ヘ候事。

一　蠶業ノ期節ニ付、小學校休校願ノ始ニ候事。

一　水害有レ之村々ニ於テハ、水防用具ヲ全備セシムベキ事。

六月

一　堤防・道路・橋梁・用惡水樋類・堰溜井浚等、皆民費ノ費用取調縣廳へ差出候事。

一　地方ニ依リ、各分ノミ架橋有レ之村々ハ、假橋取始ノ事。

一　三十日大祓執行ノ事。

七月

一　坑業明納表、前半年分取調、縣廳へ差出候事。

一　四月ヨリ六月迄ノ御布告掲示表差出方、四月ニ同ジ。

一　大小區入費、四月ヨリ六月マデノ分取調、正算檢印請、竝村費檢印證等、縣廳へ差出四月ニ同ジ。

一　清券稅・車稅、竝縣限賦金共、前半年分上納ノ事。

一　一月以後六月迄半年分、官林竝木・損木御拂下代、及盜伐追徵金上納ノ事。

一　一月以後六月迄半年分地券謄書換證印稅上納ノ事。

一　川々堤外、竝用惡水路兩緣ノ竹等刈拂、藻刈等ノ場所取調、縣廳ヘ差出候事。

一　蠶業ノ終節ニ付、各小學校開キノ事。

一　徵集生徒賄費、竝御委托金補共、下半年分豫算賦課ノ分納方着手ノ事。

一　種痘調差出方、二月ノ通計候事。

八月

一　牛馬賣買免許稅、其年七月ヨリ十二月迄半年分上納ノ事。

一　檢印證ヲ以、區費・村費割賦ノ事。

一　前月着手ノ徵集生徒賄費、其他納方完了スベキ事。

九月

一　夏成金上納ノ事。

一　獵銃免許相願候者ハ、鑑札相請稅上納ノ事。

一　一月ヨリ六月迄ノ間、復籍人遞送費取調、一月ニ同ジ。

一　道路・橋梁再度ノ修繕着手始ノ事。

一 酒類釀造稅ノ殘高上納ノ事。

一 堤防・道路・橋梁・川惡水樋類・堰、官民費修繕ノ場處、翌年ノ分取調帳、縣廳へ差出候事。

一 田方檢見始ノ事。 但檢見以前、内見帳可差出候事。

十月

一 六月中取除キ置候假橋架渡候事。

一 酒造竝酒類受賣營業稅上納ノ事。

一 酒類製酒出來高、生酒見込書上ノ事。

一 同免許鑑札改之事。

一 七月ヨリ九月迄ノ御布告掲示表差出方、七月ニ同ジ。

一 大小區入費、七月ヨリ九月迄之分取調、正算檢印、竝村費檢印證、縣廳へ差出、七月ニ同ジ。

十一月

一 各村火ノ番始ノ事。

一 田方檢見終リ候事。

一 道路・橋梁再度ノ修繕ヲ終候事。 附道路取締役、持場内巡視點檢ノ事。

一 徴兵下調、並滿十七歳ノ者取調着手ノ事。

十二月

一 徴兵名簿適當免役ノ分共、縣廳ニ差出候事。

一 各小學校二十五日ヨリ休校ノ事。

一 大祓式三十一日執行ノ事。

右之通概略ヲ假定スト雖モ、地方ニ依リ細目ニ大同小異ナキ能ハス。（作表可成各區一定ヲ要スルニ付、本文ニ準據取扱可申事。

# 第二節　郡長戸長時代

## 第一項　郡治

明治十一年七月廿二日、太政官布告第十七號を以て發布せられたる郡區町村編成法、及び同七月廿五日の府縣官職制の頒布は、我國地方行政に一大變革を加へたるものなり。之により從來地理的名稱たりし郡は、行政の一區劃と改まり、郡長・郡書記、其部內の行政事務を掌ること丶なれり。本縣は同年十二月七日、布達を發し、從前の大小區制を廢し、群馬郡は東・西、勢多・甘樂の兩郡は南・北、各二郡に分割し、左表の如く郡役所を設立し、同日郡長を任命し、管掌及び委任條項を布達し、同時に郡役所雜則を定む。

| （郡名） | （郡役所位置） | （郡長職名） |
| --- | --- | --- |
| 東群馬（利根川東一圓） | 前橋曲輪町 | 東群馬兼南勢多郡長 |
| 南勢多（舊十八大區ヲ除ク一圓） | 右同町 | |
| 西群馬（利根川西一圓） | 高崎宿 | 西群馬兼片岡郡長 |

| 郡名 | 所在 | 郡長 |
|---|---|---|
| 片岡 | 右同宿 | |
| 緑野 | 藤岡町 | |
| 多胡（舊十五大區一圓） | 右同町 | 緑野多野兼南甘樂郡長 |
| 南甘樂 | 右同町 | |
| 北甘樂（舊十五大區ヲ除ク一圓） | 富岡町 | 北甘樂郡長 |
| 碓氷 | 安中宿 | 碓氷郡長 |
| 吾妻 | 中ノ條町 | 吾妻郡長 |
| 利根 | 沼田町 | 利根兼北勢多郡長 |
| 北勢多（舊十八大區一圓） | 右同町 | |
| 山田 | 桐生新町 | 山田郡長 |
| 新田 | 太田町 | 新田郡長 |
| 邑樂 | 舘林町 | 邑樂郡長 |
| 佐位 | 伊勢崎町 | 佐位那波郡長 |
| 那波 | 右同所 | |

郡役所書記雇定員表

（明治十一年十二月七日）

| （郡名） | （反別人口） | （書記） | （雇） | （金高） |
| --- | --- | --- | --- | --- |
| 東群馬郡 | 反別千七百六拾六町九反四畝十五歩三厘<br>人口壹萬七千六百四拾六人 | 二人 | 二人 | 六十圓 |
| 南勢多郡 | 反別一萬千八百八十七町五反八畝廿四歩九厘五毛<br>人口六萬二千六十八人 | 五人 | 七人 | 百七十圓 |
| 西群馬郡 | 反別一萬六千百十七町八反五畝八歩五厘一毛<br>人口九萬七千二百六十人 | 六人 | 拾人 | 二百二十圓 |
| 片岡郡 | 反別五百壹町八畝十三歩<br>人口二千六百三十三人 | 一人 | 〇 | 二十圓 |
| 綠野郡 | 反別四千九百八十七町三反廿三歩二厘八毛<br>人口二萬三千七百九十三人 | | | |
| 多胡郡 | 反別二千四町九反一畝廿二歩<br>人口一萬百五十七人 | 五人 | 五人 | 百五十圓 |
| （右二郡合計） | 反別六千九百九十二町二反二畝十五歩二厘八毛<br>人口三萬三千九百五十人 | | | |
| 南甘樂郡 | 反別二千六百七十四町二反六畝廿歩<br>人口八千九百九十二人 | 二人 | 一人 | 五十圓 |
| 北甘樂郡 | 反別八千四百八十八町四反十九歩<br>人口五萬百三十九人 | 六人 | 七人 | 百九十圓 |
| 碓氷郡 | 反別七千四百四十七町二反三畝廿六歩<br>人口四萬八百七十三人 | 六人 | 六人 | 百八十圓 |
| 吾妻郡 | 反別七千四百七十五町二反九畝歩<br>人口三萬三千百九十三人 | 六人 | 五人 | 百七十圓 |
| 利根郡 | 反別八千四百十三町二反七畝十六歩<br>人口三萬二千三百八十九人 | 六人 | 七人 | 百九十圓 |
| 北勢多郡 | 反別千六百九十五町二反拾九歩<br>人口四千六百十七人 | 一人 | 〇 | 二十圓 |
| 山田郡 | 反別五千二十二町五反七畝五歩<br>人口三萬八千六百九十二人 | 六人 | 五人 | 百七十圓 |
| 新田郡 | 反別八千七百十四町九反八畝二歩<br>人口三萬七千七百六十三人 | 六人 | 六人 | 百八十圓 |
| 邑樂郡 | 反別一萬千四百八十四町七反一畝廿七歩九厘二毛<br>人口六萬二千百十六人 | 六人 | 八人 | 二百圓 |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 佐渡郡 | 反別五千二百廿一町三反九畝十六歩<br>人口二萬七千四百七十人 | 六人 | 六人 | 百八十圓 |
| 那波郡 | 反別四千二十六町五反一畝廿五歩<br>人口一萬八千四百八十四人 | | | |
| （右二郡合計） | 反別九千二百四十七町八反一畝十一歩<br>人口四萬五千九百五十四人 | | | |
| （合計） | 反別十萬七千九百廿九町四反六畝十三歩七厘六毛<br>人口五十六萬六千三百八十五人 | 七十人 | 七十五人 | 二千百五十圓 |

郡長管掌ノ條件（郡長ニ於テ處分シテ後縣廳ニ報告スルヲ得ルモノ）

一　徵稅竝地方稅徵集、及不納者處分ノ事。

二　徵兵取調ノ事。

三　身代限財產取扱ノ事。

四　逃亡・死亡・絕家ノ財產處分ノ事。

五　官有地ノ倒木・枯木ヲ賣却スル事。

六　電線・道路・田畑・水利ニ障害アル官有樹木ヲ伐採スル事。

七　河岸地・借地檢查ノ事。

八　職遊獵願・威銃願ノ事。

九　印紙・罫紙賣捌願ノ事。

一〇小學校資金ノ事。

右之外縣令ヨリ特ニ委任スル條件。

明治十二年一月十一日布達に至り、南勢多郡役所を前橋細ヶ澤町に、片岡郡役所を石原村に、南甘樂郡役所を萬場村に、北勢多郡役所を絲井村に設置し、郡內の事務を取扱はしめたるが、明治十四年一月四日を以て、南勢多郡役所を東群馬郡役所に合併、東群馬南勢多郡役所、片岡郡役所を西群馬郡役所に合併、西群馬片岡郡役所、北勢多郡役所を利根郡役所に合併、利根北勢多郡役所と改稱せり。而して明治十二年三月より、郡役所出張所を澁川に設置し、北部十一箇村を分轄し、同廿八年まで存置せり。其當時の指令は左の如し。

澁川假出張所

本郡內舊九大區廿大區村々ノ儀ハ、山僻ニテ加フルニ當役所ヲ距ル、遠キハ十數里ニ及ビ、下方困難不少。依テ伺之上、當分澁川驛ヘ假出張所ヲ設、本月十八日開局、別紙ノ件々取扱ハセ候條、爲念此段及御通知候也。

明治十二年三月十七日　西群馬郡長宮田金固

於假出張所代理爲致候件々

一　徵兵取調之事。
一　身代限財產取扱事。
一　逃亡・死亡・絕家ノ財產處分ノ事。
一　河岸地・借地檢査ノ事。
一　威銃願ノ事。
一　水車開廢業ヲ調理シ、水理檢査ノ事。
一　船車新調並賣買願ヲ受理シ、檢印・燒印ノ事。但他府縣ニ係ハルハ郡役所ニ可差出事。
一　社倉・積穀管理ノ事。
一　水火風震災害ニ罹リ、凍餒目下ニ迫レル者救助ノ事。
一　火防・水防ノ事。
一　官林並木、社寺境內共立墓地ノ枯木損木處分ノ事。
一　並木植繼ノ事。

郡役所職務沿革

郡役所内の事務は、設置當時、庶務・勸業・學務・地理・租稅・出納の六課を置きたるが、明治十四年十二月廿七日、郡役所事務規定改定により、第一分掌（庶務）第二分掌（勸業・學務・衞生）第三分掌（租稅・土木・會計）となし、各分掌に書記壹名乃至兩三名を置き、

其他補助員として、雇を置くと置かざるとは、郡の大小事務の繁簡に依りて、適宜之を定む。凡そ大小の事務、郡長の裁決を經ざれば、施行することを聽さずと規定せり。明治十八年一月の改正により、第一分掌に兵事を加へ、第三分掌の租稅を收稅と改めたり。

## 第二項　町村

此期に於ける町村の行政は、每町村又は數町村に戸長役場を設け、一名の戸長を置き、其下に用掛壹名乃至四名を置きて、戸長の職務を補助せしむ。戸長は戸長以下選擧法によりて三名を選擧せしめ、縣廳に於て其内に就き選拔し、任期を三年となす。此選擧法は、明治十三年六月の改正に至り、官選と爲す。但し時宜によりて民選となすことを得。其職務は戸長職務の概目を以て規定し、令達の町村内周知地租、及び諸稅の取纒上納、戸籍作製、徵兵下調、地劵・臺帳の事、兒童の就學勸誘、町村內人民の印鑑簿整置、道路・橋梁の修繕等を主なることゝす。而して町村には專ら部內衆庶の安寧公益、及び協議費の徵收法等を議決する爲めに、町

村會を設け、議員は該町村內に住居する滿二十年以上の男子にして、不動產を所有する者の互選とし、其人數は町村の大小によりて、十人乃至廿五人の範圍內にて定め、議長は議員中より公選す。其詳細は別項明治十二年三月三十一日甲第四十一號群馬縣町村會規則を參照するを便とす。明治十七年七月に至り、管下各郡町村戶長配置方區域を定め、數町村聯合の戶長役場と稱せしむ。其當時に於ける町村の狀態は左の如し。

戶長役場の設置

戶長以下選擧法

戶長以下選擧法　（明治十一年十二月十九日甲第百九號）

第一條　戶長は每町村又ハ數町村ニ、一名ヲ置クモノトス。

第二條　戶長壹名ノ外、戶數貳百戶以上ハ左ノ割合ヲ以テ用掛ヲ置キ、戶長ノ職務ヲ補助セシム。

貳百戶以上五百戶未滿　壹名　五百戶以上千戶未滿　貳名

千戶以上貳千戶未滿　參名　貳千戶以上　四名

第三條　戶長タルヲ得ベキモノハ、丁年已上ノ男子ニシテ、滿一年以上本縣內ニ住居シ、地租五圓已上ヲ納ル者ニ限ル。但左ノ二項ニ觸ル、者ハ、戶長タルヲ得ズ。

一　懲役一年以上實決ノ刑ニ處セラレ、滿期ノ後三ケ年ヲ經ザル者。

一　身代限ノ處分ヲ受ケ、負債ノ辨償ヲ終ヘザル者。

第四條　戸長ヲ選擧シ得ベキ者ハ、丁年以上ノ男戸主ニシテ、其町村内ニ不動産ヲ所持スル者ニ限ル。但三條但書ノ二項ニ觸ル、者ハ、選擧人タルヲ得ズ。

第五條　戸長選擧法ハ、投票ヲ以テ三名ヲ選擧シ、其内縣廳ニ於テ選拔スベシ。但任期三年トシ、改選ノ節、前任ノ者ヲ再選スルコトヲ得。

第六條　戸長役人ハ選擧人一同連署、郡役所ヲ經由シテ、本縣ヘ願出、辭令ヲ以テ之ヲ命ズルモノトス。

第七條　用掛ハ、戸長ニ於テ人選、郡長ノ許可ヲ得テ、戸長ニ於テ命ズルモノトス。

明治十三年六月、本縣甲第六十六號布達戸長選擧法左の通改正す。

戸長選擧規則

第一條　戸長ハ官選ヲ以テ之ヲ任ズト雖、時宜ニ依リ、人民ヲシテ選擧セシムルトキハ、左ノ箇條ニ據ルベシ。

第二條　戸長ヲ選擧スルヲ得ベキ者ハ、滿二十年以上ノ男子ニシテ、其町村ニ住居シ、其町村内ニ於テ地租ヲ納ムル者ニ限ル。但府縣會規則第十三條第一款第三款ニ觸ル、者、及ビ陸海軍々人現役ノ者ハ選擧人タルコトヲ得ズ。

第三條　被選人タルコトヲ得ベキ者ハ、滿二十五年以上ノ男子ニシテ、其町村ニ住

居シ、其町村内ニ於テ地租ヲ納ムル者ニ限ル。但府縣會規則第十三條第一款・第二款・第三款・第四款ニ觸ル、者ハ、被選人タルコトヲ得ズ。

第四條　數町村ヲ所轄スル戸長ヲ選擧セシメントスルトキハ、毎町村選擧人ヨリ五名ノ選擧委員ヲ出サシメ、其選擧委員ヲシテ之ヲ投票セシムルコトヲ得。

但選擧委員ハ毎町村選擧人ニ於テ之ヲ互選スベシ。

第五條　戸長ヲ選擧セシメントスルトキハ、其旨郡長ヨリ其町村ニ内達シ、選擧ノ期日及場所等ヲ公告シ、投票用紙ヲ配付スベシ。

第六條　選擧ノ投票ハ、豫定ノ日、戸長役場ニ於テ之ヲ爲シ、郡長或ハ其代理者之ヲ調査シ、選擧會中ノ取締ヲ爲スベシ。但便宜ニ依リ、戸長役場外ニ於テ選擧會ヲ開クコトヲ得。

第七條　選擧人ハ豫メ郡長ヨリ付與シタル投票用紙ニ、自己及ビ被選人ノ住所姓名ヲ記シ、豫定ノ日、之ヲ戸長役場ヘ出スベシ。但投票ハ代人ニ托シ差出モ妨ナシ。

第八條　投票終ル後、郡長ハ選被選人名簿ニ就キ、其當否ヲ査シ、不都合ナキニ於テ、高票ノ者三名ヲ擧ゲ、具狀スベシ。縣令中ニ就キ之ヲ選任ス。但當選人其任ニ適セズト認ムルトキハ、更ニ再選セシメ、又ハ特ニ選任スルコトアルベシ。

## 戸長職務ノ概目　（明治十一年十二月七日甲第九十五號）

第一　布告布達ヲ町村内ニ示ス事。
第二　地租及諸稅ヲ取纏上納スル事。
第三　戸籍之事。
第四　徵兵下調之事。
第五　地所・建物・船舶質入書入、竝ニ賣買ニ奥書加印ノ事。
第六　地劵臺帳ノ事。
第七　迷子・捨兒、及行旅病人・變死人、其他事變アルトキハ、警察署ニ報知之事。
第八　天災又ハ非常ノ難ニ遭ヒ、目下窮迫ノ者ヲ具狀スル事。
第九　孝子・節婦、其他篤行ノ者ヲ具狀スル事。
第十　町村ノ幼童就學勸誘ノ事。
第十一町村内人民ノ印形簿ヲ整置スル事。
第十二諸帳簿保存管守ノ事。
第十三官費府縣費ニ係ル河港・道路・堤防・橋梁、其他修繕保存スベキ物ニ就キ、利害ヲ具狀スル事。

右之外、縣令又ハ郡區長ヨリ命令スル所ノ事務ハ、規則又ハ命令ニ依テ從事スベ

キコト。其他町村限リ道路・橋梁・用悪水ノ修繕・掃除等、凡協議費ヲ以テ支辨スル事件ヲ幹理スルハ、此ニ掲グル所ノ限ニアラズ。



## 群馬縣町村會規則　（明治十二年三月三十一日甲第四十一號）

### 第一欵　總則

第一條　町村會ハ專ラ部内衆庶ノ安寧公益、及ビ協議費ノ徴收法等ヲ議定スル所ニシテ、泛ク政治上ニ論及スルヲ得ズ。

第二條　町村會ハ毎町村ニ開ク可キ者ト雖モ、其戸數僅少ナル者ハ、數町村合併開設スベシ。

第三條　町村會ハ通常・臨時ノ二類ニ分ツ。其議案ハ都テ戸長及ビ議長ヨリ發スル者トス。

第四條　凡ソ町村ノ協議費ヲ以テ施行スベキ者ハ、事ノ大小緩急ヲ問ハズ、必ズ會議ニ附シ、議決ノ上施行スベシ。若シ郡長戸長ニ於テ其決議ヲ不可トスルトキハ、事由ヲ縣令ニ具狀シテ、指令ヲ乞フ可シ。

第五條　町村會議員ハ該町村戸長役場ニ就キ、協議費ヲ以テ支辨シタル諸勘定帳ヲ展見スルヲ得ベシ。

第六條　町村會ハ議事ノ細目ヲ議定シ、戸長ノ認可ヲ經テ執行スルモノトス。

第七條　町村會ニ關スル諸經費ハ、公平ノ議ヲ悉シテ、本町村ニ割賦スベシ。其明細勘定ハ每半年宛取纏メ、郡長ヲ經由シテ、縣廳ニ報告スベシ。

第二款

第八條　町村會ノ議員ハ、十人ヨリ少ナカラズ、廿五人ヨリ多カラザル者トス。其選擧ハ百戶以下ノ町村ニ十人、百戶以上千戶迄每百戶ニ一人ヲ增シ、千戶以上ハ二十五人トス。其議員ヲ選擧スルハ互選ヲ以テス。

第九條　議長ハ議員中ヨリ公選スベシ。而シテ戶長ハ其當選者ノ姓名ヲ本町村内ニ公示シ、及ビ郡長ヲ經由シテ、縣廳ニ報告スベシ。

第十條　書記ハ議長選定シテ、本會ノ庶務會計ヲ整理調査セシム可シ。

第十一條　議長議員ハ無給トス。書記ノ俸金ハ本會ノ議決ヲ以テ定メ、會費ヨリ支給スベシ。

第十二條　議員選擧人ハ、本町村内ニ住居スル滿二十年以上ノ男子ニシテ、不動產ヲ所持シ、左ノ三項ニ觸レザル者ニ限ルベシ。而シテ其姓名簿ハ本町村戶長役場ニ於テ調製シ、增減アル每ニ改正存錄スベシ。

一　風癲白癡ノ者

一　懲役一年以上ノ國事犯、禁獄一年以上實決ノ刑ニ處セラレタルモノ。但

滿期後七年ヲ經タルモノハ此限ニ非ス。

一　身代限處分ヲ受ケ、負債ノ辨償ヲ終ラザル者。但官吏及教導職ハ選擧人タルヲ得ス。

第十三條　選擧人タル者、他ニ寄留スル時ハ、名代人ヲ出スヲ得。若シ町村ノ者本町村内ニ不動產ヲ所持スル、亦選擧人タルヲ得ベシ。

第十四條　凡ソ議員ヲ選擧スル、本町村戸長ハ部内ノ選擧人ト共議シテ、其期日及選擧場ヲ定メ、少クモ一週間以前部内ニ公告シ、併テ戸長役場ノ印章ヲ押捺シタル投票用紙ヲ選擧人ニ交付スベシ。

第十五條　議員選擧ノ定日、選擧人參場シ、互選法ヲ以テ其本人及ビ被選擧人ノ姓名等ヲ詳記シテ、之ヲ會場ニ差出ス可シ。而シテ投票ハ多數ノ者ヲ以テ當選人トナシ、同數ハ年長ヲ採リ、同年ハ抽籤法ヲ以テ之ヲ定ム可シ。但シ投票ハ代人ニ托シテ差出スモ妨ナシ。若シ缺席シテ選票ヲ出サヽル者ハ除名スベシ。

第十六條　投票終ルノ後、戸長役場ニ於テ選擧人姓名簿ニ照シ、其當否ヲ查スベシ。若シ當選人自ラ其選ヲ辭スルトキハ、順次選票ノ多數ヲ得タル者ヲ取ル。

第十七條　議員選定ノ後、戸長役場ヨリ本人ニ當選狀ヲ渡シ、其請書ヲ取ベシ。但

議員ヨリ請書ヲ差出シタル後、戸長ハ其姓名ヲ本町村内ニ公示シ及ビ郡長ヲ經由シテ、之ヲ縣廳ニ報告スベシ。

第十八條　議員ノ任期ハ二年ト定メ、毎一年ニ全數ノ半ヲ改選スベシ。但初年期ノ改選ヲ爲スハ、抽籤法ヲ以テ退任者ヲ定ムベシ。

第十九條　議長ノ任期ハ一年間ト爲シ、毎年議員改選ノ期ニ於テ之ヲ改選スベシ。

第二十條　議長議員共ニ前任ノ者ヲ以テ、更ニ之ヲ選擧スルヲ得ベシ。

第廿一條　議員中第十二條ノ三項ニ遭遇スルカ、或ハ死去シタルトキハ、更ニ其代員ヲ選擧スベシ。

第廿二條　議員中第廿八條ノ事故ナクシテ參會セザル者ハ、退職者トシテ其代員ヲ選擧スベシ。其任期ハ所代ノ本員退任ノ期ニ止ル。但戸長役場ニ於テ第十六條・第十七條ニ示スノ兩例ニ照準シテ、其取扱ヲ爲ス可シ。

### 第三款　議事

第廿三條　議員半數以上出席セザレバ、當日ノ議事ヲ開クヲ得ズ。

第廿四條　議事ノ可否ハ、半數以上ノ同論ニ依テ決ス可シ。若シ可否同數ノ時ハ議長ノ決スル所ニ據ル可シ。

第廿五條　會議ハ本町村内衆庶ノ傍聽ヲ許ス可シ。但議長ノ意見ニ依テ之ヲ禁

ズルヲ得可シ。

第廿六條　議員ハ議事ニ方テ專ラ公正ヲ旨トシ、議長ニ向テ充分討議ス可シ。其各員相互ニ論辯シ、及褒貶毀譽ニ渉ルヲ禁ズ。

第廿七條　議長ハ本會場ヲ整理シ、規則ヲ掌テ議事ヲ執行ス可シ。若シ犯則ノ者アルトキハ、議長之ヲ退場セシムルヲ得。其强暴ニ渉ル者ハ、警察官ニ照會シテ、其處分ヲ求ムルヲ得。

第廿八條　議員ハ自己ノ疾、父母ノ病、及ビ官廳ノ呼出シ等、止ムヲ得ザルノ事故アルニ非ザレバ、缺席スベカラズ。

第廿九條　若シ議長事故アリテ缺席スル時ハ、各議員ノ内ヨリ第九條ノ例ニ據テ臨時公選法ヲ以テ、本會一日ノ議長ヲ定メテ、議事ヲ開クベシ。

第三十條　議決ノ事件ヲ實施スル時ハ、戸長之ヲ本町村ニ公示シ、及郡長ニ報告スベシ。而テ毎半年宛取纏メ郡長ヲ經由シテ、縣廳ニ報告スベシ。

第卅一條　議決ノ事件ヲ實施シタル後、布告布達アリテ之ニ抵觸スル時ハ、直ニ消滅スルモノトス。

第四款　開閉

第卅二條　會場ハ創建新築スルヲ要セズ。其町村内ニ於テ、人家或ハ社寺等ヲ借

受假用ス可シ。而シテ其開會スル場所ハ、郡長ヲ經由シテ、縣廳ニ報告スベシ。

第卅三條　通常會ハ隔月ニ開キ、會期ハ十日以内トス。其開閉期日ハ、郡長ヲ經由シ、縣廳ニ報告スベシ。

第卅四條　通常會期ノ外、急施ノ事務アル時ハ、其大意ヲ各議員ニ告ゲ、十分ノ六以上ノ同議ヲ得レバ、臨時會ヲ開クベシ。此會期ハ五日以内トス。其開閉日限ヲ縣廳ニ報告スルハ、前條ノ例ニ據ル可シ。但臨時會ハ特ニ會議ヲ要スル事ニ限リ、他事ヲ議スルヲ得ズ。

第卅五條　會議ノ論說・地方ノ安寧公益ヲ害シ、法律規則ヲ犯ス事有ト認ムル時ハ、郡長又ハ戸長ハ、其會議ヲ中止セシメ、其由ヲ縣令ニ具狀シ、指揮ヲ乞フベシ。其場合ニ於テハ、縣令ハ議員ヲ解散セシムルコトアルベシ。但本文解散ノ上ハ、更ニ議員ヲ選擧スベシ。

甲第六拾五號

管下各郡町村ヘ戸長配置方、別表ノ通改正ス。但追テ役場開始之義告示候迄ハ、從前ノ通可相心得事。

右布達候事。

明治十七年戸長配置方區域

明治十七年七月廿八日　群馬縣令楫取素彦

戸長配置方區域　〇印戸長役場所在地

東群馬郡

〇前橋曲輪町　前橋北曲輪町　前橋南曲輪町　前橋神明町　前橋石川町
前橋堀川町　前橋田中町　前橋柳町
〇前橋横山町　前橋紺屋町　前橋桑町　前橋本町　前橋連雀町
前橋萱町　前橋竪町　前橋立川町　前橋榎町　前橋相生町
前橋田町
前橋百軒町　前橋大塚町〇前橋中川町　前橋片貝町　前橋新町
前橋芳町　天川村
〇朝倉村　上佐鳥村　下佐鳥村　後閑村　宮地村
〇新堀村　房丸村　徳丸村　下阿内村　力丸村
〇龜里村　横手村　三公田村　鶴光路村
前代田村　紅雲分村　宗甫分村　市ノ坪村〇六供村
橳島村　天川原村

南勢多郡

○前橋小柳町　前橋細ケ澤町　前橋向町　前橋神明町　前橋諏訪町
○才川村　萩村　國領村　清王寺村　一毛村
○三俣村　西片貝村　東片貝村　幸塚村　上沖之郷
下沖之郷
○五代村　端氣村　鳥取村　小坂子村　小神明村
○龍藏寺村　下小出村　北代田村　上細井村　青柳村
下細井村
○小暮村　嶺村　時澤村　小澤新田　皆澤新田
勝澤村
○原之鄕　引田村　横室村
○日輪寺村　荒牧村　關根村　川端村　上小出村
田口村
○石井村　漆窪村　市ノ木場村　山口村　田島村
○米野村　箱田村　眞壁村　上箱田村　下箱田村
○八崎村　分鄕八崎村　小室村　樽村　宮田村

○津久田村　猫村
○長井小川田村　深山村　棚下村
持柏木村　下南室村　○溝呂木村　北上野村　勝保澤村
瀧澤村　見立村　三原田村　上三原田村　上南室村
○下大島村　上大島村　天川大島村　野中村　上長磯村
下長磯村　女屋村
○駒形新田　下増田村
○笂井村　小屋原村　小島田村　上増田村
○上泉村　石關村　龜泉村　荻窪村　堀之下村
○大胡町　茂木村　河原濱村　堀越村　瀧窪村
橫澤村　樋越村　上大屋村
○鼻毛石村　市ノ關村　柏倉村　大前田村　三夜澤村
○馬場村　苗ヶ島村　室澤村　月田村
○女淵村　新屋村　込皆戸村　稻里村
○富田村　江木村　東上野村　堤村　荒口村
泉澤村

○二之宮村　今井村　荒子村　飯土井村　新井村
下大屋村
○西大室村　東大室村　深津村
○小林村　膳村　中村　一日市場村　上東田面村
西東田面村　下東田面村　前皆戸村　武井村
○山上村　關村　板橋村　奥澤村　鶴ヶ谷村
高泉村　大久保村
○新川村　野村　磯村
○上神梅村　下神梅村　宿廻村
○水沼村　上田澤村　八木原村　鹽澤村　下田澤村
○花輪村　坐間村　荻原村　小夜戸村　小中村
○神戸村　草木村　澤入村

西群馬郡

高崎連雀町　高崎新喜町　高崎南町　高崎新田町　高崎新町
高崎職人町　高崎若松町○高崎通町　高崎鎌倉町　高崎田町
高崎寄合町　高崎白銀町　高崎羅漢町　高崎九藏町　高崎中紺屋町

高崎元紺屋町　高崎砂賀町　高崎檜物町　高崎下横町　高崎鞘町
高崎鍛冶町　高崎高砂町
高崎高松町　高崎柳川町　高崎堰代町　高崎宮元町　高崎明石町
高崎十人町　高崎龍見町　高崎北通町　高崎弓町　高崎椿町
高崎本町　高崎眞町　高崎山田町　高崎新紺屋町　高崎嘉多町
高崎赤坂町　高崎常盤町　高崎歌川町　高崎四ッ谷町　高崎相生町
高崎住吉町

○下ノ城村　柴崎村　矢中村　下中居村　下佐野村
上佐野村　佐野窪村
○栗崎村　岩鼻町　臺新田　東中里村　綿貫村
下大類村　中大類村
○島野村　元島名村　西島村　大澤村　矢島村
萩村　京目村
○下和田村　和田多中村　新後閑村　岩押村　江木村
高關村　上中居村
○倉賀野驛

上瀧村　上新田村　與六分村　齋田村　板井村
八幡原村　字貫村○下齋田村　下瀧村　西横手村
宿横手村　中島村　瀧村
○上大類村　宿大類村　南大類村　新保村
○箱田村　上新田村　下新田村　小相木村　前箱田村
江田村　古市村　後家村　川曲村　稻荷新田
○元惣社村　內藤分村　大友村　大渡村
上並榎村○飯塚村　下並榎村　赤坂村
○三ッ寺村　棟高村　中泉村　福島村　井出村
○引間村　塚田村　後引間村　冷水村　東國分村
西國分村　北原村　稻荷臺村
○柏木澤村　廣馬場村
○日高村　新保田中村　貝澤村　中尾村　鳥羽村
○小八木村　井野村　大八木村　正觀寺村　濱尻村
菅谷村
○筑縄村　上小鳥村　下小鳥村　上小塙村　下小塙村

○總社町　植野村　高井村
○金古驛　足門村
○野良犬村　青梨子村　池端村　上青梨子村
○生原村　保渡田村　下芝村　中里村
○北新波村　濱川村　行力村　南新波村　菊池村
我峯村　樂間村　西新波村
○高濱村　白岩村　木鄕村　十文字村　神戸村
宮澤村　三ツ子澤村
○上室田村　榛名山村
○大久保村　漆原村　川原島新田
○上野田村　下野田村　小倉村　北下村　南下村
○金井村　川島村　阿久津村　祖母島村　南牧村
○富岡村　善地村　白川村　和田山村
○西明屋村　矢原村　東明屋村　金鋪平村　松ノ澤村
上芝村
○下室田村　中室田村

○三ノ倉村　權田村
○山子田村　新井村　長岡村
○八木原村　半田村　有馬村
○石原村　湯ノ上村　中村
○澁川村
○伊香保村　湯中子村　水澤村
○北牧村　白井村　吹屋村　横堀村
○小野子村　村上村
○上白井村　中鄉
○中山村　尻高村
片岡郡
○石原村　寺尾村　乘附村
利根郡
○沼田町
下久屋村　横塚村○沼須村　上沼須村　戶鹿野村
戶鹿野新町

平田村　尾台村　岩室村〇高平村　生枝村
上久屋村　上吉語父村　下吉語父村　萩室村　中野村
太田川村　小田川村
〇立岩村　生品村
川場湯原村　谷地村〇門前組　天神組　秋塚村
下發知村　發知新田〇中發知村　佐山村　奈良村
岡谷村〇町田村　戸神村　石墨村　善桂寺村
下沼田村　硯田村　恩田村　白岩村〇井土上村
堀廻村　大釜村　原村　宇楚井村
〇眞庭村　政所村　師村　後閑村
下牧村〇上牧村　奈女澤村　大沼村
鹿野澤村　吉本村　谷川村〇湯原村　寺間村
小仁田村　阿能川村　川上村　高日向村　小日向村
〇湯檜曾村　大穴村　幸知村　向山村　綱子村
粟澤村
〇藤原村　夜後村

石倉村○小川村 月夜野村

○新巻村 羽場村 相俣村

○上津村 下津村

○下川田村 上川田村 今井村 屋形原村 岩本村

○薗原村 日向南郷村 穴原村 大原新町 老神村

高戸谷村 大揚村○追貝村 平川村 千鳥新田

幡谷村

御坐入村 下平村 築地村 菅沼村○須賀川村

摺淵村 花咲村 針山新田

東小川村 土出村 戸倉村○越本村

北勢多郡

川額村○森下村 栃久保村

絲井村 貝野瀨村○生越村 多那村 石戸新田

輪組村

砂川村 青木村 利根郡小松村 利根郡柿平村○日影南郷村

根利村

吾妻郡

○中之條村　西中之條村　伊勢町　青山村　市城村
○山田村　折田村　上澤渡村　下澤渡村
○四萬村
○原岩本村　五反田村　蟻川村　大道新田
○平村　横尾村　大塚村　赤坂村　栃窪村
○五町田村　箱島村　岡崎新田　新巻村　奥田村
○植栗村　泉澤村　小泉村　岩井村
○原町　金井村　川戸村
○郷原村　矢倉村　厚田村
○岩下村　三島村　松谷村
○本宿村　大柏木村　須賀尾村
○大戸村　萩生村
○川原畑村　川原湯村　横壁村　林村
○長野原町　與喜屋村　大津村　羽根尾村　古森村
○草津村　前口村

○入山村

○赤岩村　日影村　太子村　小雨村　生須村

○三原村　西窪村　門貝村　鎌原村　芦生田村

袋倉村　今井村

○應桑村

○大笹村　大前村　田代村　干俣村

○須川町　西峯須川村　布施村　東峯須川村　入須川村

師田村

○吹路村　猿ヶ京村　永井村

碓氷郡

○中豐岡村　下豐岡村　上豐岡村

○下大島村　若田村　金井淵村　町屋村　上大島村

○安中町

○原市村　嶺村　簗瀬村　鄉原村

○松井田村　新堀村

○八幡村　藤塚村　劍崎村　鼻高村

○岩井村　中宿村　大谷村　野殿村
○板鼻驛
○横川村　五料村　原村　坂本驛　峠町
○入山村
○東上磯部村　上磯部村　西磯部村　下磯部村　大竹村
○二軒在家村　人見村　八城村　行田村
○國衙村　小日向村　高梨子村　下増田村
○古屋村　高別當村　小俣村
○中里見村　下里見村　上里見村
○鷺宮村　中野谷村　下間仁田村　上間仁田村
○土鹽村　新井村　上増田村
○中後閑村　下後閑村　上後閑村
○東上秋間村　下秋間村　中秋間村　西上秋間村
○川浦村　岩氷村　水沼村

北甘樂郡

○富岡町

○七日市町　黒　川　村　別　保　村　上黒岩村　下黒岩村
上奥平村○下奥平村　岩　崎　村
○上丹生村　下丹生村　原　村
○一ノ宮町　田　島　村　宮　崎　村　宇　田　村　神農原村
○藤　木　村　上高尾村　下高尾村　桑　原　村　小桑原村
相野田村　白　岩　村　後　賀　村　蕨　村　坂　口　村
○諸　戸　村　古　立　村　岳　村　大　牛　村　妙　義　町
行　澤　村　菅　原　村　中　里　村
○上高田村　下高田村　八木連村
○白　倉　村　金　井　村　天　引　村　造　石　村　庭　谷　村
○福　島　町　星　田　村　君　川　村　曾　木　村　田　篠　村
小　川　村
○小　幡　村　上　野　村　轟　村　國　峯　村　善慶寺村
○秋　畑　村
○馬　山　村　白　山　村
岡　本　村○南後箇村　岩　染　村　野　上　村

○南蛇井村　中澤村　上小林村　神成村　蚊沼村
○中小坂村　上小坂村　下小坂村　東野牧村
本宿村　南野牧村○西野牧村　北野牧村
○下仁田町　栗山村　吉崎村　川井村
○青倉村　風口村　宮室村　大桑原村
○磐戸村　小澤村　大鹽澤村　檜澤村　千原村
○羽澤村　砥澤村　星尾村　熊倉村
○大日向村　大仁田村　六車村
○高瀬村　内匠村　大島村

綠野郡

○藤岡町　小林町　上戸塚村
○中村　中栗須村　上栗須村　森新田　森村
○新町驛
○上大塚村　中大塚村　鮎川村　東平井村
○岡之郷村　下戸塚村　下栗須村
○立石村　立石新田　中島村

○本郷村　根岸村　生田村　川除村
篠塚村○本動堂村　上落合村　下大塚村○山名村
阿久津村　根小屋村　木部村
○緑野村　白石村　三ッ木村　西平井村　金井村
○三波川村
○矢場村　神田村　保美村　三本木村　高山村
○鬼石町　淨法寺村
多胡郡
○吉井町　長根村　下長根村　池村　鹽川村
矢田村
○鹽村　多胡村　神保村　高村　東谷村
大澤村
○片山村　小棚村　本郷村
○上日野村
○小串村　黑熊村　深澤村　石神村　中島村
○小暮村　馬庭村　岩井村

○多比良村
○下日野村

南甘樂郡

○保美濃山村　讓原村　阪原村
○相原村　小平村　森戸村　船子村　黒田村
　青梨村
○乙母村　新羽村　勝山村　乙父村　野栗澤村
　川和村　楢村
○神ヶ原村　尾附村　平原村　魚尾村
○萬場村　鹽澤村　生利村　麻生村　柏木村

新田郡

○太田町
○飯塚村　新島村　内ヶ島村　小舞木村　飯田村
　東別所村　東矢島村　西矢島村　新井村
　下濱田村　岩瀬川村○福澤村　富澤村　高林村
　牛澤村　米澤村　細谷村　藤阿久村

徳川郷平塚村　○世良田村
○木崎宿　中江田村　下江田村　高尾村　赤堀村
粕川村
○三ッ木村　西今井村　下田中村　上矢島村　女塚村
境村　米岡村　小角田村　花香塚村
○大島村　長手村　鶴生田村　鳥山村　新野村
○西野谷村　由良村　別所村　沖野村　中根村
下田島村　上田島村　脇屋村
小金井村　○村田村　小金村　四軒在家村　多村
多村新田　市ノ井村　反町村　市村
○成塚村　西長岡村　菅鹽村　北金井村　寄合村
强戸村　寺井村　天良村
○大根村　大村　溜池村　權右衞門村　上中村
嘉禰村　金井村　上田中村　上江田村　六千石村
○本町村　藪塚村　山ノ神村　大久保村
○鹿村　阿佐美村　西鹿田村　久宮村

○尾島村　備前島村　押切村　岩松村　阿久津村
堀口村　龜岡村
○大館村　前小屋村　前島村　二ッ小屋村　武藏島村
安養寺村　出塚村

山田郡

○桐生新町　下久方村　安樂土村
○新宿村
○境野村
○上久方村　淺部村　二渡村　山地村
○廣澤村　一本木村
○丸山村　吉澤村　古氷村　東今泉村　矢田堀村
○只上村　富若村　市場村
○矢場村　荒金村　大町村　植木野村
○龍舞村　八重笠村　沖ノ郷村　茂木村　下小林村
○臺ノ郷　安良岡村　上小林村　東金井村　石原村
東長岡村

○下新田村　如來堂村　天沼新田　天王宿村　蕪町村
○大間々町　桐原村
○淺原村　長尾根村　小平村　鹽原村
○山田村　東小倉村　西小倉村　須永村　高津戸村

邑樂郡

○館林町
○當郷村　新當郷　田谷村　四ッ谷村
○北大島村
○除川村　西岡村　西岡新田離村　細谷村
大曲村　大荷場村
○大高島村　下五箇村
○海老瀨村
○板倉村　飯野村
○岩田村　籾谷村　內藏新田
斗合田村　江黑村　江口村　田島村○千津井村
南大島村　梅原村○新里村　中谷村

○須賀村　川俣村　大輪村　矢島村　大佐貫村

大輪新田　下中森村

○上三林村　下三林村　野邊村　入ケ谷村

上中森村○上五箇村　木崎村　萱野村　瀨戸井村

○赤岩村　鍋谷村　舞木村　福島村　新福寺村

仙石村　吉田村　古海村　古戸村　古氷村

坂田村　寄木戸村

下小泉村○上小泉村

篠塚村　赤堀村○狸塚村

○藤川村　石打村　秋妻村

○中野村　光善寺村　鶉村　日向村　鶉新田

○下早川田村　足次村　大新田　傍示塚村　上早川田村

○高根村　岡野村　木戸村　成島村

谷越村　小桑原村○新宿村　堀江村　松原村

青柳村　近藤村

○羽附村　赤生田村

佐位郡

○伊勢崎町

○安堀村　太田村　波志江村

○市場村　今井村　下觸村　五目牛村　堀下村

野村

○下植木村　上植木村

○伊與久村　木島村　百々村

○上武士村　保泉村　小此木村

○島村

○西久保村　曲澤村　間ノ谷村　香林村　西野村

○田部井村　國定村　西小保方村　上田村

○東小保方村　八寸村

○茂呂村　今泉村

○下淵名村　上淵名村　東新井村

○境町　下武士村　中島村

那波郡

○東飯島村　國領村　上蓮沼村　馬見塚村　下蓮沼村
○下道寺村　富塚村　大正寺村　長沼村　除ヶ村
○田中島村　連取村　宮子村
○宮古村　田中村　東上ノ宮村　西上ノ宮村　今村
○下新田村　上飯島村　南玉村　上ノ手村　福島村
上茂木村　下茂木村　後箇村　角淵村
○堀口村　下福島村　八斗島村　戸谷塚村　中町
芝町　山王堂村　韮塚村　阿彌大寺村
○北今井村
○藤川村　山王村　中内村　東善養寺村　西善村
飯塚村　樋越村　上福島村
○沼ノ上村　下ノ宮村　箱石村　川井村　飯倉村
小泉村

# 第三節　郡長市町村長時代

## 第一項　郡治

郡役所

此期に於ても、郡に郡役所を設け、郡長之を統轄したること、第二期に異ならず。唯郡の廢合に由り、郡役所名に變更あり。郡長の管掌事務に、時勢の進運に伴ひたる委任事項の追加あり。又事務章程にも多少變更を見たるに過ぎず。事務分掌に就いては、明治三十六年九月七日、訓令甲第百二號を以て、第一課(庶務・社寺・兵事・勸業)、第二課(土木・地理・税務)、第三課(學務)に改め、更に大正十三年八月十五日、訓令甲第十九號により、庶務係・町村係・學務係・勸業係・財務係と改正し、以て大正十五年六月三十日の郡役所廢止に及ぶ。

郡の廢合

明治二十九年三月廿九日、法律第四拾壹號を以て、(一)東群馬郡及び南勢多郡を廢し、其區域を以て、勢多郡を置き、(二)片岡郡を廢し、其區域と西群馬郡とを廢し、其區域の一部(高崎町・元總社村・東郷村・長野村・清里村・相馬村・瀧川村・六郷村・室田村・大類村・箕輪村・久留馬村・國府村・總社町・金古町・佐野村・東村・上郊村・倉田村・岩鼻村・中川

村・新高尾村・塚澤村・堤ケ岡村・倉賀野町・瀧川町・京ケ島村・長尾村・小野上村・古巻村・白郷井村・金島村・桃井村・駒寄村・明治村・豐秋村・伊香保町）とを以て群馬郡を置き（三）緑野郡・多野郡及び南甘樂郡を廢し、其區域を以て多野郡を置き（四）佐位郡及び那波郡を廢し、其區域を以て佐波郡を置き（五）利根郡及び北勢多郡を廢し、其區域と吾妻郡の一部（久賀村）とを以て利根郡を置き（六）西群馬郡に屬せし區域の一部（高山村）を吾妻郡に編入し、四月一日より施行せり。而して北甘樂・碓氷・山田・新田・邑樂四郡は從前の儘なるを以て、本縣は是に於て十一郡となる。

郡の自治

明治二十三年、法律第三十號を以て、郡制公布せられ、明治二十九年八月一日を以て實施せられたる結果、郡は町村の上に位する自治團體となり、郡會を設けて、郡行政の議決機關とし、更に郡參事會を設けて、郡會の代議其他の議決機關とし、郡長は郡に屬する國政事務を處理する外、郡の代表者となり、其行政の執行機關として、郡自治體の事務を執るに至り、爾來郡は其自己の發展に必要なる産業・教育等の經營を爲し、其他基本財産を造成する等、自治の本旨を全うせんとせり。然れども郡長は公選せず、國の官吏を任用したることと、府縣の知事に於ける關係の如くなれば、市町村の自治の如く完全なるものに非ず。而して最初に於ては、

議員選擧法も、町村會議員をして選擧せしむる複選制を採用したるが、明治三十二年、大地主議員及び複選制を廢止し、改正法には郡を以て法人となすことを明言せられたり。

斯くて郡制實施せらるゝこと二十七年、大正十年四月十二日、法律第六十三號を以て、郡制廢止に關する法律公布せられ、大正十一年十一月三十日、勅令第五百二號により、大正十二年四月一日より廢止せられたり。而して本縣に於て、大正十一年九月九日、臨時縣會を開き、郡制廢止に伴ふ、郡に屬する營造物及び事業の處分、權利義務の歸屬に關し、主務大臣の諮問に對し、答申の件を議了したり。

郡域は明治二十二年、市町村制施行の際の變動したるもの左の如し。

一 南勢多郡小柳町・細ケ澤町・諏訪町・向町・神明町・才川村・淸王寺村・岩神村・一毛村・國領村・萩村を東群馬郡(前橋町)ニ。

一 西群馬郡川原島新田を南勢多郡(南橘村)ニ。

一 綠野郡金井村ヲ多胡郡(日野村)ニ。

一 利根郡日向南鄕村ヲ北勢多郡(赤城根村)ニ。

一 南勢多郡磯村ヲ佐位郡(赤堀村)ニ。

一 新田郡境村ノ內ヲ佐位郡(境町)ニ。

一 西群馬郡上新田村・與六分村・齋田村ヲ那波郡(玉村町)ニ。

一　邑樂郡古戸村ヲ新田郡澤野村ニ。

一　新田郡太田町ノ一部ヲ山田郡（韮川村、毛里田村）ニ。（以上明治二十二年三月四日、縣令第十九號）

一　北甘樂郡大字西野牧ヲ碓氷郡（坂本町）ニ。

一　南甘樂郡中里村大字平泉ノ一部ヲ北甘樂郡（青倉村）ニ。（以上明治二十二年十月一日）

明治二十九年三月、郡の廢合の際、吾妻郡の內久賀村を利根郡に、西群馬郡の內高山村を吾妻郡に編入し、再び變動を見たり。其以後に於て前橋・高崎・桐生等に市制を施行せられたる時に、是れ等隣接町村の內、市內に編入せられたるものもありて、多少變更して今日に及べり。其間明治二十四年には、南勢多郡粕川・新里・黒保根・東の四箇村、新田郡鐵塚本町・笠懸の二町村を山田郡に編入の件、縣會に請願せられたることあり。而して別に明治二十四年來、山田郡中、所謂下山田と稱する韮川・休泊・毛里田・矢場川の四箇村は新田郡に、又大正七年より、佐波郡玉村町は群馬郡に編入替を、帝國議會に請願したることありたれども、其希望は達せられず、從つて郡界には變更なかりき。

## 第二項　市町村の政治

市町村制の實施區域

町村の政治は、明治二十一年四月發布の市町村制により、本縣は翌二十二年三月四日の群馬縣令第十九號を以て、本町郡町村區域名稱を改定したり。卽ち從來の宿驛の名稱を町に改め、舊町村名を大字として之を存し、飛地は各所在郡町村へ編入す。此市町村制の實施により、町村は左の如し。

群馬縣令第十九號　（明治二十二年三月四日）

明治十一年（七月）第十七號布告、郡區町村編制法ニ依リ、本縣郡町村區域名稱、左記ノ通改定シ、明治二十二年四月一日ヨリ施行ス。

但舊町村名ハ大字トシテ之ヲ存シ、飛地ハ各其所在郡町村へ編入ス。

○東群馬郡

前橋曲輪町　同北曲輪町　同南曲輪町　同　神明町　同　柳　町

同　石川町　同　堀川町　同　田中町　同　横山町　同　本　町

同　竪　町　同　桑　町　同　萱　町　同　榎　町　同　田　町

同　立川町　同　紺屋町　同　連雀町　同　相生町　同　中川町

同　片貝町　同　新町　同　芳町　同　百軒町　同　大塚町

天川村　紅雲分村字龍海院西　中河原村北ノ内一番二番三番八番九番十番ノ甲同乙十一番ヲ除ク。

○南勢多郡

小柳町　細ケ澤町　諏訪町　向町　神明町

才川町　清王寺村　岩神村　一毛村　國領村

茯村　ヲ本郡ニ編入ス。

以上合併シテ前橋町ト稱ス。

六供村　市ノ坪村　橳島村　朝倉村　後閑村

上佐鳥村　下佐鳥村　宮地村

前代田村　前橋町ニ屬シタル分ヲ除ク。

宗甫分村　同

天川原村　同

紅雲分村　同　以上合併シテ上川淵村ト稱ス。

龜里村　横手村　三公田村　鶴光路村　新堀村

力丸村　房丸村　徳丸村　下阿内村

以上合併シテ下川淵村ト稱ス。

○南勢多郡

龍藏寺村　下小出村　北代田村　上細井村　青柳村
下細井村　日輪寺村　荒牧村　關根村　川端村
上小出村　田口村

西群馬郡

川原新田ヲ本郡ニ編入ス。　以上合併シテ南橘村ト稱ス。

箱田村　上箱田村　眞壁村　八崎村　分郷八崎村
小室村　上南室村　下南室村　下箱田村
以上合併シテ北橘村ト稱ス。
溝呂木村　勝保澤村　持柏木村　北上野村　上三原田村
三原田村　見立村　瀧澤村　樽村　宮田村
以上合併シテ横野村ト稱ス。
津久田村　猫村　長井小川田村　深山村　棚下村
以上合併シテ敷島村ト稱ス。
原ノ郷　引田村　横室村　石井村　漆窪村
山口村　田島村　市ノ木場村　米野村　小暮村
時澤村　小澤新田　皆澤新田

以上合併シテ富士見村ト稱ス。

五代村　端氣村　鳥取村　小坂子村　小神明村

嶺村　勝澤村　以上合併シテ芳賀村ト稱ス。

上泉村　荻窪村　石關村　堀ノ下村　龜泉村

三俣村、西片貝村　東片貝村　幸塚村　上沖之鄕

下沖之鄕　江木村　堤村

以上合併シテ桂萱村ト稱ス。

下大島村　上大島村　天川大島村　上長磯村　下長磯村

野中村　女屋村　駒形新田　下增田村　荒井村

小屋原村　小島田村　上增田村　東上野村

以上合併シテ木瀨村ト稱ス。

二ノ宮村　今井村　飯土井村　新井村　荒子村

下大屋村　富田村　荒口村　泉澤村　東大室村

西大室村　以上合併シテ荒砥村ト稱ス。

大胡町　茂木村　河原濱村　堀越村　瀧窪村

橫澤村　樋越村　上大屋村

以上合併シテ大胡(おほご)村ト稱ス。

鼻毛石村　市ノ關村　柏倉村　三夜澤村　馬場村

苗ヶ嶋村　大前田村　以上合併シテ宮城(ミヤギ)村ト稱ス

女淵村　新屋村　込皆戸村　稻里村　深津村

西田面村　前皆戸村　上東田面村　下東田面村　一日市村

膳村　中村　室澤村　月田村

以上合併シテ粕川(かすかは)村(むら)ト稱ス。

新川村　野村　小林村　山上村　關村

武井村　板橋村　奧澤村　鶴ヶ谷村　高泉村

大久保村　以上合併シテ新里(にひざと)村(むら)ト稱ス。

上神梅村　下神梅村　宿廻村　水沼村　上田澤村

八木原村　鹽澤村　下田澤村　以上合併シテ黑保根(くろほね)村ト稱ス。

花輪村　座間村　荻原村　小夜戸村　小中村

神戸村　草木村　澤入村以上合併シテ東(あづま)村ト稱ス。

○西群馬郡

高崎宮元町　同　連雀町　同　田町　同　新町　同　眞町

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 同　鎌倉町 | 同　砂賀町 | 同　鞘町 | 同　白銀町 | 同　元紺屋町 |
| 同　羅漢町 | 同　通町 | 同　明石町 | 同　十人町 | 同　職人町 |
| 同　檜物町 | 同　鍛冶町 | 同　下横町 | 同　新田町 | 同　南町 |
| 同　新喜町 | 同　龍見町 | 同　若松町 | 同　四ッ谷町 | 同　相生町 |
| 同　住吉町 | 同　嘉多町 | 同　九藏町 | 同　高砂町 | 同　新紺屋町 |
| 同　寄合町 | 同　中紺屋町 | 同　柳川町 | 同　堰代町 | 同　山田町 |
| 同　北通町 | 同　弓町 | 同　椿町 | 同　高松町 | 下和田村 |
| 下並榎村 | 赤坂村 | 以上合併シテ高崎町ト稱ス。 | | |
| 上佐野村 | 下佐野村 | 佐野窪村 | 下之城村 | 下中居村 |
| 和田多中村 | 上中居村 | 新後閑村 | | |

以上合併シテ佐野村ト稱ス。

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 岩鼻町 | 矢中村 | 栗崎村 | 東中里村 | 臺新田村 |
| 綿貫村 | 以上合併シテ岩鼻村ト稱ス。 | | | |
| 上大類村 | 中大類村 | 下大類村 | 宿大類村 | 南大類村 |
| 柴崎村 | 以上合併シテ大類村ト稱ス。 | | | |
| 上瀧村 | 下瀧村 | 瀧村 | 西横手村 | 中島村 |

宿横手村　下齋田村　宇貫村　八幡原村　板井村
以上合併シテ瀧川村ト稱ス。
島野村　京目村　元島名村　矢島村　西島村
大澤村　萩原村　以上合併シテ京ヶ島村ト稱ス。
箱田村　後家村　前箱田村　川曲村　稻荷新田村
下新田村　上新田村　小相木村　古市村　江田村
以上合併シテ東村ト稱ス。
元總社村　内藤分村　大友村　大渡村
以上合併シテ元總社村ト稱ス。
新保田中村　中尾村　鳥羽村　新保村　日高村
以上合併シテ新高尾村ト稱ス。
小八木村　大八木村　正觀寺村　井野村　濱尻村
以上合併シテ中川村ト稱ス。
飯塚村（高崎町ニ屬スル分ヲ除ク）
貝澤村　岩押村　高關村　江木村
以上合併シテ塚澤村ト稱ス。

筑縄村　上小鳥村　下小鳥村　上小塙村　下小塙村

上並榎村　以上合併シテ六郷村ト稱ス。

行力村　楽間村　菊池村　我峯村　濱川村

北新波村　南新波村　西新波村

以上合併シテ長野村と稱ス。

高濱村　本郷村　白岩村　十文字村　宮澤村

三ツ子澤村　神戸村　以上合併シテ久留馬村ト稱ス。

下室田村　中室田村　上室田村　榛名山村

以上合併シテ室田村ト稱ス。

三ノ倉村　權田村　以上合併シテ倉田村ト稱ス。

富岡村　善地村　和田山村　白川村

以上合併シテ車郷村ト稱ス。

西明屋村　上芝村　矢原村　東明屋村　金敷平村

松之澤村　下芝村　以上合併シテ箕輪村ト稱ス。

柏木澤村　廣馬場村　以上合併シテ相馬村ト稱ス。

生原村　保渡田村　中里村　井出村

以上合併シテ上郊村ト稱ス。

三ッ寺村　棟高村　中泉村　福島村　菅谷村

以上合併シテ堤ケ岡村ト稱ス。

引間村　稻荷臺村　後引間村　冷水村　東國分村

西國分村　北原村　塚田村

以上合併シテ國府村ト稱ス。

總社町　高井村　植野村

以上合併シテ總社町ト稱ス。

金古驛　足門村

以上合併シテ金古町ト稱ス。

野良犬村　青梨子村　池端村　上青梨子村

以上合併シテ清里村ト稱ス。

大久保村　漆原村

以上合併シテ駒寄村ト稱ス。

半田村　八木原村　有馬村

以上合併シテ古巻村ト稱ス。

上野田村　下野田村　小倉村　北下村　南下村

以上合併シテ明治村ト稱ス。

山子田村　新井村　長岡村

以上合併シテ桃井村ト稱ス。

石原村　湯ノ上村　中村

以上合併シテ豐秋村ト稱ス。

伊香保村　湯中子村　水澤村

以上合併シテ伊香保町ト稱ス。

金井村　南牧村　阿久津村　川島村　祖母島村

以上合併シテ金島村ト稱ス。

北牧村　白井村　吹屋村　横堀村

以上合併シテ長尾村ト稱ス。

上白井村　中郷村

以上合併シテ白井村ト稱ス。（明治二十二年三月、白郷井村ト改ム。）

小野子村　村上村　以上合併シテ小野上村ト稱ス。

中山村　尻高村　以上合併シテ高山村ト稱ス。

倉賀野驛　倉賀野町ト改稱ス。

澁川村　澁川町ト改稱ス。

○片岡郡

石原村　乘附村　寺尾村

以上合併シテ片岡村ト稱ス。

○綠野郡

藤岡町　小林村　以上合併シテ藤岡町ト稱ス。

岡之鄕村　下栗須村　下戸塚村　上戸塚村

以上合併シテ神流村ト稱ス。

中村　森村　森新田　上栗須村　中栗須村

立石村　立石新田　中島村

以上合併シテ小野村ト稱ス。

阿久津村　根小屋村　木部村　山名村

以上合併シテ八幡村ト稱ス。

鮎川村　東平井村　西平井村　綠野村　三ッ木村

白石村　以上合併シテ平井村ト稱ス。

上大塚村　中大塚村　下大塚村　本動堂村　上落合村

篠塚村　以上合併シテ美土里村ト稱ス。

神田村　矢場村　保美村　三本木村　高山村
本鄉村　牛田村　川除村　根岸村
以上合併シテ美九里村ト稱ス。
鬼石町　淨法寺村　以上合併シテ鬼石町ト稱ス。
三波川村　從前ノ通。
新町驛　新町ト改稱ス。

○多胡郡

吉井町　矢田村　池村　鹽川村　長根村
下長根村　片山村　本鄉村　小棚村
以上合併シテ吉井町ト稱ス。
多胡村　鹽村　神保村　高村　東谷村
大澤村　以上合併シテ多胡村ト稱ス。
小串村　黑熊村　深澤村　石神村　中島村
小幕村　馬庭村　岩井村　多比良村
以上合併シテ入野村ト稱ス。
上日野村　下日野村　緑野郡金井村ヲ本郡ニ編入ス。

以上合併シテ日野村ト稱ス。

○南甘樂郡

譲原村　保美濃山村　坂原村

以上合併シテ美原村ト稱ス。

柏木村　麻生村　生利村　萬場村　鹽澤村

森戸村　黑田村　小平村　船子村　相原村

青梨村　以上合併シテ神川村ト稱ス。

魚尾村　神ヶ原村　尾附村　平原村

（北甘樂郡青倉村へ屬シタル分ヲ除ク）以上合併シテ中里村ト稱ス。

野栗澤村　新羽村　勝山村　川和村　乙母村

乙父村　楢原村　以上合併シテ上野村ト稱ス。

○北甘樂郡

富岡町　七日市町　曾木村

以上合併シテ富岡町ト稱ス。

黑川村　別保村　上黑岩村　下黑岩村

以上合併シテ黑岩村ト稱ス。

一ノ宮町　宮崎村　田島村　宇田村　神農原村

以上合併シテ一ノ宮町ト稱ス。

上高田村　下高田村　八木連村

以上合併シテ高田村ト稱ス。

上丹生村　下丹生村　原村

以上合併シテ丹生村ト稱ス。

妙義町　中里町　行澤村　菅原村　諸戸村

岳村　大牛村　古立村

以上合併シテ妙義町ト稱ス

上小坂村　中小坂村　下小坂村　東野牧村

以上合併シテ坂牧村ト稱ス。（明治二十三年三月小坂村ト改稱ス。）

南後箇村　岩染村　野上村　岡本村

以上合併シテ額部村ト稱ス。

小幡村　上野村　轟村　國峯村　善慶寺村

以上合併シテ小幡村ト稱ス。

青倉村　宮室村　大桑原村　風口村　南甘樂郡平原村

字土屋・澤・井出・山ノ神・船澤・三本木・丸岩・大平・仲反リ・小屋場・山口・高岩・羽根岩・比良・ヲロセイ・トヲ見・後・細倉・溫エ・戸渡・仁田久保・鳥屋後ヲ本郡ニ編入ス。

以上合併シテ青倉村ト稱ス。

上奥平村　下奥平村　岩崎村　坂口村

以上合併シテ岩平村ト稱ス。

白倉村　庭谷村　造石村　天引村　金井村

以上合併シテ新屋村ト稱ス。

福島町　田篠村　小川村　君川村　星田村

以上合併シテ福島町ト稱ス。

大日向村　大仁田村　六車村

以上合併シテ月形村ト稱ス。

砥澤村　羽澤村　星尾村　熊倉村

以上合併シテ尾澤村ト稱ス。

南蛇井村　中澤村　蚊沼村　神成村　上小林村

以上合併シテ吉田村ト稱ス。

高瀬村　内匠村　大島村

以上合併シテ高瀬村ト稱ス。

馬山村　向山村　以上合併シテ馬山村ト稱ス。

磐戸村　小澤村　大鹽澤村　楡澤村　千原村

以上合併シテ磐戸村ト稱ス。

本宿村　南野牧村　西野牧村　碓氷郡坂本町ニ屬シタル分ヲ除ク

以上合併シテ西牧村ト稱ス。

下仁田町　吉崎村　川井村　栗山村

以上合併シテ下仁田町ト稱ス。

藤木村　小桑原村　上高尾村　下高尾村　相野田村

蕨村　後賀村　白岩村　桑原村

以上合併シテ小野村ト稱ス。

秋畑村　從前ノ通。

○碓氷郡

安中驛　古屋村　高別當村　小俣村　中宿村

以上合併シテ安中町ト稱ス。

原市村　郷原村　峯村　簗瀬村

以上合併シテ原市町ト稱ス。

松井田驛　新堀村　以上合併シテ松井田町ト稱ス。

横川村　五料村　以上合併シテ臼井村ト稱ス。

原村　坂本驛　峠町　入山村　北甘樂郡北野牧村・西野牧村字千駄木・向山・栗ノ木下・横谷・新井・野原・丸山・小山平・新林・中河原・袖萱・大林・西平山・八島澤・日萱・田屋ヲ本郡ニ編入ス。以上合併シテ坂本町ト稱ス。

二軒在家村　入見村　八城村　行田村

以上合併シテ西横野村ト稱ス。

鷺宮村　中野谷村　上間仁田村　下間仁田村

以上合併シテ東横野村ト稱ス。

西上磯部村　上磯部村　下磯部村　大竹村　東上磯部村

以上合併シテ磯部村ト稱ス。

岩井村　大谷村　野殿村

以上合併シテ岩野谷村ト稱ス。

八幡村　藤塚村　劍崎村　鼻高村　下大島村

町屋村　金井淵村　若田村

以上合併シテ川間村ト稱ス。（明治二十三年三月八幡村ト改稱ス。）

中豐岡村　下豐岡村　上豐岡村

以上合併シテ豐岡村ト稱ス。

中里見村　下里見村　上里見村　上大島村

以上合併シテ里見村ト稱ス。

東上秋間村　西上秋間村　中秋間村　下秋間村

以上合併シテ秋間村ト稱ス。

中後閑村　上後閑村　下後閑村

以上合併シテ後閑村ト稱ス。

國衙村　高梨子村　下増田村　小日向村

以上合併シテ九十九村ト稱ス。

土鹽村　新井村　上増田村

以上合併シテ細野村ト稱ス。

川浦村　岩氷村　水沼村

以上合併シテ烏淵村ト稱ス。

板鼻驛　板鼻町ト改稱ス。

○吾妻郡

中之條町　西中之條町　伊勢町　青山村　市城村
以上合併シテ中之條町ト稱ス。

原町　金井村　川戸村
以上合併シテ原町ト稱ス。

五町田町　箱島村　岡崎新田　奥田村　新巻村
以上合併シテ東村ト稱ス。

植栗村　岩井村　小泉村　泉澤村
以上合併シテ太田村ト稱ス。

大戸村　萩生村　本宿村　須賀尾村　大柏木村
以上合併シテ坂上村ト稱ス。

岩下村　松谷村　三島村　矢倉村　郷原村
厚田村　以上合併シテ岩島村ト稱ス。

長野原町　與喜屋村　羽根尾村　古森村　大津村
應桑村　横壁村　林村　川原畑村　川原湯村
以上合併シテ長野原町ト稱ス。

三原村　今井村　鎌原村　門貝村　袋倉村
芦生田村　西窪村　大笹村　大前村　干俣村
田代村　以上合併シテ嬬恋村ト稱ス。
草津村　前口村　赤岩村　小雨村　生須村
太子村　日影村　入山村
以上合併シテ草津村ト稱ス。
四萬村　山田村　折田村　上澤渡村　下澤渡村
以上合併シテ澤田村ト稱ス。
原岩本村　五反田村　蟻川村　大道新田
以上合併シテ伊參村ト稱ス。
平村　横尾村　大塚村　赤坂村　栃窪村
以上合併シテ名久田村ト稱ス。
須川町　東峯須川村　西峯須川村　入須川村　布施村
師田村　吹路村　永井村　猿ヶ京村
以上合併シテ久賀村ト稱ス。

○利根郡

沼須村　上沼須村　上久屋村　下久屋村　横塚村
戸鹿野村　戸鹿野新町　以上合併シテ利南村ト稱ス。
高平村　生枝村　岩室村　尾合村　平出村
上古語父村　下古語父村　以上合併シテ白澤村ト稱ス。
追貝村　千鳥新田　平川村　高戸谷村　大揚村
老神村　大原新町　薗原村　穴原村
以上合併シテ東村ト稱ス。
須賀川村　菅沼村　御座入村　築地村　下平村
土出村　摺淵村　花咲村　針金新田　越本村
東小川村　戸倉村　幡谷村
以上合併シテ片品村ト稱ス。
川場湯原村　谷地村　門前組　天神組　生品村
立岩村　萩室村　中野村　太田川村　小田川村
以上合併シテ川場村ト稱ス。
下發知村　中發知村　上發知村　發知新田　佐山村
奈良村　秋塚村　岡谷村

以上合併シテ池田村ト稱ス。

下沼田村　井土上村　硯田村　恩田村　白岩村
堀廻村　大釜村　原村　宇楚井村　善桂寺村
石墨村　戸神村　町田村

以上合併シテ薄根村ト稱ス。

眞庭村　政所村　師村　後閑村　下牧村
上牧村　大沼村　奈女澤村

以上合併シテ古馬牧村ト稱ス。

湯原村　高日向村　小日向村　阿能川村　谷川村
鹿野澤村　吉本村　小仁田村　寺間村　川上村
大穴村　幸知村　湯檜曾村　綱子村　向山村
粟澤村　藤原村　夜後村

以上合併シテ水上村ト稱ス。

月夜野町　小川村　上津村　下津村　石倉村

以上合併シテ桃野村ト稱ス。

新巻村　羽場村　相俣村

以上合併シテ湯ノ原村ト稱ス。

下川田村　上川田村　今井村　屋形原村　岩本村

以上合併シテ川田村ト稱ス。

沼田町　從前ノ通。

○北勢多郡

森下村　川額村　栃久保村　以上合併シテ久呂保村ト稱ス

糸井村　貝野瀬村　以上合併シテ絲之瀬村ト稱ス。

日影南鄕　青木村　砂川村　輪組村　多那村

石戸新田　根利村　生越村　利根郡小松村・柿平村・日向南鄕村ヲ本郡ニ編入ス。以上合併シテ赤城根村ト稱ス。

○佐位郡

波志江村　安堀村　太田村

以上合併シテ三鄕村ト稱ス。

今井村　下觸村　五目牛村　堀下村　市場村

野村　西久保村　曲澤村　間野谷村　香林村

西野村　南勢多郡磯村ヲ本郡ニ編入ス。

以上合併シテ赤堀村ト稱ス。

東小保方村　西小保方村　田部井村　國定村　上田村

以上合併シテ東村ト稱ス。

上植木村　下植木村　八寸村

以上合併シテ植蓮村ト稱ス。

茂呂村　今泉村　以上合併シテ茂呂村ト稱ス。

上淵名村　下淵名村　東新井村　伊與久村　木島村

百々村　以上合併シテ釆女村ト稱ス。

境町　下武士村　字萩原　新田郡ノ内字町並・町並南・二枚橋ヲ本郡編入。以上合併シテ境町ト稱ス。

保泉村　上武士村　下武士村（境町ニ屬スル分ヲ除ク。）

中島村　小此木村　以上合併シテ剛志村ト稱ス。

伊勢崎町　從前ノ通。

島村　從前ノ通。

○那波郡

東飯島村　國領村　上蓮沼村　長沼村　下道寺村

下蓮沼村　馬見塚村　富塚村　大正寺村　除ヶ村
以上合併シテ豐受村ト稱ス。
戸谷塚村　中町　芝町　北今井村　山王堂村
韮塚村　八斗島村　阿彌大寺村　堀口村　下福島村
以上合併シテ名和村ト稱ス。
下之宮村　箱石村　川井村　沼ノ上村　飯倉村
小泉村　後箇村　上茂木村　下茂木村
以上合併シテ芝根村ト稱ス。
下新田村　福島村　南玉村　上飯島村　上之手村
角淵村　西群馬郡上新田村・與六分村・齋田村ヲ本郡ニ編入ス。
以上合併シテ玉村町ト稱ス。
山王村　中内村　東善養寺村　西善村　飯塚村
藤川村　樋越村　上福島村
以上合併シテ上陽村ト稱ス。
田中村・西上ノ宮村　東上ノ宮村　宮古村　今村
連取村　田中島村・宮子村

以上合併シテ宮郷村ト稱ス。

○新田郡

太田町（强戸村・島之郷村及山田郡毛里田村・同郡韮川村ニ屬スル分ヲ除ク。）

大島村ノ内字大島宿・宿南・裏宿・上八幡前ノ内

以上合併シテ太田町ト稱ス。

飯塚村　内ケ島村　東矢島村　西矢島村　小舞木村

新島村　東別所村　新井村　飯田村

以上合併シテ九合村ト稱ス。

福澤村　富澤村　牛澤村　高林村　岩瀬川村

下濱田村　細谷村　米澤村　由良村ノ内字清川　邑樂郡古戸村ヲ本郡ニ編入ス。

以上合併シテ澤野村ト稱ス。

尾島村　龜岡村　阿久津村　堀口村　岩松村

押切村　備前島村　二ツ小屋村　武藏島村　前島村

前小屋村　安養寺村　大舘村

以上合併シテ尾島町ト稱ス。

世良田村　三ツ木村　女塚村　米岡村　上矢島村

西今井村　小角田村　平塚村　徳川郷　出塚村
粕川村　境村　佐位郡境町ニ屬スル分ヲ除ク。
以上合併シテ世良田村ト稱ス。

木崎宿　中江田村　下江田村　高尾村　赤堀村
以上合併シテ木崎町ト稱ス。

西野谷村　由良村（野澤村ニ屬スル分ヲ除ク）　別所村
沖野村　上田島村　下田島村　中根村　藤阿久村
脇屋村（生品村ニ屬スル分ヲ除ク）　小金井村字子持川
以上合併シテ寶泉村ト稱ス。

大島村（太田町ニ屬スル分ヲ屬ク）　新野村　鳥山村
鶴生田村　長手村　太田町字長手口
以上合併シテ鳥之郷村ト稱ス。

成塚村　西長岡村　菅鹽村　强戸村　寺井村
北金井村　天良村　太田町字鶴生田口
以上合併シテ强戸村ト稱ス。

村田村　小金井村（寶泉村ニ屬スル分ヲ除ク）　市野井村

反町村　市　村　脇屋村字ハカドノ桑木原　多　村
多村新田　小金村　四軒在家村
以上合併シテ生品村ト稱ス。
大根村　上江田村　上田中村　權右衛門村　上中村
溜池村　大　村　嘉禰村　金井村　花香塚村
下田中村　以上合併シテ綿打村ト稱ス。
本町村　藪塚村　山ノ神村　大久保村　六千石村
寄合村　以上合併シテ藪塚本町ト稱ス。
鹿　村　西鹿田村　久宮村　阿佐美村
以上合併シテ笠懸村ト稱ス。

○山田郡

桐生新町　安樂土村　下久方村　新宿村　上久方村字平井
以上合併シテ桐生町ト稱ス。
山田村　須永村　西小倉村　東小倉村　高津戸村
以上合併シテ川内村ト稱ス。
廣澤村　一本木村　以上合併シテ廣澤村ト稱ス。

上久方村（桐生新町ニ屬スル分ヲ除ク）　淺部村　高澤村
二渡村　山地村　以上合併シテ梅田村ト稱ス。
下新田村　如來堂村　天王宿村　蕪町村　天沼新田
以上合併シテ相生村ト稱ス。
淺原村　鹽原村　小平村　長尾根村
以上合併シテ福岡村ト稱ス。
大間々町　桐原村　以上合併シテ大間々町ト稱ス。
矢場村　大町村　植木野村　荒金村　臺之郷
東長岡村　東金井村　石原村　安良岡村　上小林村
龍舞村　沖之郷　茂木村　下小林村　八重笠村
新田郡太田町字熊野口金井ヲ本郡ニ編入ス。
以上合併シテ韮川村ト稱ス。
吉澤村　丸山村　矢田堀村　東今泉村　古氷村
只上村　市場村　富若村　新田郡太田町字强戸口ヲ本郡ニ編入ス。　以上合併シテ毛里田村ト稱ス。
境野村　從前ノ通。

○邑樂郡

館林町（郷谷村ニ屬スル分ヲ除ク。）谷越村（多々良村ニ屬スル分ヲ除ク）

成島村字富士北　當郷村字川田

以上合併シテ館林町ト稱ス。

當郷村（館林町ニ屬スル分ヲ除ク）　新當郷村　川谷村

四谷村　館林町字二家・外作木・外加法師

以上合併して郷谷村と稱す。

除川村　西岡村　西岡新田　細谷村　離村

大荷場村　大曲村　以上合併シテ西谷田村ト稱ス。

大高島村　下五箇村　飯野村

以上合併シテ大箇野村ト稱ス。

板倉村　岩田村　籾谷村　内藏新田

以上合併シテ伊奈良村ト稱ス。

羽附村　赤生田村　以上合併シテ赤羽村ト稱ス。

千津井村　江口村　江黒村　田島村　斗合田村

以上合併シテ千江田村ト稱ス。

須賀村　大輪村　大輪沼新田　川俣村　大佐貫村
(三野谷村ニ屬スル分ヲ除ク。)　入谷村字八反田袖谷
以上合併シテ佐貫村ト稱ス。
新里村　梅原村　中谷村　南大島村
以上合併シテ梅島村ト稱ス。
新宿村　松原村　小桑原村　青柳村　近藤村
堀江村　以上合併シテ六郷村ト稱ス。
上三林村　下三林村　野邊村　入ケ谷村(佐貫村ニ屬スル分
ヲ除ク。)矢島村字定棚　以上合併シテ三野谷村ト稱ス。
上五箇村　瀬戸井村(永樂村ニ屬スル分ヲ除ク。)　萱野村
木崎村　上中森村　下中森村　赤岩村字タヽラ
以上合併シテ富永村ト稱ス。
福島村　赤岩村(富永村ニ屬スル分ヲ除ク。)　舞木村
鍋谷村　新福寺村　瀬戸井村字堤外宮崎
以上合併シテ永樂村ト稱ス。
仙石村　吉田村　古海村　寄木戸村　古氷村

坂田村　以上合併シテ大川村ト稱ス。

上小泉村　下小泉村　以上合併シテ小泉村ト稱ス。

篠塚村　狸塚村　赤堀村

以上合併シテ長柄村ト稱ス。

中野村　鶉村　鶉新田　光善寺村

以上合併シテ中野村ト稱ス。

藤川村　秋妻村　石打村

以上合併シテ高島村ト稱ス。

成島村（館林町ニ屬スル分ヲ除ク。）　高根村　木戸村

日向村　谷越村字樋ノ口　以上合併シテ多々良村ト稱ス。

下早川田村　上早川田村　傍示塚村　足次村　大新田村

岡野村　以上合併シテ渡瀬村ト稱ス。

北大島村　大島村ト改稱ス。

海老瀬村　從前ノ通。

明治二十二年三月、本縣町村區域決定後、町村勢の發達に伴ひ、市制町制を施されたるあり。或は町村自治の狀勢によりて、町村區域に變更を生じたるものあ

り。

（一）市制を布きたるは、

東群馬郡前橋町　明治二十五年四月一日ヨリ。

群馬郡高崎町　明治三十三年四月一日ヨリ。

山田郡桐生町　大正十年四月一日ヨリ。

（二）町制を布きたるは、

碓氷郡臼井村　明治二十三年より。

勢多郡大胡村　明治三十二年より。

邑樂郡小泉村　明治三十五年七月二十五日より。

群馬郡室田村　明治三十八年四月一日より。

群馬郡箕輪村　大正十年四月一日より。

多野郡神川村（萬場町）　大正十五年四月一日より。

（三）町村の分合廢置改稱

北甘樂郡坂牧村ヲ小坂村ニ改稱　明治二十三年三月

山田郡韮川村ヲ韮川村矢場川村休泊村ニ分割　明治二十六年七月十五日

利根郡久賀村湯之原村ヲ合併新治村ト改稱　明治四十一年五月一日

かくて大正十五年六月三十日、郡役所廢止當時に於ける縣下郡市町村數は左の如し。

| （郡市名） | （郡市役所々在地） | （役所役場數） | 町村數（町） | 町村數（村） | 町村數（計） | （大字又ハ市内町數） |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 勢多郡 | 前橋市一毛町 | 一七 | 一 | 一六 | 一七 | 一六六 |
| 群馬郡 | 高崎市連雀町 | 三七 | 七 | 三〇 | 三七 | 一六七 |
| 多野郡 | 藤岡町 | 一八 | 五 | 一三 | 一八 | 九三 |
| 北甘樂郡 | 富岡町 | 二三 | 五 | 一八 | 二三 | 九六 |
| 碓氷郡 | 安中町 | 一八 | 六 | 一二 | 一八 | 六七 |
| 吾妻郡 | 中之條町 | 一四 | 四 | 一〇 | 一四 | 七三 |
| 利根郡 | 沼田町 | 一六 | 一 | 一五 | 一六 | 一三四 |
| 佐波郡 | 伊勢崎町 | 一六 | 三 | 一三 | 一六 | 九三 |
| 新田郡 | 太田町 | 一三 | 四 | 九 | 一三 | 一〇六 |
| 山田郡 | 桐生市大字安樂土 | 一一 | 一 | 一〇 | 一一 | 四八 |
| 邑樂郡 | 館林町 | 二二 | 二 | 二〇 | 二二 | 九四 |
| 前橋市 | 曲輪町 | 一 | ― | ― | ― | 四二 |
| 高崎市 | 宮元町 | 一 | ― | ― | ― | 五四 |
| 桐生市 | 大字安樂土 | 一 | ― | ― | ― | 五 |
| （計）（郡） | 一一 | 二〇五 | 三九 | 一六六 | 二〇五 | 一、一三七 |
| （市） | 三 | 三 | ― | ― | ― | 一〇一 |

本縣職制の沿革

# 第七章　産業獎勵と其發達

## 第一節　總說

産業は國家活動、國民生活の源泉にして、之が消長隆替は、直に國家の運命、國民の生命に係はること頗る大なれば、産業行政は、一國行政事務中最主要なるものの一に屬す。晩近世界の大勢は、益〻産業振興の急務たるを認め、官民鋭意之が企劃に努め、以て國民の經濟的基礎を確立せんとするは、誠に國家の慶事と云ふべきなり。

明治維新の當初、我國未だ産業行政に關する獨立の官省なし。乃ち明治十四年四月、新に農商務省を特設せらるゝまでは、産業事務は、最初は民部官、明治二年四月、次は民部省、其次は內務省とに屬して、勸業寮・勸業局の名の下に、事務を分掌せられ、所謂産業・內務兩行政混沌時代たりき。然るに一度農商務省設立せられてより、茲に産業制度は劃時代の域に入り、日清・日露の兩戰役を經て、益〻發展し、歐洲大戰亂の影響を被りて、前古未曾有の隆盛を見るに至れり。

一國の産業行政機關の整備に伴ひ、地方の産業行政も亦、次第に整頓するは當然なり。今之を本縣の廳規の沿革史に徵するに、岩鼻縣時代に於ては、知縣事の職權中に「人民を繁育し、生産を富殖し」の文字は見えたれども、職制中、勸業の文字なし。勸業の掛の置かれたるは、群馬縣（第一次）職制中、庶務課の中に勸業掛なるものありて、學務・開墾・牧畜・種藝・諸礦鑛・工藝・諸會社等の事務を分掌したるを初とせるが如し。

勸業掛　常ニ管内ヲ巡回シ、正副區長・戸長及ヒ有志ノ士民ト協力シ、專ラ人民教育ノ責ニ任ジ、兼ネテ草萊荒蕪ヲ開墾シ、草木各品ノ種藝、牧畜等ヲ勸メ、諸礦鑛・工藝・工場ヲ開興シ、新發明ノ器械ヲ檢査シ、諸會社・開市・病院等發行ノ方法利害ヲ詳ニシ、都而自今進歩ノ各業一切ノ事務ヲ擔任ス。最モ地形築造等ニ關スルノ事件ハ、必ズ地理土木掛ニ商議、分課ノ法制違亂ナキヲ要ス。（群馬縣史稿）

熊谷縣時代亦大同小異にして、勸業掛は依然として庶務課中の一掛に過ぎざりしが、明治八年十一月、府縣職制並に事務章程改定せらるゝに及び、勸業課は獨立して、一課となり、明治十一年十二月七日の本縣職制事務章程には、勸業課の中に勸農・勸工・勸商・銀行の四科を分ち、明治十四年、中央政府に農商務省の設置せら

れたる翌八月に至り、本縣勸業課は常務・農務・工商・山林・銀行の五係に分たる。爾來數次の改廢ありといへども、內務部の一課として、重要なる地位を占むるに至る。而して時勢の進運は、產業立國の高唱せらるゝありて、施設亦之に伴ひ、逐年事務多端となるを以て、本縣は大正七年一月、先づ蠶糸商工課を農務課より、大正十一年一月更に、蠶糸商工課を蠶糸課・商工課に大正十三年一月、林務課を農務課より分離獨立せしめて、今日に及べり。明治四年、庶務課の一掛たりし勸業が、五十年後には、斯くも獨立せる四課に分化したる如きは、地方行政中、他に匹儔を見ざる大發展と稱すべく、亦以て本縣產業進展の反映と見ることを得べし。因に最近五箇年間に於ける產業統計を擧げて、現況の一班を知るの料に供すべし。

### 最近五箇年（自大正九年 至大正十三年）產額調表

| （年次） | （農產） | （畜產） | （林產） | （鑛產） | （水產） | （工產） | （計） | （一世帶當） | （現在人口一人當） |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 大正十三 | 八九、四八九、六四五圓 | 三、六一〇、三三八圓 | 九、三四〇、九〇六圓 | 一、〇九五、四四三圓 | 四三五、四五四圓 | 一七一、七五一、〇八〇圓 | 二七五、七二三、八六六圓 | 一、三三一圓 | 二四七圓 |
| 同　十二 | 九七、四三五、八八四 | 三、三九四、九二三 | 一〇、六〇〇、一七〇 | 一、〇六六、九六三 | 四〇〇、五三三 | 一七二、七八八、三六〇 | 二八五、六八六、八四二 | 一、三九二 | 二六一 |
| 同　十一 | 八三、七九六、一三九 | 三、一二八、〇四三 | 九、〇八八、六〇〇 | 一、一五八、五〇一 | 四四五、九八一 | 一七八、〇七三、六一三 | 二七五、六九〇、八七七 | 一、三六二 | 二五五 |
| 同　十 | 七八、一三六、二四六 | 三、二〇六、三九五 | 八、五七六、九七四 | 八〇九、一九七 | 三九九、〇二一 | 一九二、六六五、六五四 | 二八三、七九三、四八七 | 一、四二三 | 二六六 |
| 同　九 | 七八、二九六、九六一 | 二、六〇三、五八二 | 六、五二〇、六九三 | 六二五、九四二 | 二八五、二四〇 | 一二七、一三二、三一七 | 二一五、四六四、七三五 | 一、〇九五 | 二〇五 |

## 最近五箇年（自大正九年至大正十三年）間產額五十萬圓以上品目累年比較表

| （種別） | （大正十三年）圓 | （大正十二年）圓 | （大正十一年）圓 | （大正十年）圓 | （大正九年）圓 |
|---|---|---|---|---|---|
| 織物 | 六八、四六六、三〇九 | 七〇、七〇七、七四二 | 七九、三七三、四六三 | 八五、五五八、七〇〇 | 六二、二〇八、九〇九 |
| 生絲 | 五九、三三三、六二六 | 五八、一八六、三〇二 | 五一、〇三〇、八六八 | 四五、〇四四、七〇七 | 三五、八二一、二二九 |
| 繭 | 三六、八八四、五三三 | 四六、八二四、九五三 | 三六、四三三、八二六 | 三五、〇〇〇、〇八三 | 一八、八〇一、八九三 |
| 米 | 二四、七七九、三〇九 | 二四、〇九九・〇二四 | 二〇、三八五、五九七 | 二四、三二〇、六〇二 | 三三、三三五、〇三六 |
| 撚絲 | 二一、三七八、八〇七 | 二三、三九一、三六七 | 二八、〇五三、三六九 | 三九、三八一、九五三 | ― |
| 麥 | 九、一六七、七三六 | 八、三六三、六七九 | 一〇、三五一、〇九五 | 一〇、二六〇、一八五 | 一二、七六四、七三六 |
| 酒 | 七、三三三、〇二二 | 六、三五一、三〇三 | 五、七五四、四〇九 | 六、八八三、二一六 | 五、一三八、三二四 |
| 醬油 | 四、五二七、三二七 | 四、〇五二、二四七 | 四、一二七、六八五 | 一、五六〇、四四四 | 三、七八三、一〇七 |
| 木炭 | 四、三〇四、三七九 | 四、一七三、四〇一 | 四、一〇〇、四二一 | 四、一四六、九四一 | 三、〇〇六、五三九 |
| 染物 | 二、五九〇、三八九 | 二、四三五、九八一 | 二、八九六、四二九 | 三、一九四、〇八八 | 二、六八八、六一〇 |
| 蠶種 | 二、五四八、〇四三 | 二、六五〇、八二三 | 二、三三三、九九九 | 二、三二〇、五七六 | 一、八九五、八二一 |
| 薪炭材 | 二、四五六、五六九 | 二、七八四、三七九 | 二、三一三、〇一五 | 一、九四八、五五九 | 一、六一九、八〇七 |
| 蒟蒻芋 | 二、三六八、一五三 | 一、六六六、〇八二 | 一、三七三、五六一 | 八二三、九九九 | 四七五、四一八 |
| 川材 | 二、〇〇六、八五八 | 三、〇一八、一三三 | 二、二三四、七〇七 | 二、三三四、七八五 | 一、四三二、〇二九 |
| 木製品 | 一、九〇〇、八七六 | 一、五六一、九八三 | 一、四七七、二九七 | 一、五七三、四五七 | 七九九、八〇七 |

| 品目 | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 計　諸 | 一,七一七,二三八 | 一,五九二,〇四二 | 一,四三二,五七〇 | 一,八〇六,三〇〇 | 一,九五七,七二五 |
| 麵類 | 一,五三七,八六二 | 一,三六一,四三四 | 一,二六〇,二三三 | 一,五三六,〇二七 | — |
| 蠶絲屑物 | 一,五〇九,三二一 | 一,三一五,三四九 | 一,一三一,九五六 | 九八七,六五三 | 九六二,七七一 |
| 鷄卵 | 一,四三三,八三四 | 一,五一五,三三九 | 一,三七六,九四六 | 一,二四二,九三七 | 一,一一三,三〇五 |
| 青芋 | 一,三三七,四八一 | 一,四三五,六二七 | 一,三六一,二五八 | 一,五九〇,三一五 | 一,二九〇,一四一 |
| 屠肉 | 一,三三五,三九一 | 九九四,三四八 | 九六一,七五三 | 八七七,三一六 | 八七七,三一六 |
| 生蘿蔔 | 一,一五二,三三二 | 一,〇九三,三三五 | 九三三,二〇〇 | 一,四六九,六二八 | 八六三,六八八 |
| 大豆 | 一,〇三四,五八九 | 一,一一六,七六〇 | 一,〇六五,九五五 | 一,三〇八,八三八 | 一,三〇〇,一四七 |
| 石材 | 八四七,六八五 | 八五四,四三二 | 九九三,三九一 | 六七二,一二八 | 二九七,八四一 |
| 漬菜 | 七六〇,四九一 | 七九三,八九七 | 七〇〇,五五一 | 一,〇一三,二九三 | 五三五,四一六 |
| 馬鈴薯 | 七四五,一三六 | 七四九,七八八 | 六四八,四九二 | 七九〇,七二四 | 八二六,一二八 |
| 茄 | 七〇八,四五六 | 六一三,四八八 | 五九七,四四五 | 七九一,七九五 | 六〇八,四二八 |
| 綠肥 | 六四九,六二九 | 六八〇,一八一 | 六一七,五四七 | 五三四,八九三 | 五九九,二九二 |
| 瓦 | 五五一,六四四 | 六一〇,五三八 | 三八四,七〇四 | 三七三,六〇七 | 二六七,二五七 |
| 牛乳 | 五三六,九五九 | — | — | — | — |
| 桑苗 | 五一六,一九八 | — | — | — | — |

## 第二節　一般振興施設

### 第一項　勸業調査會

一、明治十三年の勸業委員制度　本制度は純然たる調査會に非るも、勸業委員頭取は、縣廳及び郡役所の諮問、竝に該郡内各區の事務報告等を掌る點に於て、本項に準ずべきものなるべし。

本制度は明治十三年七月二日の創定（甲第七拾貮號、勸業委員事務章程。）にして、翌十四年六月廿一日の改定（甲第九拾四號、勸業區及勸業委員の制竝に委員事務章程、）明治十五年六月廿八日の一部改定に係るものにして、明治十四年六月の改定制度の要點を摘記すれば、左の如し。

明治十四年改定の要點

一、本縣管内ヲ分ツテ六十一ノ勸業區ヲ設ケ、毎區勸業委員一名ヲ置ク。

一、毎郡役所所管内ノ勸業委員中、各一名ノ委員頭取ヲオク。

一、勸業委員ノ選擧ハ、其勸業區内ノ投票ヲ以テ、老農有志者又ハ各會社頭取等、一家ノ生計ニ差支ナク勸業上ニ義務ヲ盡スベキ者ヨリ擧グルモノトス。頭取ハ各郡内毎區ノ委員、互選投票ヲ以テ之ヲ擧グベシ。

一、勸業委員ハ俸給ヲ與ヘズ。出縣竝區內巡囘ノ時日數ニ應ジテ、日當ヲ支給ス。

一、勸業委員ノ職掌ハ左ノ如シ。

イ、勸業委員ハ、其區內ノ各業ヲ業導振作スルヲ以テ責任トス。

ロ、勸業委員區內巡囘ノ日數ハ、每月五日間ヲ定日トシ、巡囘日誌ヲ作リ、各業ノ利害、物產ノ狀況ヲ概記シ、該業委員頭取ヘ差出シ、委員頭取之ヲ纒括、縣廳ヘ報導スベシ。

ハ、勸業委員頭取ハ縣廳及郡役所ノ諮問、竝該郡內各區ノ事務報告等ヲ掌ルベシ。

ニ、勸業委員ノ專ラ注目掌管スベキ事項ハ、凡左ノ通タルベシ。

一、桑樹其他田圃產物ノ良否ヲ鑑別シ、改良蕃殖方ノ事。

二、種實交換ノ便益ヲ起シ、竝肥料充足法ヲ設クル事。

三、開墾、牧畜、及山林ノ蕃殖方ヲ獎勵シ、其事業ヲ監査スル事。

四、各會社、各工場ノ現業ヲ熟知シ、其勉惰進否ヲ具申スル事。

五、農工器ノ便否ヲ考ヘ、改製勞費ヲ省カシムル事。

六、養蠶・製絲、其他地方著名ノ物產、及舶來代用品ノ增殖ヲ勸獎シ、衰態アルモノハ挽囘ノ法案ヲ立ル事。

七、農商工業ノ景況ヲ報導スル事。

八、各市場・河岸場ノ商況ヲ詳ニシ、其盛衰ヲ報導スル事。
九、力農者及各業有功者ノ履歴ヲ具申スル事。

ホ、勸業委員頭取ハ、年二回（二月九月）縣廳ニ會同シ、縣會ノ諮問スル事件ニ付、意見ヲ陳述シ、及掌務上ノ考案ヲ審議スベシ。
ヘ、勸業委員會ハ一回ノ日數五日間ヲ超ユベカラス。
ト、勸業委員頭取ハ、毎半期其郡區内各業ノ實況報告ヲスル事。

勸業諮問會に諮問したる事項

二、群馬縣勸業諮問會　本會は明治三十一年六月廿三日を以て告示せられたるものにして、農商工業の改良發達に關する重要なる事項につき、本縣知事の諮問に應じ、意見を開陳するを目的とし、蠶絲・染織・普通農事の三部に分ち、委員數各十五名以下とし、該當業者中より知事之を選任す。而して議長には知事之に當る。實際選任委員數四十三名にして、同年十一月十八日・十九日兩日諮問したる事項は、左の如し。

（一）將來縣下ニ於テ奬勵スベキ織物ノ種類。
（二）工業試驗場設置ノ必要如何。
（三）勸業ニ係ル統計ヲ精確ナラシムル方法。

(四)坐繰製絲ヲ器械製絲トナスヲ奬勵スルノ可否。
(五)重要輸出品同業組合法ニヨリ、生絲同業組合ヲ組織セシムルニ當リ、其地區ヲ郡市トナスト、縣全體トナストノ得失如何。
(六)現今縣下ニ於ケル提造生絲ハ、粗製濫造ノ弊アリ。右改善矯正ノ方法如何。
(七)蠶絲檢査法手續中、修正加除スベキ條項如何。
(八)林業ノ奬勵方法如何。
(九)畜産業ノ奬勵方法如何。
(一〇)秋蠶飼育ノ得失如何。
(一一)霜害豫防法ヲ調査スル方法。
(一二)漁業取締規則ヲ發布スルノ可否。

此他委員會ヨリ知事ニ具申シタル事項ハ、左ノ如シ。

(一)農學校設置ヲ知事ニ具申スル件。
(二)本縣農事試驗場ニ土質竝ニ肥料分析兩機具ヲ設ケ、縣下各農會及農會員ノ需メニ應ジテ、肥料分析ノ業ニ從ハシムルコト。

三、群馬縣産業調査會　本會は産業に關する事項を調査攻究するを目的とし、會長一人、委員若干名を以て之を組織し、會長は知事之に當り、委員は學識ある

者、又は産業に從事し經驗ある内より、知事之を囑託す。委員は廳内産業關係官吏十人を指命せり。明治四十二年九月十日、本縣告示第二二八號を以て、本調査會規則を發布せり。本會は會議を開催するに當り、部門を分ちて研究するの必要を認め、調査事項を蠶絲部・農事部・織物部・雜部（交通・運輸・金融）に分ち、各部に特別委員を選定し、先づ各部會に於て、當該事項を協議し、其決定を待ち、之を總會に提出し、確定することゝせり。爾來各部會に於て協議決定したること左の如し。（○印を附せるは其一部若くは全部に亘り施設中に屬せるもの、又は實施方法既に確定したる事項なりとす。）

産業調査會にて決定したる事項

## 農事部

### 普通農事

一、町村農會ノ活動ヲ圖ルコト。
　二箇町村農會ニ一名ノ專任技術者ヲ常設ス。
一、町村是ノ調査。
一、農業經營法ノ調査。

### 林業

○一、私有林野苗木補助ノ件。

○一、公有林野整理ノ件。

畜　産

○一、群馬縣畜産共進會開催ノ件。

一、郡市畜産品評會ヲ開催スル件。

○一、群馬縣大競馬會ヲ春秋二回開催スル件。

一、牧草種子ノ無代配布法ヲ設クル件。

雜　部

一、金融機關ノ現況。

銀行産業組合郵便貯金等ノ資金額。

一、産業上ニ於ケル放資ノ狀況。

一、産業ノ生産力。

右三項ハ十年前五年前竝ニ現在ヲ調査スルコト。

一、國道假定縣道縣費支辨里道ニ於ケル生産調査。

織物ノ部

左ノ各項ニ對シ、桐生・伊勢崎・邑樂・高崎ノ四組合ノ意見ヲ徵シ、之ニ因リ調査研究ヲ重ネ、以テ將來ノ施設方法ヲ定ム。

（一）織物ノ種類　種類ノ選定、將來發達ノ見込アル種類。
（二）原料　原料ノ選擇、買入ノ方法。
（三）撚絲　種類・器械・器具。
（四）染色　染料・藥品ノ選擇、染色ノ方法、機械・器具。
（五）機織　技術・意匠・機械・器具。
（六）整理　整理ノ方法、機械・器具。
（七）工場經營　撚絲・染色・機械整理。
（八）販賣　市場仲買・直接販賣高。
（九）職工徒弟ノ保護奬勵法。
（一〇）賃業者取締。
（一一）染色教育　技術者職工及徒弟普及ノ方法。
（一二）保護取締　官廳團體。
（一三）金融機關　銀行會社。

蠶絲業ノ部

本部ハ三囘部會ヲ開ケリ。各會決定事項左ノ通リ。

第一囘

一蠶絲組合ハ、縣下ヲ通ジテ、約百箇所ヲ設置セシメ、一箇所ニ對シテ、金五十圓以内ヲ補助スルコト。

○一繭質統一ニ就テハ、群馬縣蠶業者同業組合聯合會ヘ、相當ノ補助ヲ爲シ、其完成ヲ期セシムルコト。

一蠶絲ノ貯藏ニ就テハ、訓令又ハ其他ノ方法ヲ以テ、一般ニ實行ヲ奬勵スルコト。

一桑園整理ニ就テハ、改植及秋蠶專用、桑園ノ增殖ニ重キヲ置キ、相當ノ補助費ヲ支出シテ、改良ヲ奬勵スルコト。

第二回

一蠶業資金ノ融通ヲ圖ル方法。

一生繭販賣法ノ改良。

一掃立蛾量ト設備ノ權衡ヲ得セシムル方法。

一蠶種ノ購入及保護ニ關スル設備ヲ完カラシムル方法。

一桑園整理ノ方法。

右各項ヲ詳細ニ調査スルコト。

第三回

○一縣ニ於テ教婦養成ノ方法ヲ講ズルコト。

一縣ニ於テ汽罐檢査員ヲ設クルコト。
一敎婦ヲ常設スル工場ニ對シテハ、敎婦給ノ半額以内ヲ縣ニ於テ補助スルコト。
○一低利資金ノ貸與方ヲ圖ルコト。
○一伊勢賓山丹波郡是其他、參考トナルベキ製絲場ヲ視察スルコト。

（以　上）

四、群馬縣臨時產業調査會　本會は知事の諮問に應じ、本縣の産業振興に關する重要事項を調査審議する機關にして、又前項の事項に就き、知事に建議することを得。知事を會長とし、内務部長及び縣會議長を副會長とし、委員は七十人以内。外に特別委員を置き、其に關係官吏、及び學識經驗ある中より、知事之を任命又は囑託す。（大正十四年五月十六日、告示第百五十七號、本縣選出貴衆兩院議員・縣會議員・實業家等より選任す。）實際に任命囑託したる委員六十八名、特別委員七名とす。本會設置の趣意は、第一回總會席上に於て、牛塚知事の演説に明なり。其一節に曰ふ、

世界ノ經濟戰ハ日ニ月ニ激甚ノ度ヲ加ヘツヽアルコト、國民生活安定ノ鍵鑰ハ、結局國民ノ經濟的基礎ノ確立ニ在ルコトニ想到スル時ニ、速ニ縣下各種ノ産業振興ヲ圖ラザルベカラザルコトハ、全ク議論ノ餘地ナキ所ト信ズ。然レドモ産業振興ノ方途ニ到リテハ、動モスレバ其根本方策ノ確立ヲ缺キ、之ガ政策竝ニ施設ハ、往

々輕々シク一時的ノ決定ヲナシタルモノニ非レバ、徒ニ當面ノ事物ノミヲ考慮シテ、應急的當面策ニ出デタル者多ク、時ト人トニヨリテ、常ニ動搖ヲ免レザルノ弊ハ、國家ト地方團體トノ別ナク屢〻見ル所ニシテ、甚ダ遺憾トスル所ナリ。斯ノ如キ方面ニ於テハ、努メテ一定不動ノ方針ヲ以テ邁進スベキハ、識者ノ常ニ力說スル所ナルガ、昨年縣會ノ意見ハ、卽チ玆ニ意ヲ致シタルモノニシテ、本縣產業ノ根本方針ヲ確立シ、次デ產業ニ關スル本縣施設ノ大綱ヲ示サントスルハ、誠ニ達見ト云フベキナリ。云々。

臨時產業調査會諮問案は左の如し。

一、本縣農業水利改善ニ對スル方策如何。

一、本縣蠶絲業ノ改善發達ヲ圖ルタメ、特ニ緊要ト認ムル方策如何。

一、本縣治水及水源涵養上特ニ重要ト認ムル對策如何。

一、金融機關ノ整備ニ關スル方策。

現代產業組織ノ大動脈ハ、金融機關ニシテ、其整否ハ卽產業ノ振否ヲ支配ス。

一、本縣工業振興上、特ニ緊要ト認メル施設如何。

本縣工業ノ中心ハ染織業ニアリ。

## 第二項　博覽會的施設

### 一　群馬縣主催一府十四縣共進會

各地の產物を蒐集し、之を一館内に陳列し、汎く公衆の觀覽に供し、加之、是等を審査し、其成績を發表して、當業者の勸獎に資する方法は所謂博覽會・共進會・品評會等にして、產業の改良發達を圖ると同時に、一種の廣告機關たり。我政府は明治十年八月下旬より、十一月下旬まで、東京上野公園に第一回内國勸業博覽會を開設し、模範を示されたるが、爾來各地・各府縣、或は獨立して、或は聯合して開催し、隨時其効果を收めたり。本縣當局は夙に其効果大なるを領得し、機會ある毎に之に加入したるは、別表の示す所にして、明治十五年に山田郡桐生町に、七縣聯合共進會を開催したることあり。明治三十四年、再び之が主催地たらんとせしが、故ありて新潟に決し、明治三十九年の山梨縣明治四十一年の長野縣を經て、明治四十三年を以て開催することに決せり。其聯合府縣數、一府十四縣にして、本州中部以東の關東北全部を包括せり。（但し秋田縣を除く。）其聯合地區の廣大なるだけ、其効

果も亦頗る大に、本縣產業の改良進步の上に、確に一新紀元を劃したりと云ふべし。其概要左の如し。

一、聯合諸府縣名。東京・神奈川・新潟・埼玉・長野・千葉・茨城・栃木・山梨・福島・宮城・山形・岩手・青森・群馬。

二、會場。前橋市。

第一會場(淸王寺町。)本館敷地一萬九千坪。

第二會場(連雀町外入會)。參考館敷地、七百六十七坪、四九。

第三會場(紅雲町)。馬匹共進會場、竝畜產陳列館敷地、七千坪。

三、會期。自明治四十三年九月十七日、至同年十一月十五日、六十日間。

四、出品數。

| (部門) | (業種) | (品目數) | (出品總數) | | (本縣出品數) | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | (點數) | (人員) | (點數) | (人員) |
| 第一部 | 農業 | 一四 | 一九、〇八五 | 一七、四六九 | 二、四八八 | 二、三七四 |
| 第二部 | 蠶絲業 | 七 | 一四、七一八 | 一二、九二一 | 三、四六四 | 三、一三八 |
| 第三部 | 林業 | 七 | 一、五〇八 | 九八九 | 八一 | 五八 |
| 第四部 | 鑛業 | 六 | 一七七 | 九五 | 二九 | 一六 |
| 第五部 | 水產業 | 四 | 一、一六六 | 一、七四八 | 三五五 | 三〇 |

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 第六部 | 染織工業 | 九 | 一四、一四七 | 四、三〇〇 | 二、九二四 | 八二五 |
| 第七部 | 雜工業 | 二〇 | 一五、九一八 | 五、〇五七 | 七七一 | 二七七 |
| 第八部 | 畜產業 | 四 | 三三九 | 三〇四 | 一一五 | 一〇八 |
| 第九部 | 特許品 | 三 | 二、三一二 | 四五九 | 五九 | 四一 |
| 第十部 | 參考品 | | 一、三七〇 | 三〇一 | 二八五 | 九九 |
| 合計 | | 七四 | 七一、七四〇 | 四三、六四二 | 一〇、二四六 | 六、九三七 |

五、受賞者數

| | （一等） | （二等） | （三等） | （四等） | （合計） |
|---|---|---|---|---|---|
| 全體 | 二五五 | 一、〇〇四 | 二、〇九五 | 六、七三六 | 一〇、〇九〇 |
| 本縣分 | 四二 | 一七八 | 三六七 | 一、一九八 | 一、七八五 |

六、功勞者及追賞者。

本會ニ於テ功勞ヲ表彰セラレタル者三十一名、追賞者三名ニシテ、內本縣ニ屬スル者ハ、功勞者・追賞者各〻一名ナリ。

功勞者　山田郡廣澤村　　飯塚春太郎

追賞者　勢多郡植野村　　故角田喜右作

七、來觀人員。

皇族御台臨　閑院宮殿下　伏見宮殿下。

總員百十二萬二千九百五十一人。一日平均一萬八千八百八十二人。

八、經費。

金二十三萬三千八百三圓五十八錢　主催本縣分

金一萬六千三十二圓四十二錢　府縣聯合馬匹共進會費

## 二　本縣加入府縣聯合共進會

| （回次） | （位置） | （開會年次） | （出陳品目） | （聯合府縣數） | （主催縣） |
|---|---|---|---|---|---|
| 第一回 | 八王子町 | 明治十四年 | 繭・織物・生絲 | 四縣聯合 | 神奈川縣 |
| 第二回 | 桐生町 | 明治十五年 | 同上 | 七縣聯合 | 群馬縣 |
| 第三回 | 浦和町 | 明治十六年 | 米・麥・大豆・菜種・綿・茶 | 一府六縣 | 埼玉縣 |
| 第四回 | 千葉町 | 明治十八年 | 米・麥・煙草・製絲・菜種 | 同上 | 千葉縣 |
| 第五回 | 八王子町 | 明治二十年 | 繭・生絲・織物 | 一府九縣 | 神奈川縣 |
| 第六回 | 水戸町 | 明治二十一年 | 米・麥・實綿・茶・煙草・織物 | 一府六縣 | 茨城縣 |
| 第七回 | 宇都宮市 | 明治二十六年 | 米・麥・麻・煙草・製茶・繭・生絲・織物 | 一府六縣 | 栃木縣 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 第八回 | 足利町 | 明治三十年 | 繭・生絲・織物 | 同上 | 同上 |
| 第九回 | 八王子町 | 明治三十二年 | 米・麥・豆・煙草・藍・茶・繭・眞綿・織物漆器・陶磁器 | 一府九縣 | 東京府 |
| 第十回 | 新潟市 | 明治三十四年 | 米・麥・豆・菜・實綿・麻・藍・茶・煙草・酒・醤油・生絲・織物・漆器・陶磁器・金屬器・木竹製品 | 一府十一縣 | 新潟縣 |
| 第十一回 | 甲府市 | 明治三十九年 | 四十二種(品目名略) | | 山梨縣 |
| 第十二回 | 長野市 | 明治四十一年 | 六十五種(同前) | 一府十縣 | 長野縣 |
| 第十三回 | 前橋市 | 明治四十三年 | 七十四種(同前) | 一府十四縣 | 群馬縣 |

## 三　內國勸業博覽會

| (回次) | (場所) | (會期) |
|---|---|---|
| 第一回 | 東京市上野公園 | 自明治十年八月二十一日<br>至同　十一月三十日 |
| 第二回 | 同 | 自明治十四年三月一日<br>至同　六月三十日 |
| 第三回 | 同 | 自明治二十三年四月一日<br>至同　七月三十一日 |
| 第四回 | 京都市 | 自明治二十八年四月一日<br>至同　七月三十一日 |
| 第五回 | 大阪市 | 自明治三十六年三月一日<br>至同　七月三十一日 |
| 平和記念東京博覽會 | 東京市 | 自大正十一年三月十日<br>至同　七月三十一日 |

## 四　群馬縣商品陳列所

本所はもと物産陳列館と稱し、明治三十年の通常縣會の議決を經て、同三十一年九月二十日より開場せり。其目的とする所、本縣の物産及び外國輸入品、若くは他府縣の製作品を蒐集陳列し、本縣物産の改良上進を計らんとするにあり。建物は師範學校附屬小學校跡、卽ち今の本縣農會事務所を假用したるが、明治四十三年、一府十四縣共進會の第二會場たりし參考館を、閉會後本館に充て、大正二年規則の改正あり。此年度より作業資金を置き、以て陳列品の新陳代謝を圓滑ならしむると共に、縣立圖案調製所を本所に合併し、專ら各種圖案の改良指導に努め、産業の進歩を圖れり。翌大正六年、出品協會の成立あり。是等機關の戮力協賛に依り、諸般の設備も亦改良せられ、事業擴大せり。大正八年、圖案調製所の分離あり。次いで大正九年四月二十三日、農商務省令第四號、道府縣市立商品陳列所規則に準據し、名稱を群馬縣商品陳列所と改め、相踵いで規則の改廢を行ひ、一は以て縣下商業の發展に資し、一は以て縣下の生産改良に資することゝせり。大正十一年四月、再び圖案部を設置し、更に翌十二年度より、作業資金の收支を特

別會計とし、亟いで設立認可を受け、今日に至れり。(大正十一年度、群馬縣商品陳列所年報)本館は設立以來、常に商品を陳列し、或は縣下生産品の展覽會を開き、其機能を發揮したりしが、本館が主催となり、縣下各織物同業組合を參加せしめ、織物巡回展覽會を東北地方に開き、本縣織物の販路を擴張すると共に、其地方の嗜好をも調査し、以て本縣織物界の改良發達を圖りたることありき。時は明治四十三年、本縣主催、一府十四縣聯合共進會が開かれ、本縣の織物界が東北人に紹介せられたる機會に乘じ、翌四十四年九月二十九日より、十月十五日まで、秋田・弘前・青森・盛岡・仙臺・福島の六市に於て、各二日間宛開催せり。本館は又前同樣の目的を以て、大正二年五月三日より、六月四日に至る六日間、栃木縣足尾町に於て織物展覽會を開けり。

## 第三項　其他一般振興施設

### 一　勸業資金補助又は貸與

産業奬勵の爲め、勸業銀行・興業銀行・農工銀行の設立あり。低利に資金を融通

し、府縣亦補助金を支出することは、近年益〻隆盛を見るに至りしが、現に本縣にては、明治四十年二月十五日、縣令第十三號を以て、勸業費補助規程を制定し、農工商に關する事業中、奬勵を加ふべき必要ありと認むるものに對しては、縣費豫算の範圍內に於て、其事業に支出すべき費用の半額以內を補助することあるべしと規定し、以て農工商の發達を奬勵し居れるが、此精神は明治の初年より夙に實行せられて、一方には失業士族を救濟し、他方には勸業の發達を計劃したるは、特に注意すべきこととなりとす。當時補助せられ又は貸與せられたる諸會社全部が、社業を振興し、産業發達上に貢獻したりとは云ひ得べからざらんも、是等によりて今日勃興せる産業の基礎建設に、相當の効果ありしは、想像するに難からざるなり。

甲　農商務省より貸與金（明治十五年、管下士族就産勸業資本金補助として）

| （金額） | （事業） | （貸與ヲ受ケタル社名） |
| --- | --- | --- |
| 九、〇〇〇圓 | 製絲事業 | （前橋藩士族團）桃井社・淸益社・交水社・明練社・高開社・衆潤社・共榮社<br>（伊勢崎藩士族團）勸奬組合<br>（小幡藩士族團）小幡組（七日市藩士族團）七日市組<br>（沼田藩士族團）沼田組（舘林藩士族團）舘林製絲會社 |

| | | |
|---|---|---|
| 七〇〇 | 養蠶事業 | （安中藩士族團）安中養蠶社 |
| 一、〇〇〇 | 紡績事業 | （前橋藩士族團）蘭綿紡績事業 |
| 五〇〇 | 肥料製造事業 | （前橋藩士族團）牛馬骨粉肥料製造弘義分社 |
| 二、四〇〇 | 器具製造事業 | （高崎藩士族團）日常器具製造勸工社 |
| 五〇〇 | 機織事業 | （館林藩士族團）機產社 |
| 九〇〇 | 開墾事業 | （館林藩士族團）吾妻郡應桑村移住開墾社 |
| （計）一五、〇〇〇 | | |

乙　內務省より貸下金

一、金參萬圓精絲事業鼓舞獎勵金として拜借（明治十一年。）
水沼精絲所、精絲研業社（南勢多郡關根村）精絲原社ヘ各一萬圓づつ分割貸與五箇年賦。

二、金參千圓、牧畜資金として拜借。
赤城牧社　赤城產馬會社　吾妻畜產會社　根利會社　利根郡產馬家一人、年六朱の利子にて五箇年賦。

丙　地方税より貸與金

| （金額） | （事業） | （貸與ヲ受ケタル社名及個人） | （備考） |
|---|---|---|---|
| 四四六、〇八 | 牧畜事業 | 吾妻畜産會社、赤城産馬會社、利根郡二人 | 年六朱五箇年賦 |
| 五五〇〇、〇〇 | 製絲事業 | 上毛繭絲改良會社 | 年五朱一時貸與 |
| 三五〇〇、〇〇 | 同 | 第一生産會社 | 年八朱一時貸與 |
| 一五〇〇、〇〇 | 同 | 精絲交水社 | 同上 |
| 一五〇〇、〇〇 | 織物事業 | 縮緬機業會社（山田郡安樂土村） | 年五朱三箇年賦 |
| 一〇〇〇、〇〇 | 製絲事業 | 製絲勸獎組合（佐位郡伊勢崎町） | 年八朱 |
| 一〇〇〇、〇〇 | 同 | 製絲共研會社（佐位郡伊勢崎町） | 年八朱三箇年賦 |
| 三〇〇、〇〇 | 日用器具製造事業 | 勸工社（西群馬郡高崎驛） | 年八朱一時貸與 |

丁　本縣勸業要途依託金

右は明治五年度畑租ノ増石代（豫算外收入歟）を本縣に依托せられたるもの。

| | | |
|---|---|---|
| 九三二三、九八二 | 精絲事業 | 水沼製絲所、精絲研業社（南勢多郡水沼村）共研會社（佐位郡伊勢崎町） |

產業組合發達沿革

## 二　產業組合

產業組合の目的とする所、組合員の產業、其經濟の發達を企圖するにあれば、亦一種の產業振興施設なり。明治三十三年三月、法律第三十四號を以て、政府が產業組合法を公布するや、明治三十四年七月、本縣に二組合の設立を嚆矢とし、同年內九組合の設立あり。同三十八年には、五十五組合を算するに至れり。當時日露戰役の終局に際し、地方の產業を振興し、一面奢侈の風を防遏せんには、產業組合を普及するを最善の策となし、極力之が設立の獎勵に努めたるを以て、翌三十九年末には、百組合に倍加するに至れり。因つて此機を逸せず、益〻組合思想を圖り、兼ねて組合當業者をして、經營知識を養成せんが爲め、縣は明治四十年以降、縣費より產業組合中央會群馬縣支會（明治三十八年設置）に對し、相當の補助を與へ、以て指導獎勵の任に當らしめたるに、其効果あるを認め、同四十二年、更に縣費を以て、組合巡回教師を設置し、實地に就き指導啓發をなさしめ、或は講習講話を行はしむる等、專ら組合の發達に留意せしめたり。明治四十二年、產業組合法の改正せらるヽに及び、從來生絲の共同販賣機關たりし碓氷・甘樂・下仁田の三社、所謂上州南三

大正十三年現在の組合總數

社が、同法により聯合會を組織するや所屬組合數頓に增加し、二百二十餘の多きに上り、爾後新設の組合を合して、同四十四年末には、四百四十三組合と三聯合會とを包有するに至れり。此の如くにして産業組合の設置、稍〻縣下に普及し、大正四年十一月、縣を區域とする群馬縣信用組合聯合會の設立を見、組合事業に一段の進歩を示すに至れり。現在（大正十三年六月）の組合總數は三百九十三にして、其中信用組合五十三、販賣組合一、購買組合八、利用組合四、販賣購買利用組合一、信用販賣組合四十八、信用購買利用組合十二、信用販賣購買利用組合百三十四なり。兼營組合にして、全然缺如せる種類のものは、販賣購買のみの組合と、購買利用のみの組合と、及び信用利用のみの組合との三種なり。以上を總合して信用事業を行ふ數は三百七十八にして、縣下總組合數中、信用事業を行はざるものは、僅に十五組合にすぎず。販賣事業を行ふもの之につぎ、總數二百六十七、購買事業を行ふもの二百三十九にして、略〻之と雁行し利用事業を行ふものは、最少くして其數百九十九なり。

聯合會

右の外聯合會八あり。信用組合一、購買組合三、信用販賣組合三、購買販賣組合一なり。而して最近の傾向を見るに、信用組合・信用購買利用組合・信用販賣購買

利用組合等、年々增加を示せるも、信用販賣組合・信用販賣利用組合・信用販賣購買組合等は漸次減少の勢を示せり。是等組合の組織を見るに、有限責任三百七十二にして、總數の九割四分强、無限責任は二十二、保證責任は僅に一あるのみ。而も無限責任は年々減少を示し、有限責任のみ增加を示せり。

加入組合員數及其職業別

全縣下市町村數二〇八の中、未設置町村數は二十三にして、組合所在市町村の總市町村に對する割合は約八八四パーセントなりとす。加入組合員數五萬七百三十九人、出資口數十八萬七千四百四拾九口なり。是等組合員の職業別を見れば、左の如し。

| （職業） | （全員總數） | （割合） |
|---|---|---|
| 農業 | 四三、一九八人 | 八五、一四 |
| 工業 | 二、一九一 | 四、三六 |
| 林業 | 二三八 | 〇、〇五 |
| 雜業 | 一、七七二 | 三、四九 |

利用物の種類は製絲機械・乾燥室・精米機・蒟蒻製粉裝置・脫穀機・籾摺機・精粉機とす。

## 三　實業教育の振興

産業の發達は、畢竟實業教育の振興に據らざれば、萬全を期し難し。故を以て政府は明治二十七年、實業教育費國庫補助法案を議會に提出し、其協贊を經て、同年六月十一日を以て公布したり。是に於て山田郡桐生町は明治二十九年四月、徒弟學校規程に依り、町立桐生織物學校を、佐波郡伊勢崎町伊勢崎町商工業組合（後の伊勢崎織物同業組合）は、同組合立伊勢崎染織學校を設け、縣下實業教育界に先鞭を付けたり。是に於て吾妻郡は明治三十二年四月、中之條町に郡立農學校を起し、翌三十四年、高山社は、多野郡藤岡町に私立甲種高山社蠶業學校を立て、前三者は縣立に移管せられ、益〻規模を擴張せられ、中等實業教育の振興漸く緒に就けり。斯くて郡市町村の自治團體に於ても、土地の情況に應じて、之が設置を圖るもの多く、縣も亦其間設立する所あり。大正十四年四月の調にては、工業學校二、農業學校縣立六、私立一、商業學校三を數へ、大正五年より桐生市に官立桐生高等工業學校の設置を見るに至れり。

是等の中等程度以上の實業諸學校と相俟ちて、實業教育の振興に與つて力あ

るものは明治三十五年一月公布の文部省實業補習學校規程に基きて設置せられたる實業補習學校なり。此種學校設立の目的の一は、實業教育の振興に存するを以て、其設置は軈て實業教育の普及を證明するものなり。大正十四年四月の調査に據れば、縣下二百八町村中之を設置せざるものは、藤岡・伊勢崎の二箇町のみ。縣は此實業補習學校の完成を圖るため、大正七年四月より、群馬縣師範學校内に農業講習科を附設し、農業補習學校教員の教員養成所とし、大正十一年度より新に實業教育主事を設置し、專ら實業補習教育の發達指導に當らしめたれば、實業教育愈振興するに至れり（第八章實業教育參照）。

## 第三節　產業類別勸奬施設と其發達

### 第一項　普通農事

#### 一　總說

普通農事は牧畜業・養蠶業・森林業と共に、農業を組織するものにして、一に主穀農業、或は耕種農業とも稱せられ、農業中の主業たるべきものなり。元來本邦人の主食物は、此耕種農業の生產に屬するを以て、此種の農業が、人口の增加に伴ひ、自然發達の域に進むべきは理の當然なり。然り而して本縣は、地形風土の關係上、德川時代より養蠶・生絲・織物を殖產の生命とし、維新以後も海外輸出の好況を享け、專ら此方面を勸奬し、其發達に焦心したる爲めに、此主穀農業は稍〻忽諸に附せられたる憾なしとせず。然れども多年の經驗に徵すれば、養蠶・生絲等の如きは、經濟界の變動を受け易き爲めに、主生業として、聊か安定を缺くことを免れず。加之、輓近世界の大勢は、國策上食糧自給を必要とするに至り、政府は率先して此種農業の興隆に留意し、本縣亦本縣の實狀に鑑み、之が振興に努め、更に副業の奬

勵にも及ぼしたる結果、逐年發達の道程に進めり。明治の初年に溯り、其之が道程を考査するに、明治十二年頃、勸農委員なるもの設けられたることありしが、之が廢止後、東毛平坦部地方には、米作改良に熱心するものあり。次第に米作改良の氣運を馴致するに至りしが、本縣が進んで之が研究機關を設け、指導奬勵を行ひたるは、明治二十七年七月、政府が府縣農事試驗場規定及び農事講習所規程を定めて、之を公布したる後なりしが如し。即ち本縣は明治二十八年四月、群馬縣農事試驗場を設置し、同二十九年、前橋測候所を建設せり。明治二十九年、郡市農會施設成りて、縣農會を設置し、各級農會との連絡統一を圖れり。越えて同三十二年、農會法發布せられ、翌年四月一日、之が實施を見、次いで帝國農會設立せらるるに至り、爰に系統的農會の組織成り、農事の調査研究指導の機關具備するに至れり。而して明治三十二年四月、吾妻郡に郡立農學校の設立あり。同三十五年、實業補習學校規程の發布となりて、農業教育機關も亦起り、是等の農業振興機關は、互に連繫を保ち、指導奬勵の任に當れり。

是等施設の結果、實績次第に擧がり、普通農事の改良上、數段の進歩を見たりしが、大正三年勃發したる歐洲の大動亂は、食糧増收の機運を促進せしかば、本縣は

此時勢の要求に應せんが爲め、種々施設する所ありき。左に大正三年以後、此普通農事の振興に關する縣の法令を擧げて、其奬勵施設を知るの一助とせん。

| | |
|---|---|
| 水稻原種田設置補助規程 | 大正三年 |
| 郡技術員費補助規程 | 同上 |
| 實業教育奬勵規程 | 同四年 |
| 水稻採種奬勵規程 | 同五年 |
| 耕地整理奬勵規則 | 同六年 |
| 米麥採種圃奬勵規程 | 同上 |
| 小作俵米品評會奬勵規程 | 同上 |
| 農業倉庫奬勵規程 | 同七年 |
| 農業講習所規程 | 同上 |
| 米穀檢査規則 | 同上 |
| 産米改良ニ關スル件(告諭) | 同上 |
| 食糧農産物增殖奬勵規程 | 同九年 |
| 實業教育奬勵規程 | 同上 |
| 農會令施行細則 | 同上 |

| | | |
|---|---|---|
| 自給肥料獎勵規程 | 同 | 十年 |
| 開墾地移住獎勵規程 | 同 | 上 |
| 改良農具獎勵規程 | 同 | 十一年 |
| 農事組合獎勵規程 | 同 | 上 |
| 農會費補助規程 | 同 | 十二年 |
| 食糧農產物獎勵規程 | 同 | 上 |
| 群馬縣自作農創設資金貸與規程 | 同 | 十三年 |
| 主要食糧農產物獎勵規程 | 同 | 十四年 |
| 麥檢查規則 | 同 | 上 |

以上の諸法規は、科學の進步に伴ひたる農業の合理的經營法を基礎とし、本縣の實情に徵して發布したるものなり。縣は之に因つて農家經濟の安定を圖り、農村振興に資し、健全なる社會の建設と、國家の獨立を維持せんとするにあり。以下施設經營の主なるものにつき、項を設けて略說すべし。

農事試驗場の業務規定

## 二　群馬縣農事試驗場

本場は明治二十八年四月、農產の改良增殖を圖るを目的として設置せられたるものにして、設置の際の業務規定は左の如し。

(一)本縣重要ノ普通作物竝ニ特用作物ニ關スル諸種ノ試驗。
(二)舊慣農法ノ調査。
(三)耕地ノ改良。
(四)農產物製造ノ方法。
(五)植物病虫害豫防驅除ニ係ル研究調査。
(六)農業上ノ質問應答。
(七)種苗ノ配布。
(八)巡回講話。
(九)見習生ノ養成
(一〇)試驗報告ノ刊行。

後此規定は縣令第十六號(明治四十五年三月)にて改正せり。

（一）農產ノ改良增殖ニ關シ、試驗ヲナスコト。
（二）農事ニ關スル模範ヲ示スコト。
（三）農事ニ關スル調査設計、及督勵ヲナスコト。
（四）農事ニ關スル講話・講習・傳習・練習、及質問應答ヲナスコト。
（五）試驗成蹟ノ普及ヲ圖ルコト
（六）農用器具器械ノ貸與、又ハ配布ヲナスコト。
（七）種苗・種禽・蠶種・農產物等ノ配布、又ハ種畜ノ種付ヲナスコト。
（八）土壤・種苗・肥料・農用器具器械、及農產物ノ鑑定、又ハ分析ヲナスコト。
（九）試驗ノ成蹟、及業務ノ功程ニ關スル報告ノ刊行。
（以上）

位置及沿革

本場は之を前橋市岩神に、分場を碓氷郡磯部村・新田郡鳥之郷村の二箇所に置く。（明治二十八年四月一日、縣令第廿號、群馬縣農事試驗場規則。）廿九年に至り、本場一箇所に集中經營し、同三十一年前橋市下河原に桑園を設け、桑樹に關する試驗を開始し、同三十四年現地に移轉せり。同三十六年、養蠶室を新築して、蠶業に關する試驗を開始し、同三十八年、畜產部を設けて、種禽・種豚の試驗、竝に育成配布をなし、又野鼠チブス菌の培養を始め、一般に無償配布を行へり。同年更に各郡に委託試驗を開始し、同四十年、

水田を擴張し、採種田及び農商務省依托の稻田養鯉試驗を開始し、又同省の指定に依り、桑園二町四段步を增設す。四十一年、本場隣接地に果樹園三段三畝步を擴張せしめ明治四十五年に至り、原蠶種製造所敷地に當てたるを以て、下川原（現位置）果樹園を擴張し、同時に蠶業に關する試驗は、原蠶種製造業に於て行ふことゝせり。大正四年に於て、農商務省指定桑樹試驗の完了と共に、本試驗を廢止し、同五年に至り、米麥採種圃一町步を新設して、原種の配布をなし、尙同年より鷄豚舍の增築を行ひ、育雛・種豚蕃殖、竝に果樹苗木の養成を擴張して、繼續施行すると共に、六年度に於て、更に施肥標準調査を開始せり。大正八年度、陸稻原種圃三段步を增設し、大正九年度、群馬縣種畜場に養禽・養豚の試驗、及び畜產事業に要する土地建築物を讓り、同時に雜穀・甘藷・馬鈴薯の原種圃一町步を設置し、以て甘藷・馬鈴薯の原種配布を行ふ。大正十三年度、農具室を新設し、農具の改良研究調査を行へり。（群馬縣農事試驗場資料。）

## 三　群馬縣農會

農會の創立と其沿革

明治二十七年本邦農業界の元老船津傳次平・前田喜右作氏等主唱者となり、廣く縣下に本會設立の急務なるを傳ふ。越えて同二十八年に至り、農會設立準則を發布し、郡市町村農會の設立を促したる結果、翌二十九年七月下旬を以て、一市十一郡及び縣下大多數の町村農會の設立を見たり。依つて同年八月一日愈、此處に多年の懸案成りて、一市十一郡を以て、本會を組織するに至り、時の知事古莊嘉門會長に就任す。明治三十三年五月十六日、農會令に依り、本會の繼續を認可せらる。明治四十三年、帝國農會の設立に加はり、大正十三年には、農會法改正せられ、強制徴收の便を得、愈、其基礎を固むるに至る。創設當初の事業は、左の如し。

（一）農會に關する講話會・共進會・品評會・種苗交換會の開設。

（二）農事講習。

（三）農事調査。

（四）耕地整理、動植物病虫害の防除、及霜害豫防に關する實地指導等。

是れ當時に於ける本縣農業界は未だ所謂黎明期を脫せざるの時代なるを以て、

勢本會自ら農業各般の實地指導に努むると同時に、力を農業者の知識開發に致せる所以なり。當時事務所は縣廳內に置きたるが、明治三十五年、前橋市曲輪町乙六十九番地に新築して、之に移り、更に明治四十四年一月、縣有元物產陳列館と無償交換（現在の建物）して之に移れり。開設以來の事蹟は、明治三十六年に至る迄は、技術員の常置、耕地整理、蠶病消毒、繭乾燥法、苗木配付、農事視察、農產物品評會等、農業全般に亘りて調査指導をなし、更に農事試驗場內に分析所設置、縣立農業學校設置、殖林事業獎勵設置の件を地方長官に建議し、皆採用せらる。而して是等の活動は縣下農業改善に貢獻し、本縣農業發展の基礎を築きたり。

其後各級農會の發展と共に、直接農家に對する事業は、漸次農家に接する機會多き下級農會をして、之が衝に當らしむるの方針を採るに至り、大正九年よりは、年々本會に於て、町村農會の技術者を、十五名乃至二十名宛を養成しつゝあり。今や縣下町村農會の技術者の過半は、本會の養成に懸り、町村農會今日の活動は、實に之に負ふ所僅少にあらざるなり。又大正八九年以來、各地に小作爭議頻發し、農村疲弊の聲顯著なるに及びては、本會は率先して農村問題指導委員會を設け、公正なる小作料の標準を示して、農業紛議の調停又は仲裁に資する所あり。

同時に農家經濟に關する各種の調査書を刊行し、農業經營の合理化を高調し、農產物販賣斡旋に力を致し、農家の有終の美を收めしむる等、主として農政經濟方面に其使命を開拓しつゝあり。（群馬縣農會調査。）

## 四　前橋測候所

測候所の創立と其沿革

氣象を觀測して、農業經營に利用し、農事の改良上進を圖ることは、科學の進步せる現代に於ては、當然なさゞるべからざる施設なり。本縣に於て前橋測候所の設置されたるは、明治二十九年にして、（明治二九、四、一六、告示第六七號、）同年管內二十五箇所に觀測所を設置し、調査材料を蒐集して、一般產業上に應用すべき氣象の研究に從事せり。桑の凍害豫防試驗に關する觀測は、縣立農事試驗場及び縣農會と連繫を保ちて、明治三十二年より開始せり。養蠶期に於ける地方天氣豫報は他に率先して之を開始し、其範を示したるものと云ふべし。結霜豫報と共に、當業者に便益を與へしこと實に多大なりとす。

## 五　耕地の改良及擴張

農業は耕地を一要素として成立するものなれば、農業の發達を圖るもの、耕地の改良及び擴張に思を致さざるべからず。耕地の改良には、區劃整理、耕地の交換分合、用排水の改良、耕地の擴張には林野の開價等ありて、區劃整理は耕地面積を增加し兼ねて勞力の經濟を圖り、耕地の交換分合は、之によりて經營の便を圖ること、用排水改良は用排水を便利にして、耕地の利用價値を增進せしむるものにして、是等は所謂耕地整理法の施行により、其目的の大部分は達せらるゝものなり。本縣に於ては明治六七年頃より、開墾事業を奬勵する所あり。吾妻郡應桑村字南木山に段別凡五十町歩、明治六年頃着手、碓氷郡上增田村地內字箕輪久保に四町八畝二歩、明治八年より着手、吾妻郡應桑村字御所平地內に大凡五町歩、明治十六年四月より着手、吾妻郡原町地內字藥師嶽四町六反五畝歩、明治十六年より開墾に着手し、熟地となし、用排水の改良に水利組合を設けしめ、指導勸奬する所ありしが、明治三十三年耕地整理法發布せらるゝに及び、爰に始めて根本的に耕地の改良擴張に着手せり。

明治三十四年、耕地整理規則を設け、設計費及び工事費を補助することゝし、縣農會亦設計竝に工事の指導監督の爲め、技術員をおき、專ら勸誘奬勵に努めたり。明治三十八年の凶歉に當りては、窮民救濟事業として、縣費を以て多數技術員を採用し耕地整理の測量設計に從事せしめたり。同三十九年十一月補助標準を改め、特殊の施設に對しては、補助率を增し、同四十一年三月、更に之を改め、又同年四月、農商務省令を以て、耕地整理に關する奬勵規則の發布ありたるを以て、補助規則を廢し、耕地整理奬勵規則を設け、補助金は省令の項目に則りて交付するとに更め、且技術員を置き、設計竝に工事の指導監督をなすとゝし、縣農會は耕地整理技術員を廢し、新に耕地整理指導委員を設け、斯業の經驗家を以て之に充て、施行事務の指導竝に勸誘の任に當るとに改めたり。又明治三十九年十一月以來、基本調査に着手し、將來の施設方針を確立して、基本となし、農村に耕地整理の概念を鼓吹して、事業の進捗を圖れり。而して本縣の耕地整理は、專ら道路網を改め、交通を便にし、用要水路を適當に配置して、灌漑排水の設備を完全にし、從來の一毛作地を二毛作地に改むるを主とし、有効地積の增加區劃を改め、管理の便利勞力の減少を之に伴ふ効果とせり。左に明治三十五年以降に於ける事業調を

記す。但し此表外に明治三十四年分に屬する地區數三、面積五十七町歩あり。

## 耕地整理

| | 整理施行又ハ組合設立認可 | | | (換地處分認可) | | | (事業完了) | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | (地區又ハ組合數) | (面積) 整理前 町 | (面積) 整理後 町 | (地區又ハ組合數) | (面積) 整理前 町 | (面積) 整理後 町 | (地區又ハ組合數) | (面積) 整理前 町 | (面積) 整理後 町 |
| 大正十三年 | 五 | 一〇五、六七九 | 一〇九、一九〇五 | 三 | 一一三、八〇一八 | 一一六、九〇〇三 | 一 | 一三、八八一三 | 一四、七八〇四 |
| 同十二年 | 六 | 一三一六、〇九〇三 | 一、三五七、七八一四 | 九 | 一、一〇二、二四一八 | 一、一六一、七六〇〇 | 一 | 五、九九〇四 | 六、一一一三 |
| 同十一年 | 四 | 六六、一〇二一 | 六九、四六一〇 | 五 | 六一九、六九一九 | 六三九、四七〇四 | 一 | 一一、四四一三 | 一一、五七二七 |
| 同十年 | 五 | 五四七、九八一三 | 五六六、三四三八 | 二 | 五三五、三九二七 | 五四三、一七一四 | 三 | 八八、三九一六 | 八九、六七〇〇 |
| 同九年 | 三 | 一一九、四七二一 | 一三六、八一一三 | 二 | 一、三〇〇、四八〇九 | 一、三七三、六九〇一 | 四 | 一八六、七〇二六 | 一九四、二九二八 |
| 同八年 | 三 | 一九八、五三一四 | 二〇五、一七二〇 | 二 | 三六、九五〇六 | 三八、一四一一 | 七 | 五六四、五三一二 | 五八〇、五二一八 |
| 同七年 | 六 | 四二六、九七〇七 | 四五七、三一〇七 | 四 | 一九二、六四一三 | 一九七、七三三三 | 七 | 二〇七、九六二三 | 二一七、三七〇三 |
| 同六年 | 五 | 二八二、八三三三 | 二九二、八〇二一 | 一 | 一三三、七四〇五 | 一三七、六〇一九 | 一三 | 二七五、一三三四 | 二八八、〇〇三五 |
| 同五年 | 三 | 二七、四一三五 | 二八、八四一四 | 四 | 一九三、〇八二九 | 二〇〇、七三一〇 | 一四 | 一六七、〇三一三 | 一七六、一七〇七 |
| 同四年 | 六 | 六九四、九七〇六 | 七三七、一三一三 | 五 | 二九七、六九〇七 | 三〇九、〇八二七 | 七 | 一四七、七七〇八 | 一五〇、九九二七 |
| 同三年 | 三 | 八一、一四一六 | 八二、四七一八 | 八 | 四一八、〇三二一 | 四三八、三一〇五 | 一 | 三七、一六〇〇 | 三七、四三二〇 |
| 同二年 | 七 | 五〇三、四五〇九 | 五三三、五八〇三 | 一五 | 五四六、六一一三 | 五六六、八七二〇 | — | — | — |

| 年次 | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 大正元年 | 九 | 一、六二八、四五一六 | 一、七二四、七七九 | 四 | 一七二、八五二六 | 一七八、九九三 | — | — | — |
| 明治四十四年 | 一七 | 八〇六、三二七 | 八二五、一〇〇二 | 六 | 一六一、六〇〇六 | 一六七、二四〇六 | — | — | — |
| 同　四十三年 | 六 | 四六四、六五二六 | 四七四、三七三 | 二 | 五九、一六二 | 六〇、四二一七 | — | — | — |
| 同　四十二年 | 一四 | 一、〇七六、九八〇八 | 一、一三三、二四二〇 | 三 | 七九、二〇二四 | 八一、三三二八 | 六 | 六四、〇八一六 | 七〇、九二三三 |
| 同　四十一年 | 二 | 七三、一〇二六 | 七九、九六六 | 四七 | 一、四〇四、七一三九 | 一、四六九、〇九〇二 | 六 | 四九、三五〇二 | 五三、七八〇七 |
| 同　四十年 | 一〇 | 一八三、三八三 | 一九〇、九七〇三 | 一六 | 六三九、〇六二 | 六四九、四七三〇 | — | — | — |
| 同　三十九年 | 五七 | 一、八八五、八九〇三 | 一、九六〇、三六八一九 | 九 | 三八五、八四〇五 | 三九九、六三二〇 | 二 | 二〇、六五三二 | 二一、六三二六 |
| 同　三十八年 | 二 | 三〇、三二〇三 | 三一、三八四 | 七 | 三七七、一五二九 | 三九〇、三九〇八 | 四 | 五八、八二三三 | 六三、九二二九 |
| 同　三十七年 | 一〇 | 五五九、五六〇二 | 五七八、三〇一〇 | 五 | 五七、三〇三 | 六〇、八八〇四 | 七 | 一〇三、五七〇九 | 一〇六、六九二三 |
| 同　三十六年 | 七 | 一二五、九七三 | 一三五、〇二〇四 | 八 | 一〇五、三七六 | 一一〇、八五二九 | 四 | 二四、九三二七 | 二七、一七二八 |
| 同　三十五年 | 八 | 一二六、一四二八 | 一三一、八一〇四 | 三 | 五五、九四〇〇 | 五七、五五三〇 | 二 | 五〇、三九〇五 | 五二、四八二四 |

開墾地移住奬勵規程

大正八年政府が食糧增殖の爲め、耕地擴張の必要上開墾助成法を發布し、開墾を奬勵するに及び、本縣は同法に基き、助成を受くる開墾施行地區三十箇所、關係面積八百六十町步を設定せり。而して尙此開墾地の利用を十分ならしむる爲め、大正十年二月開墾地移住奬勵規程を設け、同規程に據り、移住家屋を建設したる者に對し、補助金を交付したり。大正十年より、大正十四年に至る五箇年間の

補助戸數百二十五戸、補助額一萬二千五百三十圓なり。

本縣にて用排水の改良を大規模に企劃せしは、所謂大正用水なり。食糧の增殖を圖り、自給の計を樹て、耕地を擴張せんが爲めに、縣營事業として、利根川流域、廣瀨・桃木兩堰用水路の頭首部を改良し、同所北橘村より新田郡笠懸村阿佐美沼に至る、約八里の幹線水路を掘鑿し、勢多・佐波・新田三郡に渉り、約一萬町步を開發せんとするにあり。此の企劃は大正八年度より、縣費一萬餘圓を支出し、大正九年五月までに實測設計調査を了したるものなり。然るに大正九年、經濟界未曾有の動搖に際會し、一旦大正十二年以後に繰延べたるも、其後時運至らずして、自然中止の狀態にあるものなり。併し縣下用水不足地七千三百二町步の大部が、此計劃區域に屬すると、新田・山田・邑樂三郡の渡良瀨川引用水量の近來枯渇し行く現狀に鑑み、必ずや實現の期遠きに非るべし。

水利組合表

| （名稱） | （許可年月日） | （目的事業） | （組合區域） | （管理者） | （灌漑反別 面積若ハ） |
|---|---|---|---|---|---|
| 廣瀨桃木兩堰普通水利組合 | 明治二十五年十一月一日 | 堰堤ヲ設ケ、利根川流水ヲ廣瀨川桃木川ニ引入 | 勢多郡南橘村、桂萱村ノ一部、木瀨村ノ一部、荒砥村ノ一部、上川淵村、下川淵村 佐波郡 | 群馬縣勢多郡長 | 三、七〇四町 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| | | 灌漑ニ供スルモノトス。 | 三郷村、茂呂村、宮野村、上陽村、名和村、豐受村ノ一部<br>前橋市 | | |
| 天狗岩堰普通水利組合 | 明治二十五年十二月七日 | 利根川ヲ疏水シ專ラ灌漑スルヲ目的トス。 | 群馬郡<br>總社町ノ一部、元總社村、塚澤ノ一部、東村、瀧川村ノ一部、新高尾村、京ケ島村<br>佐波郡<br>玉村町、芝根村ノ一部 | 同<br>群馬郡長 | 一、八八八 |
| 長野堰普通水利組合 | 明治二十五年十二月八日 | 烏川ヲ疏水シ、榛名湖水用水ヲ以テ灌漑スルヲ目的トス。 | 高崎市<br>群馬郡<br>佐野村ノ一部、塚澤村ノ一部、六郷村ノ一部、岩鼻村ノ一部、長野村ノ一部、大類村ノ一部、中川村ノ一部 | 同<br>同 | 一、七八一 |
| 待矢場堰普通水利組合 | 明治二十六年二月四日 | 水田灌漑ノ爲、渡良瀬川ヨリ新田堀及休泊堀ニ用水ヲ引入、組合區域内ノ各水路ヘ疏水スルヲ目的トス。 | 山田郡<br>毛里田村、韮川村、休泊村、矢場川村<br>新田郡<br>強戸村ノ一部、生品村ノ一部、寶泉村、澤野村、太田町、鳥之郷村、九合村<br>邑樂郡<br>小泉町、大川村、中野村、高島村、渡瀬村、長柄村、大島村、永樂村ノ一部、三野谷村ノ一部、多々良村ノ一部、郷谷村ノ一部、赤羽村ノ一部、伊奈良村ノ一部 | 同<br>新田郡長 | 五、九五四 |
| 岡登堰普通水利組合 | 明治三十二年八月二十八日 | 渡良瀬川ヲ疏水スルヲ目的トス | 山田郡<br>相生村ノ一部<br>新田郡<br>笠懸村ノ一部、藪塚本町ノ一部、強戸村ノ一部 | 同<br>山田郡長 | 二六八 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 藤川堰普通水利組合 | 明治二十六年三月二十三日 | 本組合ノ區域内ニ灌漑スルモノトス。 | 邑樂郡高島村ノ一部、中野村ノ一部、長柄村ノ一部、三野谷村ノ一部、多々良村ノ一部、渡瀬村、郷谷村ノ一部、大島村、赤羽村ノ一部 | 同　邑樂郡長 | 九九一 |
| 赤岩堰普通水利組合 | 明治四十一年五月二十九日 | 渡良瀬川ヲ疏水スルヲ以テ目的トス。 | 桐生市ノ一部<br>山田郡境野村 | 同　山田郡長 | 九八 |
| 利根加用水普通水利組合 | 明治二十七年八月二十九日 | 本組合ノ區域内ニ灌漑スルモノトス。 | 邑樂郡永樂村、富永村、三野谷村ノ一部、佐貫村、六郷村ノ一部、梅島村、千江田村ノ一部 | 同　邑樂郡長 | 八九七 |
| 板鼻堰普通水利組合 | 明治二十五年六月四日 | 碓氷川ヲ疏水スルヲ以テ目的トス。 | 碓氷郡八幡村ノ一部、豊岡村ノ一部、板鼻町ノ一部 | 同　碓氷郡長 | 一五八 |
| 馬庭堰普通水利組合 | 明治三十九年二月二十八日 | 鏑川ヲ疏水シ、揚水器ヲ設ケ、揚水スルヲ目的トス。 | 多野郡入野村ノ一部 | 同　多野郡入野村長 | 九四 |
| 五ヶ村圦樋普通水利組合 | 明治二十八年十一月四日 | 新田堀ヨリ用水ヲ引入レ區域内ノ各水路ニ疏水スルヲ目的トス | 山田郡毛里田村ノ一部、韮川村ノ一部 | 同　山田郡毛里田村長 | 一七九 |
| 八坂堰普通水利組合 | 明治四十二年三月十九日 | 桃木川流水ヲ堰上ケ、灌漑ニ供スルヲ目的トス | 佐波郡伊勢崎町ノ一部 | 同　佐波郡伊勢崎町長 | 二四二 |
| 金ヶ崎堰普通水利組合 | 大正三年三月七日 | 碓氷川ヲ疏水シ灌漑ニ充ツル爲引入口及水路ヲ修築保存スルヲ目的トス。 | 邑樂郡大島村ノ一部、西谷田村ノ一部、海老瀬村ノ一部、伊奈良村ノ一部 | 同　邑樂郡長 | 一、四八四 |
| 仲伊谷田排水樋管普通水利組合 | 大正十年一月二十日 | 樋管ヲ設ケ區域内土地ノ排水ヲ爲スヲ目的トス | 邑樂郡大島村ノ一部、西谷田村ノ一部、海老瀬村ノ一部、伊奈良村ノ一部 | 同　同 | 一、四八四 |

## 六　副業獎勵

本縣に於ける副業獎勵は、大正七年度より、縣農會に於て專任職員を設置し、之が獎勵をなしつゝありしが、大正十年より、此獎勵施設に就き、政府之に獎勵金を交付するに至りしかば、同年度より事務を縣に移し、七月專任技師を設け、一層事業の發達振興に努めたり。

(一)副業分布ノ狀態、及餘剩勞力ニ關スル事項。
(二)副業獎勵施設ニ關スル事項。
(三)講習・講話、及實地指導ノタメ職員派遣。
(四)副業生產、及販賣ニ關スル紹介斡旋。

先づ右の四項を定め、調査及び指導に就き事業を開始したるが、就中副業に關する智識の啓發、並に主なる副業種目に對する製法技術の練磨、製品の改良增殖を圖るの必要を認め、大正十年度より、十二年に於ては、獎勵施設を一に傳習會の開設に置き、之が指導督勵に努め、大正十三年に於ては、引續き副業傳習會を開設す

ると共に、之が奬勵に伴ひ、生産增加せる副業加工品に對し、形質の統一及び販路の擴張を圖るの急務を認めて、副業共同經營の實施を奬勵し、大正十四年度よりは副業生產品の共同出荷を奬勵し、尚之が生產に機械力の應用と、能率の增進を圖るため、副業生產用機械器具を購入貸付し、特に本縣に於て最も助長普及を要すべき副業の種類を選び、本省より指定事業とし、全額の補助を受け、之が普及に努む。大正十年以來開始したる傳習會に、栗柹の栽培、蔬菜加工、竹細工、木工、凍豆腐製造、眞綿製造、同加工染織に關する技術、蒟蒻栽培、魚肉加工、豚肉加工、椎茸栽培、山葵栽培の十二種あり。

## 七　農事組合及自作農創設計畫

大正十一年二月十七日、縣令第十號、農事組合奬勵規程、大正十三年四月一日、縣令第二十一號、群馬縣自作農創設資金貸付規程は、其目的共に農村の振興を圖るに在り。前者は組合區域內の地主・自作農・小作農の三者を以て、之を組織し、組合員の融和親善を圖り、且つ農事の改良發達に努め、相協力して、福利を增進するを

目的とし、之によりて時代に順應したる農事改良法を實行せしめ、農民の思想を善導して、思想界の變化に原因する農村の社會問題を、未前に防止せんとするに在り。大正十一年度末九拾四組合は、大正十四年度末には四百九拾八組合を算し、尚益増加の狀況なり。縣は之に甘んせず、既設組合を一層善導するの必要上年々四十組合を限り巡回實地指導を行へり。即ち民間より組合の實地經營に堪能なる者を選びて、組合實地指導員を囑託し、縣係官と共に巡回指導に當らしむる方法なり。後者の自作農創設計畫は、左の二項を具備する者に、市長村長より轉貸するものなり。

（一）耕地ヲ所有セザル者、又ハ耕地ヲ所有スルモ、購入セントスル耕地ト、本人及其家族ノ所有耕地トヲ合セ、約五段歩以内ノモノ。

（二）妻帶者又ハ子女ヲ有スルモノニシテ縣内ニ一戸ヲ構ヘ、專ラ農業ニ從事シ、勤勉誠實信用確實ナルモノ。（以上同規則第二條。）

之に依りて、勤勉確實なる小作農を保護し、土地所有の便を與へ、郷土に安定して、農業を經營せしめ、漸次向上して自作農たらしめ、農村振興の先驅者たらしむると同時に、地方の中堅とし以て思想の惡化を緩和し、圓滿なる發達を遂げしむる

方針なり。縣の計畫は、縣下に於ける小作農家數三萬三千七百三十六戸中、其二十分の一に相當する、千七百五十戸に對し、一戸に付き約三段歩の自作地を得しめ、漸次向上して、全然自作農たらしむる基礎を作るを目的とし、之に要する耕地約五百二十五町歩購入に要する資金約百五十萬圓を、簡易保險積立金中より借入利用せんとするにあり。大正十三年度貸付人員四百十七人、其金額十九萬八千九百六十八圓なり。

## 八　米麥產額累年比較

| （年　度） | （米）（收穫高） | （米）（價額） | （麥）（收穫高） | （麥）（價格） |
|---|---|---|---|---|
| | 石 | 圓 | 石 | 圓 |
| （明治十三年） | 三一八、三七五 | ― | 二〇三、一五五 | ― |
| 同　三十三年 | 四四四、九三八 | ― | 七六四、九一四 | ― |
| 同　三十四年 | 四九八、二〇一 | ― | 七〇一、五三六 | ― |
| 同　三十五年 | 三五三、四八六 | ― | 六八八、一八六 | ― |
| 同　三十六年 | 五一三、七〇四 | ― | 六二四、二四七 | ― |
| 同　三十七年 | 五四五、八五九 | ― | 七四六、〇一五 | ― |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 明治三十八年 | 一七三、八一七 | — | 六七七、三六六 | — |
| 同　三十九年 | 三三八、八五五 | — | 七一九、三九七 | — |
| 同　四十年 | 四九七、九六九 | 七、九六一、一〇六 | 八五六、九八〇 | 六、一五二、一六七 |
| 同　四十一年 | 四四八、〇二〇 | 七、〇三五、九一六 | 七九一、三九八 | 五、六八九、七六〇 |
| 同　四十二年 | 五六二、六五三 | 七、七五〇、四五七 | 八三六、六一七 | 五、八九三、五五一 |
| 同　四十三年 | 四〇八、四四九 | 五、五八一、七七五 | 八七九、九五〇 | 六、一六八、六三四 |
| 同　四十四年 | 五五八、三一三 | 九、三九六、九一四 | 八一六、三九四 | 六、一〇二、一八四 |
| 大正元年 | 六〇五、二〇五 | 一三、一三六、五一三 | 八八一、八四五 | 八、五〇五、七八四 |
| 同　二年 | 五五四、三五一 | 一一、五四三、一五四 | 九一三、六五三 | 八、四四六、三六八 |
| 同　三年 | 六三五、二五四 | 一三、三三三、九三九 | 八八三、三八七 | 八、一七六、九八一 |
| 同　四年 | 六六四、九六二 | 八、五八一、〇八四 | 九三六、三〇五 | 四、四六二、九五〇 |
| 同　五年 | 六四七、四九二 | 九、六八一、九七一 | 九一六、七一三 | 四、八七六、一〇〇 |
| 同　六年 | 六六〇、三五九 | 一三、九三七、三〇八 | 九〇六、六三七 | 八、三三八、九四七 |
| 同　七年 | 六八七、六三三 | 二五、三九三、三六三 | 九三八、一九三 | 一四、〇五一、八五七 |
| 同　八年 | 六八八、四八三 | 三三、三三一、三九六 | 九六〇、九九七 | 一七、六三三、七九九 |
| 同　九年 | 七七一、五八〇 | 三三、三三五、〇三六 | 七七六、八一七 | 一一、七六四、七三六 |
| 同　十年 | 六四〇、八六三 | 二四、三三〇、六〇三 | 九三九、一七三 | 一〇、一六〇、一八五 |
| 同　十一年 | 七〇〇、一七一 | 二〇、三八五、五七九 | 九三五、一〇九 | 一〇、三五一、〇九五 |

| 同十二年 | 七〇六、三八一 | 二四、〇九九、〇二四 | 八一七、四一九 | 八、三六三、六七九 |
|---|---|---|---|---|
| 同十三年 | 六〇六、五三七 | 二四、七七九、二五九 | 八四〇、三六八 | 九、一六七、七三六 |
| 同十四年 | 七〇三、四五〇 | 二六、二七五、三五〇 | 八八五、八八六 | 一三、三三一、七四五 |

## 第二項　畜産業

本縣畜牛の濫觴

明治七年、舊前橋藩士の有志數名團結し、地を赤城山にトし、赤城牧社を創設し、專ら產牛の經營をなす。之を本縣畜牛の濫觴とす。

本縣牧馬の濫觴

又產馬の業に於ても、赤城山麓各村の有志者ありて、結社の端を得、赤城產馬會社を起す。是れ明治維新以後に於ける本縣牧馬の嚆矢とす。

種畜貸與の制

之によつて本縣は、愈〻畜產を振興せしめんとし、内務省より貸下の牧畜資金三千圓と、本縣々税より年分の原資を以て、明治十一年、種畜貸與規則の制を設けて、管内正副區戸長に布達す。その文に曰く、

牧畜蕃殖ノ儀ハ、方今ノ急務ニシテ、農事上一日モ缺クベカラザル儀ニ候處、管下人民偶其志アルモ、其資本ニ乏シク、空シク、年月日ヲ經過候趣ニ付、今般縣廳ニ於テ、左ノ通リ規則相定メ、種畜貸與候條、此旨爲心得相達候事。

牝畜二十五頭以上組合所有スルモノニ向ヒ、牡畜一頭ノ賦リヲ以テ、其地方山

野ノ景況、秣草ノ良否等ヲ斟酌視察シテ貸與スルモノトス。尤モ會社等設立シテ、專ラ蕃殖ヲ謀ルモノハ、牝畜ノ頭數ニ不拘貸與スルコトモ可有之事。

大なる開牧者

小なる開牧者

牛馬の改良蕃殖

是に於て、山附地方、即ち吾妻・利根・勢多の人民、續々開牧の舉あり。其大なるものは、吾妻郡に全郡共同の會社を設け、吾妻畜産會社と名付け、牧牛家畜産馬を社業とし、且つ郡内藥師嶽・高間山・有笠山の三牧場を設く。之に亞ぎ北勢多郡（現今利根）郡にも、牧牛馬を業とする根利牧社の開設あり。又西群馬郡に牧畜と開墾とを兼ねたる昆同農業社、吾妻郡に同樣の二牧場あり、其小なるものは、南勢多郡に牧馬を業とする荒山・沼の窪・硯石貝・藤原の四牧場起る。又利根郡に牧馬所有者二十五名以上組合を立て、種畜金貸與を乞ひ、實業に着手するもの三箇所あり。明治十五年には、北白川宮家の吾妻郡（長野原町大字應桑六里ヶ原）に一大牧場を設け、馬匹の改良蕃殖を企劃せらるゝありて、鋭意牛馬の改良蕃殖を圖りし爲め明治十六年には、洋種及び雜種犢牛、合計百頭餘、仔馬合計百五十餘頭（宮家牧場ヲ除ク）を產出する盛況を呈し、畜產事業の發達漸く緒に就かんとするに際し、牛馬の價格低落と金融梗塞との爲めに、動もすれば一大頓挫を來さんとせり。依りて縣は明治十八年七月廿一日、甲第五五號種牛馬取締規則を設けて、種畜に供用する資格を制限し、明治

二十年三月には縣下人民の所有牛馬四萬餘頭に對し、獸醫僅に十餘名に過ぎざるを以て、獸醫の增員を諭達するあり、翌廿一年には、牧場及び廢牧に關する報告を徵する等、畜産奬勵に關する注意を怠らざりしが、會、明治二十七八年戰役起り、馬匹改良を促進すると共に、一般畜産の發達を要求せしかば、本縣の畜産界も政府の諸施政諸法令の下に、一段と進歩せり。

吾妻郡牛馬組合

明治三十三年二月、産牛馬組合法發布せらるゝに及びて、吾妻郡先づ吾妻郡牛馬組合を組織し、牛馬の改良及び組合員共同の利益を奬勵す。次いで利根・勢多・前橋、亦同組合の設立あり。逐年發達の域に進みしが、縣は時運の趨勢に鑑み、明治三十七年、種牛馬貸下規則、馬匹去勢奬勵に關する告諭(明治三十七年九月二日、本縣告諭第四號)を發し、更に專任の畜産技術員をして、當業者の指導誘掖に當らしめ、或は講習・講話、並に共進會を開催するあり、一方國有牝馬の貸下、國有種牡馬の配置等あり、尤も奬勵に努む。明治四十三年には、各郡市に成立せし畜産組合(佐波邑樂には組合なし)を聯合して、聯合會を組織し、益、斯業の發展に資せり。

養豚

以上は主として牛馬に關し記述したるのみなるが、時勢の進運に伴ひ、豚鷄の飼養に就いて奬勵する所ありき。養豚に就いては、明治三十五年二月廿一日、告

諭第一號を以て左の諭告を發せり。

養豚業ハ頗ル有利ノ事業ナルニ係ハラズ、往々投機者ノ乘ズル所トナリ、或ハ其販路ノ如何ヲ探求セズ、或ハ種豚ノ撰擇ヲ誤リ、漫然之ニ從事シタル結果、不測ノ失敗ヲ招致シ、爲メニ斯業ノ進路ヲ阻碍シタルモノ例證尠カラズ。曩ニ農商務省ハ之ガ改良發達ヲ期センガタメ、種豚拂下規定ヲ發布シ、既ニ客年十二月其、第一回拂下ヲ行ハレ、爾後毎年其拂下ヲ行ハル、計畫ナルヲ以テ、當業者タルモノ克ク此意ヲ體シ、鋭意斯業ノ改良ヲ努ムベシ。又養豚ノ業ハ農家ノ副業トシテ、最モ利益アルモノナレバ、一般農家ハ奮テ斯業ノ普及ヲ企劃シ之ガ發達ヲ期スベシ。

養鷄

緬羊の飼育

養鷄に就いては、明治三十八年、縣立農事試驗場に、畜産部を設け、種豚と共に種禽の試驗並に育成配布を爲し、專ら奬勵に努めたるが、大正九年三月、種畜場を新設するに及び、豚鷄の飼養蕃殖及び配布事業を移管し、一層指導奬勵に努め、共同の利益を增進する養豚養鷄組合を設けしめたり。緬羊の飼育も、國防上最も必要なる事項に屬するを以て、大正八年以來、政府より拂下を受け、飼育者に就き、技術員を派して、飼養管理、剪毛其他に對して、懇切に指導を行ひ、堅實に發達を遂ぐるに努めつゝあり。

群馬縣種畜場

種畜場は、畜産の改良發達を圖る爲めに設置せられたるものにして、最初農事試驗場事務室の一部を假用して開場し種牡牛馬の購入貸付、種豚の蕃殖・拂下・貸付・去勢・種付、種禽蕃殖・拂下、種卵拂下・家畜家禽の飼料、其他の研究指導、畜産に關する質疑應答を實施したりが、時勢の進運は益〻斯業の改良發達を促すものあるを以て、牛馬の育成・蕃殖等の事業を加へ、本場・分場に分ち、本場を勢多郡富士見村大字小暮に、分場を前橋市岩神町に選定し、本場は大正十二年より、分場は大正十三年六月より移轉し、本場に於ては牛・馬・山羊・蜜蜂を、分場にては豚鷄を飼養し以て目的達成を期しつゝあり。

獸疫の豫防

獸疫の發生傳播は、畜産の發達を阻碍し、延いて人體にも危害を及ぼすを以て、明治三十一年二月には、農商務省令に基き、獸疫屆出手續(縣令第十三號)を定め、畜牛結核病豫防制遏方に就いて、明治三十三年五月、告諭第四號を以て當業者の周到なる注意を促したるが、後には縣にも專任の技手、及び雇獸醫各〻二人を置き、其他關係官吏員に檢查員を命じ、之が豫防に努めしめ、更に近年家畜間に獸疫の發生漸く多きを加ふるに至りて、甚しきに於ては、豫防注射を行ひ、主なる畜産地には、郡に畜産專門の技術員を置かしめ、畜産奬勵の傍、家畜衞生に當らしむ。

家畜家禽累年比較　（年末現在頭數）

| （年次） | （牛） | （馬） | （豚） | （緬羊） | （山羊） | （鷄家禽） |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 明治十三年 | 四一九 | 四三、六二九 | ― | ― | ― | ― |
| 明治二十八年 | 八五六 | 二四、四〇一 | ― | ― | ― | ― |
| 明治三十八年 | 三、一一三 | 二四、五九三 | 一、五六三 | ― | 六八 | 一八三、四二三 |
| 大正四年 | 三、七六八 | 二四、二三五 | 七、一三七 | ― | 四八三 | 一九三、四三六 |
| 大正九年 | 三、六三五 | 二三、九〇三 | 一四、八四五 | 九七 | 三七一 | |
| 大正十年 | 四、〇四二 | 二三、四〇五 | 一七、六七六 | 一〇五 | 五四七 | |
| 大正十一年 | 三、八二七 | 二四、一四五 | 一六、五五四 | 一〇八 | 六〇六 | 三二一、六九六 |
| 大正十二年 | 四、三三八 | 二四、七八六 | 二三、四三〇 | 一四二 | 六八四 | 三六五、三七九 |
| 大正十三年 | 四、八二一 | 二五、〇三四 | 二五、八〇四 | 一八六 | 七二一 | 三七八、九二三 |

## 第三項　林業

維新以後の林政

本縣に於ける林野面積は、全廣袤の七割六分を占め、其産額は一千百九十七萬圓餘、工業・農業に次いで主要なる産業なり。而して其所在利根川本流、及び其支

流の水源地帶を占むるを以て、此林野の興廢は、啻に本縣の林產額其ものゝ多寡に止まらず、水田灌漑、發電治水等より、直接民衆の保安に及ぼす影響甚大なるべし。然るに明治維新當時に於て、百事草創の際、林政亦頗る弛廢し、殆んど顧みられず、自然の荒廢に委したりしが、明治十一年五月、山林係を置き、翌十二年十一月、野火入りの際は、官私有林の差別なく、森林に延燒せしめざる樣、布告を出したるなど、本縣に於ける林政漸く緒に就きたり。明治二十一年三月、本縣官林區を六十三林區に分ち、翌廿二年官林火災に關し、平素の注意及び取締に就き訓令す。明治二十九年、市町村立小學校植栽規則を設け、小學兒童の愛林思想を涵養し、同三十年、市町村基本財產の蓄積を奬勵し、翌年郡基本財產の蓄積を奬勵し、明治三十五年、林業巡回教師一名を設置し、林業の指導奬勵、並びに森林施行に關する用務を擔當せしめたる等、地方の林業奬勵に努めたる結果、赤城・榛名・妙義の山麓、及び利根・吾妻・碓氷・多野・北甘樂・群馬各郡の山野に於て、漸次杉・扁柏・落葉松・赤松・黑松・櫟、其他の重要樹種植栽を實行し、山野利用の途開發せらるゝに至り、林業の前途頗る有望の域に進みたり。會〻日露の戰役は、諸般の事業勃興の機運に向ひたれば、縣は明治三十八年、二十六箇年繼續の計畫を樹立し、明治三十八年度より縣費金六千五百圓を支出して、造林

欅榛厚朴胡桃白楊栗の樹苗養成及購入

費補助奬勵に努めたるに依り、（縣治一斑）縣設模範林を創始して、合理的林業經營の模範を示し、又市町村造林補助規定を發布し、公有林野の造林を奬勵せしかば、續々造林の實施を見るに至れり。縣は更に進んで造林の成果を收めんと欲し、樹苗養成をなして之が無償交付をなし、（明治四十一年及四十四年）、造林の促進を計畫し、大正三年、民間樹苗養成奬勵の爲め、造林及び苗圃補助規程を發布して、縣費を以て補助金交付の途を開き、以て造林及び苗木養成の啓發指導に努め、優良なる樹苗の供給に遺憾なからしめんとせり。是より先數年、洪水氾濫し、水害頻に臻りたれば、縣は水源地帶地盤擁護の必要上、明治四十一年、森林開墾地禁止制限地の調査を開始し、明治四十四年、荒廢地復舊補助規程を定め、山野荒廢地の復舊を圖り、かくて公有林及び私有林の造林に就て、一層の奬勵に努め、大正四年、公有林野の整理實行に着手し、大正八年には、部落有林野統一補助規程を定め、大正十一年には、更に治水關係地造林補助規程を定め、保安林竝に森林開墾禁止制限地、其他それ等と同樣なる地域の造林を奬勵し、一方に地方の財源增殖と、他方に水源涵養の目的とを兼ね、一擧兩得の擧に出でたり。而して竹林經營の有利なることを一般に周知せしむる爲めに、竹林栽培補助規程（大正三年發布）を一部改正して發布し、之が增殖に努め、更に新

炭林の缺乏漸く甚しきと、林野改良の急務を認め、之が改良の爲めに、薪炭林改良補助規程を制定し、林種の改良と林利增進とを計り、漸次縣下の林業は面目を刷新するに至れり。大正十三年、皇太子御成婚記念模範林を設置し、又農務課の一部たりし林務係を獨立し、林務課を設置するに及び、縣下の林政は一段の進展となれり。

以上縣の施設經營と相俟つて、本縣林業の發達に貢獻したるを、群馬縣山林會、及び森林組合となす。群馬縣山林會は、元群馬山林會と稱し、明治四十年度の創設にして、大正八年組織を變更して、社團法人となし、同時に群馬縣山林會と改め、左の事項を遂行するに努力しつゝあり。設立當時僅に六百名の會員なりしが、大正十四年八月には、千三百九十三名の多きに達せり。

記

一、林業ニ關スル諸般ノ調査・研究・試驗、及ビ實地指導ヲナスコト。
二、林業ニ關スル各般ノ調査・設計・鑑定・及ビ紹介等ノ依頼ニ應ジ・又ハ林業上ノ質疑ニ應答スルコト。
三、林業ニ關シ、官廳ニ意見ヲ開申シ、又ハ諮問ニ應答スルコト。

群馬縣山林會

四、林業ニ關スル圖書・標本・器具・機械其他參考資料ヲ蒐集陳列シ斯業ノ參考ニ資スルコト。
五、林業ニ關スル講習會・講話會・共進會、又ハ品評會ヲ開催スルコト。
六、苗圃事業ヲ經營シ、優良樹苗ノ配付ヲナスコト。
七、竹林ヲ經營シ、之ガ模範ヲ示スコト。
八、林産物ノ販路發展ヲ圖ルコト。
九、月刊雜誌「上毛ノ林業」ヲ發刊販賣シ、其他有益ナル印刷物ヲ發刊スルコト。
十、林業ニ關シ功勞顯著ナル者ヲ表彰スルコト。
十一、其他林業ノ改良發達ニ關シ、必要ト認ムルコト。

右事項に從ひ實施せられたる主なるものを擧ぐれば左の如し。

一、林政調査會　大正十三年、縣内林業家四十三名ヲ委員ニ囑託シ組織セシモノニシテ、林政及林業ニ關スル當面ノ問題ヲ調査研究シ、會ノ意見ヲ確立シ、林業ノ改良ニ資スル目的ナリ。

二、共進會開催　共進會ヲ開催シ、林産物ノ向上發展ヲ期スルハ、林業上必要ナルヲ以テ、本會ハ縣ノ助勢ノ下ニ、大正九年、第一回ヲ前橋市ニ、第二回ヲ北甘樂郡下仁田町ニ、第三回ヲ利根郡沼田町ニ、第四回ヲ前橋市ニ開催セリ。

三、講習講話　大正十三年九月、吾妻郡草津町ニ夏季大會ヲ開催セリ。

森林組合

森林組合は、明治四十年現行森林法の改正と共に、森林組合の制度を設けられ、其奬勵の爲めに、或は設立奬勵費の交付、或は低利資金の融通を圖り組合事業の經營上困難を排除するに努めたる結果、設定せられたるものにして、本縣に於ては榛名山保護土工森林組合が明治四十一年十月に於て設立せられたるを嚆矢とす。現在に於て組合數二十三、其面積九千六百九十八町歩に達し、單獨經營の不便を除去して、漸次合同企業の效果を收めつゝあり。

林政の成績

上記の奬勵施設の結果、成績次第に擧りて、面目を一新せり。中に就き二三の表を擧げて、其狀況を示さん。

一　部落有林野統一年度別成績（自明治三十七年 至大正十三年）

| （年次） | （郡） | （村） | （統一面積） | （内譯）（無償無條件） | （辨償條件付） |
|---|---|---|---|---|---|
| 明治三十七年 | 碓氷 | 里見 | 一二町 | 一二町 | —町 |
| 大正元年 | 吾妻 | 東 | 二〇一 | 一六〇 | 四一 |
| 大正四年 | 同 | 太田 | 一〇二 | 一〇二 | — |
| 大正八年 | 同 | 高山 | 一、五〇四 | 一五〇四 | — |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 大正十年 | 同 | 長野原、嬬戀、坂上 | 四、五四二 | 三、八八四 | 六五八 |
| 大正十一年 | 群馬 | 金島 | 一五 | 一五 | — |
| 大正十三年 | 吾妻 | 嬬戀 | 三二一 | — | 三二一 |
| （合計） | | | 六、六九七 | 五、六七七 | 一、〇二〇 |

二　入會地整理年度別成績（自明治三十七年至大正十三年）

| （年度） | （郡） | （村） | （面積） | （村ニ歸屬面積） | （離權面積） |
|---|---|---|---|---|---|
| 明治三十七年 | 碓氷 | 里見 | 一二町 | 一二町 | — |
| 同四十年 | 吾妻 | 太田 | 一〇二 | 一〇二 | — |
| 大正元年 | 同 | 東 | 四三一 | 二〇一 | 二三〇 |
| 大正八年 | 同 | 高山 | 三、〇〇七 | 一、五〇四 | 一、五〇三 |
| 大正十年 | 同 | 長野原、嬬戀、坂上 | 九、〇四一 | 四、五四二 | 四、四九九 |
| 大正十一年 | 群馬 | 金嶋 | 六五 | 一五 | 五〇 |
| （合計） | | | 一二、六五八 | 六、三七六 | 六、二八二 |

## 三　公有林野施業計劃案編成成績表

| （年度） | （施設案） | （施設要領） | （管理方法） | （合計） |
|---|---|---|---|---|
| 大正四年 | — | 四七一、三 | 二三〇、四 | 七〇一、七 |
| 同五年 | — | 七五五、五 | 六〇七、八 | 一、三六二、三 |
| 同六年 | — | 六九三、九 | 二二〇、〇 | 九一三、九 |
| 同七年 | — | 一五六、〇 | 五五三、〇 | 七〇九、〇 |
| 同八年 | — | — | 六〇、〇 | 六〇、〇 |
| 同九年 | — | — | 三〇七、〇 | 三〇七、〇 |
| 同十年 | 二、九二〇、〇 | 一六〇、六 | 一、五五三、〇 | 四、六三三、六 |
| 同十一年 | 五二〇、〇 | 五七三、六 | 三七五、二 | 一、四六七、八 |
| 同十二年 | 四五一、九 | 一七六、三 | 四二、〇 | 六七〇、二 |
| 同十三年 | 三二七、〇 | 三八九、〇 | 一〇六、〇 | 八二二、〇 |
| （計） | 四、二二八、九 | 三、三七五、二 | 四、〇五四、三 | 一一、六五八、四 |

## 四　最近五箇年（自大正九年至大正十三年）造林及伐採調

| 料 | 造林・人工・新植・樹林（面積）町 | 造林・人工・新植・樹林（數量）本 | 造林・人工・新植・竹林（面積）町 | 造林・人工・新植・竹林（數量）本 | 造林・人工・補植（數量）本 | 造林・天然（下種萌芽）（面積）町 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 御料有 | 三〇三、五 | 一、三四六、四三二 | — | — | 二〇〇、三八三 | — |
| 國有 | 八〇七、三 | 一、九三〇、三二七 | — | — | 一、一〇三、九二〇 | 一、一二四、九 |
| 公有 | 一七八、四 | 五二〇、四九〇 | — | — | 五八、四七〇 | 一四四、一 |
| 社寺有 | 一一、三 | 三六、三〇〇 | — | — | 三、九〇〇 | 二五、六 |
| 私有 | 八五四、四 | 二、五五七、八八九 | 二〇、六 | 三三、〇八三 | 六九四、三三五 | 三、一二九、七 |
| （合計） | 二、一五四、九 | 六、三九一、四三八 | 二〇、六 | 三三、〇八三 | 二、〇五九、七八八 | 四、四二四、三 |
| 大正一二 | 二、九三三、五 | 六、五三三、七六三 | 二一、五 | 一四、一〇三 | 二、八五六、〇三四 | 五、二六四、六 |
| 同　一一 | 二、四六〇、五 | 三、七七九、七六四 | 一七、九 | 一八、一七〇 | 二、八三六、一二八 | 三、八九三、一 |
| 同　一〇 | 二、一二九、二 | 八、三九五、三九六 | 一〇、七 | 八、七三六 | 一、八七六、九一七 | 三、五三一、七 |
| 同　九 | 二、四八七、七 | 七、六七〇、六八四 | 九、八 | 八、三六九 | 一、七四三、〇三〇 | 四、七二八、九 |

| | （伐採） | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | （用材） | | （薪炭材） | | （竹林） | | （合價計額） |
| | （材積） | （價額） | （材積） | （價額） | （材積） | （價額） | |
| 御料 | 五、二六一石 | 一五、九六五圓 | 一一、八七六棚 | 五〇、五一八圓 | 五六束 | 五七圓 | 六六、五四〇圓 |
| 國有 | 一四〇、〇〇五 | 一六三、五〇八 | 六九六、〇八四石 | 三八八、〇一〇 | 七三 | 三一 | 五五一、五四九 |
| 公有 | 八、四六三 | 五五、〇九四 | 九、六六五棚 | 四九、二九六 | — | — | 一〇四、三九〇 |
| 社寺有 | 一三八 | 一、三四四 | 六二一 | 七、六三三 | 四六〇 | 六三一 | 九、五〇七 |
| 私有 | 二七三、九六〇 | 一、七七一、〇四七 | 二四七、二六三石 | 一、九六一、一一三 | 一三七、六九八 | 一三一、三八〇 | 三、八五三、五四〇 |
| （合計） | 四二七、八二七 | 二、〇〇六、八五七 | 六九六、〇八四石 二六九、四一五棚 | 二、四五六、五六九 | 一三八、二八七 | 一三三、〇九九 | 四、五八五、五二六 |
| 大正一二 | 二〇束 一八、二九六本 四九五、〇三三石 | 三、〇一八、一一三 | 三、〇〇〇本 七一三、九四七石 一九、〇一九束 二八三、六五九棚 | 二、七八四、三七九 | 一一五、二二七 | 一三六、九五六 | 五、九三九、四五八 |
| 同一一 | 六、四二〇本 五九二、六七三石 | 二、三三四、七〇七 | 三三、八一六束 五一九、〇三三石 二七七、〇三三棚 | 二、二二二、〇一五 | 一一五、八〇八 | 一三七、六三六 | 一、五八四、三五八 |
| 同一〇 | 三六三、八五一 | 二、三三四、三八五 | 六八二、一〇七石 一八九、一一五棚 | 一、九四八、五五九 | 一三四、一一九 | 一五六、六八九 | 四、四三〇、〇三三 |
| 同九 | 二九六、三七〇 | 一、四二一、〇二九 | 一八、七八九束 五〇六、〇二五石 二二五、一四一棚 | 一、六一九、八八七 | 一〇四、〇二四 | 一四一、三四五 | 三、一八二、二六一 |

御料及國有は年度中の事實なり。

## 五　所有別林野面積（大正十三年末現在）

| （所有別） | （立木地）（針葉樹） | （濶葉樹） | （針濶混淆） | （竹林） | （計） | （無立木地） | （合計） |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 町 | 町 | 町 | 町 | 町 | 町 | 町 |
| （公有）縣有 | 八九〇、八 | 一、五九七、三 | — | 〇、二 | 二、四八八、三 | 一、五六六、〇 | 四、〇五四、三 |
| 市町村有 | 二、九四五、一 | 三、四〇五、四 | 一、四八九、七 | 三、九 | 七、八四四、一 | 八、四八〇、六 | 一六、三二四、七 |
| 部落有 | 二四九、〇 | 一、三八三、六 | 七三九、二 | 二、五 | 二、三七四、三 | 六三二、四 | 三、〇〇六、七 |
| （計） | 四、〇八四、九 | 六、三八六、三 | 二、二二八、九 | 六、六 | 一三、七〇六、七 | 一〇、六七九、〇 | 二四、三八五、七 |
| （社寺有）神社有 | 一七四、七 | 七六一、七 | 一九〇、二 | 四、六 | 一、一三一、二 | 一五九、七 | 一、二九〇、八 |
| 寺院有 | 四四六、六 | 一、一〇四、二 | 三六七、九 | 六三、二 | 一、九七一、九 | 一五四、一 | 二、一二六、〇 |
| （計） | 六二一、三 | 一、八六五、九 | 五五八、一 | 六七、八 | 三、一〇三、一 | 三一三、八 | 三、四一六、九 |
| 私有 | 五四、〇四四、一 | 七〇、八八一、一 | 三一、八一六、七 | 二、五一二、八 | 一五九、二五四、七 | 一七、〇二一、一 | 一七六、二七五、八 |
| （合計） | 五八、七四〇、三 | 七九、一三三、三 | 三四、六〇三、七 | 二、五八七、三 | 一七五、〇六四、五 | 二八、〇一三、九 | 二〇三、〇七八、四 |
| 國有 | 三三、五〇二、二 | 七五、三七〇、九 | 八〇、八〇六、一 | 一、四 | 一八八、六八〇、六 | 一二、四七五、七 | 二〇〇、一五六、三 |
| 御料 | 二、二五三、五 | 四、四五六、九 | 六五、六 | 〇、二 | 六、八七六、三 | 六、五三〇、六 | 一三、四〇六、八 |
| （總計） | 九三、五九六、〇 | 一五八、九六一、一 | 一一五、四七五、四 | 二、五八八、八 | 三七〇、六二一、三 | 四六、〇二〇、二 | 四一六、六四一、五 |

## 六　縣有模範林表

### 甲　縣設模範林　（大正十三年末現在）

| （林別） | （所在地） | （名稱） | （公簿面積） | （實測面積） | （植栽面積） | （實行經費） |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 第一 | 北甘樂郡妙義町外三箇村 | 大桁山 | 町 三六七、八四〇三 | 三三三、八二三三 | 三三九、八五〇〇 | 圓 一〇、六六八、三〇 |
| 第二 | 利根郡川場村 | 川場山 | 一八一、三九一一 | 一八一、三九一一 | 一三四、九三〇〇 | 四、五九一、五九 |
| （計） | | | 五四九、二三一四 | 五一五、二二〇四 | 四六四、七八〇〇 | 一五、二五九、八九 |

（備考）明治三十八年度其經營ニ着手、同三十九年度ヨリ實行ニ着手、二十六箇年繼續計畫。

### 乙　移管模範林　（大正十三年末現在）

| （模範林別） | （所在地） | （全面積） | （植栽面積） | （實行經費） | （備考） |
|---|---|---|---|---|---|
| 多野郡模範林 | 多野郡神川村 | 町 一九、〇三〇〇 | 町 一一、三六〇〇 | 圓 二、九九四、九四五 | 明治四十一年度より植栽に着手せり |
| 同上 | 多野郡三波川村 | 二五、一〇〇七 | 一五、五〇〇〇 | 一、七三三、三六〇 | 明治三十九年度より同上 |
| 利根郡模範林 | 利根郡白澤村 | 八三、九七〇四 | 六〇、八〇〇〇 | 四、八九四、一一七 | 大正三年度より同上 |
| 北甘樂郡模範林 | 北甘樂郡吉田村 | 三〇、七六二五 | 二八、四四〇〇 | 三、七六四、〇八五 | 同上 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 北甘樂郡模範林 | 北甘樂郡丹生村 | 二四、一八三 | 一六、七六〇 | 三、〇四〇、九七〇 | 大正三年度ヨリ同上 |
| 吾妻郡模範林 | 吾妻郡岩島村 | 五〇、三〇〇 | 五〇、三〇〇 | 四、四四四、三九五 | 明治三十九年度ヨリ同上 |
| 同上 | 吾妻郡澤田村 | 六、七三〇 | 六、五三〇 | 九四三、五六〇 | 大正四年度ヨリ同上 |
| 同上 | 吾妻郡長野原町 | 九、〇四〇 | 九、〇四〇 | 一、〇六四、五九〇 | 大正四年度ヨリ植栽ス |
| 同上 | 吾妻郡坂上村 | 一五、六〇〇 | 一五、六〇〇 | 三、三四三、七九〇 | 同上 |
| （計） | | 二六四、〇三八 | 二二四、二三〇 | 三五、一九三、七二三 | |

（備考）元郡有林ナリシガ、郡制廢止ノ結果、大正十二年四月ヨリ縣有ニ移管セラレタルモノナリ。

内　御成婚記念模範林

| （所在地） | （面積） | 造林計劃 | |
|---|---|---|---|
| 赤城山御料地ノ内 | 一、三六七、七五町 | （杉造林豫定地） | 四四〇、〇〇町 |
| 榛名山御料地ノ内 | 一、二七四、一四 | 扁柏造林豫定地 | 八八〇、〇〇 |
| 烏淵村所在國有林 | 四五六、七七 | 松、落葉松造林豫定地 | 八八〇、〇〇 |
| （計） | 三、〇九八、六六 | 既往造林地 | 一三四、〇〇 |
| | | 天然造林地 | 七六四、一四 |

（備考）大正十三年一月二十六日ヲ以テ取行ハセラレタル皇太子御成婚ノ大典

チ奉祝記念センガ爲メ設定シ、大正十三年度ヨリ着手シ、三十八箇年計劃ニシテ、總支出額百十七萬二千八百圓ニシテ、收入合計金額百十萬二百三十八圓ノ預算ナリ。

（主として群馬縣之林業に據る。）

## 第四項　養蠶及蠶種業

### 一　養蠶業

上州は蠶業界に於ける先進國なり

養蠶は本縣の主要なる產業にして、夙に養蠶の本場を以て稱せられ、其豐凶は縣民の生活に直接影響を及ぼし、本縣としては農家の主業たる觀あり。幕末橫濱港の互市場と定まり、蠶絲の重要貿易品となるや、最も活躍したるは我縣民なり。吾妻郡三原の中居金兵衛の如き、前橋の下村善太郎の如き、我邦生糸貿易史に光彩を放つ者なり。蠶絲貿易の有利は、即ち其根原たる養蠶業の勃興となり、明治の初年、本縣の養蠶は、其飼育法に於て全國に一步を先んじ、明治三年、養蠶改良の目的を以て、綠野郡高山村の人、高山長五郎は高山組を組織し、多年硏究の養蠶淸淨溫育法を博く世に傳ふ。明治四年三月、東京舊西丸城內宮內省瀧の茶屋

近室に於て、蠶兒を飼育せらるゝに就き、縣下佐位郡島村田嶋彌平に之が指圖を命せられ、養蠶界に於ける先進國たる光榮を擔へり。明治初年に於ける本縣の養蠶は、全國に嶄然頭角を著はしたれば、官費を以て、製絲場を新設せらるゝや、亦富岡・新町と縣内に指定せらるゝに至り、此製絲業の隆盛に因果的關係をなして、愈、養蠶業の發達を來し、民間に於て此飼育法の改良に苦心成功するもの尠からず。群馬郡青梨子村松下政右衛門の陝爽育、綠野郡栗須村の順氣育法、甘樂郡富岡町佐藤國太郎の清溫親切育法等、即ち其主なるものなり。是等の人々は各地に傳習所を設け、其飼育法の普及に努めたり。是れ實に明治初年より同廿年前後までの事に屬し、縣としては、飼育方法に至りては別に指導もなかりしが如し。唯縣としては、繭の良否は直に蠶絲に關し、施いて國產の名聲を振揚する所以に非るを以て、明治八年八月二十四日、養蠶の本旨に關する告諭を布達し、當業者をして嚮ふ所を誤らざらしむ。其告諭は左の如し。

　抑養蠶ノ本意タルハ、製絲ニアリテ、製種輸出ニアラス。其絲ヲ製スル、最モ撰ムベキハ蠶種ニアリ。其絲ヲ繰ル、亦機械取ヲ良トス。故ニ原種ヲ撰ムハ、數年養蠶ニ注目シ、加ルニ桑樹ノ良否ヲ察シ、克ク飼養スルノ種子ヲ得ルヲ急務トス。當管

内ノ如キ、往時ハ奥州ノ原種ヲ尚ブノ說專ラ行ハレシモ、從來深ク養蠶ニ注意シ、年ニ月ニ其飼養ニ力ヲ盡シ、大ニ發明スル處アリ。故ニ各國ニテ其名ヲ知リ、他縣ニテモ是ヲ慕フモノ豈他アラン哉。然レバ則各自益勉强シテ、飼養ノ法ヲ講究シ、御國產ヲ擴充シ、又名聞ヲ惜マザル可ラズ。抑横濱開港以來、本色ノ製絲ニ比較スレバ、蠶種ノ輸出上ニ利益ノ巨多ナルハ、其實一時ノ僥倖ニ出デ、生產殖益ノ淳利ニアラザル也。夫生產ヲ興スルハ、各自協同勞力ニ出ルヲ良トス。獨立獨見、陰計密策、壹人小利ヲ得ントスルハ、豈國益ト謂ベケンヤ。然レバ則物產上協同戮力ノ大益ヲ振興シテ、永遠ヲ維持スベキノ目算、今日痛ク念慮スベキノ秋ナラズヤ。既ニ政府ニ於テモ、厚キ御趣意ヲ以、本年蠶絲組合條令御布達ニヨリ、組合結立ノ事アルモ、人民上僥倖射利ノ心ヲ抑ヘテ、生產殖益ノ淳利ニ就シメントノ御仁惠ナレバ、各自モ其趣意ヲ奉體スベキハ勿論也。蓋シ御趣意ヲ奉スルヤ、製絲職工ニ力ヲ盡スヲ本意トス。其製絲職工ト兩ナガラ精良美名ヲ得ントセバ、其本源ハ蠶種ヲ購求スル、其品位ヲ撰ムルニ在リ。已ニ前ニ述ブルガ如ク、假令バ、我管下優等ノ蠶種アルモ、之ヲ措テ問ハズ。從前ノ得意場引付ノ向ヨリ、劣等ノ種ヲ買入、或ハ同管下ニ鬻ガズシテ、他縣ニ賣捌等、内國用原紙ノ數粗相似タリト聞ケリ。若然ラズトモ、互ニ往返ノ冗費、或ハ倶ニ時日ヲ費スアリ。則是ヲ國損ト謂ベシ。又製絲ノ如キ、舊習

ノ手繰、二ツ取ハ、其品位醜劣リテ、益少キキヲ以テ、是マデ屢說諭ヲ加ヘタルニ、未ダ改メザル者アリ夫二ツ取リハ、製絲ノ如キハ慣ヲ成サヽルハ勿論、終ニハ輸出品トモナラザルニ至ラン。其時ニ臨ミ悔悟候トモ、何ゾ及バンヤ。元來製絲ハ機械取ヲ第一トシ、二ツ取ハ決テ無用トス。各自愛國長育ノ情ヲ以テ、同縣下ノ義務ハ殊更懇厚ナラシメ、共ニ振起作興ノ力ヲ盡シ、物産ノ名譽ヲ揚ゲ、富强ノ實ヲ計ラズシテ可ナランヤ。雖然蠶種ノ如キハ、敢テ他邦ヘ出入スルヲ妨グルニアラズ。只製造上ノ損益ヲ辨知セシメ、互ニ國益ヲ興シ、協同ノ利ヲ爲サシメントテ、告諭スルモノ如此。

明治十二年四月（十四日甲第五十三號）を以て、桑園改良に關する件を告諭し、更に同年十月十四日には、養蠶奬勵に關する告諭を發せり。

本縣下産出生絲ノ儀ハ、著名ノ物産ナルヲ以テ、其製出ノ額量モ逐年增加スト雖、其原繭ニ於ケル、上毛産ノモノハ概十中ノ四ニシテ、其他ハ信武兩國ヨリ買入ノ繭ヲ以テ供用ス。故ニ原繭ニ對スル收利ハ、他方ニ多ク、本地ニ寡キノ姿ニ相成、甚遺憾ノ事ニ候條、自今一層桑園ノ栽培ハ勿論、養蠶ノ業ニ勉强シ、産繭・製絲兩全ノ洪益振作候樣可致、此旨諭達候事。

明治二十一年八月、農商務大臣井上馨は、群馬・長野二縣知名の蠶業家二十餘名を、碓氷郡磯部村の別莊に招集し、蠶業談話會を開かる。其席には農商務省の關係官吏、本縣知事・書記官・關係郡長等列席せり。一夕の會合たりしも、斯界の振興上に稗益したる、疑を容れざる所なり。

明治二十三年、同廿六年、相次いで降霜の被害あり。殊に明治廿六年五月六日の霜害は、縣下に於て、前代未聞の巨災と稱せらる。是より桑樹霜害豫防方案の研究起り、勢多郡の人船津傳次平、其方案を發表し、世を稗益したり、明治廿九年、群馬縣前橋測候所を新設し、之が對策をなせしが、桑樹の保護は之にては足らず、明治二十一年四月、桑樹發生の尺蠖驅除に關する告諭を下して、隣保協同、害虫驅除を謀るべきを諭され、明治三十年十二月に、勢多郡の人角田喜右作、群馬縣下に桑樹萎縮病豫防問答（農商務省農事試驗場技師船津傳次平案）を印刷し、當業者に頒ちたることありしが、此頃に至りては、日清戰役の後を受け、政府の奬勵保護政策漸次行はるゝに到り、本縣亦其意を體し、蠶業の收利を一層大ならしめんが爲め、當時飼育上の缺陷たる蠶病消毒に關し、布達を發し、民間亦講習會（上毛蠶事講習同窓會發起、明治三十一年一月）を開き、蠶業消毒觀念の喚起に努めたり。本縣亦霜害豫防蠁蛆驅除に付きて諭達する所あ

りしが、時勢の進運は、本縣當局をして永く監督主義たるを許さず、積極的に指導獎勵をなさしむるに至れり。由來本縣は、本邦蠶絲業の發達に貢献する所尠少に非ざりき。夫れだけに又其技術經驗を自負し、動もすれば斯業改善に對する施設等、後進府縣に一歩を輸する憾なしとせざりき。本縣の當局蓋し茲に鑑みる所ありしなり。縣は之が第一着手として、蠶業教育の必要を認め、明治四十一年以來、毎年一回、六十日の期間を以て、女子蠶業講習を行ひ、大正二年、蠶絲學校を特設し、農事試驗場及び蠶病豫防事務所・縣農會等、各主管に關する講習・講話に努めしめ、更に郡農會に蠶業技術員を置き、農閑を利用して、講習・講話をなさしめ、群馬・吾妻・利根の三郡は、郡立蠶業講習所を設くるに至る。大正五年縣に技術員一名を置き、專ら養蠶組合設置獎勵規程の實施の任に當らしめ、越えて大正九年、更に一名を增員し、養蠶組合、竝に一般の指導獎勵に當らしむると共に、各郡に養蠶專任の技術員設置を勸めたるを以て、各郡共に郡費を以て之を設置し、縣と相呼應して、斯業の指導獎勵に努めたりしが、會〻大正十二年、郡制廢止せらるゝに及び、郡技術員は之を縣に移管して、郡役所に駐在せしむ。是より先き大正七年、本縣は蠶

絲課を農務課より獨立せしめ、蠶絲業方面の行政に精進せしむる所ありしかば、事績愈〻揚がり、大正十二年、養蠶教師認定證下附規程を制定し、養蠶組合を指導する養蠶教師の資格認定を行ひ、更に同年四月、養蠶教師短期講習會を開催し、翌大正十三年三月、大日本蠶絲會主催、高等蠶業講習會の前橋市に開設せらるゝを機とし、普く受講を勸奬し、其他蠶業試驗場に於て、適當の時期を選み、年々養蠶教師講習會を開催する等、專ら養蠶教師の素質の向上に努めたり。尙大正十二年制定したる乾繭場設置奬勵規程の如き、其目的とする所、繭價維持の一方法にして、畢竟は養蠶奬勵の一施設に外ならざるなり。更に又養蠶經營の重要素たる、桑園の改良に就て、縣は注意する所あり。明治十二年、一旦諭達以後、全く閑却せられたりしが、最近夏秋蠶の發達著しく、桑葉濫採の爲め、桑園は逐年荒廢に傾かんとするに至れり。よつて縣は桑園改良の急務を認め、大正十一年、縣に專任の技術員を置き、既設桑園の改植又は換地改植による夏秋蠶專用桑園の設置を奬勵し、以て桑園改良の實を擧げんとせり。當時制定したる桑園改良奬勵規程は、此目的に基きたるものなり。

以上輓近に於ける縣の奬勵施設は、よく當業者の自覺と相俟ちて、面目を一新

して、再び先進縣たる名聲を恢復するに至れり。

現在（大正十三年）に於ける、養蠶戸數は、七萬九千二百四十戸を算し、農家戸數の七割、全戸數の約三割を占め、其掃立枚數百四十三萬六千枚、其收繭額、五百四十一萬五千餘貫にして、全國中長野に次いで、第二位となる。收繭額明治九年の十七萬六千九百五十一貫、明治三十四年の二十一萬五千七百八十九石に比し、最近に於ける其發達實に驚くに堪へたり。而して其掃立一枚に對する收繭額桑園一段步に對する收繭額、最近二十箇年產額表に就いて調査するに、一進一退は多少免れざるも、大要左の如くなり。

| | （繭産額）春蠶 | 秋蠶 | 計 | （對一戸收繭額） | （對掃立一枚收繭額） | （對一反步收繭額） |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 明治二十八年 | 一,四六八,五六〇貫 | 五二七,〇三〇貫 | 一,九九五,五九〇貫 | 二六,二〇〇貫 | 二,二九貫 | 七,〇〇〇貫 |
| 大正三年 | 二,二五五,四六〇 | 一,一三四,四八〇 | 三,三八九,九四〇 | 五六,三二〇 | 一,八七〇 | 九,九六〇 |
| 大正十三年 | 三,一六八,七〇五 | 二,二四六,八五四 | 五,四一五,五五九 | 六八,二〇〇 | 三,七七二 | 一四,七五五 |

對一戸收繭額の二、五倍に上りしは、夏秋蠶飼育の普及したる爲めにして、其掃立一枚收繭額の三倍、及び對一段步收繭額の二倍は、是れ養蠶飼育法の異常なる進步の結果に依るものと云ふべし。

## 養蠶累年比較表

| (年次) | (桑畑) | (養蠶戸數) | (掃立枚數) | (繭産額) | (價額) |
|---|---|---|---|---|---|
| | 町 | 戸 | 枚 | 石 | 圓 |
| 明治二十八年 | 一六、一三五、七 | 八二、五〇六 | 二九二、一八二 | 二〇、九六〇六 | — |
| 同 三十三年 | 二八、一二一、二 | 九〇、五一八 | 三一三、三六六 | 三、八四一五 | 一〇、〇一〇、六三〇 |
| 同 三十四年 | 二五、四〇二、〇 | 八七、八六三 | 四三八、三四五 | 二一五、六三〇 | 七、八三三、一三六 |
| 同 三十五年 | 二六、七三五、〇 | 八四、四二三 | 四二二、七五八 | 二〇五、七二一 | 七、二九二、九一八 |
| 同 三十六年 | 二六、五八一、〇 | 八一、八八三 | 四二三、九四八 | 二一八、一八〇 | 八、六五一、三二一 |
| 同 三十七年 | 二七、一四八、〇 | 八一、一九二 | 四四一、八〇〇 | 二二八、六九九 | 七、九六一、一八五 |
| 同 三十八年 | 二八、三二五、〇 | 七九、八九五 | 四二九、八六二 | 一九九、五六〇 | 七、〇二〇、六二三 |
| 同 三十九年 | 三〇、七一〇、四 | 七〇、七六九 | 四三二、二二〇 | 二一一、六一八 | 八、二八三、五三〇 |
| 同 四十年 | 三三、七一〇、〇 | 七五、一七二 | 四八五、二五八 | 二五三、五三三 | 一一、四二二、一九二 |
| 同 四十一年 | 三三、二九八、〇 | 七五、七五九 | 四六五、〇五〇 | 二五三、七四四 | 九、三三七、二八〇 |
| 同 四十二年 | 三四、三七四、〇 | 七三、九四六 | 四六七、五五〇 | 二六九、五八一 | 九、三三〇、一五二 |
| 同 四十三年 | 三四、七四四、〇 | 七三、二八一 | 四八七、〇〇八 | 二八六、三六七 | 九、五六八、〇九二 |
| 同 四十四年 | 三四、〇二〇、〇 | 七〇、八五五 | 四八八、八六六 | 二八一、〇六九 | 九、五四六、〇九八 |
| 大正元年 | 三四、一四七、〇 | 六九、七三二 | 四八四、四九〇 | 三三五、四六四 | 一一、五〇九、七五八 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 同　二　年 | 三四、一三四、〇 | 七〇、四七五 | 四九八、一八二 | 三三三、三七五 | 一二、二〇九、六二〇 |
| 同　三　年 | 三四、〇〇四、一 | 七〇、八六五 | 五〇八、六二〇 | 三三八、九九四 | 一三、三七二、七一三 |
| 同　四　年 | 三四、七三〇、七 | 七七、六一五 | 五三五、四三五 | 三一五、八六八 貫 | 九、一九二、五三五 |
| 同　五　年 | 三五、三二二、八 | 七八、一五六 | 五五六、四三一 | 四〇〇、五六四 | 一八、四七七、〇七八 |
| 同　六　年 | 三五、六二七、二 | 八〇、〇五〇 | 五八四、八二一 | 四五七、〇二七 | 二八、三〇一、二十四 |
| 同　七　年 | 三六、二〇三、三 | 八〇、八二五 | 六〇三、〇七八 | 四七三、一八四 | 三四、六九二、七九三 |
| 同　八　年 | 三六、五七四、五 | 八一、五四二 | 五九七、九二〇 | 四七二、一二三 | 四八、八二五、六八六 |
| 同　九　年 | 三六、七五二、七 | 八〇、八六六 | 五八〇、九五二 | 三七二、四二三 石 | 一八、八〇一、八九三 |
| 同　十　年 | 三六、七二九、一 | 七八、〇〇五 | 四五六、六五五 | 四四七、九八八 石 | 二五、〇三〇、〇八三 |
| 同　十一年 | 三六、四八三、七 | 七九、四八三 | 一、四四四、九五三 | 四、三三〇、九三四 貫 | 三六、四三三、八二六 |
| 同　十二年 | 三六、二一八、一 | 七九、一七三 | 一、四四四、五六二 | 五、一五五、一八五 | 四六、八八四、九五三 |
| 同　十三年 | 三六、七〇三、九 | 七九、三四〇 | 一、四三五、六五四 | 五、四一五、五五九 | 三六、八八四、五二三 |

（備考）（イ）大正三年以前ハ養蠶戸數ノ調査ヲ缺キ、春蠶飼育戸數ヲ以テ之ニ充ツ。

（ロ）大正十年以前ニ於ケル蠶種掃立枚數ハ、百蛾ヲ以テ一枚ニ計算セルモノナリ。

## 二　蠶種業

優良なる蠶種の生産は、養蠶の能率を向上せしむる根源なり。苟くも養蠶の收益を得んとする者は、先づ蠶種の選擇に留意すべきは自明の理なり。溯つて我蠶種業の沿革を攷ふるに、明治維新の前後、蠶種を一貿易品として盛に海外に輸出し、巨利を博したる時代に於ては、本縣の當業者は、巧に機先を制して之に當り、從つて粗製濫造の弊續出したれば、政府は蠶種製造規則、或は蠶種取締規則を發し、本縣亦屢〻法令告諭を出し、其弊を戒飭する所ありしが、目前の商利に迷へる徒、容易に改めず、國益上頗る遺憾とする所なりき。然るに明治十二三年頃より、海外輸出の商勢次第に衰頽に傾きたるが、幸にも本邦養蠶業の發展と共に、國内の需要益〻多きを加へたれば、殆んど獨占的地位を占むること、年亦久しかりき。然るに本縣の蠶種は、他府縣に比し、高率を示し、動もすれば後進府縣に壓倒せられんとする事實は、漸次に當業者の覺醒を促し、明治十九年五月、本縣蠶絲業組合に於ては、蠶病試驗所を前橋北曲輪町精絲原社内に設け、微粒子檢査の先鞭をつけ、同年八月、農商務省省令を以て、蠶種檢査規則を發布するに及び、本縣は明治二

蠶種檢査所の設置

十年八月、縣令第九十四號を以て、蠶種檢査施行手續を定め、檢査所を前橋外十二箇所に設置せり。明治二十六年四月、群馬縣令第十九號を以て、蠶種檢査施行手續を改正し、原種は蠶種業組合蠶種檢査所に於て檢査を行ひ、縣は之が監督に任ずることゝせり。原種に框製を用ゐるは、此時に始まる。然れども未だ不正の原種を以て、蠶種を製造するものあるを以て、本縣は同二十七年五月、及び同八月、相續いて諭達し、當業者に注意を促す所あり。同年六月、蠶絲取締規則、竝に蠶種檢査規則を發布し、蠶種は規定の檢査に合格したるものに非れば、賣買授受し、又は所持飼育することを得ざらしめ、原種は必ず框製に限ることゝし、尙蠶種製造者は同功繭・薄皮繭・汚繭、形狀不正の繭を以て、原料に供すべからざること等をも規定するに至れり。是れ實に本縣蠶種製造上に於ける一大革新なりとす。

明治二十九年十月、縣下蠶絲業者角田喜右作、外二千二百十名連署して、蠶種檢査法の發布を、時の農商務大臣に建白す。即ち左の如し。

伏シテ惟フニ、養蠶ハ我國產業中ノ首位ニシテ、之ガ豐凶盛衰ハ國家ノ消長ニ關スルヤ大ナリ。故ニ之レガ改良發達ヲ謀ルハ、目下ノ最大急務タリ。而シテ之レガ發達ヲ謀ラントスルニハ、須ク先ヅ其根本タル蠶種改良ヲナサザルベカラズ。

蠶種ノ改良ヲナサンニハ、須ク先ヅ之レガ適當ノ檢査及取締法ナルモノナカルベカラザルナリ。曩ニ御省ハ明治十九年ヲ以テ、原種用蠶種檢査規則ナルモノヲ發布セラレ、爾來各府縣或ハ之ニ依リ、又ハ特ニ其府縣限リノ檢査規則ナルモノヲ發布シ、之レガ檢査ヲナスニ至レルモ、皆其目的専ラ微粒子毒撲滅ノ一方ニ偏シ、敢テ其他ニ及バズ。故ニ此病毒ハ漸ク滅却シ、其成績稍見ルベキモノアリト雖モ、未ダ以テ蠶種全部ノ改良ナルモノニ至ツテハ、缺漏不備ノ點亦少シトセズ。由テ其法ヲ改善シ、適當ノ制裁ヲ加ヘ、以テ斯業ノ改良發達ヲ謀ランコトヲ、茲ニ別紙檢査法草按ヲ添ヘ、閣下ノ尊嚴ヲ冒シ、敢テ建言ス。希クハ生等ノ微意ヲ納レ、速ニ該法設立ヲ見ルニ至ランコトヲ希望ノ至リニ堪ヘズ。頓首再拜。

（檢査法草按省略。）

翌三十年二月、前橋市田中左金吾外八百七十一名より同上の建白書を出す。是年三月、法律第十號を以て、蠶種檢査法を頒布せられ、全國一定の檢査を行ふことゝなれり。本縣當業者の建白大に與つて力ありと云ふべし。同三十八年七月、縣は夏秋蠶種取締規則を發布して、夏秋蠶種の販賣を取締ることゝなせり。縣は進んで蠶病豫防に就いて徹底を期すべく、明治三十八年、蠶病豫防法の實

蠶病豫防事務所

施せらるゝに當り、蠶病豫防事務所を前橋・高崎・藤岡・伊勢崎の四箇所に置き、毎年四月より十二月に至る間、高崎支所は澁川・安中に、藤岡支所は富岡に、伊勢崎支所は境・館林に出張所を開設して、事務に從はしむ。明治四十一年度より、母蛾檢査擔當吏員に、女子を採用したるに、頗る良好なる成蹟を得たるを以て、今後尙多からんことを力め、又蠶病消毒の蠁蛆驅除等に就きては、夙に各團體と氣脈を通じて、鋭意撲滅を圖りつゝあり。

蠶種檢査所設立

明治三十一年、蠶種檢査法の施行せらるゝや、蠶種檢査所を前橋・高崎・藤岡・富岡・安中・澁川・伊勢崎・太田・館林の九箇所に置き、更に母蛾檢査期間に於て、新町・玉村・豐受・島村の四箇所に出張所を設け、前橋を常設とし、他の檢査所は四月に、出張所は九月に開始し、共に十二月に閉鎖せり。後明治三十八年、蠶病豫防法の實施せらるゝに當り、前橋・高崎・藤岡・伊勢崎の四箇所に、蠶病豫防事務所を設け、澁川・安中・富岡・境・館林の五箇所に期節出張所を置きしも、明治四十年に至り、從來の蠶病豫防事務所を支所とし、本所を縣廳内に設けて、全管を統轄せり。

蠶業取締所

明治四十五年一月、蠶絲業法實施せらるゝに至り、從來の蠶病豫防事務所を、蠶業取締所・支所・出張所と改稱し、尙事務及び斯業の便宜に鑑み伊勢崎支所を廢し

蠶種整理所

て、安中・富岡・境の三出張所を支所に改め、玉村出張所を増設せり。大正二年に至り、組織を改革し、前橋に本所一箇所を新築し、他は母蛾検査期間に於て、高崎・藤岡・境の三箇所に出張所を設け、安中、富岡・澁川・玉村・館林の五箇所に蠶種整理所を置き、翌三年には高崎出張所及び澁川整理所を廢止し、以て大正七年に至れり。大正八年、藤岡・境に支所を置き、富岡・安中・玉村・館林に出張所を置きしが、大正九年に至り、富岡、安中・玉村・館林の出張所を支所とし、其他原町・嬬戀・沼田に臨時出張所を設け、一般蠶病の豫防驅除に從事せしめたり。かゝる間に、本縣蠶種製造業者は大正九年、病毒輕減の策を立案講究して、具體的施設を縣に請願したり。乃ち縣は其願意を容れて、翌十年より愈〻之を實施することゝせり。尋いで大正十一年、全國に率先して、蠶業取締所に遠心器を設置し、翌十二年より、原蠶種母蛾檢査に之を應用して、病毒の絶滅を期し、更に蠶種製造業者中、檢査成績の不良なる者に對しては、所謂特別指導を行ひ、以て病毒の輕減に努め、超えて大正十三年度より當業者の請願に基き、軟化病取締の勵行をなす等、極力蠶種の素質を向上せしめんことを期せり。以上は蠶種の取締に關する沿革を叙したるものなれど、この他優良なる蠶種の積極的生産法とも見るべき蠶業試驗場を設置せり。

## 蠶業試驗場

蠶業試驗場は、原蠶種の製造配付、竝に試驗、及び調査等を行ふものにして、群馬縣原蠶種製造所の後身なり。抑本縣に於ては明治三十一年、始めて縣立農事試驗場に蠶桑部を設け、爾後年々蠶桑に關する各種の試驗調査を實施し、一般當業者に範を示し來りしが、時勢の趨勢に鑑み、明治四十四年、通常縣會の決議を經て、新に、原蠶種製造所を設置する事となり、大正元年十一月、地を前橋市前代田にトして、建築の工を起し、翌年三月より農事試驗場に一時假事務所を置き、原蠶種製造所の事務を開始し、翌四月工事の竣るを待ちて移轉せり。而して農事試驗場蠶桑部の事務を繼承して、漸次其規模を擴張し、品種比較試驗・交雜種試驗・原蠶種製造竝に配付に力め、縣下養蠶業・蠶種業の改良上進に資しつゝありしが、其製造竝に配付の數量は、普く一般の要望に應ずる能はざるの缺陷ありしかば、大正七年、本縣蠶絲業織物業聯合研究會は、其決議に基き、蠶種の配附數量を三十萬蛾に增加せられん事を縣に陳情する所あり。一面蠶種業製造業者より設備擴張を條件として、寄附金の出願ありたるを以て、縣は之を容れて、設備を擴張し、直に二十萬蛾配附の計劃を樹て、大正八年より、其實行に着手し、稍、從來の缺陷を補ふことを得たり。然るに大正九年九月、不慮の火災に遇ひ、建物の過半を燒失せり。

原蠶種製造所を蠶業試驗場と改稱

翌大正十年四月、總社分場を設置し尋いで大正十一年、更に尾嶋支場を設置せられたるを以て、設備漸く舊に復せり。斯くて大正十一年五月、農商務省令の改正に基き、原蠶種製造所を改めて、蠶業試驗場と稱し、單に原蠶種の製造配付をなすに止まらず、併せて試驗研究に努め、其成績を公表することゝなれり。而して大正十三年三月、尾嶋支場の廢止となり、之が爲め原蠶種の配付、數量十四萬蛾に減少せり。此の如き施設は着々効を奏して、病毒率は年と共に次第に減少し、又蠶品種の統一も亦成りて、一時頽勢に傾かんとせる本縣蠶種は、挽回の機運に向ひつゝあり。然るに其製造額に於て、却つて減少を來し、縣內掃立の所要數に充たざるの狀態にあり。左に最近二十箇年間の蠶種製造者數、竝に製造額を掲載す。

### 最近二十箇年蠶種製造者數竝製造額

| (年次) | (蠶種製造者數) | (春期) 原蠶種 | 有毒歩合 | 普通蠶種 | 合格歩合 | 計 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 明治三八年 | 六九八戸 | 八〇,六九六枚 | 三七,〇% | 一,一八三,五五〇枚 | —% | 一,二六四,二四六枚 |
| 同 三九年 | 六六七 | 八四,〇六一 | 一五,五 | 九七八,八二一 | — | 一,〇六二,八七二 |
| 同 四〇年 | 七六七 | 一一〇,二一六 | 一五,九 | 一,二三九,六六〇 | — | 一,三四九,八七六 |

| （年次） | （夏秋蠶）（原蠶種）枚 | （有毒歩合）% | （普通蠶種）枚 | 合格歩合 % | （計）枚 | （合計）枚 | （指數） | （百分比）（春）% | （秋）% |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 明治三八年 | 五、九五七 | 二三、三 | 八六、四九三 | ― | 九二、四五〇 | 一、三五六、六九六 | 一〇〇 | 九三、一九 | 六、八一 |
| 同　三九年 | 二七、七七四 | 一〇、八 | 一八七、二九二 | ― | 二一五、〇六六 | 一、二七七、九三八 | 九四 | 八三、二九 | 一六、七一 |
| 同　四〇年 | 四三、一二六 | 三〇、七 | 二九七、四〇八 | ― | 三四〇、五三三 | 一、六九〇、四〇六 | 一二五 | 七九、九〇 | 二〇、一〇 |
| 同　四一年 | 五九、八五九 | 三五、四 | 二一四、一一五 | ― | 二七三、九七四 | 一、五七四、〇七九 | 一一六 | 八二、五九 | 一七、四一 |
| 同　四二年 | 一一八、一六二 | 三三、五 | 二五四、二九三 | ― | 三七二、四五五 | 一、五九四、三一九 | 一一五 | 七六、六四 | 二三、三六 |
| 同　四三年 | 一三七、一三九 | 二六、二 | 二八三、二五三 | ― | 四二〇、三九二 | 一、七九六、一六六 | 一三三 | 七六、六〇 | 二三、四〇 |
| 同　四四年 | 一八九、九六四 | 三二、六 | 三一六、七八三 | ― | 五〇六、七四七 | 一、七八三、五八九 | 一三一 | 七一、五九 | 二八、四一 |
| 大正　元年 | 二三一、五三二 | 一五、八 | 二七七、九四七 | ― | 五〇九、四六九 | 一、九二三、一八九 | 一四一 | 七三、五一 | 二六、四九 |
| 同　二年 | 二四五、八一四 | 六、〇 | 二一八、四八三 | ― | 四六四、二九七 | 一、七五七、五二四 | 一三〇 | 七三、五八 | 二六、四二 |
| 同　三年 | 二九四、八三四 | 七、七 | 二四七、五六八 | ― | 五四二、四〇二 | 一、七六四、五五二 | 一三〇 | 六九、二六 | 三〇、七四 |
| 同　四年 | 三三八、二五〇 | 五、七 | 二八二、二四三 | ― | 六二〇、四九三 | 一、八四九、七二七 | 一三六 | 六六、四五 | 三三、五五 |
| 同　五年 | 四〇六、〇六三 | 一〇、三 | 二〇二、三三三 | ― | 六〇八、三九六 | 一、八一六、〇六五 | 一三四 | 六六、五〇 | 三三、五〇 |
| 同　六年 | 五七八、二四九 | 六、九 | 一一九、九四三 | ― | 六九八、一九二 | 一、八八六、三八四 | 一三九 | 六二、八四 | 三七、一六 |
| 同　七年 | 二六、五〇〇 | 一二、九 | 九五四、六五六 | 二五、三 | 九八一、一五六 | 二、〇九二、六五七 | 一五四 | 五三、五七 | 四六、四三 |
| 同　八年 | 二九、三二七 | 九、六 | 九六二、一八六 | 三六、二 | 九九一、五一三 | 二、〇九〇、四六七 | 一五四 | 五二、七四 | 四七、二六 |
| 同　九年 | 二一、五三〇 | 九、五 | 八五五、四三六 | 三二、一 | 八七六、九六六 | 一、八二三、〇七六 | 一三四 | 五一、八八 | 四八、一二 |
| 同　一〇年 | 一七、四五三 | 四、二 | 七二四、七一八 | 九、一八 | 七四二、一七一 | 一、五八六、二三三 | 一一七 | 五三、二三 | 四六、七七 |

| 同　一一年 | 一三五〇 | 一三 | 六二、七〇〇 | 九二六 | 六三四、一八〇 | 一、四四二、三四一 | 一〇六 | 五六、七五 | 四二、二五 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 同　一二年 | 一二〇三 | 一〇 | 六五七、八〇〇 | 九五八 | 六六八、九二三 | 一、四六二、八〇三 | 一〇八 | 五四、三〇 | 四五、七〇 |
| 同　一三年 | 一一二八 | 一〇三 | 六三四、七一九 | 八六四 | 六五五、九四七 | 一、三六八、一五六 | 一〇三 | 五四、一九 | 四五、八一 |

(群馬縣布達令書・群馬縣蠶絲業沿革調査書・群馬縣之蠶絲業に據る。)

## 第五項　水產業

本縣水產業に關する最初の布達

本縣水產業に就ては、明治十二年九月十日縣は乙第百五十七號を以て、水產保護に關する件として、左の布達あり。

水產保護ノ儀ニツキ、勸農局ヨリ特更ニ照會ノ趣モ有之、其趣旨タル、該產ニ於ケル各地方其從來適宜ノ慣例モ有之處、廢藩置縣ノ際、頻リニ新法ノ行ハレシガタメ、捕魚採藻ノ事モ、自カラ舊規ノ束縛ヲ脫シ(爲メニ弊風ヲ矯正スル處アリト雖モ、滋息ノ源塞ガリテ該業ノ利次第ニ衰耗セルモノ多シ)テ、其方法ヨリ器具ノ使用ニ至ルマデ、多分ハ其自由ヲ得タルガタメ採魚ノ途駸然トシテ日ニ開ケ、遂ニ水產ヲシテ生息ニ暇ナキノ嘆ヲ免レザラシムルニ至レリ尤舊藩ノ遺法ハ、頗ル束縛ノ弊アリテ、今日現業ノ適當ナルニ若カザルモノ多カルベシト雖、數百年來ノ經驗ニ據テ成立シタル處ノ制法ハ、當局ノ想像ヲ以テ強チニ廢棄スベカラザルノミナラズ、之

ガ爲メ或ハ他ニ大害ヲ及ボスコト亦少カラザル也。依テ此際新舊沿革ノ中ニ就キテ、得失利害ノ存スル處ヲ篤ト調査ノ儀ニ有之。然レドモ河川ノ洪ナル、營業ノ多キ、舊慣現行ノ別各地均シキコト能ハザレバ、實際取調方モ素ヨリ同一ヲ得ベキニ非レドモ凡別紙ノ式ニ倣ヒ、舊藩ノ慣例現行ノ規則ヨリ、地方ノ分割合併若クハ廢藩置縣ニ據リテ、增補新設ノ方法、竝採漁ニ供スル所ノ器具類其他、漁場ノ仕來專有共有ノ區域處分等ノ沿革ニ至ル迄、苟モ資料ニ供スルニ足ルベキ件々ノ詳細調査ノ上、本月三十日ヲ期シ、書類取纒進達可致、此旨相達候事。

右の布達は明治以後、本縣に於て水產業に關する布達の初見なり。蓋し本縣の地形上、河川湖沼に產する水產額は、餘り問題とならず、勸農局の照會による他動的布達にすぎず。其後に於て明治二十一年二月訓令して、管下水產物調查成績を徵したることありたれども、奬勵指導に至らず。唯政府の法令に從ひ、其適用上施行規則を制定したるのみ。從つて水產物も其產額微々たるものなりしが、日露戰役後、產業勃興時代に於ては、苟くも遺利あれば、開發せずんは止まざるの時運に際會したれば、茲に本縣の水產業は、勃興の機運に進み、大正四年度より、縣農務課内に專任技術員一名を置き、一般監督指導奬勵の任に當らしむ。大正七年に至り、副業奬勵事項の一として、淡水魚養殖を擧ぐるに及び、着々施設する

所あり。即ち河川漁業の發達を圖る爲め、區劃漁業に依り、魚苗の放流を獎勵し、且つ鮎の禁漁期間（一月より五月まで）を設けたり。水面利用養魚は、極力指導獎勵の結果有利なるを以て、起業するもの簇出するに至れり。大正十二年度より鯉・鮒・鰻の仔魚、及び紅鱒卵の無償配布をなし、尙之が飼育管理及び實地指導をなし、飼育に關する智識の啓發に努め、斯業の改良發達を促せり。大正十三年度よりは、鮎の人工孵化を行へり。最近に於ける本縣水產業の一班は左の如し。

（一）水產養殖高及水產製造物（最近六ヶ年間統計）

| | （養殖場數） | （養殖場面積）坪 | （水產養殖收獲高）（鯉）（數量） | （價格） | （鰻）（數量） | （價格） | （其他價格） | （價格合計） | （水產製造物價額） |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 大正八年 | 三八六 | 一、六〇四、四〇九 | 四六、三五一 | 二三六、六八八 | 九七四 | 四、六二七 | 二七、六七六 | 二五八、九九一 | 九、一八三 |
| 大正九年 | 三九九 | 一、五七三、三〇五 | 五〇、〇八三 | 一三七、六四一 | 七六八 | 三、〇七九 | 六三一 | 一四一、四〇一 | 九、九五五 |
| 大正十年 | 五三三 | 一、七三五、四九二 | 五四、六七四 | 一八八、六五〇 | 八〇 | 三、三二五 | 三、〇九〇 | 一九三、九五五 | 二四、八八五 |
| 大正十一年 | 五〇五 | 一、八五三、九三九 | 六九、三三五 | 二二三、五八七 | 九八二 | 四、二三〇 | 二、六六五 | 二三〇、三七二 | 二四、五四六 |
| 大正十二年 | 七二五 | 一、八八九、四四六 | 八三、五九一 | 二一〇、四一九 | 九五七 | 六、一二七 | 三、五八五 | 二二〇、一三三 | 一八、五六六 |
| 大正十三年 | 八三〇 | 一、九七、〇〇五 | 八〇、〇六九 | 二三六、〇六六 | ― | ― | 二七、八〇〇 | 二六三、八六六 | 一七、八七八 |

## （二）水産漁獲物（最近六ヶ年統計）

| | （鮎）（數量） | （鮎）（價格） | （鯉）（數量） | （鯉）（價格） | （鰻）（數量） | （鰻）（價格） | （其ノ他價額） | （合計價額） |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 大正八年 | 七、四三四 | 五六、五九六 | 五〇、八七九 | 一四〇、七五九 | 六、三一二 | 四九、五三〇 | 八〇、七三一 | 三二七、六一六 |
| 大正九年 | 六、四七一 | 四七、五六六 | 五三、五六九 | 一四四、六九五 | 四、三四四 | 二五、二〇一 | 五七、八三三 | 二七五、二九五 |
| 大正十年 | 七、〇〇一 | 五八、二四一 | 一一、五三九 | 四一、九〇三 | 四、八〇九 | 三〇、九〇八 | 四九、一二九 | 一八〇、一八一 |
| 大正十一年 | 八、〇八一 | 七五、五三一 | 九、七七六 | 三三、六四三 | 四、七〇三 | 二九、〇九八 | 四三、七九二 | 一八一、〇六三 |
| 大正十二年 | 六、八四〇 | 六四、〇四九 | 五、七一八 | 二〇、〇三六 | 五、一一〇 | 二九、三八七 | 五八、三六三 | 一六一、八三五 |
| 大正十三年 | 六、六九六 | 六二、一三〇 | 五、四七四 | 一九、一八三 | 四、三三九 | 二八、三九五 | 四五、〇一三 | 一五三、七一〇 |

## （三）水産業者及漁船

| | （漁撈） | （製造） | （養殖） | （計） | （漁船） |
|---|---|---|---|---|---|
| 大正十年 | 二、二九二人 | 四七九人 | 三〇一人 | 三、〇七二人 | 四九〇 |
| 大正十一年 | 一、九一三 | 四六一 | 三三五 | 二、七〇九 | 四七四 |
| 大正十二年 | 一、八二六 | 四五一 | 三九一 | 二、六六八 | 四四〇 |
| 大正十三年 | 一、八一〇 | 三六一 | 四九六 | 二、六六七 | 四〇五 |

（四）免許漁業數

定置漁業　五二　（内　簗漁業　三〇　魚堰　八　堰筌　一四）

區劃漁業　四八　（内　河川　二九　溜池　一九）

（五）漁業組合

| （組合名） | （事務所々在地） | （地區） | （組合員數） | （設立年月日） |
|---|---|---|---|---|
| 日向漁業組合 | 邑樂郡多々良村 | 邑樂郡多々良村大字日向 | 一三五名 | 明治四三、一一 |
| 城沼漁業組合 | 同　赤羽村 | 館林町・六郷村・赤羽村・郷谷村 | 四五八 | 大正　三、六 |

（群馬縣水產業之一斑。）

## 第六項　工業通說

本縣工業の主要產物たる生糸・織物は、德川時代既に發達し、明治三年、製絲業に夙く泰西の器械製を輸入し、織物業者亦西洋の染織法を採用し、明治十年前後には、此二業者共に家內工業より機械工業へ、小工業より大工業へ轉換の一步を踏み入れ、新工業勃興の機運に向ひたれど、こは二業に限りて、其他の工業に及ばざりしが如し。因りて明治十一年一月卅一日、乙第拾貳號を以て、正副區長に宛て、

諸工業振起の件に就き、左の布達を發せり。

地方著名ノ物産ヲ蕃殖セシメ、廢頽ニ歸セントスル諸工業ヲ振起シ、不毛地開墾等ノ儀ニ付、各地生産會社ノ者共、現場實視、直ニ照會質問等致シ度旨、同社ヨリ申出聞置候條、右樣ノ場合ニ於テハ、最墾切ニ應答致シ、專ラ土地ノ繁榮ヲ起シ候樣注意可致、此旨豫テ相達候事。

本邦モスリン製織の嚆矢

而も前記二業を措いては、本縣に如何なる工業が發達せしかは、甚だ明瞭ならず。二業に就いては次に特説す。明治二十七八年戰役以後、政府は國富增進の爲め、農業と共に工業の隆盛を圖らざるべからずとし、工業に向ひても保護奬勵の策を採りたる結果、二業以外の新工業漸次に興起するに至る。其先驅を馳せたるは、上毛モスリン株式會社の前身たる毛布織合資會社にして、明治二十七年十一月の創立、實に本邦モスリン製織の嚆矢たり。之に次ぐは日清製粉株式會社館林分工場の前身たる館林製粉株式會社にして、明治三十三年十月の創立なり。三十五年に至りて、模範工場桐生撚絲株式會社設立せられ、絹織物の原料たる撚絲の改良發達を圖るを目的とせり。其翌三十六年には、明治二十年一旦三井家の有に移りたる新町紡績所が、是年再轉して、同業會社合同の手に歸し、絹絲紡績株式會社と

改稱し、事業を擴張し、原料に繭絲・屑絲・出殼繭・熨斗絲・生皮苧・揚繭・生糸屑等を用ゐ、絹絲の紡績をなし、新工業逐年興起したるが、是等の會社は、日露戰役以後益隆盛となり、醸造工業・製鐵業・漆器工業等も亦起り、明治四十三年の一府十四縣關東北聯合共進會は、工業方面の進步に一大刺戟を與へ、本縣の工業面目を一新するに至れり。是等新興の機運は、歐洲大動亂と共に一層勃興し、特に電力供給に利便多き本縣は、各種の工業の發達を助長し、中島飛行機製作所は新田郡太田町に、大正六年十二月より事業を開始し、民間飛行機製作所の範を示し、大正七年以後、副業奬勵の結果は、愈竹細工・木工品・眞綿・玉絲・麻苧等の家內工業の發達を招來したるを以て、本縣の工業は愈發達して、大正十二年の產額一億七千二百七十八萬八千三百六十圓に達し、生產總額に對して六割强を占め、單に工產額のみを以て全國に比するに、各府縣中第六位にして、大阪・愛知・京都・東京・兵庫に次げり。（但此比較は何れも酒類醬油を含まず）而して是等產額の大宗は、勿論生糸・染職工業にありといへども、其他の工業、機械器具工業・化學工業・飲食物工業、及び雜工業等、各種の發達著しきものあり。大正十年より、同十二年に至る、三箇年間に於ける分類比較表は左の如し。

工産物價額比較表（蠶絲類ヲ除ク）

| （年次） | （染織工業） | （機械器具工業） | （化學工業） | （飲食物工業） | （雜工業） | （計） |
| --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- |
| 大正十年 | 一二八、一七二、四五八 | 一八九、八五四 | 一八七、一八七 | 一四、三四五、一八〇 | 三、〇〇〇、九九四 | 一四五、八九五、六七三 |
| 大正十一年 | 一一〇、四三三、一〇九 | 三三二、四八二 | 一七二、九八八 | 一一、六二八・四三九 | 二、九二〇、三八七 | 一二五、四八七、四〇五 |
| 大正十二年 | 九六、五一九、〇一六 | 三九一、五七〇 | 一六二、二七六 | 一三、一七七、四九八 | 三、三四七、四四三 | 一一三、五九七、八〇三 |

試みに大正十三年に於ける、染織工業以外の工業品種を工業種別に掲記すれば、左の如し。但拾萬圓以上。

| （種別） | （品種別） | （金額） |
| --- | --- | --- |
| 飲食工業 | 酒 | 七、二三二、〇一二圓 |
| | 味噌 | 四三三、四九二 |
| | 醤油 | 四、五二七、二二七 |
| | 麹 | 一、五三七、八六二 |
| 化學工業 | 和紙 | 一三七、三三五 |
| 機械器具工業 | 鐵製鍋釜及鐵製瓶類 | 一三六、〇〇〇 |
| | 刄物類 | 四一二、八一二 |
| | 瓦 | 五五一、六四四 |
| | 皮革製品 | 二七七、六四六 |

| 雜工業 | |
|---|---|
| 木製品 | 一、九〇〇、八七六 |
| 竹製品 | 三二一、六七〇 |
| 藁製品 | 一四九、二八八 |
| 足袋 | 一三九、四八〇 |

次に是等工業に從事する工業戸數は、大正十年以後、最近の分は、國勢調査に依る旨規定せられてより、未だ判明せずといへども、大正九年以前の總計に依り、略其概數を推測することを得べし。之に依るときは、本縣總戸數、大正四年末現在十八萬四千五百二十六戸中、農業十萬九千四百八十六戸、商業二萬九千五十八戸、工業四萬五千九百八十二戸、而して各業の總戸數に對する百分比は、農五九%、商一六%、工二五%の割合なり。爾後年々各業共増加を示し、大正九年末に於て、農業十一萬千三百七十四戸、商業三萬四千三百二十四戸、工業五萬四千四百八十戸、其總戸數に對する割合は、農五六%、商一七%、工二七%なり。大正四年より大正九年末に至る六箇年間に於て、各業戸數の増加は、農業千八百八十八戸、商業五千二百六十六戸、工業八千四百九十八戸を示し、大正四年現在戸數に對する増加率は、農業〇、〇一七强、商業〇、一八强、工業同じく〇、一八强なり。是等を概括するに、總戸數に對する各業の割合は、大凡農は五九%乃至五六%なるも、増加率最も低

く、商工の二業は増加率殆んど相等しきも、商業が僅に一六%乃至一七%なるに比し、工業は二五%乃至二七%を示せり。

次に又是等工業に從事する工場法適用工場を見るに、大正十年に於て、工場數二百十六、職工數一萬一千百二十八、大正十三年度に於ては、工場數二百八十九、職工數一萬四千百五十三人なり。而して各種工業中、依然染織工業首位を占め、大正十年度、工場數は全工場の七割六分强、職工數八割九分强を占め、大正十三年度に在りても、工場數七割四分强、職工數八割二分强を占めたり。

最近工場一覽表

| (區分) | (大正十年) | | | | (大正十一年) | | | | (大正十二年) | | | | (大正十三年) | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 工場數 | (職工數) | | | 工場數 | (職工數) | | | 工場數 | (職工數) | | | 工場數 | (職工數) | | |
| | | (男) | (女) | (計) | | (男) | (女) | (計) | | (男) | (女) | (計) | | (男) | (女) | (計) |
| 染織工業 | 一六六 | 二、三八八 | 七、五三六 | 九、九二四 | 二〇四 | 二、六九九 | 七、九三三 | 一〇、六三二 | 二四三 | 二、五九八 | 七、八四七 | 一〇、四四五 | 二一五 | 二、六七〇 | 八、九七七 | 一一、六四七 |
| 機械器具工業 | 一五 | 四三五 | 四五 | 四八〇 | 一三 | 六八二 | 六六 | 七四八 | 二一 | 八三七 | 六三 | 九〇〇 | 二五 | 九九七 | 七二 | 一、〇六九 |
| 化學工業 | 一五 | 一六五 | 三〇 | 一九五 | 二〇 | 二三六 | 四〇 | 二七六 | 一七 | 二二一 | 五一 | 二七二 | 一八 | 二五〇 | 四二 | 二九二 |
| 飲食物工業 | 一三 | 三二二 | 一三 | 三三五 | 一四 | 四〇六 | 一五 | 四二一 | 二一 | 七一四 | 二九 | 七四三 | 二四 | 八三三 | 三五 | 八六八 |
| 雜工業 | 七 | 一七五 | 二一 | 一九六 | 一三 | 三四八 | 三六 | 三八四 | 一三 | 四二四 | 四四 | 四六八 | 七 | 二五一 | 二六 | 二七七 |
| (計) | 二一六 | 三、四七五 | 七、六四五 | 一一、一二〇 | 二七三 | 四、三七一 | 八、〇九〇 | 一二、四六一 | 三一四 | 四、七九四 | 八、〇三四 | 一二、八二八 | 二八九 | 五、〇〇一 | 九、一五三 | 一四、一五三 |

## 第七項　蠶絲業

本縣の蠶絲業は、德川時代夙に發達し、幕末横濱開港となり、生絲輸出の道行はるゝに及び、斯業頓に勃興し、面目頓に一新せり。大正の今日に至つて、其産額日本第三位を下らず。實に本邦著名の生絲産出縣なりとす。而も斯業の振興は、必しも縣當局の勸奬にのみ賴りたるに非ず。民間有志者の自治的に改良上進を企て、其目的を達したるは、養蠶業と共に本縣産業史上特筆大書すべき價値あるものなり。元來我國の蠶絲は、手挽提絲製にして、器械製絲なく、海外貿易上頗る不利なりき。此時に當り、此器械製絲に就き先鞭をつけたるは、實に本縣なり。

器械製絲所の新設

明治三年、前橋藩士速水堅曹、南勢多郡岩神村に地をトし、十二人取りの器械場を新築し、瑞西人ミウラーなる者を傭聘して、教師となし、製法の傳習をなす。之を前橋製絲場と稱す。此年政府は官設模範製絲場設置の擧あり。上・武・信地方中、富岡の適當せるを見て之を指定し、工事に着手し、五年十月、事業を開始す。教師は佛人ブリューナ氏外十人にして、佛國式器械の運轉をなし、汎く傳習して斯業發展の階梯たらしむ。翌六年六月には、　皇后・皇太后の行啓ありて、實況御視察

座繰製絲精絲會舍

せらるゝあり。明治六年佐位郡伊勢崎町に製絲共研會起り、同七年、南勢多郡水沼村に水沼製絲場を設け、同八年、同郡關根村に製絲研業社を起し、各器械製絲の模範となりしが、未だ以て提絲の製造を器械製に轉換すること能はず。而して手挽提絲製には、家內工業としての特徴あり。之を適當に改良し、品質を向上せしむるに於ては、又時宜に適應する良策たるを以て、此目的を以て明治十年八月、前橋在住の士族等相謀り、深澤雄象を盟約主とし、精絲會舍を起し、座繰製絲改良申合をなしたるを始とし、縣下諸所に起る。明治十一年一月、前橋町に精絲會舍起り、共同製絲の方法に依り、製絲の品位を一定せんとせり。此會舍は、後に精絲原社と改め、同年九月、天皇行幸巡覽の光榮を得たり。本社は率先して、座繰製絲の提絲束裝を、捻造束裝に變更し。亞いで改良座繰生絲從來の座繰に洋式器械中より一部の器具を採りて添付したる座繰にて製したるものの製出あり。倶に良成蹟を得、大に縣下製絲の面目を新にせり。是れ後に橫濱市場に於て、外商より聲價を博し、莫大の取引ありし上州座繰製絲の記念となすべき事項なり。此年五月、碓氷郡磯部村に、同地方の有志相謀り、碓氷精絲社を設立す。是れ農家各自飼育の繭を以て、毎戶一定の製絲をなし、之を集合類別し、地方仲買の手を經ず、直に橫濱市場に於て鬻ぐの法、即ち農家製

碓氷社

絲合同販賣團體の嚆矢にして、碓氷社の起原なり。此の如き共同販賣團體は、各地に續設せられ、明治十二年中には縣下百有餘の數に至れりと云ふ。

甘樂社の設立

明治十三年三月縣下の蠶業熱心家相結んで、上毛繭絲改良會なるものを設立し、前橋本町生絲改所内に會合して、養蠶製絲に關する十二の項目を掲げて、之を商議せり。其目的は地方固有の繭絲を改良し、名聲を炫燿し、産額を增加せしむるにあり。次いで明治十三年五月、北甘樂精絲會社を設立す。即ち郡中揚返工場十三箇所の合同販賣の始めにして、甘樂社の前身なり。（明治二十六年、西部所在の二十四組分離して、下仁田社を組織するに及びて、二十八年甘樂社と改稱せり。）同十月曩に設立せられたる上毛繭絲改良會は、組織を變更し、上毛繭絲改良會社と改稱し、星野長太郎を會長とし、十二月一日開業を

上毛繭絲改良會社

舉げ、先づ第一に生絲の品位を一定するを以て急務とし、十二名の檢査役を置き、之を六箇所に分遣して、社中一般に巡回檢査を爲せり。かくて本縣製絲の改良、漸を逐ひて緒に就けり。民間の氣勢此の如くなれば、本縣亦令諭達して、粗製濫造不正行爲の弊を戒飭し、生絲製出檢査規則を制定する所ありたり。明治十七年七月、本縣は生絲製出檢査規則を廢し、蠶絲組合準則を布達し、器械製絲所・改良座繰製絲會社の如き出願許可を受けし者の外、蠶絲仲買商は、地方の景況に從

蠶絲組合準則

び、郡又は町村の區畫により、組合を設置せしめ、各組合中、便宜の地に改所を設け、組合內蠶絲の出荷高、並に良否を檢査することを得しむ。明治十八年十一月、農商務省は、各府縣へ蠶絲業組合準則を示達するに及び、本縣は同十九年一月、之に基きて蠶絲業組合準則を布達し、關係布達を廢せり。よつて縣下各郡當業者は惣代人を選び、前橋に會合せしめ、縣下各組合の規約を統一する爲めに、組合規約草案を協議し、縣の認可を請へり。而して尙之を連繫機關として、各郡組合を連合して、群馬縣蠶絲業組合取締所を設置し、取締所一箇所、事務所十三箇所、便宜の地に出張所を置き、區內の事務を整理せしむ。此頃に至り、縣內篤志の士、海外に出張し、斯業を視察する者多く、吾妻郡田中甚平は明治二十二年勢多郡星野長太郎は二十三年、佐波郡德江八郎は二十六年、各〻海外に渡航し、蠶絲業發達の爲め、稗益したる所少からざりき。

下仁田社

明治二十六年七月、下仁田社設立せられ、本縣の製絲界は愈〻活氣を呈し、當業者の活躍は、明治二十七年四月、橫濱の生絲賣込拒絕事件の中心となりて、外商一般の態度を一變し、生絲貿易上に便宜を得しめたり。同十月二十日、本縣有志者發起となりて、關東蠶絲業大會を前橋市本縣議事堂に開き、埼玉・千葉・栃木・福島・長野・

關東蠶絲業者大會

新潟・岩手・神奈川・青森・東京の一府十二縣、其他佐賀及び北海道の有志者も參會し、總員六百餘名に及ぶ。又來賓として農商務次官を初として、本省關係官吏、各縣高等官出席し、華々しく開會せられ、連合會組織せられしも、此一回のみにして、繼續せざりしは、時期の尚早なりし爲めか。されど此大會が準備會の如くなりて、同年十二月五日より、東京溜池大日本農會に全國蠶絲業者大會を開き、爾來年々繼續せられ、かくして蠶絲業の團結を見、國家の方針を一定し、着々效果を見るに至りたるは、本縣蠶絲業の幹旋盡力大なりと云ふべし。明治三十年四月、法律第四十八號を以て公布せられたる生絲直輸出奬勵法の如きは、正に其一なり。本縣の當業者は、爺進んで清國蠶業の視察を遂げ、其調査報告は、又斯業の發達に貢獻したること多し。明治三十一年十一月、本縣勸業諮問會を開かれたる時の諸問事項中、蠶絲業に關するもの其大部分を占めしが如き、亦本縣當局の意のある所を窺ふを得べし。

蠶絲業調査會

翌三十二年十月、本縣は勸業諮問會を開き、蠶絲業調査會規則の原案を議せり。即ち翌三十三年四月、告示第六十六號を以て告示す。本會は知事の監督に屬し、蠶絲業に關する事項を調査攻究し、其他知事の諮問に應じ、意見を開申す（第一條）とあり。委員に學識經驗兩者共、第一流者を集めたるだけに、

蠶絲業同業聯合會

大日本蠶絲會群馬支會

其效果の大なりしことは想像するに難からず。同年六月、佐波新田生絲同業組合設置せられ、他地方之に倣ひて設立せらるゝに及び、蠶絲業の改良發展に盡すあり。此等の組合は、明治三十七年聯合して、蠶絲業同業組合聯合會を組織し、更に氣脈を通じ、營業上の弊害を矯正し、共同の利益を增進するを以て目的とす。其方法の一として、組合員の取扱營業品に對し、檢査法の一定を期する爲め、檢査員を派遣して、檢査を執行す。明治四十年に至りて大日本蠶絲會群馬支會成り、斯業發展の爲め劃策する所少からざりき。斯の如く民間當業者の活躍と、縣當局の機宜の施設とにより、逐年發達を見たりと雖も、時勢の進運は生産能率の增進と、品位の向上統一とを要求するに至りしかば、其結果、器械製絲に變更するもの次第に多きを加へたり。明治四十一年二月の設立に係る、北甘樂郡馬山生産組合の合同機械製絲法は、此轉換期に於て範を示したるものと云ふべし。爾來座繰製絲は衰退し、之に反比例して器械製絲は、長足の進歩をなせり。之を要するに、本縣の製絲業は座繰製絲より器械製絲に、家庭工業より小工場組織に、小工場經營より大工場經營に進み、健實なる進歩の過程を歩みつゝあり。されど近年蠶種類の變遷及び工場法實施の結果、其經營並に能率の增進等、技術的方面に

最近に於ける縣の奬勵施設

於て指導奬勵を要すべき事項尠からざるに至れるを以て、大正七年より、縣に製絲專門の技師一名を置き、指導の任に當らしめ、越えて大正九年、技手二名（内一名女）を設置し、教婦養成の任に當らしめ、更に同年より工女養成の必要を認めたるにより、製絲教師囑託規程を發布し、製絲工場に於て工女養成の爲め、技術員を設置したる場合、縣は製絲教師を囑託し、其養成に努めしめたり。教師の養成は大正九十の兩年度にて打切り、大正十一年度よりは、縣に奬勵の技手一名を增員し、專ら指導奬勵、並に工女養成の監督に當らしむると共に、製絲業に對する各般の指導に任ぜしめ、別に玉絲の改良、屑物の整理に關する指導に當らしむ。而して別に縣立工業試驗場内に、大正七年以來、專任の技術員を置き、製絲の改善指導に當らしめ、大正十一年より、試驗調査を行ふ設備をなし、製絲に關する各般の試驗に着手せしむ。又玉絲製造改善に關しては、大正九年七月創立せられたる群馬縣玉絲製造同業組合に對し、大正十二年度に於て、玉絲檢査所の設備に對し補助をなし、更に其事業に對して、補助金を交付して、之が助成等の方法を採れり。

發達の狀況

明治十二年の生絲產額は四七三八八二斤（五六八六五貫、八四）なり。

| | (器械) | (座繰) | (計) |
|---|---|---|---|
| 明治三十二年 | 二二、四二〇貫 | 二二七、〇五四貫 | 二四九、四七四貫 |
| 同　三十八年 | 二〇、〇二〇 | 一〇六、四〇七 | 一二六、四二七 |
| 大正三年 | 一六四、九三六 | 七二、〇八三 | 二三七、〇一九 |
| 大正十三年 | 四二三、七二七 | 一八、〇六三 | 四四一、七九〇 |

發達の狀況右の如くにして、大正八年より十二年に至る五箇年平均を以て、全國に於ける本縣の位置を調査すれば、製絲戶數二〇九一九戶、十釜以上工場數四一三にして、全國第二位、長野に次ぐ。卽ち左の如し。

| | | (順位) | (備考) |
|---|---|---|---|
| 釜數 | 五七、〇三九 | 三 | 長野、愛知 |
| 十釜以上工場釜數 | 二〇、八三六 | 三 | 同 |
| 產額 | 四九二、二九九貫 | 三 | 同 |
| 價格 | 五一、七五七、三三三圓 | 三 | 同 |
| 屑物產額 | 一五四、〇七〇貫 | 三 | 同 |
| 同上價額 | 一、三九九、八九四圓 | 三 | 同 |

尙參考のために最近二十箇年の累年比較表を左に揭記す。

## 一　最近二十箇年製絲釜數並産額

| （年次） | 工場數 | 器械（釜數） | 器械（産額）貫 | 器械（價格）圓 | 器械（對百斤價格）圓 | （一釜當産額）匁 | 座繰（戸數） | 座繰（釜數） | 座繰（産額）貫 | 座繰（價格）圓 | 座繰（對百斤價格）圓 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 明治三十八年 | 九四 | 三,六二一 | 二〇,〇三〇 | 一,三三九,二〇六 | 九八三 | 五,一〇〇 | 二七,八八四 | 五五,八〇五 | 一〇六,四〇七 | 五,八二二,四七八 | 八八〇 |
| 同　三十九年 | 八〇 | 三,八六八 | 二五,〇五九 | 一,六八四,六八七 | 一,〇七二 | 六,五〇〇 | 二七,九九七 | 五四,〇六六 | 一一三,四九三 | 六,九二〇,三五三 | 九七六 |
| 同　四十年 | 二〇一 | 四,三〇三 | 四三,三二一 | 三,〇五〇,九二三 | 一,一三六 | 一〇,五〇〇 | 二八,一六四 | 五五,七五四 | 一〇九,八九一 | 六,六八四,八七七 | 九七六 |
| 同　四十一年 | 七二 | 四,一七〇 | 四七,〇五一 | 三,七二〇,三六三 | 九三八 | 一一,三〇〇 | 二九,三〇三 | 五七,四〇七 | 一二六,四九四 | 六,〇五七,一四三 | 八九六 |
| 同　四十二年 | 一一〇 | 四,八五八 | 七〇,七五三 | 三,七五三,一〇三 | 八四八 | 一四,五〇〇 | 二七,八二三 | 五四,五四九 | 一三〇,七四〇 | 五,七九〇,六五六 | 七六八 |
| 同　四十三年 | 一三五 | 六,三三一 | 六五,五九九 | 三,五八六,三三六 | 九九四 | 一〇,四〇〇 | 二五,六二七 | 五四,四七〇 | 一三一,四三三 | 六,七九九,九五八 | 八三二 |
| 同　四十四年 | 一七四 | 八,七九三 | 九〇,三九六 | 四,七九四,六五六 | 八〇〇 | 一二,八〇〇 | 二四,五三六 | 五〇,八四五 | 一七〇,一一八 | 八,三三五,一五六 | 七六八 |
| 大正　元　年 | 四一四 | 一〇,三四五 | 一〇八,〇六八 | 五,七四九,六六九 | 八四八 | 一〇,五〇〇 | 二一,五九三 | 四八,四一三 | 一三九,三一三 | 六,三三六,七五二 | 七六八 |
| 同　二　年 | 八二四 | 一四,五四五 | 一三六,六九三 | 七,九七三,三五四 | 九三八 | 九,五〇〇 | 一九,八二三 | 四二,一〇九 | 八〇,九四一 | 四,三八四,三四三 | 八四六 |
| 同　三　年 | 四八〇 | 一六,八六八 | 一六四,九三六 | 八,一七九,五五九 | 七八九 | 九,八〇〇 | 二七,一三八 | 三五,四〇六 | 七二,〇八三 | 二,九九五,八一八 | 六六四 |
| 同　四　年 | 三六八 | 一八,六三七 | 一六七,四一八 | 九,三二九,一九三 | 八〇〇 | 八,九〇〇 | 二五,五六六 | 三二,七二七 | 六〇,四九六 | 三,一一三,〇四一 | 八三二 |
| 同　五　年 | 三〇三 | 二一,七九二 | 二三三,三七〇 | 二六,一六一,五七八 | 一,三二六 | 九,八〇〇 | 二四,三八六 | 三〇,二七八 | 五八,五〇三 | 三,八〇三,七八四 | 一,〇五六 |
| 同　六　年 | 三三六 | 二七,四五〇 | 二九五,九〇四 | 二五,六二〇,七三六 | 一,三九三 | 一〇,八〇〇 | 二二,三六二 | 二七,〇七六 | 四六,九五八 | 三,三七一,〇七〇 | 一,一三〇 |
| 同　七　年 | 六九六 | 二九,五七四 | 三二三,八五五 | 三〇,七三一,二五九 | 一,五三〇 | 一〇,九〇〇 | 二〇,〇一二 | 二三,八四一 | 三七,九九九 | 三,三〇一,一八九 | 一,三四四 |

| | | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 同　八年 | 三二〇 | 二九,五七四 | 三二〇,〇四六 | 五三,一四四,六七八 | 二,六〇八 | 一〇,八〇〇 | 一七,七四六 | 三〇,五七一 | 二八,八七〇 | 四,一七四,〇九二 | 一,七一二 |
| 同　九年 | 三一五 | 二七,九〇三 | 二八七,一七三 | 三八,七〇三,七〇五 | 一,六〇〇 | 一〇,三〇〇 | 一六,七一六 | 一八,八九六 | 二三,七七三 | 一,九八六,一八三 | 一,三四四 |
| 同　十年 | 三〇三 | 二七,八九四 | 三三七,三一九 | 三三,三七七,〇六七 | 一,五八四 | 一二,一〇〇 | 一六,四六二 | 一八,四三六 | 二四,七三七 | 二,一一二,九四七 | 一,三七六 |
| 同十一年 | 二九五 | 二七,三五三 | 三四五,九七三 | 四一,三四四,八三二 | 一,九〇四 | 一二,六〇〇 | 一五,二三六 | 一六,六一七 | 二二,二四七 | 二,三三〇,七一八 | 一,六〇〇 |
| 同十二年 | 二七七 | 二六,七六八 | 三七五,八七九 | 四八,五三三,七四一 | 二,〇六四 | 一四,〇〇〇 | 一三,一八二 | 一四,六九七 | 二〇,一一四 | 二,〇三六,三三四 | 一,六三二 |
| 同十三年 | 二七六 | 二六,五六二 | 四三三,七二七 | 五〇,二八一,〇一九 | 一,八九九 | 一五,九五〇 | 一一,九一一 | 一三,三一〇 | 一八,〇六三 | 一,七八一,四四〇 | 一,五七六 |

## 二　最近二十箇年一般製絲南三社器械製絲産額比較

| （年次） | （一般製絲） | | | （南三社） | | | （計） | | | （一釜當製産額） | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | （工場數） | （釜數） | （産額） | （工場數） | （釜數） | （産額） | （工場數） | （釜數） | （産額） | （一般製絲） | （南三社） |
| 明治三十八年 | 六七 | 二,八二九 | 一八,〇六一貫 | 二七 | 七八二 | 一,九五九貫 | 九四 | 三,六一一 | 二〇,〇二〇貫 | 六,三八〇匁 | 二,六四〇匁 |
| 同三十九年 | 五二 | 三,一五一 | 三,八二八 | 二八 | 七一七 | 二,三三一 | 八〇 | 三,八六八 | 二〇五,〇五九 | 七,三五〇 | 三,一一〇 |
| 同　四十年 | 一三五 | 三,六七二 | 四〇,九〇九 | 六六 | 六三二 | 二,三〇二 | 二〇一 | 四,三〇四 | 四三,二一一 | 一一,一四〇 | 三,六四〇 |
| 同四十一年 | 四二 | 三,三三八 | 四三,一四〇 | 三〇 | 八三二 | 三,九一一 | 七二 | 四,一〇七 | 四七,〇五一 | 一二,九四〇 | 四,七〇〇 |
| 同四十二年 | 七五 | 三,三一四 | 六一,四二〇 | 三五 | 一,五四四 | 九,三三三 | 一一〇 | 四,八五八 | 七〇,七五三 | 一八,五三〇 | 六,四四〇 |
| 同四十三年 | 一五六 | 二,二四四 | 四四,四六二 | 一七九 | 四,〇八七 | 二一,一三七 | 三三五 | 六,三三一 | 六五,五九九 | 一九,八〇〇 | 五,三〇〇 |
| 同四十四年 | 三九六 | 四,〇五一 | 六四,四四二 | 三一八 | 四,七四二 | 二五,九五四 | 七一四 | 八,七九三 | 九〇,三九六 | 一五,八〇〇 | 五,五〇〇 |

| | | | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 大正元年 | 一〇〇 | 四,〇二一 | 六九,七四〇 | 二二一 | 六,三三四 | 三八,三三八 | 四二三 | 一〇,三四五 | 一〇八,〇六八 | 一七,四〇〇 | 六,〇七九 |
| 同二年 | 四五 | 五,一三八 | 八六,八七九 | 二六九 | 九,四〇七 | 五四,二四一 | 八一四 | 一四,五四五 | 一三六,六九二 | 一六,九〇〇 | 五,三〇〇 |
| 同三年 | 一〇三 | 六,三九四 | 一〇三,四八一 | 三一七 | 一〇,四七四 | 六一,四五五 | 四八〇 | 一六,八六八 | 一六四,九三六 | 一四,五〇〇 | 五,八〇〇 |
| 同四年 | 五五 | 七,二七五 | 一〇三,六七三 | 二二三 | 一一,三五三 | 六三,七四五 | 二六八 | 一八,六三七 | 一六七,四一八 | 一五,六〇〇 | 五,六〇〇 |
| 同五年 | 七五 | 八,四六八 | 一三五,〇〇四 | 三一七 | 一三,三三四 | 八八,三六六 | 三〇三 | 二一,七九二 | 二一三,三七〇 | 一四,七〇〇 | 七,八〇〇 |
| 同六年 | 八七 | 一〇,七〇七 | 一八二,五九三 | 二三九 | 一六,七四三 | 一二三,五三三 | 三三六 | 二七,四四〇 | 二九五,九〇四 | 一七,〇〇〇 | 六,八〇〇 |
| 同七年 | 四五五 | 一三,五四七 | 二一九,六八一 | 二四一 | 一六,九八一 | 一〇三,一七四 | 六九六 | 二九,五三八 | 三三三,八五五 | 一七,六〇〇 | 六,一〇〇 |
| 同八年 | 八五 | 一三,三四八 | 二三九,〇〇九 | 二三五 | 一七,三三六 | 八一,〇三七 | 三二〇 | 二九,五七四 | 三三〇,〇四六 | 一九,四〇〇 | 四,七〇〇 |
| 同九年 | 七四 | 一二,三七四 | 一八五,九〇一 | 二四一 | 一六,五二九 | 一〇一,二七一 | 三二五 | 二七,九〇二 | 二八七,一七一 | 一六,三〇〇 | 六,一〇〇 |
| 同十年 | 八六 | 一二,九七三 | 二五七,二〇三 | 二一七 | 一五,九二三 | 八〇,〇一七 | 三〇三 | 二七,八九四 | 三三七,三二九 | 二一,五〇〇 | 五,三〇〇 |
| 同十一年 | 七三 | 一三,一〇二 | 二六二,〇二七 | 二三三 | 一五,二五一 | 八三,九四六 | 二九五 | 二七,三五三 | 三四五,九七三 | 二一,三〇〇 | 五,五〇〇 |
| 同十二年 | 八五 | 一一,八三三 | 二九三,五八〇 | 一九三 | 一四,九三六 | 八三,二九九 | 二七七 | 二六,七六八 | 三七五,八七九 | 二四,八〇〇 | 五,六〇〇 |
| 同十三年 | | | | | | | 二七六 | 二六,五六二 | 四二三,七一七 | | |

（備考）明治四十二年前ハ南三社縣內外別生產額不明ニ付兩社ヲ含ム

## 三　最近二十箇年間に於ける玉絲製造統計

(イ) 製造戸數並産額

| (年次) | (戸數) | (釜數) | (産額) | (價額) | (對百斤價額) |
|---|---|---|---|---|---|
| 第一次 自明治三十八年至同四十二年五ヶ年平均 | 四、六六一 | 五、四一〇 | 二二、八〇九貫 | 六三七、三四四圓 | 四七二圓 |
| 第二次 自明治四十三年至大正三年五ヶ年平均 | 三、八三八 | 六、一〇一 | 五六、二二六 | 一、三一九、九六六 | 三七六 |
| 第三次 自大正四年至同八年五ヶ年平均 | 四、一七五 | 九、二一九 | 一二三、七八四 | 五、六二四、八八七 | 七三三 |
| 第四次 自大正九年至同十三年五ヶ年平均 | 四、七五八 | 一〇、九八三 | 一二一、二二一 | 七、三八四、六九一 | 六〇九 |

(ロ) 同上指數

| (年次) | (戸數) | (釜數) | (産額) | (價額) | (對百斤價額) |
|---|---|---|---|---|---|
| 第一次 自明治三十八年至同四十二年五ヶ年平均 | 一〇〇 | 一〇〇 | 一〇〇 | 一〇〇 | 一〇〇 |
| 第二次 自明治四十三年至大正三年五ヶ年平均 | 八〇 | 一一二 | 二四七 | 一九六 | 七九 |
| 第三次 自大正四年至同八年五ヶ年平均 | 八八 | 一七〇 | 五三八 | 八三五 | 一五五 |
| 第四次 自大正九年至同十三年五ヶ年平均 | 九九 | 二〇三 | 五三一 | 一、〇九七 | 一二七 |

四 最近二十箇年玉絲製造戸數竝産額

| （年度） | （戸數） | （釜數） | （産額）（貫） | （價額）（圓） | （對百斤價額）（圓） |
|---|---|---|---|---|---|
| 明治三十八年 | 四、〇三一 | 五、〇三二 | 一二二、七八七 | 六八七、九〇七 | 四八〇 |
| 同　三十九年 | 四、六九二 | 五、九二六 | 一二六、六二一 | 九一八、八九七 | 五五二 |
| 同　四十年 | 四、九〇九 | 五、四七八 | 一二一、一四一 | 七〇九、一五六 | 五三六 |
| 同　四十一年 | 四、八〇七 | 四、五九二 | 一一八、四九八 | 四五二、六〇〇 | 三九一 |
| 同　四十二年 | 四、八六五 | 六、〇二三 | 一二四、九九九 | 五九八、一六二 | 三八二 |
| 同　四十三年 | 四、一一一 | 五、五七六 | 一二九、七〇七 | 七四一、五〇九 | 三九九 |
| 同　四十四年 | 三、六二三 | 五、七二八 | 一四五、六一四 | 一、〇九六、八一二 | 三八五 |
| 大正　元年 | 四、〇八五 | 六、六二四 | 一五一、四〇九 | 一、一八九、一九二 | 三七三 |
| 同　二年 | 三、六九四 | 五、八四六 | 一八五、四六二 | 二、〇〇八、九〇一 | 三七六 |
| 同　三年 | 三、六七九 | 六、七三三 | 一六八、九三八 | 一、五六三、四一六 | 三六三 |
| 同　四年 | 三、五四一 | 七、一五八 | 一八〇、〇一二 | 一、八三五、七七〇 | 三六七 |
| 同　五年 | 三、九八五 | 八、四三三 | 一九六、八九〇 | 二、八九一、〇六九 | 四八〇 |
| 同　六年 | 四、一二三 | 九、一一七 | 一三〇、〇〇〇 | 四、九二八、六四六 | 六〇八 |
| 同　七年 | 四、三三一 | 九、七二九 | 一一四、一八三 | 六、〇六四、〇六〇 | 八四八 |
| 同　八年 | 四、六三六 | 一一、六六〇 | 一九二、八三三 | 一二、四〇四、八九二 | 一、〇四〇 |
| 同　九年 | 四、三九七 | 一一、四二八 | 九一、三八二 | 五、一二一、二四一 | 八九六 |

| 同十年 | 五、〇七二 | 一一、七七六 | 一四二、五四〇 | 九、五五四、六九三 | 一、〇七二 |
| --- | --- | --- | --- | --- | --- |
| 同十一年 | 四、八九九 | 一〇、八二一 | 一二三、七四八 | 七、四五五、三一九 | 九六〇 |
| 同十二年 | 四、七五一 | 一〇、八〇二 | 一二四、七七六 | 七、六二七、三三六 | 九七六 |
| 同十三年 | 四、六七一 | 一〇、〇八六 | 一二三、六五八 | 七、一六四、八六七 | 九二七 |

(群馬縣蠶絲業沿革調査書
群馬縣之蠶絲業に據る。)

## 第八項　織物業

本縣の織物業は、現今に於て絹織・絹綿交織・綿織・毛及び其交織・麻及び其交織の五種を含む。就中産額の大なるものは、絹織及び其交織を以て(七八%)最となす。絹織の中心地は、桐生・伊勢崎・高崎にして、綿織物は中野、毛織物は館林となし、絹綿交織は桐生を最盛とす。是等産額を合計すれば、實に六千八百四十六萬六千二百九圓にして、本邦第七位を占め、本縣産物の優位に居り、從つて斯業の盛衰が、直に縣經濟に至大の影響を及ぼすは、論を俟たず。延きては我國海外輸出の勢力に關することも、亦甚大なり。故を以て縣は、夙に各生産地當業者を奬勵して、粗製濫造を矯め、動もすれば失墜せんとする聲價の維持に努むる所ありたり。即ち桐生の當業者に對しては、明治十二年有志を勸奬、染法の改良を先にし、合せて

桐生會社の創立

伊勢崎太織會社創立

生絹生太織同業組合

合密法を教示し、續いて西洋形機械及び廣幅織の機械を創設し、其得失を比較せしめ、改良を謀りしより、稍、體面を一變するに至りしかば、尚一層之を鼓舞し、同業結社相互の約束上より、善良の物品製造のことを示諭せり。依つて同地の同業者協同申合規約を定め、桐生會社を創立し、爾來製品を製出することを得しむ。伊勢崎の當業者に對しても、同年十二月、伊勢崎太織會社を創設し、專ら改良を謀らしむ。明治十八年一月五日、甲第五號を以て、同業組合準則を發布し、向後組合を設け、規約を立て、同業者の共益を希圖する向は、總て此組合準則に基き、出願すべきを達せり。高崎の當業者は、此令達に依り、生絹生太織同業組合を設置せり。桐生・伊勢崎等、亦商工業組合を設置し、改良發達を謀りしも、業務の發達と共に、大に弊害を生じたれば、本縣は明治二十七年一月廿四日、群馬縣令第十號を以て、織物業組合取締規則を布達し、織物製造業者は勿論、原料商工業者・製品買次仲買商者までに適用し、營業上の弊害を矯正し、同業一般の利益を增進するを目的としたり。當時設立せられたる組合は左の如し。

### 織物業組合表（明治二十八年六月現在）

| (名稱) | (所在地) | (創立年月日) | (設立認可年月日) | (組合數) |
|---|---|---|---|---|
| 桐生商工業組合 | 山田郡桐生町 | 明治二五、一一、八 | 同 二六、二、一〇 | 一〇一三人 |
| 伊勢崎織物商工業組合 | 佐波郡伊勢崎町 | 同 二七、二、一九 | 同上 | 三八七一人 |
| 群馬縣生絹生太織同業組合 | 群馬郡高崎町 | 同 一八、九、一〇 | 同上 | 八七人 |
| 中野絣機業組合 | 邑樂郡中野村 | 同二七、一一、一九 | 同上 | 五六人 |

明治三十年に至り、政府重要輸出品同業組合法の發布あり。然るに該法中輸出の二字あるを不便とし、更に明治三十三年五月六日、法律第三十五號を以て、重要物産同業組合法なるものを公布し、重要輸出品同業組合法を廢止せり。依つて各組合は該法に準據して、組織を變更せり。而も尙弊害止まざれば、本縣は明治三十三年十月、山田・新田・佐波・邑樂・勢多の各郡當業者に向つて、左の告諭を發せり。

明治卅三年の本縣告諭

本縣ニ於ケル織物業ハ、輓近長足ノ進歩ヲナシ、其産額亦多キヲ加ヘタレバ、隨テ粗製濫造ノ風ヲ釀シ、殊ニ賃業者ノ不正行爲ニ依リ、織物ノ絲量ヲ減ジ、其製品ヲ粗造ナラシメ、甚シキハ機業者ニシテ、該行爲ヲ默認シ、其弊ヲ助長セシムル傾ナキニ非ズ。之レ畢竟、目前ノ小利ヲ僥倖セントスル、不正業者ノ行爲ナリト雖モ、其結果

遂ニ織物ノ隆替ニ係ル、至大ノ影響ヲ及ボスモノナレバ、當業者タルモノ、深ク戒心以テ業ニ隨ヒ、須ク其宿弊矯正ニ極力盡瘁セザルベカラズ。今ヤ桐生物產同業組合、並ニ中野織物同業組合ハ、共ニ其定款ヲ變更シ、以テ諸般ノ業務ヲ革新スルト同時ニ賃業者取締法ヲ實施勵行シ、伊勢崎織物同業組合亦該取締ヲ實施セントスルノ計畫アリ。寔ニ時弊ニ適中シタルノ施設ナリトス。依テ當業者ハ勿論賃業者モ共ニ其趣旨ヲ遵守、相互呼應以テ組合定款ノ實施ヲ圖リ、益本縣織物ノ信用ヲ發揚スベシ。

**賃織業者取締規則**

**兩野織物同業組合聯合會**

是より縣は、同業組合の獎勵監督に努め、特に重きを檢査に置き、年々檢査獎勵補助金を交附して檢査を勵行し、不正品の防遏に任せしめ、之と同時に、組合は生產の統一と取締の嚴密とを期せんが爲め、賃織業者取締規則を設け、成績優良なる職工徒弟を表彰し、或は機臺の改良、販路擴張、意匠圖案の改良、新奇織物の獎勵に努力し、以て時代の要求に順應せんことを期しつゝあり。而して本縣は栃木縣と共に、大正元年九月以來、兩野織物同業組合聯合會（栃木縣同業組合と協議し、共同の利益を增進せんために組織したるもの、）に對して、補助金を與へ、輸出絹織物の檢査を實行せしめたるを以て、成績見るべきものありしといへども、全國の絹織物を統一するに非れば、其効果を

輸出絹物檢査規定發布

收め難きを認め、農商務省及び兩縣當局と交渉を重ねたる結果、大正四年三月、省令を以て輸出絹物檢査規程を發布せられたるを以て、同年九月、全然縣の事業に移し、之が檢査所を山田郡桐生町に置き、桐生市を中心として生産せらるゝ輸出絹織物に對し、單に所定の檢査を施行せり。斯くて我國重要輸出品の一たる本品に對し、檢査を行ふのみならず、一般的に其需要狀況を調査し、當業者と連絡を保ち、生産品質の向上統一等に對し、相當施設する所ありき。

群馬縣機業取締規則及染織賃業取締規則

撚絲取締規則

尙本縣は、斯業の發達するに隨ひ、是等從業者中、往々不正行爲者を發見するに至りしかば、改めて大正十五年三月、群馬縣機業取締規則及び群馬縣染織賃業取締規則を令達して、機業者及び染織賃業者を取締り、之が防遏に努めたり。縣は織物の原料たる撚絲についても留意する所あり。曩に大正九年四月、撚絲取締規則及び撚絲檢査規則を公布して、之が監督を怠らざりしが、大正十三年六月に至りて、以上二規則を廢して、代ふるに撚絲取締規則を以てせり。

教育指導機關

教育指導機關として、明治二十九年四月、桐生町に町立桐生織物學校、伊勢崎町に商工業組合、竝に伊勢崎染織學校設立せられたりしを、明治三十三年四月より、縣立に移管して、其設備を充實し、明治三十八年に至り、伊勢崎染織學校を桐生織

物學校に合併して、群馬縣立織物學校と改稱し、伊勢崎染織學校跡に同校所屬工業試驗所を置き、主として染色織物の試驗を行ひ、直接に當業者の利便を圖りしが、明治四十三年四月に至り、群馬縣立工業學校を伊勢崎町に設置し、（工業試驗場を廢す。）再び二校となしたり。大正二年三月より、群馬縣立織物學校を廢して、桐生町に群馬縣圖案調製所を置けり。越えて大正十年三月、縣立工業試驗場を設置し、本場を前橋に、分場を桐生・伊勢崎・館林・高崎の四箇所に設け、染織圖案（前橋本場には製絲部あり。）の各部に分ち、一般的に各種原料、其他の試驗・檢定・講習・講話・圖案調製・實地指導等の事務を行ひ、以て當業者を稗益し、益斯業の發達を圖れり。

## 一　最近二十箇年機業從業者數調

| （年次） | （機業戶數） | （機臺數） | | （職工數） | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | | （力織機） | （手織機） | （男） | （女） | （計） |
| 明治三十八年 | 三〇、五九三 | 一五三 | 四四、六〇一 | — | — | 三七、二三七 |
| 同　三十九年 | 三三、四一四 | 一五三 | 三七、七八一 | — | — | 四一、五六一 |
| 同　四十　年 | 三六、〇〇六 | 一八六 | 四〇、六七三 | 七五三 | 四四、七〇一 | 四五、四五四 |
| 同　四十一年 | 三五、三六〇 | 三三六 | 四〇、一二一 | 一、一五七 | 四四、〇二五 | 四五、一三八 |
| 同　四十二年 | 三四、七五三 | 一、一八三 | 四四、一九四 | 七〇〇 | 四六、〇二六 | 四六、七二六 |

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 明治四十三年 | 三五、七八八 | 九八二 | 三九、〇九一 | 七七九 | 四六、一八九 | 四六、九六八 |
| 同　四十四年 | 三七、七五七 | 八九五 | 四五、一五七 | 八六七 | 四六、五一九 | 四六、三八三 |
| 大正　元　年 | 三九、三八九 | 七七五 | 四七、九二五 | 六四三 | 五〇、〇七五 | 五〇、七一八 |
| 同　二　年 | 三九、九六七 | 八六九 | 四九、三四七 | 六九二 | 五一、五八六 | 五二、二七七 |
| 同　三　年 | 三八、六九一 | 一、五一五 | 四八、四八〇 | 八四五 | 五一、五八六 | 五三、四三一 |
| 同　四　年 | 四〇、五五一 | 一、二七三 | 四九、七七四 | 二、五八八 | 五一、八二三 | 五四、四四一 |
| 同　五　年 | 四〇、四八一 | 一、一九四 | 四八、六四一 | 三、三四一 | 五一、三三七 | 五四、五七八 |
| 同　六　年 | 四一、四〇九 | 二、二二三 | 五〇、二一五 | 三、六六〇 | 五五、二二三 | 五八、八八二 |
| 同　七　年 | 四三、九一六 | 二、六九九 | 五二、二三五 | 三、九一〇 | 五八、〇〇一 | 六一、九一一 |
| 同　八　年 | 四六、八四二 | 三、九一一 | 五五、〇七二 | 四、五〇二 | 六一、六八九 | 六六、一八九 |
| 同　九　年 | 四七、九三三 | 四、五二六 | 五五、六九六 | 四、四一七 | 六一、七六二 | 六六、一七九 |
| 同　十　年 | 四三、五三三 | 五、七九三 | 五〇、一五九 | 五、〇六〇 | 五六、一八二 | 六一、二四三 |
| 同　十一年 | 四一、〇六一 | 七、四二三 | 四七、六四四 | 四、九〇一 | 五三、三三一 | 五八、三三三 |
| 同　十二年 | 四〇、七〇三 | 八、一一三 | 四六、四八七 | 四、〇四二 | 五五、二三〇 | 五九、二七二 |
| 同　十三年 | 三九、八三六 | 八、七四二 | 四五、九五二 | 四、二一六 | 五四、七三三 | 五八、九四九 |

## 二　最近二十箇年織物產額比較

| （年　次） | （絹織物） | （絹綿交織物） | （綿織物） | （麻及其交織物） | （毛及其交織物） | （特殊織物） | （合　計） |
| --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- |
| 明治三十八年 | 六、四七〇、四〇四 | 一、一二七、三六〇 | 五二五、七七三 | 一二〇 | 六八、四四〇 | 五〇〇 | 八、一九二、六〇七 |
| 同　三十九年 | 九、一三九、八五四 | 三、〇八九、四三三 | 一、〇六七、九四八 | 一三〇 | — | 一五、〇〇〇 | 一三、四六二、七一〇 |
| 同　四　十　年 | 九、〇九七、八二四 | 六、三八九、八〇三 | 七五四、四七六 | 一四〇 | 五一、八〇〇 | 五三、三六〇 | 一六、三四七、四〇三 |
| 同　四十一年 | 一一、三三一、六八四 | 四、三七〇、一〇二 | 九八三、九一〇 | 一四〇 | 一六六、八四五 | 九五、七〇〇 | 一六、九二八、三八一 |
| 同　四十二年 | 一〇、一三九、五〇七 | 五、〇九七、一一〇 | 八九五、五六二 | 一四〇 | 一八七、六四一 | 三一、九三〇 | 一六、三五一、八八〇 |
| 同　四十三年 | 九、八三三、一七五 | 六、二九七、三九〇 | 一、一二一、六三三 | 一七四 | 一、七三二、三四八 | 二〇、五三八 | 一八、九八四、一五八 |
| 同　四十四年 | 一〇、八七五、一五三 | 六、四三九、〇五四 | 七一五、八九九 | 一八八 | 一、七四一、三〇〇 | 二九、八〇八 | 一九、八〇二、三〇三 |
| 大正　元　年 | 一三、三〇三、九五〇 | 五、一一八、七四四 | 七六二、〇九一 | 九〇 | 一、九〇七、四三四 | 八六、四二〇 | 二〇、一七八、七一九 |
| 同　二　年 | 一二、五三三、一八五 | 四、三三五、五三五 | 六七九、一六〇 | 一六七 | 二、三五〇、〇〇〇 | 五一、三三六 | 一九、七四八、三八三 |
| 同　三　年 | 九、八九一、五五三 | 三、六三八、一五六 | 一、三三六、二四〇 | 二、〇〇三 | 一、九九三、〇〇〇 | 五一、五四八 | 一六、八二二、五〇〇 |
| 同　四　年 | 一〇、一四四、一九三 | 三、八四〇、三七八 | 一、一六四、七四二 | 三三〇 | 一、八九六、六三〇 | — | 一七、〇四六、一七三 |
| 同　五　年 | 一三、一二一、八五八 | 五、一一四、三五七 | 二、〇七六、八四六 | 一五、三五三 | 一、二八八、七五三 | — | 二一、六一七、〇六七 |
| 同　六　年 | 二〇、五一八、一八五 | 六、八二六、九四七 | 五、〇二三、五五六 | 一五、二六九 | 二、六三四、三三三 | 二、〇〇〇 | 三五、〇一〇、三八九 |
| 同　七　年 | 二九、九〇五、七一二 | 一二、二一九、八三二 | 七、五九三、八一九 | 四〇七 | 三、七〇八、九〇〇 | 二〇 | 五三、四二八、六八八 |
| 同　八　年 | 五二、二五九、七一四 | 一五、三九九、三三〇 | 一一、六八九、八二九 | 七一〇 | 四、六四〇、九二八 | 一七五、七九一 | 八四、三六六、二九二 |
| 同　九　年 | 三八、五〇八、四五七 | 九、六三〇、九三八 | 九、〇七〇、八六七 | 一、〇八五 | 四、八一六、三五四 | 一三一、三〇八 | 六二、一四八、九〇九 |

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 同十年 | 五六、二七九、九五三 | 一一、〇六六、九〇七 | 一〇、九八〇、九〇三 | 一〇、五一三 | 六、五六五、九九〇 | 六五四、四三六 | 八五、五五八、七〇〇 |
| 同十一年 | 五三、一三八、〇三九 | 一一、六七四、九六二 | 七、六五一、一五一 | 七三、八二七 | 六、五三〇、二九七 | 三三六、一八六 | 七九、三七三、四六二 |
| 同十二年 | 四六、一四三、三五八 | 九、三八三、五八四 | 五、六八九、四一八 | 三九、二一六 | 八、二四六、七五〇 | 一、二〇六、四一六 | 七〇、七〇七、七四二 |
| 同十三年 | 四六、〇一三、〇五四 | 七、九二一、二七四 | 六、九九五、〇七一 | 五六、三七九 | 五、九二六、六四五 | 一、五五四、七八六 | 六八、四六六、二〇九 |

（殆群馬縣織物現況調査書・群馬縣内務部商工課調査書類。）

## 第九項　水力電氣事業

本縣に於ける水力電氣事業の起源は、明治二十六年三月、遞信大臣の許可を受け、群馬郡地内天狗堰普通水利組合の用水を使用して、同郡總社町に發電所を設置し、主として前橋市に電燈の供給を爲すを目的とし、資本金六萬圓を以て、前橋電燈株式會社を設立したるを以て嚆矢とす。當時我國に於ける斯業は、極めて幼稚にして、該會社の發電裝置、其他の設計は、帝國大學總長山川理學博士の手に成りたるものにして、開業後は見學の爲め、理工科大學生の實地視察等もありて、實に本邦に於ける斯業の魁なりきと云ふ。次いで同年六月、桐生電燈株式會社は、資本金三萬圓を以て興り、桐生町に電燈電力供給の事業を開始するあり。降つて明治三十六年五月、高崎水力電氣株式會社は、資本金二十萬圓を以て、電燈電

力供給の目的にて設立せられ、又同年七月、前橋市六供絹絲紡績株式會社に於ては、自家用電燈の設置を爲し、次いで明治三十九年十月許可せられたる渡良瀬水力電氣株式會社は、資本金二十萬圓を以て、電燈電力の供給、竝に電氣に關する工事設計、機械器具の製造販賣を目的として設置せらるゝあり。爾來年と共に益〻進歩の趨勢を來し明治四十年には、伊香保町々營、四十二年には西毛電氣及び利根發電の兩株式會社の設立を見、四十三年には吾妻軌道株式會社の電氣事業兼營、四十四年には日本製布株式會社桐生工場の自家工場用電燈電力の經營の許可あり。四十五年には惣社水力電氣株式會社、大正二年には武藏水電株式會社、大正四年には川原湯電氣合資會社の設立、及び利根發電株式會社の片品川第二工事の竣工を見、大正六年には利根川流水引用を目的として、利根川水力株式會社の設立あり。殆ど毎年新會社の設立を見ざるなきの盛況を呈し、而して各會社とも、何れも相當の好成績を擧げ、近時或は其の事業を擴張し、若くは他に合併し、從つて漸次其の資金を增額し、會社の基礎は、益〻鞏固となり、社會の信用は一層向上の好況にあり。而して又是等既設會社の供給を得られざる地方に在りては、自家用水力電氣の企業漸く隆盛ならんとし、之が爲め水利使用出願者頗る多

し。若し今後既設會社の施設足らざる部分を、自家用電氣にて補ひ、晝間電力利用の途一般に普及するに至ては、本業の將來は、蓋し尙一般の進步發達を來し、國利民福を增進する疑ひを容れざる所たるべし。

元來本縣の地勢たる、東南の一方を除くの外、大概山嶽重疊し、殊に利根川上流、竝に各支派川、多くは急流にして、發電動力水利上、到る處優秀の地に富むを以て、前記事業者の開業、水路以外、已に水利使用の許可を得たる水路は三十六箇所、亦許可出願中の水路六十八箇所にして、其數實に尠しとせず。是を以て視るも、縣下に於ける發電動力用水利が豐富なるを知るに足るべし。茲に本縣斯業一班を記述し、現在營業開始中の水利使用一覽表を添へ、會社變遷の狀況を掲記し、以て參照に資せむとす。

開業中の水利使用一覽　（大正十五年以後未調査）

| （許可年月日） | （河川名） | （流水取入箇所）（郡） | （町村） | （大字） | （字） | （資本金額） | （備考） |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 明治三十九年十一月廿八日 | 片品川<br>泙川 | 利根<br>同 | 片品<br>白澤 | 幡谷<br>平川<br>岩室 | | | |
| 同上 | 片品川 | 同 | 白澤<br>利南 | 岩室<br>上久屋 | 奥崎<br>中 | | |

| | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 明治四十一年三月十日 | 永井澤川 | 利根 勢多 | 久呂保 數島 | 川額 永井小川田 | 上永井 日影 | 一六、八〇〇 三、三五三 | 六、一〇〇、〇〇〇 | 利根發電株式會社 | 大正元年渡良瀬水電及前橋軌道（電車）、同四年前橋瓦斯株式會社ト合併 |
| 明治三十九年二月二十八日 | 渡良瀬川 | 勢多 山田 | 黒保根 福岡 | 宿廻 鹽原 | 向上 | | | | |
| 同三十九年二月二十四日 | 同 | 山田 同 | 川內 同 | 高津戸 同 | 川面 同 | | | | |
| 明治四十一年一月二十一日 | 名久田川 | 吾妻 同 | 名久田 同 | 赤坂 横尾 | 矢場 小塚 | 一、八九五 二、四九九 | 一五〇、〇〇〇 | 吾妻軌道株式會社 | 資本金ハ電氣事業ノミ分割スルヲ得ズ總資本ヲ揭グ |
| 同四十二年九月十二日 | 武能川 | 同 | 澤田 同 | 四萬 同 | 讓葉 同 | | | | |
| 同四十年三月十八日 | 沼尾川 | 群馬 同 | 伊香保 同 | 湯中子 同 | 五萬石 同 | 一五八 二二三 | 三五、〇〇〇 | 伊香保町 | |
| 同三十二年十一月廿四日 | 烏川 | 同 同 | 室田 同 | 上室田 同 | 川曲 初越 | 二、八〇四 三、九二四 | 一、六〇〇、〇〇〇 | 高崎水力電氣株式會社 | 明治四十年前橋電燈株式會社、四十五年高崎瓦斯株式會社ト合併、高崎電氣軌道被併 |
| 同四十二年六月一日 | 鳴澤川 | 吾妻 同 | 東 同 | 箱島 同 | 橋倉 同 | | | | |
| 同四十三年六月二日 | 同上 | 同 | 同 | 同 | 宿河原 下 | | | | |
| 大正元年九月二十七日 | 溫川 大谷澤川 | 同 同 | 坂上 岩島 | 大戸 厚田 | 城山 新井 | | | | |
| 明治四十一年七月十一日 | 碓氷川 | 碓氷 同 | 坂本 同 | 坂本驛 | 城山 霧積澤 | 三、三三九 四、五五七 | 三〇〇、〇〇〇 | 西毛電氣株式會社 | 明治四十三年六月水害ノ爲メ大損害ヲ蒙リタルモ漸次之ヲ補塡シツヽアリ |

| | | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 同四十四年一月十一日 | 霧積川 | 同 同 | 同 同 | 同 同 | 道仝 高芝 | | | | | |
| 同三十九年十月十一日 | 神流川 | 群馬 埼玉 同 | 美原 矢納 同 | 坂原 手津久山林 | | 一,五七七 | 二,二一四 | 七〇〇,〇〇〇 | 武藏水電株式會社 | |
| 同四十四年七月二十一日 | 利根川 天狗岩用水堰 | 群馬 同 | 惣社 同 | 植野 同 | 二子山 同 | 七三 | 九八 | 三〇,〇〇〇 | 惣社水力電氣株式會社 | 前橋電燈高崎電氣合併後不用ニ歸シタルヲ讓受ケタルモノ |
| 大正四年五月十七日 | 大澤川 | 吾妻 同 | 長野原 同 | 川原湯 同 | 上打越 同 | 三,三三一 | 二九,三三九 | 二,五〇〇 | 川原湯電氣合資會社 | |

（主として群馬縣内務部土木課調査書類に據る。）

## 第十項　鑛業

明治元年、政府始めて鐵山司を置かれ、舊習を矯正し開採を要し、鑛山開拓の布達あり。當時本州兵馬騷擾の餘、官事鞅掌民心疑懼、僅に硫黄等の舊坑を營業するのみにて、更に一鑛の開くことなかりき。同五年、鑛山心得の布達あり。同六年、鑛山諸坑業の規則を改正し、日本坑法の布達あり。此時に當り開化日に進歩し、坑法亦精巧を極む。同七年、熊谷縣時代、縣に勸業掛を置き、管内諸般の物産を興隆せしめ、且つ鑛山開採の事務を勵精擔任せしむるに當り、是より新坑を發見し、廢鑛を興復し、本縣の鐵業、此時より漸次盛ならんとするの勢となれり。明治

十年二月調の本縣鑛山の概要は、左の如し。

| （鑛種） | （鑛山所在地） | （鑛區坪數） | （採掘許可年月） | （現況） | （備考） |
|---|---|---|---|---|---|
| 岩鐵鑛 | 甘樂郡中小坂村金窪山 | 二四〇〇坪 | 明治三年 | 營業中 | 自明治九年一月至同六月、鑄造高一六八一八九貫五五〇 |
| 硫黃鑛 | 吾妻郡草津村干俣村入會 | 二四五二 | 同　七年七月 | 休業 | |
| 同 | 草津村字殺生山 | 四〇〇 | 同　八年十月 | 營業中 | |
| 同 | 郡草津村字殺生河原 | 一八〇〇 | 同　八年十二月 | 營業中 | |
| 同 | 前口村字白根山 | 不明 | 同　九年七月 | 營業中 | |
| 石炭鑛 | 片岡郡寺尾村字大畑岩 | 七〇五 | 同　九年五月 | 營業中 | 自明治九年一月至六月、六三四六四貫目 |
| 同 | 乘附村字蛇持 | 一五〇〇 | 同　八年十月 | 營業中 | 同、七一四一九貫四五 |
| 同 | 碓氷郡下秋間村字道ノ入 | 不明 | 同　八年十一月 | 試掘中 | |
| 蠟石鑛 | 甘樂郡秋畑村字杉ノ久保 | 一〇〇 | 同　八年十月 | 營業中 | 自明治九年一月至三月、八六二貫一〇一 |
| 同 | 秋畑村字チガヤノツリ | 二四 | 同　八年十一月 | 營業中 | 自明治九年一月至六月二四〇貫 |
| 同 | 多胡郡上日野村字ナ、ムラ | 未詳 | 同　九年八月 | 同 | |
| 同 | 同郡同村字ミカホ山ノ内フキリ | 未詳 | 同　九年八月 | 同 | |
| 同 | 吾妻郡四萬村字蠟石山 | 未詳 | 同　九年八月 | 同 | |
| 同 | 利根郡谷地村字櫻川 | ― | ― | ― | 明治十年内國勸業博覽會出品調査中 |

| 明礬礦 | 吾妻郡大前村鎌原村字馬踏土澤 | 未詳 | 同 | 七年七月 | 休業 |
|---|---|---|---|---|---|

（群馬縣史稿工業編。）

之を本邦鑛業發達史に徴するに、明治の初年より十八年に至る間は、鑛業の官營時代にして、富坑良山は皆官業に屬し、政府は鋭意して、外國技師を招徠し、新式機械を買入れ、計畫實施に頗る勉め、範を垂れ、一方民營の鑛山採開を奬勵する所ありたればにや、本縣の鑛業も漸次開採せられ、明治十七年の調査は、新に銅・陶土・黑鉛・等を加ふるを見たり。其調査表は左の如し。

明治十七年自七月至十二月借區坑業明細表

| （鑛山名） | （產鑛） | （位置） | （鑛區坪數） | （開業許可日） | （廢坑年月） |
|---|---|---|---|---|---|
| | 銅鑛 | 利根郡相俣村字大源太山 | 一六、〇〇〇坪 | | |
| | 蠟石 | 吾妻郡四萬村字蠟石山 | 九〇〇 | 明治九年十月十九日 | 明治十八年七月 |
| | 硫黄 | 吾妻郡草津村字白根山萬座山 | 五、一七三 | | |
| | 陶土 | 碓氷郡下秋間村字二反田 | 三〇 | | |
| | 同 | 同郡安中驛湯澤字笹平 | 一〇〇、五 | 明治十三年十一月二十五日 | 明治十四年十月 |
| | 同 | 吾妻郡折田村字戰道 | 一〇、〇 | 同十六年四月二日 | 明治十八年七月二十一日 |

| | | | |
|---|---|---|---|
| 陶土 | 北勢多郡輪組村字白岩 | 一〇 | 同十六年五月二十三日 |
| 硅酸苦土 | 利根郡下河田村字宮塚 | 一〇 | |
| 同 | 北甘樂郡下奥平村字長坂山 | 九 | |
| 石炭 | 碓氷郡下野尻村字馬入ラズ | 五七〇 | 明治六年十二月 |
| 同 | 緑野郡山名村赤岩山字南ノ平 | 二〇〇 | |
| 同 | 多胡郡馬庭村字外山 | 一、二〇〇 | |
| 同 | 片岡郡寺尾村字小塚 | 四、一七五 | |
| 同 | 同　寺尾村字長坂 | 七〇〇 | 明治十四年四月 |
| 同 | 同　字上ノ臺 | 四〇〇 | 同　二　月 |
| 同 | 緑野郡山名村字赤岩 | 六〇〇 | |
| 同 | 同　字左近屋敷 | 五〇〇 | 明治十四年九月 |
| 同 | 同　字小塚 | 二、〇〇〇 | 同　十一月 |
| 同 | 同　字大畑 | 三、〇〇〇 | 同　二　月 |
| 同 | 同　乗附村字雨坪 | 一、〇〇〇 | |
| 同 | 多胡郡馬庭村字猪々ノ龍 | 二、〇〇〇 | 明治十三年十二月 |
| 同 | 片岡郡寺尾村字長坂 | 三、六四〇 | 同十三年一月 |
| 同 | 片岡郡寺尾村字中臺 | 三七〇 | |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 同 | 同　字長坂 | 六〇〇 | | |
| 同 | 片岡郡乘附村字蛇喰見 | 三、〇〇〇 | 明治十年 | |
| 同 | 同　字雨坪 | 一〇、二九〇 | | |
| 黑鉛 | 利根郡川場湯原村字中谷 | 三〇 | 明治十三年十二月廿三日 | 明治十八年十二月 |
| 班石 | 同 | 三〇 | 同 | 同上 |
| 硫黄 | 碓氷郡川浦村字氷妻 | 二五〇〇 | 同十八年十二月二日 | |
| 銅鑛（川間々銅山） | 利根郡柿平村字川間々 | 七五一、五 | 同十二月十六日 | |
| 陶土 | 同　尾合村字屋敷平 | 一五 | 同十五年十一月 | |

右の表中に就き、比較的大規摸の採掘を行へるは、唯北甘樂郡中小坂の鐵山のみ。

中小坂鑛山は、北甘樂郡中小坂村字金窪にあり。發見年曆等詳ならざるも、嘉永年中、飛驒國人金藏と云ふ者、土俗金窪と稱するを傳聞し、來つて右山持主石井長市外一人と謀り、假りに熔礦を試み、其製鐵を得るを覺知し、時の藩主（小幡）松平攝津守へ開鑛を請願して果さず。夫れより數年の後、舊幕府勘定役山崎代之進なる者、山相を檢査し、同普請役橫山信太郎出張し、鑛爐建築の事を起して成らず。維新の後、明治三年、土御門家の家來內藤半十郎なる者、開鑛を企

望し、許可を民部省に得たりといへども、着手に至らずして、東京士族野村誠一郎なる者に讓與せり。翌四年、洋法を摸擬し、礦爐を築造し、試吹をなせしも、其宜しきを得ず。偶〻同人病に罹り、東京人鵜飼五郎兵衛外八人にて之を繼續す。同五年・六年の間、專ら坑業を主張し、幾分の銑鐵を得きと雖、其經費を支出する能はず、又東京士族丹羽正庸に讓り、同人は英人ウヲーハルス氏を雇ひて、工師と爲し、更に洋法の鎔爐を新築し、蒸氣械を輸入し、專ら試驗中、猶經費の堆積するを以て、明治九年十月、石川縣士族由利公正・三浦安の兩人に讓與せり。明治十年よりは、舊工部省鑛山局にて之を經營せしが、明治十七年、再び民有に歸し、東京府坂本彌八擔任經營せり。

明治二十三年、日本坑法の一部改正あり。此の時に當り、地方廳に委任しありたる鑛業行政を解除し、總て出願等、直接中央官憲に於て接受處理することゝなり、續いて明治廿五年六月施行の鑛業條例に伴ひ、農商務省鑛山局處理の下に鑛山監督署を設け、全國を五區に分ち、直接に鑛山の保護監督の事務に當らしむることゝなり、地方廳に於ては、試掘・採掘等出願に關する事務を處理するに止まれり。其以後に於ける鑛業の發達は詳ならず。然れども概觀する所明治二十年前後

に隆盛を極めたる本縣管下の諸鑛山も、休坑・廢坑に及びて、甚だ不振なりしが、大正三・四年、歐洲戰役の影響を受け、鑛物の市價一般の昂騰に因り、鑛山採掘の事業頓に勃興し來りて、出願件數著しく激增し、且つ三菱・古河・高田等の大資本家の、競うて投資經營したる爲めに、微々として振はざりし本縣鑛業も、漸く斯界に認められ、其產額の如き、大正五年に金五萬壹千餘圓は、大正八年に一躍二十二萬餘圓の多額に上れり。今大正八年中の產額を、產物・產地と共に表示すれば、左の如し。

大正八年鑛產表

| (鑛種) | (產額) | (產鑛山名) |
|---|---|---|
| 鐵 | 三〇、二六四圓 | (北甘樂)小坂鑛山、八幡鑛山 |
| 硫黃 | 二八、五七四 | (吾妻)嬬戀村、草津村 |
| 亞鉛 | 一、一八四 | 八重鑛山(多野郡上野村) |
| 亞炭 | 八二、七九二 | 群馬郡片岡村、碓氷郡安中町、同八幡村 |
| 銅 | 一二〇 | 多野郡日野村 |
| 金銀銅 | 二七〇 | 八幡鑛山(北甘樂郡) |
| 金銀銅亞鉛 | 七二、八五一 | 上武鑛山(多野郡上野村) |
| 石炭 | 四七五 | 吾妻郡名久田村 |

| | | |
|---|---|---|
| 滿俺 | 四、〇八七 | 勢多郡東村、黒保根村 |
| （計） | 二二〇、六一七 | |

尚大正十四年七月一日現在の試掘・採掘・砂鑛の鑛區は、左の如し。

甲　試掘鑛區一覽表　（大正十四年七月一日現在）

| （鑛種） | （所在地）（郡） | （所在地）（町村） | （鑛區坪數） |
|---|---|---|---|
| 滿俺 | 勢多 | 東村 | 二六七、五〇〇 |
| 同 | 同 | 黒保根村 | 七八一、三五〇 |
| 同 | 同 | 東村黒保根村 | 三六〇、五一四 |
| 亞炭 | 群馬 | 片岡村 | 三九三、一〇〇 |
| 金銀銅鉛亞鉛 | 多野 | 上野村 | 四六七、七〇〇 |
| 亞炭 | 同 | 八幡村 | 一九〇、六三七 |
| 金銀銅硫化鐵 | 北甘樂 | 小坂村 | 一、〇〇〇、〇〇〇 |
| 金銀銅亞鉛硫化鐵滿俺 | 同 | 尾澤村 | 九四八、〇〇〇 |
| 金銀銅砒 | 同 | 西牧村 | 七八五、〇〇〇 |
| 金銀銅砒亞炭 | 同 | 同 | 九九九、〇〇〇 |
| 亞炭 | 碓氷 | 岩野谷村安中町 | 三七七、八八七 |

| （鑛種） | （所在地）（郡） | （所在地）（町村） | （鑛區坪數） |
|---|---|---|---|
| 亞炭 | 碓氷群馬 | 八幡村片岡村 | 一三九、〇三五 |
| 金・銀・銅・硫化銅 | 吾妻 | 嬬戀村 | 四七六、七〇〇 |
| 鐵 | 吾妻利根 | 伊參村名久田村新治村 | 九七六、一〇〇 |
| 硫黄 | 吾妻 | 嬬戀村 | 一、六二九、一九八 |
| 同 | 同 | 草津町 | 一五四、八四〇 |
| 黒鉛 | 利根 | 川場村 | 一四七、〇〇〇 |
| 銀・銅・鉛 | 同 | 赤城根村 | 四二一、五七〇 |
| 鐵 | 同 | 新治村 | 六二六、〇〇〇 |
| 石炭 | 同 | 絲之瀬村 | 五七、五〇〇 |
| 金・銀・銅 | 同 | 水上村 | 四三〇、八〇〇 |
| 金・銀・銅・鐵・重石 | 同 | 川場村東村白澤村 | 九七二、〇〇〇 |

| 鑛種 | 郡 | 町村 | 坪數 |
|---|---|---|---|
| 金銀銅鉛 | 利根 | 新治村 | 三九一、一七三 |
| 金銀銅亞鉛 | 同 | 東村 | 二、一七三、三七六 |
| 金銀銅鉛 | 同 | 水上村 | 二、五四三、〇一六 |
| 金銀銅 | 同 | 片品村 | 二、三一四、二八九 |
| 石炭 | 吾妻・利根 | 伊參村・新治村 | 一八二、三〇〇 |
| 亞炭 | 利根 | 久呂保村 | 二七三、六〇〇 |
| 金・銀・銅・鐵・重石・亞鉛 | 同 | 川場村 | 六五三、七〇〇 |
| 金・銀・銅重石 | 同 | 片品村 | 五四一、八〇〇 |
| 銀・銅・鉛 | 同 | 赤城根村 | 五三三、〇〇〇 |
| 滿俺 | 山田 | 梅田村 | 三四、〇〇〇 |

## 乙 採掘鑛區表

| （鑛種） | （鑛山名） | （所在町）（郡） | （所在町）（町村名） | （鑛區坪數） | （大正十三年鑛產額） |
|---|---|---|---|---|---|
| 滿俺 | 小中山 | 勢多 | 東村 | 六、四三五 | — |
| 同 | 瀧澤 | 同上 | 同上 | 二八、三〇〇 | 三一一七〇貫 |
| 亞炭 | 田島 | 群馬・碓氷 | 片岡村・八幡村 | 一六〇、八二四 | 四二七七噸 |
| 同 | 石童赤岩 | 群馬・碓氷・多野 | 片岡村・八幡村・入野村 | 五四、七二〇 | — |
| 同 | 館 | 群馬 | 片岡村 | 三〇八、八三四 | 一三六三噸 |
| 同 | 乘附 | 同 | 同 | 一七、六五五 | — |
| 同 | 同 | 同 | 同 | 一四二、七一五 | 六七〇 |
| 同 | 大平 | 群馬・碓氷 | 片岡村・八幡村 | 二九、〇一六 | — |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 亞炭 | 平山 | 群馬 | 片岡村 | 六五、八一四 | 一八 |
| 同 | 根岸 | 同 | 同 | 一二五、六六二 | ― |
| 同 | 中山 | 多野 | 入野村 | 一一、一三一 | 八二 |
| 同 | 赤岩 | 同 | 八幡村 | 四二、六三八 | 一四二 |
| 同 | ― | 同 | 平井村 美土里村 | 一二八、一五〇 | ― |
| 石炭 | 西牧 | 北甘樂 | 西牧村 | 一五、二三二 | ― |
| 金銀銅鉛 亞鉛ニッケル | 八幡 | 同 | 八幡村 | 五九七、九八四 | ― |
| 鐵 | ― | 同 | 小坂村 | 一六三、七四七 | ― |
| 亞炭 | 湯澤 | 碓氷 | 安中町 秋間村 | 一六一、二八五 | 一〇九 |
| 同 | 碓氷 | 同 | 安中町 秋間村 板鼻町 | 四三三、〇九五 | 二、六七六 |
| 同 | 山王 | 同 | 安中町 岩野谷村 八幡村 | 一一五、七〇六 | 四八 |
| 同 | 鼻高 岩井 | 碓氷 群馬 | 岩野谷村 八幡村 片岡村 | 二三〇、八二三 | 四、六五九 |
| 同 | 日ノ木 | 碓氷 群馬 | 八幡村 片岡村 | 一二五、二〇五 | 二、三九〇 |
| 石炭 | 安中 | 碓氷 | 安中町 | 九、五三七 | ― |
| 亞炭 | ― | 同 | 八幡村 板鼻町 | 六六、四五二 | ― |
| 同 | ― | 同 | 岩野谷村 八幡村 | 二七、七七六 | ― |
| 硫黃 | 白根 | 吾妻 | 嬬戀村 | 一五、二七〇 | ― |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 同 | 萬座 | 同 | 同 | 六一、六七二 | ― |
| 同 | 吾妻 | 同 | 同 | 一二一、四八六 | 一二五一噸 |
| 同 | 小倉 | 同 | 六合村 | 七二、二七〇 | ― |
| 同 | 草津 | 同 | 草津町 | 四〇、六一七 | 沈澱硫黄鑛 二〇九〇五貫 |
| 金銀 | 舟ヶ原 | 利根 | 片品村 | 二七三、七〇〇 | ― |
| 銅 | ― | 同 | 新治村 | 一四〇、七八五 | ― |
| 銀銅 | 利根 | 同 | 水上村 | 一八、六二〇 | ― |
| 金銀銅 | 利根 | 同 | 同 | 三四三、四八二 | ― |
| 金銀銅鉛亞鉛 | 一ノ澤 | 同 | 同 | 四三、七三一 | ― |
| 金銀銅鉛亞鉛 | 大利根 | 同 | 同 | 三〇八、四〇七 | ― |
| 金銀銅鉛重石 | 赤城根 | 同 | 赤城根村 | 二四、〇九七 | ― |
| 銅 | 寶川 | 同 | 水上村 | 五〇八、三四八 | ― |
| 銀銅鉛 | 赤城根 | 同 | 赤城根村 | 二〇七、〇六〇 | ― |
| 同 | 小松 | 同 | 同 | 二六九、一一六 | ― |
| 黒鉛 | ― | 同 | 川場村 | 六九、八六五 | ― |
| 鐵 | ― | 同 | 白澤村 | 六五五、〇〇〇 | ― |
| 満俺 | 山地 | 山田 | 梅田村 | 五、一二〇 | ― |

丙　砂鑛區表

| （鑛種） | （郡） | （町村名） | （鑛區坪數又ハ延長） | （大正十三年採取高） |
|---|---|---|---|---|
| 砂金　砂鐵　砂錫 | 利根 勢多 群馬 | 久呂保村・敷島村 白郷井村 | 一二三〇四〇（里 町 間） | 一 |
| 同 | 勢多 群馬 | 横野村 白郷井村長尾村 | 一三四二〇 | 一 |
| 同 | 勢多 | 敷島村 | 一四一五 | 一 |
| 同 | 勢田 群馬 | 横野村 長尾村 | 三〇四四 | 一 |

（縣廳保存文書・東京鑛山監督局管區鑛區一覽）

## 第十一項　商業

明治維新以來、世運の進歩に隨ひ、經濟生活機關の分化を促し、生產と消費との距離、漸次大になりしかば、此兩者の連絡を通ずる機關としての商業、亦次第に發達せんとする機運に際會せり。是を以て本縣に於ても、明治十一年十二月、所定の本縣事務章程には、勸業課中に勸商・銀行の二科を設け明治十四年八月改正の勸業課中にも、商工・銀行の二係を置き、後內務部に商工課を、大正十一年には商工

課を獨立せしめて、以て時代に適應せる職制を定めたり。而して之が發達に對する施設も、亦怠ることなかりき。其施設する所、概ね政府の法令に基くは勿論なれども、今其著しきもの二三を擧ぐれば、明治四十二年、（群馬縣令第四十五號、）度量衡の取締に關する法規を定め、同三十四年十月、銀行の濫設に關する告諭を出し、次いで明治四十四年三月、前橋・高崎兩商業會議所の會頭を召集して、特別議員任命、調査部の常置書記長の任用、會議の狀況報告、商工業者の會合の訓示をなすと共に、業務振興策として必要なる事項につき、意見を諮問して、商業振興策を講じたり。大正九年、物産陳列館を商品陳列所と改め、專ら商品に關する業務を行ひ、以て縣下商業の發展に資したる如き、即ち是れなり。此他種々の施設は、交通機關の發達、金融機關の整頓、農工生産物の增加と相連繫して、逐年發達の域に進めり。今は取引上の慣習、市場の狀況、度量衡に關する詳精なる記事等を揭載するの暇なきを以て、最近に於ける商業從事者調、及び金融機關として銀行・會社等の發達概況を略述して、最後に貨物移動狀況、及び物價調・賃銀調表を附載して、最近の商業狀態の一班を知るの參考に供せん。

## 一　商業戸數調

| （年　次） | （仲買業） | （小賣業） | （仲買小賣業） | （合　計） | （總戸數ニ對スル百分比） |
| --- | --- | --- | --- | --- | --- |
| 明治四十一年 | 二、七三五 | 二〇、〇二七 | 四、九四五 | 二七、七〇七 | — |
| 大正二年 | 二、七五〇 | 二二、一四五 | 四、七八八 | 二九、六八三 | — |
| 同　三年 | 二、四五八 | 二二、〇四三 | 四、七六八 | 二九、二六九 | — |
| 同　四年 | 二、三八五 | 二二、一七四 | 四、四九九 | 二九、〇五八 | 一六 |
| 同　五年 | 二、六七〇 | 二三、一六三 | 四、九〇七 | 三〇、七四〇 | 一六 |
| 同　六年 | 二、九一三 | 二三、六九六 | 五、一八二 | 三一、七九一 | 一七 |
| 同　七年 | 二、八五二 | 二四、二四六 | 五、三九九 | 三二、四九七 | 一七 |
| 同　八年 | 三、〇二五 | 二四、九九五 | 五、八六五 | 三三、八八五 | 一七 |
| 同　九年 | 三、〇七二 | 二五、三九四 | 五、八五八 | 三四、三二四 | 一七 |

大正十年以後此種別調查廢止ニツキ記載セズ。

## 二　銀行

明治五年、國立銀行條例制定せられたれども、當時本縣には其設立を見ざりき。

第三十九及第四十國立銀行

明治十七年まで設立の私立銀行

明治八年調熊谷縣一覽表に據れば、第二國立銀行支店高崎驛と記すを見れば、思ふに本縣の銀行は、此年以前に設置せられたるなるべし。併し本店の設立せられたるは、此の後に在り。明治九年八月一日、第百六號國立銀行條例發布に據り、明治十年八月廿二日、前橋町住人樋口猛を初とし、百五十八人より、資本金三十五萬圓を以て、士族合本國立銀行創立を、大藏省に向ひ出願し、一日後れて二十三日、邑樂郡館林町林恪齋を始めとして四十五人より、資本金二十萬圓を以て、之れ亦同樣出願せり。其目的とする所、士族就産の爲め金融機關を設置するにありき。此出願に對し明治十一年一月十二日附を以て、國立銀行設立を認可し、前橋を第三十九國立銀行、館林を第四十國立銀行と稱すべきこと、及び創立證書銀行定款は、金祿公債證書下附の日より九十日間に差出すべき旨を、大藏省より達せらる。開業免狀は同年十二月十二日附を以て下附せられたり。是れ本縣銀行設立の嚆矢なり。是等を先驅として、縣下各地に私立銀行の設立を見るに及べり。明治十七年迄の分は左の如し。

| (名稱) | (所在地) | (承認年月 開業年月) | (業務) | (株式一株金) | (資本金) |
| --- | --- | --- | --- | --- | --- |
| 富岡銀行 | 北甘樂郡富岡町 | 明治十五年五月<br>同十六年七月 | 荷爲替、通常爲替、商人生産者資金貸與、當座定期預金 | 五〇圓 | 拾萬圓 |

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 大間々銀行 | 山田郡大間々町 | 同十五年十一月 | 同十六年一月 | 同前 | 五〇 | 五萬圓 |
| 碓氷銀行 | 碓氷郡安中驛 | 同十六年一月 | 同十六年三月 | 産業資金貸與・荷爲替・送金爲替・預金・公債證書・地金賣買等 | 二〇 | 貳拾萬圓 |
| 松井田銀行 | 同郡松井田驛 | 同十六年一月 | 同十六年三月 | 同前 | 二〇 | 拾萬圓 |
| 澁川銀行 | 西群馬郡澁川村 | 同十六年十一月 | 同十六年十二月 | 同前 | 五〇 | 七萬圓 |

明治十八年沼田銀行明治二十年吾妻銀行の創立を見、明治二十一年を劃して、銀行の新設一時中絶したりしが、明治二十七八年戰役の後、産業各般の勃興に促進せられて、銀行亦各地に設立せらる。其銀行を設立年次別に示せば左の如し。

明治卅三年迄に設立の銀行

明治二十六年　富岡銀行　原市銀行
同　二十七年　北毛農商銀行　群馬商業銀行　伊勢崎銀行
同　二十八年　館林貯蓄銀行　藤岡銀行
同　二十九年　高崎積善銀行　下仁田銀行
同　三十　年　上毛貯蓄銀行　安中銀行　新田銀行　沼田銀行
同　三十一年　與志井銀行　群馬縣農工銀行　前橋商業銀行
　　　　　　　高崎銀行　沼田貯蓄銀行　吾妻貯蓄銀行
同　三十二年　木瀬銀行　廿樂銀行

同　三十三年　尾島銀行　鬼石銀行　利根銀行　玉村銀行
玉村貯蓄銀行　花輪貯蓄銀行　碓氷產業銀行
吾妻興業銀行　高山銀行　世良田銀行　原町銀行
岩島銀行

斯く續々設置せられ底止する所を知らざりしかば、本縣は其濫設の結果、經濟界を紊亂する虞を懷き、明治三十四年十月、告諭第一號を以て銀行設立に就いて注意する所ありたり。其告諭文に曰く、

近時銀行ノ設立年々增加シ、其止ル所ヲ知ラズ。斯ノ如キハ遂ニ銀行濫設ノ弊ニ陷リ、經濟界ヲ紊亂スルノ虞アリ。大藏省ニ於テモ、玆ニ見ル處アリ。向後一層愼密ノ審査ヲ遂ゲタル後、認可ヲ與フルノ方針ナリト聞ク。故ニ從前ノ如ク、當業者ガ會社設立ニ關スル一切ノ手續ヲ完了シ、資本ヲ蓄積シナガラ、營業ノ認可ヲ竢ツコト、セバ若シ不認可ノ指令ニ接シタル場合ニ於テハ、其拂込ミタル株金ヲ返却スル等、商法規定ノ權利關係ヲ錯亂シ、地方經濟上ノ弊害、決シテ尠少ナラザルベシ。依テ今後銀行ヲ設立セントスル者ハ、豫メ郡市役所ヲ經テ、當廳ニ謀リタル後、會社成立ノ手續ニ着手シ、他日ノ遺憾ナキヲ期スベシ。

爾來新設者少く、加之既設銀行中にても、漸次合併して大資本組織の傾向を生じたれば、本縣の銀行數も、最近其數を減じ、大正四年末四十二銀行より、大正十五年六月末には二十八銀行を算せり。

本縣銀行一覽　（大正十五年六月末日現在）

| （銀行名） | （所在地） | （創立年月日） | 營業所（支店） | 營業所（出張所） | 資本金（公稱額） | 資本金（拂込額） | （積立金） |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 株式會社群馬縣農工銀行 | 前橋市本町 | 明治三十一年三月十二日 | — | （代）二七 | 二,〇〇〇,〇〇〇圓 | 二,〇〇〇,〇〇〇圓 | 一,七八六,〇〇〇圓 |
| 同　上毛貯蓄銀行 | 前橋市横山町 | 大正十年七月十八日 | 一 | （代）四九 | 一,〇〇〇,〇〇〇 | 二五〇,〇〇〇 | 五〇〇,〇〇〇 |
| 同　群馬銀行 | 前橋市本町 | 大正七年十月二十七日 | 五 | — | 二,〇〇〇,〇〇〇 | 一,五〇〇,〇〇〇 | 四一六,九〇〇 |
| 同　上毛實業銀行 | 前橋市竪町 | 大正十年七月一日 | 七 | 二 | 五,九〇〇,〇〇〇 | 一,五三〇,〇〇〇 | 二九六,〇〇〇 |
| 同　上州銀行 | 高崎市田町 | 大正八年六月二十日 | 六 | — | 三,三一〇,〇〇〇 | 一,〇八〇,〇〇〇 | 三五一,一七五 |
| 同　大間々銀行 | 山田郡大間々町 | 明治十九年十一月二十七日 | 一 | — | 五〇〇,〇〇〇 | 三二七,〇〇〇 | 一一九,四二五 |
| 同　伊勢崎銀行 | 佐波郡伊勢崎町 | 大正十一年十二月二日 | 六 | — | 四,三五〇,〇〇〇 | 一,九四五,〇〇〇 | 二五四,〇〇〇 |
| 同　追貝銀行 | 利根郡東村 | 大正十年一月十二日 | 二 | — | 五〇〇,〇〇〇 | 一二五,〇〇〇 | 三〇,四〇〇 |
| 同　利根銀行 | 利根郡沼田町 | 大正十五年四月一日 | 四 | — | 一,三七〇,〇〇〇 | 三一七,五〇〇 | 二〇〇,〇〇〇 |
| 同　利根實業銀行 | 利根郡沼田町 | 明治四十三年一月四日 | 二 | — | 五〇〇,〇〇〇 | 三五〇,〇〇〇 | 一〇四,一一〇 |
| 同　岩島銀行 | 吾妻郡岩島村 | 明治三十三年十一月二日 | — | — | 一五〇,〇〇〇 | 七五,〇〇〇 | 三四,〇〇〇 |

| | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 同 | 吾妻興業銀行 | 吾妻郡中之條町 | 明治三十三年十月二十八日 | ｜ | ｜ | 一五〇、〇〇〇 | 一〇〇、〇〇〇 | 三九、六五九 二九六 |
| 同 | 高山銀行 | 吾妻郡高山村 | 明治三十三年十一月十八日 | ｜ | ｜ | 三〇、〇〇〇 | 三〇、〇〇〇 | 一〇、九三五 |
| 同 | 原町銀行 | 吾妻郡原町 | 明治三十三年十月二十六日 | ｜ | ｜ | 五〇、〇〇〇 | 五〇、〇〇〇 | 六六、八〇〇 |
| 同 | 中之條銀行 | 吾妻郡中之條町 | 大正十年十一月十三日 | ｜ | ｜ | 一、〇〇〇、〇〇〇 | 二五〇、〇〇〇 | 六〇、九三四 七〇 |
| 同 | 碓氷産業銀行 | 碓氷郡安中町 | 明治三十三年七月二十九日 | 二 | ｜ | 一〇〇、〇〇〇 | 一〇〇、〇〇〇 | 一三六、〇〇〇 |
| 同 | 原市銀行 | 碓氷郡原市町 | 明治二十六年六月二十九日 | ｜ | ｜ | 二五〇、〇〇〇 | 一〇〇、〇〇〇 | 四六、〇七八 五三 |
| 同 | 松井田銀行 | 碓氷郡松井田町 | 明治十六年一月十日 | 二 | ｜ | 五〇〇、〇〇〇 | 二五〇、〇〇〇 | 八三、五五〇 |
| 同 | 甘樂銀行 | 北甘樂郡富岡町 | 明治三十二年十一月二十九日 | ｜ | ｜ | 五〇〇、〇〇〇 | 五〇〇、〇〇〇 | 一四三、〇〇〇 |
| 同 | 一ノ宮銀行 | 北甘樂郡一ノ宮町 | 大正五年六月二十日 | ｜ | ｜ | 一〇〇、〇〇〇 | 六〇、〇〇〇 | 三、八二九 |
| 同 | 下仁田銀行 | 北甘樂郡下仁田町 | 明治二十九年六月四日 | 一 | ｜ | 五〇〇、〇〇〇 | 五〇〇、〇〇〇 | 二五三、〇〇〇 |
| 同 | 富岡銀行 | 北甘樂郡富岡町 | 明治二十六年二月十三日 | ｜ | ｜ | 五〇〇、〇〇〇 | 五〇〇、〇〇〇 | 二一六、〇〇〇 |
| 同 | 與志井銀行 | 多野郡吉井町 | 明治三十年十二月九日 | ｜ | ｜ | 三〇〇、〇〇〇 | 一二二、五〇〇 | 五八、一〇〇 |
| 同 | 鬼石銀行 | 多野郡鬼石町 | 明治三十三年二月二十日 | 一 | ｜ | 三〇〇、〇〇〇 | 一五〇、〇〇〇 | 二六、一五〇 |
| 同 | 澁川産業銀行 | 群馬郡澁川町 | 大正元年十一月二十八日 | ｜ | 二 | 二五〇、〇〇〇 | 二五〇、〇〇〇 | 五二、五〇〇 |
| 同 | 倉賀野銀行 | 群馬郡倉賀野町 | 明治三十三年七月十五日 | ｜ | ｜ | 二〇〇、〇〇〇 | 九五、〇〇〇 | 二二、〇〇〇 |
| 同 | 澁川銀行 | 群馬郡澁川町 | 明治十六年十月一日 | ｜ | ｜ | 六〇〇、〇〇〇 | 三三〇、〇〇〇 | 一五四、〇〇〇 |
| 同 | 横野銀行 | 勢田郡横野村 | 明治十五年二月十五日 | ｜ | 一 | 一〇〇、〇〇〇 | 一〇〇、〇〇〇 | 三三、〇〇〇 |

右の外、他府縣に本店を有し、本縣内に支店を置くものは左の如し。

| （銀行名） | （本店所在地） | （支店數） | （支店所在地） |
|---|---|---|---|
| 株式會社第二銀行 | 横濱市本町 | 二 | 前橋市　高崎市 |
| 同　安田銀行 | 東京市麹町區永樂町 | 五 | 前橋市　高崎市　桐生市　藤岡町　伊勢崎町 |
| 同　足利銀行 | 足利市通三丁目 | 六 | 前橋市(2)　高崎市　館林町　桐生市　伊勢崎町 |
| 同　東海銀行 | 東京市日本橋區呉服町 | 三 | 館林町　桐生市(2) |
| 同　横濱興信銀行 | 横濱市辨天通四丁目 | 一 | 高崎市 |
| 同　不動貯金銀行 | 東京市麻布區新龍土町 | 一 | 前橋市 |

大正十三年末現在、縣下本店銀行は、農工銀行一、貯蓄銀行一、普通銀行二十四、資本金二千六百二十四萬圓、拂込濟一千二百九十四萬五千圓、中普通銀行の資本金二千三百二十四萬圓、拂込濟一千六十九萬五千圓なり。各種預金總額は、大正三年末一千九百二十四萬七千九百七十五圓、大正十二年末四千九百三十九萬六千百二十一圓にして、甚だしき増加を示し、之に對し各種貸付金も亦、大正十二年末五千四百九十一萬九千四百六十三圓の巨額を示せり。斯くて各種貸付金が預金よりも五百五十二萬八千七百四十二圓の超過を示し、此額は拂込濟資本金の約半に近し。諸預金中、特別當座預金最も多く、一千四百七十九萬三百二十五圓、定

期預金略之と雁行し、一千四百四十九萬四千一百四十五圓、當座預金は八百十一萬二千七百五十七圓を示す。貸附金は手形貸付・證書貸付、大部分を占め、前者二千二百二十一萬四千二百五圓、後者一千七百七十萬九千六百五十二圓、當座貸越と割引手形と之に次ぎ、前者は八百九十一萬六百七圓、後者は五百六十八萬五百七十八圓なり。(左の二表參照。)

### 銀行預金表

| (年次) | (定期預金) | (當座預金) | (特別當座預金) | (貯金積金) | (其ノ他預金) | (計) |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 大正三年 | 六、一〇四、四三五 | 三、〇三一、八五九 | 四、一九九、五四八 | 一、七五八、一三七 | 四、一六四、〇〇六 | 一九、二四七、九七五 |
| 同　四年 | 五、一〇三、一八〇 | 二、六五四、九一八 | 一、四八一、一四九 | 一、七七六、九三四 | 四、四三六、八四五 | 一六、四四二、〇三六 |
| 同　五年 | 七、三四一、四六四 | 三、三七四、四八三 | 四、八六八、九七三 | 二、二四八、八七一 | 二、八三〇、六一三 | 二五、四五五、八三五 |
| 同　六年 | 九、八〇四、七〇五 | 四、七三八、三七四 | 八、〇三六、三三〇 | 二、八一五、五〇五 | 七〇、九一一 | 二五、四五五、八三三 |
| 同　七年 | 八、七六八、一三〇 | 四、三七一、四八八 | 八、五五七、三九五 | 二、二九三、四四〇 | 三、〇三三、七八三 | 二六、九一三、三三五 |
| 同　八年 | 一〇、五八一、七七四 | 五、一九四、三四一 | 八、八七三、九六三 | 二、七二九、五五一 | 六、一一六、七九九 | 三三、四九五、四三七 |
| 同　九年 | 九、一四三、五九九 | 五、一六九、九七四 | 八、三六六、七七三 | 二、三三五、一八九 | 五、七一六、二五七 | 三〇、七三〇、七九三 |
| 同　十年 | 九、三五八、三三三 | 五、四四一、八〇六 | 一一、七三七、九三三 | 七三六、三八三 | 八、一四四、六九六 | 三五、三三四、一四〇 |

| 年次 | 證書貸付 | 手形貸付 | 當座貸越 | 割引手形 | 荷付爲替手形 | 計 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 同　十一年 | 一〇、九五五、五七四 | 六、九二五、九五〇 | 一三、二六三、一五七 | 一、〇六八、五三三 | 九、五三三、五二八 | 四一、七三六、七四二 |
| 同　十二年 | 一四、四九四、一四五 | 八、二一三、七五七 | 一四、七九〇、三三五 | 一、七七四、八九〇 | 一〇、二一八、五〇四 | 四九、三九〇、六三一 |

銀行貸付金表

| （年次） | （證書貸付） | （手形貸付） | （當座貸越） | （割引手形） | （荷付爲替手形） | （計） |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 大正　三年 | — | — | — | — | — | — |
| 同　四年 | — | — | — | — | — | — |
| 同　五年 | — | — | — | — | — | — |
| 同　六年 | — | — | — | — | — | — |
| 同　七年 | — | — | — | — | — | — |
| 同　八年 | — | — | — | — | — | — |
| 同　九年 | 一三、八八五、三九二 | 一二、三三八、七二七 | 八、一九四、八〇一 | 五、七七五、五八七 | 一三三、八七三 | 四〇、三一七、三九〇 |
| 同　十年 | 一三、三四九、八五二 | 一四、二七三、六四二 | 七、七二一、三三八 | 六、二〇七、二四八 | 四一七、〇〇七 | 四一、九五九、〇七七 |
| 同　十一年 | 一七、一二三、六〇八 | 一五、三六四、三三九 | 八、四七六、〇五九 | 五、九一四、〇三三 | 二九九、二一九 | 四七、四二七、一五七 |
| 同　十二年 | 一七、七〇九、六五二 | 一三、二一四、三二五 | 八、九一〇、六〇七 | 五、六八〇、五七八 | 四四〇、四四一 | 五四、九一九、四六三 |

預金貸付金ノ利子ハ、大正七八年好況時代以後、漸時高歩トナリ、大正十一年末現在ニ於テハ、別表（銀行貸付金利子表參照）ノ如ク、全國ヨリ見テ中位ニ在リ。

## 銀行預金利子調

| （年次） | （定期預金）（最高）年利 | （定期預金）（最低）同 | （定期預金）（平均）同 | （當座預金）（最高）日步 | （當座預金）（最低）同 | （當座預金）（平均）同 | （特別當座預金）（最高）日步 | （特別當座預金）（最低）同 | （特別當座預金）（平均）同 | （普通貯金）（最高）年利 | （普通貯金）（最低）同 | （普通貯金）（平均）同 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 大正三年 | 〇、六五 | 〇、六一 | 〇、六三 | 一、二三 | 一、〇〇 | 一、一三 | — | — | — | 〇、五六 | 〇、四八 | 〇、五三 |
| 同四年 | 〇、六三 | 〇、五四 | 〇、五九 | 一、〇六 | 〇、九二 | 〇、九九 | — | — | — | 〇、五四 | 〇、四八 | 〇、五一 |
| 同五年 | 〇、五四 | 〇、四九 | 〇、五一 | 〇、八一 | 〇、七四 | 〇、七七 | 一、一三 | 〇、八二 | 一、〇〇 | 〇、四九 | 〇、四一 | 〇、四五 |
| 同六年 | 〇、五三 | 〇、四八 | 〇、五〇 | 〇、九六 | 〇、七〇 | 〇、七八 | 一、一〇 | 〇、九六 | 一、〇四 | 〇、四九 | 〇、四〇 | 〇、四四 |
| 同七年 | 〇、五八 | 〇、四九 | 〇、五三 | 〇、九二 | 〇、七二 | 〇、八二 | 一、一五 | 一、〇二 | 一、〇七 | 〇、五〇 | 〇、四三 | 〇、四七 |
| 同八年 | 〇、六一 | 〇、五四 | 〇、五七 | 一、〇〇 | 〇、八〇 | 〇、九〇 | 一、二六 | 一、〇二 | 一、一五 | 〇、五〇 | 〇、四四 | 〇、四八 |
| 同九年 | 〇、七〇 | 〇、六五 | 〇、六八 | 一、一八 | 一、〇七 | 一、一四 | 一、四三 | 一、三一 | 一、三七 | 〇、五九 | 〇、四八 | 〇、五三 |
| 同十年 | 〇、六九 | 〇、六〇 | 〇、六五 | 一、三三 | 〇、八一 | 一、〇八 | 一、四一 | 一、三一 | 一、二八 | 〇、六〇 | 〇、五〇 | 〇、五五 |
| 同十一年 | 〇、七一 | 〇、六三 | 〇、六七 | 一、三三 | 〇、七〇 | 〇、九九 | 一、四〇 | 一、三〇 | 一、二八 | — | — | 〇、五一 |
| 同十二年 | 〇、七三 | 〇、六三 | 〇、六九 | 一、二〇 | 〇、七〇 | 〇、九三 | 一、四五 | 一、三〇 | 一、三四 | — | — | 〇、五三 |

## 銀行貸付金利子調

| （年次） | （證書貸付）（最高）年利 | （證書貸付）（最低）同 | （證書貸付）（平均）同 | （手形貸付）（最高）日步 | （手形貸付）（最低）同 | （手形貸付）（平均）同 | （當座預金貸越）（最高）日步 | （當座預金貸越）（最低）同 | （當座預金貸越）（平均）同 | （割引手形）（最高）日步 | （割引手形）（最低）同 | （割引手形）（平均）同 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 大正三年 | 一、〇三 | 〇、九〇 | 〇、九七 | — | — | — | 二、七四 | 二、五六 | 二、七〇 | 二、七四 | 二、五五 | 二、六八 |

| | | | | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 同　四年 | 一、〇三 | 〇、九五 | 〇、九七 | — | — | — | 二、八二 | 二、五七 | 二、六六 | 二、七三 | 二、三三 | 二、六三 |
| 同　五年 | 〇、九四 | 〇、八六 | 〇、八九 | 二、三三 | 二、一〇 | 二、一五 | 二、四七 | 二、三九 | 二、三七 | 二、五六 | 一、八六 | 二、三一 |
| 同　六年 | 〇、九七 | 〇、八三 | 〇、八六 | 二、三三 | 二、〇九 | 二、一六 | 二、三三 | 二、一六 | 二、三六 | 二、三三 | 一、九四 | 二、三三 |
| 同　七年 | 一、〇二 | 〇、八一 | 〇、八七 | 二、三〇 | 二、〇七 | 二、一六 | 二、三五 | 二、一三 | 二、三四 | 二、一四 | 二、〇九 | 二、一三 |
| 同　八年 | 〇、九九 | 〇、八三 | 〇、八九 | 二、四四 | 二、一八 | 二、三四 | 二、四一 | 二、三三 | 二、三四 | 二、三六 | 二、三五 | 二、三一 |
| 同　九年 | 一、一三 | 〇、九九 | 一、一一 | 三、三八 | 二、九八 | 三、一一 | 三、三八 | 二、九一 | 三、〇八 | 三、三六 | 二、九一 | 三、一四 |
| 同　十年 | 一、二九 | 一、〇六 | 一、二六 | 二、九一 | 二、六九 | 二、八一 | 三、四六 | 二、八七 | 三、〇六 | 三、四四 | 二、七一 | 二、九九 |
| 同十一年 | 一、一三 | 一、〇三 | 一、一四 | 二、八五 | 二、七三 | 二、七八 | 三、五〇 | 二、七六 | 二、九九 | 三、三八 | 二、七六 | 二、九七 |
| 同十二年 | 一、三三 | 一、〇〇 | 一、一一 | 三、五〇 | 二、六七 | 二、九七 | 三、五〇 | 二、八〇 | 三、〇〇 | 三、五〇 | 二、八〇 | 三、一〇 |

## 三　商事會社

本縣の商事會社に就きては、其沿革の跡詳ならず。明治五年六月、內國通運會社が高崎驛に、同九年八月前橋町に支店を設けたる、蓋し會社設置の先驅たるべきか。而も本縣人に依つて企てられたるは、明治九年五月、前橋町の人勝山源三郎・下村善太郎兩人發起して、一株貳千五百圓、八株貳萬圓の資本金を以て、前橋生

前橋生產會社

產會社を設置したるを創始とするが如し。其名稱は殖產興業の爲め、資金を貸與し、物產を繁殖に資益する目的を有するに起因す。當時此種の生產會社は、縣下の各地に設立せられ、從つて起り、從つて倒れ、明治九年より同十七年に至る、九箇年に涉る生產會社興廢表は、左の如し。

| | (設立) | (廢止) | (明治十七年末現在) |
|---|---|---|---|
| 本社 | 貳壹 | 五 | 一六 |
| 分社 | 六壹 | 三八 | 二三 |
| 出張所 | 一二 | 五 | 七 |
| 支店 | 三 | 〇 | 三 |
| (計) | 九七 | 四八 | 四九 |

而して是等の會社の業務は、六・七割は製絲關係なり。然るに社會の進步と共に、諸種の產業發達するに伴ひ、各種の會社も起りて、大正三年以後、大正十二年まで、十年間の營業別會社調に依れば、大正十二年は商業工業首位にありて、其數相匹敵し、前者二七一、後者二六〇、運輸業二八、農業二四なり。拂込濟資本金は、工業首位を占め、三千百九萬五千八百六十三圓、商業二千二百三十萬四千四百九十圓、運

輸業百七十九萬二千四百二十二圓、農業二十八萬三千九百八十五圓なり。其內譯は左表の如し。

## 營業別會社調（其一）

| （年次） | （農業）（社數） | （拂込濟資本金） | （積立金） | （工業）（社數） | （拂込濟資本金） | （積立金） |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 大正三年 | 一五 | 五三、五九一 | 一、一四〇 | 七三 | 八、五一五、三三五 | 三六七、四四一 |
| 同四年 | 一四 | 四五、四六七 | 一、五三五 | 七六 | 一〇、五五六、三四五 | 四一三、七九一 |
| 同五年 | 一五 | 四六、六六七 | 二、九二三 | 七八 | 一二、一九九、三六九 | 四九九、五六七 |
| 同六年 | 一八 | 七八、一六七 | 二、五四四 | 八七 | 一三、九〇三、〇五〇 | 七五五、八八七 |
| 同七年 | 一八 | 一三一、一八二 | 二、七八九 | 一三〇 | 一七、八四九、〇四〇 | 一、三五三、二二五 |
| 同八年 | 二三 | 一八四、〇六四 | 三、五〇七 | 一六四 | 二六、〇三九、三二五 | 一、七九八、四六〇 |
| 同九年 | 二一 | 四〇一、九三五 | 三、三九三 | 二二四 | 二八、〇三七、六三九 | 四、一六八、六〇八 |
| 同十年 | 二六 | 四八五、五四七 | 七、一五三 | 二四七 | 二九、八八六、四九九 | 四、八九九、九五九 |
| 同十一年 | 二七 | 四七〇、五〇五 | 五、九〇三 | 二八六 | 二七、九〇二、四一三 | 四、八五八、五八四 |
| 同十二年 | 二四 | 二八三、九八五 | 三、〇二四 | 二六〇 | 三一、〇九五、八六三 | 四、三五〇、五四八 |

## 營業別會社調（其二）

| （年次） | （商業）（銀行）（社數） | （拂込濟資本金） | （積立金） | （其他）（社數） | （拂込濟資本金） | （積立金） | （運輸業）（社數） | （拂込濟資本金） | （積立金） |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 大正三年 | 四〇 | 五、九〇八、四〇〇 | 一、七六三、五八二 | 一一五 | 一、二五九、六三八 | 一五四、一〇〇 | 一五 | 六〇七、六五七 | 二三、七一七 |
| 同四年 | 四三 | 六、一〇七、七〇〇 | 一、九九九、三一六 | 一一三 | 一、四六二、五五〇 | 一三七、二六九 | 一七 | 六六五、二七七 | 二六、四八五 |
| 同五年 | 四三 | 五、八〇七、六〇〇 | 二、一七二、三一四 | 一三七 | 一、五四七、〇〇五 | 二〇五、〇六一 | 一七 | 七一四、七九二 | 二七、八九四 |
| 同六年 | 四一 | 六、一七八、八五〇 | 二、四三六、六八七 | 一四八 | 一、七四三、七九八 | 二三八、〇〇一 | 一八 | 八八一、七二六 | 三〇、〇五五 |
| 同七年 | 四〇 | 五、二三三、八五〇 | 二、一九二、二五二 | 一六〇 | 二、五八一、九四七 | 二七六、六三一 | 二四 | 一、二〇八、九九二 | 四〇、五〇七 |
| 同八年 | 三八 | 七、〇四七、九二五 | 二、四三一、二六七 | 一六八 | 四、二〇九、一七三 | 三八九、〇〇四 | 一八 | 一、七八一、八六〇 | 四八、二九〇 |
| 同九年 | 三八 | 八、九五二、七三三 | 三、三八四、六六〇 | 二三七 | 三、五二九、三八三 | 八八四、四四二 | 三〇 | 一、六一九、二七四 | 六二、七六〇 |
| 同十年 | 三四 | 一〇、七五三、七五〇 | 三、四九七、三〇五 | 二五五 | 一一、〇八二、七五八 | 六八三、七二〇 | 二五 | 一、三五三、五三八 | 二六、九八八 |
| 同十一年 | 三一 | 一一、九七二、〇〇〇 | 三、三三〇、五七〇 | 二〇四 | 一〇、二二七、〇二〇 | 七三五、七一〇 | 二八 | 八二九、七七〇 | 二八、三三八 |
| 同十二年 | 二九 | 一一、八一七、五〇〇 | 三、五八九、六四〇 | 二三三 | 一〇、四八六、九九〇 | 八五九、四二五 | 二八 | 一、七九二、四三三 | 九九、一八〇 |

次に會社數を組織別と、資本金別とに分くれば左の如し。

### 組織別會社數調

| （年次） | （合名） | （合資） | （株式） | （株式合資） | （計） |
|---|---|---|---|---|---|
| 大正三年 | 五二 | 九四 | 一一〇 | 二 | 二五八 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 大正　四年 | 五〇 | 一一四 | 一一七 | — | 二八一 |
| 同　五年 | 五四 | 一一一 | 一二四 | — | 二八九 |
| 同　六年 | 五四 | 一一六 | 一四一 | 一 | 三一二 |
| 同　七年 | 五六 | 一二一 | 一八四 | 一 | 三六二 |
| 同　八年 | 五七 | 一二二 | 二三一 | 一 | 四一一 |
| 同　九年 | 六七 | 一二五 | 三六七 | 一 | 五六〇 |
| 同　十年 | 六一 | 一二七 | 三九七 | 二 | 五八七 |
| 同　十一年 | 五五 | 一一六 | 四〇四 | 二 | 五七七 |
| 同　十二年 | 六〇 | 一一六 | 三八五 | 二 | 五七三 |

資本金別會社數調

| （年　次） | （五萬圓未滿） | （拾萬圓未滿） | （五拾萬圓未滿） | （百萬圓未滿） | （五百萬圓未滿） | （五百萬圓以上） |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 大正　三年 | 一九四 | 二五 | 二九 | 四 | 五 | 一 |
| 同　四年 | 二三九 | 二一 | 二五 | 二 | 四 | — |
| 同　五年 | 二四〇 | 一七 | 二七 | 一 | 三 | 一 |
| 同　六年 | 二三五 | 二八 | 三四 | 一〇 | 四 | 一 |
| 同　七年 | 二八二 | 三〇 | 四〇 | 六 | 三 | 一 |

前橋商業會議所

高崎商業會議所

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 同　八年 | 三〇二 | 四〇 | 五三 | 一〇 | 五 | 一 |
| 同　九年 | 三八五 | 七九 | 七五 | 一一 | 七 | 三 |
| 同　十年 | 三〇一 | 九一 | 一四三 | 三〇 | 一九 | 三 |
| 同十一年 | 三四四 | 七六 | 一二五 | 二二 | 一〇 | 一 |
| 同十二年 | 三八一 | 八七 | 八九 | 七 | 八 | 一 |

## 四　商業會議所

縣下には前橋・高崎の兩市に商業會議所の設けあり。前橋商業會議所は、明治三十一年三月廿二日、高崎商業會議所は、明治二十八年八月廿四日の創立にして、共に所在地の商工振興を目的とする機關なれど、兩市が縣下商業の二大中心地として、其波動の及ぶ所、殆んど縣下全般に亙るものなれば、本縣は明治四十四年三月、兩所の會頭を縣廳に招致して、訓示諮問をなし、（總說部參照、）其機能發揮に努めたることありしが、爾來兩所何れも活躍して、直接間接に縣下商業を促進しつゝあり。

## 五　貨物移動狀況

鐵道に依る縣内外貨物移動（移入移出）狀況を見るに、移出總額三十五萬五千三百三十六噸、移入總額七十八萬四千九百七十一噸にして、移入超過四拾二萬九千六百三十五噸なり。移入超過の重なる品は、石炭の二十二萬七千四百九十一噸を首とし、麥類の七萬六千七百七十四噸、大豆粕四萬二千六百十八噸、米三萬八千四百七十四噸、人造肥料二萬九百十五噸、鹽一萬五千二百四十噸、鐵及銅製品一萬三千五百六十三噸、雜穀一萬六百二噸等にして、移出超過の重なるものは、小麥粉の三萬九千百四十噸、砂利三萬一千四百七十三噸、石材一萬五千三百四十一噸、木材類一萬二百七十四噸等なり。移出入品の重なるものは左の三表を參照せよ。

主要貨物移入表

其一

| （年　次） | （粳　米） | （糯　米） | （陸　米） | （外國米） | （大　麥） | （小　麥） | （大　豆） | （小　豆） |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 大正三年 | 四、〇二四、三三九 | 四五五、七五六 | 八二、五三六 | 二三七、一七〇 | 一二八、六三二 | 一、七八三、五三〇 | 三五三、五八三 | 八三、〇四六 |
| 同　四年 | 三、一一六、〇九〇 | 二六五、九二〇 | 三三、八五四 | 六八、一九八 | 九九、八六八 | 一、一三三、九八六 | 三七一、六六三 | 六七、〇三七 |

移）

| 區分 | 年次 | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| （移入） | 同　五年 | 四、七二二、二二一 | 八六〇、八九一 | 六五、〇七五 | 四一、三六〇 | 一、一〇六、一九八 | 一、一二二、二一〇 | 四五七、八五六 | 四五七、八五六 |
| | 同　六年 | 五、三八〇、五三一 | 七八四、五五七 | 八四、八一三 | 一三九、二七六 | 一五〇、三三九 | 二、〇三四、一四六 | 六八〇、四九八 | 一四三、九八七 |
| | 同　七年 | 九、七七九、七二三 | 九五六、五九九 | 一三六、五三〇 | 一、五三三、四八六 | 一、一一二、八〇八 | 五、一四六、八三五 | 八七三、九六四 | 一六〇、二〇一 |
| | 同　八年 | 一一、六九二、四六五 | 一、三〇七、八二七 | 二一〇、二六五 | 一、八七六、七〇三 | 五九〇、八四七 | 六、四二七、七八〇 | 八三〇、六九六 | 三三五、五七九 |
| （移出）（再移出） | 大正三年 | 九、九〇〇 | 二、五二〇 | — | — | 三、九一五 | — | — | — |
| | 同　四年 | 六二、七七二 | 四、三三三 | — | — | 三八、四二五 | 七九、五二〇 | — | — |
| | 同　五年 | 二一五、二四三 | 四、一〇五 | — | — | 七三四、二二〇 | 八四、六七〇 | — | — |
| | 同　六年 | 一八三、八三〇 | 九、〇三三 | — | — | 三一、三三三 | 二四三、九五二 | 一、三六〇 | — |
| | 同　七年 | 二九〇、五五〇 | 六、七三五 | — | 七、五〇〇 | 一五、四〇〇 | 一七六、四〇〇 | — | — |
| | 同　八年 | 二五三、八九三 | 八、七三八 | — | — | 一九、三六〇 | 二一四、〇〇〇 | — | — |
| （移出）（生産） | 大正三年 | 二一三、〇八七 | 三三、五八四 | 二〇、八四一 | — | 一六一、三三一 | 一〇八、九一六 | 三一、四五九 | 四、五八九 |
| | 同　四年 | 二五五、七三九 | 三四、七〇三 | 一八、一七六 | — | 二〇二、七八九 | 八九、一〇四 | 六八、七四八 | 一六、九二七 |
| | 同　五年 | 一五八、八四九 | 六、四八二 | 一七、一四二 | — | 一、二五四、七三一 | 一、四六〇、九九一 | 六〇、七九〇 | 六〇、七九〇 |
| | 同　六年 | 四八三、九四八 | 五九、七三六 | 四七、五三九 | — | 一、六四四、二八三 | 一、九五三、二一一 | 三二、〇五〇 | 六、〇六五 |
| | 同　七年 | 六八四、七一三 | 四九、三三一 | 三一、三三〇 | — | 三八七、〇一一 | 五三五、四七七 | 四五、五一三 | 一〇、五九三 |
| | 同　八年 | 七七七、九一一 | 七二、四九一 | 三七、三一四 | — | 三六二、九四六 | 九八、三七〇 | 七四、四三七 | 一四、八二〇 |

其一

| （年次） | （上繭） | （玉繭） | （屑繭） | （生絲） | （玉絲） | （熨斗絲） | （撚絲） | （蠶種） | （綿） |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| （移入） | | | | | | | | | |
| 大正三年 | 二、二一九、三二六 | 七五三、五九九 | 二九、四六九 | 四、一〇〇、〇〇三 | — | 一五、四三三 | — | 二四三、三〇九 | 一七一、四三一 |
| 同　四年 | 二、六二四、四〇〇 | 一、三三三、六三九 | 三七、七五六 | 六、三九八、八三七 | 八九九、八五六 | 一三、五五八 | 三三、一〇五 | 二三五、四九九 | 一八九、〇七四 |
| 同　五年 | 二、四八三、〇三〇 | 二、四九三、〇四五 | 四六、二五三 | 九、〇七四、六五〇 | 一、二五五、四八五 | 三、八〇四 | — | 二六三、三九七 | 二八八、一〇六 |
| 同　六年 | 三、五七八、三五三 | 三、八七〇、〇五四 | 一二四、五四六 | 一三、五三七、二一〇 | 一、五八八、五〇四 | 七一、九一五 | 二、〇九〇 | 三一四、六四四 | 二四五、八三七 |
| 同　七年 | 四、三三二、六〇七 | 九一三、七五四 | 四二、三六〇 | 一九、五三五、五二四 | 一、四七八、三六五 | 一三、八八〇 | — | 四九四、九九六 | 三九二、三七九 |
| 同　八年 | 一一、三六九、二一〇 | 三、三六四、九六七 | 一九六、六六〇 | 二九、三二六、三八九 | 二、三六三、九九八 | 三六一、六〇〇 | — | 五八〇、四〇四 | 八二三、八八八 |
| （移出）（再移出） | | | | | | | | | |
| 大正三年 | — | — | — | 九八三、〇三九 | — | — | — | — | — |
| 同　四年 | 三三、四〇〇 | — | — | 一、三二四、三〇五 | — | — | — | 一四、三〇〇 | — |
| 同　五年 | 一〇三、九四〇 | 一五、八一五 | 五、二八五 | 一、四一〇、三五〇 | — | 九、三〇六 | — | 一、三五〇 | — |
| 同　六年 | 二七一、五八〇 | 一〇〇、九三〇 | 一、三三五 | — | — | — | — | — | 一、三一五 |
| 同　七年 | 三三一、九一〇 | 六、四五〇 | 三、三三〇 | 四九四、〇〇〇 | — | 一、八〇〇 | 二一九、五〇〇 | 一〇、四八〇 | — |
| 同　八年 | 六三四、五〇〇 | 二五、〇〇〇 | 二一、〇〇〇 | 六七五、〇〇〇 | — | — | 一、五〇〇、三三〇 | — | — |
| （生） | | | | | | | | | |
| 大正三年 | 二、八六五、一八五 | 六六五、六九一 | 五三、四九一 | 八、七三三、五七五 | 八五一、四一七 | 三三三、二七二 | 一、三九九、三三三 | 三三一、九八八 | — |
| 同　四年 | 二、五二三、五七七 | 四九、八八三 | 二一、一七〇 | 一〇、四二三、九九八 | 一、一九七、四七〇 | 二〇三、五九六 | 一、四二三、六〇〇 | 二〇九、〇一三 | — |
| 同　五年 | 四、五九一、二四六 | 一三八、一〇〇 | 九三、四三九 | 一六、七一五、七九八 | 二、七三三、三三三 | 五三、九三三 | 三、〇一〇、六二六 | 二三五、二八四 | — |

| （産 | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 同 六年 | 六、三〇五、〇六三 | 一〇一、一一八 | 一四三、〇五三 | 二四、二五六、四二七 | 二、三一六、五八〇 | 一、〇五八、六七三 | 五、八八〇、七六〇 | 二〇四、六〇六 | — |
| 同 七年 | 九、二七八、二五七 | 一五七、四〇四 | 一五四、七七〇 | 二八、七二〇、四四七 | 一三、四八四、三〇〇 | 六二五、七一七 | 一、三三三、〇〇〇 | 三二一、六九六 | — |
| 同 八年 | 一三、八八三、六一八 | 二二五、〇六七 | 二七五、九九一 | 四七、七一九、八七四 | 五、四九七、一九〇 | 一、二三八、四四八 | 四、四〇三、二二三 | 二六五、〇八九 | — |

其三

| | （年次） | （綿絲類） | （絹織物） | （綿織物） | （絹綿交織物） | （綿毛交織物） | （毛織物） |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| （移入） | 大正三年 | 一、三二二、八五六 | 七五三、三八一 | 一、七三三、三〇六 | 二七〇、九〇一 | — | 二七三、二一八 |
| | 同 四年 | 一、三三六、〇四三 | 一、二八八、六八三 | 一、一二七、六九一 | 四四五、四七一 | — | 五三九、一三八 |
| | 同 五年 | 二、五七八、八四七 | 一、八八八、六七八 | 一、六八四、七八三 | 五六一、八五〇 | — | 三八一、一九七 |
| | 同 六年 | 三、九一四、七五八 | 八二二、八八六 | 二、四五二、八六二 | 八八九、一〇一 | — | 四二〇、四三九 |
| | 同 七年 | 六、七五六、〇四九 | 三、八九六、一一一 | 三、三六一、七八四 | 一、一二三、七三〇 | — | 六六六、三三七 |
| | 同 八年 | 一、一五一、九〇九 | 七、四七三、七六五 | 六、八七五、二〇三 | 一、七九五、九五三 | — | 一、二二三、六四五 |
| （再移出） | 大正三年 | — | — | — | — | — | — |
| | 同 四年 | 三、〇〇〇 | 五、〇〇〇 | 三、七〇〇 | 二、〇〇〇 | — | 二、〇〇〇 |
| | 同 五年 | 一、三三三、六〇〇 | 五、〇〇〇 | 三、〇〇〇 | 二、〇〇〇 | — | — |
| | 同 六年 | 五、四七四 | 五、六三〇 | 八、九六〇 | 三、五〇〇 | — | — |
| | 同 七年 | 一五、二〇〇 | 六、五〇〇 | 一〇、五〇〇 | 五、四〇〇 | — | — |

（移

| 年次 | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 同　八年 | 一一、三〇〇 | 五三、三〇〇 | 九三、六〇〇 | 三六、七〇〇 | — | — |
| （出）（產生）大正三年 | — | 九、六三〇、七〇三 | 三、六八一、〇〇四 | 四、一五七、五一八 | 二〇、六〇〇 | 二、〇〇五、四四二 |
| 同　四年 | — | 一〇、九三九、六六八 | 一、四五三、九九九 | 三、八六六、一五五 | — | 一、八七六、〇〇九 |
| 同　五年 | — | 一四、八七七、六三五 | 一、九一八、九三七 | 六、一六六、六三五 | — | 一、三八三、一三四 |
| 同　六年 | 一、二五四、〇〇〇 | 一八、〇〇五、八九三 | 二、七六八、九三五 | 六、四七一、四四七 | — | 二、六九一、三六六 |
| 同　七年 | — | 一一、五六三、八〇〇 | 一七、八三一、三五七 | 九、八〇九、二五〇 | — | 二、六五四、四一三 |
| 同　八年 | — | 五六、七九九、四一四 | 一〇、五五九、八六六 | 二六、二三二、七〇九 | — | 四、三一八、三〇六 |

## 其四

| 年次 | 日本酒 | 西洋酒 | 醤油 | 味噌 | 塩 | 砂糖 | 乾物類 | 魚類 | 鶏卵 | 小麦粉 | 蒟蒻粉 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| （移入）大正三年 | 六三九、六三三 | 一七六、三五五 | 一、三四五、六一六 | 五三、九七一 | 六、六〇六 | 一、四三三、三五九 | 二六五、七三 | 七〇八、五六一 | 一〇三、一九四 | 三九、八七一 | 四、一八六 |
| 同　四年 | 五三九、一三八 | 一六九、三六九 | 六八一、五七七 | 四六、五三一 | 三四五、七四 | 一、三四五、四一八 | 二九九、七七八 | 六五〇、八六八 | 四六、九四一 | 二五六、九九六 | 三、七七〇 |
| 同　五年 | 五九八、四三五 | 一六七、一六五 | 五〇三、〇四六 | 五七、八一四 | 二八九、四七九 | 一、三三五、三七七 | 四〇七、八九八 | 七三五、八八六 | 七九、一九一 | 二一九、五三七 | 三、八四三 |
| 同　六年 | 一、〇一五、九九八 | 二六六、八三三 | 七五三、六〇七 | 一〇〇、九六七 | 四五九、一四四 | 三、四八七、三三七 | 五六九、五七五 | 一、〇六七、六二一 | 九九、七一八 | 四八三、五九三 | 五、四一〇 |
| 同　七年 | 一、四三四、一六五 | 三〇三、六〇〇 | 七八〇、八六七 | 二一六、五六四 | 七四七、四六八 | 一、九七〇、三〇一 | 六五四、〇三七 | 一、五七三、九一一 | 二四、六三五 | 一、四八三、八七三 | 一、四六〇 |
| 同　八年 | 一、九九四、九七五 | 四九一、九一四 | 一、三六八、一三一 | 三六八、三〇八 | 九六一、七五 | 四、四四九、七三一 | 九三六、〇四 | 三、一四六、九五一 | 三四五、九四三 | 一、七八六、〇三五 | 一三、一三〇 |
| （再）大正三年 | — | — | 一、四七〇 | — | — | 九六三、一三 | — | — | — | 一〇五、四一一 | — |
| 同　四年 | — | — | | — | 一、四三五 | 一六、五〇〇 | 二、〇〇〇 | — | — | 七、五〇〇 | — |

| （年次） | | | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| （出移）同　五年 | 三、〇〇〇 | — | 四二、八二〇 | — | — | 四、九一二 | 一、六九〇 | 三、七八〇 | — | — | — |
| 同　六年 | — | 一、二九一 | 八一、八五〇 | — | — | 四、九三七 | 二、六五〇 | 三、三〇〇 | — | — | — |
| 同　七年 | — | 一、三五〇 | — | — | 一、〇三八 | 二五五、九三三 | 一九、九一三 | 四、六二五 | — | — | — |
| 同　八年 | — | 二、〇二五 | — | — | 一、四四〇 | 三四、二〇七 | 一三二、九二八 | — | — | — | — |
| （産生）大正三年 | 一三一、五〇九 | — | 三〇六、九四五 | 一六、二四四 | — | — | — | 二三、〇一七 | 一、四八八 | 一、七三五、六三六 | 一八一、〇六三 |
| 同　四年 | 二七〇、七九〇 | — | 三四六、四一一 | 三〇、九〇一 | — | — | 三、八四一 | 二四、七二〇 | 一、五六七 | 一、二七六、八九〇 | 六五、二二〇 |
| 同　五年 | 二九八、九一九 | — | 三七六、六六七 | 四一、一六八 | — | — | — | 二七、一一三 | 二、五七二 | 一、六七四、六一七 | 六九、六五五 |
| 同　六年 | 四四九、五六六 | — | 三〇三、〇六〇 | 六三、五二六 | — | — | — | 二六、九六九 | 二、二八〇 | 二、五三五、二三〇 | 一〇九、八三〇 |
| 同　七年 | 四二七、七九九 | — | 五三九、一七五 | 六九、四六六 | — | — | — | 五四、三八三 | 四、二六五 | 四、八三四、三一九 | 六〇五、二二一 |
| 同　八年 | 六七四、八五〇 | — | 二、〇二六、九五八 | 一一三、四五九 | — | — | — | 七〇、一七六 | 四、三九五 | 五、二五五、三〇〇 | 九一三、四〇四 |

### 其五

| （年次） | （甘藷） | （魚肥料） | （植物肥料） | （人造肥料） | （和紙） | （西洋紙） | （大麻） | （蠟及蠟燭） | （水油） |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| （入移）大正三年 | 二三〇、一七六 | 二九三、六三七 | 八九四、二七八 | 七〇七、八六三 | 二三〇、四二三 | 八一、〇二四 | — | 三五、八二七 | 一一四、九八三 |
| 同　四年 | 一四〇、五五四 | 二〇二、四八八 | 一、三六七、八八六 | 六五三、七二八 | 二二六、〇九九 | 九〇、五九八 | — | 六七、九四三 | 二四〇、四六九 |
| 同　五年 | 一二〇、九五五 | 三一五、八九九 | 一、五四九、九三八 | 七七八、一一九 | 三五一、一八〇 | 一三三、八二七 | — | 六八、一六七 | 一三〇、二七八 |
| 同　六年 | 一七三、四七六 | 四〇八、九三六 | 二、三八二、六三六 | 九一一、二四四 | 四九三、七二六 | 一七九、五五三 | — | 五二、二六六 | 一六六、八八〇 |
| 同　七年 | 二五五、〇九四 | 三九三、八一八 | 三、八五六、七六四 | 一、一九八、四四一 | 六八五、四四五 | 三二三、四七三 | — | 六五、〇五九 | 一八四、六八〇 |
| 同　八年 | 四一二、〇二七 | 七一九、三一八 | 六、〇八六、三七一 | 二、八四〇、五〇八 | 一、〇四七、〇二五 | 四六〇、一五三 | — | 七六、〇七七 | 二五三、九九〇 |

| （年次） | | （石油） | （金属） | （薬品） | （材木） | （茶） | （陶磁器） | （漆器） | （石灰） |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| （移出）（再移出） | 大正三年 | — | 八一,一三〇 | 七〇,九八〇 | 三,三一五 | — | — | — | — |
| | 同　四年 | — | — | — | 六,〇〇〇 | — | — | — | 二,九〇〇 |
| | 同　五年 | — | 四,六五〇 | 六,七〇〇 | 二,八〇〇 | — | — | — | — |
| | 同　六年 | — | 一八,五五三 | 一二三,五五九 | 八,六七二 | — | — | — | 一,三〇〇 |
| | 同　七年 | — | 八,〇三五 | 一七,六〇〇 | 三,二五〇 | — | — | — | 三,七七五 |
| | 同　八年 | — | 二四,二九五 | 四四,五八七 | 七,六一四 | — | — | — | 六,四九〇 |
| （移出）（生産） | 大正三年 | 一,五一八 | — | 三,五三三 | — | — | 二三,五〇〇 | 三三,六〇〇 | — |
| | 同　四年 | 一,一一八 | — | 三〇,〇〇〇 | — | — | — | — | — |
| | 同　五年 | 一,八八三 | — | 二,五〇〇 | — | 一,〇八〇 | 一五四,八三一 | — | — |
| | 同　六年 | 一,三四六 | — | — | — | 一,一一〇 | 一六六,一〇〇 | — | — |
| | 同　七年 | 三,〇九八 | 一,四七四 | 四七,四九一 | 二〇,〇九四 | 一,一一〇 | — | — | — |
| | 同　八年 | 一,二三六 | — | 五三,四一九 | 二七,五〇六 | 一,一三〇 | — | — | — |

## 其六

| | （年次） | （石油） | （金属） | （薬品） | （材木） | （茶） | （陶磁器） | （漆器） | （石灰） |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| （移） | 大正三年 | 八〇二,七四〇 | 七五三,四三一 | 二七二,九二四 | 二四二,八六〇 | 六三三,七一九 | 一六七,七九七 | 八四,六八九 | 八四,八八一 |
| | 同　四年 | 八九〇,四四四 | 四九五,六五八 | 一三六,三一三 | 一五六,二七〇 | 五五四,五五六 | 一三〇,四六五 | 九三,一八〇 | — |
| | 同　五年 | 一,〇五八,六一八 | 五九二,三〇〇 | 四〇三,〇六三 | 三〇九,五五六 | 五三四,一〇七 | 一四〇,〇一五 | 一〇一,七〇五 | — |
| | 同　六年 | 一,一八九,三四八 | 七六七,一三六 | 四三八,一七九 | 五四四,四五五 | 六四七,二三〇 | 一六四,八七八 | 一三〇,三四〇 | — |

| （年次） | （砥石） | （席及疊表） | （石炭） | （木炭） | （薪） | （牛） | （馬） | （豚） |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| （入） | | | | | | | | |
| 同七年 | 一、一五三、四一八 | 一、三〇二、六三三 | 五三〇、六九五 | 二、三六九、三四四 | 八九二、二六四 | 一六九、三九八 | 一一七、一六三 | 三四、八四一 |
| 同八年 | 一、六六八、六三三 | 二、一九九、四七一 | 七六四、五九三 | 四、三九四、八〇九 | 一、二三〇、四〇八 | 二一八、七三三 | 一七四、八六一 | — |
| （出移）（再移出） | | | | | | | | |
| 大正三年 | 七四、四〇〇 | — | — | — | 三三、五五〇 | — | — | — |
| 同四年 | 四三、五九四 | 一〇三、三〇〇 | — | — | — | — | — | — |
| 同五年 | 四、五〇〇 | — | 一、五〇〇 | 二六、五〇〇 | — | — | — | — |
| 同六年 | 三、五〇〇 | — | — | — | 三〇、〇〇〇 | — | — | — |
| 同七年 | 八四、六四〇 | 三三、八五〇 | — | 一、五六〇、〇〇〇 | — | 三、三〇〇 | 一〇、一〇〇 | — |
| 同八年 | 一一〇、四〇〇 | 三三、三七〇 | — | 二、四〇〇、〇〇〇 | — | — | 一三、六三〇 | — |
| （産生） | | | | | | | | |
| 大正三年 | 三六、三三四 | 四四、四〇〇 | — | 三〇五、七一六 | — | — | 四八、〇〇〇 | 一、四七一 |
| 同四年 | — | 一九三、〇〇〇 | — | 二八七、三六五 | — | — | 三五、〇〇〇 | — |
| 同五年 | — | 一六一、八〇〇 | 三八、〇〇〇 | 二九六、五一〇 | — | — | 一八、〇〇〇 | — |
| 同六年 | — | 一六三、四〇〇 | 七四、一七三 | 六〇九、九八〇 | — | — | 三〇、〇〇〇 | — |
| 同七年 | — | 一三四、〇〇〇 | 一三三、一一五 | 一一四、三〇〇 | — | 一、五〇〇 | 一五、〇〇〇 | — |
| 同八年 | — | 二六三、六〇〇 | 一七〇、二八〇 | 四八八、九三五 | — | — | 二〇三、五〇〇 | — |

## 其七

| （年次） | （砥石） | （席及疊表） | （石炭） | （木炭） | （薪） | （牛） | （馬） | （豚） |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| （移） | | | | | | | | |
| 大正三年 | 二、六八九 | 四三四、〇〇〇 | 一、三四六、五九九 | 三五〇、七一七 | 二七、四五八 | 一〇五、九〇〇 | 七〇、一八六 | 一三、三四〇 |
| 同四年 | 七、七九八 | 一六三、五三四 | 六九四、三一一 | 七二、七八一 | 六、〇三〇 | 八八、一三五 | 九四、五三一 | 三、九三五 |

| 區分 | 年次 | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| （入） | 同五年 | 八,〇四〇 | 一八六,〇三三 | 一,〇四七,九〇五 | 六六,五五八 | 八四,一一 | 三二,五四七 | 二二,四〇九 | 七,三五一 |
| | 同六年 | 六,三七五 | 一八八,四一六 | 一,四四六,三三三 | 一〇四,一四七 | 一六,九四〇 | 一二五,七一八 | 一三三,八一五 | 六,七一九 |
| | 同七年 | 一五,六一五 | 二七三,九七六 | 一,九六三,八五五 | 一六八,六七三 | 一九,九四〇 | 三三八,六六五 | 二五七,六六五 | 一四,八五九 |
| | 同八年 | 三〇,七六三 | 五三三,三三七 | 三,七一二,六九四 | 三五六,〇六九 | 二七,四三〇 | 一七四,七一〇 | 三五四,八六三 | 二六,六六四 |
| （出移）（再移出） | 大正三年 | — | — | — | — | — | — | — | — |
| | 同四年 | 五,〇〇〇 | — | — | — | — | 一,七五〇 | 三,九九〇 | — |
| | 同五年 | — | — | — | — | — | 一,六〇〇 | 七,四六〇 | — |
| | 同六年 | — | — | — | — | — | 一,二〇〇 | — | — |
| | 同七年 | — | — | — | — | — | 一,〇五〇 | 一六,九八〇 | — |
| | 同八年 | — | 四七,九二五 | — | — | — | 一,五〇〇 | 三一,四一〇 | — |
| （出移）（産生） | 大正三年 | 三三,五三五 | — | — | 一七九,六〇三 | 四三,六五三 | 一三,八〇五 | 四四,六五五 | — |
| | 同四年 | 一五,二四三 | — | — | 一五〇,九七三 | 四一,六九〇 | 一五,五三五 | 七,二一四 | 七,〇八六 |
| | 同五年 | 二五,二九三 | — | — | 二〇三,〇一四 | 五三,一〇四 | 九,九六〇 | 四,七九六 | 四,〇三三 |
| | 同六年 | 二五,五〇〇 | — | — | 二八三,七八五 | 二,九三五 | 五,六五〇 | 五,三五〇 | 三,三一〇 |
| | 同七年 | 三三,六五〇 | — | — | 五九九,三三七 | 一,五六〇 | 三三,一七五 | 一九,六四〇 | 一,五〇三 |
| | 同八年 | 三一,九〇〇 | — | — | 九九八,四六四 | 三,五〇〇 | 六,三三〇 | 一一,〇六〇 | 五,八〇〇 |

## 鐵道主要貨物移出入表　大正十一年　（單位噸）

| （品名） | （移出） | （移入） | （出超） | （入超） |
|---|---|---|---|---|
| 米 | 七、五四七 | 四六、〇二一 | — | 三八、四七四 |
| 麥類 | 一六、八二一 | 九三、五八五 | — | 七六、七六四 |
| 大豆 | 一、六四三 | 一二、二四四 | — | 一〇、六〇三 |
| 雜穀 | 六三三 | 五、三三五 | — | 四、七〇二 |
| 生甘藷 | 七六 | 四、一九四 | — | 四、一一八 |
| 生馬鈴薯 | 一六六 | 四九七 | — | 三三一 |
| 生野菜 | 五、〇四九 | 三、〇一六 | 二、〇三三 | — |
| 柑橘 | 三〇九 | 四、八七三 | — | 四、五六四 |
| 其ノ他ノ果物類 | 八八七 | 一、八二三 | — | 九三六 |
| 藥工品 | 二、九五五 | 八、四四七 | — | 五、四九二 |
| 木材類 | 五〇、八三三 | 四〇、五五九 | 一〇、二七四 | — |
| 木炭 | 二一、四五七 | 一二、七〇八 | 八、七四九 | — |
| 薪 | 九、六一四 | 一、五七三 | 八、〇四一 | — |
| 石材 | 三四、七四七 | 一九、四〇六 | 一五、三四一 | — |
| 砂利 | 四四、六二一 | 一三、一四八 | 三一、四七三 | — |
| 石炭 | 四、七六〇 | 二三二、二五一 | — | 二二七、四九一 |
| 骸炭 | 一一一 | 二、〇七九 | — | 一、九六八 |
| 鑛 | 一一 | 二 | 九 | — |
| 鑛物 | 五、四九六 | 一、〇六〇 | 四、四三六 | — |
| 石油類 | 五一〇 | 三、八二六 | — | 三、三一六 |
| 鐵及鋼 | 一、〇六四 | 一〇、二〇二 | — | 九、一三八 |
| 銅 | — | 九四 | — | 九四 |
| 海藻類 | 三 | 二五七 | — | 二五四 |
| 鹽 | 一三、七二三 | 二八、九六三 | — | 一五、二四〇 |
| 鹽乾魚 | 一、二三八 | 七、五五一 | — | 六、三一三 |
| 活鮮魚 | 一九六 | 二、三九二 | — | 二、一九六 |
| 小麥粉 | 五〇、九一八 | 一一、七七八 | 三九、一四〇 | — |
| 澱粉類 | 一八 | 八三六 | — | 八一八 |
| 砂糖類 | 一、六五五 | 一一、八四一 | — | 一〇、一八六 |
| 味噌醬油 | 八、四四五 | 七、七〇九 | 七六三 | — |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 漬物類及乾野菜 | 三五〇 | 一、〇四〇 | — | 六九〇 |
| 茶 | 三 | 七六 | — | 七一四 |
| 煙草 | 三、六〇三 | 七、九九五 | — | 四、三九三 |
| 清酒 | 一、六四三 | 五、八五五 | — | 四、三二三 |
| 麥酒 | 一八三 | 三、九九七 | — | 三、八一五 |
| 清涼飲料水 | 三八九 | 一、四〇八 | — | 一、〇一九 |
| 人造肥料 | 三、二三七 | 三三、一五三 | — | 二〇、九一五 |
| 大豆粕 | 九七三 | 四三、五九一 | — | 四三、六一八 |
| 魚肥 | 九一 | 五四七 | — | 四五六 |
| 其ノ他肥料 | 三、七二七 | 七、三五六 | — | 四、六二九 |
| 飼料 | 一八、五三一 | 八、六八〇 | 九、八五二 | — |
| 綿 | 四四八 | 二、一二二 | — | 一、六七三 |
| 綿絲 | 四三 | 八九一 | — | 八四九 |
| 綿織物類 | 三、〇二〇 | 三、三九七 | — | 三七 |
| 繭 | 一〇、一三六 | 一五、九二五 | — | 五、七八九 |
| 生糸 | 三、三〇九 | 一、七二〇 | 一、五九九 | — |
| 絹織物類 | 五三四 | 二七九 | 二五五 | — |
| 毛織物 | 四五六 | 一四五 | 三二 | — |
| 麻苧類 | 七六 | 五五 | 二 | — |
| 石灰 | 五五六 | 五、九〇九 | — | 五、三五三 |
| セメント類 | 一、四二三 | 二〇、三〇四 | — | 八、八八一 |
| 煉瓦 | 二〇四 | 五、〇八三 | — | 四、八七八 |
| 陶磁器及土器 | 八六八 | 四、〇二四 | — | 三、一五六 |
| 硝子及其製品 | 一、七八八 | 一、三二〇 | 四七八 | — |
| パルプ及襤褸類 | 一、七八二 | 五、九七八 | — | 四、一九七 |
| 和紙 | 一七一 | 一、〇七五 | — | 九〇四 |
| 洋紙 | 六、六七四 | 三、一八七 | 四、四八七 | — |
| 皮革類 | 七九 | 八二 | — | 二 |
| 獸毛 | 五七 | 七五九 | — | 七〇三 |
| 疊表類 | 五四 | 一、三六四 | — | 一、三二〇 |
| 鐵及銅製品 | 一、五六三 | 一五、一二六 | — | 一三、五八三 |
| 漆器 | — | 一九五 | — | 一九五 |
| 機械類 | 二、八〇五 | 三、七七五 | — | 九七〇 |
| 油脂蠟類 | 一〇三 | 一、五三一 | — | 一、四二九 |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 染料顔料及塗料 | 四九 | 一六三 | ― | 一一四 |
| 藥品類 | 一、四八七 | 五、八六八 | ― | 四、三八一 |
| 燐寸類 | 三 | 四五三 | ― | 四二一 |
| （合計） | 三五五、三三六 | 七八四、九七二 | ― | 四二九、六三五 |
| 鮮肉 | 七 | 二五 | ― | 一八 |
| 牛 | 四二四 | 一、〇四四 | ― | 六二〇 |
| 馬 | 九五〇 | 一、五六八 | ― | 六一八 |

# 六　物價及賃金調査表

## （イ）前橋市物價

| 品名 | | （立物名稱） | （大正十三年） | （大正十二年） | （大正十一年） | （大正十年） | （大正九年） | （大正八年） |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 米 上 | 一石 | 地廻 | 圓 四一、六〇 | 圓 三四、八三 | 圓 三七、四〇 | 圓 三三、七〇 | 圓 四五、〇三 | 圓 四七、四〇 |
| 米 中 | 同 | 同 | 四〇、五〇 | 三三、九三 | 三六、六一 | 三一、七三 | 四四、四〇 | 四六、三四 |
| 米 下 | 同 | 同 | 三九、八〇 | 三三、一七 | 三五、七五 | 三〇、五六 | 四三、五四 | 四五、三三 |
| 大麥 | 一石 | 同 | 一一、〇五 | 八、八〇 | 八、五一 | 九、八九 | 一五、一四 | 二〇、〇〇 |
| 小麥 | 同 | 同 | 一五、七〇 | 一五、七五 | 一六、五三 | 一八、〇八 | 二〇、八七 | 二八、二〇 |
| 大豆 | 同 | 同 | 三一、二五 | 二四、七五 | 一九、〇二 | 一七、五四 | 二六、一八 | 三五、〇〇 |

| | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 小豆 | 一石 | 地廻 | 三八、〇〇 | 二七、七三 | 二一、六九 | 二〇、八八 | 三三、七〇 | 四〇、〇〇 |
| 食塩（五等） | 百斤 | 内地 | 四、八〇 | 四、八五 | 四、三五 | 四、五八 | 四、五七 | 三、七八 |
| 醤油 | 一石 | 地廻 | 六〇、〇〇 | 六四、四五 | 六六、九五 | 七五、八〇 | 七九、七五 | 六一、三六 |
| 味噌 | 一貫目 | 同 | 〇、七〇 | 〇、七一 | 〇、七一 | 〇、八〇 | 〇、八五 | 〇、七九 |
| 白砂糖 | 百斤 | 東京 | 二三、七五 | 三〇、四五 | 二八、一五 | 三一、四四 | 四八、五七 | 五三、〇〇 |
| 赤砂糖 | 同 | 同 | 二一、〇〇 | 二六、〇〇 | 二三、五五 | 二六、一四 | 四一、八三 | 四八、〇〇 |
| 清酒 | 一石 | 地廻 | 一一七、五〇 | 一三七、一五 | 一二九、五〇 | 一三三、九〇 | 一〇五、八三 | 九八、五九 |
| 煎茶（番茶粉茶ヲ除） | 百斤 | 武州 | 一四〇、〇〇 | 一四一、〇〇 | 一四〇、八〇 | 一四〇、〇〇 | 一四〇、三六 | 八九、三八 |
| 鰹節 | 一貫目 | 約島 | 一九、〇〇 | 二一、五〇 | 二〇、一〇 | 一九、〇六 | 一五、七〇 | 一〇、八一 |
| 牛肉（骨付） | 百斤 | 地廻 | 八一、〇〇 | 八四、九〇 | 八一、六〇 | 六四、四〇 | 六三、五八 | 八五、〇九 |
| 鶏卵 | 一貫目 | 同 | 四、四〇 | 四、三三 | 四、〇一 | 五、七一 | 五、三七 | 四、三三 |
| 牛乳 | 一升 | 同 | 〇、九〇 | 〇、九〇 | 〇、八五 | 〇、八〇 | 〇、八〇 | 〇、五八 |
| 梅干（四斗入十六貫） | 一樽 | 同 | 二六、三五 | 二七、五〇 | 二七、三〇 | 二七、八五 | 二四、五七 | 一七、一三 |
| 澤庵（四斗入十八貫） | 一樽 | 同 | 七、五〇 | 九、一三 | 八、七〇 | 六、八三 | 七、〇〇 | 五、七五 |
| 洋産繰綿 | 百斤 | 支那 | 七四、〇〇 | 六一、一〇 | 五三、〇三 | 四五、九五 | 七〇、三〇 | 七三、九〇 |
| 紡績綿絲（二十手） | 同 | 関西 | 二二五、〇〇 | 八六、〇五 | 八六、五七 | 八六、二五 | 一三八、七五 | 一八三、一八 |
| （上 | 同 | 地（機械） | 一、七三五、〇〇 | 二、二一四、〇〇 | 一、九六八、五〇 | 一、七四〇、〇〇 | 一、八六六、〇〇 | 二、五九〇、〇〇 |

| 品目 | 單位 | 産地 | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 生絲（中） | 同 | 地（機械） | 一、七〇六、〇〇 | 二、〇三五、〇〇 | 一、九一六、五〇 | 一、六二〇、〇〇 | 一、七五〇、〇〇 | 二、四五〇、〇〇 |
| 生絲（下） | 同 | 同 | 一、六〇〇、〇〇 | 一、九二五、〇〇 | 一、八五八、〇〇 | 一、四二五、六〇 | 一、六〇〇、〇〇 | 二、三二〇、〇〇 |
| 花色絹 | 一反 | 地廻 | 七、五〇 | 七、七三 | 八、二七 | 七、四六 | 七、七七 | 五、三五 |
| 晒木綿 | 同 | 伊勢 | 〇、八三 | 〇、八三 | 〇、九一 | 〇、九九 | 一、三五 | 一、三五 |
| 洋産金巾（四十五ヤール〇〇） | 一釜 | 支那 | 一二、五〇 | 一二、五〇 | 一二、七〇 | 一二、七〇 | 一八、五四 | 一八、八六 |
| 麻 | 百斤 | 野州 | 一六〇、〇〇 | 一三五、〇〇 | 一三三、五〇 | 一六〇、〇〇 | 一五五、八四 | 一七六、〇〇 |
| 洋鐵 | 一貫目 | 米國 | 〇、九五 | 〇、六一 | 〇、六三 | 〇、七〇 | 〇、九七 | 一、〇二 |
| 洋釘 | 同 | 同 | 〇、七〇 | 〇、九六 | 一、〇七 | 一、一五 | 一、四五 | 一、四四 |
| 松角材（尺角長二間物） | 一本 | 地廻 | 一〇、〇〇 | 一八、九五 | 一八、〇五 | 一八、六二 | 一四、〇〇 | 一一、〇〇 |
| 杉（同） | 同 | 同 | 一三、〇〇 | 一三、〇〇 | 二〇、九〇 | 一九、八〇 | 一六、〇〇 | 一三、〇〇 |
| 松六分板 | 一坪 | 同 | 三、〇〇 | 三、〇五 | 二、七六 | 三、二五 | 三、二一 | 二、八〇 |
| 杉四分板 | 同 | 同 | 三、〇〇 | 二、九〇 | 二、六二 | 三、一八 | 二、九一 | 二、八六 |
| 家根板 | 同 | 同 | 二、九〇 | 二、九七 | 二、八二 | 三、〇二 | 二、九六 | 四、七四 |
| 石油（二鑵入） | 一箱 | 米國 | 六、九〇 | 五、八〇 | 七、〇九 | 八、五八 | 八、八五 | 五、六五 |
| 石炭 | 一噸 | 茨城 | 一二、〇〇 | 二二、二〇 | 二二、七五 | 二四、五〇 | 二七、五四 | 二一、三八 |
| 薪 | 十貫目 | 地廻 | 〇、二〇 | 〇、八五 | 〇、八一 | 〇、八〇 | 〇、九五 | 〇、九〇 |
| 炭（堅炭） | 同 | 同 | 五、〇〇 | 五、〇三 | 四、六一 | 四、九四 | 四、四五 | 三、〇六 |

| （品目） | （單位） | （産地） | （大正十三年） | （大正十二年） | （大正十一年） | （大正十年） | （大正九年） | （大正八年） |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 菜種油 | 一石 | 伊勢 | 九五、〇〇 | 八一、二五 | 七一、六〇 | 七三、三三 | 九七、〇〇 | 一〇九、〇〇 |
| 美濃紙 | 千枚 | 靜岡 | 九、二五 | 五、五九 | 七、六〇 | 八、八五 | 九、六九 | 七、五〇 |
| 半紙 | 同 | 東京 | 三、〇〇 | 二、八九 | 三、六五 | 四、二五 | 四、九〇 | 四、〇〇 |
| 魚粕肥料 | 十貫目 | 北海道 | 七、二五 | 六、三八 | 七、一七 | 七、三八 | 九、七五 | 九、一三 |
| 菜種油粕 | 同 | 地廻 | 四、六〇 | 四、八八 | 四、六〇 | 四、四四 | 五、六〇 | 五、九〇 |

（ロ）高崎市物價

| （品目） | | （單位） | （産地物名稱） | （大正十三年）圓 | （大正十二年）圓 | （大正十一年）圓 | （大正十年）圓 | （大正九年）圓 | （大正八年）圓 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 米 | 上 | 一石 | 地廻 | 四〇、〇九 | 三四、二三 | 三五、八四 | 三三、〇二 | 四三、八〇 | 四七、五〇 |
| | 中 | 同 | 同 | 三九、四六 | 三三、五七 | 三五、三三 | 三一、四〇 | 四二、一四 | 四六、六八 |
| | 下 | 同 | 同 | 三八、八四 | 三一、九七 | 三四、六一 | 三〇、七五 | 四二、二九 | 四六、一二 |
| 大麥 | | 同 | 同 | 一二、六八 | 九、一二 | 八、〇三 | 九、五五 | 一四、一三 | 一六、〇九 |
| 小麥 | | 同 | 同 | 一八、三六 | 一六、四七 | 一六、七四 | 一八、六〇 | 二二、三八 | 二三、三六 |
| 大豆 | | 同 | 北海道 | 二〇、三四 | 一九、〇八 | 一六、〇八 | 一四、四五 | 二三、二九 | 二一、九七 |
| 小豆 | | 同 | 信州 | 三三、八八 | 二四、〇九 | 一八、七七 | 二〇、八五 | 三一、一五 | 三三、三五 |
| 食鹽（五等） | | 百斤 | 内地 | 三、七六 | 三、七六 | 三、七六 | 三、九四 | 七、九六 | 七、〇四 |

| 品目 | 單位 | 産地 | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 醤油 | 一石 | 地廻 | 三七、〇八 | 三九、八九 | 四一、四四 | 四三、九三 | 五五、二九 | 五〇、八四 |
| 味噌 | 一貫目 | 同 | 〇、六二 | 〇、五八 | 〇、六二 | 〇、六二 | 〇、七五 | 〇、七〇 |
| 白砂糖 | 百斤 | 東京 | 三三、九二 | 二五、三三 | 二一、二八 | 二四、五五 | 四五、四七 | 三六、九六 |
| 赤砂糖 | 同 | 同 | 二一、八七 | 二三、三七 | 一五、七二 | 一八、六五 | 三九、一九 | 二八、五九 |
| 清酒 | 一石 | 地廻 | 八八、七〇 | 九三、二七 | 九四、七四 | 九六、三〇 | 八六、九二 | 八七、五〇 |
| 煎茶(番茶粉茶ヲ除) | 百斤 | 武州 | 一三九、七三 | 一三三、三三 | 一三八、四〇 | 一二四、一〇 | 七五、五八 | 六四、〇〇 |
| 鰹節 | 一貫目 | 約島 | 一四、九四 | 一五、〇五 | 一七、五一 | 一五、五〇 | 一三、九三 | 九、五二 |
| 牛肉(骨付) | 百斤 | 地廻 | 六〇、七九 | 六一、八〇 | 六五、一一 | 六七、八五 | 六五、五四 | 五四、三八 |
| 鶏卵 | 一貫目 | 同 | 四、二六 | 一三、一六 | 一三、五〇 | 四、二五 | 八、七九 | 七、一三 |
| 牛乳 | 一升 | 同 | 〇、六〇 | 〇、六〇 | 〇、五四 | 〇、五〇 | 〇、六〇 | 〇、四四 |
| 梅干(四斗入十六貫) | 一樽 | 同 | 二三、七八 | 二一、四四 | 二〇、三〇 | 二〇、六五 | 一九、五〇 | 一六、六四 |
| 澤庵(四斗入十八貫) | 一樽 | 同 | 八、四〇 | 六、九九 | 九、八三 | 七、三八 | 六、〇四 | 五、五八 |
| 洋産繰綿 | 百斤 | 支那 | 七八、一七 | 六〇、四七 | 五一、二六 | 三〇、五〇 | 六七、〇九 | 七六、三五 |
| 紡績綿絲(二十手) | 同 | 英産 | 一二四、四三 | 八九、三三 | 八六、五六 | 二七一、八〇 | 一五三、七六 | 一八〇、二八 |
| 生絲 上 | 同 | 地(器械) | 一、八二一、五〇 | 二、〇九〇、五〇 | 一、八七五、〇〇 | 一、四八八、〇〇 | 一、八一五、〇〇 | 一、八八九、二五 |
| 生絲 中 | 同 | 同 | 一、七六〇、〇〇 | 二、〇三六、〇〇 | 一、八二四、五〇 | 一、四四一、〇〇 | 一、六九七、五〇 | 一、八一〇、七五 |
| 生絲 下 | 同 | 同 | 一、六一三、五〇 | 一、八二八、五〇 | 一、六七五、〇〇 | 一、三四八、五〇 | 一、五三七、五〇 | 一、七一〇、〇九 |

| | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 花色絹 | 一反 | 地廻 | 六、四九 | 七、四二 | 六、三九 | 五、八八 | 七、三六 | 七、七五 |
| 晒木綿 | 同 | 伊勢 | 〇、八四 | 〇、七三 | 〇、六九 | 〇、七五 | 一、一八 | 一、二九 |
| 洋産金巾（四十五吋一ル〇〇） | 一釜 | 英産 | — | — | — | 一〇、八九 | 一七、七八 | 一三、三三 |
| 麻 | 百斤 | 地廻 | 一二〇、〇四 | 一二七、〇〇 | 一三五、〇〇 | 一五七、一〇 | 一〇六、〇八 | 二〇八、〇〇 |
| 洋鐵 | 一貫目 | 米國 | 〇、五四 | 〇、五〇 | 〇、四九 | 〇、六一 | 〇、五〇 | 〇、六八 |
| 洋釘 | 同 | 同 | 〇、八二 | 〇、九四 | 〇、八一 | 一、〇五 | 一、三三 | 一、四五 |
| 松角材（尺八角長二間物） | 二本 | 地廻 | 一三、〇九 | 一三、五九 | 一三、一七 | 一三、六〇 | 一九、三五 | 一八、三五 |
| 杉（同） | 同 | 同 | 一一、七一 | 一三、一六 | 一一、三五 | 一三、二九 | 一九、七五 | 一九、七五 |
| 松六分板 | 一坪 | 同 | 二、七五 | 二、七一 | 二、六五 | 二、八〇 | 三、五七 | 二、四九 |
| 杉四分板 | 同 | 同 | 二、三一 | 二、四〇 | 二、四五 | 二、五八 | 三、〇五 | 二、三七 |
| 家根板 | 同 | 同 | 二、四三 | 二、四〇 | 二、一八 | 二、四八 | 三、一四 | 二、五六 |
| 石油（一罐入） | 一箱 | 米國 | 七、九四 | 六、八三 | 七、四四 | 九、三七 | 一〇、三八 | 一二、二六 |
| 石炭 | 一噸 | 茨城 | 一九、一九 | 一七、三三 | 二一、五三 | 一九、〇〇 | 一三、九三 | 八、四七 |
| 薪 | 十貫目 | 地廻 | 一、四〇 | 一、二三 | 一、三三 | 〇、八九 | 〇、九二 | 〇、八四 |
| 炭（堅炭） | 同 | 同 | 五、〇八 | 五、一三 | 五、〇一 | 四、九五 | 五、〇六 | 三、五四 |
| 菜種油 | 一石 | 伊勢 | 八三、六一 | 七五、四四 | 七一、一〇 | 七一、九〇 | 八九、五四 | 一〇〇、七一 |
| 美濃紙 | 千枚 | 東京 | 九、三七 | 九、三八 | 一一、七三 | 五、七八 | 一一、四二 | 一一、七七 |

| 品目 | 單位 | 産地 | 大正十三年 | 大正十二年 | 大正十一年 | 大正十年 | 大正九年 | 大正八年 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 半紙 | 同 | 土州 | 三、〇五 | 二、六七 | 三、七二 | 三、九八 | 四、七〇 | 四、二〇 |
| 魚粕肥料 | 十貫目 | 北海道 | 八、〇四 | 七、九八 | 八、八五 | 七、一五 | 一〇、一〇 | 九、八六 |
| 菜種油粕 | 同 | 地廻 | 五、〇七 | 五、〇〇 | 四、七四 | 四、四三 | 六、八六 | 五、六八 |

## (八) 前橋市賃銀

| 職業 | | (賄及被服給與ノ有無) | (大正十三年) | (大正十二年) | (大正十一年) | (大正十年) | (大正九年) | (大正八年) |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 農作年雇 | 男 | 有賄 | 圓 一六〇、〇〇 | 圓 一八八、〇〇 | 圓 一八〇、〇〇 | 圓 一六〇、〇〇 | 圓 一六〇、〇〇 | 圓 一四〇、〇〇 |
| 農作日雇 | 男 | 同 | 一、八〇 | 一、七〇 | 一、八〇 | 一、六五 | 一、五〇 | 一、五〇 |
| | 女 | 同 | 一、一〇 | 〇、八五 | 一、二〇 | 〇、九五 | 一、二〇 | 一、二〇 |
| 養蠶雇(日給) | 男 | 同 | 二、〇〇 | 二、三五 | 二、〇〇 | 一、八三 | 一、六〇 | 一、五〇 |
| | 女 | 同 | 一、三五 | 一、五〇 | 一、五〇 | 一、三三 | 一、二〇 | 一、二〇 |
| 蠶絲繰女 | 日給 | 同 | 一、四五 | 一、四〇 | 一、五〇 | 一、〇四 | 一、〇五 | 一、一〇 |
| 機織工(日給) | 男 | 同 | — | — | — | 一、三五 | 一、三〇 | 一、二五 |
| | 女 | 同 | 一、一〇 | 一、三〇 | 一、四〇 | 一、一五 | 一、二〇 | 一、一五 |
| 陶器轆轤職 | 日給 | 無賄 | 二、〇〇 | 二、〇〇 | 一、九〇 | 一、八〇 | 一、七〇 | 一、七〇 |
| 塗師職 | 同 | 同 | 二、〇〇 | 二、一〇 | 一、九〇 | 二、〇〇 | 一、八〇 | 一、七八 |

| 職 | 日給 | 無賄 | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 錺職 | 同 | 同 | 二,一五 | 二,二五 | 一,九〇 | 一,八〇 | 二,二五 | 一,八〇 |
| 染物職 | 同 | 同 | 一,五〇 | 一,五〇 | 一,六五 | 一,〇〇 | 一,三〇 | 一,三〇 |
| 和服仕立職 | 同 | 同 | 一,五〇 | 一,六五 | 一,四〇 | 一,五〇 | 二,〇〇 | 一,六〇 |
| 洋服仕立職 | 同 | 同 | 一,九〇 | 一,七五 | 二,二五 | 二,〇〇 | 二,五〇 | 二,〇〇 |
| 木挽職 | 同 | 同 | 二,四〇 | 一,五〇 | 二,〇〇 | 二,〇〇 | 二,〇〇 | 二,〇〇 |
| 大工職 | 同 | 同 | 一,八五 | 一,七五 | 二,五〇 | 二,三五 | 二,〇〇 | 二,〇〇 |
| 左官職 | 同 | 同 | 三,一五 | 二,八〇 | 三,四五 | 二,三五 | 二,一五 | 二,一五 |
| 石工職 | 同 | 同 | 三,一〇 | 二,九〇 | 三,五〇 | 三,六〇 | 三,三〇 | 二,〇七 |
| 瓦葺職 | 同 | 同 | 二,九〇 | 二,九五 | 二,六〇 | 二,四五 | 二,五〇 | 二,三〇 |
| 家根職 | 同 | 同 | 二,二五 | 二,二五 | 一,八五 | 一,七五 | 一,八〇 | 一,八〇 |
| 煉瓦製造職 | 同 | 同 | 三,〇〇 | 三,〇〇 | 二,三〇 | 二,五〇 | 二,五〇 | 二,三〇 |
| 煉瓦積職 | 同 | 同 | 二,九〇 | 二,二五 | 二,六〇 | 二,八〇 | 二,八五 | 二,七〇 |
| 指物職 | 同 | 同 | 二,二五 | 二,一五 | 二,〇〇 | 三,〇〇 | 二,三五 | 二,〇〇 |
| 經師職 | 同 | 同 | 二,〇〇 | 二,二五 | 二,〇〇 | 二,〇〇 | 二,二五 | 一,九〇 |
| 疊刺職 | 同 | 同 | 二,五〇 | 二,六〇 | 二,三〇 | 二,五〇 | 二,三〇 | 二,三〇 |
| 建具職 | 同 | 同 | 二,〇〇 | 二,二五 | 二,〇〇 | 二,〇〇 | 一,八〇 | 二,〇〇 |
| 植木職 | 同 | 同 | 二,四〇 | 二,四〇 | 二,三〇 | 二,〇〇 | 二,〇〇 | 二,〇〇 |

| 職業 | 給與 | 賄 | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 菓子製造職 | 同 | 有賄 | 一、五〇 | 一、五〇 | 一、〇〇 | 一、三〇 | 一、二〇 | 一、二〇 |
| 下駄職 | 同 | 無賄 | 二、〇〇 | 二、一〇 | 一、六五 | 一、八〇 | 一、五〇 | 一、五〇 |
| 靴職 | 同 | 同 | 二、三〇 | 二、二五 | 一、八五 | 二、一〇 | 二、〇〇 | 二、〇〇 |
| 馬具職 | 同 | 同 | 一、一〇 | 一、九〇 | 一、八五 | 二、〇〇 | 一、八〇 | 二、〇〇 |
| 車製造職 | 同 | 同 | 二、三〇 | 二、二五 | 二、〇〇 | 二、〇〇 | 二、〇〇 | 一、八〇 |
| 鑄物職 | 同 | 同 | 二、七五 | 二、七五 | 二、二五 | 二、二〇 | 二、三〇 | 二、三〇 |
| 鍛冶職 | 同 | 同 | 二、六五 | 二、七五 | 二、五〇 | 二、六〇 | 二、五〇 | 二、五〇 |
| 綿打職 | 同 | 同 | 一、四五 | 一、五〇 | 一、四〇 | 一、六五 | 一、五〇 | 一、五〇 |
| 活版植字職 | 同 | 同 | 一、六〇 | 一、五〇 | 二、二五 | 二、〇〇 | 二、二〇 | 二、二〇 |
| 版摺職 | 同 | 同 | 一、三五 | 一、四〇 | 二、〇〇 | 二、〇〇 | 二、〇〇 | 二、〇〇 |
| 蓆職 | 同 | 同 | 二、五〇 | 二、一〇 | 二、〇〇 | 一、九〇 | 一、九〇 | 一、九〇 |
| 桶職 | 同 | 同 | 二、二〇 | 二、一五 | 一、六五 | 一、八〇 | 一、八〇 | 一、八〇 |
| 杜氏 | 月給 | 有賄 | 四二、〇〇 | 三七、五〇 | 二七、五〇 | 三〇、〇〇 | 二五、〇〇 | 二五、〇〇 |
| 醬油造職 | 同 | 同 | 三九、五〇 | 三一、二五 | 三二、八〇 | 三五、〇〇 | 二四、〇〇 | 二四、〇〇 |
| 日雇人夫 | 日給 | 無給與 | 二、〇〇 | 一、九〇 | 一、五〇 | 一、八〇 | 一、九〇 | 一、八〇 |
| 下男 | 月給 | 有賄 | 一三、〇〇 | 一〇、〇〇 | 一〇、〇〇 | 一〇、〇〇 | 八、〇〇 | 八、〇〇 |
| 下女 | 同 | 同 | 九、五〇 | 八、〇〇 | 八、〇〇 | 八、〇〇 | 六、〇〇 | 六、〇〇 |

## （二）高崎市賃銀

| | | （賄及被服給與ノ有無） | （大正十三年） | （大正十二年） | （大正十一年） | （大正十年） | （大正九年） | （大正八年） |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 農作年雇 | 男 | 有賄 | 圓 一五〇、〇〇 | 圓 一三〇、〇〇 | 圓 一三〇、〇〇 | 圓 一三〇、〇〇 | 圓 一三〇、〇〇 | 圓 一二八、三三 |
| 農作日雇 | 男 | 同 | 一、六〇 | 一、〇〇 | 一、〇〇 | 一、四〇 | 一、三五 | 一、三三 |
| | 女 | 同 | 一、一〇 | 〇、八〇 | 〇、八〇 | 〇、八五 | 〇、八〇 | 〇、八七 |
| 養蠶雇（日給） | 男 | 同 | 一、八〇 | 一、二〇 | 一、二〇 | 一、二〇 | 一、三〇 | 一、三三 |
| | 女 | 同 | 一、二〇 | 〇、九〇 | 〇、九〇 | 〇、九〇 | 〇、九〇 | 一、〇八 |
| 蠶絲繰女 | 日給 | 同 | 〇、九〇 | 〇、八五 | 〇、八五 | 〇、八〇 | 〇、六〇 | 〇、六〇 |
| 機械工（日給） | 男 | 同 | — | — | — | 〇、七三 | 〇、九五 | 〇、八〇 |
| | 女 | 同 | 〇、七〇 | 〇、六五 | 〇、七〇 | 〇、七〇 | 〇、六五 | 〇、六三 |
| 陶器轆轤職 | 日給 | 無賄 | — | — | — | 二、〇〇 | 一、六〇 | 一、三五 |
| 塗師職 | 同 | 同 | 二、〇〇 | 二、〇〇 | 二、〇〇 | 二、〇〇 | 一、六五 | 一、三五 |
| 餝職 | 同 | 同 | 二、六〇 | 二、六〇 | 二、六〇 | 二、六〇 | 一、九〇 | 一、五三 |
| 染物職 | 同 | 同 | 一、五〇 | 一、三〇 | 一、三〇 | 一、三〇 | 一、五〇 | 一、三四 |
| 和服仕立職 | 同 | 同 | 一、五〇 | 一、四〇 | 一、四〇 | 一、四〇 | 一、四三 | 一、一四 |
| 洋服仕立職 | 同 | 同 | 二、九〇 | 二、七五 | 二、三〇 | 二、〇〇 | 一、九〇 | 一、四五 |

| | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 木挽職 | 同 | 同 | 三、〇〇 | 二、五〇 | 二、五〇 | 二、五〇 | 二、五〇 | 一、七三 |
| 大工職 | 同 | 同 | 二、九〇 | 二、六〇 | 二、四〇 | 二、四〇 | 二、五〇 | 一、六五 |
| 佐官職 | 同 | 同 | 三、一五 | 二、八〇 | 二、六〇 | 二、六〇 | 二、七〇 | 一、八三 |
| 石工職 | 同 | 同 | 三、一〇 | 二、七〇 | 二、六〇 | 二、六〇 | 二、七〇 | 一、六七 |
| 瓦葺職 | 同 | 同 | 三、二五 | 二、九〇 | 二、八〇 | 二、八〇 | 三、〇〇 | 二、三〇 |
| 家根職 | 同 | 同 | 三、〇〇 | 二、八〇 | 二、六〇 | 二、〇〇 | 二、六〇 | 一、八二 |
| 煉瓦製造職 | 同 | 同 | 二、三〇 | 二、〇五 | 一、八〇 | 一、八〇 | 一、六〇 | 一、三五 |
| 煉瓦積職 | 同 | 同 | 三、〇〇 | 二、七五 | 三、〇〇 | 三、〇〇 | 三、〇〇 | 二、一八 |
| 指物職 | 同 | 同 | 二、五〇 | 二、二五 | 二、〇〇 | 二、〇〇 | 二、三〇 | 一、四三 |
| 經師職 | 同 | 同 | 二、五〇 | 二、〇〇 | 二、〇〇 | 二、〇〇 | 二、〇〇 | 一、四〇 |
| 疊刺職 | 同 | 同 | 二、四〇 | 二、四〇 | 二、三〇 | 二、三〇 | 三、〇〇 | 一、八〇 |
| 建具職 | 同 | 同 | 二、五〇 | 二、三〇 | 二、一〇 | 二、一〇 | 二、一五 | 一、五三 |
| 植木職 | 同 | 同 | 二、七五 | 二、四〇 | 二、三五 | 二、三五 | 二、四五 | 一、四三 |
| 菓子製造職 | 同 | 有賄 | 一、五〇 | 一、六五 | 一、五〇 | 一、五〇 | 一、五〇 | 一、一〇 |
| 下駄職 | 同 | 無賄 | 二、〇〇 | 一、七五 | 一、五〇 | 一、五〇 | 一、七〇 | 一、一九 |
| 靴職 | 同 | 同 | 二、〇〇 | 一、九〇 | 一、八〇 | 一、八〇 | 二、一八 | 一、二七 |
| 馬具職 | 同 | 同 | 一、五〇 | 一、六〇 | 一、五〇 | 一、八〇 | 一、七五 | 一、一五 |

| | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 車製造職 | 同 | 同 | 二,〇〇 | 一,七五 | 一,八〇 | 一,九〇 | 一,九五 | 一,四三 |
| 鑄物職 | 同 | 同 | 一,八〇 | 一,八五 | 一,九〇 | 二,〇〇 | 二,二〇 | 一,七〇 |
| 鍛冶職 | 同 | 同 | 一,八〇 | 一,八〇 | 二,〇〇 | 二,二〇 | 二,二五 | 一,六七 |
| 綿打職 | 同 | 同 | 一,五〇 | 一,五〇 | 一,五〇 | 一,五〇 | 一,五〇 | 一,一〇 |
| 活版植字職 | 同 | 同 | 二,〇〇 | 二,〇〇 | 二,〇〇 | 二,〇〇 | 一,七〇 | 〇,九三 |
| 版摺職 | 同 | 同 | 一,七〇 | 一,七〇 | 一,七〇 | 一,七〇 | 一,五〇 | 〇,八八 |
| 鳶職 | 同 | 同 | 二,六五 | 二,四〇 | 二,三〇 | 二,三〇 | 二,五〇 | 一,五三 |
| 桶職 | 同 | 同 | 二,〇〇 | 二,〇〇 | 二,〇〇 | 一,八〇 | 一,八八 | 一,三〇 |
| 杜氏 | 月給 | 有賄 | 四〇,〇〇 | 四〇,〇〇 | 三〇,〇〇 | 三〇,〇〇 | 三〇,〇〇 | 二五,〇〇 |
| 醬油造職 | 同 | 同 | 三五,〇〇 | 三三,〇〇 | 二四,〇〇 | 二四,〇〇 | 二四,〇〇 | 二三,七五 |
| 日雇人夫 | 日給 | 無給與 | 一,八〇 | 一,七五 | 一,七〇 | 一,七〇 | 一,八五 | 一,四〇 |
| 下男 | 月給 | 有賄 | 一〇,〇〇 | 九,〇〇 | 九,〇〇 | 九,〇〇 | 九,〇〇 | 七,〇〇 |
| 下女 | 同 | 同 | 八,〇〇 | 七,〇〇 | 七,〇〇 | 七,〇〇 | 五,三五 | 三,九一 |

(ホ)製絲職工賃銀　大正十三年

| | | （三月）（普通） | （最高） | （最低） | （六月）（普通） | （最高） | （最低） | （九月）（普通） | （最高） | （最低） | （十二月）（普通） | （最高） | （最低） |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 男（日給） | 現業員 | 圓一,七〇 | 圓二,三〇 | 圓一,〇〇 | 圓二,〇〇 | 圓二,五〇 | 圓一,三〇 | 圓二,〇〇 | 圓二,五〇 | 圓一,三〇 | 圓二,〇〇 | 圓二,五〇 | 圓一,三〇 |
| | 束裝工 | 一,三〇 | 一,四〇 | 〇,七〇 | 一,三〇 | 一,五〇 | 〇,八〇 | 一,三〇 | 一,五〇 | 〇,八〇 | 一,三〇 | 一,五〇 | 〇,八〇 |
| | 煮繭工 | 一,三〇 | 一,六五 | 〇,九二 | 一,三〇 | 一,六五 | 〇,九二 | 一,三〇 | 一,六五 | 〇,九二 | 一,三〇 | 一,六五 | 〇,九二 |
| | 雜工 | 一,一〇 | 一,四五 | 〇,七五 | 一,一〇 | 一,四五 | 〇,七五 | 一,一〇 | 一,四五 | 〇,七五 | 一,一〇 | 一,四五 | 〇,七五 |
| 女（日給） | 繰絲工 | 〇,八一 | 一,三〇 | 〇,四八 | 一,〇五 | 一,六五 | 〇,五五 | 一,〇五 | 一,八〇 | 〇,五五 | 一,〇五 | 一,八〇 | 〇,五五 |
| | 揚返工 | 〇,八〇 | 〇,九〇 | 〇,七〇 | 一,〇〇 | 一,三〇 | 〇,八九 | 一,〇〇 | 一,三〇 | 〇,八〇 | 一,〇〇 | 一,三〇 | 〇,八〇 |
| | 束裝工 | 一,〇〇 | 一,三〇 | 〇,七〇 | 一,〇〇 | 一,三〇 | 〇,七〇 | 一,〇〇 | 一,三〇 | 〇,七〇 | 一,〇〇 | 一,三〇 | 〇,七〇 |
| | 煮繭工 | 〇,八五 | 一,一〇 | 〇,四五 | 〇,九一 | 一,三七 | 〇,五二 | 〇,九一 | 一,三七 | 〇,五五 | 〇,九一 | 一,三七 | 〇,五五 |
| | 撰繭工 | 〇,八五 | 一,一〇 | 〇,四一 | 〇,九一 | 一,三七 | 〇,五二 | 〇,九一 | 一,三七 | 〇,五五 | 〇,九一 | 一,三七 | 〇,五五 |
| | 雜工 | 〇,七三 | 〇,八七 | 〇,五五 | 〇,七三 | 〇,八七 | 〇,五五 | 〇,七三 | 〇,八七 | 〇,五五 | 〇,七三 | 〇,八七 | 〇,五五 |

（縣廳保存文書・群馬縣統計書・群馬縣內務部商工課調査書類。）

## 第十二項　勸業費

一　縣勸業費（經常部）每年度決算

| | （大正十三年度）圓 | （大正十二年度）圓 | （大正十一年度）圓 | （大正十年度）圓 | （大正九年度）圓 |
|---|---|---|---|---|---|
| 蠶業取締所費 | 一〇七、九三七、四一〇 | 一二三、三六二、九九〇 | 一四〇、三〇八、二三〇 | 一四五、六〇八、六七〇 | 八〇、三六六、一四〇 |
| 農事試驗場費 | 二八、六〇四、二〇〇 | 二八、三七五、〇九〇 | 三三、五三四、六〇〇 | 三五、〇二四、二七〇 | 二九、五四三、一九〇 |
| 地方測候所費 | 八、七二四、七五〇 | 八、八四九、七五〇 | 九、三六七、二〇〇 | 一一、四六六、三八〇 | 九、三七六、〇五〇 |
| 商品陳列所費 | 七、五九〇、四六〇 | 七、五三四、九七〇 | 八、九五六、五二〇 | 一三、六七八、七八〇 | 一一、九一三、七六〇 |
| 耕地整理調查費 | 一二、二三五、七九〇 | 二〇、〇一七、九〇〇 | 二三、二三八、九〇〇 | 二五、七五七、四七〇 | 三三、〇四七、三五〇 |
| 蠶業試驗場費 | 四三、一七八、三六〇 | 四六、三七一、二五〇 | 四六、四三三、八四〇 | 三二、〇八三、三〇〇 | 三六、〇八〇、三二〇 |
| 地方森林會費 | 二三三、七六〇 | 二一四、五九〇 | 一八三、一三〇 | 一九七、五八〇 | 五〇、〇〇〇 |
| 病害蟲驅除豫防費 | 四七七、八二〇 | 四八四、二〇〇 | 六四八、三〇〇 | 六〇二、五三〇 | 五五七、一一〇 |
| 林業費 | 三三四五二、〇七〇 | 二、二三五、七五〇 | 一七、七八四、四二〇 | 二〇、九〇五、四二〇 | 一八、〇九三、四二〇 |
| 畜產獎勵費 | 九七五、六六〇 | 三、〇六三、四九〇 | 三、一三七、〇〇〇 | 三、三四七、四三〇 | 三、〇四八、四二〇 |
| 產業組合獎勵費 | 一、四九九、六八〇 | 二、二七六、三四〇 | 二、六九九、六四〇 | 四、一八二、〇二〇 | 三、六五九、〇八〇 |
| 機業獎勵費 | — | — | — | 二、〇二四、四二〇 | 四、二〇六、四二〇 |
| 製絲獎勵費 | 一、八〇四、〇二〇 | 一、八二五、七四〇 | 二、〇四六、三二〇 | 三、六五九、五八〇 | 三、三七八、八七〇 |
| 勸業諸費 | 一、三七〇、九五〇 | 四五六、一四〇 | 九六六、四八〇 | 一、三八五、五八〇 | 一、三二五、〇三〇 |
| 畜牛結核病豫防費 | 六二〇、七七〇 | 八〇五、七二〇 | 八九八、五三〇 | 八五六、六四〇 | 七九一、一三〇 |
| 輸出織物檢查所費 | 一〇、八二一、九一〇 | 八、八六三、八七〇 | 八、九四三、〇九〇 | 九、九七七、八五〇 | 九、九五七、六九〇 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 穀物檢査所費 | 六三、〇七〇、八二〇 | 六三、六八六、九七〇 | 七〇、七三七、一一〇 | 七一、八五八、二四〇 | 六一、五三三、五三〇 |
| 採種圃費 | — | — | — | — | 二、九八八、三一〇 |
| 圖案研究所費 | — | — | — | — | 一二、四六九、〇七〇 |
| 工業試驗所費 | 四五、四八五、五一〇 | 四五、一八八、六五〇 | 四〇、九五四、三三〇 | 二四、八一三、六三〇 | 一、五〇三、八三〇 |
| 水產獎勵費 | 一、三四九、六八〇 | 一、五六二、〇〇〇 | 七〇八、八八〇 | 一、〇〇八、五四〇 | 一、八九九、五〇〇 |
| 食糧農產物獎勵費 | 二、五六六、五八〇 | 五、四二八、一一〇 | 五、八九七、八九〇 | 五、五七八、二八〇 | 一四、九三六、八八〇 |
| 種畜場費 | 二三、七四一、二四〇 | 一八、九三七、八二〇 | 一五、九三四、六一〇 | 一五、七〇四、一三〇 | 二、九五三、〇六〇 |
| 蠶業獎勵費 | 三、四六七、一六〇 | 三、七一四、三七〇 | 三、六三六、四一〇 | 三、二一八、九九〇 | 八、五〇七、一六〇 |
| 副業獎勵費 | 六五三、〇四〇 | 六一四、六〇〇 | 一、〇五四、六七〇 | 二、七四〇、六九〇 | — |
| 撚絲取締費 | 四四四、八九〇 | 二、五四五、八七〇 | 四、七九四、九九〇 | 四、七一六、三三〇 | — |
| 肥料改良獎勵費 | — | — | — | 一、三一五、一〇〇 | — |
| 俸給及諸給 | 六三、九一五、二五〇 | 三六、八二一、九二〇 | 三四、五七八、二七〇 | — | — |
| 郡產業職員費 | 五九、八一三、〇〇〇 | 六〇、七六一、八九〇 | — | — | — |
| 郡產業組合獎勵費 | 一二、六〇三、二七〇 | 一一、九六八、六三〇 | — | — | — |
| (合計) | 五一四、五一六、〇四〇 | 五一四、八四八、六二〇 | 四七五、三二一、二四〇 | 四三九、七二一、八二〇 | 三四四、〇六四、二九〇 |

## 一　縣勸業費（臨時部）

| | （大正十三年度）圓 | （大正十二年度）圓 | （大正十一年度）圓 | （大正十年度）圓 | （大正九年度）圓 |
|---|---|---|---|---|---|
| 蠶業取締所建築費 | 六、九九四、〇五〇 | — | — | — | — |
| 蠶業講習費 | 一、三〇三、五一〇 | 一六八、三五〇 | 二〇三、二四〇 | 二三四、七四〇 | 二三三、〇一〇 |
| 種畜購入費 | — | — | — | — | — |
| 蠶業調査費 | — | — | — | — | 一、三五〇、〇〇〇 |
| 產業調査費 | 四、二〇六、三〇〇 | 一、四七四、八〇〇 | 一、三七五、〇〇〇 | 一、七六〇、〇〇〇 | — |
| 副業助成費 | 二、四九三、〇五〇 | — | — | — | — |
| 農事試驗場建築費 | 二、四四六、七〇〇 | — | 二、三九六、五〇〇 | — | — |
| 蠶業試驗場建築費 | 一六、七三二、一二〇 | 一四、〇三一、三〇〇 | 四八、八〇三、一三〇 | 二四、六九四、七一〇 | 一四、七〇一、八五〇 |
| 林野整理費 | 六、三五三、八六〇 | 六、六五五、〇一〇 | 七、八八四、五〇〇 | 四、八六九、九六〇 | 三、七四六、四二〇 |
| 採種奬勵費 | 八、九四〇、〇〇〇 | 九、九三四、〇〇〇 | 三、七八二、〇〇〇 | 三、三九六、〇〇〇 | 二、九一六、四〇〇 |
| 夏秋蠶指導費 | — | — | — | — | — |
| 開墾農具運轉費 | — | — | 五一一、二五〇 | — | — |
| 養蠶組合奬勵費 | — | — | — | — | — |
| 工業試驗場建築費 | — | — | — | 四、九四一、四〇〇 | — |
| 製絲改良費 | — | — | — | 五、一六九、三一〇 | 三、八六七、六八〇 |

| 費目 | （大正十三年度） | （大正十二年度） | （大正十一年度） | （大正十年度） | （大正九年度） |
|---|---|---|---|---|---|
| 牝馬育成奬勵費 | 二、二一〇、〇〇〇 | 二、七〇〇、〇〇〇 | 二、七五〇、〇〇〇 | 二、二五〇、〇〇〇 | 一、五〇〇、〇〇〇 |
| 畜産博覽會費 | — | — | — | 三、〇九三、六八〇 | — |
| 自給肥料奬勵費 | 一、八〇〇、〇〇〇 | 一、九七八、〇〇〇 | 二、二一六、〇〇〇 | 九四一、〇〇〇 | — |
| 種畜場建築費 | — | — | — | — | 一、三一一、五〇〇 |
| 前橋測候所修築費 | — | 七九九、八〇〇 | — | — | — |
| 養蠶組合技術員設置奬勵費 | 六、〇〇〇、〇〇〇 | 四、五〇〇、〇〇〇 | — | — | — |
| 改良農具普及奬勵費 | — | 八五、〇四〇、〇〇〇 | 二一、二七六、〇〇〇 | — | — |
| 農村指導費 | 五、八四三、八〇〇 | 五、八一三、三六〇 | 四、八六九、六八〇 | — | — |
| 桑園改良奬勵費 | 二〇、〇〇〇、〇〇〇 | 二〇、〇〇〇、〇〇〇 | 六、七八八、〇〇〇 | — | — |
| （計） | 八四、〇四二、三九〇 | 一五三、〇九四、四三〇 | 一〇一、七八三、四九〇 | 六一、三一九、八〇〇 | 二九、八〇六、八八〇 |

### 三　勸業補助費　（臨時部）

| 費目 | （大正十三年度） | （大正十二年度） | （大正十一年度） | （大正十年度） | （大正九年度） |
|---|---|---|---|---|---|
| 縣農會費補助 | 圓 一一、九三一、〇〇〇 | 圓 一三、一九一、〇〇〇 | 圓 九、七〇〇、〇〇〇 | 圓 九、七〇〇、〇〇〇 | 圓 九、五〇〇、〇〇〇 |
| 組合聯合會費補助 | 八、〇〇〇、〇〇〇 | 六、三二〇、〇〇〇 | 二、八〇〇、〇〇〇 | 二、八〇〇、〇〇〇 | 二、八〇〇、〇〇〇 |
| 諸會費補助 | 二七五、〇〇〇 | 四五〇、〇〇〇 | 三、一七九、〇〇〇 | 一〇、〇七〇、〇〇〇 | 一、六七五、〇〇〇 |
| 耕地整理費補助 | — | — | 九、五三七、〇〇〇 | 九、三四〇、〇〇〇 | 四、一六〇、〇〇〇 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 山林會費補助 | 一、四九〇、〇〇〇 | 一、五八〇、〇〇〇 | 一、七五〇、〇〇〇 | 一、〇〇〇、〇〇〇 | 一、〇〇〇、〇〇〇 |
| 林業費補助 | — | — | — | — | 七、一四四、四〇〇 |
| 荒廢地復舊費補助 | — | — | — | 六、六七〇、〇〇〇 | 一〇、四五〇、〇〇〇 |
| 蠶絲織物組合研究會費補助 | 三〇〇、〇〇〇 | — | 三〇〇、〇〇〇 | 三〇〇、〇〇〇 | 五〇〇、〇〇〇 |
| 開墾地移住家屋建築費補助 | 三、六〇〇、〇〇〇 | 三、四〇〇、〇〇〇 | 三、三〇〇、〇〇〇 | 一、三〇〇、〇〇〇 | — |
| 郡技術員費補助 | — | — | 四、三三一、〇〇〇 | 三、七五二、〇〇〇 | 三、九九六、〇〇〇 |
| 同業組合費補助 | — | — | — | — | 一五〇、〇〇〇 |
| 産業組合中央會群馬支部會費補助 | 七〇〇、〇〇〇 | 七〇〇、〇〇〇 | 七五〇、〇〇〇 | 五〇〇、〇〇〇 | 五〇〇、〇〇〇 |
| 養蠶組合費補助 | 五〇〇、〇〇〇 | 一五、七四〇、〇〇〇 | 三、四五六、〇〇〇 | 一、八〇〇、〇〇〇 | 三、〇〇〇、〇〇〇 |
| 夏秋蠶講習會費補助 | — | — | — | — | — |
| 郡市農會事業費補助 | 八、〇〇〇、〇〇〇 | 八、一四三、〇〇〇 | — | — | — |
| 農業倉庫建設費補助 | 一二、五三九、〇〇〇 | — | — | — | 一二、[illegible] |
| 造林費補助 | 一四、九六〇、一九〇 | 一四、五七九、九〇〇 | 一六、四三五、四〇〇 | 九、六二〇、五〇〇 | — |
| 産麥改良組合費補助 | — | — | 一、一八三、〇〇〇 | — | — |
| 部落有林野統一費補助 | 一〇、五〇〇 | — | — | 五九一、〇〇〇 | — |
| 織物原料檢査機械設備費補助 | — | — | — | — | — |
| 畜産組合費補助 | — | 三、七四四、〇〇〇 | — | — | — |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 蠶種同業組合技術員設置費補助 | 一、二四五、〇〇〇 | 八九五、〇〇〇 | — | — | — |
| 開墾農具運轉費ニ對スル補助 | 一、〇三五、〇〇〇 | 二〇〇、〇〇〇 | — | — | — |
| 生絲檢査所費ニ對スル補助 | 一、〇〇〇、〇〇〇 | 三、八〇〇、〇〇〇 | — | — | — |
| 日本度量衡協會支部群馬會費補助 | 三〇〇、〇〇〇 | — | — | — | — |
| （計） | 六四、八七五、六九〇 | 七〇、六七一、九〇〇 | 五五、六二一、四〇〇 | 五七、四三三、五〇〇 | 四五、〇三八、四〇〇 |

## 四　勸業費本年度支出額（臨時部）

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 勸業費ノ内模範林業費本年度支出額 | — | — | 一二、二六九、九七〇 | 六、〇〇七、七三〇 | 五、四〇〇、〇三〇 |
| 勸業費ノ内耕地擴張費本年度支出額 | — | 六八、一五八、七五〇 | — | — | 四、六六九、二〇〇 |
| 勸業費ノ内工業試驗場設備費本年度支出額 | — | — | 二九、三五九、七一〇 | 一〇、七一五、九五〇 | — |
| 勸業費ノ内平和記念東京博覽會費本年度支出額 | — | — | 九、九〇八、二七〇 | 二七、二〇六、三五〇 | — |
| 勸業費ノ内治水費本年度支出額 | 一五、〇三三、八八〇 | 一四、四八一、〇九〇 | 一七、九九〇、〇〇〇 | — | — |
| 勸業費ノ内種畜場建築費本年度支出額 | 五〇、五七四、〇一〇 | 二三、八一三、三七〇 | 二七、〇一三、〇五〇 | — | — |
| 勸業費ノ内用排水改良費本年度支出額 | 九八、二三九、九五〇 | 一七六、七八〇 | — | — | — |
| （計） | 一六三、八四七、八四〇 | 一〇六、九二八、九九〇 | 九六、五四一、〇〇〇 | 四三、六三〇、〇三〇 | 一〇、〇六九、二三〇 |
| （臨時費合計） | 三一二、七六五、九二〇 | 三三〇、三九五、三二〇 | 二五三、九四五、八九〇 | 一六三、六八三、三三〇 | 八四、九一四、五〇〇 |
| （總計） | 八二七、二八一、九六〇 | 八四五、二四三、九四〇 | 七二九、二六七、一三〇 | 六〇二、四〇五、一五〇 | 四二八、九七八、七九〇 |

## 五　市町村勸業費　（大正十三年度豫算）

| | （勸業費） | （勸業費補助） | （合計） | （歳出總額） | （歳出總額百中勸業費） |
|---|---|---|---|---|---|
| | 圓 | 圓 | 圓 | 圓 | |
| 勢多郡 | 一,三九九 | 二〇,七四一 | 二二,一四〇 | 七九二,四六三 | 一,五二 |
| 群馬郡 | 四,六一四 | 一,七九〇 | 六,四〇四 | 一,〇八六,七七七 | 〇,五九 |
| 多野郡 | 三一六 | 一,七二五 | 二,〇四一 | 五六六,五七四 | 〇,三六 |
| 北甘樂郡 | 九一四 | 五,〇一七 | 五,九三一 | 五五四,六七七 | 一,〇七 |
| 碓氷郡 | 一,三九四 | 四,三五五 | 五,六四九 | 四二九,三〇五 | 一,三三 |
| 吾妻郡 | 一,七三〇 | 三,一七〇 | 四,九〇〇 | 四五〇,四一四 | 一,〇九 |
| 利根郡 | 二,〇二八 | 七,八三〇 | 九,八五八 | 八〇三,八一六 | 一,二三 |
| 佐波郡 | 二,三九六 | 四〇〇 | 二,七九六 | 八一八,三三八 | 〇,三四 |
| 新田郡 | 一,四九八 | 三,二七〇 | 四,七六八 | 四四三,〇〇二 | 一,〇七 |
| 山田郡 | 一,八二二 | 一,六七四 | 三,四八六 | 三八六,七五八 | 〇,九〇 |
| 邑樂郡 | 二,九七三 | 一,〇〇五 | 三,九七八 | 六三九,七四九 | 〇,六二 |
| 前橋市 | 一一,七〇〇 | 三〇〇 | 一二,〇〇〇 | 五四三,三三六 | 二,二一 |
| 高崎市 | 二,〇一〇 | 五五〇 | 二,五六〇 | 四一六,八七二 | 〇,六一 |
| 桐生市 | 二五二 | 一〇〇 | 三五二 | 三一三,七二〇 | 一,一三 |
| （合計） | 三四,八二六 | 四一,九二七 | 七六,七六三 | 八,二四五,六九〇 | 〇,九三 |

# 第八章　教育奬勵と文物隆盛

## 第一節　總說

本縣の教育は三期に分つを得べし

施設奬勵を主として、明治維新以後に於ける本縣教育を通觀すれば、之を三期に分つことを得るが如し。第一期は學制頒布より、明治二十七八年戰役頃まで、第二期は明治二十七八年戰役以後、明治四十二三年頃まで、第三期は明治の末年より現時に至るまでにして、之を教育の等別より觀れば、第一期は主として初等教育施設時代、第二期は初等教育の振興と共に、高等普通教育及び實業教育施設時代、第三期は前記教育の向上發達と合せて、社會教育施設時代と稱すべし。

### 第一期　明治五年學制頒布より明治廿七八年戰役頃まで

第一期の特色

此期は政府に於て明治五年學制を頒布し、之を實施したりしが、この制度は規

楫取縣令ノ教育方針

模宏大、秩序整頓に過ぎて、却つて當時の國力及び文化の程度に適せず、之を强ひて實施したるために、干渉その度にすぎ、徒に地方の經費を增大し、種々の弊害を生ずるに至つて、明治十二年之を廢し、教育令を以て之に代へたり。然るにこの教育令は學校の設置についても、監督についても、餘りに自由放任に失したるを以て、是れ亦改正の必要起り、翌年之を改正し、公私立學校の設置廢止を取締り、就學の督責を嚴にし、小學校の學期及び授業日數を改め、稍〻干渉主義を採りしが、明治十九年、教育令廢せられ、各種學校令を制定し之に代へ、更にこの學校令を改正したる時代にして、綜合的の教育制度より漸時等別的教育制度に分化し、教育制度こゝに面目を一新し、初等教育より進みて、中等教育發展の曙光を呈したる時代なりとす。この期に於ける本縣の教育は、勿論政府の意を體して、制度の改廢に伴ひ施設奬勵したること、以下各節に亘り詳記する所なるが、玆に特筆すべきは、楫取群馬縣令が時代の趨勢と地方民俗の實狀に鑑み、適當に施設奬勵したることと是れなり。縣令は明治八年四月廿三日、廳內庶務課中學務掛を廢して、改めて學務課を獨立せしめ、教育の方針については、重きを德育に置き、教育の普及と共に、良風美俗の涵養に竭したることなり。同縣令の教育方針は、載せてその學

政に關する演說書中にあり。

明治七年七月赴任以來、施政上教育の事項、數々變革枚擧に遑あらず。是れ皆時勢の變遷、朝旨の赴く所に違ひ施行せるに由ると雖も、地方民俗に就て、聊か愚意を加ふるものなきにあらず。抑上毛地方の風俗たる、從來兇暴無頼の徒多く、往々治度德化に嚮はず、維新後と雖も、尙其惡風を兇れず。是本縣治政上の一難事たり。尙事小學一般の教科を按ずるに、大抵工藝技術の學に偏傾し、未だ德義の道を講ずるものなきが如し。是に於て特に修身に資するの書を加へ、彼の惡風を薰化し、良俗たらしめんことを企圖せり。其後教育令發布に際し、世上自由教育等の說行はれ、人心大に惑を生じ、卒に學事衰退の狀を現はせり。然れども本縣は之を放任に附せざるを以て、甚だしき弊害あるを見ずして、該令改正に至り、復學政の紀綱大に張り、定例規則の如き周到精密、教科は修身を旨とし、工藝技術の學之に次ぎ、加ふるに體育術を以てせり。爾來教育の方向一定し、事業の順序、施設の方法等は、稍緒に就くを得たり。云々。(揖取縣令引繼書。)

修身教科書を編纂す

之を事例に徵するに、明治十一年十一月、本縣にて編纂したる修身說約を以て、小學校の修身教科書とし、翌十二年九月、教育令發布せられ、小學校教則中にこの科を闕ける際に於ても、本縣は之を特設せり。明治十六年一月、幼學綱要下賜につ

幼學綱要につき諭達

いては、楫取縣令は聖諭寫を添へて、各郡長へ諭達する所あり。其文に曰く、

客歲十二月二日、素彥宮內省に召され、聖上御前に於て別紙寫の通り親しく聖諭の旨ありて、幼學綱要一部を下し賜ふ。兒童敎育上、聖意の優渥なる、素彥感激の至りに堪へざるなり。今寫を以て玆に示す。諸子其れ聖旨を奉體し、感化部民に及ばんことを勗められよ。

聖諭寫

彝倫道德は敎育の主本、我朝支那の專ら崇尙する所、歐米各國も亦修身の學ありと雖も、之を本邦に採用する其要を得ず。方今學科多端、本末を誤る者亦鮮からず。年少就學最當に忠孝を本とし、仁義を先にすべし。因て儒臣に命じて、此書を編纂し群下に頒賜し、明倫修德の要、玆に在ることを知らしむ。

右

聖諭の大旨、讀者謹て奉體服膺あらんことを要す。

明治十五年十二月　　宮內卿　德大寺實則

翌十七年三月に至り、町村立小學校へは宮內省藏版各二部御下賜相成りたり。而して右は本縣小學校敎則修身口授用書に充用すべき筈につき、該書頒賚の旨

趣篤く服膺し益明倫修德の道を講ずべき旨更に諭達せらる。同縣令は縣下文化の現況を審察して敎育の及不及を徵知することの施政上最も緊要なるを以て明治十三年敎育程度の調査をなせり。其の結果は左の如し。因に當時日本全國中此調査をなしたる府縣としては他に滋賀縣と島根縣とあるのみ。

楫取縣令敎育程度の調査をなす

| | (六才以上にして自己の姓名を書き得るもの) | (同書き得ざるもの) |
|---|---|---|
| 男 | 二一七、三一三人 | 五七、三一三人 |
| 女 | 六一、〇三四人 | 一九九、六五三人 |
| 計 | 二七八、三四七人 | 二五六、九六六人 |

男女百人中姓名を書き得ざるものゝ百分比例　四八、〇〇

同年調査の滋賀縣の同比例は　三二、二六

楫取縣令が敎育奬勵の結果本縣敎育の成績頗る興隆したることは明治十四年四月二十六日より五月五日に至るまで本縣敎育の情況を視察して文部大臣に復命したる久保田文部少書記官の報告書に徵することを得べし。

群馬縣は夙に學政の整理上に注意し町村立小學校維持の法を定め學齡兒童就

學の法を嚴にしたるが如き、其根本を培植し先務を急にせし實ありて自由教育の風潮も亦其慣例を動かす能はず。故に所在の學校、多少の貯資あらざるなく、且就學生徒の多き、之を埼玉・神奈川の二縣に比するに、同日の論に非るものあり。若し能く此緒を繼ぎ、更に學校の内部に注意せば、本縣の學事は殆んど間然する所なきに至らん。今回巡視の町村立小學校は十九箇にして、其校舍は大半新築に係り、且つ教則中に修身科を設け、又間々物理器械を備ふるものあるは、埼玉・神奈川の二縣中、未だ曾て觀ざる所のものなり。縣立學校は中學及び師範學校の二個あり。師範學校の狀況は、該二縣と大なる優劣なしと雖も、其附屬小學校は亦大に整頓せり。其他縣立醫學校一箇ありて、其結構及び器械等諸般の整頓せること、他の府縣中希に觀る所なりしが、本年の縣會議決を以て之を廢止し、生徒若干名を東京大學醫學部の別課に入學せしむるの法を設けたり。夫れ此の如きの經營あり、而して一旦之を沮止せしは、最惜しむべしとす。況んや醫學部は固より定員ありて、漫に無數の志願者を待ち得べきに非るをや。（文部省第九年報）

更に此當時に於ける就學步合の一事に就て、全國に於ける位置を調査すれば、左の如し。又以て當時に於ける本縣教育の一班を知るに足らん。

自明治九年至同十八年　九年間就學兒童調査表　（文部省年報）

| （年次） | （學齢人員） | （就學）（男女合計） | （就學）（計百分比） | （全國就學百分比。） | （關東府縣中順位。） | （全國中順位。） |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 明治九年 | 七六、七六四 | 三八、三八二 | 五〇、〇〇 | 三八、三一 | 四 | 九 |
| 同十年 | 七三、九七四 | 四二、一一三 | 五七、四五 | 三九、八七 | 九 | 四 |
| 同十一年 | — | — | — | — | — | — |
| 同十二年 | 七四、九一六 | 五一、六七三 | 六八、九七 | 四一、一六 | 一 | 一 |

| （年次） | （學齢人員） | （就學）（男女合計） | （就學）（計百分比） | （人口百中生徒比例）（本縣） | （人口百中生徒比例）（全國） | （順位）（關東中） | （順位）（全國中） |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 同十三年 | 八二、五八四 | 五一、三六七 | 六二、二〇 | 九、〇四 | 六、九三 | 一 | 一 |
| 同十四年 | 八七、九〇四 | 五六、五四二 | 六四、三三 | 一〇、〇二 | 七、二四 | 一 | 一 |
| 同十五年 | 九五、二六八 | 六六、九八七 | 七六、三〇 | 一一、七五 | 八、二〇 | 一 | 一 |
| 同十六年 | 九七、〇五三 | 六六、五八八 | 六八、六一 | 一一、三八 | 八、八〇 | 一 | 二 |
| 同十七年 | 一〇四、四五六 | 六七、三六二 | 六四、一一 | 一一、三九 | 八、七九 | 三 | 一 |
| 同十八年 | 一一三、九八二 | 六五、七七三 | 五七、七〇 | 九、六五 | 八、二一 | 二 | 二 |

**佐藤縣令の教育に關する告諭**

されば明治十七年八月廿一日、楫取縣令の後を襲ぎたる佐藤縣令は、新任に際して特に教育に關する告諭を下せり。

與三新ニ職ヲ本縣ニ奉ジ、牧民ノ責任ニ當レリ。惟フニ縣政ノ要ハ、上朝旨ヲ奉體シ、下人民ノ幸福ヲ圖ルニ在リ。前縣令ノ治ヲ布クモ、蓋シ此意ニ外ナラズ。今

與三ノ事ヲ承クルモ亦然リ。抑教育ナルモノハ、吾人身ヲ立テルノ原資、國家安寧ノ命脈ナリ。學事ノ忽ニス可カラザル言ヲ俟タズ。方今教育上改良ヲ要シ、進歩ヲ圖ル者多端ニシテ、已ニ實施中ニ係ルモノ亦少シトセズ。或ハ恐ル、今回縣令ノ交迭ニ由テ、徒ニ妄想ヲ起シ、事業ヲ躊躇スル如キアランコトヲ。宜シク予ガ旨意ヲ體シ、勵精シテ以テ將來教育ノ目的ヲ誤ルコト勿レ。右告諭候事。（教育事務便覽第四編）

中等教育

この期は所謂啓蒙時代に屬したれば、主力を初等教育に集注せしといへども、中等教育は全然措いて顧みざるに非ず。明治十一年の群馬縣師範學校新築の外に、明治九年十月一日、前橋市曲輪町に衛生所兼醫學校を新築し、明治十四年十月廢校に至る迄繼續し、中學校は縣立として明治十二年に、縣立女學校亦明治十五年より設立せられたるを見て、之を知るべし。但し女學校は明治二十年三月限り廢止せられたり。

## 第二期　明治廿七八年戰役後より明治四十二三年頃に至る

此期に於ける國の教育制度を述ぶれば、日清戰役の結果國運次第に發展し來

れるに伴ひ曩に公布したる各種の學校令に大革新を行ふの必要を生じ、明治卅年十月、師範學校令を廢し、新に師範教育令を制定したるを初とし、同三十二年二月中學校令を、同三十三年八月小學校令を改正し、又同三十二年二月には實業學校令・高等女學校令を制定し、中等教育の振興を圖れり。日露戰役以後に於ては、急激なる國勢の膨脹と、時代の趨勢とにより、明治四十年三月、小學校令第十八條を改正し、四箇年の義務教育を六箇年に延長したる時期にして、學制史上一時期を劃したる時期とす。此期に於て本縣の初等教育に於ては明治二十九年一月、市町村學事奬勵規程を定め、小學教育の振興を圖りたるを初とし、國の法令改廢新定の旨趣を體して、施設奬勵に努めたり。就中明治三十三年、小學校令の改正につき、之が施行に當り、本縣知事は訓令を發して、改正の精神の徹底に努めたり。

明治卅三年縣令は小學校令改正の精神に就き訓令す

其訓令（訓令一四四號明治卅三年十月十七日）に曰く、

今般小學校令改正相成リ、其施行規則發布セラレタルニ就テハ、改正令ノ旨趣ニ基キ、小學校教育上ノ實施ニ遺算ナキヲ期セザルベカラズ。是レ今回本縣從來ノ規定中、時勢ノ進運ニ伴ハザルモノヲ改廢シ、併セテ諸般ノ事項ヲ一令ノ下ニ、總括規定シタル細則ヲ發布セル所以ナリ。蓋兒童就學ノ增加ヲ圖ルト共ニ、學校設備

ノ完成ヲ期シ、以テ學校教育ノ實績ヲ擧ゲルハ、國民教育ノ要務ナリ。其實施上ノ手續ニ於テハ、學齡簿ノ加除、入學ノ通知、及出席ノ督促等、凡テ義務教育ノ基本ヲ整理シテ、遺漏ナキヲ勉メ、男トナク女トナク、就學督促ヲ勵行シテ、無教育ノ徒ナキニ至ラシメザルベカラズ。學校設備ノ完成ヲ圖ルニ就テハ、其增設ト共ニ構造ヲ完全ニシテ、以テ兒童身心ノ發育ニ障害ヲ及ボスコトナキニ注意スルノミナラズ、其建築ヲ堅牢ニシテ、不慮ノ危難ヲ豫防スルノ注意ヲ怠ルベカラズ。今回ノ改正中、教科目ノ變更、文字ノ省約及試驗ノ廢止等ハ、兒童ノ教育ニ最直接ノ關係ヲ有スルモノニシテ、其運用ノ範圍ヲ擴張シタルハ、教職ニアル者ノ責任ニ對シ、一層ノ重大ヲ致シシ所以ナリ。抑教員自重ノ精神ト、誠實ノ勤務トハ、教育ノ實効上最要ノ力タリ。教職ニアル者深ク其本分ニ省ミ、精査熟思、實効ヲ擧グルコトヲ勉ムベシ。市町村ノ當局者ニ於テハ、以上ノ旨趣ニ依リ、教育ニ關スル諸般ノ施設ヲシテ、時勢ノ進運ニ伴ハシメ、且教員ヲ優遇シテ、以テ國民ノ教育ニ十分ナル成果ヲ得ルヲ期セザルベカラズ。又學事監督ノ任ニアル者ハ、常ニ以上ノ諸點ヲ視察シ、能ク其實行ヲ督勵シテ、國家永遠ノ大計ヲ誤ラザル樣、特ニ注意アランコトヲ望ム。

### 日露戰役の際の教育施設

明治三十七年二月、日露兩國の兵戈を交ふるに及びて、この非常の事變に際しても、時局に對する施設を怠らず、教育上遺漏なきを期せり。その施設概要を抄

錄すれば、開戰後間もなき二月十七日、郡市長に向ひ、

戰役ニ從事シタル者ノ子弟教育ニ關シテハ、明治二十九年勅令第五號ノ特典ハアレドモ、右ハ高等小學校生徒ノ授業料免除ニ止マルヲ以テ、市町村其他ノ公共團體ニ於テ、適宜ノ方法ヲ設ケ、戰役從事者子弟ノ教育ヲ缺カザル樣、特ニ注意セシメ、又此際小學校ノ建築ヲ見合スト雖モ、就學ノ奬勵ハ固ヨリ緩ウスベカラザルヲ以テ、兒童就學ノ校舍ニ差支フル場合ハ、二部教授ノ方法ニ依ルカ、若クハ便宜ノ家屋ヲ假用スル等、兒童教育ニ阻害ヲ生セザル樣、特ニ計劃スベシ。

又明治三十七年四月二十八日、同じく郡市長に向て「實業補習學校ハ未ダ經驗ニ乏シキヲ以テ、十分其効果ヲ認ムルニ足ラズト雖モ、其必要ナルハ勿論ナルガ故ニ、特ニ縣費ヨリ補助ヲ支給スルノ方法ヲモ設ケタレドモ、今回ノ如キ時局ニ際シテハ、主トシテ其影響ヲ受ケ易キ事情ナキニ非レバ、此際特ニ注意ヲ加ヘテ、實業教育上ニ遺憾ナカラシムベシ」と命せり。

次いで明治三十七年七月十六日、東京帝國大學に於て、畏くも教育に關しての御沙汰を賜はれり。即ち「軍國多事ノ際ト雖モ、教育ノ事ハ忽ニスベカラズ。其局ニ當ル者、克ク勵精セヨ」との事にして、明治三十七年十二月十日訓令第三百五十二號を以て に

日露戰役當時教育上施設概目

は、戰時に於ける教育上の施設概目を訓令せり。その要項は左の如し。

(一)勅語ノ御旨趣ヲ貫徹スルコト。

(二)出征軍人ノ忠勇ナル事蹟ヲ講談スルコト。

(三)學術上ノ講談ヲナスコト。

(四)奢侈ヲ戒メ困苦缺乏ニ堪フルノ習慣ヲ養成スルコト。

(五)衞生ニ注意スルノ習慣ヲ養成スルコト。

(六)時間ヲ正確ニシ、紀律ヲ嚴守スルノ習慣ヲ養成スルコト。

(七)重要ナル戰報ハ校內ニ於テ便宜ノ方法ニ依リ、其概要ヲ知ラシムルコト。

(八)戰地ノ地圖、其他戰爭ニ關係アル繪畫等ヲ集メテ、參考品トスルコト。

(九)日露國勢ノ大要ヲ知ラシムルコト。

(一〇)當該市町村及近郷出征軍人一覽表ヲ作リ、學校其他便宜ノ場所ニ揭示シオクコト。

(一一)出征軍人ノ寫眞書牘等ヲ集メ、且其功績・逸話等ヲ編纂シテ、敎授上ノ材料ニ供スルコト。

(一二)生徒ノ手ニナレル紀念書畫・作文、其他紀念製作品アル場合ニハ、便宜ノ方法ニ依テ展覽セシムルコト。

(一三)授業ヲ妨ゲズ、且適度ノ制限内ニ於テ、便宜出征軍人ノ送迎、又ハ葬儀ニ參會スルコト。
(一四)全校又ハ全級ヲ代表シタルモノヲシテ、便宜出征軍人又ハ傷病者ニ慰問狀ヲ贈リ、且其留守宅又ハ遺族ノ慰問ヲナサシムルコト。
(一五)出征軍人又ハ戰死者等ノ子弟ニ對シ優待法ヲ設クルコト。
(一六)出征軍人ノ留守宅ニシテ、勞力ノ缺乏シタルモノニ對シテハ、便宜ノ方法ニ依リ、特ニ害虫驅除ノ如キ助力ヲ與フルコト。
(一七)學校相當ノ方法アルニ於テハ、恤兵品ノ製作ヲナサシムルコト。
(一八)紀念基本財産蓄積ノ方法ヲ設クルコト。
(一九)土地ノ狀況ニ依リ、年長ノ生徒ヲシテ、家庭ニ於テ家禽ノ飼養、魚族ノ播殖、殖林用苗木ノ仕立等ヲナサシムルコト。
(二〇)學校生徒ニ郵便貯金ヲ奬勵スルコト。
(二一)學校内ニ紀念花壇ヲ設クルコト。
(二二)青年ノタメニ夜學會ヲ設クルコト。
(二三)紀念圖書館ヲ設クルコト。

又明治三十七年度より開始せる壯丁敎育調査の如き、亦時局に鑑みたる一施設

と見るべきものなり。この調査の目的とする所は、小學校教育の效果如何を調査し、これが發展向上に資せんとするに外ならず。その方法は、各郡市徵兵署管内の別室に於て、縣屬若くは縣視學臨席、各郡市學事關係吏員をして調査せしむ。明治四十年度より縣官の臨席を止めて、專ら各郡市學事關係吏員（關係市町村小學校長立會の上。）をして調査せしむ。この調査實施につきては、文部省より通牒を發したるは、明治三十九年なり。爾來本縣は繼續して之を實施し、その調査の成績に徵し、青年會夜學會の開設を奬勵し、國民教育の補習に力めつゝあり。

義務教育年限の延長

明治四十年三月二十日、勅令第五十二號を以て、義務年限を延長せらるゝや、師範學校に小學校教員學力補充講習會を開設し、時勢の要求に應じ、明治四十四年六月十三日、教育に關する訓令、所謂四大方針を示して、教育の實績向上に努めしめたり。この訓令は教育に關する重要訓令として、爾來踏襲する所なり。由つて其の全文を採錄す。

訓令甲第三十七號（明治四十四年六月十三日）

郡役所
市役所

町村役場
小學校

本縣教育ノ趨勢ハ、夙ニ當事者一般ノ精勵ニ依リ、着々進歩改善ノ域ニ達セリト雖、時運ハ益駸々乎トシテ底止スル所ヲ知ラズ。此時ニ際リ、國本培養ノ根蒂タル教育ニ從事スルモノ、常ニ此ニ留意シ、研鑽怠ルベカラズ。曩ニ本縣教育調査會ヲ起シテ、縣下教育ノ現狀ヲ審査シ、當事者ヲシテ其嚮フ所ノ方針ヲ定メムトシタル所以、亦實ニ此ニ存ス。

今同會調査ノ結果ニ徵スルニ、今後改善助長ヲ要スベキ事項鮮少ナラズト雖、一時ニ多クヲ要求スルハ、其ノ實績ヲ擧グル上ニ於テ、反リテ効果ヲ減殺スベキ虞ナシト爲サズ。故ヲ以テ本縣ノ現狀ニ鑑ミテ、就中最急務ト認ムベキモノ、別記數項ヲ揭ゲタリ。而シテ本文ノ内容ハ、大體ノ綱領ニ止メ、之ガ實施ニ關スル具體的方案ニ至リテハ、之ヲ略シタルモノ少カラズ。是主トシテ劃一ニ偏スルノ弊ヲ避ケ、運用ヲ自在ナラシメムガ爲ナリ。其ノ實行ニ關スル先後緩急ニ就テハ固ヨリ土地ノ情況ト、現在成績ノ程度如何トヲ參酌シ、適當ノ施設ニ出デムコトヲ要ス。

各郡市ニ於ケル實施ニ關スル方案、及其成績ノ如キハ、爾後期ヲ定メテ之ヲ徵シ、勸獎ヲ怠ラザラムコトヲ期ス。當事者其レ宜シク其旨趣ノアル所ヲ體シ、協力一

致之ガ實績ヲ擧グルニ努ムベシ。

一　學齡兒童就學出席ノ成績ヲ良好ナラシムベシ。

敎育上最急務トスル所ハ、義務敎育ノ普及ニ在リ。而シテ本縣學齡兒童就學步合ハ逐年增加スト雖、最近ノ統計年報ニ徵スルニ、本縣ハ百分ノ九十六、八三ニシテ、之ヲ全國學齡兒童就學平均步合百分ノ九十七、八〇ニ比較シテ、其成績中等以下ニ位スルハ、義務敎育ノ普及上遺憾尠カラザルヲ以テ、今後一層就學ノ督勵ヲ周到ニシ、以テ皆就學ノ域ニ達セシムルコトニ努ムベシ。

抑皆就學ノ實ヲ擧ゲムニハ、成績ニ基キ就學ノ督勵ヲ嚴ニスルニ止ラズ、尙進ムデ貧困子弟ノ就學ニ便ナル方法ヲ講究シ、之ガ施設ヲ爲スノ最緊要ナルヲ認ム。サレバ各町村ニ於テハ、其ノ地方ノ情況ニ應ジ、本年六月訓令中第三十八號ヲ以テ示シタル準則ニ基キ、學齡兒童保護會等ノ設立ヲ企ツルヲ要ス。

年長又ハ極貧ノ兒童ニシテ、一定ノ時期若ハ時間ニ於テ就學スルコト能ハザルモノニハ、便宜特殊ノ敎育ヲ施スノ道ヲ開ク等、事宜ニ應ジ、相當ノ施設ヲ爲スヲ要ス。

就學ノ督勵ト共ニ、兒童ノ出席ヲ獎勵スルハ、是亦緊要ノ事タルヲ以テ、各小學校ニ於テ個人奬勵、學級奬勵、又ハ部落奬勵等、既ニ實施セル所ノ方法尠カラザルガ故

ニ、宜シク之ヲ斟酌採擇シテ、適宜競進ヲ促シ、其效果ヲ多大ナラシメザルベカラズ。當事者ハ是等ニ就テ、相當ノ措置ヲナシ、施設宜キヲ得テ、其ノ成績ヲ良好ナラシムベシ。

本年四月、訓令甲第二十八號、同訓令甲第二十九號ヲ以テ、學齡簿・學籍簿・檢閲規程、竝學齡兒童就學事務取扱手續等ヲ定メ、尙近ク學齡兒童就學出席奬勵補助規程ヲ定メムトスルノ旨趣モ、全ク學齡兒童就學出席ノ實績ヲ擧ゲトスルニ外ナラズ。局ニ當ルモノ、宜シク其ノ旨趣ヲ體シ、教育事務ニ關スル整理ヲ正確ナラシムルト同時ニ、就學ノ督勵出席ノ奬勵ニ向テ、一層ノ奮勵ヲ要ス。

一 小學校基本財産ノ増殖ヲ計ルベシ。

學校教育ハ農作ノ豐凶、商工業ノ盛衰等ニ因リ、毫モ弛張アラシムベカラズ。然レドモ之ガ財政ノ基礎ヲ確立スルニアラザレバ、之ガ影響ヲ蒙ル虞ナシトセズ。而シテ是等不慮ノ影響ヲ避ケ、且市町村費ノ負擔ヲ輕減スルノ一方法トシテ學校基本財産ノ増殖ヲ計ルヲ以テ、教育上ノ一大急務トス。是ヲ以テ明治三十九年十二月、訓令甲第七十七號、小學校基本財産蓄積竝管理規程準則ヲ發布シ爾來之ガ準則ニ基キ、施設ヲ爲シツヽアリト雖、而モ現時ノ狀況ハ、僅ニ其端緒ヲ啓キタルニ過ギズシテ、豫期ノ目的ヲ達スルコト、前途尙遼遠ナリトス。益小學校基本財産ノ増

殖ヲ企圖シ、土地ノ情況ニ依リ、同準則第二條蓄積方法ノ内容ヲ擴充シ、將來其ノ財産ノ收利額ノミヲ以テ、市町村ノ教育費ヲ支辨シ得ルニ至ラシムルヲ期シ、學校維持ノ基礎ヲシテ、愈強固堅實ナラシムルコトニ勉ムベシ。基本財産蓄積ノ實行ニ當リテハ、蓄積豫定表ヲ作製シ、戸主會若ハ父兄會等ニ於テ、基本財産蓄積ノ緊要ナルコト、及方法等ヲ村民ニ周知セシメ、一致協力、興味ヲ以テ之ニ當ラシムル樣指導スルヲ要ス。基本財産蓄積上、當事者ノ最注意ヲ要スベキハ確實ナル管理方法ヲ立テシメ、監督ヲ嚴ニスルコト是ナリ。若シ其レ此點ニ缺クル所アラムカ、他日之ガ爲ニ紛擾ヲ惹起シ、之ガ影響ノ及ブ所甚大ニシテ、中途ニシテ蹉跌ヲ來シ、容易ニ挽回シ得ザルノ悲境ニ陷ルコトナキヲ保セズ。一層ノ留意ヲ要スル所ナリ。

一、内容ノ充實ヲ期スベシ。

兒童教養上特ニ注意ヲ要スルハ、其ノ精神教育ニ在リ。今ヤ國運益發展シテ、國民ノ責務愈重大ナルヲ致セリ。故ニ教職ニ在ルモノ、宜シク時勢ノ進運ニ鑑ミ、修養怠ラズ、躬行實踐、範ヲ兒童ニ示シ、以テ高潔ナル人格ノ養成ニ努メ、其ノ責務ヲ完ウスルニ適セシメザルベカラズ。

學校長及教員ハ、教育ニ關スル勅語及戊申詔書ノ聖旨ニ基キ、大ニ兒童ノ德性涵養ニ力ヲ竭シ、殊ニ忠君愛國ノ志氣ヲ鼓舞シ、敬神尊祖ノ念ヲ敦ウシ、益國民道德ノ

特長ヲ發揮セシムルト共ニ、儉素勤勉ヲ好ムノ美風ヲ作興シ、以テ聖旨ノ貫徹ニ努力スベシ。

敎授上一般ノ缺點トスル所ハ、往々形式ニ拘泥シテ、時間ヲ空費シ、敎授事項繁多ニシテ、確實ヲ缺キ、練習復習ヲ等閑視シテ、知識技能ノ忘却ヲ來シ、若ハ兒童ノ知識實用的ナラザルガ爲、比較的高尙ノ理論ヲ知ルモ、日常須知ノ事項ヲ辨ゼザルガ如キモノアルニ歸スルガ如シ。故ニ敎員ハ常ニ茲ニ注意シテ、各敎科ノ敎授要旨ヲ明ニシ、敎材ヲ精選シテ、其主眼トスル所ヲ失ハズ、敎授ノ効果ヲシテ、確實ニシテ、且適當ナラシメムコトヲ期スベシ。

一小學校ヲ以テ敎化ノ中心タラシムベシ。

學校長及敎員ノ本務ハ、直接當該學校ニ於ケル內容ノ充實ヲ期スルニ在リト雖、兼テ其地方ニ於ケル文化ノ先導者タルヲ自覺シ、事ノ輕重本末ヲ慮リ、市町村ノ當事者ト協力シ、社會敎育ノ普及發達ヲ圖ルベシ。抑小學校敎育ノ効果ヲ完ウセシメンニハ、其ノ卒業後ニ於ケル靑年ノ指導ニ努ムルト共ニ、一般父兄ノ知德ヲ啓發スルヲ以テ、其ノ要務トス。サレバ其ノ地方ノ狀況ニ依リ、適當ノ團體ヲ組織シ、學校長及敎員之カ指導者トナリテ、其ノ智德ヲ進メ、醇厚ノ俗ヲ馴致シ、一般ノ福利ヲ增進スルコトヲ努メザルベカラズ。近時靑年會·同窓會·父兄會·母姉會等ノ設ケアリ

テ、各有益ナル事業ヲ爲スモノ著シク增加シタルハ洵ニ喜ブベキ現象ナリトス。宜シク之ヲ善導助長シテ、益其ノ實績ヲ擧ケムコトニ努メ、小學校ヲ以テ教化ノ中心タラシムルノ理想ヲ現實セムコトヲ期スベシ。

中等教育

**中等教育**（師範教育・高等普通教育・實業教育）　現在の中等諸學校の基礎は、多くこの期に築かれ、著るしき發達を呈せり。即ち前期の終りには、師範學校・中學校各一校なりしものが、この期の終り明治四十四年には、師範學校二、中學校本校四、分校四、高等女學校縣立一、郡立二、市立一、實業學校中、農業縣立一、郡立一、私立一、工業學校二、商業學校市立一、となり、生徒の數亦著しき增加を示せり。明治二十九年四月、桐生・伊勢崎に實業學校創設せられたるを始として、三十年四月には、中學六分校の設置を見、明治三十二年には、吾妻郡中之條町に郡立農業學校設立せられ、明治三十三年四月より、縣立移管となり、亦群馬縣立高等女學校を高崎に設置せられ、明治三十五年四月より、群馬縣女子師範學校設立せられて、明治三十六七年頃は、縣立學校整理に關する調査は、縣會の問題となり、調査の結果、中學校二本校を分校となし、伊勢崎染織學校を桐生織物學校に合併すること、なり明治三十八年には、師範學校二、中學校四、同分校四、高等女學校一、工業學校一農業學校二を數ふるに至れり。

而も時局の影響は、益中等教育振興の必要を認め、明治四十一年には、高崎市に市立高崎商業學校、勢多郡に郡立勢多農林學校、山田郡に郡立高等女學校、明治四十三年四月には、前橋市に市立高等女學校、翌四十四年には、北甘樂郡富岡町に郡立實科高等女學校の設立を見るに至れり。實に此期は中等教育勃興時代にして、從つて縣立各種學校の學則は勿論、縣立學校統督に關する規程も亦多く、この期に整備の域に入れり。明治三十四年六月二十一日、訓令第百六十三號、縣立學校職員服務規程、明治三十八年八月十八日、訓令甲第七十一號、縣立中學校高等女學校實業學校職務規程、明治三十九年七月十三日、訓令第六十三號、縣立學校校務處理に關する件卽ちこれなり。

## 第三期　明治末年より現時に至る

日露戰役後、我國民思想の動搖を起したる中に、大正三年、勃發したる歐洲の大動亂に依り、愈その動搖を繼續したれば、教育も亦この時勢に適應すべき制度改善の必要を生じ、大正二年六月、勅令を以て教育調査會官制を公布せられ、大正六

年九月、之を廢し、臨時教育會議を公布し、教育全般に亙り調査せしめ、國の教育方針を確定したり。即ち本期は、初等教育・高等普通教育・大學教育・專門教育・師範教育・視學制度・女子教育・實業教育・通俗教育・學位制度に分ち、調査研究し、その決議に基き、各種の教育制度に改善を加へたる時期なり。されば本縣も亦その主旨を奉じて、施設奬勵する所ありき。

**初等教育**

初等教育は教育方針に關する訓令を四大綱領とし、これが實績を擧ぐるに、普通教育奬勵規程を二回まで改正し、教育資金使用規則を改正し、教育資金使用規程（大正四年八月縣令第四十六號）を發し、小學校設備金の貸付は、教員の疾病療治料、學事關係者の奬勵費に充つることゝし、專ら教育の實質向上に努めたり。

**中等教育**

前期に於て根柢を築かれたる本縣の中等教育は、益〻振興の域に進めり。明治四十四年十一月七日規定せられたる、公立私立實業學校及高等女學校補助規程は、大正三年に至り、改正を加へらるゝに及び、中等教育振興の氣運に促進せられ、大正四年、伊勢崎町に實科高等女學校設立あり。之に次ぐに、館林町・藤岡町・吾妻郡澁川・太田・沼田・碓氷郡に郡立又は町立の女學校、利根郡・佐波郡に郡立農業學校、桐生に町立中學校、澁川・館林に中學校の設立を見たり。是等は郡制廢止を機會

として、悉く皆縣立に移管せられたり。この外市町村立の中等學校に、伊勢崎町・前橋市に商業學校、高崎市に實踐女學校、綿打村・大間々町に實科女學校、境町に實科高等女學校あり。

明治四十五年二月には、中等學校奬勵規程を設け、卒業生中操行善良學術優等なる者、及び操行特に善良なる者に、知事より賞狀を授與して、之を奬勵せり。大正元年十二月には、縣令第二十七號を以て、群馬縣立學校基本財産蓄積竝管理規程を定めて、從前各學校別蓄積管理規程を廢せり。本規程により蓄積すべき要項は左の如し。

(イ)縣立學校入學受驗手數料又は入學料。
(ロ)縣立學校生徒及び兒童の授業料、收入額の百分の五十以內。
(ハ)縣立學校の製作品、竝に生産拂下代金、及び作業資金より生ずる利益金。
(ニ)縣立學校不用品賣却代。
(ホ)縣立學校演習林、及び植林地より生ずる收入金。
(ヘ)基本金より生ずる利子。
(ト)指定寄附金。

この蓄積金五百萬圓に滿つるを限度とす。但し五十萬圓に達したる時は、之より生ずる利子を以て、縣立學校費に充用することあるべし。但し但書の費用に達する迄、縣費より毎年三百圓以上を補充す。大正十四年九月一日、現在の基本金二十七萬九千六十五圓なり。

中等教育の內容の改善を圖るために、大正元年度より、縣費を以て三日乃至五日間に亙り、毎年教科の一科乃至二科を選び、管下中等教員在職者のために、講習會を開き、翌大正二年より同七年まで、縣費を以て毎年五六人宛、縣立學校職員中學術研究の爲めに、管外出張を命じ、特殊研究に從事せしめ、更に最近大正十一年度より、專門家を囑託し、各學校を視察せしめ、直接指導せしむる等の方法を採れり。

社會教育

本縣に於ける社會教育の施設は、この期に始まるが如し。明治四十五年四月二十六日、縣令第三十二號を以て、通俗教育奬勵規程を定む。該規定は學校教育施設以外に於て、國民一般に對し、通俗平易の方法により教育を行ふを通俗教育の要旨とし、縣郡市教育會にして、通俗教育の施設をなしたるものに對し、奬勵金を交附する規定なり。之を我國に於ける社會教育發達に徵するに、本縣必しも

後れたりと云ふべからず。由來我國に於ける社會教育の發達は、甚だ輓近に屬し、之が發達の急務を認めて、文部省が通俗教育調査委員會官制を公布したるは、明治四十四年五月十七日にして、この奬勵規程發布より一年前なり。この間にも本縣當局は、明治四十四年六月、彼の本縣教育の四大方針として、小學校をして社會教化の中心とすべき方針を發表して、社會教育に留意する所ありき。又明治四十五年には、私立上野教育會總會に向て「通俗教育施設をして、最有效ならしむる方法如何」との諮問案を提出し、その答申を求めたるなど、頗る留意する所ありき。大正三年、歐洲大戰勃發し、その戰局の開展と共に、社會教育の必要一層深刻となるに至り、大正六年九月二十日、勅令第百五十二號を以て公布せられたる臨時教育會議は、通俗教育の改善に關して、詳細なる決議を答申せり。文部省はこの答申に基き、大正八年六月、文部省分課規程を改正し、普通學務局の第四課に於て、通俗教育の事務を分掌することゝせり。是れより我國の社會教育の施設は、積極的に企劃せられ、本縣亦この意を體して、社會教育施設を完備し、その効果を徹底せしむるために、大正七年度より、先づ縣廳學務課内に青年指導員をおき、大正九年四月より、縣社會教育主事をおき、而して各郡に、郡費を以て青年指導員

後に社會教育主事と改む　の設置を奬勵し、大正十二年には、各郡これが設置を見ざる所なきに至れり。而して縣社會教育主事は、國民精神作興に關する件、勤儉奬勵、青年男女の教化、その他感化院、盲聾啞教育等、社會教育一切に關する事業を管掌して、社會教育の振興を圖るに在り。是れより本縣の社會教育は愈振興し、國體精華の闡明、國民思想善導の期待、文化的施設事業の企劃及び普及、經濟的施設事業の奬勵、及能率增進、體育の向上、男女青少年の訓練等、多方面に亙り施設する所あり。その成績の見るべきもの亦少からず。

## 第二節　御眞影御影及教育勅語

本縣に於ける御眞影は、明治二十一年十月二十五日、群馬縣師範學校、及び群馬縣尋常中學校二校に於て奉戴せるを嚆矢とす。是れより先き、明治二十一年五月、本縣にては、學校生徒禮式要項を頒ち、七月三大節小學校祝賀式次第を訓令し、別に無窮の聖德を頌し、忠愛の心情を喚起したき趣旨を以て、天皇・皇后兩陛下御眞影御下賜を、宮內省へ上申し、許可せられたるなり。翌廿二年十二月、更に管內小學校に於ても、同樣の趣旨を以て、同じく上申に及びたるに、同二十三年三月を以て、各郡一校の割合にて、御聞屆けあり。此時御下賜せられたる各郡小學校名は左の如し。

一東群馬南勢多高等小學校　　一北甘樂高等小學校
一西群馬片岡高等小學校　　一碓氷高等小學校
一綠野多胡高等小學校　　一吾妻高等小學校
一利根北勢多高等小學校　　一山田高等小學校
一新田高等小學校　　一邑樂高等小學校

一佐位那波高等小學校　一南甘樂高等小學校

計十二校

爾來新に設置せられ、或は設備完整し、他校の模範となすに足ると認めたるものには、漸次御下賜となり、遂に明治二十八年九月七日、訓令甲第九十號を以て、御眞影復寫奉置手續を制定せり。爾來大正十三年に至る三十八年間を經て、現に奉戴せる御眞影及び御影は左の如し。

（一）天皇・皇后兩陛下の御眞影を拜戴せる學校數

| （縣立學校） | （市立中等學校） | （市町村立小學校） | （合計） |
|---|---|---|---|
| 二六 | 一 | 一八六 | 二一三 |

（二）昭憲皇太后の御眞影を拜戴せる學校。

| （縣立學校） | （市町村立小學校） | （複寫） | （合計） |
|---|---|---|---|
| 一二 | 五九 | 四九 | 一二〇 |

（三）天皇陛下が皇太子に在らせられたる時の御影。

| （縣立學校） | （市町村小學校分教場） | （合計） |
|---|---|---|
| 一五 | 一 | 一六 |

御眞影拜戴學校に於て、萬全を期するために、奉安所建設につき、大正四年九月二十五日、依命通牒を以て、內務部長より各郡市長に宛て、徒に巨額經費を投ずるが如きは、却つて聖旨に副ふ所以にあらざるを以て、質實堅牢を旨とし、適當に設備する等、之が通牒を發せり。

教育に關する勅語謄本竝に訓示

明治二十三年十月三十日を以て、御下賜せられたる教育に關する勅語、及び文部大臣の訓示は、同年十二月二十二日、各〻五百五十八枚を文部省より下附せらる。由つて本縣は同月二十五日、左の訓示を附して、縣下各學校に交附せり。

明治二十三年十月三十日、教育ニ關シ下シ賜ヒタル勅語ハ、嘗ニ教育ニ關係スルモノ、ミナラズ、一般人民ニ於テ厚ク服膺シテ、聖慮ノアル所ヲ奉體シ、以テ一日モ之レニ報ヒ奉ランコトヲ忘ルベカラズ。今文部大臣下附ノ謄本ヲ頒ツニ當リ奉讀心得ヲ示シテ、佩服スル所アラシム。

勅語奉讀心得

一勅語奉讀式ハ每年三大節、冬季・夏季休業後、授業始、卒業證書授與當日、及其他學校式日ニ於テ執行スルモノトス。

一勅語奉讀式ニハ、御眞影下賜ノ學校ニ於テハ、先ヅ天皇陛下奉拜ノ式ヲ行フベシ。

一勅語ハ校長若クハ校長補（不在又ハ缺員ノトキハ首席教員）之ヲ奉讀シ、一同靜肅謹聽スベシ。

一勅語奉讀式ヲ了レバ、可成職員ハ道德教育、及國民教育ニ關スル講談ヲナスベシ。

一勅語奉讀式ニハ可成生徒ノ父兄親戚保證人等ヲ會集セシムベシ。

# 第三節　初等教育と幼稚園教育

## 第一項　小學校

### 一　學制時代

明治五年八月三日文部省は學制を頒布して、學區を定め、全國を分ちて八大學區となし、毎區に大學校各一箇所を置き、又一大學區に督學局一箇所を設けて、學校を監督し、一中學區に學區取締十名乃至十三名を置き、一名に二十或は三十小學區を分擔せしめ、地方廳に學務主任の吏員を置きて部内の學事を掌らしめたり。

舊學廢止の布達及び新設立の告諭

此學制一度頒布せらるゝや、本縣令青山貞は、當時存立せる舊學、卽ち博喩堂（前橋）・游藝館（高崎）・造士館（安中）・學習館（伊勢崎）・沼田學校（沼田）の五校に、廢學の布達を出し、次いで左の告諭を發せり。

夫レ人タル者、自ラ其身ヲ立テ、其産ヲ治メ、其業ヲ昌ニシテ、以テ其生ヲ遂ル所以ノ道ハ、第一身ヲ修メ、智ヲ開キ、才藝ヲ長ズルニアリ。是人生一大緊要事ナリ。智

ヲ開キ、才藝ヲ長スルハ、必ズ學文ニアラザレバ能ハズ。是レ各地學校ノ設アル所以ニシテ、日用言行書算ヲ初メ、士官・農商・百工・技藝、及法律・政治・天文・地理・醫療等ニ至ルマデ凡ソ人ノ營ム所ノ事ハ、都テ學問ニ非ルハナシ。人能ク其天稟ノ性質ト才智ノアル所ニ應ジ、勉勵シテ之ニ從事シ、而後初テ生ヲ治メ、產ヲ興シ、業ヲ昌ニスルヲ得ベシ。サレバ學問ハ身ヲ立ルノ財本トモ云フベキモノニシテ、人タル者誰カ學バズシテ可ナランヤ。自今一般ノ人民、必ズ邑ニ不學ノ戸ナク、家ニ不學ノ人ナカラシメンコトヲ期ス。人ノ父兄タルモノ、宜ク此意ヲ體認シ、其愛育ノ情ヲ厚クシ、其子弟ヲシテ必ズ學問ニ從事セシムルコト肝要ナリ。依之今般御頒布相成タル學制ニ基キ、凡縣內ヲ三中學區ニ分チ、一中學區ノ下ニ、各二百十小學區ヲ置キ、縣內一般概計六百三十小學トナル。然レドモ亦是ヲ一朝ニ施スベキニ非ルヲ以テ、姑ク地方ノ適宜ニ任セ、一小區每ニ二三小學ヲ興シ、漸ヲ追ヒ歲ヲ經テ、以テ全數ニ至ラン。夫レ各區ニ於テ、速ニ此意ヲ領シ、所在ニ學校ヲ開立シ、能ク時世ノ景況ニ通ズル教師ヲ雇ヒ、廣ク少年ヲ教育センコトヲ要ス。有志ノ輩、時世ノ文明ニ進歩スルノ美事タルヲ知ルモノアラバ、協力會議シ、多少ニ不拘出金シ、以テ校費ニ充ンコトヲ要スル也。戸長・副戸長ノ者能ク此趣旨ヲ注意スベシ。

然れども管民固陋舊習に安んじ、容易に、此勸奬に應ずるの風も見えざれば、縣令

は更に在職の官吏をして、月給の五分の一乃至十分の一を、官等に應じて出金せしめ、率先模範を示し、管民をして感悟せしめんとせり。此時布達せる告諭文は左の如し。時は五年十月なり。當局の苦心容易ならざりしを知るべし。

學校ノ要具タル、此程相達候御布告ノ如クナレバ、今更論ヲ待タズ。故ニ今般當縣下各小區ヲ合セ、先一小學校ヲ設ケ、子弟教育ノ道ヲ開キ、漸次管内一般ニ普及セントス。其授業料ハ御規則ニ基キ、毎戸ニ分課スト雖モ、從來ノ學校古制ニシテ、其額廢用ユル能ハズ。器械亦其用ニ供スルナシ。固ヨリ小學ハ人民自費タルベキノ道理ナレドモ、之ヲ毎戸ニ賦課シ創立セントスルハ、貧富同ジカラズ、或ハ行ハレ難ルベシ。依テ其情實ヲ陳シ、政府ニ請求シ、扶助金若干ヲ賜フ。然レドモ有限ノ金ヲ以テ、無涯費用ニ供ス。其不足勿論ナルハ宜ク察知ス可シ。此ニ於テヤ有無ヲ通ジ、區内子弟ノ學費ヲ供給シ、人生天賦ノ知識ヲ發達セシメザル可ラズ。是人間交際上缺ク可カラザルノ通義ニシテ、文明各國皆然リ。故ニ先當縣内ノ官員ヨリモ、各自出金扶助ヲ加フ。固ヨリ職掌ヲ以テ爲スニ非ズ。此ニ移住スレバ、供給ナスベキノ通義ナレバナリ。況ヤ區内ノ人民、此學ヲ扶ケザルベカラズ。有志ノ輩、夫レ此ヲ體シ、協心戮力、費用ヲ供給シ、以テ開化進歩ノ基本ヲ創立セン事ヲ欲ス。

此段及告諭候也。

本縣小學校設立の嚆矢

かくて第一に設立せられたるは、前橋町の第一番小學校なり。之を本縣小學校の嚆矢とす。時に五年十一月なり。是れより學務官吏各所に出張し、富民を說諭し、建設を促したれども、更に應ずる者なし。翌六年一月に至り、勢多郡水沼村農星野長太郎、奮然官吏の說諭に應じ、償金五百圓を出し、尙同志を募り、共に協議して建設を謀る。本縣之を嘉し、其擧を助け、一小學校を設立す。三月に至り、吾妻郡原町戶長山口六平、亦之に倣ひ、一校を開設す。此三校の建設は、一般縣民に多少感奮の機會を與へたりと雖も、一方經費問題を疑懼すると、他方には人民改學の旨趣を悟認せず。加之陋習頑固の儒生等、百般誹謗其建設を阻碍するあり

教育補習小學校の開設

て、縣當局豫定の建設は、遲々として進まず。是に於て河瀨縣令は、此管下の形勢に鑑み、先づ敎員養成の急務を思ひ、小學敎員傳習所を前橋町舊前橋縣學校に起し、敎員速成に努め、又管內人民稠密の地の有名の富者を、本廳に召集し、學校設立を慫慂する所ありたり。是れより興學の風翕然として盛となり、管下次第にその設立を見るに至れり。

同六年十一月十六日、本庄驛暢發學校に、全管轄正副戶長を會同せしめ、學務概

則及び小學校掟書を議定せり。前者は中學本部小學・暢發學校・學事取扱・學費等に關する通則にして、後者は小學校の生徒學科教則・休業日・教員・保護役等に關する規定にして、翌年一月より施行せり。而して此年十二月十八日、兒童就學奬勵の告諭文を布達し、就學を奬勵せり。その告諭文は左の如し。

近古ノ弊風ニテ、學問ハ士以上ノ事ニテ、農工商ニ於テハ徒ラニ驕慢ヲ生ジ、産業ヲ破リ、全ク無益ノ事ト看做セシハ、其教授ニ順序法則ナキガ故ナリ。

御維新以來、百般ノ弊習御釐正ニテ、四民ノ差別ナク、智識秀絶ノ者ハ名ヲ掲ゲ、家ヲ興ス可ク、今ノ四民ハ昔時ノ四民ニ非ザルハ、皆人ノ知ル所ナラズヤ。然レドモ學問ニ勉勵スルニ非レバ、其天賦ノ智識ヲ啓發スルコト決シテ能ハザルナリ。故ニ昨壬申年、學制ヲ御發行ニ相成、有益實用ノ教則ヲ以テ、一般ノ人民ヲシテ蒙昧ヲ啓キ、智識ヲ發セシメ、各自ラ身ヲ立テ、家ヲ興サシム可キ、厚キ御布告モ有之、速ニ朝旨ヲ奉ジ、追々小學校ヲ設立シ、子弟ヲシテ疾ク就學セシメシ者ハ、未ダ數月ヲ經ズト雖トモ、實ニ驚嘆ス可キ進歩ヲナセリ。其父兄ニ於テ、孰レカ之ヲ感泣欣戴セザランヤ。其學業ヲ成就シ、國器トナル、年ヲ期シテ竣ツベキナリ。若シ父兄タル者、子弟ヲ愛育スルノ情アル者ハ、皆欣々躍々トシテ、所在ニ學校ヲ興シ、就學セシメ

サル可ケンヤ。然ルニ此際ニアタリ、演劇歌舞妓ニ耽溺シ、興ス可キ學校ヲモ興サス、教フ可キ子弟ヲモ教ヘズ、至仁ノ朝旨ヲ奉戴セズ、一時ノ遊觀ヲ貪リ、許多ノ資材ヲ浪費シ、却テ興學ノ盛擧ヲ誹謗スルノ聞エアリ。何ゾ其愚ノ甚シキヤ。禽獸スラ尚其子ヲ愛養スルヲ知ル。父兄トシテ子弟ヲ教育スルヲ知ラズ。禽獸ニモ不及コト遠シト謂フ可シ。天然ノ良知ヲ固有セシ子弟ヲシテ、教育スベキ期節ヲ誤リ、終ニ無學蒙昧ノ一癈人トナシ、瓦礫ト倶ニ朽腐セシメントス。之レヲ人ノ父兄ト謂フ可キヤ。實ニ見聞ニモ堪ヘ忍ビザル事ナリ。故ニ追テ可及布達旨モ候得共、豫メ申諭シ置候條、各區戸長ハ勿論、重立候者、能々此意ヲ體認シ、毎戸無洩懇切ニ可告諭者也。

更に翌七年九月、大區長會同の際諮問して、その意見を徵し、前年則定したる學務概則及び小學校掟書を改定する所ありき。かゝれば、管民次第に新學制の精神を體認し、小學校の設置、一歳の内に二百餘を增加し、その數實に五百九十六校に及べり。然れどもその資金の乏しきにより、校舍の新築は稀にして、多くは舊寺院を假用せり。此の如く建學の議、既に闔管下に普及したれば、本縣は更に勸奬激勵、生徒の志氣を作興し、父兄の情誼を振起せんとし、此年十二月、生徒試驗表

生徒試驗表

なるものを調製し、管下に頒布せり。その方法は、本年第十月より第十二月を限り、道路の險易、里閭の遠近を較し、一里乃至二三里に生徒を便宜の地に徵集し、下等學科四級以上は、年齡を問はず五級にし、十五歲以下六級にし、十三歲以下七級にし、十歲以下の者を節減し、關係正副戸長及び一村一名の村吏臨席して、試驗の上、優等成績者には、乃ち賞品を與へ、畢りて區長・村吏・教員を說諭し、以て教育振作の旨を體認せしめ、又別に就學・不就學の人員を調査し、區內の學事の景況をも附記し、是等を表示し管內に公布したるなり。これ所謂生徒試驗表なるものにして、管內學事奬勵法の端緒なり。此年復大區長會議の贊同を得て、小學校基本金蓄積法を發表せり。蓋し小學校經費は、學制に於ては民費に依るを原則としたれば、多く區內有志の寄附に俟ちたる如きも、かくては學校維持上頗る憂慮すべきものありたるにより、之が應急の方途を講せんとしたるなり。是れ小學校基本金蓄積法制定の起原たり。その文に曰く、

小學校基本金

夫レ學校ノ永繼方ニ於ケルヤ、沈思熟慮無ルベカラザルハ、各區ノ飽クマデ領知スル所ナル可シ。自今南北兩部ノ校、六百餘ノ設置ニ至リ、然シテ永續方ヲ問フ時ハ僅々數十校ニスギズ。差向キ永續ノ資ハ有志ノ寄附ヲ渴仰スルノ外、未ダ良法

アルヲ聞カズ。抑管内廣シト雖モ所有ノ財産ハ限アリ。故ニ之ヲ出シテ學費ヲ資ントスル者、先ヅ稀少ナリト知ルベシ。是ニ於テカ益永續方法ニ急ナルモノアリ。某等曾テ之ヲ講究スルニ、各區ニ於テ協議ヲ遂ゲ、所有ノ反歩ニツキテ毎年些少ヲ課賦シ之ヲ積ムニ如カズ。然リ而シテ課出スルモノ、穀粟金錢ヲ問ハズ、地産ノ適宜ニ任セ、課賦スル所定額ヲ立テズ、土地ノ肥瘠、民戸ノ貧富ニ隨ヒ、畢竟協議ノ歸着ヲ主トシ、今年之ヲ積ミ、又來年ニ至リ、三年・五年ヲ經テ、十年・二十年ニ至ラバ、巨大ノ額ニ至ルベシ。然シテ之ヲ取扱フノ法、區長・戸長、其他身元アル者ニ主管セシメ、毎年積ム所ヲ總計シ、帳簿ニ登記シ、其遣ヒ拂亦差引勘定ヲ明晰ニシ、縣廳ノ照査ニ供ヘ、檢印ヲ乞ヲ定規トシ、且ツ此金蓄タルヤ、融通シテ子息ヲ生ゼシム亦妨ナク、必ス之ヲ身元慥トル者ニ託シ、證人ヲ立テ、相應抵當品ヲ出サシメ貸付置キ、抵當品・證書共ニ之ヲモ縣廳ニ願ヒ、預ケ置モノトナシ、即チ積ム所ノ額ハ共有物ナレバ、一人一箇ノ我儘ニ費ヤス可ラザルルハ勿論ナリ。

然レドモ積ンデ巨大ニ至ルノ日ハ、其遣拂獨リ學校ノミナラズ、區内ノ人民、水火盜賊不慮ノ災ニ罹リ、一時活計ヲ失フ者、或ハ貧困流離ノ子弟アリテ、學ニ就ク能ハザル者等コレアル時ハ、協議ノ上、縣廳ニ申請シ、扶助ヲモナスベシ。夫レ斯ノ如クナレバ、學校永續ノ法自ラ存在シテ、古所謂義倉ノ意モ亦此ニ外ナラザルベシ。

右頒布の結果早速着手したる者數區ありきと云ふ。翌九年八月、學區取締・正副區長等を會し、曩に制定したる學務概則を改定し、實際に適應せしめたり。是れ翌十年三月制定の各種學校概則なり。則ち小學校教則・女兒小學校教則・村落學校概則・變則夜學校概則・工女餘暇學校概則なり。當時の縣當局が、時代の趨勢に鑑み、法令施設をして、努めて土地の事情に適應せしめんとしたる跡、歷々徵すべし。此概則に據り、明治十年中に設立せられたるもの、村落小學二、女子小學一、變則夜學五、工女餘暇學校一ありきと云ふ。

明治九年八月、熊谷縣栃木縣を分合して、群馬縣を置くに及びて、栃木縣に屬したる第四十二番の中學區（新田・山田・邑樂）を加へて、小學區數總て八百十三、小學校數五百四十四となれり。明治十年九月本縣學則を改正領布す。是れ嚮に明治六年十一月に創定せられたる學務概則は、其後七年九月・九年八月兩度の改正ありたれども、尙改正の必要ありて、此月更定頒布を見るに至りしなり。此原則は明治の初年に於ける本縣教育の一班を知るには最適當なる資料たるを以て、左に其全部を抄錄せり。此月又別に小學校授業法・小學訓導心得・小學生徒心得を編成して、縣下に頒てり。小學校授業法は教師の教場心得、及各學科授業法にして、小學

校訓導心得は小學校教員服務規律とも見るべく、小學校生徒心得は生徒として家庭及學校内に於ける動作に關する心得を示したるものにして、當時に於ける教授訓練の方針方法、一に之に準據したるものなり。その片鱗は傳はりて、現時の教育に存するを見る。



群馬縣學則

第一章　中學ノ事

第一條　本縣ハ第一大區内ニ位シ、管下ヲ區分シテ四中學區トス。其本部ノ位置左ノ如シ。

| | |
|---|---|
| 第十七番中學 | 上州群馬郡前橋町 |
| 第十八番中學 | 同　同　高崎驛 |
| 第十九番中學 | 同　甘樂郡七日市町 |
| 第四十二番中學 | 同　新田郡太田町 |

第二條　中學校ハ毎中學區ニ設立スベシ。

第三條　中學教員ハ當分師範學校ヨリ派出在勤ナサシムベシ。但月俸旅費ハ當分官ヨリ之レヲ給ス。

第四條　中學校維持方法等ハ、總テ其中學區內ノ協議ヲ以テ、適宜方法ヲ設ケ、可否ノ裁決ヲ官ニ請ヒ、許可ヲ得テ之レヲ行フベシ。

## 第二章　小學ノ事

第一條　四中學區ヲ分ツテ、小學區ヲ定ムル左ノ如シ。

第十七番中學區分ツテ　二百三十七小學區トス。

第十八番中學區分ツテ　二百四小學區トス。

第十九番中學區分ツテ　百六十三小學區トス。

第四十二番中學區分ツテ　二百九小學區トス。

第二條　小學校ハ毎小學區ニ設立スルヲ目途トスト雖モ、生徒通學ノ便ヲ缺ザルニ於テハ、二三小學區聯合シテ、確ク一校ヲ維持スルヲ良トス。

第三條　學費備ハザルカ又ハ地形ノ便宜ニ據リ、已ムヲ得ザルモノハ、最寄ニシテ體裁略備リタル小學校ノ分校トナシ、教員保護役等之レヲ兼務シ、學資ヲ一途ニ會計スルモ其便宜ニ任ス。

第四條　女兒小學校ハ、學齡女子ヲ就學セシムルガ爲ニ之ヲ設ク。教則ハ尋常小學科ニ聊斟酌ヲ加フルモノトス。但該校ハ尋常小學校所在ノ地ハ、普ク設立スルノ目途ト雖モ、實際行ハレ難キノ事情アルヲ以テ、當分市街宿驛ノミ之レヲ設ク。

第五條　邊陬ニシテ、尋常小學校ヲ設ケ得サルノ地ニ於テハ、村落小學校ヲ置クヘシ。

第六條　變則小學校夜學校ハ、庶民學校ノ階梯ニシテ、市街村落ヲ問ハス、適宜ノ地ヘ設クルモノトス。

第七條　工女餘暇學校ハ、大渡・關根・水沼・伊勢崎、其他各工場ヘ設クルモノトス。

第八條　小學教員ハ訓導、或ハ訓導補ト稱シ、學業ノ優劣ニ因リ之ニ等級ヲ附シ、囑任・解任共、本縣ノ辭令ヲ以テ、然シテ學校ヘ在勤ナサシム。其等級月俸左ノ如シ。

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| (一等訓導)三拾圓ヨリ二拾六圓マデ | (二等訓導)貳拾圓ヨリ拾六圓迄 | (三等訓導)拾五圓ヨリ拾貳圓迄 | (準三等訓導)拾壹圓ヨリ拾圓迄 | (四等訓導)同上 |
| (準四等訓導)九圓 | (五等訓導)同上 | (準五等訓導)八圓 | (一級訓導補)同上 | 一級訓導補心得　七圓 |
| (二級訓導補)同上 | (二級訓導補心得)六圓 | (三級訓導補)同上 | (三級訓導補心得)五圓 | (四級訓導補)同上 |
| (四級訓導心得)四圓 | (五級訓導補)同上 | (五級訓導補心得)三圓五拾錢 | (授業生)貳圓五十錢以下 | |

第九條　小學教員ハ男女ニ拘ハラス、性行方正貞實ニシテ、師範學校ノ免許ヲ請ケシモノヲ任用シ、最任期ハ滿二年トス。其任期中不得已事故ナクンバ、職ヲ辭ス

コトヲ許サズ。

第十條　小學教員ハ概ネ生徒二十五名乃至五十名ニ、一人ノ目途タルベシ。但教員ノ數ハ、授業ノ繁簡（階級ノ多少ヲ云）ニ據リ、斟酌スルコトモアルベシ。

第十一條　訓導ノ外ニ授業生ヲ置キ、以テ訓導ノ授業ヲ助ク。其置ト否ラザルトハ、各校授業ノ繁簡ニヨリ、該校訓導・學區取締・保護役等協議ノ上、之レヲ決シ、其姓名ハ第五課ヘ屆出ベシ。

第十二條　分校或ハ村落學校、變則夜學校、及ビ工女餘暇學校ノ教員ト雖モ、師範學校ノ免許ナキ者ハ訓導タルヲ許サズ。

第十三條　一般ノ人民、男女ノ別ナク滿六歲ヨリ十四歲マデノ者ハ、小學生ト唱ヒ、必ズ就學スベキモノトス。若シ無據事故アルモ、其情狀ヲ上陳セズシテ就學セザルハ、其父兄タルモノ其責ヲ免レザルベシ。

第十四條　小學生タル者ハ、小學科ヲ卒業セザル以內ハ、他ノ學科ヲ學ブヲ許サズ。但授業時間ノ外ハ此限ニアラズ。

第十五條　生徒每級試驗ハ、每歲三月・九月ヲ以テ定期トナシ、每一期一級ヲ卒リ、一歲二級ヲ卒ルヲ法トシ、第五課吏員・師範校教員莅監ス。

第十六條　小學校ノ學資ハ、教員・保護役給料旅費、及費ニ關スル一切ノ經費ニ充

ツルヲ云フ。

第十七條　學資ハ黌ヲ設クルノ初ニ當リ、其學區協議維持方法ヲ確定スベキハ勿論ナリ。依テ一般ノ制ヲ立ズト雖モ、其學區内學齡人員百人以下ナレバ、概ネ一歲ノ學費三百圓トス。故ニ一校貳千圓以上ノ資本ヲ立テ、確實ナル增殖方ヲ設ケ、其利益年一割二歩トス。並ニ授業料ヲ以テ、學費ニ充テ、尚不足アレバ、其他ノ適宜ヲ以テ段別・戶口等ニ割賦スベシ。亦學齡人員百人以上ナレバ、隨テ學資ノ多キヲ要セザル可ラズ。因テ百人以上一人ノ學資三圓ト見做シ、一人ヲ加フル每ニ一歲ノ校費三圓ヲ增シ、之ニ應ジテ資本金ヲ增加スベシ。

第十八條　資本金ヲ要スルニ二樣アリ。一ハ有志輩ノ寄附金ニ成リ、一ハ學區内ノ醵金ニ成ル。亦寄附金ニ二樣アリ。一ハ卽時現金寄附、或ハ年賦・月賦ヲ以テ納メ、一ハ學區内協力シテ、資本金ヲ寄附セントスト雖モ、卽時出金ナシ難キノ事情アルニ於テハ、先ヅ寄附ノ金額ヲ定メ、其金ヲ直ニ本人へ貸渡シ、返納ノ期ヲ定メ、利子月一分ヨリ少ナカラズ。ヲ納メシム。學區内醵金ノ方ハ豫メ一定ナシ難シ。專ラ其ノ地ニ就キ便宜方法ヲ設クベシ。

## 第三章　師範學校ノ事

第一條　廳下へ師範學校ヲ設ケ、小學ノ訓導タルベキ者ヲ養成ス。

第二條　師範學校一校長・副校長・幹事各一名ヲ置ク。

第三條　師範學校中ヘ教科講習所附屬小學校各一個ヲ設ク。

第四條　附屬小學校ハ師範生徒竝ニ小學教員ヲシテ授業法ヲ實際學バシムル所トス。

第五條　小學教科講習ハ、師範學本科ヲ歷ズシテ小學教員タル者ヘ、教科書授業法ヲ傳フ。但開業ハ一歲二回トシ、小學定期試驗後ヲ以テ一期七週間トス。

第六條　師範學校教員ハ、一二ノ學科得業ノ者、及ビ大學本部師範學校ニ於テ卒業ノ者、又ハ本縣師範學校卒業生ノ內優等ノ者ヲ以テ之ニ充テ、任期ヲ滿三年トス。任期中不レ得レ已事故ナクンバ職ヲ辭スコトヲ許サズ。

第七條　師範學校教員ノ等級月俸ヲ定ル左ノ如シ。

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| （一等教師） | （一等教師） | （準二等教師） | （準二等教師） | （二等教師） |
| 三拾圓 | 貳拾圓 | 貳拾五圓 | 貳拾貳圓 | 貳拾圓 |
| （準三等教師） | （四等教師） | （準四等教師） | （五等教師） | （準五等教師） |
| 拾七圓 | 拾五圓 | 拾貳圓 | 拾圓 | 八圓 |

第八條　中學校教科講習所附屬小學校共、都テ師範學校教員ヲ分派シテ、其員ニ充ツ。

第九條　師範學校中ニ事務掛三名ヲ置キ、事務ヲ分掌シテ、常務・書籍・會計ノ三掛トシ、任期ヲ滿三年トス。任期中不得已事故ナクシハ、職ヲ辭スコトヲ許サス。

第十條　師範生徒ハ在學二年ヲ以テ、卒業ノ期トナス。

第十一條　講習生徒ハ七週間ヲ以テ、講習一期トナス。

第十二條　附屬小學校生徒ハ、尋常小學生ニ同シ。

第十三條　師範講習附屬小學校生徒共、總テ其學科卒業セサレハ、當局ニ退校ヲ許サズ。

第十四條　各小學校教員乏シキヲ以テ、當分師範學校ニ豫備教員十名ヲ置キ、官費ヲ以テ、一ヶ月學資三圓ヲ給シ、專ラ小學教材授業法ヲ學バシメ、小學教員ノ缺ヲ補ハシム。

第十五條　師範講習生徒共、官費・私費ノ二項トナシ、第二十條・第二十一條ノ順序ヲ以テ徴募ス。

第十六條　官費師範生徒ニ全給・半給ノ二項ヲ設ケ、全給ハ賄費・筆墨紙料・書籍器械ヲ給シ、半給ハ賄費ヲ給スルノミ。官費講習生徒ハ賄費・筆墨紙料ヲ給シ、書籍器械ヲ貸與ス。亦私費トハ學費ヲ自辨シ入學スルヲ云フ。但官費生徒ト雖モ、本條ニ舉ルノ外、旅費ハ勿論一切費用ヲ給セズ。

第十七條　師範生徒ハ八十人トシ、内官費四十人私費四十人講習生徒ハ七十人トシ、内官費五十四人、私費十六人、以上官費生ヲ定員トナシ、私費生ヲ員外トナス。附屬小學校生徒ハ二百人トス。

第十八條　附屬小學校生徒ハ勿論、私費生徒ハ通學ヲ許ス。

第十九條　師範講習生徒・豫備教員、學科卒業ノ後、左ノ制ニ據リ、任期ノ義務ヲ盡サヾレバ、官省府縣ノ採用又ハ管外ニ於テ教員タルヲ許サズ。

在學一ケ月　任期二ケ月

同　二ケ月　同　四ケ月

右ニ倣ヒ一月ヲ加フル毎ニ、二ケ月ヲ增ス。師範生徒滿期在學ノ者ハ、義務三年半、半給生ハ其半バヲ以テシ、私費生ハ三分ノ一ヲ以テ期トナス。若シ事故アリテ義務ヲ盡サヾルニ於テハ、在學中ノ費用ヲ悉皆辨償ナサシム。但癈疾ニ罹ルモノハ此限ニアラズ。

第二十條　師範生徒徵募ハ、豫テ管内ヘ公布シ、左ニ掲グル處ニ合格ノ者ヲ募リ、試驗ノ上入學ヲ許ス。但官費生ハ學業ノ優劣ニ據リ、全給・半給ヲ別チ、全給二十人、半給二十人トシ、半給生入學ノ後、學業ノ進步品行ノ如何ヲ認メ、擢テ之ヲ全給生トナシ、亦私費生ヨリ官費生ニ學ルコトモアルベシ。

一年齢十八歳以上三十五歳以下ノ者。

一普通ノ書ヲ讀ミ得ル者。

一公私用文ヲ綴リ得ル者。

一粗算術ヲ學ビ得シ者。

一性質温厚ニシテ偏癖ナキ者。

一體格強健ニシテ疾ヲナセシ者。

一教育篤志ノ者。

第二十一條　講習官費生徒ハ、人口一萬ニ一名ノ割ヲ以テ之ヲ徴募ス。第五課ニ於テ各學區取締ノ受持場ヨリ出スベキ講習生徒ノ人員ヲ定メ、之ヲ報告ス。其受持場ノ人員奇數アルトキハ、六千以上ハ一萬ト見做シ、一名ヲ出サシム。

第二十二條　學區取締其受持場ヨリ講習生徒ヲ徴募スルノ時ハ、其區正副區戸長學校保護役ト熟議シ、撰擧ノ上其姓名ヲ連署上陳スベシ。

第廿三條　豫備教員徴募ノ節ハ、豫テ其旨ヲ公布シ、試驗ノ上入校ヲ許ス。但試驗ヲ要スルニ、年齢其他師範生徒ト一般ナリ。

第廿四條　師範學校費並生徒費ハ、文部省配付師範學校補助金、及管下ノ賦課金ヲ以テ之ニ充テ、第五課ニ於テ一途ニ會計シ、餘金アレバ翌年ヘ越高トス。

第廿五條　師範講習生徒月費ノ概額ハ、食費貳圓八拾五錢、雜費拾五錢、筆墨紙料壹圓、外ニ師範生徒ハ卒業迄ノ書籍器械代價ヲ豫算シ、三拾六圓トス。之ヲ在學ノ期二十四ケ月ニ平均シ、一ケ月壹圓五拾錢ナリ。因テ師範生徒ハ月費五圓五拾錢トシ、講習生徒ハ四圓トス。

第廿六條　學費ハ一年管下人口一人金三錢ヲ以テ、各小區人口ニ充テ、之ヲ賦課ス。但一歳兩度ニ徵收ス

第廿七條　私費ヲ以テ寄宿寮ニ入ル生徒ハ、食費トシテ金三圓ヲ、每月廿五日迄ニ、身元保證人ヨリ本校事務掛ヘ納メ、三・六・九・十二月ノ末、又ハ退寮ノ際、過不足ヲ精算シテ出納スベシ。但講習私費生徒ハ、一期講習ノ終ニ精算スベシ。

第廿八條　師範教師巡廻ノ節、臨時相設ル講習ノ費用ハ、其區ノ適宜ヲ以テ支消スベシ。但師範教師ノ給料・旅費ノ如キハ此限ニアラズ。

第廿九條　豫備教員ハ一ケ月學資金三圓ヲ給シ、其書籍ヲ貸與シ、小學校派出ノ際返納セシム。

### 第四章　私學ノ事

第一條　私塾・家塾共、本縣ノ許可ヲ得ズシテ、擅ニ開業スルヲ許サズ。

第二條　小學正科ニアラザル私塾・家塾ハ、學齡內ノ生徒、小學全科卒業ノ免狀ナ

クシテ其門ニ入ヲ許サズ。但小學正科授業時間外ハ此限ニアラズ。

第五章 學事ニ關スル役員ノ事

第一條 學區取締ノ人員ハ、當分一中學區五名ヲ以テ目途トス。但當分人選ハ官ニ於テス。

第二條 學區取締準等月俸ヲ定ムル左ノ如シ。

| （準十二等） | （準十三等） | （準十四等） | （準十五等） |
| --- | --- | --- | --- |
| 拾五圓 | 拾貳圓 | 拾圓 | 八圓 |

第三條 公立學校ニハ、毎校必ス學校保護役ヲ置ク。人員ハ其區ノ適宜ニ任ス。

第四條 學校保護役ハ、其區ニ於テ協同撰擧シ、正副區長・學區取締連署シ以テ本廳ヘ上陳スベシ。

第五條 正副區戸長ハ、學事ヲ負擔スルハ更ニ言ヲ俟ズト雖モ、故サラニ學資維持方法・就學等ニ於テハ、專ラ關渉盡力スベシ。

第六章 學區取締小學教員學校保護役月俸之事

第一條 學區取締月俸ハ、委托金ヲ以テ半額ヲ給シ、其餘ハ受持區內ヨリ辨ズベシ。因テ第五課ニ於テ之ヲ徴收シ、一月ヲ初トシ、三ケ月ヅツヲ束ネ、其翌月ヲ以テ一歳四度（一月・四月・七月・十月）ニ支給ス。但轉免其他非常ノ事故アル時ハ、此限ニアラズ。

第二條　小學校教員・學校保護役月俸ハ、該校費ヲ以テ、毎月十七日、教員ハ保護役ヨリ給シ、保護役ハ戸長ノ承諾ヲ得テ受收スベシ。

第三條　月俸ハ一月ヲ以、前後ニ分チ、新任十五日前ニアル者ハ、其全額ヲ給シ、十六日以前ニ在ル者ハ、猶舊等月俸半額ヲ給シ、十六日以後ハ全額ヲ給スベシ。但免職ノ者ハ、其擔當セシ事務引渡ニ付、時日ヲ要スルトモ、其半月内ニアレバ別ニ俸ヲ給セズ。若シ其半月ヲ過ギ、更ニ引渡事務ヲ命ズルトキハ、舊任ノ月俸三十分ノ一ヲ日當トシテ給スベシ。

第四條　上下半月内ニ免職ノモノ再任スレバ、別ニ俸ヲ給セズ。然リト雖モ再任ノ俸、舊任ノ俸ヨリ增ストキハ、其增額ヲ給スベシ。

第五條　轉任セシ者ノ俸ハ、其月十五日以前ニアレバ、新任ノ方ニテ全額ヲ給ス。舊任ヨリ俸ヲ減ズルトキハ、其半月分ノ減額ハ、舊任ノ方ニテ給シ、亦十六日以後ニアリテハ、舊任ノ方ニテ全額ヲ給ス。若シ舊任ヨリ俸ヲ增ストキハ、其半月分ノ增額ハ、新任ノ方ニテ給スベシ。但小學校在勤換モ又本條ニ據ルベシ。

第六條　他ニ出張或ハ在勤ノ者、轉任黜陟スルトキハ、辭令其他ニ達シ、本人承受ノ日ヲ推シ、十五日前後ノ區分ヲ以テ、俸ヲ給スベシ。

第七條　學區取締缺員アリテ、他ノ學區取締之ヲ兼務スルトキハ、其本務ノ俸半

額ヲ增給ス。

第八條　私事ノ爲メ、許可ヲ得テ他行スル者ハ、其月十五日前後ヲ分テ給暇中、月俸ノ半額ヲ給スベシ。但小學教員・學校保護役ハ、各學校資金未ダ充備セザルヲ以テ、不レ得レ已當分之ヲ給セズ。

第九條　病氣引ノ者ハ二ケ月間、月俸全額ヲ給シ、其後ハ三分ノ一ヲ給スベシ。此計算方ハ病氣引十五日前ニアレバ、下半月ヨリ算シ、十六日後ニアレバ翌月ヨリ算スベシ。但小學教員學校保護役ハ前同斷ニ付、已ヲ得ズ當分本條二ケ月ヲ一ケ月トス。

第十條　忌引ハ月俸全額ヲ給ス。

第十一條　公事失錯等ニテ糾問中ハ、月俸全額ヲ給ス。亦私事ニ渉ルトキハ、其月十五日前後ヲ分チ、以テ俸ヲ給シ、其餘ハ之ヲ給セズ。

第十二條　各學校暑中或ハ農繁等、準テ其他ノ都合ヲ以テ休業スルトキハ、教員保護役月俸全額ヲ給スベキハ勿論ナリ。

第十三條　小學教員月俸ハ、等級ニヨリ給額ヲ定ムト雖モ、土地ノ狀況、資本ノ厚薄ニヨリ、適宜斟酌增減スルコトモアルベシ。

第十四條　學校保護役ノ月俸ヲ定ムト雖モ、學資未ダ充備セズ、勢ヒ定額ヲ給シ

難キノ地ニ於テハ減給シ、又人家稠密ノ地ニアリテ、便宜ヲ以他ノ校務ヲ兼ル者ハ、増給スル等、其地ノ協議ヲ以テスルハ妨ゲナシトス。

學區取締月俸

| (準十二等) | (準十三等) | (準十四等) | (準十五等) |
| --- | --- | --- | --- |
| 拾五圓 | 拾貳圓 | 拾圓 | 八圓 |

小學教員學校保護役月俸

| | | | | |
| --- | --- | --- | --- | --- |
| (一等訓導) 三拾圓ヨリ二拾六圓迄 | (二等訓導) 二拾圓ヨリ十六圓迄 | (三等訓導) 拾五圓ヨリ拾貳圓迄 | (準三等訓導) 拾一圓ヨリ拾圓迄 | (四等訓導) 同上 |
| (準四等訓導) 九圓 | (五等訓導) 同上 | (準五等訓導) 八圓 | (一級訓導補) 同上 | (一級訓導補心得) 七圓 |
| (二級訓導補) 同上 | (二級訓導補心得) 六圓 | (三級訓導補) 同上 | (三級訓導補心得) 五圓 | (四級訓導補) 同上 |
| (四級訓導補心得) 四圓 | (五級訓導補) 同上 | (五級訓導補心得) 三圓五拾錢 | (授業生) 二圓五拾錢以下 | (學校保護役) 三圓 |

### 第七章　學區取締小學教員學校保護役旅費ノ事

第一條　學區取締(準等ニ拘ハラズ)小學教員(等級ニ拘ハラズ)學校保護役出張巡廻トモ、管内外ヲ

區分シ、準テ旅中一切ノ費用トシテ、表面ノ通旅費日當ヲ支給スベシ。

第二條　旅費ヲ二分シテ、竝旅行・赴任旅行トナシ、各一日十里詰ヲ以テ、表面ノ日當ヲ支給スベシ。十里以上ノ端里數、滿一里以上ハ日當一日分ヲ給シ、一里未滿ハ切捨トス。

第三條　竝旅行ハ、該所ヨリ片道六里以上ヨリ之ヲ給ス。片道六里未滿ハ第五條ニ準ズ。

第四條　赴任旅行ハ在勤其所ノ當務ニ服スルヲ云。及新任轉任ノ節、本廳ヘ三里以上ヨリ三里未滿ハ一切給セズ。之ヲ給ス。新任轉任トモ、旅費ハ其採用ノ方ニテ給ス。

第五條　該所ヨリ片道六里未滿ノ旅行ハ、總テ出張巡廻ニ拘ハラズ近方派出トシ、片道三里未滿ニシテ、日歸リナレバ、日當ヲ給セズ。一泊スレバ滯留日當ヲ給シ、片道三里以上六里未滿ハ、日歸・一泊ノ別ナク、往返ニテ竝旅行日當一日分ヲ給シ、滯在スレバ、滯留日當ヲ給ス。

第六條　出張先滯在中、片道三里以上ノ地へ派出ノ節ハ、第五條ニ準ジ竝旅行ノ日當ヲ給ス。最三里未滿ノ地ヘ同斷ノ節ハ、滯留日當ノ外一切給セズ。

第七條　巡廻ハ總テ日數ニ應ジ、里程ハ算セズ。竝旅行日當ヲ給ス。近方派出ハ第五條ニ準ジ、滯在ノ節ハ第十條ニ準ズ。

第八條　十里外ヨリ始ル巡廻、及此地ヨリ彼地ヘ移ルトキ、十里以上ノ場所ハ、第二條ニ準ジ竝旅行日當ヲ給シ、卽日巡廻スルトモ、其日ハ別ニ日當ヲ給セズ。最十

里未滿ハ第七條ニ準ジ、日數ヲ以給ス。

第九條　生徒試驗等ニテ巡廻滯在中、旅行ヨリ其場所ヘ日々派出スルモ、日歸ナレバ（里程ニ拘ハラズ）別ニ旅費ヲ給セズ、滯留日當ノミヲ給ス。（一泊以上ハ、里程ニ拘ハラズ第五條ニ準ズ。）

第十條　出張ハ着翌日ヨリ滯留日當ヲ給スベシ。

第十一條　便船或ハ車馬等ニテ、道程日積ヨリ早着スルトモ、第十條ニ準ジ滯留日當ヲ給ス。

第十二條　行旅中、川留・雪支或ハ病氣等ニテ延滯セシトキハ、增日數ノ分、滯留日當ヲ給ス。　川留・雪支ハ其所戶長ノ證書、病氣ハ醫師ノ診斷書ヲ差出スベシ。

第十三條　出張先病氣ニテ事務ヲ盡サズ、許可ヲ得本地ヘ歸ル者ハ、旅費ヲ給シ、重症ニテ一時其地ニ滯在ヲ乞フ者ハ、醫師ノ診斷書ヲ以テ願出レバ滯留日當、及歸着ノ節ハ旅費ヲ給ス。

第十四條　三里以上ノ地ヨリ採用ノ向ハ、着翌日ヨリ拜命ノ前日迄、滯留日當ヲ給ス。

第十五條　免職ノ者、其日ヨリ三十日以內ニ歸鄕願出ル者ハ、表面ノ赴任旅行日當ヲ歸鄕旅費トシテ、其在勤又ハ出發ノ地ヨリ、採用セシトキ居住ノ地マデ（里程制限ハ第四條ニ準ズ。）支給スベシ。

第十六條　免職後歸鄕ノ旅費ヲ受取、歸鄕セザル內ニ再任スル者ハ、旅費悉皆返納スベシ。

第十七條　私事ノ爲メ許可ヲ得テ他行中、免職又ハ死去ノ者モ本條ニ準ジ、奉職ノ地ヨリ採用ノトキ、居住ノ地マデ歸鄕旅費ノ額ヲ手渡トシテ給ス。奉職地ニ於テ死去ノ者モ亦同ジ。

第十八條　學區取締旅費ハ、其受持區內ヨリ辨スベシ。因テ第五課ニ於テ之ヲ徵收シ、一歲四度（一月・四月・七月・十月・）ニ支給ス。小學教員・學校保護役旅費ハ、該校費ヲ以テ其都度、教員ハ保護役ヨリ給シ、保護役ハ該校教員戶長ノ承諾ヲ得受收スベシ。但學區取締ハ轉免、其他非常ノ事故アル時ハ、臨時支給スルコトモアルベシ。

學區取締小學教員保護役旅費日當表

| （管內旅行） | （同滯在） | （管外旅行） | （同滯在） | （赴任旅行） |
|---|---|---|---|---|
| 五拾錢 | 貳拾五錢 | 壹圓 | 三拾錢 | 壹圓 |

第十九條　學區取締ハ一月ヲ始メトシ、三ヶ月每ニ左ノ出張巡廻表式ニ準ジ、其翌月五日（一月・四月・七月・十月）限リ、第五課ヘ差出シ、調査ヲ受ベシ。但轉任免ノ者ハ、出張巡廻表ヲ其時ニ差出シ、新任ノ者ハ其月ヲ推シ、三ヶ月ニ至ラザルモ、本條ノ期限ヲ以テ

差出スベシ。

出張表　明治何年何月何日出足　同　年何月何日歸着　學區取締　何某　印

一、何々ノ件ニ付何所迄出張　到所役員ノ承認　何某　印

但何所ヨリ何所迄道程何里、往返合里數何里、(滯留セシトキハ)何月何日何所へ着、翌何日ヨリ何日迄日數幾日滯留。

巡廻表　明治何年何月何日出足　同　年何月何日歸着　學區取締　何某　中

| (日附) | (地名) | (校名) | (行程) | (到所役員承認) |
|---|---|---|---|---|
| 何月何日 | 大小區郡村町驛 | 何番小學何々學校 | 自宅ヨリ何所迄何里何町 | 正副戸長保護役教員ノ内一人　何某　印 |
| 同日 | 同所 | 同所 | 同 | 何某　印 |
| 同日 | 同所 | 同校 | 滯在 | 何某　印 |
| 何日 | 大小區郡村町驛 | 何番小學何々學校 | 何所ヨリ何所迄何里何町 | 何某　印 |
| 同日 | 大小區郡村町驛 | ○ | 何所ヨリ何所迄何里何町 | 何某　印 |
| 何日 | 大小區郡村町驛 | 何番小學何々學校 | 何所ヨリ何所迄何里何町 | 何某　印 |
| 同日 | ○ |  | 歸着　何所ヨリ何所迄何里何町 |  |

# 第八章　事務撮要

第一條　管内一切ノ學事ハ、本廳第五課ニ於テ之ヲ總括ス。

第二條　教員生徒ヲ教授スルノ功他ニ秀越スルモノ、公私學校ヲ開ク者、及ビ學事關渉ノ役員ヨリ一般人民ニ至ルマデ、勉勵衆ニ超ヘ、篤志人ヲ感ゼシムルモノハ、褒賞ノ典アルベシ。

第三條　公私學校ヲ設立セントスルトキハ、先其維持方法ヲ確實ニシ、將來經費ノ出納等ヲ豫算詳記シ、學制第百七拾七章ニ照準シ、正副區戸長・學區取締連署、設立伺書ヲ出シ、許可ヲ得テ開校スベシ。

第四條　私學開業ヲ願フ者ハ、學制第四拾參章第百七拾九章ニ照準シ、正副區長・學區取締連署、開業願書ヲ出シ、許可ヲ得テ開業スベシ。但時トシテハ其教員ノ學力ヲ試驗スルコトモアルベシ。又免許開業後ト雖モ、教育上不都合ノ儀有之時ハ、上請ヲ經、第五課ニ於テ之ヲ處分ス。

第五條　小學校生徒定期試驗ノ際、優等ノモノ及上下等學科卒業ノ者、姓名ハ管下一般報告ス。但優等ノ者ハ之レニ褒賞ヲ與フ。

第六條　學齡並就學調ハ、正副區長・學區取締商議ノ上、毎歳兩度（三月九月）調査錄ヲ製シ、連署開申スベシ。

第七條　學校ヘ金員・書籍・器械等寄附ヲ願フ者ハ、其本人族籍ヲ詳記シ、正副區戸

長・取締・學校保護役連署ノ願書正副ヲ出シ、許可ノ上速ニ納付スベシ。該校ニ於テハ保護役・學區取締連署、納濟ノ旨屆出ベシ。尤其寄附スル所金員ニシテ、資本或ハ積金トナストキハ、監守人ノ證書ヲ添ヘ、又校費等ニ遣拂フモノハ、其仕譯書ヲ添フベシ。

第八條　年賦或ハ月賦寄附金モ、渾テ第七條ニ準ジ、寄附金額悉皆納濟ノ上屆出ベシ。

第九條　學區内協同連合シ、學校資本金ヲ寄附セント欲スルモ、一時ニ出金ナシ難キノ事情アルモノハ、先ヅ第七條ニ準ジ、願出許可ノ上、其寄附金ヲ直ニ各自ヘ貸與シ、以テ返納ノ期ヲ確定シ、每月利子（月一分ヨリ少ナカラズ）ヲ納メシムルコトモアルベシ。之レ已ヲ得ザルニ出ヅ。此時ニ於テハ其借用證書ヲ添ヘ、第七條ニ準ジ屆出ヅベシ。

第十條　連名ノ寄附金額願書ハ、各金員ノ多キヨリ寡キニ及ボシ、以テ順序ヲ紊サズ記載スベシ。總テ公文書ハ字體ヲ正フスベキハ勿論ナリ。殊ニ金員ニ「一二十」ノ字體ヲ用フベカラズ。必ズ「壹貳拾」ニ作ルベシ。又姓名ハ最モ注意誤字ナキヲ要ス。

第十一條　寄附金利子ハ每月該地正副戸長ヘ納ムベシ。戸長ハ其金ヲ取纒メ、區務所ヘ出シ、區務所ニ於テ該校保護役ヘ渡ス。學區取締之ヲ承認スベシ。但本

條利子納メ方ノ儀ハ、該地役員ノ協議ヲ以テ、二ヶ月或ハ三ヶ月ヅツ取束ネ納メシムルモ妨ゲナシ。

第十二條　各小學校ニ於テ、教員ノ派出ヲ願フトキハ、正副戸長・學校保護役・學區取締連署ヲ以テ、願書ヲ出スベシ。但生徒ノ等級ニ教員月俸ノ給額ヲ添テ申出ベシ。

第十三條　各學校（公私ニ拘ラズ）學事年報ハ、翌年一月中、學區取締ヲ經テ出スヲ制トス。其項目ハ毎歳前以テ第五課ヨリ達スベシ。

第十四條　各中小學校ニ於テハ、毎月生徒人員校費出納表、豫テ達置ク處ノ雛形ニ做ヒ三枚ヲ作リ、一枚ハ學區取締ヲ經テ第五課へ進達シ、一枚ハ學區取締へ出シ、一枚ハ該校ニ備フベシ。

小學授業法

## 小學授業法

### 第一章　通則

第一條

起業鐘聲ニ應ジ、當直教師鐸ヲ鳴シ、生徒ヲメ各教師ノ面前ニ集合整列セシム。

各教師ハ上位ノ生徒ヲ先トシ、二列ニ編制ス。其法生徒二十四人トスレバ、

| 24 | 23 | 22 | 21 | 20 | 19 | 18 | 17 | 16 | 15 | 14 | 13 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 |

尾生徒ハ容姿端正、兩手ヲ臆骨上（拇指ヲ帶ニ挾ミ、臂ヲ後方ニ向ケシム）ニ

置キ、肅然トシテ進行ス。教師ハ背行シテ之ヲ率ヒ、目ヲ衆生ニ注ギ、「左リ」「右」ノ令ヲ下シ、其足音ヲ調整ス。將ニ教場ニ入ラントスルトキ、教師ハ戸外ニ立、後列ハ速ニ背面ニ方向ヲ轉ジ、前列ハ依然トシテ進行シ、後列ノ尾位、卽チ今頭位トナルモノハ、前列ノ尾位ニ續キ、一列トナツテ進行シ、共ニ卓子間ニ設クル空地ヲ歷テ、各自椅子ノ外側ニ至リテ靜止ス。教師卽チ左ノ令ヲ下ダス。

一、此令ニテ各生徒右ニ方向ヲ轉ジ、自己ノ將ニ倚ントスル椅子ニ面ス。

二、此令ニテ卓子ト椅子ノ間ニ身ヲ容レ直立ス。

三、此令ニテ椅子ニ倚リ、兩手ヲ膝上ニ置ク。

右畢テ一齊ニ立禮セシメ、教師ハ自己ノ卓子ニ倚リ、名簿ヲ記シ、速ニ業ニ就クノ手續ヲ爲ス。

第二條

生徒ハ後列卓子ノ左方ヲ(教師ノ位置ヨリ云フ。)上位トシ、毎脚二名トシ、(卓上ニ番號ヲ付シ、生徒ヲシテ記セシムベシ。)順次ニ右方ニ數ヘ、前列結尾ニ至テ已ム。之ヲ下位トス。此位ニ在ル者ハ、最モ幼齡ニシテ、學業未熟ナルガ故ニ、教師ニ接近スレバ、其益少シトセズ。

第三條

生徒ノ書籍・器具等皆之ヲ卓子ノ箱中ニ收メ、卓上ヲシテ一物ナカラシメ、其出納

ヲ私ニセシメズ、毎ニ教師ノ令アル可シ、其方左ノ如シ。

授讀復讀等ノ時、教師先ヅ某ノ書ヲ出シテト令シ、直チニ左ノ令ヲ下ダス。

一、生徒左手ヲ卓箱ノ蓋端ニ置ク。

二、左手ニ蓋ヲ開キ、右手ニ其ノ書ヲ把ル。

三、左手ニテ蓋ヲ閉ヂ右手ニテ書ヲ卓上ニ正置シ、兩手ヲ膝上ニ置ク。

是ニ於テ教師令シテ曰ク、「書ヲ（或ハ何枚ト稱スルモ可ナリ）開テ」。

右ハ就業ノ方トス。業ヲ畢ルトキハ、教師先ヅ「書ヲ掩フテ」ト令シ、又「書ヲ收メテ」ト令シ、直ニ左ノ令ヲ下ダス。

一、兩手ヲ卓箱ノ蓋端ニ置ク。

二、左手ニ蓋ヲ開キ、右手ニ書ヲ收ム。

三、蓋ヲ閉ヂ、直チニ兩手ヲ膝上ニ置ク。

右ニ掲スル所ハ、書籍出納ノ手續ナレドモ、其他一切ノ器具ニ至ルマデ、其方ヲ用ルモノトス。但「某ノ器ヲ出シテ」「收メテ」ノ令ヲ以テ、「某ノ書ヲ出シテ」「收メテ」ニ代ルノミ。

第四條

放課ノ時ハ、速ニ業ヲ收ルノ順序ヲ踐ミ、畢テ立禮ヲ行ヒ、乃チ左ノ令ヲ下ダス。

一、椅子ヲ離ル、ノ準備ヲナス。（退校ノ時ハ、生徒所携品ヲ手ニス。）

二、左右側面ニ方向ヲ轉ジ、兩手ヲ膝上ニ置ク。

三、敏速ニ起立ス。（此時衆生ノ足立、一齊ニ響クヲ要ス。）

四、方向ヲ轉換ス。（黒盤ニ背シテ立ツヲ云フ。）

五、歩ヲ起ス。

此時教師ハ戸外ニ立チ、生徒ノ一列ト爲ツテ進行シ、尾位ノ生徒已ニ戸外ニ出ル時、頭位ノ生徒ヲシテ稍々止ラシメ、尾位ヨリ次第ニ前進シテ、復二列ニ編制シ、之ヲ率ヒテ遊戲場ニ至リ、令シテ解散セシム。退校ノ時ハ、玄關ニテ解散ス可シ。

第五條

卓子及椅子ハ、生徒二人ニ各一脚トス。之ヲ排置スルニ、毎脚ノ左右各二尺以上ノ距離ヲ設ケ、教師ノ通路トシ、前列ノ椅子ハ後列ノ卓子ニ密接シ、椅子ト卓子ノ距離ハ、生徒ノ直立ス可キヲ度トス。

第六條

書籍・器具ノ出納ハ、都テ第三條ノ如シト雖モ、其昇校・退校ノ際ハ、必ラズ各所携ノ具アリ。故ニ昇校ノ時ハ、各自ニ所携品ヲ卓箱内ニ納メシメ、退校ノ時ハ、左ノ令ヲ下ス。

歸裝（かへりじたく）　此令ニテ靜カニ所携ノ物品ヲ卓箱内ヨリ出シ、之ヲ整理シテ卓上ニ正置ス。

教師ハ歸裝ノ全ク了ルヲ俟テ、禮ヲ命ジ、卓子ヲ離ル、ノ手續ヲ爲ス。



## 小學校訓導心得

人ノ善惡賢愚ハ多クハ幼時ヨリ習慣ニ因ルモノナレバ、小學ノ教師タルモノハ、唯ダ學科ヲ授クルノミヲ以テ其ノ職ヲ竭スモノトセズ、躬ヲ修メ、行ヲ正フシ、一擧一措輕忽ニセズ、片言隻行模範タル可ク、生徒ヲシテ知ラズ識ラズ之レニ薫陶セラレ、以テ善良ノ人ト爲ラシムルヲ要ス。其ノ之ヲ遇スルヤ務メテ寬嚴中ヲ得、優柔ニ流レ、格猛ニ陥ル等ノ弊アル可ラズ。依テ平生服膺スベキノ件若干條ヲ掲グルコト左ノ如シ。

第一條

教方ハ本縣定ムル所ノ教則及授業法ニ從フ可シ。

第二條

幼童ヲ教導スルニ密ニ過グルハ、眞理ヲ忘テ末説ニ流レ、簡ニ過グレバ疎漏ニ陥ル故ニ、教師タル者ハ簡密能ク其ノ中ヲ得ザル可ラズ。

第三條

生徒質問スル事アラバ、曖昧ノ答ヲ爲ス可ラズ。其ノ疑團ヲ免カレザル件ハ、退テ諸書ヲ參考シ、或ハ之ヲ先輩ニ訂シ、確實明瞭ニ答フ可シ。

第四條

兒童ヲ導クニ、自ラ男女ノ別アリ。男ハ寛厚ニシテ剛ナラシメ、女ハ溫良ニシテ順ナラシム。故ニ男兒ニハ教科書、或ハ他書ニ就キ、古今義士・仁人ノ事蹟ヲ撮說シ、女子ニハ賢女・節婦ノ言行ヲ說話ス可シ。但古來義士節婦ト稱スル者、動モスレバ慷慨激烈ニ過グル者アリ。故ニ現今適切ノ事蹟ヲ選ブハ教師ノ最注意スベキ所ナリ。

第五條

兒童ノ性質ヲ識別スルハ、最モ緊要ノコトナレバ、動作遊戲ノ間ニ於テ之ヲ視察シ、之ヲ矯正シ、之ヲ奬勵ス可シ。

第六條

記憶乏シキ者、及訓誨ヲ守ラザル者ハ、懇ニ之ヲ教諭シ、決シテ暴劇ノ譴責ヲ爲スベカラズ。頑鈍ノ童兒ヲシテ豁然感悟セシムルハ教員ノ最モ務ム可キ任トス。

第七條

生徒ヲ遇スル一般ニ公平ナル可シ。決シテ彼ニ厚ク、此ニ薄キ等ノ弊アル可カラズ。

第八條

生徒過失アルトキハ、左ノ三項ニ據リ、其輕重ヲ斟酌シテ處分スベシ。其則タルヤ固ヨリ改良ヲ俟ツ所以ニシテ、已ムヲ得ザルニ出ル方法ナレバ、容易ニ之ヲ處ス可ラス。可及的說諭ヲ加ヘ、自ラ悔悟セシム可シ。

第一　訓誨

生徒ヲシテ敎場ニ整理セシメ、犯則ノ者ヲ呼出シ、再犯ナキ樣懇ニ諭シ、滿室ノ生徒ヲシテ之ヲ傍聽セシム。

第二　誨懲

授業中、三十分若クハ二十分時間、其坐席或ハ一隅ニ直立セシメ、（課業ヲ缺セシム可ナラス）課業畢レバ訓誨ヲ加ヘテ放免ス。

第三　警誡

退校時間ニ後レシムルコト三十分ヨリ少カラス、一時ヨリ多カラザル可シ。而シテ其間小學生徒心得、或ハ其犯件ヲ警誡スベキ簡易ノ修身談ヲ聽カシメ、其ノ非ヲ悔悟セシム。

第九條

生徒若シ校則第十八條ニ揭ル如キ所業アラバ、其尊屬ノ親ヲシテ說諭セシメ、尙

之ヲ守ラザル者ハ、同僚及學區取締ト合議シ、連署ヲ以テ其ノ狀ヲ具陳シ、許可ヲ得テ後處分ス可シ。

第十條

務テ生徒ノ健康ニ注意シ、時々教場ノ窓戶ヲ開閉シ、寒暖其度ニ適セシム可シ。又體操・遊戲ヲ爲ストキハ、之ヲ監護シ、粗暴ヲ制シ、傷害ヲ防グ可シ。

第十一條

兒童體操場ニ出テ遊戲ヲ爲ストキハ、其ノ具ニ就キ其ノ理ヲ論示ス可シ。鞠ニ就テ反動ノ理ヲ說キ、輪ニ依テ運傳ノ理ヲ論ス等。或ハ草花・木葉・金石・貝虫等、類ニ觸レ物ニ應ジ簡易ニ其ノ理由ヲ解說ス可シ。

第十二條

生徒顏面手足等ヲ汚ス者アレバ、直チニ之ヲ洗淨セシム可シ。

第十三條

教鞭ハ掛圖ヲ示シ、字畫ヲ指スノ具ナレバ、生徒ヲ指揮シ、或ハ警笞ス可カラズ。

第十四條

使丁ヲ備フル學校ハ勿論、若シ已ヲ得ズシテ生徒ヲ以テ交番灑掃セシムルトモ、十二歲以下ノ兒童ヲシテ汲水ノ用ヲナサシム可カラズ。

第十五條

學生ノ進歩ヲシテ一科ニ偏暢セシム可ラズ。

第十六條

月給ノ外、謝儀・贈物等ヲ受クベカラズ。但夜學等ヲ開キ其ノ給料ヲ受ルハ此例ニ非ズ。

第十七條

生徒毎日ノ勤惰及學區取締ノ巡回、保護役出席ノ月日等ヲ詳記シ、第五課並學事管掌ノ吏員巡回ノ時、其ノ檢閲ヲ受ク可シ。但小學校則第五號ノ雛形ニ照準ス可シ。

第十八條

教員ハ便宜ヲ以テ、五・六或ハ七・八校ヲ聯合シ、會日ヲ定メ、會則ヲ建テ、教科書並授業法等ヲ研究シ、專ラ學業ノ進歩ニ注意ス可シ。議事若シ其ノ當ヲ得ザルコトアラバ、之ヲ等閑ニ付セズ、必ズ師範學校ヘ質問ス可シ。但教場ノ都合ニ因リ、自ラ出頭シ能ハザルトキハ、書牘ヲ以テ質問スルモ妨ナシ。又該日ハ行厨ノ外、猥リニ飲食ス可ラザルハ勿論、決シテ暴論・雜話ニ亙ル可ラズ。

## 小學生徒心得

夫レ人ハ幼稚ノ時ヨリ學校ニ入リ勉強シテ身ヲ修メ行ヲ正ウシ、智ヲ開キ業ヲ昌ニシ人ニ賴ラズシテ自營スルノ基ヲ立テズンバアルベカラズ。サレバ智者モ富貴ハ勉強ヨリ生ズトイヘリ。天下有用ノ人トナリ、世ニ貴重セラレテ、富榮ヲ一生ニ全スルモ、世間無用ノ人トナリ、世ノ輕蔑ヲ受ケテ、一生ヲ貧賤ニ過スモ、皆幼稚ノ時ヨリ勉強シテ學問セルト否ラザルトノ二ツニ原クモノナリ。故ニ勉強シテ學問セザル者ハ、自暴自棄ノ人トテ、終ニハ世ニ身ヲ容ル、所ナキニ到ルモノナレバ、各篤ク左ノ箇條ヲ守リ、毫モ懈ルコト莫ク、將來ノ幸福ヲ受ル樣心懸ルコト肝要ナリ。

第一條

毎朝早ク起キ、面ヲ洗ヒ、口ヲ嗽ギ、髮ヲ櫛リ、衣服ヲ正シ、而シテ父母尊長ヘ一禮シ、其安否ヲ伺ヒ、食事畢リテ直ニ學校ヘ出ルノ用意ヲナスベシ。尤當日入用ノ筆紙・書籍・器具等取落シナキ樣致スベシ。

第二條

學校昇降ノ節ニハ、必ズ先ヅ父母尊長ヘ一禮スベシ。其ノ他出スルトキモ、其ノ由ヲ尊長ニ告、敬禮ヲナスベシ。

第三條

教師ハ我ニ學術ヲ授ケ、智ヲ開キ才ヲ長ジ、將來幸福ヲ請ル基ヲ建ツル恩人ナレバ、常ニ敬禮ノ意ヲ失フベカラズ。

第四條

擧止ハ靜ナルベク、言語ハ穩ナルベシ。教場ニ入テハ先ヅ教師ニ敬禮ヲ行ヒ、後業ニ就キ、心ヲ鎭メ他念ナク、教師ノ教ヲ受ケ、若シ不審ノ廉アラバ、反覆質問シ、了解ヲ得テ後止ムベシ。但質問ハ他生ノ妨トナラザル樣注意シ、溫柔ニ教ヲ受クベシ。

第五條

他生ノ善キ事アラバ、之ニ倣ヒ、身モ亦此ノ如クナサント要シ、又己レヨキ事アルカ、又ハ學業ノ他ニ優ル事アリテ、教師故ラニ褒賞スル事アルモ驕リテ他生ニ誇ルベカラズ。

第六條

校内ハ勿論、他ニ於テモ平素ヲ正クシ、惡キ遊ヲナサズ、善キ友ニ從ヒ、アシキ友ハ愼デ之ヲ避クベシ。

第七條

若シ事故アリテ昇校ノ時刻ニ後レタル時ハ、其由ヲ教師ニ告ゲ、其差圖ヲ待ツベシ。

第八條

教ヲ受ル時ハ勿論、總テ我意我慢ヲ出スベカラズ。教場ニテ己ノ意ヲ述ベント欲セバ、右ノ手ヲ揚ゲ、其意ヲ知シメ、教師ノ許可ヲ受テ後、穩ニ言葉ヲ發スベシ。

第九條

急ニ覺エントスル時ハ、却テ忘レヤスキモノナレバ、一事ヲ覺エテ後、一事ニ移ル樣心掛クベシ。

第十條

覺エアシキトテ倦ミ怠ルベカラズ。油斷ナク勉强スル時ハ、自然ニ覺ユルモノナリ。但日日退校後宅ニテ其日教ヲ受シ處ヲ、幾度モ繰返シ復讀スベシ。

第十一條

教師ニ告ズシテ、猥リニ教場ノ出入ヲナスベカラズ。

第十二條

障子・襖ノ開閉ハ靜カニナシ、書物・器械ハ丁寧ニ取扱ヒ、破損セザル樣注意スベシ。但他人ノ品ハ更ニ注意シ、若シ已ヲ得ザル事アラバ、本人ニ斷リテ之ヲ取扱フベシ。

第十三條

行廚ハ昇校ノ時、控所ニ置キ、正午喫飲ノ節ハ、靜ニ食シ、衣服ヲ穢サヾル樣專ラ注

意シ、又人ノ膏粱ト麁食ヲ譏ルベカラズ。

第十四條

校内ニ限ラズ、何處ト雖モ、壁塀其他ノ物ヘ濫書スベカラズ。苟且ニモ粗暴野卑ノ擧止ヲナシ、他人ノ嘲ヲ受クベカラズ。

第十五條

人ノ衣裳ノ精粗美惡ヲ稱擧譏笑スベカラズ。

第十六條

學校ヘ行厨ノ外、食物ヲ持參スベカラズ。又玩具金錢ヲ持參スル事尤嚴禁トス。

第十七條

學校ヘ往復ノ途中ハ勿論、平素遊歩ノ時ト雖モ、路傍ノ樹木花草ヲ損害シ、或ハ果實ヲ採リ、田畝ヲ踏荒シ、瓦礫土塊ヲ投グル等、總テ不行儀アルベカラズ。

第十八條

學校ヘ昇校スル途中ニ於テ、遊ビ戯ルベカラズ。若車馬等ニ行逢フトキハ、其通リ過ルヲ待チ、決シテ其前ヲ馳過グベカラズ。

第十九條

學校ハ勿論、私事ニテ他家ヘ行シ時トイヘドモ、己ノ履物傘ニ注意シ、猥リニ捨置

ベカラズ。又他人ノ品ハ、挨拶ナク用ウベカラズ。

第二十條

朋友ト睦シク交リ、不敬不遜ノ振舞決シテアルベカラズ。又人ヲ誹謗スベカラズ。

第廿一條

人ヨリ爭ヲ仕懸ルトモ、決シテ之ト爭フベカラズ。其由ヲ教師ニ告ゲテ、其指示ヲ受ベシ。

第廿二條

尊敬スベキ人、又ハ知己ノ人ニ出逢フ時ハ、帽子ヲ脱テ禮スベシ。但帽子ナキ者ハ、佇立シテ敬禮ヲナスベシ。

第廿三條

人ノ子弟タル者ハ、日々學校ニ至リテ學事ヲ勉勵スルコトニテハ、未ダ全ク其義務ヲ盡スニアラズ。歸宅ノ上、父母長者ノ命ズル所ハ、喜デ之ニ從ヒ、敢テ辛勞ヲ厭フベカラズ。

第廿四條

學業進歩ノ上、己ノ能スル所、父母尊長ニ於テ偶知ラザルコトアリトモ、驕テ之ニ

誇ルベカラス。若シ父母長者ノ問フ事アラバ、謹デ之ニ答ヘ、決シテ尊敬ノ意ヲ失フベカラズ。

## 二　就學奬勵

本縣教育の一頓挫と其改良

明治五年の學制には、學齡は六歲より十三歲までとし男女兒童は必ず尋常小學校を卒業すべしと規定したり。因てこれが實施に當り、縣當局は就學奬勵の告諭文を布達し、（學制時代參照）明治八年十二月には、生徒試驗表なるものを制定して頻りに勸奬する所ありき。而も人智蒙昧、只管舊習に安んじ容易に興學の氣運に向はず、當局の苦心尠少に非ざりき加之、明治十二年九月の教育令の制定には學齡を滿六年より滿十四年までとし、學齡間は少くとも十六箇月は普通教育を受くべく學齡兒童を就學せしむるは、父母後見の責任にして、學校に入らずとも、別に普通教育を受くる途ある者は、就學と見倣すと云ふ頗る自由主義に改められたれば、漸く振興の緒に就きたる本縣教育に一頓挫を來したり。然るに政府は翌十三年十二月、之を改正し、小學科三學年を卒らざる間は、每年十六週日以上就

學せしむべしとし、就學の督責を嚴にしたり。是に於て本縣は就學督責規則を定めたり。其準據する所は、改正教育令第十五條但書に屬する就學督責起草心得にあり。その要は學務委員督責事務を掌理し、郡長之を總管するものとす。この督責規則の效果は空しからずして、明治十四年、六四・三二%より一躍して、七六、三〇%に進めり。而も就學義務の制未だ確立せず、明治十八年の教育令の改正にも、學齡兒童を就學せしむるは、父母後見人の責任としたるのみなれば、就學步合は遲々として進まず、明治十八九年の頃は、却つて低減の結果をさへ見るに至れり。かくて明治十九年四月の制定の小學校令に、學齡は滿六年より滿十四年までとし、父母後見人等はその學齡兒童の尋常小學科を卒へざる間は就學せしむべしとし、次いで明治二十三年十月の改正小學校令には、學齡を滿六年より滿十四年までとす。學齡兒童保護者はその學齡兒童をして、尋常小學校の教科を卒らざる間は就學せしむるの義務あるものとし、初めて義務の文字表はれ、義務制を布かれたり。これより學齡兒童の就學、及び家庭教育に關する規則を制定し、（明治二十五年六月二十三日、縣令第三十九號。）就學免除・就學猶豫、その他家庭修了者等に關する規定を以て、學齡兒童の就學勵行を圖り、明治二十五年六月には、學齡兒童保護者代

人に關する規則明治二十八年一月には、文部省令第十六號第三條に基き、傭主・師匠等に就きて、學齡兒童を保護すべき者と認むべき要件を定めて、（本縣令第二號）就學に關する監督を嚴にし、越えて明治二十九年一月には、本縣訓令を以て、市町村學事奬勵規程を設け、同三十八年五月には、學齡兒童保護者に對する取扱方を依命通牒し、正當の事由なくして、その兒童を就學又は出席せしめざる時は、行政執行法及び施行令により處分すべき等のことを以てしたれば、逐年就學率は向上し、明治三十七八年頃には、九六％以上に達せり。　而も本縣は之に甘んぜず、明治四十三年九月、普通教育奬勵規定、明治四十四年四月には學齡簿・學籍簿・檢閲規程、學齡兒童就學事務取扱手續を訓令し、次いで六月には、教育方針に關する訓令の初項に於て、學齡兒童就學出席の成績を良好ならしむべしと訓示せり。　その方法は一方に就學の督勵を嚴にすると共に、尙進んで貧困子弟の就學に便なる方法を講究し、之が施設をなす爲めに、學齡兒童保護會（同年六月、訓令第三十八號）を設立せしめ、次に年長又は極貧の兒童にして、一定の時期若くは時間に於て、就學すること能はざるものには、便宜特殊の教育を施すの途を開く施設をなさしめ、學齡兒童就學出

席補助規定を定めて、市町村に於て學齡兒童保護會に補助金を與ふる時は、その市町村に對し補助金を交付す等にして、益〻就學出席の督勵を計りたり。是より先き學齡兒童就學步合は、九六、八三％にして、全國學齡兒童步合九七、八〇％に比して、その成績中以下に位したるが、この訓令一度出でて、就學者頓に增加し、翌大正元年には、九八、一七％に上り、全國に於ける順位亦向上せり。大正十年五月には明治四十四年六月の學齡兒童就學出席奬勵補助規程を改正して、學齡兒童保護會奬勵規程とし、更に大正十四年二月、群馬縣學齡兒童就學奬勵資金設置、竝管理規程を定め、大正十三年一月、皇太子殿下御慶事を行はせらるゝに當り、兒童就學奬勵の思召を以て下賜せられたる金一萬九千三百七十四圓を資金とし、一般縣費及び寄附金を以て之が增加を圖り、兒童就學奬勵費に充つることゝし、以て就學を勸奬せり。此の如く時勢の進步に伴ひ、縣當局の施設奬勵に努めたる結果、逐年增加の勢を示し、大正十二年には九九、六一％となれり。左に明治十三年以來に於ける就學狀況を表示すべし。

學齡兒童累年比較表

（既ニ就學ノ始期ニ達シタル者）

| | （就學）尋常小學校ノ教科ヲ修ムル者 | （就學）尋常小學校ノ教科ヲ卒ヘタル者 | （就學）計 | （不就學）就學猶豫 | （不就學）就學免除 | （不就學）計 | （合計） | 未ダ就學ノ始期ニ達セザル者 | 學齡兒童總計 | （就學步合）男 | （就學步合）女 | （就學步合）男及女 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 大正一二 | 一三三、五八六 | 四五、八八三 | 一七九、四六九 | 三〇八 | 四〇〇 | 七〇八 | 一八〇、一七七 | 二七、〇九三 | 二〇七、二七〇 | 九九、六一 | 九九、六一 | 九九、六一 |
| 同　一一 | 一三一、五三四 | 四三、五六七 | 一七五、一〇一 | 三四三 | 四一九 | 七六二 | 一七五、八六三 | 二七、七二六 | 二〇三、五八九 | 九九、五九 | 九九、五三 | 九九、五七 |
| 同　一〇 | 一二八、九四三 | 四三、七七九 | 一七二、七二二 | 三三二 | 四三四 | 七六六 | 一七三、四八八 | 二六、四九九 | 一九九、九八七 | 九九、五九 | 九九、五三 | 九九、五六 |
| 同　九 | 一二六、八五三 | 四三、二〇一 | 一七〇、〇五四 | 三三八 | 四六五 | 八〇三 | 一七〇、八五七 | 二九、〇二四 | 一九九、八八一 | 九九、五五 | 九九、五一 | 九九、五三 |
| 同　八 | 一二四、三二四 | 三九、八六八 | 一六四、一九二 | 四四六 | 四六八 | 九一四 | 一六五、一〇六 | 二七、二六七 | 一九二、三七三 | 九九、四九 | 九九、四〇 | 九九、四五 |
| 同　七 | 一二三、〇一六 | 三五、四二七 | 一五八、四四三 | 五八〇 | 四七二 | 一、〇五二 | 一五九、四九五 | 二五、七二一 | 一八五、二一六 | 九九、四三 | 九九、二六 | 九九、三四 |
| 同　六 | 一一八、三〇六 | 三五、四五〇 | 一五三、七五六 | 九〇一 | 五一四 | 一、四一五 | 一五五、一七一 | 二六、三〇七 | 一八一、四七八 | 九九、二四 | 九八、九三 | 九九、〇九 |
| 同　五 | 一一六、四八九 | 三四、七一〇 | 一五一、一九九 | 一、〇九一 | 四八六 | 一、五七七 | 一五二、七七六 | 二四、七六五 | 一七七、五四一 | 九九、一七 | 九八、七六 | 九八、九七 |
| 同　四 | 一一二、三三二 | 三五、八五八 | 一四八、一九〇 | 一、二九六 | 四九〇 | 一、七八六 | 一四九、九七六 | 二四、六九六 | 一七四、六七二 | 九九、〇八 | 九八、五三 | 九八、八一 |
| 同　三 | 一一〇、六六七 | 三五、〇八〇 | 一四五、七四七 | 一、四二三 | 五二三 | 一、九四六 | 一四七、六九三 | 二四、四六一 | 一七二、一五四 | 九九、〇〇 | 九八、三五 | 九八、六八 |
| 同　二 | 一〇八、二八三 | 三三、五六二 | 一四一、八四五 | 一、五八一 | 四九六 | 二、〇七七 | 一四三、九二二 | 二四、三三八 | 一六八、二六〇 | 九八、九三 | 九八、一八 | 九八、五六 |
| 同　一 | 一一〇、二八六 | 二九、八七三 | 一四〇、一五九 | 二、一三八 | 四八一 | 二、六一九 | 一四二、七七八 | 二一、九八三 | 一六四、七六一 | 九八、六九 | 九七、六三 | 九八、一七 |
| 明治四四 | 一一〇、一二三 | 二八、二二六 | 一三八、三四九 | 四、六九六 | 五一五 | 五、二一一 | 一四三、五六〇 | 二一、六〇三 | 一六五、一六三 | 九七、六三 | 九五、〇五 | 九六、三七 |
| 同　四三 | 一〇八、〇九一 | 三〇、四六一 | 一三八、五五二 | 五、九九三 | 四二〇 | 六、四一三 | 一四四、九六五 | 二二、一一一 | 一六七、〇七六 | 九七、二七 | 九三、七七 | 九五、五八 |
| 同　四二 | 一〇三、六四四 | 三五、四〇三 | 一三九、〇四七 | 四、九五二 | 三八三 | 五、三三五 | 一四四、三八二 | 二三、一九四 | 一六七、五七六 | 九七、八三 | 九四、六九 | 九六、三〇 |
| 同　四一 | 八四、二三九 | 五三、二二〇 | 一三七、四五九 | 四、〇五五 | 四四四 | 四、四九九 | 一四一、九五八 | 二三、三六三 | 一六五、三二一 | 九八、一六 | 九五、四四 | 九六、八三 |

| | | | | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 同　四〇 | 六五、二九五 | 六六、九五二 | 一三二、二四七 | 四、一〇八 | 四六八 | 四、五七六 | 一三六、八二三 | 二三、九六一 | 一六〇、七八四 | 九八、〇七 | 九五、一八 | 九六、六六 |
| 同　三九 | 六四、四六〇 | 六三、七七三 | 一二八、二三三 | 四、二六〇 | 四九八 | 四、七五八 | 一三二、九九一 | 二二、八三二 | 一五五、三七三 | 九七、九八 | 九四、七九 | 九六、四二 |
| 同　三八 | 六一、四九四 | 六一、五五三 | 一二三、〇四七 | 四、五〇七 | 四九五 | 五、〇〇二 | 一二八、〇四九 | 二一、一一二 | 一四九、一六一 | 九七、八〇 | 九四、三三 | 九六、〇九 |
| 同　三七 | 六〇、一〇八 | 五九、六四九 | 一一九、六六七 | 四、九一五 | 四八六 | 五、四〇一 | 一二五、〇六八 | 二〇、七九六 | 一四五、八六四 | 九七、五〇 | 九三、七八 | 九五、六八 |
| 同　三六 | 六一、一九九 | 五六、六七八 | 一一七、八七七 | 五、一二七 | 五九三 | 五、七二〇 | 一二三、五九七 | 二〇、三七一 | 一四三、九六八 | 九七、四一 | 九三、三三 | 九五、三七 |
| 同　三五 | 六二、九六三 | 五三、七二三 | 一一六、六八六 | 六、九一八 | 七八九 | 七、七〇七 | 一二四、三九三 | 一七、九〇五 | 一四二、二九八 | 九六、六二 | 九〇、八三 | 九三、八〇 |
| 同　三四 | 六一、〇〇二 | 四九、一六三 | 一一〇、一六五 | 一二、七五四 | 一、三八五 | 一四、一三九 | 一二四、三〇四 | 一八、七五三 | 一四三、〇五七 | 九四、二三 | 八二、七八 | 八八、六三 |
| 同　三三 | 六一、五三六 | 四二、八八九 | 一〇四、四二五 | 一八、八八三 | 一、一七八 | 二〇、〇六一 | 一二四、四八六 | 一八、〇四四 | 一四二、五三〇 | 九二、二四 | 七五、一九 | 八三、八八 |
| 同　三二 | 六四、六一五 | 三九、三二三 | 一〇三、九三八 | 三二、〇七八 | | | 一三六、〇〇六 | 一二、四六一 | 一四八、四六七 | 八七、五九 | 六四、四七 | 七六、四一 |
| 同　三一 | 六二、三〇二 | 三四、一七五 | 九六、四七七 | 三三、二一七 | | | 一二九、六九四 | 一二、九一〇 | 一四二、六〇四 | 八六、三八 | 六一、五五 | 七四、三九 |
| 同　三〇 | 六二、二〇三 | 三一、〇三八 | 九三、二四一 | 三六、一四四 | | | 一二九、三八五 | 一二、〇七〇 | 一四一、四五五 | 八五、一四 | 五八、一一 | 七二、〇六 |
| 同　二九 | 六二、〇三七 | 二九、八一〇 | 九一、八四七 | 三九、二一四 | | | 一三一、〇六一 | 一二、三三五 | 一四三、三九六 | 八三、三〇 | 五五、七八 | 七〇、九八 |
| 同　二八 | 八八、七一八 | | | 四二、〇三九 | | | 一三〇、七五七 | 一四、一二六 | 一四四、八八三 | 八二、三三 | 四七、〇七 | 六六、八七 |

| | （就學） | （不就學） | （學齡兒童總計） | （就學步合） |
|---|---|---|---|---|
| 明治二七 | 九八、三六三 | 四三、八七〇 | 一四二、二三三 | 六九、一六 |
| 同　二六 | 九三、四七五 | 四七、七一一 | 一四一、一八六 | 六六、二一 |
| 同　二五 | 八九、二七五 | 五二、四九七 | 一四一、七七二 | 六二、九七 |
| 同　二四 | 七九、六〇九 | 五五、二三四 | 一三四、八四三 | 五九、〇四 |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 同　二三 | 七七、八二七 | 五五、一〇八 | 一三二、九三五 | 五八、五五 |
| 同　二二 | 七四、一六四 | 六〇、九八三 | 一三五、一四七 | 五四、八七 |
| 同　二一 | 七五、〇三五 | 五七、八九一 | 一三二、九二六 | 五六、四五 |
| 同　二〇 | 六七、一〇四 | 六〇、五一八 | 一二七、六二二 | 五二、六二 |
| 同　一九 | 五七、四五七 | 六二、八三五 | 一二〇、二九二 | 五七、七六 |
| 同　一八 | 六五、七七三 | 四八、二〇九 | 一一三、九八二 | 五七、七〇 |
| 同　一七 | 六七、三六三 | 三七、〇九三 | 一〇四、四五六 | 六四、一一 |
| 同　一六 | 六六、五八八 | 三〇、四六五 | 九七、〇五三 | 六八、六一 |
| 同　一五 | 六六、九八七 | 二八、二八一 | 九五、二六八 | 七六、三〇 |
| 同　一四 | 五六、五四二 | 三一、三六二 | 八七、九〇四 | 六四、三二 |
| 同　一三 | 五一、三六七 | 三一、二一七 | 八二、五八四 | 六二、二〇 |

## 三　學區及學校

本縣の學區は、學制制定の當初は、第一大學區東京に屬し、三中學區六百三十小學區、明治九年本縣再置の際には、八百十三學區、五百四十四校なりしが明治十年に

は四中學區二百九小學區と改正せり。明治十二年發布の教育令によりて、此學區制を廢止し、每町村若くは數町村聯合して、公立小學校を設置すべしと改定せられたるも、翌十三年十二月の改正教育令により、學區制は復舊せられ、明治十四年三月三十日、本縣は小學區域竝校數設制規則を布達せり。此時指定の區畫數二百八十一學區、平均面積一方里五六四餘、人口二千百五十四人七分弱、學校數は五百八十七、一學區に二校〇九六を有するの比例なり。區域の廣狹は甚だ均しからず。廣きは三里に亙り、狹きは二十町內外に過ぎず。是れ土地の廣狹と、戶口の多寡とを計り、之が布置をなしたり。但し寒村僻落、從來孤立の情勢を存し、到底完全の教育を施行し難きものは、團結協合の基礎を設けたり。此團結協合の方法は、當時巡視したる文部少書記官久保田讓の功程上申書中に、良法として、推奬したる所なりき。

次いで十一月、本縣丁第十六號を以て、小學校區域を布達したるが、明治十七年四月十九日、學區校數規定標準を示し、此標準に據り、學區校數及び等位を選定し、七月三十一日迄に取調差出さしめ、本縣は此取調に基き、同年十一月六日を以て、

學區校數規定標準

小學校區域校數を指定せり。

規定標準　學區の幅員は可成廣大にして資力に富むを希圖すと雖も、生徒の通學に不便を生ぜざるがため、其廣袤左の目的に過ぎざるを要す。

小學高等科生徒は、道程四十町以下、中等科生徒は三十町以下、初等科生徒は二十町以下を最遠の處とす。故に高等小學校は方八十町の中央に、中等小學校は方六十町の中央に、初等小學校は方四十町の中央に、一校を置くの割合にして、高中初の三等を具備する完全なる一小學校を有する、最少なる學區の幅員は、方四十町卽ち一方里一餘に止り、別に中初等科若くは初等科の學校をおき、更に高中等科の學校をおく最大なる學區の幅員は、方八十町卽ち二方里二餘に及ぶものとす。而して一學區の戸數は、人口稠密なる市邑と山村僻落を除き、凡そ五百戸を適度とし、五百戸につき一箇年金一千圓以上の學資を要する割合とす。（以下略）。

學區は前橋を、第一學區とし、那波郡の東飯島村外九箇村を第百九拾三學區とし、指定せられたる校數は四百二十三校なり。

| （郡名） | （學區番號） | （學區數） | （本校數） | （分校數） | （合計數） |
| --- | --- | --- | --- | --- | --- |
| 東群馬 | 一—三 | 三 | 三 △一 | 五 | 九〇 |
| 南勢多 | 四—二〇 | 一七 | 一七 | 三二 | 四九 |
| 西群馬 | 二一—五二 | 三二 | 三二 △一 | 二六 | 五九 |
| 片岡 | 五三 | 一 | 一 | 一 | 二 |
| 綠野 | 五四—五八 | 五 | 六 | 一四 | 二〇 |
| 多胡 | 五九—六〇 | 二 | 二 | 五 | 七 |
| 南甘樂 | 六一—六四 | 四 | 四 | 一二 | 一六 |
| 北甘樂 | 六五—八四 | 二〇 | 二〇 | 一二 | 三二 |
| 碓氷 | 八五—一〇二 | 一八 | 一八 | 一一 | 二九 |
| 吾妻 | 一〇三—一二二 | 二〇 | 二〇 | 三〇 | 五〇 |
| 利根 | 一二三—一四二 | 二〇 | 二〇 | 二五 | 四五 |
| 北勢多 | 一四三—一四五 | 三 | 三 | 三 | 六 |
| 山田 | 一四六—一五三 | 八 | 八 | 一五 | 二三 |
| 新田 | 一五四—一六三 | 一〇 | 一〇 | 九 | 一九 |
| 邑樂 | 一六四—一八〇 | 一七 | 一七 △一 | 一二 | 三〇 |
| 佐位 | 一八一—一八八 | 八 | 八 | 九 | 一七 |

| 那波 | 一八九 | 一九三 | 五 | 五 | 五 | 一〇 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| （計） | | | 九一三 | 一九四<br>△三 | 二三六 | 四二三 |

乙印　女兒學校。（前橋高崎館林）

本校　高等中等初等科完備。

分校　初等若クハ初等科中等科。

高等小學校數及設置區域指定表

明治十八年八月、教育令改正となり、同十九年一月、小學校教則亦改正となり、本縣にては又々明治十七年十一月の布達を廢し、新に町村立小學校教場數及び設置區域を指定せり。學區數は二百六十學區とし、之を十二に區分し、高等小學校十七を設置し、尋常小學校は一區一校の標準と爲したれど、學區によりては二校乃至三校を設くるあり。或は一本校一分教場を設くるありて、一樣ならず。尋常小學校の數は、明治十九年十二月末日調、四二〇校內私立五校なり。

明治十九年二月廿三日、甲第廿一號、市町村立小學校教場數及設置區域指定、四月一日より。

高等小學校數及設置區域指定表

| (設置區域學區名) | (位置) | (學校名) |
| --- | --- | --- |
| 東群馬郡 南勢多郡 自第一學區 至第三十八學區 | 東群馬郡前橋町 | 東群馬 南勢多 高等小學校 |
| 西群馬郡 片岡郡 自第三十九學區 至第七十八學區 | 西群馬郡高崎驛<br>同　郡澁川村 | 西群馬 片岡 第一高等小學校<br>同　第二高等小學校 |
| 緑野郡 多胡郡 自第七十九學區 至第九十八學區 | 緑野郡藤岡町<br>多胡郡吉井町 | 緑野 多胡 第一高等小學校<br>同　第二高等小學校 |
| 南甘樂郡 自第九十九學區 至第百十二學區 | 甘樂郡萬場村 | 南甘樂高等小學校 |
| 北甘樂郡 自第百十三學區 至第百廿五學區 | 北甘樂郡富岡町<br>同　郡下仁田町 | 北甘樂第一高等小學校<br>同　第二高等小學校 |
| 碓氷郡 自第百廿六學區 至第百四十四學區 | 碓氷郡安中町<br>同　郡松井田驛 | 碓氷第一高等小學校<br>同　第二高等小學校 |
| 吾妻郡 自第百四十五學區 至第百六十五學區 | 吾妻郡中ノ條町<br>同　郡長野原町 | 吾妻第一高等小學校<br>同　第二高等小學校 |
| 利根郡 北勢多郡 自第百六十六學區 至第百八十九學區 | 利根郡沼田町 | 利根 北勢多郡 高等小學校 |

山田郡

自第百九十學區　至第二百三學區――山田町桐生新町――山田高等小學校

新田郡

自第二百四學區　至第二百十八學區――新田郡太田町――新田高等小學校

邑樂郡

自第二百十九學區　至第二百四十一學區――邑樂郡館林町――邑樂高等小學校

佐位那波郡

自第二百四十二學區　至第二百六十學區――佐位郡伊勢崎町――佐位那波高等小學校

明治二十年三月、小學校設置區域及び位置を指定したれど、大體從前の通りにて、大なる變更なかりき。明治二十二年三月、町村區域名稱を改定し、四月一日より施行するに隨ひ、學區制も亦此年十二月を以て改正し、東群馬外九郡尋常小學校設置區域を定め、其區域は總て町村の區域に據るべしと定めたり。明治二十三年十二月に於ける學區學校數三一〇校、公立三〇一 私立九、生徒數七二、八八九なりき。

明治二十三年の改正小學校令に於ては、小學校を分ちて尋常・高等の二種とし、兩種を併置して尋常高等小學校と稱するを得しめ、漸次高等小學校の併置を奬

働したる結果、年毎に尋常小學校及び高等小學校の數の減少を來したる反對に、尋常高等小學校數の增加を見るに至れり。

小學校數及學校別百分比例

| （年次） | （校數）尋常小學校 | 尋常高等小學校 | 高等小學校 | （合計） | （校數百分比）尋常小學校 | 尋常高等小學校 | 高等小學校 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 明治二十九年 | 二九七 | 七六 | 五二 | 四二五 | 六九、九 | 一七、九 | 一二、三 |
| 同　三十八年 | 一八八 | 一七三 | 三五 | 三九六 | 四七、五 | 四三、七 | 八、八 |
| 大正　三　年 | 五〇 △四 | 二二三 △九五 | 三 | 二七六 △九六 | 一八、一 | 八〇、八 | 一、一 |
| 同　十二　年 | 四四 △一 | 二二八 △九七 | 三 | 二七五 △九八 | 一六、〇 | 八二、九 | 一、一 |

△印　分校數

## 四　學級及兒童數

學校數は教育の發達に隨ひ、漸時遞減したるも、學級及び兒童數は之に反して、漸時增加したるは、左表に由りてその一班を知ることを得べし。

| （年次） | （學級數）（尋常科） | （高等科） | （合計） | （兒童數）（尋常科） | （高等科） | （合計） | （備考） |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 明治二十九年 | 一、〇七五 | 三二九 | 一、四〇四 | 六二、〇三八 | 一六、四〇三 | 七八、四四一 | |
| 明治三十四年 | 一、一七三 | 五二三 | 一、六九六 | 七四、〇六九 | 二二、〇〇二 | 九六、〇七一 | |
| 明治四十年 | 一、五七二 | 六八五 | 二、二五七 | 八三、〇六二 | 二九、三五九 | 一一二、四二一 | |
| 明治四十一年 | 一、九九六 | 四四四 | 二、四四〇 | 一〇一、〇七三 | 一五、八一四 | 一一六、八八七 | 義務年限延長ニヨリ尋常科學級增加 |
| 大正三年 | 二、三三八 | 四四一 | 二、七七九 | 一二四、一六六 | 一四、四二三 | 一三八、五八九 | |
| 大正十二年 | 二、七七八 | 四七一 | 三、二四九 | 一四四、八五八 | 三二、七五五 | 一七七、六一三 | |

## 五　教科課程

本縣小學校の教則は、政府の法令に準據して、その細目を設くるにすぎざれば、勿論その法令の規定以外に出づることを得ず。唯法令の範圍内に於て、多少の特異あるを以て、年次に從ひて之を揭ぐることとす。

明治五年九月小學校教授細則

下等小學　六歳ヨリ九歳ニ止マリ、四ヶ年八級ニ分チ、毎級課程修業期間、各六ヶ月ト定メ、始メテ學ニ入ル者ヲ第八級トシテ、次第ニ進ミテ第一級ニ至ル、學科

トシテ綴字・習字・單語讀方・洋法算術・修身口授・單語諳誦・會話讀方・單語書取・讀本讀方・地學讀方・養生口授・會話暗誦、(以上第五級。) 習字・會話書取・算術・讀本輪講・地學讀方・地學輪講・文法・養生口授・理學輪講・書牘・各科溫習。(以上第一級マデ。)

上等小學　十歲ヨリ十三歲ニ終ル四ヶ年。亦八級ニ分テ、毎級課程各六ヶ月トス、」第八級ニ起リ、第一級ニ終ル。學科ハ細字習字・算術・讀本輪講・理學輪講・文法・書牘作文・地學輪講・史學輪講・細字速寫・圓罫畫・書牘・幾何。(以上第五級マデ。)細字速寫・算術・書牘・理學輪講・地學輪講・文法・史學輪講・幾何罫畫・博物・化學・書牘作文・生理・諸科溫習。(以上第一級マデ。)

明治六年四月、算術ハ洋法算術トアレドモ、和算ヲモ課スル意義トセラル。

明治六年五月改正、初メテ毎級ニ體操科ヲ置ク。

明治八年九月改正、熊谷縣小學教則

下等小學教科　讀本・習字・算術・綴字・書取・作文・問答・復讀・修身口授・讀科溫習・體操。(以上第八級ヨリ第一級マデ。)

上等小學教科　讀本・讀本輪講・習字・算術・罫畫・幾何・作文・輪講・體操・諸科溫習。(以上第八級ヨリ第一級マデ。)

明治十年四月改正。

小學下等教科　讀物・復讀・作文・書取・問答・算術・習字・體操・諸科溫習、(以上第八級ヨリ第一級マデ。)

小學上等教科　授讀(讀物科)・輪讀(理學科)・輪讀(地理科)・輪讀・諸科溫習・問答・作文・記簿法・罫畫・算術・幾何・習字・體操(以上第八級ヨリ第一級マデ)

明治十一年十二月改正。

下等小學教科　讀物・復讀・書取・問答・算術・習字・體操、(以上第八級ヨリ第一級マテ。)

上等小學教科　授讀・輪讀・輪講・問答・作文・記簿法・罫畫・算術・幾何・習字・體操。(第八級ヨリ第一級マデ。)

明治十四年十一月改正(明治十四年五月文部省達小學校教則綱領ニ準據。十一月十四日、甲第百六十二號。)

小學初等科　修業年限三ヶ年。第一年ヨリ第三年ニ至リ、一ヶ年ノ修業期間ヲ前期・後期ノ二期ニ分チ、各六ヶ月ヅツトス。教科ハ修身・讀書・算術・唱歌・體操トス。(小學校ニ唱歌科ヲ設ケラレタル最初トス。)

小學中等科　修業年限三ヶ年。第四年ヨリ第六年ニ至ル。前期後期ノ別、初等科ニ同ジ。教科ハ修身・讀書・習字・算術・地理・歷史・圖畫・博物・物理・唱歌・體操トス。且女子ノタメニ裁縫科ヲ設ク。

小學高等科　修業年限二ヶ年。第七年ヨリ第八年ニ至ル。前期・後期ノ別、前二等科ニ同ジ。教科ハ修身・讀書・習字・算術・地理・圖畫・化學・生理・經濟・唱歌・體操トス。且ツ女子ノタメニ裁縫科ヲ設ケ、經濟ニ換フルニ家事經濟ヲ以テス。

明治十九年一月改正、四月ヨリ施行。

尋常小學科　修業年限四ヶ年。第一年ヨリ第四年ニ至ル。修業年限各一ヶ年。教科ハ修身・讀書・習字・算術・地理・歴史・唱歌・體操トス。地理・歴史ハ所謂鄉土・地理歴史ニシテ、學校近傍地理、上野地誌概略ヲ授ク。

高等小學科　修業年限四ヶ年。第一年ヨリ第四年ニ至ル。修業年限各一ヶ年。教科ハ修身・讀書・習字・算術・地理・歴史・理科・圖畫・唱歌・體操・裁縫・農業トス。

明治二十年二月制定。（明治十九年四月、小學校令準據。）

尋常小學校　修業年限四ヶ年。教科ハ修身・讀書作文・習字・算術・唱歌・體操。

高等小學校　修業年限四ヶ年。教科ハ修身・讀書作文・習字・算術・地理・歴史・理化・圖畫・唱歌・體操・裁縫・英語トシ、唱歌・英語ヲ隨意科トス。女子ニハ、讀書ノ一時間ヲ割キテ、育兒・家政ヲ口授スベシ。

小學校令ノ本則ニハ、隨意科目トシテ英語・農業・手工・商業ノ四科アリテ、英語ハ一科ヲ課シ、農業・手工・商業ハ、一科若クハ二科ヲ課スコトアリ。

明治二十五年六月、群馬縣令第三十七號。（明治二十三年十月、小學校令準據。）

尋常小學校　修業年限四ヶ年。教科ハ修身・讀書作文・習字・算術・體操。

加設科目　日本地理・日本歷史・圖畫・唱歌・手工・裁縫。

高等小學校　修業年限四ヶ年。教科ハ修身・讀書作文・習字・算術・日本地理・日本歷史・外國地理・理科・圖畫・唱歌・體操・裁縫。

加設科目　幾何ノ初步・外國語・農業・商業・手工。

明治三十三年ノ改正小學校令ニ於テハ、修業年限教科科程ニハ別ニ變更ナク、唯讀書作文・習字ヲ合セテ、國語トシ、高等小學校ノ日本地理外國地理ヲ合セテ、地理トシタルニ過ギズ。

本縣ニテ裁縫科ヲ加設シタルハ、明治二十九年ニハ、既ニ八校アリ。農業ハ明治三十四年ヲ初トシ、十六校、商業ハ明治三十七年ヲ初トシ、八校アリ。就中農業科ハ本縣ノ情況ニ應ズルヲ以テ、縣下高等科ノ殆ンド全部ガ之ヲ加設シ、實習地ヲ備フルニ至ル。

明治四十年三月勅令第五十二號

尋常小學校　修業年限六ヶ年。學科ハ修身・國語・算術・日本歷史・地理・理科・圖畫・唱歌・體操・裁縫。加設科目ハ手工。

| 名稱 | |
| --- | --- |
| 高等小學校 | 修業年限二ヶ年。學科ハ修身・國語・算術・日本歷史・地理・理科・圖畫・唱歌・體操・裁縫。加設科目ハ手工・農業・商業・英語。 |

## 六　教員

明治五年學制頒布當時、大・中・少教授、及び大・中・少助教を置きしが、後その名稱を改めて、訓導・訓導補・授業生の三種とせり。明治十年、群馬縣學制に據れば、小學教員は訓導或は訓導補と稱し、囑任・解任共、本縣の辭令を以て之を行ふこととせり。明治十三年、公立小學校教員委囑法に據れば、教員を分ちて、訓導・准訓導・授業生の三種とし、教員は締約書を作成し、保證人加判し、本縣の認可を受くるものとす。而して明治十五年四月、町村立小學校職員任免規則(本縣布達甲第三十二條)にては、職員を分ちて、校長・訓導・准訓導・授業生・助手とし、校長は特置するも、又三等以上の訓導より兼務せしむるも、地方の便宜たるべし。是れ明治十四年六月十五日、太政官達、小學校職員名稱、並准官等に準據したるものにして、小學校に校長ある、この法令發布以後の事に屬す。蓋し此に至るまでは、學校長の職務は、專ら學區取締及び學校保護

役等の掌る所たりしならん。而して小學校職員は、學務委員の申請により、縣令之を任免す。任免には縣令の辭令を用ゐ、職員は請書竝に誓書を出すことゝす。

待遇

小學校教員の待遇につきては明治十年、群馬縣學則中に制定したる所なりしが、此時左の如く俸給令を改正し、准官等の待遇をも設けられたり。

| | （准官等） | 月俸 |
|---|---|---|
| 小學校長 | （十一等以下十三等以上） | |
| 小學校一等訓導 | （十一等） | 三十圓以下二十圓以上 |
| 二等訓導 | （十二等） | 廿五圓以下十七圓以上 |
| 三等訓導 | （十三等） | 二十圓以下十三圓以上 |
| 四等訓導 | （十四等） | 十七圓以下十三圓以上 |
| 五等訓導 | （十五等） | 十五圓以下十二圓以上 |
| 六等訓導 | （十六等） | 十七圓以下九圓以上 |
| 七等訓導 | （十七等） | 十二圓以下七圓以上 |

其月俸の多寡等級の高下は、師範學校卒業、若くは免許狀の優劣を以て定む。而して五等訓導以上は高等科、六等訓導は中等科、七等訓導は初等科に教員たるの制あり。

次に旅費日當につきて規定は左の如し。

| （管内竝旅行） | （同滯留） | （管外竝旅行） | （同滯留） | （赴任旅行） |
|---|---|---|---|---|
| 金八拾錢 | 金三拾錢 | 金壹圓五拾錢 | 金五拾錢 | 金壹圓九拾錢 |

小學校教員月俸

備考

（イ）竝旅行は學校より片道六里以上より之を給すべし。

（ロ）竝旅行・赴任旅行、各一日十里詰を以て給し、十里以上の端里數、滿一里以上は日當一日分を加へ、一里未滿は給せず。

以上俸給旅費規則は、明治十八年の改正、明治十九年七月、町村立小學校々長教員旅費支給規則、明治二十年二月、小學校職員月俸支給規則の改正を經て、明治二十年二月五日、群馬縣令第十五號、小學校職員月俸旅費規則の制定に至りて、著しく俸給額を高められたり。

小學校職員月俸

| | （學校長） | | | （同補） | | （訓導） | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | （一等） | （二等） | （三等） | （四等） | （五等） | （六等） | （七等） | （八等） | （九等） | （十等） |
| 上級俸 | 五〇圓 | 四〇圓 | 三〇圓 | 二六圓 | 二二圓 | 一八圓 | 一五圓 | 一三圓 | 一一圓 | 九圓 |
| 下級俸 | 四五 | 三五 | 二八 | 二四 | 二〇 | 一六 | 一四 | 一二 | 一〇 | 八 |

（一）學校長ハ七等以上、同補ハ八等乃至九等ノ月俸ヲ給スベシ。訓導ヨリ兼務スルモノ亦同ジ。

（二）訓導試補ノ月俸八圓ヨリ六圓マデ。
（三）授業生ノ月俸五圓ヨリ三圓マデ。

小學校教員待遇向上

明治二十九年三月、市町村立小學校教員年功加俸國庫補助法（法律第十四號）を公布せられ、小學校教員待遇の途漸く備はれり。該規程に依れば、市町村立小學校の正教員及准教員にして、五箇年以上一學校に勤續するものには、國庫より年功加俸を給することゝし、其割合は五箇年勤續のものには、本俸の百分の十五、五箇年以上は五箇年毎に更に百分の十を加へ、百分の三十五に至て止む。然るに此年功加俸令は、明治三十三年三月、法律第六十三號、市町村立小學校教育費國庫補助法、及び同三月勅令第百三十三號、市町村立小學教員加俸令に依りて改正せられ、同一學校を同一府縣内として、地方長官に於て成績佳良なりと認めたる者とし、給與額は本科正教員年額二十四圓、准教員同十八圓とし、勤續五年を加ふる毎に、本科正教員にありては年額十八圓、准教員にありては同十二圓を加ふる事となり、本縣又縣令第五十五號（明治三十三年六月八日）を以て、市町村立小學校教員加俸給與細則を定めたり。此改正令に依りて給與せられたる人員は、明治三十五年に於て、男八四二人、女五人、計八四七人にして、加俸額一萬七千六百六十四圓となれり。

| | 年功加俸 一八圓 | 年功加俸 二四圓 | 年功加俸 三六圓 | 年功加俸 (四八圓) | 年功加俸 (六〇圓) | 増加加俸 (一二圓) | 増加加俸 (一八圓) | 多級加俸 (二四圓) | 單級加俸 (三五圓) | 僻陬加俸 (一八圓) | 僻陬加俸 (二四圓) | 特別増加加俸 (一二圓) | 特別増加加俸 (一八圓) | 人員合計 | 金額合計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 大正六年 | 三三二 | 六五九 | 六〇六 | 一七 | 三 | 二 | 九二 | 三 | 二 | 二六 | 七二 | — | 一六 | 一、七四二 | 四七、三五二 |
| 大正十四年 | 三二〇 | 四八〇 | 八〇八 | 一三 | 一 | 九七 | 一三四 | — | 三 | 二八 | 五五 | 九 | 一八 | 一、八四七 | 五一、五四二 |

此頃此年市町村立小學校教員待遇法開かれ、曩に明治二十四年十一月、勅令第二百十八號により、小學校長及び正教員も判任文官と同一の待遇を受くるに至り、且つ一般官吏の如く退隱料、及び遺族扶助料を受くるの權利を附與せらるゝに至れり。明治二十三年十月二日、法律第九十號、市町村立小學校教員退隱料及遺族扶助料法。教員俸給の如き、明治三十年に至り、勅令第二號を以て、小學校教員の俸給は、正教員月俸平均額尋常十二圓、高等十六圓を町村に於て義務として支出を命せらるゝに至り、又小學校本科教員の月俸は、正教員は六圓、准教員は四圓を下るを得ざらしむ。又明治三十年三月三十一日、群馬縣令第十七號を以て、市町村立小學校教員給料額、及び旅費額標準竝給料・旅費其の他諸給與支給規則を定め、最大極限月額六十圓まで給與することを得しめたり。

市町村小學校教員給料月額

| | 一等 | 二等 | 三等 | 四等 | 五等 | 六等 | 七等 | 八等 | 九等 | 十等 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 上級俸 | 五〇 | 四〇 | 三〇 | 二二 | 一八 | 一四 | 一二 | 九 | 七 | 五 |
| 下級俸 | 四五 | 三五 | 二五 | 二〇 | 一六 | 一三 | 一〇 | 八 | 六 | 四 |

高等本科正教員　七等下級以上。
高等本科准教員　九等上級俸以上。
尋常本科正教員　八等下級俸以上。
尋常本科准教員　十等上級俸以上。

小學校教員の種類を正教員・准教員の二種となしたること、明治二十三年小學校令により定まる。

明治三十三年十月十七日、群馬縣令第八十七號明治三十三年八月、勅令第三百四十四號、小學校令及び明治三十三年八月文部省令第十四號、小學校令施行規則實施に關する細則により、小學校本科正教員の俸給、一級上俸七十五圓を給し、一級上俸を受け特に功勞ある者には、漸次百圓まで增すことを得とせらる。而して教員の任用・解職に就いて、市立小學校長及び教員の任用は、市長の申請に依り、町村立小學校長及び教員の任用は、郡長の申請に依り、府縣知事之を行ひ、市町村立小學校長及び教員の解職は、府縣知事之を行ふ規定となりて、現時（大正十五年三月）に

至る。

明治四十年六月、四十四年四月一日の小學校令施行規則の改正により、小學校教員の月俸額は、本科正教員一級上俸九十五圓とし、特に功勞あるものは、百二十圓まで增すを得ることとなり、此年十月、奏任文官と同一の待遇を賜はる規定も設けられて、教員の待遇は次第に高まり、更に大正七年三月、及び九年八月の文部省令を經て、本科正教員の一級上俸は百八十圓、特に功勞者は二百四十圓まで增給することを得せしむる規定に改正もられ、現時に至る。本縣にても省令の改正により、漸時に待遇も改まり、大正十二年度末調にて、總數三千二百一人中、一級上俸一人、二級上俸一人、二級下俸三人、三級上俸十八人あり。奏任待遇を受けたものは、大正十四年度末在職者三名なり。

明治三十八年六月、文部省令第十一號、小學校教育效績狀規程により、效績顯著なるものとして、文部大臣より選奬に預りしもの、明治三十九年以來、大正十四年に至るまで十五人、又明治四十三年九月、訓令第六十三號、普通教育奬勵規程により、本縣知事より選奬されたるもの、明治四十三年度より大正十三年度まで、百三十二人を數へり。

教員住宅補助費

教員優遇の一方法として、教育資金の一部を割いて、教員住宅補助費に充當するの制を設けられたれば、本縣は明治四十一年二月、群馬縣令第四號を以て、之が規程を創定し、同四十二年九月、之が規定を改正し、建設費に對しては、十分の五以内、住宅料並に賃借料に對しては、十分の三以内の補助を與ふること丶して、之が設置・給與を奬勵せり。その成績は左の如し。

| | （住宅施設ノモノ）町村數 | （住宅施設ノモノ）住宅戸數 | （住宅施設ノモノ）居住教員數 | （住宅料支給ノモノ）町村數 | （住宅料支給ノモノ）教員數 | （住宅賃借料支給ノモノ）町村數 | （住宅賃借料支給ノモノ）教員數 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 大正六年 | 七三 | 一七三 | 一八五 | 三五 | 三三〇 | 二 | 八 |
| 同　十四年 | 一〇五 | 一一九 | 一八九 | 七五 | 五五 | 一二 | 七七 |

職務及服務

小學校教員の服務に就いては、明治十年九月、小學訓導心得を令達して、教員の心得方を指示したりしが、明治十二三年頃、民間に民權自由の說漸く喧傳せられ、不穩當なる急進的思想は、社會一般の風潮となり、小學校教員の間にも浸入せしかば、政府は明治十三年四月、集會政社法を定め、教員・學生の政黨・政社に關する集合に加はるを禁じ、翌十四年六月十八日、文部卿は小學校教員心得を頒ち、その一項中に教員たる者は、常に寬厚の量を養ひ、中正の見を持し、就中政治及び宗教に

渉り、執拗矯激の言論をなす等のことあるべからずと明記せり。依つて本縣亦此法令の趣旨を體し、明治十五年八月、縣立學校及び町村立學校教員は、商賈の營業及び新聞・雜誌等に於て、私に一切の政務を敍述し、及びその職務に係る外、政談講學を目的として公衆を聚め、講談演説の席を開く等を禁止する諭達を發したり。是れより先、四月布達したる町村立小學校職員任免規則中、教員任命の際提出したる誓書中に、專心勵精本務に從事仕るべく、殊に詭激の言論を愼み云々と宣誓せしめたり。

明治十六年一月、縣達丁第二號を以て、小學校長・教員等職務心得を布達し、校長訓導・准訓導・授業生・助手の職務を明示せり。翌十七年四月、縣達第十三號、學校長・首席教員・學務委員・事務取扱心得を定めて、校務の掌理整頓に就いて規定する所ありて、次第に小學校教員の職勢及び服務に關する規定整頓したりしが、明治二十五年六月、(縣令第四十九號)、小學校長及び教員職務及服務細則を以て、校長及び教員の職務及び服務を明記せり。即ち校長は教員の分掌を定むること、學校の風紀を保持すること、學校に屬する物品及び文書を整理保存すること、學校衞生に關することと、教員は教授準備をなすこと、教具の整理をなすこと、教育の成績を調査す

ることを職務の要項と定む。是れ素より文部省令第二十一號、小學校長及び教員職務及び服務規則に基き規定したるものなれど、此細則によりて、小學校長及び教員の職務及び服務は愈ゝ整頓するに至れり。明治三十年六月には、小學校長及び教員職務及び服務細則を改正公布せり。（縣令第三十號。）然るに明治三十三年十月十七日、小學校令施行規則實施に關する細則を定むるに及びて、學校長・教員の職務及び服務は改定せられ、其中の一章に收めらるゝに至れり。

服制

市町村立小學校男教員の服制は明治三十年六月、執務上洋服を著用すべきを訓令したりしが、明治三十七年六月、その後二回に亘り改正訓令を發したり。併し式日外に洋服を著用することには變更なし。女教員の服制に付ても明治四十一年二月訓令を以て執務上筒袖及び袴を著用すべきことを規定せり。學校教員の商賣の營業については、明治十五年八月、禁止の布達ありしかど、大正八年八月、本縣は副業奬勵の訓令を發するに及び、其中に「且事情ノ許ス限リ、教員ノ家族ヲシテ、適當ナル副業ニ從事シ、以テ家産ヲ治メンコトヲ期スベシ」と加へて、教員の家族には適當なる營業を奬勵したり。

教員數

就學兒童の增加に伴ひ學級數亦隨つて增加すれば、所要の教員數も增加する、

亦自明の理なり。その教員數は別表の如し。而してこの員數を男女の性別に就き、其百分比例を見る時は、明治三十八年を劃して、其比率に著るしき差別を見るべし。是年は群馬縣女子師範學校第一回卒業生を出したる年にして、明治三十五年、女子師範學校の設立後、講習科の規程も設けられ、女教員養成機關の整備したる結果と見らるべきものなり。又教員種別に就き、正教員の充實歩合を調査する時は、明治三十八年頃までは、五〇%前後なりしが、明治四十一年の義務教育年限延長制度の實施に及びたるより、學力補充の講習を開き、或は無試驗檢定・試驗檢定の制度により、正教員の不足を補ひたるを以て、大正二三年頃より、著しく增加を來し、大正五年度には、七八、九四%に上りしが、大正六年度には、七六、六〇%に下り、大正十四年度には、七二、一三%に下れり。これ大正六七年以後、退職して他の業務に轉ずるものを生じたると、他方學級數の增加とによれるなり。

男女教員數及百分比例表

| (年度) | (男教員數) | (女教員數) | (總計) | (教員全般中女教員百分比) |
|---|---|---|---|---|
| 明治九年 | 一、一〇八 | 八 | 一、一一六 | 〇、七二 |
| 明治十九年 | 一、三五九 | 四三 | 一、四〇二 | 四、一三 |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 明治卅年 | 一、四七六 | 六九 | 一、五四五 | 四、四七 |
| 明治卅五年 | 一、九四二 | 三三九 | 二、二八一 | 一三、九七 |
| 明治卅八年 | 一、九九三 | 四六四 | 二、四五七 | 一八、八八 |
| 明治四十年 | 二、〇三五 | 五三四 | 二、五六九 | 二〇、七九 |
| 大正元年 | 二、六九四 | 五六二 | 二、二五六 | 一七、二六 |
| 大正五年 | 二、四四六 | 七九九 | 三二四五 | 二四、六二 |
| 大正十年 | 二、〇八五 | 一、〇四一 | 三、一二六 | 三三、三〇 |
| 大正十三年 | 二、五九八 | 一、二六四 | 三、八六二 | 三二、七三 |

教員の養成

## 七　檢定試驗

明治五年の學制中、小學校教員は男女を論ぜず、年齢二十歳以上にして、師範學校卒業免狀、又は中學免狀を得たるものとせられしが、草創の際、有資格者に乏しきを以て、先づ教員傳習小學を設立し、次いで師範學校を設置し、專ら教員の養成を圖れり。明治七年創定の學務概則には、小學教員たるべき者は、必ず暢發學校、若くは中學本部傳習所に於て、卒業免狀を受くる者を任用することゝし、免狀な

者は、其任に當るを許さゝるの制としたり、明治十年六月、小學校教員名稱等位設定の爲め、各小學校教員一同を師範學校に會せしめ、又小學校教員現職ならざる者も、教員志願にして試驗を請ふ者は、學業試驗を行ひ、受驗者實に九十九名ありき。翌十一年三月には、訓導試業法を制定し、正科・豫科試の二法を立て、正科は訓導、豫科試は訓導補たるべき者の試驗なりしが、明治十三年七月、教育令第三十八條但書に基き、公立小學校學力試驗法を公布し、公立師範學校の卒業證書を有せざる教員志願者を試驗せり。是れ小學校教員學力檢定試驗の創始なり。即ち試驗を甲乙丙の三種に別ち、甲種は訓導、乙種は准訓導、丙種は助手の資格を與ふるものにして、試驗場を本縣師範學校、時期を毎年一月・八月の二期とす。明治十七年三月には、師範學校應請卒業試驗手續を定め、年齡十八年以上にして、體格強壯なる者、本縣に於て滿一箇年以上、小學校教員に從事する者に限り、毎年五月・十一月の二期、學術試驗を行ひ、合格の見込ある者を、尙五週間留め置き、實地授業及び體操術を傳習せしめ、其成績により、及落を判する制を設けたることありしが、後明治廿三年、文部省令第十九號を以て、小學校教員檢定等に關する規則を頒布せらるゝに及び、本縣にては明治廿五年七月、小學校教員檢定等に關する細則

教員學力試驗の創始

を定めたり。是れ即ち甲種認定・乙種檢定にして、前者は出願者の學力及び經歴を調査し、學力檢定を行はず、後者は學力檢定により、小學校教員免許狀を授與する制度にして、其後その細則に至りて、多少の變更こそあれ、此二種の檢定法は變更なく、適當なる教員增加の方法として今に繼續せらる。

## 八　教科書圖書審査

小學校教科書は、學制時代教育令時代に於ては、主として文部省調査濟の教科書表に據り、取捨撰擇して採定したるものなるが、明治二十年三月に至り、公立及び私立小學校教科用圖書採定の方法を定め、地方長官は此省令に基き、審査委員會を組織し、其會議の議決に依り採定したり。明治二十三年、小學校令の改正せらるゝに及び、圖書審査に關する規定も亦改まり、明治二十四年十一月、文部省令第十四號を以て頒布せられたり。本縣はこの改正令に準據して、小學校教科書圖書審査に關する細則を定めたり。（明治二十五年六月二十三日。）審査委員には府縣官吏一名、尋常師範學校長及び同教員二名、小學校教員二名乃至三名、府縣參事會員二名よ

り、知事之を任命する規定なり。此後二十六年九月、文部省再審査委員規程を改正するに及び、本縣亦之を改正して、府縣高等官及び學務擔任官吏各一名、府縣參事會員二名、尋常師範學校長・同教諭・尋常中學校長・小學校長等とし、三十二年六月、更に審査委員會の組織に改正ありたるにより、本縣亦隨つて之を改正し、府縣高等官は府縣視學官及び視學とし、府縣參事會員を學務擔任官吏としたり。以上審査委員會の組織には、再三の變更ありたれど、審査委員會は依然繼續せられ、明治三十八年四月、國定教科書を採用するに至りて廢止せられたり。

## 九　視學機關

學區取締

學校保護役

明治五年の學制に於て、小學校の督學事務は、一中學區に學區取締十名乃至十二名を置き、一名に二十又は三十の小學區を分擔せしめ、學區取締は專ら區内の人民を勸誘して學に就かしめ、且つ學校を設立し、學校を保護し、費用の便用を計る等、その學區内の學務に關する一切の事務を擔任せしめ、一中學區内の事に關し、互に相論議して、專ら便宜を計り、區內の學事を進步せしむる職能を有したり

しが、本縣は明治十二年二月、學區取締竝學校保護役事務心得を改正し、保護役は本縣の成規を奉じ、學校維持を擔當し、學區取締區戶長に協議し、學資出納及び一切の雜務を掌り、學區取締は學制竝に本縣の成規を奉じ、其擔當區內の人民を獎勵し、學事をして擴張せしめ、大は學校開設、學資徵集、學校維持の方法より、教員保護役の勤惰・品行まで監視する等にて、督學事務稍緒に就きたりしが、此督學事務は、明治十三年七月、學務委員職務章程と共に、各郡に督業教師を創置するに及び、大に整頓せり。其中督業教師職務章程の概要は、左の如し。

小學巡回督業教師

一、督業教師は、事を學務課に稟け、小學の業を督するを以て任とす。

一、督業教師は、各郡長所轄內へ一名を置き、郡長所在の地を以て根據と定むべし。

一、巡回は、毎月三週間以上を以て定規とし、毎月巡回日誌を製し、翌月五日を以て、學務課へ申報すべし。

思ふに曩の學區取締及び學校保護役の制は、主として學校設置、設備整頓、經費支出の方法等にて、教授以外の外觀形式等に關し、教授方面の內容充實に至りては、未だ缺くる所ありしを以て、明治十二年、初期の縣會に於て、小學巡回督業教師の經費を議決し、翌年より實施するに至りしなり。然るに此規程は、翌明治十四

小學校督業

巡閲委員

年六月限り、一旦廢止せられたれども、同十七年四月、小學督業設置規則、同處務規程となりて、再び布達せられたり。小學校督業は、小學教育の改良進歩を圖る爲めに之を置き、定員を設けず。其准官等・月俸額は、師範學校教諭に準じ、縣令之を任免す。其職掌は、縣令の命を受け、町村立私立小學校教員講習會に臨み、又は小學校生徒を試驗し、又は小學校を巡視し、生徒學業の監視、教員の能否、勤惰品行等に就き意見を縣令に具申することを得ることゝす。明治二十三年改正小學校令に、郡に郡視學一名を置き、府縣知事之を任免し、郡長の指揮命令を受けて、郡内の教育事務を監督するの條項ありたるが、郡の申出に依りて、之を置かざるを得る但書ありたるに依り、本縣にては之を置かず。由りて本縣は視學機關として、暫時小學校巡閲規程を設けたり。即ち管內學事を視察するを目的とし、縣內を左の五巡閲區に區分して、毎區に一名の巡閲委員を置けり。

| | | |
|---|---|---|
| 第一區 | 東群馬・南勢多・佐位・那波 | 四郡 |
| 第二區 | 西郡馬・片岡・綠野・多胡 | 四郡 |
| 第三區 | 南甘樂・北甘樂・碓氷 | 三郡 |
| 第四區 | 吾妻・利根・北勢多 | 三郡 |

第五區　山田・新田・邑樂　三郡

而して各委員は自己の主任とする區内の小學校・町村役場、郡役所を巡閲し、校長・教員の良否・教育費收支の事項、校舍・校具等、學校の設備に關する事項、學齡兒童の就學・不就學、在籍生徒と出席生徒との關係、諸帳簿の整理否、其他必要と認むべき事項を巡閲するを任務とし、而して各委員は年一回以上、他區に交互交代して巡閲するものとす。

**郡視學の制**

然るに本縣は、明治二十九年八月より郡制を實施し、勢多・群馬の二郡先づ之を置き、其他の各郡は之を置かざりしかば、本縣はその否決上申を聞届け難しとして、再議に附せしめ、明治三十一年度より、多野郡を除く以外の各郡に之が設置を見たり。是に於て明治三十一年七月一日、群馬縣令第一號を以て、郡視學職務規程を制定せり。第一條に郡視學は小學校及び其他小學校令に掲ぐる學校等の視察に從事し、國民教育の改良上進を圖るにありと規定す。此規程發布の翌三十二年六月、地方官官制改正の結果、府縣に視學官及び視學を置かれ、郡視學に關する費用も、地方税支辨に移りたるを以て、縣下洽く之を設置せられ、縣内に於ける視學機關始めて完備せり。

**縣視學の制**

縣視學は明治三十年五月一日勅令第四十號を以

て定めたる地方視學の改正にして、本縣定員は二名なり。爾來地方官官制の改正に伴ひ、視學官の制度に變更はありたれども、縣視學・郡視學は依然として現時（大正十五年四月、）に及ぶ。

學事視察員

大正八年八月、本縣は學事視察に關する規定を制定す。學事視察員は公私立學校職員中より選ばれ、知事の命を受けて、教育事項につき隨時視察するものとす。視察の結果は、之を知事に復命し、學校教育の內容充實に資せんとするにあり。此視察員を管內中等學校職員中より任命し、各專門的見地より、小學校各科の視察を行はしむることもありき。

## 一〇　學校園及小學校樹栽規則

小學校樹栽規則

明治二十九年七月二日、群馬縣市町村立小學校樹栽規則を制定す。其目的とする所は、小學校生徒をして實業を重んずる思想を涵養し、及び植物學上の智識を育成せしめ、竝に學校の經濟を圖らしめんがためなり。而して其樹栽日は、諸祭日若くは特に學校に縁故ある日を選定して、記念的たらしむ。後明治三十七

學校園設施獎勵

年八月六日文部省訓令第七號を以て、學校樹栽を督勵せらるゝに至り、本縣亦此趣旨を體し、大に獎勵する所あり。逐年之が發達を見るに至れり。學校園の施設につきては、明治三十八年十一月七日、内務部長より之が獎勵の依命通牒を發せり。學校園の設置が、高尚なる趣味の助長、品性の陶冶、美的觀念の發暢、勞働勤勉の習性を養成する點に於て、頗る有效なるは言を俟たず。然れば本縣に於ても之が設置に着手したるものあり。創設年月日の最も古きもの、中等學校にては、師範學校の明治二十六年中、及び太田中學校の明治三十四年四月、小學校にては勢多郡粕川尋常高等小學校の明治二十二年三月、實業補習學校にては、碓氷郡原市實業補習學校の明治三十五年九月等なり。明治三十七八年には、戰役記念として設置するもの、次第に増加するに及び、縣は之を機會として、獎勵の通牒を發したるに依り、競うて之を設置し、明治三十九年一月の調査にては、左の成績を示せり。

| （學校別） | （現在學校數） | （學校園ヲ有スル學校數） | （學校園ノ總面積） | （同上既設學校一校當平均坪） |
|---|---|---|---|---|
| 中等學校 | 一三 | 一二 | 四、九〇五坪 | 四〇九坪 |
| 小學校 | 三九五 | ― | 七、九八六 | 七四 |

實業補習學校　三三　五　五五八　一一二

爾來年を逐ひて其數を增加し、現今に至りては規模の大小、栽種の差別等一樣ならずと雖も、各學校殆んど之が設置を見ざる所なきまでに至れりと云ふ。

## 二　小學校基本財產

小學校基本財產の蓄積必要の告諭は、學制時代明治八年に於て之を下して、その蓄積を奬勵したるが、（學制時代參照。）教育令時代に於ても、益〻その必要を認めて、明治十五年十月十三日無號を以て學校資本設備方に就いて諭達を發し、其蓄積法を指示せり。

學校資本設備方

學校資本設備方（明治十五年十月十三日無號）

人々身ヲ立ツルノ本ハ教育ニアリ。其子弟ヲシテ善良ノ教育ヲ受ケシムルハ、學校ヲ興起シ、世運ト倶ニ進步セシメザルベカラズ。是レ父兄タルモノ、義務也。凡ソ一學校ヲ維持スル、必ズヤ資本ノ設ケ勿ルベカラズ。管下或ハ既ニ其設ケヲナスアリト雖モ、蓋シ指ヲ屈スルモノ僅々ニ過ギザルノミ。夫レ一國ノ教育ヲシ

テ全盛ナラシメント欲セバ、先民意ノ歸向ヲ一ニシ、以テ資本ノ準備ヲ充タシムルニアリ。我ガ教育會ニ於テモ、亦大ニ所見ヲ同フシ、以テ二三ノ法案ヲ議決シ、之ヲ各地ノ參考タラシメ、大ニ民心ヲ勸起シ、我ガ上野一國ノ教育ヲシテ、他日全盛ノ地位ニ在ラシメンコトヲ企圖セリ。各自其レ教育ノ今日ニ切要ナルコトヲ體認シ、地方適應ノ方法ヲ設備シ、以テ學校ヲ興起シ、子弟ヲシテ果テ善良ノ教育ヲ受ケシメ候樣可致、參考法案相副、此旨諭達候事。

一、學田設クベキ也。然レトモ古ノ制ヲ用ユルニ非ルナリ。斯ニ欲スル所ノ者ハ、村民ノ協議ヲ以テ、數町或ハ數段ノ田圃ヲ購入シ、若クハ期借シ、之ニ附スルニ學田ノ名ヲ以テシ、其作物ノ如キハ肥料・地税等ノ諸費ヲ除去シ、殘餘ノモノハ卽チ小學校ノ資タラシムベシ。積ンデ數年ニ至ラバ、則巨額ノ學資ヲ得ル疑ヲ容レザル所ナリ。

一、原野多キ地方ニ於テハ、官地拜借ヲ願ヒ、桑・桐等ヲ仕立、或ハ部分木等ヲ取立バ、成木ノ後、利潤極メテ大ナラン。

一、財産餘裕アル者、並ニ教育ニ從事スル者、及有志者ハ、應分ノ金額ヲ十ヶ年賦ニ醵集シ、又該町村ニ於テ町村會決議ノ上、十ヶ年間小學校用豫算ノ十分一ヲ毎年增集シ、戸長學務委員之ヲ保監シ、以テ資金ノ增殖ヲナスベシ。

但シ其資金ハ該町村會決議ニヨリ、確實ナル公債證書購求スルモ、又銀行等ニ預ケオクモ適宜タルベシ。

以上揭くる所の數目の外、猶其地方により、各產出の物品、或は殖財の法、種々あるべし。適宜地方の協議を以て便益の計て可なり。

小學校基本財產蓄積竝管理規程準則

明治三十九年十二月に至り、訓令甲第七十七號を以て、小學校基本財產蓄積竝管理規程準則を發布し、その方法を明治四十年度より五十年間に亙り、繼續事業として、

(一)小學校生徒の報恩寄附金。

尋常科卒業生金「拾錢」以上。高等科卒業生金「參拾錢」以上。

(二)小學校樹栽地より生ずる收入。

(三)學校所屬財產より生ずる收入。

(四)敎育費豫算の殘餘。

(五)有志者の指定寄附金。

と規程し、四十年四月一日より實施したり。而して明治四十四年六月十三日、小學校敎育方針に關する訓令中に、小學校基本財產の增殖を計るべしといふ一項

を設けて、基本財産増殖の必要を縷々訓令する所あり。各市町村何れもその旨趣を體して、蓄積管理の方法を講せり。其狀況左の如し。

小學校基本財產調

| | 市町村數 | 小學校基本財產ヲ有スル町村數 | 土地 | 立木 | 建物 | 公債 | 社債 | 株券 | 現金 | 其他財產價格 | 計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 明治四十年 | 二〇七 | 七一 | 七〇、六五五 | — | 七、六五一 | 九、〇九五 | — | 七、二〇一 | 八二、九五二 | 一五、〇〇〇 | 一九〇、二六一 |
| 大正二年 | 二〇八 | 二〇二 | 一六六、九二三 | — | 二三、四五七 | 二三、六六四 | — | 二三一、五〇四 | 一二三、〇二八 | 四、九六六 | 五七一、五四一 |
| 同三年 | 二〇八 | 二〇四 | 一四一、六八三 | — | 四五〇 | 二三、九九四 | — | 一七五、三三一 | 一三五、五八一 | 七、九〇〇 | 四七四、六七七 |
| 同四年 | 二〇八 | 二〇三 | 一五一、五七三 | — | — | 五、八六七 | — | 一八八、七八六 | 一六七、三三五 | 一、八八一 | 五四三、九七一 |
| 同八年 | 二〇八 | 二〇五 | 二四一、九四一 | 八九、七一三 | 二五五 | — | 五一、六五三 | — | 二七一、九二九 | — | 一、二五四、五八六 |
| 同十二年 | 二〇八 | 二〇六 | 六八一、二〇九 | 一六三、三六五 | 一五二 | 一二、八四六 | 四三、四五五 | 四七、五四五 | 五九二、一二七 | — | 一、〇〇二、八四六 |
| 同十三年 | 二〇八 | 二〇四 | 七一六、四四一 | 四三二、五八〇 | 五九、七六〇 | — | — | 五七五、四九七 | 七三七、六五九 | 二〇、〇二三 | 二、六〇〇、六五九 |

大正十三年中、株券ノ欄ハ、社債公債有價證券ヲ含ム。

## 二　學事奬勵諸會

本縣にては普通教育の發達上進を圖らんが爲め、知事の諮問機關的の性質を帶びたる教育會を開きたる事、學制時代以來四回あり。その一は明治十五年七

教育通信規程

月頒布の群馬縣教育會規則なり。本會は管下學事の隆盛を企圖せんが爲めに、教育上緊要の事件を詢議するを目的とし、縣立學校長及同教諭各〻一名、各郡學務擔任郡書記各〻一名、公立小學校教員・學務委員各〻二名、總員六十一名を以て組織し、學務課員之が、之が答辨者たり。例會は八月一日より同七日に至る七日間にして、其諮詢議目は、小學校等位設制法、教育通信規程、學校資本設備の方法、小學校建築、書籍・機具・校舍修繕の爲め、地方稅より補助費を徵せんとする等、總て七項に涉りしものにして、會員よりも亦小學校補助資金積立法、學區更正、小學校へ兒傳教場を副設する等の建議ありて、其決議の結果、縣達として實施せられたる少からず。小學校基本財產の蓄積法として頒布したる、小學校資本設備方（同部項參照）も其一なるが、此年十月制定せられたる教育通信規程も、亦其一なり。本規程の目的は、本縣教育に關する論說意見等を採集し、汎く之を頒布し、教育の氣脈を通暢せんが爲めに設けられたるものにして、委員は各郡役所內に二名、各縣立學校に二名を置く。縣立學校は校長一名、及び校長の見込を以て教員中より一名を選定し、各郡は學務擔任の郡書記・學務委員及び小學校教員中より投票を以て之を定め通信事項は、通信委員及び通信文編述者、並に各學校に配布し、又必ず文部省に

送達する規定なり。斯くして縣は文部省通信の料に供するのみならず、併せて縣下教育進歩を促すの一具となさんとするにあり。（明治十五年十月三十日丙第六十七號）其二は、明治二十七年三月十一日制定の地方教育會規則にして、本會は知事の諮問に應じて縣內教育に關する事項を審議す。定員二十八名にして、尋常師範學校長・尋常中學校長・郡書記・町村立小學校教員・縣會議員・教育に經驗ある者の中より知事之を任命すとあり。其三は、明治三十年三月（訓令第七號）二の郡市教育協議會規則なり。即ち本縣教育各部の連繫統一を保ち、その發達上進を圖るが爲め、郡市長は郡市教育協議會を開くべし。その組織は、郡市學務主任書記・郡視學・小學校長・首席訓導若干名、實業學校長にして、郡市長は會長となる。明治三十二年九月廢止せらる。其四は、明治四十三年五月二日組織せられたる群馬縣小學校教育調査委員會にして、內務部長を委員長とし、學務課長・學務課屬・男女兩師範學校長、及び同校主事・各郡視學を委員とし、縣教育の方針に就いて調査したるものなり。此調査會の結果は、縣教育の四大方針として、翌四十四年六月、訓令第三十七號を以て發布せられ、今に至るまでこの方針を繼承しつゝあり。（第七章第一節第二期參照）

地方教育規則

郡市教育協議會規則

群馬縣小學校教育調査委員會

市町村學事會規程

明治二十八年七月八日、市町村學事會規程を制定す。市町村は普通教育の改

良を圖る爲めに、定時若くは臨時に學事會を開設することを得。其種類を甲乙に分ち、甲種學事會は市町村長・學務委員・學校醫、及び市町村立小學校教員を以て組織し、乙種學事會は市町村小學校教員を以て組織す。甲種學事會は各市町村、若くは町村學校組合に於て開設し、乙種學事會は一市町村、若くは數町村連合して開設することを得。而して乙種學事會は各郡數區に分ち、大正十四年四月末日現在調にては、全管下四十一區なり。本規程は明治四十一年二月、訓令甲第一二號を改正したり。

乙種學事會狀況 （大正十四年四月末日現在）

| （郡市名） | （會數） | （會員數） | （大正十四年度經常費） | （會員一人會員年額） | （市町村補助額） | （大正十四年度　主要事業） |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 勢多 | 五 | 四四一 | 一、四四三 | 圓 一、三〇 | 圓 七八三 | 研究授業・兒童體操會・學事視察・研究調査。 |
| 群馬 | 四 | 五八三 | 二、三五二 | 一、八一 | 一、〇一八 | 講演會・講習會・運動會・研究會其他。 |
| 多野 | 三 | 二八〇 | 八三五 | 一區 錢 三、三〇 二區 三、四〇 三區俸給百分の三 | 二〇〇 | 講演會・教科研究會・研究調査・研究視察員派遣。 |
| 北甘樂 | 三 | 三〇一 | 八〇三 | 一、三〇 | 三九一 | 講話會・出張研究・學事視察・講習會・教材研究・實地授業研究會。 |
| 碓氷 | 四 | 二六三 | 七七三 | 一、三〇 | 三一二 | 諸調査研究・講習・講演會・研究會・運動會ノ開催・學校參觀・見學旅行・視察員派遣。 |
| 吾妻 | 三 | 二三三 | 九〇七 | 二、三〇 | 三九三 | 教科目每ニ研究會ヲ學校每ニ開催、學事視察員派遣、聯合學藝會、運動會開催、修養ニ關スル講演、講話會。 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 利根 | 三 | 二九八 | 五四六 | 一、八三 | 一五三 學術研究其他。 |
| 佐波 | 四 | 二五八 | 一、〇四五 | 一、三三 | 四七九 授業法竝教材研究調査、學事視察・學術講演、又ハ講習會ニヨル教員修養。 |
| 新田 | 三 | 二三六 | 一、一六〇 | 月俸ノ二百分ノ一 | 五九八 講習會・實地授業研究會・准代用教員講習會・研究調査。 |
| 山田 | 三 | 二三〇 | 七五八 | 一區 一、六〇 二區 一、四〇 三區 一、三〇 | 二五二 各科教授等ノ研究、優良校視察。 |
| 邑樂 | 三 | 三二六 | 一、二二七 | 一、二八 | 七四 講習・講話・學事視察・研究發表・研究授業。 |
| 前橋 | 一 | 一四五 | 三二四 | 一、三〇 | 一〇〇 教育ノ研究、講習、講演會開催、學事視察。 |
| 高崎 | 一 | 一二〇 | 二九九 | 一、三三 | 一〇四 教授訓練ニ關スル研究調査、講演及講習、學事視察、初等教育研究會參加等。 |
| 桐生 | 一 | 一〇六 | 四一六 | 一、一〇 | 一八四 教育上ノ諸調査、教材研究、學事視察、講習會、會員相互ノ研究、其他。 |
| 全管 | 四一 | 三、八六九 | 一三、〇七八 | — | 五、七六三 |

## 第二項　幼稚園

幼稚園に就いては、明治五年頒布の學制に、幼稚小學として、男女の第六歳までの者、小學に入る前の端緒を教ふるものとあり。法規上には夙に定められたれども、直に實行に至らず。明治九年、東京女子師範學校の附屬として開設せられたるが、我國幼稚園の嚆矢なり。本縣にても此頃早く幼稚園設立の必要を認め、

幼稚遊戯場

幼稚科

高崎幼稚園

明治十年八月、東京女子師範學校保姆松野クラ、女史を招き、前橋校・桃井校に於て八月六日より同八日まで、高崎學校に於て同九日より十日まで、幼稚園開誘式を行ひ、且つ幼稚園設置の要旨を演説せしめ、普く衆庶をして參觀せしめたることとあり。後明治十四年十一月、本縣師範學校內に幼稚遊戯場を假設し、稚兒三十名を限り入場を許し、同校內に假設しありたる女子師範學校生徒をして、稚兒保育の道を學ばしめたることとあり。然るにこの幼稚遊戯場は、縣立女學校新設に伴ひ、女子模範學校と共に廢止せられたり。依つて明治十六年八月、改めて縣立幼稚園を縣立女學校內に設置したりしが、是れ亦明治廿一年四月廢止せられたり。是に於て附屬小學校內に幼稚科を置かれしが、是れ亦明治二十七年三月廢止せらる。然れ共本縣に於ける幼稚園の設置は、縣下幼稚園設立の機運を促進したる一方には、明治二十三年改正小學校令に、幼稚園に關する條文表はれ、同二十四年文部省令を以て、幼稚園・圖書館・盲啞學校、其他小學校に類する各種學校、及び私立小學校に關する規則の制定の爲め、明治二十六年、高崎町立高崎幼稚園の設置を初めとし、同年佐波郡伊勢崎小學校附屬幼稚園の設立を見たり。尋いで同二十七年、前橋市に私立清心幼稚園、同二十八年、市立前橋幼稚園の設立ありし

が、爾來著しき發達を見ず。大正四・五年の頃、一時多數の設立を見たるが、順次減少し、近年再び勃興の機運に向ひつゝあり。

本縣幼稚園數調表

| （年次） | （園數）（公立） | （私立） | （計） |
|---|---|---|---|
| 明治三十年 | 三 | 一 | 四 |
| 同　三十五年 | 四 | 〇 | 四 |
| 同　四十年 | 三 | 〇 | 三 |
| 大正元年 | 四 | 四 | 八 |
| 同　五年 | 五 | 五 | 一〇 |
| 同　十年 | 四 | 二 | 六 |
| 大正十四年 | 六 | 三 | 九 |

幼稚園調　（大正十四年四月末日現在）

| （郡市名） | （園數）（公立） | （私立） | （計） | （職員數）（公立） | （私立） | （計） | （園兒數）（公立） | （私立） | （計） | （大正十四年度經常費）（公立） | （私立） | （計） |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 群馬 | ― | 一 | ― | ― | 三 | 三 | ― | 四〇 | 四〇 | ― | 一五二三 | 一五二三 |
| 碓氷 | ― | 一 | ― | ― | 一 | 一 | ― | 六八 | 六八 | ― | 七五〇 | 七五〇 |

| | | | | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 佐波 | 一 | ― | 一 | 六 | ― | 六 | 三二一 | ― | 三二一 | 四,五三六 | ― | 四,五三六 |
| 邑樂 | 一 | ― | 一 | 六 | ― | 六 | 一四〇 | ― | 一四〇 | 四,四九三 | ― | 四,四九三 |
| 前橋 | 一 | 一 | 二 | 九 | 三 | 一二 | 二三九 | 七五 | 三一四 | 七,八五八 | 二,〇〇〇 | 九,八五八 |
| 高崎 | 二 | ― | 二 | 一二 | ― | 一三 | 三三五 | ― | 三三五 | 一〇,九〇五 | ― | 一〇,九五五 |
| 桐生 | 一 | ― | 一 | 五 | ― | 五 | 一〇六 | ― | 一〇六 | 二,九五八 | ― | 二,九五八 |
| 全管 | 六 | 三 | 九 | 三八 | 七 | 四五 | 一,〇四一 | 一三三 | 一,一七四 | 三〇,七五〇 | 四,二六二 | 三五,〇一二 |

## 第四節　師範教育

國民教育の普及發展を圖るには、教員養成より急務なるはなし。是を以て明治五年頒布せられたる學制中にも、速に師範學校を興すべきことを以てす。是に於てか明治六年二月、河瀨縣令は、興學の一手段をかねて、教員傳習小學校を前橋町舊前橋縣學校に設立し、每大區十人宛、年齡二十歲以上にして篤實有志の者を選びて、此所に入れ、大抵二箇月にして、下等小學の課程を卒へしむ。初選既に卒業すれば、卽ち次選を入れ、爾後循環更迭、漸次小學の本數に至らしむ。其教授を停めたる家塾の教員と雖も、更に開業せんとする者は、此教場に於て課程を卒へ、然る後開校の許可を得しむ。而して又管内人民稠密の地、卽ち前橋町・高崎驛・富岡町等の有名の富者を召し、本廳に於て學務官員をして、學規・學則を講じ且つ其興學の旨趣、人生日用常行欠くべからざるを說諭して悟了せしむ。是れより管下翕然として興學の風盛となり、高崎・富岡亦教員傳習小學の開設を見たり。是れ實に本縣に於ける師範教育の萌芽なり。

# 一　群馬縣師範學校

暢發學校

明治六年六月十五日、本縣は熊谷縣と合併したるに依り、同年七月、傳習學を兒玉郡本庄驛に移し、假の校所とし、改めて暢發と名づく。十一月、更に熊谷驛に移轉の協議成り、翌年二月、新築暢發學校落成し、三月三日開講す。是れ本縣師範學校の前身なり。

附屬小學校

明治七年八月、附屬小學校設置規則を定め、師範學校内に一教場を設け、子弟六歳以上、十歳未滿の者二十名を限り、試驗の上通學を許可せり。是れ實に附屬小學校の濫觴にして、全く教員生をして實地授業を練習せしむるを目的とす。因に附屬小學校は縣會の議決により、明治十五年六月、一旦廢止せられたるが、同十六年八月、再設置せられて今日に及べり。

群馬縣師範學校と改稱

明治九年八月、熊谷縣栃木縣を分合して、群馬縣を置くに及び、九月暢發學校も亦高崎驛に遷り、下横町興禪寺を假用し、校名を群馬縣師範學校と改稱す。同時に師範學校教則を定む。十月、群馬縣假廳を前橋に移さるゝや、復前橋に移り、紅雲分村龍海院を假用し、中學利根川校を合併し、新築の機運を促進せり。

曲輪町に校舍新築

明治十年三月、本校新築の議定まり、此年十月、曲輪町に工を起し、翌十一年八月四日、新築落成、開校の式を擧行す。（現今勝山工場の一部となる。）工事費總計金一萬六千二百五十一圓、其出途は當時地租改正の際、民力の及ばざるにつき、小學補助有志者寄附、及び師範學校費の殘金を以てす。生徒は全官費二十三人、半官費八人、私費三十一人、計六十二人、豫備教員六人、附屬小學校生徒百七十八人、男百二十一人、女五十七人なり。落成の翌九月には、明治天皇東北御巡幸に際し、驛を前橋町に駐めらるゝに當り、本校に臨御、本校生徒及び縣下各小學校中の優等生の授業を天覽あらせらる。

群馬縣尋常師範學校と改稱

明治十九年四月、師範學校令に基き、校名を群馬縣尋常師範學校と改稱す。明治二十六年、敷地を擴張し、本校增築及び附屬小學校を新築す。此年簡易科を置く。

再び群馬縣師範學校と改稱

明治三十一年四月、師範教育令に基き、校名を再び群馬縣師範學校と改稱す。明治四十年三月、義務教育年限延長の改正令出で、師範學校規程の制定により、師範教育擴張の必要に迫られ、明治四十二年三月、前橋市內清王寺町に改築工事を起し、大正三年七月竣工す。

校舍を清王寺町に新築す

竣工に先ち、大正二年十二月、曲輪町の舊校舍より移轉す。敷地一萬七千百三十坪九七、工費十六萬七千三百四圓四十二錢五厘、校舍

敢て輪奐の美と云ふに非ざれども、其完備は敷地の廣大と共に當時に於ける縣立中等學校中の偉觀たりき。會〻大正四年十月出火あり。一部燒失したるを以て、更に補充工事に着手し、同七年十二月落成せり。是れ現在の校舍なり。是より先明治四十五年、縣立學校整理の事あるや、當時高崎中學校安中分校の跡に、第二師範學校を設置したるにより、本校を第一師範學校と改稱する所ありしが、翌年第二師範學校を廢し、第一師範學校に合併し、復群馬縣師範學校に復せり。本校創立以來大正十四年三月に至るまで、卒業生を出したるもの左の如し。

自明治八年至明治二十年　　二九九名
自明治二十一年度至大正十四年度本科(第二部生を除く)　　一五七八名
本科第二部生　六二〇名　簡易料　一〇二名
第二種講習科　五〇八名　農業講習科　八一名
合計三二八八名とす。(第一種講習科・中部講習科・女子講習科の修了者を除く。)

## 二　群馬縣女子師範學校

抑小學校女教員は、明治五年の學制に於て、之を任用すること男教員と同一なりしが、女子教育不振の時代、之が資格を有するもの少く、依りて當局は女教員養成の必要を認め明治十四年、群馬縣師範學校内に、女子模範學校を附設し、之が養成の端を啓きたるが、その廢止後、明治二十年九月、同校附屬小學校の校舍の一部を利用し、小學校女子授業生傳習所を開設し、翌年亦女教員速成傳習所を設置し、後明治二十八年、私立上野教育會に於て、女子准教員養成所を設け、後又明治四十三年、群馬縣立高等女學校の新設に際し、補習科を置き、只管小學校女教員の養成に努めたり。而も未だ完全なる養成機關の起るに至らざりしが、明治三十年十二月十七日、文部省は女子師範學校の獨立設置を奬勵したるを以て、本縣は明治三十四年十一月十四日、前橋市清王寺町に群馬縣女子師範學校設立の認可を得、同三十五年一月十四日群馬縣女子師範學校規則（群馬縣令第七號）を定め同四月一日より開校せり。是に於て小學校女教員の養成機關始めて完きを得たり。翌明治三十六年一月、小學校教員講習科規程（群馬縣令第十五號）を定め、女子の講習科は女子師範學校に行ふことゝなり、更に師範學校規程の改正ありて、漸次規模を擴張し、次第に完備の域に進めり。明治三十八年以來、大正十四年三月に至るまで、卒業者本

科（第二部を除く）六八〇名、本科第二部三三六名、講習科五四六名、通計一五六二名なり。

師範學校一覽　大正十四年四月調

| （校名） | （位置） | （創立年月日） | （移管年月） | （校地坪數） | （建物坪數） | （建築年月日） | （完成學級數） | （完成定員） | （十四年度學級數） | （同上生徒數） | （同上校長以外の教員數） |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 師範學校 | 前橋清王寺町 | 明治六年二月一日 | 同上 | 一八、五八六 | 三、六七九 | 大正四年五月 | 一二 | 四八〇 | 一二 | 四六八 | 三三、五 |
| 女子師範學校 | 同 | 明治卅五年四月卅日 | 同上 | 九、九九三 | 一、九七六 | 明治卅五年十月 | 八 | 三二〇 | 八 | 三二一 | 一七、〇 |

## 第五節　高等普通教育

### 一　中學校

明治五年の學制に據れば、全國を八大學區、二百五十六中學區に分ち、毎中學區に中學校一箇所を設くる制なりしが、文部省は同年八月、中學校の設立は小學教育普及の後となすべきを以てしたれば、本縣は單に中學區分のみを定めて、之が設立の議に及ばざりき。明治八年二月、文部省は諭達を發し、中學校設置を慫慂する所ありしも、本縣は小學校設營に專心中なりしを以て、尙之を設置するに至らざりき。明治九年八月、再び群馬縣を置かれ、群馬縣學則を制定するや、本縣を四中學區に分ち、中學校を毎中學區に設立すべく、中學教員は當分師範學校より派遣在勤し、月俸・旅費を官給とせり。然るに中學校維持方法は、總て其中學區內の協議を以て、適宜方法を設け、可否の裁決を官に請ひ、許可を得る事に定められたれば、四中學區全部設立するに至らず、唯前橋・高崎の兩所に、變則公立中學校を開設せしのみにて、前橋は利根川中學校、高崎は烏川中學校と稱せり。是れ實に

本縣に於ける中學校の濫觴なり。

然るに此二中學は、明治十二年六月、縣會の決議に依りて之を廢し、別に師範學校内を區畫して教場とし、縣立中學校を設置し、翌十三年十一月を以て開校せり。是れ蓋し現群馬縣立前橋中學校の前身にして、實に本縣立中學校の嚆矢なり。開校に先ち、明治十二年十一月、群馬縣中學規則を制定せり。生徒定員百五十名、内五十名は貸費生なり。明治十五年一月、一旦南勢多郡小暮村に移轉したりしが、同二十年四月、再び前橋町に移せり。此年三月、尋常中學校の經費は、自今有志寄附金、及び授業料を以て之に充つべきを本縣より告示せり。是れ明治十九年四月改正の中學校令に於て、尋常中學校は各府縣に於て便宜設置することを得と規定し、土地の狀況によりては、一校をも設置せざるを得と云ふ頗る自由制度なりしを以て、明治十九年の本縣會に於て、中學校經費地方經濟の範圍に入るゝ必要を視ざる理由にて、否決したるに因るなり。是に於て本縣尋常中學校は、明治二十年度より有志の寄附金と授業料とを以て維持費とし、名義上のみ縣立として、辛ふじて繼續したりしが、明治二十二年度に及びて、寄附金の收入益〻不確實にして、經費愈〻窮乏を告げ、校舍の處理上支障を來すといふ悲境に陷る一方には、

高等諸學校への連絡機關として、益々擴張發展を計劃すべき機運に際したれば、明治二十三年度より、縣費補助を要求し、金千九百四十八圓六十六錢を得たり。而も經費未だ不充分にして、校運の發展期し難きを以て、縣當局は縣會に提案して、明治二十四年四月より、全部地方稅支辨と爲せり。（群馬縣史稿・群馬縣會決議錄・群馬縣尋常中學校沿革要略、）

會々日清戰役起り、戰後の我國狀は、中學校增設の機運に際會したれば、本縣當局は此時代の趨勢に鑑み、縣會の議決を經て、明治三十年四月一日より、高崎・藤岡・富岡・安中・沼田・太田の六箇所に、群馬縣尋常中學校の六分校を設置せり。而して所在地なる郡名を冠せしめ、群馬分校・多野分校・甘樂分校・碓氷分校・利根分校・新田分校と稱せり。是れ現在縣立各中學校の前身にして、本縣中學教育に一新紀元を劃せるものなり。而も此大擴張は明治三十二年、中學校令の改正に先ち、中學校の設置は其府縣の自由に委せられたる舊制時代に屬したるだけ、縣當局の提案もさることながら、之を可決したる縣會も、共に時勢の進運を理解したる措置として、稱賛に値すべし。而して以上の六分校中、群馬・甘樂・新田の三分校は、明治三十三年四月本校に變更し、多野・碓氷・利根の三分校は、前橋中學校の分校となりしが、明治三十四年四月、多野・碓氷の二分校は本校となり、更に館林に太田中學校邑

樂分校を置かれ、六本校二分校となる。是れより先き明治二十七年三月、文部省令を以て、尋常中學校學科及び程度を改正し、尋常中學校に於て實業に就かんとするものに適切なる教育を施す爲めに、本科の外實科を設くるを得る規定となりしに依り、本縣にては明治三十年四月より、尋常中學校（前橋中學本校）に實科制を採用したり。併し明治三十四年六月、群馬縣立中學校學則を定めらるゝに及び、之を廢止せり。

明治三十四年、第二次の中學擴張にて、六本校二分校は、其數多きに過ぐとなし、明治三十六年二月の通常縣會に於て、三十八年度より縣下教育の施設に關し、刷新の實を擧げんことを建議し、明治三十七年三月の臨時縣會に於て、中學校に於て、藤岡中學校の廢止を決議せり。然れば縣當局に於て此決議に省みるあり。此年十月、縣立學校整理に關する精密なる調査を爲し、縣會に提出し、中學に於ては明治三十八年度、藤岡・安中の二本校を富岡中學校藤岡分校・高崎中學校安中分校の二分校とし、四本校四分校となせり。然るに明治四十五年四月に至り、再ひ中等學校の改廢行はれ、前橋中學利根分校は沼田中學校に、富岡中學藤岡分校は藤岡中學校に昇格し、太田中學邑樂分校と高崎中學安中分校とは廢せられ、邑樂

分校は其跡に館林農業學校を、高崎中學安中分校は第二師範學校を置かれて、六本校となれり。大正六年に至り、桐生町立桐生中學校の設立ありて、大正十年五月、縣に移管あり。大正九年に縣立澁川中學校、同十年には縣立館林中學校設置あり。大正十四年四月には九中學となれり。大正十四年度現在は左表の如し。

縣立中學校一覽（大正十四年四月調）

| （校名） | （位置） | （創立年月日） | （縣移管年月） | （校地坪數） | （建物坪數） | （建築年月日） | （完成學級數） | （完成定員） | （十四年度學級數） | （同上生徒數） | 同上校長（月俸） |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 前橋中學校 | 前橋紅雲町 | 明治十三年一月廿六日 | 同上 | 八、九三四 | 一、四八四 | 明治卅年七月 | 一五 | 七五〇 | 一五 | 六七七 | 二四、〇 |
| 高崎中學校 | 高崎上和田町 | 明治卅年四月一日 | 同上 | 七、五二五 | 一、三三七 | 明治卅一年三月 | 一五 | 七五〇 | 一五 | 七〇四 | 二四、〇 |
| 富岡中學校 | 富岡町 | 同前 | 同上 | 六、五二三 | 一、三二〇 | 明治卅一年四月 | 一〇 | 五〇〇 | 一〇 | 四四一 | 一七、〇 |
| 太田中學校 | 太田町 | 同前 | 同上 | 八、〇四三 | 一、一二〇 | 同前 | 一五 | 七五〇 | 一五 | 六八八 | 二四、〇 |
| 藤岡中學校 | 藤岡町 | 同前 | 同上 | 六、一〇〇 | 七七九 | 明治卅二年二月 | 一〇 | 五〇〇 | 一〇 | 四三〇 | 一七、〇 |
| 沼田中學校 | 沼田町 | 同前 | 同上 | 三、六七七 | 六七四 | 明治卅一年四月 | 一〇 | 五〇〇 | 七 | 三〇三 | 一三、五 |
| 澁川中學校 | 澁川町 | 大正九年四月廿日 | 同上 | 七、八九九 | 六四六 | 大正十年四月 | 一〇 | 五〇〇 | 九 | 三〇六 | 一五、五 |
| 桐生中學校 | 桐生安樂土 | 大正六年四月一日 | 大正十年三月一日 | 三、四八九 | 六七〇 | 明治卅年四月 | 一〇 | 五〇〇 | 一〇 | 四五一 | 一七、〇 |
| 館林中學校 | 館林町 | 大正十年四月十三日 | 同上 | 一〇、五四三 | 三九五 | 大正十一年六月 | 一〇 | 五〇〇 | 九 | 三八四 | 一五、五 |

## 二　高等女學校

本縣に於ける公費の女子中等教育機關は、明治十五年七月より開校せる、群馬縣女學校を以て嚆矢とす。本校は前橋町曲輪町舊醫學校跡に設置せられ、女子の爲めに高等なる普通學科を教授し、優良なる婦女を養成する所とす。定員百五十名、內三十名を貸費生とし、修業年限は下等科三年、上等科二年、計五箇年なり。然るに明治十九年三月限り廢校となれり。而して時勢の進運は、女子の中學教育熱次第に勃興し、文部省は明治二十八年一月、省令を以て高等女學校規程を定めたり。本縣當局亦此大勢を觀取し、明治二十八年十一月の縣會に、縣立高等女學校新設の提案をなしゝも容れられず。依つて明治三十一年再提案して、其議決を經て、玆に始めて其の設置を見るに至れり。是れ現在の群馬縣立高崎高等女學校の前身なり。此年二月七日、政府は勅令を以て、高等女學校令を公布し、同令に於て高等女學校の目的を掲げて、女子に須要なる高等普通教育をなす所とし、北海道及び各府縣は高等女學校を設立すべきものとし、郡市町村又は町村學校組合、及び私人も亦之を設置することを得と云ふ制度を設けられたれども、本

縣は久しく一校のみなりき。然るに明治四十一年五月、山田郡は此省令に基き、桐生町に山田郡立桐生高等女學校を設置し、同四十三年、前橋市亦市立高等女學校を設置せり。此時に當り文部省は女子中等教育の普及を圖らんが爲め、勅令を以て高等女學校令を改正し、文部省令を以て、高等女學校施行規則を改正し、高等女學校に實科を置き、又は實科のみを置く高等女學校の設立を許し、之を實科高等女學校と稱せしめ、實科高等女學校は高等小學校に附設することを得とし、其修業年限にも二年制・三年制・四年制を置き、學科・課程等に斟酌を加ふる範圍を大にしたれば、縣下郡町村に之が設立を見るに至り、即ち明治四十四年北甘樂郡立實科高等女學校の設置を劈頭とし、伊勢崎町立伊勢崎實科高等女學校・館林町立實科等高等女學校・藤岡町立實科高女學校・吾妻郡立實科高等女學校・澁川町立澁川實科高等女學校・碓氷郡立安中高等女學校・太田町立太田實科高等女學校・沼田町立沼田實科高等女學校の設立相繼ぎ、縣下各郡樞要の市街には之が設立を見ざるなきに至れり。是等の高等女學校は、大正十二年郡制廢止の結果、郡立の縣移管になりたるを機會として、順次縣立に移管せられ、組織も其際或は移管後、高等女學校に變更せられ、現在（大正十四年四月）に於ては全部縣立高等女學校となれり。

之を一覽表にて示せば左の如し。

縣立高等女學校一覽（大正十四年四月調）

| （校名） | （位置） | （創立年月日） | （縣移管年月） | （校地坪數） | （建物坪數） | （建築年月日） | （完成學級數） | （完成定員） | （十四年度學級數） | （同上生徒數） | （同上校長以外ノ教員數） |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 高崎高等女學校 | 高崎末廣町 | 明治卅二年五月一日 | 同上 | 七、一四二 | 一、七六一 | 明治三十三年十二月 | 一二 | 六〇〇 | 一二 | 五九五 | 一九、五 |
| 前橋高等女學校 | 前橋紅雲町 | 明治四十三年四月廿三日 | 明治四十五年四月一日 | 六、六五〇 | 一、五一八 | 大正二年三月 | 一二 | 六〇〇 | 一二 | 五七〇 | 一九、五 |
| 桐生高等女學校 | 桐生安樂土 | 明治四十一年五月四日 | 大正七年四月一日 | 三、一三〇 | 一、一八三 | 明治四十二年三月 | 八 | 四〇〇 | 八 | 三八一 | 一四、〇 |
| 富岡高等女學校 | 富岡町 | 明治四十四年四月廿日 | 大正十三年四月一日 | 三、一九九 | 七五三 | 明治四十五年三月 | 八 | 四〇〇 | 五 | 二四五 | 九、五 |
| 安中高等女學校 | 安中町 | 大正十年四月十七日 | 同前 | 二、六三五 | 四七〇 | 大正十一年一月 | 四 | 二〇〇 | 四 | 一八五 | 七、五 |
| 吾妻高等女學校 | 原町 | 大正八年四月廿二日 | 同前 | 二、四四六 | 三五五 | 大正八年四月 | 四 | 二〇〇 | 四 | 一九二 | 七、五 |
| 澁川高等女學校 | 澁川町 | 大正九年四月十四日 | 大正十三年四月一日 | 三、二四一 | 三九三 | 大正十三年六月十三日 | 八 | 二〇〇 | 五 | 二四二 | 九、五 |
| 藤岡高等女學校 | 藤岡町 | 大正七年四月廿日 | 同前 | 三、〇六二 | 六四八 | 大正十四年三月十七日 | 四 | 二〇〇 | 四 | 一八六 | 七五 |
| 太田高等女學校 | 太田町 | 大正十年四月十五日 | 同前 | 二、七六八 | 四三八 | 大正十三年十月十五日 | 八 | 四〇〇 | 六 | 三〇二 | 一一、〇 |
| 館林高等女學校 | 館林町 | 大正六年四月十四日 | 同前 | 四、〇〇〇 | 三九四 | 明治卅五年五月 | 八 | 四〇〇 | 八 | 三六五 | 一四、〇 |
| 沼田高等女學校 | 沼田町 | 大正十年二月九日 | 大正十三年四月 | 一、九二七 | 三八四 | 大正十三年四月十日 | 四 | 二〇〇 | 四 | 一八七 | 七、五 |
| 伊勢崎高等女學 | 伊勢崎町 | 大正四年三月五日 | 同前 | 三、九六〇 | 七九九 | 大正十三年六月一日 | 八 | 四〇〇 | 七 | 三四八 | 一三、五 |

私立の女子中等學校にありては、明治二十一年二月、前橋市曲輪町に前橋英和女學校の設立認可を見たるが、是れ卽ち現在の上毛共愛高等女學校の前身にし

て、本縣に於ける唯一の私立高等女學校なり。大正十四年三月末調査によれば、修業年限四箇年學級數五、教員數一四、生徒數二七五名なり。

## 第六節　實業教育

明治五年の學制頒布以來、實業教育に關する規程は、法令の改正毎に次第に分化整頓し、明治十五年農業學校通則、明治十七年、商業學校通則等の制定ありしが、本縣未だ之が設置を見ず。明治二十七年六月、實業教育費國庫補助法を公布し、實業教育を奬勵するに至り、本縣の實業教育は、明治二十九年、桐生・伊勢崎の兩地に、工業教育機關として、其端を發し、次いで明治三十二年、吾妻郡中之條町に郡立農業學校を設立して、農業教育の機關と爲せり。明治三十五年一月、實業補習學校規程の改定あるや、其規定の趣旨に則り、實業補習學校の設置を見、爾來時勢の進運と共に、次第に發達し、以て今日に及べり。

### 一　農業學校

本縣に於ける農業學校は、明治三十二年四月二十九日、吾妻郡立中之條農業學校の設立に創まる。本校は啻に農業學校としてのみならず、本縣に郡立中等學

校の設立ある、之を以て嚆矢とす。農業學校に關する法規は、明治十六年四月、文部省農學校通則を定め、明治十九年三月之を廢止し、次いで明治二十七年七月、簡易農學校規程を定めたるも、本縣未だ農業學校の設置あらず。明治三十二年二月、實業學校令の公布あり。別に省令を以て、農業學校規程の制定あるに及び、爰に甲種農業學校を創立したるなり。翌三十三年十一月、多野郡藤岡町に私立甲種高山社蠶業學校設立認可ありて、三十四年四月より授業を開始す。此年郡立中之條農業學校は縣立に移管せられ、群馬縣立農業學校と改稱、公私の別あれども、高山社と共に南北相對立し、數年農業教育機關たりしが、日露戰役以後、明治四十一年勢多郡郡桂萱村に、勢多郡立農林學校を設立せられたるを第二として、郡立館林農業學校乙種・群馬縣立蠶絲學校・利根郡立利根農業學校乙種・佐波郡立佐波農業學校の設立相踵ぎ、郡立校は、大正十二年郡制廢止と共に、縣移管となり、大正十四年現在にては左の狀況を呈す。

本縣農業學校一覽（大正十四年四月調）

| （校名） | （位置） | （創立年月日） | （縣移管年月日） | （校地坪數） | （建物坪數） | （建築年月日） | （完成學級數） | （完成定員） | （十四年度學級數） | （同上生徒數） | （同上校長以下職員ノ數） |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 中之條農業學校 | 中之條町 | 明治卅三年四月廿九日 | 明治卅四年四月一日 | 四、三三六 | 三九五 | 明治三十五年十二月 | 六 | 三〇〇 | 三 | 一五五 | 八〇 |

| | | | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 勢多農林學校 | 勢多郡桂萱村 | 明治四十一年四月一日 | 大正三年四月一日 | 一〇、一一六 | 九六九 | 明治四十一年七月 | 六 | 三〇〇 | 六 | 二七七 | 一三、〇 |
| 蠶絲學校 | 安中村 | 大正二年四月一日 | 同上 | 七、〇五三 | 一、一四九 | 明治三十一年十二月 | 三 | 一二〇 | 三 | 一一九 | 八、〇 |
| 小泉農業學校 | 小泉町 | 明治四十五年四月十五日 | 同上 | 四、〇二五 | 七八六 | 大正十二年三月 | 三 | 一五〇 | 三 | 一〇六 | 八、〇 |
| 利根農業學校 | 利根郡利南村 | 大正八年四月廿五日 | 大正十二年四月一日 | 四、六四六 | 八六九 | 大正十年九月 | 三 | 一五〇 | 三 | 一四五 | 五、五 |
| 佐波農業學校 | 佐波郡茂呂村 | 大正九年四月廿六日 | 同上 | 二、七三七 | 九〇五 | 大正十年三月 | 三 | 一五〇 | 三 | 一三三 | 八、〇 |
| 私立甲種高山社蠶業學校 | 多野郡藤岡町 | 明治卅三年十一月 | 私立 | | | | | | 三 二 | 六三 四六 | |

## 二 工業學校

明治二十七年、政府が實業教育費國庫補助法を公布し、實業教育の振興を圖らんとするや、翌二十八年、桐生商工業組合及び機染織工業に關係ある有力家は率先して織物學校の設立を企て、奔走盡力の結果同年十一月九日、桐生町長より桐生織物學校設立願書を提出し、同二十九年一月認可を得、町立桐生織物學校を創立し、同年四月より開校せり。同年同月、佐波郡伊勢崎町に於ても、伊勢崎織物商工業組合又認可を得、同組合立伊勢崎染織學校を設立したり。此兩校は共に徒弟學校規程に則りたるものなりしが、明治三十二年二月、實業學校令の發布に基

き、工業學校規程の規定せらるゝに及びて、組織を變更し、明治三十三年四月、縣立に移管せられ、面目を一新せり。當時我國に於ける工業學校の數甚だ少く、（明治三十三年公私立合計十八校）從つて他府縣より入學者群集し、その數四分の一を占む。されば一時は獨り本縣のみならず、他府縣の工業教育に至るまで貢獻したること甚大なりき。會、明治三十八年、第一次縣立學校整理の際、伊勢崎染織學校を桐生織物學校に合併して、群馬縣立織物學校と改稱し、伊勢崎染織學校跡には、工業試驗場を設け、桐生織物學校の附屬とせり。然るに時勢の進運は伊勢崎町にも從前通り工業學校存置の必要迫りて、明治四十三年、群馬縣立工業學校として再び設置せられ、桐生・伊勢崎の二箇所併立せられたりしが、桐生町には國立高等工業學校設立に決定したるを以て、大正二年三月、桐生なる群馬縣立織物學校を廢止し、縣立工業學校は復び一校となれり。大正十二年五月に及び、前橋市に市立工業學校新設せられ、復二校となれり。

工業學校一覽（大正十四年四月調）

| （校名） | （位置） | （創立年月日） | （設立別種度） | （敷地坪數） | （建物坪數） | （完成學級數） | （完成定員） | （十四年學級數） | （同上生徒數） | （同上校長以外ノ職員數） |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 群馬縣立工業學校 | 佐波郡伊勢崎町 | 明治四十三年四月二十八日 | 縣立甲種 | 七四四二 | 二八六 | 五 | 二〇〇 | 五 | 二三〇 | 二 |
| 前橋工業學校 | 前橋市 | 大正十二年五月 | 市立甲種 | — | 九六 | 五 | 二五〇 | 六 | 二四 | 四 |

## 三　商業學校

農工に關する本縣の實業學校は、明治三十二年二月公布の實業學校令に準據し、夙に設立を見たるが、商業學校に至りては、暫く措いて顧みられざりき。明治三十七年十月、縣立學校整理に關する調査案作製の際、商業學校設置の必要を認められたるも、實現するに至らざりき。明治四十一年五月に至り、始めて高崎市に市立商業學校創設せられ、大正七年四月縣立に移管せらる。斯くて歐洲大戰の亂後、實業熱の勃興に伴ひ、商業教育機關設立の必要、識者間に唱導せらるゝに及び、大正八年、佐波郡伊勢崎町に町立伊勢崎商業學校、大正九年、前橋市に市立前橋商業學校の設立を見るに至る。其狀況は左表の如し。

商業學校一覽（大正十四年四月調）

| （校名） | （位置） | （創立年月日） | （設立別程度） | （敷地坪數） | （建物坪數） | （完成學級數） | （完成定員） | （十四年度學級數） | （同上生徒數） | （同上校長以外ノ敎員數） |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 群馬縣立高崎商業學校 | 高崎市台町 | 明治四一年五月四日 | 縣立甲種 | 五、七八七 | 九四四 | 一〇 | 五五〇 | 一〇 | 四七七 | 一六 |
| 前橋商業學校 | 前橋市芳町 | 大正九年三月二十五日 | 市立甲種 | 三、三七四 | 七二〇 | 五 | 二五〇 | 五 | 二五四 | 一一 |
| 伊勢崎商業學校 | 佐波郡伊勢崎町 | 大正八年四月二日 | 町立乙種 | 一、七〇八 | 二四六 | 四 | 一八〇 | 四 | 一六四（十三年度） | 九 |

## 四　女子實業中等學校

職業學校規程に準據し設立せられたる女子の中等學校三校あり。（十四年四月調）

| （校名） | （位置） | （創立年月日） | （設立別程度） | （敷地坪數） | （建物坪數） | （完成學級數） | （定員） | （十四年學級數） | （同上生徒數） | （同上校長以外教員數） |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 綿打實科女學校 | 新田郡綿打村 | 大正十三年十二月卅一日 | 村立乙種 | — | — | 三 | 一五〇 | 二 | 八八 | ×五 五 |
| 大間々實科女學校 | 山田郡大間々町 | 大正十三年三月 | 町立乙種 | 一,〇〇二 | 一七〇 | 三 | 一五〇 | 三 | 一二四 | ×四 一二 |
| 高崎實踐女學校 | 高崎市宮元町 | 大正十三年三月十二日 | 市立乙種 | 八九七 | 二四六 | 六 | 三〇〇 | 六 | 二六四 | ×三 八 |

## 五　實業補習學校

法令上實業補習教育の文字は明治二十三年の改正小學校令に始めて表はれ、明治二十六年十一月、實業補習學校規程を定め同時に地方長官に向つて、其設立の趣旨・目的、竝に施行方法等を訓示したることありしかば、本縣は明治二十八年四月、之が設置勸誘方を管下各郡市長に內訓したることありき。而も其設置方法等に於て、適切を缺くものあるを以て、文部省は明治三十五年一月、實業補習學

校規程を改定し、其趣旨施設順序等に關し、重ねて訓令を發したれば、此年四月、新規程に基き、群馬縣澁川町に町立澁川農商補習學校の設置を劈頭とし、勢多郡荒井村、新田郡尾嶋町、碓氷郡原市町に、補習學校の設立相繼ぎ、吾妻郡中之條町に女子補習學校設置等ありて明治三十五年中、其數八校、生徒數三六二名に達せり。明治三十七八年戰役以後、該教育振興の時運に際會したれば、本縣は縣令を以て、職員の待遇、經費補助等の規程を設け、設置奬勵を怠らざりき。大正七年四月より、群馬縣師範學校内に農業補習學校教員の養成所を置き、大正十一年度よりは、實業教育主事を設置し、專ら實業補習教員の發達指導に當らしめ、大正十二年二月八日、實業補習學校施設要項竝準則を制定し、益〻之が整備充實を圖りたり。之が爲め學校數も逐年其數を增加し、大正十四年三月末に於ては、公立二百四十七、私立三、計二百五十校を算し、內商業校五、商工校二、農工校三、農工商校三、農商校一〇を除きて、其他の全部は、農業補習學校なり。而して縣內未設置の町村は、多野郡藤岡町、佐波郡伊勢崎町の二町のみ。

實業補習學校一覽 (其一) 校數生徒調

| （年度） | （校數） | （生徒）（男） | （女） | （合計） |
|---|---|---|---|---|
| 明治卅六年 | 二六 | 四五〇 | 六六七 | 一、一一七 |
| 明治四十年 | 九〇 | 二、六三八 | 二、七八九 | 五、四二七 |
| 大正元年 | 一三九 | 四、七〇三 | 三、九三二 | 八、六三五 |
| 大正六年 | 一七一 | 一〇、七七三 | 六、五七八 | 一七、三五一 |
| 大正十二年 | 二四三 | 二一、四四九 | 八、〇八一 | 二九、五三〇 |

同（其二）經費調（大正十四年四月）

| （郡市名） | （市町村數） | （未設置町村數） | （補習學校數） | （實業補習教育費） | （平均一市町村支出費） | （平均一校ノ支出費） | （生徒一人當經費） | （備考） |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 勢多 | 一七 | — | 三五 | 二六、八二八 | 一、五七八 | 七七六 | 五、五二 | |
| 群馬 | 三七 | — | 四二 | 四五、四八七 | 一、二二九 | 一、〇八三 | 七、五五 | |
| 多野 | 一八 | 一 | 二〇 | 一〇、六五〇 | 六二七 | 五三三 | 五、四一 | 未設置ハ藤岡町 |
| 北甘樂 | 二三 | — | 二六 | 一六、一五六 | 七〇三 | 六二二 | 四、一一 | |
| 碓氷 | 一八 | — | 二一 | 一六、三三五 | 九〇八 | 七七八 | 七、一七 | |
| 吾妻 | 一四 | — | 一六 | 一七、二〇二 | 一、二二八 | 一、〇八一 | 六、一二 | |

|  |  |  |  |  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- |
| 利根 | 一六 | ｜ | 一九 | 二八、〇五五 | 一、七五三 | 一、四七七 | 八、二〇 |  |
| 佐波 | 一六 | 一 | 一七 | 二四、一八三 | 一、六一二 | 一、四二三 | 九、二六 | 未設置ハ伊勢崎町 |
| 新田 | 一三 | ｜ | 一三 | 一一、五一三 | 八八六 | 八八六 | 五、五二 |  |
| 山田 | 一一 | ｜ | 一四 | 一二、一八五 | 一、一〇八 | 八七〇 | 一〇、一五 |  |
| 邑樂 | 二二 | ｜ | 二二 | 二二、三五七 | 一、〇二六 | 一、〇二六 | 六、七三 |  |
| 前橋 | 一 | ｜ | 一 | 五、一七一 | 五、一七一 | 五、一七一 | 一四、七七 |  |
| 高崎 | 一 | ｜ | 一 | 三、七三三 | 三、七三三 | 三、七三三 | 三八、四九 |  |
| 桐生 | 一 | ｜ | ｜ | ｜ | ｜ | ｜ | ｜ |  |
| 私立 | ｜ | ｜ | 三 | 六、八九〇 | ｜ | 二、二九七 | 一 |  |
| 全管 | 一〇八 | 二 | 一五〇 | 一四六、七四五 | 一、一〇四 | 九八七 | 六、九一 | 一人當リハ私立ヲ除キ計算ス |

## 第七節　高等專門教育

桐生高等工業學校設置

大正五年四月、桐生高等工業學校開校せらる。本縣に於ける唯一の高等專門學校なり。抑本校の設置に就ては、由來頗る久しく、既に明治三十七年頃群馬縣桐生地方先覺者の熱心主唱の下に胚胎して、同年第廿二回帝國議會の際、衆議院議員武藤金吉より、群馬縣立織物學校を國立高等染織專門學校に變更せんことを建議し、爾來群馬縣廳、縣會、及び當時の山田郡長、桐生町長、其他地方有志者の協力を經、明治四十四年十二月、時の群馬縣知事神山閏次の名を以て、高等工業學校を群馬縣に新設せられたき議を、文部大臣に上申し、越えて四十五年一月、群馬縣より本校敷地約一萬五千坪、及び設立費三十五萬圓を寄附したるにより、其設立の基礎定まり、更に第二十八回帝國議會に於て、武藤代議士提出の建議案に基き、本校創立の件を審議せられ、兩院に於て之を可決せしかば、同年三月、敷地及寄附金の件許可せられたり。是に於て政府は、本校に關する官制を公布し、創立委員を命じ、地を山田郡桐生町に卜し、之が建設工事に歩を進め、大正四年十二月二十七日、勅令第二百三十五號を以て、文部省直轄學校官制を改正し、桐生高等染織學

校の設置を公布せられ、翌五年四月より開校するに至りしなり。桐生高等工業學校一覽。

## 第八節　特殊教育

### 一　盲啞教育

盲啞教育は、學制に廢人學校の名ありたるのみにして、明治十九年の小學校令には、未だ何等の規程を設けず。同二十三年の改正小學校令に至りて、始めて盲啞學校の設置廢止は、小學校に準すべきものとし、此教育に關する教育の規程を設けたるも、餘り世人の注意する所とならざりき。明治二十八年頃より、盲啞教育の必要を認めて、私立學校を起す者、各地に生ぜしも、他の諸般の教育の急激なる發達に比すれば、寥々の感ありき。本縣に於ける盲啞教育は、私立上野教育會が明治三十八年九月、附屬事業として訓盲所を創設したるに始まれり。本訓盲所は、明治三十七八年戰役に於て、本縣出征軍人中、失明者六名あり。當時の視學官にして、上野教育會長たりし大束重善は、この失明軍人及び軍人遺族中の失明者を收容して、之を教育し、且つ生活の途を授けんとしたるにあり。併し後には一般盲人を收容したり。同所は明治四十四年四月、本縣師範學校附屬小學校に

移され、特別學級として、盲生教育の研究機關に充てられしが、大正三年四月に至り、更に前橋市立桃井小學校に移され、其の翌年前橋市醫師後藤源九郎の個人經營となり、校名を前橋盲學校と改稱したり。爾來、久しく本縣唯一の學校たりしが、大正十一年頃より高崎・桐生の兩市に於て、亦之を設置するものあり。大正十四年四月、現在にては左の四校なり。

盲啞學校一覽表（大正十四年四月調）

| （校名） | （所在地） | （設立年月日） | （設立者） | （教員數） | （生徒）（男） | （女） | （計） | （大正十三年度經費決算額）圓 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 前橋盲學校 | 前橋市曲輪町 | 大正　四、九、一 | 大森房吉 | 六 | 二三 | 七 | 三〇 | 三、二四八 |
| 高崎聾啞學校 | 高崎市北小學校內 | 同　一一、四、二 | 保坂元哉 | 四 | 二四 | 七 | 三一 | 三、〇六四 |
| 高崎盲學校 | 高崎市羅漢町 | 同　六、三 | 三浦與泰 | 五 | 一三 | 一〇 | 二三 | 一、三五四 |
| 桐生盲學校 | 桐生町 | 同一二、二、二八 | 靜谷暢純 | 三 | 四 | 三 | 七 | 一、六四八 |

## 二　子守教育

特殊教育の一種たる子守教育につきては、甚だ不振なり。明治十年、本縣より

文部省への申報には保兒教育所の名を以て子守學校を設けんとする意志ありしことを述べられたるが、實現には至らざりしが如し。後明治廿六七年の頃、佐波郡今井尋常小學校・西群馬郡桃井小學校等に、子守教育所を附設したるを始めとして、縣下各地に小學校教員の有志者が、之が教育を試みたるもののなきにしも非りしかど、永續せず。獨立の教育所としては明治三十八年四月の創立にかゝる、高崎市の私立樹德子守學校を嚆矢とせるが如し。此學校は現今本縣に於ける唯一の子守學校なり。大正十四年六月、高崎樹德學校と改稱し、教員六名、生徒九十七名、經費一千四百九十六圓（大正十三年度經費決算額）の計數を示せり。

## 三　感化院群馬學園

特殊教育の一として、感化院群馬學院あり。我國に於ける感化法は、明治三十三年三月九日、法律第三十七號を以て公布せられ同四十一年、法律第四十三號を以て改正せられ、本縣は明治四十一年十一月一日より、此感化法を施行することとなるや、明峯榮泉は前橋市天川原松竹院内に、明峯學園を開設し、同時に本縣代

用感化院に指定せられ、事業を繼續したるが、明治四十三年三月、前橋市岩神町に縣立感化院群馬學園を設立したるに因り、兒童を引渡して閉園せり。然るに大正二年に至り、縣立群馬學園を廢するに及び、同年四月、明峯榮泉は同院の敷地建物を無償使用の下に、再び明峯學院を開き、本縣代用感化院に指定せられ、同十年四月、市内天川町に移轉す。大正十一年三月、同園の閉鎖に依り、金井智見氏從來の經營を踏襲して、本院を開院し、同時に本縣の代用感化院に指定せられしが、本縣は大正十四年、縣立感化院群馬學院を設置するに及び、兒童を引渡して閉園し、改めて縣立群馬學院長となれり。大正十五年新築落成し、兒童を收容せり。

## 第九節　社會教育

### 一　青年會

本縣青年會の發達に就て稽ふるに、其起原は頗る古きものゝ如し。明治二十年前後、既に縣内各地に所謂青年會なるもの組織せられ、智識の交換、學術の練磨、辯論の練習等の目的を以て會合したるは、未だ吾人の記憶に存し、又縣廳文書明治二十一年四月、北甘樂郡西牧村青年會則に載する所なり。當時之が顧問に推され、指導の任に當りたるは、其地方の先進なりしが如く、縣郡として、何等施設なく、只自然の發達に委したるが如し。而も逐年其數を增加し、設立の目的も、個人の修養より進みて、風紀の改善、農事の改良を圖り、自治體の幇助をなす等、社會の爲めに極めて有益なる機關となれるものもありき。然るに日露戰役後に至り、時運の趨勢に鑑み、政府は地方青年會改善の必要を認め、明治三十九年、地方廳に向て、青年團體設置奬勵を通牒する所あり。本縣亦之を郡市長に移牒するに及び、益發達して、其數三〇〇、會員總數一八五一九人の多きに及べり。此に於て一

層之が向上發展を期する爲め、大正二年十二月十六日、先づ町村青年會準則、及び郡聯合青年會準則を公示せり。之れ從來の青年團體の多數が、一部落の青年を以て組織せる小團體にして、全く獨立し、其間何等の連絡なく、指導誘掖上、不便尠からざるを以てなり。此結果、各部落を區域とせる青年團體は、悉く統一して、町村青年團體の組織となり、進んで郡聯合青年團體の組織となれり。世界大戰の勃發と共に、政府當局は大に青年團體を改善し、發達せしむることの急務なるを感じ、大正四年九月十五日、內務・文部兩大臣より訓令を發し、且つ兩省次官より各地方長官に通牒し、從來の青年團をして、青年修養の機關たらしめんことを期したるに因り、本縣は此意を體して、大正五年三月廿四日、青年團體指導に關し、訓令及び通牒を發し、別に青年團體設置に關する要項を詳示したり。されば既設の青年會は、順次改造せられて、全部新組織となり、大正七年三月二十六日に至り、縣聯合青年會の成立を見るに至りしなり。大正七年四月現在にて會數二一一二、支會數一〇九五、會員數三七六九六人。此年五月三日、青年團體の指導に關し、內務・文部兩大臣は重ねて訓令を發せられたるを以て、本縣亦訓令及び通牒を發して、大臣の訓令の旨趣の徹底に努むる所ありたり。而も之が指導機關設置の必要を認め、大正八年度より、學務課內に青年

指導員を置き、大正九年度より、各郡市に內訓して、郡費を以て青年指導員を設置せしめ、系統的組織の下に、指導啓發に努めたれば、向上進步頗る顯著となれり。

大正九年一月十六日、內務・文部兩大臣は、三度內容改善に關する訓令を發したれば、本縣は同年三月十二日、復本縣訓令第百號を以て、青年團體の發達助成に關する件を令達せり。大正九年十一月、明治神宮竣工の盛典を機とし、全國青年團明治神宮代參者大會が、東京に開催せられし際、畏くも　東宮殿下より賜はられたる令旨、

國運進展ノ基礎ハ、青年ノ修養ニ須ツコト多シ。諸子能ク內外ノ情勢ニ顧ミ、恒ニ其ノ本分ヲ盡シ、奮勵協力以ヲ所期ノ目的ヲ達成スルニ勗メムコトヲ望ム。

を奉戴するに及び、本縣謄本を作成して、各青年會に分ち、令旨奉體に努め、大に成果を收めつゝあり。(大正十一年四月廿一日、青年會事業奬勵規定縣令第四十一號。)大正十四年度に於ける、縣聯合青年會と郡市青年會との狀況は、左の如し。

| (名　稱) | (會長種別)(會員) | (會長種別)(會員外) | (會員數) | (大正十四年度經費) | (大正十四年度施設事業) |
|---|---|---|---|---|---|
| 青年會 | ｜ | 一 | 四三、〇三一 | 一、五七五、〇〇 | 青年壯丁成績表彰、縣下中堅青年講習會青年學藝發表會、縣下青年運動會機關誌(大利根) |

# 郡市青年會狀況調査表（大正十四年四月現在）

| （郡市名） | （郡市聯合青年會）（會費總額） | （施設事業） | （加盟會數） | （會長種別）（會員） | （會員外） | （會員數）（正會員） | 其他會員 | （正會員年齡範圍） | （經費總額） |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 勢多 | 一、四四六、〇〇 | 中堅青年講習會、學藝發表會、運動會、神[illegible]田設置、武道大會、青年時報、講習會 | 一七 | 一七 | — | 三、九四四 | 二、五一七 | 自滿十二歲至滿廿五歲 | 九、四六六、〇八 |
| 群馬 | 一、〇五〇、〇〇 | 學藝發表會、武道大會、運動競技會、講演會、視察見學 | 三七 | — | 三七 | 四、七六四 | 一、六〇二 | 自滿十二歲至滿廿五歲 | 七、九七七、八七 |
| 多野 | 七八〇、〇〇 | 青年會幹部講習會、武道大會、運動會學藝發表會 | 一八 | 四 | 一四 | 一、九四七 | 一、三〇六 | 自滿十二歲至滿三十歲 | 四、九二六、〇〇 |
| 北甘樂 | 一、三五〇、〇〇 | 幹部講習、武道講習、學藝發表會、武道大會、青年巡覽、會報發行、壯丁體格表彰、展覽會、體育講習、參宮旅行 | 二三 | 一八 | 五 | 二、九六七 | 三九五 | 自滿十二歲至滿廿五歲 | 六、八二九、五八 |
| 碓氷 | 八五三、〇〇 | 青年幹部講習會、學藝發表會、武道大會、青年運動會 | 一九 | 一四 | 五 | 一、五九二 | 五一七 | 自滿十二歲至滿三十歲 | 四、四四五、七四 |
| 吾妻 | 六九六、〇〇 | 青年巡閱、中堅青年講習會、學藝發表會、武道大會、運動會 | 一四 | 一一 | 三 | 二、三〇三 | 一、〇八七 | 自滿十二歲至滿三十歲 | 五、九三六、九〇 |
| 利根 | 二、〇四三、〇〇 | 政治思想養成講習會、武道講習會、武道大會、學藝發表會、運動會、優良青年會視察 | 一六 | 一三 | 三 | 二、六四七 | 二、五五九 | 自滿十二歲至滿三十歲 | 五、六九九、〇〇 |
| 佐波 | 未定 | 講習會、講演會、武道大會、運動會、青年點呼、蠶器評會 | 一六 | 二 | 一四 | 二、二二七 | 一、八七一 | 自滿十二歲至滿三十歲 | 七、一一五、六三 |
| 新田 | 六三〇、〇〇 | 幹部講習會、學藝發表會、武道大會、運動會、會報發行 | 一三 | 一〇 | 三 | 一、七九九 | 八四四 | 自滿十二歲至滿三十歲 | 三、四八九、五〇 |
| 山田 | 六三三、〇〇 | 學藝發表會、見學旅行、各種宣傳、記念事業、武道大會 | 一一 | 七 | 四 | 一、一六三 | 六九六 | 自滿十二歲至滿廿五歲 | 三、八四一、三六 |
| 邑樂 | 一、一四〇、〇〇 | 學藝發表會、優良青年團體視察、運動會、體育講習會、幹部講習、貯金獎勵 | 二三 | 二〇 | 三 | 一、九二一 | 一、四三七 | 自滿十二歲至滿三十歲 | 五、三六八、〇〇 |
| 前橋 | 六九四、六七 | 青年講座開設、青年デー施行、警備隊事業、入營者送別會、運動會、講習員派遣 | 四 | 四 | — | 一七五 | 二一七 | 自滿十二歲至滿廿五歲 | 五四九、三三 |
| 高崎 | 九一五、六四 | 講習會、講演會、剛健旅行、武道大會優良青年團視察、郡市青年團大會 | 四 | 一 | 三 | 二〇二 | 一五一 | 自滿十二歲至滿廿五歲 | 三八六、二一 |
| 桐生 | 六四八、〇〇 | 兩毛雄辯大會、講演會、幹部講習會、武道講習會 | 四 | 四 | — | 一七三 | 一五九 | 自滿十二歲至滿廿五歲 | 二六〇、〇〇 |

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 全管 | 二三、七七八、三八 | 二一八 | 一三五 | 九三 | 三七、八三三 | 一五、三〇八 | 自滿十二歳至滿廿五歳 | 六六、三九一、〇九 |

## 二　處女會

處女會に就いては、本縣は嘗て訓令若くは通牒を發したることなかりしが、勿論青年會と併進すべきものと認め、縣當局は奬勵の方針を採り、各郡市亦青年團に準じて督勵を加へたれば、大正十一二年頃より、郡聯合處女會の設立を見るに至りしを以て、玆に統一的活動を期せんがために、大正十三年八月二十七日、縣聯合處女會を組織したり。會長・副會長・幹事・顧問を置き、會長には知事、若くは知事夫人を推戴することゝし、顧問には縣內學識德望あるもの、又は本會に對して功勞ある者を推擧することゝなせり。大正十四年四月、現在にて加盟會數十一、會員數三萬四千八百五十二人、經費金二百六十四圓六十二錢、施設事業は縣下中堅處女講習會なり。郡聯合處女會狀況は左の如し。

| （郡名） | （郡・聯合處女會） | | （加盟會數） | （會長種別） | | （會員數） | （會員年齢範圍） | （經費總額） |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | （經費總額） | （施設事業） | | （會員） | （會員外） | | | |
| 勢多 | 二六一、〇〇 | 講習會、中堅處女講習會、學藝發表會、體育講習會 | 一七 | 一五 | 二 | 五、七三七 | 自滿十二歳至滿廿五歳 | 三、九九七、七三 |

| | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 群馬 | 二三八、〇〇 | 講演會、發表會 | 三七 | ― | 三七 | 六、四七一 | 自滿十二歲 | 四、七七五、四一 |
| 多野 | 一三六、〇〇 | 幹部講習會、講話會 | 二四 | 四 | 二〇 | 二、三七九 | 同　右 | 二、三二三、〇〇 |
| 北甘樂 | 五〇〇、〇〇 | 幹部講習會、展覽會、學藝發表會體育衞生講習會 | 一三 | 四 | 一九 | 二、七二九 | 同　右 | 二、八四四、八〇 |
| 碓氷 | 二六五、〇〇 | 幹部講習會、運動會、敬老會男運動會後援縣聯合處女會事業參加 | 一九 | 一三 | 六 | 二、一九六 | 同　右 | 二、一五九、三八 |
| 吾妻 | 二九三、〇〇 | 作法講習會、中堅講習會、學藝發表會、町村處女會、事業補助 | 一四 | 一二 | 二 | 二、二七九 | 同　右 | 一、九八八、七九 |
| 利根 | 五四六、〇〇 | 幹部講習會、學藝發表會、優良處女會表彰 | 一六 | 六 | 一〇 | 二、六八八 | 同　右 | 一、八八六、〇〇 |
| 佐波 | 未　定 | 講習會、旅行、運動會 | 一六 | 二 | 一四 | 三、七九二 | 同　右 | 二、六八二、四七 |
| 新田 | 二五六、〇〇 | 幹部講習會、講演會、宣傳學藝獎勵施設、會報發行 | 一三 | ― | 一三 | 二、〇八六 | 同　右 | 一、三七六、五八 |
| 山田 | 四六五、〇〇 | 學藝發表會、見學旅行、各種宣傳記念事業 | 一一 | 二 | 九 | 一、五四三 | 同　右 | 一、九一八、四七 |
| 邑樂 | 四六〇、〇〇 | 講習會、講演會、町村處女會獎勵 | 二三 | 一 | 二二 | 三、〇五三 | 同　右 | 三、一五七、二七 |
| 全管 | 三、四九九、〇〇 | | 二一二 | 五九 | 一五三 | 三四、八五三 | 同　右 | 二八、五九八、八九 |

## 三　體育奬勵

教育上體育が忽諸に附すべからざるは自明の理なれば、學制時代、小・中學の教科に、體操科を加へ、楫取縣令も亦之を重んじたることは、學制に關する演說書中

中學校に歩兵操練科を加ふるの建議案を通過す

に明記したる所なり。明治十八年三月、本縣の通常縣會に、中學校教科に歩兵操練科を加ふるの建議案(その理由とする所、一に身體の强壯、二に志氣の勃興、三に兵役年限の短縮に資せんがため)を通過するなど、夙に本縣當事者の留意する處たりき。文部省は明治二十三年、小學校令改正以後は、特に此方面に注意し、小學校設備準則、學校衛生等に關する諸規程を設けたれば、本縣當局亦此意を體して、大に之が發達に考慮する所ありき。明治二十九年、前橋市東照宮側の群馬縣尋常師範學校附屬運動場を整理し、運動場を擴張し、此年六月六日を以て、師範學校・中學校・附屬小學校・前橋市高等小學校四校、聯合大運動會を開催し、聯合運動會の範を示し、越えて明治三十六年五月三日には、高崎歩兵第十五聯隊營庭を借用して、縣立學校大運動會を開催せり。參加學校は師範學校・前橋中學校・同利根分校・高崎中學校・富岡中學校・太田中學校・同邑樂分校・藤岡中學校・安中中學校・農業學校(中之條)の諸校にして、體育振興上頗る有益なる施設なりしが、未だ充分の發達をなしたりとは云ふべからざりき。

聯合運動會

日露戰役後、體育振興の必要益盛なるに及び、文部省は大正二年一月二十八日、訓令を以て學校體操教授要目を示し、普通教育上に於ける體操教授の參考に供せり。

體育改善に留意す

本縣は當時小學校兒童及び壯丁の體格等位が、全國中劣位なるに鑑み、之が改善に留意

する所あり。大正四年六月、上野教育會總集會に對し、諮問案として、本縣人の體格の劣りし原因、並に之が救濟策を提出し、其答申案を容れて、縣下小學校體操科を、系統的に、統一的に、指導奬勵するの方針を定め、當時本縣師範學校教諭矢嶋鐘藏に小學校教員體操科講習會講師兼務を命じ、之が指導の任に當らしめたり。

是に於て興隆の氣運に向ひつゝありし本縣の體操は、急激の發達を來し、單に小學校のみならす、縣下青年間に普及し、大正五年三月、梨本宮殿下は佐波郡小學校青年團在郷軍人分會聯合體操會、多野郡藤岡小學校に台臨せられたるを初とし、陸軍省・文部省其他斯界の權威者續々來縣視察せられ、大正六七年頃は、群馬縣の體操、全國に喧傳せられ、大に其隆盛を稱贊せらるゝの全盛を見たり。本縣は益〻之が指導奬勵機關特設の必要を認め、大正十年四月より、縣體育主事を設置し、學務課に屬せしめ、小學校は勿論、青年男女の體育の指導奬勵に關する職務を管掌せしむるに至れり。爾來體操のみならず、武道を初め、各種の運動競技の振興を企劃し、其結果頗る見る見るべきものあり。

## 四　圖書館

上野教育會附屬圖書館

前橋市立圖書館

圖書館設置に就いて、文部省は明治十二年・十四年の兩次、規定する所あり。明治十五年、地方學務官に之が設置奬勵の訓示を爲し、明治二十三年、小學校令の改正に於て、圖書館に關する規則を設け、本縣亦明治二十三年一月十七日、縣令第五號を以て、市町村立小學校・幼稚園と共に、之が設置廢止變更に關する規程の制定あり。次いで明治三十二年十一月、文部省は勅令第百廿九號を以て、圖書館令の公布あり。法令上大に整備したる觀ありしも、本縣未だ一の圖書館の設立なかりしが、明治三十三年五月、私立上野教育會は、前橋市曲輪町に附屬圖書館を設置したり。これを本縣圖書館の嚆矢と爲す。爾來、縣民の注意する所となり、日露戰役の結果、之が記念事業として教育向上の機關として設置したるものに、碓氷郡教育會・征露記念高崎戰捷記念圖書館・多野郡神川村立圖書館、其他各郡教育會附設の巡回文庫等開始せられ、明治四十三年、文部省令第十八號、圖書館令施行規定竝に群馬縣令第七號、圖書館及私立學校に關する規定等發布せられたれども、大正五年九月、前橋市立圖書館の開館したる外、著しき發達を見ず。大正九年度

金山圖書館

末に於て公立四、私立六の如き、甚だ少數なりき。縣は圖書館の設置が社會教育上甚だ緊要なるを認め、大正十年四月二十二日、圖書館費補助規程を定め、設置の普及と內容の改善とを圖ると共に、圖書購入費二十圓より五百圓までの簡易圖書館標準目錄を調製し、各郡市町村學校等に配布する等、奬勵する所ありき。最近設置の機運頓に勃興し、大正十四年四月末現在にては、一躍して公立十七、私立一五二、計一六九の多數に上れり。就中大正十年九月建設、大正十一年一月一日より開館せられたる私立金山圖書館（新田郡太田町）は、同町葉住利藏一個人の設立にかかり、設備藏書其他の點に就いて最特色を有し大に世人の推奬を受けたり

本縣圖書館調（大正十四年四月現在）

| （郡市名） | （圖書館數）（公立） | （私立） | （計） | （大正十三年度經費） | （藏書冊數） | （閲覽人員） |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 前橋市 | 一 | 一 | 二 | 八、七五五、〇〇 | 二七、一〇八 | 六五、七七〇 |
| 高崎市 | 一 | ｜ | 一 | 四、一六八、〇〇 | 一二、七一三 | 四四、一九一 |
| 勢多郡 | ｜ | 一九 | 一九 | 三、九四五、一三（一館未報告） | 八、六六四（一館未報告） | 三〇、五〇四（一館未報告） |
| 群馬郡 | 六 | 二六 | 三二 | 四五、八七七、二八 | 一七七、四一六 | 三八五、六五八 |
| 多野郡 | 五 | 六 | 一一 | 八一三、一〇（一館未報告） | 六、七二〇（一館未報告） | 一六、〇八九（一館未報告） |

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 北甘樂郡 | ー | 二二 | 二二 | 二、四〇九、三八（一館未報告） | 九、六三〇 | 二一、九七九 |
| 碓氷郡 | ー | 一六 | 一六 | 一、六八五、二二〇（三館未報告） | 六、六〇五（三館未報告） | 一四、二三一（一館未報告） |
| 吾妻郡 | 一 | 九 | 一〇 | 一、七七九、〇〇〇（一館未報告） | 五、八七二 | 一二、二七三 |
| 利根郡 | ー | 一八 | 一八 | 二、五五八、六三三（一館未報告） | 五、八六九 | 二三、九六七 |
| 佐波郡 | 一 | 一四 | 一五 | 三、二二三、二二三（一館未報告） | 一一、二〇八 | 四四、三三九 |
| 新田郡 | 二 | 二 | 四 | 六、〇三八、五〇〇 | 四一、二八七 | 一八、〇二一 |
| 山田郡 | ー | 六 | 六 | 四九九、六三三 | 二、五七七 | 二、二七四 |
| 邑樂郡 | ー | 一三 | 一三 | 二、六六九、四四四（一館未報告） | 二〇、一八六 | 一二、九九四 |
| （計） | 一七 | 一五二 | 一六九 | 八四、四二一、五二二（一〇館未報告） | 三三五、八五五（三館未報告） | 六九二、二七〇（三館未報告） |

## 五　新聞雜誌

本縣に於ける新聞雜誌の創刊は明かならざれども、明治十三年の本縣統計書に據れば左の如し。

| （題號） | （創刊年月） | （社名所在地） | （社主　編輯人） |
|---|---|---|---|
| 群馬新聞 | 明治一二、一一 | 廣聞社（前橋） | 梶山榮吉　清水孝 |

| 上毛新聞 | 同 | 一三、一二 | 廻瀾社（前橋） | 宮田重固　野上瀧三 |
|---|---|---|---|---|
| 毎日電信物價新聞 | 同 | 一一、一二 | 隆盛社（高崎） | 吉井兵太郎　同人 |

されば本縣の新聞雜誌の發刊は、大體明治十一年頃とすべきか。尤是より先、明治七年、熊谷縣時代に於て、書拔新聞（月二回）の發刊を計畫し、縣廳に出願したるものありたる事實あり。

是に由て之を觀れば、本縣の新聞雜誌の創刊は思ぶに、明治十一年頃なるべきか。當時、文化未だ洽からず、新聞雜誌に關する知識亦未だ開發せざりしを以て、本縣は新聞に關する知識普及の爲め、明治十一年二月二十七日、乙第二八號を以て、正副區戶長・學區取締に宛て、日報社新聞一葉づつを下附して、之を回覽せしめたり。其全文を抄錄すれば、左の如し。

新聞紙下附　明治十一年二月二十七日、乙第二八號、正副區長・學區取締新聞紙之儀ハ、世態ニ通ジ、知識ヲ開クノ一端ニテ、有益ノ物ニ候處、自力購求難及ヨリ、何物タルヲ不知者有之趣相聞候ニ付、方今費途多端ノ際ニハ候得共、特別ノ詮議ヲ以、來三月一日ヨリ、先以各大區（二十三大區各小區）及び學區取締ニ、日報社新聞誌一葉宛下附候條、區戶長ハ區內人民、學區取締ハ持區內學校ヘ回覽ニ取計遲滯ナク巡覽、周尾ヨリ區務

所、及取締へ返却爲致、號順ニ綴備、一見ヲ要スル者へ縦覽可爲致、右ハ民智開進ノ旨趣ニ候條、能ク其意ヲ體シ、該旨轍底候樣注意可致、此旨相達候事。

但新聞ハ本縣布達ニ添ヘ下附候條、該區之分引去、學區取締分ハ配達方可取計、且從前民費ヲ以買入候分有之向ハ、區内便宜上回覽ニ取計可申事。

是より人智次第に進み、新聞の購讀者も出で來て、新聞雜誌の發刊漸く多きを加ふるに至れり。但し右に掲げたる群馬新聞及び上毛新聞は現時發行の群馬新聞・上毛新聞に非ず。現時の上毛新聞は、明治十九年一月の創刊に係り、初め官令日報と號し、同二十年三月、群馬日報と改む。偶〻上野新聞と競爭の結果、形勢一變して、合同の議成り、玆に上毛新聞と改題して今日に至れり。群馬新聞は明治三十二年十一月の創刊にして、初め上野民報と稱せしが、翌三十三年十二月、組織を變更して、同時に群馬新聞と改題したるなり。以上二新聞の外、現時發刊する新聞にて來歷古きものを上州新報とす。上州新報は明治二十九年十一月第一號を發刊して、爾來今日に至れるものなり。

別表は大正十二年、本縣統計書の示す所なり。

| | 發行期日 | 開業 | 配布高(管內) | 配布高(管外) | 配布高(計) | 收入金額 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 上毛新聞 | 日刊 | 明治三十二年十一月一日 | 四、八六〇、〇〇〇 | 五四〇、〇〇〇 | 五、四〇〇、〇〇〇 | 圓 一〇八、〇〇〇 |
| 上毛教界月報 | 月一回 | 同　年十一月十五日 | 五、一〇〇 | 一、七七六 | 六、八七六 | 三四四 |
| 上州新報 | 日刊 | 同　二十九年十月廿八日 | 一、四四〇、〇〇〇 | 三六〇、〇〇〇 | 一、八〇〇、〇〇〇 | 三六、〇〇〇 |
| 兩毛織物商報 | 月六回 | 同　三十一年七月十四日 | 四、七〇〇 | 六、七〇〇 | 一一、四〇〇 | — |
| 群馬新聞 | 日刊 | 同　三十二年十一月十五日 | 一、一五二、〇〇〇 | 二八八、〇〇〇 | 一、四四〇、〇〇〇 | 二八、八〇〇 |
| 上州實業新報 | 月四回 | 同　三十六年五月二十日 | 三九、六〇〇 | 三、六〇〇 | 四三、二〇〇 | 二、一六〇 |
| 上野新聞 | 日刊 | 同　年十一月二十日 | 一二五、〇〇〇 | 一五、〇〇〇 | 一四〇、〇〇〇 | 二一、〇〇〇 |
| 前橋商業會議所月報 | 月一回 | 大正二年六月十日 | 八、六四〇 | 三、三六〇 | 一二、〇〇〇 | — |
| 商業新報 | 月六回 | 同　三年三月三十日 | 八、三八〇 | 三、三二〇 | 一一、六〇〇 | 三四八 |
| 兩毛織物新聞 | 日刊 | 同　年十月十五日 | 三、〇二〇 | 二、七八〇 | 五、八〇〇 | 九八六 |
| 上毛及上毛人 | 月一回 | 同　四年九月十一日 | 八、八八〇 | 三、一二〇 | 一二、〇〇〇 | 三、〇〇〇 |
| 書上タイムス | 月一回 | 同　五年六月五日 | 三、六〇〇 | 七、二〇〇 | 一〇、八〇〇 | 二、七〇〇 |
| 衛生時報 | 月一回 | 同　七年一月十五日 | 四、八〇〇 | 一、二〇〇 | 六、〇〇〇 | 一、二〇〇 |
| 上野每日新聞 | 日刊 | 同　年十月一日 | 一、九〇八、〇〇〇 | 七二、〇〇〇 | 一、九八〇、〇〇〇 | 三五、六四〇 |
| 前橋市立圖書館報 | 月一回 | 同　八年一月十五日 | 六、九六〇 | 一、四四〇 | 八、四〇〇 | — |
| 上毛商工新聞 | 月二回 | 同　年六月廿五日 | 五〇〇 | — | 五〇〇 | 二五 |

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 伊勢崎新聞 | 月四回 | 同 | 九年一月十五日 | 五,〇〇〇 | 三,〇〇〇 | 七,〇〇〇 | 三五〇 |
| 碓氷社報 | 月一回 | 同 | 年八月二日 | 九,四八〇 | 一三〇 | 九,六〇〇 | — |
| 上野魁新聞 | 月三回 | 同 | 年十一月六日 | 一三,〇〇〇 | — | 一三,〇〇〇 | 一,三〇〇 |
| 關東產業 | 月一回 | 同 | 年十一月廿五日 | 二五〇 | 五〇 | 三〇〇 | 七五 |
| 新上野 | 月一回 | 同 | 年十一月廿六日 | 一六,九九二 | 一,〇〇八 | 一八,〇〇〇 | 三六九 |
| 地方文化 | 月一回 | 同 | 十年二月十五日 | 三五〇 | 一五〇 | 五〇〇 | 一五〇 |
| 實業之高崎 | 月一回 | 同 | 年五月八日 | 一一,四〇〇 | 三,〇〇〇 | 一四,四〇〇 | — |
| 東毛實業新聞 | 月四回 | 同 | 年九月三日 | 一四,四〇〇 | — | 一四,四〇〇 | 七二〇 |
| 金山時報 | 月二回 | 同 | 年十月五日 | 一九四,四〇〇 | 三一,六〇〇 | 二二六,〇〇〇 | 四,三二〇 |
| 種を蒔く人 | 月一回 | 同 | 年十一月十日 | 三六,〇〇〇 | — | 三六,〇〇〇 | 一,八〇〇 |
| 群馬タイムス | 月一回 | 同 | 十一年二月十八日 | 三,九〇〇 | 三〇〇 | 四,二〇〇 | 八四〇 |
| 民政新聞 | 月三回 | 同 | 年三月五日 | 五,〇〇〇 | — | 五,〇〇〇 | 五〇〇 |
| 東上百貨化粧品商報 | 月一回 | 同 | 年四月十五日 | 九〇〇 | 一〇〇 | 一,〇〇〇 | 五〇 |
| 社會時事 | 月一回 | 同 | 年四月廿日 | 五,七六〇 | 二四〇 | 六,〇〇〇 | 一,八〇〇 |
| 上越新報 | 月三回 | 同 | 年十二月十五日 | 一,六五〇 | 三五〇 | 二,〇〇〇 | 一四〇 |
| 上越新聞 | 月二回 | 同 | 十二年一月一日 | 六,〇〇〇 | 二,〇〇〇 | 八,〇〇〇 | 六四〇 |
| 盛年 | 月一回 | 同 | 年三月十日 | 八,〇〇〇 | 四,〇〇〇 | 一二,〇〇〇 | — |

|  |  |  |  |  |  |  |  |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 両野通信 | 日刊 | 大正 | 十二年八月七日 | 五四、〇〇〇 | — | 五四、〇〇〇 | 一、三五〇 |
| からし種 | 月一回 | 同 | 年九月五日 | 三、三六〇 | 二四〇 | 三、六〇〇 | 七二 |
| 上野朝日 | 月三回 | 同 | 年九月廿日 | 六〇〇 | — | 六〇〇 | 六 |
| 平民時報 | 月一回 | 同 | 年十二月廿五日 | 三、六〇〇 | — | 三、六〇〇 | 三六〇 |
| 上毛蠶絲業評論 | 月一回 | 同 | 十三年一月廿五日 | 五〇〇 | — | 五〇〇 | 一〇〇 |
| 大高崎 | 月一回 | 同 | 年二月三日 | 五〇〇 | — | 五〇〇 | 一〇〇 |
| 坂東新聞 | 月二回 | 同 | 年三月三十日 | 二八〇 | — | 二八〇 | 四二 |
| 上毛時事新聞 | 月二回 | 同 | 年四月二十日 | 四、三二〇 | 一八〇 | 四、五〇〇 | 九〇〇 |
| 政治と文藝 | 月一回 | 同 | 年五月三日 | 五、二〇〇 | 一、五〇〇 | 六、七〇〇 | 二、三四五 |
| 東雲新聞 | 月一回 | 同 | 年五月三日 | 四、〇〇〇 | 二〇〇 | 四、二〇〇 | 一、二六〇 |
| 農村 | 月一回 | 同 | 年五月十五日 | 五、六五〇 | 五〇 | 五、七〇〇 | 八五三 |
| 両毛新聞 | 月三回 | 同 | 年七月十五日 | 五〇〇 | — | 五〇〇 | 二五 |
| 自由 | 月一回 | 同 | 年七月廿五日 | 三、九〇〇 | 九、一〇〇 | 一三、〇〇〇 | 二、六〇〇 |
| 廿樂新聞 | 月二回 | 同 | 年七月廿五日 | 三、〇〇〇 | — | 三、〇〇〇 | — |
| 上信時報 | 月三回 | 同 | 年八月一日 | 一、一二〇 | 八〇 | 一、二〇〇 | 一二〇 |
| 新經濟 | 月一回 | 同 | 年八月廿六日 | 一、五〇〇 | 一、〇〇〇 | 二、五〇〇 | 一、二五〇 |
| 上野中央新聞 | 月一回 | 同 | 年九月廿五日 | 七、〇〇〇 | — | 七、〇〇〇 | 一、四〇〇 |

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 上州公論 | 月一回 | 同 | 年九月二十日 | 一,九〇〇 | 五〇 | 一,九五〇 | 七八〇 |
| 上武新報 | 月三回 | 同 | 年十月二十日 | 七五〇 | 五〇 | 八〇〇 | 八〇 |
| 地方公論 | 月一回 | 同 | 年十月四日 | 五〇〇 | — | 五〇〇 | 五〇 |
| 坂東新聞 | 月三回 | 同 | 年十月三十日 | 四五〇 | 五〇 | 五〇〇 | 二五 |
| 郷土 | 月一回 | 同 | 年十月十七日 | 二,四〇〇 | 六〇〇 | 三,〇〇〇 | 一,〇五〇 |
| 上毛評論 | 月一回 | 同 | 年十二月一日 | 一,〇〇〇 | — | 一,〇〇〇 | 一五〇 |
| （合計） | — | | — | 一〇,〇一六,六九二 | 一,三五七,四一四 | 一一,三七四,一〇六 | 二六八,〇七五 |

## 第十節　私立學校

本縣の私立學校に對する監督法規は、明治九年八月制定の學務規則中に、私學・家塾の設置は、本縣の許可を得べきこと、及び滿十四歳以下の兒童、小學科卒業の免狀なくしては、入門を許さゞることを規定したるを最初としたるが如し。當時の私立學校は、多くは學制中の所謂私學・家塾にして、學制頒布以前より設置したるものなり。其外興學の氣運に伴ひ、新に之を設置したるものもあり。何れも教化を裨補すること少からざりしと雖も、動もすれば寺小屋一流の學風を慕ひ、無價の教育を以て自ら甘んじ、兼ねて學資の負擔を免れんとするを以て、之が監督の必要を認めたるに由るなり。後明治十年九月、群馬縣學則、明治十三年一月、群馬縣教育令施行規程、皆同趣旨を以て之を規定したりしが、明治十三年七月、新に私立學校規則なる單行規程を定めて、縣下に布達したり。即ち私立學校は、一人若くは數人の私費を以て設置するものにして、其學科は、小學・中學、及び專門各種の別あるものとす等、種類設置廢止學則監督獎勵法等を詳細に規定したり。而も尚正當の手續を經ずして、猥りに私宅に子弟を集め、教授を施す者ありしか

ば、明治十八年十一月諭達を出して、速に手續をなすべき旨を達せり。左表は明治十年以來設廢せられたる私立學校表なり。此表に就き、其の設立の年次と、同年次に設立せられたる學校と、其教授科目を通覽すれば、時勢の變遷を知ることを得べし。

私立學校調査表（明治十年至大正十四年一月）

| (校名) | (所在地) | (學科) | (開校年月) | (設立者又ハ校長名) | (入學年齡修業年限生徒定員數) | (備考) |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 藍園學舍 | 群馬郡澁川村 | 漢學 | 明治一〇、五 | 堀口貞欽 | 十四年以上四ケ年 | 人物養成ニ留意 |
| 積小學校 | 高崎驛鞘町 | 同 | 同 | 市川左近 | | 明治二十二年一月積小學館改稱 |
| 邦振學校 | 高崎驛宮元町 | 和歌學 | 同 | 深井ジン | | 女子ヲシテ歌學ノ外習字讀書裁縫ニモ熟セシム |
| 日進學舍 | 前橋町神明町 | 普通學 | 同 | 高梨正太郎 | | |
| 淳風學校 | 群馬縣元惣社村 | 漢學 | 同　六 | 赤石元長 | 學齡以外ノ者 | |
| 黑石學校 | 群馬縣柴崎村 | 同 | 同 | 黑石周壽 | 十四年以上五ケ年 | |
| | 勢多郡駒形村 | 醫學 | 同　一二、一 | 内田抱一 | 三ケ年 | |
| | 前橋町紺屋町 | 漢學 | 同　三 | 牧野再龍 | | |
| 飯島學校 | 西群馬郡足門村 | 同 | 同 | 飯島三宅 | 三ケ年 | |
| 吾妻漢字書院 | 吾妻郡原町 | 同 | 同 | 成嶋大秀 | 十四年以上四ケ年 | 修身・歷史・習字等モ授ク |

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 高崎漢字書院 | 高崎町通町 | 和漢學 | 明治一二、三 | 貫名正祁 | 十四年以上 | 明治十九年五月廢校届出 |
| | 前橋町相生町 | 書學 | 同 一五 | 武井基一郎 | | |
| 關派數學舍 | 西群馬郡棟高村 | 數學 | 同 一七 | 坂本椎市 | 十四年以上四ケ年 | |
| | 南勢多郡小沼村 | 漢學 | 同 一〇 | 長岡孝次郎 | 三ケ年 | |
| 製絲工女餘暇學校 | 同 | | 同 二一 | 星野長太郎 | | 本縣工女餘暇學校準據 大正八年十二月廿三日學制變更 |
| （）灌來舍 | 高崎町元紺屋町 | 漢學 | 同 一三、四 | 築瀨藏六 | 二ケ年 | |
| 山口學校 | 前橋町相生町 | 書學（西洋畫） | 同 一三、一 | 山口彥治郎 | 年齡ニ制限ナシ | |
| 南淵塾 | 佐位郡伊勢崎町 | 漢學 | 同 一二 | 新井雀里 | 十四年以上四ケ年 | 明治十七年四月廢校届出 |
| 私立修身學校 | 新田郡大島村 | 皇漢學 | 同 一三 | 由良靈松 | 十四年以上三ケ年 | 明治十九年四月廢校届出 |
| 灌來分舍 | 西群馬郡下室田村 | 漢學 | 同 一四 | 齋藤源吉 外四名 | 十四年以上 | |
| 鳳鳴學社 | 前橋町堀川町 | 漢學 | 同 一九 | 保岡亮吉 | 二ケ年 | |
| 旭嶺學舍 | 西群馬郡上増田村 | 普通學 | 同 | 田村源藏 | 十五年以上四ケ年 | |
| 風詠社 | 利根町沼田町 | 漢學 | 同 | 後藤敬義 | 學齡以外四ケ年 | 普通學モ授ク |
| 松平學校 | 山田郡大町村 | 讀算修 | 同 一三 | 松平定靜 | | 小學校ニ準ズ |
| 贊育社 | 前橋町芳町 | 數學 | 同 一四 | 秋葉廣定 | | |
| 養正舍 | 前橋町南曲輪町 | 變則中學 | 同 一六 | 山井幹六 | 六ケ年 | |
| 修誠書院 | 北甘樂郡曾木村 | 支那學 | 同 | 佐々木左源太 | 三ケ年 | |

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 紹啓私塾 | 北甘樂郡下仁田町 | 漢學 | 同 | 有賀善五郎 | 十四年以上 | |
| 餘力學校 | 山田郡吉澤村 | 普通學 | 同 八 | 長岡又平 | 四ヶ年 | 小學校ニ準ズ |
| 約牖學校 | 山田郡矢場村 | 同 | 同 九 | 山崎誠一郎 | 四ヶ年 | 小學校ニ準ズ |
| 精理義塾 | 高崎町柳川町 | 數學 | 同 一四、六 | 竹貫登代多 | 四ヶ年 | |
| 共立盈科義塾 | 山田郡安樂土村 | 漢學 | 同 | 岩崎民三郎外三名 | 十五年以上二ヶ年 | 明治十七年七月廢校屆出 |
| 來新舍 | 西群馬郡下室田村 | 漢學 | 同 | | | 從來分舍ノ後身 |
| 梁瀬學校 | 高崎町北通町 | 普通學 | 同 一五、五 | 梁瀬忠方 | 一年半 | 後私立發育小學校ト改稱ス |
| 天章義塾 | 前橋町細ケ澤町 | 漢學 | 同 一六、二 | 服部秀三 | 十四年以上二ヶ年 | |
| 明治義塾 | 高崎町宮元町 | 同 | 同 三 | 鵜島周爾 | 年限規定ナシ | 後算術ヲ加フ |
| 啓沃學校 | 新田郡尾嶋町 | 皇漢學 | 同 九 | 金井只五郎 白石藏之輔 | 三ヶ年 | 明治十七年二月廢校屆出。 |
| 回天義塾 | 佐位郡伊勢崎町 | 英漢學 | 同 一七、二 | 細野時敏 | 十四年以上二ヶ年 | |
| 明志義塾 | 前橋町南曲輪町 | 漢學 | 同 五 | 松田謙二 | 十四年以上三ヶ年 | 明治十八年一月廢校屆出 |
| 愛性義塾 | 佐位郡小此木村 | 同 | 同 六 | 天田辨藏 | 小學卒業三ヶ年 | |
| 大日本傍聽筆記速成學舍 | 前橋町南曲輪町 | 傍聽筆記法 | 同 八 | 早川彪 | 五十日七十日間 | |
| 幽谷義塾 | 前橋町百軒町 | 漢學 | 同 一〇 | 蜂須長五郎 | 學齡以外四ヶ年 | 明治廿三年十一月集成學館ニ統一 |
| 猶興學館 | 高崎町柳川町 | 英漢學 | 同 一七、一〇 | 清水元造外二名 | 十四年以上三年半 | |
| 群馬明進學校 | 高崎町本町 | 簿記學 | 同 一八、三 | 高橋鐵五郎 | 小學中等科卒業三期七ケ月 | |

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 英語學校 | 前橋町北曲輪町 | 英學 | 同 | 星野耕作 | 二ヶ年 | |
| 環水堂 | 新田郡世良田村 | 漢學 | 同一〇 | 毛呂岩三 | 學齡外三ヶ年 | |
| 英語學校 | 高崎町柳川町 | 英學 | 同三 | 大橋花 | 學齡外二ヶ年 | |
| 刀北學舍 | 新田郡 | 漢學 | 同 | 北爪貝一 | 學齡外三ヶ年 | |
| 英學校 | 前橋町堅町 | 英數學 | 同一九、二 | 加藤勇次郎 | 五ヶ年 | |
| 高崎法學校 | 高崎町通町 | 法律學 | 同 | 久保田房次郎 | 十五年以上三ヶ年 | |
| 寒香義塾 | 高崎町龍見町 | 皇漢學 | 同三 | 長谷川長愛 | 學齡外四ヶ年 | 詩文教育モ授ク |
| 刀川英學校 | 南勢多郡宮田村 | 英漢數學 | 同四 | 角田喜右作 | 五ヶ年 | |
| 共立學校 | 那波郡下蓮沼村 | 和英漢數學 | 同 | 高柳清重郎 | 十四年以上四ヶ年 | |
| 養端塾 | 南勢多郡萩村 | 漢學 | 同五 | 眞砂野彦 | 學齡外四ヶ年 | |
| 正心義塾 | 南勢多郡八崎村 | 漢學 | 同 | 萩原市十郎 | 三ヶ年五〇人 | |
| 揚發塾 | 佐位郡今井村 | 普通學 | 同六 | 織田傳次郎 | 四ヶ年 | 化學農業科ヲ教授ス |
| 獨蘭學舍 | 前橋町北曲輪町 | 獨語醫學 | 同 | 中島尚友 | 三ヶ年十二人 | |
| 英學私校 | 前橋町北曲輪町 | 英語 | 同七 | 是洞能凡類 | 十四年以上三ヶ年五〇人 | 普通學ヲモ授ク |
| 英學校 | 碓氷郡原市町 | 英語 | 同 | 宮口次郎 | 十三年以上三ヶ年 | |
| 桐生私立英語學校 | 山田郡安樂土村 | 英語 | 同 | 仲田信亮 | | 變則中學教育 |
| 學習館 | 前橋町神明町 | 英漢數學 | 同 | 藤井蓮平 | 十五年以上二ヶ年六〇人 | |

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 濟美塾 | 南勢多郡堀越村 | 皇漢學 | 同　一九、八 | 田川義孝 | 十四年以上三ヶ年 | |
| 敢爲私塾 | 西群馬郡川島村 | 皇漢學 | 同 | 加藤高十郎 | 十四年以上四ヶ年 | |
| 三餘義塾 | 佐位郡木島村 | 普通學 | 同 | 小暮貞啓 | 六ヶ年四〇人 | |
| 三省舍 | 碓氷郡豐岡村 | 皇漢學 | 同 | 瀧田資利 | 學齡以外四ヶ年 五〇人 | |
| 簿記學傳習所 | 前橋町北曲輪町 | 簿記學 | 同　九 | 小林勝壽 | 學齡以外一ヶ年 五〇人 | |
| 石打英學校 | 邑樂郡石打村 | 英學 | 同　一二 | 荒井啓五郎 | 十二年以上三ヶ年 | 明治廿一年十二月廢校届出 |
| 英學校 | 北甘樂郡高瀬村 | 英數學 | 同　一三 | 齋藤壽雄 | 五ヶ年五〇人 | 後ニ甘樂英學校ト改ム |
| 私立太田英語夜學校 | 新田郡太田町 | 英學 | 同　二〇、一 | 小林平三郎 外三名 | 十年以上三ヶ年 三十人 | |
| 求仲塾 | 南勢多郡國領村 | 漢學 | 同　二 | 石山確平 | 學齡以外 | |
| 英語專修學校 | 高崎町鍛冶町 | 英學 | 同 | 那須禎太郎 | 學齡以外三ヶ年 九〇人 | 男女共入學ヲ許ス |
| 澁川英語學校 | 西群馬郡澁川村 | 英學 | 同　三 | 石坂雄吾 | 十四年以上四ヶ年 五六人 | 明治廿四年十二月廢校届出 |
| 修齊塾 | 前橋町神明町 | 漢學 | 同　四 | 鳥海彌 | 學齡外四ヶ年 | |
| 桐生漢學私塾 | 山田郡安樂土村 | 漢學 | 同　五 | 木村四郎平 | 十五年以上三ヶ年 三〇人 | |
| 曳尾義塾 | 邑樂郡館林町 | 漢英數學 | 同　七 | 田中謙三 外三名 | 十四年以上三ヶ年 七〇人 | 男女共入學ヲ許ス |
| 清揚女學校 | 前橋町南曲輪町 | 英學 | 同　八 | 芦澤鳴尾 | 十四年以上三ヶ年 百人 | 普通學技藝ヲモ授ク 後集成學館ニ併合 |
| 訓蒙義塾 | 同 | 漢學 | 同　一〇 | 玉尾儒 | 十四年以上三ヶ年 百人 | |
| 惜陰學舍 | 前橋町北曲輪町 | 漢學 | 同　一二 | 遠山靜藏 | 學齡以外四ヶ年 三〇人 | 明治廿二年三月廢校届出 |

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 富岡私立英語學校 | 北甘樂郡富岡町 | 英學 | 同 | 一七 | 金井愛之助 | 十二年以上三ヶ年四〇人 | 男女共ニ入學ヲ許ス |
| 江東英學校 | 南勢多郡原之郷村 | 英語普通學 | 同 | 二〇、二 | 古屋金次郎 | 三ヶ年 | |
| 私立英學夜學校 | 吾妻郡中之條町 | 英學 | 同 | 四 | 田中甚平外四名 | 十四年以上二年三〇名 | |
| 前橋産婆學校 | 前橋町立川町 | 産婆學 | 同 | 二一、三 | 小原澤錠三郎 | 十五年以上一ヶ年三〇人 | |
| 碓氷英學校 | 碓氷郡原市町 | 英學 | 同 | 四 | 萩原國太郎外二名 | 十二年以上三年七〇人 | |
| 私立松井田産婆學校 | 碓氷郡 | 産科 | 同 | 五 | 小林寮仙 | 十六年以上四十年迄二ヶ年一五人 | 明治廿三年十二月廢校届出 |
| 一方義塾 | 南勢多郡才川村 | 漢英數學 | 同 | | 永井元 | 十五年以上二ヶ年半百人 | |
| 前橋英和女學校 | 前橋町曲輪町 | 英漢學 | 同 | 六 | 不破唯治郎 | 尋卒以上四ヶ年五〇人 | 明治廿二年上毛共愛女學校ト改稱 |
| 正教會修身女學校 | 同 | 神學 | 同 | 八 | 加藤畯臧 | 學齡以外五ヶ年九〇人 | |
| 新町英學校 | 綠野郡新町驛 | 英學 | 同 | 一〇 | 鶴見良憲 | 十年以上三ヶ年一五〇人 | 明治廿九年四月廢校届出 |
| 竹林義塾 | 綠野郡新町驛 | 漢學 | 同 | | 芦田武彦 | 學齡以外三ヶ年四〇人 | |
| 育英學校 | 前橋町曲輪町 | 普通科 | 同 | 三、九 | 保岡亮吉 | 學齡以外三ヶ年 | 明治廿三年十月集成學館ニ併合 |
| 私立倉賀野幼稚園 | 西群馬郡倉賀野町 | | 同 | 三、二 | 蓮田文翁 | 三年以上六年マデ六ヶ月六〇人 | 明治廿四年五月廢園届出 |
| 産婆學校 | 佐位郡伊勢崎町 | 産婆學 | 同 | 七 | 星野せき | 十五年以上四〇人 | |
| 兼子簿記學英學舍 | 前橋町南曲輪町 | 簿記學 | 同 | | 兼子初太郎 | 高卒以上一年半一〇人 | 明治廿四年四月廢校届出。 |
| 集成學館 | 前橋町曲輪町 | 英漢數學 | 同 | 一 | 朝岡剛平外二名 | 高卒以上三ヶ年 | 女子モ入學ヲ許ス |
| 有德義塾 | 西群馬郡東村 | 漢學 | 同 | 二四、二 | 永井一義 | 學齡以外三ヶ年二五人 | |

| 校名 | 位置 | 學科 | 設立 | 設立者 | 入學資格・修業年限・生徒數 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 有隣學舍 | 前橋町曲輪町 | 普通學 | 明治二四、三 | 小林爲則 | 高卒以上三ケ年 | |
| 前橋數學院 | 前橋町芳町 | 數學 | 同　五 | 秋葉元政 | 十四年以上三ケ年 | 明治廿八年一月前橋商業學校に組織變更 |
| 簿記精成學館 | 前橋町神明町 | 簿記學 | 同　五 | 小針健壯 | 十五年以上一ケ年四〇人 | |
| 積小學館 | 高崎町宮元町 | 數學 | 同　六 | 大澤安次郎 | 學齡外二ケ年 | |
| 數學舍 | 高崎町宮元町 | 數學 | 同　一〇 | 中溝利一郎 | 學齡外三ケ年二六人 | |
| 新町學校 | 山田郡桐生新町 | 普通學 | 同　一一 | 加納喜輔 | 學齡以外三ケ年 | |
| 育材館 | 利根郡沼田町 | 漢數學 | 同　二六、四 | 金子健次郎外二名 | 高卒以上三ケ年百人 | |
| 太田裁縫學校 | 高崎町 | 裁縫 | 同　一一 | 太田うゐ | 十四年以上一ケ年 | |
| 大友裁縫女學校 | 前橋市清王寺町 | 裁縫 | 同　二七、二 | 大友清次郎 | 十四年以上三ケ年 | |
| 私立高崎婦女學院 | 高崎市柳川町 | 裁縫家政 | 同　三 | 鈴木義一 | 學齡外一ケ年八〇人 | |
| 私立川内學校 | 山田郡川内村 | 漢學 | 同　三 | 松島喜一郎 | 尋卒以上三ケ年 | 農業モ授ク男女入學ヲ許ス |
| 私立吾妻中學院 | 吾妻郡原町 | 中學程度普通學 | 同 | 高山昇 | | |
| 私立謙讓學舍 | | 漢學 | 同　二七、八 | 河村武彦 | 學齡以外三ケ年 | 男女共入學ヲ許ス |
| 私立和英學校 | 前橋市北曲輪町 | 英學 | 同　一一 | 中西秀雄 | 尋卒以上 | |
| 利根學校 | 利根郡沼田町 | 中等程度普通學科 | 同　二九、七 | 沼田町外十六ケ村學校組合 | 三ケ年五〇人 | |
| 倉賀野義塾 | 西群馬郡倉賀野町 | 英漢數學 | 同　一三 | 松本勘十郎 | 三ケ年 | |
| 開明英和學館 | 勢多郡木瀨村 | 英漢數學 | 同　三一、二 | 内田忠一 | 制限ナシ、三ケ年 | 夜學部モアリ |

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 私立前橋裁縫女學校 | 前橋市清王寺町 | 裁縫 | 同　三 | 南城キイ | 十四年以上四ケ年五〇人 | |
| 和氣發育義塾 | 群馬郡國府村 | 漢學 | 同　三、 | 内山誠臣 | | |
| 佛學館 | 利根郡湯ノ原村 | 佛學 | 同　三 | 八木素遵 | 四ケ年五〇人 | |
| ○私立明治裁縫女學校 | 前橋市本町 | 裁縫 | 同　三、五 | 鈴木タマ | 學齡外一ケ年 | 教員ヲ養成ス大正八年九月私立ノ冠稱廢止 |
| ○共立普通學校 | 山田郡大間々町 | 中等程度普通學 | 同　四 | 井上浦造 | 十三年以上三ケ年一二〇人 | |
| ○私立甲種高山社蠶業學校 | 多野郡藤岡町 | 養蠶科 | 同　二 | 町田菊次郎 | | 實業學校令ニ準據ス |
| ○私立月田裁縫學校 | 勢多郡粕川村 | 裁縫 | 同　三六、三 | 田村森太郎 | 三ケ年 | |
| 上毛裁縫學校 | 群馬郡國府村 | 裁縫 | 同　三 | 今井連四郎 | 二ケ年 | 隨意科トシテ養鷄科加設 |
| ○前橋裁縫專門學校 | 前橋市田中町 | 裁縫 | 同 | 栗間ハナ | 二ケ年 | 卅八年二月前橋裁縫淑女學校ト改稱 |
| ○私立鈴木裁縫學校 | 前橋市堀川町 | 裁縫 | 同　二 | 鈴木浪吉 | 高卒以上三ケ年 | 大正八年九月私立ノ冠稱廢止 |
| 高崎裁縫學校 | 高崎市檜物町 | 裁縫 | 同　三七、三 | 細谷ゆき | 尋卒以上二ケ年七〇人 | |
| 和洋裁縫學校 | 前橋市曲輪町 | 裁 | 同　一〇 | 木村とみ | 一ケ年半五〇人 | |
| ○桐生裁縫女學校 | 山田郡相生町 | 裁 | 同　三 | 番なか | 十四年以上三ケ年 | 大正十二年十月設立者變更 |
| ○私立和洋裁縫學校 | 前橋市北曲輪町 | 修裁縫編物 | 同　三七、一〇 | 代田かつ | 本科一ケ年速成六ケ月 | 大正九年十月設立者變更 |
| 私立富岡女學校 | 北甘樂郡七日市町 | | 同　三八、四 | 齋藤壽雄 | 高卒以上三ケ年 | |
| ○私立佐波學館 | 佐波郡伊勢崎町 | 中等普通科 | 同　六 | 中嶋雄太郎 | 三ケ年等卒以上 | 倫理中心ノ中等教育 |
| 私立女子裁縫專修所 | 前橋市南曲輪町 | 裁縫 | 同　八 | 森下ひやく | 尋卒以上二ケ年 | |

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 名和裁縫學校 | 佐波郡名和町 | 裁縫 | 明治三七、一 | 五代せん | 三ヶ年 | |
| 私立高崎裁縫學校 | 高崎市柳川町 | 同 | 同　三 | 清水新一郎 | 二ヶ年八〇人 | 大正七年九月廢校 |
| ○私立佐藤裁縫女學校 | 同 | 同 | 同　三九、二 | 佐藤タネ | 十二年以上二ヶ年 | 教員ヲモ養成ス |
| 私立桐生育英學校 | 山田郡桐生町 | 英漢學 | 同　三 | 廣田孝五郎 | 十四年以上三ヶ年 | |
| ○私立樹徳子守學校 | 高崎市赤坂町 | 尋常小學科 | 同　四 | 山端息耕 | 三ヶ年百二十人 | 大正十四年六月高崎實業學校ト改稱 |
| ○私立桐生裁縫補習學校 | 山田郡桐生町 | 裁縫家事 | 同　七 | 番なか | 高卒以上二ヶ年 | 桐生裁縫學校ニ附設 |
| 日清學校 | 多野郡藤岡町 | 養蠶製絲 | 同　九 | 山口正太郎 | | 清國人ヲ入學セシム |
| 私立共立義塾 | 佐波郡宮郷町 | 中學普通學 | 同　一 | 小暮喜平 | 高卒以上三ヶ年 | 大正九年二月廢校 |
| 私立裁縫學校 | 前橋市神明町 | 裁縫手藝 | 同　四〇、二 | 八木いと | 二ヶ年 | 大正十三年十二月廢校 |
| 私立女子裁縫學校 | | 同 | 同　四 | 樋口金四郎 | 本科一年六ヶ月 | 男女共ニ入學ヲ許ス |
| ○私立東寧實業補習學校 | 新田郡世良田村 | 農業家事裁縫 | 同　四一、一 | 内田作次郎 | 尋卒以上二ヶ年 | |
| ○私立吉田裁縫女學校 | 高崎市中紺屋町 | 裁縫編物 | 同　三 | 吉田百太郎 | 二ヶ年 | |
| ○新田學館 | 新田郡木崎町 | 普通學 | 同　四三、七 | 松尾俊應 | 尋卒以上三ヶ年 | |
| ○私立藤岡裁縫女學校 | 多野郡藤岡町 | 裁縫 | 同　一 | 代田キウ | | 大正八年九月廢校 |
| ○實地專門私立前橋裁縫女學校 | 前橋市本町 | 裁縫女禮 | 同　四三、八 | 鈴木金五 | 二ヶ年 | |
| ○私立實修專門小野澤裁縫學校 | 前橋市神明町 | 裁縫 | 同　四四、七 | 小野澤延吉 | 高卒二年二ヶ月 | |
| 私立高崎徒弟夜學校 | 高崎市 | 修國算商英 | 大正二、二 | 保坂元哉<br>山内謙介 | 尋卒以上 | 大正九年六月十五日廢校 |

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| ○私立柴田裁縫女學校 | 多野郡藤岡町 | 裁縫 | 同 | 二、六 | 柴田はま | 尋卒以上三ヶ年 | 大正八年九月學則變更 |
| 私立笠懸西區女子實業補習學校 | 新田郡笠懸村 | 農業 | 同 | 三、三 | 木村吉三郎 | 尋卒以上二ヶ年 | 大正十二年四月廢校 |
| ○私立樹徳裁縫女學校 | 桐生市 | 裁縫家事 | 同 | 九 | 野口周善 | 同 | 大正十三年三月學則變更。 |
| ○私立鬼石裁縫女學校 | 多野郡鬼石町 | 同 | 同 | 一〇 | 岩城マツ | 高卒以上二年 | |
| ○前橋盲學校 | 前橋市曲輪町 | 普通科 技藝科 | 同 | 四、九 | 深澤利重 | 十年以上六ヶ年 | 後校長變更 |
| 私立織姫裁縫女學校 | 山田郡桐生町 | 裁縫手藝 | 同 | 五、一 | 倉林フサ | 尋卒以上二年 | 大正十年二月廢校 |
| 私立伊香保裁縫女學校 | 群馬郡伊香保町 | 裁縫編物 | 同 | 三 | 笠松かめ | 尋卒一年 | 大正九年一月廢校 |
| ○私立太田裁縫女學校 | 新田郡太田町 | 裁縫 | 同 | 二 | 常見ろく | 十四年以上二年 | 大正十四年五月學則變更 |
| 私立新町家庭裁縫女學校 | 多野郡新町 | 同 | 同 | | 清水喜三郎 | 尋卒以上二年 | 大正八年七月廢校 |
| ○私立前橋産婆看護婦學校 | 前橋市堀川町 | 産婆科 看護婦科 | 同 | | 梁瀬まつ | 十六年以上一ヶ年百人 | 後岩田ト改稱 |
| ○昌賢學堂 | 前橋市曲輪町 | 普通科 | 同 | 三 | 長尾平次郎 | 尋卒以上三ヶ年 | |
| 私立前橋商業補習學校 | 前橋市曲輪町 | 商業簿記 | 同 | 六、一 | 長尾平次郎外二名 | 尋卒以上一年 | 大正十年二月廢校 |
| 私立宮邊裁縫女學校 | 前橋市田中町 | 家事裁縫 | 同 | 六 | 田邊トク | 尋卒以上二ヶ年 | 大正十一年三月廢校 |
| ○前橋市看護婦會附屬産婆看護婦學校 | 前橋市堀川町 | 産婆科 看護婦科 | 同 | 三 | 絲井なか | 高卒以上一ヶ年半 | |
| 私立聖和裁縫女學校 | 新田郡鳥之郷村 | 裁縫 | 同 | 七、一 | 木村敬三郎 | 高卒以上一年 | 大正八年十二月廢校 |
| ○私立多比良裁縫學校 | 多野郡入野村 | 裁縫 | 同 | 八、三 | 喜多けさ | 尋卒以上三年 | |
| ○二葉裁縫女學校 | 前橋市一毛町 | 裁縫手藝 | 同 | 九 | 同人 | 尋卒以上二年 | |

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| ○私立福島裁縫女學校 | 北甘樂郡福島町 | 裁縫 | 同　九、五 | 山田しん | 尋卒以上二年 | 後富岡町大字七日市ニ移轉、校名福島ヲ山田ト變更 |
| ○私立高崎唖學校 | 高崎市請地町 | 技藝 | 同　一一、四 | 保坂元哉 | 六年以上初等科六年中等科五年 | |
| ○丸茂實業女學校 | 多野郡新町 | 裁家作 | 同　五 | 丸茂米重 | 尋卒以上四年 | |
| 群馬裁縫女學校 | 群馬郡元總社村 | 裁縫 | 同 | 松島力ノ | 尋卒以上二ヶ年 | 大正十四年八月廢校 |
| ○高崎鍼按學校 | 高崎市羅漢町 | 初等科 中等科 | 同　六 | 三浦興泰 | 十年以上初六中四 | 高崎盲學校ト改正． |
| ○私立日本絹撚工業浦習學校 | 山田郡桐生町大字安樂土 | 修國算工裁 | 大正九、三 | 小林嘉助 | 本科二年別科一年 | |
| ○私立桐生産婆看護婦學校 | 山田郡桐生町大字桐生町 | 産婆科 看護婦科 | 同　八 | 小内養藏 | 高卒以上各一ヶ年 | |
| ○桐生盲學校 | 桐生町 | 鍼按科 | 同　一三、二 | 靜谷暢純 | 六年以上初六中四年 | |
| ○私立館林裁縫女學校 | 邑樂郡館林町 | 裁縫 | 同　一三 | 峯崎重賢 | 十二年以上三ヶ月 | 大正十三年十月設立者變更 |
| ○私立旭裁縫女學校 | 前橋市田中町 | 裁縫手藝 | 同　一三 | 茂木ちやう | 高卒以上一年半 | 大正十三年二月同市前代田町ニ位置變更 |
| ○私立尾嶋裁縫女學校 | 新田郡尾島町 | 同 | 同　一三、一 | 石渡邦之丞 | 高卒以上二年 | |
| ○私立澁川裁縫女學校 | 群馬郡澁川町 | 裁縫 | 同　一三 | 清水庄平 | 高卒以上本科一年 | 大正十五年四月設立者芝下利藤太ニ變更 |
| ○岡田裁縫女學校 | 勢多郡南橘村 | 同 | 同　一二 | 岡田時助 | 高卒以上三年 | |
| ○文化裁縫女學校 | 佐波郡伊勢崎町 | 和服科 洋服科 | 同 | 磯邊晉太郎 | 二年 | |
| ○私立湯淺裁縫女學校 | 高崎市請地町 | 裁縫手藝 | 同 | 湯淺ツネ | 十四年以上二年 | |
| ○私立南裁縫女學校 | 前橋市前代田村 | 和服科 洋服科 | 同　一四、一 | 吉田清康 | 十四年以上三ヶ年 | |
| ○萩女子裁縫學校 | 前橋市萩町 | 裁縫 和服科 洋服科 | 同　一三 | 前田孝英 | 尋卒以上二ヶ年 | 夜學部ノ設ケアリ |

| ○千代田裁縫女學校 | 前橋市岩神町 | 裁縫 | 同 | 一五、一〇 | 武田榮喜知 | 尋卒以上二ケ年 |
|---|---|---|---|---|---|---|

〔備考〕

一、本表ハ縣廳保存書類私立學校設廢願綴ニツキ調査シタルモノナレドモ、脱漏ナキヲ保シ難シ。

二、表中記入ヲ缺ケルハ不明ナルモノナリ。

三、○印ハ大正十五年十二月一日現在セル學校ナリ。

## 第十一節　學校衞生

學校衞生事項は、夙くより文部當局者の留意したる所なるべしと雖明治五年學制以來、法令として發布する所あらず。明治二十一年十二月二十八日、學生生徒活力檢査に關する條項を規定して訓令し、明治二十三年四月、改正小學校令を施行するに當り、小學校設備準則を定め、兒童の生理的發達に對する環境に就き考慮する所あり。後明治二十七年八月二十九日、井上文部大臣は訓令を發して、體育及び衞生に關する注意を與へ、本縣亦訓令を發して、之が徹底に努めたりしが、政府に於ても更に學校の一般公衆衞生に關する規程の發布の急務なるを覺り、明治三十年一月、學校清潔方法の標準、翌三十一年、公立學校に學校醫設置方、及び學校醫職務規程、學校醫資格に關する規程、學校傳染病豫防及び消毒方法を制定し、大に學校衞生に注意する所ありたれば、本縣又其趣旨を體し、之が實施細則を設けたり。卽ち明治三十年五月、小學校生徒體格檢査規程、同七月學校清潔法、及び小學校清潔法、翌三十一年五月十六日、縣立郡市町村立學校醫囑託に關する手續是なり。これより學校衞生に關する規程、年と共に多きを加へ、明治三十二

年八月二日、學校醫視察様式、(群馬縣訓令甲第七三號)學校生徒檢査規程、(明治三十二年文部省令第四號)小學校設備準則、(明治三十三年改正小學校令施行規則第二章)學校生徒の喫煙に關し取締方(明治三十三年三月文部省訓令第五號)を出し明治三十九年七月に至りて、本縣訓令を以て、學校職員身體檢査規程を設けて、學校職員の健康に注意する所ありき。學校生徒トラホーム豫防方法に就きては明治四十二年六月十八日、縣訓令第四十四號を以て、詳細に規程を定め、四・九月の二回檢疹し、其結果の處理に遺憾なからしめんとせり。然れども其研究施設は、動もすれば往々形式に走りて、實効を擧ぐる能はざる憾みなしとせず。是に於て大正五年一月、縣下學校醫會を開催し、學校醫相互の研究協議と併せて、市町村學校當路者との連絡を圖り、此機會に於て群馬縣學校醫會設立の議興り、同年五月其發會を見、更に各郡市に其支部會を設置するに至れり。此年六月、文部省に專任の學校衛生官を置かるゝに及び、本縣亦大正八年度より、群馬縣學校衛生主事を設け、同五月二十三日職務規程を定め、縣内公私立學校衛生上の視察調査講話等に從事せしむ。爾來文部省の官制改正あり。學校衛生に關する事務の擴張せられ、舊諸規程の改廢あり。本縣亦此改廢に伴ひ、亦改廢して現時に至る。而して大正九年二月二十七日、學校トラホーム豫防方法を定む。大正十

二年度末に於ける縣下學校醫の總數は二百三十八人にして、其資格別は左の如し。

| | |
|---|---|
| 帝國大學醫科大學卒業 | 二八 |
| 同　別科卒業 | 二 |
| 同　撰科卒業 | 一 |
| 官立醫學專門學校卒業 | 五九 |
| 第一高等學校醫學部卒業 | 六 |
| 愛知縣立醫學專門學校卒業 | 一 |
| 慈惠會醫院醫學專門學校卒業 | 三 |
| 試驗及第 | 一二六 |
| 本職履歴ニ依ルモノ | 四 |
| （計） | 二三〇 |

## 第十二節　教育に關する其他の諸施設

### 一　教育會

本縣教育會は、明治十九年一月三日、本縣內教育に關係する者、縣廳學務課員・師範學校教員・小學校教員等四十名、本縣師範學校樓上に集合し、設立したる上野教員會を以て濫觴となす。是れ現今の財團法人群馬縣教育會の前身とも稱すべきものなり。本會は每月一回、機關雜誌上野教育會雜誌を發刊し、或は縣當局者の諮問案に答申し、或は進んで縣教育の重要問題を研究討議し、又明治四十三年には、一府十三縣關東北聯合共進會の前橋市に開催せられたるを機として、同年九月廿日より十一月十五日まで五十七日間、高崎市中央尋常高等小學校を會場とし、群馬縣教育品展覽會を開設し、本縣內は勿論、共進會聯合府縣の出品、其他參考品總計二千七百四十八種、二萬五千六百八十九點を陳列し、博く公衆の觀覽に供せり。入場者實に十一萬餘人なり。此開期中、十月八日より十日まで三日間、同所に於て一府十三縣關東東北聯合教育大會を開く等、直接間接縣教育の向上

發展に資すること甚大なりしが、時勢の進運に伴ひ、各郡市に郡市教育會の設置せらるゝに至りて、上野教育會の組織に缺陷あるを以て、之が組織變更の議擡頭し、大正三年二月十五日、上野教育會の總會に於て、上野教育會を群馬縣教育會と改稱し、各郡市教育會を其部會となす件を附議したるも、成立せずして一時延期することゝなれり。越て大正六年に至り、統一ある縣教育會設立の急を唱導するもの、各地に少からさるに至りたるを以て、大正七年五月廿六日の總會に於て、聯合組織に依る縣教育會設立の件を附議し、之を可決したり。依つて同年九月二十三日、上野教育會長より各郡市教育會長に聯合教育會組織に關する要件を示して照會し、回答を求め、各郡市の贊同を得、之が組織に關する手續を了し、大正九年正月二日、群馬縣師範學校に於て、群馬縣教育會創立委員會を開會し、上野教育會の起案したる定款を可決し、前記の日付を以て、設立許可となりたるなり。（上野教育會組織變更經過大要・上野教育雜誌第一號。）爾來各郡市教育會の中心となり、益〻縣教育の發展を圖りつゝあり。施設事業の主なるものとしては、毎月一回機關雜誌上野教育を發刊し、又補習讀本（本縣實業補習學校用）及び農業教科書（高等小學用）を編纂し、縣の指定により、群馬縣史を編纂しつゝあること等とす。尚各郡市教育會の概況は左の如し。

| （會名） | （會員數） | （資金） | （大正十四年度經費） | （同上中市町村寄附又ハ補助費） | （事業概要） |
|---|---|---|---|---|---|
| 勢多教育會 | 四二〇 | 一、八二七 | 三、二四六 | 一、六四五 | 講習、講演會、功勞者表彰、學事視察員派遣、雜誌發行等。 |
| 群馬郡教育會 | 九三〇 | 三四六 | 三、〇一八 | 一、一三〇 | 調査研究、講習會、講演會、會報刊行、教員互助會補助。 |
| 多野郡教育會 | 一、五〇〇 | 二六 | 一、三六〇 | — | 會報發行、講話會、郡誌改訂、表彰、教育調査研究、教育視察員派遣、准教員養成講習會、准代用教員學力補充講習會。 |
| 北甘樂郡教育會 | 八九〇 | — | 三、五五七 | 一、八〇〇 | 講話會、表彰、調査研究、雜誌刊行、教育品展覽會、學事視察。 |
| 碓氷教育會 | 一、三七〇 | — | 一、四七〇 | 三三九 | 會報發行、視察員派遣、講習會、講演會、展覽會開催、圖書館經營、功績者表彰、各種調査研究。 |
| 吾妻教育會 | 九三五 | — | 一、二四九 | — | 雜誌發行、初等教育展覽會、視察旅行、其他修養上ノ各種講習、講演會開催。 |
| 利根教育會 | 八五六 | 四、八一六 | 一、三一七 | 一、四〇〇 | 講演會、講習會、兒童教員其他表彰、視察見學派遣、郡誌編纂等其他。 |
| 佐波教育會 | 五八〇 | 八七〇 | 一、三〇九 | — | 優良兒童表彰、講演、講習會、學事視察、學事調査。 |
| 新田郡教育會 | 一、五五五 | 一、六六〇 | 一、三八〇 | — | 講習會、巡廻文庫、通俗講話會、學事調査、表彰、會報發行等。 |
| 山田郡教育會 | 一、〇八八 | — | 三、一六五 | 七八七 | 各種講演、講話及宣傳、圖書館經營、優良兒童表彰等。 |
| 邑樂郡教育會 | 一、四五〇 | 六〇〇 | 二、三一〇 | 五五〇 | 通俗講演會、巡廻文庫、學事視察、教育功勞者表彰、雜誌刊行、教育上研究調査 |
| 前橋市教育會 | 九六五 | — | 一、五九五 | 二〇〇 | 講演會、講習會開催、表彰、水泳、教育上ノ調査研究。 |
| 高崎市教育會 | 五三六 | 一、七九八 | 一、七二三 | 四〇〇 | 通俗講演會、夏季大學、教育功勞者表彰等。 |
| 桐生市教育會 | 四一一 | — | 三、〇二三 | 五〇〇 | 講習會、講演會開催、林間學校開設、優良地視察、教育功勞者表彰等。 |
| 合計 | 一三、五三六 | 一一、九四三 | 三〇、六二一 | 八、七五一 | |

## 二　育英事業

向學の意欲あり。而も社會的並に經濟的障碍の爲め、之を充足し得ざるは、本人は勿論、國家社會に取りても亦一恨事たれば、本縣當局は夙に玆に見るあり。他方に教育振興の一策を兼ねて、明治十三年中學校を設立するや、生徒數の三分の一を貸費生とし、明治十五年女學校を設立するや、是れ亦三十名を貸費生としたることとあり。尋いで明治十六年、大學生徒學資給與規則を布達し、東京大學志願者中、本縣在籍にして中學初等科、若くは高等科を卒業し、學力超衆、品行端正、大に將來に望あるも、貧困にして學資を自辨する能はざる者、及び中學科卒業にあらざるも、學力品行拔群の成績ある者に、縣費を以て學資を貸與する規程を設け、高等教育に關し、英才教育の端を啓きたることとあり。而もこの貸費制は永續せず、明治十七年より、二十年前後にかけて廢止せられたるが如し。後明治三十五年一月、在上海東亞同文書院學生にして商務科を研究するものにして、本縣の撰拔に係る者に、學資及び旅費を補助する規定を設けられたるも、是れ特殊の學校に限られたれば、英才教育上の遺憾少からざりき。然るに大正八年に至り、本縣

知事大芝惣吉は、此の缺陷を補ひ、時勢の進運に副はんとして、劃策努力する所あり。大正八年三月二十四日、群馬縣育英會給與規程を定めたり。其目的は人材養成のため、學資に乏しき有爲の靑年に給與し、其志を遂げしめんとするにありき。然るに大正十一年二月二十四日、群馬縣育英資金設置竝管理規程、及び群馬縣育英給與規程制定により、前規定を廢し、其目的も英才を教育し、兼て一般教育の振興に資するためと改正し、貸與も給費と改正したりしが、更に大正十三年十月、財團法人群馬縣育英會の設立せらるゝに至り、復この兩規程を廢せり。財團法人群馬縣育英會は、群馬縣より群馬縣育英資金及び事業の全部を繼承し、群馬縣人にして高等教育を受くる學生を保護奬勵して、英才を育成せんとするにあり。其資產は群馬縣育英金二十四萬圓、及び有志者の寄附金品、その他の收入を以て組成し、その資金の利子を以て、貸與其他一切の經費に充つることゝせり。大正十四年四月に於けて給貸費の成績は、卒業せる給費生八名、現在給費生三十五名、現在貸與生三十六名なり。其内譯は左表の如し。現貸與生の月額は、一箇月金十五圓乃至三十圓なり。

群馬縣育英會給貸費調　（大正十四年七月調）

| （學校名） | （給費生）（在學） | （給費生）（卒業） | （貸費生） | （合計） |
|---|---|---|---|---|
| 帝國大學 | 四 | — | 四 | 八 |
| 高等學校 | 七 | — | 六 | 一三 |
| 商科大學 | 三 | — | — | 三 |
| 高等師範 | 三 | 三 | 五 | 一一 |
| 女子高等師範 | 五 | — | — | 五 |
| 高等工業 | 四 | 三 | 四 | 一一 |
| 高等商業 | 五 | — | 二 | 七 |
| 高等農林 | 一 | — | 二 | 三 |
| 高等蠶糸 | — | 一 | 一 | 二 |
| 美術學校 | — | 一 | — | 一 |
| 早稻田大學 | — | — | 五 | 五 |
| 女子大學 | 二 | — | 一 | 三 |
| 女子醫專 | 一 | — | — | 一 |
| 滿洲醫大 | — | — | 一 | 一 |
| 農大教員養成所 | — | — | 一 | 一 |
| 京都同志社 | — | — | 一 | 一 |
| （合計） | 三五 | 八 | 三三 | 七六 |

以上は本縣の施設に關するものなるが、民間に於ても、明治十年一月、舊館林藩主秋元春朝は出資し、館林町敬愛會を起し、貸費を以て舊藩子弟の英才を教育し、（中等以上教育）、明治三十二年十二月には、舊前橋藩主松平甚則は、前橋市盈進會を立てて、是れ亦貸費を以て、舊藩の子弟を教育し、（中等以上教育）、繼續して現時に至る。館林敬愛會は、既に卒業生六十二名、在學者六名、資產額金一萬五千四百九十四圓、前橋盈進會は、卒業生五十一名、在學者七名、資產額金一萬九千八百六十三圓を有せり。

大正十二年三月調。此の外小學校卒業優良者にして、進學する能はざる者に對し、施設をなせる團體、及び個人は左の如し。

| | | |
|---|---|---|
| 山田郡福岡村 | 給費 | 師範學校及女子師範學校入學者ノタメ |
| 伊勢崎町獎學資金 | 給費 | |
| 利根郡久米民之助 | 貸費金月拾圓 | |
| 佐波郡赤堀村 | 貸費 | |

（以上大正十二年四月調）

## 三　郷土誌調製と縣史編纂

完全なる郷土誌を編纂し、之を基とし、郷土に關する知識を教授し、愛郷心を涵養振作するは、教育上の緊要事たり。是を以て明治政府は、百事改廢の當初、郡村誌の編輯を企て、本縣は其意を體して、明治八年十一月十七日、郡村誌編輯條例を示し、之を編輯せしめ、明治二十一年八月、再び訓令して、郡村誌竝に國誌資料を蒐集せしめたることあり。之が爲めに幸に舊記の散佚を稍〻未然に防ぐことを得たるが、本縣は時勢の進運に伴ひたる、完全なる郷土誌調製の必要を認め、明治四

十二年九月廿五日、郷土誌調製方に關し訓令を發し、市町村長及び小學校長は、別紙目次略目次に依り、明治四十三年六月三十日までに、郷土誌を調製し、市町村役場及び市町村小學校に備付くべしと令し、市町村郷土誌を編纂せしめ、明治四十五年六月廿八日、重ねて訓令を發して、小學校教育にはこの郷土誌を、學校教育と自治・民育とに利用すべき旨を令せらる。縣は更に進みて縣史編纂の要あるを認め三宅知事時代に、之が編纂費を縣會に提出して、縣會の容るゝ所とならず。次代中川知事再び提案して可決せられ、大正七年度より四箇年繼續事業として、學務課内に縣史編纂委員一名を置き、編纂に着手したり。而して將に脱稿に至らんとして、大正十二年九月一日、偶〻不慮の災變に遭ひ、稿本悉皆烏有に歸したり。由りて大正十三年度より二箇年に亘り、群馬縣教育會に指定補助を爲し、之を完成せしむることゝせり。因に本縣に於ては楫取縣令時代、夙に群馬縣歴史なるものを編輯し、明治維新岩鼻縣設置以後、第二次群馬縣設置時代までの縣治につきて、詳細に編述せり。

（學制五十年史・明治時代小學校制度沿革誌・群馬縣史稿・本縣教育事務便覽・群馬縣廳學務課調査書類・群馬縣學事關係法規類。）

# 第九章　交通と治水

## 第一節　交通

### 第一項　交通職制

明治二年、政府は各所の關門を一時に撤廢し、居住・營業等に自由を與へたれば、人と物との移動、次第に頻繁となり、從つて交通行政亦次第に整頓するに至れり。廢藩置縣の當時、庶務課中に驛遞掛、租税課中に土木掛を置き、通信・運輸に關する事務を掌らしむ。

驛遞掛と土木掛の設置

驛遞掛　專ラ人民往來ノ事務ヲ任ジ、道路ノ通達、水陸ノ運輸、舟車ノ利、及郵便等、都テ其方法ヲ案ジ、廣ク人民ヲシテ、通信ノ便ヲ得セシムルコトヲ掌ル。最モ道路・橋梁、其修繕築造、道敷ノ變換等ニ至テハ、地理土木掛ニ協議、分課ノ制限違亂ナキヲ要ス。

土木掛　堤防・橋梁・道路ヲ修築シ、用悪水路ヲ疏通シ、治水一切ノ事務ヲ任シ、兼テ縣廳及ビ官舍、其他官費ニ關スル社寺等、修補營繕ヲ掌ル。

土木課の獨立

明治十一年十二月七日の本縣職制事務章程に於て、土木科・驛遞科・山林科を統一して、地理課に屬せし交通・治水に關する事務を管掌せしめたるが、明治十三年の改正により、土木科は獨立して課となり、驛遞科は庶務課中の驛遞係となり、郵便・電信・運輸に關する事務を屬せしむ。然るに明治十六年、郵便條例の制定により、驛遞係の管掌したる通信事務は、中央政府の驛遞局の直轄に移りたれば、是れより地方廳は運輸に關する事務のみとなり、土木課土木係の名の下に、之を管掌せり。現今は内務部に屬し、土木課と稱し、道路・橋梁・河川・堤防及び砂防・水道・下水道・水利・鐵道及軌道等、交通地理に關する事務を主管せしむ。而して管下の土木事務を處理する爲めに、明治某年土木係員派出所を設けたるが、明治三十四年之を廢止し、更に土木管區を設置し、其名稱區域を定む。(明治三十四年一月二十八日、訓令甲十一號。)

土木管區々劃表

| (名稱) | (位置) | (所轄區域) |
|---|---|---|
| 第一土木管區 | 高崎市 | 高崎市　碓氷郡　群馬郡(金島村 長尾村 白郷井村 小野上村ヲ除キ)一圓 |
| 第二土木管區 | 佐波郡伊勢崎町 | 佐波郡　新田郡内(笠懸村)勢多郡(横野村 敷島村ヲ除キ)一圓 |

| | | 山田郡（毛里田村 廣澤村 韮川村 矢場川村 休泊村ヲ除キ）一圓 |
|---|---|---|
| 第三土木管區 | 新田郡太田町 | 新田郡（笠懸村ヲ除キ）一圓 邑樂郡 山田郡内（毛里田村廣澤村韮川村矢場川村休泊村） |
| 第四土木管區 | 利根郡沼田町 | 利根郡 勢多郡内（敷島村横野村）群馬郡内（白郷井村） |
| 第五土木管區 | 吾妻郡中之條町 | 吾妻郡 群馬郡内（金島村 長尾村 小野上村） |
| 第六土木管區 | 北甘樂郡富岡町 | 北甘樂郡 多野郡 |

本表ノ外、前橋市ハ内務部第二課土木課ニ於テ直接管轄ス。

土木管區々劃表は此後二回の改正を經て、現行は大正十一年三月三十一日本縣告示第八十七號の告示に係るものなり。

土木管區々劃表

| （名稱） | （位置） | （所轄區域） |
|---|---|---|
| 前橋土木管區 | 前橋市 | 前橋市 勢多郡ノ内（東村 黑保根村ヲ除キ）（利根川ハ利根郡界マデ工右兩岸）一圓 |
| 高崎土木管區 | 高崎市 | 高崎市 碓氷郡 群馬郡ノ内（白郷井村 長尾村 小野上村ヲ除キ）一圓 |
| 藤岡土木管區 | 多野郡藤岡町 | 多野郡 |
| 富岡土木管區 | 北甘樂郡富岡町 | 北甘樂郡 |
| 中之條土木管區 | 吾妻郡中之條町 | 吾妻郡 群馬郡ノ内（長尾村小野上村）（吾妻川ハ左右兩岸全部） |
| 沼田土木管區 | 利根郡沼田町 | 利根郡 群馬郡ノ内（白郷井村） |

| | | |
|---|---|---|
| 伊勢崎土木管區 | 佐波郡伊勢崎町 | 佐波郡 |
| 太田土木管區 | 新田郡太田町 | 新田郡　山田郡ノ内(休泊村矢場川村韮川村毛里田村) |
| 桐生土木管區 | 桐生市 | 桐生市　勢多郡ノ内(東村　黒保根村)<br>山田郡ノ内休泊村矢場川村韮川村毛里田村ヲ除キ一圓 |
| 館林土木管區 | 邑樂郡館林町 | 邑樂郡 |

大正十一年十一月に至り、本縣下國道・府縣道の道路改良事務を處理する爲め、高崎市・佐波郡伊勢崎町・群馬郡澁川町の三箇所に群馬縣道路改良事務所を設置せり。

## 第二項　道路及橋梁

舊幕の世、道路の開鑿は、領地自衛の精神に戻るとして、多くは放擲せられ、却つて其要害嶮岨を恃みたりしが故に、道路の改修發達に見るべきものなかりしが、廢藩置縣後、明治六年に至り、我政府は始めて河港道路修築規則の制定あり。道路を分ちて、一等より三等とし、之が改修築造の經費の負擔は、專ら舊慣に依りたれば、本縣は道路・橋梁の修理に就き、明治六年九月廿五日、達第四十三號を以て、次

いで道路修築の布達を、同年十月三十日付を以て、管下に達示せり。達第四十三號に曰く、

抑道路・橋梁修理等ノ儀ハ、行旅車馬之便宜ニ關シ候儀ハ勿論、自他ノ功利ニモ相成候儀ハ、衆庶ノ辨知スル處、今更述ルマデモ無之事ニ候。依之他府縣ニ於ケル、既ニ夫々着手修繕等行屆、人民辨理ヲ得候由、本縣管下ノ如キモ、道路ノ儀ニ付テハ、舊縣已來屢及布達候次第、殊ニ昨壬申年中、掃除持場等確定云々、御布告ノ趣ニ仍テ、驛村正副戸長共專ラ盡力、夫々加修補置候趣ニ候。然ルニ頃日ニ至リ、追々破損ノ場所モ不尠候ニ付、官員出張、現場調査ノ上、營繕方可申付處、壬申十月以來、地券取調ノ條件モ有之、且區學校設立、其他村役人頗ル繁劇ノ折柄、彼是厚ク斟酌、車馬通行ノ道橋ノミ、差向修補候樣、去ル四月中及布達置候處、却テ等閑ニ相心得、其橋々モ差置候村々モ有之、人民及困難候趣相聞へ、眞ニ等閑ノ事ト謂フベキナレドモ、既往ハ强テ咎メノ沙汰ニ不及候間、今後副區長・正副戸長ハ勿論、小前末々ニ至ルマデ、厚ク心掛ケ、目下難場ノ分ハ、速ニ加修理候樣、協力勉勵可致候。最各驛村ノ都合ニ依リ、又ハ有志ノ者申合、前條修繕候儀ハ適宜取計不苦候事。

同年十月の布達に曰く、

道路ハ人民ノ依テ交通スル所、物産ノ隨テ起ル所ニシテ、經國ノ要務今更言ヲ待

タズ。然ルニ維新以前、各藩各區ニ峙立、相互ニ其境界ヲ守リ、甚シキハ關門ヲ鎖シ、勉メテ嶮難ノ地ニ道路ヲ設ケ術ノ得タルモノトスルモ、亦兵馬ノ餘習、時勢ノ然ラシムルモノナリ。然リト雖モ之ガ爲メ全國ノ經脉ヲ遮リ、人民ノ交際ヲ妨ゲ、物産ノ輸出入ヲ支ヘ、隨テ物價ノ平均ヲ失ヒ、自然一般ノ民情ニ於テモ孤獨ニ安ジ、管見ニ慣レ、大ニ人生ノ本分ヲ誤リ、國家富饒ノ基ヲ失ス。今ヤ四海一家ノ世運ニ會シ、豈鋭意勉勵セザル可ケンヤ。抑、人民ノ本然、廣ク各人ノ交際ヲ開キ、信實ヲ以テ其主本トシ、農者ハ織者ニ通ジテ衣ニ足リ、織者ハ遲キモ速カニ應シテ、百般ノ供用闕ク事ナク、初メテ人民相互ニ公福ヲ得、其志ヲ遂グル事ヲ得ルト否ルトハ、畢竟道路ノ難易ニ關ル頗ル至大ノ要務ニ非ランヤ。既ニ壬申年中、公布ノ旨モ有之、舊縣々ニ於テモ專ラ注意著手セシ跡ヲ追ヒ、益其業ヲ續キ、其ノ志ヲ伸べ、本年秋入、聊農隙ノ際、管下一般協力大イニ道路ノ修繕ヲ加ヘ、難ヲ變シテ易トナシ、狹ヲ換ヘテ廣トナシ、曲ヲ正シテ直トナシ、各地ノ景勢ニ應ジ、適宜方法ヲ定メ、往々人馬ノ勞役ヲ省キ、農事流行獨リ運輸ノ便ノミナラズ、人々交際親密、家々産業盛大ノ基、國是ノ初歩ヲ斯ニ開業セン事ヲ議定ス。此旨布達候事。

明治六年十月三十日

此頃本縣の主道路は、左の如くにして、明治十年一月まで改修を經たるものも、

亦別表の如し。

## 驛路

### 中山道

| 驛名 | 所在 | 里程 |
|---|---|---|
| 新町 | 緑野郡 | 一里二六町二八間 |
| 倉賀野 | 群馬郡 | 一、八、四九、五 |
| 高崎 | 同 | 二、四、八 |
| 坂鼻 | 碓氷郡 | 〇、二八、二八 |
| 安中 | 同 | 二、一四、一〇 |
| 松井田 | 同 | 二、一二、四五 |
| 坂本 | 同 | 二、三一、五六 |
| 輕井澤 | 信濃佐久郡 | |
| 合七驛 | | 一三、一八、四 |

### 信濃別路

| 驛名 | 所在 | 里程 |
|---|---|---|
| 藤岡 | 緑野郡 | 二、二〇、二〇 |
| 吉井 | 多胡郡 | 一、一三、二七 |
| 福島 | 甘樂郡 | 〇、二六、一五 |
| 富岡 | 同 | 〇、二三、〇 |
| 七日市 | 同 | 〇、一八、三 |
| 一ノ宮 | 同 | 二、一五、四二 |
| 下仁田 | 同 | 二、二、一五 |
| 本宿 | 同 | 二、二、一五 |
| 初鳥屋 | 矢川村 | 三、三四、五四 |
| 信濃追分 | 佐久郡 | |
| 合八驛壹村 | | 一六、二一、五七、五 |

### 越後三國街道

| 驛名 | 所在 | 里程 |
|---|---|---|
| 高崎 | 群馬郡 | 二、二四、八 |
| 金古 | 同 | 二、二八、一二 |
| 澁川 | ×別路白井村一九町 | 〇、二五、五五、五 |
| 金井 | 同 | 〇、三〇、二一、五 |
| 横堀 | 同 | 二、二九、五六、五 |
| 中山 | 同 | 一、二六、八 |
| 塚原 | 利根郡上津村 | 一、七、八 |
| 布施 | 吾妻郡 | 〇、一九、一八 |
| 須川 | 同 | 〇、三〇、三八 |
| 相俣 | 利根郡 | 一、一七、五七 |
| 永井 | 吾妻郡 | 二、三五、二七 |
| 越後淺貝 | 魚沼郡 | |

合十驛　一八、一三二、九、五

越後清水越新路

境町（佐位郡）〇、二四、五九、五　伊勢崎（同）一、二五、三一　駒形（勢多郡）二、二、三三

前橋（群馬郡）一、三三、五　田口（勢多郡）一、一三、四六　八崎村（同）〇、三一、二〇

白井村（群馬郡）一、二四、二一、五　上白井村（同）一、九、三四　岩本村（利根郡）一、二一、五二

沼田（同）一、四、五一　岩代路六里　追貝五、戸倉八、五、四七　岩代會津郡檜枝岐村

眞庭村（利根郡）一、三五、五二、五　上牧村（同）一、二三、二四　湯原村（同）一、一一、六

湯檜曾村（同）五、九、一七、五　越後清水村　魚沼郡

合五驛九村　一二五、三二五、三三二、五

日光舊例幣使道

高崎（群馬郡）一、八、四九、五　倉賀野（同）一、一八、五〇　玉村（那波郡）一、一〇、二九

五料（同）〇、一九、三二　柴町（同）二、四、四六　境町（佐位郡）一、六、〇

木崎（新田郡）一、三〇、〇

別路　二、八、〇〇　大原本町二、〇、〇　山田郡大間々三、　勢多郡花輪
　　　一、〇、〇〇　神戸二、一八、澤入村、二、一八、下野安蘇郡足尾村

太田（新田郡）二、一〇、〇　下野福居町　梁田郡

合七驛　一二、〇、二六、五

同支道

川俣 邑樂郡 一、二〇、〇　館林 同 二、〇　下野天明 安蘇郡

合二驛 三、二〇、〇

下野別路

高崎 群馬郡 三、〇、〇　前橋 同 二、二、三二、五　駒形 勢多郡 一、二五、三一

伊勢崎 佐位郡 五、　桐生 山田郡 四、　下野足利 足利郡

合四驛 一五、二八、三五

信濃支道

高崎 群馬郡 三、一三、七　神山 同 二、二二、二二　三ノ倉 同 三、七、三二

大戸 吾妻郡 一、三二、一九、五　須賀尾 同 二、二六、五五　長野原 同 一 別路三、三、三一 草津

羽根尾 同 二、〇、〇　中居 同 二、一八、〇　大笹 同 一、一八、〇

田代村 同 四、三〇、二三　別路二、一二、二二 信濃小縣郡中ノ澤

信濃禰津 小縣郡

合八驛一村 二五、二三、三八、五

（日本地誌提要。）

縣下道路改修箇所表

自明治六年六月　至同十年一月

| （開鑿道） | （街道名） | （經由地） | （着手年月） | （落成年月） | （經費） | （備考） |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 勢多郡下箱田・八崎間 | 前橋沼田道 | 下箱田村・眞壁村・八崎村、一里半餘 | 明治六、六 | 同 七、八 | 二、一二八圓 | 八崎村田中清六發起、私財 |

| | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 碓氷郡上増田・吾妻郡大笹間 | 舊北國街道 | 上増田外九ケ村地内、舊道修補、九里 | 同 | 六、九 | 同 | 七、八 | 二、五三九、五六 | |
| 利根郡湯檜曾村・越後國魚沼郡清水村間 | 清水越道 | 七里一七町三九間 | 同 | 七、六 | 同 | 七、一〇 | 六、七〇〇 | |
| 吾妻郡須賀尾村・信州杏掛宿間 | | 須賀尾村・應桑村・佐久郡杏掛、四里三九町四九間 | 同 | 七、八 | 同 | 八、一〇 | 一三〇、一五 人夫一、六五〇人 | |
| 甘樂郡坂原・柏木間 | 十國峠道 | 坂原柏木地内、三二町三八間 | 同 | 七、一〇 | 同 | 八、一〇 | 四六五、三三二 人夫一、三三四人 | |
| 甘樂郡楢原村・信州佐久郡大日向村 | 同 | 楢原村・黒川澤ヨリ大日向村界迄、二里三六町 | 同 | 七、一〇 | 同 | 八、一〇 | 六五六、九〇 人夫二、一五七人 | |
| 群馬郡室田村 | | 室田村地内、丹後坂、三三五間 | 同 | 七、三 | 同 | 八、二 | 一〇九、九〇八 | |
| 碓氷郡入山村・信州追分間 | | 入山村地内、五里四八間 | 同 | 七、六 | 同 | 七、一〇 | 三八五、〇五 | |
| 吾妻郡田代・信州川浦間 | | 田代村地内、一里一二町 | 同 | 八、六 | 同 | 八、一〇 | 一九五、〇〇 | |
| 勢多郡森下・棚下間 | | 森下・棚下間、一〇町 | 同 | 八、四 | 同 | 九、三 | 八二〇、〇〇 | 森下村澤浦善衛盡力 |

右の内清水越新道開鑿に就き、縣下一般に布達したる本文は、左の如し。本道開鑿の價値之に依りて知ることを得べし。

越後國清水越新道開鑿　(明治八年二月五日、第十九號)

管下上野國利根郡湯檜曾村ヨリ、新潟縣管下越後國魚沼郡清水村へ通ズル、從前一條ノ線路有レ之、俗ニ清水越ト稱ス。巉巖絶壁ノ地ニシテ、樵夫行ベク、物荷通ズベカラズ。之ヲ開鑿スルニ於テハ、本道三國嶺通リニ比シ、若干ノ里程ヲ短縮シ、兩國互市ノ業ヲ開クニ便ナルニ付、一昨明治六年以來、開鑿通路見込有レ之、遂ニ前橋・沼田、

其他市街村落有志之者共、出金等ヲ以テ費用ニ充、開鑿之擧ヲ起シ、客歳六月着手、同十月落成相成、右開路ノ里程ヲ實測スルニ、中仙道熊谷驛ヨリ、上州伊勢崎・前橋・沼田通リ、此新道ヲ經、三國街道六日町迄、三十五里三十三町二十八間有之、熊谷驛ヨリ高崎通リ三國嶺ヲ越シ、六日町ニ至ル本道ト比較スルニ、四里十五町三十九間半餘短縮候。依テ開路相成候儀、爲心得相進候間、毎戸無洩可通達者也。

明治十年一月十八日、路程取調概則を達し、同七月五日、縣下道路等級を定む。

路程取調概則 (明治十年一月十八日第十四號)

諸街道竝岐路共、里程之稱呼的實ナラズ。口碑流傳等ニ因襲シ來候ニ付、過ル明治六年以來、度々公達モ有之、舊稱一二等道路之儀ハ實測相成、已ニ昨九年七月中、里程本標建設ノ宿驛モ有之候得共、爾來修繕ノ都度屈曲ヲ矯メ、或ハ迂回ノ舊道ヲ廢シ、更ニ捷路ヲ修築ノ箇所モ有之、其實ヲ得ガタク候條、別紙路程取調概則、及雛形ニ照準、各小區ニ取調圖面ヲ製シ、來ル三月三十一日迄可差出此旨相達候也。

一測器ハ分間用麻繩ヲ用ユベシ。

一路線ノ中央ヲ測ルヲ法トス。故ニ屈曲ノ箇所ニ尤注意スベシ。

一路線ノ屈曲毎ニ方位ヲ改ムベシ。外略。

明治十年七月五日、(甲第卅號)縣下道路從前の等級を廢定し、左の如く相定む。

國道　第一等　○中山道　○三國往還。

第三等　○前橋ヨリ伊勢崎通リ東京道。

縣道　第一等　○清水越往還。

○舊例幣街道。

○前橋ヨリ高崎道(曲輪橋通リ 實正通リ)兩道。

○前橋ヨリ玉村・新町・藤岡通リ、武州八幡山町道。

○前橋ヨリ大渡リ、澁川通リ、伊香保道。

第三等　○三國往還南牧村ヨリ、中ノ條・上澤渡・入山通リ、信州中野町道。

○中ノ條ヨリ四萬溫泉道。

○入山村ヨリ草津溫泉道。

○中山道豐岡村ヨリ長ノ原・田代通リ、信州長野道。

○新町ヨリ吉井道。

○藤岡ヨリ武州肥土村及富岡・初鳥屋通リ、信州追分道

○西ノ牧村字本宿料地ヨリ、信州内山道。

○新田郡古戸村ヨリ、太田・桐生・大間々・花輪通リ・野州日光道。

○桐生ヨリ野州足利道。

○太田ヨリ野州足利道。
○館林ヨリ野州簗田道。
○川俣ヨリ館林通リ、野州佐野道。

明治十二年縣會開設と共に、地方稅支辨の道路に就いては、或は當局の提案となり、或は縣會の建議となり、逐年改修を施し來り、碓氷峠の新道開鑿も其の一なるが、明治二十年に至り、道路改修工事計畫を立てたり。即ち明治廿年度より、同廿三年度に亘り、四箇年の繼續事業とし、縣道中改修を要するもの、里程總延長計二十八里十八町、經費の程度を一里當り平均七千圓に、又毎年起工の里程を、二十年度は一里十八町、廿一年度・廿二年度・廿三年度は各九里と豫定し、縣會決議の上、廿年に於て金壹萬五百圓、後三箇年各六萬三千圓づつ地方稅の支辨に屬せしめ、廿一年二月、前橋・高崎間の工事を起し、續いて各線に歩を進めて、同廿四年に竣工せり。 其道路と里程とは左の如し。

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 前橋・高崎間 | 二里 | 富岡・下仁田間 | 一里 | 戸鹿野・沼田間 | 一里 |
| 前橋・桐生間 | 五里 | 前橋・澁川間 | 四里 | 安中富岡間 | 一里 |
| 太田・館林間 | 四里 | 藤岡・鬼石間 | 三里 | 吹屋・原町間 | 二里 |

藤岡・高崎間　一里　伊勢崎・太田間　四里　高崎・吉井間　二里
新町・富岡間　一里　高崎・三ノ倉間　二里　鬼石・萬場間　二里
桐生・境野間　一里

かくて縣下の道路に一新紀元を劃し、爾來これが完備に努めたりしが、最近時勢の進展に伴ひ、産業の勃興殊に甚しく、又高速度重量車輛の利用都鄙に普く、道路に據る交通運輸の狀態は、益〻繁劇重要の度を加へ、道路の改善整備を要すること愈〻急なるものあり。加之、縣內道路の大部分、道路構造上の規格に適合せざるものあるを以て、大芝知事は所謂大道路計畫案を作製し、大正十年、臨時縣會の決議を經、大正十一年九月二十八日、內務・大藏兩大臣に手續を開始し、大正十一年十月十九日附、許可の指令に接したり。其計畫概要は左の如し。

大正九年ニ於テ、縣現在ノ全路線ハ百拾壹線ニシテ、此延長三百四十餘里ニ亘リ、一時ニ之レガ改良工事ヲ施サンカ、其總工費約四千餘萬圓ヲ要ス。コハ縣財政ノ堪ユル能ハザルヲ以テ、之ヲ二期ニ分チ、第一期計畫トシテ、既定十箇年計畫工費二百三十萬圓ヲ變更シ、最急速ニ改修ヲ要スル國縣道路線四十九線、百五十餘里ヲ十箇年ニ亘リ、總工費一千五百三十五萬圓ヲ投ジ、改修セントスルニアリ。

大正十二年、郡制廢止の結果、從來郡道たりしものも、縣費支辨に變更せられたる

ものありて、大正十三年には、國道二線、縣道一五七線、道路總延長四百五十三里六町十四間なり。

一　國道　（大正十三年末）

| | （起點） | （主要經過地） | （終點） | （路線延長）里町間 | （道路延長）里町間 |
|---|---|---|---|---|---|
| 第九號線 | 新町（埼玉縣境） | 群馬郡岩鼻村・倉賀野町・高崎市 | 前橋市 | 五、三四、一八 | 五、一八、五七 |
| 第十號里 | 高崎市 | 碓氷郡板鼻町・安中町・原市町・松井田町・臼井町・ | 碓氷郡坂本町（長野縣境） | 一〇、三五、二八 | 一〇、三一、〇六 |
| （計） | … | 二線 | … | 一六、三三、四六 | 一六、一四、〇三 |

二　府縣道　（大正十三年末）

| | （起點） | （主要經過地） | （終點） | （路線延長）里町間 | （道路延長） |
|---|---|---|---|---|---|
| 前橋宇都宮線 | 前橋市 | 勢多郡大胡町・山田郡大間々町・桐生市 | 山田郡境野村（栃木縣境） | 八、〇九、五七 | 八、〇五、三五 |
| 前橋館林線 | 前橋市 | 勢多郡木瀬村、佐波郡伊勢崎町・新田郡太田町 | 邑樂郡館林町 | 一三、〇六、五九 | 一三、〇一、一七 |
| 吉井高崎線 | 多野郡吉井町 | — | 高崎市 | 一、三一、〇五 | 一、三一、五〇 |
| 吉井富岡線 | 多野郡吉井町 | 北甘樂郡福島町 | 北甘樂郡富岡町 | 二、一三、五七 | 二、一〇、四九 |
| 前橋藤岡線 | 前橋市 | 群馬郡元總社村・岩鼻村 | 多野郡藤岡町 | 四、三一、四七 | 四、一五、三七 |
| 前橋中之條線 | 前橋市 | 群馬郡澁川町・長尾村 | 吾妻郡中之條町 | 八、〇八、五七 | 七、三四、四三 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 片品前橋線 | 利根郡片品村 | 利根郡川場村・利南村・勢多郡敷島村 | 前橋市 | 一四、一八、二四 | 一三、一三、〇一 |
| 前橋安中線 | 前橋市 | 群馬郡元惣社村・長野村・碓氷郡八幡村・板鼻町 | 碓氷郡安中町 | 四、一〇、三三 | 三、〇〇、三一 |
| 高崎總社線 | 高崎市 | 群馬郡中川村・新高尾村・東村・元惣社村 | 群馬郡總社町 | 二、三四、〇三 | 〇、三一、三八 |
| 總社澁川線 | 群馬郡總社町 | 群馬郡明治村・豐秋村 | 群馬郡澁川町 | 二、一六、三六 | 二、一三、三三 |
| 前橋玉村線 | 前橋市 | 勢多郡上川淵村佐波郡上陽村 | 佐波郡玉村町 | 二、三四、四七 | 二、三一、四一 |
| 前橋伊勢崎線 | 高崎市 | 群馬郡塚澤村・佐波玉村町・上陽村 | 佐波郡伊勢崎町 | 四、〇九、一三 | 三、三八、三〇 |
| 高崎藤岡線 | 高崎市 | 群馬郡片岡村 | 多野郡藤岡町 | 三、〇一、一〇 | 二、〇三、一三 |
| 中之條上田線 | 吾妻郡中之條町 | 吾妻郡原町・長野原町 | 吾妻郡嬬戀村（長野縣境） | 一三、三〇、五一 | 一三、一六、一七 |
| 高崎草津線 | 高崎市 | 群馬郡六郷村・室田町・吾妻郡坂上村・岩島村・長野原町 | 吾妻郡草津町 | 一四、三三、五五 | 九、三四、三一 |
| 高崎箕輪線 | 高崎市 | 群馬郡六郷村・長野村 | 群馬郡箕輪町 | 二、一六、〇〇 | 一、三三、三三 |
| 箕輪伊香保線 | 群馬郡箕輪町 | 群馬郡室田町 | 群馬郡伊香保町 | 三、三九、三五 | 三、三八、四三 |
| 伊勢崎大間々線 | 佐波郡伊勢崎町 | 佐波郡殖蓮村・勢多郡新里村 | 山田郡大間々町 | 三、三八、三〇 | 三、一〇、三一 |
| 伊勢崎桐生線 | 同 | 佐波郡殖蓮村・新田郡笠懸村・山田郡廣澤村 | 桐生市 | 四、一五、三〇 | 四、〇七、四三 |
| 伊勢崎本庄線 | 同 | 佐波郡宮郷村 | 佐波郡名和村（埼玉縣境） | 一、三一、四四 | 一、一〇、三八 |
| 伊勢崎足利線 | 同 | 新田郡強戸村 | 山田郡毛里田村（栃木縣線） | 五、一三、一四 | 三、〇四、五七 |
| 伊勢崎大胡線 | 同 | 勢多郡荒砥村 | 勢多郡大胡町 | 三、一二、一六 | 三、〇五、四三 |
| 玉村新町線 | 佐波郡玉村町 | — | 多野郡新町 | 〇、三四、〇九 | 〇、二七、〇〇 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 玉村倉賀野線 | 佐波郡玉村町 | 群馬郡岩鼻村 | 群馬郡倉賀野町 | 一、一〇、〇八 | 一、〇五、三一 |
| 玉村境線 | 佐波郡玉村町 | — | 佐波郡境町 | 三、三三、一九 | 三、二五、三九 |
| 境館林線 | 佐波郡境町 | 新田郡尾島町、邑樂郡小泉町 | 邑樂郡館林町 | 六、三一、四八 | 六、三〇、四三 |
| 境本庄線 | 佐波郡境町 | — | 佐波郡豐受村（埼玉縣境） | 一、一八、一二 | 〇、二九、三〇 |
| 境大間々線 | 佐波郡境町 | 佐波郡采女村 | 山田郡大間々町 | 四、二一、三〇 | 四、一三、三三 |
| 境太田線 | 佐波郡境町 | 新田郡木崎町・寶泉村 | 新田郡太田町 | 二、二九、四四 | 二、一三、四八 |
| 太田深谷線 | 新田郡太田町 | — | 新田郡尾島町（埼玉縣境） | 二、〇七、一四 | 〇、三三、一二 |
| 太田佐野線 | 新田郡太田町 | — | 山田郡矢場川村（栃木縣境） | 一、三五、三四 | 一、一八、二〇 |
| 太田大間々線 | 新田郡太田町 | 新田郡鳥之郷村・藪塚本町・笠懸村 | 山田郡大間々町 | 三、三四、四七 | 三、一六、三三 |
| 太田足利線 | 新田郡太田町 | 山田郡韮川村 | 山田郡毛里田村（栃木縣境） | 一、一三、三三 | 一、一〇、一九 |
| 太田妻沼線 | 新田郡太田町 | 新田郡九合村 | 新田郡澤野村（埼玉縣境） | 一、三四、三九 | 一、三三、四五 |
| 太田桐生線 | 新田郡太田町 | 山田郡毛里村・廣澤村 | 桐生市 | 四、〇八、〇三 | 三、〇五、五七 |
| 大間々足尾線 | 山田郡大間々町 | — | 勢多郡東村（栃木縣境） | 七、三四、一七 | 七、三〇、四二 |
| 桐生彥根線 | 桐生市 | — | 山田郡梅田村（栃木縣境） | 二、三三、〇〇 | 二、三一、三九 |
| 黑保根前橋線 | 勢多郡黑保根村 | 勢多郡富士見村・南橘村 | 前橋市 | 一〇、三四、一九 | 一〇、一八、三〇 |
| 尾島大間々線 | 新田郡尾島町 | 新田郡藪塚本町 | 山田郡大間々町 | 三、三四、一三 | 三、三三、〇八 |
| 尾島妻沼線 | 新田郡尾島町 | — | 新田郡尾島町（埼玉縣境） | 〇、一八、〇六 | 〇、一三、〇六 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 館林足利線 | 邑樂郡館林町 | — | 邑樂郡多々良村（栃木縣境） | 〇、三〇、五七 | 〇、三〇、五七 |
| 館林藤岡線 | 邑樂郡館林町 | 邑樂郡大島村 | 邑樂郡西谷田村（栃木縣境） | 三、〇〇、〇〇 | 三、三五、五〇 |
| 館林忍線 | 邑樂郡館林町 | 邑樂郡六郷村 | 邑樂郡佐貫村（埼玉縣境） | 一、三一、一五 | 一、一八、三三 |
| 館林佐野線 | 邑樂郡館林町 | — | 邑樂郡渡瀬村（栃木縣境） | 〇、三一、四六 | 〇、二九、三二 |
| 小泉足利線 | 邑樂郡小泉町 | 山田郡休泊村 | 山田郡矢場川岡（栃木縣境） | 一、二八、三六 | 一、二八、三一 |
| 小泉忍線 | 邑樂郡小泉町 | — | 邑樂郡永樂村（埼玉縣境） | 一、三五、三〇 | 一、三三、三七 |
| 館林加須線 | 邑樂郡館林町 | — | 邑樂郡千江田村（埼玉縣境） | 一、一七、四五 | 一、〇九、一九 |
| 沼田若松線 | 利根郡沼田町 | 利根郡白澤村 | 利根郡片品村（福島縣境） | 一三、二八、四九 | 一三、二三、一四 |
| 沼田日光線 | 利根郡沼田町 | — | 利根郡片品村（栃木縣境） | 一一、三四、〇三 | 五、一七、二九 |
| 沼田大間々線 | 利根郡沼田町 | 利根郡赤城根村 | 山田郡大間々町 | 一一、〇六、一〇 | 七、二〇、三三 |
| 澁川沼田線 | 群馬郡澁川町 | — | 利根郡沼田町 | 五、〇三、五八 | 四、一七、〇三 |
| 澁川伊香保線 | 群馬郡澁川町 | — | 群馬縣伊香保町 | 二、〇七、五五 | 二、〇七、三三 |
| 安中伊香保線 | 碓氷郡安中町 | 群馬郡室田町 | 同 | 七、三三、三〇 | 六、一九、一一 |
| 中之條四萬線 | 吾妻郡中之條町 | — | 吾妻郡澤田村大字四萬 | 四、〇六、三三 | 三、三三、三〇 |
| 安中富岡線 | 碓氷郡安中町 | — | 北甘樂郡富岡町 | 二、三〇、一六 | 二、一九、三三 |
| 板鼻富岡線 | 碓氷郡板鼻町 | 北甘樂郡小野村 | 同 | 二、三三、三四 | 二、〇一、〇三 |
| 富岡野澤線 | 北甘樂郡富岡町 | 北甘樂郡一ノ宮町・下仁田町 | 北甘樂郡西牧村（長野縣境） | 八、三三、四〇 | 八、一八、四八 |

| 原市一ノ宮線 | 碓氷郡原市町 | 碓氷郡磯部村・北甘樂郡高田村 | 北甘樂郡一ノ宮町 | 二、一七、〇一 | 二、一三、二九 |
|---|---|---|---|---|---|
| 松井田下仁田線 | 碓氷郡松井田町 | 北甘樂郡妙義町 | 北甘樂郡下仁田町 | 四、〇五、一一 | 三、〇六、三三 |
| 富岡萬場線 | 北甘樂郡富岡町 | 北甘樂郡高瀬村 | 多野郡神川村大字萬場 | 四、一九、二八 | 四、〇三、一八 |
| 新町鬼石線 | 多野郡新町 | 多野郡藤岡町 | 多野郡鬼石町 | 三、三三、一八 | 三、一八、三七 |
| 鬼石萬場線 | 多野郡鬼石町 | 多野郡美原村 | 多野郡神川村大字萬場 | 六、一六、〇八 | 六、一三、五〇 |
| 藤岡兒玉線 | 多野郡藤岡町 | — | 多野郡藤岡町（埼玉縣境） | 〇、一五、三六 | 〇、一一、一四 |
| 藤岡吉井線 | 多野郡藤岡町 | — | 多野郡吉井町 | 二、〇六、三九 | 一、三三、五六 |
| 鬼石秩父線 | 多野郡鬼石町 | — | 多野郡鬼石町（埼玉縣境） | 〇、〇四、三三 | 〇、〇四、一九 |
| 吉井萬場線 | 多野郡吉井町 | 多野郡日野村 | 多野郡神川村大字萬場 | 四、二〇、三三 | 四、一七、五七 |
| 新町停車場線 | 多野郡新町 | — | 新町停車場 | 〇、〇五、二一 | 〇、〇四、〇一 |
| 倉賀野停車場線 | 群馬郡倉賀野町 | — | 倉賀野停車場 | 〇、〇三、三四 | 〇、〇三、三六 |
| 高崎停車場線 | 高崎市 | — | 高崎停車場 | 〇、一二、四四 | 〇、〇五、二一 |
| 前橋停車場線 | 前橋市 | — | 前橋停車場 | 〇、一〇、三一 | 〇、〇四、五六 |
| 伊勢崎停車場線 | 佐波郡伊勢崎町 | — | 伊勢崎停車場 | 〇、〇六、三六 | 〇、〇一、三四 |
| 大間々岩宿停車場線 | 山田郡大間々町 | — | 岩宿停車場 | 一、一〇、五一 | 〇、〇一、一八 |
| 桐生停車場線 | 桐生市 | — | 桐生停車場 | 〇、〇四、五二 | 〇、〇〇、三〇 |
| 安中停車場線 | 碓氷郡安中町 | — | 安中停車場 | 〇、一四、〇〇 | 〇、〇一、一〇 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 原市磯部停車場線 | 碓氷區原市町 | — | 磯部停車場 | 〇、二七、一一 | 〇、〇一、〇七 |
| 松井田停車場線 | 碓氷郡松井田町 | — | 松井田停車場 | 〇、一〇、一六 | 〇、〇一、一四 |
| 伊勢崎新伊勢崎停車場線 | 佐波郡伊勢崎町 | — | 新伊勢崎停車場 | 〇、〇六、三三 | 〇、〇三、五八 |
| 境停車場線 | 佐波郡境町 | — | 境停車場 | 〇、〇三、〇三 | 〇、〇三、五九 |
| 太田停車場線 | 新田郡太田町 | — | 太田停車場 | 〇、〇一、四一 | 〇、〇〇、四二 |
| 館林停車場線 | 邑樂郡館林町 | — | 館林停車場 | 〇、〇四、五〇 | 〇、〇三、五五 |
| 大間々停車場線 | 山田郡大間々町 | — | 大間々停車場 | 〇、〇三、三〇 | 〇、〇一、四八 |
| 桐生新桐生停車場 | 桐生線 | — | 新桐生停車場 | 〇、二六、三〇 | 〇、〇三、〇〇 |
| 吉井停車場線 | 多野郡吉井町 | — | 吉井停車場 | 〇、〇四、〇五 | 〇、〇四、〇五 |
| 富岡停車場線 | 北甘樂郡富岡町 | — | 富岡停車場 | 〇、〇三、三四 | 〇、〇一、〇八 |
| 一ノ宮停車場線 | 北甘樂郡一ノ宮町 | — | 一ノ宮停車場 | 〇、〇三、四一 | 〇、〇三、一三 |
| 下仁田停車場線 | 北甘樂郡下仁田町 | — | 下仁田停車場 | 〇、〇三、四三 | 〇、〇〇、四七 |
| 前橋總社線 | 前橋市 | — | 群馬郡總社町 | 一、〇五、三三 | 〇、三一、三九 |
| 高崎瀧川線 | 高崎市 | 群馬郡金古町 | 群馬郡瀧川町 | 四、三一、五八 | 二、三三、三三 |
| 伊勢崎境線 | 佐波郡伊勢崎町 | 佐波郡剛志村 | 佐波郡境町 | 二、〇一、二六 | 一、一九、一一 |
| 境深谷線 | 佐波郡境町 | — | 新田郡世良田村（埼玉縣境） | 〇、三一、四〇 | 〇、二七、一五 |
| 草津東長倉線 | 吾妻郡草津町 | 吾妻郡長野原町 | 吾妻郡嬬戀村（長野縣境） | 六、〇四、〇〇 | 三、一〇、二七 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 利島館林線 | 邑樂郡海老瀨村(埼玉縣境) | 邑樂郡伊奈良村・六鄕村 | 邑樂郡館林町 | 三、一〇、三七 | 二、三〇、五一 |
| 下仁田臼田線 | 北甘樂郡下仁田町 | 北甘樂郡磐戶村 | 北甘樂郡尾澤村(長野縣境) | 五、一八、二〇 | 五、一五、〇〇 |
| 前橋新潟線 | 前橋市 | 群馬郡澁川町利根郡沼田町 | 利根郡水上村(新潟縣境) | 二〇、一二、四二 | 一三、〇八、三〇 |
| 沼田六日町線 | 利根郡沼田町 | 利根郡薄根村 | 利根郡新治村(新潟縣境) | 八、三〇、三九 | 七、〇八、三一 |
| 萬場岩村田線 | 多野郡神川村大字萬場 | ― | 多野郡上野村(長野縣境) | 九、二四、三五 | 九、一七、四五 |
| 松井田中之條線 | 碓氷郡松井田町 | 碓氷郡烏淵村・群馬郡倉田村・吾妻郡原町 | 吾妻郡中之條町 | 一一、〇四、〇九 | 四、〇八、四九 |
| 中之條沼田線 | 吾妻郡中之條町 | ― | 利根郡沼田町 | 六、二九、五〇 | 五、一六、四〇 |
| 室田總社線 | 群馬郡室田町 | 群馬郡箕輪町・金古町 | 群馬郡總社町 | 四、二八、三九 | 三、一六、四四 |
| 太田金山線 | 新田郡太田町 | ― | 新田郡太田町字金山新田神社 | 〇、三三、〇六 | 〇、二七、〇〇 |
| 藤岡本社線 | 多野郡藤岡町 | ― | 多野郡藤岡町(埼玉縣境) | 〇、一九、四〇 | 〇、〇四、〇〇 |
| 鬼石兒玉線 | 多野郡鬼石町 | ― | 多野郡鬼石町(埼玉縣境) | 〇、一〇、〇〇 | 〇、〇二、三五 |
| 萬場下吉田線 | 多野郡神川村大字萬場 | ― | 多野郡神川村(埼玉縣境) | 一、〇四、三〇 | 〇、三〇、〇〇 |
| 館林福居線 | 邑樂郡館林町 | ― | 邑樂郡中野村(栃木縣境) | 一、一九、二四 | 〇、〇一、一九 |
| 上野小鹿野線 | 多野郡上野村 | ― | 多野郡中里村(埼玉縣境) | 三、二八、四〇 | 一、一四、〇〇 |
| 川邊藤岡線 | 邑樂郡海老瀨村(埼玉縣境) | ― | 邑樂郡海老瀨村(栃木縣境) | 〇、一七、〇〇 | 〇、一七、〇〇 |
| 下仁田東長倉線 | 北甘樂郡下仁田町 | ― | 北甘樂郡西牧村(長野縣境) | 五、〇九、〇二 | 二、三三、五二 |
| 澁川大胡線 | 群馬郡澁川町 | 勢多郡北橋村・富士見村・芳賀村 | 勢多郡大胡町 | 四、二五、二〇 | 三、三五、〇四 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 大胡玉村線 | 勢多郡大胡町 | 勢多郡荒砥村・木瀬村・佐波郡上陽村 | 佐波郡玉村町 | 四、二一、五七 | 三、一九、一〇 |
| 神梅大胡線 | 勢多郡黒保根村神梅 | 勢多郡新里村・粕川村・宮城村 | 勢多郡大胡町 | 三、一〇、四九 | 三、〇七、一三 |
| 前橋木曾線 | 前橋市 | 勢多郡南橘村 | 勢多郡北橘村縣社木曾三社神社 | 二、一〇、二四 | 〇、一六、二四 |
| 石山前橋線 | 佐波郡赤堀村石山 | 勢多郡荒砥村・木瀬村 | 前橋市 | 三、〇六、一三 | 二、三三、三〇 |
| 石山桐生線 | 佐波郡赤堀村石山 | 新田郡笠懸村・山田郡相生村、 | 桐生市 | 三、三三、〇六 | 三、一一、四〇 |
| 水沼大間々線 | 勢多郡黒保根村大字水沼 | 山田郡福岡村 | 山田郡大間々町 | 二、一三、〇〇 | 二、〇五、二七 |
| 京ヶ島高崎線 | 群馬郡京ヶ島村 | 群馬郡高尾村・大類村・塚澤村 | 高崎市 | 一、一六、四三 | 一、〇九、〇七 |
| 箕輪澁川線 | 群馬郡箕輪町 | 群馬郡相馬村・桃井村・明治村・古巻村 | 群馬郡澁川町 | 三、三三、四六 | 二、一四、〇一 |
| 澁川原町線 | 群馬郡澁川町 | 群馬郡金島村・吾妻郡東村・太田村 | 吾妻郡原町 | 五、二六、一三 | 五、〇七、一三 |
| 倉賀野前橋線 | 群馬郡倉賀野町 | 群馬郡岩鼻村・大類村 | 前橋市 | 三、〇三、五三 | 一、〇九、〇〇 |
| 松井田伊香保線 | 碓氷郡松井田町 | 碓氷郡九十九村・後閑村・秋間村・里見村・群馬郡室田町 | 群馬郡伊香保町 | 七、二四、三〇 | 四、〇三、一〇 |
| 新町吉井線 | 多野郡新町 | 多野郡神流村・小野村・美土里村・平井村・入野村 | 多野郡吉井町 | 三、三三、三〇 | 一、三八、四四 |
| 日野藤岡線 | 多野郡日野村 | 多野郡平井村・美土里村 | 多野郡藤岡町 | 四、〇八、五三 | 三、三七、〇〇 |
| 上野下仁田線 | 多野郡上野村 | 北甘樂郡磐戸村・青倉村 | 北甘樂郡下仁田町 | 五、一七、五九 | 三、一四、二七 |
| 一ノ宮妙義線 | 北甘樂郡一ノ宮町 | 北甘樂郡高田村 | 北甘樂郡妙義町 | 二、二九、五七 | 二、一五、〇四 |
| 安中磯部線 | 碓氷郡安中町 | ― | 碓氷郡磯部村 | 一、一八、〇一 | 〇、三七、一〇 |
| 磯部妙義線 | 碓氷郡磯部村 | 碓氷郡西横野村 | 北甘樂郡妙義町 | 二、〇四、五五 | 二、〇四、三三 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 大久保安中線 | 碓氷郡細野村大久保 | 碓氷郡九十九村・後閑村 | 碓氷郡安中町 | 三、二四、三三 | 三、一〇、三三 |
| 原市伊香保線 | 碓氷郡原市町 | 碓氷郡後閑村・秋間村・里見村・群馬郡室田町 | 群馬郡伊香保町 | 七、二一、五五 | 一、〇五、二四 |
| 安中停車場岩野谷線 | 碓氷郡安中町安中停車場 | ― | 碓氷郡岩野谷村府縣道(安中富岡線) | 〇、一一、四五 | 〇、一一、一九 |
| 間野高崎線 | 碓氷郡里見村間野 | 碓氷郡八幡村・豐岡村 | 高崎市 | 四、二七、三三 | 三、三五、〇六 |
| 中之條草津線 | 吾妻郡中之條町 | 吾妻郡澤田村・六合村 | 吾妻郡草津町 | 八、〇七、五八 | 六、一三、五五 |
| 草津嬬戀停車場線 | 吾妻郡草津町 | ― | 吾妻郡嬬戀村嬬戀停車場 | 四、〇〇、四一 | 二、二四、一七 |
| 川原湯原町線 | 吾妻郡長野原町大字川原湯 | 吾妻郡岩島村 | 吾妻郡原町 | 三、二八、四三 | 〇、一二、四〇 |
| 小倉原町線 | 吾妻郡長野原町小倉 | 吾妻郡坂上村・岩島村 | 吾妻郡原町 | 六、一〇、四七 | 三、三五、五三 |
| 迦葉山沼田線 | 利根縣池田村大字上發知迦葉山 | ― | 利根郡沼田町 | 二、三三、一三 | 二、三〇、一〇 |
| 大間々若松線 | 山田郡大間々町 | 勢多郡黑保根村・利根郡赤城根村・東村 | 利根郡片品村(福島縣境) | 二一、二五、一四 | 一、一二、〇〇 |
| 牛澤太田線 | 新田郡澤野村大字牛澤 | ― | 新田郡太田町 | 一、一六、一四 | 一、一四、三九 |
| 桐生木崎線 | 桐生市 | 新田郡强戶村・生品村・寶泉村 | 新田郡木崎町 | 四、一三、五六 | 二、一七、二〇 |
| 藪塚本町藪塚停車場線 | 新田郡藪塚本町 | ― | 新田郡藪塚本町藪塚停車場 | 〇、二七、〇六 | 〇、一七、一八 |
| 太田小泉線 | 新田郡太田町 | 新田郡九合村・山田郡休泊村 | 邑樂郡小泉町 | 一、二三、四四 | 一、一一、五九 |
| 大間々小泉線 | 山田郡大間々町 | 山田郡相生村・廣澤村・毛里田村・韮川村・休泊村 | 同 | 六、一九、三三 | 二、三一、一五 |
| 毛里田小泉線 | 山田郡毛里田村 | 山田郡矢場川村・林泊村 | 同 | 二、二五、二四 | 一、三三、〇三 |
| 桐生菱線 | 桐生市 | ― | 桐生市(栃木縣境) | 〇、二〇、五八 | 〇、一一、五七 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 赤岩栗橋線 | 邑樂郡永樂村大字赤岩 | 邑樂郡富永村・佐貫村・梅島村・千江田村 | 邑樂郡大筒野村（埼玉縣境） | 五,〇一,五六 | 四,三〇,三五 |
| 赤羽藤岡線 | 邑樂郡赤羽村 | 邑樂郡鄕谷村・大島村 | 邑樂郡西谷田村（栃木縣境） | 二,三〇,〇三 | 一,一五,五五 |
| 館林熊谷線 | 邑樂郡館林町 | 邑樂郡多々良村・長柄村 | 邑樂郡永樂村（埼玉縣境） | 二,二六,五六 | 一,三一,五四 |
| 赤岩福居線 | 邑樂郡永樂村大字赤岩 | 邑樂郡長柄村・中野村・高島村 | 山田郡矢場川村（栃木縣境） | 二,二九,〇八 | 二,二六,二四 |
| 館林赤見線 | 邑樂郡館林町 | ― | 邑樂郡渡瀬村（栃木縣境） | 〇,三三,一三 | 〇,二四,〇三 |
| 江口館林線 | 邑樂郡千江田村大字江口 | 邑樂郡梅島村・六鄕村 | 邑樂郡館林町 | 一,〇九,四五 | 一,〇一,五五 |
| 桐生深谷線 | 桐生市 | 新田郡藪塚本町・綿打村・木崎町 | 新田郡世良田村（埼玉縣境） | 五,一四,二八 | 一,一一,〇〇 |
| 新前橋停車場古市線 | 群馬郡東村新前橋停車場 | ― | 群馬郡東村大字古市（國道九號線） | 〇,〇〇,五四 | 〇,〇〇,五四 |
| 總社群馬總社停車場線 | 群馬郡總社町 | ― | 群馬郡總社町停車場群馬總社 | 〇,一三,〇六 | 〇,〇三,〇六 |
| 澤入停車場澤入線 | 勢多郡東村澤入停車場 | ― | 勢多郡東地大字澤入府縣道大間々足尾線 | 〇,〇二,四五 | 〇,〇二,一〇 |
| 駒形大間々線 | 山田郡川内村駒形 | ― | 山田郡大間々町 | 二,二二,〇〇 | 二,一九,〇〇 |
| 大胡赤城線 | 勢多郡大胡町 | 勢多郡宮城村 | 勢多郡富士見村赤城山 | 四,〇五,二九 | 四,〇三,一〇 |
| 沼田赤城線 | 利根郡沼田町 | 利根郡利南村・糸之瀨村・赤城根村 | 同 | 五,二七,二三 | 四,一七,〇〇 |
| 萬場福島線 | 多野郡神川村萬場 | 多野郡日野村・北甘樂郡秋畑村・小幡村 | 北甘樂郡福島町 | 五,一八,〇〇 | 〇,二五,四二 |
| 野邊館林線 | 邑樂郡三野谷村野邊 | 利根郡利南村 | 邑樂郡館林町 | 二,〇六,〇〇 | 一,一五,四八 |
| （計） | ― | 一五七線 | ― | 五九〇,二六,五七 | 四三六,二八,一一 |

## 碓氷新道

一工事期　從明治十六年二月三日、至同十九年四月二十日
一工事實費　金七萬九千四百七十四圓七十九錢八厘
一道路　起終點　長倉村舊道接續點
　　中尾山ヲ經テ坂本驛新舊接續點ニ至ル
　距離　長野縣分　國境以西　壹里壹町九間壹尺
　　群馬縣分　國境以東　三里二十四町八間五尺
　　　合計　四里二十五町拾八間
　　舊道ニ比シ遠キコト三十町二十五間壹尺
　坡度　舊道　離山初點輕井澤驛里程標迄　百九十五分一
　　同上ヨリ國界マデ　十一、七分一
　　同上ヨリ坂本驛里程標マデ　十二、二分一
　新道　離山初點ヨリ矢ケ崎麓マデ　平均○
　　同上ヨリ上信國界マデ　三十七分一
　　同上ヨリ坂本驛里程標マデ　二十九、七分一

一起業年月日　明治十六年八月廿六日
一落成年月日　同　十七年五月二十日
一所要職工人夫數　三十萬三千百一人

（縣廳文書碓氷嶺新道修築工事（三））

## 三　橋梁

橋梁・渡船の架設に就いては、明治四年四月、太政官より各地方官に令したる文、左の如し。

從來諸道ノ渡津、多ク船渡歩渡ナルヲ以テ、旅人艱難多シ。地方官宜シク其水利ヲ審究シ、速ニ假橋ヲ架設スベシ。若其川流中ニ石砂多クシテ、其抗柱ノ施シ難キモノハ、新ニ舟船ヲ通ジテ、増水ノ日ト雖モ通行障碍ナカラシムベキ考案ヲ草定シ、來七月一日ヲ限テ之ヲ出スベシ。

但シ從前慣例ヲ以テ支給スル所ノ一切ノ賜金ヲ廢スルヲ以テ、定賃錢及無賃渡越等ノ地ハ、更ニ相當ノ賃錢ヲ定メ、其賃錢内ニ於テ橋梁・渡船等、營業ノ方法ヲ設クベシ。

本縣は明治六年、利根川筋、利根郡水上村地内に桁橋を架設し、明治十七年に至

り、追分街道、利根川を横斷する前橋市、群馬郡元惣社村入會に、始めて木鐵混交構桁橋を架設し、交通の利便に供したるも、明治二十九年度の大洪水に遭遇し、終に流失せるを以て、縣は更に三箇年繼續事業として、鐵橋を架設し、明治三十二年三月竣工せり。是れを本縣に於ける鐵橋の嚆矢なりとす。

本縣鐵橋の嚆矢

續て明治三十四年坂東橋、明治三十七年吾妻橋、其他幾多橋梁の新設を見るに至れり。是れ本縣橋梁に對する一大革新なりき。降て明治四十三、年未曾有の大洪水に際會し、橋梁の流失せしもの幾百、本縣河川に橋無しと云ふも、敢て過言に非らざるの慘況を呈せり。此に於て本縣は、橋梁に對する方針を確立し、特に橋梁專務者を定め、且つ橋梁の流失源因調査の結果、徑間の長大なるを必要と認めたるに依り、桁材は北亞米利加產の松材を輸入し、又橋面材は青森產檜材を、縣に於て購入し、之を工事請負人に交附する等の手段を採り、橋梁の完備を期したり。是れ本縣橋梁に對する第二の革新なり。現時架設しある橋梁にして著名なるもの左の如し。

## 本縣橋梁一覽（大正十三年末現在）

| （路線） | （郡） | （町村） | （大字） | （橋名） | （橋種） | （帳）尺 | 尺 | （架設年月日）年 月 | （工費） |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 新潟道 | 群馬 | 金島 長尾 | 金井 吹屋 | 吾妻橋 | 構桁橋 鐵橋 | 九二八、四 一八、〇 | 二四五、四 四三七、〇 | 三七、七 四五、七 | 一七六、九八九四七七 |
| 長野街道 | 勢多 群馬 | 北橘 古巻 | 眞壁 半田 | 阪東橋 | 同 同 | 六八八、〇 一八、〇 | | 三四、一二 | 一二四、八二九九一三 |
| 追分街道 | 前橋 群馬 | 紅雲 元惣社 | 内藤分 | 利根橋 | 同 同 | 六四六、〇 一五、〇 | | 三三、三 | 九〇、四〇一六七七 |
| 中仙道 | 碓氷 | 安中 | 安中 中宿 | 久芳橋 | 同 木鐵混交橋 | 六四七、六 一八、〇 | 二四六、〇 四〇一、六 | 四一、一 四五、三 | 七七、八六三〇〇六 |
| 足利街道 | 山田 | 桐生 相生 | 安樂土 天王宿 | 赤岩橋 | 同 同 | 二九三、八 一八、〇 | | 三六、七 | 四四、五二八三七二 |
| 澁川町道 | 吾妻 | 原町 太田 | 原町 岩井 | 東橋 | 同 同 | 一三四、〇 一三、〇 | | 三七、三 | 一三、五六四六四一 |
| 後閑三國道 | 利根 | 古馬牧 桃野 | 後閑 月夜野 | 月夜野橋 | 同 同 | 一一四、〇 一一、七 | | 三二、一二 | 八、一八八一七九 |
| 下仁田餘地道 | 北甘樂 | 盤戸 | 磐戸 | 磐戸橋 | 同 同 | 一二四、〇 一三、〇 | | 三三、四 | 三、三五八一四一 |
| 戸鹿野會津道 | 利根 | 川田 利南 | 下川田 戸鹿野 | 戸鹿野橋 | 同 同 | 一三〇、〇 一三、〇 | | 三四、七 | 三、三三〇七二九 |
| 長野街道 | 吾妻 | 中之條 | 伊勢町 青山 | 松見橋 | 同 同 | 九六、六 一二、〇 | | 三八、八 | 五、三八一三五九 |
| 戸鹿野會津道 | 利根 | 白澤 赤城根 | 岩室 日向南郷 | 赤城根橋 | 吊橋 | 一五九、〇 一三、〇 | | 三六、七 | 四、七二五六三七 |
| 同 | 同 | 東村 | 薗原 | 薗原橋 | 同 | 一五八、〇 九、〇 | | 三六、七 | 三、九四九四一三 |
| 上小林下仁田道 | 北甘樂 | 吉田 馬山 | 南蛇井 馬山 | 比佐野橋 | 同 | 二四三、〇 一三、〇 | | 三八、一二 | 二、八七八三三六 |

| | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 新潟道 | 利根 | 川田 利南 | 下川田 戸鹿野 | 鷲石橋 | 構桁橋 木鐵混交橋 | 一〇一、二五 一三、〇 | 三九、九 | 三、八二〇〇〇〇 |
| 中仙道 | 碓氷 | 板鼻 安中 | 中宿 | 鷹ノ巣橋 | 構桁橋 木鐵混交橋 一六、七〇〇圓 | 一三〇、〇 一八、〇 四四〇、〇 一八、〇 | 四一、一 四五、一 | 四五、六〇六七九四 |
| 追分街道 | 北甘樂 | 富岡 福島 | 曾木 田篠 | 甘樂橋 | 構桁橋 木鐵混交橋 | 四〇七、〇 一三、〇 | 四一、一 | 三七、八六〇〇〇〇 |
| 下仁田餘地道 | 同 | 下仁田 | 下仁田 川井 | 牧口橋 | 同同 | 一六三、〇 一三、〇 | 四一、一 | 一三、七八五〇〇〇 |
| 追分街道 | 同 | 西牧 | 西牧 | 清水澤橋 | 同同 | 一六八、〇 一三、〇 | 四二、三 | 七、一〇〇〇〇〇 |
| 同 | 同 | 同 | 同 | 芝ノ澤橋 | 頰杖橋 | 九〇、〇 一三、〇 | 四二、三 | 二、五六〇〇〇〇 |
| 長野街道 | 吾妻 | 長野原 | 長野原 | 須川橋 | 構桁橋 木鐵混交橋 | 一〇九、〇 一三、〇 | 四三、八 | 四、五〇〇〇〇〇 |
| 同 | 同 | 嬬戀 | 大前 大笹 | 嬬戀橋 | 吊橋 | 一六二、〇 一三、〇 | 四四、一二 | 六、九七〇七四八 |
| 豐岡中野道 | 碓氷 群馬 | 里見 室田 | 上里見 下室田 | 森下橋 | 構桁橋 木鐵混交橋 | 二一三、〇 一三、〇 | 四四、一二 | 一四、〇八九七五四 |
| 中仙道 | 碓氷 | 臼井 坂本 | 橫川 原 | 霧積橋 | 同同 | 一四四、〇 一八、〇 | 四五、二 | 六、〇二一九七五 |
| 十石峠街道 | 多野 | 鬼石 | 鬼石 | 鬼石橋 | 同同 | 八四、〇 三、〇 | 四四、二 | 五、一八六一四八 |
| 下仁田餘地道 | 北甘樂 | 月形 | 大日向 | 稻荷橋 | 同同 | 二一五、〇 一三、〇 | 四五、一 | 九、二〇七一七一 |
| 十石峠街道 | 多野 | 美九里 鬼石 | 保美 淨法寺 | 境橋 | 頰杖橋 | 七八、〇 一三、〇 | 四四、一〇 | 二、八六七五五四 |
| 同 | 同 | 鬼石 | 淨法寺 | 彌勒橋 | 同 | 六〇、〇 一三、〇 | 同 | 二、一六七〇二七 |
| 同 | 同 | 美九里 | 神田 保美 | 三名川橋 | 同 行桁橋 | 八〇、〇 一三、五 | 同 | 二、〇九七三六一 |

而して本縣は利根川、其他大小數十の河川を有するを以て、橋梁の數亦從つて多し。

## 第三項　鐵道及軌道

### 一　鐵道

鐵道の敷設が、直接旅客貨物の運輸交通に對し、著大の利便を與ふるは言ふ迄もなく、延いて產業の開發、人文の發達を來し、政治・社會・經濟上に及ぼす影響、實に顯著なるものなり。今縣內鐵道發達の梗概を錄し、續いて主なる線路に就いて、別に記述する所あらんとす。

鐵道發達の梗概

本縣に於ける鐵道發達の經過を顧みるに、明治十六年十二月、東京市上野驛より、新町迄開通し居たる、日本鐵道株式會社の經營に係る線路を、明治十七年五月、高崎まで延長したるを濫觴とし、同年八月、高崎・前橋（利根川西岸）を連絡し、翌十八年十月、高崎・橫川間成り、同廿一年、碓氷の峻嶺を越えて、信州輕井驛に達し、同十一月、西毛線の工を竣へ、同廿二年十二月を以て、前橋・高崎（利根川鐵橋竣工）全く連絡し、茲に縣內

幹線の全通を見、交通上一生面を開きたり。而して前記幹線成りたる以來、久しく鐵道の新設絶えたりしが、上野鐵道株式會社は、高崎・下仁田間に輕便鐵道を敷設し、明治三十年九月、運輸を開始し、以て甘樂方面、人文開發に資したり。その後東武鐵道株式會社は、淺草・伊勢崎間を明治四十三年三月に、太田・桐生・相生間を大正二年三月に、館林・佐野間を大正三年八月に開通し、足尾鐵道株式會社は、桐生・足尾間を大正元年十二月に開通し、中原鐵道株式會社は、館林・小泉間を大正六年三月に、岩鼻輕便鐵道株式會社は、岩鼻・倉賀野間を大正六年四月に、草津輕便鐵道株式會社は、輕井澤・吾妻間を大正六年七月に開通せり。又鐵道省上越南線は、高崎・澁川間を大正十年七月開通せり。而して現在延長總計一七九・二哩、恰も鐵道網を張りたるが如く、若し豫定せられ居る上越線の貫通、八高線の全通、將に測量を開始せられんとする澁川・長野原間の開通を見れば、更に面目を一新するものあらん。

### （イ）高崎線　（埼玉縣界——高崎驛）

高崎線は原と私設日本鐵道株式會社の設立にして、明治三十九年十一月一日、

政府が買收し、國有となしたるものなり。本縣内の敷設は、明治十六年にして、同年七月廿八日、上野・熊谷間三十八哩の運轉開始を見たるが、同年十月廿一日、熊谷・本庄間に延長し、更に本庄驛より新町迄延長して開通したるは、同年十二月廿七日なり。是れ本縣鐵道の嚆矢と云ふべし。新町・高崎間は、明治十七年五月一日竣工、同年六月廿五日を以て、上野・高崎間開通式を擧行し、畏くも　明治天皇の親臨を辱うし、同日高崎驛迄御試乘を賜へり。越えて廿八日、　皇后宮竝に、皇太后御同列にて、上野停車場御發車、高崎へ行啓あらせられたり。（行幸啓章參照）同年八月二十日には、前橋驛（利根川以西群馬郡石倉地内）まで延長し、明治二十二年十二月二十日、兩毛鐵道會社の利根川橋梁落成し、兩社の線路連絡するに及び、石倉地内の前橋驛を撤せり。

### （ロ）信越線（高崎・横川間。横川・輕井澤間。）

高崎・横川間は、明治十七年十月二十日の起工にして、明治十八年十月十五日の開通なり。延長十八哩、最急勾配四十分の一、建築費四一七、三二一圓（明治二十年迄）なり。

横川・輕井澤間は、明治二十六年四月一日の開通にして、是より先、明治二十年十二月一日、直江津・輕井澤間の全通を見たれば、政府は此横川・輕井澤兩驛を連絡し

て、上野・直江津間の全通を圖らんと、明治二十四年十二月四日、線路を決定したり。抑も此兩驛の線路に就いて、政府は明治九年九月より測量に着手し、入山線・和見線・中尾線、三線を測定し、種々に比較研究の結果、明治十六年十一月、和見線を選定したりしが、明治二十四年、中尾線に變更し、横川・輕井澤に建築事務所を設け、兩方より起工し、明治二十五年十一月下旬、各隧道略竣功し、十二月初旬、橋梁全部落成し、二十二日横川・輕井澤間相連絡するを得たり。

明治二十五年七月、横川起點三哩五十一鎖より同五十三鎖に至る、熊ノ平第十號隧道を切取に變更するの議を決せり。該隧道は列車行違の場所となり、設計上三線の敷設を要するに至り、從つて工費を增加するのみならず、隧道中に轉轍器を設くるの危險を生ずるを以て、之を切取に變更するを要し、同月七日、長官より之を第一部長に訓達したり。

明治二十六年一月二十三日より、雇英國人・邦人職員と共に、アプト式機關車の試運轉を行ふ。三月末に至り、其經驗に依り、營業運轉を開始し得るまでに熟達したり。

是年四月一日、運輸開始す。其哩程凡七哩にして、十五分の一の勾配、凡五哩に

及び、横川附近一哩餘は四十分の一にして、熊ノ平及び輕井澤附近は概ね平坦、全區隧道二十六箇所、總延長一四、六四四呎、第六隧道一八〇七呎は最長とす。橋梁十八箇所、總延長一、四七一呎、建築設費一、九九一、六六五圓（廿六年度最終）、一哩平均二八四、五二四圓なり。

### 高崎線及信越線

高崎驛

| （驛名） | （驛間距離） | （運輸事務開始年月日） |
|---|---|---|
| 埼玉縣界 | | |
| 新町 | 二、八（哩分） | 明治一六、一二、二七 |
| 倉賀野 | 三、七 | 同　二〇、五、一 |
| 高崎 | 三、八 | 同　一七、五、一 |
| 信越線 | | |
| 高崎 | ― | ― |
| 北高崎（舊名飯塚） | 一、四 | 明治一八、一〇、一五 |
| 群馬八幡 | 二、五 | 大正一三、一〇、一五 |
| 安中 | 二、六 | 明治一八、一〇、一五 |
| 磯部 | 四、四 | 同 |
| 松井田 | 四、一 | 同 |
| 横川 | 三、四 | 同 |
| 熊ノ平 | 二、七 | 明治三九、一〇、一 |
| 長野縣界 | 二、一 | |

### （八）　兩毛線　（栃木縣界―前橋）

兩毛線は原と兩毛鐵道株式會社に屬し、明治十九年一月の創立なり。明治二

十一年五月廿二日、小山・足利間の開通を見、是年本縣に延長して、十一月廿五日、足利・桐生間を開通せり。同廿二年十一月二十日、桐生・前橋間の開通を見て、利根川を隔てて日本鐵道會社の前橋驛と對立したるが、此年二月より着手したる利根川橋梁は、十二月二十日を以て竣工を見たれば、十二月二十六日より列車を通じて、前橋・高崎間を連絡せり。後明治二十九年、東武鐵道株式會社が、東京を起點として、兩毛地方に線路を布設するの計畫を立つるに當り、兩毛鐵道株式會社亦、明治二十八年以來、兩毛地方に支線を延長の企望を有するを以て、東武鐵道と合同する事の、兩社に有利なるを慮り、同鐵道の發企人と交渉せしも、不調に終れり。間もなく日本鐵道株式會社と合同の議起り、廿九年九月兩社の協約成立し、明治三十年四月一日、財産の授受を了し、全く合同せり。隨つて日本鐵道株式會社の國有となりたると共に此線亦國有となる。

| （驛名） | （驛間距離） | （運輸事務開始年月日） | 驛名 | 驛間距離 | 運輸事務開始年月日 |
|---|---|---|---|---|---|
| 高崎 | — | — | 駒形 | 四、三 | 明治二二、一一、二〇 |
| 新前橋 | 四、六 | 大正一〇、七、一 | 伊勢崎 | 三、六 | 同 |
| 前橋 | 一、六 | 明治一七、八、二〇 | 國定 | 三、六 | 同 |
| | | | 岩宿 | 四、〇 | 同 |

| 桐生 | 二、五 | 明治二二、一一、二〇 | 縣界 | 二、六 |
|---|---|---|---|---|

## （二）足尾線（桐生―栃木縣界）

足尾線はもと私線足尾鐵道會社の敷設にして、之が敷設は明治三十一年頃より計畫せられ、大間々・足尾線は、明治三十三年假免許狀下附せられしが、同三十五年五月、一旦失效となりしかば、同月再び足尾鑛業鐵道の名稱を以て計畫せられ、其線路桐生・足尾間として、明治四十一年十二月、假免許狀を受け、同四十二年二月、足尾鐵道と改稱し、明治四十三年一月三十一日、本免許狀を受けたり。明治四十三年、線路を變更し、起點桐生町の西方、山田郡桐生村下新田より大間々町に至り、足尾を經て、本山に達せんとし、之が起點變更を申請して認可せられ、明治四十四年、下新田・大間々間の工事成り、四月十五日開通し、官線桐生停車場下新田聯絡所間六十五鎖の借用を鐵道院と契約し、同月二十七日、桐生を經て、官線と連絡運輸を通じたり。大正元年九月五日、大間々・神土間、十一月十一日神土・澤入間、十二月三十一日澤入・足尾間を開通し、全通に及べり。かくて大正七年法律第十三號の規定により國有となる。

| (驛名) | (驛間距離) | (運輸事務開始年月日) |
|---|---|---|
| 桐生 | — | 前出 |
| 相老 | 一、九 | 明治四四、四、一五 |
| 大間々 | 二、七 | 同 |
| 上神梅 | 三、二 | 大正 元、九、五 |
| 水沼 | 二、七 | 大正 元、九、五 |
| 花輪 | 二、六 | 同 |
| 神土 | 三、三 | 大正 元、九、五 |
| 澤入 | 四、四 | 同 一一、一一 |
| 栃木縣境 | 一、一 | 同 一二、三一 |

## (ホ) 上越南線

上越南線南越線は、明治十六年、本縣人高橋周禎、新潟縣人岡村貢等の發起したる上越鐵道株式會社の計畫線なり。該會社は明治二十二年三月、群馬縣廳を經て、敷設許可願を政府に提出して、不許可の指令に接し、更に明治二十三年八月、再願書を提出して、容易に許可せられず、漸く明治二十九年に至り、敷設許可の假免許を受けたり。由りて必要書類を作製し、明治三十三年四月、東京府を經て、本免狀を下附せられ、愈〻工事に着手せんとしたる際、財界不況の爲め着手し得ず、遺憾にも免許の效力を失ふに至る。斯くて大正六年、國勢發展の結果、國防上・產業上の必要に迫られ、政府は國營として建設するに決し、千九百五十萬圓の豫算を以

て、翌七年工事に着手し、北線は長岡より、南線は前橋より起工することとなれり。本線は大正八年四月十四日、測量に着手し、同年十一月一日を以て、工事を起し、大正十年七月二十二日、高崎・澁川間竣工を告げ、七月一日開通式を擧行せり。其後工事完成するに從ひ、沼田・後閑等、運輸事務を開始す。

| （驛名） | （驛間距離） | （營業開始年月日） |
|---|---|---|
| 新前橋 | ― | 大正一〇、七、一 |
| 群馬總社 | 三、〇 | 同 |
| 八木原 | 三、五 | 同 |
| 澁川 | 二、一 | 同 |
| 敷島 | 三、九 | 大正一三、三、三一 |
| 岩本 | 五、六 | 同 |
| 沼田 | 三、一 | 同 |
| 後閑 | 三、二 | 一五、一一、二〇 |

## （へ）東武鐵道株式會社線

（埼玉縣界―伊勢崎。太田―相老。館林―栃木縣界。）

東武鐵道會社は明治二十八年の創立にして、明治三十二年四月起工、同三十五年九月には、淺草・川俣（埼玉縣）間を開通し、同四十年八月廿七日川俣・足利町間を開通せり。是れより先、本會社は栃木縣足利町・太田町・尾嶋・木崎・境を經て、日本鐵道株式會社線伊勢崎停車場に至る十八哩餘の延長免許を申請し明治四十一年一月

四日、本免許を受け、工事に着手し、明治四十二年二月十七日、足利・太田間、翌四十三年三月廿七日、太田・新伊勢崎間を開通せり。

太田・相老間は、元太田輕便鐵道株式會社の創設にて、大正二年一月買收契約を爲し、未成線笠懸・相老間の工事を施し、同年三月十九日、太田・相老間を全通せり。

館林・佐野間は、元佐野鐵道株式會社（明治四十年創立）の未成豫定線なるを、明治四十五年三月、東武鐵道株式會社が買收して、大正元年八月二日開通するに至れり。

東武本線（淺草・伊勢崎間）

| （驛名） | （驛間距離） | （運輸事務開始年月日） |
| --- | --- | --- |
| 川俣 | 埼玉縣境ヨリ 一、二 | 明治三六、四、二三 |
| 館林 | 二、六 | 同 四〇、八、二七 |
| 中野 | 栃木縣境へ 二、五 〇、三 | 同 |
| 太田 | 栃木縣境ヨリ 三、六 | 同 四二、二、一七 |
| 木崎 | 四、一 | 同 四三、三、二七 |
| 境町 | 三、二 | 同 |
| 剛志 | 二、二 | 同 |
| 新伊勢崎 | 二、一 | 同 |
| 伊勢崎 | 〇、七 | （前出） |

桐生線（太田・相老間）

| （驛名） | （驛間距離） | （運輸事務開始年月日） |
| --- | --- | --- |
| 太田 | ― | （前出） |
| 三枚橋 | 二、一 | 大正二、三、一九 |
| 治良門橋 | 一、六 | 同 |
| 藪塚 | 二、三 | 同 |
| 新桐生 | 三、一 | 同 |
| 相老 | 一、四 | |

佐野線（館林・葛生間）

| 館林 | （前出） | 栃木縣境 | 二、九 | 大正　三、八、二 |
|---|---|---|---|---|

（主として日本鐵道史に據る。）

## （下）　上信電氣鐵道會社線　（高崎・下仁田間）

上信鐵道會社はもと上野鐵道株式會社と稱し、明治二十六年十二月の創立にして、同廿八年十二月二十七日、本免狀下附せられ、同廿九年二月、會社の位置を高崎町に定め、同四月二十六日起工式を擧げ、明治三十年五月十日、高崎・福島間、同七月七日福島・南蛇井間、同九月十日南蛇井・下仁田間を開通し、同九月廿五日、全通式を擧行せり。爾來經營上、數次の苦境に沈淪したりしが、大正十年五月、始めて、省線と連帶運輸を開始し、會社內部の秩序を改め、同年八月、社名を上信電氣鐵道株式會社と變更し、且つ資本總額を増加し、以て鐵道電化改良の計畫を企圖せり。

| （停車場） | （距離） | （運輸事務開始年月日） | （停車場） | （距離） | （運輸事務開始年月日） |
|---|---|---|---|---|---|
| 高崎 | ― | 明治三〇、五、五 | 吉井 | 一、五 | 同　三〇、七、七 |
| 根小屋 | 二、三 | 大正一五、六、一 | 新屋 | 一、八 | 同　四四、八、二〇 |
| 山名 | 一、五 | 明治三〇、五、五 | 福島 | 一、二 | 同　三〇、九、一〇 |
| 馬庭 | 二、〇 | 同　四三、七、五 | 富岡 | 二、二 | 明治三〇、七、二 |

| 驛名 | 哩程 | 開業年月日 | 驛名 | 哩程 | 開業年月日 |
|---|---|---|---|---|---|
| 七日市 | 一、二 | 同 三〇、五、一〇 | 南蛇井 | 一、七 | 同 四五、五、一一 |
| 一ノ宮 | 〇、七 | 大正 四、七、二五 | 千平 | 一、一 | 同 三〇、七、七 |
| 神農原 | 一、五 | 明治三〇、五、一〇 | 下仁田 | 二、三 | 同 四三、一二、二五 |

（上信電氣鐵道株式會社調査。）

## （チ）草津電氣鐵道株式會社線

草津電氣鐵道會社は、もと草津株式會社と稱し、大正元年九月二十八日の創立なり。是より先き明治四十二年創立に着手したる、最初の起業目論見にては、起點は沓掛驛なりしが、測量の結果、技師の主張に依りて、輕井澤驛に變更したり。大正三年の春起工式を擧げ、小瀨驛までを第一期として、工事を終へ、大正四年七月開通し、後二箇年を經て、吾妻驛迄開通し、更に二箇年餘を經て、嬬戀驛まで延長せり。時に大正八年十一月なり。嬬戀驛より草津町迄は新道を開して、自働車を以て連絡を圖りたるが、大正　年、吾妻川電力會社が今井羽根尾に發電所を起工するに會し、此會社の後援を得て、社運頓に昂上し、會社の組織を改め、電氣鐵道會社に改め、資本金を一躍二百萬圓に増加し、嬬戀驛より草津町迄の開通を企て、大正十四年九月十七日より工を起し、一年を經て竣工、茲に輕井澤・草津間三十四

哩を全通せり。其各驛間距離と營業開始年月日とは左の如し。（草津電鐵創立功勞者黑岩忠四郎氏記事。）

| (驛名) | (驛間距離) | (運轉事務開始年月日) | (驛名) | (驛間距離) | (運轉事務開始年月日) |
|---|---|---|---|---|---|
| 新輕井澤 | — | 大正 四、七、二二 | 小代 | 二、五 | 大正一〇、一〇、一五 |
| 二度上 | 長野縣界より一、八 | 同 六、七、一九 | 嬬戀 | 二、八 | 同 八、一一、七 |
| 栗平 | 二、四 | 同 | 前口 | 七、三 | 同 一五、八、一四 |
| 地藏川 | 一、二 | 同 七、六、一五 | 草津 | 四、三 | 同 一五、九、一八 |
| 吾妻 | 一、六 | 同 六、七、一九 | | | |

## （リ）上州鐵道株式會社線

上州鐵道會社は、大正　年　月日の創立にして、邑樂郡館林町に起り、同郡小泉に終點を有す。その間十七哩なり。大正　年　月起工し、大正六年三月竣工せり。

| (驛名) | (驛間距離) | (營業開始年月日) | (驛名) | (驛間距離) | (營業開始年月日) |
|---|---|---|---|---|---|
| 館林 | — | 大正 六、三、一二 | 篠塚 | 一、三 | 同 |
| 本中野 | 三、八 | 同 | 小泉町 | 一、五 | 同 |

### （ヌ）　岩鼻輕便鐵道株式會社線

官線倉賀野驛より群馬郡綿貫まで一哩六分の敷設にして、大正六年四月二十八日營業を開始し專ら貨物の運輸に便せり。

## 二　軌道

本縣の鐵道が、今日の如く發達せざる時代に於て、之を補足し、平坦部は勿論、山間部の交通運輸に資したるは、この軌道にして、動力として電氣の利用未だ盛ならざる以前は、凡て馬匹を使用したり。今斯業發達の沿革竝に現在施設の概況を述べん。

抑も本縣の軌道は、明治二十年七月、碓氷馬車鐵道會社發企人等が、八萬五千圓の資本金を以て、横川・輕井澤兩驛連絡運輸の目的を以て、碓氷郡横川より、同郡坂本地内、信州境までの馬車鐵道敷設を出願し、同年十二月該許可を受け、更に翌廿一年五月、之を輕井澤に延長の許可を得、同年八月九日横川・坂本驛間、九月五日坂

本・國境間の運輸を開始したるを嚆矢とす。而して此鐵道馬車會社は明治二十六年、碓氷嶺に汽車開通の爲め、大なる打撃を被り、政府に之が買收方を請願せしも容れられず、已むなく明治二十六年四月、終に會社を解散せり。此會社に次ぎて敷設せられたるは、上毛馬車鐵道株式會社の前橋・澁川間にして、開業認可は明治二十三年七月十二日なり。次いで群馬馬車鐵道株式會社は、高崎・澁川間に、明治廿六年九月二日開業認可を受けたるが、此頃に至りて、縣下に軌道會社企業熱勃興し、廿六年より廿八九年に亙り、之が敷設を企て、特許を經たるもの少しとせず。其主なるものを表示すれば、左の如し。

| | |
|---|---|
| 澁川伊香保間 | 群馬馬車鐵道株式會社 |
| 太田・小島間 | 上武石材馬車鐵道株式會社 |
| 安中・富岡・下仁田間 | 甘樂馬車鐵道株式會社 |
| 伊勢崎・境間 | 佐位新田馬車鐵道株式會社 |
| 新田・藤岡・鬼石間 | 綠野馬車鐵道株式會社 |
| 高崎・板鼻・室田間 | 西毛馬車鐵道株式會社 |
| 澁川・中之條・草津間 | 吾妻鐵道株式會社 |

右の内實現したるは、澁川・伊香保間、新町・鬼石間、澁川・中之條間なり。而して新町・鬼石間は明治二十九年十月特許、明治三十一年四月十五日、先づ新町・藤岡間を開通し、藤岡・美九里、美九里・鬼石と順次に開通し、明治三十三年一月廿六日、全線を開通せり。後同會社を解散するに及び、軌道を廢せり。

前橋・澁川間の馬車鐵道會社は、前橋電氣軌道利根發電株式會社の經營に係り、明治四十三年十月九日、電力に變更し、高崎・澁川間は高崎水力電氣會社の經營に移り、明治四十年十一月二十日、電力に變更せり。澁川・伊香保間は、上毛電氣軌道會社（明治四十年六月特許）より、伊香保電氣軌道根式會社にて讓受け、明治四十三年十月十四日運輸を開始せり。

澁川・中之條間は、明治四十三年四月、吾妻軌道株式會社が特許を受け、明治四十五年七月十九日より、運輸を開始せり。大正十年電力に變更せり。

此他澁川・沼田間に利根軌道株式會社ありて、明治四十四年四月より、馬車鐵道を敷設し、同八月一日、全線の運輸を開始したるが、大正六年二月十六日、動力電氣に變更許可を受け、大正七年一月二十一日、運輸を開始せり。大正十三年三月、澁川・沼田間の上越線開通するに及び、之を廢せり。

## 第四項　諸車

### 一　馬車

本縣に於て旅客の爲めに馬車を使用したるは、明治四年八月認可の車にして、高崎・東京間に運輸馬車を開始したるを嚆矢とす。此出願は明治三年九月三日なれども、高崎藩に於て驛遞司に申議し、沿道關係地へ熟議を要したる爲、多大の日數を要したりしが如し。越えて明治六年六月、前橋より駒形・伊勢崎・境を經て、武州中瀨より熊谷に至る馬車會社も亦設立せられ、同年新町驛より富岡町に通ずる馬車道も亦開通し、翌七年七月には、高崎驛を中心として、高崎・本莊間、高崎・玉村間、高崎・松井田間の馬車營業も亦認可せられ、馬車の使用も次第に縣下に普及するに至れり。縣下に鐵道の敷設未だ洽からざる明治時代の前半に於ては、人力車と共に亦主要なる交通機關たりき。（統計表參照。）

## 二 人力車

人力車が發明せられたるは明治二年と云ひ、或は三年と云ひて明かならざれど、明治三年三月には、東京に營業官許せられたれば、三年以前たるは明かなり。本縣に於て始めて人力車營業を出願したるは、明治四年五月三日、縣下新田郡木崎宿なり。由りて岩鼻縣は願書を添へて、太政官に指令方を請ひたるに、伺の趣不取締無之樣心得べき事として聞屆けられたり。是れより人力車の營業は各地に起りたるものか。翌五年十一月十日には、高崎驛人力車營業者に令して、人力車業規則賃錢を注定申呈せしむ。越えて明治七年八月五日には、前橋町外九驛、陸運會社より人力車夫賃錢を確定せんことを、本縣に申請し來れり。明治八年一月頃、熊谷縣の調査によれば、上野國だけの分にても、人力車八百十五輛を算せり。其發達の著るしきを知るべし。

## 三　荷車

自家用は暫く措いて問はず、一般旅客の行李、貨物の運輸を目的として、營業を開始したるは、明治六年三月、東京・高崎間を以て始とす。其手續、挽夫は途中一泊挽通しにて往返す。一切夜行させず。途中護衞を附して、安全に到着する方法を取れり。

## 四　自轉車

自轉車の本縣に入りて、始めて使用せられたる時期は、之を詳にするに由なしといへども、明治十二年、本縣布達に之が取締に關する條文あるを以て、之を考ふれば、此頃既に使用せられたることを知るべし。

近頃各地ニ於テ自轉車ナル者ヲ使用候處、右ハ一箇ノ戯器ニ止リ、夫レガタメ行路ノ妨害ハ勿論、延テ危險ニ渉リ候テハ不都合ニ候。以來市街村落ヲ論ゼズ、渾テ輻湊ノ地竝ニ夜中使用候儀禁止候。此旨布達候事。（明治十二年十一月十一日、群馬縣布達第百五十一號。）

自轉車ノ儀ハ、人力車同樣課稅候條、此旨布達候事。明治十三年十月廿三日、同甲廿六號。

自轉車ノ儀ハ妨害ノミナラズ、危險ノ恐不少候條、妄リニ馳驅候ハ勿論、用辨ト雖モ、人民輻湊ノ場所、及夜中無燈ニテ往復候儀不相成候。此旨布達候事。明治十三年十一月十日、同第百二十六號。

是等に由つて之を考ふれば、當初は娛樂用・遊戲用とし、後に實用期に入りたるが如きも、其臺數の如き、餘りに數ふるに足らざりき。然るに明治三十二三年頃より、實用として乘用する者次第に多くなるに及び、明治三十三年九月十四日、縣令第七十八號を以て、自轉車取締規則を設けたるが、爾來年々其數を增加し、殆んど全縣下に普及し、山間部の傾斜道路地方に至るまで、盛に使用せられ、其數十萬に達せんとす。

## 五　自動車

本縣に於ける自動車使用の起原は詳ならず。然れども大正五年の諸車統計表に、荷積用二臺、乘用二臺と記載しあれば、此頃既に使用せられたるは明なり。

而して本縣が自動車取締令施行細則を發布したるは、大正八年三月二十四日なれば、當時相當に使用せられしを推知すべし。大正八年七月七日には、吾妻郡中之條町に四萬自動車會社を設立せられ、中之條・四萬間に運轉を開始したるは、蓋し本縣に於ける自動車會社の嚆矢ならん。本縣廳にては、荷積用として大正九年六月、乘用として大正十年六月、自動車を購入使用したり。勿論發達の初期に於ては、主として乘用なりしが、其後荷積用も次第にその數を增し、路面の修築改良と共に、愈使用盛となり、交通上に一革新を起せり。

諸車統計表

| （年　年） | （馬車）（乘用） | （荷積用） | （牛車） | （荷車） | （自動車）（乘用） | （荷積用） | （人力車） | （自轉車）（自動） | （普通） | （計） |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 明治十三年 | 一五〇 | ― | 五四 | 一九、五七〇 | ― | ― | 四、九二三 | ― | ― | 二四、六九七 |
| 同　二十年 | 一三三 | 一、〇五〇 | 一三 | 一三、七六二 | ― | ― | 一、九八二 | ― | ― | 一六、九四〇 |
| 同　三十年 | 五八 | 一、九七八 | 六 | 二四、二五九 | ― | ― | 二、二三八 | ― | ― | 二八、五三九 |
| 同　四十年 | 二一六 | 二、二〇七 | 六 | 二七、八五七 | ― | ― | 一、九五四 | ― | ― | 三二、〇四〇 |
| 大正　五年 | 一三七 | 二、八五七 | 一 | 三八、九〇〇 | 二 | 二 | 一、三四六 | 二四 | 一九、一四二 | 五七、四〇一 |
| 同　十三年 | 五〇 | 四、一六九 | 一三九 | 四九、五〇九 | 一三三 | 八六 | 一、四〇三 | 一六三 | 八五、〇九三 | 一四〇、七四三 |

郵便の創始

# 第五項　通信

## 一　郵便

本縣の郵便は、明治五年三月、政府が東京より北海道・北陸道線路に郵便開始の擧を企て、大藏省驛遞寮より、其準備の爲め、官吏を派遣し、實地調査をなさしめたるに、其端を發せり。同年四月、大藏省の令達により、縣職員中より、府縣郵便御用掛を命じ、驛遞寮の示諭に因りて、管內各地の郵便取扱所を監督して、能く其所務を勤めしむるの事を掌らしむ。次いで六月十四日、來る七月一日より全國一般郵便法施行に決定に就き、施設標準の要旨を、驛遞寮より本縣に照會あり。此時に於て本縣下に開始せられたる郵便取扱所は左の如し。

前橋　高崎　桐生　館林　川俣　木崎　伊勢崎　境　藤岡
新町　吉井　萬場　富岡　下仁田　安中　松井田　横川　中之條
中山　草津　沼田　猿ヶ京　布施　金古　澁川　倉賀野

なり。明治六年、政府は郵便規則を改正し、尚郵便便利擴張の爲め、驛遞寮より本

縣に官吏を派遣し、其實際に就き調査し、翌七年一日より改正實施せり。又郵便取扱所を縣下各地に増設し、明治八年には、（東毛三郡を除く、）四十八箇所なり。之を等級に從つて表示すれば、

三等局　高崎　前橋
四等局　下仁田　富岡　安中　伊勢崎　沼田
五等局　岩鼻　倉賀野　金古　澁川　中山　三ノ倉　白井　箕輪
伊香保　川浦　神山　坂本　原市　板鼻　松井田　中之條
澤渡　草津　布施　永井　大前　長野原　大戸　溝呂木
大胡　駒形　境町　玉村　新町　藤岡　鬼石　神ヶ原
小幡　一ノ萱　砥澤　萬場　湯原　高平　月夜野

の四十八局なり。而して郵便事務は廢藩置縣後、縣廳内庶務課驛遞掛の掌る所にして、局所の存廢の如きも、地方官に一任して、中央政府は敢て干渉することなかりしが、隨つて濫設の弊を生じたるを以て、明治十六年、郵便條例の制定と共に、監督方法を變更し、從來地方官の掌中にありし事務を擧げて、驛遞局の直轄となし、全國を五十二の驛遞區とし、驛遞區を劃して郵便區とし、毎驛遞區に一驛遞出

局を設け、毎郵便區に郵便局をおき、驛遞出張局をして、其驛遞區内の郵便局を管理し、郵便局をして、其の郵便區内の郵便受取所及び切手賣下を管理せしむ。此時に本縣の驛遞出張局は、高崎郵便局なりき。此改正より、驛遞事務は府縣廳の手を離れて發達したり。各郵便局事務開始年月日表參照。

## 二 電信

本縣に初めて電信の架設せられたる事は、明治十年十月十五日、東京・高崎間、高崎・前橋間を嚆矢とす。此架設に就いて、縣より左の布達を發し、縣民の注意を促せり。

電信架設ニツキ心得方布達 (明治十年七月十六日甲第三十四號)

今般東京ヨリ中山道高崎驛迄、尚同驛ヨリ前橋町迄、電信架設相成、上野地方官民ノ便ヲ得ル不少、衆庶ノ幸福ヲ待タズ。然ルニ右電線電柱及陶器ヲ破壞ス等、障害ヲナス者モ有之哉ニ相聞エ、實ニ不相濟事ニ候。右電信ニ就テハ、明治七年九月、第九十八號別紙條例ノ旨モ有之、人民輕忽ニ相心得、意外ノ重罰ヲ受クル者有之候テ

ハ慨然ノ至リニ付キ、右條例ヲ熟視シ、電線沿道ハ勿論、一般人民ニ於テモ、決シテ心得違無之樣、幼童ニ至ル迄懇篤ニ告諭可致依之更ニ條例相添、此旨布達候事。（條例略）

## 三　電話

本縣内に於ける電話は明治三十九年、本縣廳と縣下各警察署、及び各郡役所間に架設したるを嚆矢とす。是れより先、明治二十八年八月、本縣にては縣治上及び經濟上の利便を圖り、縣治上の敏活を期する爲めに、電話架設を企て、金壹萬四千百五十圓の豫算を計上し、明治二十八年十一月の通常縣會に提案し、可決を經、翌二十九年四月二十八日、遞信省に架設認可を申請し、同五月二十三日、認可の指令に接し、六月八日を以て架設工事に着手したり。架設に就いても、遞信省より本縣の乞に應じて、技師を派遣し、之が工事を監督せしめたり。明治二十九年八月、電話使用手續規定を設け、完成の箇所より順次に開通せり。

公衆電話は明治三十五年八月一日、前橋市曲輪町に電話交換局を置き、前橋電話交換局と稱し、電話に關する事務を開始し、翌三十六年四月、官制改革の結果、郵

局に合併せられたる後は、宇都宮郵便局前橋電話建築官の派遣駐在となり、之が架設業務に從事し、明治三十六年七月一日を以て、電話交換事務を開始せり。縣下の電話交換業務は、是より始まれり。その後に於ける發達の狀況は、左表を參照せらるべし。

（群馬縣三等郵便局長協議會調査報告に據る。）

## 四　縣内各郵便局事務開始年月日表

| （局名） | （所在地）（郡市） | （町村） | （通常郵便） | （小包郵便） | （電信）（和文）（歐文） | （電話） | （爲替）（內國） | （外國） | （貯金） |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 前橋 | 前橋市 | 曲輪町 | 明治 五、七、一 | 明治 三六、三、三一 | 明治 一〇、一〇、一五 | 明治 三六、七、一 | 明治 九、三、一六 | 明治 一八、一〇、一 | 明治 一三、二 |
| 同横山町（二） | 同 | 横山町 | 同 二八、一一、二三 | 同 二九、七、一 | 同 四三、三、六 | 大正 二、一、二二 | 同 二八、一一、二三 | 同 二八、四、一 | 同 二八、一一、二三 |
| 同本町 | 同 | 本町 | 同 三五、三、一〇 | 同 三五、三、一〇 | 大正、六、三、二六 | 大正 一三、 | 同 三五、三、一〇 | — | 同 三五、三、一〇 |
| 同細ケ澤 | 同 | 細ケ澤町 | 同 三八、四、一 | 同上 | — | — | 同 三八、四、一 | — | 同 三八、四、一 |
| 同新町 | 同 | 新町 | 同 四一、二、六 | 同上 | — | — | 同 四一、二、六 | — | 同 四一、二、六 |
| 同諏訪町 | 同 | 諏訪町 | 大正 一四、七、二六 | 同上 | — | — | 大正 一四、七、二七 | — | 大正 一四、七、二七 |
| 高崎 | 高崎市 | 連雀町 | 明治 六、二、一 | 同 二六、一二、二一 | 明治 一〇、一〇、一五 同 一八、一〇、一 | 同 二九・一二、二七 | 明治 七、一二、九 | 同 一八、一〇、一 | 明治 七、一二、九 |
| 同相生町（三） | 同 | 相生町 | 同 一五、四、一 | 同 三〇、一〇、一 | 同 三六、三、三一 | 同 四二、一〇、一 | 同 三〇、一〇、一 | 同上 | 同上 |
| 同新紺屋町 | 同 | 新紺屋町 | 同 三六、一二、一〇 | 同上 | — | 大正 二、一、二二 | 同 三六、一二、一〇 | — | 同 三六、一二、一〇 |
| 同南町 | 同 | 南町 | 同 三九、三、二三 | 同上 | 同上 | — | 同 三九、三、二三 | — | 同 三九、三、二三 |

| | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 桐生 | 桐生市 | 桐生 | 明治五、七、一 | 明治六、六、六 | 明治二六、三、二六 | 明治四〇、三、三一 | 明治八、一、一 | 明治一八、一〇、一 | 明治一三、三、二五 |
| 同新宿 | 桐生市 | 桐生新宿 | 同三五、一二、二六 | 同上 | — | — | 同三五、一二、二六 | 同四一、四、一 | 同三五、一二、二六 |
| 同末廣町 | 桐生市 | 末廣町 | 大正一五、九、一 | 同上 | — | — | 大正一五、九、一 | — | 大正一五、九、一 |
| 大間々 | 山田郡 | 大間々町 | 明治六、七、一 | 明治二六、七、一 | 明治二五、一二、五 | 明治四三、一二、一六 | 明治一七、七、一七 | 同二五、六、三〇 | 明治一七、七、二八 |
| 龍舞 | 山田郡 | 休泊村 | 同四一、三、六 | 同上 | 大正九、八、一二 | 大正九、八、一二 | 同四一、三、六 | — | 同四一、三、六 |
| 館林 | 邑樂郡 | 館林町 | 同五、七、一 | 同二六、七、一 | 明治二二、二、六 | 明治四三、三、一 | 同一三、八、一 | 同二五、七、一 | 同一三、三、二五 |
| 川俣 | 邑樂郡 | 佐貫村 | 同五、七、二 | 同三三、二、一 | — | — | 同二五、五、二六 | — | 同一八、一〇、一 |
| 小泉 | 邑樂郡 | 小泉町 | 同九、六、一 | 同三二、一、一 | 同二七、一、一六 | 同四四、三、二三 | 同三三、四、一 | 同三三、一、一 | 同上 |
| 中野 | 邑樂郡 | 中野村 | 同三五、二、五 | 同上 | 大正七、五、一 | 同上 | 同三五、二、五 | 同上 | 同上 |
| 赤岩 | 邑樂郡 | 永樂村 | 同三五、三、一〇 | 同上 | — | — | 同三五、三、一〇 | 同二八、四、一 | 同三五、三、一〇 |
| 板倉 | 邑樂郡 | 伊奈良村 | 同九、六、一 | 同三三、三、一 | — | — | 同三三、二、一 | — | 同一八、六、二五 |
| 太田 | 新田郡 | 太田町 | 同五、七、一 | 同二九、七、一 | 明治三三、九、一 | 同四三、一、一六 | 同一一、三、二五 | 同二五、七、一 | 同一三、三、二五 |
| 本町 | 新田郡 | 藪塚本町 | 同九、六、一 | 同三三、三、一 | 大正一四、四、一三 | 同上 | 同三三、四、一 | 同三三、四、一 | 同一八、一〇、一 |
| 強戸 | 新田郡 | 強戸村 | 大正五、九、二六 | 同上 | — | — | 大正五、九、二六 | — | 大正五、九、二六 |
| 生品 | 新田郡 | 生品村 | 同七、六、二 | 同上 | — | — | 同七、六、二 | — | 同七、六、二 |
| 尾島 | 新田郡 | 尾島町 | 明治九、六、一 | 同三三、三、一 | 明治三三、一二、一二 | 同四四、三、六 | 明治二九、七、一 | 同上 | 同上 |
| 木崎 | 新田郡 | 木崎町 | 同五、七、一 | 同三三、二、一 | — | — | 同一四、一二、一 | — | 明治一六、五、一六 |
| 世良田 | 新田郡 | 世良田村 | 同四一、二、六 | 同上 | — | — | 同四一、二、六 | — | 同四一、二、六 |
| 伊勢崎 | 佐 | 伊勢崎町 | 同五、七、一 | 同二六、二、二六 | 同一五、一二、一七<br>同三五、五、一 | 同四〇、三、三一 | 明治一三、八、一 | 同上 | 同一三、三、一六 |

| | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 境 | 波郡 | 境町 | 同　五、七、一 | 同　二五、一一、一六 | 同　二九、三、二六 | 同　四四、三、六 | 同　一六、五、一六 | 同　二五、七、一〇 | 同　一六、五、一六 |
| 島村 | 波郡 | 島村 | 同　一〇、七、一六 | 同　三一、三、一 | 同　四四、二、二六 | ― | 同　三二、一一、一 | 同　四一、三、一 | 同　三三、一、四 |
| 玉村 | 波郡 | 玉村町 | 同　六、七、一 | 同　二九、一一、一六 | 同　三六、三、六 | ― | 明治　一六、五、一六 | ― | 同　一六、五、一六 |
| 國定 | 波郡 | 東村 | 同　四三、三、二六 | 上 | 大正　九、六、二六 | 同　上 | 明治　四三、三、二六 | 同　上 | 同　上 |
| 藤岡 | 多野郡 | 藤岡町 | 同　五、七、一 | 同　二六、六、一 | 同　二七、三、一　同前 | 同　四一、一、二六 | 同　一三、八、一 | 同　二八、一、一 | 同　一三、五、二五 |
| 新町 | 多野郡 | 新町 | 上 | 同　二六、六、一 | 大正　三、一二、二六 | 大正　三、一二、二六 | 同　三三、四、一 | 同　上 | 同　一九、一、一 |
| 金井 | 多野郡 | 日野村 | 同　四三、三、二六 | 上 | ― | ― | 同　四三、三、二六 | 同　上 | 同　上 |
| 鬼石 | 多野郡 | 鬼石村 | 同　六、五、二九 | 同　二九、一一、一六 | 明治　三〇、五、二六 | 明治　四四、三、一六 | 同　三三、四、一 | 同　三五、七、一〇 | 同　一八、六、一 |
| 吉井 | 多野郡 | 吉井町 | 同　五、七、一 | 上 | 明治　三五、一、一二 | 同　四一、四、一二 | 同　上 | 同　二五、四、一 | 同　一八、三、二五 |
| 萬場 | 多野郡 | 萬場町 | 同　六、七、一 | 上 | 同　四一、三、二六 | ― | 同　二一、五、一 | 同　三一、一、一 | 同　一八、一〇、一 |
| 楢原 | 多野郡 | 上野村 | 同　一三、三、三 | 同　三二、七、一 | ― | ― | 同　三三、一二、一六 | ― | 同　三三、三、一 |
| 平原（四） | 多野郡 | 上野村 | 同　一九、三、一 | 上 | ― | ― | 同　二一、三、一 | ― | 同　二一、五、一 |
| 新羽 | 多野郡 | 上野村 | 同　三九、一〇、一 | 上 | ― | ― | 同　三九、一〇、一 | ― | 同　三九、一〇、一 |
| 富岡 | 北甘樂郡 | 富岡町 | 同　五、七、一 | 同　二六、六、一 | 同　三五、一二、一六　同　二〇、九、一 | 同　四一、四、一二 | 同　八、一〇、三 | 同　三三、一〇、一六 | 同　一三、二、二五 |
| 下仁田 | 北甘樂郡 | 下仁田町 | 上 | 同　二九、七、一 | 同　三〇、五、二六 | 同　上 | 同　一三、一二、一六 | ? | 同　一四、五、一 |
| 砥澤 | 北甘樂郡 | 尾澤村 | 同　七、一、二九 | 同　三二、七、一 | ― | ― | 同　三三、一一、一 | ― | 同　一八、一〇、一 |
| 本宿 | 北甘樂郡 | 西牧村 | 同　一〇、五、一 | 同　四二、七、一 | 大正　一〇、六、一 | 大正　一〇、六、一 | 同　二九、七、一 | ― | 同　一八、一〇、一 |
| 磐戸 | 北甘樂郡 | 磐戸村 | 同　一三、四、一六 | 同　三二、―、 | 明治　四五、一、一二 | 同　一三、三、一二 | 同　二六、四、一 | ― | 同　上 |
| 小幡 | 北甘樂郡 | 小幡村 | 同　三五、一二、一六 | 上 | ― | ― | 同　三五、一二、一六 | 同　上 | 同　上 |

| | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 一ノ宮 | 碓氷郡 | 一ノ宮町 | 明治 二四、三、一〇 | 明治 三三、七、一 | 明治 四四、一〇、三一 | 明治 四三、三、二一 | 明治 三四、三、一〇 | 明治 二三、一〇、一六 | 明治 一八、一〇、一 |
| 安中 | 碓氷郡 | 安中町 | 同 五、七、一 | 同 二六、六、一 | 同 二六、一、三一 | 同 四一、四、二一 | 同 一二、八、一 | 同 二五、七、一〇 | 同 一三、五、一五 |
| 板鼻 | 碓氷郡 | 板鼻町 | 同 一四、二、一 | 同 三三、二、一 | — | — | 同 三三、一二、一五 | 同 上 | 同 一八、六、一五 |
| 横川(五) | 碓氷郡 | 臼井町 | 同 五、七、一 | 同 二六、七、一 | 大正 九、五、三一 | 大正 九、五、三一 | 同 三五、四、一 | 同 二八、一〇、一 | 同 一八、一〇、一 |
| 松井田 | 碓氷郡 | 松井田町 | 同 五、七、一 | 同 二九、七、一 | 明治 三三、一二、二六 | 同 四四、三、三一 | 同 二六、五、一 | 同 二五、七、一 | 同 一六、五、一 |
| 磯部 | 碓氷郡 | 磯部村 | 同 一九、五、一 | 同 二六、六、一 | 同 四一、六、二六 | 同 四三、一二、三一 | 同 二一、五、一 | 同 二五、七、一 | 同 二一、五、一 |
| 原市 | 碓氷郡 | 原市町 | 同 三〇、八、二一 | 同 三一、一、一 | 同 三〇、八、二一 | 同 四一、四、二一 | 同 三〇、八、二一 | — | 同 三〇、八、二一 |
| 豐岡 | 碓氷郡 | 豐岡村 | 大正 一〇、五、一六 | 同 上 | — | — | 大正 一〇、五、一六 | — | 大正 一〇、五、一六 |
| 中之條 | 吾妻郡 | 中之條町 | 明治 五、七、一 | 同 二六、七、一 | 同 三〇、三、二六<br>同 四一、一二、二六 | 同 四三、六、一 | 同 一二、八、一 | 同 二五、七、一 | 同 一四、一〇、一五 |
| 高山(六) | 吾妻郡 | 高山村 | 同 五、六、一 | 同 二三、一〇、一 | 同 四四、一〇、三一 | 同 四四、三、六 | 同 二三、三、一六 | — | 明治 二三、三、一 |
| 澤渡 | 吾妻郡 | 澤渡村 | 同 六、七、一 | 同 二九、一二、一六 | 同 四五、二、一 | 大正 一〇、七、二一 | 同 二七、一、一 | 同 上 | 同 上 |
| 四萬 | 吾妻郡 | 澤田村 | 同 一〇、七、一 | 同 二九、一二、一六 | 同 上 | 大正 一一、七、二一 | 同 二六、四、一 | 同 上 | 同 上 |
| 箱島 | 吾妻郡 | 東村 | 同 一九、三、一三 | 同 三三、二、一 | 大正 四、七、一六 | 明治 四四、三、六 | 同 三三、一一、一 | 同 上 | 同 三三、三、一 |
| 原町(七) | 吾妻郡 | 原町 | 同 六、七、一<br>同 二四、二、一 | 同 二四、二、一 | 同 四三、三、二一 | 同 四三、六、一 | 同 二四、三、一 | 同 上 | 同 上 |
| 岩下 | 吾妻郡 | 岩島村 | 同 一三、四、一六 | 同 三三、一〇、三一 | 大正 四、七、一六 | 明治 四四、三、六 | 同 二五、三、一 | 同 二五、七、一〇 | 同 一八、一〇、一 |
| 大戸 | 吾妻郡 | 坂上村 | 同 六、七、一 | 同 三三、二、一 | 大正 四、七、一六 | 明治 四四、三、六 | 同 三三、一二、一六 | — | 同 一九、一二、一六 |
| 長野原 | 吾妻郡 | 長野原町 | 同 六、七、一 | 同 二九、七、一 | 同 四〇、三、三一 | 同 四三、六、一 | 同 二五、三、一 | — | 同 一八、一〇、一 |
| 應桑 | 吾妻郡 | 長野原町 | 同 一三、六、一 | 同 三三、七、一 | 大正 一三、一〇、一 | 大正 一三、一〇、一 | 明治 三三、一二、一六 | 同 二五、一、一 | 同 三三、一、一 |
| 大笹 | 吾妻郡 | 嬬戀村 | 明治 一三、四、一六 | 同 三三、七、一 | 大正 元、一〇、二一 | 同 四四、三、六 | 同 二九、一〇、一六 | — | 同 二九、一〇、一六 |

| 局名 | 郡 | 所在地 | (4) | (5) | (6) | (7) | (8) | (9) | (10) |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 三原 | | 嬬恋村 | 同 一三、四、一三 | 同 三三、七、一 | 大正 一三、一〇、一 | 同 上 | 同 三二、一一、一 | — | 同 三二、一一、一 |
| 草津 | | 草津村 | 同 五、七、一 | 同 二六、七、一 | 同 三〇、四、二二<br>同 四四、七、六 | 同 四三?、六、一 | 同 一六、五、一六 | 同 三〇、五、二七 | 同 一六、五、一六 |
| 川原湯（八） | | 長野原町 | 同 一三、四、一六 | 同 三三、三、一 | 大正 一一、三、二六 | 同 上 | 同 三三、三、一 | — | 同 三二、一一、一六 |
| 沼田 | 利根郡 | 沼田町 | 同 五、七、一 | 同 二六、七、一 | 同 二六、三、一 | 同 四一、四、二一 | 同 八、一〇、二 | 同 三五、六、二三 | 同 三三、三、二五 |
| 猿ヶ京（九） | | 新治村 | 同 五、七、一 | 同 二九、七、二一 | 大正 一四、七、二一 | 同 上 | 同 二九、一〇、一六 | 同 上 | 同 一八、一〇、一 |
| 布施 | | 新治村 | 同 五、五?、一 | 同 二九、七、一 | 大正 一四、七、一 | 大正 一四、一二、一 | 同 三三、四、一 | 同 四〇、一〇、一 | 同 一八、一〇、一 |
| 高平 | | 高平村 | 同 五、七、一〇 | 同 三二、三、一 | — | — | 同 三二、一一、一六 | — | 同 三二、一一、一六 |
| 湯原 | | 水上村 | 同 六、七、一 | 同 三三、二、一 | — | — | 同 三三、三、一六 | 同 上 | 同 一八、六、一五 |
| 月夜野 | | 桃野村 | 同 六、五、二九 | 同 三三、三、一 | 同 四四、一二、二六 | 同 上 | 同 三二、四、一 | — | 同 一八、一〇、一 |
| 眞庭 | | 古馬牧村 | 同 三六、三、一〇 | 同 上 | 同 四四、一二、二六 | 同 上 | 同 三四、三、一〇 | 同 上 | 同 上 |
| 上牧 | | 古馬牧村 | 同 一三、三、三〇 | 同 三三、二、一 | — | — | 同 三二、一二、一六 | 同 四〇、一〇、一 | 同 三二、一、一 |
| 追貝 | | 追貝村 | 同 八、六、二六 | 同 三三、七、一 | — | — | 同 三五、五、六 | — | 同 一八、一〇、一 |
| 湯檜曾 | | 水上村 | 同 一四、一二、一 | 同 三三、七、一 | — | — | 同 三三、三、一 | — | 同 三三、二、一 |
| 片品 | | 片品村 | 同 四三、三、三〇 | 同 上 | — | — | 同 四三、三、三〇 | — | 同 四三、三、三〇 |
| 川場 | | 川場村 | 大正 一三、五、一六 | 同 上 | — | — | 大正 一三、五、一六 | — | 大正 一三、五、一六 |
| 伊香保 | 群 | 伊香保町 | 明治 七、一二、一 | 同 二六、六、一 | 同 上<br>同 二〇、七、一 | 同 三九、八、二一 | 同 一六、五、一六 | 同 二〇、七、一 | 明治 一六、五、一六 |
| 金古 | | 金古町 | 同 五、七、一 | 同 三三、一二、一 | 大正 一〇、六、一六 | 同 上 | 同 三三、七、一 | 同 三四、四、一 | 同 一八、六、二五 |
| 澁川 | | 澁川町 | 同 五、七、一 | 同 二六、七、一 | 同 二六、三、一<br>大正 一〇、三、二六 | 明治 三九、八、二一 | 同 一三、三、一 | 同 二六、五、一 | 同 一三、一、一六 |
| 倉賀野 | | 倉賀野町 | 同 五、七、一 | 同 二九、七、一 | 大正 七、一三、三 | 同 上 | 明治 一六、五、一六 | 同 三四、四、一 | 同 一六、五、一六 |

| | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 岩鼻 | 群馬郡 | 岩鼻村 | 明治一八、一〇、一 | 明治三三、三、一 | — | — | 明治三二、一二、二六 | — | 明治一八、一〇、一 |
| 三ノ倉 | 群馬郡 | 倉田村 | 同六、七、一 | 同三三、三、一七 | 大正一〇、七、一 | 大正一〇、七、一 | 同二七、一、一 | — | 同一八、一〇、五 |
| 箕輪（一〇） | 群馬郡 | 箕輪町 | 同七、一、一六 | 同三三、七、一 | 同一〇、六、二六 | 同一〇、六、二六 | 同三〇、五、一 | — | 同一八、一〇、一 |
| 室田 | 群馬郡 | 室田町 | 同一〇、四、一 | 同三三、一二、一 | 明治四三、三、二一 | 明治四三、二、一 | 同三三、四、一 | 同上 | 同一八、一〇、一 |
| 總社 | 群馬郡 | 總社町 | 同三七、三、一五 | | — | — | 同三七、三、一五 | — | 同三七、三、一五 |
| 元總社 | 群馬郡 | 元總社村 | 大正一〇、四、一六 | 同上 | — | — | 大正一〇、四、一六 | — | 大正一〇、四、一六 |
| 北牧 | 群馬郡 | 長尾村 | 明治三四、三、一〇 | 同上 | — | — | 明治三四、三、一〇 | — | 明治三四、三、一〇 |
| 大胡 | 勢多郡 | 大胡町 | 同六、七、一 | 同二九、一、一六 | 明治四三、一二、二六 | 大正一三、三、二六 | 同二四、一二、一 | — | 同一八、一〇、一 |
| 粕川 | 勢多郡 | 粕川村 | 大正一四、五、二六 | 同上 | — | — | 大正一四、五、二六 | — | 大正一四、五、二六 |
| 駒形 | 勢多郡 | 木瀨村 | 明治八、四、一四 | 同二九、七、一 | 同四〇、一二、一六 | 同四三、二、一 | 明治二九、五、一 | — | 明治二九、五、一 |
| 花輪 | 勢多郡 | 東村 | 同九、五、一 | 同三三、一二、一 | — | — | 同三三、四、一 | 同上 | 同三三、四、一 |
| 澤入 | 勢多郡 | 東村 | 同四三、七、一 | 同上 | — | — | 同四三、七、一 | 同上 | 同上 |
| 小暮 | 勢多郡 | 富士見村 | 同一五、五、二一 | 同三三、七、一 | — | — | 同三三、一二、二六 | | 同一八、一〇、一 |
| 敷島（一一） | 勢多郡 | 敷島村 | 同一九、三、二一 | 同二九、七、一 | — | — | 同二九、一二、二六 | 同上 | 同上 |

〔註〕

（一）舊桑町局　（二）舊田町局　（三）元新田町局　（四）元新羽局

（五）元坂本局　（六）元中山局　（七）十八年一旦廢止（八）元川原畑局

（九）元永井局　（一〇）元上芝村局　（一一）元棚下局

# 第二節　治水

## 第一項　總説

本縣は利根川の幹川、及び其支川の水源地域を有し、是等大小幾多の河川の流下する地方、概ね急傾斜なるを以て、一朝大雨に際會せんか、忽ち河水の氾濫甚しく、其慘害を被ること、古來其數を知らず。其損害の莫大なる、實に驚くべきものあり。内務省土木局の調査によれば、洪水の週期は、十年に約一回の割合なりと云ふ。之れを本縣の記録に徴するに、明治二十年代にては明治二十三年八月二十三日、明治二十九年九月十一日の二回、同三十年代にては、三十年九月九日、同三十一年九月六日、同三十九年七月十六日の三回、同四十年代にては、四十年八月廿五日、同四十三年八月十一日の二回なり。左に縣廳調査の増水量を示さん。

| (河川測量地) | (明治三〇・九・九) 年月日 | (同三一・九・六) | (同三九・七・一六) | (同四〇・八・二五) | (同四三・八・一一) |
|---|---|---|---|---|---|
| 利根川筋縣廳裏 | 一四、〇尺 | 二三、〇尺 | 二三、〇尺 | 一〇、二尺 | 二〇、〇尺 |
| 渡良瀬川筋(邑樂郡下早川田) | 一七、九 | 一九、二 | 二〇、七 | 一九、九五 | 二〇、〇 |
| 烏川筋(高崎市) | 七、五 | 一〇、五 | 八、七 | 六、二 | 一二、七 |

就中近年最も大なる慘害を及ぼしたるは、明治四十三年八月十一日の大洪水なり。其被害總計を擧ぐれば左の如し。

浸水面積田畑約二萬町歩。農作物損害額約三百萬圓。秋蠶損害額約二百萬圓。流亡湮沒地約三千五百町歩。浸水家屋二六、七九六戸。内床上浸水一五、六六九戸。床下浸水一一、一二七戸。居宅流失七六九戸。全潰四二一戸。半潰四五六戸。破損一三八五戸。變死者二八〇名。内溺死一二九人。壓死一五一人。（行衞不明二四名。）

尚近年に於ける水産關係費額の明瞭せる分は左の如し。

自明治三十七年度至大正二年度　水害損失額調

| （年度別） | （明治卅七年度） | （同三十八年度） | （同三十九年度） | （同四十年度） | （同四十一年度） | （同四十二年度） | （同四十三年度） | （同四十四年度） | （大正元年度） | （大正二年度） |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 金額 | 九七、九四六圓 | 三〇、七三五圓 | 二、八三〇、四四四圓 | 三、六二八、三五四圓 | 六五、〇四八圓 | 一六八、一〇三圓 | 二、九一七、四九五圓 | 八〇八、五八七圓 | 三七、八三六圓 | 五一〇、〇四三圓 |

自明治四十年度至大正五年度　十年間河川費決算調

| （年度） | （明治四十年） | （同四十一年度） | （同四十二年度） | （同四十三年度） | （同四十四年度） | （大正元年度） | （大正二年度） | （大正三年度） | （大正四年度） | （大正五年度） |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 本縣工事費 | 六〇三、四一三圓 | 七七八、〇七三圓 | 一二四、三一七圓 | 七九三、九九三圓 | 一、九五五、八一六圓 | 一一一、九〇〇圓 | 一二五、五六八圓 | 三〇〇、〇〇〇圓 | 六三二、七三三圓 | 一二六、〇七〇圓 |
| 内務省直轄工事ニ係ル本縣負擔額 | — | — | 六一、九〇〇 | 九〇、九〇〇 | 九〇九、〇〇〇 | 一二三、〇〇〇 | 一三六、〇〇〇 | 一三六、〇〇〇 | 一四八、三〇〇 | 一五二、〇〇〇 |
| （合計） | 六〇三、四一三 | 七七八、〇七三 | 一八六、二一七 | 八八四、八九三 | 二、八六四、八一六 | 二三四、九〇〇 | 二六一、五六八 | 四三六、〇〇〇 | 七八一、〇三三 | 二七八、〇七〇 |

以上は數量に表はれたる或期間の被害關係額を擧げたるに過ぎず。此他明治卅三年八月廿三日の大洪水に端を發したる、所謂足尾鑛毒被害問題に至りては、一時不祥事件まで惹起し、三十有餘年後の今日、全然解決せられたりと云ふべからず。渡良瀨川の河川改修の豫定工事は殆ど完了し、足尾鑛山に於て鑛毒流出防止の設備は成れりと雖ども、問題は殘されて最近年々の縣會の問題に表はる。洪水の被害それ斯の如く甚大なるものなれば、本縣治水事業の良否は、直接縣民の利害休戚に關するは勿論、施て國運の隆替に影響する所亦鮮少に非るなり。

## 第二項　治水に關する施設

### 一　通　説

本縣にては明治六年九月、堤防取締規則を設け、治水に關する方針を示せり。曰く、

豫メ持場ヲ定メ、治水堤防ニ關スルノ規則ヲ守リ、時ニ巡回水路ノ利害、堤防ノ得失、詳案縣官ニ稟議スベシ。若シ損所等アレバ、些少ノ廉ハ速ニ補繕ヲ加ヘ、大破ニ

至ラザラシムベク、大ナルハ急ニ報告ス。出水ノ際ニ當テハ、水防一般ノ事務ヲ擔當シ、正副戸長其筋熟練ノ者ト協力、崩潰セザランコトヲ勉メ、若シ誤アレバ其責ニ任ジ、鄰保相助ケ、各區組合ハ勿論、管轄自他内外等都テ彼我ノ別ナク專ラ戮力、平素ト雖モ治水ノ術ハ素ヨリ、間隔ノ弊ナク、協議勉勵スルヲ緊要トス。（群馬縣史稿第三熊谷縣第一課職制。）

越えて明治十一年五月、正副區戸長に宛て、堤防・川除等、損害致さざる樣の注意方の布達をなせり。明治十四年より、五箇年繼續事業を以て、群馬郡白川流域に對し、石堰堤・土堰堤・積苗工・植樹・石垣工等の方法により、砂防工事を施行したることありしが、こは内務省第一土木監督署に於て行ひたるにて、本縣としては、根本的治水方法に就いて、完全なる企劃を見るに至らざりき。然るに政府は明治二十九年、法律第七十一號を以て、河川法を布き、河川工事を施行し、水行を便にし、以て河川の氾濫を防ぐと共に、翌三十年には法律第二十九號砂防法を公布し、治水上必要なる砂防の設備をなし、又は治水上砂防の爲め、一定の行爲を禁止、若くは制限することに關し、詳細なる規定を設け、又同年法律第四十六號を以て、森林法を公布し、この二法を以て、治水の要諦とせらるる治山の方法を示し、國の治水方針を明示し、着々實施するに至りしかば、本縣も亦法令の下に施設する所ありき。

明治四十年度より、四十二年度に至る、三箇年繼續事業として、縣費一萬二千五百九十六圓を支出し、國土保安治水の關係より保安林調査を行ひ、翌四十一年八月、管內測候所規程を定め、其中に四萬・室田・神川の三觀測所は、毎年五月一日より、十月三十一日までの期間、降雨量一日三〇粍以上の場合には、電報を以て前橋測候所に報告せしめ、水害豫防に對する準備を講ずる等、施設する所ありしが、明治四十三年八月の大洪水は深く本縣民の治水思想を喚起し、種々計劃施設する所となれり。即ち翌四十四年十二月の縣會に於て、利根川水源地たる利根郡藤原國有林、又碓氷川水源地たる碓氷郡中魚山・切積山國有林伐採中止を、內務・農商務兩大臣に建議し、又足尾鐵道工事の中止を命じ、渡良瀨川の土砂岩石を浚渫せしめられん事を、內務大臣に建議する等、一層治水方面に留意する所ありき。同年農商務省令を以て、荒廢地復舊補助規程の發布せらるるに及び、同年五月、縣令第三十一號、荒廢地復舊補助規程に依り、國庫の補助を受け、地盤保護工事、竝に地盤保護植樹に着手し、治水上重要なる箇所より、順次施行せしめ、一方保安林開墾禁止制限地の設定と相俟ちて、積極的に治水の實を擧げんことを期せり。本縣管轄內利根川改修工事は、明治四十四年より着手せられたれども、本縣治水の大

計未だ樹立せられたりといふに非ざれば、大正五年、縣會の議決を經て、繼續的事業となし、同六年四月之が調査に着手し、爾來三箇年に亙り、調査を續行し、大正九年三月を以て、豫備調査を終了したり。其概要は左の如し。（群馬縣治水調査會報告。）

治水調査ノ規模

一、調査ノ目的。

縣内利根川・渡良瀨川筋内務省直轄工事區域、上流ニ於ケル縣費支辨各河川ニ對シ、治水ニ適切ナル施設方法ヲ定ムルタメ、治水方針ヲ決定スルニ必要ナル豫備調査ヲナスヲ以テ目的トス。

二、調査ノ範圍。

利根川・渡良瀨川内務省直轄部分ヲ除ク、利根川外十一河川ニ對シ、其必要ナル區域延長五十八里トシ、之ガ河川名左ノ如シ。

利根川　烏川　吾妻川　片品川　神流川　鏑川　碓氷川　赤谷川　薄根川

九十九川　高田川　鮎川

以上河川ノ内、烏川筋第一區及碓氷川筋第一區ノ區間ニ對シテハ、明治三十六年、縣ニ於テ實測シタルモノアルヲ以テ、之ガ實地ニ照査シ、異動セシ箇所ヲ更正シ、

不足セル箇所ヲ補足スルモノトス。

三、調査機關ノ組織

本調査ハ治水調査ト稱シ、之ニ從事スル官吏吏員ハ理事官・技師・屬・技手・測量技手トシ、作業ノタメニ技手以下ヲ三班ニ分チ、各班ニ技術員三名以上ヲ配置シ、內二班ヲシテ河川ノ測量ニ從事セシメ、他ノ一班ヲシテ流量ノ觀測ニ從事セシメ、又若干ノ技術員ヲシテ、林野ノ調査ヲナサシム。

四、調査事項及其方法。

イ外業。

A平面測量。

B高低測量。

C流量測量。

D量水標建設。

E降水量測定ノタメ、主要ナル河川ノ水源附近ニ、自記雨量計ノ設置。

ロ內業。

A計算。

B平面圖　　三千分ノ一。

C縱斷面圖　　横三千分一　縱二百分一。

D横斷面圖　　横三千分一　縱二百分一。

五、林野調査。

イ外業

A林相・樹種・蓄積及生育ノ狀態。

B無立木地ノ利用・區分及其造林ノ要否。

C荒廢地ノ狀態。

D保安林開墾禁止地、開墾制限地ノ決定。

E森林施業方法ノ適否、及改善ノ方法。

F所有ノ關係。

G地勢及地質土質。

ロ内業

A林相圖　　二萬分一。

B治水關係圖　二萬分一。

C位置圖　　五萬分一。

D縣下林相一覽圖　十萬分一。

E同治水關係一覽圖　十萬分一。

F調査簿。

(イ)林相調査簿。

(ロ)治水關係地調査簿。

(ハ)所有別調査簿。

G面積ノ算定。

六、經費　七萬一千五十四圓。

河川測量費　金六萬三千二百七十四圓。自大正六年至大正八年度。

林野調査費　金七千七百八十圓。自大正七年至大正八年度。

七、調査ノ結果。(概論)

イ河川改修。

主要河川ノ下流部ニ於テ、河身ヲ改修シ、堤防ヲ改築シ、河川ノ濫流狀態ヲ修正シ、一定ノ流積ヲ得セシメ、由テ以テ勾配ヲ增加シ、流勢ヲ單一流路ニ集注シ、流路ニ分岐及寄洲ノ生ズルヲ防止シ、河底水面ヲ低下セシメ、洪水ニ際シテハ、漲流汎濫ヲ防グト共ニ、上流水源涵養ノ策ヲ講ズルヲ緊要ナリトス。

ロ林野經營概論。

A國有林野・民有林野施業案ハ、連絡統一ノ要アルコト。
B御料林野ノ改良。
C保安林ノ整理。
D開墾禁止地、及制限地ノ整理。
E荒廢地（民有・國有・御料有林野共）復舊ノ急務。
F私有無立木地ノ整理植林、竝採草地ノ限定。
G民有林經營ノ合同作業。（組合組織ノ必要）
H伐採ニ就キ十分ナル注意ヲ拂フコト。

以上の調査會により、本縣の治水の根本方針確立したるを以て、縣は此方針に基き、着々施設する所あり。大正七・八兩年度に於て施行せる林野基本調査の結果に鑑み、大正十一年度より、民有保安林の整理調査を行ひ、又大正十一年度より荒廢地復舊補助規程の一部を改正し、經費多額を要し、補助事業のみを以てしては、容易に其復舊を促進する能はざる工事、至難なる施業地に對しては、縣營を以て事業を行ふこととし、同年度より大正二十二年度迄の繼續支出方法に據り、着々進捗を示せり。左に明治四十四年以來の荒廢地復舊事業の成績を掲記す。

## イ　地盤保護工事（補助事業）

| （年度） | （郡） | （流域） | （施業面積） | （施業數量） | （施業經費） | （補助金） |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 明治四四 | 多野 | 神流川 | 一、三五一三町 | 三、五五八坪七〇<br>七二間九〇 | 一、八四九、三三〇圓 | 一、五七八、五〇〇圓 |
| 大正元 | 同 | 同 | 一〇、六三〇一 | 二、九一三、九〇<br>四九〇、七二 | 二、四四〇、五六三 | 二、〇三三、五五〇 |
| 二 | 同 | 同 | 八、八五三一 | 九、七〇三、八〇<br>四、三四七、三一 | 六、一一七、七六六 | 五、〇九四、四三〇 |
| 三 | 同 | 同 | 三、〇〇一四 | 九一三、八〇<br>四六八、八〇 | 一、四三七、八七三 | 一、一九八、一五〇 |
| 四 | 同 | 同 | 七五〇五 | 一、二六三、五〇<br>三、八八五、九〇 | 一、一三六、九三八 | 九三八、〇〇〇 |
| 四 | 北甘樂 | 鏑川 | 三、〇三〇一 | 二、一九四、七〇<br>九、四七九、四〇 | 一、八八五、四六八 | 一、五五一、〇〇〇 |
| 四 | 吾妻 | 吾妻川 | 二〇〇〇 | 一九一、〇〇<br>六六〇、〇〇 | 二九二、三一〇 | 二四二、〇〇〇 |
| 五 | 勢多 | 渡良瀬川 | 二〇三一 | 四九八、〇〇<br>六五三、〇〇 | 三五四、八〇六 | 二六四、〇〇〇 |
| 五 | 多野 | 神流川 | 七一〇〇 | 一、八〇一、七〇<br>四、〇二九、四七 | 二、四〇六、九六六 | 一、八五六、〇〇〇 |
| 五 | 北甘樂 | 鏑川 | 三、〇二一七 | 九四一、三〇<br>五、九二六、七二 | 二、七四五、三七四 | 二、一七四、九〇〇 |
| 五 | 吾妻 | 吾妻川 | 七三一一 | 一、八八三、九〇<br>二、六三五、九五 | 一、二八四、三八三 | 九八〇、九〇〇 |
| 六 | 勢多 | 渡良瀬川 | 六七〇三 | 九四八、三六<br>一、一一三、〇〇 | 一、三七一、〇二四 | 一、〇九六、〇〇〇 |
| 六 | 北甘樂 | 鏑川 | 二、四六二三 | 三、三四五、五〇<br>七、〇九〇、一五 | 三、九八二、一一七 | 三、三八六、〇〇〇 |

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 六 | 吾妻 | 吾妻川 | 〇五一二 | 一六三、五〇〇<br>一八三、四〇〇<br>四三八、〇〇〇 | 七五、四九二 | 六〇、〇〇〇 |
| 七 | 勢多 | 渡良瀨川 | 一一〇五 | ｜ | 三三、三六八 | 一八五、〇〇〇 |
| 七 | 北甘樂 | 鏑川 | 二、八三二〇 | 八、四四八、〇〇〇<br>四、四七〇、三九〇 | 六、一八四、〇三三 | 四、三九六、〇〇〇 |
| 七 | 吾妻 | 吾妻川 | 三五〇〇 | 四〇九、一一〇<br>九三、六一一 | 六一三、九九四 | 四一八、〇〇〇 |
| 八 | 北甘樂 | 鏑川 | 二、二三一九 | 六、三〇〇、四〇〇<br>六、三七九、一〇〇<br>一、六九九、三〇（立坪） | 六、二一四、〇五五 | 五、一七五、〇〇〇 |
| 九 | 同 | 同 | 二、二一〇九 | 四、〇一七、〇〇〇<br>五、九六八、六〇〇<br>一、四三五、〇〇〇 | 一三、六六九、一五七 | 一〇、四五〇、〇〇〇 |
| 一〇 | 同 | 同 | 一、九六〇八 | 二、〇八七、〇〇〇<br>三、三七七、八〇一<br>二、九一一、〇〇〇 | 七、八一三、四七〇 | 六、四八七、〇〇〇 |
| 一一 | 勢多 | 渡良瀨川 | 一、六五〇〇 | 七七三、五〇〇<br>八〇五、六〇六<br>七五、〇〇〇 | 一、三九九、一四一 | 一、一三九、〇〇〇 |
| 一一 | 北甘樂 | 鏑川 | 三、六七〇一 | ｜ | 三、〇七八、〇七九 | 二、五六九、〇〇〇 |
| 一二 | 勢多 | 渡良瀨川 | 二三一四 | 一四六、〇〇三<br>六七四、〇〇〇<br>二三三、〇〇〇 | 八九四、一六〇 | 七一五、〇〇〇 |
| 一二 | 多野 | 神流川 | 一三一〇 | 一九五、〇〇〇<br>三九、〇〇〇 | 五四五、八七〇 | 四五〇、〇〇〇 |
| 一二 | 北甘樂 | 鏑川 | 〇四一〇 | 五四五、〇〇〇<br>二九、九〇〇 | 二八四、三八〇 | 二二七、〇〇〇 |
| 一二 | 碓氷 | 碓氷川 | 一一三四 | ｜ | 三九一、六八〇 | 三一七、〇〇〇 |
| 一三 | 勢多 | 渡良瀨川 | 二六三三 | 三七〇、〇〇〇<br>六、〇〇〇、〇〇〇<br>二一一、二二五 | 七二〇、一二五 | 六〇〇、〇〇〇 |
| 一三 | 碓氷 | 碓氷川 | 二一一三 | 六八一、〇〇〇<br>三三一、六六八 | 一、一七八、五一七 | 九〇〇、〇〇〇 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 計 | 神流川 | 二五、四三〇四 | 二〇、三五〇、四〇〇<br>一三、三三五、一〇〇<br>二七、四二〇、四〇〇 | 一五、九三五、二〇六 | 一三、一四八、六二〇 |
| | 鏑川 | 二〇、二六〇八 | 四二、七六八、一〇〇<br>三、四一五、八〇〇 | 四五、八五五、〇三三 | 三六、三三〇、九〇〇 |
| | 吾妻川 | 一、三三三 | 二、六四七、五〇〇<br>三、五七二、九六 | 二、三三〇、〇七九 | 一、七〇〇、九〇〇 |
| | 渡良瀬川 | 三、一三〇五 | 九、三三〇、八六<br>二、六一三、九一<br>七五、〇〇立坪 | 四、九六一、六二四 | 三、九九九、〇〇〇 |
| | 碓氷川 | 〇、三三〇七 | 六八一、〇〇〇<br>四〇二、六八 | 一、五七〇、一九七 | 一、三一七、〇〇〇 |
| （合計） | | 五〇、七五二九 | 五五、六六九、五五<br>六三、〇一二、五七<br>二六、六三六、六五 | 六九、五六一、〇四九 | 五六、三七三、四二〇 |

## ロ　地盤保護工事（縣營事業）

| （年度） | （郡） | （流域） | （施業面積） | （工事數量） | （施業經費） |
|---|---|---|---|---|---|
| 大正一一 | 北甘樂 | 鏑川 | 二、〇九〇〇町 | 一、二〇四、五九坪<br>九〇七、〇間 | 四、六一七、〇〇〇圓 |
| 一一 | 多野 | 神流川 | 二〇〇〇 | 八七二、七坪<br>四七五、〇間 | 四、一六三、〇〇〇 |
| | （計） | | 二、二九〇〇 | 二、〇七七、二九坪<br>一、三八四〇間 | 八、七八〇、〇〇〇 |
| 一二 | 北甘樂 | 鏑川 | 二、〇九〇〇 | 一二五、三八坪<br>三、七一〇、〇間 | 三、八九二、七八〇 |
| 一二 | 多野 | 神流川 | 一、三五一八 | 七〇、六五坪<br>二、八〇〇、〇〇間 | 二、一二一、七五〇 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 一二 | 碓氷 | 碓氷川 | 四三二一 | 一四五、〇坪<br>一、一七七、〇間 | 一、五二八、五六〇 |
| （計） | | | 三、八八一〇 | 三四一、〇〇三坪<br>七、六八七、〇間 | 七、五四三、〇九〇 |
| 一三 | 勢多 | 渡良瀬川 | 一、二四〇二 | 二〇七、五五坪<br>二、一五八、〇間 | 六、〇七六、一一〇 |
| 一三 | 碓氷 | 烏川 | 三九〇四 | 四二、一五坪<br>八三五、〇間 | 九六六、七七〇 |
| 計 | | 鏑川 | 四、一八〇〇 | 一、三二九、九七坪<br>四、六一七、〇間 | 八、五〇九、七八〇 |
| | | 神流川 | 一、五五一八 | 九四三、三五坪<br>三、二七五、〇間 | 六、二八四、七五〇 |
| | | 碓氷川 | 四三二一 | 一四五、〇坪<br>一、一七七、〇間 | 一、五二八、五六〇 |
| | | 烏川 | 三九〇四 | 四二、一五坪<br>八三五、〇間 | 九六六、七七〇 |
| | | 渡良瀬川 | 一、二四〇二 | 二〇七、五五坪<br>二、一八〇、〇間 | 六、〇七六、一一〇 |
| （合計） | | | 八、三〇一六 | 二、六六八、一〇間<br>一二、〇六四、〇〇坪 | 二三、三六五、九七〇 |



## 八　地盤保護植樹（補助事業）

| （年度） | （郡） | （流域） | （施業面積） | （施業經費） | （補助金） |
|---|---|---|---|---|---|
| 明治四四 | 多野 | 神流川 | 一九、三八一〇町 | 八七五、三九〇圓 | 三九一、七八〇圓 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 大正元 | 同 | 同 | 四七〇〇 | 一三,六五〇 | 四,五四〇 |
| 二 | 同 | 同 | 一四,〇一一七 | 六四五,〇一〇 | 二〇三,八一〇 |
| 三 | 多野 | 神流川 | 二三,九二三三 | 七四四,四八四 | 二四八,〇八〇 |
| 四 | 同 | 同 | 一六,九九一六 | 五三八,三六一 | 一九九,五〇〇 |
| 四 | 北甘樂 | 鏑川 | 一九,八二〇五 | 六七七,一七一 | 二一七,〇〇〇 |
| 四 | 碓氷 | 碓氷川 | 五,一七〇〇 | 二四二,三六〇 | 八〇,〇〇〇 |
| 四 | 同 | 烏川 | 一八二,五一二六 | 四,七〇四,六九八 | 一,五六五,〇〇〇 |
| 四 | 吾妻 | 吾妻川 | 三五〇〇 | 七,三一〇 | 二,〇〇〇 |
| 四 | 勢多 | 渡良瀬川 | 六六,三八〇〇 | 二,八九四,〇三一 | 九五七,〇〇〇 |
| 五 | 勢多山田 | 同 | 六三,〇八一〇 | 二,五三一,五九五 | 七九五,〇〇〇 |
| 五 | 多野 | 神流川 | 一一〇七 | 四,五一五 | 一,二〇〇 |
| 五 | 北甘樂 | 鏑川 | 二六,七五〇〇 | 一,一三三,五五四 | 三三五,〇〇〇 |
| 五 | 碓氷 | 碓氷川 | 四,〇〇〇〇 | 一九三,六〇〇 | 六〇,〇〇〇 |
| 五 | 同 | 烏川 | 九六,八四〇〇 | 二,八八八,三三九 | 九三三,〇〇〇 |
| 五 | 吾妻 | 吾妻川 | 一一〇〇 | 四,六六〇 | 一,〇〇〇 |
| 六 | 勢多 | 渡良瀬川 | 三四,一一一三 | 一,三九八,七四〇 | 四二六,〇〇〇 |
| 六 | 多野 | 神流川 | 一五,二四〇三 | 三〇三,七二四 | 九〇,〇〇〇 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 大正六 | 北甘樂 | 鏑川 | 四〇〇〇 | 一四、四七〇 | 四、〇〇〇 |
| 六 | 碓氷 | 碓氷川 | 三、〇〇〇〇 | 一八八、七〇〇 | 三六、〇〇〇 |
| 六 | 吾妻 | 吾妻川 | 一七〇〇 | 六、五三一 | 二、〇〇〇 |
| 八 | 同 | 同 | 三、三〇〇〇 | 一三六、二五〇 | 四三、〇〇〇 |
| 九 | 北甘樂 | 鏑川 | 二、〇〇〇〇 | 五〇、八九〇 | 一六、〇〇〇 |
| 九 | 吾妻 | 吾妻川 | 三、〇〇〇〇 | 一三九、〇〇〇 | 四〇、〇〇〇 |
| 一〇 | 北甘樂 | 鏑川 | 六、二六二〇 | 七四一、〇〇〇 | 一八三、〇〇〇 |
| 一三 | 勢多 | 渡良瀬川 | 一五、〇〇〇〇 | 一、四三一、五〇〇 | 四七三、〇〇〇 |
| | （計） | 神流川 | 八九、一四一五 | 三、一一五、〇三四 | 一、〇三七、九一〇 |
| | | 鏑川 | 五五、三三二五 | 二、六〇六、〇八五 | 七四五、〇〇〇 |
| | | 碓氷川 | 七、三五〇〇 | 六三四、六六〇 | 一七六、〇〇〇 |
| | | 烏川 | 二七九、三五二六 | 七、五九二、九三七 | 二、四九七、〇〇〇 |
| | | 吾妻川 | 六、九三〇〇 | 二七三、六四一 | 八七、〇〇〇 |
| | | 渡良瀬川 | 一七八、四七二三 | 八、二三五、八六六 | 二、六六一、〇〇〇 |
| （合 | 計） | | 六三一、一三〇一 | 二三、五四八、二二三 | 七、一九一、三七〇 |

以上の外本縣管內國有林に對し、東京營林局に於て、大正三年以來施行したる砂防工事の成績は左表の如し。

| (年度) | (片品川支流追貝川) 圓 | (鏑川支流西牧川) 圓 | (烏川支流碓氷川) 圓 | (計) 圓 | (摘要) |
|---|---|---|---|---|---|
| 大正三年 | ― | ― | 九、四二八、二〇〇 | 九、四二八、二〇〇 | 新設經費の外修繕費を含む。 |
| 同　四年 | ― | ― | 七、八一三、四二〇 | 七、八一三、四二〇 | |
| 同　五年 | 一〇、〇七三、八四〇 | ― | 四、三五九、五二〇 | 一四、四三三、三六〇 | |
| 同　六年 | 一一、七七一、八七〇 | 九、二七〇、七二〇 | 九、三三六、五一〇 | 三〇、三七九、一〇〇 | |
| 同　七年 | 二三、五五三、六一〇 | ― | 一四、九一五、〇二〇 | 三八、四六八、六三〇 | |
| 同　八年 | 五、四四五、一一〇 | 二、九一三、八三〇 | 一三、三五四、四八〇 | 二一、七一三、四二〇 | |
| 同　九年 | 八、七七一、六九〇 | 五九四、五八〇 | 七五一、八七〇 | 一〇、一一八、一四〇 | |
| 同　一〇年 | 一、八四五、〇〇〇 | ― | 一〇、四二三、四八〇 | 一二、二六八、四八〇 | |
| 同　一一年 | 八三〇、〇〇〇 | 四、二四三、六八〇 | 一一、四九二、六三〇 | 一六、五六六、三一〇 | |
| 同　一二年 | 四、五二四、四八〇 | 三、五五三、〇六〇 | 三二、一五七、七七〇 | 四〇、二三五、三一〇 | |
| 同　一三年 | 二八二、三一〇 | 四五、三六〇 | 二三、一八九、〇六〇 | 二三、五一六、七三〇 | |
| (計) | 六七、〇九六、九一〇 | 二〇、六二〇、三三〇 | 一三六、三三一、九六〇 | 二二三、九三九、一〇〇 | |

從來本縣に於いて激甚なる山崩を發生する地方の地質を按ずるに、神流川上

流地方は秩父古生層、鏑川及び吾妻川上流地方は安山岩、渡良瀨川流域に於ては花崗岩を認む。而して崩壞地の性狀は各之を異にするものあり。崩壞面は多くは急峻にして、ま丶岩盤を露出し、山腹工の施行不可能なるもの多く、而も漸次區域を擴大して、谿間を荒すこと夥しく、從つて工事は谿流工を主として施設するの最も緊切なるもの多し。尙治水上重要なる地方の造林に就いては、本縣は大正十一年、縣令第六號を以て、治水關係地造林費補助規程を規定し、治水上重要なる所の無立木地、又は散生地に對する造林費に對し、施業經費の四分の一以内を補助することとして、造林を奬勵したる結果は、左の如し。

治水關係地造林費補助

| （年度） | （件數） | （造林面積） | （補助金額） |
|---|---|---|---|
| 大正十一年 | 一〇五 | 町歩 二八三、四 | 圓 六、一四五 |
| 同　十二年 | 一二〇 | 二六三、七 | 五、六二〇 |
| 同　十三年 | 一六〇 | 三一四、五 | 五、六二五 |

（地盤保護工事以下群馬縣内務部林務課調査書類に據る。）

## 二　河川管理

河川管理

河川に就きては、別表の如く河川法施行及び準用區域を調査して、之を告示し、本縣所管の河川には、河川管理吏員、及び河川工夫を配置し、河川の監視、工作物の

保護に努めしめたり。

河川法施行及同法準用區域調書 （群馬縣內務部土木課調査）

| （告示年月日） | （施行及準用河川名） | （區域） | | （里程） |
|---|---|---|---|---|
| 大正六年五月十七日內務省告示第二十五號 | 普川 利根川 | 左岸勢多郡北橘村 右岸群馬郡澁川町 | 吾妻川合流點以下海ニ至ル（本縣內分） | 里町間 一九、〇九、〇〇 |
| 大正六年五月十一日縣告示第百十四號 | 準用 同川 | 左岸利根郡古馬牧村大字後閑 右岸同郡桃野村大字下津 | 赤谷川流點以下河川法施行地點ニ至ル | 六、一九、〇〇 |
| 大正十一年二月十六日縣告示第四十四號 | 同 同川 | 左岸利根郡水上村大字藤原 右岸同 | 楢俣澤合流點以下赤谷川合流點ニ至ル | 八、〇二、〇〇 |
| 大正十三年八月二十二日縣告示第二百六十一號 | 同 同川 | 左岸利根郡水上村大字藤原 右岸同 | 新潟縣界水源ヨリ現在準用區域ニ至ル | 四、三二、〇〇 |
| 同 | 同支川 奈良澤川 | 左岸同 右岸同 小澤合流點ヨリ | 左岸利根郡水上村大字藤原 右岸同 利根川合流點ニ至ル | 〇、三三、〇〇 |
| 同 | 準用支川 矢木澤川 | 左岸同 右岸同 無名川合流點ヨリ | 左岸同 右岸同 利根川合流點ニ至ル | 〇、三三、〇〇 |
| 同 | 同 同 楢俣川 | 左岸同 右岸同 澤種澤日崎澤合流點ヨリ | 左岸同 右岸同 利根川合流點ニ至ル | 二、〇三、〇〇 |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 大正十三年八月二十二日縣告示第二百六十一號 | 同 楢俣川支川 湯ノ小屋澤 | 左岸同 右岸同 無名川合流點ヨリ | 左岸同 右岸同 楢俣川合流點洞元瀧ニ至ル | 〇、一八、〇〇 |
| 同 | 同 利根川支川 寶川 | 左岸同 右岸同 新潟縣界水源ヨリ | 左岸同 右岸同 利根川合流點ニ至ル | 三、三一、〇〇 |
| 同 | 同 同 湯檜曾川 | 左岸同郡同村大字湯檜曾 右岸同 新潟縣界水源ヨリ | 左岸同郡同村大字幸知 右岸同 利根川合流點ニ至ル | 三、三三、〇〇 |
| 同 | 同 同 沼尾川 | 左岸勢多郡富士見村赤城山 右岸同 赤城大沼流出口ヨリ | 左岸勢多郡敷島村大字長井小川田 右岸同 利根川合流點ニ至ル | 三、一五、〇〇 |
| 同 | 同 同 粕川 | 左岸同 右岸同 赤城小沼流出口ヨリ | 左岸佐波郡豐受村大字下蓮沼 左岸同 廣瀬川合流點ニ至ル | 八、三二、〇〇 |
| 同 | 同 同 廣瀬川 | 左岸佐波郡豐受村大字蓮沼 右岸同 粕川合流點ヨリ | 左岸新田郡世良田村大字平塚 右岸同 利根川合流點ニ至ル | 一、〇九、〇〇 |
| 大正十二年二月十六日縣告示第四十四號 | 同 同 片品川 | 左岸利根郡片品村大字土出 右岸同 栓ケ瀧以下 | 左岸同郡久保村大字森下 右岸同郡利南村大字新橋 利根川合流點ニ至ル | 一三、一三、〇〇 |
| 大正十三年八月二十二日縣告示第二百六十一號 | 同 同 同川 | 左岸利根郡片品村大字戸倉 右岸同 | 釼瀧ヨリ現在準用區域ニ至ル | 三、〇五、〇〇 |
| 同 | 同 片品川支川 小川 | 左岸利根郡片品村大字菅沼 右岸同 大尻沼流出口ヨリ | 左岸利根郡片品村大字須賀川 右岸同 片品川合流點ニ至ル | 二、三三、〇〇 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 同 | 同　同 | 塗川 | 左岸 同郡同村大字花咲<br>右岸 同 | 十二澤川合流點ヨリ | 左岸 同郡同村大字播谷<br>右岸 同<br>片品川合流點ニ至ル | 一、〇六、〇〇 |
| 同 | 同　同 | 泙川 | 左岸 同郡東村大字泙川<br>右岸 同 | 平瀧道路橋ヨリ | 左岸 同<br>右岸 同<br>片品川合流點ヨリ | 三、〇〇、〇〇 |
| 同 | 同　同 | 栗原川 | 左岸 同郡赤城根村大字利根<br>右岸 同 | 不動澤合流點ヨリ | 左岸 同郡東村大字高戸谷<br>右岸 同<br>片品川合流點ニ至ル | 二、一五、〇〇 |
| 同 | 同　同 | 根利川 | 左岸 同<br>右岸 同 | 道路橋ヨリ | 左岸 同郡赤城根村大字日影南郷<br>右岸 同郡同村大字日向南郷<br>片品川合流點ニ至ル | 三、〇六、〇〇 |
| 大正十二年二月十六日縣告示第四十四號 | 同　利根川支川 | 吾妻川 | 左岸 吾妻郡川戀村大字田代<br>右岸 同 | 湯淺川合流點ヨリ | 左岸 群馬郡長尾村大字白井<br>右岸 同郡澁川町<br>利根川合流點ニ至ル | 一七、一五、二〇 |
| 大正十三年八月二十二日縣告示第二百六十一號 | 同　同 | 同川 | 左岸 吾妻郡嬬戀村大字田代<br>右岸 同 | 長野縣界水源ヨリ | 現在準用區域ニ至ル | 一、一四、〇〇 |
| 同 | 同　吾妻川支川 | 湯尻川 | 左岸 同<br>右岸 同 | 鹿澤山ノ湯水源ヨリ | 左岸 吾妻郡嬬戀村大字田代<br>右岸 同<br>吾妻川合流點ニ至ル | 一、一三、〇〇 |
| 同 | 同　同 | 大澤川 | 左岸 同<br>右岸 同 | 道路橋ヨリ | 左岸 同<br>右岸 同<br>吾妻川合流點ニ至ル | 〇、二六、〇〇 |
| 同 | 同　同 | 大横川 | 左岸 同<br>右岸 同 | 水源ヨリ | 左岸 同<br>右岸 同<br>吾妻川合流點ニ至ル | 一、一八、〇〇 |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 同 | 準用吾妻川支川 千俣川 | 左岸同郡同村大字千俣字井戸尻道路橋ヨリ<br>右岸同 | 左岸同郡同村大字大前<br>右岸同郡同村大字大笹 吾妻川合流點ニ至ル | 一、一〇、〇〇 |
| 同 | 同 同 萬座川 | 左岸同郡同村大字千俣 萬座溫泉ヨリ<br>右岸同 | 左岸同郡同村大字西窪 吾妻川合流點ニ至ル<br>右岸同 | 三、三五、〇〇 |
| 同 | 同 同 小宿川 | 左岸同郡嬬戀村大字鎌原<br>右岸同郡長野原町大字應桑 濁澤合流點ヨリ | 左岸同郡嬬戀村大字芦生田<br>右岸同郡同村大字袋倉 吾妻川合流點ニ至ル | 一、一三、〇〇 |
| 同 | 同 同 遅澤川 | 左岸同郡草津町大字前口 贋造澤川合流點ヨリ<br>右岸同 | 左岸同郡長野原町大字大津<br>右岸同郡同町大字羽根尾 吾妻川合流點ニ至ル | 〇、三三、〇〇 |
| 大正十三年八月二十二日縣告示第二百六十一號 | 同 同 熊川 | 左岸同郡長野原町大字應桑<br>右岸同 片蓋川合流點ヨリ | 左岸同郡同町大字與喜屋<br>右岸同 吾妻川合流點ニ至ル | 二、三七、〇〇 |
| 同 | 同 熊川支川 地藏川 | 左岸同<br>右岸同 水源ヨリ | 左岸同郡同町大字應桑<br>右岸同 熊川合流點ニ至ル | 一、一四、〇〇 |
| 同 | 同 吾妻川支川 須川 | 左岸同郡六合村大字小雨<br>右岸同 白砂川湯川合流點ヨリ | 左岸同郡長野原町大字長野原<br>右岸同 吾妻川合流點ニ至ル | 三、一八、〇〇 |
| 同 | 同 須川支川 白砂川 | 左岸同郡同村大字入山<br>右岸同 新潟縣界水源ヨリ | 左岸同郡六合村大字小雨<br>右岸同 湯川合流點須川起點ニ至ル | 五、一三、〇〇 |
| 同 | 同 吾妻川支川 溫川 | 左岸吾妻郡坂上村須賀尾<br>右岸同 水源ヨリ | 左岸同郡岩島村大字厚田<br>右岸同 吾妻川合流點ニ至ル | 四、〇九、〇〇 |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 同 | 同　同<br>深澤川 | 左岸同郡原町大字原町<br>右岸同　太田村村界ヨリ | 左岸同郡原町大字原町<br>右岸同　吾妻川合流點ニ至ル | 一、三九、〇〇 |
| 同 | 同　同<br>山田川 | 右岸同郡澤田村大字下澤渡<br>右岸同　四方川上澤渡川合流點ヨリ | 左岸同郡中之條町大字中之條<br>右岸同郡原町大字原町　吾妻川合流點ニ至ル | 一、一三、〇〇 |
| 同 | 同　山田川支川<br>四萬川 | 左岸同郡同村大字四萬<br>右岸同　四萬溫泉道路橋ヨリ | 左岸同郡澤田村大字下澤田<br>右岸同　上澤渡川合流點山田川起點ニ至ル | 三、一九、〇〇 |
| 同 | 同　同<br>上澤渡川 | 左岸同郡同村大字折田<br>右岸同　蛇野川反下川合流點ヨリ | 左岸同郡同村大字下澤渡<br>右岸同　四萬川合流點ニ至ル | 〇、一四、〇〇 |
| 同 | 同　吾妻川支川<br>名久田川 | 左岸同郡高山村大字中山<br>右岸同　無名川合流點ヨリ | 左岸同郡中之條町大字青山<br>右岸同　吾妻川合流點ニ至ル | 三、一三、〇〇 |
| 同 | 同　同<br>泉澤川 | 左岸同郡太田村大字泉澤字新井<br>右岸同　道路橋ヨリ | 左岸同郡東村大字新巻字御園<br>右岸同　吾妻川合流點ニ至ル | 〇、三三、〇〇 |
| 同 | 同　同<br>鳴澤川 | 左岸同郡東村大字箱島<br>右岸同　水源ヨリ | 左岸同郡同村大字箱島<br>右岸同　吾妻川合流點ニ至ル | 〇、一三、〇〇 |
| 大正十三年八月二十二日縣告示第二百六十一號 | 同　同<br>沼尾川 | 左岸群馬郡室田町字榛名山<br>右岸同　榛名湖流出口ヨリ | 左岸吾妻郡東村大字箱島<br>右岸同郡金島村大字祖母島　吾妻川合流點ニ至ル | 三、三〇、〇〇 |
| 大正十年十二月六日縣告示第三百二十一號 | 利根川支川<br>烏川 | 左岸高崎市<br>右岸群馬郡片岡村大字乘附　碓氷川合流點以下利根川合流點ニ至ル | | 二、〇四、〇〇 |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 大正六年五月十一日縣告示第百七十四號 | 準用　同　川 | 左岸群馬郡倉田村大字三ノ倉<br>右岸碓氷郡烏淵村大字水沼 | 道路橋以下河川法施行地點ニ至ル | |
| 大正十二年二月十六日縣告示第四十四號 | 同　同　川 | 左岸群馬郡倉田村大字權田<br>右岸碓氷郡烏淵村大字川浦<br>湯澤川合流點以下 | 左岸同郡同村大字三ノ倉<br>右岸同郡同村大字水沼<br>道路橋所在地點ニ至ル | 一、一九、〇〇 |
| 大正十二年二月十六日縣告示第四十四號 | 同　烏川支川　白川 | 左岸群馬郡箕輪町大字松ノ澤<br>右岸同<br>大澤合流點以下 | 左岸群馬郡長野村大字西新波<br>右岸同郡久留馬村大字東鄉<br>烏川合流點ニ至ル | 三、〇七、四六 |
| 明治三十二年一月三十一日縣告示第十八號 | 利根川支川　渡良瀨川 | 左岸邑樂郡渡瀨村大字上早川田<br>右岸山田郡毛里田村大字市場 | 以下栃木縣界ニ至ル | 八、一八、〇〇 |
| 大正六年五月十一日縣告示第百十四號 | 準用　同　川 | 左岸勢多郡東大村字澤入栃木縣界以下山田郡境野村栃木縣界ニ至ル<br>右岸同郡同村大字同栃木縣界以下河川法施行地點ニ至ル | | 一一、三五、〇〇 |
| 大正十三年八月廿二日縣告示第二百六十一號 | 同　渡良瀨川支川　黑坂石川 | 左岸勢多郡東村大字澤入字黑坂石<br>右岸同<br>道路橋ヨリ | 左岸勢多郡東村大字澤入<br>右岸同<br>渡良瀨川合流點ニ至ル | 〇、三一、〇〇 |
| 同 | 同　同　小中川 | 左岸同郡東村大字小中<br>右岸同<br>袖丸川合流點ヨリ | 左岸同郡東村大字小中<br>右岸同<br>渡良瀨川合流點ニ至ル | 〇、三三、〇〇 |
| 同 | 同　同　小黑川 | 左岸同郡同村大字花輪<br>右岸同<br>湧丸川合流點ヨリ | 左岸同郡東村大字花輪<br>右岸同<br>渡良瀨川合流點ニ至ル | 〇、一九、〇〇 |
| 同 | 同　同　川口川 | 左岸同郡黑保根村大字宿廻<br>右岸同<br>無名川合流點ヨリ | 左岸同郡黑保根村大字宿廻<br>右岸同<br>渡良瀨川合流點ニ至ル | 〇、三二、〇〇 |

| 明治三十二年一月三十一日縣告示第十八號 | 利根川支川 谷田川 | 左岸邑東郡赤羽村大字赤生田字十二社橋 右岸同郡千代田村大字江黒 以下栃木縣界ニ至ル | 二、〇〇、〇〇 |
|---|---|---|---|
| 大正六年五月十一日縣告示第百十四號 | 準用 碓氷川 | 左岸碓氷郡松井田町大字松井田 右岸同郡西横野村大字八城 鐵道橋以下烏川合流點ニ至ル | 五、一五、〇〇 |
| 大正十三年二月十六日縣告示第四十四號 | 同 同川 | 左岸碓氷郡臼井町大字横川 右岸同 霜積川合流點以下 左岸同郡松井田町大字松井田 右岸同郡西横野村大字八城 鐵道橋所在地點ニ至ル | 一、三五、三〇 |
| 大正十三年八月二十二日縣告示第二百六十一號 | 同 烏川 | 左岸碓氷郡烏淵村大字川浦 右岸同 水源ヨリ現在準用區域ニ至ル | 二、一六、〇〇 |
| 同 | 同 烏川支川 榛名川 | 左岸群馬郡室田町字榛名山 右岸同 榛名湖流出口ヨリ 左岸群馬郡室田町大字上室田字日向本庄 右岸同郡倉田村大字三ノ倉字落合 烏川合流點ニ至ル | 二、一九、〇〇 |
| 同 | 同 同 碓氷川 | 左岸碓氷郡坂本町大字坂本驛 右岸同 道路橋ヨリ現在準用區域ニ至ル | 〇、三四、〇〇 |
| 大正十三年二月十六日縣告示第四十四號 | 同 碓氷川支川 九十九川 | 左岸碓氷郡九十九村大字小日向 右岸同郡原市町大字郷原 増田川合流點以下 左岸碓氷郡安中町大字安中 右岸同郡安中町大字中宿 碓氷川合流點ニ至ル | 二、二六、三六 |
| 大正十三年八月二十二日縣告示第二百六十一號 | 同 碓氷川支川 霜積川 | 左岸碓氷郡坂本町大字坂本驛 右岸同 温泉澤ヨリ 左岸同郡坂本町大字坂本驛 右岸同 碓氷川合流點ニ至ル | 一、〇九、〇〇 |
| 大正十年十二月六日縣告示第三百二十一號 | 利根川支川 神流川 | 左岸多野郡鬼石町大字鬼石三波川合流點以下烏川合流點ニ至ル | 四、三〇、〇〇 |

| 告示 | 河川 | 起點 | 終點 | 延長 |
| --- | --- | --- | --- | --- |
| 大正十二年二月十六日縣告示第四十四號 | 準用　神流川 | 左岸多野郡上野村大字楢原　右岸同　黑川合流點以下 | 左岸多野郡鬼石町大字三波川合流點　右岸同郡神流村大字生利埼玉縣界ニ至ル | 一三、三九、四〇 |
| 大正十三年八月二十二日縣告示第二百六十一號 | 同　烏川支川　神流川 | 左岸同郡同村大字同　右岸同　北澤中澤本谷合流點ヨリ | 現在準用區域ニ至ル | 〇、三五、〇〇 |
| 同 | 同　神流川支川　野栗澤川 | 左岸同郡同村大字野栗澤　右岸同　無名川合流點ヨリ | 左岸多野郡上野村大字新羽　右岸同　神流川合流點ニ至ル | 〇、二〇、〇〇 |
| 同 | 同　同　間物澤川 | 左岸同郡中里村大字神ケ原　右岸同　水源ヨリ | 左岸同郡中里村大字神ケ原　右岸同　神流川合流點ニ至ル | 〇、三八、〇〇 |
| 同 | 同　同　三波川 | 左岸同郡三波村大字大奈眞　右岸同　無名川合流點ヨリ | 左岸同郡鬼石町大字鬼石　右岸同　神流川合流點ニ至ル | 一、〇三、〇〇 |
| 大正六年五月十一日縣告示第百十四號 | 準用　鏑川 | 左岸北甘樂郡一ノ宮町大字田島　右岸同郡高瀬村大字大島 | 道路橋以下烏川合流點ニ至ル |  |
| 大正十二年二月十六日縣告示第四十四號 | 同　同川 | 左岸同郡下仁田町大字下仁田　右岸同郡同町大字川井　南牧川西牧川合流點以下 | 左岸北甘樂郡一ノ宮町大字田島　右岸同郡高瀬村大字大島　道路橋所在地點ニ至ル | 三、三四、四〇 |
| 同 | 同　鏑川支川　高田川 | 左岸北甘樂郡妙義町大字諸戸　右岸同郡同町大字菅原　菅原川諸戸川合流點以下 | 左岸北甘樂郡福島町大字君川　右岸同郡富岡町大字曾木　鏑川合流點ニ至ル | 四、一四、五〇 |
| 大正十三年八月二十二日縣告示第二百六十一號 | 同　同　西牧川 | 左岸北甘樂郡西牧村大字本宿　矢川川市野萱川合流點ヨリ | 左岸北甘樂郡下仁田町大字下仁田　右岸同郡下仁田町大字川井　南牧川合流點ニ至ル | 三、一五、〇〇 |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 同 | 同　西牧川支川 小坂川 | 左岸北甘樂郡小坂村大字小坂 右岸同 無名川合流點ヨリ | 左岸同郡小坂村大字中小坂 右岸同 西牧川合流點ニ至ル | 一、〇五、〇〇 |
| 同 | 同　鏑川支川 南牧川 | 左岸同郡尾澤村大字羽澤 右岸同 熊倉川合流點ヨリ | 左岸同郡下仁田町大字川井 右岸同郡同町大字吉崎 西牧川合流點ニ至ル | 四、〇一、〇〇 |
| 同 | 同　南牧川支川 大仁田川 | 左岸同郡月形村大字大仁田 右岸同 水源ヨリ | 左岸同郡月形村大字大日向 右岸同 南牧川合流點ニ至ル | 一、一六、〇〇 |
| 大正六年五月十一日縣告示第百十四號 | 準用 桐生川 | 右岸山田郡梅田村大字淺部道路橋以下栃木縣界ニ至ル | | 三、一三、〇〇 |
| 大正十三年八月二十二日縣告示第二百六十一號 | 同　相生川支川 高澤川 | 左岸山田郡梅田村大字高澤 右岸同 大瀧ヨリ | 左岸山田郡梅田村大字淺部 右岸同 相生川合流點ニ至ル | 一、〇〇、〇〇 |
| 大正十二年二月十六日縣告示第四十四號 | 準用 赤谷川 | 左岸利根郡新治村大字猿ヶ京 右岸同 井生橋以下 | 左岸利根郡桃野村大字下津 右岸同 利根川合流點ニ至ル | 三、一五、〇〇 |
| 同 | 同 薄根川 | 左岸利根郡川場村大字川場湯原 右岸同 赤倉川合流點以下 | 左岸利根郡沼田町大字沼田 右岸同郡薄根村大字井戸ノ上 利根川合流點ニ至ル | 四、〇三、一〇 |
| 同 | 同 鮎川 | 左岸多野郡日野村大字上日野 右岸同 大谷澤合流點以下 | 左岸同郡八幡村大字山名 右岸同 鏑川合流點ニ至ル | 五、一五、一〇 |
| 大正十三年八月二十二日縣告示第二百六十一號 | 同 菅沼 | 利根郡片品村大字菅沼地内全面 | | 周圍 一、一三、〇〇 |

| | | | |
|---|---|---|---|
| 同 | 準用 丸沼 | 利根郡片品村大字菅沼地内全圓 | 周圍 〇、二〇、〇〇 |
| 同 | 同 大尻沼 | 同 | 同 〇、四〇、〇〇 |
| 同 | 同 八町流 | 左岸利根郡片品村大字菅沼 右岸同 菅沼流出口ヨリ 左岸利根郡片品村大字菅沼 右岸同 丸沼ニ至ル | 〇、一一、〇〇 |
| 同 | 同 野反池 | 吾妻郡六合村大字入山地内全面 | 周圍 〇、三三、〇〇 |
| 同 | 同 魚川支川 野反川 | 左岸吾妻郡六合村大字入山 右岸同 野反池流出口ヨリ 左岸吾妻郡六合村大字入山 右岸同 長野縣境界ニ至ル | 〇、一六、〇〇 |
| 同 | 同 榛名湖 | 群馬郡室田町字榛名山地内全面 | 周圍 一、〇八、〇〇 |
| 同 | 同 大沼 | 勢多郡富士見村字赤城山地内全面 | 同 〇一、〇〇 |
| （計） | | | 二七三、一一〇二 |

## 二　水害豫防及洪水防禦規程

明治二十五年三月八日、訓令甲第十七號を以て、水害豫防組合の設置を必要とする時は、名稱・區域・段別・地價・組合員・土地所有者・家屋所有者・事業舊慣の有無の事項を取調べ、且つ其事由を詳具し、稟申すべき旨を訓令せり。

此訓令を基として設置せられたるものに、渡良瀨水害豫防組合、及び利根川利害豫防組合ありて、共に邑樂郡にあり。前者は明治三十九年十二月の設立にして、渡良瀨川・谷田川筋組合區域内堤防に於ける、水害防禦を目的とし、館林・鄕谷・大島・西谷田・海老瀨・伊奈良・赤羽・多々良・渡瀨の各町村、土地所有者を以て組織し、事務所を邑樂郡役所に置き、邑樂郡長を以て管理者とす。後者は利根川筋組合區域堤防に於ける、水害豫防を目的とし、明治四十四年十月の創立なり。組合村は大川・永樂・長柄・三野谷・富永・六鄕・梅島・千江田・赤羽・大箇野の十一箇村にして、邑樂郡長管理者たり。

洪水防禦に就いては、明治四十四年七月、縣令第四十三號、水防委員設置規程、同縣令第四十四號、洪水防禦準備規程を定め、河川法を施行し、及び之を準用したる

河川に關係ある町村、又は其他の公共團體にして、特に指定したるものに、本規程により、豫め洪水防禦の準備をなすべき事を規定し、以て水害豫防に當らしむ。而して此洪水防禦準備規防により、洪水防禦準備をなすべき町村指定（大正六、七、二〇、告示百八十九號）地は左の如し。

利根川筋　群馬郡瀧川村、佐波郡上陽村・玉村町。

烏川筋　郡馬郡片岡村、多野郡新町・小野村・八幡村碓氷郡八幡村・豐岡村、佐波郡玉村町・芝根村。

碓氷川筋　群馬郡片岡村碓氷郡八幡村・豐岡村・板鼻町。

鏑川筋　多野郡八幡村・小野村。

神流川筋　多野郡美九里村・藤岡町・神流村・新町。

桐生川筋　山田郡桐生町・境野村。

渡良瀨川筋　山田郡桐生町・境野村・廣澤村・毛里田村。

## 第三項　河川改修工事

### 一　利根川

利根川（右岸群馬郡澁川町吾妻川合流點、左岸勢多郡北橘村）以下、海ニ至ルマデ、公共ノ利害ニ重大ノ關係アル河川ト認定シ、該川ニ就キ、明治三十七年十月一日ヨリ、明治二十九年法律第七十一號河川法ヲ施行ス。（明治三十年九月十一日内務省告示第五十九號。）

利根川は右の告示により、河川法を適用せられ、改修工事は明治三十三年度より、大正十六年度に至る、廿八箇年度繼續事業として、總工費六千三百四十萬三千百十七圓四十八錢五厘の豫算を以て、之を三期に分ちて、工事を施行せり。本縣は其第三期工事に屬し、明治四十三年度に着手せり。此第三期區域に屬する工事計畫の大要は、左の如し。

（計畫大要）

第三期區域に屬するものの内、上流沼ノ上・妻沼間は急流部にして、高水勾配千五百分一、乃至五百分一、妻沼・境間は緩流部にして、二千二百分一乃至三千三百分一、境・取手間は鈍流部にして、五千五百分一乃至一萬分一を有せしむる事とせり。

幅員に於ては、沼ノ上以下赤岩に至る間は、利根川高原部より始めて平地に出でたる部分にして、所謂氾濫部に屬し、其河幅は廣大にして、砂礫の沈澱多く、洪水毎に流路を變じ、舊堤は斷續不同、且つ河狀最險惡の部分たり。故に本改修計畫に於ては、大略現川を中心として五四四米の河道を設け、法線は掘鑿を施し、所要の斷面を與へ、尙兩岸に三六三・六の堤外地を存せしめ、遊水區域とし、以て危險性の河川に備へたり。然れども島村附近竝に前小屋附近は、屈曲甚しく、流路數派に岐れ、所謂亂流區域なるを以て、在來の河身に關せず、計畫法線を定め、不規則を匡正し、禍根を斷つ事とせり。又中瀨及び石塚、竝に秦村附近は、論所堤を控へ、數百年來水論絶ゆる事なき箇所なれば、此際大斧鉞を加ふるに非れば、到底完全なる整理を期すること能はざるを以て、何れも新堤を築造し、水害の根源を斷つこととせり。其結果、福川吐口には逆水樋門を設置することとせり。

利根川・烏川合流口は、殆んど直角を成し、之れがため幹川の水勢は、八丁河原に激突し、次いでは八斗島を襲ふのみならず、烏川は幹線のため流路を支らるるを以て、幹川の流身を左に轉ずる樣、法線を選定し、赤岩以下、三ッ堀間は大體五四五米の河幅を標準とし、法線を規定せり。此區間は河狀比較的良好なるを以て、可及

的現川に依り、幅員の足らざる部分は、此を擴張し、河積の足らざる部分は掘鑿を行ひ、河幅に餘地ある部分は、舊態に委ね、餘裕を與ふるの方針を採れり。其結果、富永・梅島・千江田・井泉・大越・中田・塚崎・關宿・長須・川間・莚打等は、何れも引堤をなすこととなれり。派川權現堂川は、分派點に於て締切り、專ら赤堀川を擴張して、本川となしたり。

此改修工事は、明治四十四年一月十日、事務所を埼玉縣北葛飾郡栗橋町に設置し、邑樂郡大箇野村外二箇村の土地買收に着手、同年十二月を以て、土地約七十町歩、家屋約四百二十四棟の買收、及び移轉を協議し、明治四十五年二月を以て、無事承諾を了し、同年二月一日より、其上流卽ち邑樂郡永樂村、及び佐波郡境町に土地買收に着手、大正元年十二月一日を以て、土地約四百七十七町歩、家屋約千四十五棟の買收、及び移轉を協議し、其承諾を了へ、大正二年より佐波郡島村より上流卽ち佐波郡芝根村に至る間を買收し、工區事務所を新田郡尾島町、外栗橋・田中に設置し、竣工を急ぎたる結果、大正六年度末に於て、略〻成功に近づきたるを以て、同七年五月、三區を合併し、栗橋町に第三期改修事務所を置き、殘工事全部を統轄し、斯くて本縣所屬の分は大正十年度殆んど完成の域に達せり。

## 二　渡良瀬川

本川は其上流に足尾鑛山を有するを以て、其汎濫は單に出水の被害のみならず、曾ては鑛毒の損害を伴ひたるを以て、明治二十三年八月の出水以來、所謂足尾鑛毒問題を惹起し、其被害に直面する每に、本縣々會の問題となり、帝國議會の問題となり、之が救濟の方法は講ぜられたれども、根本的解決方法に至らざりき。由つて明治三十九年の本縣縣會は、渡良瀬川河水汎濫に對し、河川法・砂防法・森林法、及び鑛業條例を古河鑛業主、並に渡良瀬川に對し適用を望む意見書を、內務大臣に提出したり。本川の流域は、本縣の外、栃木・埼玉・茨城三縣に跨り、其關係する區域亦大なるを以て、政府は河川法を適用して、改修工事を行ふに至れり。

渡良瀬川　左岸　栃木縣足利市／右岸　栃木縣足利郡山邊村　以下利根川合流地點マデ。

支川　秋山川・思川・巴波川。（以上栃木縣ニ屬ス。）

工事の大要は、明治四十三年度より大正八年度まで、十箇年計畫、七百五十萬圓の經費豫算を以て設計し、明治四十四年五月一日、之が事務所を茨城縣猿島郡古

河町に設置し、土地の買收に着手したるが大正四年度に於て、工事期を二箇年延長して、大正十年度までとし、其費用も金一千一百四十萬圓に増加したり。其施工は大正元年度に、一部買收濟の箇所より工事に着手し、藤岡新川開鑿部支川、巴波・思の兩川、及び古河町下流に於ける新川の附替工、並に遊水地周圍の築堤、及び浚渫工等、主として下流部の速成を圖り、大正五年、先づ古河町以下の新川の開鑿を了して、各、之を疏通せしめ、其他の諸工事は、大正十一年度に殆んど完成し、上流部は藤岡新川疏通以來、鋭意其進捗に努め、大正八年度以降、旗川左岸輪所部、並に右岸矢場川流末部の閉塞、旗川右岸堤の築設、及び秋山川附替、其他を完成し、大正十三年度に於ては、支川袋川逆水門樋、並に接續堤塘を竣成し、今後剩せるは岩井附近に於ける護岸工事の一部、及び既設部整理補修工事となり、思川亦大約施工を了り、殘すは鹽澤地先築堤、並に水門樋工と、既設工事の補修等のみとなれり。

以上二目大正十三年度内務省直轄工事年報に據る。

# 第十章　賑恤と旌表

## 第一節　賑恤救濟

### 第一項　賑恤

救荒濟世の實を舉げ、路に一人の餓莩なく、家に無告の窮民なからしむるは、一國治者の一要道なり。故を以て明治政府は、王政維新の翌年、即ち明治二年八月、太政官布達を以て、府縣奉職規則を各府縣に頒つに當りてや、其條欵中に、常に凶荒の慮をなし、豫め民患賑濟の備へを設け、鰥寡•孤獨•癈疾無告の窮民を速に救助すべき旨を達せらる。是に於て前橋藩の如き、藩内にある無檀•無住•荒壞の寺院を毀撤し、其空地を該村窮民に分授し、以て救恤の資に充てんとし、其允許を請ひ、明治三年四月岩鼻縣の如きは、舊管轄交附の窮民救助備金等を以て、備荒貯蓄の資に供せんことを、太政官辨官明治四年四月に申稟し、以て聖旨に副はんことを期せり。

明治七年十二月、恤窮規則太政官布達第百六十二號の發布あり。官給を以て無告の窮民を賑恤すべしとの旨なり。凶荒豫備に就ては、別に民部省より府藩縣に布告し

たるも、成案を見ず。依りて明治十二年、救荒豫備の實施を府縣に勸め、同十三年に至り、備荒儲蓄法を定め、地租金額に應じ、毎年課賦し、以て非常變災に準備する所あらんとせり。本縣にては、明治十一年九月二十四日、乙第百二號社倉義倉積穀方法設定につき、正副區戸長に向ひて、左の諭達と條例とを布達し、凶年賑貸の用に備へしめたり。

社倉義倉積穀方法設立

正副區戸長

天保以降、全國凶饑ナク、年々豐熟、人民久シク其慘毒ヲ蒙ルコトナキヲ以テ、自然蓄積ノ策ヲ建テズ。加之、向キニ鄕村在來ノ倉穀解散、適宜ノ命下ルヲ聞キ、僅カニ存置セルモノモ、又從テ影跡ヲ留メザルニ至ル。凡災害ハ備ナキヨリ大困難ナルハナシ。亞細亞大陸ニ於テ、遠クハ印度ノ凶歉、近クハ支那ノ窮厄ニ徵シ、預メ其備ヲナスニアラザレバ、天運循還、吾人覆車ノ轍ニ罹ントス。今ヤ實ニ社倉設立スベキノ秋ナラズヤ。然レドモ官民ノ間苟モ其當ヲ得ザレバ、方法美ナリト雖モ、其實行シ難シ。前政府之弊ハ、專ラ之ヲ民ニ委スルニアリ。故巡視ノ吏ヲ置キ、歲時檢按、頗ル蠹害ヲ防察セシモ、奸欺ノ禁ズベカラザルヨリ、遂ニ空稱アリテ、實物ナシ。官之ヲ覺知スルモ、積弊ノ仍ル所、又手ヲ措ク能ハズ、近頃岩鼻縣ノ如キ、積穀施設ノ擧アルモ、上下關鍵ノ術ニ疏ク、且蓄積之法ニ出ズシテ、衆庶之醵金ヲ以テ、單ニ官庫

ニ貯收シ、一朝小野組不意ノ困蹶アリテ、只ニ益ナキノミナラズ、信ヲ後來ニ失フニ至ル、豈嘆スベキニアラズヤ。爰ニ從前ノ得失ヲ考ヘ、廣ク衆議ヲ執リ、永久保存ノ方略ヲ畫リ、今般別冊條例ヲ設ケ、社倉ヲ民間ニ置キ、社國ノ共有トナシ、義庫ヲ管廳ニ建、全管ノ豫備トナシ、出納監視、共ニ節制アリ。人民私ヲ以テ公ヲ害スルヲ得ズ。官亦繁文、人民ヲ役スル煩ナク、輕重多寡、簿冊ニ就キ、直ニ實數ヲ知ラシメントス。此方ニ困テ施行セバ、凶荒ニ際シ、老幼飢餓ノ憂ナキノミナラズ、豪富ノ兼亂民ニ襲ハレ、一時紛擾ノ患ヲ免ルベシ。依之社倉資本トシテ、縣稅ノ内壹萬圓、每村人口ニ應ジ下附候條、管内ノ人民審思熟慮ヲ遂ケ、別紙條例ニ基キ、積穀方法ヲ設立候樣可致、此旨諭達候事。

社倉條例

## 社倉條例

第一條　結社法

一箇村ヲ以テ社倉ノ一團トシ、現在ノ伍組ヲ以、社倉組合トス。但二三箇村又ハ七八箇村ヲ以、一社團トスルモ妨ナシ。人民ノ便宜ニ從。

第二條　監守法

社倉ノ事務ハ、村吏ノ擔任トシテ、其組内取纒メモノハ各伍長ノ世話タルベシ。

每團檢査人二名ヲ置ク。（村吏ヲ除ク。）　但團中投票區長開封、之ヲ選定スルモノトス。檢

査人ハ該團ノ帳簿ヲ按シ、金穀出入ノ場所ニ立會、承認印ヲ捺スベシト雖モ、社倉ニ付村吏ノ事務ヲ執行スルヲ得ズ。正副區長ハ區内社倉ノ事務ニ付、一切ノ管理ニ任シ、積穀新舊出入ノ機ヲ誤ラザル樣、村吏ニ注目、提督スルモノトス。正副區長ハ區内毎團ノ書類ヲ整頓、之ヲ所轄廳主務課ヘ送致シ、主務吏員ハ管内巡廻實際閲視スベシ。主務吏員ノ補助トシテ、警察官吏モ亦實際閲視スル事アルベシ。

第三條　積穀法

社倉ハ毎團人口九十日ニ充ツルノ倉料ヲ以定額トス。（老幼男女ヲ不レ論、一人一日ノ食料、稻ハ籾一升、麥ハ同二升、雜穀ハ同三升。）當明治十一年ニ起リ、毎年十五日分ヲ積、明治十六年ニ至テ、定額ヲ充シム。但本文ハ貧村穀積ノ法トス。其資力アル町村ハ、本文年限以内定額ニ充ベシ。積穀ハ戸口・反別・收穫高等、適宜ニ割合、稻麥黍稷等、凡テ土地便宜ノ穀ヲ積ベシト雖、必籾ニ限ルベシ。又金錢代償ヲ許サズ。但穀類ニ乏シキ土地ハ、繭・絲・薪炭等所產ノ物ヲ出シ、於村吏之ヲ穀ニ換ヘ、藏置スルヲ法トス。

第四條　保存法

倉穀ヲ分テ甲乙二部トス。（甲乙各四十五日分ノ食料アリ。）翌年ニ至、穀相場ヲ考、甲部ヲ糶シテ金ニ換、乙部ヲ移シテ甲部トス。新穀登場ノ日、新穀ヲ糴シテ乙部トシ、以定額ニ備フ。年々如此以滯積、紅腐ノ患ナカラシム。但明治十六年定額金備造ハ、年々只積替フ

ルノミ。明治十七年ヨリ本文ノ法ヲ行フモノトス。

第五條　賑貸法

社倉ハ素ヨリ凶歲ノ豫備タリト雖凶荒ニ大小遠近アレバ其貸與ノ法モ亦區分ナカル可カラズ。依テ之ガ概則ヲ設クル如ㇾ左。但縣廳ノ允可ナクシテ倉穀ヲ出納スルヲ禁ズ。

第一、全國ノ凶荒ニハ倉粟ヲ悉シテ賑貸シ、返償ヲ求メズ。翌年ニ至リ、第三條ノ手續ヲ以更ニ積マシム。

第二、管内一般ノ凶荒ニハ息ヲ斂メズ、區戶長連印ノ證書ヲ以貸與セシム。

第三、水火風雹等、數郡數村ノ凶荒ニハ不動產ヲ抵當トシ、區戶長連印ノ證書、年一割以上二割以下ノ息ヲ斂メ、先ヅ息ヲ引去テ貸與ス。

第四、鰥寡孤獨、及不幸薄命凍餒目下ニ迫ル者、伍組連署辨償ノ證書ヲ出サシメ、第三項同一ノ息ヲ以、甲部內ヨリ貸與スルモ決シテ乙部ニ及可カラズ。但放蕩無賴自ラ貧困ニ陷ル者ニハ貸與セズ。

第六條　防奸法

賣却穀代金其他社倉ヨリ生ズル現金ハ、村吏立會檢査人ノ點檢ヲ經由シ、封印藏置、新穀買入ヲ除クノ外、他事ニ用ルヲ得ズ。

第七條　減費法

什二ノ息及ビ糶糴利得剩餘ヲ生ズル時ハ、村吏檢査人協議ノ上、金ニ換ヘテ藏置シ、一ハ以火盜難ニテ定額不足ヲ生ズル時ノ補トシ、一ハ以倉庫修繕等諸費ニ充ベシ。

第八條

社倉一切ノ諸費ハ、村費ヨリ貸給スベシ。

第九條

市街モ此規則ニ準シ施行スベシ。

## 義倉條例

第一條　義倉ハ管內ノ預備トシテ縣廳ニ設、官民共有トス。

第二條　義倉事務ハ縣官四名、(縣令選擧)、區長四名、(年番ニ奉事ス)、有志總代四名、(金穀十圓以上ヲ積モノ投票シテ)定、都合二一名ヲ委員トシテ、一切ノ事ヲ議行セシム。義倉委員ハ一年四次(二月・五月・八月・十一月)縣廳ニ會議スベシ。

第三條　義倉積穀ハ縣稅幾分、官吏準官吏及ビ有志ノ金穀ヲ募リ、於委員金ハ穀ニ換ヘ、貯藏スベシ。但金穀ノ外、繭・絲・薪・炭等便宜物產ヲ出スモ妨ナシ。於委員之ヲ穀ニ換ベシ。

第四條　義倉穀ハ毎年積替ヘントト雖、其糶糴期節ハ預定スベカラズ。必委員會議シ、決ヲ縣令ニ取テ施行スベシ。

第五條　義倉ハ天下ノ大凶ニ非ルヨリハ賑貸セズ。雖然左二項ニ於テハ委員會議、縣令ノ允可ヲ得テ賑貸ス。

第一　孝節不幸薄命ニシテ、其尊長ヲ養ニ悃ム者。

第二　全村又ハ連村、水火ノ炎害ニ罹リ、倉庫共ニ失亡セシ者ニハ、息ヲ斂テ賑貸ス。

第六條　倉庫修繕費及ビ諸雜費ハ、官民折半シテ償フベシ。

明治十四年一月、備荒儲蓄法施行規程を制定し、翌年五月、其一部を改定し、更に明治三十年七月に至り、備荒儲蓄管理支給規則を定めたり。既にして明治三十二年三月、政府備荒法を停め、罹災救助法を頒布するに及びて、本縣亦罹災救助基金法と改めたり。該基金は大正十四年九月末日調にて左の如し。

罹災救助基金法

| | |
|---|---|
| 有價證券 | 額面七十七萬六千三百二十五圓 |
| 現金 | 金七萬千九十五圓五十九錢三厘 |
| 貸出金 | 金四十二萬九千圓 |

計金百二十七萬六千四百二十圓五十九錢三厘

### 最近五箇年（自大正九年至大正十三年）縣罹災救助基金及支出額竝救助戶數人員表

| （年度） | 年度末基金現在高 | （年度內支出高）（救助費） | 町村罹災救助資金補助 | （其他） | （計） | （救助）（戶數） | （人員） |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 大正九年度 | 一、〇一二、九六二圓 | 二、三九六圓 | 二、七六八圓 | 五〇圓 | 五、二一四圓 | 五三四 | 二、七〇九 |
| 同十年度 | 一、〇五八、四一一 | 一、六二四 | 二、九四七 | — | 四、五七一 | 一三三 | 八五八 |
| 同十一年度 | 一、一〇七、四二〇 | — | 二、八一七 | — | 二、八一七 | — | — |
| 同十二年度 | 一、〇三三、二七八 | — | 二、一九四 | — | 三、一九四 | — | — |
| 同十三年度 | 一、二〇三、四四三 | — | 三、〇一三 | — | 三、〇一三 | — | — |

| （年度） | （救助費災害別支出高）（水災） | （風災） | （火災） | （其他） | （救助費費目別支出高）（避難所費） | （食料費） | （被服費） | （治療費） | （小屋掛費） | （就業費） | （雜支出） |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 大正九年度 | 一、〇一八圓 | 一〇〇圓 | 一、二七八圓 | —圓 | 二一六圓 | 一、一〇七圓 | 一四圓 | —圓 | —圓 | 九三圓 | 二三六圓 |
| 同十年度 | 六四八 | — | 九七六 | — | 五四 | 六三四 | 一〇九 | — | 一〇五 | 七三 | — |
| 同十一年度 | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — |
| 同十二年度 | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — |
| 同十三年度 | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — |

〔參考〕備荒儲蓄法施行規程（明治十四年一月八日甲第三號）

第一條　公儲スル金額ハ、地租百分ノ二分二厘ヲ以テシ、更ニ市街（五百戸以上ノ地）ハ、人口壹人ニ付（地租割ノ外）金貳錢ヲ賦スルモノトス。

第二條　儲蓄金徴收順序ハ、地方税·地租割ト同一ノ法ヲ以テ、同時徴收スベシ。

第三條　儲蓄金ハ縣廳ニ於テ管理シ、其半額ハ公債證書ニ交換シ、殘半額ハ各郡役所ニ分儲シ、該郡役所之ヲ管守ス。

第四條　儲蓄金ニ係ル諸費ハ、儲蓄金ノ内ヲ以テ支辨ス。

第五條　公債證書ハ縣廳ニ預リ置、分儲金ハ各郡役所ニ於テ、其所轄内ヘ支出ニ差閊ナキ締約ヲ以テ預ケ置クベシ。

第六條　儲蓄金收納支給及ビ利子收入經費支出等、年度ヲ以テ決算シ、次年ノ縣會ニ報告ス。

第七條　備荒儲蓄法第六條第一項ノ場合ニ於テ、給スル食料ハ男一人一日玄米三合（十五歳以下ハ女ノ割合ヲ以テ給ス）。女一人一日玄米二合ノ積ヲ以テ、最寄下米相場二十日救助ス。但罹災ノ狀況ニ依リ現物ヲ購入シテ給スル事アルベシ

第八條　同斷ノ場合ニ於テ給スル小屋掛料ハ、借家住居或ハ同居ノ者ヘハ給セズ。

第九條　罹災ノ狀況ニ依リ、目下窮困ニ迫ル者ハ、炊出ヲ給與シ、或ハ假ニ小屋ヲ

營ミ、一時ノ急ヲ救フコトアルベシ。

第十條　備荒儲蓄法第六條第二項ノ場合ニ於テ、地租ヲ納ムル能ハザル者ニハ、之ヲ貸與シ、其翌年ヨリ五ケ年賦ヲ以テ返納セシム。但災害ノ狀況ニヨリ、返納シ能ハザルモノハ、之ヲ猶豫シ、又ハ免除スルコトアルベシ。

第十一條　同斷貸與金未完納ニシテ、該地（或ハ幾部ヲ分割シ、）ヲ賣却スルトキハ、年賦ニ拘ハラズ、其地ニ係ル貸與金ハ、地券書替ノ日ヲ以テ一時ニ返納セシム。又之ヲ讓渡スルトキハ、其讓受人ニ於テ年賦返納スベシ。

第十二條　同斷貸與金未完納ニシテ、猶貸與セザルヲ得ザル場合ニ於テ、之ヲ貸與スル時ハ、最前貸與ノ金完納翌年ヨリ起算シ、五ケ年賦ヲ以テ返納セシム

第十三條　同斷貸與金未完納ニシテ、天災ニ罹リ荒地トナリタル時ハ、該地ニ係ル貸與金返納殘ハ棄損スベシ。

備荒儲蓄施行規則改定　（明治十五年五月十三日甲第四十一號）

公儲スル金額ハ、毎年縣會ノ決議ニ依リ徵收スベシ。

儲蓄金ハ縣廳ニ於テ管理シ、其半額ハ公債證書ニ交換シ半額ハ各郡役所ニ分儲シ、該郡役所之ヲ管守ス。

給スル食料ハ、男壹人一日玄米三合、女一日玄米二合ノ割合トス。

備荒儲蓄施行規則改定

## 第二項　救濟保護

### 一　社會課の設置及管掌事務

社會課の設置

輓近學術益〻開け社會の文化年と共に進むに及びては、單に天災地變に備ふるのみならず、濟貧恤窮に關する施設規定の公布を必要とすると共に、更に進んで感化保護施設の制定の急を告ぐるものあり。依りて本縣は此時代の趨勢に適應せんが爲め、種々企劃する所ありたり。大正九年には廳規を改正して、內務部に社會課を獨立せしめ、從來地方課に屬したる賑恤救濟に關する事務、及び學務課に屬したる感化保護事務を割きて之に屬せしめ、其他社會的事業に關する一切の事務を管掌せしめたり。

管掌事務

其管掌事務は左の如し。

一　賑恤救濟ニ關スルコト。
二　罹災救助ニ關スルコト。
三　軍事救護ニ關スルコト。
四　免囚保護ニ關スルコト。

五　感化事業。

六　行旅病人、行旅死亡人、精神病者ノ看護費ニ關スルコト。

七　恩賜財團濟生會一般事務ニ關スルコト。

八　同胞改善ニ關スルコト。

九　失業ノ救濟及防止ニ關スルコト。

一〇　住宅公設市場其他生活改善ニ關スルコト。

一一　營利ヲ目的トセザル社團又ハ財團法人ニ關スルコト。但シ他ノ主管ニ屬スルモノヲ除ク。

一二　民力涵養ニ關スルコト。

一三　他課ノ主管ニ屬セザル社會事業ニ關スルコト。

### 群馬縣社會事業協會

是れより先、明治四十一年十一月、大正天皇東宮に渡らせ給ひし時、近衛師團機動演習御統裁として、本縣に行啓あらせらるゝや、本縣有志は鶴駕奉迎の記念事業として、群馬縣社會事業協會を設立し、社會事業の普及發達、竝に其聯絡を圖り、社會事業の調査研究實施、竝に助成等の事業を興し、社會改善に資する所ありたり。本協會の事業は、本縣施設と相俟ちて、斯の救濟保護の事業上に貢獻したること尠少ならざりき。

## 二　救濟事業

### 甲　濟貧恤窮に關する法令

(一)棄子・迷子取扱手續。(明治二七、一一、五、訓令甲第百二號。)
(二)慈惠救濟資金管理規程。(明治三〇、七、二四、縣令第三十三號。)
(三)行旅病人及行旅死亡人取扱法。(明治三二、八、一六、訓令甲第七八號。)
(四)郡市町村罹災救助資金監督規程。(明治三三、三、二、縣令第十二號。)
(五)群馬縣災害準備資金管理規程。(明治三四、一二、二七、縣令第六九號。)
(六)恩賜財團濟生會群馬縣救療規程。(大正四、一二、二七、告示第二九八號。)
(七)賑恤資金管理規程。(大正五、三、三、縣令第六號。)
(八)軍事救護法施行細則。(大正六、一二、一四、縣令第四三號。)
(九)軍人援護資金管理規程。(大正六、一二、六、縣令第四號。)
(一〇)群馬縣方面委員規程。(大正一四、三、一三、縣令第一九號。)

## 乙　本縣救濟施設

(イ)慈惠救濟資金　明治三十年、英照皇太后の御大喪に際し、各地方慈惠救濟の御思召に依り、御內帑金六千九百圓を下賜せられたるを以て、之を元資とし、「特別會計慈惠救濟資金」を設定し、大正元年、明治天皇の御大喪に當り、更に御內帑金八千二百圓御下賜の恩命に浴したるを以て、之を基金に加へ、增殖の方法を講じ、其利金を以て一般社會事業、竝に感化事業の奬勵助成に資することゝなれり。

慈惠救濟資金高

資金現在高　(大正十四年九月末日現在)

有價證券額面　金三萬八百五十圓

農工銀行株券拂込金六萬四千六百圓

現金　五千百八十八圓四錢三厘

あり。大正十三年度の支出額は金七千五百圓にして、上毛孤兒院外十六慈善團體及び特殊學校に交付せり。

(ロ)軍人援護資金　明治三十九年、本縣に配布せられたる帝國軍人援護會の殘餘金、竝に大阪朝日新聞社の寄附金を元資とし、縣有財產中特別會計として

軍人援護の資金高

之を管理し、爾來其利金を以て、出征及び應召軍人の遺家族、若くは癈兵並に其家族に對する救護の資に充てつゝありしも、大正七年、軍事救護法の實施に伴ひ、同法に該當せざる者、及び同法の救護を受くるも、尚生計困難なる者に對し、其救護事務を愛國婦人會群馬支部に委託し、以て之に補助金を交付しつゝ今日に及べり。而して其資金現在高、及び補助金支出額は左の如し。

農工債券　額面金六千七百圓
甲號五分利公債同　千三百圓
五分利國庫債券同千六百七拾五圓
現金　千二百六拾八圓
支出額　大正十四年度六〇〇圓

窮民救助資金高

(八)賑恤資金　大正四年十一月、御卽位の御大典に際し、特に賑恤の御優旨を以て下賜せられたる御內帑金一萬三千七百圓を元資とし、之に逐年の縣費補充金を併せ、蓄積增加の方法を講じ、一面其利金を以て、窮民救助の奬勵に資することゝなれり。大正十四年九月末日の資金現在高は、

有價證券額面　金四萬七百七十五圓

農工銀行株券拂込金　一萬四千圓
現金　六千八百九圓六錢

にして、支出額は大正十三年度に六百四拾四圓〇九錢にして、慈善團體及び公共團體に賑恤奬勵金として交付せり。

濟生會群馬縣委托病舍

（二）恩賜財團濟生會群馬縣救療施設　抑も濟生會は明治四十四年二月十一日、明治天皇施藥救療の資とし、御內帑金壹百五十萬圓を御下賜あらせられたるに依り、之に有志の義金を加へて、財團法人として設置せられたるものにして、本縣は同會の委囑に依り、前橋市に恩賜財團濟生會群馬縣委托病舍を設置し、收容治療を施し、其他開業醫師、又は病院に救療を托し、普く其恩惠に浴せしめんことを期せり。之が爲め大正四年十二月、三宅知事は左の告諭を發して、本會設置の徹底を期せり。

群馬縣告諭第一號（大正四年十二月廿七日）

凡そ病苦は人生の最大不幸なるも、就中家貧にして、醫藥迨ばず、ために其生業を營むこと能はざるか、又は其天壽を全くせざる者の如きは、實に憫むべき極にして、悲慘事是より深甚なるはなし。畏くも　明治天皇には深く之を御軫念あらせ

らせ給ひ、如斯病苦者を汎く救はせ給ふべき叡慮を以て、巨額の御内帑金を下賜あらせ給ひたれば、是を基本として、恩賜財團濟生會の設立成り、朝野の搢紳亦義金を寄附するもの多し。依て不幸の人々に對し、救療の事業を開始し、既に本縣に在ては、其筋よりの委囑に依り、此趣旨を體して、救療の事業を實行せるも、未だ本會の趣旨洽く徹底せざるの憾なき能はず。困て今回規程を改正し、一層充分に其事業を行はんとす。救療事務に從事するものは、深く此點に留意し、宜しく生計窮迫し病苦に惱めるものは、速に最寄の市役所・町村役場、又は警察官吏へ申出、無料にして且即時にても容易く得らるゝ治療券を受け、直に便利のよき病院、又は醫師に就き、逸早く健康を恢復して、再び其業に服し、皇恩に酬い奉ると共に、邦家のために報效の途を竭さんことを期すべし。

大正四年十二月廿七日　　群馬縣知事　三宅源之助

大正十三年中の事業成績は、入院患者十五名(男一三、女二)、外來患者二百六十四名(男一三七、女一二七)なり。

(ホ)群馬縣方面委員制度　本制度は一般社會の實情を調査し、其改善向上を圖るため、大正十四年三月、縣令第十九號を以て創設し、先づ前橋・高崎・桐生の三市、及び伊勢崎町の四地方に實施を見、同年九月一日、各地共夫々事業を開始せり。

而して方面委員は、擔當區域内に於ける狀況を詳にし、凡そ左の事項の調査及び實行に從事す。

(イ)一般社會狀態、生活狀態を調査し、其改善向上を圖ること。
(ロ)保護又は指導を要する者、及び現に公私の救助を受くる者に付、其實情を精査し、適切なる方法を講ずること。
(ハ)社會設施の適否、過不及を調査し、其完備改善に努むること。
(ニ)風紀並生活方法の指導改善に努むること。
(ホ)其他特に委囑せられたる事項の調査實行に當ること。

大正十四年度歲出豫算は金一千九百五十五圓なり。

## 丙　各種團體の事業

| (團體名) | (創立年月日) | (所在地) | (組織代表者) | (事業の目的) | (大正十三年度經費豫算又ハ支出額) |
|---|---|---|---|---|---|
| 愛國婦人會群馬支部 | 明治三四、九、一 | 群馬縣廳 | 社團法人牛塚なを | 軍人遺族、癈兵、現役兵家族ノ救護、竝一般貧困者救濟、姙産婦幼兒保護事業 | 六四、四八〇・一〇 圓 |
| 帝國軍人後援會群馬支會 | 明治三九、一 | 同 | 支會長一名 牛塚虎太郎 | 軍人遺族、癈兵、竝現役兵應召軍人ノ家族救護 | (支)一、八六一・〇六 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 館林佛教積善會 | 明治四三、六 | 邑樂郡館林町大字館林 | 會員組織正村龍誠 | 窮民救助 | （支）八九・〇〇圓 |
| 前橋積善會 | 明治一三、四 | 前橋市前代田二五 | 會員組織前田順弁 | 貧民施療、並廉費診療 | （支）四、一八四・九一 |
| 日本赤十字社群馬支部 | 明治二〇、 | 群馬縣廳 | 牛塚虎太郎 | 戰時救護事業ノ準備、看護婦養成、平時救療、災害救護、結核病豫防、兒童妊産婦保護 | 六七、六六九・八七 |
| 草津聖バルナバ醫院 | 大正七、 | 吾妻郡草津二九〇ノ二 | 個人經營コン、ウォール、リー | 癩病患者貧困者施療 | 三一、〇六〇・〇〇 |
| 伊勢崎積善會 | 大正六、四、八 | 佐波郡伊勢崎町七〇一 | 會員組織鶴牧得之 | 社會福祉增進（佛教ノ本旨ニ基キ）、施療施米、無料宿泊 | （支）二一二・四〇 |
| 佐波郡醫師會救療部 | 大正九、一、一 | 佐波郡伊勢崎町甲六三四 | 會員組織坂口鍉之 | 佐波郡貧困者施療救療 | （支）六一五・〇〇 |
| 前橋養老院 | 明治三六、二、一六 | 前橋市芳町一七 | 個人經營田邊熊藏 | 六十歳以上ノ鰥寡孤獨ニシテ扶養義務者ナキ者ヲ救容 | （支）二、〇四九・三三 |
| 簡易宿泊所愛隣館 | 大正一四、九、一 | 前橋市芳町一七 | 前橋養老院附屬 | 失業者其他宿泊ニ窮スル者救助 | 五〇〇・〇〇 |
| 伊勢崎積善會無料宿泊部 | 大正六、四、 | 佐波郡伊勢崎町七〇一 | 伊勢崎積善會經營 | 失業者等ニ宿泊ニ窮スルモノニ無料宿泊 | （支）四四・四〇 |
| 桐生積善會職業紹介所無料宿泊所 | 大正一三、四、一 | 桐生市大字桐生三五一 | 桐生積善會經營 | 失業者ニ對シ無料宿泊 | （支）一九四・〇〇 |
| 無料宿泊所大月商店 | 大正九、九、一〇 | 桐生市大字桐生三六三 | 個人經營 | 困窮者無料宿泊 | （支）六〇〇・〇〇 |

## 三　保護感化教化事業

此事業は健全なる社會の建設を圖る爲めの一策として、多くは近來の施設にかゝる。分ちて兒童保護事業、福利事業、教化事業の三となす。

(イ)兒童保護事業ハ、亦孤兒・貧兒保護、保育事業、感化事業、盲聾唖教育、助産事業の五とす。

(ロ)福利事業ハ、職業紹介所、公益市場、授産事業、住宅事業の四とし。

(ハ)教化事業ハ、矯風事業、民力涵養、並勤儉奬勵、地方改善事業、釋放者保護事業、其他の感化事業の五とす。而して直接縣の之を施設し、或は勸奬するもの丶主要なるものは左の如し。

## 甲　兒童保護事業

### (イ)　孤兒貧兒等保護

| (名稱) | (創立年月日) | (所在地) | (組織代表者) | (事業ノ目的) | (大正十三年度支出額) |
|---|---|---|---|---|---|
| 上毛孤兒院 | 明治 三五、六、三〇 | 前橋市岩神町一四九 | 財團法人金子尙雄 | 孤兒・棄兒遺兒・迷兒・貧兒ヲ收容シ、義務教育ヲ施シ、獨立ノ生計ヲ營マシム | 九、三〇一・八一圓 |
| 高崎育兒院 | 明治 三九、五、一 | 高崎市下横町五 | 個人經營田邊鐵定 | 孤兒・貧兒等不遇ノ兒童ヲ收容シ養育教養ス | 三、一四一・九〇 |
| 高崎樹德學校 | 明治 三六、一〇、五 | 高崎市請地町二二三 | 個人經營山端息耕 | 貧困女兒ニ子守ヲシツ丶普通教育ヲ授クルニアリ | 一、五一三・九二 |

### (ロ)　保育事業

| (名稱) | (創立年月日) | (所在地) | (組織代表者) | (事業ノ目的) | (大正十三年度支出額) |
|---|---|---|---|---|---|
| 愛國婦人會群馬支部幼兒保育所 | 大正 二、八、一五 | 前橋市芳町九三 | 愛國婦人會群馬支部經營 | 勞働者ノ幼兒敎養 | 二、二三〇・六九圓 |

| (名稱) | (創立年月日) | (所在地) | (組織代表者) | (事業ノ目的) | |
|---|---|---|---|---|---|
| 前橋幼兒園 | 大正一三、七、一〇 | 前橋市萩町三五 | 上毛孤兒院經營 | 勞働者ノ幼兒教養 | 一五、九一三・二九 |
| 高崎幼兒園 | 大正八、一二、三 | 高崎市元紺屋町一七 | 會員組織 井上保三郎 | 勞働者ノ幼兒教養 | 四、〇九九・七一 |

## (ハ) 助產事業

| (名稱) | (創立年月日) | (所在地) | (組織代表者) | (事業ノ目的) | (大正十三年度支出額) 圓 |
|---|---|---|---|---|---|
| 黑保根村公設產婆 | 大正一三、九、一五 | 勢多郡黑保根村 | 村營 星野元治 | 廉價若クハ無料ヲ以テ助產及妊產婦ノ保護 | 一六〇・八〇 |
| 南橋村公設產婆 | 大正一三、一二、九 | 勢多郡南橋村 | 村營 天海昇平 | 同上 | 一三〇・〇〇 |
| 神川村公設產婆 | 大正一四、四、二一 | 多野郡神川村 | 村營 宮前右一郎 | 同上 | 一五〇・〇〇 |

# 乙　福利事業

## (イ) 職業紹介

| (名稱) | (創立年月日) | (所在地) | (組織代表者) | (事業ノ目的) | (大正十二年度經費支出額) 圓 |
|---|---|---|---|---|---|
| 前橋市職業紹介所 | 大正一一、一一、一四 | 前橋市立川町一四 | 市營 岸慶三 | 失業者救濟、需給兩者調節 | 一、五四〇・六〇 |
| 高崎市職業紹介所 | 大正一一、八、三一 | 高崎市通町九九 | 市營 星野九平 | 同 | 九七七・三〇 |
| 伊勢崎町職業紹介所 | 大正七、四、一 | 佐波郡伊勢崎町甲二三七 | 町營 戶谷清一郎 | 失業者保護、雇傭者・被雇傭者ノ紹介 | 一、六三三・〇〇 (大正十三年度) |
| 館林町職業紹介所 | 大正一四、四、一〇 | 邑樂郡館林町大字館林甲三九五 | 町營 近藤晋二郎 | 勞務、需給調節 | 九〇〇・〇〇 (豫) (大正十三年度) |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 桐生積善會職業紹介所 | 大正 九、七、 | 桐生市大字桐生三五一ノ二 | 桐生積善會經營 | 失業者保護、需給調節 | 一、五一五・三六 |

(ロ) 公益市場

| (名稱) | (創立年月日) | (所在地) | (組織代表者) | (事業ノ目的) | (大正十三年度經費支出額) |
|---|---|---|---|---|---|
| 高崎日用品販賣市場 | 大正 一二、三、一 | 高崎市八島町三三 | 會員組織金子薫藏 | 低利物品提供、市價調節 | 圓 三、〇四四・五四 |
| 勢多郡園藝組合共同販賣所 | 大正 七、四、二〇 | 前橋市 | 組合組織阿部勘作 | 組合員出產販賣、物價調節 | 四二〇・〇〇 |

(ハ) 授產事業

| (名稱) | (創立年月日) | (所在地) | (組織代表者) | (事業ノ目的) | (大正十三年度經費支出額) |
|---|---|---|---|---|---|
| 伊勢崎共立授產所 | 大正 三、九、五 | 佐波郡伊勢崎町同聚院內 | 有志組織岩井隆照 | 失業者ニ一定ノ職ヲ與ヘテ生活ノ安定ヲ圖ラシム | 圓 七五・〇〇 |

## 丙 教化事業

(イ) 民力涵養並勤儉獎勵

民力涵養に關し、大正八年三月、內務大臣訓令の五大要綱に基き、實行要目を制

内務大臣訓令五大要綱に基ける本縣實行要目

定し、其趣旨の徹底を期すべく、或は告諭及び訓令を發し、或は縣職員其他を派し、各地に於て講演せしめ、尚内務省より講師を聘して、講演會を開催したり。

内務大臣訓令五大要綱に基ける本縣實行要目

(一)立國の大義を闡明し、國體の精華を發揚して、健全なる國家觀念を養成すること。

(い)建國の精神を了解すること。
(ろ)敬神崇祖の實を擧ぐること。
(は)忠君愛國の信念を鞏固にすること。
(に)國家生活の眞義を領得すること。
(ほ)世界に於ける帝國の地位並に使命を自覺し、國民的意識を確立すること。

(二)立憲の思想を明瑩にし、自治の觀念を陶冶し、公共心を涵養し、犧牲の精神を旺盛ならしむること。

(い)立憲の意義を明瞭にし、欽定憲法の精神を理解すること。
(ろ)自治の觀念を明確にし、地方自治の改善發達を圖ること。
(は)責任觀念を旺にし、公德心の養成に努むること。

(三)世界の大勢に順應して、銳意日新の修養を

(い)廣く智識を吸收し、世界の大勢に通曉すること。
(ろ)研究心を促進し、積極敢爲の精神を養成すること。

積ましむること。

(は)國民體育の向上を圖ること。

(四)相互諧和して、彼此共濟の實を擧げしめ、以て輕進妄作の憾なからしむること。

(い)共同生存の眞義を領得せしむること。

(ろ)社會政策上の施設を實行すること。

(は)自重自制の良習を養ふこと。

(五)勤儉力行の美風を作興し、生産の資金を増殖して、生活の安定を期せしむること。

(い)勤儉の趣味を助長すること。

(ろ)貯蓄心を涵養すること。

(は)衣食住の改善を圖ること。

勤儉を奬勵して民風を作興することは、爲政家の一要諦たるを以て、本縣の風俗、婚姻に多額の費用をかくる弊あるを見て、明治七年一月、之が節約を布達したることあり。明治十八年八月には、農商務省達第二十號の意を體し、郡役所に向つて勤儉貯蓄勸誘方を訓令したることあり。翌十九年には、養蠶・米作共に豐饒に際したれば、此機を利用して、貯金を奬勵すべきことを、十月八日、各郡長へ内訓したり。明治三十七八年戰役中は、戰時に於ける教育上の施設中に、奢侈を戒め、困苦缺乏に堪ふる習慣を養成すること、及び學校生徒に郵便貯金を奬勵するこ

との項目を置きて、勤儉を奬勵したるが、時局に際しては、縣下一般に勤勉貯蓄の風振興し、其成績の見るべきもの各地に少からざりき。明治四十二年十月十二日、戊申詔書御下賜記念日を期して、勤儉貯蓄奬勵方法を頒ち、勤儉貯金組合準則を設け、次いで實行方法細則を規定し、縣下小學校・中等學校生徒に至るまで、實施要項を示せり。而も時代の趨勢は、益〻質實剛健の民俗を作り、勤儉力行の國風を興し、以て國力充實するの急務なるを認め、曩に下賜せられたる戊申詔書、及び國民精神作興に關する詔書の御趣旨を奉戴し、政府に於て閣議の決定を經て定められたる勤儉奬勵に關する計畫の趣旨に基き、大正十三年九月、本縣計畫要綱を定め、第一に綱領を示し、次に其實績を擧ぐるため、機關として勤儉奬勵群馬縣委員會、及び群馬縣郡市委員會を組織し、其決議に基き、各種の協議會を催して、實行方法を定め、講演會・活動寫眞會等を開催して、趣旨の普及を圖り、各方面の施設と相俟ちて、官民協力之が實效の擧揚に努めつゝあり。因に本計畫要綱中の勤儉奬勵の綱領は、左の如し。

(一)戊申詔書、竝國民精神作興に關する詔書の趣旨を普及徹底せしめ國民をして之か實踐躬行を期せしむること。

(二)質素勤勉、貯蓄の道徳的竝に經濟的意義を闡明し、且其力行の必要なる所以を明にすること。

(三)刻下我國財政竝經濟の難局に在るを明にすると共に、國際貸借の狀勢に鑑み、貿易振興の必要を說き、以て國民の反省自覺を促すこと。

(四)無爲徒食は勿論、荒怠の個人的竝に社會的に不可なる所以を明にし、國民擧て勤勞を尙び、業務を樂しむの氣風を養ふこと。

(五)能率增進の方法を講じ、優秀なる成果を收めしむること。

(六)勉めて國產品を以て外國品の使用に代へ、贅澤品に就ては、之が消費を抑制する要あるを說明すること。

(七)生活を簡素にして、社會生活に於ける各種の弊習を矯正するの必要につき、國民の覺醒を促すこと。

(八)公債の應募、債券の購入、郵便貯金、產業組合の利用、其他の方法に依る貯蓄を奬勵すること。

(ロ) 地方改善事業

本縣に於ける部落は、其數二百二十二、戶數四千百十六にして、人口二萬五千餘に達す。之が改善に關しては、夙に意を用ゐ、部落民の自覺向上を促すと共に、一

般民の因襲的賤視觀念の打破に努め來りしが、更に大正十一年三月、部落改善補助規程を設け、別記事業に對しては、補助金を交附し、以て之を助成するの外、大正十四年度よりは、縣自ら主體となりて、講習講演會・協議懇談會、乃至視察奬勵等を行ひ、極力物心兩面に亙りて、部落の改善を期すると同時に、一般民の理解促進を圖りつゝあり。

補助規程該當事業

（一）教育に對する特別施行。
（二）講習講話會の施設。
（三）生業の奬勵及其の改良に關する施設。
（四）移住及出稼。
（五）集會場の新築又は改築
（六）共同浴場の新設又は改良。
（七）井戸・上水道及下水道、又は便所の新設改良。
（八）トラホーム其の他疾病治療に關する設備。
（九）居住地域の整理。
（十）道路の改良。

(十二) 住宅の新築又は改築。

(十三) 其他の部落改善上必要と認むる施設。

猶融和機關として設立し、施設したる會は、大正十一年四月より大正十四年四月まで、七施設あり。 或は融和事業の施行、或は改善事業の勵行、精神開發等に對し、夫々機能を發揮しつゝあり。

(ハ) 釋放者保護事業

釋放者保護事業は、明治三十一年、前橋市天川町橋本圓太に依り着手せられ、爾來同人の事業は、年を逐うて隆盛に赴き、又幾多の變遷を免かれざりき。 明治四十二年、本縣に於ては、新刑法竝に監獄法の實施に伴ひ、獨り監獄行刑のみにては、到底刑罰の效果、卽ち犯罪の輕減を期することの困難なるを認め、釋放者保護事業の發達を奬勵し、同年二月、群馬縣令第十一號を以て、他府縣に率先、出獄人保護規程及び同取扱手續等を發布し、所轄警察署長・市長・町村長を直接の保護者とし、之に本人歸住地の小學校長を參與せしめ、以て管內釋放者に對し、相當保護を加へて、感化誘導せしむる。 而して同規程の發布は、廣く縣民をして斯事業の必要を感ぜしめ、就中各宗寺院の僧侶は、痛切に其刺戟を受け、彼等釋放者の保護は宗

教家の天職なりとし、規定發布と同時に、各郡市に十五團體の勃興となり、盛に活躍するに到れり。此各宗寺院住職經營の團體は、其初め縣令に依りて定められたる法定保護機關の誘導に依り、別働體として、組織せられたるも、漸次各團體の保護機關整頓するに從ひ、各地何れも當面保護の責任を宗教團體に一任し、郡市町村は或は補助金を交附し、或は後援者となり、警察署長の助力とに依り、保護の實を擧ぐるに至れるを以て、刑餘者を郷黨的、間接的に保護をなすことゝなれり。是より先、明治四十五年、群馬縣佛教中央保護會の連絡を圖り、進んで大正二年五月に至り、群馬縣佛教聯合保護會の組織を見、始めて各郡市に分立の地方團體が、一致協力の下に連絡統一して、縣内保護事業の發達を期するに至れり。是に於て前橋市天川原松竹院に事務所を設け、直接保護を開始せしが、收容者頓に增加し、到底保護の要求を滿たす能はざるを以て、大正三年二月、事務所並に直接保護收容所新築の議起り、時恰も御大典擧行の年に遭遇せしを以て恰好の記念事業として設立に決し、前橋市宗甫分二三二の地をトし、大正三年八月起工、翌四年一月竣工し、事業を開始せり。大正十一年組織を變更して、財團法人とし、以て今日に及べり。大正十三年中、此團體が直接保護したる人員は、男四十六人なり。

# 釋放者保護團體

| (團體名) | (創立年月日) | (所在地) | (組織) | (目的) | (大正十三年度經費支出額) 圓 |
|---|---|---|---|---|---|
| 財團法人群馬縣佛教聯合保護會 | 大正 二、五、― | 前橋市宗甫分二二三二 | 財團法人 | 直接保護 | 四、一九七・二三 |
| 勢多郡佛教各宗協會 | 明治四三、四、― | 勢多郡役所内 | 會員組織 | 間接保護 | 五二一・〇二 |
| 群馬郡佛教協和會 | 明治四三、一〇、― | 群馬郡總社町 | 同上 | 同上 | 五二三・〇九 |
| 多野郡各宗協會 | 明治四三、六、二五 | 多野郡藤岡町 | 同上 | 同上 | 三六三・七五 |
| 甘樂各宗和敬會 | 明治一七、九、一五 | 北甘樂郡富岡町 | 同上 | 同上 | 二〇七・八〇 |
| 碓氷郡各宗協會 | 明治四三、三、一〇 | 碓氷町安中町 | 同上 | 同上 | 二五〇・〇〇 |
| 吾妻樹德會 | 明治四二、八、― | 吾妻郡澤田村 | 同上 | 同上 | 一七四・九五 |
| 利根佛教會 | 明治四三、一二、― | 利根郡沼田町 | 同上 | 同上 | 四八二・八三 |
| 佐波各宗協會 | 明治四二、―、― | 佐波郡伊勢崎町 | 同上 | 同上 | 二八八・三一 |
| 山田郡各宗協會 | 大正 六、四、一 | 山田郡役所内 | 同上 | 同上 | 三七七・九六 |
| 新田各宗協會 | 明治四三、五、一〇 | 新田郡太田町 | 同上 | 同上 | 二四六・一七 |
| 邑樂郡各宗協會 | 大正 七、四、六 | 邑樂郡役所 | 同上 | 同上 | 五三七・六〇 |
| 前橋各宗協會 | 大正 二、六、― | 前橋市立川町 | 同上 | 同上 | 二六八・九九 |
| 高崎各宗協會 | 明治四四、六、― | 高崎市新町 | 同上 | 同上 | 三三〇・四六 |
| 桐生各宗協會 | 大正一〇、七、― | 桐生市下久方 | 同上 | 同上 | 二八七・二一 |

（主として群馬縣社會事業協會發行群馬縣社會事業便覽に據る。）

# 第二節　旌表

## 第一項　明治初年以降褒賞狀況

忠孝・節義・力行・篤行の人士を旌表し、一般の徳行を勸奬し、社會風教の向上に資したるは、舊幕時代既に之を實行せる所なり。明治政府亦此方針を採用し、百事草創の際と雖も、夙に留意する所あり。明治元戊辰年十月二十七日、孝子・義僕等の旌賞に就き、全國に通牒し、其該當者を稟申せしめたり。由りて本縣にては、岩鼻縣權知事小室彰は、高山彦九郎の祠宇造立に就き、左の建言書を太政官辨官に提出し、追賞方を乞へり。太政官其建言を容れ、彼が子孫に三人扶持を下賜せり。

高山彦九郎祠宇造立建言

高山彦九郎祠宇御造立建言

方今勤王有功ノ列藩首メ、追々御褒賞ノ御沙汰ニ相成候ノミナラズ、大塔宮・楠中將、其外豐太閤・大石良雄輩ニ至ルマデ、遠ク其赤心ヲ御恤愓被レ爲レ遊、各祭祠追奠被レ爲二仰出一候。覆載至仁之聖慮、感泣ニ不レ奉レ堪、謹而奉二建言一候。抑高山彦九郎儀ハ、當縣管轄內上州新田郡細谷村ノ産ニテ、夙ニ民間ヲ發シ、衆ニ先チ勸王ノ志厚ク、終身孜々

矻々東西ニ奔走、最後舊幕ノ嫌疑ヲ受ケ、筑後國ニ於テ屠腹仕候モ、全ク尊王ノ赤心ニ出候儀ニテ、素ヨリ一時ノ聲ヲ釣リ名利ヲ僥倖仕候徒ニ無之、實ニ勤王ノ嚆矢トモ可謂歟。其王室ニ功勞有之候事、章々トシテ天下有志者ノ普ク知ル所ニ御座候。然ルニ當時其祭統ヲ繼ギ、靈魂ヲ祭リ候者無之、纔ニ其女孫守三郎ナル者、上州山田郡桐生町ニ於テ傭夫ト相成、幽煙絶エザル綫ノ如ク、寔ニ以テ愍然ノ至ニ御座候。仰冀彼ノ舊勳ヲ被思食、朝廷ニ於テ右細谷村ナル舊廬跡ヘ一祠ヲ御造立相成、俸米七口若クハ五口ヲ附與シ、孫守三郎ヲシテ其靈ヲ祭ラシメ、猶其嗣續永ク追祀被仰付候樣仕度、偏仰御執奏候。謹言。

明治二巳年十一月　　　岩鼻縣權知事　小室彰

辨官御中

褒狀其他に就いては、別章(第三卷五四七頁參照、)に述べたれば、參照す可し。勤王若しくは公益を興し、地方文運の上に特に功勞ありし者に對して、贈位又は叙位の恩命に及びし者少なからず。而して其事蹟に就いて前に叙せしものあれば、夫等に讓りて詳說せず。今左に略表を揭げて索出に便にせんとす。

被贈位者及敍位一覽

| （氏名） | （贈位記） | （宣下年月日） | （事蹟） |
| --- | --- | --- | --- |
| 高山正之 | 正四位 | 明治十一年三月八日 | 勤王 |
| 新田義貞 | 正一位 | 同　十五年八月七日 | 忠誠 |
| 脇屋義助 | 從三位 | 同　十六年八月六日 | 同 |
| 秋元志朝 | 從三位 | 同　廿九年五月廿日 | 勤王、帝陵修築 |
| 關新助 | 從四位 | 同　四十年十一月十五日 | 數學者（算聖） |
| 新田義顯 | 從三位 | 同　四十二年九月十一日 | 忠誠 |
| 新田義興 | 從三位 | 同日 | 忠誠 |
| 新田義宗 | 從三位 | 同日 | 忠誠 |
| 秋元長朝 | 正四位 | 同　四十五年二月廿六日 | 民政（天狗岩用水） |
| 秋元喬知 | 從三位 | 大正元年十一月十九日 | 皇居造營奉行、用材獻上 |
| 秋元禮朝 | 正四位 | 同　四年十一月十日 | 勤王 |
| 脇屋義治 | 正四位 | 同日 | 忠誠 |
| 榊原康政 | 正四位 | 同日 | 民政（治水植林） |
| 金谷經氏 | 正四位 | 同日 | 忠誠 |
| 大館氏明 | 正四位 | 同日 | 同 |
| 秋田文雄 | 從五位 | 同日 | 同 |

| | | | |
|---|---|---|---|
| 齋田明善 | 從五位 | 同日 | 勤王 |
| 村上俊平 | 從五位 | 同日 | 同 |
| 大久保鼎 | 從五位 | 同日 | 同 |
| 岡上治郎兵衛 | 從五位 | 同日 | 同 |
| 大谷新左衛門 | 從五位 | 同日 | 民政 |
| 橋本通 | 從五位 | 同六年十一月十七日 | 勤王（上毛及上毛人第十六號、上野人物志中參照） |
| 大舘謙三郎 | 正五位 | 同七年十一月十八日 | 勤王 |
| 松田正雄 | 從五位 | 同日 | 同（上毛及上毛人第廿五號、人物志中卷五一頁參照） |
| 齋藤大之進 | 從五位 | 同日 | 外交功勞 |
| 船津傳次平 | 從五位 | 同日 | 農事改良（上毛及上毛人第廿五號、人物志中卷三三一頁參照） |
| 高山長五郎 | 從五位 | 同日 | 養蠶改良（上毛及上毛人第廿五號） |
| 小島伴左衛門 | 從五位 | 同日 | 民政（同上） |
| 安井與左衛門 | 從五位 | 同日 | 民政 |
| 金井彥兵衛 | 從五位 | 同日 | 勤王 |
| 堀口貞歆 | 從五位 | 同十三年二月十一日 | 文教 |
| 岡谷瑳磨介 | 從五位 | 同日 | 滯治 |
| 小野善兵衛 | 從五位 | 同日 | 公共事業（上毛及上毛人八十三號贈從五位小野善兵衛翁傳中參照） |

明治三年十一月八日、太政官は府縣に令し、賞與金は五兩、米は二苞以內は專裁を許し、其數人に涉る者は稟請せしむ。十二月に至り、事急ならざる者は、制限內と雖も之を稟請し、專裁する者は直に上申せしむ。六年三月、第一次群馬縣時代に於て、管內に令し、孝悌・篤行等詳細具狀せしむ。令に曰く、

一　人並ニスグレ、
一　親ニ孝行スルモノ、
一　主人ニ仕ヘ方ヨロシキモノ、
一　家內睦ク、農業其外總テ家業出精致スモノ、
右ノ者共、宿村町限リ取調、本人ノ行狀悉シク相認メ、士民共、區長並ニ正副戶長ニテ取纏、來ル四月中、本廳へ可差出者也。
　但本文ノ趣ニ寄、舊支配幷又ハ地頭ヨリ是迄御褒美ニテモ被下候者ハ、其廉ヲモ相認可差出候事。

明治六年三月　群馬縣令　河瀨秀治

是等によりて旌表せられたる者、明治十二三年頃までに計廿五人あり。

孝子　十一人　貞婦　一人
賑窮興利及學事篤志者　九人　義僕　一人

力田　　二人　　憂國　　一人

計二十五人

又明治十二年九月、學校・病院、其他道路・橋梁・濟貧・恤窮等の爲め、金圓又は物品等を差出候者へ、自今賞狀竝に賞盃下附に及ぶ旨、郡役所に布達せらる。本縣達乙第一五八號。



## 第二項　褒章條例に據る旌表者

明治十四年十二月七日、太政官は布告第六十三號を以て、褒章條例を定め、翌年一月一日より施行せり。卽ち四種の褒章を定め、(一)紅綬褒章は自己の危難を顧みず、人命を救助したる者、(二)綠綬褒章は孝子・順孫・節婦・義僕の類にして、德行卓絶なる者、又は實業に精勵し、衆民の模範たるべき者、(三)藍綬褒章は學術・技藝上の發明・改良・著述、敎育・衞生・慈善・防疫の事業、學校・病院の建設、道路・河渠・堤防・橋梁の修築、田野の墾闢、森林の栽培、水產の繁殖、農商工業の發達に關し、公衆の利益を興し、成績著明なる者、又は公同の事務に勤勉し、勞效顯著なる者、(四)紺綬褒章は公益の爲

め、私財を寄附し、功績顯著なる者に賜ふものとせり。十六年一月、金銀木盃下賜の制を定められ、褒狀・木盃等を賜ふことを知事に委任せり。二十年五月廿四日には、勅令第十六號を以て、黃綬褒章を制定せられ、私財を獻納し、防海の事業を贊成する者に授與することゝす。章には金章・銀章の二種あり。

## 一　褒章受領者

### （イ）藍綬褒章受領者

| （年月日） | （住所） | （氏名） | （事蹟） |
|---|---|---|---|
| 明治一六、一二、二八 | 北甘樂郡馬山村 | 神戸禎三郎 | 公衆ノ利益ヲ興ス（道路改修）人物志中ノ三四五頁 |
| 同　一八、五、二八 | 前橋市 | 深澤雄象 | 同（蠶絲改良） |
| 同 | 南勢多郡水沼村 | 星野長太郎 | 同　人物志中ノ三三四頁 |
| 同　二三、一一、四 | 同（飾版） | 同 | 同（審査官） |
| 同　二三、一一、五 | 勢多郡（農商務省二等技手） | 船津傳次平 | 同　農蠶改良（審査官）人物志中ノ三三〇頁 |
| 同　二五、九、七 | 北甘樂郡馬山村（飾版） | 神戸禎三郎 | 同（教育自治製絲） |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 同 | 二七、一二、一五 | 佐位郡伊勢崎町長 | 武　孫平 | 公共事務ニ勉勵（地方自治）上毛及上毛人四五號、人物志中ノ二五六頁 |
| 同 | 三四、一、二三 | 多野郡吉井町 | 小林省吾 | 同（教育）人物志中ノ二六四頁 |
| 同 | 三五、五、六 | 北甘樂郡高瀨村 | 齋藤壽雄 | 同（衛生） |
| 同 | 三七、一〇、五 | 同　郡吉田村長 | 小柴龜吉 | 同（地方自治）人物志中ノ二五九頁 |
| 同 | 三七、一二、二三 | 新田郡強戸村長 | 岡部駒次郎 | 同 |
| 同 | 四〇、五、一一 | 新田郡綿打村長 | 荒牧孫三郎 | 公衆ノ利益ヲ興ス（地方自治）人物志中ノ二五七頁 |
| 同 | 四四、六、二八 | 山田郡桐生町 | 森　宗作 | 同（機業發電） |
| 大正 | 二、一一、五 | 北甘樂郡富岡町長 | 古澤小三郎 | 同（地方自治、製絲） |
| 大正 | 三、一二、二四 | 利根郡桃野村 | 小野善兵衛 | 同（養蠶、教育） |
| 同 | 四、一一、一三 | 邑樂郡館林町長 | 熊谷直方 | 同（地方自治、織物市場） |
| 同 | 四、一二、九 | 佐波郡島村村長 | 田島彌四郎 | 同（地方自治、蠶業） |
| 同 | 四、一二、九 | 同　豐受村長 | 松本宗藏 | 同（地方自治） |
| 同 | 五、一、三〇 | 高崎市九藏町 | 須藤清七 | 同（製絲改良、電氣事業） |
| 同 | 七、八、一五 | 群馬郡伊香保町 | 木暮武太夫（秀家） | 同（溫泉場開發）上毛及上毛人廿二號 |

（ロ）綠綬褒章受領者

| （年月） | （住所） | （氏名） | （事蹟） |
|---|---|---|---|
| 明治一五、一〇、一三 | 西群馬郡中郷村 | 後藤貞三郎 | 孝行 |
| 同　一五、一〇、五 | 佐位郡島村 | 田島彌平 | 實業ニ精勵（蠶種改良）人物志中ノ二九七頁、上毛及上毛人三三三號 |
| 同　一五、一〇、六 | 西群馬郡清里村 | 松下政右衛門 | 同（蠶業改良） |
| 同　上 | 北甘樂郡富岡町 | 佐藤國太郎 | 同 |
| 同　一五、一〇、一九 | 前橋町 | 松本源五郎 | 同（士族授産ニ盡力、蠶絲業改良） |
| 同　上 | 山田郡廣澤村 | 藤生佐吉郎 | 同（織物改良）人物志中ノ三四二頁 |
| 同　上 | 山田郡桐生町 | 森山芳平 | 同　人物志中ノ三三九頁 |
| 同上（明治三九、飾版　大正六、四、叙位） | 綠野郡美九里村 | 町田菊次郎 | 同（養蠶改良）人物志中ノ三五四頁 |
| 同　一五、一〇、二三 | 佐位郡殖蓮村 | 下城彌一郎 | 同（織物改良）人物志中ノ三五〇頁 |
| 同　一五、一〇、一九 | 同　郡三郷村 | 德江八郎 | 同（蠶絲業改良） |
| 同　二六、一二、八 | 碓氷郡磯部村 | 萩原鐐太郎 | 同（製絲改良）上毛及上毛人四號、人物志中ノ三五三頁 |
| 同　三三、三、八 | 勢多郡横野村 | 角田喜右作 | 同（養蠶製絲、興業）人物志中ノ三四五頁 |
| 同　上 | 碓氷郡原市町 | 眞下邑三 | 同（製絲） |
| 同　三三、二、二二 | 多野郡神流村 | 中山金兵衛 | 同（興農、養蠶） |
| 同　上 | 山田郡休泊村 | 武藤幸逸 | 同（勸農）人物志中ノ三四四頁 |
| 同　上 | 同　郡桐生町 | 横山嘉兵衛 | 同（織物）人物志中ノ三四一頁 |

| 年月日 | 住所 | 氏名 | 事蹟 |
|---|---|---|---|
| 同 三二、三、二七 | 前橋市國領町 | 高須泉平 | 同(士族授産、製絲) |
| 同 三九、二、八 | 綠野郡美九里村(飾版) | 町田菊次郎 | 同(養蠶) |
| 同 四一、一〇、一三 | 北甘樂郡磐戸村 | 佐藤量平 | 同(下仁田社) |
| 同 上 | 同 郡 | 齋藤正次郎 | 同(製絲) |
| 同 四一、一〇、一三 | 同 郡吉田村 | 山口太三郎 | 同 |
| 明治四二、八、三(大正四叙位) | 碓氷郡磯部村(飾版) | 萩原鐐太郎 | 同(製絲改良) 人物志中ノ三五三頁 |
| 大正 五、四、三〇 | 山田郡廣澤村 | 飯塚春太郎 | 同(機織) |
| 同 九、七、二 | 前橋市向町 | 岡部傳平 | 同(器械、製絲) |

## (ハ) 紺綬褒章受領者

| (年月日) | (住所) | (氏名) | (事蹟) |
|---|---|---|---|
| 大正一〇、八、二八 | 多野郡吉井町 | 塚越文右衛門 | 縣道改修費ニ二萬圓寄附 上毛及上毛人五四號 |
| 同 一〇、一二、二六 | 前橋市新町 | 江原芳平 | 公益事業費トシテ一萬圓寄附 |
| 同 一一、一一、一三 | 桐生市大字下久方 | 和田正秀 | 桐生市基本財産ニ土地建物寄附 |
| 同 一一、一二、一二 | 佐波郡宮郷村 | 森村堯太 | 伊勢崎町外十五町村基本財産ニ一萬一千五百圓寄附 人物志中ノ二六五頁 |
| 同 一四、四、一六 | 北甘樂郡磐戸村 | 青木喜十郎 | 磐戸村小學校基本財産ニ土地及立木杉寄附 |

| | | | |
|---|---|---|---|
| 同　一五、一一、五 | 前橋市曲輪町 | 羽生田仁作 | 勢多郡富士見村費ニ一萬三百圓寄附 |

### （三）黄綬褒章受領者

| （年月日） | （住所） | （氏名） | （事蹟） |
|---|---|---|---|
| 明治二〇、月日未詳 | 横濱（群馬郡高崎の人） | 茂木惣兵衛 初代 | 生絲貿易、學校設立、道路改良、橋梁架設、海防費獻上 人物志中ノ三一七頁 |

## 二　特例金銀杯受領者

（褒賞條例第一條ニ準ズベキ奇特ノ行爲ニシテ賞勳局ヨリ旌表ノ者）

| （年月日） | （賞品別） | （住所） | （氏名） | （事蹟） | （褒賞官衙） |
|---|---|---|---|---|---|
| 明治一八、六、五 | 金圓 | 佐波郡 | 田島彌平 | 養蠶 | 農商務省 |
| 同　上 | 同 | 勢多郡 | 桑島新平 | 蠶絲、蠶種 | 同　上 |
| 同　上 | 同 | 北甘樂郡 | 佐藤國太郎 | 蠶種 | 同　上 |
| 同　上 | 同 | 佐波郡島村 | 田島武平 | 蠶種 | 同　上 |
| 同　上 | 同 | 碓氷郡 | 萩原茂十郎 | 製絲 | 同　上 |
| 同　上 | 同（追賞） | 前橋市 | 勝山宗三郎 | 製絲 | 同　上 |

| 年月日 | 賞品別 | 住所 | 氏名 | 事蹟 | 褒賞官衙 |
|---|---|---|---|---|---|
| 同 二五、三、二五 | 同（追賞） | 多野郡美九里村 | 高山武十郎 | 養蠶 人物志中ノ二九九頁 | 賞勳局 |
| 同 二六、九、四 | 金杯（追賞） | 前橋市 | 下村善右衛門 | 公益 上毛及上毛人八號、人物志中ノ三〇七頁 | 同上 |
| 同 三七、九、二四 | 金圓 | 前橋市 | 小川八重 | 忠婢 | 同上 |
| 同 四三、五、三〇 | 銀杯 | 吾妻郡草津町 | 安仲五郎次 | 公益 | 同上 |
| 大正元、一二、四 | 銀杯 | 前橋市 | 速水堅曹 | 蠶絲業 | 同上 |
| 同 五、二、一九 | 同 | 利根郡赤城根村 | 林貞次郎 | 公益 | 同上 |
| 同 六、一二、二一 | 同 | 山田郡桐生町 | 小野里庸之助 | 機織 | 同上 |
| 未調 | 同 | 山田郡桐生町（東京市牛込區） | 書上文左衛門 | 織物販賣 | 同上 |

## 三 定例木杯金圓褒狀受領者 公益ノタメ盡シタル者 實業精勵者

（褒章條例第一條ニ準ズベキ奇特ノ行爲者ニテ地方長官ノ專行ニカヽル者）

| （年月日） | （賞品別） | （住所） | （氏名） | （事蹟） | （褒賞官衙） |
|---|---|---|---|---|---|
| 未詳 | 金圓 | 碓氷町鷺宮村 | 小井戸忠次郎 | 力田 | 岩鼻縣 |
| 同 | 銀杯 | 前橋市 | 下村善太郎 | 公益 | 群馬縣 |
| 同 | 同 | 新田郡阿久津村 | 白石榮三郎 | 救荒 | 栃木縣 |

| 年月日 | 賞 | 住所・氏名 | 事由 | 上申者 |
|---|---|---|---|---|
| 未詳 | 銀杯 | 群馬郡高崎町　市川左近 | 學資金寄附 | 群馬縣 |
| 同 | 同 | 新田郡藪塚町　伏島近藏 | 開拓 | 栃木縣 |
| 明治八、一、二〇 | 銀杯金圓 | 勢多郡八崎村　田中清六 | 道路開鑿 | 熊谷縣 |
| 同　九、―、― | 同 | 佐波郡島村　田島善平妻キヤウ | 教育資金寄附 | 群馬縣 |
| 同　九、一〇、― | 木杯 | 勢多郡下田澤村　高柳アキ | 同 | 同 |
| 明治一〇、五、一四 | 銀杯 | 勢多郡荒口村　阿部耕雲 | 藏書寄附 | 同 |
| 同　一〇、一一、二四 | 金圓 | 綠野郡本動堂村　富岡安吉 | 勸農 | 同 |
| 同　一一、一一、― | 同 | 利根郡上牧村　阿部平藏母ヤス | 貞烈 | 同 |
| 同　一七、一〇、七 | 木杯 | 利根郡岩室村　岡村八彌 | 公益 | 本縣知事 |
| 同 | 同 | 那波郡連取村　小暮橘平 | 同 | 同上 |
| 同 | 同 | 同郡田中村　武井右金次 | 同 | 同上 |
| 同 | 同 | 同郡連取村　森村源五郎 | 同 | 同上 |
| 同 | 同 | 新田郡内ヶ島村　飯田藤四郎 | 同 | 同上 |
| 同　一六、八、七 | 褒狀 | 邑樂郡館林町　堀越寅吉 | 傳染病豫防 | 同上 |
| 同　一八、一、一四 | 木杯 | 碓氷郡上增田村　上原杢彌 | 公益 | 同上 |
| 同　一九、二、一二 | 金圓 | 利根郡薗原町　新井彌太郎 | 施與 | 同上 |
| 同　三〇、五、一一 | 木杯 | 邑樂郡海老瀬村　齋藤與平 | 同 | 同上 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 同 三五、七、三一 | 同 | 群馬郡佐野村 | 江原又八 | 公同事務 | 同上 |
| 同 三六、七、一八 | 同 | 同郡新高尾村 | 中村五平 | 教育 | 同上 |
| 同上 | 同 | 同郡瀧川村 | 渡邊太平 | 公益(清酒釀造) | 同上 |
| 大正 六、四、五 | 同 | 勢多郡南橘村 | 金子角次郎 | 勸農 | 同上 |
| 同 七、二、一 | 同 | 山田郡桐生町 | 江原貞助 | 實業精勵 | 同上 |
| 同上 | 同 | 佐波郡豐受村 | 小茂田丈衞 | 同 | 同上 |
| 同 八、二、一 | 同 | 佐波郡名和村 | 大和杢右衞門 | 勤儉力行 | 同上 |
| 同 九、二、一 | 同 | 群馬郡久留馬村 | 木暮秀太郎 | 公益 | 同上 |
| 同 一四、二、一一 | 同 | 多野郡藤岡町 | 星野兵四郎 | 教育 | 同上 |
| 同 一四、四、二八 | 同 | 北甘樂郡丹生村 | 岡部爲作 | 公同事務精勵 | 同上 |

## 四 定例木杯金圓受領者郡市別統計表

(大正十五年九月調)　(孝子節婦義僕ノ部)

| (行爲) | (勢多) | (群馬) | (多野) | (北甘樂) | (碓氷) | (吾妻) | (利根) | (佐波) | (山田) | (新田) | (邑樂) | (前橋) | (高崎) | (桐生) | (合計) |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 孝子 | 四 | 三 | 二 | 五 | 一〇 | 四 | 五 | 六 | \| | 二 | 三 | 二 | 一 | \| | 四七 |
| 貞節 | 二 | 三 | 一 | 一 | 六 | 二 | \| | 四 | 一 | 一 | 三 | 一 | 一 | \| | 二六 |

| | | | | | | | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 義僕 | 一 | 一 | 二 | — | 一 | — | — | — | 一 | 一 | 一 | 二 | — | — | 一〇 |
| （合計） | 七 | 七 | 五 | 六 | 一七 | 六 | 五 | 一〇 | 二 | 四 | 七 | 五 | 二 | — | 八三 |

（備考）孝子四十七人ノ内、孝女十三人ナリ

## 第三項　其他の旌表

### 甲　地方課關係

明治四十二年十月本縣訓令第六十七號市町村吏員效績旌表規程による者

右規程第一條市町村事蹟の優良なる者、市町村吏員にして、多年職務に精勵し、成績顯著なる個人、又は團體にして、自治其他公益事務に對する成績顯著なる者を旌表する規程なり。

（イ）表彰市町村及吏員年次別統計表（大正十五年九月調）

| （年次） | （町村名） | （吏員ノ部）（市町村長） | （助役） | （收入役） | （書記等） | （吏員計） |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 明治四十年 | — | 一〇 | 四 | 四 | 五 | 二三 |

| 年 | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 同四十一年 | ｜ | ｜ | ｜ | 一 | ｜ | 一 |
| 同四十二年 | 四 | 七 | ｜ | 一 | 一 | 九 |
| 同四十三年 | 六 | ｜ | ｜ | ｜ | ｜ | ｜ |
| 同四十四年 | 六 | ｜ | ｜ | ｜ | ｜ | ｜ |
| 大正元年 | 四 | 二 | 一 | 二 | 一 | 六 |
| 同二年 | ｜ | ｜ | ｜ | ｜ | ｜ | ｜ |
| 同三年 | 五 | 三 | 一 | 二 | 一 | 七 |
| 同四年 | 八 | 三 | ｜ | ｜ | 二 | 五 |
| 同五年 | 七 | 一 | ｜ | 一 | 三 | 五 |
| 同六年 | 三 | 二 | ｜ | ｜ | ｜ | 二 |
| 同七年 | 二 | 一 | ｜ | ｜ | 一 | 二 |
| 同八年 | ｜ | 二 | 一 | 二 | ｜ | 五 |
| 同九年 | 一 | 一 | ｜ | 一 | 一 | 四 |
| 同十年 | 一 | 一 | ｜ | ｜ | 二 | 三 個人一 |
| 同十一年 | 一 | 二 | ｜ | 二 | 三 | 七 |
| 同十二年 | 一 | ｜ | 二 | ｜ | 二 | 四 |
| 同十三年 | 一 | ｜ | ｜ | 一 | 一 | 二 |

| 大正十四年 | ― | 一 | ― | 二 | 二 | 五 |
|---|---|---|---|---|---|---|

（ロ）表彰市町村及吏員郡市別統計表

| （郡名） | （町村數） | （吏員數） | （郡名） | （町村數） | （吏員數） |
|---|---|---|---|---|---|
| 勢多 | 一 | 八 | 新田 | 一 | 一一 |
| 群馬 | 四 | 八 | 邑樂 | 一 | 八 |
| 多野 | ― | 一二 | 佐波 | 三 | 五 |
| 北甘樂 | ― | 九 | 前橋 | ― | 三 |
| 碓氷 | 一 | 一一 | 高崎 | ― | 一 |
| 吾妻 | 四 | 五 | 桐生 | ― | ― |
| 利根 | 二 | 八 | （計） | 一八 | 九六 |
| 山田 | 一 | 七 | | | |

（ハ）群馬縣表彰町村一覽

| （町村名） | （旌表年度） | | | | | | | | | | | | | | | （回數） |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 明治四二 | 同四三 | 同四四 | | | | 大正四 | 同五 | | | | | 大正一一 | 大正一二 | 大正一三 | |
| 群馬郡古巻村 | | | | | | | | | | | | | | | | 三 |
| 同　清里村 | | | | | | | | | | | | | | | | 五 |

| | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 同 | 長野村 | | | | | | | | | | | | 大正九 | | | | 一 |
| 同 | 桃井村 | | | | | 大正二 | 大正三 | 大正四 | | | | | | | | | 三 |
| 利根郡 | 桃野村 | 明治四二 | 同四三 | 同四四 | | | | | | | | | | | | | 三 |
| 同 | 薄根村 | | | | | | 大正三 | 大正四 | 大正五 | | | | | | | | 三 |
| 佐波郡 | 島村 | 明治四二 | | | | | | | | | | | | | | | 一 |
| 同 | 赤堀村 | | | | | | | | 大正五 | 大正六 | 大正七 | | | | | | 三 |
| 同 | 茂呂村 | | | 明治四四 | 大正元 | | | | | | | | | | | | 二 |
| 山田郡 | 境野村 | 明治四二 | 同四三 | 同四四 | 大正元 | | | | | | | | | | | | 四 |
| 吾妻郡 | 岩嶋村 | | 明治四三 | 同四四 | | | 同三 | 大正四 | 大正五 | | | | | | | | 五 |
| 同 | 伊參村 | | | | | | | | 大正五 | 大正六 | 大正七 | | | | | | 三 |
| 同 | 原町 | | | | | | | 大正四 | | | | | | | | | 一 |
| 同 | 太田村 | | | | | | | | | | | | | 大正一〇 | | | 一 |
| 勢多郡 | 横野村 | | 明治四三 | 同四四 | | | | | | | | | | | | | 二 |
| 邑樂郡 | 佐貫村 | | 明治四三 | | | | 大正三 | 大正四 | 大正五 | | | | | | | | 四 |
| 碓氷郡 | 八幡村 | | | | 大正元 | | 大正三 | 大正四 | | | | | | | | | 三 |
| 新田郡 | 綿打村 | | | | | | | 大正四 | 大正五 | 大正六 | | | | | | | 三 |

（三）　內務大臣より旌表せられたる者

賞　狀

山田郡境野村

協同緝睦、相率ヰテ克ク公共ノ事ニ竭シ、整理經營、共ニ見ルベキモノ少カラズ。今後尙一層ノ奮勵ヲ以テ、互ニ相勠力シ、益其實績ヲ擧グベシ。茲ニ金五百圓ヲ授與ス。

明治四十三年二月廿五日

內務大臣法學博士男爵平田東助

猶上毛孤兒院長本縣人金子尙雄は救濟事業の功勞により、大正七年、內務省より效績狀を授與せられたり。即ち左の如し。

效績狀

金子尙雄

救濟ノ事ニ關シ、從來盡力スル所尠ナカラズ。今後尙一層ノ淬勵ヲ望ム。茲ニ之ヲ選奬ス。

大正七年二月十一日

內務大臣正三位勳一等男爵後藤新平

大正十一年に至り、內務省より右上毛孤兒院以下四團體に對し、左の如く夫々助成金の下賜ありたり。

金五百圓　財團法人上毛孤兒院　　金參百圓　前橋積善會

金貳百圓　高崎育兒院　　金百圓　私立樹德子守學校

社會事業ニ關シ、從來盡力スル所尠カラズ。今後一層淬勵シテ其效果ヲ收メンコトヲ望ム。玆ニ助成金ヲ下附ス。

大正十一年

內務大臣從三位勳一等床次竹二郎

（ホ）宮內省より旌表せられたる者

上毛孤兒院長　金子尙雄　　前橋積善會理事　荒井久七

私立樹德子守學校長　山端息耕　　私立高崎育兒院長　田邊鐵定

多年社會事業ニ盡力シ、效績顯著ナル趣被聞召、以思召御紋附銀盃一個及金貳百圓下賜候事。

大正十三年一月廿六日

宮內省

## 乙　學務課關係

（一）小學校教育效績狀受領者

明治三十八年、文部省令第十一號、小學校規程第一條に依り、效績顯著なりと認め選奬せられたる者は、左の如し。

（イ）多年小學校の教育に從事し勵精其職に盡し教導感化の效觀るべき者

| （年　月　日） | （職　名） | | （氏　名） |
|---|---|---|---|
| 明治三九、一一、　三 | 勢多郡細井尋常高等小學校 | 訓導兼校長 | 鈴木又吉郎 |
| 同　四一、　二、一一 | 佐波郡伊勢崎尋常高等小學校 | 訓導兼校長 | 千賀覺次 |
| 同　四一、一〇、　一 | 北甘樂郡富岡尋常高等小學校 | 訓導兼校長 | 安藤嘉市 |
| 同　四二、　二、一一 | 利根郡薄根尋常高等小學校 | 訓導兼校長 | 廣瀨久明 |
| 同　四三、　二、一一 | 利根郡利南東尋常高等小學校 | 訓導兼校長 | 樋口千代松 |
| 同　四四、　二、一一 | 山田郡境野尋常高等小學校 | 訓導兼校長 | 長島織吉 |
| 同　四四、　二、一一 | 新田郡世良田尋常高等小學校 | 訓導兼校長 | 澁澤嘉津間 |
| 同　四五、　二、一一 | 新田郡綿打尋常高等小學校 | 訓導兼校長 | 青木嘉之 |

| | | | |
|---|---|---|---|
| 大正 二、二、一一 | 多野郡吉井尋常高等小學校 | 訓導兼校長 | 新井巴 |
| 大正 四、二、一一 | 高崎市高崎中央尋常高等小學校 | 訓導兼校長 | 小林茂 |
| 大正 四、一一、一〇 | 前橋市桃井尋常小學校 | 訓導兼校長 | 秋山金次郎 |
| 同 六、二、一一 | 北甘樂郡富岡尋常高等小學校 | 訓導兼校長 | 田中美名人 |
| 同 七、二、一一 | 高崎市高崎北尋常小學校 | 訓導兼校長 | 淺井繼世 |
| 同 一四、二、一一 | 前橋市久留萬尋常高等小學校 | 訓導兼校長 | 伊東保乃麿 |
| 同 一四、二、一一 | 碓氷郡安中尋常高等小學校 | 訓導兼校長 | 小井戸方三郎 |

（ロ）多年村長の職務に従事し拮据經營以て小學教育の普及發達を圖りし者

| （年月日） | （職名） | （氏名） |
|---|---|---|
| 明治四〇、三、三一 | 北甘樂郡馬山村長 | 神戸禎三郎 |
| 同 四二、二、一一 | 多野郡多胡村長 | 向井周彌 |
| 同 四三、二、一一 | 山田郡境野村長 | 野邊三左 |
| 同 四五、二、一一 | 北甘樂郡富岡町長 | 古澤小三郎 |
| 大正 二、二、一一 | 群馬郡桃井村長 | 高野邊惣三郎 |

| | | |
|---|---|---|
| 同 七、二、一 | 利根郡新治村長 | 木檜仙太郎 |
| 同 八、二、一 | 新田郡綿打村長 | 正田盛作 |
| 同 一三、一、二六 | 群馬郡新高尾村長 | 反町角三 |

（二） 文部大臣より表彰せられたる學校

（イ） 職員克く協同一致して職務に努め教授訓育の成績見るべきある者

| （年 月 日） | （學 校 名） |
|---|---|
| 明治四二、三、三〇 | 勢多郡細井尋常高等小學校 |
| 同 四三、二、一一 | 佐波郡伊勢崎尋常高等小學校 |

（ロ）補習教育の施設其宜しきを得成績見るべきある者

| （年　月　日） | （學校又ハ會名） |
| --- | --- |
| 大正一一、一一、二八 | 群馬郡倉賀野實業補習學校 |
| 同　上 | 新田郡綿打實業補習學校 |
| 明治四三、三、三〇 | 邑樂郡永樂村赤岩青年會 |
| 同　四三、三、三〇 | 新田郡世良田村平塚青年會 |
| 同　四四、五、二七 | 碓氷郡豐岡同窓會 |
| 大正　三、二、一一 | 邑樂郡長柄村青年會篠塚支會 |
| 同　八、三、二五 | 邑樂郡六郷青年會 |
| 同　一〇、一一、二三 | 群馬郡新高尾青年會 |
| 同　一二、三、二八 | 北甘樂郡丹生處女會 |

（三）明治四十三年九月本縣訓令甲第六十三號普通教育獎勵規程に據る表彰者數調（本規程の表彰費は教育基金令第八條の費用及び本縣學事獎勵費を以て之に充つ）

| （年　度） | （學　校） | （市町村） | （教　員） | （吏　員） | （其　他） |
| --- | --- | --- | --- | --- | --- |
| 明治四十三年度 | 一 | \| | 一八 | 三 | 一 |
| 明治四十四年度 | 一 | \| | 一六 | 三 | \| |
| 大正元年度 | \| | \| | 一四 | 二 | \| |
| 大正二年度 | 一 | \| | 一三 | \| | 一 |
| 大正三年度 | 二 | \| | 一〇 | 一 | \| |
| 大正四年度 | \| | \| | 七 | \| | 一 |
| 同五年度 | 一 | \| | 五 | 三 | \| |
| 同六年度 | 一 | \| | 九 | \| | \| |
| 同七年度 | \| | \| | 一二 | 二 | \| |
| 同八年度 | \| | \| | 九 | 二 | 二 |
| 同九年度 | \| | \| | 四 | 二 | 一 |
| 同一〇年度 | \| | \| | 一〇 | \| | \| |
| 同一一年度 | \| | \| | 二 | \| | 二 |
| 同一二年度 | \| | \| | 一 | \| | 一 |
| 同一三年度 | \| | \| | 二 | 一 | \| |

## 丙　警察部關係

明治四十三年十二月勅令第四百三十八號警察官吏及消防官吏功勞記章受領者（警察賞與規則に依り、賞與を受けたる警察官吏、又は消防官吏にして功勞拔群、一般の龜鑑となるべき者に對し、記章を附與して制服に佩用せしむ）

| （年月日） | （職名） | （氏名） | （事蹟） | （備考） |
|---|---|---|---|---|
| 大正八、一一、三〇 | 巡査 | 關庄作 | 持兇器强盜嫌疑者ト格鬪重傷 | 警察賞與特別賞金及功勞加俸授與 |
| 大正一一、一二、一七 | 巡査部長巡査 | 赤野八百藏 | 精神錯亂放火犯持兇器者ト格鬪重傷 | 同上 |

## 丁　遞信省關係

第一回　第一級效績章

第二回　金百五拾圓

正七位勳八等　中澤廣勝

平素熱誠其ノ職ニ從ヒ、成績拔群、品行方正ニシテ、一般ノ儀表トナスニ足ル。仍テ遞信選奬規程ニ依リ、金百五拾圓ヲ授與シテ其效績ヲ表彰ス。

大正十三年二月十一日　　遞信大臣正四位勳四等　藤村義朗

# 第十一章　兵事

## 第一節　廢藩置縣前後の兵備

明治の初年、廢藩置縣以前、卽ち府藩縣三治時代に於ては、兵事一に兵部省の所管に屬せしも、明治三年兵制を布告せらるゝまでは、未だ統一の制度は無かりしものゝ如し。今前橋藩の明治二年十月の職制中、兵制に係はるものを摘錄す。他藩大體之に準じて推知するを得べし。

### 前橋藩職制

知事

掌知藩內社祠・戶口名籍、字養士民、布敎化、敦風俗、收租稅、督賦役、判刑賞、知僧尼名籍、兼藩兵。

大參事

權大參事

掌參判藩內大事務、主宰諸局。

兵政局

大司事　少司事

掌下制二守備節二制兵馬・器械・兵學館等事上。

輜重方　測量方　書記　國師　下吏

兵學館

教授　助教　管事　寮長　副助教　助教補　測量算術師

同助教　書記　器械方　下吏

兵器局

管事　兵器方　下吏

兵馬方

管事　兵馬方　下吏

兵制

一、隊伍ノ儀、從前序々隊銘被レ廢、新ニ上中下ノ三等隊被二差立一、總隊長壹人ヅツ被二召置一、軍務一切ハ勿論、隊中ノ庶事御委任ノ事。

一、右ノ通毎等壹員ヅツ總長被二差立一候ヘ共、元來中等・下等總隊長ノ儀ハ、上等副總長ノ儀ニ付、各等總長缺員ノ節ハ、勿論時宜ニ寄リ、平非共相互ニ相代リ、指揮致候儀

モ可ㇾ有ㇾ之事。

一、毎一等ニ軍校壹人ヅツ、下軍校二人ヅツ被ㇾ差立ㇾ候事。

一、上等隊ハ二中隊ニ御編制、中隊司令ヲ以テ隊長、小隊司令ヲ以テ副隊長、半隊司令ヲ以テ半隊長トス。半隊長補ハ、半隊長缺員ノ時、其任ニ可ㇾ代事。

一、中等隊ハ大砲隊ニ御編制、二砲隊及護衛隊一中隊被ㇾ差立ㇾ候事。但砲隊役員ハ是迄ノ通、中隊役員ハ上等隊ニ同ジ。以下准ㇾ之。

一、下等隊ハ五中隊御編成候事。

一、兵粮・彈藥護衛隊一隊被ㇾ差立、兵政局附ノ事。

一、三等共、老兵ハ强健ノ者ノ員數ニ因テ、隊伍被ㇾ差立ㇾ候事。

一、士族・卒族ヨリ隊入ハ、老幼共壯健ノ者ニ命ジ候事。

一、壯兵隊年齡期限、四拾五歲マデノ處、以來四十六歲以上ト雖モ、壯健ノ向者、猶豫期限補ニ召延ㇾ候儀モ可ㇾ有ㇾ之事。

一、生兵伍ヨリ本隊入ハ、十八歲以上トス。但技倆ニ因テハ、十八歲以下ト雖、隊入被ㇾ命候事。

一、生兵伍御規是等マデ通ノ事。

一、之レマデ十五歲以下ニテモ、脩心ノ向ハ修行致候處、以來十五歲以上ニ限候事。

但之レマデ學ビ來リシ族者、勝手次第ノ事。

一、生兵伍ハ、兵政局附ニ被ㇾ命、隊長始役々ハ、兵學館役々ニテ兼帶ノ事。但兵政局扱支配ハ、當主ノ向(任カ)ㇾ計、嫡子次三男親兄ニ屬候事。

一、上等隊士取扱者、半隊長ノ事。

一、嚮導助、以來嚮導補ト被ㇾ改候事。

一、軍事方檢査史被ㇾ廢候事。

一、諸隊嚮導頭取被ㇾ廢候事。

一、大鼓被ㇾ廢候事。

一、喇叭手、兵政局支配ニ申付候事。但非常ノ節ハ勿論、操練ノ節モ隊々ヘ附屬申付候事。

右之通被ㇾ命候事。

十月　藩政府

兵部省兵制を定む

然るに明治三年二月に至りて、兵部省は兵制を定めて、各府縣藩に布令す。內民部省を通して、岩鼻縣に達したる令に曰く、

兵制之義ニ付別紙ノ通各藩ヘ布告候間、諸縣ノ兵モ當今有合之分、編隊員數等右ニ準ジ改正可ㇾ有ㇾ之、尤新ニ兵員取立候義ハ、先般モ御布告相成候通被ㇾ禁候。且又有

合之分減少之儀ハ、可爲勝手候事。

二月　兵部省

別紙

步兵隊

六拾名ヲ以テ一小隊トス。二小隊ヲ以テ一中隊トス。五中隊ヲ以テ一大隊トス。則十小隊。但嚮導以上諸有司、右定員之外タリ。

砲兵隊山野戰用

砲二門ヲ以テ一分隊トス。三分隊ヲ以一隊トス。則砲六門。

一、兵士卒年齡十八歲ヨリ三十七歲マデタルベキコト。但是迄ノ隊士中、三十七歲以上ト雖、其人ニヨリ强壯ノ者ハ格別之事。

一、練兵式之義ハ、先是迄相用來候式ニテ不苦候事。

一、石高壹萬石ニ付、一小隊之割合ヲ以テ可相定事。

一、士族・卒族之外、新ニ兵隊取立候儀被相禁候。若萬石一小隊之割合ニ不足候ハヽ、其旨兵部省ヘ伺出、差圖ヲ受可取計事。

右之通相達候也。

二月二十四日　民部省

徵兵規則

此兵制一度各府縣藩に達してより、各藩此の令達に準して、常備兵隊を組織せり。次いで此年十月、太政官より各藩へ令達あり。陸軍兵式は佛蘭西式を目的とし、漸く以て編制相改むべき旨を達せらる。同年十一月に至りて、徵兵規則を制定せられ、太政官より府藩縣に布令せらる。

兵制之儀、先般先ヅ石高ニ應ジ、定員被仰出候處、兵事ハ護國之急務、皇威ヲ發輝スルノ基礎ニ付、宇内古今之沿革得失ヲ御洞察被為在、前途兵制一變、全國募兵之御目的ニ候處、即今先ヅ左ノ規則ヲ以テ、徵募被仰出候間、來ル未年ノ正月ヨリ順次ヲ以テ、各道府藩縣士族・卒・庶人ニ不拘、身體强壯ニシテ、兵卒之任ニ堪フベキ者ヲ選ミ、一萬石ニ五人ヅツ、大阪出張兵部省へ可差出候事。

但從來之常備ハ勿論、各地方緩急應變之守備ト可相心得事。

庚午十一月　　太政官

徵兵規則

第一條　兵卒年齡二十ヨリ三十ヲ限リ、身材强幹、筋骨壯健、長ケ五尺以上ニシテ、兵役ニ堪ユベキ者ヲ選擧スベキ事。但シ醫官ノ檢査ヲ受ケ、合格セザル者兵役ニ服スルヲ許サズ。

第二條　一家ノ主人又ハ一子ニシテ、老父母アル者、或ハ不具ノ父母アル者等選擧スベカラザル事。

第三條　服役先ヅ四年ヲ以テ期限トス。役ヲ終ヘ歸鄕スル者ニハ、在役中ノ級階ニ應ジ、賑恤金ヲ賜與スベシ。期限中私ノ故ヲ以テ、歸鄕願フベカラザルコト。但四年ノ服役終ル後、歸鄕ヲ欲セズ、再役ヲ請フ者ハ之ヲ許ス。

第四條　在役中役仕ノ故ヲ以テ、傷痍等ニテ終身不具ト相成者ニハ、扶助金ヲ賜フ可キ事。

第五條　衣食給料等、總テ省ヨリ賜與スベシ。各地方ヨリ大阪迄差出候費用ハ其地方ヨリ相辨ズベシ。免役ノ節路費ハ省ヨリ可差遣事。

第六條　檢査ニ依リ、服役相成難キ者有之節ハ、再選代人差出スベキ事。但此往復ノ路費ハ、地方官ヨリ辨ズベキ事。

第七條　始テ營所ニ來ル費用ノ外ハ、一切地方官ヨリ給與スベカラザルコト。

第八條　地方廳ニテ選擧之上、左ノ通リ送リ狀ヲ本人ニ附シ、大阪出張兵部省へ可差出事。但地方官員召連罷出候儀、其便宜ニ從フ。

（以下略。）

此徴兵規則は明治六年一月、徴兵令の前提なり。同年十二月廿二日、各藩常備兵

編制方を太政官より布令せらる。前橋藩に於ては、明治四年正月四日、同規程を設く。

法則

一、隊官之指揮號令、必不可違背事。

一、期約刻限遲參スベカラザルコト。

一、百事可爲簡易迅速事。

一、奢侈・放逸・怠惰ノ擧止不可有ノ事。

一、壹人ノ過ハ壹隊ノ過タルベキコト。

一、器械使用可注意事。

旅行中法則

一、兵器一切身ヲ離スベカラザル事。

一、進退・行止・休憩・喫飯共ニ號令ニ依ルベキコト。

一、喧嘩口論無用ノ遊歩、及酒食ノ義嚴禁ノ事。但シ時宜ニ因リ、長官ノ許ヲ受ケ、飲酒候儀ハ別段ノコト。

滯京中法則

一、兵器及彈藥手入方、專注念可致事。但時々隊官ニテ檢査可致事、

一、他出刻限ハ、朝六ッ時ヨリ暮六ッ時マデノ事。但出入共隊官ハ上役、士卒ハ嚮導ヘ屆ヶ可レ出事。

一、他出者ハ組合相立置、三人或ハ四人ヅッ同伴可レ罷出事。但隊官ノ分ハ、此例ニアラズ。

一、公私共、他出ハ必軍服タルベキコト。

邏所法則

一、邏所守護中、無益ノ雜談、喧囂無用ニ遊歩スルヲ禁ズ。

一、同所守衛中、禁酒勿論ノ事。

右條々堅可ニ相守一者也。

明治四年七月廢藩となるや、八月に至り、兵部省より左の布達あり。

今般廢藩被ニ仰出一候ニ付テハ、從前所管ノ常備兵、總テ解隊ノ上、全國一途ノ兵制御改正可ニ相成一ノ處、差向内外警備ノタメ、別紙ノ通各所ニ鎭臺ヲ被レ置、管地ヲ被レ定候條、此旨相達候事。

辛未八月　　兵部省

此布達により、本縣は關東一圓の外、伊豆・甲斐・駿州と共に、東京鎭臺の直管となる。而して此際に於ける布令に曰く、

廢藩に就いての兵制

一、鎭臺本分營ノ常備兵者、元藩下ノ常備兵ヲ召集シテ之ニ充ツベキコト。
一、元大中藩ノ常備兵ハ、其縣下へ一小隊ヅツ備へオクベキコト。
一、元小藩ニテモ、地方ノ形勢ニ依リ、縣下へ多少兵隊備置候儀モ可レ有レ之事。但壹萬石已下ノ諸縣兵ハ被二仰付一候。依テ大砲・小銃都テ兵器ハ、當分其縣廳へ可二收置一、何分ノ儀ハ追テ仰出サルベキコト。
一、地方城郭之儀モ、兵部省管轄被二仰付一候事。但縣ニ於テ明細ノ圖面相調、早々兵部省へ可二差出一事。

縣兵解隊に付當分捕亡方を置く

同年十月十二日に至り、縣下常備豫備兵とも、本月末日限り解隊の旨、兵部省より布令せられ、兵器悉く上納すべき旨亦達せらる。是に於て本縣は、同年十一月十三日、舊諸縣兵解隊により、新置縣へ非常の節のため、捕亡備置の義を大藏省に伺ふ。

諸縣兵解隊ニ相成、新置ノ縣、非常ノ手當一切無レ之ニ付、差向捕亡トシテ、當分六十名計備置申度、尤始終右人員ヲ以テ捕亡ニ備置候儀ニハ無レ之、一通折合相付候迄ノ儀ニ候間、至急御差圖相成候樣致度、此段奉レ伺候也。

大藏省ヨリ十一月二十七日付ヲ以テ、書面ノ通リ相心得、手當等更ニ申出ヅベク旨指令アリ。

同年十二月に至り、八月布令したる元大中藩の常備兵一小隊を、地方縣廳の管轄とし、兵隊の稱號を廢せらるゝ旨、兵部大輔より布令あり。翌五年一月に至り常備兵全部を解隊し、更に捕亡吏を置かるゝ趣、大藏省より布令あり。同年三月兵部省を廢し、十一月二十八日、徵兵令の發布となる。群馬縣史稿兵制部。

## 第二節　陸軍管區及高崎兵營

明治六年正月、太政官布告第四號を以て、全國を六軍管に分ち、各軍管に一鎭臺を置くの制を布かるゝや、本縣は第一軍管東京鎭臺の所轄たり。明治十六年七月、後備軍司令部條例發布せられ、第一軍管に屬し、東群馬郡前橋町を府縣駐在所とし、郡區駐在所を前橋、及び佐位郡伊勢崎町に置き、利根川以西を前橋郡區駐在所、利根川以東を伊勢崎郡區駐在所に屬せしむ。（東群馬を加ふ。）明治二十一年五月、陸軍管區を制定し、大隊區司令部條例の公布あるや、本縣は第一師管第一旅管高崎大隊區に屬し、監視區を高崎及び伊勢崎に置きて、之に分屬せしむ。明治二十三年五月全國監區の一部改正ありたれども、本縣には變更なし。明治二十九年三月、管區の再改正に際しても、本縣所管には變更なく、此月發布の聯隊區司令部條例に依り、高崎大隊區司令部は、高崎聯隊區司令部と改まり、依然として第一師管第一旅管の所管たり。明治四十年九月、復々改正あり。第十四師管第二十八旅管に移り、大正十四年四月、管區の改正に際しても、依然第十四師管高崎聯隊區に屬

し、常備團體の配備も、亦第十四師團第二十八旅團に屬して、旅團司令全部は高崎市に設置せらる。

東京鎭臺高崎分營

明治六年正月、（太政官布告第四號）全國を六軍管區に分ち、各軍管に一鎭臺を置くの制を布かるゝや、本縣は第一軍管東京鎭臺に屬せり。同年四月、高崎舊城を營繕し、六月一日を以て、東京鎭臺高崎分營とし、歩兵第三聯隊第一大隊の屯營を置く。現在の歩兵第十五聯隊の前身なり。

明治七年八月廿四日、臺灣事變に際し、全隊の上京申付けられしを以て、當營所空虛となる。乃ち宇都宮より一中隊出張し、後新潟營所より第八大隊と交代し、更に新兵を募集し、第二十九大隊を編成す。同年十二月、聯隊を編成し、軍旗を授與せられ、東京鎭臺歩兵第三聯隊と改稱し、歩兵中佐中村尙武聯隊長となる。本部を東京に置く。

高崎兵を第三聯隊第一大隊とす

明治八年一月、臺灣鎭定し、第二十九大隊は解散となり、四月十六日、聯隊本部を高崎に移し、舊城主の別館に置く。第三聯隊は三個大隊、即ち第一大隊（高崎）第二大隊（新發田）第三大隊（東京）にして、第一大隊の徵兵管區は群馬・長野一圓、及び埼玉縣の一部となる。

明治十年二月十五日、東京鎮臺より急達あり。西南地方不穩出兵の擧あるも計り難きを以て、士官一同兵營内に常宿す。同月廿五日、鹿兒島征討として、留營兵八十名の外、全部出發す。此間聯隊本部第一・第三大隊兵舍を新築す。五月十九日、本部及び殘留兵共上京、呉服橋兵營に屯在す。

歩兵第十五聯隊の設置

明治十一年九月五日、天皇高崎大隊へ臨幸あらせらる。明治十七年二月廿日、當兵營を廢し、五月廿八日、聯隊本部を東京に移さる。五月廿四日、新に歩兵第十五聯隊を高崎に設置せられ、元歩兵第三聯隊第一大隊を改めて、第十五聯隊第一大隊と稱す。兵員は東京より徴兵十一名、本縣より百三十二名、長野縣より百五名、埼玉縣より百四十九名、全員下士五十名、兵卒三百六名とし、第一旅團に屬す。同年七月廿七日、軍旗を授與せられ、聯隊本部を三ノ丸に置き、外濠以內全部兵營となる。但し東門より內の通行は自由なりき。

明治十七年十一月四日、埼玉縣秩父大宮邊に暴徒橫行す。警戒として隊長以下、營內に常宿す。八日暴徒信州佐久郡に入る。鎭壓として第二中隊出張、翌月第一中隊の二小隊援隊として出張す。同月十四日、全部歸營す。

第二大隊の增置

明治十八年六月十五日、第二大隊增置せられ、同七月二十七日軍旗授與式を營

內に擧行す。司令官陸軍中將三浦梧樓、臨場左の勅語を賜はる。

步兵第十五聯隊編成るを告ぐ。仍て軍旗一旒を授く。汝軍人等協力同心して、益威武を宣揚し、我帝國を保護せよ。

聯隊長の奉答。

敬で明勅を奉す。臣等死力を竭し、誓て國家を保護せん。

第三大隊の増置

明治二十年五月十四日、第三大隊增設せられて、聯隊の編制完了したり。斯くて明治二十七八年戰役には同二十七年九月二十二日出發、明治二十八年五月二十九日歸着す。明治三十七八年戰役には同三十七年三月二十日出發、翌々三十九年二月一日歸着す大正八年四月二十四日には西比利亞派遣軍として、出發大正九年十二月二日歸着す。毎に赫々たる武勳を輝せしは、世間周知のことに屬す。（高崎衛戍病院史・步兵第十五聯隊史。）

## 第三節　本縣兵事行政

職制の沿革

本縣兵事課は、素庶務課中戸籍係に屬したるが、明治十六年兵備擴張のことあり。由りて兵事課を獨立して、事務章程を定む。明治三十八年四月、社寺課と合併し、社寺兵事課と稱し、內務部第二部に屬したるが、明治四十年の改正にて、學務課の一部となり、社寺兵事係となり、大正十五年七月の改正に依りて、學務部に屬し、社寺兵事課を獨立せしむ。

兵役忌避に對する注意

明治五年頒布せられたる徵兵制度は、立法の精神徹底せざる時代にありては、兵役を忌むの弊風あり。其男子を有する者にあつては、概ね幼年の頃より、種々策を廻らし、徵兵適齡に至り、免役名稱を得るもの多く、甚しきは逃亡して徵集に應ぜず。之がため、年々徵員の不足を生ずるにさへ至れり。明治十六年一月、兵備擴張の達ありしより、一層徵兵の旨趣を普く人民へ貫徹せしめんとし、同年十月二日、兵役忌避に關する告諭（別項）を發せり。其他兵事課員を各郡に出張せしめ、陸軍教導團生徒志願者を誘導し、或は徵兵檢査の節、懇篤に說諭せしむる等、當局

の者心に依り、忌避を圖り、逃亡を企つるもの次第に減少するに至れり。

### 兵役忌避に關する告諭

兵役ハ國民ノ義務ニシテ、各自適齡ニ至レバ、勇進應募スベキハ今更論ヲ不レ待處、從來兵役ヲ忌避スルノ弊風熾ニシテ、甚シキハ檢査ニ際シ、失踪逃亡等ノ者、年々數十人ノ多キヲ告グルニ至ル。是レ畢竟人民一般未ダ此徴兵主旨ノ何タルヲ不レ知、或ハ其主旨ヲ知ルモ、殊更免役ヲ圖ルガ爲メ、故意ニ出ル等ノ者有レ之ニ據ルナリ。今ヤ兵備擴張ノ際、尚如レ斯弊害有レ之樣ニテハ、實ニ相濟マザル次第ニテ、一ニハ其定ムル所ノ徴員ヲ充滿スル能ハズ。夫レガ爲メ往々兵備ノ缺乏ヲ見ルニ至ルベク、二ニハ本人共ニ在リテモ、國民タルノ義務ヲ失スルノミナラズ、一旦兵役ニ服セザル間ハ、假令幾年月ヲ經過スルモ、敢テ免役セザルハ勿論、後ニハ罪科ニ處セラル、者モコレアルベキニ付、各町村吏ニ於テ、取扱上一層注意、汎ク此趣旨ヲ貫徹セシメ、以テ前條ノ如キ心得違ノ者無レ之樣、懇篤示諭可レ致、且從前逃亡、于今復歸致サヾル者モ、此際精々搜索ノ上、一期モ早ク兵役ニ服シ、其國民タル義務ヲ盡サシムル樣、該親族ノ者へ嚴重說諭致スベシ。此旨諭達候事。

戰役事蹟

明治二十七年、清・韓兩國に事あるに當り、縣下各地に義勇兵を團結するの擧あるや、左の告諭を發して、縣民の歸趨を愆らざらしめたり。

今般清・韓兩國ニ對スル事アルニ當リ、各地義勇兵ヲ團結スルノ擧有之候處、此事ニ關シ特ニ詔勅ヲ發セラレ、卽本月八日ノ官報ヲ以テ之ヲ公布セラル。就テハ一般臣民タルモノ、厚ク右詔勅ノ旨趣ヲ奉戴シ、非常徵發ノ令アル場合ヲ除ク外、各其常業ヲ勤メ、益生殖ヲ進メ以テ富强ノ源ヲ培フノ本分ニ背ク勿レ。（明治二十七年八月十一日本縣告諭第五號）

明治三十七八年戰役は、我國有史上の一大事變にして、實に皇國興廢の岐るゝ所たれば、時局に於ける國民の覺悟、其他の措置に就き、其筋より訓諭周知方につき頗る努め、志氣の鼓舞を圖り、動員召集、國債の募集、軍需品の供給より戰病死者の葬祭、出征軍人家遺族の救護、恤兵犒軍等、直接軍事に關する事務は勿論、戰時に於ける敎育・産業・經濟等に到るまで、機宜を失せず施設する所ありき。

明治三十七八年戰役應召軍人調　（明治三十八年九月九日現在）

| （郡市名） | （應召軍人數） | （以上ノ内）（戰死者） | （以上ノ内）（病死者） | （應召軍人ニ對スル戰死者割合）割 | （應召軍人ニ對スル病死者割合）割 | （應召軍人ニ對スル戰病死者割合）割 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 勢多 | 一、六四四 | 九四 | 三〇 | 〇、五七 | 〇、一八 | 〇、七五 |
| 群馬 | 二、二七一 | 一四六 | 四〇 | 〇、六四 | 〇、一八 | 〇、八二 |
| 多野 | 一、一三九 | 五八 | 三四 | 〇、五一 | 〇、三〇 | 〇、八一 |

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 北甘樂 | 一、三八九 | 八〇 | 一六 | 〇、五八 | 〇、一二 | 〇、六九 |
| 碓氷 | 一、〇七五 | 五八 | 一三 | 〇、五四 | 〇、一二 | 〇、六六 |
| 吾妻 | 七九三 | 三一 | 一六 | 〇、三九 | 〇、二〇 | 〇、五九 |
| 利根 | 一、〇五三 | 六一 | 一六 | 〇、五八 | 〇、一五 | 〇、七三 |
| 山田 | 一、二一八 | 六七 | 一〇 | 〇、五五 | 〇、〇八 | 〇、六三 |
| 新田 | 一、〇〇〇 | 七七 | 一三 | 〇、七五 | 〇、一三 | 〇、八八 |
| 邑樂 | 一、五〇一 | 九三 | 二一 | 〇、六二 | 〇、一四 | 〇、七六 |
| 佐波 | 一、三八三 | 七二 | 一七 | 〇、五二 | 〇、一二 | 〇、六四 |
| 前橋 | 五四九 | 二八 | 七 | 〇、五一 | 〇、一三 | 〇、六四 |
| 高崎 | 三七八 | 三〇 | 二 | 〇、七九 | 〇、〇五 | 〇、八五 |
| 全管 | 一五、三九三 | 八九五 | 一三五 | 〇、五八 | 〇、一五 | 〇、七三 |

（備考）

負傷者ノ數ハ調査中ニ屬シ、本表ニ掲記スル能ハズ。尤モ現時知リ得タル者ハ、負傷ニ依リ癈兵トナリシ者、重傷百五十四人、輕傷二百七十人ナリ。

徴發物件は、馬三萬七千三百三十六頭、車二萬五千三百四十輛（明治三十八年九月九日現在）軍

需品被服類・蒲團・外套・襦袢・袴下・足袋等、價額九萬八千六百二十七圓、大麥二十萬七千二百〇一石、價額百四十九萬三千七百五十六圓、副食物乾燥野菜六萬七千四百九十一圓、福神漬一萬九千三百八十六圓なり。

國債の募集は、前後五回にして、毎回とも應募額は募入額に三倍乃至九倍し、應募額の總計一千九百八十五萬六千八百八十圓にして、募入額總計は四百二十二萬九千六百七十五圓、募入外れ千五百六十二萬七千二百〇五圓、右の中にて公共團體の基本財産を國庫債券に應募し、募入せられたる額は十二萬九千七十五圓なり。

國費救助は、被救助戶數四百二十九戶、救助金月額九百五十四圓五十三錢三厘、救助累計五百八十三戶救助累計金額一萬七千四百五十七圓四十二錢三厘なり。

私設救護團體の施設は、明治三十七年二月より翌三十八年二月までの間に於て、三百九十一團體、會員數十五萬五千百八十七圓にして、其支出金內譯は應召者餞別金四萬五千九百九十五圓、傷病者見舞金二千百七十六圓、弔祭料戰死者九千八百六十四圓、病死者七百五十二圓、應召者家族現金救助二萬八千四百四十七圓、犒軍費其他二萬六千四百四十五圓、救助戶數は三千四百五十六戶、內常時二千三百

十戸、臨時一千四戸、一時百四十二戸なりとす。
戰時に於ける教育上の施設に就きては、明治三十七年二月開戰となるや、諸般の事業と共に、其費用節減の方針を取り、且つ教育上特に縣令を發し、其他訓示又は注意を與へ、施設概目二十三項を示せり。壯丁學力試驗は、明治三十七年度徴兵檢査より之を開始したり。
經費緊縮は、縣郡市町村共に實行したる所にして、縣費に於ては、三十六年十一月通常縣會に於て、三十七年度歳出豫算九十三萬五千六拾圓餘を議せしが、日露開戰に際し、三十七年三月、臨時縣會を開き、之が豫算を變更し、七十八萬八千七百五十六圓餘に減じたり。然るに其後臨時に經費增額の必要を生じ、追加したるものあるが爲めに、遂に九十二萬三千餘圓に達せり。然れども之を前年度に比せば、尚十九萬七千餘圓の減額なり。
郡の經濟は、三十七年度二萬九千二百六十九圓にして、前年度に比し一萬二千有余圓を減せり。然れども三十八年度に至りては、戰時に於ける積極的事業に要する費用增加し、爲めに三十七年度に比し、二千五百餘圓を增せりと雖、之を三十六年度に比する時は、尚九千六百有餘圓の減少なり。

市町村の經濟に於ては、不急の事業は之を中止し、其負擔を輕減し、以て稅源の涵養を計り、國費の負擔に堪ふるの方針を執りしかば、三十七年度百二十八萬九千百十四圓、前年度に比し十九萬六千三百〇四圓を減せり。然るに三十八年度に於ては、教育上止むを得ざるの施設、又は戰時記念基本財產造成等の費用を增加したるものありと雖、其通計に於ては、更に一層の減額にして、卽ち三十七年度に比し五萬二千餘圓、三十六年度に比し二十四萬九千餘圓を減せり。

縣下人民の軍隊に對する尊敬の念慮は、三十七八年戰役以來、一層之を高めたるものゝ如し。前橋市は二萬有餘圓を投じて、利根河畔に永久的廠舍を建設し以て工兵演習宿舍の便に供へ、群馬郡相馬村は步兵第十五聯隊、及び工兵諸隊の實彈射擊演習場に、多大の便宜を與へ、高崎市は金九千有餘圓を以て、軍用公會堂壹棟を營內に建設し、之を寄附せり。群馬縣布達令書・群馬縣治對時局概覽・縣治一班。

## 第四節　壯丁檢査狀況及兵員

壯丁檢査狀況は、大正元年以後、陸軍省調製各年徵兵事務摘要中より左の三表を摘錄す。其成績は各項とも、餘り優位に非るざが如し。

一　自大正元年至大正十四年本縣壯丁體格檢査狀況

| 年度 | 實數 甲種 | 第一乙種 | 第二乙種 | 丙種 | 丁種 | 戊種 | 受検壯丁トノ千分比 甲種 | 一乙種 | 二乙種 | 丙種 | 丁種 | 戊種 | 全國ニ於ケル甲種順位 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 大正元年 | 二,六九一 | 一,三九六 | 一,四一七 | 二,一九一 | 五七一 | 二四一 | 三一六 | 一六四 | 一六七 | 二五八 | 六七 | 二八 | 二八 |
| 同二年 | 二,六〇八 | 九〇五 | 一,六七五 | 二,四三七 | 六四五 | 二五 | 三一三 | 一〇九 | 二〇一 | 二九三 | 七七 | 七 | 三八 |
| 同三年 | 二,八一六 | 一,三〇三 | 一,六二一 | 二,四八七 | 六〇〇 | 四〇 | 三三一 | 一三七 | 一八五 | 二八四 | 六八 | 五 | 三四 |
| 同四年 | 二,五四五 | 一,三〇七 | 一,八四三 | 二,六九九 | 五九三 | 四四 | 二八五 | 一三五 | 二〇六 | 三〇二 | 六六 | 五 | 四一 |
| 同五年 | 三,二〇七 | 一,一三四 | 一,九五〇 | 二,〇三七 | 四六四 | 五三 | 三七〇 | 一二七 | 二一八 | 三一七 | 五三 | 六 | 三三 |
| 同六年 | 二,八七六 | 六〇八 | 二,六九七 | 二,六六七 | 七三三 | 七七 | 二九八 | 六三 | 二七九 | 二七七 | 七五 | 八 | 四二 |
| 同七年 | 三,三八六 | 八九六 | 二,七八九 | 二,三八四 | 六〇四 | 五七 | 三三八 | 九〇 | 二七八 | 二三八 | 六〇 | 六 | 二六 |
| 同八年 | 二,七七三 | 九〇五 | 三,三八〇 | 二,二四九 | 五五〇 | 四三 | 二八〇 | 九一 | 三四二 | 二二七 | 五六 | 四 | 四四 |

| | | | | | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 同九年 | 三,二五八 | 一,三三〇 | 二,五九四 | 二,四三〇 | 四八五 | 三七 | 三三二 | 一三二 | 二五六 | 二三九 | 四八 | 四 | 四一 |
| 同十年 | 三,九四一 | 一,四七〇 | 二,八九二 | 二,一七六 | 六〇八 | 一八 | 三五五 | 一三三 | 二六〇 | 一九六 | 五五 | 二 | 二七 |
| 同十一年 | 三,八七二 | 一,三八六 | 二,八七五 | 二,五五〇 | 四八九 | 二八 | 三四九 | 一一六 | 二五九 | 二三〇 | 四四 | 二 | 三〇 |
| 同十二年 | 三,二九三 | 一,五五七 | 三,〇三七 | 二,七四九 | 五八八 | 一八 | 二九三 | 一三八 | 二七〇 | 二四五 | 五二 | 二 | 四〇 |
| 同十三年 | 三,五四四 | 一,三三〇 | 三,三三五 | 二,〇〇四 | 四五一 | 二二 | 三三五 | 一三六 | 三〇五 | 一九〇 | 四三 | 一 | 二九 |
| 同十四年 | 三,二九一 | 一,三二七 | 二,八九〇 | 二,三八七 | 四六四 | 三三 | 三三〇 | 一三〇 | 二八一 | 二三三 | 四五 | 二 | 二六 |

（備考）

本表中、甲種・乙種ハ現役兵・補充兵ニ徴集シ得ルモノ、丙種ハ國民兵役ニ服スレドモ、現役兵・補充兵ニ徴集得ザルモノ、丁種ハ不合格、即チ兵役ニ適セザル者戊種ハ身長不足、又ハ疾病等ノタメ、其年徴集ニ適セズ、徴集ヲ翌年ニ延期シタル者ナリ。

## 二 自大正元年至大正十四年本縣壯丁教育程度狀況

| （年度） | 大學卒業者 | 同上同等ノ學力ト認ムル者 | 高等學校卒業者 | 同上同等ト認ムル者 | 中學卒業者 | 同上同等ト認ムル者 | 高等小學卒業者 | 同上同等ト認ムル者 | 尋常小學卒業者 | 同上以上ノ學力アリト認ムル者 | 稍讀書算術ヲ爲シ得ル者 | 讀書算術ヲ知ラザル者 | 總計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 大正元年 | 一四 | 一一 | 八 | 五一 | 一二三 | 二三六 | 二,八三九 | 一,三〇八 | 二,七一七 | 五四〇 | 五五二 | 二〇九 | 八,五〇七 |
| 同二年 | 一〇 | 一一 | 一七 | 四四 | 一五三 | 二三一 | 二,八八六 | 八四四 | 三,一三三 | 四三三 | 四三〇 | 一五四 | 八,三三五 |
| 同三年 | 一五 | 二〇 | 二四 | 四九 | 一六七 | 二七九 | 三,〇三三 | 六五六 | 三,四二〇 | 四五〇 | 四七二 | 一八一 | 八,七六七 |
| 同四年 | 四 | 一四 | 一一 | 四三 | 二二四 | 二五三 | 二,八八〇 | 一,一四六 | 三,一六三 | 五二四 | 四八一 | 一八九 | 八,九三一 |
| 同五年 | 九 | 一九 | 二七 | 三八 | 一六九 | 二四九 | 三,一五二 | 一,一六四 | 二,八三一 | 五六〇 | 五四二 | 一七四 | 八,九四四 |
| 同六年 | 二二 | 二一 | 一二 | 四六 | 一九三 | 二六四 | 三,二二五 | 八四二 | 三,三五二 | 七六九 | 五九五 | 二〇七 | 九,六四八 |
| 同七年 | 一五 | 一七 | 七 | 六〇 | 二二七 | 二五四 | 三,五七七 | 九五〇 | 二,八八九 | 一,二四三 | 五八八 | 一八九 | 一〇,〇一六 |
| 同八年 | 八 | 三 | 四 | 一〇〇 | 一七七 | 三四六 | 三,三四三 | 七一〇 | 二,九九九 | 一,三四三 | 五四二 | 一〇六 | 九,九〇〇 |
| 同九年 | 一三 | 一六 | 八 | 七七 | 三二三 | 三〇八 | 三,四九四 | 五六九 | 三,二一三 | 一,二五四 | 七一〇 | 一五九 | 一〇,一三四 |
| 同十年 | 二八 | 一三 | 一〇 | 七七 | 三三三 | 三九七 | 三,九五七 | 六八九 | 三,五八〇 | 一,四六二 | 三五八 | 二一一 | 一一,一〇五 |
| 同十一年 | 二一 | 一三 | 三五 | 九六 | 三五四 | 三九四 | 三,九八〇 | 六五三 | 三,六八一 | 一,一三三 | 五二〇 | 二一一 | 一一,一〇〇 |
| 同十二年 | 二九 | 三一 | 一〇 | 九二 | 三八二 | 四一一 | 四,〇六七 | 七〇四 | 三,四八四 | 一,三〇三 | 五九六 | 一三三 | 一一,三四二 |
| 同十三年 | 二一 | 三七 | 六 | 五七 | 三七九 | 四〇二 | 三,三七六 | 一,一八二 | 二,〇六四 | 二,〇五七 | 八三四 | 一四八 | 一〇,五六六 |
| 同十四年 | 二〇 | 五 | 六 | 四九 | 四一六 | 四四一 | 四,二九三 | 五三六 | 三,三〇三 | 八七二 | 二七七 | 一六三 | 一〇,二八一 |

## 三 自大正元年至大正十四年本縣壯丁花柳病（トラホーム）檢査狀況

| （年度） | 檢査人員 | （トラホーム患者）重症 | 中等症 | 輕症 | 計 | 檢査人員千分比例 | 全國順位 | （花柳病患者）梅毒 | 軟下疳即横痃 | 痳疾 | 計 | 檢査人員每千分比例 | 全國順位 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 大正元年 | 八、五四二 | 一六 | 二四九 | 一、五九四 | 一、八五九 | 二一七、六一 | 二七 | 二五 | 四一 | 七五 | 一四一 | 一六、五〇 | 一〇 |
| 同二年 | 八、三一九 | 五七 | 三五九 | 一、四八〇 | 一、八九六 | 二二七、九一 | 三三 | 四 | 四一 | 五七 | 一〇二 | 一二、二六 | 二 |
| 同三年 | 八、七六三 | 一三五 | 五四九 | 二、八六九 | 三、五五三 | 四〇五、四五 | 四五 | 四四 | 一七 | 五三 | 一一四 | 一三、〇一 | 二 |
| 同四年 | 八、九九八 | 一〇八 | 四三〇 | 三、三四四 | 三、七八二 | 四二〇、三三 | 四六 | 三九 | 二〇 | 八四 | 一四三 | 一五、八九 | 九 |
| 同五年 | 八、八五九 | 三〇 | 一五五 | 二、二七八 | 二、四六三 | 二七八、〇二 | 四四 | 一四 | 三一 | 七三 | 一〇八 | 一二、一九 | 六 |
| 同六年 | 九、四一七 | 七五 | 一七五 | 七三五 | 九八五 | 一〇四、六〇 | 一四 | 五六 | 二五 | 二〇二 | 二八三 | 三〇、〇五 | 三六 |
| 同七年 | 九、七四〇 | 二〇 | 一五〇 | 一、一五一 | 一、三三一 | 一三五、六三 | 一九 | 一三 | 二五 | 五六 | 九四 | 九、六五 | 四 |
| 同八年 | 九、六八七 | 五三 | 一六三 | 九五四 | 一、一六九 | 一二〇、六八 | 一八 | 四〇 | 三四 | 一三三 | 一九七 | 二〇、三四 | 三三 |
| 同九年 | 一〇、〇四九 | 一五 | 七三 | 九二七 | 一、〇一五 | 一〇一、〇〇 | 一三 | 五九 | 一〇 | 一〇〇 | 一六九 | 一六、八七 | 二 |
| 同十年 | 一〇、九六四 | 三五 | 二〇四 | 一、八五二 | 二、〇九一 | 一九〇、七二 | 三八 | 一四 | 三三 | 七六 | 一二三 | 一一、二三 | 八 |
| 同十一年 | 一一、〇五八 | 四七 | 一八一 | 一、二七七 | 一、五〇五 | 一三六、一〇 | 三三 | 二五 | 三六 | 五七 | 一一八 | 一〇、六七 | 六 |
| 同十二年 | 一一、一五二 | 五一 | 一八一 | 一、二〇五 | 一、四三七 | 一二八、八六 | 二一 | 二三 | 一八 | 一七三 | 二一三 | 一九、〇一 | 三六 |
| 同十三年 | 一〇、六七五 | 二七 | 一六七 | 二、九六七 | 三、一六三 | 二九六、三〇 | 四五 | 六九 | 三三 | 六一 | 一六三 | 一五、二七 | 二七 |
| 同十四年 | 一〇、三三三 | 三七 | 八五 | 一、七九二 | 一、九一四 | 一八五、二三 | 三七 | 九 | 二四 | 九一 | 一二四 | 一二、〇〇 | 一六 |

(備考)
全國順位ハ、全國各府縣中ニ於テ、成績佳良ナルモノヨリ順位ヲ記シタルナリ。

## 四　陸海軍人表　(群馬縣統計書)

| (年次) | (陸軍)(現役) | (豫備) | (後備) | (補充兵役) | (計) | (海軍)(現役) | (豫備) | (後備) | (補充兵役) | (計) | (合計) |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 明治三十年 | 一、九六八 | 一、九八八 | 九九九 | — | 四、九五五 | 三三 | 二 | 一 | — | 三五 | 四、九九〇 |
| 同三十六年 | 三、一九一 | 四、一〇四 | 二、一八八 | 六、八八四 | 一六、三六七 | 一〇八 | 六 | 一 | — | 一一五 | 一六、四八二 |
| 同四十年 | 三、七一七 | 四、八六三 | 四、一四〇 | 一七、一三七 | 二九、八五七 | 一九八 | 一三 | 三 | — | 二一三 | 三〇、〇七〇 |
| 大正元年 | 五、八一六 | 七、七六四 | 六、七三五 | 二八、三三四 | 四八、六三九 | 四八四 | 三七 | 二 | — | 五二三 | 四九、一六二 |
| 同十年 | 七、三四一 | 一〇、三四六 | 一四、八九四 | 三四、一七二 | 六六、七五三 | 一、〇三三 | 二〇八 | 九七 | 四 | 一、三三二 | 六八、〇八五 |
| 同十四年 | 六、〇五八 | 一一、九七二 | 一七、五八五 | 三七、七九八 | 七三、四一三 | 一、一〇三 | 五三 | 七三 | 一 | 一、七〇〇 | 七五、一一三 |

## 五　同郡別表　(大正十四年十二月末現在)　(本縣學務課調査)

| (郡市名) | (陸軍)(現役) | (豫備) | (後備) | (補充) | (計) | (海軍)(現役) | (豫備) | (後備) | (補充) | (計) | (合計) |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 勢多 | 八七三 | 一、二六六 | 一、九三五 | 四、四八七 | 八、五六一 | 一五六 | 七一 | 三 | 一 | 二三一 | 八、七九二 |

| 群馬 | 多野 | 北甘樂 | 碓氷 | 吾妻 | 利根 | 佐波 | 新田 | 山田 | 邑樂 | 前橋 | 高崎 | 桐生 | 合計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 八〇三 | 四九九 | 四二八 | 四二四 | 三〇〇 | 四一六 | 五二四 | 四〇四 | 二六一 | 五〇七 | 二七七 | 二一〇 | 一二三 | 六,〇五八 |
| 一,九一八 | 八八一 | 一,〇九三 | 八一三 | 六六四 | 七七四 | 一,一六一 | 八〇三 | 五八二 | 九二九 | 五一八 | 三七八 | 二九三 | 一一,九七二 |
| 二,六二四 | 一,三四三 | 一,四八六 | 一,三八六 | 八八二 | 一,〇四八 | 一,四九五 | 一,三〇三 | 九九六 | 一,六一三 | 六六七 | 五五七 | 四五〇 | 一七,五八五 |
| 五,六五五 | 二,八六二 | 三,二四二 | 二,五一〇 | 二,〇六六 | 二,四三九 | 三,三九一 | 二,五〇六 | 一,八二六 | 三,二七八 | 一,五五五 | 九八一 | 一,〇〇〇 | 三七,七九八 |
| 一〇,九九九 | 五,五八五 | 六,二四九 | 五,〇三三 | 三,九一二 | 四,六七七 | 六,五七一 | 四,九一六 | 三,六六五 | 六,三三七 | 三,〇一七 | 二,〇二六 | 一,八七六 | 七三,四一三 |
| 二一四 | 九〇 | 八八 | 六九 | 六三 | 五七 | 八四 | 八六 | 五三 | 五七 | 四三 | 二一 | 二三 | 一,一〇三 |
| 八八 | 五〇 | 四五 | 三三 | 三一 | 二六 | 三九 | 四〇 | 一五 | 三八 | 二五 | 一三 | 一〇 | 五三三 |
| 一三 | 五 | 一〇 | 四 | 一 | 一〇 | 七 | 三 | 四 | 九 | 一 | 一 | 二 | 七三 |
| — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | 一 |
| 三一五 | 一四五 | 一四三 | 一〇五 | 九五 | 九三 | 一三〇 | 一二九 | 七二 | 一〇四 | 六九 | 三五 | 三四 | 一,七〇〇 |
| 一一,三一四 | 五,七三〇 | 六,三九二 | 五,一三七 | 四,〇〇七 | 四,七七〇 | 六,七〇一 | 五,〇四五 | 三,七三七 | 六,四三二 | 三,〇八六 | 二,〇六一 | 一,九一〇 | 七五,一一三 |

## 第五節　日本赤十字社群馬支部及愛國婦人會群馬支部

### 第一項　日本赤十字社群馬支部

群馬支部の沿革

本縣に委員部を設置したるは、明治二十年十一月六日なり。當時は本社の前身たる博愛社が、始めて日本赤十字社と改稱したる時にて、世人未だ本社の主旨目的を知る者尠く、隨つて其社員數の如きも、縣下を通じて僅に五名に過ぎざりしが、各郡長に委員を囑託し、年醵金の收集、社員の增募方を委託し、社業の擴張を圖りたり。越えて明治二十年十一月、各郡に委員部設置以來、社業は漸次其步を進め、二十五年十二月末に至りて、現在社員數九百餘名に及びたり。明治二十六年十月十六日、群馬縣委員部を群馬支部と改稱し、郡市に委員部、町村に分區を置き、以て系統的に事務を處理することゝなれり。而して支部總會を開催すること、前後五回に及ぶ。大正二年、支部病院を開設し、救護看護婦生徒の養成をなし、普通患者の治療並に施療に從事す。亦同年支部病院内に、結核診斷所を置き、又

病院構内に病舍一棟を建設し、之に患者を收容治療し、以て結核豫防撲滅事業の一端となし、又各郡市に講演會を開催し、豫防注意書を配付し、各地に衞生展覽會衞生劇等を開催し、以て結核豫防に關する知識の普及を計れり。尙大正十年三月、遠隔せる數箇郡に委員部診斷所を設置し、地方結核患者の診斷治療に從事せしめ、以て社旨の普及を計りつゝあり。創立以來、委員長及び支部長には、本縣知事を推戴し、社員の數は逐年發達の狀況にあり。

## 赤十字社員數調査表

| (年度) | (總數) | (有功章) | (特別社員) | (正社員) (完納) | (正社員) (納期中) | (賛助員) (完納) | (賛助員) (納期中) | (總人口) | 正社員以上ノ社員一人ニ對スル人口 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 明治二十年 | 二八 | — | — | — | 二七 | — | 二 | 六九四、三五七 | 二五、七一七 |
| 同廿五年 | 九七九 | — | 一 | — | 八〇九 | — | 一六九 | 七六七、五六六 | 九四八 |
| 同三十年 | 七、五六六 | 一 | 三 | 二八五 | 七、〇五七 | 七四 | 一三八 | 八〇四、九五八 | 一〇九 |
| 同三十五年 | 一七、六七三 | 一 | 三九 | 一、七九二 | 一五、六七八 | 一一六 | 四七 | 八八七、八七八 | 五一 |
| 同四十年 | 二四、一五〇 | 六 | 一、一四 | 五、六九四 | 一八、二〇三 | 一三七 | 三 | 九四五、七二六 | 三九 |
| 大正元年 | 二六、三五〇 | 一七 | 四、六六 | 一〇、一三五 | 一五、六二八 | 一三八 | 三 | 一、〇〇七、六四八 | 三八 |
| 同六年 | 二九、五六二 | 一五 | 六、〇九 | 一五、六六六 | 一三、一五九 | 一三八 | — | 一、〇八〇、三三九 | 三六 |
| 同十一年 | 三八、一〇九 | 四四 | 一、一六八 | 一九、〇六二 | 一七、七五四 | 一三五 | — | 一、〇八二、六〇〇 | 二九 |

| 大正十三年 | 四〇、五四八 | 四六 | 一三、八〇 | 二〇、九一九 | 一八、二〇六 | 四三 | — | 一、二一五、三〇〇 | 二八 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|

事業

過去戰役に於ける行動の大要を左に錄す。

(一)明治二十七八年戰役　明治二十七年七月三十一日、朝鮮事件につき、召集に應じ、救護に從事すべき篤志看護婦選定方、本社長よりの通達に接し、當支部に於ては、直に之が募集に着手し、四十四名の志願者を得たり。是等は多少看護法の講習を受けたるものなれども、到底純然たる看護婦と比すべきものにあらざるを以て、前橋病院に速成講習を委託し、同年十月十八日より、右講習に着手したり。尙三名は中途事故退學したるを以て、他四十一名に對し、同年十二月廿一日、修業證書を授與し、何時にても召集に應じ得る準備をなしたり。明治二十八年三月、本社の命令に依り、醫員二名、看護人六名を募集し、本社に派遣し、尙曩に速成したる特志看護婦の內、二十六名召集の命に接し、本社に派遣し、救護に從事せしめたり。尙當支部附屬として、高崎將校團看護婦（第十五聯隊將校家族ノ團結シタルモノ）なるものを本社に派遣して、救護事業を幇助したり。

(二)明治三十三年北淸事變　明治三十三年七月、本社の召集に依り、當支部に於て養成したる看護人四名を派遣し、尙同年九月、看護婦一名をも派遣したり。

(三)明治三十七八年戰役　明治三十七年七月廿二日、本社長より、當支部第二十二

救護班は、陸軍病院船勤務を命ずるに付、八月三日、宇品碇泊場司令部に參着せしむべき旨通達ありたるを以て、卽日該班救護員一同へ召集狀を發し、七月二十七日當支部へ參集せしめ、諸般準備を整へ同月三十日出發派遣したり。三十八年十二月三十一日、日本赤十字社群馬支部所管、陸軍病院船御吉野丸乘組、第二十二救護班任務結了歸還に付き、三十九年一月二日、解散式を擧行したり。三十七年二月廿三日より、三十九年五月二日に至る間、步兵第十五聯隊、及び第十六・第三十の兩聯隊出征竝に凱旋に際し、縣下高崎市停車場通過、每に支部長以下職員、會場に出張、犒軍をなしたる日數百三十九日にして、出征軍人通過の際は、私製郵便繪葉書を寄贈し、又出征竝に凱旋共に麥湯其他接待をなし、尙高崎豫備病院入院患者を慰問したること數回なり。又出征軍人及び本社救護班にして、戰病死に就き葬儀執行の際は、支部長以下幹事以上の職員に於て、夫々會葬し、弔詞を贈りたること、實に數十回の多きに達せり。

(四) 自大正三年至大正九年 日獨及歐洲戰役　佛國派遣救護班要員として、救護看護婦一名を派遣したり。東部西伯利亞方面へ臨時救護班要員として、救護看護人二名、看護婦一名を派遣したり。

浦鹽派遣救護班要員として、救護看護婦二名を派遣したり。サガレン洲派遣救

護班要員として、同一人を派遣したり。（日本赤十字社群馬支部調査）



## 第二項　愛國婦人會群馬支部

本支部創立は、明治三十四年九月一日にして、事務所を群馬縣廳内に設置す。當支部幹事長缺員にして、支部幹事三橋敬子、副幹事長として事務を掌理す。明治三十五年五月十六日、同人幹事長となれり。此時始めて各郡市に幹事十五名を配置し、各區域を通じて、着々會旨の普及に努力せり。翌三十六年十二月二十六日、本會の通知に則り、支部幹事部長を支部長、副幹事長を支部副長と改稱し、且つ支部に顧問（男子）を置く。此時より本縣知事夫人を支部長に、本縣知事を顧問に推戴することとなれり。

明治三十七年十月八日、定款の制定に依り、支部規則を制定し、各郡市に幹事部長（從前の如く）幹事部顧問を設く。各郡市長の夫人を幹事部長とし、其夫たる各郡市長顧問たり。尙縣下町村を委員區とし、區域に幹事、又は委員區長・委員を設置することとなれり。委員區長は、町村長夫人之に當り、缺員の場合は代理助役

夫人たることもあり。委員は委員區長の夫たる各町村長（町村長缺員の場合は代理助役）之に當る。幹事は委員區内に於て若干名を置く。（幹事部長の推薦に依り支部長之を囑託す。）斯の如く縣郡市町村長夫人就職し、上下相通じて會務を處理するに至れり。然れども事實は夫たる顧問・委員等に於て事務を統掌するに過ぎず。

本支部創立當時は、會員僅に十六名なりしが、其年十二月末に至り、漸く特別會員二十五名、通常會員三十四名、計五十九名となりしも、徴納收會費僅に八十四圓のみにして、徴かに支部の存立を維持するに過ぎず。三十五年・三十六年の兩年間は、遲々として更に振はざりしが、明治三十七年に至り、三十七八年戰役の起るに伴ひ、大に活動を開始し、郡市幹事部長の外に、縣下各警察署長・分署長を顧問に囑託し、幹事部長と相呼應して、會員の增募を企て、明治三十六年十二月末日までに、特別會員四十七名、通常會員百九十九名、計二百四十六名となり、明治三十八年末には、特別會員二百十七名、通常會員千三百三十七名、計千五百五十四名となるに至れり。爾後年々增募の結果、大正九年十二月末日には、實に一萬六千三百三十人、（特別二千二十三人、通常一萬四千二百九十三人）大正十三年には二萬一千三百七十四人、（内譯特別會員三千百六十七人、通常會員一萬八千二百〇七人）此會費一萬六百三十八圓を徴收し得べき状況を見るに至れ

り。

支部の事業は、本會の旨趣に基き、主として戰病死軍人の遺族、並に癈兵の救護出征軍人の遺族、及び一般の救濟を行ひ、尙會の發展を計らんが爲めに、時々支部總會・幹事部總會・委員區總會を開催せり。其他講演會を開き、又軍隊の犒軍、出征戰病死軍人の會葬に從事す。大正十一年八月十一日、幼兒保育所設置の認可を受け、同年十月一日より實施す。明治三十七八年戰役に於ては、支部長以下職員・會員等、出征及び歸還の軍隊を各停車場に於て送迎し、或は東京豫備病院に、或は高崎病院に就て、傷病兵の慰問を爲し、癈兵及び軍人の遺族を訪問し、且つ戰病死者の葬式擧行の際は、其都度會葬する等、專ら慰籍の事に努めたり。又開戰以來、定期救護を受けたる者九十三人、臨時救護を受けたるもの百七十人、此金八百七十三圓、外に上野教育會附屬失明軍人訓盲所、經費補助として尙支部より金百圓を寄贈し、以て其事業を翼賛せり。尙右訓盲所に就ては、本社よりも金四百圓を寄贈せられたり。（愛國婦人會群馬支部調査。）

# 第十二章　衞生

## 第一節　職制

岩鼻縣時代には、衞生に關する職制を見ず。思ふに、百事草創の際、治安維持を主とする當時に在りては、蓋し止むを得ざりしならん。然れども衞生保健の道は、人生の大事、國家消長の係る所なれば、地方政治も稍〻緒に就きたる熊谷縣時代に於ては、大に此方面に留意する所あり。當時國の衞生行政は、文部省の所管なりしを以て、熊谷縣亦學務係の一員に衞生係兼務を命じ、先づ衞生局を熊谷驛に創設し、專ら人民一般の健康を保護し、醫務を統轄せしむ。是れ蓋し本縣に於ける衞生職制の嚆矢たる可し。明治九年五月、學務課より第一課庶務課に移されしが、明治十二年十二月の本縣職制事務章程に依りて、再び學務課に戻り、衞生科となれり。十三年三月、學務課の衞生科を廢して、別に獨立の一課衞生課を設置し、公私立病院・地方衞生會・町村醫・幷に醫務・醫師・製藥家・藥舖・產婆・入齒・齒拔・鍼灸治・傳染病豫防方法・衞生法、及び溝渠・厠圊・芥溜の掃除、種痘・檢疫・避病舍の開廢、玩弄品・

着金料・屠畜場・魚干場等、專ら技術に關するものを主管したりしが、明治二十三年十一月、本縣處務細則の改正により、衞生課は内務部を離れて、警察部に入り、保安課の一分掌中に屬せり。明治三十七年六月の改正により、警務課・保安課・衞生課と相竝びて、第四部警察部に屬し、以て現時に及べり。所管事務としては、明治四十年七月以降、從來内務部第四課に屬したる、獸疫に關する事務を新に移管せらる。而して又所屬官吏として、明治二十五六年頃までは、事務屬吏にて事足りしかど、保健の障害となるべき行爲の取締監督を爲すに於ては、專門の技術者の必要を見るに至り、次第に之を設置し、明治四十二年、トラホーム豫防の爲め、縣醫二名を置き、明治四十五年、縣警察醫設置制に及び、更に大正十年十一月、道府縣衞生職員制（勅令第四百三十五號）、公布せらるゝに及び、本縣には衞生技師四名、衞生技手十二名を置かれ、衞生行政は次第に完備の域に進めり。

## 第二節　明治初年の衛生狀態

師範學校學科に生理を加ふ

入浴規則の頒布

衛生所の出張所設置

維新當初に在りては、一般民衆の衛生思想幼稚にして、身命保護の理を解せず。其醫たる者、亦不學無術病理の何物たるを知らず、官亦衛生に對する施設なく、官民共に衛生觀念に乏しきを以て、熊谷縣に於ては、明治六年五月、學制改革の際、學科中生理の一科を重大視し、師範學校教員生徒をして、各自生理の殊に貴重すべきを悟らしめ、且つ實際解剖を目擊せしめて、大に衛生思想を喚起する所あらしめんとせり。明治七年一月、熊谷驛に衛生所を創設し、專ら人民一般の健剛を保護することを掌り、醫師を統轄せり。四月文部省に申請して、醫業進歩の爲め引取人なき病囚の遺骸解剖の許可を受け、熊谷驛囚獄に於て解剖を施せり。同月掛醫員を管內に派遣し、各溫泉の分析試驗を行ひ、溫泉客舍に入浴規則を頒布し、入浴者の保健衛生上に遺憾なきことを期せり。是等縣當局の努力は、一般人民に認められ、同七月には衛生所分置の議起り、依りて先づ甘樂郡富岡町に出張所を設く。又吾妻郡原町の區民協議し、區費を以て出張所設置を出願するに及び、亦之を許可して、醫員を在勤せしむ。翌八年一月には、種痘規則を定む。同年四

月、管民漸く漢方醫治術の迂濶にして、良醫を請求するの念慮萠生せるを以て、衞生所を師範學校中に移し、醫務概則卽ち醫師・產婆・針治・導引・賣藥業者等の取締法を制定し、之を普く管下各區に領布し、九年三月、內務省布達に依り、醫務取締同世話役を選拔し、三名づつを各區に置き、專ら醫務に關らしめ、同八月心得書を定めて、各村醫員及び每戶に達せり。

醫學概則の制定

明治九年八月、群馬縣廳を高崎驛に假設したるに由り、衞生所亦假りに同驛若松町龍廣寺に設けらる。同九月縣廳の前橋町に移るに及び、衞生所も亦前橋町横山町に假設せらる。尋いで自費生徒を徵集し同所に醫學校を開く。此冬新轄新田・山田・邑樂の三郡、舊管地に倣ひ、醫務奬勵、且つ娼妓黴毒檢查施行の爲め、新田郡太田町に出張所を設け、醫員を在勤せしめ、亦各區をして協議せしめ、醫學講習所を設置す。此際勢多郡水沼村、外三箇村有志者、協力醵金して、同村に衞生出張所を設け、共立病院と稱せり。

衞生所の設置

明治十年二月、管內醫事の儀表として、醫學校新築の事を謀り、倍〻衆醫を振勵せしめんとす。依りて各區內醫生藥舖等の諸有志の寄附、及び前橋生絲改所より獻ずる所の二千圓を以て、其費に充て、其不足は縣稅を以て補ふの儀を決し、事由

醫學校新築の決議

を內務省に上請せり。同年六月、各所より蓄藏製氷販賣の事を出願す。依りて其水質を分析せしめ、無害のものは其請を允せり。同年九月、村吏等協力出金して、甘樂郡下仁田町に衛生所設置を乞ひ、之を許可せらる。此年に至りて、管內醫術の進步駸々として觀るべき勢を成せり。去る八年各區に講習所を設置してより、殆四歲にして從前開業漢醫の洋法を學び、其術優等に至る者、數十人に及べり。

明治十一年一月、醫學區費生徒召募規則を假定し、同年五月より、醫學校に入校せしむ。是に於て從前の校則・寮則を改正す。即ち本縣醫學校は、各區內の醫員となるべき者を養成する所とし、其生徒を二種とし、一を區費生として、二十七名を定員とし、一を自費生として、定員なく、教場の都合に依りて、之を定むる事とす。修業年限は之を三箇年とす。而して衛生所を廢して、單に醫學校とし、同校中に附屬病院を置く。然るに此醫學校及び附屬病院は、經費の關係にて、明治十四年七月廢止せられ、改めて縣立病院を設置せられたり。明治十三年九月には、郡醫設置法(甲第百四號)、を定め、一郡內に二名乃至三名を置き、郡長之を人選し、縣令之を任命し、以て醫療の普及を圖れり。

以上は主として明治初年より同十年前後に於ける本縣衛生行政狀態の大要なり。之を約說すれば、當局意を疾病治療に用ひ、專ら良醫の供給に努力したる時代と云ふ可し。而して此頃に至り、一方には人智次第に進み、他方には傳染病流行等の刺戟を受けて、人民一般衛生保健の人間生活に必要なるを直觀するに及びて、眞の意義に於ける保健衛生施設の必要を生じ、是れより本縣の衛生狀態は啓蒙期を脫して、諸般の施設法令、次第に完備の域に進めり。

## 第三節　防疫

本縣に於ける防疫制度としては明治六年八月痢病流行に就き豫防法を令達したるを嚆矢とすべきか。明治十年頃より諸種の傳染病流行し明治十三年の調査に依れば虎列剌病九人腸チブス病五百五十四人發疹チブス病百六十四人赤痢病二百十四人實布垤里亞病四十人の患者を出し其結果は人命を傷ひ生産を害すること少からざりしを以て防疫制度の發達を促したり。明治十二年十一月には管內開業醫師にして他管內に在るコレラ病其他惡疫に罹りし者を診斷したる際は該患者所在の戶長役場最寄郡役所或は警察署に屆け出づべき旨を公立病院及び開業醫師に達す。翌十二月には六種傳染病流行の節取扱權限を定めて郡役所及び警保課に達し郡役所には患者治療に關することを主管せしめ警察署には檢疫豫防消毒の事務を主管せしめたり。明治十三年九月には宮內省より下附せられたる賜金を以て防疫會所各郡役所々轄內四箇所設置に配賦し防疫費の幾分を補助し明治十三年九月甲第百四號同十四年二月には部內に於て傳染病發生して醫師無きか或は病勢によりては醫師を派遣すべき制を定め超えて同十六年一月

には、傳染病患家の交通遮斷の制を設け、翌二月には、傳染病に罹り、身元赤貧にして資力なき者に限り、地方税衛生費より支辨方を、戸長・衛生委員に訓令し、(太政官第八號)に基き、同六月には、六種傳染病死屍埋火葬場を各町村に設置せしめ、十九年七月には、傳染病豫防法要領を布達し、(甲第六十二號)防疫制度稍〻整頓せり。

是れより後は、特に流行蔓延の虞ある時、或は流行蔓延を極めたる特殊の傳染病に就き、其都度防疫制度を講じ、(各種病類別參照)而も、一般傳染病豫防に必要なる事項は、特に之を規定したり。明治二十八年五月、避病院及び患者隔離所設備規則(縣令第二十九號)を定め、又傳染病豫防上施設計畫すべき事項は、合議すべき件を郡市役所警察所に訓令し、(訓令第四十一號)同二十九年七月には、避病院及び患者隔離所管理規程(訓令甲第七十七號)を、明治三十一年二月には、市町村傳染病豫防費補助規程(縣令第十五號)を創定し、傳染病豫防に關し特に要したる費用に就いては、其幾分を補助し、明治三十三年二月には、傳染病隔離病舎設置規則を改定し、同設備細則(訓令甲第十四號)を定め、同三十四年四月には、清潔保持に關する規則を制し、同三十七年五月には、檢疫委員職務章程(訓令甲第二十八號)を定め、明治三十八年より縣廳内に細菌檢査所を設けて、事務を開始せり。更に明治三十九年一月には、凶歳に伴ふ衛生上の病害を注意すべ

き件告諭第一號、を翌四十年九月には、水害に關する衛生上の注意方告諭第三號、を告諭し、又明治四十一年七月、傳染病豫防方針訓令乙第二百六十五號、を公示する等、周到なる注意を拂ひたり。されば四十二年以後に於ては、特別なる惡疫の流行を見ざるに至れり。斯くて傳染病豫防法の公布により、大正十二年八月、傳染病豫防法施行細則、縣令第三十九號、傳染病豫防施行手續訓令甲第三十八號、を規定して、豫防法を統一したり。此他夙に衛生會を設置し、之が活動を促し、別項記載、衛生思想の涵養に努むると與に、郡當局・警察官吏を督勵して、法の運用に遺憾なきを期せり。

## 第一項　痘瘡

痘瘡は諸種の傳染病中、夙に注意せられしものにして、之が豫防として種痘術の効果あること、既に明瞭となりしかば、本縣にては明治七年三月廿七日、種痘施行に就き心得書を縣下に發せり。

種痘施行ニツキ心得　（明治七年三月二十七日番外）

疱瘡ハ人間一世ノ大厄難ニテ、重キハ命ニ拘ハリ、輕キハ片輪トナリ、生レツキ美

シキ顏ニ痕ヲツケ、幸ニ免レテ成長スル者モ、流行ノ時ニ氣味惡ク思ヒ、若大人トナリテ流行ノ疱瘡ニ罹レバ、命ヲ失フ者マヽ有之、然ルニ種痘ヲ以テ天然ノ疱瘡に換ヘ、前條ノ厄難ヲ免ルヽハ、此上モナキ良術ナルヲ、或ハ邪法ナリト唱ヘ、又ハ再ビ流行ノ疱瘡ニカヽルトテ、信ゼザル者モ有之由、甚心得違ノ事ニ候。假令再ビ流行ノ疱瘡ニ罹レドモ、一度種痘セシ者ハ其毒減少シ、死スベキ者ハ死ヲ免レ、片輪ニナルベキ者ハ、片輪ニナラザルコト疑ナシ。去ル二月二日、大區會議ノ節、有志ノ者申出ノ趣モ有之、衆議一決セシニ依リ、則チ左ノ規則ヲ以テ、一般種痘術取行候條、一同其意ヲ得、衞生局御雇醫員、各出張所ヨリ口取相達次第、兼テ書上ゲノ小兒召連罷出、種痘可致旨、毎戸無洩懇切ニ可相達者也。（規則略。）

右の如く告諭を發し、種痘料上中下三等に分ち、上等二十五錢、中等拾錢、下等五錢とし、貧富によりて區別し、極貧の者は全く免除したるにも拘はらず、此趣旨徹底せざるに依り、翌八年一月廿四日、重ねて左の訓令を發して、種痘規則施行に就き、人民を說諭し、夭死を保護する事務を、專ら正副區戶長に擔任せしめて、大に勸奬する所ありたり。

種痘施行の方法創立

種痘ノ儀ニツキテハ、昨明治七年三月中、本縣番外ヲ以テ布達候通、人命保護ノ一

大事件ニシテ、素ヨリ貴重スベキ筋ニ有之候得共、中ニハ未ダ舊習ニ惑溺シ、種痘ヲ信ゼズ、遂ニ天命ヲ誤リ候者往々有之哉ニ相聞候ニ付、於文部省モ深ク被爲在配慮、更ニ規則モ精密御改定相成候次第ニ有之。依テ本縣下ニ於テモ今般別記ノ通リ方法相設ケ、一般施行候條、御趣意猶厚ク相心得、各區各村内人民ヘ無洩懇切ニ相諭シ、人命保護行屆候樣可致候。最手續書ハ勿論、實際施行ノ順序ハ、衛生局ヘ可伺出、此段相達候也。

### 種痘ノ儀ニツキ告諭（明治九年三月廿九日第四十五號）

種痘ノ儀ニ付テハ、一昨明治七年三月、本縣番外、同八年一月、本縣第十四號ヲ以テ、布達ノ通、人命保護ノ一大要件ニシテ、素ヨリ貴重スベキ筋ニ有之候處、僻陬未開ノ地ニ至リ候テハ、未ダ舊習ニ惑溺シ、種痘ノ貴キヲ信ゼズ、遂ニ愛子ヲシテ不具癈疾ニ致シ、甚ダシキハ自ラ生命ヲ誤リ候者往々有之哉ニ相聞、甚以憫然ノ至リニ候。右ハ豫テ政府ニ於テモ深ク御配慮被爲在候次第ニ付、尚一層御趣意柄厚ク相心得、種痘ノ期ヲ誤ラズ、最寄種痘醫ニ就キ、必施術致サセベク、萬一其期節等了解致サザル者有之候ハヾ、其區々戸長ヨリ厚ク示諭シ、人命保護ノ御趣意普ク徹底候樣可致、種痘ノ儀ニ付テハ、是迄數回相達候旨モ有之候得共、時々遷延、自然舊習ニ歸依候テハ、以ノ外ノ次第ニ有之、依テ更ニ及告諭候條、此旨無洩懇切ニ可通達事。

明治九年七月十一日、種痘規則を定む。蓋し天然痘豫防規則、內務省甲第十六號を以て布達せられたるに依り、此布達に基いて制定したるものなり。同十八年二月には、天然痘ある家には、赤色紙片を貼布すべき件（甲第八號）を達し、十九年二月、甲第十八號を以て、種痘細則を、同日告諭第二號を以て、種痘者心得を發して、種痘思想の普及に努めたり。會〻明治廿四年十二月、山田郡大間々町に天然痘患者十二人の發生を見、明治廿四年十一月一日より、廿五年三月三十一日までに、縣下に三百九十七名の多數の患者を出し、未種痘患者死亡者二五・九三%を出したれば、愈〻種痘を勵行して、豫防撲滅に努めしめたり。明治三十一年四月、痘苗請求手續（訓令甲第四十八號、）を定め、更に四十二年四月、種痘法、（法律第三十五號、）同年十二月、種痘法施行規則（內務省令第二十六號、）公布せらるゝや、本縣亦種痘法令施行手續（明治四十三年三月訓令甲第十八號、）を布達して、之が勵行に努力したり。是に於て一般人民も種痘の有効なるを知得し、四十四年頃に至りては、故意に接種を免れんとする者もなく、該病も大なる流行なくして現時に及べり。

## 第二項　コレラ病

本病は明治十年頃、既に蔓延の兆ありたりと見えて、明治十年九月廿五日、コレラ病類似患者は屆出づべき旨令達あり。次いで同年九月廿四日、コレラ病豫防法心得を各醫師方へ配布し、乙第七十八號、同廿九日には、甲第五十六號を以て、左の注意を達せり。

コレラ病ノ際ニ於テ各自注意スベキ養生法等、今般左ノ通リ内務省衞生局報告第五號ヲ以テ告示相成候ニ付、右方法豫テ心得置可申、此旨布達候事。

明治十二年七月には、本縣管内に本病の流行を見たるに就き、甲第九十二號を以て、豫防法を令達し、同年十一月十四日、本縣の開業醫師にして、他管内に在るコレラ病其他惡疫に罹りし者を診斷の節は、該患者所在の戸長役場、又は最寄郡役所、或は警察署に屆出づべき旨を達せり。翌十三年五月流行期に先ち、左の告諭を發せり。

昨十二年七月ノ始メ、コレラ病管内各地ニ傳播ノ處、各自專ラ豫防消毒等ニ注意シタメニ該病ニ罹ルモノ僅ニ百六十餘名ニ過ギズシテ、遂ニ撲滅ニ歸ス。然リト

雖モ豫防主眼トナスベキ火葬・埋葬・燒棄場等ノ設ケ無之ヨリ、多少病毒ヲ殘シ、再發ノ程モ難計、殊ニ本年モ追々惡疫萌芽ノ季節ニ赴キ、懸念少カラザルニ付キ、右火葬・埋葬及排泄物・汚穢物燒棄場等、人家稠密ノ場所ニ於テハ、適應ノ地ヲ撰定シオキ、萬一該病ニ罹ルモノ之アルモ、實地差支ナキ様篤ク協議ヲ盡シ、早速毎箇所取調、郡役所ヲ經テ可屆出、此旨相達候事。（乙第三十四號）

是月本病豫防法教諭方に就き、神道各宗教導職に左の令達あり。

コレラ病豫防ノ義ニ付、内務省ヨリ各管長ヘ諭達ノ趣モ有之、各自ニ於テモ既ニ了知ノ事ニ候得共、該病ノ毒タル、古今無比ノ猛毒ニシテ、瞬時モ忽如スベカラズ。平素攝生上最注意可致儀ニ候處、或ハ前年ノ傳染少カリシヲ恃ミ、甚ダシキハ祈禱符呪ヲ信ジ、豫防治法ノ詳細ヲ辨ゼザル等、心得違ノ者無之様、各地ノ状況ニ隨ヒ疑惑アル處ヲ視察シ、懇諭教誘厚ク注意可致、此旨諭達候事。（無號）

同年七月廿四日、重ねてコレラ病豫防實施の方法を布達せり。此年は本縣患者三千百十二名に上り、最流行を極めたる年なりとす。同十六年七月戸長役場衞生委員に向つて、自今コレラ病患者ありたる節は、廿五項の取調表を作製し、（書式を示）し、所轄郡役所を經て、縣廳へ差出さしめ、同十八年十月には、戸長役場に對し、コレ

ラ病患者發生の場合には、其源因を調査して報告すべき旨を達し、(乙第百十八號、)翌十九年五月十五日には、コレラ病流行終熄後の報告書を、郡役所より差出さしめ、同年六月には、本病豫防消毒心得書(内務大臣の訓令に基づき、)を發し、同年九月には、コレラ病豫防注意を諭達す。(諭達第十號。) 同年八月には、戸長役場に衞生方を諭告し、同十五日、コレラ病檢疫心得を定む。(訓令第五號。) 又同廿五年六月には、訓令甲第六十五號を以て、コレラ病豫防に關する件を訓令して、豫防に注意し、蔓延に先ちコレラ菌の撲滅を期せしめたり。

## 第三項　赤痢病

明治六年、本縣にては早くも痢病の流行したることあり。此痢病が赤痢病なりや否やは判明せざれども、明治六年八月、第三十一號を以て、赤痢流行に就き、豫防法を講ずべき旨を布達せり。曰く、

此節頻リニ痢病ヲ煩ヒ候者有之、右ハ流行病ノ一種ニシテ、地中或ハ空氣ノ中ニ一種ノ毒氣出來シテ、人ノ呼吸又ハ毛穴等ヨリ染込ミ、終ニ此病トナルナリ。依テ

流行病ヲ防グ養生ノ法ハナシトノ說ナレドモ、日本地方ノ如キ、未ダ養生ノ道開ケズ、食料ノ法モ定マラザルニ依テ發スルモ亦多シ。故ニ病ノ起ルヲ防グノ法、並痢病ノ手當大略ヲ示スコト左ノ如シ。（方法手當省略。）

明治十三年以後の統計に據れば、同十三年に赤痢病患者二百を超えたる後は、著るしく減少して、五十以上に達することなかりしが、明治廿七年には、該病流行の虞ありて、同年七月三日、告諭第三號を以て、赤痢病豫防の件を發せられ、翌八月に至り、赤痢病に疑はしき患者を診察したる時は、通知すべき旨、本縣令第四十二號を以て令達せられたり。事實此時に於て、本縣にては未だ一人の赤痢患者あらざりしも、前年即ち明治廿六年に於て神奈川縣下まで流行したるを推考して、此年は本縣地方を侵襲する虞ありと認め、豫め之を警戒せしなり。果せる哉、一年を隔てゝ明治廿九年、俄然大流行を來し、其勢頗る猖獗を極めたり。其患者數、明治廿九年一月一日より同年十一月三十日まで、實に九千四百五十四人、死亡總數千八百四十六人に及び、吾妻郡を最多とす。依りて本縣にては、臨時檢疫部を設置し、之が撲滅に努力したれど、頓に屏息せざりき。翌三十年も亦大に流行し、總數五千八百三十八人（明治三十年一月一日より同十二月廿五日に至る、）死亡者一千二百七十四人にして、利

根郡を最多とす。是より本縣に於ても、本病の豫防撲滅に就きては、一層努力する所あり。明傳三十二年七月には、赤痢病豫防に就き、特に告諭を發せり。（告諭第一號。）明治三十三年二月、傳染病院隔離病舍設置規則を改正し、同年五月、各郡市に檢疫委員事務所を設置し、檢疫に努めたる結果、次第に減少するに至れり。

明治四十年八月、前橋市に多數の赤痢患者を發生したり。流行の源因が、用水使用にあるを究め、縣令第三十五號を發して、一時之が使用を禁じたることあり。此時代より本縣に於ては、本病の流行源因を精密に探究し、成案を得、四十二年七月、訓令乙第二六五號を以て、本病豫防の詳密なる方針を制定し、告諭を發して、縣下一般人民に對し、各自豫防上の自衞心得を周知せしめ、專ら豫防撲滅に腐心せる結果、明治四十三年後は、大なる流行を見ざるに至れり。

### 第四項　腸チブス發疹チブス及パラチブス

腸チブス及び發疹チブス病は、明治初期頃既に流行を見たりと見え、明治十三年八月、公私立病院及び開業醫師に向つて、此二病辨識心得（内務省衞生局報告第十五號、發疹室扶斯・腸

室扶斯辨識心得、を發したることあり。而も腸チブス患者は、年々終熄せず。其數千人を超過すること稀ならず。明治廿八年は、千三百七十三名にして明治十三年以後の最多記錄なり。之が爲めに豫防撲滅に苦心したれども、十分なる目的を達せず、遂に明治四十年五月、本縣廳細菌室に於て調製せる、腸チブス診斷液を無料にて、縣下開業醫師に下付することゝし、翌四十一年には、早期診斷法を施行し、同四十二年には、自宅療養を禁じ、本病患者は全部隔離舍に收容して加養せしむる方法を執れり。而も容易に終熄せず、年々多數の患者を出したるに鑑み明治四十四年には、之が豫防方策に就き、各郡醫師會竝に檢疫委員の意見を徵し、之が防疫に努めたれば、次第に患者の數は減じたる如きも、年々六百以上の患者を出せるは、甚だ遺憾とする所なり。

發疹チブス

發疹チブスは、明治十二三年頃流行したる以後、年々少數の患者を出したるのみ。大正三年、一時百名以上に達したれば、本縣にては大正三年四月、告諭第二號を以て、豫防に關する件を告諭し、次いで本病の類似病に對し、傳染病豫防法の全部を適用する旨を達せり。（縣令第五十五號。）

パラチブス

パラチブスは從來一般人民は勿論、醫師に於ても、不全チブスと同一のものと

して所置したりしが、明治四十四年七月廿一日、傳染病豫防法第一條第二項に依り、内務省令を以て獨立の傳染病として取扱ふことに規定せられたり。是年勢多郡敷島村の屆出を嚆矢とし、一市九郡二十五箇町村より屆出でたる患者、百七十五名に達せり。内細菌檢査を行ひたる者百十二名内パラチブス菌を見出したるものは十八名、其他は腸チブス菌を認めたるものと、病源菌を認めざるものと相半するの狀態なるを以て、尚腸チブス病と混同するを免れざりき。而も年々患者を出し、大正九年には、七百十一名の多數を出して、レコードを作れり。

## 第五項　猩紅熱

本病は明治三十六年、始めて前橋市に一名發生し、二年を隔てゝ、明治三十九年、前橋市に三人發生し、翌四十年、又々同市に四人の患者を出し、其翌四十一年には、同市四人の外、郡部に五人の患者を出したり。當時該病に對する世人の衞生觀念極めて幼稚なりし爲めに、豫防救濟の方法に缺陷ありて、四十二年に三百九十三人、四十三年に五百十九人の多數を出したれば、本縣にては患者の絶對隔離を

規定し、之が豫防防疫に努めたり。此時の注意書訓令第七十三號（明治四十二年十二月十六日）は左の如し。

傳染病毒ノ傳播ヲ防ギ、該病ノ流行ヲ防遏スル最良ノ手段ハ、迅速ニ且ツ完全ナル消毒法ノ施行ノ、患者ト健康者トノ隔離ニ若クモノナキコトハ、從來ノ實驗ニ徵シテ明ナル所ナリトス。之ヲ以テ年々本縣下ニ發生スル赤痢腸チブスニ對シテ、絕對隔離ノ方法ヲ採リ來リシガ、猩紅熱ニ付テハ明治三十九年ヨリ昨四十一年ニ至ルノ間、僅ニ十數名ノ發生ヲ見、其區域モ亦一局部ニ止マリシヲ以テ、之ガ豫防施設ハ前二者ニ比シ、一般世人ハ勿論、當該者ニ於テモ稍遺憾トスル所アリタリ。然ルニ本年一月、斯病山田郡ノ一隅ニ發生セシ以來、各地ニ續發シ、其流行二市七郡ニ亙リ、患者ノ數二百八十六名ノ多キニ及ビ、今尙終熄ノ模樣見エズ。如斯多數ノ患者ヲ出シタルハ、如何ナル原因ニ基クカハ、目下調査中ニ屬スルヲ以テ、不詳ナラズト雖モ、少クモ其一因ハ、世人ノ斯病ニ關スル觀念幼稚ナリシト、當該者ノ豫防施設上ニモ亦遺憾ノ所アリシニ歸セザルヲ得ズ。抑モ猩紅熱ノ病原體ハ其抵抗力頗ル強大ニシテ、患者ノ落屑中ニアル病毒ハ、十數年間其毒力ヲ保有シ、他ニ傳染スルノ力アルノミナラズ、病毒ノ撒漏最モ容易ナルヲ以テ、之ヲ自宅療養ニ任ストキハ、完全ナル消毒行ハレズ。爲メニ長ク病毒ヲ遺留シ、遂ニハ救フベカラザル慘狀ニ

陷ルガ如キコトナキヲ保セズ。依テ自今該病ノ豫防施設ニ付テハ、一層力ヲ致シ、世人ヲシテ其恐ルベキコトヲ深ク覺醒セシムルト共ニ、患者ハ總テ傳染病隔離病舍ニ收容スルノ方針ヲ採リ、消毒ヲ嚴行シ、以テ本病ノ撲滅ヲ期セラルベシ。

## 第六項　實布的里亞病

本病は本縣夙く發生を見、明治初期即ち明治二十年頃、患者百人以上にも及びたれば、明治二十二年、該病豫防の件を告諭したり。然れども明治三十年より、急激に其數を增加し、四百人を超過せり。而して其死亡率亦比較的多數にして、三十%內外なるに依り、本縣にても之が豫防に就て注意する所ありき。之が爲め死亡率は幾分減少したるも、患者の數に到りては著しき減少を見ず。

## 第七項　流行性惱脊髓炎

本病は大正十一年、一時に六名の患者を發したるを最初とし、爾來多少の流行

を見たり。本病疑似病に對しては、大正七年八月、傳染病豫防法の全部を適用すべき旨を令達したることあり。其發生に先ち警戒する所ありたり。

附

一　自明治十二年至大正十三年累年傳染病患者數表

| （年次） | （赤痢） | （腸チフス） | （パラチフス） | （發疹チフス） | （ジフテリヤ） | （猩紅熱） | （痘瘡） | （流行性腦脊髓膜炎） | （コレラ） |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 明治十三年 | 二一四 | 五五四 | — | 一六四 | 四〇 | — | — | — | 九 |
| 同　十四年 | 五九 | 二九七 | — | 五八 | 三 | — | — | — | 四 |
| 同　十五年 | 一九 | 四七一 | — | 四三 | 二〇 | — | — | — | 三,一一二 |
| 同　十六年 | 六 | 二〇五 | — | 三 | 二 | — | — | — | 一三 |
| 同　十七年 | 一四 | 二五〇 | — | 八 | 二六 | — | — | — | 三五 |
| 同　十八年 | 五 | 二五五 | — | 六 | 一七 | — | — | — | 四 |
| 同　十九年 | 五 | 六四三 | — | 二四 | 七四 | — | — | — | 二一五 |
| 同　二十年 | 五 | 一,〇八三 | — | 五六 | 一二五 | — | — | — | 二 |
| 同　廿一年 | 三 | 一,三一一 | — | 二 | 六五 | — | — | — | 五 |
| 同　廿二年 | 三 | 五三五 | — | 三 | 八九 | — | — | — | 一二 |
| 同　廿三年 | 一 | 八〇四 | — | — | 一六四 | — | — | — | 二一九 |

| | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 同　廿四年 | 九 | 一,三一六 | ― | 四 | 一四三 | ― | ― | ― | 一八 |
| 同　廿五年 | 二 | 一,二九〇 | ― | 六 | 一一〇 | ― | ― | ― | 九 |
| 同　廿六年 | 一〇 | 一,〇〇一 | ― | ― | 九六 | ― | ― | ― | ― |
| 同　廿七年 | ― | 五 | ― | ― | 八七 | ― | ― | ― | 五 |
| 同　廿八年 | 八 | 一,三七三 | ― | ― | 一五七 | ― | ― | ― | 三九 |
| 同　廿九年 | 九,八五二 | 一,〇九四 | ― | 六 | 一八一 | ― | ― | ― | 五 |
| 同　三十年 | 五,八三〇 | 七四五 | ― | 一 | 四五三 | ― | ― | ― | ― |
| 同　卅一年 | 三,八四四 | 八〇九 | ― | ― | 五五三 | ― | ― | ― | 二 |
| 同　卅二年 | 三,一六五 | 八六〇 | ― | ― | 六二三 | ― | ― | ― | ― |
| 同　卅三年 | 一,三〇三 | 七一〇 | ― | ― | 五三三 | ― | ― | ― | ― |
| 同　卅四年 | 二,三二一 | 九三九 | ― | ― | 五五〇 | ― | ― | ― | ― |
| 同　卅五年 | 一,五三七 | 八三四 | ― | ― | 四〇四 | ― | ― | ― | ― |
| 同　卅六年 | 七四七 | 六一九 | ― | ― | 四四二 | ― | ― | ― | ― |
| 同　卅七年 | 八二四 | 五八四 | ― | ― | 三七四 | ― | ― | ― | ― |
| 同　卅八年 | 一,三九九 | 七八八 | ― | ― | 三三五 | ― | ― | ― | ― |
| 同　卅九年 | 九三三 | 九〇〇 | ― | ― | 三六三 | ― | ― | ― | ― |
| 同　四十年 | 七九〇 | 五七一 | ― | ― | 三一〇 | ― | ― | ― | ― |

| 年次 | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 同四十一年 | 二一八 | 一四三 | — | — | 一六〇 | 三 | 二 | — | — |
| 同四十二年 | 五三六 | 九一四 | — | — | 四二七 | 三九三 | 二 | — | — |
| 同四十三年 | 三三一 | 七二〇 | — | — | 四九三 | 五一九 | 一 | — | — |
| 同四十四年 | 二七四 | 九八五 | 一七五 | — | 五六五 | 七六 | — | — | — |
| 大正元年 | 二〇五 | 九一三 | 三〇三 | — | 五三三 | 四八 | — | — | — |
| 同二年 | 八五 | 五九七 | 二二一 | — | 五五四 | 八 | — | — | — |
| 同三年 | 一〇四 | 七一七 | 一一六 | 二一 | 五五三 | 一九 | 一 | — | — |
| 同四年 | 一三四 | 五七四 | 一三八 | 一 | 六六一 | 一四 | — | — | — |
| 同五年 | 一七四 | 五九四 | 二〇九 | 二 | 五八九 | 二 | — | — | 六 |
| 同六年 | 一五四 | 四八四 | 一五八 | 三 | 六七五 | 三 | 六 | — | 六 |
| 同七年 | 二一 | 七三〇 | 二八一 | 三 | 六〇三 | 七 | 一 | — | — |
| 同八年 | 六九 | 八八九 | 一九一 | — | 四七九 | 一三 | — | — | — |
| 同九年 | 八四 | 七九三 | 七二一 | — | 四五〇 | 一三 | 二 | — | — |
| 同十年 | 七七 | 八九一 | 二七五 | — | 四四〇 | 三三 | 二〇 | — | — |
| 同十一年 | 一三九 | 八〇三 | 二〇九 | — | 四六三 | 二三 | — | 六 | 二 |
| 同十二年 | 一八八 | 六八七 | 二三七 | — | 四〇三 | 二 | — | 五 | — |
| 同十三年 | 二五八 | 六一三 | 二四九 | 一 | 三五九 | 二三 | 三 | 三 | — |

## 二 自明治四十一年至大正十一年累年傳染病患者調査表

| （年次） | 傳染病患者（全治） | 傳染病患者（死亡） | 傳染病患者（合計） | （人口一萬ニツキ患者數） | （死亡者百人中傳染病死亡者） | （傳染病患者百人ニツキ死亡者） |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 明治四十一年 | 一、九〇八 | 五二五 | 二、四三三 | 二五、四〇 | 二、五六 | 二四、五八 |
| 同　四十二年 | 一、七四四 | 五二八 | 二、二七二 | 二三、五一 | 二、三六 | 二三、二四 |
| 同　四十三年 | 一、五八九 | 四七五 | 二、〇六四 | 二〇、八九 | 二、二五 | 二三、〇一 |
| 同　四十四年 | 一、六三五 | 四四〇 | 二、〇七五 | 二〇、八四 | 二、一一 | 二一、二〇 |
| 大正　元年 | 一、六五一 | 三七三 | 二、〇二四 | 二〇、〇九 | 一、八二 | 一八、七三 |
| 同　二年 | 一、一二一 | 三四四 | 一、四六五 | 一四、三九 | 一、七一 | 三三、四八 |
| 同　三年 | 一、三一六 | 三〇五 | 一、六二一 | 一五、七〇 | 一、三八 | 一八、八二 |
| 同　四年 | 一、三一〇 | 三一二 | 一、六二二 | 一五、五六 | 一、四二 | 一九、二四 |
| 同　五年 | 一、二八二 | 三一一 | 一、五九三 | 一五、〇二 | 一、三五 | 一六、三三 |
| 同　六年 | 一、二〇四 | 三〇六 | 一、五一〇 | 一三、九八 | 一、三六 | 二〇、二六 |
| 同　七年 | 一、三九八 | 三三八 | 一、七三六 | 一六、〇八 | 一、二七 | 一九、四七 |
| 同　八年 | 一、二七三 | 三六七 | 一、六四〇 | 一四、九九 | 一、三八 | 二二、三八 |
| 同　九年 | 一、七七四 | 二七八 | 二、〇五二 | 一八、六二 | 一、〇三 | 一三、五五 |
| 同　十年 | 一、四二五 | 三一〇 | 一、七三五 | 一五、四六 | 一、三三 | 一七、八七 |
| 同　十一年 | 一、三四五 | 三〇〇 | 一、六四五 | 一五、一九 | 一、二〇 | 一八、二四 |

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 同　十二年 | 一、二七五 | 三四六 | 一、六二二 | 一四、七八 | 一、三六 | 二一、三四 |
| 同　十三年 | 一、三五五 | 三五三 | 一、六〇八 | 一七、五八 | 一、四三 | 一八、〇〇 |

三　自明治四十一年至大正十三年累年傳染病患者病類別死亡率調査表

| （年次） | （赤痢） | （腸チフス） | （パラチフス） | （發疹チフス） | （實布垤里亞） | （猩紅熱） | （痘瘡） | （コレラ） | （流行性腦脊髓膜炎） |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 明治四十一年 | 一八、六 | 一九、八 | — | — | 三一、一 | 三三、三 | — | — | — |
| 同　四十二年 | 一七、〇 | 二一、二 | — | — | 三〇、四 | 二八、七 | — | — | — |
| 同　四十三年 | 一〇、九 | 二〇、三 | — | — | 三〇、四 | 二七、六 | — | — | — |
| 同　四十四年 | 一三、五 | 一九、二 | 九、一 | — | 三一、〇 | 三一、四 | — | — | — |
| 大正　元年 | 八、三 | 一八、五 | 九、二 | — | 二七、五 | 一六、七 | — | — | — |
| 同　二年 | 一四、一 | 二四、八 | 一三、七 | 一三、七 | 二七、八 | 五、六 | — | — | — |
| 同　三年 | 一七、三 | 一六、〇 | 七、八 | 七、八 | 二五、九 | 五、三 | — | — | — |
| 同　四年 | 一五、七 | 一六、五 | 五、一 | 五、一 | 二六、〇 | 七、一 | — | — | — |
| 同　五年 | 一三、三 | 一八、〇 | 七、二 | 七、二 | 二七、三 | — | — | — | — |
| 同　六年 | 一六、二 | 二〇、三 | 八、九 | 八、九 | 二四、二 | 四、八 | — | — | — |
| 同　七年 | 一八、九 | 二〇、一 | 五、〇 | — | 二五、二 | — | — | — | — |
| 同　八年 | 一四、五 | 二三、三 | 一五、二 | — | 二四、八 | 一六、七 | — | — | — |

| | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 同 九年 | 一〇、七 | 一八、九 | 六、一 | — | 一七、〇 | — | — | — | — |
| 同 十年 | 一八、三 | 一六、九 | 九、八 | — | 二五、〇 | 一五、六 | 一五 | — | — |
| 同 十一年 | 一四、〇 | 一八、九 | 一二、五 | — | 二一、八 | 三、〇 | — | 五〇、〇 | 五〇、〇 |
| 同 十二年 | 二五、一 | 一八、六 | 一〇、一 | — | 二八、八 | — | — | — | 六〇、〇 |
| 同 十三年 | 二四、九 | 二三、〇 | 八、〇 | 一〇〇、〇 | 二六、五 | 八、七 | — | — | 六六、七 |

## 第八項　トラホーム

本病の豫防に關しては、明治四十二年五月十八日、告諭第三號を以て告諭したるが、本縣として該病注意の嚆矢たるべし。翌六月十八日、訓令甲第四十二號を以て、告諭の趣旨周知方に關し訓令する所あり。卽ち本病の豫防撲滅に從事せしむる爲め新に縣醫二名を設置し、警察の取締れる營業者の檢疹、竝に警察官吏・郡市町吏員・學校職員・醫師・其他工場主・衛生組合員等に對し、該病の豫防撲滅に關する概要を講習せしめたり。學校生徒に對する本病豫防撲滅策に關しては、各學校醫に對し、豫めトラホームに關する講習を受けしめ、當該校醫をして、每年二回（四月九月）一般檢疹を行はしめ、其結果は直に報告せしむる事とし、治療證票は學校

より交付せしめ、之が査閲は職員をしてなさしめ、成績を每月報告せしめつゝあり。工場に在つては、先づ職工徒弟三十名以上を使役する者に對して檢診せしめ、患者には各工場主をして治療證票を交付せしめ、警察官吏は時々證票を查閲して、治療の督勵をなすことゝし、是年九月より檢診を開始せり。是年に於ける檢診數百に對する患者數及び患者百に對する治療者は左の如し。

| | | |
|---|---|---|
| 學校生徒 | 二八、七 | 三二、九 |
| 營業者 | 一一、九 | 二九、二 |
| 職工 | 二四、六 | 三七、七 |

にして、明治四十三年より、壯丁に關しても檢診を行へり。其患者百分率は別表の如し。而して大正八年三月、トラホーム豫防法（法律第二十七號）を公布し、同年八月トラホーム豫防法施行規則を規定せらるに及びて、本縣亦大正八年十一月、トラホーム豫防法施行細則、（縣令第六十三號）トラホーム豫防法執行手續、（訓令甲第五十號）を制定せり。

自明治四十三年至大正十三年トラホーム患者檢診百分比表

| （年次） | （縣立學校附屬小學校生徒）（四月） | （九月） | （市町村小學校生徒）（四月） | （九月） | （職工）（四月） | （九月） | （壯丁） |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 明治四十三年 | 一六、一 | 一二、三 | 三六、三 | 三三、八 | 三〇、七 | 一五、〇 | 三六、四 |

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 同　四十四年 | 一八、一 | 一〇、三 | 二四、七 | 二三、六 | 一六、六 | 一三、九 | 三六、三 |
| 大正　元年 | 一一、七 | 九、七 | 二三、九 | 二一、一 | 一三、九 | 一一、九 | 三〇、六 |
| 同　二年 | 一〇、五 | 九、七 | 二〇、八 | 二〇、七 | 一三、三 | 一一、四 | 三〇、九 |
| 同　三年 | 一一、〇 | 九、九 | 二〇、〇 | 一九、三 | 一〇、〇 | 一一、五 | 三三、〇 |
| 同　四年 | 九、六 | 一一、六 | 一九、六 | 一九、九 | 九、五 | 一一、三 | 三七、三 |
| 同　五年 | 一〇、一 | 一〇、六 | 二〇、六 | 二〇、四 | 九、五 | 一一、六 | 四三、〇 |
| 同　六年 | 八、四 | 一一、三 | 一九、八 | 二〇、一 | 九、四 | 九、七 | 三九、四 |
| 同　七年 | 九、六 | 七、一 | 一九、三 | 一八、八 | 九、二 | 八、二 | 四一、七 |
| 同　八年 | 九、八 | — | 一九、八 | — | 一〇、三 | — | 五三、八 |
| 同　九年 | 一〇、五 | 九、六 | 一九、九 | 一九、七 | — | — | 四三、九 |
| 同　十年 | 一一、九 | 一一、一 | 二〇、七 | 一九、一 | — | — | 三五、五 |
| 同　十一年 | 一一、七 | 一〇、四 | 二〇、三 | 一九、五 | — | — | 三六、九 |
| 同　十二年 | 九、八 | 八、七 | 二〇、〇 | 一九、三 | — | — | 三四、三 |
| 同　十三年 | 九、九 | 七、九 | 一九、七 | 一九、五 | — | — | 三一、〇 |

## 第九項　花柳病

花柳病豫防に關しては明治九年四月、內務省より乙第四十五號を以て、娼妓黴毒檢査方法を施設すべき旨布達ありしが、本縣にては、是より先明治七年十二月、娼妓梅毒檢査法を施行し、明治十三年七月、本縣第四十四號にて之を改定せり。黴毒檢査場を貸坐敷娼妓免許の地每に設置せしめ、每週一回檢査を行ひ、梅毒に感染せし者は、受持檢査醫員に就き、速に治療を受けしむ。同月更に梅毒檢査手續を規定し、檢査醫の手當及び旅費等を、本縣より支出する等、種々規定する所あり。同二十六年十二月三十一日、本縣に於て貸座敷營業を廢止する迄、一部の改正を行ひつゝも、此規則を施行し來りしものゝ如し。然るに貸座敷營業廢止と共に、此檢黴規則も自然廢止となりしが、縣下の壯丁檢査の結果、花柳病患者逐年增加の傾向あるを以て、病毒傳播の疑ある酌婦・藝妓に就き、明治三十九年より、高崎市に於て自衞的酌婦の健康診斷をなし、以て病毒の蔓延を防ぎたり。（壯丁檢査狀況參照。）

## 第十項　癩病

癩患者取扱に關しては明治四十二年六月、訓令甲第四十五號を以て、其取扱を訓令し、同月又同患者屆出に關する件を醫師に令達す。（縣令甲第三十六號。）次いで七月一日には、之が豫防及び消毒方法に關し、留意すべき件を告諭せり。（告諭第四號。）其文に曰く、

癩ハ古來本邦各地ニ蔓延シ、通俗「ナリンボウ」ト云ヒ、或ハ「カツタイ」ト稱シ、病初ハ主トシテ顏面ニ赤色、又ハ赤褐色ノ斑點ヲ生ジ、或ハ皮膚肥厚シテ、結節ヲ作リ、若クハ神經鈍痲シテ、知覺及運動ノ障害ヲ起シ、尙病勢ノ進ム時ハ、骨及筋肉崩潰萎縮シ、遂ニハ畸形ヲ呈スル等、普ク人ノ知ル所ナリ。然レドモ本病ノ性質ニ至リテハ、從來遺傳病ナリト誤認シ、或ハ天刑病ナリト稱シタルモ、今ヨリ凡四十年前、癩病桿菌ヲ發見セラレタル以來、確然タル傳染性病ニシテ、主トシテ患者ト接觸スルニヨリ傳染シ、又患者ノ鼻汁・唾液・潰瘍部ノ濃汁等ニ汚染シタル物件ヲ介シテ、傳播スルモノナルコトヲ證明セラレタリ。之ヲ以テ政府ハ明治四十年三月、本疫ノ豫防ニ關シ、法律ヲ發布シ、癩患者ニシテ療養ノ途ヲ有セズ、且救護者ナキ者ハ、之ヲ府縣ノ療養所ニ隔離シ、其他各自ニ於テ消毒及豫防ノ方法ヲ行ハシメ、以テ本病ノ蔓延ヲ防

止シ、漸次其根絶ヲ期ス。然ルニ從來遺傳性疾患ト誤認セラレ、世人ノ擯斥ヲ受クルコト甚ダシキ爲メニ、患者ハ極力之ヲ祕密ニ附スルノ習慣アリ。又其經過ハ緩慢ニシテ、長年月ニ涉リ、加フルニ非傳染性ナリト思惟スルヲ以テ、病毒撒漏シ、健康者ニ傳播スルノ機會多ク、故ニ一般健康人ト雖モ、左記豫防法ヲ知悉シ、各自衞ノ途ヲ講ジ、又患者並ニ患者アル家ニ於テハ、公德ヲ重ンジ、消毒ヲ嚴行シ、以テ本病ノ豫防、並ニ撲滅ノ目的ヲ達スル樣、篤ク留意セラルベシ。（豫防方法及消毒方法は略す。）

是れ明治四十年三月、法律第十一號、癩豫防に關する件、及同施行細則、内務省令第十一號に準據したるものなり。

## 第十一項　結核病

結核病豫防については、明治三十七年二月、告諭第一號を以て告達せり。曰く、

結核ハ傳染病ニシテ、多クハ慢性ノ經過ヲ取リ、世人ノ注意ヲ惹クコト「コレラ」「ペスト」ノ如ク甚シカラズト雖モ、全國各地ニ蔓延シ、年々多數ノ國民ニ慘害ヲ及ボスモノ、蓋シ其比ナカルベシ。最近ノ調査ニヨレバ、明治三十二年中、結核ニ原因シタル死亡者ハ、約七萬ニシテ、而シテ都市ニ於テ最多ク、死亡總數ノ平均六分一ヲ占メ、

又全國ニ於テ生產能力ヲ有スル年齡ニアツテハ、其死亡數中六分一餘ニ相當セリ。加之近年ニ至リ本病患者增加ノ傾向アルヲ以テ、今般內務省令第一號ヲ以テ、結核諸病中其大部分ヲ占メ、從テ傳染蔓延ノ危害最大ナル肺結核ノ豫防ニ關シ、取締規則ヲ制定セラレタル所以ナリ。就テハ右規則ヲ遵守スベキ義務者ハ勿論、假令其義務者ニ非ルモ、該病豫防上篤ク注意シ、特ニ患者アル家又ハ多人數集合スル場所、實質虛弱ノ者等ハ、左記事項ヲ履行シ、以テ本病豫防ノ實效ヲ收ムル樣努ムベシ。

（事項は略す。）

大正八年三月、政府は肺結核又は喉頭結核にして、病毒傳播の危險ある者に適用する結核豫防法（大正八年三月法律第廿六號）を公布し、次いで十二月、之が施行令（勅令第四百五十號）を制定せらるゝに及び、本縣亦此法令に準據し、大正九年九月、結核豫防法施行細則、（縣令第七十號）及び結核豫防法施行手續（訓令甲第六十號）を定め、翌十月には、結核に關する生活費補給規程を定め、豫防上に遺憾なからしめんとせり。

## 第四節　保健

本縣に於て保健に注意したるは、明治七年四月、熊谷縣時代に於て、管内上・武兩州の温泉・冷泉の分析試驗を行ひ、且つ温泉場の客舍に入浴規則を頒布したるを嚆矢とすべきか。即ち温泉場に於て、(一)道路を清潔にすること、(二)土地の卑濕を去るべきこと、(三)温泉中他物の混交を防ぐこと、(四)砂石飛揚の日注意のこと、(五)厠中掃除のこと、(六)病室注意のこと、(七)炊烟注意のこと、(八)飲水注意のこと、(九)販賣する所の食物注意のこと、(一〇)傳染病流行の時心得方のこと等、十項に分ちて注意する所あり。次いで明治十年二月、入浴の温度を華氏九十八度より百十度の範圍内になすべき通達を行へり。明治十二年、コレラ病大流行以來、傳染病豫防手段として、清潔攝生に關する規程の設けらるゝに至り、漸次整頓するに至れり。

汚物掃除不潔物の處分

明治二十年六月、掃除取締規則を定めて、同日縣令第七十五號設定の市街地、及び國縣道筋に施行せり。明治三十三年三月、内務省令第五號汚物掃除法施行規則頒布せらるゝに及びて、同年三月、縣令第三十五號を以て、市の汚物監視吏員俸

給の件、縣令第三十六號を以て、巡視採用規則、同年六月、掃除法準用の個所を指定せり。(縣令第五十九號) 郎ち前橋・高崎の二市は、此法律を適用し、藤岡・富岡・安中・沼田・桐生・館林・伊勢崎の七町は、準用個所として、何れも汚物掃除運搬處分規程を認可せり。翌三十四年四月には、清潔保持に關する取締規則(縣令第二十九號)を設け、塵芥取扱場及び汚泥取扱場・塵芥燒却場・公共便所の位置・構造等に、種々制限を加ふる所ありき。明治四十二年三月、胞衣及び產汚物取締規則を定め、胞衣及び產汚物は投棄することを得ざる旨、及び之に關する規定を設けたり。下水溝・芥溜・廁圊構造に就ては、明治二十年四月、縣令第六十一號を以て、取締規則を定め、飲料に供すべき井水と、廁圊・芥溜及び下水溝とは、其距離一丈八尺以上に非ざれば、設置することを得ざることを規定せり。

着色飲食物其他の取締

明治十五年六月、飲食物彩色料取締規則(甲第四十七號)を布達して、諸飲食物に用ゆる彩色料は、無害無毒の品に非れば、之を用ゆるを許さゞる旨(第一條)を規定して、有毒色素の種類を示して、取締る所あり。明治三十三年、內務省令を以て、有害性着色取締規則の定めらるゝあり。本縣亦明治三十三年三月、飲食物及玩弄品着色料取締規則(縣令第十八號)を定めて、有害色料を用ゐて着色したる飲食物、又は玩弄品は總

て販賣使用することを得ざらしむ。（第五條。）

飲食物取締

飲食物其他の物品取締に關しては、明治三十三年二月法律第十五號、飲食物其他の物品取締に關する法律施行に關する件は、同年三月內務省令第十號、飲食物用器具取締規則は、同年十二月內務省令第五十號、飲食物防腐劑取締規則は、明治三十六年九月內務省令第十號を以て、夫々制定せられたるを見る。

飲料水取締

清凉飲料水營業取締規則は、明治三十三年六月、內務省令第三十號を以て制定せられたるに依り、本縣は同年六月、之が施行細則（縣令第五十六號）を設けて取締る所あり。飲料水の改良に就ては、飲料水改良費補助規程（大正九年三月縣令第四十四號）を設け、共用又は公衆用飲料水の改良を爲したるものに對しては、縣費を以て豫算の範圍內に於て、其支出したる費用の三分の一以內を補助する規定を設けたり。水道に就きては明治四十三年九月、高崎市水道取締規則（縣令第七十一號）を設けたるが、大正十四年九月に至り、之を廢して水道取締規則（縣令第七十一號）を設け、以て水道條例に依り布設したる水道の水源地に關して取締を施行せり。

氷雪取締

製氷に就きては明治十一年十二月、製氷取締規則（本縣甲第百十九號）を布達したるが、明治十四年九月、甲第百三十三號を以て、之を改定する所あり。製氷營業者を爲さ

んと欲する者に、製氷場所在地、其構造氷室、用水引方等に就き規定に背く時は、其營業を許可せざることゝしたり。明治十六年十一月に至り、更に總て無免許の氷は、賣買は勿論、讓與と雖も之を許さゞる箇條を追加し、其後も時々追加箇條を加へて、之が取締を嚴重にせり。明治三十三年三月、内務省令を以て、氷雪營業取締規則の制定あり。本縣亦之が施行細則を定めたるが、大正十二年十二月、之を改定して現時に至る。

牛乳搾取販賣

牛乳の搾取販賣に就きては、明治十六年八月、牛乳搾取販賣規則（甲第五十號）を定めて、乳牛・乳汁に關する規定を設け、明治二十年四月に至り、自今牛乳搾取販賣營業出願者ある時は、警察署に於て實地調査の上、許否を定むべき旨を郡役所・警察署・警察分署に達せり。明治三十三年四月、内務省令を以て、牛乳取締規則を制定せらる。依りて本縣にては、六月牛乳營業取締規則施行細則（縣令第五十七號）を設け、縣下一齊に囑託獸醫の外、一名の獸醫を顧聘し、七月以降、飼牛の檢査を爲し、病牛（結核病）は隔離を命じ、次いで牛舍の改築を勵行せり。明治四十四年十二月、縣令第七十五號を以て、更に改正を行ひ、後數次の小改正を經て、現行に及べり。

屠獸取締

屠獸取締規則は、明治十九年二月、甲第十九號を以て布達し、其取扱手續は、明治

十九年五月、戊第十九號を以て警察方面に達したるが、明治二十一年七月之を廢して、屠獸及賣肉取締規則を定めたり。明治三十四年四月、賣肉營業取締規則（縣令第二十八號）を設けたるが、大正元年九月、縣令第十二號を以て之を改正せり。

## 第五節　醫療に關する業務

醫師の教養及び行政上の監督については明治八年四月、本縣醫務概則を編定し、普く各區に頒布せり。本概則は醫師修養の事、醫師業務心得、産科・産婆の事、針治・導引の事、藥舗竝に賣藥の事を規定したる醫藥業者取締法なり。明治十八年七月、醫師取締規則を定め、同二十年四月には、開業醫組合規則を定め、開業醫をして組合を設けしめ、醫風の改良、醫術の進歩等、凡醫事に關する法律規則の履行順序を謀り、兼ねて傳染病及び地方病等の源因、竝に豫防救治の法を探究し、公衆衞生に係る除害の方法を研究することを目的とせしむ。明治卅九年、醫師法竝に醫師法施行規則を發布せらるゝに及び、同四十年二月、（縣令第八號）醫師法施行細則を定め、醫師會規則第三條に依り、郡市醫師會設立を認可せり。其認可年月日は左の如し。

| | | |
|---|---|---|
| 明治四〇、二、一九 | 高崎市 | 利根郡 |
| 同　三、八 | 多野郡 | 群馬郡 |

同　三、一三　碓氷郡
同　三、一四　新田郡
同　三、二一　前橋市
同　三、二六　吾妻郡　山田郡
同　四、四　勢多郡
同　四、五　邑樂郡　佐波郡
同　四、二三　北甘樂郡
同　一二、一四　群馬縣聯合醫師會

大正八年九月、醫師會令（勅令第四百二十九號）公布せらるゝに及び、前記醫師會は、此勅令に從ひ、改めて各郡市醫師會を設け、更に群馬縣醫師會を設立し、以て現時に及べり。

藥劑師及藥物業者

藥劑師及び藥物に關する規定は、明治八年四月の醫務概則中に設けられたり。鑑札なくして藥劑を調合し、或は藥種を販賣する者は、科の輕重に應じて處分あるべし。劇藥は司藥場檢印の品に非れば、調合及び販賣する事を許さざる等の規定あり。明治十五年一月、藥舖並藥種商規則（甲第三號）の單行規程となり、藥舖には

醫師の處方書に據り、藥品を調製するを業とするものと定め、(第一條)新に藥舖の業を開かんと欲する者、及び從來藥舖の子弟、其父兄の業を相續し、藥舖主たらんと欲する者は、成規の試驗を經て、內務省より免狀を交付せられたるもの(第七條)とす。製藥に就いては、明治九年五月、製藥免許手續を定め、(第八十九號、)賣藥に就ては、明治十年一月、太政官第七號、賣藥規則公布に基き、本縣は同三月、賣藥出願手續を達せり。(乙第六號。)

明治十九年六月、內務省は省令を以て、日本藥局方を發布し、各種藥品の性狀・品質・貯藏法、劇毒藥の區別、及び其極量等、詳細に涉りて局方の定義を明にし、次いで明治二十二年三月、藥品營業竝に藥品取扱規則を制定して、藥劑師・藥種商・製藥者に就き、各、其本分を明にし、夫々制裁を加ふることにせられたり。明治二十二年三月、內務省令第四號、藥品巡視規則を定めらるゝや、本縣亦藥品巡視員證票を定め、(明治二十二年十二月告示第八十六號、)藥種商製藥者取締規則を設け、(明治二十三年三月縣令第十三號、)明治二十五年六月には、藥品巡視手續を定め、以て不良藥品商の橫行を防遏せしが、明治四十年四月よりは、特に政府より專任の藥品監視員を配置し、同法の勵行を努められたる結果、次第に良好の成績を收むるに至れり。明治四十五年七月に至り、藥種

商製藥者取締規則を改定せり。（縣令第四十二號）大正三年三月、賣藥法（法律第十四號）公布せられ、次いで八月、賣藥法施行規則（內務省令第十六號）制定せらるゝに及び、本縣にては同年十月、賣藥法施行細則、（縣令第六十八號）賣藥法施行細則取扱手續（訓令甲第三十二號）を規定して、現時に及ぶ。

### 齒科醫

齒科醫に就きては、醫務概則に別に規定なきも、口中科とし、本縣限り鑑札を下附したるが如し。明治十五年十月、口中科を入齒師と改稱し、醫師の部內に屬せざる儀と心得べき旨を布達せらる。明治十六年十月、太政官布達を以て、齒科醫術試驗規則を定められ、同十八年三月、內務省達を以て、試驗を經るに非れば、新規開業を許さず。曩に地方廳に於て附與したる鑑札は、此際に限りてのみ、有効と認むる旨を布達せられたるに因り、本縣に於ては、明治十八年七月、自今新に入齒・齒拔・口中療治・接骨術等を開業せんとする者は、明治十六年十月、太政官第三十四號布達に依り、試驗を經て免狀を受くべき旨を達し、翌十九年七月には、所謂從來開業者（醫術開業試驗に依らざる者）の他府縣移轉の上營業せんとする者に、證明書を乞はしむる樣の旨を、戶長役場に達したり。明治二十七年四月には、入齒師出張所に置く代理者は、免許の者に限る旨を令達して取締る所あり。明治三十九年五月、齒科

醫師法（法律第四十八號）發布せられ、次いで同年九月、內務省令第二十八號を以て、同法施行規則を制定せられ、齒科醫に關する法令も整頓するに及べり。

明治六年、醫務概則に依りて、自今產婆たらんとする者の、三十歳以上にして、產科醫竝に產婆より出す所の實驗證書を以て、本縣に出願すべし。本縣に於て一應虛實を糺し、不都合なくば開業鑑札を與ふること、及び產婆は產科醫或は內外科醫の差圖を受くるに非れば妄り手術を施すことを得ざる旨を規定したり。明治十五年、本縣甲第七十五號を以て、產婆に關する規定を設けたるが、明治十八年七月制定の、產婆鍼灸治導引免許規則中に、產婆を營業せんと欲する者は、其年齡滿二十年以上にして、產科醫（內外科醫にても妨なし。）若くは產婆に就き、滿三箇年以上實地修業の履歴ある者は出願するを得ることゝなり、縣廳に於て朱氏產婆論に就き、其要領を試問し、大意に通ずる者に之を許可する旨を達せられたり。明治二十一年四月、產婆試驗規則を定め、內務省の產婆開業免狀を得んと欲する者に施行せり。（縣令第二十四號）同月產婆講習會準則（訓令甲第八十五號）を發布して、產婆の養成を奬勵したり。明治三十二年七月、勅令を以て產婆規則を制定せられ、次いで內務省に於て產婆試驗規則・產婆名簿登錄規則等を定めらるゝに及び、本縣亦產婆試驗受驗人

心得（明治三十二年九月縣令第三十四號）を定め、翌三十三年二月には、産婆限地營業出願手續を規定し、産婆に乏しき地に限り、營業産婆以前の限地營業産婆を許可し、以て産婆の不足に對する應急の所置を講ぜり。而も良産婆の供給分布の必要を認めて、明治四十五年三月、群馬縣立産婆看護婦養成所規程（告示第九十四號）を設けたり。

鍼灸

明治六年醫務概則中、針治・灸治・導引を業とするものは、方藥を與ふることを禁せられ、其重大の病症に至りては、內外科醫の差圖を受くるに非れば、施術するを得ざること、及び開業資格に就ての規程を設けたるが、其の後明治十八年三月、內務省より鍼術・灸治にして、新に營業する者は、履歴を審査し、免許を與へ、且相當取締方法を設くべき旨布達ありたるにより、本縣亦此旨に副ふ所ありたり。明治四十四年八月、內務省令を以て鍼術・灸術營業取締規則、及び按摩術營業取締規則發布せられ、業務上の取締竝に試驗に關する制度を定められたるに因り、本縣は明治四十四年十二月、按摩術營業取締規則施行細則（縣令第七十六號）、鍼術灸術營業取締規則施行細則（縣令第七十七號）、按摩術營業取締規則及鍼術灸術營業取締規則手續（訓令甲第七十一號）を設けて、今日に及べり。

看護婦

看護婦の取締に就きては、從來格別の規定あらざりしが、明治四十年二月、看護

婦試驗規則(縣令第二號)、看護婦取締規則(縣令第六號)を規定して、其弊害を矯むる所ありしが明治四十五年三月には、産婆養成、看護婦養成とを兼ねて縣立産婆看護婦養成所を設置し、大正四年六月、看護婦規則(内務省令第九號)公布せらるゝに及び、本縣看護婦規則施行細則、(大正四年十一月縣令第七十號)及び看護婦規則施行細則取扱手續(訓令甲第四十四號)を定めて、前規程を改定したり。即ち施行細則は、看護婦免許手續、及び看護婦心得を主なるものとし、施行細則取扱手續は、出願者の身元調査及び看護婦臺帳のこと等を規定せり。

自明治四十一年至大正十三年 累年醫師藥劑師產婆數調查表

| (年次) | (醫師) | (齒科醫師) | (藥劑師) | (產婆) | (醫師一人に對する人口) | (人口一万につき醫師數) |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 明治四十一年 | 四四一 | 一五 | 四三 | 二四五 | ― | 四、七六 |
| 同 四十二年 | 四七五 | 一九 | 四七 | 二五二 | ― | 五、一一 |
| 同 四十三年 | 四六一 | 一九 | 四六 | 二三八 | ― | 四、八六 |
| 同 四十四年 | 四八二 | 二一 | 五〇 | 二三六 | ― | 五、〇五 |
| 大正 元年 | 四八五 | 二一 | 六〇 | 二一三 | ― | 四、八一 |
| 同 二年 | 五二八 | 三〇 | 七二 | 二六八 | 一、九二八 | |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 大正三年 | 五六二 | 三四 | 七五 | 二八九 | 一、八三八 |
| 同四年 | 六〇〇 | 四一 | 九二 | 三一七 | 一、七三七 |
| 同五年 | 六〇二 | 五一 | 八四 | 三五三 | 一、七六二 |
| 同六年 | 六一四 | 五五 | 九八 | 三五二 | 一、七六三 |
| 同七年 | 六一一 | 六二 | 九六 | 三七六 | 一、七六七 |
| 同八年 | 六五二 | 七四 | 一〇五 | 三九八 | 一、六七五 |
| 同九年 | 六四三 | 八六 | 二〇二 | 三九八 | 一、七一四 |
| 同十年 | 五〇六 | 八四 | 一一七 | 四〇一 | 二、二一八 |
| 同十一年 | 四七五 | 九九 | 九六 | 四二一 | 二、二七九 |
| 同十二年 | 五三八 | 一二〇 | 一一八 | 四六一 | 二、〇三八 |
| 同十三年 | 五四五 | 一三九 | 一二七 | 四八四 | 二、〇四六 |

自明治四十一年至大正十三年　看護婦鍼灸治按摩業者調

| （年次） | （看護婦） | （鍼術） | （灸術） | （按摩術） | （鍼灸術兼業） | （鍼按術兼業） | （灸按兼業） | （鍼灸按術兼業） |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 明治四十一年 | 三七五 | ? | ? | ? | ? | ? | ? | ? |
| 同四十二年 | 三八六 | ? | ? | ? | ? | ? | ? | ? |

| 年 | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 同四十三年 | 四〇九 | ? | ? | ? | ? | ? | ? | ? |
| 同四十四年 | 四六一 | 五〇 | 三七 | 六五五 | 三八 | 二六〇 | ? | ? |
| 大正元年 | 四九九 | 五〇 | 三七 | 六五八 | 三四 | 二五五 | ? | 五四 |
| 同二年 | 五三七 | 四九 | 三九 | 六八三 | 三四 | 二六三 | 四 | 五五 |
| 同三年 | 五九二 | 四八 | 三四 | 六九八 | 三一 | 二五四 | 四 | 五七 |
| 同四年 | 六五三 | 四八 | 三四 | 七一三 | 三二 | 二五〇 | 四 | 五八 |
| 同五年 | 五五八 | 四八 | 三七 | 七一七 | 三四 | 二四四 | 三 | 五八 |
| 同六年 | 五九四 | 四七 | 三六 | 七一五 | 三八 | 二三九 | 二 | 五九 |
| 同七年 | 六三八 | 四五 | 三〇 | 五八五 | 三三 | 一八九 | 一三 | 六二 |
| 同八年 | 七一二 | 七五 | 二〇 | 四八〇 | 一九 | 一六〇 | 三三 | 一二六 |
| 同九年 | 七一九 | 三六 | 二九 | 五二四 | 三七 | 一八四 | 七 | 八五 |
| 同十年 | 六六〇 | 五三 | 三三 | 五六七 | 四三 | 二二一 | 二七 | 八四 |
| 同十一年 | 七二九 | 三九 | 二六 | 五六八 | 三五 | 二三三 | 二 | 八二 |
| 同十二年 | 八〇〇 | 六一 | 四一 | 七七五 | 五〇 | 二一四 | 三 | 七二 |
| 同十三年 | 八六三 | 五九 | 四四 | 七六九 | 四三 | 二〇三 | 三 | 八四 |

## 第六節　衛生會及衛生組合

地方衛生會

地方衛生會は明治十二年十二月、内務省達に依り明治十三年三月之を設く。本會は地方衛生の全體を視察し、人民の健康を保持増進するの目的にして、委員は醫師三名乃至五名、府縣會議員三名、公立病院長、公立病院藥局長、衛生課長、警察官一名を以て組織し、會長は縣令之に任じ、副長は委員中より投票を以て之を選定し、委員の任期を二箇年とす。

明治二十年四月、閣令第十號に據り同廿一年三月、地方衛生會議事規則を創定し、傳染病豫防心得書、衛生組合、産婆鍼治灸治導引、免許規則、牛乳搾取販賣規則等の件を議決せり。

衛生組合

明治十三年三月、町村中に衛生委員を置き、衛生事務を取扱はしめ、其委員を町村内に本籍を有する二十歳以上の男子より選擧せしめしが、翌十四年六月、同選擧法を改正し、五十戸未滿一人として、戸數の多寡に應じて人員を定め、二十五歳以上の男子にして、町村内に本籍を有するものより之を選擧せしむ。然るに此

町村衛生委員制度は、明治十八年八月、衛生法施行上廢せられ、明治二十年四月、町村衛生組合規則を規定せられたり。本組合は衛生法施行上便宜の爲め、町村內に設け、戸長を定むるものとし組合內に組長一人を置き、組合內より之を公選す。其資格は滿二十歲以上の男子にして、其組合內に居住を定むるものとし、其任期を二箇年とし、俸給なし。但し組合內に於て相當の報酬をなすは適宜たるべきものとす。組長は時々組合內の各戸を巡回し、家屋の內外、下水・便所・芥溜等の清潔法を施行し、其他衛生上に關し、組合員を指導するの責任を有するものとす。明治二十四年四月に至り、改めて町村衛生組合を設置す。組合組織標準と規約標準を示すと共に、設置に關する左の訓令を發せり。

凡ソ町村ニ於テ其利害ヲ負擔シ、生命財産ヲ安全ニ保護スルハ、自治ノ最モ急務ナルモノニシテ、殊ニ傳染病豫防方法ノ如キ、之ヲ實際ニ徹底セシメントスルニハ、隣保相互ノ制裁扶助ニ賴リ、以テ各自ノ注意戒愼ヲ喚起スルニ非レバ、其全効ヲ收メ難キヲ以テ、宜シク左ノ標準ニヨリ、便宜衛生組合ヲ設ケ、清潔法・攝生法、其他豫防ノ事ニ就キ規約ヲ立テ之ヲ履行スベシ。（明治二十四年四月本縣訓令甲第四十五號）

組合組織標準要項

(一)組合ハ土地ノ廣狹戸口ノ疎密ニ依リ、適宜之ヲ編成スルコト。
(二)組合中ノ互選ヲ以テ組合長ヲ置キ、組合内ノ諸事ヲ斡旋セシムルコト。
(三)組合長ノ任期ハ其組合ノ協議ニ依ルコト。

組合規約標準

(一)家屋内外ノ下水・便所・芥溜等ノ清潔法ヲ實施スルコト。
(二)飲料水ノ不良ナルモノハ、之ヲ改良スルカ又ハ使用セザルコト。
(三)傳染病ノ豫防撲滅ヲ計ルコト。
(四)組合長ハ衛生上ノ注意方ヲ組合中ニ通達、又ハ組合中ニ注意スベク、衛生上不都合ト認ムルトキハ諭告スルコト。

然るにこの衛生組合法は、明治三十一年十一月、縣令第四十六號を以て、衛生組合設置規則と改正せられ、市町村は本則の規定により、衛生組合を設置し、清潔方法、消毒方法、其他傳染病豫防救治に關し、組合規約を設け、執行手續を制定すべく、而して衛生組合は、市に於ては各町毎、町村に於ては各大字毎に、一組合を設置し、土地の狀況によりては適宜之を分合するを得しめ、市町村長をして之が監督の任に當らしむ。

大正十三年七月、更に衞生組合設置規則を改正し、其區域を市町村の區域とし、町村衞生組合の郡を區域とする郡聯合衞生組合、及び市衞生組合は、縣を區域とする縣聯合衞生組合を設立することを得。而して各聯合衞生組合は、衞生組合の目的を達する爲め、各衞生組合の連絡を計り、組合の發達に資し、又講習會視察其他により、衞生思想の發達涵養に努むる等の事項を行はしむ。左に最近五箇年間に於ける衞生組合に關する一覽表を示す。

最近五箇年衞生組合調査表

| （年次） | （組合數） | （組合委員數） | （一ヶ年間組合員）（町村補助額） | （徴集金） | （有志寄附及其他） | （計） | （平均一組合費） | （組合費千圓中町村補助額） |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 大正九年 | 一、五一三 | 一〇、九八七 | 二、九二三圓 | 二〇、八九一圓 | 一、一二一圓 | 二四、九二四圓 | 一六、四七四圓 | 一一七圓 |
| 同十年 | 一、四八六 | 九、三九五 | 二、九一四 | 二三、九二五 | 三七〇 | 二六、二〇九 | 一七、六三七 | 一一一 |
| 同十一年 | 一、四四九 | 一〇、〇五八 | 三、九七五 | 二五、七四〇 | 五六〇 | 二九、二七五 | 二〇、二〇三 | 一〇三 |
| 同十二年 | 一、四五八 | 一一、六九九 | 二、九七一 | 二五、六八七 | 一、二四三 | 二九、九〇一 | 二〇、五〇八 | 九九 |
| 同十三年 | 一、四二八 | 一三、三三八 | 四、一七七 | 二八、〇〇五 | 六〇〇 | 三二、七八二 | 二二、九五七 | 一二七 |

（群馬縣史稿衞生部・群馬縣統計書・群馬縣衞生關係法規類。）

# 第十三章　司法と警察

## 第一節　司法

### 第一項　行政司法非分離時代

維新の初には、行政機關と司法機關との分離は未だ行はれず、地方官は啻に行政事務を掌るのみならず、又裁判を行ふの權を有したり。之を岩鼻縣の職制（明治元年七月）に見るに、民政局の下に聽訟掛あり。これ即ち裁判掛なり。村中の輕微の民事爭訟裁判は、名主の職掌に屬したり。而してその勸解に應ぜず、解訟なし難き事件、及びその他の重大事件は、この聽訟掛にて裁判したり。明治四年七月、廢藩置縣の後、第一、次群馬縣時代に至りて、聽訟課を置きて、裁判事務を掌らしむ。

明治四年聽訟課の設置

聽訟課　縣内ノ訴訟ヲ審聽シ、其情ヲ盡シテ、長官ニ具陳シ、及ビ縣内ヲ監視シ、罪人ヲ處置シ、捕亡ノ事ヲ掌ル。（群馬縣職制）

明治五年裁判所の設置

明治五年八月十二日、始めて府縣に裁判所を置き、從來地方官に屬し居たる民事・刑事の訴訟事務を地方官より分離して、之を掌らしむることゝなしたり。司

法と行政との分離は、是に依りて稍〻その緒に就くことを得たりといへども、尙府縣裁判所の裁判官は、地方官をして兼任せしめたり。この時群馬縣への達に曰ふ。

群馬縣

其縣へ裁判所被置候事。

但委細之儀ハ司法省可承合事。

壬申八月十二日　正院

之に因て前橋舊城內該縣廳に隣接する舊藩廳を營繕し、司法省吏員を茲に移し事務を行ふ。是れ即ち群馬裁判所にして、實に本縣裁判設置の嚆矢なり。

**高崎區裁判所**

明治六年六月十五日、群馬縣を廢し熊谷縣を置かるゝに及び、裁判所位置及び管轄區域に變更あり。是年九月、群馬裁判所を區裁判所と稱し、熊谷に熊谷裁判所を置く。同十二月四日、前橋なる群馬區裁判所を高崎に移し、高崎區裁判所とし、本州十一郡をその管轄の下に屬せしめたり。明治八年五月、大審院諸裁判所職制章程を定め、大審院を設けて、最高の司法官廳と爲し、司法卿は唯司法・行政の事務を行ふものとせらる。此時熊谷縣は、上等裁判所の管轄に屬する旨を布告

熊谷裁判所前橋支廳

せられ、同九年二月、群馬郡澁川村に澁川區裁判所を置き、高崎區裁判所所轄を分轄し、同三月廿三日を以て開廳せり。その所轄は北第三・九・一八・一九・二〇の五大區、外に第二大區の内二・三・四・五の小區とす。

明治九年九月、府縣裁判所を改め、地方裁判所となすと共に、地方官より裁判官を兼任することを禁止する旨公達せらる。會〻熊谷縣を廢し、群馬縣を置かれたれば、再び裁判所位置及び管轄にも變更あり。九月公達と共に、熊谷裁判所は浦和に移りたるが、同年十一月、再び埼玉縣熊谷驛に移り、熊谷裁判所と稱し、縣内にては澁川の區裁判所を廢し、熊谷裁判所支廳を前橋町に置かれ、熊谷裁判所前橋支廳と稱し、十二月十三日開廳せり。其事務は地方裁判所の權限に屬する民刑事務を取扱ひ、尙支廳内にて別に區裁判所の事務をも取扱はれ、高崎區裁判所は前橋支廳の管下に屬せり。而して前橋區裁判所の所轄は、第一・二内二・三・四・五の四小區・三・六・七・八・九・一六・一七・一八・一九・二〇の十二大區、外に新田・山田の兩郡とす。邑樂郡は熊谷本廳の所轄に屬す。かくて本縣下は前橋・高崎の兩支廳と熊谷本廳とに所轄せらる。明治十年一月六日、布達第一號を以て、邑樂郡も亦前橋支廳管轄に入ることゝせり。是に於て司法事務全く獨立せり。是れより司法事務は司法省直轄となり、以て今日に至る。

前橋支廳高崎區裁判所所轄區域の變更

裁判所の位置及管轄の改正

## 第二項　司法事務分離以後

明治十一年、郡區町村編制法の施行により、群馬郡を東西に分つに及びて、裁判所所轄にも變更を生じ、舊第二大區（内一小區より五小區まで、）十大區は、前橋支廳より高崎區裁判所に變更せり。（明治十二年五月九日、本縣布達。）次いで明治十二年十二月より、熊谷區裁判本支廳區劃を改正す。卽ち左の如し。

| （裁判所名） | （所轄區域） |
| --- | --- |
| 前橋、支廳 | 東群馬　那波　佐位　北勢多　南勢多　利根　吾妻 |
| 高崎區裁判所 | 西群馬　片岡　綠野　多胡　北甘樂　南甘樂　碓氷 |
| 太田區裁判所 | 新田　山田　邑樂 |

明治十三年、治罪法創定の結果として、裁判所の位置及び管轄を左の通り改正せられ、從前の上等裁判所は控訴裁判所に、地方裁判所は初審裁判所に、區裁判所は治安裁判所に改まり、十五年一月より開始せられたり。

| 大審院 | （控訴院） | （始審裁判所） | （治安裁判所） | （縣名） | （國名） | （區郡名） |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 大審院 | 東京 | 前橋 | 前橋 高崎 太田 | 群馬 | 上野 | 東群馬 南勢多 北勢多 佐位 那波 利根 西群馬 碓氷 片岡 吾妻 南甘樂 北甘樂 多胡 綠野 新田 山田 邑樂 |

（以上司法省告示第五十三號明治一四・一〇・六）

然るに同十六年一月十日、太政官布告第二號を以て、前記裁判所管轄再び改正せらる。

| 大審院 | （控訴院） | （始審裁判所）（本廳） | （始審裁判所）（支廳） | （治安裁判所） | （縣名） | （國名） | （郡名） |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 大審院 | 東京 | 前橋 |  | 前橋 高崎 太田 | 群馬 | 上野 | 東群馬 南勢多 北勢多 佐位 那波 利根 吾妻 西群馬（猪野川以東） 碓氷 南甘樂 北甘樂 片岡 綠野 多胡 西群馬（猪野川以西） 新田 山田 甘樂 |

區劃一部の改正

而して翌二月二十四日に至り、更に區劃一部の改正を行ひたり。卽ち西群馬郡の內、保渡田村・大八木村・濱尻村・貝澤村・上大類村・綿貫村を高崎治安裁判所に、又西群馬郡の內、小八木村・井野村・新保村・八幡原村・下瀧村を前橋治安裁判所に變更せり。明治二十一年九月十五日、勅令第六十四號を以て、治安裁判所を置き、登記事

務を取扱ふ旨を公布せられ、同年十月十九日、司法省令甲第一號を以て、治安裁判所出張所及び管轄區域を定めらる。內本縣に屬する分は左の如し。

治安裁判所及出張所位置管轄區域表

| （管轄廳） | （治安裁判所） | （治安裁判所出張所） | （縣） | （國） | （郡區） | （管轄） |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 前橋 | 前橋 |  | 群馬 | 上野 | 東群馬郡 | 一圓 |
|  |  |  |  |  | 南勢多郡ノ內 | 澁川出張所大間々出張所管轄ヲ除クノ外一圓 |
|  |  |  |  |  | 西群馬郡ノ內 | 十六ヶ村（村名略以下同斷） |
|  |  | 大間々 |  | 上野 | 南勢多郡ノ內 | 三十七ヶ村 |
|  |  |  |  |  | 山田郡ノ內 | 六ヶ町村 |
|  |  | 澁川 |  | 上野 | 西群馬郡ノ內 | 三十六ヶ村 |
|  |  |  |  |  | 南勢多郡ノ內 | 二十一ヶ村 |
|  |  | 伊勢崎 |  | 上野 | 佐位郡那波郡 | 各一圓 |
|  |  | 沼田 |  | 上野 | 利根郡ノ內 | 月夜野出張所管轄ヲ除クノ外一圓 |
|  |  |  |  |  | 北勢多郡ノ內 | 一圓 |
|  |  | 月夜野 |  | 上野 | 利根郡ノ內 | 三十ヶ村 |
|  |  |  |  |  | 吾妻郡ノ內 | 九ヶ村 |

| 始審裁判 | 出張所 | 縣 | 國 | 郡 | 區域 |
|---|---|---|---|---|---|
| 高崎 | 中之條 | 群馬 | 上野 | 吾妻郡ノ内 | 月夜野出張所長野原出張所管轄ヲ除クノ外一圓 |
| | 長野原 | | 上野 | 吾妻郡ノ内 | 二十九ケ村 |
| | | | 上野 | 片岡郡 | 一圓 |
| | | | | 西群馬郡ノ内 | 前橋治安裁判所澁川出張所三ノ倉出張所管轄ヲ除クノ外一圓 |
| | | | | 碓氷郡ノ内 | 三ケ村 |
| | 三ノ倉 | | 上野 | 西群馬郡ノ内 | 六ケ村 |
| | | | | 碓氷郡ノ内 | 三ケ村 |
| | 安中 | | 上野 | 碓氷郡ノ内 | 高崎治安裁判所三ノ倉出張所管轄ヲ除クノ外一圓 |
| | 富岡 | | 上野 | 北甘樂郡ノ内 | 下仁田出張所吉井出張所管轄ヲ除クノ外一圓 |
| | 下仁田 | | 上野 | 同上 | 三十ケ村 |
| | 萬場 | | 上野 | 南北甘樂郡 | 一圓 |
| | 藤岡 | | 上野 | 綠野郡 | 一圓 |
| | | | | 多胡郡ノ内 | 二ケ村 |
| | 吉井 | | 上野 | 多胡郡ノ内 | 藤岡出張所管轄ヲ除クノ外一圓 |
| | | | | 北甘樂郡ノ内 | 八ケ村 |
| 太 | | | 上野 | 新田郡ノ内 | 桐生出張所管轄ヲ除クノ外一圓 |
| | | | | 山田郡ノ内 | 二十三ケ村 |

| 所 | 田 | | | |
|---|---|---|---|---|
| | | 館林 | 上野 | 邑樂郡ノ内 | 十二ヶ村 |
| | | | 上野 | 邑樂郡ノ内 | 太田治安裁判所管轄ヲ除クノ外一圓 |
| | | 桐生 | | 山田郡ノ内 | 大間々出張所太田治安裁判所管轄ヲ除クノ外一圓 |
| | | | | 新田郡ノ内 | 四ヶ村 |

地方裁判所と區裁判所

明治二十三年二月八日、法律第六號、裁判所構成法發布の結果、同年八月十一日、法律第六十二號を以て裁判所の位置及び管轄區域を改定せらる。此時より治安裁判所は區裁判所、始審裁判所は地方裁判所と改稱す。

裁判所位置及管轄區域表

| （控訴院） | （地方裁判所） | （區裁判所） | （國） | （管轄）（郡市町村） |
|---|---|---|---|---|
| 東京 | 前橋 | 前橋 | 上野 | 東群馬郡南勢多郡佐位郡那波郡一圓<br>西群馬郡ノ内十五ヶ村山田郡ノ内福岡村大間々町二ヶ町村 |
| | | 沼田 | | 利根郡北勢多郡一圓吾妻郡ノ内久賀村 |
| | | 中之條 | | 吾妻郡ノ内十二ヶ町村 |
| | | 太田 | | 新田邑樂郡一圓山田郡ノ内八ヶ町村 |
| | | 高崎 | | 片岡郡碓氷郡綠野郡多胡郡南甘樂郡西群馬郡ノ内二十三ヶ町村 |
| | | 富岡 | | 北甘樂郡一圓 |

（註一）西群馬郡ノ内十五ヶ町村ハ東村・元總社村・總社町・駒寄村・古巻村・明治村・桃井村・豐秋村・伊香保町・金島村・長尾村・白郷井村・高山村・澁川町・小野上村ナリ。

區裁判所は前橋高崎二所となる

沼田及新田區裁判所を增設

北甘樂區裁判所增設

中之條區裁判所增設

明治二十六年六月十三日、司法省令第十號を以て、區裁判所出張所の管轄變更あり。大正二年四月十九日、司法省令第十一號を以て、區裁判所廢合の結果、本縣の區裁判所は前橋・高崎兩所となり、在來の沼田・太田の兩區裁判所は前橋區裁判所管内出張所に、富岡・中之條の兩區裁判所は高崎區裁判所管内出張所と變更せられ、同年四月二十一日より實施す。然るに大正六年八月二十五日、司法省令第五號を以て、復改正あり。前橋區裁判所管内沼田・太田の各出張所を昇格して、沼田區裁判所・新田區裁判所とし同年九月十五日より施行し、大正九年六月二十四日、司法省令第十號にて、重ねて改正あり。高崎區裁判所管内富岡出張所は北甘樂區裁判所として、同年七月十五日より施行せり。次いで大正八年六月十二日、司法省令第十四號を以て、高崎區裁判所管内中之條出張所を中之條區裁判所に復活して、同年七月一日より實施し、爾來今日に及べり。前橋地方裁判所管内に取扱へる事件數を明治二十年より十年毎に掲記すれば、左の如し。

前橋地方裁判所管内民事訴訟事件數種類別調

| （年次） | （件数）（舊受） | （新受） | （計） | （結果）（判決） | （取下） | （和解） | （訴訟差戻） | （其他） | （計） | （未決） | （上欄結果ノ種類）（人事） | （土地） | （建物） | （金錢） | （米穀） | （物品） | （證券） | （雜事） |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 明治二十年 | 一三五 | 一、一七四 | 一、二九九 | 四八八 | 六五 | 四〇二 | — | 二三九 | 一、一八四 | 一二五 | 五 | 一四 | 七 | 八八〇 | 一一 | 一六 | 一七 | 二三四 |
| 同　三十年 | 二三二 | 二、四四四 | 二、六七六 | 八三〇 | 四七〇 | 四四 | 一 | 一、〇六八 | 二、四一三 | 二六三 | 六〇 | 一三 | 二七 | 九八九 | 三一 | 四三 | 八 | 一、二三二 |
| 同　四十年 | 六四一 | 三、〇一八 | 三、六五九 | 一、〇〇五 | 八四四 | 八八 | 二 | 一、二一一 | 三、一五〇 | 五〇九 | 六〇 | 七九 | 三三 | 一、五九二 | 二五 | 三六 | 六 | 一、三二〇 |
| 大正六年 | 六三六 | 三、一四二 | 三、七七八 | 八〇二 | 七七九 | 一五九 | — | 六〇一 | 二、三四一 | 四三七 | 九四 | 一一二 | 四六 | 一、二一七 | 一三 | 四〇 | 二 | 八〇八 |
| 同　十三年 | 一、〇七七 | 二、四〇六 | 三、四八三 | 八九七 | 八一七 | 三三四 | — | 二七二 | 二、三二〇 | 一、一六三 | 八二 | 九四 | 五〇 | 一、五四二 | 一三 | 六二 | 六 | 四七二 |

# 前橋地方裁判所檢事局管内檢事々件數調

| （年次） | （受理）（舊受） | （新受） | （計） | （處分）（起訴） | （不起訴） | （其他） | （計） | （未濟） |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 明治二十年 | 四 | 一、三七六 | 一、三八〇 | 一、〇九六 | 二五七 | 二三 | 一、三七六 | 四 |
| 同　三十年 | 三八 | 五、五一四 | 五、八二三 | 四、六八三 | 四八〇 | 二八一 | 五、四四四 | 三八八 |
| 同　四十年 | 一 | 二、八八八 | 二、八八九 | 一、八六八 | 七九七 | 二二二 | 二、八八七 | 二 |
| 大正六年 | 四〇 | 三、三八三 | 三、四二三 | 一、三六九 | 一、六五九 | 三六一 | 三、三八九 | 三四 |
| 同　十三年 | 一一七 | 三、五六八 | 三、六八五 | 一、一〇二 | 一、九九二 | 六一一 | 三、六三五 | 五〇 |

## 第三項　登記事務

登記法の制定

明治五年二月、始めて人民の土地所有を認め、地所永代賣買禁制なりしを、自今四民共に之が賣買を差許され、地券の制を定め、同六年地所質入書入規則を發布し、地所の質入又は書入については、戸長をしてその證文に奥書捺印せしむることゝなせり。これ所謂戸長の公證にして、物權公示の方法を定めたる嚆矢なり。爾來規則の增補を行ひたれど、尙權利保護の實を完ふすること能はざるを以て、明治十九年八月、勅令第一號を以て、登記法を制定せり。該法は地所・建物・船舶の賣買・讓與・質入・書入に關する登記手續を定められ、明治二十年二月一日より施行せらる。是に於て從來戸長役場の所管に屬したりし事務は、治安裁判所に於て取扱ふことゝなれり。但し遠隔地に限り、郡役所又は戸長役場等に於て取扱はしめ、始審裁判所長之が事務を監督することゝなれり。當時本縣内には登記所二十二箇所を置く。司法省令第四號、明治十九年十二月二日。内譯は治安裁判所三、郡役所九、同出張所一、戸長役場九にして、その所在位置は左記の如し。

明治十九年新設登記所位置及所管表

（管轄廳）前橋始審裁判所

| （登記所） | （位置） | （郡區） |
| --- | --- | --- |
| 前橋 | 前橋治安裁判所 | 佐波郡ノ内、西群馬郡ノ内 |
| 桐生 | 山田郡役所 | 山田郡ノ内、新田郡ノ内 |
| 水沼 | 水沼村戸長役場 | 南勢多郡ノ内、 |
| 伊勢崎 | 佐位那波郡役所 | 佐位郡ノ内、那波郡ノ内 |
| 萬場 | 南甘樂郡役所 | 南甘樂郡ノ内 |
| 藤岡 | 緑野多胡郡役所 | 緑野郡ノ内、南甘樂郡ノ内 |
| 富岡 | 北甘樂郡役所 | 北甘樂郡ノ内 |
| 吉井 | 吉井町戸長役場 | 多胡郡ノ内、北甘樂郡ノ内 |
| 太田町 | 太田治安裁判所 | 新田郡ノ内、山田郡ノ内、邑樂郡ノ内 |
| 館林 | 邑樂郡役所 | 邑樂郡ノ内 |
| 澁川 | 西群馬片岡郡役所出張所 | 西群馬郡ノ内、南勢多郡ノ内 |
| 大胡 | 大胡町戸長役場 | 南勢多郡ノ内 |
| 沼田 | 利根北勢多郡役所 | 利根郡ノ内、北勢多郡ノ内 |
| 湯原 | 湯原村戸長役場 | 利根郡ノ内 |

| 判所 | | |
|---|---|---|
| 新巻 | 新巻村戸長役場 | 利根郡ノ内、吾妻郡ノ内 |
| 中之條 | 吾妻郡役所 | 吾妻郡ノ内 |
| 長野原 | 長野原町戸長役場 | 吾妻郡ノ内 |
| 安中 | 碓氷郡役所 | 碓氷郡ノ内 |
| 下仁田 | 下仁田町戸長役場 | 北甘樂郡ノ内 |
| 三ノ倉 | 三ノ倉村戸長役場 | 西群馬郡ノ内、片岡郡 |
| 高崎 | 高崎治安裁判所 | 碓氷郡ノ内、緑野郡ノ内 |
| 追貝 | 追貝村戸長役場 | 利根郡ノ内 |

治安裁判所出張所を置き登記事務を取扱ふ

明治二十一年九月十五日、縣令第六十四號を以て、治安裁判所出張所を置き、登記事務並に期日を定め、裁判事務を取扱はしむることを定め、其位置及び管轄區域は、明治二十一年十月十九日、司法省令甲第一號を以て、左記十六箇所の治安裁判所出張所新設あり。登記事事務取扱に關し、同月より施行せられ、郡役所及び戸長役場より事務の引續を受く。是れに依り郡役所及び戸長役場の登記事務取扱は廢せられたり。

| （管轄廳） | （治安裁判所） | （治安裁判所出張所） | （管轄） |
|---|---|---|---|
| | 前橋 | | 東群馬郡、南勢多郡ノ内、西群馬郡ノ内 |

# 治安裁判所

| 裁判所 | 出張所 | 管轄區域 |
| --- | --- | --- |
| | 大間々 | 南勢多郡ノ内、山田郡ノ内 |
| | 澁川 | 西群馬郡ノ内、南勢多郡ノ内 |
| | 伊勢崎 | 佐位郡、那波郡 |
| | 沼田 | 利根郡ノ内、北勢多郡 |
| | 月夜野 | 利根郡ノ内、吾妻郡ノ内 |
| | 中之條 | 吾妻郡ノ内 |
| | 長野原 | 吾妻郡ノ内 |
| 高崎 | | 片岡郡、西群馬郡ノ内、碓氷郡ノ内 |
| | 安中 | 碓氷郡ノ内 |
| | 富岡 | 北甘樂郡ノ内 |
| | 下仁田 | 北甘樂郡ノ内 |
| | 萬場 | 南甘樂郡ノ内 |
| | 藤岡 | 緑野郡ノ内、多胡郡ノ内 |
| | 吉井 | 多野郡ノ内、北甘樂郡ノ内 |
| 太田 | | 新田郡ノ内、山田郡ノ内、邑樂郡ノ内 |
| | 館林 | 邑樂郡ノ内 |

| | | |
|---|---|---|
| 桐生 | | 新田郡ノ内、山田郡ノ内 |

右新設の出張所は、曩に關係地方人民より設置を要望し、廳舍及び敷地を獻納すべしとするもの、或は貸借すべしとするものあり。内澁川・沼田・月夜野・中之條・長野原・富岡・下仁田・藤岡・吉井・館林の十箇所は新築獻納し、他は貸借契約にせらる。爾來區裁判所の廢合に伴ひ、登記所の所轄にも亦變更を來したりしが、現行の登記所及び其管轄區域は左表の如し。

登記管轄區域表（大正十五年十二月調）

| （地方裁判所） | （區裁判所） | （出張所） | （管轄區域） |
|---|---|---|---|
| 前橋 | 前橋 | | 前橋市勢多郡ノ内（八ヶ村）(一) 群馬郡ノ内（總社町・東村・元總社町） |
| | | 澁川 | 群馬郡ノ内（十ヶ村）(二) 勢多郡ノ内（植野村・敷島村） |
| | | 大胡 | 勢多郡ノ内（大胡町・荒砥村・宮城村・粕川村） |
| | | 花輪 | 勢多郡ノ内（東村・黑保根村） |
| | | 大間々 | 山田郡ノ内（大間々町・福岡村）勢多郡（新里村） |
| | | 伊勢崎 | 山田郡ノ内（十三ヶ村）(三) |
| | | 玉村 | 佐波郡ノ内（玉村町・芝根村・上陽村） |
| | 沼田 | | 利根郡ノ内（十ヶ村）(四) |

| 登記所 | 出張所 | 管轄區域 |
| --- | --- | --- |
| | 東 | 利根郡ノ内(東村・片品村) |
| | 桃野 | 利根郡ノ内(桃野村・古馬牧村・新治村) |
| | 水上 | 利根郡ノ内(水上村) |
| 新田 | | 新田郡ノ内(太田町・藪塚本町・鳥之鄕村・寶泉村・九合村・澤野村・强戸村) 山田郡ノ内(毛里田村・韮川村・休泊村・矢場川村) |
| | 桐生 | 山田郡ノ内(桐生町・川内村・廣澤村・梅田村・相生村・境野村) 新田郡ノ内(笠懸村) |
| | 木崎 | 新田郡ノ内(木崎町・尾島町・世良田村・生品村・綿打村) |
| | 館林 | 邑樂郡ノ内(一町(五)十一村) |
| | 小泉 | 邑樂郡ノ内(小泉町・永樂村・大川村・長柄村・高島村) |
| | 伊奈良 | 邑樂郡ノ内 (伊奈良村・西谷田村・大箇野村・千江田村・海老瀨村) |
| 高崎 | | 高崎市、群馬郡ノ内(倉賀野町・佐野村・岩鼻村・大類村・瀧川村・京ヶ島村・新高尾村・中川村・塚澤村・六鄕村・長野村・片岡村) 碓氷郡ノ内(豐岡村) |
| | 金古 | 群馬郡ノ内(金古町・相馬村・堤ヶ岡村・國府村・淸里村・桃井村) |
| | 箕輪 | 群馬郡ノ内(箕輪村・車鄕村・上郊村) |
| | 室田 | 群馬郡ノ内(室田町・久留馬村) 碓氷郡ノ内(里見村) |
| | 倉田 | 群馬郡ノ内(倉田村) 碓氷郡ノ内(烏淵村) |

| | | |
|---|---|---|
| | 安中 | 碓氷郡ノ内（安中村・原市町・板鼻町・東横野村・磯部村・岩野谷村・八幡村・秋間村・後閑村） |
| | 松井田 | 碓氷郡ノ内（松井田町・臼井町・坂本町・西横野村・九十九村・細野村） |
| | 藤岡 | 多野郡ノ内（藤岡町・新町・神流村・小野村・八幡村・美土里村・平井村・美九里村・日野村） |
| | 鬼石 | 多野郡ノ内（鬼石町・三波川村・美原村） |
| | 吉井 | 多野郡ノ内（吉井町・多胡村・入野村） |
| 中之條 | | 吾妻郡ノ内（中之條町・原町・東村・太田村・坂上村・岩島村・澤田村・伊參村・名久田村・高山村） |
| | 長野原 | 吾妻郡ノ内（長野原町・草津町・六合村・嬬戀村） |
| 北甘樂 | | 北甘樂郡ノ内（五町九村）（六） |
| | 下仁田 | 北甘樂郡ノ内（下仁田村・小坂村・青倉村・月形村・尾澤村・吉田村・馬山村・磐戸村・西牧村） |
| | 萬場 | 多野郡ノ内（神川村） |
| | 上野 | 多野郡ノ内（上野村・中郷村） |

（註一）八ヶ村
上川淵村・下川淵村・南橘村・北橘村・富士見村・芳賀村・桂萱村・木瀬村。

（註二）十ヶ村
澁川町・伊香保町・駒寄村・古卷村・明治村・豐秋村・金島村・長尾村・白郷井村・小野上村。

（註三）佐波郡ノ内

伊勢崎町・境町・三鄕村・赤堀村・東村・殖蓮村・茂呂村・釆女村・剛志村・島村・豐受村・名和村・宮鄕村。

(註四)沼田町・利南村・白澤村・川場村・池田村・薄根村・川田村・久呂保村・絲之瀨村・赤城根村。

(註五)館林町・鄕谷村・赤羽村・梅島村・佐貫村・六鄕村・三野谷村・富永村・中野村・多々良村・渡瀨村・大島村。

(註六)富岡町・一ノ宮町・妙義町・福島町・黑岩村・高田村・丹生村・額部村・小幡村・岩平村・新屋町・高瀨村・小野村・秋畑村。

(群馬縣史稿縣治部・前橋地方裁判所調査。)

# 第二節　刑務所

## 第一項　監獄職制

司獄事務は地方廳の所管

明治の初、行政・司法事務未だ分離せず、地方官が司法事務を管轄したる時代は勿論、明治九年九月、兩事務全く分離したる後といへども、司獄事務は地方廳の所管に屬し、明治三十三年一月十五日、監獄費國庫支辨の法律發布せられ、同年十月一日より施行まで引續けり。岩鼻縣時代に於ては、民政局の下に斷獄課ありて、管内の罪囚を管し、入監人を徒罪人と稱し、徒罪人假規則を設く。その條目に曰く、

徒罪人假規則

一法皮着用不致者、外出不相成候事。但是迄ノ法皮相廢止、更ニ左記雛形ノ通リ相定候事。

| 徒 |
|---|
| 淺黄木綿 |
| 文字白 |
| 袖ナシ半纏 |

一縣下市中ハ勿論、郷中ニ於テ猥リニ飲食不ㇾ相成候事。但差配人附添差出候節ハ、此限ニアラズ。

一身元ヨリ金錢等私ニ取寄候儀者、素ヨリ嚴禁ノ處、中ニハ途中ニ於テ懇意ノ者相賴、村宿へ申遣シ取遣致候者モ有ㇾ之哉ニ相聞、以ノ外ノ事ニ候條、以來右體ノ儀ハ不ㇾ及ㇾ申、途中ニ於テ外人ト談話致候儀、一切不ㇾ相成候。尤身元ヨリ願ノ上、衣類等差入候儀ハ、檢査ノ上聞屆ケ可ㇾ遣候事。

右之趣吏ニ申渡候條、屹度可ㇾ相守者也。

監獄吏の職制

監獄吏の職制は、徒場・囚獄各別にして、徒場は後の懲役場なり。等外官吏一人を置き、囚獄を兼ぬ。而して獄吏には徒場人足差配方・下番・徒場焚出世話方・徒場門番・病囚治療醫・囚獄掛(未決監首長)・徒刑場掛(已決檻首長)・徒刑場會計掛あり。

二月廿五日徒場を改めて懲役場と稱す

明治四年廢藩置縣後は、群馬縣に聽訟課を置き、その下に屬したるが、明治六年二月の改正により、庶務課に監察掛を置き、囚獄・徒流場・邏卒の事務を處理せしめたるが、同三月捕亡の事務を廢し、司法省に引渡すに際し、本縣監察掛の廢せらるるや、徒場・囚獄・斷刑の事務は、常務掛に屬せしむ。同年四月、區廳を設けらるゝに及び、裁判所所在の區廳に於ては、刑人處置の事、附處置濟府縣送取扱の事、囚獄懲

役場取締の事、懲役人を使役すること、區廳の事務に屬せしむ。
同六年六月、監獄規則（明治五年十一月制定、）の施行を停め、舊規に從はしむ。同月囚獄附屬規則十四箇條を定め、看守の心得を示せり。同月熊谷縣となるや、九月熊谷驛に囚獄落成するまで、當分岩鼻懲役場に於て囚獄・懲役一般の事務を總括し、前橋其他の囚獄懲役人、脱檻越獄逃亡することある際の手續を假定し、本廳支廳より區廳へ達せり。
同八年五月、已決・未決兩監非常分任取扱の順序を假定し、非常の變災に應ぜしめたり。同八月に至りては、官省公布、布達及び縣限りの布達等も、未決・已決兩監囚徒へも宣讀會得せしむる樣の布達あり。次いで十一月、笞杖實決を廢し、百日以下懲役施行に就き、其順序内務省の許可を得て創定し、庶務課囚獄懲役掛に達せり。明治九年一月に至り、第一課庶務の分掌中、囚獄懲役の事務を警保課に移掌せしむ。明治十一年一月、未決・已決兩檻中、附屬下番の稱を廢し、獄丁・下男を設置し、服制を定む。同十二月、本縣職制改革に就き、警保課に警察署・監獄署・懲役署を置けり。
明治十九年九月、地方官々制の改正に伴ひ、廳中庶務細則の改定に依り、司獄事

監獄事務は警察より分離す

務は警察事務と分離して、第二部監獄課に屬せり。明治二十一年に至り、廳內監獄課を前橋監獄内に移せり。明治二十三年九月、地方官々制の改正に伴ひ、復監獄署を設けられたるより、本縣監獄署名を改正し、監獄署庶務細則を定め、守警課・庶務課とせしが、明治二十五年十二月廿六日、再改定し、庶務課・警守課・作業課・經理課・醫務所・教務所を置き、各課所に長各〻一人を置き、庶務課・作業課・經理課の課長には監獄書記、警守課の課長には看守長、醫務所長には監獄醫、教務所長には教誨師を充て、皆署長の命を受けて事務を處理せしむ。

明治二十六年三月六日には、看守教習規則を定め、新に採用する看守は、先づ之を教習して後、本務に從事せしむ。此月十三日、告示第八二號を以て、太田監獄支署を廢止し、同日以後太田裁判所に屬する刑事被告人は、新田郡警察署に留置する旨を告示す。更に同年五月十二日、高崎監獄支署に拘禁する刑事被告人、刑の言渡を受け、裁判確定したる時は、其署に押達せしむべき旨達し置きたるが、右は輕禁錮又は拘留にして、其刑期十日を超えざるものは、自今同支署に於て直に刑の執行をなさしむることゝなる。同年十一月十八日、在監人貨物出納規則を定む。二十七年一月四日、本縣庶務細則の改定により、監獄署は左の如く改正せり。

第一課　監視　監獄書記
第二課　監役　看守長
第三課　庶務　監獄書記
醫務所　監獄醫

明治三十一年十月、衛生課を獨立す。

## 第二項　監獄官署の廢置

岩鼻縣の當初にありては、縣廳舍の一部に罪囚を拘留したることありしも、明治三年八月二十四日、岩鼻町丘千十九坪の地を割し、囚獄（未決監）及び徒刑場（已決監）を置く。是れ維新後監獄設置の濫觴なり。廢藩置縣に及び、前橋藩に於て設置したる一毛村（諏訪町南裏）に在りたる囚獄並に徒刑場を群馬縣に引繼ぎ、（明治四、一〇、二八）熊谷縣の設置に至り、この囚獄徒刑場を引拂ひて、その事務を熊谷縣に引繼ぐ。（六年六月十五日。）熊谷縣は此年十二月、高崎驛宮元町烏川緣に、舊藩以來の官有地四百十三坪を劃し、舊岩鼻囚獄の建物を修補して、高崎囚獄を設く。同八年十二月一日

より、笞杖實決の處斷を廢し、岩鼻を本局とし、熊谷・高崎・川越・大宮の四箇所に支局を設け、百日以下の懲役を執行すること、定む。翌九年に至り、群馬郡澁川驛に囚獄を新築し、並に懲役人假部屋を落成したるにより、四月廿七日より開局す。この年九月、前橋町曲輪町縣廳西裏利根河岸の地二千七百七十六坪を選定し、前橋囚獄を設け、同時に前橋天河原村に懲役出張所を構置したり。翌十月、高崎懲役場を廢し、岩鼻懲役場に合併す。但し囚獄は元の如し。同十一月、澁川裁判所廢止の結果、澁川囚獄を廢止す。明治十年二月に至り、本縣囚獄懲役場の名稱を左の通り改む。

| (舊稱) | (所在) | (改稱) |
| --- | --- | --- |
| 群馬縣囚獄 | 前橋町 | 群馬縣未決檻 |
| 同 | 高崎驛 | 同未決分檻 |
| 同懲役場 | 岩鼻町 | 同已決檻 |
| 同懲役假出張所 | 前橋天川村 | 同已決分檻 |
| 同 | 緑野郡藤岡町 | |
| 同 | 碓氷郡神山村 | 群馬縣已決囚外役所 |
| 同 | 同藤塚村 | |

明治十一年七月、碓氷郡藤塚村外役所を使役の都合により、同郡松井田驛に移し、更に山田郡上久方村に外役所を新設し、而して同年七月卅一日を以て、松井田驛に移置せる已決囚外役所を廢止す。明治十三年八月、新田郡太田町三丁目に五百十二坪を割し、太田監獄支署を新築開廳す。是れ曩に十一年四月、太田町に裁判所を設置せられ、一時民有空土藏を假用したるによる。明治十五年一月、北甘樂郡小坂村已決所外役所を廢止し、二月南勢多郡水沼村に同外役所を設置し、同十六年十月廢止す。此年又吾妻郡原町にも已決囚外役所を設置し、假監房を新築す。同廿一年五月廢止す。明治十九年八月に至り、本支獄の別を廢し、岩鼻監獄・前橋監獄・高崎監獄・太田監獄と稱し、太田監獄にも懲役場を設く。明治廿一年一月、東群馬郡宗甫分・紅雲分兩村境界に建築せる新監獄落成により、前橋監獄と名稱し、岩鼻監獄を此年一月十日限り廢止し、在監人を悉く前橋監獄に移す。是れ即ち現在の前橋刑務所なり。この監獄新築は明治十八年より、同二十年の三箇年繼續事業にて成りたるものにして、總坪敷三萬二千五百八十八坪、構內一萬八千三十四坪なり。この新築に關し、佐藤群馬縣令により內務卿に申請したる全文は左の如し。監獄移轉改築に關する當時の事情を知るに足るを以て、之

を抄錄す。

## 監獄移轉改築に關し申請(內務大臣ニ)

本縣監獄ノ儀ハ、舊岩鼻立縣中ノ建築ニ係リ、其構造タル規模極メテ狹小、且ツ粗陋ナルニ、繼承以來既ニ數十ノ星霜ヲ經、漸次頹敗セルヲ、年々修補綢繆、纔ニ維持今日ニ至レリ。然ルニ本縣ノ地勢タル、境ヲ越・甲・信・越ニ接シ、慓悍無賴ノ徒、往來出沒常ナク、隨テ罪囚ノ夥多ナル、他縣ノ比ニ非ズ。固ヨリ狹隘ノ監房、能ク之ヲ容ル、能ハザルヲ以テ、前橋支監及各地ニ外役所ヲ分設シ、之ヲ配置スルモ、未ダ其需用ニ供スルヲ得ズ。而テ囚徒ハ日ニ其員ヲ加ヘ、其數ヲ增シ、每ニ一房內ニ數十ノ惡漢ヲ雜居セシムルヨリ、共ニ不良ヲ晉謀リ、相誘ヒ、往々破監・越獄、其害毒ヲ良民ニ及ボスコト實ニ鮮淺ナラズトス。抑モ在來ノ監獄タル、啻ニ構造ノ狹隘脆弱ナルノミナラズ、地形亦其當ヲ失シ、將ニ縣廳ヲ距ル殆四里。一朝事變アルニ當テハ、緩急應援其便ヲ缺クモノ、一ニシテ足ラズ。治安上ノ危險實ニ言フベカラザルナリ。是本監ノ改築ト移轉トハ、施政上一日モ緩過スベカラザル喫緊急務ナルヲ以テ、茲ニ移轉ノ地ヲトスルニ、縣下東群馬郡紅雲分村宗甫分村ノ內某地ヲ適當ナリトス。該地タルヤ、高燥ニシテ飮用水ニ富ミ、市街ニ隔離シテ、火災ノ憂少ク、而テ縣廳ヲ距ル亦僅ニ數百步ノ外ニ在レバ、凡百ノ事ニ處スルニ、實ニ至便ナリトス。依テ該村

內民有地反別五町五反一畝三歩ヲ敷地ニ買上ゲ、移轉ノ見込ヲ以テ、本年通常縣會ニ對シ、建築經費總額九萬九千四百五十八圓餘ヲ三ケ年ニ徵收スベキ議案ヲ發シタルニ、議會ハ之ヲ八萬五千五百九圓六拾九錢壹厘ニ減ジ、其支出ヲ五ケ年ニ延シ、總額金ノ內若干圓ヲ政府ヨリ拜供センコトヲ議了セルニ由リ、乃チ其事由ヲ詳具シ、本年四月三十日、金額御貸下ノ儀稟請候處、五月二十八日御聞屆相成、隨テ縣會議決認可候ニ付、右移轉改築ノ儀至急御允可相成度、別紙仕樣目論見帳四冊、圖面三十九相添、此段相伺候也。

明治十八年六月十八日　　　群馬縣令　佐藤與三

內務卿　伯爵　山縣有朋殿

是より本縣監獄は前橋・高崎・太田の三箇所となる。明治二十三年十月、地方官官制改正に依り、監獄署を設けらるゝに及び從前の前橋監獄を群馬縣監獄署と名稱し、高崎監獄を群馬縣監獄支署、太田監獄を同太田監獄支所と改稱す。同廿六年三月に至り、太田監獄支所を廢して、明治三十六年三月、監獄官制を發布し、地方長官に屬せる監獄は、司法大臣の直轄となり、この改正に伴ひ、群馬縣監獄署を前橋監獄、高崎監獄支所を高崎分監と改稱す。同三十九年十月、高崎分監を宮元町百四十六番地より、同地十三番地高崎區裁判所の構內まで取擴げて、こゝに移

せり。大正六年九月、新田郡太田町に前橋監獄新田出張所を置かれたるが、大正十二年七月、復廢止せらる。大正十一年十月、官制改正あり。前橋監獄署を前橋刑務所と改稱し、同十三年十二月の改正にて、浦和刑務所及び同熊谷支所を廢して、浦和支所及び熊谷出張所を設置し、前橋刑務所に附屬せしむ。

司獄官吏數表

| (年次) | (典獄) | (副典獄) | (監獄書記) | (看守長) | (看守) | (監獄醫) | (女監取締) | (教誨師) | (押丁) | (授業手) | (雇) | (合計) |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 明治二二 | | 一 | 九 | 五 | 八七 | 六 | 三 | 一 | 一三〇 | 四 | 一七 | 二五三 |
| 同二七 | 一 | | 一〇 | 六 | 八二 | 三 | 四 | 二 | 一五九 | 六 | 一九 | 二九二 |
| 同三二 | 一 | | 七 | 五 | 一八六 | 三 | 七 | 三 | 二一 | 六 | 一四 | 二五三 |
| 同三七 | 一 | | | 一二 | 一四六 | 三 | 九 | 三 | 六 | 四 | 一 | 一八六 |
| 同四二 | 一 | | | 一〇 | 一六〇 | 一 藥劑師一 | 四 | 二 | | 四 | 二〇 | 二〇四 |
| 大正三 | 一 | | | 六 | 一三九 | 二 | 三 | 二 | | | 二六 | 一七六 |
| 同八 | 一 | | | 六 | 一二八 | 一 | | 二 | | | 二九 | 一六七 |
| 同一三 | 一 | 典獄補一 | | 七 | 一六九 | 保健技師一 | | 三 | | 作業技手六 | 三三 | 二二一 |

## 第三項　在監人狀況

（明治十五年刑法實施より明治四十年改正刑法公布迄二十六年間の記事）

| （年次） | （在監人一日平均） | （死亡人員） |
|---|---|---|
| 明治一五 | 九一七 | 三一 |
| 一六 | 一、一六七 | 二四 |
| 一七 | 一、二五五 | 三六 |
| 一八 | 一、九七七 | 九八 |
| 一九 | 二、五〇九 | 一三三 |
| 二〇 | 一、七四五 | 七七 |
| 二一 | 一、三四二 | 五一 |
| 二二 | 一、三八九 | 一九 |
| 二三 | 一、二一〇 | 二五 |
| 二四 | 一、二〇八 | 二五 |
| 二五 | 一、一四六 | 二四 |

| （年次） | （在監人一日平均） | （死亡人員） |
|---|---|---|
| 明治二六 | 一、三九〇 | 二七 |
| 二七 | 一、七一九 | 四六 |
| 二八 | 二、〇六九 | 四四 |
| 二九 | 一、九〇九 | 一一一 |
| 三〇 | 一、七七三 | 七五 |
| 三一 | 一、八一六 | 七五 |
| 三二 | 一、六八七 | 六一 |
| 三三 | 一、四五一 | 五一 |
| 三四 | 一、三〇〇 | 一八 |
| 三五 | 一、三四五 | 二一 |
| 三六 | 一、四八六 | 一二 |

| 明治三七 | 一、三〇五 | 二四 |
| --- | --- | --- |
| 三八 | 一、三五六 | 二〇 |
| 三九 | 一、三〇八 | 三〇 |
| 四〇 | 一、一九一 | 一九 |
| 四一 | 一、一二三 | 一五 |
| 四二 | 一、四〇八 | 二七 |
| 四三 | 一、三八四 | 二四 |
| 四四 | 一、三三六 | 二三 |
| 大正元 | 一、二〇七 | 二六 |
| 二 | 一、一六五 | 二四 |
| 三 | 一、〇三六 | 三〇 |
| 大正四 | 九八〇 | 三三 |
| 五 | 八八九 | 二九 |
| 六 | 九一九 | 一三 |
| 七 | 八九三 | 二五 |
| 八 | 八七七 | 一八 |
| 九 | 七七六 | 一一 |
| 一〇 | 七〇四 | 九 |
| 一一 | 六〇七 | 六 |
| 一二 | 五七〇 | 六 |
| 一三 | 六二〇 | 九 |
| 一四 | 六九二 | 一五 |

## 群馬縣監獄及分監在監人員

| (年次) | (受刑者) | | | (刑事被告人) | | | (勞役場留置場) | | | (乳兒) | | | (合計) | | |
| --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- |
| | (男) | (女) | (計) | (男) | (女) | (計) | (男) | (女) | (計) | (男) | (女) | (計) | (男) | (女) | (計) |
| 明治二三 | 七九五 | 三四 | 八二九 | 一五三 | 七 | 一六〇 | 一三 | 二 | 一五 | 三 | — | 三 | 九六四 | 四三 | 一、〇〇七 |

| | | | | | | | | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 明治 | 一七 | 一、一八二 | 五六 | 一、二三八 | 二七二 | 八 | 二八〇 | 二二 | 二 | 二四 | 五 | — | 五 | 一、四八一 | 六六 | 一、五四七 |
| 同 | 二二 | 八七〇 | 三八 | 九〇八 | 一七一 | 一〇 | 一八一 | — | — | — | 一 | 二 | 三 | 一、〇四二 | 五〇 | 一、〇九二 |
| 同 | 二七 | 一、三七八 | 八一 | 一、四五九 | 三七七 | 二二 | 三九九 | 五 | 二 | 七 | 二 | 六 | 八 | 一、七六二 | 一一一 | 一、八七三 |
| 同 | 三二 | 一、二八三 | 一〇七 | 一、三九〇 | 一四二 | 一四 | 一五六 | 三 | — | 三 | 一 | 三 | 四 | 一、四四八 | 一二四 | 一、五七二 |
| 同 | 三七 | 一、三二二 | 五九 | 一、三八一 | 八四 | 三 | 八七 | 一 | — | — | — | — | — | 一、四〇六 | 六二 | 一、四六八 |
| 同 | 四二 | 一、三六九 | 三二 | 一、四〇一 | 一〇九 | 六 | 一一五 | 二三 | 四 | 二七 | — | — | — | 一、五〇一 | 四二 | 一、五四三 |
| 大正 | 三 | 八一〇 | — | 八一〇 | 四七 | — | 四七 | 二三 | 一 | 二四 | 二四 | — | 二四 | 九〇四 | 一 | 九〇五 |
| 同 | 一三 | 九〇二 | — | 九〇二 | 二二 | 一 | — | — | — | — | — | — | — | 九二四 | 一 | 九二五 |
| 同 | 一四 | 一、〇二七 | — | 一、〇二七 | 三九 | 一 | 四〇 | 五 | — | 五 | — | — | — | 一、〇七一 | 一 | 一、〇七二 |

（群馬縣史稿・群馬縣布達令書・前橋刑務所調査。）

# 第三節　警察

## 第一項　職制

三局と警察事務

岩鼻縣創置の當初は、職制甚だ簡單にして、唯取締・調方・書記等の職名あるのみ。蓋し領内未だ皇化に霑はず、所在脱賊奸民尠からざるを以て、縣治の目的主として公安維持にあり。從つてその政務が保安警察にありしは、想像するに難からず。明治二年七月、民政・地方・監察の三局を立て、分課職制を定むるに及び、所謂警察事務は監察局の所管にして、取締方の名を以て、縣吏の曲直勤惰を監し、宿驛村落を巡檢し、下民安撫の事を掌る。而して捕亡事務は聽訟・斷獄の司法事務と共に、法政局に屬せり。

明治四年七月、廢藩置縣となり、十月群馬縣を置かれ、廳内を四課に分つに及び、聽訟課を置いて、訴訟・斷獄・警邏・捕亡等の事務を掌らしめ、典事之れが課長たり。同五年六月に至り、捕亡及び附屬を廢して、邏卒を置く。長副各〻一人、小頭二人、一等邏卒五人、二等邏卒十人、三等邏卒十五人、計三十四人なり。市中巡邏の節は、戎

服を着用し、一等邏卒以下は股引半天・割羽織を用ふる苦しからざる事、長以下平常營所に相詰め、聽訟課差圖次第、四方へ出張す可しとの事なりき。同六年二月の改定職制に於ては、警察事務は庶務課中の監察掛の所管となる。

監察掛　專ラ人民ノ權利ヲ保護スルノ責ヲ任ジ、平素管内ニ派出シ、火附・人殺・盜賊等ハ勿論、亂法ノ所業及ビ公事・出入・爭訟等ノ事ヲ工ミ、都テ良民ノ患害ヲ釀シ、愚民ヲ輕蔑又ハ煽動セシムル奸民等ノ類、常ニ搜索、其事ノ輕重緩急ニ應ジ、邏卒捕亡等ヘ報告、協力抑制シテ各區々長ヘ護送セシメ、糺問等ノ節、時宜侍座スルコトアルベシ。最諸官員ハ勿論、正副區戶長ノ勤惰及ビ各區ノ邏卒・神官・教官等ノ勉・不勉、人品ノ當否ヲ視察シ、直言忌諱ヲ憚ラザルベク、兼テ囚獄・徒場邏卒ヲ管治ス。

但巡回中案知ノ事件ハ、急劇ニ發リ、且大ニシテ、邏卒等ヘ報告スルノ暇ヲ得ザルトキハ、手限リ捕縛セシムルコトアルベシ。亦已ムヲ得ザルノ時宜ニ任ス。

最モ人民相互ノ訴訟ハ勿論、其他制外ノ諸務、奏任官殊更ニ指令スルニ非レバ、一切關係スルヲ得ズ。（群馬縣職制。）

同三月捕亡の事務を廢し、司法省へ引渡すに及び、本縣監察掛を廢し、更に勸業掛に監察方面の事務を追加し、常務掛に懲役場・囚獄・斷刑等の事務を追加分掌せしむ。是に於て警察事務に獨立の一掛なし。依りて五月、監察事務を管掌するた

め、巡回方職制及び巡回方附屬職制を定めたり。巡回方は區廳に在勤し、巡回方附屬は巡回方の指揮を守り、持場の地方を巡回し、人民一般の情況を視察し、惡徒奸民なからしむ。而して犯罪人探索捕亡の事務は、檢事局に屬す。是れ別に地方官檢事局合議權限を明確にし、各その權限を守り、互に相侵害することなく、治績の向上に努めしむ。明治七年二月、行政・司法兩警察規則發布せられ、庶務課勸業掛中の巡回方を廢して、更に警視方を置き、從來の取締所を警視出張所と改む。三月に至り、警視方假職制を定む。曰く(一)警視方は行政警察を主務とし、司法警察を兼る者とす。(二)警視方は從前勸業掛り巡回方の職制、幷行政警察の權限を守り、人民保護(權利・健康・風俗・國事等の類)に盡力、若し豫防の力及ばずして、法律に背く者あれば、司法警察の規則に依り、檢事の叶示に從ひ、探索逮捕すべし。(三)犯罪・死傷・違式詿違の外、水火縊死等の檢視は、行政警察の權內たりと雖も、其他人の故造過誤に關る者は、司法警察の權限に依り、檢事へ出すべし。

右の通り假定し、尙實際着手の便否を酌量し、追次に增加すべき者とす。翌四月、司法警察職務取扱順序を決議し、九箇條を定む。此に至りて從來混沌たりし職權職務劃然たり。正に警察事務に一時代を劃したりと云ふべし。明治八年

警察の文字の職名に表はれたる初

一月、本支廳に警視課を置き、本廳に大中屬各〻一名、支廳には中屬以下兩三名を置き、警保事務を擔當せしめ、別に十二等以下の官員を適宜に置き、課中の事務を取扱はしむ。其管掌事務は警視課假規程に依れば、課中諸員は本廳に相詰め、長次官の命を受け、管內警保の事務を知り、火難・盜賊・囚獄・懲役・鬪毆・殺傷及び裁判所の往復、各出張警視掛よりの應答を主管し、自から課長は諸課總括掛同一の權あるべし。其他二章あり。要するに後の警察本部の部長の格たるが如し。次に各出張警視掛假職制に依れば、こは後の各警察署長の職制に準ずべきものなり。明治八年四月七日、警視方の稱を一般警視掛と改む。此年七月四日、碓氷峠に見廻方を置き、峠町・坂本間の警戒に當らしむ。是れ行旅人の安全を圖らんとするがためなり。同年八月二十四日、警視掛を改めて、警察掛と稱す。警察の文字、職名に表はるゝ之を嚆矢とす。明治八年十一月、縣治職制及び司法警察規則の改革に際し、警察掛を警保課と改稱し、警察掛員を警部とし、六等に分ち、一等警部を以て警保課の課長たらしむ。邏卒は更に巡査と改稱し、四等に分つ。是月巡査召募規程を定めて、巡査を召集す。

明治十一年十二月、本縣職制改革に就き、警保課に警察署・監獄署・懲役署に分ち、

明治十三年七月には、警保課を警察本署と改む。明治十六年、巡査行務の際は、總て帶劍すべき旨を達し、巡査帶劍心得を發布す。同年八月四日に至り、本縣警察職務章程を定む。此章程に處れば、警察本署は本署長一名、警部長の職任とし、其以下に部長・警部・部員・警部補・受附・巡査を置く。警察署は署長一人、警部を以て之に充て、其下に警部・警部補・巡査を配す。警察分署は分署長一人、警部補を以て之に充て、其下に巡査を配置す。明治十九年八月、巡査教習所規則を定む。教習所は警察本部の直轄に屬し、新任巡査に其職務の要領を教授する所とす。明治十九年十一月二十四日、警察本部細則を定め、祕事課・外事課・内事課・用度課に分つ。又警察本部處務權限を定む。

明治廿三年の改定

明治二十三年十一月五日、本縣處務細則の改定(訓令第一六五號)あり。警察部を警務課・保安課の二課とし、警務課は警察の區劃配置、其他庶務を、保安課は執行事務に關する事項を管掌し、別に高等警察に關する事項は、警部長自ら之を處理することゝせり。

明治廿七年の細則更定

二十七年一月四日、本縣處務細則の更定ありて、警察部は第一課・第二課とし、第一課は警察區劃・派出駐在所廢置變更等に關する事項、第二課は法律命令の勵行、並に監督に關する件を分掌す。三十二年七月十日、訓令第六十

明治卅五年の細則改定

衛生事務は警察部の所管となる

明治卅八年勤務規程の制定

大正十三年改正の勤務規程

六號、警察監督規程を定む。三十五年六月、更に處務細則の改定に依りて、警務課・保安課・衛生課・巡査教習所の四分課となり、衛生事務は警察部の所管となる。蓋し時勢の一進歩なり。三十八年六月二十三日、警察署分署勤務規程の制定あり。警察署分署に署長の外、署僚警部・巡査部長・內勤巡査・外勤巡査・特務巡査・刑事巡査を置く。但し土地の狀況により、署僚警部又は刑事巡査を置かざることを得と、警察署分署の組織を定め、其所轄內に巡査受持區を定め、巡査受持區二乃至六を以て一組合とし、上席巡査を以て組合長とす。組合は互に氣脈を通じて補翼すべく、其方法は署長之を定む。警察署分署所在地にあらざる巡査受持區は、巡査一人を駐在せしめ、其宿所を以て駐在所とする等配置及區域を第一章に規定し第二章に職務權限、第三章に勤務、第四章に處務順序、第五章に監督と、順序を追ひ規定し、大に整頓したり。此後明治四十三年四月一日、訓令甲第二十七號、同七月一日、訓令甲第四十八號、同四十四年一月三十一日、訓令甲第四號、大正五年四月七日、訓令甲第二十三號、大正十三年八月廿九日、訓令甲第二十一號を以て、一部の改正あり。大正十三年十二月八日、訓令甲第三十六號を以て、全部を改正し、警察官署勤務規程とし、十章に分ち、第一章を組織とし、警察官署には署長の下に署僚警

部・警部補・巡査部長・內勤・外勤・特務及び刑事巡査を置く。但し土地の狀況に依り署僚警部・警部補、又は刑事巡査を置かざることあるべし。其配置及び定員は左の如く定む。大正十四年群馬縣統計書。

| | （所在地） | （戶數） | （人口） | （署所在地） | （派出所） | （駐在所） | （市） | （町） | （村） | （警視） | （警部） | （警部補） | （巡査部長） | （巡査） | （計） |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 前橋警察署 | 前橋市田中町 | 二四、二〇〇 | 一三九、六〇七 | 五 | ×一 七 | 一九 | 一 | — | 一〇 | 一 | 一 | 三 | 九 | 八〇 | 八九 |
| 大胡警察署 | 勢多郡大胡町 | 五、九四五 | 三五、八二六 | 一 | — | 一二 | — | 一 | 四 | — | 一 | 一 | 一 | 一七 | 一八 |
| 花輪警察分署 | 同　東村 | 二、四二一 | 一五、〇七六 | 二 | — | 五 | — | — | 二 | — | — | 一 | 一 | 九 | 一〇 |
| 高崎警察署 | 高崎市連雀町 | 二六、七五四 | 一四八、五三三 | 四 | ×一 五 | 二九 | 一 | 五 | 二一 | 一 | — | 二 | 八 | 七六 | 八四 |
| 澁川警察署 | 群馬郡澁川町 | 九、一一七 | 五三、三七五 | 四 | — | 一三 | — | 二 | 九 | — | 一 | 一 | 一 | 二三 | 二三 |
| 安中警察署 | 碓氷郡安中町 | 八、五三六 | 四七、六八五 | 三 | — | 一八 | — | 三 | 九 | — | 一 | 一 | 二 | 二七 | 二九 |
| 松井田警察分署 | 同　松井田町 | 三、五三三 | 二〇、一八三 | 二 | — | 六 | — | 三 | 三 | — | 一 | — | 一 | 一三 | 一三 |
| 富岡警察署 | 北甘樂郡富岡町 | 八、九〇九 | 五〇、七三七 | 四 | — | 一四 | — | 四 | 九 | — | 一 | 一 | 二 | 二六 | 二八 |
| 下仁田警察分署 | 同　下仁田町 | 五、三七〇 | 三一、六六一 | 二 | — | 一一 | — | 一 | 八 | — | — | 一 | 一 | 一七 | 一八 |
| 藤岡警察署 | 多野郡藤岡町 | 九、一六四 | 五三、一二三 | 四 | — ×二 | 一五 | — | 三 | 八 | — | 一 | 一 | 三 | 二五 | 二八 |
| 吉井警察分署 | 同　吉井町 | 二、五五三 | 一七、〇四三 | 二 | — | 六 | — | 一 | 三 | — | — | — | 一 | 一〇 | 一二 |
| 萬場警察分署 | 同　神川村 | 二、八七四 | 一五、六二九 | 一 | — | 六 | — | — | 四 | — | — | 一 | 一 | 九 | 一〇 |

| | | | | | | | | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 伊勢崎警察署 | 佐波郡伊勢崎町 | 一四、五三四 | 八四、三四五 | 四 | ― | ×一 | 二〇 | ― | 二 | 一〇 | ― | 一 | 二 | 四 | 三一 | 三五 |
| 境警察分署 | 同　境町 | 三、六一〇 | 一八、六八四 | 三 | ― | | 四 | ― | 一 | 三 | ― | ― | ― | 一 | 九 | 一〇 |
| 太田警察署 | 新田郡太田町 | 一二、二七七 | 六八、六六八 | 三 | ― | ×二 | 三三 | ― | 四 | 九 | ― | 一 | 二 | 三 | 三二 | 三五 |
| 館林警察署 | 邑樂郡館林町 | 一七、一一五 | 九四、八一五 | 五 | ― | ×一 | 二四 | ― | 二 | 二〇 | ― | 一 | 二 | 四 | 三五 | 三九 |
| 桐生警察署 | 桐生市大桐生 | 一三、七八六 | 七一、九九九 | 四 | 四 | ×一 | 九 | 一 | ― | 七 | 一 | 一 | 二 | 七 | 五〇 | 五七 |
| 大間々警察分署 | 山田郡大間々町 | 三、七三〇 | 二〇、七八四 | 四 | ― | | 四 | ― | 一 | 三 | ― | 一 | ― | 一 | 一二 | 一三 |
| 沼田警察署 | 利根郡沼田町 | 一四、二六九 | 七三、九九三 | 四 | ― | ×二 | 三〇 | ― | 一 | 一五 | ― | 一 | 二 | 三 | 三五 | 三八 |
| 原町警察署 | 吾妻郡原町 | 七、二五二 | 四一、三八六 | 二 | ― | ×一 | 一五 | ― | 二 | 八 | ― | 一 | 一 | 二 | 二二 | 二四 |
| 長野原警察分署 | 同　長野原町 | 三、〇五六 | 一五、九八〇 | 一 | ― | ×一 | 七 | ― | 二 | 二 | ― | ― | 一 | 二 | 一〇 | 一二 |
| （合計） | …… | 一九九、〇八五 | 一、一〇八、二一九 | 六四 | 一六 | ×一三 | 二八七 | 三 | 三八 | 一六七 | 三 | 一四 | 二五 | 五八 | 五六五 | 六二三 |
| 大正一二 | …… | 一九六、二五三 | 一、〇九二、五七五 | 六八 | 一五 | ×一三 | 二八一 | 三 | 三八 | 一六七 | 三 | 一七 | 二六 | 五三 | 五四〇 | 五九二 |
| 同　一一 | …… | 一九二、二七六 | 一、〇八一、三三〇 | 六三 | 一六 | ×一三 | 二八二 | 三 | 三八 | 一六七 | 三 | 一八 | 二六 | 五三 | 五三三 | 五八六 |
| 同　一〇 | …… | 一九〇、四二五 | 一、〇六八、二一五 | 六三 | 一六 | ×一三 | 二八二 | 三 | 三八 | 一六七 | 三 | 一七 | 二六 | 五一 | 五一九 | 五七〇 |
| 同　九 | …… | 一八八、四三二 | 一、〇五一、五六七 | 五九 | 一四 | ×一二 | 二八一 | 二 | 三八 | 一六八 | 二 | 一七 | 二三 | 四九 | 五〇一 | 五五〇 |

×符アルハ巡査部長派出所

警察官吏數表

（群馬縣統計書）

| （年度） | （警部長 警察部長） | （警視） | （警部） | （警部補） | （巡查） | （計） | （巡查一人ニツキ平均受持人口數） |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 明治十二年 | — | — | 三七 | — | 二九〇 | 三二七 | 一四四五、八人 |
| 同十五年 | 一 | — | 三四 | 一七 | 三四九 | 四〇一 | 一四四八、九 |
| 同二十年 | 一 | — | 一三 | 二八 | 三九六 | 四三八 | 一七五六 |
| 同二十五年 | 一 | — | 三二 | — | 四五二 | 四八五 | 一六九四 |
| 同三十年 | 一 | — | 三一 | — | 四五九 | 四九一 | 一七五四 |
| 同三十五年 | 一 | 二 | 三〇 | — | 五二三 | 五五六 | 一六九八 |
| 同四十二年 | 一 | 二 | 一七 | — | 五一九 | 五三九 | 一八六二 |
| 大正三年 | 一 | 二 | 一六 | 一七 | 五五八 | 五九四 | 一八五一 |
| 同八年 | 一 | 二 | 一七 | 二三 | 五三八 | 五八一 | 二〇三三 |
| 同十三年 | 一 | 三 | 一四 | 二五 | 六二三 | 六六六 | 一七七九 |

## 第二項　警察官署

本縣に於ける警察官署は、熊谷縣時代に設置せられたる警視出張所を濫觴と

すべし。明治七年、行政・司法兩警察規則を發布し、警視方を置くに當り、從來の取締所を警視出張所と改む。翌八年、本支廳に警保課の置かるゝや、警察掛員を警部と改め、六等に分ち、一等警部を以て之に長たらしめ、邏卒を巡査と改稱し、四等に分つ。從つて警察出張所を警保出張所と改む。是歲十一月十五日、巡查官等規程を定めて、巡查を召募す。十二月に於ける本縣內の警保出張所は、高崎・前橋・伊勢崎・富岡・沼田・澁川・中之條の七箇所なり。但し中之條警保出張所は、十二月二十日廢止せり。因に當時は熊谷縣時代なれば、新田・山田・邑樂の三郡は含まず。而して此月二十七日設置せられたる巡查屯所は、左の如し。

| (郡名) | (屯所所在地) |
|---|---|
| 勢多 | 花輪村　宮關村　米野村 |
| 佐位 | 境町　伊勢崎町 |
| 群馬 | 倉賀野宿　高崎驛　前橋町　澁川村　北牧村　金子宿 |
| 甘樂 | 下仁田町　富岡町 |
| 利根 | 沼田町　大原新町 |
| 吾妻 | 布施村　長野原町　大笹村　中之條町 |

| | | |
|---|---|---|
| 緑野 | 新町 | |
| 碓氷 | 安中驛　横川村 | |
| （計） | | 二十二箇所 |

但同九年四月、緑野郡鬼石町ニ屯所ヲ設置、同七月碓氷郡横川屯所ハ松井田宿ニ移轉セラル。

明治九年二月、各地の警保出張所は、再び警察出張所と改稱し、明治九年九月、再び群馬縣を置かれ、新田・山田・邑樂の三郡、栃木縣より本縣管内に入るや、直に當分附にて新田郡太田町に假出張所、山田郡桐生町・邑樂郡館林町兩所に警察假出張所を設け、三郡の事務を取扱ひたるが、更に警察管轄區劃を左の如く定め、出張所を設けたり。

| （所名） | （管轄大區名） | （計） |
|---|---|---|
| 群馬縣廳 | 第一　第三　第四　第七　第八 | 五 |
| 高崎警察出張所 | 第二　第五　第六　第十　第十一 | 五 |
| 富岡警察出張所 | 第十二　第十三　第二十一　第二十二 | 四 |
| 沼田警察出張所 | 第十八　第十九 | 二 |
| 澁川警察出張所 | 第九　第二十六 | 二 |
| 藤岡警察出張所 | 第十四　第十五 | 二 |

| | | | |
|---|---|---|---|
| 伊勢崎警察出張所 | 第十六 | 第十七 | 二 |
| 太田警察出張所 | 第二十三 | | 一 |
| 一本廳七出張所 | | | |

次いで同年十二月廿八日、從來の所名を左の如く改稱し、翌十年一月一日より施行す。但し各所取扱權限の儀は是迄通りとす。

| | |
|---|---|
| 群馬縣警察第一號出張所 | 群馬郡前橋町 |
| 同　第二號出張所 | 同　郡高崎驛 |
| 同　第三號出張所 | 新田郡太田町 |
| 同　第四號出張所 | 邑樂郡館林町 |
| 同　第五號出張所 | 佐位郡伊勢崎町 |
| 同　第六號出張所 | 緑野郡藤岡町 |
| 同　第七號出張所 | 甘樂郡富岡町 |
| 同　第八號出張所 | 群馬郡澁川町 |
| 同　第九號出張所 | 利根郡沼田町 |
| 同　第十號出張所 | 山田郡桐生新町 |
| 同　第八號出張所分局 | 吾妻郡中之條町 |
| 同　第七號出張所分局 | 碓氷郡松井田町驛 |

警察出張所竝屯所名改稱廢置

明治十年二月十日に至りて、警察出張所竝に屯所の名稱を廢し、更に出張所を警察署、屯所を分署と改稱し、各設置せられたる地名を冠唱せしめたり。即ち左の如し。

| (本署) | (分署) |
| --- | --- |
| 前橋警察署 | 大胡分署　米野分署 |
| 高崎警察署 | 倉賀野分署　安中分署　金古分署 |
| 太田警察署 | 木崎分署 |
| 伊勢崎警察署 | 境分署　花輪分署 |
| 館林警察署 | 川俣分署 |
| 藤岡警察署 | 新町分署　鬼石分署 |
| 富岡警察署 | 下仁田分署　松井田分署 |
| 澁川警察署 | 北牧分署　中ノ條分署　長野原分署 |
| 沼田警察署 | 布施分署　大原新町分署 |
| 桐生警察署 | 大間々分署 |

右は内務省よりの達の趣に依り改稱。各本分署事務取扱の儀は總て從前通り松井田・中之條之兩分署は、各警察本署同樣事務取扱のこと。

然るに同年三月一日に至り、左の通り改正増置となる。

| （警察署名） | （所在） | （分署名） | （所在） |
|---|---|---|---|
| 前橋警察署 | 群馬郡前橋町 | 大胡分署 | 勢多郡大胡町 |
| | | 米野分署 | 同　米野村 |
| 高崎警察署 | 群馬郡高崎驛 | 倉ヶ野分署 | 群馬郡倉ヶ野驛 |
| | | 岩鼻分署 | 同　岩鼻町 |
| | | 金古分署 | 群馬郡金古驛 |
| | | 板鼻分署 | 碓氷郡板鼻驛 |
| 太田警察署 | 新田郡太田町 | 木崎分署 | 新田郡木崎驛 |
| | | 小泉分署 | 邑樂郡小泉村（五月十六日改屬） |
| 館林警察署 | 邑樂郡館林町 | 川俣分署 | 同　川俣村 |
| | | 赤岩分署 | 同　赤岩村 |
| 伊勢崎警察署 | 佐位郡伊勢崎町 | 境分署 | 佐位郡境町 |
| | | 駒形分署 | 勢多郡駒形驛 |
| | | 平塚分署 | 新田郡平塚村 |
| 藤岡警察署 | 緑野郡藤岡町 | 新町分署 | 緑野郡新町驛 |

| 富岡警察署 | 甘樂郡富岡町 |
| --- | --- |
| 松井田警察署 | 碓氷郡松井田驛 |
| 澁川警察署 | 群馬郡澁川驛 |
| 沼田警察署 | 利根郡沼田町 |
| 桐生警察署 | 山田郡桐生新町 |

| 鬼石分署 | 同　鬼石町 |
| --- | --- |
| 下仁田分署 | 甘樂郡下仁田町 |
| 吉井分署 | 多胡郡吉井町 |
| 坂本分署 | 碓氷郡坂本驛 |
| 安中分署 | 同　安中町 |
| 三ノ倉分署 | 群馬郡三ノ倉村 |
| 北牧分署 | 同　北牧村 |
| 原町分署 | 吾妻郡原町 |
| 長野原分署 | 同　長野原町 |
| 布施分署 | 同　布施村 |
| 大原分署 | 利根郡大原新町 |
| 大間々分署 | 山田郡大間々町 |
| 花輪分署 | 勢多郡花輪村 |

右の内原町分署は、十年三月、甲第五號にて、本署に昇格し、長野原分署を附屬せしめたり。

一、事務取扱權限の義、各警察署は舊出張所の通り、各分署は舊屯所通り。

一高崎・太田兩署は、明治九年、本縣第四十二號布達の通り、當分の内警察外の事務取扱候。但吟味願の儀は、本廳第四課に限る。
一原町分署の儀は、當分の内警部出張各警察署同樣の事務取扱。
一碓氷郡峠町邑樂郡赤岩村へ交番所を設け、峠町は坂本分署より、赤岩村は小泉分署より巡査交番候事。

明治十年十一月廿八日に至り、新田郡大原本町村へ巡査交番所を置き、桐生警察署に附屬せしむ。第六十九號。　明治十四年二月八日に至り、各警察署持區劃を定めて、縣下に布達せり。

本縣警察持區劃町村一覽表、別冊之通編纂候條、此旨布達候事。

群馬縣警察署管轄表　△印分署の位置

○前橋警察署　位置　東群馬郡前橋曲輪町

管轄　△三ヶ所

東群馬郡四十七箇町村　(曲輪町　南曲輪町　北曲輪町　神明町

柳町　石川町　堀川町　田中町　萱町　榎町

紺屋町　横山町　桑町　連雀町　田町　相生町

本町　芳町　片貝町　中川町　新町　天川村

後閑村　朝倉村　天川原村　前代田村　紅雲分村　宗市分村
市ノ坪村　六供村　三公田村　上佐鳥村　下佐鳥村　橳島村
力丸村　房丸村　宮地村　徳丸村　下阿内村　鶴光路村
龜里村　新堀村　横手村）

南勢多郡ノ内九十一箇町村（神明町　向町　細澤町　小柳町
諏訪町　岩神村　萩村　國領村　才川村　清王寺村
一毛村　三俣村　東片貝村　西片貝村　幸塚村　下沖之郷
天川大島村　上大島村　△大胡町　上大屋村　下大屋村　西大室村
荒子村　富田村　小島田村　荒口村　泉澤村　茂木村
堀越村　瀧窪村　荻窪村　横澤村　小坂子村　鳥取村
端氣村　五代村　龜泉村　石關村　上泉村　堀之下村
東上野村　江木村　堤村　樋越村　河原濱村　大前田村
馬場村　室澤村　苗ケ島村　込皆戸村　月田町　女淵村
新屋村　市ノ關村　柏倉村　鼻ケ石村　三夜澤村　野中村
△米野村　田口村　關根村　荒牧村　上小出村　下小出村
日輪寺村　川端村　引田村　田島村　小暮村　皆澤新田村
石井村　漆窪村　横室村　原之郷村　青柳村　龍藏寺村
北代田村　上細井村　下細井村　山口村　市ノ木場村　箱田村

上箱田村　下箱田村　眞壁村　小澤新田村　時澤村　勝澤村
嶺村　上冲之郷　小神明村）
西群馬郡ノ内二十七箇町村（惣社町　大渡村　川曲村　大友村
稻荷新田村　京目村　大澤村　小相木村　内藤分村　古市村
萩原村　上新田村（下新田村　元惣社村　中島村　宿横手村
西横手村　瀧村　上瀧村　八幡原村　宇貫村　下瀧村
上六分村　板井村　齋田村　下齋田村
那波郡ノ内十五箇村（下新田村　上ノ手村　角淵村　上茂木村
下茂木村　東飯島村　飯倉村　川井村　沼ノ上村　小泉村
下ノ宮村　箱石村　南玉村　福島村　後箇村）

○高崎警察署　位置　西群馬郡高崎連雀町

管轄　△四ヶ所
西群馬郡ノ内百四十四箇村（宮本町　龍見町　柳川町　堰代町
嘉多町　弓町　椿町　山田町　北通町　十人町
明石町　眞町　新紺屋町　本町　四ツ谷町　相生町
常盤町　歌川町　住吉町　赤坂町　新喜町　南町
新田町　職人町　砂賀町　檜物町　鍛冶町　新町

下横町　若松町　鎌倉町　連雀町　鞘　町　通　町
田　町　中紺屋町　寄合町　白銀町　元紺屋町　羅漢町
九藏町　高砂町　上佐野村　和田多中村　下ノ城村　高關村
佐野窪村　新後閑村　岩押村　上中居村　上大類村　南大類村
宿大類村　島野村　江木村　新保村　井野村　小八木村
大八木村　元島名村　矢島村　赤坂村　貝澤村　濱尻村
上小島村　下小島村　筑縄村　飯塚村　日高村　西島村
新保多中村　江田村　箱田村　前箱田村　上並榎村　下並榎村
上小塙村　下小塙村　西新波村　南新波村　北新波村　菊地村
我峯村　本郷村　白川村　白岩村　高濱村　和田山村
三ツ子澤村　神戸村　下室田村　濱川村　樂間村　行力村
下和田村　△金古村　下芝村　中里村　矢原村　金敷平村
野良犬村　廣馬場村　柏木澤村　宮澤村　善地村　富岡村
十文字村　生原村　松之澤村　東明屋村　西明屋村　足門村
保渡田村　上芝村　井出村　福島村　三ツ寺村　棟高村
中泉村　菅谷村　中尾村　鳥羽村　正觀寺村　北原村
東國分寺　西國分村　塚田村　稻荷臺村　引間引　後引間村
冷水村　△倉賀野驛　岩鼻町　臺新田村　栗崎村　柴崎村

矢中村　東中里村　綿貫村　中大類村　下大類村　下中居村
下佐野村)
片岡郡三箇村(乘附村　寺尾村　石原村)
碓氷郡ノ内二十六箇村(上豐岡村　中豐岡村　下豐岡村　若田村
八幡村　藤塚村　劔崎村　金井淵村　町屋村　下大島村
上大島村　中宿村　野殿村　岩井村　大谷村　鼻高村
上里見村　中里見村　△板鼻宿　下里見村　古屋村　小俣村
下秋間村　中秋間村　△安中驛　高別當村)

○太田警察署　位置　新田郡太田町

管轄　△二ヶ所

新田郡ノ内七十箇村(新野村　島山村　脇屋村　太田町
成塚村　北金井村　菅鹽村　强戸村　寺井村　別所村
新島村　西長岡村　天良村　寄合村　多村　四軒在家村
小金村　西村　東別所村　飯田村　大島村　長手村
鶴生田村　內ヶ島村　小舞木村　飯塚村　新井村　西矢島村
下濱田村　牛澤村　福澤村　富澤村　岩瀨川村　藤阿久村
細谷村　由良村　金井村　市ノ井村　嘉禰村　大根村
大村　小金井村　市村　△木崎宿　上田島村　上江田村

中江田村　下江田村　粕川村　西野谷村　沖野村　反町村
赤堀村　村田村　前小屋村　二ッ小屋村　前島村　武藏島村
安養寺村　高尾村　押切村　備前島村　堀口村　岩松村
龜岡村　阿久津村　尾島村　米澤村　中根村　下田島村
東矢島村　高林村）
山田郡ノ内二十三箇村（古氷村　矢田堀村　只上村　市場村
大町村　富若村　下小林村　塞之郷村　植木野村　上小林村
東今泉村　東金井村　矢場村　茂木村　安良岡村　石原村
東長岡村　吉澤村　丸山村　沖之郷村　八重笠村　荒金村
龍舞村）
邑樂郡ノ内四十三箇村（寄木戸村　古氷村　坂田村　吉田村
仙石村　古戸村　篠塚村　石打村　藤川村　秋妻村
△上小泉村　下小泉村　中野村）

○館林警察署　位置　邑樂郡館林町

管轄　△三ノ所

邑樂郡ノ内七十六箇町村（館林町　谷越村　足次村　大新田
上早川田村　下早川田村　傍示塚村　木戸村　高根村　岡野村
日向村　鶉村　鶉新田村　成島村　新宿村　小桑原村

近藤村　松原村　羽附村　當郷村　新當郷村　四ッ谷村
田谷村　北大島村　△川俣村　須賀村　大輪村　大輪沼新田村
下三林村　入谷村　大佐貫村　矢島村　南大島村　中谷村
新里村　田島村　梅原村　江口村　千津井村　赤生田村
堀工村　青柳村　江黑村　△赤岩村　鍋谷村　狸塚村
赤堀村　福島村　新福寺村　舞木村　光善寺村　木崎村
瀬戸井村　上五ヶ村　古海村　上中森村　下中森村　萱野村
野邊村　上三林村　西岡村　△板倉村　西岡新田村　除川村
離、村　細谷村　海老瀬村　大曲村　大荷場村　籾谷村
岩田村　內藏新田村　下五ヶ村　大高島村　飯野村　斗合田村）

○伊勢崎警察署　位置　佐波郡伊勢崎町
管轄　△二ヶ所
佐位郡三十八箇町村（伊勢崎町　太田村　上植木村　下植木村
今泉村　茂呂村　八寸村　西小保方村　上田村　田部井村
國定村　東小保方村　香林村　五目牛村　下觸村　今井村
市場村　堀下村　野村　西久保村　曲澤村　間谷村
西野村　安堀村　波志江村　△境町　百々村　木島村
伊與久村　上淵名村　下淵名村　保泉村　上武士村　下武士村

小此木村　東新井村　中島村　島　村）

那波郡ノ内三十七箇町村（田中島村　田中村　韮塚村　阿彌大寺村
北今井村　山王道村　芝　町　中　町　堀口村　戸谷塚村
下福島村　八斗島村　連取村　國領村　下蓮沼村　上蓮沼村
馬見塚村　上飯島村　長沼村　富塚村　下道寺村　大正寺村
除ケ村　前河原村　東善養寺村　山王村　西善村　藤川村
飯塚村　中内村　樋越村　上福島村　東上之宮村　西上之宮村
宮古村　今　村　宮子村）

南勢多郡ノ内二十五箇村（東田面村　西田面村　一日市村　下田面村
膳　村　中　村　前皆戸村　小林村　野　村　武井村
深津村　東大室村　△駒形新田　小屋原村　筑井村　女屋村
上長磯村　下長磯村　下大島村　上増田村　下増田村　新井村
飯土井村　二之宮村　今井村）

新田郡ノ内十八箇村（境　村　花香塚村　上矢島村　西今井村
下田中村　上田中村　溜池村　上中村　權右衞門村　平塚村
米岡村　大舘村　德川郷　女塚村　世良田村　出塚村
三ッ木村　小角田村）

（二）藤岡警察署　位置　緑野郡藤岡町

管轄　△二ヶ所

綠野郡四十四箇村（藤岡町　小林村　上戸塚村　下戸塚村
上栗須村　中栗須村　下栗須村　篠塚村　上落合村　本動堂村
三ッ木村　本郷村　白石村　上大塚村　中大塚村　川除村
根岸村　鮎川村　綠野村　矢場村　牛田村　東平井村
西平井村　神田村　保美村　三本木村　高山村　金井村
△新町驛　岡之鄕村　中村　立石新田村　立石村　中島村
森村　森新田村　阿久津村　木部村　山名村　根小屋村
△鬼石町　淨法寺村　三波川村）

多胡郡ノ内十箇村（上日野村　下日野村　深澤村　小串村
黑熊村　石神村　中島村　岩井村　小暮村　馬庭村）

南甘樂郡二十五箇村（讓原村　保美濃山村　坂原村　柏木村
麻生村　森戸村　生利村　萬場村　鹽澤村　黑田村
小平村　青梨子村　相原村　舟子村　魚尾村　神ヶ原村
平原村　尾附村　新羽村　川和村　野栗澤村　膝山村
乙母村　乙父村　楢原村）

○富岡警察署　位置　北甘樂郡富岡町

管轄　△二ヶ所

北甘樂郡ノ内七十八箇村（富岡町　上丹生村　下丹生村　原　村

下高田村　黑川村　宇田村　上黑岩村　下黑岩村　上高尾村

下高尾村　曾木村　星田村　君川村　大島村　一ノ宮町

七日市町　田島村　別保村　高瀬村　秋畑村　岩染村

南後閑村　國峯村　善慶寺村　岡本村　內匠村　轟　村

小幡村　田篠村　小川村　上野村　福島村　白倉村

金井村　天引村　庭谷村　造石村　後賀村　小桑木村

岩崎村　下奥平村　上奥平村　蕨　村　藤木村　白岩村

桑原村　相野田村　坂口村　富崎村　神成村　神農原村

△下仁田町　上小坂村　中小坂村　下小坂村　南蛇井村　中澤村

上小林村　數沼村　野上村　馬山村　白山村　宮室村

青倉村　大桑原村　栗山村　吉崎村　川井村　風口村

楡澤村　熊倉村　大日向村　小澤村　大鹽澤村　大仁田村

砥澤村　千原村　蟲尾村　羽澤村　六車村　岩戸村

西野牧村

多胡郡ノ内十七箇町村（吉井町　長根村　下長根村　大澤村

多胡村　高　村　神保村　鹽　村　東谷村　池　村

鹽川村　河内村　多比良村　矢田村　本郷村　小棚村
片山村）

○澁川警察署　位置　西群馬郡澁川村

管轄　△二ヶ所

西群馬郡ノ内四十箇村（澁川村　石原村　湯ノ上村　中村
金井村　阿久津村　南牧村　水澤村　上野田村　有馬村
小倉村　長岡村　山子田村　新井村　青梨子村　上青梨子村
池端村　南下村　北下村　高井村　植野村　大久保村
下野田村　河原島新田村　漆原村　半田村　八木原村　△北牧村
村上村　小野子村　横堀村　中山村　白井村　吹屋村
上白井村　中郷村　祖母島村　川島村　△伊香保村　湯中子村）

南勢多郡ノ内二十箇村（八崎村　分郷八崎村　小室村　上南室村
下南室村　持柏木村　溝呂木村　瀧澤村　上三原田村　三原田村
樽村　宮田村　猫村　津久田村　長井小川田村　深山村
棚下村　北上野村　勝保澤村　見立村）

○沼田警察署　位置　利根郡沼田町

管轄　△二ヶ所

利根郡百十一箇村（沼田町　戸鹿野村　戸鹿野新町　尾形原村

岩本村　上久屋村　下久屋村　横塚村　沼須村　立岩村
生品村　天神組　門前組　川場湯原村　谷地村　岡谷村
町田村　戸神村　下發知村　奈艮村　上發知村　秋塚村
發知新田村　中發知村　石墨村　下佐山村　上佐山村　善桂寺村
下沼田村　堀廻村　宇楚井村　原村　大釜村　白岩村
硯田村　恩田村　井土上村　政所村　眞庭村　師村
後閑村　下川田村　上川田村　今井村　上牧村　下牧村
川上村　湯原村　阿能川村　谷川村　大穴村　湯檜曾村
幸知村　綱子村　粟澤村　夜後村　藤原村　向山村
戸鹿澤村　小川村　石倉村　新巻村　羽場村　相俣村
上津村　下津村　月夜野村　大沼村　寺間町　小仁田村
吉本村　小日向村　高日向村　奈女澤村　尾合村　高平村
生枝村　岩室村　平出村　上古語父村　下古語父村　萩室村
中野村　大田川村　小田川村　高戸谷村　追貝村　△大原新町
幡屋村　平川村　千鳥新田村　大場村　老神村　薗原村
穴原村　日向南鄉村　柿平村　小松村　越本村　須賀川村
御座入村　菅沼村　小鍛新田村　土出村　戸倉村　東小川村
築地村　下平村　揚淵村　花咲村）

北勢多郡十三箇村（栃窪村　森下村　川額村　貝野瀬村
生越村　絲井村　多那村　石戸新田村　輪組村　青木村
砂川村　日影南郷村　根利村）
吾妻郡九箇村（△布施村　師田村　入須川村　須川宿　西峰須川村
東須川村　猿ヶ谷村　吹路村　永井村）

○桐生警察署　位置　山田郡桐生新町
管轄　△二ヶ所

山田郡ノ内二十八箇村（桐生新町　安樂土村　下久方村　上久方村
境野村　廣澤村　浚部村　高澤村　二渡村　山地村
新宿村　下新田村　如來堂村　一本木村　△大間々町　東小倉村
西小倉村　須永村　高津戸村　山田村　桐原村　鹽原村
淺原村　長尾根村　小平村　天王宿村　蕪原村　天沼新田村）
南勢多郡ノ内二十四箇村（下田澤村　上田澤村　萩原村　水沼村
△花輪村　小夜戸村　八木原村　小中村　神戸村　草木村
座間村　澤入村　新川村　山上村　鶴谷村　奥澤村
大久保村　關村　板橋村　高泉村　上神梅村　下神梅村

宿廻村　鹽澤村）

新田郡ノ内九箇村　（阿佐美村　久宮村　鹿　村　藪塚村
山野神村　六千石村　大久保村　大原本町村　西鹿田村）

○松井田警察署　位置　碓氷郡松井田宿

管轄　△二ヶ所

碓氷郡ノ内四十箇村　（松井田宿　新堀村　上磯部村　下磯部村
東上磯部村　西上磯部村　中野谷村　人見村　二軒在家村　八城村
行田村　原市村　簗瀬村　峰　村　高梨子村　國衙村
鄉原村　五料村　新井村　土鹽村　上增田村　下增田村
上後閑村　中後閑村　小日向村　下後閑村　東上秋間村　西上秋間村
大竹村　上間仁田村　下間仁田村　鷲宮村　△坂本宿　原　村
横川村　水沼村　峠　町　入山村　岩永村　川浦村）

西群馬郡ノ五箇村　（三ノ倉村　權田村　上室田村　中室田村
春名山村）

北甘樂郡ノ内十箇町村　（妙義町　大牛村　岳　村　行澤村
諸戸村　中里村　上高田村　八木連村　古立村　菅原村）

○原町警察署　位置　吾妻郡原町

管轄　△三ヶ所

吾妻郡ノ内六十八箇村（原町　中之條町　西中之條町　伊勢町
箱島村　五町田村　岡崎新田村　青山村　市城村　奥田村
新巻村　泉澤村　小泉村　植栗村　岩井村　金井村
川戸村　厚田村　大戸村　萩生村　本宿村　大柏木村
須賀尾村　三島村　松谷村　岩下村　矢倉村　郷原村
山田村　折田村　上澤渡村　下澤渡村　五反田村　△四萬村
原岩本村　平村　大塚村　蟻川村　赤坂村　大道新田村
栃窪村　横尾村　△長野原町　林村　河原畑村　河原湯村
横壁村　與喜屋村　古森村　大津村　羽根尾村　袋倉村
今井村　蘆生田村　三原村　西窪村　大前村　大笹村
田代村　干俣村　門貝村　前口村　△草津村　入山村
生須村　小雨村　赤岩村　太子村　日影村　應桑村
鎌原村）

西群馬郡ノ内一箇村（尻高村）

是年第四十八號を以て、違警罪を公布せられたるに依り、十二月其裁判警察署竝に管轄區劃を布達せり。

| （違警罪裁判所警察署名） | （同署管轄） |
| --- | --- |
| 前橋警察署 | 前橋・伊勢崎兩署持區一圓 |
| 高崎警察署 | 高崎・藤岡・富岡・松井田四署持區一圓 |
| 澁川警察署 | 澁川・原町・沼田三署持區一圓 |
| 太田警察署 | 太田・桐生・館林三署持區一圓 |

明治十六年六月三十日甲第三拾九號を以て、太胡分署を始め左の十三分署を廢し、該地に巡査派出所を設置す。

太胡・米野・板鼻・小泉・赤岩・板倉・鬼石・砥澤・花輪・三ノ倉・大原新町・四萬・草津

同日甲第四十號を以て、左の派出所を六月限り廢止す。

前橋町内（本町・向町・横山町）岩鼻・平塚・芝町・尾島・新町・川原・一ノ宮・北牧・白井・湯原・大原本町・下新田・峠町・中之條

次いで十月、本縣警察署分署所轄を改定する所ありしが、翌十七年六月二十日、更に左の如くに改定し、七月一日より實施せり。

| （警察署名） | （位置） | （管轄郡區域） | （所屬分署名） | （巡査派出所在地） |
|---|---|---|---|---|
| 前橋警察署 | 前橋曲輪町 | 東群馬・南勢多一圓　西群馬ノ内五十三ヶ町村 | 澁川分署　大胡分署 | 駒形　米野　天川　前橋新橋　伊香保　花輪 |
| 高崎警察署 | 高崎連雀町 | 西群馬ノ内百六十四ヶ町村　片岡・碓氷一圓 | 安中分署　松井田分署 | 倉ヶ野　金古　三ノ倉　板鼻　坂本 |
| 太田警察署 | 新田郡太田町 | 新田・山田一圓 | 桐生分署　木崎分署 | 大間々 |
| 館林警察署 | 邑樂郡館林町 | 邑樂一圓 | | 川俣　赤岩　小泉　板倉 |
| 伊勢崎警察署 | 佐位郡伊勢崎町 | 佐位・那波一圓　西群馬ノ内一ヶ村 | | 境　玉村 |
| 藤岡警察署 | 緑野郡藤岡町 | 緑野・多胡・南甘樂一圓 | 萬場分署　新町分署 | 鬼石　吉井 |
| 富岡警察署 | 甘樂郡富岡町 | 北甘樂一圓 | 下仁田分署 | |
| 沼田警察署 | 利根郡沼田町 | 利根・北勢多一圓　吾妻ノ内九村 | | 布施　大原新町 |
| 原町警察署 | 吾妻郡原町 | 吾妻郡ノ内七十一ヶ町村 | 長野原分署 | 四萬　草津 |

然るに警察管區は明治十九年十一月に至り、復亦改正あり。此に至り始めて郡の行政區域と警察管區と一致したり。

| （署名） | （位置） | （管轄） | （巡査派出所在地） |
|---|---|---|---|
| 東群馬南勢多郡警察署 | 前橋町曲輪町 | 東群馬郡一圓　南勢多郡一圓 | |
| 直轄 | | 東群馬郡ノ内四十七ヶ町村　南勢多郡ノ内九十一ヶ町村 | 前橋細ヶ澤町　同天川町　駒形村　米野村 |
| 大胡分署 | 南勢多郡大胡村 | 南勢多郡ノ内七十一ヶ町村 | 花輪村 |

| | | | |
|---|---|---|---|
| 西群馬片岡郡警察署 | 高崎驛連雀町 | 西群馬郡一圓、片岡郡一圓 | |
| 直轄 | | 西群馬郡ノ内百八十二ヶ町村 | 高崎新町 倉ヶ野町 內藤分村 金古驛 三ノ倉村 |
| 澁川分署 | 西群馬郡澁川村 | 西群馬郡ノ内三十六ヶ町村 | 伊香保村 |
| 石原分署 | 片岡郡石原村 | 片岡郡一圓三ヶ村 | |
| 碓氷郡警察署 | 碓氷郡安中驛 | 碓氷郡一圓 | |
| 直轄 | | 碓氷郡ノ内三十九ヶ町村 | 板鼻驛 |
| 松井田分署 | 碓氷郡松井田宿 | 碓氷郡ノ内十八ヶ町村 | 横川村 |
| 磯部分署 | 碓氷郡西上磯部村 | 碓氷郡ノ内九ヶ村 | |
| 北甘樂郡警察署 | 北甘樂郡富岡町 | 北甘樂郡一圓 | |
| 直轄 | | 北甘樂郡ノ内六十二ヶ町村 | |
| 下仁田分署 | 北甘樂郡下仁田町 | 北甘樂郡ノ内三十五ヶ町村 | |
| 綠野多胡郡警察署 | 綠野郡藤岡町 | 綠野郡一圓、多胡郡一圓 | |
| 直轄 | | 綠野郡一圓、四十四ヶ町村 | 新町驛 鬼石町 |
| 吉井分署 | 多胡郡吉井町 | 多胡郡一圓、二十六ヶ町村 | |
| 南甘樂郡警察署 | 南甘樂郡萬場村 | 南甘樂郡一圓 | |
| 佐位那波郡警察署 | 佐位郡伊勢崎町 | 佐位郡一圓、那波郡一圓 | |
| 直轄 | | 佐位郡一圓、三十八ヶ町村 那波郡ノ内三十六ヶ町村 | 境 |

| | | | |
|---|---|---|---|
| 玉村分署 | 那波郡玉村驛 | 那波郡ノ内十五ケ町村 | |
| 新田郡警察署 | 新田郡太田町 | 新田郡一圓 | |
| 直轄 | | 新田郡ノ内五十四ケ村 | 本町村 |
| 木崎分署 | 新田郡木崎宿 | 新田郡ノ内四十五ケ町村 | |
| 邑樂郡警察署 | 邑樂郡館林町 | 邑樂郡一圓八十九ケ町村 | 川俣　赤岩　小泉　板倉 |
| 山田郡警察署 | 山田郡桐生新町 | 山田郡一圓 | |
| 直轄 | | 山田郡ノ内三十七ケ町村 | 丸山村 |
| 大間々分署 | 山田郡大間々町 | 山田郡ノ内十四ケ町村 | |
| 利根北勢多郡警察署 | 利根郡沼田町 | 利根郡一圓、北勢多一圓 | |
| 直轄 | | 利根郡一圓、百十ケ町村 | 大原新町　湯檜曾　後閑 |
| 絲井分署 | 北勢多郡絲井村 | 北勢多郡一圓十三ケ村 | |
| 吾妻郡警察署 | 吾妻郡原町 | 吾妻郡一圓 | |
| 直轄 | | 吾妻郡ノ内五十一ケ町村 | 中之條町　四萬村　猿ケ京村 |
| 長野原分署 | 吾妻郡長野原町 | 吾妻郡ノ内二十九ケ町村 | 草津村 |

而して翌二十年一月に至り、東群馬南勢多郡警察署所轄中、細ケ澤・天川・米野の三派出所を廢し、八崎村・關根村に置く。又西群馬片岡郡警察署所轄中、高崎新町・内藤分村の

群馬縣警察區劃(明治廿二年)

二派出所を廢す。二十二年亦區劃改正あり。四月一日より實施せり。即ち左表の如し。

| | (位置) | (所轄) |
|---|---|---|
| 東群馬南勢多郡警察署 | 東群馬郡前橋町 | 東群馬郡一圓、南勢田郡ノ內(南橋村 北橋村 横野村 敷島村 富士見村 芳賀村 桂萱村 木瀬村) |
| 大胡分署 | 南勢多郡大胡町 | 南勢多郡ノ內(大胡村 宮城村 粕川村 新里村 東村 黒保根村 荒砥村) |
| 西群馬片岡郡警察署 | 西群馬郡高崎町 | 西群馬郡ノ內(高崎町 佐野村 岩鼻村 大類村 瀧川村 京ケ島村 東村 元惣社村 新高尾村 中川村 塚澤村 六郷村 長野村 久留馬村 室田村 倉田村 東郷村 箕輪村 相馬村 上郊村 堤ケ岡村 國府村 總社町 金古町 清里村 倉ケ野町) |
| 西群馬伊香保派出所 | 西群馬郡澁川町 | 西群馬郡ノ內(澁川町 駒寄村 古巻村 明治村 桃井村 伊香保町 豐秋村 金島村 長尾村 白井村 小野上村 高山村) |
| 片岡分署 | 片岡郡片岡村 | 片岡郡一圓 |
| 碓氷郡警察署 | 碓氷郡安中町 | 碓氷郡ノ內(安中町 原市町 板鼻町 後閑村 秋間村 岩野谷村 川間村 里見村 豐岡村 烏淵村) |
| 松井田分署 | 碓氷郡松井田町 | 碓氷郡ノ內(松井田町 臼井村 坂本町 九十九村 細野村) |
| 磯部分署 | 碓廿郡磯部村 | 碓氷郡ノ內(磯部村 西横野村 東横野村) |
| 北廿樂郡警察署 | 北廿樂郡富岡町 | 北廿樂郡ノ內(富岡町 黒岩村 高田村 丹生村 妙義町 一ノ宮町 額部村 小幡村 小野村 新屋村 秋畑村 福島町 高瀬村 岩平村) |
| 下仁田分署 | 北廿樂郡下仁田町 | 北廿樂郡ノ內(下仁田町 吉田村 馬山村 磐戸村 青倉村 月形村 尾澤村 坂牧村 西牧村) |
| 緑野多胡郡警察署 | 緑野郡藤岡町 | 緑野郡一圓 多胡郡ノ內(日野村) |
| 吉井分署 | 多胡郡吉井町 | 多胡郡(日野村ヲ除キ)一圓 |

| 署名 | 位置 | 管轄區域 |
|---|---|---|
| 南甘樂郡警察署 | 南甘樂郡神川村 | 南甘樂郡一圓 |
| 佐位那波郡警察署 | 佐位郡伊勢崎町 | 佐位郡一圓　那波郡ノ内（豐受村　名和村　上陽村　宮郷村） |
| 玉村分署 | 那波郡玉村町 | 那波郡ノ内（玉村町　芝根村） |
| 新田郡警察署 | 新田郡太田町 | 新田郡ノ内（太田町　九合村　鳥ノ郷村　澤野村　强戸村　藪塚本町　笠懸村　寶泉村ノ内字由良　別所　藤阿久　脇屋） |
| 木崎分署 | 新田郡 | 新田郡ノ内（木崎町　生品村　綿打村　尾島町　世良田村　寶泉村ノ内字西ノ谷　沖野　上田島　下田島　中根　小金井ノ内字子持川） |
| 邑樂郡警察署 | 邑樂郡館林町 | 邑樂郡一圓 |
| 山田郡警察署 | 山田郡桐生町 | 山田郡ノ内（桐生町　廣澤村　梅田村　韮川村　毛里田村　境野村） |
| 大間々分署 | 山田郡大間々町 | 山田郡ノ内（大間々町　川内村　相生村　福岡村） |
| 利根北勢多郡警察署 | 利根郡沼田町 | 利根郡一圓 |
| 絲之瀨分署 | 北勢多郡絲之瀨村 | 北勢多郡一圓 |
| 吾妻郡警察署<br>中之條派出署 | 吾妻郡原町 | 吾妻郡ノ内（原町　中ノ條町　東村　太田村　坂上村　岩島村　澤田村　伊參村　名久田村　久賀村） |
| 長野原分署<br>草津派出所 | 吾妻郡長野原町 | 吾妻郡ノ内（長野原町　嬬戀村　草津村） |

明治二十五年四月一日、前橋町に市制を布かれるに及び、本縣は縣令第十八號明治廿五、四、十八を以て、前橋市に警察署を設け、前橋市警察署と稱し、東群馬南勢多郡警察署の所轄より、前橋市一圓を割きて、之を管轄せしむ。明治廿六年十一月三十日、本縣告示第二百十六號にて、警察名を改稱し、十二月一日より實施す。

| （改稱） | （舊稱） |
|---|---|
| 安中警察署 | 碓氷郡警察署 |
| 富岡警察署 | 北甘樂郡警察署 |
| 萬場警察署 | 南甘樂郡警察署 |
| 太田警察署 | 新田郡警察署 |
| 館林警察署 | 邑樂郡警察署 |
| 桐生警察署 | 山田郡警察署 |
| 原町警察署 | 吾妻郡警察署 |

群馬縣警察署區劃（大正十四年）

大正十四年前記區劃を廢止し、左の如く定め、三月十五日より之を施行す。

群馬縣警察署區劃

| （署名） | （位置） | （管轄區域） |
|---|---|---|
| 前橋警察署 | 前橋市田中町 | 前橋市 勢多郡ノ内（上川淵村 下川淵村 木瀬村 南橋村 富士見村 芳賀村 桂萱村）群馬郡ノ内（總社町 元總社村 東村） |
| 大胡警察署 | 勢多郡大胡町 | 勢多郡ノ内（大胡町 宮城村 荒砥村 粕川村） |
| 高崎警察署 | 高崎市連雀町 | 高崎市 群馬郡ノ内（佐野村 國府村 中川村 新高尾村 大類村 金古町 久留馬村 岩鼻村 堤ヶ岡村 室田町 清里村 倉賀野町 上郊村 箕輪町 倉田村 車郷村 長野村 京ヶ島村 相馬村 瀧川村 塚澤村 六鄕村 片岡村）碓氷郡ノ内（里見村 烏淵村 豐岡村） |
| 澁川警察署 | 群馬郡澁川町 | 群馬郡ノ内（澁川町 豐秋村 古卷村 駒寄村 明治村 桃井村 伊香保町 金島村 小野上村 長尾村 白鄕井村）勢多郡ノ内（横野村 北橋村 敷島村） |

| | | |
|---|---|---|
| 安中警察署 | 碓氷郡安中町 | 碓氷郡ノ内（安中町　原市町　板鼻町　後閑村　秋間村　岩野谷村　八幡村　磯部村　東横野村） |
| 松田井警察署 | 碓氷郡松井田町 | 碓氷郡ノ内（松井田町　臼井町　坂本町　九十九村　細野村　西横野村　北甘樂郡ノ内（妙義町） |
| 富岡警察署 | 北甘樂郡富岡町 | 北甘樂郡ノ内（富岡町　一ノ宮町　福島町　黑岩村　高田村　丹生村　額部村　小幡村　小野村　新屋村　秋畑村　高瀬村　岩平村）多野郡ノ内（吉井町　多胡村） |
| 下仁田警察署 | 北甘樂郡下仁田町 | 北甘樂郡ノ内（下仁田町　吉田村　馬山村　磐戸村　靑倉村　月形村　尾澤村　小坂村　西牧村） |
| 藤岡警察署 | 多野縣藤岡町 | 多野郡ノ内（藤岡町　新町　鬼石町　小野村　八幡村　美土里村　平井村　美九里村　神流村　三波川村　日野村　入野村） |
| 萬場警察署 | 多野郡神川村 | 多野郡ノ内（美原村　神川村　中里村　上野村） |
| 伊勢崎警察署 | 佐波郡伊勢崎町 | 佐波郡 |
| 太田警察署 | 新田郡太田町 | 新田郡（但シ笠懸村ヲ除ク）山田郡ノ内（毛里田村　韮川村　矢場川村　休泊村） |
| 館林警察署 | 邑樂郡館林町 | 邑樂郡 |
| 桐生警察署 | 桐生市大字桐生 | 桐生市　山田郡ノ内（廣澤村　梅田村　境野村　相生村） |

大正十四年、縣の訓令（明治三十六年甲第一九八號）を廢止し、三月十五日より、左の如く監督區域を改め、之を施行す。

警部補竝巡査部長派出所監督區域

警部補派出所

| （所屬署名） | （位置） | （監督區域）（郡町村名） |
|---|---|---|
| 伊勢崎警察署 | 佐波郡境町大字境 | 佐波郡（境町　采女町　剛志村　島村） |

| | | |
|---|---|---|
| 大間々警察署 | 勢多郡東村大字花輪 | 勢多郡（東村　黒保根村） |

## 巡査部長派出所

| （所屬署名） | （位　置） | （監督區域）（郡町村名） |
|---|---|---|
| 高崎警察署 | 群馬郡室田町大字室田 | 群馬郡（倉田村　室田町　久留馬村）碓氷郡（烏淵村　里見村） |
| | 群馬郡箕輪町大字箕輪 | 群馬郡（箕輪町　長野村　東郷村　上郊村　相馬村） |
| 富岡警察署 | 多野郡吉井町大字吉井 | 多野郡（多胡村　吉井町）北甘樂郡（岩平村　新屋村） |
| 藤岡警察署 | 多野郡鬼石町大字鬼石 | 多野郡（鬼石町　三波川村　美九里村） |
| | 多野郡新町 | 多野郡（新町　小野村　八幡村　神流村　美土里村ノ内　大字下大塚　本動堂） |
| 伊勢崎警察署 | 佐波郡玉村町大字新田 | 佐波郡（玉村町　芝根村　上陽村） |
| 太田警察署 | 新田郡藪塚本町大字大原 | 新田郡（藪塚本町　生品村　强戸村　綿打村）<br>新田郡（尾島町　世良田村　木崎町） |
| | 同　郡尾島町大字尾島 | 澤野村ノ内　大字牛込　富澤　福澤　米澤　細谷　下濱田　岩瀬川<br>寶泉村ノ内　大字上田島　下田島　中根　西野谷　沖野 |
| 館林警察署 | 邑樂郡小泉町大字小泉 | 邑樂郡（小泉町　大川村　高島村　長柄村　永樂村） |
| 沼田警察署 | 利根郡新治村大字新巻 | 利根郡（新治村　桃野村） |
| | 利根郡東村大字追貝 | 同郡（東村　片品村　赤城根村ノ内　大字日字南郷　日向南野　根利　柿平　小松　砂川　青木） |

| | | |
|---|---|---|
| 原町警察署 | 吾妻郡中之條町大字中之條町 | 吾妻郡（中之條町　高山村　名久田村　伊參村　澤田村ノ内大字四萬） |
| 長野原警察分署 | 吾妻郡草津町大字草津 | 吾妻郡（草津町　六合村）新田郡ノ内（笠懸村） |
| 大間々警察分署 | 山田郡大間々町 | 山田郡ノ内（大間々町　川内村　福岡村）勢多郡ノ内（新里村　黒保根村　東村） |
| 沼田警察署 | 利根郡沼田町 | 利根郡 |
| 原町警察署 | 吾妻郡原町 | 吾妻郡ノ内（原町　中之條町　東村　太田村　坂上村　岩島村　澤田村　伊參村　名久田村　高山村） |
| 長野原警察分署 | 吾妻郡長野原町 | 吾妻郡ノ内（長野原町　草津町　嬬戀村　六合村） |

## 第三項　警察事務の概要

世運の發達に從ひ、警察事務も亦益〻增加するを以て、之に適應する爲め、政府は屢〻官制を改正し、本縣亦國の法令に準據し、職制を變更して、機宜の處置を行ひたることは既に第一項職制の沿革に述べたり。明治初年の警察事務は、捕亡・邏卒等の名稱に相應して、主として犯人逮捕等の司法警察に在りしが、明治七年二月發布の行政・司法兩警察規則により、行政警察に進み、公安保持の諸方面に亘る事務を管掌したりしが、更に福利行政事務の發達に伴ひ、衛生行政も亦警察事務の

所管に歸し、愈複雜を極むるに至れり。是等の事務の内、衞生事務は第十一章に讓り、本項に於ては、司法・保安事務に關係せる四表を示さん。

## 一 自明治四十年 至大正十三年 變死及捨兒累年表

| (年次) | (自殺者) | | | (被殺害者) | | | (災害其他ノ事故ニテ死亡セシモノ) | | | (合計) | (捨子) | (備考) |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | (男) | (女) | (計) | (男) | (女) | (計) | (男) | (女) | (計) | | | |
| 明治三十年 | 一一五 | 七五 | 一九〇 | …… | …… | ……二九七…… | …… | …… | 二九七 | 四八七 | 二〇 | |
| 同 四十年 | 一二二 | 九九 | 二二一 | …… | …… | ……三七四…… | …… | …… | 三七四 | 五九五 | 一 | |
| 同 四十一年 | 一四八 | 一二二 | 二七〇 | …… | …… | ……二七八…… | …… | …… | 二七八 | 五四八 | 二 | |
| 同 四十二年 | 一三七 | 九五 | 二三二 | 二五 | 一七 | 二四 | 一九一 | 八五 | 二七六 | 五三〇 | 三 | |
| 同 四十三年 | 一五三 | 八三 | 二三六 | 三一 | 二三 | 五四 | 三三八 | 二四八 | 五八六 | 八七六 | 一 | 大洪水アリ |
| 同 四十四年 | 一二二 | 九六 | 二一八 | 二六 | 一八 | 四四 | 二〇二 | 八八 | 二九〇 | 五五二 | 四 | |
| 大正元年 | 一六三 | 一二一 | 二八四 | 三一 | 二五 | 五六 | 一九七 | 一〇三 | 三〇〇 | 六〇〇 | 三 | |
| 同 二年 | 一六三 | 八六 | 二四九 | 二四 | 二〇 | 四四 | 一八一 | 八〇 | 二六一 | 五五四 | 六 | |
| 同 三年 | 一七六 | 九四 | 二七〇 | 四四 | 三一 | 七五 | 二三九 | 九五 | 三三四 | 六七九 | 三 | |
| 同 四年 | 一五六 | 一〇四 | 二六〇 | 二二 | 一九 | 四一 | 一八〇 | 一〇二 | 二八二 | 五八三 | 四 | |
| 同 五年 | 一四七 | 九二 | 二三九 | 一七 | 二三 | 四〇 | 二〇六 | 八七 | 二九三 | 五七二 | 五 | |

| 同　六年 | 一六一 | 九七 | 二五八 | 一五 | 二五 | 四〇 | 一八四 | 九〇 | 二七四 | 五七二 | 七 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 同　七年 | 一六二 | 一〇〇 | 二六二 | 三二 | 二一 | 五三 | 二三〇 | 九五 | 三二五 | 六四〇 | 二 |
| 同　八年 | 一三九 | 一一八 | 二五七 | 一九 | 一六 | 三五 | 二一七 | 一一三 | 三二九 | 七三一 | 〇 |
| 同　九年 | 一七三 | 一一一 | 二八四 | 二七 | 一七 | 四四 | 二一四 | 一〇一 | 三一五 | 六四三 | 五 |
| 同　十年 | 一六五 | 一〇一 | 二六六 | 一三 | 一七 | 三〇 | 二三五 | 八〇 | 三〇五 | 六〇一 | 三 |
| 同　十一年 | 一八八 | 一一二 | 三〇〇 | 一〇 | 一三 | 二三 | 一九五 | 八三 | 二七八 | 六〇一 | 三 |
| 同　十二年 | 一九八 | 一三五 | 三三三 | 二六 | 五 | 三一 | 二四一 | 八九 | 三三〇 | 六八四 | 一 |
| 同　十三年 | 一七三 | 一二九 | 三〇二 | 八 | 一二 | 二〇 | 一六八 | 八〇 | 二四八 | 五六九 | 三 |

（備考）明治三十年ハ參考ノタメニ記載セリ。

## 二　自明治四十年至大正十三年　火災累年表

| （年次） | （火災度數）（失火） | （放火） | （雷火及不審火） | （計） | （火災ニ罹リシ戸數）（住家） | （非住家） | （燒失セシ建坪） | （損害見積金額） |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 明治三十年 | 三三三 | 一〇三 | 四一 | 四七七 | 九〇六 | | 一七一三八 | ? |
| 同　四十年 | 五〇一 | 四一 | 六六 | 六〇八 | 六八八 | | 一四二三九 | ? |
| 同　四十一年 | 五一二 | 二四 | 六九 | 六〇五 | 七七〇 | | 一三二五〇 | ? |

|  |  |  |  |  |  |  |  |  |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 同四十二年 | 四二三 | 三八 | 五九 | 五二〇 | 七〇九 |  | 一一,九一二 | 一九九,一〇五 |
| 同四十三年 | 三八九 | 二八 | 四〇 | 四五八 | 六八〇 |  | 八,八八二 | 一三七,三六六 |
| 同四十四年 | 三一七 | 三三 | 三四 | 三八三 | 五四七 |  | 一〇,九九九 | 九三,〇一三 |
| 大正元年 | 三七一 | 四九 | 四七 | 四六七 | 七六五 |  | 一〇,八一三 | 一八五,六〇九 |
| 同二年 | 三六〇 | 四一 | 三九 | 四四〇 | 五七四 | 二五六 | 一一,八九一 | 二〇四,六一五 |
| 同三年 | 三七六 | 三五 | 四二 | 四五三 | 四〇二 | 三一一 | 九,五一〇 | 二〇三,八三一 |
| 同四年 | 三〇八 | 三〇 | 三六 | 三七四 | 三六二 | 二六〇 | 七,一〇三 | 六八,五七八 |
| 同五年 | 三四三 | 二七 | 三三 | 三九三 | 五一四 | 二五三 | 九,〇八四 | 一九三,七三八 |
| 同六年 | 三七八 | 二四 | 三〇 | 四三三 | 六〇〇 | 五一二 | 一三,四六八 | 二五七,九一八 |
| 同七年 | 三八八 | 三三 | 四二 | 四五三 | 四九八 | 三〇〇 | 九,三三四 | 四〇一,二一四 |
| 同八年 | 三三七 | 一九 | 三九 | 三九五 | 四〇八 | 四一三 | 一〇,四九九 | 三三六,六〇〇 |
| 同九年 | 三三九 | 一五 | 二四 | 三七八 | 四三八 | 二五〇 | 一五,八〇四 | 二,三四一,一四〇 |
| 同十年 | 三六三 | 一三 | 二一 | 四〇一 | 五〇八 | 三五四 | 二五八,九四六 | 一,五四二,〇一〇 |
| 同十一年 | 四一七 | 四一 | 五〇 | 五〇八 | 三七〇 | 三六五 | 八,八五七 | 三六一,六八二 |
| 同十二年 | 三五七 | 三〇 | 四四 | 四三一 | 四二〇 | 三七三 | 九,〇〇四 | 五三九,六〇四 |
| 同十三年 | 三八三 | 四一 | 二九 | 四五三 | 四六一 | 二九三 | 九,三〇七 | 四二七,八七四 |

〔備考〕明治三十年ハ参考ノタメ記載セリ。

## 三　自明治三十年至大正六年盜難及詐欺恐喝事件累年表

| 年次 | 件數 強盜 | 件數 竊盜 | 件數 掏摸 | 件數 詐欺恐喝 | 計 | 被害價額 | 贓品發見價額 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 明治三十年 | 一〇八 | 三、五四九 | ……四三…… | …… | 三、六五七 | 五六、二三〇 | ― |
| 同　四十年 | 三九 | 二、二七八 | ― | 二三九 | 二、五五六 | 五三、五二四 | 二五、〇三二 |
| 同　四十一年 | 二七 | 二、〇七三 | ― | 二七三 | 二、三七三 | 五五、〇〇二 | 二四、四四〇 |
| 同　四十二年 | 四五 | 三、〇六七 | 二三 | 四九七 | 三、六三二 | 五一、四〇四 | 一四、一八二 |
| 同　四十三年 | 五三 | 二、九三三 | 一七 | 四二三 | 三、四二五 | 四〇、三四九 | 七、六五九 |
| 同　四十四年 | 三五 | 二、九六〇 | 九 | 六五六 | 三、六六〇 | 四一、五六七 | 六、九四七 |
| 大正元年 | 四八 | 三、三一七 | 八 | 六五四 | 四、〇二七 | 五二、八〇九 | 一〇、九七三 |
| 同　二年 | 二九 | 四、〇六二 | 一四 | 七七五 | 四、八八〇 | 六四、三八八 | 一六、四七二 |
| 同　三年 | 三三 | 三、八七二 | 六 | 一、一二三 | 五、〇三四 | 五九、五六七 | 一四、四九二 |
| 同　四年 | 三三 | 三、二七六 | 三 | 一、二二五 | 四、五三七 | 五四、四九八 | 一一、九五九 |
| 同　五年 | 三〇 | 三、二一五 | 四 | 八四三 | 四、〇九二 | 五八、三八四 | 一六、五五二 |
| 同　六年 | 一八 | 三、一九三 | 六 | 九三九 | 四、一五六 | 六四、一三七 | 二二、一二三 |

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 同七年 | 二一 | 三,一五九 | 二 | 九三七 | 四,一一九 | 九一,三〇七 | 二七,七八一 |
| 同八年 | 八 | 二,六三一 | 八 | 九一二 | 三,五五九 | 一一九,八九五 | 三八,一九二 |
| 同九年 | 一六 | 二,四九一 | 一 | 九二六 | 三,四三四 | 一七四,九八四 | 四七,〇六七 |
| 同十年 | 一〇 | 二,三五八 | 七 | 八九七 | 三,一七二 | 一三三,八九一 | 三七,四八二 |
| 同十一年 | 一三 | 二,一八三 | 一 | 七八六 | 二,九八三 | 一八九,七五六 | 三四,五七二 |
| 同十二年 | 三 | 一,八六九 | 一〇 | 九五八 | 二,八四〇 | 一九九,〇五二 | 二九,九〇九 |
| 同十三年 | 一四 | 二,〇七五 | 一三 | 七二三 | 二,八二四 | 一七六,四五〇 | 四二,四三三 |

## 四　最近十箇年間檢擧犯罪人累年表

| （年次） | （刑法） | （警察犯處罰令） | （廳府縣令違犯） | （其他法令違犯） | （合計） |
|---|---|---|---|---|---|
| 大正四年 | 三,七九九 | 一,一八五 | 二,〇七二 | 九六三 | 八,〇二五 |
| 同五年 | 三,七九九 | 一,三八〇 | 二,三五九 | 八二六 | 八,三六四 |
| 同六年 | 三,四二〇 | 一,三四六 | 一,九〇六 | 一,三三三 | 七,八〇五 |
| 同七年 | 四,〇四六 | 一,一七四 | 一,七〇一 | 一六二 | 七,〇八三 |
| 同八年 | 三,五二〇 | 八六六 | 一,六四二 | 七五三 | 六,七八一 |
| 同九年 | 三,一四九 | 八〇九 | 一,五五八 | 六五八 | 六,一七四 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 同　十　年 | 二、八五九 | 六三六 | 二、〇三五 | 九五二 | 六、四七二 |
| 同　十一年 | 三、〇二三 | 七七二 | 二、九八九 | 一、一八一 | 七、九五四 |
| 同　十二年 | 三、三三一 | 四八三 | 二、六七五 | 一、三八三 | 七、七七二 |
| 同　十三年 | 三、一八五 | 六〇七 | 四、七五七 | 一、一九七 | 九、七四六 |

## 五　最近十箇年間犯罪件數檢擧件數並檢擧人員表

| （年次） | （刑法違犯）（犯罪件數） | （刑法違犯）（檢擧件數） | （刑法違犯）（檢擧人員） | （諸法令違犯）（犯罪件數） | （諸法令違犯）（檢擧件數） | （諸法令違犯）（檢擧人員） | （合計）（犯罪件數） | （合計）（檢擧件數） | （合計）（檢擧人員） |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 大正四年 | 七、〇一六 | 六、三三八 | ×四三二 三、九四七 | 六九二 | 七四四 | ×三一 六一七 | 七、七五八 | 七、〇八六 | ×四六四 四、五八六 |
| 同　五年 | 六、四〇九 | 五、八一四 | ×三二〇 三、八九四 | 七七二 | 七七三 | ×四五 五七一 | 七、一八一 | 六、五八八 | ×三五六 四、四六五 |
| 同　六年 | 六、〇七三 | 五、四〇七 | ×二八五 三、五三七 | 八二五 | 八二四 | ×一七 八五八 | 六、九〇三 | 六、二四三 | ×三〇二 四、三九七 |
| 同　七年 | 四、四五九 | 五、九九六 | ×三五九 四、〇四六 | 七五七 | 七五九 | ×五二 五五七 | 七、二一六 | 六、七五五 | ×四二一 四、六〇三 |
| 同　八年 | 五、五五七 | 五、二四二 | ×三九六 三、六〇五 | 四九六 | 四九七 | ×二六 五四二 | 六、〇五四 | 五、七四〇 | ×四三五 四、一一八 |
| 同　九年 | 五、四六二 | 五、三〇九 | ×三三九 三、三三一 | 六〇四 | 六〇五 | ×三五 四九四 | 六、〇六六 | 五、八一四 | ×三六四 三、七二五 |
| 同　十年 | 四、九五四 | 四、八三〇 | ×三四三 二、九三五 | 六六八 | 六六九 | ×一九 五八四 | 五、六二二 | 五、四九九 | ×三六二 三、五一九 |
| 同　十一年 | 四、八四三 | ×四八〇 四、五五五 | 三、一六〇 | 六五七 | 六六二 | 六〇〇 | 五、四九九 | 五、二一六 | 三、七五九 |

| | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 同　十二年 | 四、七一七 | ×七五九 五、二七二 | 三、三三一 | 五七八 | 五七六 | 九一八 | 五、二九五 | ×二三 五、八四八 | 四、一四九 |
| 同　十三年 | 五、〇二四 | ×八四二 四、九三三 | 三、二六八 | 四三三 | ×一七 四三一 | 四二九 | 五、四五七 | ×八四九 五、三六四 | 三、六九七 |

〔備考〕（イ）本表ハ罰金刑以上ニ該當スルモノヲ掲ゲタリ。

（ロ）×符アルハ他ノ犯罪ト併發ニカヽル重復ノ人員ナリ。

（群馬縣史稿・群馬縣布達全書・群馬縣警察法規・群馬縣統計書。）

群馬縣史第四卷 大尾

昭和二年七月二十五日印刷
昭和二年八月一日發行
（非賣品）

著作兼發行人 群馬縣教育會
群馬縣廳內

印刷人 井上源之丞
東京市本所區番場町四番地

印刷所 凸版印刷株式會社本所分工場
東京市本所區番場町四番地

甲府
岩村田
小田い
本宿
松枝
坂本
沓掛
追分
小諸
田中
海の
上田
浦の
田田
松本
坂木
戸ぐら
矢代
真田
松代
川田
中の沢
浅間山

大宮
上尾
おけ川
くまがく
本庄
しん町
藤岡
吉井
富岡
一の宮
高崎
前橋
玉村
五料
大胡
米の
水さは
足利
桐生
川股
太田
館林
さの